現代日本文學全集

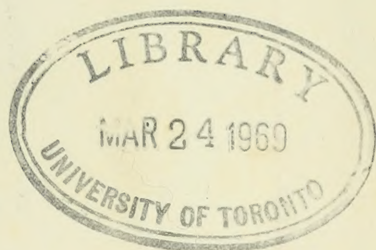


伊藤左千夫集
長塚節集
高濱虛子集

伊藤左千夫集
長塚節集
高濱虛子集

改造社版

杉浦非水裝幀







節と書簡（上）左千夫と短冊（右下）お牧の茶屋に於ける虚子（左下）

「左千夫・節・虚子集」目次

伊藤左千夫集

長塚節集

高濱虚子集

伊藤左千夫集

序

左千夫は一面純情の抒情詩人であるが、一面好んでよく議論した。多數の抒情的短歌と共に後來の短歌を示唆した歌論を殘したのである。左千夫の議論好きはその生來であらう。曾つて年少にして太政官への建白書を書いたりして居る。左千夫の一生を彼の如くあらしめた正岡子規との交渉もその議論が機縁となつて居る。明治三十一年左千夫は新聞「日本」に「非新自讃歌論」なるものを投じて居る。此は子規の眼にも入つたものと見えて、子規は「三たび歌よみに與ふる書」中にその說を引いて駁し、又「人々に答ふ」中に更に詳細に批判を加へて居る。[illegible]の鋭い左千夫の論陣は、明快率然なる子規の理論の筆鋒によつて粉碎し盡されたかの觀がある。然し左千夫には全身を論敵子規に傾倒し師事してゆく純情が存して居た。否左千夫の議論は既に理論ではない。そこに左千夫の作家としての本領が存するのである。左千夫が作品の價値は此の純情に發して居るのである。左千夫の處女作小說『野菊の墓』の如きも、技巧に幼稚な所があるが、此の作者の純情が人を動かして止まないのである。

左千夫の小說に於ける技巧は無論子規の寫生文から發して居る。それは短歌が子規の寫實的傾向に負つて居るのと全く同じである。が、その奥底にはいつも作者の純情が燃えて居ることも短歌に於けると同じである。

左千夫は小說家としては國木田獨步を好み、長谷川二葉亭、木下尙江、ゴリキーを愛讀して居た。然しこれは左千夫が自然主義作家の顰に倣つて居たためとはいへない。生來の主情的傾向が然らしめたのであらう。明治四十一年一月「馬醉木」終刊號に自ら其の五年間の業績を顧みて「作歌理想は子規子時代と頗る其の中心を異にし(中略)其の態度は自ら人生を親しみ自然を傍觀するに至れり。」と述べて居るのは左千夫の作品を知るには重要な意義ある言葉である。であるから左千夫の小說は多くは作者直接の經驗であつて、作者は大抵主人公として扱はれて居る。主人公の作者自身から離れることの甚た遠いもの、例へば「老獸醫」「[illegible]の提灯」「繪を書く女」等になると作者の本領から外れたといふ感がなきを得ないのである。作者の此の直接の經驗を取扱つたものも年と共に變化して居る。「野菊の墓」に於ける素朴な境遇から、「濱菊」「紅黄錄」の如きものを經て「奈々子」「去年」となり、「水害雜錄」となり、作者の心境の敍述は痛切でありながら淡々たる表現を得るまでには及んで居る。其の他多くの作品例へば「隣の嫁」「春の潮」「分家」「胡頽子」等はこの兩者の中間に位するのであらう。又「新萬葉物語」「古代の少女」の如きもあるが、これは寧ろ古典玩賞の副産物と見ればよいのである。

左千夫の小說は無論その短歌の如く完成されたものとは言へぬ。殊に寫生文から入つた寫實的の技巧と、その主情的人生觀とはまだしつくりと步調を合せて居ない。加ふるに左千夫の世俗的常識的一面が少しく多辯に傾いて居る點では甚た當代小說の行き方とそぐはないものがあつた。然しながらさういふ缺點だけを見て此の隱れる玉を捨てることは出來ぬ。短歌はその形式からして是の如き曇を被る間隙がない。ために、短歌に於ては左千夫の美點は十分に發揮されて居るのである。小說に於て短歌の達した所まで達して居ないのはただ技巧の方面である。けれど同じく寫生文より出發して小說を書いても、長塚節の作品などと比べて、其所に明に作者の個性の相違を發揮して居る點は見のがせないのである。

昭和五年四月　　土屋文明

野菊の墓

後の月といふ時分が來ると、どうも思はずには居られない。幼い譯とは思ふが何分にも忘れることが出來ない。最早十年餘も過去つた昔のことであるから、細かい事實は多くは覺えて居ないけれど、心持だけは今猶昨日の如く、其時の事を考へてると、全く當時の心持に立ち返つて、涙が留めどなく湧くのである。悲しくもあり樂しくもありといふやうな狀態で、忘れようと思ふ事もないではないが、寧ろ繰返し繰返し、考へては、夢幻的の興味を貪つて居る事が多い、そんな譯から一寸物に書いて置かうかといふ氣になつたのである。

僕の家といふは、松戸から二里許り下つて、矢切の渡を東へ渡り、小高い岡の上で矢張矢切村と云つてる所。矢切の齋藤と云へば、此界隈での舊家で、里見の崩れが二三人此處へ落ちて百姓になつた内の一人が齋藤と云つたのだと祖父から聞いて居る。屋敷の西側に一丈五六尺も廻るやうな椎の樹が四五本重なり合つて立つて居る。村一番の忌森で村ぢうから羨ましがられて居る。昔から何程暴風が吹いても、此椎森のために、僕の家許りは屋根を剥がれた事は只の一度もないとの話だ。家なども隨分と古い、柱が殘らず椎の木だ。それが又煤やら垢やらで何の木か見別けがつかぬ位、奧の間の最も煙に遠いとこでも、天井板が丸で油炭で塗つた樣に、板の木目も判らぬ程黒い。それでも建ちは割合に高くて、簡單な欄間もあり銅の釘隱なども打つてある。其釘隱が馬鹿に大きい雁であつた。勿論一寸見たのでは木か金かも知れないほど古びてゐる。

僕の母なども先祖の言ひ傳だからといつて、此戰國時代の遺物的古家を、大へんに自慢されてゐた。其頃母は血の道で久しく煩つて居られ、黑塗的な奧の一間がいつも母の病褥となつて居た。其次の十疊の間の南隅に、二疊の小座敷がある。僕が居ない時は機織場で、僕が居る内は僕の讀書室にしてゐた。手摺窓の障子を明けて頭を出すと、椎の枝が青空を遮つて北を掩うてゐる。

母が永らくぶら〳〵して居たから、市川の親類で僕には縁の從妹になつて居る、民子といふ女の兒が仕事の手傳やら母の看護やらに來て居つた。僕が今忘れることが出來ないといふのは、其民子と僕との關係である。其關係と云つても、僕は民子と下劣な關係をしたのではない。

僕は小學校を卒業して許りで十五歲、月を數へると十三歲何ヶ月といふ頃、民子は十七だけれどそれも生れが晩いから、十五と少しにしかならない。瘦ぎすであつたけれども顏は丸い方で、透き徹るほど白い皮膚に紅味をおんだ、誠に光澤の好い兒であつた。いつでも活々として元氣がよく、其癖氣は弱くて憎氣の少しもない兒であつた。

勿論僕とは大の仲好しで、座敷を掃くと云つては僕の所をのぞく、障子をはたくと云つては僕の座敷へ這入つてくる、私も本が讀みたいの手習がしたいのと云ふ、たまにはハタキの柄で僕の背中を突いたり、僕の耳を摘まんだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば來い來いと云うて二人で遊ぶのが何より面白かつた。

母からいつでも叱られる、

「又民やは政の所へ這入つてるナ。コラアさつ

さと掃除をやってしまへ。これからは政の讀書の邪魔などしてはいけません。民やは年上の癖に……」

などと頻りに小言を云ふけれど、其實母も民子をば非常に可愛がって居るのだから、一向に小言がきかない。私にも少し手習をさして……などゝ時々民子はだゝをいふ。さういふ時の母の小言も極つてゐる。

「お前は手習よか裁縫です。着物が滿足に縫へなくては女一人前として嫁にゆかれません」

此頃僕に一點の邪念が無かつたは勿論であれど、民子の方にも、いやな考などは少しも無かつたに相違ない。併し母が能く小言を云ふにも拘らず、民子は猶朝の御飯だ晝の御飯だといつては僕を呼びにくる。呼びにくる度に、急いで這入つて來て、本を見せろの筆を借せのと云つては暫く遊んでゐる。其間にも母の藥を持つてきた歸りや、母の用を達した歸りには、屹度僕の所へ這入つてくる。僕も民子がのぞかない日は何となく淋しく物足らず思はれた。今日は民さんは何をしてゐるかナと思ひ出すと、ふらつと書室を出る。民子を見にゆくといふほどの心ではないが、一寸民子の姿が目に觸れれば氣が落着くのであつた。何のこつた矢張り民子を見に來たんぢやないかと、自分で自分を嘲つた樣なことが屢々あつたのである。

村の或家さ瞽女がとまつたから聽きにゆかないか、祭文がきたから聽きに行かうのと近所の女共が誘うても、民子は何とか斷りを云うて決して家を出ない。隣村の祭で花火や飾物があるからとの事で、例の向うのお濱や隣のお仙等が大騷ぎして見にゆくといふに、内のものらまで民さんも一所に行つて見てきたらと云うても、民子は母の病氣を言ひ前にして行かない。僕も餘りそんな所へ出るは厭であつたから家に居る。民子は鼠々と僕の所へ這入つてきて、小聲で、私は内に居るのが一番面白いわと云つてニッコリ笑ふ。僕も何となし民子をばそんな所へやりたくなかつた。

僕が三日置き四日置きに母の藥を取りに松戸へゆく。どうかすると歸りが晩くなる。民子は三度も四度も裏坂の上まで出て渡しの方を見てゐたさうで、いつでも家中のものに冷かされる。民子は眞面目になつて、お母さんが心配して、見てお出で見てお出でといふからだと云ひ譯をする。家の者は皆ひそ〳〵笑つてゐるとの話であつた。

さういふ次第だから、作をんなのお增などには、無上と民子を小面憎がつて、何かといふと、一民子さんは政夫さんとこへ許り行きたがる、隙さへあれば政夫さんにこびりついてゐる一

などと頻りに云ひはやしたらしく、隣のお仙や向うのお濱等まで彼是噂をする。これを聞いてか嫂が母に注意したらしく、或日母は常になく六つかしい顏をして、二人を枕もとへ呼びつけ意味有り氣な小言を云うた、

「男も女も十五六になれば最早兒供ではない。お前等二人が餘り仲が好過ぎるとて人が彼是云ふさうぢや。氣をつけなくてはいけない。民子が年かさの癖によくない。是からはもう決して政の所へなど行くことはならぬ。民子を許すではないが政は未だ兒供だ。民やは十七ではないか。つまらぬ噂をされるとお前の體に疵がつく。政だつて氣をつけろ……來月から千葉の中學へ行くんぢやないか」

民子は年が多いし且は意味あつて僕の所へゆくであらうと思はれたと氣がついたか、非常に愧ぢ入つた樣子に、顏眞赤にして俯向いてゐる。常には母に少し位小言云はれても隨分だゝをいふのだけれど、此日は只兩手をついて俯向いたきり一言もいはない。何の疚しい所のない僕は頗る不平で、

「お母さんそりゃ餘り御無理です。人が何と云つたつて、私等は何の譯もないのに、何か大變惡いことでもした樣なお小言ぢやありませんか。お母さんだつていつもさう云つてぢやありませんか。民子とお前とは兄弟も同じだ、お母さんの眼からはお前も民子も少しも隔てはない、仲よくしろよといつでも云つたぢやありませんか」

母の心配も道理のあることだが、僕等もそんないやらしいことを云はれようとは少しも思つて居なかつたから、僕の不平もいくらかの理はある。母は俄にやさしくなつて、

「お前達に何の譯もないことはお母さんも知つてるがネ、人の口がうるさいから、只これから少し氣をつけてと云ふのです」

色青ざめた母の顏にもいつしか僕等を眞から可愛がる笑が湛へて居る。やがて、

「民やはあの又藥を持つてきて、それから縫掛けの袷を今日中に仕上げてしまひなさい……。政は立つた次手に花を剪つて佛壇へ捧げて下さい。菊はまだ咲かないか、そんなら紫苑でも切つてくれよ」

本人達は何の氣なしであるのに、人が彼是云ふので却て無邪氣でゐられない樣にして終ふ。

僕は母の小言も一日しか覺えてゐない。二三日たつて民さんはなぜ近頃は來ないのかしらんと思つた位であつたけれど、民子の方では、それからといふものは樣子がからつと變つて終うた。

民子は其後僕の所へは一切顏出ししない許りでなく、座敷の内で行逢つても、人のゐる前などでは容易に物も云はない、何となく極りわるさうに、まぶしい樣な風で急いで通り過ぎて終ふ。據處なく物を云ふにも、今までの無遠慮に隔てのない風はなく、いやに丁寧に改まつて口をきくのである。時には僕が餘り俄に改まつたのを可笑しがつて笑へば、民子も遂には袖で笑ひを隱して逃げて終ふといふ風で、兎に角一重の垣が二人の間に結ばれた樣な氣合になつた。

それでも或日の四時過ぎに、母の云ひつけで僕が背戸の茄子畑に茄子をもいで居ると、いつのまにか民子が笊を手に持つて、僕の後にきてゐた。

「政夫さん……」

出し拔けに呼んで笑つてゐる。

「私もお母さんから云ひつかつて來たのよ。今日の縫物は肩が凝つたらう、少し休みながら茄子をもいできてくれ、明日麹漬をつけるからつて、お母さんがさう云ふから、私飛んできました」

民子は非常に嬉しさうに元氣一ぱいで、僕が、

「それでは僕が先にきてゐるのを民さんは知らないで來たの」

と云ふと民子は、

「知らなくてサ」

にこ／＼しながら茄子を採り始める。

茄子畑といふは、椎森の下から一重の藪を通り拔けて、家より西北に當る裏の千栽畑。崖の上になつてるので、利根川は勿論中川までもかすかに見え、武藏一ゑんが見渡される。秩父から足柄箱根の山々、富士の高峯も見える。東京の上野の森だと云ふのもそれらしく見える。水のやうに澄みきつた秋の空、日は一間半許りの邊に傾いて、僕等二人が立つて居る茄子畑を正面に照り返して居る。あたり一體にシンとして又如何にもハッキリとした景色。吾等二人は眞に畫中の人である。

「マア何といふ好い景色でせう」

民子も暫く手をやめて立つた。

僕は茲で白状するが、此時の僕は慥に十日以前の僕ではなかつた。二人は決して此時無邪氣

な友達ではなかつた。いつの間にさういふ心持が起つて居たか、自分には少しも判らなかつたが、矢張り母に叱られた頃から、僕の胸の中にも小さな戀の卵が幾個か湧きそめて居つたに違ひない。僕の精神狀態がいつの間にか變化してきたは、隱すことの出來ない事實である。此日初めて民子を女として思つたのが、僕に邪念の萌芽ありし何よりの證據ぢや。

民子が體をくの字にかゞめて、茄子をもぎつつある其横顏を見て今更のやうに民子の美しく可愛らしさに氣がついた。これまでにも可愛らしいと思はぬことはなかつたが、今日はしみじみと其美しさが身にしみた。しなやかに光澤のある鬢の毛につゝまれた耳たぼ、豐かな頰の白く鮮かな、顎のくゝしめの愛らしさ、頸のあたり如何にも清げなる、藤色の半襟や花染の襷や、それらが悉く優美に眼にとまつた。さうなると恐ろしいもので、物を云ふにも思ひ切つた言は云へなくなる、羞しくなる、極りが惡くなる、皆例の卵の作用から起ることであらう。

此十日許り仲垣の隔てが出來て、ロク〳〵話もせなかつたから、これも今までならば無論そんな事考へもせぬに極つて居るが、今日は此で何か話さねばならぬ樣な氣がした。僕は初め無造作に民さんと呼んだけれど、跡は無造作に詞が續かない。をかしく咽がつまつて聲が出ない。民子は茄子を一つ手に持ちながら體を起し、

「政夫さん、何に……」

「何でもないけど民さんは近頃へんだからさ。僕なんかすつかり嫌ひになつたやうだもの」

民子はさすがに女性で、さういふ事には僕などより遙に神經が鋭敏になつてゐる。さも口惜しさうな顏して、つと僕の側へ寄つてきた。

「政夫さんはあんまりだわ。私がいつ政夫さんに隔てをしました……」

「何さ、此頃民さんは、すつかり變つちまつて、僕なんかには用はないらしいからよ。それだつて民さんに不足を云ふ譯ではないよ」

民子はせきこんで、

「そんな事いふはそりや政夫さんひどいわ、御無理だわ。此間は二人を並べて置いて、お母さんにあんなに叱られたぢやありませんか。あなたは男ですから平氣でおいでだけど、私は年は多いし女ですもの、あア云はれては實に面目がないぢやありませんか。それですから、私は一生懸命になつて たしなんで居るんでさ。それを政夫さん隔てるの厭になつたらうのと云ふんだもの、私はほんとにつまらない……」

民子は泣き出しさうな顏つきで僕の顏をぢいツと視てゐる。僕も只話の小口にさう云うたまでであるから、民子に泣きさうになられては、かはいさうに氣の毒になつて、

「僕は腹を立つて言つたでは無いのに、民さんは腹を立つたの……僕は只民さんが俄に變つて逢つても口もきかず、遊びにも來ないから、いやに淋しく悲しくなつちまつたのさ。それだからこれからも時々は遊びにお出でよ。お母さんに叱られたら僕が咎を背負ふから……人が何と云つたつてよいぢやないか」

何といふても兒供だけに無茶なことをいふ。無茶なことを云はれて民子は心配やら嬉しいやら、嬉しいやら心配やら、心配と嬉しいとが胸の中で、ごつたになつて爭うたけれど、とう〳〵嬉しい方が勝を占めて終つた。猶三言四言話をするうちに、民子は鮮かな曇りのない元の元氣になつた。僕も勿論愉快が溢れる……、宇宙間に只二人きり居るやうな心持にお互になつたのである。やがて二人は茄子のもぎくらをする。大きな畑だけれど、十月の半過ぎでは、茄子もちらほらしかなつて居ない。二人で漸く二升許り宛を採り得た。

「まア民さん、御覽なさい、入日の立派なこと―

民子はいつしか笊を下へ置き、兩手を鼻の先に合せて太陽を拜んでゐる。西の方の空は一體に薄紫にぼかした樣な色になつた。ひた赤く赤い許りで光線の出ない太陽が今其半分を山に埋めかけた處、僕は民子が一心日を拜むしをらしい姿が永く眼に殘つてる。

二人が餘念なく話をしながら歸つてくると、背戸口の四つ目垣の外にお增がぼんやり立つて、こつちを見て居る。民子は小聲で、

「お增が又何とか云ひますよ」

「二人共お母さんに云ひつかつて來たのだから、お增なんか何と云つたつて、かまやしないさ—

一事件を經る度に二人が胸中に湧いた戀の卵は層を增してくる。機に觸れて交換する雙方の意志は、直に互の胸中にある例の卵に至大な養分を給與する。今日の日暮は僅に其機であつた。ぞつと身振ひをする程、著しき徵候を現したのである。併し何というても二人の關係は卵時代で極めて取りとめがない。人に見られて見苦しい樣なこともせず、顧みて自ら疚しい樣なこともせぬ。從つてまだ／＼暢氣なもので、人前を繕ふと云ふ樣な心持は極めて少なかつた。僕と民子との關係も、此位でお終ひになつたならば、十年忘れられないといふ程にはならなかつただらうに。

親といふものは何處の親も同じで、吾子をいつまでも兒供のやうに思うてゐる。僕の母なども其一人に漏れない。民子は其後時折僕の書室へやつてくるけれど、餘程人目を計らつて氣ぼねを折つてくる樣な風で、いつきても少しも落着かない。先に僕に厭味を云はれたから仕方なしにくるかとも思はれたが、それは間違つてゐた。僕等二人の精神狀態は二三日と云はれぬ程著しき變化を遂げてゐる。僕の變化は最も甚しい。三日前には、お母さんが叱れば私が科を背負ふから遊びにきてとまで無茶を云うた僕が、今日は迚てもそんな譯のものでない。民子が少し長居をすると、もう氣が咎めて心配でならなくなつた。

「民さん、又お出でよ、餘り長く居ると人がつまらぬことを云ふから—

民子も心持は同じだけれど、僕にもう行けと云はれると妙にすねだす。

「アレあなたは先日何と云ひました。人が何と云つたッてよいから遊びに來いと云ひはしませんか。私はもう人に笑はれてもかまひませんの—

困つた事になつた。二人の關係が密接する程、人目を恐れてくる。人目を恐れる樣になつては、最早罪惡を犯しつゝあるかの如く、心もおど／＼するのであつた。母は口でこそ、男も女も十五六になれば兒供ではないと云つても、それは理窟の上のことで、心持ではまだ／＼二人を丸で兒供の樣に思つてゐるから、其後民子が僕の室へきて本を見たり話をしたりしてゐるのを、直ぐ前を通りながら一向氣に留める樣子もない。此間の小言も實は嫂が言ふから出たまででほんたうに腹から出た小言ではない。母の方はさうであつたけれど、兄や嫂やお增などは、盛んに蔭言をいうて笑つてゐたらしく、村中の評判には、二つも年の多いのを嫁にする氣かしらんなどと專いうてゐるとの話。それやこれやのことが薄々二人に知れたので、僕から言ひだして當分二人は遠ざかる相談をした。

人間の心持といふものは不思議なもの。二人が少しも隔意なき得心上の相談であつたのだけれど、僕の方から言ひ出した許りに、民子は妙に鬱ぎ込んで、丸で元氣がなくなり、悄然としてゐるのである。それを見ると僕もまた溜らなく氣の毒になる。感情の一進一退はこんな風にもつれつゝ危くなるのである。兎に角二人は表面

だけは立派に遠ざかつて四五日を經過した。
　陰暦の九月十三日、今夜が豆の月だといふ日の朝、露霜が降りたと思ふほどつめたい。其替り天氣はきら／＼してゐる。十五日が此村の祭で明日は宵祭といふ譯故、野の仕事も今日一通り極りをつけねばならぬ所から、家中手分けをして野へ出ることになつた。それで甘露的恩命が僕等兩人に下つたのである。兄夫婦とお増と外に男一人とは中稻の刈殘りを是非刈つて終はねばならぬ。民子は僕を手傳ひとして山畑の棉を採つてくることになつた。これは固より母の指圖で誰にも異議は云へない。
「マアあの二人を山の畑へ遣るッて、親といふものはよッぽどお目出度いものだ」
　奥底のないお増と意地曲りの嫂とは口を揃へてさう云つたに違ひない。僕等二人は固より心の底では嬉しいに相違ないけれど、此場合二人で山畑へゆくとなつては、人に顏を見られる様な氣がして大に極りが惡い。義理にも進んで行きたがる様な素振りは出來ない。僕は朝飯前は書室を出ない。民子も何か愚圖々々して支度もせぬ様子。もう嬉しがつてと云はれるのが口惜しいのである。母は起きてきて、
「政夫も支度しろ。民やもさつさと支度して早く行け。二人でゆけば一日には樂な仕事だけれど、道が遠いのだから、早く行かないと歸りが夜になる。成るたけ日の暮れない内に歸つてくる様によ。お増は二人の辨當を拵へてやつてくれ、お菜はこれ／＼の物で……」
　まことに親のこゝろだ。民子に辨當を拵へさせては、自分のであるから、お菜などはロクな物を持つて行かないと氣がついて、ちやんとお増に命じて拵へさせたのである。僕はズボン下に足袋裸足麥藁帽といふ出で立ち、民子は手指を佩いて股引も佩いてゆけと母が云ふと、手指許り佩いて股引佩くのにぐづ／＼してゐる。民子は僕のところへきて、股引佩かないでもよい様にお母さんにさう云つてくれと云ふ。僕は民さんがさう云ひなさいと云ふ。押問答をしてゐる内に、母はきゝつけて笑ひながら、
「民やは町場者だから、股引佩くのは極りが惡いかい。私は又お前が柔かい手足へ、茨や薄で傷をつけるが可哀想だから、さう云つたんだが、いやだと云ふならお前のすきにするがよいさ」
　それで民子は、例の襷に前掛姿で麻裏草履といふ支度。二人が一斗笊一個宛を持ち、僕が別に番ニョ片籠と天秤とを肩にして出掛ける。民子が跡から菅笠を被つて出ると、母が笑聲で呼びかける。
「民や、お前が菅笠を被つて歩くと、丁度木の子が歩くやうで見つともない。編笠がよからう。新らしいのが一つあつた筈だ」
　稻刈連は出てしまつて別に笑ふものもなかつたけれど民子はあわてて菅笠を脱いで、顏を赧くしたらしかつた。今度は編笠を被らずに手に持つて、それぢやお母さんいつてまゐりますと挨拶して走つて出た。
　村のものらも彼是いふと聞いてゐるので、二人揃うてゆくも人前恥かしく、急いで村を通り拔けようとの考から、僕は一足先になつて出掛ける。村はづれの坂の降口の大きな銀杏の樹の根で民子のくるのを待つた。こゝから見おろすと少しの田圃がある。色よく黄ばんだ晩稻に露をおんで、シットリと打伏した光景は、氣のせゐか殊に清々しく、胸のすくやうた眺めである。民子はいつの間にか來てゐて、昨日の雨で洗ひ流した赤土の上に、二葉三葉銀杏の葉の落ちてるのを拾つてる。
「民さん、もうきたかい。此天氣のよいことゝ

うです、ほんとに心持のよい朝だね」

「ほんとに天氣がよくて嬉しいわ。このまア銀杏の葉の綺麗なこと。さア出掛けませう」

民子の美しい手で持つてると銀杏の葉も殊に綺麗に見える。二人は坂を降りて漸く窕屈な場所から廣場へ出た氣になつた。今日は大いそぎで棉を採り片付け、さん〴〵面白いことをして遊ばうなどと相談しながら歩く。道の眞中は乾いてゐるが、兩側の田についてゐる所は、露にしと〳〵に濡れて、いろ〳〵の草が花を開いてる。タウコギは末枯れて、水蕎麥蓼など一番多く繁つてゐる。都草も黄色く花が見える。野菊がよろ〳〵と咲いてゐる。民さんこれ野菊がと僕は吾知らず足を留めたけれど、民子は聞えないのかさつさと先へゆく。僕は一寸脇へ物を置いて、野菊の花を一握り採つた。

民子は一町ほど先へ行つてから、氣がついて振り返るや否や、あれッと叫んで驅け戻つてきた。

「民さんはそんなに戻つてきないッだつて僕が行くものを……」

「まア政夫さんは何をしてゐたの。私びツくりして……まア綺麗な野菊、政夫さん、私に半分おくれッたら、私ほんたうに野菊が好き」

「僕はもとから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……」

「私なんでも野菊の生れ返りよ。野菊の花を見ると身振ひの出るほど好もしいの。どうしてこんなかと、自分でも思ふ位」

「民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のやうな人だ」

民子は分けてやつた半分の野菊を顏に押しあてて嬉しがつた。二人は歩きだす。

「政夫さん……私野菊の樣だつてどうしてですか」

「さアどうしてといふことはないけど、民さんは何がなし野菊の樣な風だからさ」

「それで政夫さんは野菊が好きだつて……」

「僕大好きさ」

民子はこれからはあなたが先になつてと云ひながら、自らは後になつた。今の偶然に起つた簡單な問答は、お互の胸に強く有意味に感じた。民子もさう思つた事は其素振りで解る。玆まで話が迫ると、もう其先を言ひ出すことは出來ない。話は一寸途切れてしまつた。

何と言つても幼い兩人は、今罪の神に飜弄せられつゝあるのであれど、野菊の樣な人だと云つた詞について、其野菊を僕はだい好きだと云つた時すら、僕は既に胸に動氣を起した位で、直ぐにそれ以上を言ひ出すほどに、まだ〳〵づうづうしくはなつてゐない。民子も同じこと、物に突きあたつた樣な心持で強くお互に感じた時に辭はつまつてしまつたのだ。二人は暫く無言で歩く。

眞に民子は野菊の樣な兒であつた。民子は全くの田舍風ではあつたが、決して粗野ではなかつた。可憐で優しくてさうして品格もあつた。厭味とか憎氣とかいふ所は爪の垢ほどもなかつた。どう見ても野菊の風だつた。

暫くは默つてゐたけれど、いつまで話もしないでゐるは猶をかしい樣に思つて、無理と話を考へ出す。

「民さんはさつき何を考へてあんなに脇見もしないで歩いてゐたの」

「わたし何も考へてゐやしません」

「民さんはそりや譃だよ。何か考へごとでもしなくてあんな風をする譯はないさ。どんなことを考へてゐたのか知らないけれど、隱さないだつてよいぢやないか」

「政夫さん、濟まない。私さつきほんとに考事してゐました。私つく〴〵考へて情なくなつたの。わたしはどうして政夫さんよか年が多

いんでせう。私は十七だと言ふんだもの、ほんとに情なくなるわ……

「民さんは何ういふことを言ふんだらう。先に生れたから年が多い、十七年育つたから十七になつたのぢやないか。十七だから何で情ないのですか。僕だつて、さ來年になれば十七歳さ。民さんはほんとに妙なことを云ふ人だ」

僕も今民子が言つたことの心を解せぬほどの兒供でもない。解つてはゐるけど、わざと戯れの様に聞きなして、振りかへつて見ると、民子は眞に考へ込んでゐる様であつたが、僕と顔合せて極りわるげに遽に側を向いた。

かうなつてくると何をいうても、直ぐそこへ持つてくるので話がゆきつまつてしまふ。二人の内でどちらか一人が、すこうしほんの僅にでも押が強ければ、こんなに話がゆきつまるのではない。お互に心持は奥底まで解つてゐるのだから、吉野紙を突破るほどにも力がありさへすれば、話の一歩を進めてお互に明放してしまふことが出來るのである。乍併眞底からおぼこな二人は、其吉野紙を破るほどの押がないのである。又茲で話の皮を切つてしまはねばならぬと云ふ様な、ハッキリした意識も勿論ないのだ。言はゞ未だ取止めのない卵的の戀であるから、少しく心の力が必要な所へくると話がゆきつまつてしまふのである。

お互に自分で話し出しては自分が極りわるくなる様なことを繰返しつゝ幾町かの道を歩いた。詞數こそ少なけれ、其詞の奥には二人共に無量の思ひを包んで、極りがわるい感情の中には何とも云へない深き愉快を湛へて居る。それで所謂足も空に、いつしか田圃も通りこし、山路へ這入つた。今度は民子が心を取り直したらしく鮮かな聲で、

「政夫さん、もう半分道來ましてせうか。大長柵へは一里に遠いッて云ひましたねイ」

「さうです、一里半には近いさうだが、もう半分の餘來ましたらうよ。少し休みませうか」

「わたし休まなくとも、ようございますが、早速お母さんの罰があたつて、薄の葉でこんなに手を切りました。ちよいとこれで結はへて下さいな」

親指の中程で疵は少しだが、血が意外に出た。僕は早速紙を裂いて結はへてやる。民子が兩手を赤くしてゐるのを見た時非常にかはいさうであつた。こんな山の中で休むより、畑へ往つてから休まうといふので、今度は民子を先に僕が後になつて急ぐ。八時少し過ぎと思ふ時分に大長柵の畑へ着いた。

十年許り前に親父が未だ達者な時分、隣村の親戚から頼まれて餘儀なく買つたのださうで、畑が八反と山林が二町ほど茲にあるのである。此邊一帯に高臺は皆山林で其間の柵が畑になつて居る。越石を持つてゐると云へば、世間體はよいけど、手間許り掛つて割りに合はないといつて母が言つてる畑だ。

三方林で圍まれ、南が開いて餘所の畑とつづいてゐる。北が高く南が低い傾斜になつてゐる。母の推察通り、棉は末にはなつてゐるが、風が吹いたら溢れるかと思ふほど棉はゑんでゐる。點々として畑中白くなつてゐる其棉に朝日がさしてゐると目ぶしい様に綺麗だ。

「まアよくゑんでること。今日採りにきてよい事しました」

民子は女だけに、棉の綺麗にゑんでるのを見て嬉しさうにさう云つた。畑の眞中程に桐の樹が二本繁つてゐる。葉が落ちかけて居るけれど、十月の熱を凌ぐには十分だ。茲へあたりの黍殻を寄せて二人が陣どる。辨當包みを枝へ釣る。天氣のよいのに山路を急いだから、汗ばんで熱い。着物を一枚づつ脱ぐ。風を懐へ入れ足を延して休む。青ぎつた空に翠の松林、百

舌も何處かで鳴いてゐる。峯の響くほど山は靜かなのだ。天と地との間で廣い畑の眞ン中に二人が話をしてゐるのである。

「ほんとに民子さん、けふといふけふは極樂の樣な日ですね」

顏から頭から汗を拭いた跡のつや／＼しさ、今更に民子の横顏を見た。

「さうですねイ、わたし何だか夢の樣な氣がするの。今朝家を出る時はほんとに極りが惡くて……嫂さんには變な眼つきで視られる、お增には冷かされる、私はのぼせてしまひました。政夫さんは平氣でゐるから憎らしかつたわ」

「僕だつて平氣なもんですか。村の奴らに逢ふのがいやだから、僕は一足先に出て銀杏の下で民さんを待つてゐたんでさア。それはさうと、民さん、今日はほんとに面白く遊ばうね。僕は來月は學校へ行くんだし、今月とて十五日しかないし、二人でしみ／＼話の出來る樣なことは是から先は六づかしい。あはれッぽいこと云ふやうだけど、二人の仲も今日だけかしらと思ふのよ。ねイ民さん……」

「そりやア政夫さん、私は道々それ許り考へて來ました。私がさつきほんとに情なくなつてと言つたら、政夫さんは笑つておしまひなしたけど……」

面白く遊ばう遊ばう言うても、話を始めると直ぐにかうなつてしまふ。民子は涙を拭うた樣であつた。丁度よくそこへ馬が見えてきた。西側の山路から、がさ／＼笹にさはる音がして、薪をつけた馬を引いて頰冠の男が出て來た。能く見ると意外にも村の常吉である。此の奴はいつか向うのお濱に民子を遊びに連れだしてくれと頻りに賴んだといふ奴だ。いやな野郎がきやがつたなと思うてゐると、

「や政夫さん、コンチヤどうも結構なお天氣ですな。今日は御夫婦で棉採りかな。洒落れてますね。アハヽヽヽ」

「オウ常さん、今日は駄賃かな。大變早く御精が出ますね」

「ハア吾々なんざア駄賃取りでもして適に一盃やるより外に樂みもないんですからな。民子さん、いやに見せつけますね。餘り罪ですぜ。アハヽヽヽ」

此野郎失敬なと思つたけれど、吾々も餘り威張れる身でもなし、笑ひとぼけて常吉をやり過ごした。

「馬鹿野郎、實に厭なやつだ。さア民さん、始めませう。ほんとに民さん、元氣をお直しよ。そんなにくよ／＼おしでないよ。僕は學校へ行つたて千葉だもの、盆正月の外にも來ようと思へば土曜の晩かけて日曜に來られるさ……」

「ほんとに濟みません、泣面などして。あの常さんて男、何といふいやな人でせう」

民子は襷掛け僕はシャツに肩を脱いで一心に採つて三時間許りの間に七分通り片づけてしまつた。もう跡はわけがないから辨當にしようといふことにして樹の蔭に戻る。僕はかねて用意の水筒を持つて、

「民さん、僕は水を汲んで來ますから、留守番を賴みます。歸りに『えびづる』や『あけび』をうんと土産に採つて來ます。」

「私は一人で居るのはいやだ。政夫さん、一所に連れてつて下さい。さつきの樣な人にでも來られたら大變ですもの」

「だつて民さん、向うの山を一つ越して先ですよ、淸水のある所は。道といふ樣な道もなくて、それこそ茨や薄で足が傷だらけになりますよ。水がなくちや辨當が食べられないから、困つたなア、民さん、待つてゐられるでせう」

「政夫さん、後生だから連れて行つて下さい。あなたが歩ける道なら私にも歩けます。一人で茲にゐるのはわたしやどうしても……」

「民さんは山へ來たら大變だゝッ兒になりましたネー。それぢや一所に行きませう」
辨當は籠の中へ隱し、着物はてんでに着てしまつて出掛ける。民子は頻りに、にこ〱してゐる。端から見たならば、馬鹿々々しくも見苦しくもあらうけれど、本人同志の身にとつては、其のらちもなき押問答の内にも限りなき嬉しみを感ずるのである。高くもないけれど道のない所をゆくのであるから、笹原を押分け樹の根につかまり、崖を攀づる。屢々民子の手を採つて曳いてやる。
近く二三日以來の二人の感情では、民子が求めるならば僕はどんなことでも拒まれない、又僕が求めるなら矢張りどんなことでも民子は決して拒みはしない。さういふ間柄でありつゝも、飽くまで臆病に飽くまで氣の小さな兩人は、嘗て一度も有意味に手などを採つたことはなかつた。然るに今日は偶然の事から屢々手を採り合ふに至つた。這邊の一種云ふべからざる愉快な感情は經驗ある人にして初めて語ることが出來る。
「民さん、茲まで來れば、清水はあすこに見えます。是から僕が一人で行つてくるから茲に待つて居なさい。僕が見えて居たら居られるでせう」
「ほんとに政夫さんの御厄介ですね……そんなにだゝを言つては濟まないから、茲で待ちませう。あらア野葡萄があつた」
僕は水を汲んでの歸りに、水筒は腰に結ひつけ、あたりを少し許り探つて、「あけび」四五十と野葡萄一もくさを採り、龍膽の花の美しいのを五六本見つけて歸つてきた。歸りは下りだから無造作に二人で降りる。畑へ出口で僕は春蘭の大きいのを見つけた。
「民さん、僕は一寸「アックリ」を掘つてゆくから、此「あけび」と『えびづる』を持つて行つて下さい」
「『アックリ』て何にい。あらア春蘭ぢやありませんか」
「民さんは町場もんですから、春蘭などゝ品のよいこと仰しやるのです。矢切の百姓なんぞは『アックリ』と申しましてね、皹の藥に致します。ハヽヽヽ」
「あらア口の惡いこと。政夫さんは、けふはほんとに口が惡くなつたよ」
山の辨當と云へば、土地の者は一般に樂みの一つとしてある。何か生理上の理由でもあるか知らんが、兎に角、山に仕事をしてやがてたべる辨當が不思議とうまいことは誰も云ふ所だ。今吾々二人は新らしき清水を汲み來り母の心を籠めた辨當を分けつゝたべるのである。興味の尋常でないは言ふも愚な次第だ。僕はあけびを好み民子は野葡萄をたべつゝ暫く話をする。
民子は笑ひながら、
「政夫さんは皹の藥にアックリとやらを採つてきて學校へお持ちになるの。學校で皹がきれたらをかしいでせうね……」
僕は眞面目に、
「なアにこれはお增にやるのさ。お增はもう疾に皹を切らしてゐるでせう。此間も湯に這入る時にお增が火を焚きにきて非常に皹を痛がつてゐるから、其内に僕が山へ行つたら「アックリ」を採つてきてやると言つたのさ」
「まアあなたは親切な人ですことね……お增は陰日向のない憎氣のない女ですから、私も仲好くしてゐたんですが、此頃は何となし私に突き當る樣な事ばかし言つて、何でもわたしを憎んでゐますよ」
「アハヽヽ、それはお增どんが燒餅をやくのでさ。つまらんことにもすぐ燒餅を燒くのは、女の癖さ。僕がそら「アックリ」を採つていつてお增にやると云へば、民さんがすぐに、まアあなた

は親切な人とか何とか云ふのと同じ譯さ」

「此人はいつのまにこんなに口がわるくなつたのでせう。何を言つても政夫さんにはかなひやしない。いくら私だつてお増が根も底もない燒もちだ位は承知してゐますよ……」

「實はお増も不憫な女よ。兩親があんなことになりさへせねば、奉公人とまでなるのではない。親父は戰爭で死ぬ、お袋は之れを嘆いたがもとでの病死、一人の兄がはづれものといふ譯で、とう／＼あの始末。國家の爲に死んだ人の娘だもの、民さん、いたはつてやらねばならない。あれでも民さん、あなたをば大變ほめてゐるよ。意地曲りの嫂にこきつかはれるのだから一層かはいさうでさ」

「そりア政夫さん、私もさう思つて居ますさ。お母さんも能くさうおつしやいました。つまらないものですけど何とかかとか分けてやつてますが、又政夫さんの樣に情深くされると……」

民子は云ひさして又話を詰まらしたが、桐の葉に包んで置いた龍膽の花を手に採つて、急に話を轉じた。

「こんな美しい花、いつ採つてお出でなして。りんだうはほんとによい花ですね。わたしりんだうがこんなに美しいとは知らなかつたわ。わたし急にりんだうが好きになつた。おオえエ花……」

花好きな民子は例の癖で、色白の顔に其紫紺の花を押しつける。やがて何を思ひだしてか、ひとりでにこ／＼笑ひだした。

「民さん、なんです、そんなにひとりで笑つて」

「政夫さんはりんだうの樣な人だ」

「どうして」

「さアどうしてといふことはないけど、政夫さんは何がなし龍膽の樣な風だからさ」

民子は言ひ終つて顔をかくして笑つた。

「民さんも餘程人が惡くなつた。それでさつきの仇討といふ譯ですか。口眞似なんか恐入りますナ。併し民さんが野菊で僕が龍膽とは面白い對ですね。僕は悅んでりんだうになります。それで民さんがりんだうを好きになつてくれゝば猶嬉しい」

二人はこんならちもなき事いうて悅んでゐた。秋の日足の短さ、日は漸く傾きそめる。さアとの掛聲で棉もぎにかゝる。午後の分は僅であつたから一時間半許りでもぎ終へた。何やかやそれ／＼まとめて番ニョに乘せ、二人で差しあひにかつぐ。民子を先に僕が後に、とぼ／＼畑を出かけた時は、日は早く松の梢をかぎりかけた。

半分道も來たと思ふ頃は十三夜の月が、木の間から影をさして尾花にゆらぐ風もなく、露の置くさへ見える樣な夜になつた。今朝は氣がつかなかつたが、道の西手に一段低い畑には、蕎麥の花が薄絹を曳き渡したやうに白く見える。こほろぎが寒げに鳴いてゐるにも心とめずにはゐられない。

「民さん、くたぶれたでせう。どうせおそくなつたんですから、此景色のよい所で少し休んで行きませう」

「こんなにおそくなるなら、今少し急げばよかつたに。家の人達に屹度何とか言はれる。政夫さん、私はそれが心配になるわ」

「今更心配しても追つかないから、まア少し休みませう。こんなに景色のよいことは滅多にありません。そんなに人に申譯のない樣な惡いことはしないもの、民さん、心配することはないよ」

月あかりが斜にさしこんでゐる道端の松の切株に二人は腰をかけた。目の先七八間の所は木の蔭で薄暗いがそれから向うは畑一ぱいに月がさして、蕎麥の花が際立つて白い。

「何といふえい景色でせう。政夫さん、歌とか

俳句とかいふものをやつたら、こんなときに面白いことが云へるでせうね。私ら様な無学でもこんな時には心配も何も忘れますもの。政夫さん、あなた歌をおやんなさいよ」

「僕は實は少しやつてゐるけど、六つかしくて容易に出來ないのさ。山畑の蕎麥の花に月がよくて、こほろぎが鳴くなどは實にえいですなア。民さん、これから二人で歌をやりませうか」

お互に一つの心配を持つ身となつた二人は、内に思ふことが多くて却て話は少ない。何となく覺束ない二人の行末、茲で少しく話をしたかつたのだ。民子は勿論のこと、僕よりも一層話したかつたに相違ないが、年の至らぬのと浮いた心のない二人は、なか〳〵差向ひでそんな話は出來なかつた。暫くは無言でぼんやり時間を過ごすうちに、一列の雁が二人を促すかの様に空近く鳴いて通る。

漸く田圃へ降りて巣香の木が見えた時に、二人は又同じ様に一種の感情が胸に湧いた。それは外でもない、何となく家に這入りづらいと言ふ心持である。這入りづらい譯はないと思うても、どうしても這入りづらい。躊躇する暇もない、忽ち門前近く來てしまつた。

「政夫さん・・・あなた先になつて下さい。私極りわる〳〵てしやうがないわ」

「よし、それぢや僕が先にならう」

僕は頗る勇氣を鼓し殊に平氣な風を裝うて門を這入つた。家の人達は今夕飯最中で盛んに話が湧いてゐるらしい。庭場の雨戸は未だ開いたなりに月が軒口迄さし込んでゐる。僕が咳払を一ツやつて庭場へ這入ると、臺所の話は俄に止んでしまつた。民子は僕の先で僕の肩を撞いた。僕も承知してゐるのだ、今御前會議で二人の噂が如何に盛んであつたか。

宵祭ではあり十三夜ではあるので、家中表座敷へ揃うた時、母も奥から起きてきた。母は一通り二人の餘り遲かつた事を咎めて深くは言はなかつたけれど、常とは全く違つてゐた。何か思つて居るらしく、少しも打解けない。これまでは口には小言を言うても、心中に疑ひはなかつたのだが、今夜は口には餘り言はないが、心では十分に二人に疑ひを起したに違ひない。民子は愈小さくなつて座敷中へは出ない。僕は山から採つてきた、あけびや野葡萄やを澤山座敷中へ並べ立てて、暗に僕がこんな事をして居たから遲くなつたのだとの意を示し無言の辯解をやつても何のきゝめもない。誰一人それをさうと見るものはない。今夜は何の話にも僕等二人は除けものにされる始末で、最早二人は全く罪あるものと默決されて了つたのである。

「お母さんがあんまり甘過ぎる。あアして居る二人を一所に山畑へやるとは目のないにも程がある。はたでいくら心配してもお母さんがあれでは駄目だ」

これが臺所會議の決定であつたらしい。母の方でも何時迄兒供と思つてゐたが誤りで、自分が悪かつたといふ様な考へに今夜になつたのであらう。今更二人を叱つて見ても仕方がない。何に政夫を學校へ遣つてしまひさへせば仔細はないと母の心はちやんと極つて居るらしく、

「政や、お前はナ十一月へ入つて直ぐ學校へやる積りであつたけれど、さうしてぶら〳〵して居ても爲にならないから、お祭が終つたら、もう學校へゆくがよい。十七日にゆくとしろ・・・えいか、其つもりで小支度して置け」

學校へゆくは固より僕の願ひ、十日や二十日早くとも遲くともそれに仔細はないが、此場合然も今夜言渡があつて見ると、二人は既に罪を犯したものと定められての仕置であるから、民子は勿論僕に取つても頗る心苦しい處がある。實際二人はそれ程に堕落した譯でないから、頭

からさうと極められては、聊か妙な心持がする。さりとて辯解の出來ることでもなし、又强いことを言へる資格も實は無いのである。是れが一ケ月前であつたらば、それはお母さん御無理だ、學校へ行くのは望みであるけど、科を着せられての仕置に學校へゆけとはあんまりでせう……などと直ぐだゝを言ふのであるが、今夜はそんな我儘を言へる程無邪氣ではない。全く處懸に陷つてしまつてゐる。

あれほど可愛がられた一人の母に隱立てをする、何となく隔てを作つて心の有りたけを言ひ得ぬまでになつてゐる、おのづから人前を憚り、人前では殊更に二人がうと／＼しく取りなす樣になつてゐる。かくまで私心が長じてきてどうして立派な口がきけよう。僕は只一言、

「はア……」

と答へたきりなんにも言はず、母の言ひつけに盲從する外はなかつた。

「僕は學校へ往つて了へばそれでよいけど、民さんは跡でどうなるだらうか」

不圖さう思つて、そつと民子の方を見ると、お茄が枝豆をあさつてる後に、民子はうつむいて膝の上に襷をこねくりつゝ沈默してゐる。如何にも元氣のない風で夜のせゐか顏色も青白く見えた。民子の風を見て僕も俄に悲しくなつて泣きたくなつた。涙は瞼を傳つて眼が曇つた。何ぜ悲しくなつたか理由は判然しない。只民子が可哀想でならなくなつたのである。民子と僕との樂しい關係も此日の夜までは續かなく、十三日の晝の光と共に全く消えうせて了つた。嬉しいにつけても思ひのたけは語りつくさず、憂き悲しいことに就けては勿論百分の一だも語りあはないで、二人の關係は闇の幕に這入つて了つたのである。

十四日は祭の初日で只物せはしく日がくれた。お互に氣のない風はしてゐても、手にせはしい仕事のあるばかりに、兎に角思ひ紛らすことが出來た。

十五日と十六日とは、食事の外用事もないままに、書室へ籠りとほしてゐた。ぼんやり机にもたれたなり何をするでもなく、又二人の關係をどうしようかといふ樣なことすらも考へてはゐない。只民子のことが頭に充ちてゐる許りで、極めて單純に民子を思うてゐる外に考へは働いて居らぬ。此二日の間に民子と三四回は逢つたけれど、話も出來ず微笑を交換する元氣もなく、うら淋しい心持を互に目に訴ふるのみであつた。二人の心持が今少しませて居つたならば、此二日の間にも將來の事など隨分話し合ふことが出來たのであらうけれど、しぶとい心持などは毛程もなかつた二人には、其場合になか／＼そんな事は出來なかつた。それでも僕は十六日の午後になつて、何とはなしに以下のやうな事を卷紙へ書いて、日暮に一寸來た民子に僕が居なくなつてから見てくれと云つて渡した。

朝から茲へ這入つたきり、何をする氣にもならない。外へ出る氣にもならず、本を讀む氣にもならず、只繰返し繰返し民さんの事許り思つて居る。民さんと一所に居れば神樣に抱かれて雲にでも乘つて居る樣だ。僕はどうしてこんなになつたんだらう。學問をせねばならない身だから、學校へは行くけれど、心では民さんと離れたくない。民さんは自分の年の多いのを氣にしてゐるらしいが、僕はそんなことは何とも思はない。僕は民さんの思ふとほりになるつもりですから、民さんもさう思つてゐて下さい。明日は早く立ちます。冬期の休みには歸つてきて民

さんに逢ふのを樂みにして居ります。

十月十六日　　政夫

民子樣

學校へ行くにはいへ、罪があつて早くやられると云ふ境遇であるから、人の笑聲話聲にも一々ひがみ心が起きる。我二人に對する嘲笑かの樣に聞かれる。いつそ早く學校へ行つてしまひたくなつた。決心が定まれば元氣も恢復してくる。昨夜は頭も少しくさえ夕飯も心持よくたべた。學校の事何くれとなく母と話をする。やがて寢に就いてからも、

一何だ馬鹿々々しい、十五かそこらの小僧の癖に、女の事など許りくよ／＼考へて……さうだ、さうだ、明朝は早速學校へ行かう、民子は可哀想だけれど……もう考へまい、考へたつて仕方がない、學校々々……

獨り言を言ひ／＼眠りに入つた樣な譯であつた。

舟で河から市川へ出るつもりだから、十七日の朝小雨の降るのに、一切の持物をカバン一個につめ込み民子とお増に送られて矢切の渡へ降りた。村の者の荷舟に便乘する譯でもう船は來て居る。僕は民さんそれぢや……と言ふつもりでも咽がつまつて聲が出ない。民子は僕に包を渡してからは、自分の手のやり場に困つて胸を撫でたり襟を撫でたりして、下許り向いてゐる。眼にもつ淚をお増に見られまいとして、顏を脇へそらしてゐる。民子があはれな姿を見ては僕も淚が抑へ切れなかつた。民子は今日を別れと思つてか、髮はさつぱりとした銀杏返しに薄く化粧をしてゐる。煤色と紺の細かい辨慶縞で、羽織も長着も同じい米澤紬に、品のよい友禪縮緬の帶をしめてゐた。襷を掛けた民子もよかつたけれど今日の民子は又一層引立つて見えた。

僕の氣のせゐでもあるか、民子は十三日の夜からは一日々々とやつれてきて、此日のいたしさ、僕は泣かずには居られなかつた。蟲が知らせるとでもいふのか、これが生涯の別れにならうとは、僕は勿論民子とて、よもやさうは思はなかつたらうけれど、此時のつらさ悲しさは、とても他人に話しても信じてくれるものはないと思ふ位であつた。

尤も民子の思ひは僕より遙かに深かつた相違ない。僕は中學校を卒業する迄にも、四五年間のある體であるに、民子は十七で今年の内にも縁談の話があつて兩親からさう言はれゝば、無造作に拒むことの出來ない身であるから、行末の事をいろ／＼考へて見ると心配の多い譯である。當時の僕はそこまでは考へなかつたけれど、親しく目に沁みた民子のいた／＼しい姿は幾年經つても昨日の事のやうに眼に浮いてゐるのである。

餘所から見たならば、若いうちに能くあるいたづらの勝手な泣面と見苦しくもあつたであらうけれど、二人の身に取つては、眞にあはれに悲しき別れであつた。互に手を控つて後來を語ることも出來ず、小雨のしよぼ／＼降る渡場に、泣きの淚も人目を憚り、一言の詞も交はし得ないで永久の別れをしてしまつたのである。無情の舟は流を下つて早く、十分間と經たぬ内に五町と下らぬ内に、お互の姿は雨の曇りに隔てられて了つた。物も言ひ得ないで、しよんぼりと悄れてゐた不憫な民さんの俤、どうして忘れることが出來よう。民さんを思ふ爲に神の怒りに觸れて即座に打殺さるゝ樣なことがあるとても、僕には民さんを思はずに居られない。年をとつての後の考へから言へば、あアもしたらかうもしたらと思はぬこともなかつたけれど、當時の若い同志の思慮には何等の工夫も無かつたのである。八百屋お七は家を燒いたらば、再た

度思ふ人に逢はれることと工夫をしたのであるが、吾々二人は襖戸一枚を忍んで開ける程の智慧も出なかつた。それ程に無邪氣な可憐な戀でありながら、猶親に怖ぢ兄弟に憚り、他人の前にて涙も拭き得なかつたのは如何に氣の弱い同志であつたらう。

僕は學校へ行つてからも、兎角民子のことばかり思はれて仕方がない。學校に居つてこんなことを考へてどうするものかなどと、自分で自分を叱り勵まして見ても何の甲斐もない。さういふ詞の尻からすぐ民子のことが湧いてくる。多くの人中に居ればどうにか紛れるので、日の中は成るたけ一人で居ない樣に心掛けて居た。夜になつても寢ると仕方がないから、成るたけ人中で騷いで居て疲れて寢る工夫をして居た。さういふ始末で漸く年もくれ冬期休業になつた。

僕が十二月二十五日の午前に歸つて見ると、庭一面に籾を干してあつて、母は前の縁側に蒲團を敷いて日向ぼつこをしてゐた。近頃は餘程體の工合もよい、今日は兄夫婦と男とお増とは山へ落葉をはきに行つたとの話である。僕は民さんはと口の先まで出たけれど遂に言ひ切らなかつた。母も意地惡く何とも言はない。僕は歸り早々民子のことを問ふのが如何にも極り惡く、其儘例の書室を片づけて茲に落着いた。併し日暮までには民子も歸つてくることと思ひながら、おろ〳〵して待つて居る。皆が歸つて愈々夕飯といふことになつても民子の姿は見えない、誰も又民子のことを一言も言ふものもない、僕はもう民子は市川へ歸つたものと察して、人に問ふのもいま〳〵しいから、外の話もせず飯がすむとそれなり書室へ這入つて了つた。

今日は必ず民子に逢はれることと一方ならず樂みにして歸つて來たのに、此始末で何とも言へず力が落ちて淋しかつた。さりとて誰に此苦悶を話しやうもなく、民子の寫眞などを取出して見て居つたけれど、ちつとも氣が晴れない。又あの奴民子が居ないから考へ込んで居やがると思はれるも口惜しく、漸く心を取直し、母の枕元へいつて夜遲くまで學校の話をして聞かせた。

翌くる日は九時頃に漸く起きた。母は未だ寢てゐる。臺所へ出て見ると外の者は皆又山へ往つたとかで、お増が一人臺所片づけに殘つてゐる。僕は顏を洗つたなり飯も食はずに、背戸の畑へ出てしまつた。此秋民子と二人で茄子をとつた畑が今は青々と菜がほきてゐる。僕は暫く立つて何所を眺めるともなく、民子の俤を腦中にゑがきつゝ思ひに沈んでゐる。

「政夫さん、何をそんなに考へてゐるの」

お増が出し拔けに後からそういつて、近くへ寄つてきた。僕がよい加減なことを一言二言いふと、お増はいきなり僕の手をとつて、も少しこつちへきて茲へ腰を掛けなさいまアと言ひつゝ、藁を積んである所へ自分も腰をかけて僕にも掛けさせた。

「政夫さん……お民さんはほんとに可哀想でしたよ。うちの姉さんたらほんとに意地曲りですからネ。何といふ根性の惡い人だか、私もはア茲のうちに居るのは厭になつてしまつた。昨日政夫さんが來るのは解りきつて居るのに、姉さんがいろんなことを云つて、一昨日お民さんを市川へ歸したんですよ。待つ人があるだつぺとか逢ひたい人が待ちどほかつぺとか、當こすりを云つてお民さんを泣かせたりしてネ、お母さんにも何でもいろ〳〵なこと言つたらしい、とうとう一昨日お盆前に歸してしまつたのでさ。政夫さんが一昨日きたら逢はれたんですよ。政

夫さん、私はお民さんが可哀想で可哀想でならないだよ。何だつてあなたが居なくなつてからは丸で泣きの涙で日を暮らして居るんだもの。政夫さんに手紙をやりたいけれど、それが能く自分には出來ないから口惜しいと云つてね。私の部屋へ毎晩も硯と紙を持つてきては泣いて居ました。お民さんも始まりは私にも隱してゐたけれど、後には隱して居られなくなつたのさ。私もお民さんのためにいくら泣いたか知れない……」

見ればお増はもうぼろ／＼涙をこぼしてゐる。一體お増は極人のよい親切な女で、僕と民子が目の前で仲好い風をすると、嫉妬心を起すけれど、固より執念深い性でないから、民子が一人になれば民子と仲が好く、僕が一人になれば僕を大騷ぎするのである。

それから猶お増は、僕が居ない跡で民子が非常に母に叱られたことなどを話した。それは概略かうである。意地惡の嫂が何を言うても、母が民子を愛することは少しも變らないけれど、二つも年の多い民子を僕の嫁にすることはどうしてもいけぬと云ふことになつたらしく、それには嫂もいろ／＼言うて、嫁にしないとすれば、二人の仲は成るたけ裂く樣な工夫をせねばならぬ。母も嫂もさういふ心持になつて居るから、民子に對する仕向けは、政夫の事を思うて居ても到底駄目であると遠廻しに諷示して居た。そこへきて民子が明けてもくれてもよくよくして、人の眼にもとまる程であるから、時々は物忘れをしたり、呼んでも返辭が遲かつたりして、母の癇癪にさはつたことも度々あつた。僕が居なくなつてから二十日許り經つて十一月の月初めの頃、民子も外の者と野へ出ることとなつて、母が民子にお前は一足跡になつて、座敷のまはりを雜巾掛けしてそれから庭に擴げてある蓆を倉へ片づけてから野へゆけと言ひつけた。民子は雜巾がけをしてからうつかり忘れてしまつて、蓆を入れずに野へ出た處、間がわるく其日雨が降つたから、其蓆十枚許りを濡らしてしまつた。民子は雨が降つてから氣がついたけれど、もう間に合はない。うちへ歸つて早速母に詫びたけれど母は平日の事が胸にあるから、

「何も十枚許りの蓆が惜しいではないけれど、一體私の言ひつけを疎かに聞いてゐるから起つた事だ。もとの民子はさうでなかつた。得手勝手な考へ事などしてゐるから、人の言ふことも耳へ這入らないのだ……」

といふ樣な隨分痛い小言を云つた。民子は母の枕元近くへいつて、どうか私が惡かつたのですから堪忍して……と兩手をついてあやまつた。さうすると母は又さう何も他人らしく改まつてあやまらなくともだと叱つたさうで、民子は溜らなくなつてワッと泣き伏した。其儘民子が泣きやんでしまへば何の事もなく濟んだであらうが、民子はとう／＼一晩中泣きとほしたので翌朝は眼を赤くして居た。母も夜時々眼をさましてみると、民子はいつでも、すく／＼泣いてゐる聲がしてゐたといふので、今度は母が非常に立腹して、お増と民子と二人呼んで母が頭辭になつて云ふには、

「相對では私がどんな我儘なことを云ふかも知れないからお増は聞人になつてくれ。民子はゆうべ一晩中泣きとほした。定めし私に云はれたことが無念で溜らなかつたからでせう」

民子は茲で私はさうでありませんと泣聲でいうたけれど母は耳にもかけずに、

「成程私の小言も少し云ひ過ぎかも知れないが、民子だつて何もそれほど口惜しがつてくれなくてもよささうなものぢやないか。私はほんとに考へると情なくなつてしまつた。かはいがつたのを恩に着せるではないが、もとを云へば他人だけれど、孔吞兒の時から、民子はしよ

つちう家へきて居て今の政夫と二つの乳房を一つ宛含ませて居た位、お増がきてからもあの通りで、二つのものは一つ宛四つのものは二つ宛、着物を拵へてもあれに一枚これに一枚と少しも分け隔てをせないできた。民子も眞の親の様に思つてくれ私も吾子と思つて餘所の人は誰だつて二人を兄弟と思はないものはなかつた程であるのに、あとにも先にも一度の小言をあんなに口惜しがつて夜中泣いて呉れなくともよささうなもの。市川の人達に聞かれたらば、齋藤の婆がどんな非度いことを云つたかと思ふだらう。十何年といふ間我子の様に思つてきたことも只一度の小言で忘れられてしまつたかと思ふと私は口惜しい。人間といふものはさうしたものかしら。お増、よく聞いてくれ、私が無理か民子が無理か。なアお増」

　母は眼に涙を一ぱいに溜めてさういつた。民子は身も世もあらぬさまでいきなりにお増の膝へすがりついて泣き泣き、

「お増や、お母さんに申譯をしておくれ。私はそんなだいそれた了簡ではない。ゆんべあんなに泣いたは全く私が悪かつたから、全く私がとどかなかつたのだから、お増や、お前がよく申譯をさういつておくれ・・・」

　それからお増が、

「お母さんの御立腹も御尤もですけれど、私が思ふにヤお母さんも少し癇違ひをして御いでなさいます。お母さんは永年お民さんをかはいがつて御いでですから、お民さんの氣質は解つて居りませう。私もかうして一年御厄介になつて居てみれば、お民さんはほんと優しい温和しい人です。お母さんに少し許り叱られたつて、それを口惜しがつて泣いたりなんぞする様な人ではありますまい。私がこんなこと申してはをかしいですが、政夫さんとお民さんとは、あアして仲好くして居たのを、何かの御都合で急にお別れなさつたもんですから、それからといふもの、お民さんは可哀想な程元氣がないのです。木の葉のそよぐにも溜息をつき烏の鳴くにも涙ぐんで、さはれば泣きさうな風でゐたところへ、お母さんから少しきつく叱られたから、留度なく泣いたのでせう。お母さん、私は全くさう思ひますわ。お民さんは決してあなたに叱られたとて口悔しがるやうな人ではありません。お民さんの様な温和しい人を、お母さんの様にあアいつて叱つては、あんまり可哀想ですわ」

　お増が共泣きをして言譯をいうたので、固より民子は憎くない母だから、俄に顔色を直して、

「なるほどお増がさういへば、私も少し癇違ひをしてゐました。よくお増さういうてくれた。私はもうすつかり心持がなほつた。民や、だまつておくれ、もう泣いてくれるな。民やも可哀想であつた。何に政夫は學校へ行つたんぢやないか、暮には歸つて來るよ。なアお増、お前は今日は仕事を休んで、うまい物でも拵へてくれ」

　其日は三人がいく度もよりあつて、いろいろ話をした。民子も此日はいつになく高笑ひをし元氣よく遊んだ。何と云つても母の方は直ぐ話が解るけれど、嫂が聞がな隙がな種々なことを言ふので、とうとう僕の歸らない内に民子を市川へ歸したとの話であつた。お増は長い話を終るや否やすぐ家へ歸つた。

　なる程さうであつたか、姉は勿論母までがさういふ心になつたでは、か弱い望も絶えたも同樣。心細さの遣瀬がなく、泣くより外に詮がなかつたのだらう。そんなに母に叱られたか・・・なるほどなどと思ふと、再び熱い涙が漲り出してとめどがない、僕は暫くの間、涙の出るがまゝにそこにぼんやりして居つた、其日はとうとう朝飯もたべず、書

逗子まで姉さんのあたりをうろついて了つた。
さうなると僕は家に居るのが厭で堪らない。出來るならば正月の内に學校へ歸つて了ひたかつたけれど、さうもならないで漸くこらへて、年が明けて元日一日置いて二日の日には朝早く學校へ立つて了つた。
今度は舟で市川へ出て、市川から汽車に乗つたから、民子の近所を通つたのであれど、僕は極りが悪くてどうしても民子の家へ寄れなかつた。又僕に寄られたらば、民子が困るだらうとも思つて、いくたび寄らうと思つたけれど遂に寄らなかつた。
思へば實に人の境遇は變化するものである。其一年前までは、民子が僕の所へ來て居なければ、僕は暇あるたびに民子の家へ行つたのである。僕は民子の家へ行つても外の人には用はない。いつでも、
「お母さん、民さんは」
そら民さんは何だかだといはれる位で、或る時などは僕が行くと、民子は庭で草花を摘んで居た。僕は民さん一寸御出でと無理に背戸へ引張つて行つて、二階梯子を二人で背負ひ出し、柿の木へ掛けたのを民子に抑へさせ、僕は登つて柿を六個許りとる、民子に半分やれば民子は一つで澤山といふから、僕は其五つを持つて其儘其處から抜けて歸つてしまつた。さすがに此時は戸村の家でも家中で僕を悪く言つたさうだけれど、民子一人は只にこ〳〵笑つて居て、決して政夫さん悪いとは言はなかつたさうだ。これ位隔てなくした間柄だに、戀といふこと覚えてからは、市川の町を通るすら恥かしくなつたのである。
此年の暑中休みには家に歸らなかつた。暮にも歸るまいと思つたけれど、年の暮だから一日でも二日でも歸れといふて母から手紙がきた故、三十一日の夜歸つてきた。お増も今年きりで下つたとの話でいよ〳〵話相手もないから、又元日一日で二日の日に出かけようとすると、母がお前にも言うて置くが民子は嫁に往つた、去月の霜月矢張市川の内で、大變有福な家ださうだ、と簡單にいふのであつた。僕はアさうですかと無造作に答へて出てしまつた。
民子は嫁に往つた。此一語を聞いた時、僕の心持は自分ながら不思議と思ふほどの平氣であつた。僕が民子を思つてゐる感情に何等の動搖を起さなかつた。これには何か相當の理由があるかも知れねど、兎も角も事實はさうである。僕は只理窟なしに民子は如何な境遇に入らうとも、僕の思つてゐる心に決して變らぬものと信じてゐる。嫁にいかうがどうしようが、民子は依然民子で、僕が民子を思ふ心に寸分の變りない様に民子にも決して變りない様に思はれて、其観念は殆ど大石の上に坐して居る様で毛の先ほどの危惧心もない。それであるから民子は嫁に往つたと聞いても少しも驚かなかつた。併し其頃から今までにない考も出て來た。民子は只々少しも元氣がなく、瘦衰へて働いて許り居るだらうとのみ思はれてならない。可哀想な民さんといふ感念ばかり高まつてきたのである。さういふ譯であるから、學校へ往つても以前とは殆ど反對になつて、以前は勉めて人中へ這入つて、苦悶を紛らさうとしたけれど、今度は成るべく人を避けて、一人で民子の上に思ひを馳せて樂んで居つた。茄子畑の事や棉畑の事や、十三日の晩の淋しい風や、又矢切の渡で別れた時の事やを、繰返し繰返し考へては獨り娯んで居つた。民子の事さへ考へればいつでも氣分がよくなる。勿論悲しい心持になることが屢々あるけれど、さん〳〵、涙を出せば矢張り跡は氣分がよくなる。民子の事を思つて居れば却て學課の成績も悪くないのである。是等も不思議の一つで、如何なる理由か知らねど、僕は

實際さうであつた。

　いつしか月も經つて、忘れもせぬ六月二十二日、僕が算術の問題に苦んで考へて居ると、小使が齋藤さんおうちから電報です、と云つて机の端へ置いて去つた。例のスグカヘレである。早速舍監に話をして即日歸省した。何事が起つたかと胸に動悸をはずませて歸つて見ると、宵闇の家の有様は意外に靜かだ。臺所で家の夕飯時であつたが、只そこに母が見えない許り、何の變つた樣子もない。僕は臺所へは顏も出さず、直ぐと母の寢所へきた。行燈の灯も薄暗く、母はひつたり枕に就いて臥せつて居る。

「お母さん、どうかしましたか」

「あア政夫、能く早く歸つてくれた。今私も起きるからお前御飯前なら御飯を濟ましてしまへ」

　僕は何の事か頻りに氣になるけれど、母がさういふまゝに早々に飯をすまして再び母の所へくる。母は帯を結うて蒲團の上に起きてゐた。僕が前に坐つても只無言でゐる。見ると母は雨の樣に涙を落して俯向いてゐる。

「お母さん、まアどうしたんでせう」

　僕の詞に勵まされて母は漸く涙を拭き、

「政夫、堪忍してくれ……民子は死んでしまつた……私が殺した樣なものだ……」

「そりやいつです。どうして民さんは死んだんです」

　僕も夢中になつて問返すと、母は噎び返つて顏を抑へて居る。

「始終をきいたら、定めし非度い親だと思ふだらうが、こらへてくれ、政夫……お前に一言の話もせず、たつていやだと言ふ民子を無理に勸めて嫁にやつたのが、こいふことになつて了つた……縱令女の方が年上であらうとも本人同志が得心であらば、何も親だからとて餘計な口出しをせなくもよいのに、此母が年甲斐もなく親だてらにいらぬお世話を燒いて、取返しのつかぬことをして了つた。民子は私が手を掛けて殺したも同じ。どうぞ堪忍してくれ、政夫……私は民子の跡追つてゆきたい……」

　母はもうおい〳〵おい〳〵聲を立てて泣いてゐる。民子の死といふことだけは判つたけれど、何が何やら更に判らぬ。僕とて民子の死と聞いて、失神するほどの思ひであれど、今目の前で母の嘆きの一通りならぬを見ては、泣くにも泣かれず、僕がおろ〳〵してゐる所へ兄夫婦が出てきた。

「お母さん、まアさう泣いたつて仕方がない」

と云へば母は、かまはずに泣かしておくれ泣かしておくれと云ふのである、どうしやうもない。

　其間で嫂が僕に話す所を聞けば、市川の某といふ家で先の男の氣性も知れてゐるに財産も戶村の家に倍以上であり、それで向うから民子を望つての所望、媒妁人といふのも戶村が世話になる人である、是非やりたい是非往つてくれといふことになつた。民子はどうでもいやだと云ふ。民子のいやだといふ精神は能く判つてゐるけれど、政夫さんの方は年も違ひ事も永いことだから、どうでも某の家へやりたいと、戶村の人達は勿論親類までの希望であつた。それで愈々齋藤のおッ母さんに意見をして貰ふといふことに相談が極り、それで家のお母さんが民子に幾度意見をしても泣いてばかり承知しないから、とどの詰り、お前がさう剛情はるのも政夫の處へきたい考へからだらうけれど、それは此母が不承知でならないよ、お前はそれでも今度の縁談が不承知か。こんな風に言はれたから、民子はすつかり自分をあきらめたらしく、とう〳〵皆樣のよい樣にといつて承知をした。

それからは何もかも他の言ふなりになつて、霜月半に祝儀をしたけれど、民子の心持がほんたうの承知でないから、向うでもいくらかいや氣になり、民子は身持になつたが、六月でおりてしまつた。跡の肥立ちが非常に惡く遂に六月十九日に息を引き取つた。病中僕に知らせようとの話もあつたが、今更政夫に知らせる顏もないといふ譯から知らせなかつた。家のお母さんは民子が未だ口をきく時から、市川へ往つて居つて、民子がいけなくなると、もう泣いて泣いて泣きぬいた。一口まぜに、民子は私が殺した樣なものだ、と許りいつて居て、市川へ置いたではどうなるか知れぬといふ譯から、昨日車で家へ送られてきたのだ。話さへすれば泣く、泣けば私が惡かつた惡かつたと云つて居る。誰にも仕樣がないから、政夫さんの所へ電報を打つた。民子も可哀想だしお母さんも可哀想だし、飛んだことになつてしまつた。政夫さん、どうしたらよいでせう。」

嫂の話で大方は判つたけれど、僕もどうしてよいやら殆ど途方にくれた。母はもう半氣違ひだ。何しろ玆では母の心を靜めるのが第一とは思つたけれど、慰めやうがない。僕だつていつそ氣違ひになつてしまつたらと思つた位だから、母を慰めるほどの氣力はない。さうかうしてゐる内に漸く母も少し落着いてきて、又話し出した。

「政夫や、聞いてくれ。私はもう自分の惡黨にあきれて了つた。何だつてあんな非度い事を民子に言つたつけかしら。今更何樣悔いても仕方がないけど、私は政夫……民子にさう云つたんだ。政夫と夫婦にすることは此母が不承知だからおまへは外へ嫁に往け。なるほど民子は私にさう云はれて見れば自分の身を諦める外はない譯だ。どうしてあんな酷たらしいことを言つたのだらう。嗚呼可哀想な事をしてしまつた。全く私が惡黨を云うた爲に民子は死んだ。お前はネ、明朝は夜が明けたら直ぐに往つてよオく民子の墓に參つてくれ。それでお母さんの惡かつたことをよく詫びてくれ。ねイ政夫」

僕も漸く泣くことが出來た。假令どういふ都合があつたにせよ、いよ／＼見込がなくなつた時には逢はせてくれてもよかつたらうに、死んでから知らせるとは隨分非度い譯だ。民さんだつて僕には逢ひたかつたらう。嫁に往つてしまつては申譯がなく思つたらうけれど、それでもいよ／＼の眞際になつては僕に逢ひたかつたに違ひない。實に情ない事だ。考へて見れば僕もあんまり子供であつた。其後市川を三回も通りながらたづねなかつたは、今更殘念でならぬ。僕は民子が嫁にゆかうがゆくまいが、只民子に逢ひさへせばよいのだ。今一目逢ひたかつた……次から次と果てしなく思ひは溢れてくる。併し母にさういふことを言へば、今度は僕が母を殺す樣なことになるかも知れない。僕は吃と心を取り直した。

「お母さん、眞に民子は可哀想でありました。併し取つて返らぬことをいくら悔んでも仕方がないですから、跡の事を懇にしてやる外はない。お母さんは只々御自分の惡い樣にばかりとつてゐるけれど、お母さんとて精神は只民子の爲め政夫の爲めと一筋に思つてくれた事ですから、よしそれが思ふ樣にならなかつたとて、民子や私等が何とてお母さんを恨みませう。お母さんの精神はどこまでも情心でしたものを、民子も決して恨んではゐやしまい。何もかもかうなる運命であつたのでせう。私はもう諦めました。どうぞ此上お母さんも諦めて下さい。明日の朝は夜があけたら直ぐ市川へ參ります」

母は猶詞を次いで、

「成程何もかもかうなる運命かも知らねど今度といふ今度私はよく／＼後悔しました。俗に

親馬鹿といふ事があるが、其親馬鹿が飛んでもない悪いことをした。親がいつまでも物の解つたつもりで居るが、大へんな間違ひであつた。自分は阿彌陀樣におすがり申して救うて頂く外に助かる道はない。政夫や、お前は體を大事にしてくれ。思へば民子はながの年の間にもつひぞ私にさからつたことはなかつたおとなしい兒であつただけ、自分のした事が悔いられてならない、どうしても可哀想で溜らない。民子が今はの時の事もお前に話して聞かせたいけれど私には迚もそれが出來ない」

など又聲をくもらしてきた。もう話せば話すほど悲しくなるからとて強ひて一同寢ることにした。

母の手前兄夫婦の手前、泣くまいとこらへて漸くこらへてゐた僕は、自分の蚊帳へ這入り蒲團に倒れると、もう溜らなく一度にこみ上げてくる。口へは手拭を噛んで、涙を絞つた。どれだけ涙が出たか、隣室の母から夜が明けた樣だよと聲を掛けられるまで、少しも止まず涙が出た。着たまゝで寢てゐた僕は其儘起きて顔を洗ふや否や、未だほの闇いのに家を出る。夢のやうに二里の路を走つて、太陽が漸く地平線に現はれた時分に戸村の家の門前まで來た。此家の竈のある所は庭から正面に見え透いて見える。朝炊きに麥藁を焚いてパチ／＼音がする。僕が前の縁先に立つと奥に居たお祖母さんが、目敏く見つけて出てくる。

「かねや、かねや、とみや…政夫さんが來ました、まア政夫さん能く來てくれました。大そう早く。さアお上んなさい。起き拔きでせう。さア…かねや…」

民子のお父さんとお母さん、民子の姉さんも來た。

「まア能くきてくれました。あなたの來るのを待つてました。兎に角上つて御飯をたべて……」

僕は上りもせず腰もかけず、暫く無言で立つてゐた、漸くと、

「民さんのお墓に參りにきました」

切なる樣は目に餘つたと見え、四人とも口がきけなくなつて了つた。……やがてお父さんが、

「それでもまア一寸御飯を濟して往つたら……あアさうですか。それでは皆して參つてくるがよからう……いや着物など着替へんでよいぢやないか」

女達は、もう鼻啜りをしながら、それぢやアとて立ちあがる。水を持ち、線香を持ち、庭の花を澤山に採る。小田卷草千日草天竺牡丹と各々手にとり別けて出かける。柿の木の下から背戸へ拔け横堀の裏門を出ると松林である。桃畑梨畑の間をゆくと僅の田がある。其先の松林の片隅に雜木の森があつて數多の墓が見える。戸村家の墓地は冬青四五本を中心として六坪許りを區別けしてある。其ほどよい所の新墓が民子が永久の住家であつた。葬りをしてから雨にも逢はないので、ほんの新らしいまゝで、力紙などもいま結んだ樣である。お祖母さんが先に出て、

「さア政夫さん、何もかもあなたの手でやつて下さい。民子のためには眞に千僧の供養にまさるあなたの香花、どうぞ政夫さん、よオくお參りをして下さい……今日は民子も定めて草葉の蔭で嬉しからう……なア此人にせめて一度でも、目をねむらない民子に……まアせめて一度でも逢はせてやりたかつた……」

三人は眼をこすつてゐる樣子。僕は香を上げ花を上げ水を注いでから、前に蹲つて心のゆくまで拜んだ。眞に情ない譯だ。壽命で死ぬは致方ないにしても、長く煩つて居る間に、あア見舞つてやりたかつた、一目逢ひたかつた。僕

も民さんに會ひたかつたもの、民さんだつて僕に逢ひたかつたに違ひない。無理々々に強ひられたとはいへ、嫁に往つては僕に合はせる顏がないと思つたに違ひない。思へばそれが當然でならない。あんな温和しい民さんだもの、兩親から親類中からよつて強ひられて、どうしてそれが拒まれよう。民さんが氣の強い人なら乾度自侭をしたのだけれど、温和しい人だけにそれも出來なかつたのだ。民さんは嫁に往つても僕の心に變りはないと、せめて僕の口から一言いつて死なせたかつた。世の中に情ないといつてかういふ情ないことがあらうか。もう私も生きて居たくない……百姓も何も嫌を出して僕は兩膝と兩手を土地へ突いて了つた。

僕の樣子を見て、後に居た三人がどんなに泣いたか。僕も吾一人でないに氣がついて漸く立ちあがつた。三人の中の誰がいふのか、

「なんだつて民子は、政夫さんといふことをば一言も言はなかつたのだらう……」

「それほどに思ひ合つてる仲と知つたらあんなに勸めはせぬものを」

「うすうすは知れて居たのだに、此人の胸も聞いて見ず、民子もあれほどいやがつたものを……いくら若いからとてあんまりであつた……可哀想に……」

三人も香花を手向け水を注いだ。お祖母さんが又、

「政夫さん、あなた力紙を結んで下さい。深く縁結んで下さい。民子はあなたが情の力を便りにあの世へゆきます。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」

僕は懷にあつた紙の有りたけを力紙に結ぶ。此時ふつと氣がついた。民さんは野菊が大變好きであつたに野菊を掘つてきて植ゑればよかつた。いや直ぐ掘つてきて植ゑよう。かう考へてあたりを見ると不思議に野菊が繁つてる。弔ひの人に踏まれたらしいが蘇立つて青々として居る。民さんは野菊の中へ葬られたのだ。僕は漸く少し落着いて人々と共に墓場を辭した。

僕は何にもほしくありません、御飯は勿論茶もほしくないです、此儘お暇願ひます、明日は又早く上りますからといつて歸らうとすると、家中で引留める。民子のお母さんはもう溜らなさうな風で、

「政夫さん、あなたにさうして歸られては私等は立つてもゐられません。あなたが面白くないお心持は重々察してゐます、考へてみれば私共の屆かなかつたために、民子にも不憫な死にやうをさせ、政夫さんにも申譯のないことをしたのです。私共は如何樣にもあなたにお詫びを致します。民子可哀想と思召したら、どうぞ民子が今はの話も聞いて行つて下さいな、あなたがお出でになつたら、お話し申すつもりで、今日はお出でか明日はお出でかと、實は家中がお待ち申したのですからどうぞ……」

さう言はれては僕も歸る譯にゆかず、母もさう言つたのに氣がついて座敷へ上つた。茶や御飯やと出されたけれど眞似許りで濟す。其内に人々皆奧へ集りお祖母さんが話し出した。

「政夫さん、民子の事に就ては、私共一同誠に申譯がなくあなたに合せる顏はないのです。あなたに色々御無念な處もありませうけれど、どうぞ政夫さん、過ぎ去つた事と諦めて、御勘辨を願ひます。あなたにお詫びをするのが何より民子の供養になるのです」

僕に只もう胸一ぱいで何も言ふことが出來ない。お祖母さんは話を續ける。

「實はと申すと、あなたのお母さん初め、私又民子の兩親とも、あなたと民子がそれほど深

い間であつたとは知らなかつたもんですから」

僕は茲で一言いひだす。

「民さんと私と深い間とおつしやつても、民さんと私とはどうもしやしません」

「いイえ、あなたと民子がどうしたと申すではないです。もとからあなたと民子は非常な仲好しでしたから、それが悪るかつたんです。それに民子はあの通りの内氣な兒でしたから、あなたの事は一言も口に出さない。それはまるきり知らなかつたとは申されません。それですからお詫びを申す様な譯……」

僕は皆さんにそんなにお詫びを云はれる譯はないといふ。民子のお父さんはお詫びを言はしてくれといふ。

「そりや政夫さんのいふのは御尤です、私共が勝手なことをして、勝手なことをお前さんに言ふといふものですが、政夫さん、聞いて下さい、理窟の上の事ではないです、男親の口からこんなことといふも如何ですが、民子は命に替へられない思ひを捨てゝ両親の希望に從つたのです、親のいひつけで背かれないと思うても、道理で感情を抑へるは無理な處もありませう、民子の死は全くそれ故ですから、親の身になつて見ると、どうも殘念でありまして、どうもしやしません」政夫さんが言ふ通り、お前さん等二人に何の罪もないだけ、親の目からは不便が一層でな。あの通り温和しかつた民子は、自分の死ぬのは心柄とあきらめてか、つひぞ一度不足らしい風も見せなかつたです。それやこれやを思ひますとな、どう考へてもちと親が無慈悲であつた様で。……政夫さん、察して下さい、見る通り家中がもう、悲みの闇に鎖されて居るです、愚なことでせうが此場合お前さんに民子の話を聞いて貰ふのが何よりの慰藉に思はれますから、年がひもないこと申す様だが、どうぞ聞いて下さい」

お祖母さんが又話を續ける。結婚の話から、いよ／＼むづかしくなつたまでの話は嫂が家での話と同じで、今はといふ日の話はからであつた。

「九月十七日の午後に醫者がきて、もう一日二日の處だから、親類などに知らせるならば今日中にも知らせるがよいと言ひますから、それではとて取敢ずあなたのお母さんに告げると十八日の朝飛んできました。其日は民子は顔色がよく、はつきりと話も致しました。あなたのおつかさんがきまして、民や、決して氣を弱くしてはならないよ、どうしても今一度なほる氣になつておくれ。よ民や……民子はにつこり笑顔さへ見せて、矢切のお母さん、いろ／＼有難う御座います。長々可愛がつて頂いた御恩は死んでも忘れません。私も、もう長いことはありますまい。民や、そんな氣の弱いことを思つてはいけない。決してそんなことはないから、しつかりしなくてはいけないと、あなたのお母さんが云ひましたら、民子は暫くたつて、矢切のお母さん、私は死ぬが本望であります、死ねばそれでよいのです……といひましてから猶口の内で何か言つた様で、何でも、政夫さん、あなたの事を言つたに違ひないですが、能く聞きとれませんでした。それきり口はきかないで、其夜の明方に息を引取りました……それから政夫さん、かういふ譯です……夜が明けてから、枕を直させます時、あれの母が見つけました。民子は左の手に紅絹の切れに包んだ小さな物を握つて其手を胸へ乗せてあるのです。それで家中の人が皆寄つて、これをどうしようかと相談しましたが、可哀想なやうな氣持もするけれど、見ずに置くのも氣にかゝる、兎に角開いて見るがよいと、あれの父が言ひ出しまして、皆の居る中であけました。それがあなたの寫眞とあなたのお手紙でありまして……」

お祖母さんが泣き出して、そこにゐた人皆涙を拭いてゐる。僕は一心に疊を見つめてゐた。

やがてお祖母さんがやう／＼語を次ぐ。

「そのお手紙をお富が讀みましたら、誰も彼も一度に聲を立つて泣きました。あれの父は男ながら大聲して泣くのです。あなたのお母さんは、氣がふれはしないかと思ふほど、口說いて泣く。お前達二人が之れほどの語らひとは知らずに、無理無體に勸めて嫁にやつたは惡かつた。あア惡いことをした、不憫だつた、民や、堪忍して、私は惡かつたから堪忍してくれ。俄の騷ぎですから、近隣の人達が、どうしましたと云つて尋ねにきた位でありました。それであなたのお母さんはどうしても泣き止まないです。體に障つてはと思ひまして葬式が濟むと車で御送り申した次第です。身を諦めた民子の心持が、かう判つて見ると、誰も彼も同じことで今更の樣に無理に嫁にやつた事が後悔され、溜らないですよ。考へれば考へる程あの兒が可哀想で可哀想で居ても起つても居られない……せめてあなたに來て頂いて、皆が惡かつたことを十分あなたにお詫びをし、又あれの墓にも香花をあなたの手から手向けて頂いたら、少しは家中の心持も休まるかと思ひまして……今日の事をなんぼう待ちましたろ。政夫さん、どうぞ聞き分けて下さい。ねイ民子はあなたにはそむいては居ません。どうぞ不憫と思うてやつて下さい……」

一語一句皆涙で、僕も一時泣きふして了つた。民子は死ぬのが本望だと云つたか、さういつたか……家の母があんなに身を責めて泣かれるのも、其筈であつた。僕は、

「お祖母さん、能く判りました。私は民さんの心持は能く知つてゐます。去年の暮民さんが嫁にゆかれたと聞いた時でさへ、私は民さんを毛程も疑はなかつたですもの。どの樣なことがあらうとも、私が民さんを思ふ心持は變りません。家の母なども只それぱかり言つて嘆いて居ますが、それも皆惡氣があつての業でないのですから、私は勿論民さんだつて決して恨みに思やしません。何もかも定まつた緣と諦めます。私は當分毎日お墓へ參ります……」

話しては泣き泣いては話し、甲一語乙一語いくら泣いても果てしがない。僕は母の事も氣にかゝるので、もうお暮だといふ時分に戸村の家を辭した。戸村のお母さんは、民子の墓の前で僕の素振りが餘り痛はしかつたから、途中が心配になるとて、自分で矢切の入口まで送つてきてくれた。民子の憫然なことはいくら思うても思ひきれない。いくら泣いても泣ききれない。乍併また目の前の母が、悔悟の念に攻められ、自ら大罪を犯したと信じて嘆いてゐる憫然さを見ると、僕はどうしても今は民子を泣いては居られない。僕がめそ／＼して居つたでは、母の苦みは增す許りと氣が付いた。それから一心に自分で自分を勵まし、元氣をよそほうて只管母を慰める工夫をした。それでも心にない事は仕方のないもの、母はいつしかそれと氣がついてる樣子、さうなつては僕が家に居ないより外はない。

毎日七日の間市川へ通つて、民子の墓の周圍には野菊が一面に植ゑられた。其翌くる日に僕は十分母の精神の休まる樣に自分の心持を話して、決然學校へ出た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

民子は餘儀なき結婚をして遂に世を去り、僕は餘儀なき結婚をして長らへてゐる。民子は僕の寫眞と僕の手紙とを胸を離さずに持つて居よう。幽明遙けく隔つとも僕の心は一日も民子の上を去らぬ。

隣の嫁

一

「満蔵々々、省作々々、そとはまつぴかりだよ。さあ〳〵起きるだ〳〵。向うや隣でや、もう一仕事した頃だわ。こん天氣のえいのん朝寝してゐてどうするだい。省作々々、さあ〳〵」

表座敷の雨戸をがら〳〵あけながら、例の六つかしやの姉が怒鳴るのである。省作は眠さうな眼をむしやくしやさせながら、ひよこと頭を上げたが又ぐたり枕へつけてしまつた。目は覺めてゐると姉に思はせる爲に、頭を枕につけて居ながらも、口の内でぐど〳〵いうてゐる。

下部屋の戸がぐわらり勢ひよく開く音がして、まもなく庭場の雨戸がぐわら〳〵二三枚づつ一度に押し開ける音がする。正直な満蔵は姉に怒鳴られて、いつものやうに帯〆める間もなく半裸で雨戸を繰るのであらう。

「おつかさんお早うございます。思ひの外な天氣になりました」

満蔵の聲だ。

「満蔵、今日は朝の内に籾を干すんだからな、すぐ庭を掃いてくれろ」

姉はもう仕事を云ひつけてゐる。満蔵は未だ顔も洗はず着物も着まいに、あれだから人からよく云はれないだなどと省作は考へて居る。

此場合に臨んではもう五分間と起きるを延す譯にゆかぬ。省作もそろ〳〵起きねばならんで猶夜具の中でもさくさして居る。直ぐ起きる了簡ではあるが、なか〳〵すぐとは起きられない。肩が痛む腰が痛む、手の節足の節共にきや〳〵して痛い。どうもえらいくたぶれやうだ。なあに起きりやなほると、省作は自分で自分を叱るやうに獨言いつて、大いに奮發して起きようとするが起きられない。又暫く額を枕へ當てたまゝ打伏になつてもがいてゐる。

全く省作は非常にくたぶれて居るのだ。昨日も稻刈では、女達にまでいぢめられて、さんざん苦しんだ爲め體のきかなくなるほどくたぶれてしまつた。

「百姓はやアだなあ……。あゝ馬鹿々々しい、腰が痛くて起きられやしない。あア〳〵」

省作は猶起きかねて家の者らの氣はひに耳を澄ましてゐる。

満蔵は庭を掃いてる様子、姉は棕梠箒で座敷を隅から隅まで、サツ〳〵音をさせて掃いてゐる。姉は實に働きものだ。姉は何をしたつてせかせかだ。座敷を歩くたつて品振つてなど歩いてはゐない。どし〳〵足踏して歩く。起されないたつて寝て居られるもんでない。姉は二度起しても省作が未だ起きないから、少しぷんとして猶荒つぽく座敷を掃く。台所の方では、下女が火を焚き始めた。豆殻をたくのでパチ〳〵ハチ盛に音がする。鶏もいつのまか降りて羽ばたきする。コウ〳〵牝鶏が鳴く。省作もいよいよ起きねばならんかなと、思つてると、

「なんだこら省作……省作……戸をあけられてしまつても未だ寝てゐるか。なんだくたぶれた、若いものが仕事にくたぶれたつて朝寝をしてるもんがあるかい」

姉たんぞへの手前があるから、母は猶烈しく云ふのだ。

「そんなにお母さん烈しく起さねたつて直ぐ起きますよ」

「すぐ起きますもねいもんだ。今時分までねてるもんがどこにある。困つたもんだな。そんなことで何所さ婿に往つたつて勤まりやしねいや」
「又始まつた。婿に往けば、往つた氣にならあね」
「余計な返答をこくわ」
つけ〳〵と小言を言はるれば口答へをするものゝ、省作も母の苦心を知らないほど愚ではない。省作が我儘をすれば、それだけ母は家の者の手前をかねて心配するのである。慈愛のこもつた母の小言には、省作もずるを極めて居られない。
「仕事のやり始めは誰でも一度はさういふものだよ。何が病氣なもんか。仕事着になつて、からだが締まれば痛みはなくなるもんだ」
母はさういつても、何所か悪いところが有るか知らんと思つたらしく、省作の背へ廻つて見上げ見下したが、なるほど兩手の肘と手頸が少し腫れてる様だけど、やつぱりくたぶれたに違ひないと云ふ。
「さうかしら、何んだか知らないけれど、馬鹿に腰が痛いや、馬鹿々々しいな百姓は」
「百姓が馬鹿々々しいて、百姓の子が百姓しねいでどうするつもりかい。あの藤吉や五郎助を見なさい。百姓なんどつまらないつて飛び出したはよいけど、あのざまを見なさい」
省作がそりやあんまりだ、藤吉の野郎や五郎助と一しよにするのは非度い、と云ふのを耳にもとめずに臺所の方へ往つてしまつた。
冷やかな空氣に觸れ、つめたい井戸水に顔を洗つて、省作も漸く生氣づいた。いくらか體がしつかりしてきはきたが、未だ痛いことは痛い。起きない内に判らなかつたが、起きて歩いて見ると股根が非常に痛む。迚ても直立しては歩けない。省作は漸くのことよち〳〵腰をまげつゝ歩いて井戸端へ出た位だ。下女のおはまがそつと横目に見てくすつと笑つてる。
「此のあまつこめ、早く飯をくはせる工風でもしろ……」
「稲刈に揉まれて、腰が痛いからつて、わしおこつたつてしやうがないや、ハ、、、、、」
「馬鹿ア。手前に用はねい……」
省作はこれで今日は稲が刈れるかと思ふほど、五體がみし〳〵するけれど、下女にまで笑はれる位だから、母にこそ口説いたものゝ、他のものには決して痛いなどと云はない。
省作は今年十九だ。年の割合には氣は若いけれど、體はもう人並以上である。喇叭を吹いて見たところで、徒に嘲笑を買ふまでで、誰あつて一人同情をよせるものもない。誰だつてさうだと云はれて見ると之れきりの話だ。
省作も今は、なあにと云ふ氣になつた。今日の稲刈で、よし田ん中へ這つたつて、苦しいのなんのと云ふもんかと力んで見る。省作は暫く井戸端に佇んで氣を養うて居る。井戸から東へ二間程の外は竹藪で、形許りの四つ目垣が廻らしてある。藪には今藪鶯がさゝやかな聲に鳴いてゐる。垣根のもとには龍の髯が透間なく繁つて、青い玉の何とも云へぬ美しい實が黒い繁り葉の間に綴られてある。龍の髯の實は實に色が麗しい。たとへて云ひやうもない。鮮かに潤ひがあるとでも云つたらよいか。藪から乗り出した冬青の樹には赤い實が澤山なつてる。濃味のある朱色で厭味のない古雅な色がなつかしい。省作は玉から連想して、おとよさんの事を思ひ出し、穏かな顔に、にこりと笑みを動かした。
「ある〳〵一人ある。おとよさんが一人ある——」
省作はかう獨言にいつて、龍の髯の玉を三つ四つ手に採つた。手の平に載せて見て、しみじみと其の美しさに見とれて居る。

「おとよさんは實に親切な人だ」

又一言いつて玉を見て居る。

省作は體は大きいけれど、此春中學を終へて今年からの百姓だから、何をしても手廻しがのろい。昨日の稲刈などは隨分みじめなものであつた。誰にもかなはない。十四のおはまにも危く負けるところであつた。實は負けたのだ。

「省さん刈りくらだよ」

といふやうな掛聲で十四のおはまに揉み立てられた。

「くそ……手前なんかに負けるものか」

省作も一所懸命になつて晝間はどうにか人並に刈つたけれど、午後も二時三時頃になつてはどうにも手がきかない。おはまはにこ〳〵しながら、省作の手許を見やつて、

「省さんは私に負けたら私に何をくれます。……」

「おまへにおれが負けたら、お前のすきなもの何でもやる」

「乾度ですよ」

「大丈夫だよ、負ける氣遣ひがないから」

こんな調子に、戯言やら本氣やらで省作はへと〳〵になつてしまつた。おはまが他所見をしてる間に、おとよさんが手早く省作のスガヒ藁を三十本だけ自分のへ入れて助けてくれたので、漸く表面おはまに負けずに濟んだけれど、さういふ譯だから實はおはまに三十本だけ負けたのだ。

省作は竝にまご〳〵してゐると、直ぐ呼びたてられるから、今少時家のものゝ視線を避けようとしてゐると、おはまが水汲みにきた。

「省さん今日は乾度負してやります」

「馬鹿いへ。手前なんかに片手だつて負けつこなしだ」

「そりだらかけつこにせよう」

「うんやろ」

おはまはハヽヽッと笑つて水を汲む。

「はま……誰かおれを呼んだら便所に居るつてさういへよ」

「いや裏の畑に立つてるつてさういつてやらアー」

「此のあまめ」

省作は例の手段で便所策を弄し、背戸の桑畑へ出て暫く召集を避けてる。果して兄が頻りと呼んだけれど、はま公がうまくやつてくれたから約二十分間ほど骨を休めることが出來た。

霜露しと〳〵と滴る桑畑の繁り、次ぎな菜畑、大根畑、新たに青み加はるさや〳〵しさ、一列に黄ばんだ田の廣やかな田畝で、少し色づいた遠山の秋の色、[illegible]の村中には[illegible]淸く、遠くまで[illegible]き渡して、空は瑠璃色深く澄みつつ、總てのものが皆潑剌として、各其本能を發揮しながら、又能く自然の統一に融合してゐる。省作はわれ自らも又自然中の一物に加はり、其の大いなる力に同化せられ、其力の一端が吾が肉體にも吾が精神にも通ひきて、新たなる生命に活きかへつたやうな思ひである。おとよさんやおはまや、晴々と元氣のよい、毛の先ほども憎氣のない人等と打興じて今日も稲刈かといふことが、何となし嬉しく樂しくなつてきた。

太陽は未だ地平線に離はれないが、隣村の誰れ彼れ馬を曳いてくるものがある。荷車を曳いてくるものもある。[illegible]の先へ風呂敷様のものをくゝしつけ肩へ掛けてくるもの、から身に懐手してくるもの、聲高に元氣な話をして通るもの、いづれも大和繪の[illegible]かと思はれ、いよ〳〵自分の胸の中にも何かゝ湧きかゝる思ひがするのである。

省作は足腰の疲れも、すつかり忘れてしまひ、活氣を全身に漲へて、皆、働いてる表へ出て來た。

二

「省作お前は鎌を研ぐんだ。朝飯の内に四挺だけ研いでしまつて置かねぢやなんねい。さつきあんなに呼ばつたに、どこに居たんだい。何だ腹の工合がわるい、……みつちりして仕事に掛れば、大抵のことはなほつてしまふ、此忙しい處で朝つぱらからぶら〳〵してゐてどうなるか」

「省作の便所は時に依ると長くて困るよ。仕事の習ひ初めは、隨分つらいもんだけど、それや誰でもだから仕方がないさ。來年は誰にも負けなくなるさ」

兄夫婦は口小言を言ひつゝ、手足は少しも休めない。仕事の習ひ初めは隨分つらいもんだといふ察しがあるならば、少しは想ひやつてくれてもよささうなものと思つても、兄や姉には口答へも出來ない、母に口答へする樣に兄や姉に口答へしたら大へんが起る。どこの家でもさうとは極つて居ないが、親子と兄弟とは非常に感じの違ふものである。兄には妻があり且つ年をとつて居る兄であるといよ〳〵六つかしい。殊に省作の家は昔から家族の六つかしい習慣がある。

省作はだまつて鎌を研ぐ用意にかゝる。兄は極つた癖で口小言を言ひつゝ、大きな箕で倉からずん〳〵籾を庭に運ぶ、跡から姉が其籾を擴げて廻る。滿藏は庭の隅から隅まで、藁シブを敷いて其上に蓆を並べる。之れに籾を干すのである。六十枚程敷かれる庭も最早六分通り籾を擴げてしまつた。

省作は手水鉢へ水を持つてきて、軒口の敷居に腰を掛けつゝ片肌抜ぎで、ごし〳〵ごし〳〵鎌を研ぐのである。省作は百姓の子でも、妙な趣味を持つてる男だ。

森の木蔭から朝日がさし込んできた。初めは障子の紙へ、極うつすらほんのりと影がさす。物の影も其形が判然としない。併し其間の色が最も美しい。殆ど黄金を透明にしたやうな色に、強みがあつて輝きがあつてさうして色がある。其色が目に見えるほど活きた色で少しも固定して居らぬ。一度は強く輝いてだん〳〵に薄くなる。木の葉の形も小鳥の形も判然映る樣になると、極めて落附いた靜かな趣きになる。

省作は其の面白い光景に我を忘れて見とれて居る。鎌を研ぐ手は只器械的に動いてるらしい。おはまは眞に苦も苛もない聲で小唄をうたひつゝ臺所に働いて居る。兄夫婦や滿藏は殆ど、活きた器械の如く、秩序正しく動いて居る。省作の眼には、太陽の光が寸一寸と歩を進めて動く意味と、殆ど同じ樣に其調子に合せて、家の人達が働いてるやうに見える。省作はもう唯々愉快である。

東京で物の本など書く人達は、田園生活とか何とかいうて、田舍は唯陽氣で人々頗る悠長に生活して居るやうに許り思つてゐるらしいが、實際は都人士の想像して居るやうなものではない。なまけ者ならば知らぬ事、眞面目な本氣な百姓などの秋と云つたら、それは隨分と忙しい烈しいものである。

のらくらして居ては女にまで輕蔑される。戀も金も働きものでなくては得られない。一家にしても、其家に一人の不精ものがあれば、その爲に殆ど家庭の平和を破るのである。其のかはりに、一家手揃で働くといふ時などには隨分烈しき勞働も見る程に苦しいものではない。朝夕忙しく、水門が白むと共に起き、三つ星の西に傾くまで働けば勿論骨も折れるけれど、其中に又云はれない樂しみも多いのである。

各好き〳〵な話は勿論、唄もうたへば洒落も云ふ。噂の戀や眞の戀や、家の内ではさすが

に多少の遠慮もあるが、外所で働いてる時には遠慮も憚りもいらない。時には三町と四町の隔たりはあつても同じ田畝に、思ひあつてゐる人の姿を互に遠くに見ながら、働いて居る時など餘所目にはわからぬ愉快に日を暮し、骨の折れる仕事も苦しくは覺えぬのである。まして憎からぬ人と肩肘並べて働けば少しも仕事に苦しみはない。よし色戀の感情は別としても、家中氣を揃へて働けば互に心持よく、所謂一家の和合から湧き起る一種の愉快も又甚だ趣味の深いものである。

省作が片肌脱いで勢よく鎌を研ぎ始めれば、兄夫婦の顔に最早六づかしいところは少しもなくなつて、快活な話が出てくる。母までが端近に出てきて皆んなの話に跋を合せる。省作が能く働きさへすれば母は家のものに肩身が廣くいつでも愉快なのだ。慈愛の親に孝をするは譯のないものである。

「今日明日とみつちり刈れば明後日は早終の刈上げになる。刈上げの祝ひは何がよかろ、省作お前は無論餅だなア」

さういふのは兄だ。省作はにこり笑つたまま何とも云はぬうち、

「餅よりは鮓にするさ。こなひだ餅を一度やつたもの。今度は鮓でなけれや、なア省作お前も鮓仲間になつてよ」

「私はどつちでも。……」

「省作お前そんなこと云つちやいけない。兄さんと滿藏はいつでも餅と極つてるから、お前は鮓になつて貰はんけりや困る。私とおはまが鮓で餅の方も二人だから、省作が鮓となればこつちが三人で多勢だから鮓と極るから。……」

省作は相變らず笑つて、右とも左とも云はない。滿藏はお祖母さんが餅に賛成だといふ。姉はお祖母さんは稻を刈らない人だから、裁決の數にや入れられないといふ。各々受持の仕事は少しも手を緩めないで働きながらの話に笑ひ興じて、賑かなうちに仕事は着々進行してゆく。省作が四挺の鎌を研ぎ上げた頃に籾干も段落がついた。おはまは御ぜんが出來たと云うてきた。

昨日こちから三人往つて隣の家の稻を刈つた。今日は隣の人達が三人來てこちの稻を刈るのである。若い人達は兎角多勢で賑かに仕事をすることを好むので、懇ろな間には能く行はれる事である。

隣から三人、家のものが五人、都合八人だが、兄は稻を揚げる方へ廻るから刈手は七人、一人で五百把づつ刈れば三千五百刈れる筈だけれど、省作とおはまは未だ一人前は刈れない。二人は四百把づつ刈れと言ひ渡される。省作は六尺大の男がおはまと組むは情ないといふ。それぢや五百でも六百でも刈つてくれと姉が冷笑する。おはまは又省さんが五百刈れば私だつて五百刈るといふ。おはまは何でもかでも今日は省さんを負かして何か買つて貰ふんだといふ。

「おれがおはまに負けたら何でも買つてやるけれど、お前がおれに負けたらどうする」

「私も負けたら何か屹度上げるから、省さんの方から極めておいて下さい」

「さうさなアおれが負けたら、皸の膏藥をおまへにやらう」

「あらア人を馬鹿にして、……そんならわたしが負けたら一文膏藥を省さんにあげべい。ハ、ハ、、」

仕事着といつても若いもの達には、それ〳〵見えがある。省作は無地着で白メリンスの兵兒帶が少し新しい位だが、おはまは上着は中古でも半襟と帶とは、仕立おろしと思ふ樣なメリンス友禪の品の惡くないのに卵色の襷を掛けてる。脊丈けすらつとして色も白い方で一寸

した娘だ。白地の手拭をかぶつた後姿、一村の問題に登る丈けがものはある。滿藏なんか眼中にないところなどは頗る賴もしい。省作に調戯はれるのがどうやら嬉しいやうにも見えるけれど、さあ仕事となれば一所懸命に省作を負かさうとするなどは甚だ無邪氣でよい。

◦淸さんと淸さんのお袋と一所におとよさんは少しあとになつてくる。おとよさんは決して淸さんと一所になつて歩くやうなことはないのだ。お早う御座いますが各自に交換され、昨日のこと天氣のよいことなど喃々と交換されて、氣の引立つほど賑かになつた。おとよさんは、今つい庭前まで浮かぬ顏色できたのだけれど、皆んなと三言四言詞を交へて、忽ち元のさえざえした血色に返つた。

　おとよさんは、みなりも心の通りで、總てがしつかりときりつとして見るもすが／＼しい程である。おはまはおとよさんを一も二もなく崇拜して、何から何までおとよさんを眞似る。おはまはおとよさんの來たのを見るや、庭まで出ておとよさんを迎へ、おとよさんの風の上から下まで見つめて、やがておとよさんの物をこれは何これはどうしてと、一々聞いて見る。おとよさんは十九だといふけれど、勝氣な女だからどう見たつて二十前の女とは見えない。女としては體がたくまし過ぎるけれど、さりとて決して角々しい譯ではない。白い女の持前で顏は紅に色どつてあるやうだ。唇はいつでも「べに」を吸つたかとおもはれる。澤山な黒髮をゆたかに銀杏返しにして帶も半襟も昨日とは變つて華かだ。どう見てもおとよさんは隣の淸さんが嫁には過ぎてる。おとよさんの浮かない顏するのもそれ故と思へば可哀想になつてくる。

「省作、いくら仕事に馴れないからとて、其體で女に刈り負けるといふことないど。どうでもえいと思つてやれば、いつまでたつたつて仕事は強くならない」

　母は氣遣つて省作を勵ますのである。省作は例の如く唯にこりの笑ひで答へる。やがて八人用意整へて目的地に出掛ける。おとよさんとおはまの風は慥に人目にとまるのである。まあ綺麗な稻刈だことと褒めるものもあれば、いやにつくつてるなアと嘲るものもある。おはまの奴が省作さんに氣があるからをかしいやといふやうなのも聞える。おはまはじろり惡口いふ方を見たが誰れだか判らなかつた。おとよさんは、どういふ心持か唯だまつて俯いたまゝ傍目も振らずに歩いてる。姉は突然、

「おとよさん、家ではお蔭で明後日刈上げになります。隣ではいつ……」

「私とこでもあさつて……」

「家ではね餅だといふのを、やう／＼鮓にすることになりました。おとよさんとこは何—

「私とこでは餅ださうです。私餅はきらひ—

「それぢやおとよさん明後日は家へお出でなさいよ」

「それだら省さんがお隣へ餅をたべに往つておとよさんが家へ鮓をたべにくるとえいや」

　かういふのはおはまだ。

「朝つぱらから食ふこと許りいつてやがらア」

　さういつて兄は背負うたスガヒ藁を右の肩から左の肩へ移した。隣のお袋と滿藏とはどんな面白い話をしてか頻りに高笑ひをする。淸さんはチン／＼と手鼻をかんではちよこ／＼歩きをする。おとよさんは不興な顏をして橫目に見るのである。

　今年の稻の出來は三四年以來の作だ。三十俵つけ一まちに纏まつた田に一草の晩稻を作つてある。一株一握にならない程大株に肥えてる。穗の重みで一つらに中伏に伏してゐる。兄夫婦は如何にも心持よさゝうに畔に立つて眺める。西の風で稻は東へ向いてるから、西手の方から

刈り始める。

おはまは省作と並んで刈りたかつたは山々であつたけれど、思ひやりのない滿藏に妨げられ、佛頂面をして姉と滿藏との間へ這入つた。

おとよさんは絕對に、自分の夫と並ぶを嫌つて省作と並ぶ。何と云つても此場では省作が花役者だ。何事にも穩かな省作も、かう並んで刈り始めて見ると負けるは殘念な氣になつて、一所懸命に顏を火のやうにして刈つてゐる。滿藏はもう獨りで唄を歌つてる。おとよさんは百姓の仕事は何でも上手で强い。にこ〳〵しながら手も汚さず汗も出さず、綽々として刈つてるが、四把と五把との割合を以てより多く刈る。省作は歯ぎしりを噛んで競らつて見ても、おとよさんにかけては殆ど兒供だ。おとよさんは微笑で意を通じ、省作のスガヒを十本二十本づつ刈りすけてやる。おはまは何と云つても十四の小娘だ。おとよさんの其仕草に少しも氣がつかない。滿藏は獨りで唄ひ飽きて、

「おはまさア唄へよ。おとよさアなで今日は唄はねいか」

誰れも唄はない。サッ〳〵と鎌の切れる音許り耳に立つて餘り話するものもない。滿さんはお袋と小聲でぺちやくちや話して居る。滿藏は欠伸をしながら、

「みんな色氣があるから駄目だ。省作さんが居れば、おとよさんもはま公も唄もうたはねいだもの」

滿藏は臆面もなくそんなことを云つて濁笑をやつてる。實際滿藏の云ふ通りで、おとよさんは省作の居るところでは、話も思ひ切つてはしない。省作はもとから話下手ときてるから、半日並んで仕事をしてゐても碌に口も利かないといふ調子で、今日の稻刈は大へん賑かであらうと思つた反對に頗る振はないのだ。併し表面賑かではないが、おとよさんとおはまの心では、時間の過ぐるも覺えない位賑かな思ひで居るのである。

省作は勿論おとよさんが自分を思つてるとは未だ氣がつかないが、少しさういふ所に經驗のある眼から見れば、平生餘り人に隱せぬおとよさんが、兎角省作に近寄りたがる風がありながら、心を抑へて話もせぬ樣子振りに眼を留めない譯にゆかない。何か心に思つてる事がなくて、そんなに餘所々々しくせんでもよい人に、勉めて餘所々々しくするのはをかしいに極つて居る。稻を刈つて助けるのは、心あつての事ともさうでないとも見られるが、其素振は何んでもないものゝする事とは見られない。

午後も稍同じやうな調子で過ぎた。兄夫婦は稻の出來榮にほく〳〵して、若い手合のいさくさなどに眼は及ばない。暮方になつてはさしもに大きな一まちの田も、綺麗に刈揚げられて、稻は畔の限りに長く長城の如くに組立てられた。省作もおとよさんのお蔭で這廻るほど疲れもせず、負恥もかゝず濟んだ。おはまが若しおとよさんの仕草を知つたら大騷ぎであつたらうけれど、とう〳〵おはまはそれを知らなかつた。おはま許りでない、誰れも知らなかつたらしい。

「今日位刈れば省作も一人前だなア」

これが姉の褒詞で見ても知られる。のつそり子の省作も、おとよさんの親切には動かされて眞底からえい人だと思つた。おとよさんが人の妻でなかつたら其親切を戀の意味に受けたかも知れないけれど、生娘にも戀したことのない省作は、未だおとよさんの微妙な素振に氣づくほど經驗はない。

元來は此秋二軒が稻刈をお互にしたといふも既におとよさんの省作いとしいから湧いた畫策なのだ。おとよさんは年に合はして、氣前のすぐれたやり手な女で、腹のこたへた人だか

ら、自然だいそれた眞似をやりかねまじき女とも云へる。
から考へて見ると只おとよさんが目的を達した許りで、今日の稻刈には何の統一もなかつた。稻刈は稻さへ思ふだけ刈上げさへすればよい譯だが、仕事の興味といふ點からいふと、二軒一所になつて刈るといふ處に仕事以外の興味がなければならないのに、今度の稻刈にはどうもそれが缺けて居つた。淸さんはさもつまらなさうに人について仕事をしてる許り、滿藏もおはまも淸さんのお袋も何だか面白くなかつた。身上の事ばかり考へて、少しでも餘計に仕事を皆んなにさせようと許り腐心してゐる兄夫婦は全く感情は別だ。みんなが面白く仕事をしたかどうかなどと考へはしない。だからこんな事はつまらんとも思はない。只若いものらが多勢でやりたがるからこれに故障を云はないまでのことだ。外の人達はさうでない。多勢でしたら面白からうと思つて二軒一所にお互にこの稻刈をしたのだが、何だか皆んなの心がてん〴〵向き向きのやうで、格別面白くなかつた。だから今日の終ひ頃には淸さんも滿藏もおはまも、言ひ合さないでつまらなかつたとこぼした。
　それはその筈なのだ。おとよさん一人の爲に皆が騷がせられたやうなもので、云はゞみんながおとよさんに馬鹿にされたのだ。誰とておとよさんに馬鹿にされてゐたと氣づきはしないけれど、事實がそれであるから興味がなかつたのである。おとよさんも勿論人を馬鹿にするなどの惡氣があつてした事ではないけれど、つまりおとよさんが皆んなの氣合にかまはず、自分一人の祕密に許り屈託して居たから、皆んなとの統一を得られなかつたのだ。いつでも非常な好い聲で唄をうたつて、隨所の一團に中心となるおとよさんが今日はどうしたか、ろく〳〵唄もうたはなかつたからして、皆んなの統一を缺いた譯だ。淸さんや淸さんのお袋は、又どうしたか御機嫌が惡いや、珍らしくもない、といふ位な心で氣にかけない。此稻刈にはおとよさんが居なかつたら却て外の者等には統一が出來たのだ。さういふおとよさんは甚だ身勝手な女のやうに聞えるけれど、人を統一する力あるものは又其統一を破るやうなことを必ずするものだ。
　おとよさんの祕密に少しも氣づかない省作は、今日は自分で自分が解らず、只自分は木偶の坊のやうに、おとよさんに引き廻されて日が暮れたやうな心持がした。

三

　今日は刈上げになる日であつたのだが、朝から非常な雨だ。野の仕事は無論出來ない。丹精一心の兄夫婦も今朝はいくらか、ゆつくりしたらしく雨戸の開けかたが常のやうには荒くない。省作も母が來て起すまでは寢せて置かれた。省作が眼を覺した時は、滿藏であらう、土間で米を搗く響きがづーんづーと調子よく響いてゐた。雨で家に居るとせば、繩でもなふ位だから、省作は腹の中ではよい鹽梅だわいと思ひながら元氣よく起きた。
　省作は今日休ませて貰ひたいのだけれど、此の取入最中に休んでどうすると來るが恐ろしいのと、省作が能く働いてくれゝば、私は家に居て御飯がうまいと母の氣遣ひを思ふと休みたくもなくなる。
「兄さん今日は何をしますか」
「うん仕方がない繩でもなへ」
「兄さんは何をしますか、繩をなふなら一所に藁を濕しませう」
「うんおれは俵を編む、はま公にも繩をなはせろ」
　省作は自分の分とはま公の分と、十把許り藁

を濕して朝飯前にそれを打つ。おはまは例の苦のない聲で小唄をうたひながら、臺所の洗物をして居る。姉はこんな日でなくては家の掃除も十分に出來ないと云つて、がたひち音をさせ、家の隅々をぐる／＼雜巾がけをする。丹精な人は掃除にまで力を入れるのだ。

朝飯が濟む。滿藏は米搗、兄は俵あみ、省作とおはまは繩なひ、姉は母を相手に襤褸繕ひらしい。稻刈から見れば休んでるやうなものだ。向うの政公も藁をかついでやつて來た。

「どうか一人仲間入さして下さい。おやおはまさんも繩なひ…こりや有難い。私は又せめておはまさんの姿の見えるとこで繩なひがしたくてきたのに…」

「あゝ政さんこゝへ這入んなさい。さあはま公おまへがよくて來たつんだから…」

「あらアいやな」

おはまはつツと立つて省作の右手へうつる。政さんはにこ／＼しながら省作の左手へ座をとる。

「昨日の稻刈は賑かでしたねい。私はおはまさんに惚れつちやつた。ハヽヽヽ」

政さんは話上手で能く場合に應じての話が頗るうまいもんだ。戯言と眞面目と工合よく取交ぜて人を話に引入れる。政さんはおはまの顏を時々見てはおとよさんを褒める。

「女の前で餘所の女を褒めるのは、ちつと失敬な譯だけど、えいやねおはまさん、おはまさんはおとよさんびいきだからねい」

おはまは側を見て相手にならない。政さんは誰へも渡りをつけて話をする。外は秋雨しとしとと降つて、此悲しげな雨の寂しさに堪へないで歩いてる人もあらう。籠つてる人もあらう。一家和樂の庭には秋のあはれなど云ふことは問題にならない。兄の生眞面目な話が一くさり濟むと、滿藏が腐抜けた話をして一笑ひ笑はせる。話は又おとよさんの事になる。政さんは眞顏になつて、

「おとよさんは本當に可哀想だよ。一體おとよさんがあの清六の所に居るのが不思議でならないよ。あんまり惡口いふやうだけど、清六はちとのろ過ぎるさ。親父だつてお袋だつてざま見さい。あれで清六が博奕も打つからさ。おとよさんも可哀想だ。身上もおとよさんの里から見ると半分しかないさうだし。なにおとよさんはとても隣に居やしまい」

「お前そんなことを云つたつて、どこがよくて居るのか知れるもんぢやない。あの働きもののおとよさんが、居てくれさへすれば困るやうな事はないから」

兄はつやけのないことを云つてる。

「尤も家中一所懸命にとりもつて、おとよさんを置かうとして居るらしい。それでも此節はおとよさんの機嫌がとり切れないちふ話だ。居て貰はうと思ふ方がよつぽど無理だ」

おはまは喉のつまつたやうな聲をして突然、

「おとよさんが居なくなつたら私やどうしよう」

「おとよさんは居なくなりやしないよ。何にが居なくなるんもんか。唯話だわ」

「さうかしら」

兄のおとよさんを譽めやうは面白い。

「おらアおとよさんが大好きさ。あの人は村の若い女のよい手本だ。おとよさんは仕事姿がえいからそれがえいのだ。おらアもう長着で羽織など引掛けてぶら／＼するのは大嫌だ。染めぬいた紺の絣に友禪の帶などを惜氣もなくしめてきりつと締まつた、あの姿で手のさえるやうな仕事振り、ほんとに見てゐても氣が晴々する。なんでも人は仕事が大事なのだから、若いものは仕事に見えするのはえいこつた。休日などにべたくさ造りちらかすのはおらア大嫌ひ。はま

公もおとよさん好きだつけなア。まねろ〳〵。仕事もおとよさんのやうに達者でなけや駄目だなア」

「やこれや旦那はえいことをいはつしやつた。おはまさんは何でも旦那に帯でも着物でもどしどし買つて貰ふんだよ」

省作は唯笑ふ仲間に許りなつて一向に話は出來ない。滿藏はもう一俵の米を搗上げてしまつた。兄は四俵の俵をあみ上げる。省作の繩なひは矢張りおはまの仲間で、二人とも二把の藁が綯ひ切れない。兄はもう家中手揃で仕事をすれば機嫌はよい。

「はま公そんなに俄に稼ぎださなくともえいよ。天氣のえい時にはみつちら働いて、こんな日にや骨休めだ。これがえいのだ。なまけて遊んだつて面白いもんでねい。はまア薩摩芋でも煮ろい」

おはまは竈屋へゆく。省作は考へた。兄は一に身上一に丹精で小六つかしい事許りいうて解らない人とのみ思つてゐたに、今日の話はなか〳〵解つてる。成程これがえいのだ。これで面白いのだ。皆んなしてかうして面白く働くがえいのだらう。田園生活などいうても、百姓の辛勞を見物ものにして、百姓の作つたものをぶら〳〵遊んで見てゐたつて、そりや本當の田園趣味でない。成ほどおれも百姓にならう。百姓は骨が折れるからと許り思つて、兎角本氣に百姓しようと思はなかつたけれど、考へると兄の云ふことがほんたうだ。百姓にならう百姓にならう。さう考へてみると、成程おとよさんは立派な女だ。年は同じだけど吾々お坊さんとは譯か違ふ。それでおとよさんは眞から親切だ。省作は獨り思ひに耽つて昨日のおとよさんの樣子を思ひ出した。政さんのいふことも本當だ。おとよさんは隣に嫁になつてるとは可哀さうだ。成程政さんのいふ通り隣にや居ないかも知れない。さう思ふと又妙におとよさんがなつかしくなつて別れたくないやうな氣がするのである。

「省作さんちつとお話しなさいよ。何か考へてるね。ハヽヽヽ」

省作は、はつとしたけれど例の如く穩かな笑ひをして政さんの方へ向く。政さんは快活に笑つて三つの繩をなつてしまつた。省作が二つ終へない內に政さんはちよろり三つなつてしまつた。滿藏は二俵目の米を倉から出してきて臼へ入れてる。おはまは芋を鍋一杯に入れてきて圍爐裏にかけた。跡はお祖母さんに賴んで又繩なひにかゝる。

滿藏は程よく米を臼に入れて俵は元の倉へ戻し、臼へ腰を掛けつゝ暫く人の話を聞いてゐるうち、調子はづれな聲を出して、

「けふは省作さアに驕つて貰ふんだつけ。おらア慥な證據を見たんだ」

意外な滿藏の話に人々興がり一齊に笑を以て滿藏の話を迎へる。

「省作さんに驕らねけりやなんねい事があるたアこりや面白い。滿藏君早く話し給へ。省作さんも驕るなら又其やうに用意が入るから」

政さんに促されて滿藏は重い口を切つた。

「おとよさアが省作さアに惚れてる」

「さアいよ〳〵面白い。どういふ證據を見た滿藏さん。省作さんもかうなつちや驕んなけりやなんねいな。」

口輕な政さんはさも面白さうに相言をとる。

「滿藏何をぬかすだい」

省作はさうは言つたものの不思議と顏がほてり出した。滿藏はとんだことを云ひだして困つたと思ふ樣な顏つきで、

「昨日の稻刈でおとよさアは、內處で省作さアのスガヒ一把すけた。おれちやんと見たもの。おとよさアは省作さアの側離れねいだもの。」

惚れてるに違ひねい」

おはまは眼をぎよろつとして滿藏を見た。省作はもう顏赤くして、

「譃だ〳〵。そらおとよさんはおれがあんまり稻刈が弱いから、内處で助けて與れたには相違ないけど、そりやおとよさんの親切だよ。何も惚れたのどうだのつてい事はありやしない。馬鹿滿め何をいふんだえ」

省作も一所懸命辯解はしたものゝ何となし極りが惡い。のみならず或はおとよさんにそんな心があるのかとも思はれるから、いよ〳〵顏がほてつて胸が鳴つてきた。滿藏はそれ以上を云ふ働きはないから急いで米を搗きだす。政さんはいよ〳〵興がつて、

「こりや判んねい。そこまで滿藏さんに見られちやア、兎に角省作さんは騎るが至當だつぺい。うん人の女房だつて何んだつて、女に惚れられつちは安くない省作さん……」

兄はまさかそんな話の仲間にもなれないだらう、六つかしい顏をしてゐる。政さんは兄の顏に氣がついて言ひだした話を引込ませかける。突然圍爐裏ばたの障子が開いて母が顏を出した。

「滿藏」

「はあ」

「お前今おとよさんの事を云つたねい」

「はあ」

滿藏はもう大變な事になつたと思つてか、色青くして眼がはや潤んでる。

「お前どんなことを見たか知んねいが、おとよさんはお前隣の嫁だろ。家の省作だつてこれから賣る體ぢやないか。戯言に事缺いて、人の體さ疵のつくやうな事いふもんぢやない。わしが頼むからこれからそんな事はいはないでくろ」

「はあ」

滿藏はもう恐れ入つてしまつて、申譯も出ない。正直な滿藏は眞から飛んだ事を云つてしまつたとの後悔が、隱れなく顏にあらはれる。滿藏が正直溢れた無言の謝罪には、母も其上叱りやうないが、猶母は政さんにもそれと響くやうに滿藏に強く念を押す。

「ねい滿藏ちよつとでもそんな噂を立てられると、おとよさんの爲め、又省作の爲め、本當に困つたことになるからね。忘れてもそんなことを云うてくれるな。えいか」

「はあ」

事は眞面目になつて話は火の消えた樣になつた。すると噂をすると影とやらで、どうやらおとよさんの聲がする。母屋の裏口から、

「背戸口から御免くださいまし」

例の晴々した、りんの音のやうな聲がすると、まもなくおとよさんは庭場へ顏を出した。につこり笑つて、

「まあ賑かなこと。……うつとしいお天氣で御座います。お祖母さん何んですか。あさらですかどうも御馳走さま」

今まで唯一の問題になつてゐた本人が、突然這入つてきたのだから、みんな相顧みて茫然自失といふ有樣だ。さすがの政さんも今までお前さんの噂をしてゐたのさとは云ひかねて、一心に繩を綯ふ風にしてゐる。おとよさんはみんなにお愛想を云うて姉の居る方へ上つた。何か機の器具を借りに來たらしい。

やがて芋が煮えたといふので、姉もおとよさんと一所に降りてくる。おほ勢輪を作つて芋をたべる。少しく立優つた女といふものは、不思議な光を持つてるものか、おとよさんが一寸玆へくれば其一寸の間おとよさんが此場の中心になる。知らず〳〵誰の目もおとよさんにあつまる。

顎のあたりゆたかに艶よきおとよさんの顏

は、どことなく重みがあつた。隨分お饒舌な政さんなぞも、陰でこそ彼是れ茶かしたやうなことを云つても、面と向つてはすつかりてれてしまつて戲言一つ云へない。おはまは先におとよさんが省作に氣があるといふのを聞いて、自分がおとよさんと一層近しくなつたやうな心持で、おとよさんの膝にすり寄つておとよさんの顏を見上げてゐる。省作はわざと輪からはづれて立つて芋をたべる。政さんは頻りにおとよさんの方を竊み見ておとよさんが省作に對する動作に何物かを發見せんとつとめてゐるけれど、政さんなんかに氣取られるやうなそんな淺々しいおとよさんではない。おとよさんは省作へはちらと目をくばる樣子もない。やがておとよさんは、今夜は早く風呂が出來るから這入りに來てくれるやうにと、お祖母さんはじめ皆んなへ云うて歸つた。

晝過ぎても雨は止まない。滿藏は六斗の米を搗き上げて終つて遊びに出た。跡は晝前の通りへ清さんも藁を持つてやつてきた。清さんがきて見れば、もうおとよさんの噂も出來ない。おはまを相手に政さんがらちもなき事を饒舌つて賑かしてる。省作は考へまいとしても、どうしても考へられてならない。考へてると人にさう思はれてはいよ〳〵困るから、殊更にらちもない話に口を出して、腹は沈んで口では浮いてるやうに振舞つてるけれど、さういふことは省作の柄でないから、傍で見てると餘程をかしい。

おとよさんがおれを思つてる、本當かしら、夫のあるおとよさんが、そんなことはありやしまい。おとよさんは何もかもきちんとした人だ。おいらなどより餘程大人だもの。おれを思つてるなんて譃だ。譃だ譃に違ひない。第一本當であつたらおとよさんは見掛に寄らず不埒な女郎だ。いやそんなことがあるもんか。譃だ。譃だ〳〵と心で云ふほど、思ひあたる事が出てくる。おとよさんがおれに親切なは今度の稻刈の時許りでない。成東の祭の時にも考へればをかしかつた。此間の日暮などもそうつと無花果を袂へ入れてくれた。さう〳〵此前の稻刈の時にもおれが鎌で手を切つたら、おとよさんは自分の冠つて居た手拭を惜氣もなく裂いて結はひてくれた。どうも思つてるのかも知れない。

考へ出すと果てがない。省作は胸が躍つて少し逆上せた。人に怪まれやしまいかと思ふと落ついて居られなくなつた。省作は出たくもない便所へ往く。便所へ往つても矢張考へられる。

それではおとよさんは、どうもおれを思つてるのかも知れない。さうするとおとよさんはよくない女だ。夫のある身分で不埒な女だ。不埒だなア。省作は慥かに一方にはさう思ふけれど、それはどうしても義理一通りの考へで、腹の隅の方で小さな弱々しい聲で鳴る聲だ。恐ろしいやうな氣味の惡いやうな心持が、よぼよぼした見すぼらしいさまで、おとよ不埒を瘠我慢に僞善的に云ふのだ。省作はいくら眼をつぶつても、眉の濃い髮の黑い艶々したおとよの顏が有り〳〵と見える。何もかも行きとゞいた女と兄も褒めた若い女の手本。いくら憎く思つて見ても所謂糠に釘で何らの手對へもない。あらゆる僞善の虛榮心を覆へして、心の底からおとよさん嬉しの思ひがむく〳〵頭を上げる。どう腹の中でこねかへしても、つまりおとよさんは憎くない。いよ〳〵おとよさんがおれを思つてるに違ひなけりや、どうすればよいか。まさかぬしある女を……おとよさんもどういふ了簡かしら。いやだ〳〵おとよさんがいくらえい女でも、ぬしある女、人の妻、いやだ〳〵。省作は漸くのこと、いやだ〳〵と口の底で云ひつつ便所を出たけれど、若しも省作がおとよさんに逢つて、おとよさんのあの力ある面付で何

とか云ひ出されたら、省作がいま口の底でいふ、いやだ〳〵なんぞは、手の平の塵を吹くより輕く飛んでしまひさうだ。省作は知らず知らず溜息が出る。

省作が自分の座へ歸つてくると、おはまはぢいつと省作の顏を見て何か云ひたさうにする。省作は周章てて、

「はま公芋の殘りはないか。芋がたべたい」

「有りますよ」

「それぢやとつてくろ。」

それから省作はろく〳〵繩も綯はず、芋を食つたり猫を逐ひ廻したり、用もないに家の周りを廻つて見たりして、僅かに心のもしやくしやを紛らかした。

四

夕飯が終へるとお祖母さんは風氣だとかで寢てしもだ。背戸山の竹に雨の音がする。雫の音がしと〳〵と聞える。其竹山ごしに隣のお袋の聲だ。

「となりの旦那あ、湯があきましたよ」

「はあい——」

おはまが隱屋から答へる。兄夫婦は湯に呼ばれて往つた。省作は小座敷へ這入つて今日の新聞を見る。小說と雜報とはどうかかうか讀めた。それから源氏物語を讀んだが讀めればこそ、一行も意義を解しては讀めない。省作は本を持つたまゝ仰向きに踏反返つて天井板を見る。天井板は見えなくておとよさんが見える。

今夜は湯に行かない方がえゝか知ら。さうだゆくまい。行かないとしよう。なに行つたつてえいさ。いや〳〵行かない方がえい。ゆくまいといふは道德心の省作で、行きたい〳〵とするのは性慾の省作とでも云はうか。一方は行かない方がえいとは云ふけれど、一方では行きたい行きたいの念がむら〳〵と抑へ切れない。

もしおとよさんが、こつそり湯端へきて何とか云つたらどうしよう。かう思ふと氣味が惡くて恐ろしくて、腹がわく〳〵する。省作は又耳がほか〳〵してきた。行かない方がえいなア。あアゆくまい〳〵。かう口の底でいうて見る。ゆきたい心は却て口底にも出てこず、行きたいなどとは決して云はないが、其力は磐若湖のやうに腹の底にひつついてゐて、どんなことしたつて離れさうもしない。果はつかれてぼんやりした氣分になつてると、

「省作々々、えい湯だど。一寸貰つておいで。隣でも待つてるよ」

嫂が呼ぶのに省作は無意識に立つてしまつた。もうなんにも考へずに、背戸の竹山の雨の暗がりを走つて隣へ往つて終つた。

湯は隱屋の庇の下で背戸の出口に据ゑてある。あたり眞暗ではあれど、勝手知つてる家だから、足さぐりに行つても仔細はない。風呂の前の方へきたら釜の火がとろ〳〵と燃えてゐて漸く背戸の入口も判つた。戸が細目に開いてるから省作は、御免下さいと云ひながら內へ這入つた。表座敷の方では年寄達が三四人高笑に話してる。今省作が這入つたのを知らない。省作は庭場の上り口へ廻つてみると燥けて赤くなつた障子へ火影が映つて油紙を透したやうに赤濁りに明るい。障子の外から省作が、

「今晩はお湯を貰ひに出ました」

「まあ省作さんですかい。ちとお上んさい。今大話があるとこです」

といふのは淸さんのお袋だ。喜兵衞どんの婆さんも居る。五郎兵衞どんの婆さんも居る。七兵衞の爺さんも居た。みんな湯に這入つて終つて話しこんで居るらしい。誰れか障子を開けて皆が省作に挨拶する。淸さんは圍爐裏の端にごろねをして居た。おとよさんだけが影も見え

ず聲もしない。よい鹽梅だなと思ふ心と、失望みたやうな心が同時に湧く。湯は明いてますからとお袋がいふまゝに省作は風呂場へゆく。風呂はとろ〳〵火ながら、ちい〳〵と音がしてる。蓆蓋を除けて見ると垢臭い。隨分多勢這入つたと見える。省作は取敢ず這入る。這入つて見れば臭味もそれほどでなく、丁度頃合の暖かさで、暫くつかつて居るとうつとりして頭が空になる。おとよさんの事も一寸忘れる。雨が少し強くなつてきたのか、椎の葉に雨の音が聞えて雫の落つるが闇に響いて寂しい。座敷の方の話聲が能く聞えてきた。省作は頭の後を槽の縁へつけ眼をつぶつて暖まりながら、座敷の話に耳を欹てる。矢つぱり其ごや〳〵した話聲の中からおとよさんの聲を聞き出さうとするやうな心も、頭のどこかに働いてゐる。聲は慥かに五郎兵衞婆さんだ。

「そら金公の嚊がさ、昨日大狂言をやつたちでねいか」

「どこで。金公の夫婦喧嘩か。珍らしくもねいや」

「ところが昨日のはよつぽど面白かつたてよ」

「あの津邊の定公ち親分の寺でね。落合の藪の中でさ、大博奕が出來たんだよ。よせばえいのん金公も仲間になつたのさ。それを誰れが敎へたか嚊に敎へたから、嚊がそれ火のやうになつて荒ばれこんだとさ」

「うん博奕場へかえ」

「さうよ、嚊の怒るのも無理はねいだよ婆さん。今年は豐作といふにさ。作得米を上げたら扶持とも小使ともで二俵しかねいといふに、酒を飲んだり博奕まで仲間んなるだもの、嚊に無理はないだよ」

「そらまアえいけど、それからどうしたのさ」

「嚊がね。眼眞暗で飛込んでさ。こん生畜生め、暮の飯米もねいのに、博奕ぶちたあ何事たつて、怒鳴つたまではよかつたけど、そら眼眞暗だから親父と思つてしがみついたのが其親分の定公であつたとさ。其内に親父は外へ逃げてしまつた。みんなして、おつかまア靜かにしろつて抑へられて、見ると他人だから、嚊もそれ大まごつきさ。それでも婆さん親分と名のつくものは感心だよ。いやおつかあに無理はねい。金公が惡い。金公々々、金公どうしたつて云ふもんだから、金公も極り惡く元の所へ戻つてくると、その始末でいやはよつぽどの見もんであつたとよ」

「そりやをかしかつたなあ」

皆一齊に笑ふ。

「それから未だをかしい事があるさ。金公も其まゝのめ〳〵と嚊と二人で歸られめい。金公が定親分に一寸あやまつてね、それから嚊の頭を二つくらしたら、嚊の方は何が飛んだかなといふ樣な面をしてゐて、却て親分が、何だ金公、おれの前で嚊を打つち法はあんめいつて怒鳴られて、二人がすご〳〵出てきた所が變なもんであつたちよ」

「うんさうか。それでも昨日の日暮おれが寄つたら、刈上げで餅を搗いたから食つていかねいかつて、二人がうんやなやでやつてたよ」

「うん、あん嚊いつもさうさ。やつぱり似たもの夫婦だよ。アハヽヽヽ」

それから何か次の話が出さうで頗る賑かだ。省作も思はず釣りこまれて獨笑してゐると、細目にあいてる戸の間から白い女の顏がすつと出た。省作がはつとする間もなくおとよさんは、風呂の前へきて小聲で今晩はといふ。省作は一寸息つまつて返辭が出來ないうちに、聲かすかに、

「お湯がぬるくありませんか」

「えゝ」

「少し燃しませう」

おとよさんは風呂の前へしやがんで火を起す。火がぱつと燃えると、おとよさんの結立ての銀杏返しが、てら／＼するやうに美しい。省作はもう戰へが出て物など云へやしない。

「おとよさんはもうお湯が濟んで」

と口の内で云つても聲には出ない。おとよさんはやがて立つた。

「おゝ寒い。手がつめたい」

と云つて二本の眞白い手を湯の中へ入れる。省作はおとよさんの手にさはつては大へんと何とも思はないけれど何となく恐ろしく體を後へ引いた。

「省作さん、流しませうか」

「えゝ」

「省作さん一寸手拭を貸して下さいな」

おとよさんは忍び聲でいふので、省作はいよいよ恐ろしくなつてくる。恐ろしいと云うても外の意味ではない。からいふ時は經驗のある人の誰でも知つてる恐ろしさだ。省作は手拭をおとよさんに貸して體を湯に沈めてゐる。おとよさんは少し屈み加減になつて兩手を風呂へ入れてゐるから、省作の顏とおとよさんの顏とは一尺四五寸しか離れない。おとよさんは少し化粧をしたと見え、えも云はれない好い香りがする。平生白い顏が夜目に見るせゐか、匂ひのかたまりかと思はれるほど美しい。幽かにおとよさんの呼吸の音の聞取れた時、省作は何だか俄かに腹のどこにか燒金を刺された樣にぢりぢりつと胸に響いた。

果して省作の胸に先刻起つた、不埒な女だとか甚だよくない人だとか思つた事が、どこの隅へ消えたか、影も形も見せないのだ。省作も今はうつとりしておとよさんに見とれる外なかつた。人の話聲も雨の音も何んにも聞えないで夢のやうな、醉つたやうな、たわいもない心持になつて、心の總て、寧ろ體の總てをおとよさんに奪はれてしまつた。省作は今おとよさんにどうされたつて、おとよさんの意の儘になるより外少しでも逆ふべき力がないやうになつてしまつた。なるほど女といふものは恐ろしいものだ。

おとよさんはありがたうございましたと小聲で云うて手拭を手渡しながら、一層幽かな聲で省作さんというた。其聲はさすがにふるへてゐる。省作は、はアと答へる聲すら出ないで、只おとよさんの顏をぢつと見上げてゐる内に、座敷の方で、

「おとよ／＼」

と呼ぶのはお袋の聲だ。おとよさんは無言のまゝすつと身を替はして戸の内へ這入る。這入つてから、

「はあい」

と鮮かな返辭をする。

「湯がぬるかないか。釜の下を見てあげてくれ」

「はい」

おとよさんは再び出てきて、今度はさえ／＼した聲で、

「省作さんおぬるいでせう。ゆつくり這入つてて下さい。今燃しますから。……」

人を憚らない聲だ。薪を二三本釜に入れて火を燃しつけた。省作はそれにはかまはず、湯を出て着物を着掛けてゐる。

「省さんもう上つたんですか。ぬるかつたでせう」

省作はいくぢなく挨拶の詞も出ないが、帶をメめるにも殊更に手間どつてもぢ／＼してゐる。おとよさんはつと立つてきて髮の香りの鼻をうつまで倚添ふ。そして聲を潜めて、

「此間里から蜂屋柿を送つてくれたから省さんに二つ三つあげますよ」

おとよさんは冷めたい髮の毛を省作の湯ぼ

てりの額へふれる。省作も今は少し氣が落ついてゐる。女の髮の毛が額へふれた時むら／＼とおとよさんがいぢらしくなつた。おとよさんは柿を省作の袂へ入れ其手で省作の手を採つた。こんな場合を初めて經驗する省作は其おとよさんの手を採り返しもせず、採られたまゝにおど／＼してゐた。採られた手に一層力がはひつたと思ふと、おとよさんは其儘手を引き、燕のやうに身を飜して戸の内へ消えて仕舞つた。省作は暫く只夢心地であつたが、はつと心づいて見ると、一時も玆に居るのが恐ろしく感じて、早々家に歸つた。省作は此夜どうしても眠れない。いろ／＼さま／＼の妄想が、狭い胸の中で、もやくや／＼煮えくり返る。暖かい夢を柔かなふは／＼した白絹につゝんだ様に何とも云へない心地がするかと思ふと、すぐ跡から罪深い恐ろしい、いやで堪らない苦悶が起つてくる。どう考へたつておとよさんは人の妻だ、ぬしある人だ、人の妻を思ふとは何事だ、馬鹿め破廉恥め、そんな事が出來るか、嗚呼いやだ、けれどおとよさんはどこまでも惡い人ではない、憎い女ではない、憎いどころではない、おとよさんの様な女でさうしてあんなに親切な人はどこにもない、一體どういふ譯であのしつかりとしたおとよさんが、隣の家のやうなくづ揃ひの所に居るのか、聞けば全く媒酌の人に欺かれただといふのに、解らねいなア、其癖淸さんと仲がえいかといふに決してさうでないやうだに、おとよさんはえい人で可哀想な人だ、どうしたらえいだらう。

只お互に思ひ合つてる許りで、どうもしなければ差支もあるまいが、それでお互に滿足が出來ようか、それが又出來たところでつまりはつまらない事になつて仕舞ふ。いくら考へても結局を思へばおれとおとよさんが、何程思ひ合つてもどうする事も出來やしない。徒らなる感情の上に空しき思ひを通はせても罪の深いことは同じだ。世間に噂でも立てられた日には二人が蒙る禍も同じだ。嗚呼つまらない馬鹿々々しい。さうだおとよさんに能く云ひ聞かして、つまらぬ考へはやめさせよう。それに限る。それでもおとよさんがおれの云ふことを聞くかしら。一體おとよさんはどういふ了簡かしら。何もかも解つてるおとよさんが、人の妻でゐながらあんなことをするのは、困つたなア。いくら考へなほしてもおとよさんはえい人だ、いとしい人だ。おとよさんの爲ならおら罪人になつてもえい。極道人になつてもえい。それでおとよさんさへえいと思つててくれるなら。嗚呼困つた。

省作はとう／＼鷄の鳴くまで眠れなかつた。幾百回考へても、繋がれてる犬が其棒を廻るやうに、廻つては元に返り、返つては元へ戻り、愚にもつかぬ事をぐる／＼考へ廻つて居たのだ。泳ぎを知らない人が水の深みへ這入つた様に、省作は今はどうにもかうにも動きがとれない、つまりおとよさんの戀の手に囚はれてしまつて居るのだから、省作が一人であがいた分には、いくらあがいたつて何んにもならないのだ。此事件は省作の心だけではどうすることも出來ないのだ。

五

それから後のおとよさんは片思ひの人ではなかつた。隣同志だから何と云つても顔見合せる機會が多い。お互に素振に心を通はし微笑に意中を語つて、夢路をたどる思ひに日を過した。後には省作が一筋に思ひ詰めて危險をも犯しかねない熱しやうな時もあつたけれど、そこはおとよさんのしつかりした處、懇ろに省作をすかして不義の罪を犯すやうな事はせない。おとよさんの行爲は女子に最も卑むべき多

情の汚行と云はれても立派な辯解は無論出來ない。併し能く其心事に立入つて見れば憐むべき同情すべきもの多きを見るのである。

おとよさんが隣に嫁入つたに就いては例の媒妁の虚僞に誤まられた。おとよさんの里は中農以上の家であるに隣は殆んど小作人同樣である。それに清六が餘り怜悧でなく丹精でもない。おとよさんも來て間もなく總ての樣子を知つて一旦里へ還つたのだが、おとよさんの父なる人は腕一本から丹精して相當な財産を作つた人だけに、財産の無いのをそれほどに苦にしない。働けば財産は出來るものだ、一旦緣あつて嫁いつたものを、只財産がないといふ一ケ條だけで離緣は出來ない、さういふ不人情な了簡ではならぬと云はれて、おとよさんはいや〳〵歸つてきた。父の云ふ通り財産のないだけで、清六が今少し男子らしければ、おとよさんも氣を揉むのではない。さういふ境遇のところへ、隣のことであるから、自然省作の家と往復して、省作の人柄が、温和な内にちやんとした處があり、學問とて清六などの比ではない、其外おとよさんと何所か氣の合つたところのあるので、おとよさんは遂に思ひをよせる事になつたのだ。蔭ながらも省作を見省作の聲を聞けば、おとよさんはいつでも胸の曇りが晴れるのだ。それが爲に到底駄目と思つてる隣の家に浮か浮か半年を過したのである。其年も漸く暮れて、十二月半頃に突如として省作の緣談が起つた。隣村某家へ婿養子になることに略ぼ定つたのである。省作はおはまの手引に依つて、一日おとよさんと某所に會し今迄の關係を解決した。

お互に心の底を話して見れば、いよ〳〵互に敬愛の念が漲り返るのであるが、儘ならぬ世のならひに背き得ず、どうしても遠い他人にならねばならない。男同志ならば益々親密の交りが出來るのに男女となるとさうはゆかない。實につまらない世の中だ。吾が身心を我が思ひに任せられないとは、人間といふものは考へて見ると馬鹿氣きつたものだ。結婚せねばならぬと云ふ理窟で能くは性根も判らぬ人と人爲的に引寄せられて、さうして自ら機械の如きものになつて居ねばならぬのが道德といふものならば、道德は人間を絞殺す道具だ。二人は互に手を採つて涙の絲を縒合せ、これから先き神の惠みに救はれるやうな事が有つたらば、互に持つた涙の綱を結び合せようと約束した。

此事あつた翌々日、おとよさんは里へ歸つてしまうた。さうして遂に隣へ歸つて來なかつた。省作も一旦養家へ往つたけれど、おとよさんとの噂が立つた爲めか遂に破緣になつた。

(明治四十一年一月)

戀の籬 (錄五首)

相思の人を里にやりて、獨居の寂しさに堪へず。戀情むらむらとゆらぐを搖ぐがまにまに歌の詞に綴り見む。

冬されの庭の端ぎは暮れてふる霙にしづめど吾れなぎがたし

うつくしく思へる戀の堪へがてに手觸るわが手を否といはざりし

百年にこころ足らせる吾戀もこもり果つべしはつるともよし

さにづらふ妹が笑眉のうら若み曇らぬ笑みはわれを活かすも

わがこころ君に知れらばうつせみの戀の籬よ越えずともよし

(明治四十一年)

冬林 (錄一首)

朝霜のしづけき畑の桑の間ゆ杉の林に小みちとほれり

(明治四十一年)

春の潮

―「隣の嫁」續篇―

一

隣の家から嫁の荷物が運び返されて三日目だ。省作は養子に往つた家を出てのつそり戻つてきた。婚禮をして未だ三月と十日許りにしかならない。省作も何となし氣が咎めてか、浮かない顔をして、吾家の門をくゞつたのである。

家の人達は山林の下刈に往つたとかで、母が一人大きな家に留守居してゐた。日あたりのよい奥のえん側に、居睡りもしないで一心にほぐしものをやつてゐられる。省作は表口からは上らないで、内庭からすぐに母の居るえん先へまはつた。

「おッ母さん追出されてきました」

省作は笑ひながらさういつて、えん側へ上る。母は手の物を置いて、眼鏡越に省作の顔を視つめながら、

「そらまあ……」

驚いた母は直ぐに跡の詞が出ぬらしい。省作は却て、母に逢つたら元氣づいた。これで見ると省作も出てくるまでには、いくばくの煩悶をしたらしい。

「おッ母さん着物はどこです私の着物は」

省作は立つたまゝ座敷の中をうろ／＼歩いてる。

「おれが今見てあげるけど、お前なにか着替も持つて來なかつたかい」

「さうさ、又男が風呂敷包なんか持つて歩けるかい」

「困つたなあ」

省作は出して貰つた着物を引掛け、兵兒帶のぐる／＼卷で、そこへ其儘寢轉ぶ。母は省作の脱いだやつを衣紋竹にかける。

「おッ母さん茶でも入れべい、とんだことした、菓子買つてくればよかつた」

「お前茶どころではないよ」

と言ひながら母は省作の近くに坐る。

「お前まあ能く話して聞かせろま、どうやつて出てきたのさ、お前にこ／＼笑ひなどして、ほんとに笑ひごつちやねいぢやねいか」

母に叱られて省作もねころんではゐられない。

「おッ母さんに心配かけて濟まねいけど、おッ母さんとてもしやうがねんですよ、あんだつていやにあてこすり許り言つて、つまらん事にも目口を立てて小言を言ふんです、近頃はあいつまでが時々いやな素振りをするんです、わたしもう癪に障つちやつたから」

「困つたなあ、だれが一番惡くあたるかい、おつれも何とか言ふのかい」

「女親です、女親がそりや非度いことを言ふんです、つれのやつは何とも口には言はないけれど、此頃失敬な風をすることがあるんです、おッ母さんわたしもう何がなんでもいやだ」

「おッ母さんもね内々心配してゐただよ、非度いことを言ふつて、どんなこと言ふのかい、それで男親は惡い顔もしないかい」

「どんなことつて馬鹿々々しいこつてす、おとつさんの方は別に惡くもしないです」

「うむ、それでは非度いこつちはおとよさんの事かい、うむ」

「はあ」

「ほんとに困つた人だよ、實はお前がよくないんだ、それでは全く知れつちまつたんだな、おッ母さんはそれ許り心配でなんなかつただ、どうせいつか知れずにはゐないけど、少しなづんでから知れてくれゝばどうにか治まりがつくべいと思つたに、今知れて見ると向うで厭氣がさすのも無理はない」

母はかういつて暫く口を閉ぢ、深く考へつゝ溜息をつく。暢氣さうに、笑ひ顔してゐる省作をつく／＼と視つめて、老の眼に心痛の色が溢れるのである。やがて又思ひに堪へない風に、

「お前はそんな暢氣な顔をしてゐて、此の年寄の心配を知らないのか」

さういはれて省作は俄に居ずまひを直した。さうして、

「おッ母さんわたしだつてそんなに暢氣でゐやしませんよ、年寄にさう心配さしちや濟まないですが、實はおッ母さん、あの家はむからで置いてくれてもわたしの方でいやなんです、なんのかんの言つたつて、わたしがゐる氣で少し氣をつければ、譯はないですけど、何だか知らんが、わたしの方で厭になつちまつたんでさ、それだからおッ母さん心配しないでください」

これは省作の今の心の事實であるが、省作の考へでは、かういつたら母の心配をいくらかなだめられると思うたのである。ところがさう聞いて母の顔はいよ／＼六づかしくなつた。老の眼はもう涙に潤つてる。母はずつと省作にすり寄つて、

「省作、そりやおまへほんかい、それではお前あんまり我儘といふもんだど、おッ母さんは只あの事が深田へ知れては、お前も居づらい筈だと思うたに、今の話ではお前の方から厭になつたといふのだね、其ではおまへどこが厭で深田にゐられない、深田の家のどういふ所が氣に入らないかえ、おつねさんだつて初めからお互に知り合つてる間柄だし、おつねさんが厭な譯はあるまい、其年をして只譯もなく厭になつたなどといふのは、其は全く我儘といふものだ、少しは考へても見ろ」

省作はだまつて俯向いてゐる。省作は全く何がなし厭になつたが事實で、茲がかうと明瞭に意識した點はない。深田の家に別に氣に入らないといふ所があるのではない。つまるところ省作の頭には、おとよの事が深く深く染みこんでゐるから、譯もなく深田に氣乗りがしない。其に此頃おとよと隣との關係も話の極りが着いて、いよ／＼おとよも他に關係のない人となつて見ると、省作は何もかにも馬鹿らしくなつて、俄に思ひついた如く深田にゐるのが厭になつてしまつた。併しそれをさうと打つけに母にも言へないから、母に問ひ詰められて旨く返答が出來ない。

口下手な省作には勿論間に合せ詞は出ないから、默つてしまつた。母も省作のおちつかぬはおとよ故と承知はしてゐるが、わざと其點を避けて遠攻めをやつてる。省作がおつねになづみさへすれば、おとよの事は自然忘れるであらうと思ひこんで、母は只省作を深田の方へやつて置きたいのだ。

「お前も知つての通り深田はお家などよりか身上もずつとよいし、それで舊家ではあるし、おつねさんだつて、あの通り十人並以上な娘ぢやないか、女親が少し六づかしやだといふ評判だけど、其六づかしいといふ人が大變お前を氣に入つて斷つての懇望で出來た縁談だもの、居られるも居られないもない筈だ、人はみんな省作さんは仕合せだ仕合せだと言つてる、何が不足で厭になつたといふのかい、我儘いふも程がある、親の苦勞も知らないで……お前は深田に居さへすれば仕合せなのだ、おッ母さんまで安心が出來るのだに、どういふ氣かいお前は、

いつまで此の年寄に苦勞をかける氣か」
　母は自分で思ひをつめて鼻をつまらせた。省作は子供の時から、随分母に苦勞を掛けたのである。省作が永く眼を煩つた時などには、不動尊に鹽物斷ちの心願までして心配したのだ。殊に父なき後の一人の母、それだから省作はもう母にかけては馬鹿に氣が弱い。のみならず省作は天性餘り強く我を張る質でない。今母にかう言ひつめられると、それでは自分が少し無理かしらと思ふ樣な男であるのだ。
「おッ母さんに苦勞許りさせて濟まないです、なるほどわたしの我儘に違ひないでせう、けれどもおッ母さん、わたしの仕合せ不仕合せは、深田に居る居ないに關係はないでせう、あの家に居ても面白くなく居ては、やつぱり不仕合せですからねイ、又よしあそこを出たにしろ別に面白く暮す工夫がつけば、仕合せは同じでありませんか、其でもあの家に居さへすればわたしの仕合せおッ母さんもそれで安心だと思ふなら考へなほして見てもえいけれど、もうかうなつちやつては仕方がなかありませんか」
　母は少し省作を睨むやうに見て、
「別に面白く暮す工夫てお前どんな工夫があるかえ、お前心得違ひをしてはならないよ、深田に居さへすればどうもかうも心配はいらないぢやないか、厭と思ふのも心のとりやう一つぢやねいか、それでお前は今日どういつて出てきました」
「別に六づかしいことといやしません、家へ往つて一寸持つてくるものがあるからつて、あいつにさう言つて來たまでです」
「さうか、そんなら仔細はないぢやないか、おら又お前が追出されて來ましたといふから、物言ひでもしてきた事と思つたのだ、そんなら仔細はない今夜にも歸つてくろ、お前の心さへとりなほせば向うでは乾度仔細はないのだよ、なあ省作、今お前に戻つてこられるとそつちこつちに面倒が多い事は、お前も重々承知してるぢやねいか」
　省作は又だまつてる。母も暫く口をあかない。省作は漸く口重く、
「おッ母さんがそれほど言ふなら、兎に角明日は歸つて見ようけれど、何だかわたしの氣が變になつて、厭な心持で居たんだから、それで向うでも少し氣まづくなつた譯だとすると、わたしは心をとりなほしたにしろ、向うで心をなほしてくんねば、しやうがないでせう」
「そりやおまへそんな事はないよ、もと〳〵懇望されて往つたお前だもの、お前が其氣になりさへすりや、譯なしだわ」
　話は随分長かつたが、要するに覺束ない結局に陷つたのである。これからどうしてもおとよの話に移る順序であれど、日影はいつしかえん側をかぎつて、表の障子をがたぴちさせ一さんに奥へ二人の子供が飛びこんできた。
「おばあさん只今」
「おばあさん只今」
　顏も手も墨だらけな、八つと七つとの重藏松三郎が重なりあつてお辭儀をする、二人は起ちさまに同じやうに帽子をはふりつけて、
「おばあさん一錢おくれ」
「おばあさんおれにも」
　二人は肩をおばあさんに小擦りつけてせがむのである。
「さあ、をぢさんが今日はお菓子を買つてやるから、二人で買つてきてくれ、お前らに半分やる」
　二童は錢を握つて表へ飛び出る。省作は茶でも入れべいと起つた。

二

　翌朝、省作は兎も角も深田に歸つた。歸つ

たけれども駄目であつた。五日許りして又省作は戻つてきた。今度はこれきりといふつもりで、朝早く人顔の見えないうちに、深田の家を出たのである。

　母は折角言うて一旦は歸したものの初めから危んでゐたのだから、再び出てきたのを見ては、もうあきらめて深く小言も言はない。兄は只、

「しやうがないやつだなあ」

　から一言言つたきり、相變らず夜は繩を綯ひ晝は山刈と土肥作りとに側目も振らない。弟を深田へ緣づけたといふことを大へん見榮に思つてた嫂は、省作の無分別を只管口惜しがつてゐる。

「省作お前あの家にゐないといふことがあるもんか」

　何遍繰返したか知れない。頃は舊曆の二月、田舍では年中最も手すきな時だ。問題に趣味のあるだけ省作の離緣話は到る所に盛んである。某々が大變よい所へ片づいて非常に仕合せがよいといふやうな噂は長くは續かぬ。併しそれが破緣して氣の毒だといふ場合には、多くの人がさも心持よささうに面白く興がつて噂するのである。あんまり仕合せがよいといふので、小面憎く思つた輩は如何にも面白い話が出來たやうに話して居る。村の酒屋へ瞽女を留めた夜の話だ。瞽女の唄が濟んでからは省作の噂で持切つた。

「省作が一たいよくない、一方の女を思ひ切らないで、人の婿になるちは大の不德義だ、不都合極まつた話だ、婿をとる側になつて見給へ、こんなことされて堪るもんか」

　かう言ふのは深田贔屓の連中だ。

「さうでないさ、省作だつて婿になると決心した時には、おとよの事はあきらめて居たに極つてるさ、第一省作が婿になる時にや、おとよはまだ清六の所に居たぢやないか、深田も懇望して貰つた以上は、そんな過ぎ去つた噂なんぞに心動かさないで大事にしてやれば、省作は決して深田の家を去るのではない、だからありや深田の方が惡いのだ、何も省作に不德義なこたない」

　これは小手贔屓の言ふところだ。

「えいも惡いもない、やつぱり緣のないのだよ、省作だつて、身上はよしおつねさんは憎くなかつたのだから、居たくないこともなかつたらうし、向うでも懇望した位だから固より置きたいに極つてる、それが置けなくなり居られなくなつたのだから、緣がないのさ」

　こんなことといふは婆と呼ばれる酒屋の内儀だ。

「みんな省さんが惡いんさ、ほんとに省さんは憎いわ、省さんはあんなえい人だからおとよさんがどうしてもあきらめられない、おとよさんがあきらめねけりや、省さんは深田に居られやしない、深田のおッ母さんは大へんおとよさんを恨んでるつさ、おつねさんもね、實は省さんを置きたかつたんだつて、それだから、省さんが出た跡で三日寢てゐたつち話だ、わたしやほんとにおつねさんが可哀さうだわ、省さんはほんとに憎いや」

　これは女側から出た聲だ。

「なんだい篦棒、ほめるんやらくさすんやら、お氣の毒樣手がとどかないや、省さんほんとに憎いや、もねいもんだ」

「そんなに言ふない、おはまさんなんか可哀さうな所があるんだアな。同病相憐むといふんぢやねいかハヽヽヽヽ」

「あん畜生ほんとにぶちのめしてやりたいな」

「あの野郎をさ」

「だれを」

「あの野郎ぢやわからねいや」

「馬鹿に下等になつてきたあな、よせ〳〵」

おはまがゐるから、惡口も此位で濟んだ、おはまでもゐなかつたら、なか〳〵この位の惡口では濟まない。省作の惡口を言ふとおはまに憎がられる、おはまには惡くおもはれたくない魂膽許りだから、話は下火になつた。政公の氣焰が最後に振つてゐる。

「おらも婿だが、昔から譬にいふ通り、婿ちもんはいやなもんよ、それに省作などはおとよさんといふ人があるんだもの、清公に聞かれちや惡いが、百俵附けがなんだい、深田に田地が百俵附あつたつてそれがなんだ、婿一人の小使錢に出來やしまいし、おつねさんに百俵附を括りつけたつて、體一つのおとよさんと比べて、とても天秤にはならない、一萬圓がほしいかおとよさんがほしいかといや、おいら一秒間も考へないで……」

「おとよさんほしいといふか、嚊にいひつけてやるど、やあい〳〵」

で話はおしまひになる。おはまが歸つて一々省作に話して聞かせる。そんな次第だから省作は奥へ引込んでて、夜でなけりや外へ出ない。外の人達にもどうも工合が惡い。おはま許り以前にも増して一所懸命に同情してゐるけれど、向うが身上がえいといふので、支度にも婚禮にも少なからぬ費用を投じたに係らず、三月と居られないで出て來た。それも身から出た錆といふやうな始末だから一層兄夫婦に對して肩身が狹い。自分許りでなく母までが肩身狹がつてゐる。平生極く人のよい省作のこと故、兄夫婦もそれ程つらく當る譯ではないが、省作自ら氣が引けて小さくなつて居る。のつそり坊も、ものつそりして居られない。省作も漸く人生の苦勞といふことを知りそめた。

深田の方でも娘が意外の未練に引かされて、今一度親類の者を迎へにやらうかとの評議があつたけれど、女親なる人が迚も駄目だからと言ひ切つて、話はいよ〳〵離別と決定してしまつた。

上總は春が早い。人の見る所にも見ない所にも梅は盛りである。菜の花も咲きかけ麥の青みも繁りかけてきた。此頃の天氣續き、毎日長閑な日和である。森を以て分つ村々、色を以て分つ田園、何もかもほんのり立ち渡る霞につゝまれて、悉く春といふ一つの感じに統一されてゐる。

遙かに聞ゆる九十九里の波の音、夜から晝から間斷なく、どう〳〵どう〳〵と穩かな響きを霞の底に傳へてゐる。九十九里の波はいつでも鳴つてる。唯春の響きが人を動かす。九十九里附近一帶の村落に生ひ立つたものは、此の波の音を直ちに春の音と感じてゐる。秋の聲といふ詞があるが、九十九里一帶の地には秋の聲はなくて唯春の音がある。

人の心を穩かにと間斷なく打ちなだめてゐるかと思はれるは、此の九十九里の春の音である。幾千年の昔から此の春の音で打ちなだめられてきた上總下總の人には、殆ど沈痛な性質を缺いて居る。秋の聲を知らない人に沈痛な趣味の有りやうがない。秋の聲は知らないで唯春の音許り知つてる兩總の人の粹は温良の二字に依つて説明される。

省作は其温良な青年である。どうしたつて省作を憎むのは憎む方が惡いとしか思はれぬ。省作は到底春の人である。煩悶不安の境涯にあつても猶悠々迫らぬ趣きがある。省作は泣いても春雨の曇りであつて雪氣の時雨ではない。

いやな言を言はれて深田の家を出る時は、何んのといふ氣で大手を振つて歸つてきた省作も、家に來て見ると、家の人達からはお前がよくないと許り言はれ、世間では意外に自分を冷

笑し、自分がよくないから深田を追出されたやうに噂をする。いつのまか自分でも妙に失態をやつたやうな氣になつた。臆病に慚愧が起つて、世間へ出るのが厭で堪らぬ。省作の胸中は失意も憂愁もないのだけれど、周圍からやみ雲にそれがある樣に取扱はれて、何となし世間と隔てられてしまつた。それで我知らず日蔭者のやうに、七八日奥座敷を出ずに居る。家の人達も省作の心は判然とは解らないが、もう働いたらよからうともえ言はないで好きにさして置く。

此間におはまは小さな胸に苦勞し乍ら、おとよ方に往復して二人の消息を取次いだ。省作は長い〳〵二回の手紙を讀み、おとよの切實でさうして明快な心線に觸れたのである。

萎れた草花が水を吸上げて生氣を得た如く、省作は新たなる血潮が全身に漲るを覺えて、命が確實になつた心持がするのである。失態も絲瓜もない。世間の奴等が何と言つたつて……

「二人の幸福は二人で作る、二人の幸福は二人で作る、他人の世話にはならない」

から獨言を言ひつゝ省作は感に堪へなくなつて、起つて座敷中をうろ〳〵歩きをするのである。省作はもう腹の中の一切のとゞこほりがとれてしまつて、胸はちやんと定まつた。胸が定まれば元氣はおのづから動く。

翌朝省作は起されずに早く起きた。

「おッ母さん仕事着は」

と怒鳴る。

「うむ、省作起きたか」

「あ、おッ母さんもう働くよ」

「うむどうぞな、さうしてくろや、お前に浮かぬ顏して引込んでゐられると、おらな壽命が縮まるやうだつたわ」

中じきりの鏡戸に、づん〳〵足音響かせて早や仕事着の兄がやつてきた。

「うむ起きたか省作、えい加減にして土龍の藝當は止めろい、今日はな種井を淩ふから手傳へ、くよ〳〵するない、男らしくもねい」

兄の詞の終らぬ内に省作は素足で庭へ飛び降りた。

彼岸がくれば籾種を種井の池に浸す。種浸す前に必ず種井の水を汲みほして掃除をせねばならぬ。これは殆ど此地の習慣で一つの年中行事になつてる。二月に入ればよい日を見て種井淩ひをやる。其夜は茶飯位拵へて酒の一升も買ふと極つてる。

今日は珍らしくおはま滿藏と兄と四人手揃ひで働いたから家中愉快に働いた。此の晩兄は例より酒を過ごしてる。

「省作、今夜はお前も一杯やれい、おらこれでもお前に同情してるど、うむ人間はな、どんな事があつても元氣をおとしちやいけない、何んでも人間の事は元氣一つのもんだよ」

「兄さんこれでわたしだつて元氣があります」

「アハヽヽヽヽ、さうかよし一杯つげ」

省作も今日は例の穩かな顏に活氣が充ちてるのだ。二つ三つ兄と杯を交換して、曇りのない笑ひを湛へて居る。兄は省作の顏を見つめて居たが、突然、

「省作お前はな、おとよさんと一緒になると決心してしまへ」

省作も兄の口から此の意外な言を聞いて、一寸返答に窮した。兄は語を進めて、

「から言ひ出すからにやおれも骨を折るつもりだど、うむ、世間がやかましい……そんな事かまふもんか、おッ母さんもおきつも大反對だが、な、隣の前が惡いとか、深田に對して恥かしいとかいふが、おれが思ふにやそれは足もとの遠慮といふものだ、なお前がこれから深田より更に財産のある所へ養子に往つた處で、それだけ

でお前の仕合せを保證することは出來ないだらう、よせ〳〵婿にゆくなんどいふ馬鹿な考へはよせ。はま公今一本持つてこ―

おはまは笑ひながら、徳利を持つて出た歸りしなに、そつと省作の肩をつねつた。

「まあ能く考へて見ろ、おとよさんは少し位の財産に替へられる女ではないど、さうだ無論おとよさんの料簡を聞いて見てからの事だ、今夜はこれで止めて置く、篤と考へて置け」

兄は見掛けに寄らず解つた人であつた。未だ若年な省作が、世間的に失敗した今の境遇を、兄は深く憐んだのである。省作の精神を大抵推知しながら先を越して弟に元氣をつけたのである、省作は腹の中で、しみ〴〵兄の好意を謝した。省作は今が今まで、是程解つてる人で、きつぱりとした決斷力のある人とは思はなかつた。省作はもう嬉しくて堪らない。誰が何と言つても心の内で覺悟を定めてゐた所へ、兄から我思ひの通りの事を言はれたのだから嬉しいのが當前だ。省作は有らん限りの力を出して平氣を裝うて居たけれど、それでもおはまには妙な笑ひをおくられた。省作は昨日の手紙に依つて今夜九時にはおとよの家の裏までゆく約束があるのである。

三

女の念力などいふこと、昔よりいつてる事であるが、さういふことも全くないものとはいはれんやうである。

おとよは省作と自分と二人の境遇を、つくづくと考へた上に所詮餘儀ないものと諦め、省作を手離して深田へ養子にやり、いよ〳〵別れといふ時には、省作の手に涙をふりそゝいで、

「かうして諦めて別れた以上は、妾のことは思ひ棄て、どうぞおつねさんと夫婦仲よく末長く添ひ遂げて下さい、妾は清六の家を去つてから、どういふ分別になるか、それは其時に申上げませう、あゝさうでない、それを申上げる必要はないでせう別れてしまつた以上は―

詞には立派に言つて別れたもののそれは神ならぬ人間の本音ではない。餘儀ない事情に迫られ、無理に言はせられた表面の口の端に過ぎないのだ。

おとよは獨身になつて、省作は妻が出來た。諦めると詞には言うても、詞の通りに心はならない。ならないのが當前である。浮氣の戀ならば知らぬこと、眞底から思ひあつた間柄が理窟で諦められる筈がない。たやすく諦める位ならば戀ではない。

おとよは意志の強い人だ。強い意志で我が思ひを抑へてゐる。幾ら抑へても只抑へて居るといふだけで、決して思ひは消えない。寧ろ抑へて居るだけ思ひは却て深くなる。一念深く省作を思ふの情は増すことはあるとも減ることはない。話合ひで別れて、得心して妻を持たせ乍ら、猶其男を思つて居るのは理窟に合はない。幾ら理窟に合はなくとも、さういかないのが人間の當前である。おとよ自身も、もう思ふまいもう思ふまいと、心に藻掻いてゐるのだけれど、いくら藻掻いても駄目なのである。

「わたしはまあしやうがないなあ、どうしたらえんだろ、ほんとにしやうがないな」

人さへゐなければさういつて溜息をつくのは夜毎日毎のことである。さりとて餘所目に見たおとよは、元氣よく内外の人と世間話もする。人が笑へば共に笑ひもする。胸に屈託のある素振りは殆ど見えない。近所隣へ往つた時、たまに省作の噂など出たとておとよは色も動かしやしない。却ておとよさんは薄情だねいなど蔭言を聞く位であつた。これ故おとよが家に歸つて二月たゝない内に、省作に對するおとよの

噂はいつ消えるとなしに消えた。

胸に遣るせなき思ひを包みながら、それだけにたしなんだおとよは、えらいものであるが、見る人の目から見れば決して解らぬのではない。燃えるやうな紅顔であつたものが、漸くあかみが薄らいでゐる。白い部分は光澤を失つて稍青みを帶んでゐる。引締つた顔がいよ〳〵引締つて、眼は何となし曇つてゐる。これを心に惱みあるものと解らないやうでは戀の話は出來ない。

それのみならず、おとよは愛想のよい人で誰と話しても能く笑ふ。能く笑ふけれどそれは眞からの笑ひではない。只おはまが來た時に許り、眞に嬉しさうな笑ひを見せる。それはどういふ譯かと聞かなくても解らう。それでおはまが歸る時には、どうかすると涙を落すことがある。

それならばおはまを捕へて、省作の話許りするかと見るに決してさうでない。省作の話は寧ろ餘りしたがらない。いつでも少し立入つた話になると、もうおよしと言つてしまふ。直接には決して自分の心持を言はない。又省作の心を聞かうともせぬ。其の癖省作の事に就ては僅かな事にまで想像以外に神經過敏である。深田の家は財産家であるとか、省作は深田の家の者に氣に入られてゐるとか、省作は元氣よく深田の家に働いて居るとか、省作は餘り自分の家へ歸つてこないとか、こんな噂を聞かうものなら、何遍同じ噂を聞いても、人の前に居られなくなつて、何んとか言つて寢てしまふのが常である。そりやおとよの事故、勿論人の目に止まるやうにはやらない。さういふ所に意思を勞するだけおとよの苦痛は一層深いことも察せられる。固より勝氣な女の持前としては、おとよが彼是言うたから省作は深田に居ないと世間から言はれてはならぬと、極端に力を入れてそれを氣にしてゐた。それであるから、姉妹も啻ならぬ程睦まじいおはまがありながら、別後一度も、相思の意を交換した事はない。

表面頗る穩かに見えるおとよも、其心中には一分間の間も、省作の事に苦勞の絶ゆることはない。これほどに底深く力強い思ひの念力、それがどうして省作に傳はらずにゐよう。

省作は何事も敏活にはやらぬ男だ。自分の意志を口に現はすにも行動に現はすにも手間のとれる男だ。思ふ事があつたつて、すぐにそれを人に言ふやうな男ではない。それ故おとよの事に就ては隨分考へて居つても、それをおはまにすら話さなかつた。殊に以前の單純の時代と反對に、自分には既に所帶といふものが出來、一方には元の戀中の女が獨身で居て、然かもどうやら自分の樣子に注意して居るらしく思はれる境涯、年若な省作には餘りに複雜過ぎた位置である。感覺の働きが鈍つた譯ではないけれど、感覺の働きがまごついてゐるやうな狀態にある。省作は丸で自分の體が常に釣られてる思ひがしてゐる。かういふ時には必ず他の強い勢力を感じ易い、おとよの念力が極々細微な徑路を傳はつて省作を動かすに至つた事は理に合つてゐる。

「おとよさんは、わたしがいくとそりや嬉しがるの、いくたびにさうなの、人が居ないとわたしを抱いてしまふの、それでわたしが歸る時にはどうかすると涙をこぼすの」

おはまから是れだけの言を聞いた許りで、省作はもう全身の神經に動搖を感じた。此時最早省作は深田の婿でなくなつて、例の省作の事であるから、それを俄かに行爲の上に現はしては來ないが、吾が身の進轉を自ら抑へる事の出來ない傾斜の滑道に這入つて終つた。

こんな事になるならば、おとよはより早く、省作と一緒になる目的を以て清六の家を去れ

ばよかつた。さうすれば省作も人の養子などに往く必要もなく、無垢な少女おつねを泣かせずにも濟んだのだ。此の解り切つた事を、さうさせないのが今の社會である。社會といふものは意外馬鹿なことをやつて居る。自分が其拘束に苦み切つて居ながら、依然として他を拘束しつゝある。

四

上屋の家では、省作に對するおとよの噂も、いつのまにか消えたので大に安心して居たところ、今度省作が深田から離縁されて、それも元はおとよとの關係からであると評判され、二人の噂は再び近村界隈の話草になつたので、家中顔見合せて弱つて居る。おとよの父は評判の六づかしい人であるから、此頃は朝から苦蟲を食ひつぶしたやうな顔をして居る。おとよの母に對してはこれからは、あのおはまのあまなんぞ寄せつけてはならんぞと怒鳴つた。

おとよはそれらの事を見ぬふり聞かぬふりで平氣を裝うてゐるけれど、内心の動搖は一通りでない。省作がいよ／＼深田を出てしまつたと、始めて聞いた夜は殆ど眠らなかつた。思慮に富めるおとよは早くも分別してしまつた。自分には迚も省さんを諦められない。諦められないことは知れてゐながら、餘儀ないはめになつて諦めようとしたものの駄目であつたのだから、もうどうしたつて諦められはしない。今が思案の定め時だ。茲で覺悟を極めてしまはねば、又どんな事にならうも知れない。省さんの心も大抵知れてる。深田に居ないところで省さんの心も大抵知れてる。おとよは獨りで莞爾笑つて、きつぱり自分だけの料簡を定めて省作に手紙を送つたのである。

省作は固より異存のありやうがない、返事は簡であつた。

深田に居られないのもおとよさん故だ。家に歸つて活き返つたのもおとよさん故だ。もう毛の尖程も自分に迷ひはない。命の總てをおとよさんに任せる。

かういふ場合に意志の交換だけで、日を送つて居られる位ならば、交換した詞は僞りに相違ない。抑へられた火が再び燃え起つた時は、勢ひ前に倍するのが常だ。

其のきさらぎの望月の頃に死にたいと誰かの歌がある。これは十一日の晩の、然かも月の幽かな夜更である。おとよは吾家の裏庭の倉の庇に洗濯をやつて居る。

こんな夜深になぜ洗濯をするかといふに、風呂の流し水は何かの譯で、洗ひ物が能く落ちる、それに新たに湯を沸す手數と、薪の儉約とが出來るので、田舍のたまかな家では能くやる事だ。此の夜おとよは下心あつて自分から風呂もたててしまひの湯の洗濯にかこつけ、省作を待つのである。

おとよが家の大體をいふと、北を表に縣道を前にした屋敷構へである。南の裏庭廣く、物置や板倉が縱に母屋に續いて、短冊形に長めな地なりだ。裏の行きとまりに低い珊瑚樹の生垣、中程に形許りの枝折戸、枝折戸の外は三尺許りの流れに一枚板の小橋を渡して廣い田圃を見晴らすのである。左右の隣家は植木の中に萱屋根が見える。九時過ぎにはもう起きてるものも少なく、眞に靜かに穩かな夜だ、月は隣家の低い森の上に傾いて、倉も物置も庇から上に許り月の光がさしてゐる、倉の軒に迫つて繁れる梅の樹も、上半の梢に許り月の光を受けてゐる。

おとよは今其倉の庇、梅の根元に洗濯をして居る。うつすら明るい梢の下に眞白い顏の女が二つの白い手を動かしつゝ、ぼちや／＼水の音をさせて洗ひ物をして居るのである。盛りを過

ぎた梅の花も芳りは今が盛りらしい。白い手の動くにつれて梅の芳りも漂ひを打つかと思はれる。餘所目に見るとも胸躍らしさうな此の風情を、吾が戀人のそれと目に留つた時、どんな思ひするかは、他人の想像し得る限りでない。

おとよはもう待つ人のくる刻限と思ふので、屢々洗濯の手を止めては枝折戸の外へ氣を配る。洗濯の音は必ず外まで聞える筈であるから、省作がそこまでくれば躊躇する譯はない。忍びよる人の足音をも聞かんと耳を澄ませば、夜は漸く更けていよ〳〵靜かだ。

表通りで夜番の拍子木が聞える。隣村らしい犬の遠吠も聞える。おとよは最早殆ど洗濯の手を止め、一應母屋の樣子にも心を配つた。母屋の方では家其物まで眠つてゐる如く全くの寢靜まりとなつた。おとよはもう洗ひ物には手が着かない。起つてうろ〳〵する。月の樣子を見て梅の芳りに氣づいたか、

「おゝえい芳り」

そつと一こと言つて、枝折戸の外を窺ふ。外には草を踏む音もせぬ。おとよは吾が胸の動氣をまで聞きとめた。九十九里の波の遠音は、かういふ靜かな夜にも、どうー〳〵どうー〳〵と多くの人の睡りをゆすりつゝ鳴るのである。さすがにおとよは落ちつきかね我知らず溜息を吐く。

「おとよさん」

一こゑ極めて幽かながら紛るべくもあらぬ其人である。同時に枝折戸は押されて、省作は俄かに寒け立つてわな〳〵する。おとよも同じやうに身顫ひがでる。

「寒いことねい」

「待つたでせう」

おとよはそつと枝折戸に鍵をさし、物の蔭を縫うて其戀人を用意の位置に誘うた。

おとよは省作に別れて丁度三月になる。三月の間は長いとも短いともいへる、悲しく苦しく不安の思ひで過さば、僅か百日に足らぬ月日も隨分長かつた思ひがしよう。二人にとつての此の三月は、變化多き世の中にも一寸例の少ない並ならぬ三月であつた。

身も心も一つと思ひあつた二人が、全くの他人となり、然かも互に諦められずに居ながら、長く他人にならんと思ひつゝ暮した三月である。

吾が命は吾が心一つで殺さうと思へば、慥かに殺すことが出來る。吾が戀は吾が心一つで決して殺すことは出來ない。吾が心で殺し得られない戀を強ひて殺さうとかゝつて遂に殺し得られなかつた三月である。

乍併三月の間は長く感じたところで數は知れてゐる。人の夫と我が夫との相違は數を以ていへない隔りである。相思の戀人を餘儀なく人の夫にして近くに見て居つたといふ悲慘な經過を取つた人が、漸く春の惠みに逢うて、新らしき生命を授けられ、梅花月光の契りを再びする事になつたのはおとよの今宵だ。感極つて泣く位のことではない。

おとよは只もう泣く許りである。戀人の膝にしがみついたまゝ泣いて泣いて泣くのである。おとよは省作の膝に、省作はおとよの肩に互に頭をつけ合つて一時間の其餘も泣き合つてゐた。

固より灯のある場合ではない。頭をあげても顏見合すことも出來ず唯手をとり合うて居る許りである。

「省さんわたし嬉しいわ」

やう〳〵一こと言つたが、おとよは又泣き伏すのである。

「省さんあとから手紙で申上げますから、今夜は思ふさま泣かして下さい」

しどろもどろにおとよは聲を吞むのである、

省作はとう〳〵一語も言ひ得ない。

悲しくつらく玉の緒も斷えん許りに危かりし悲慘を免れて僅に安全の地に、なつかしい人に出逢うた心持であらう。限りなき嬉しさの胸に溢れると等しく、過去の悲慘と烈しき對照を起し、悲喜の感情相混交して激越を極むれば、誰れでも泣くより外はなからう。

相思の情を遂げたとか戀の滿足を得たとかいふ意味の戀は抑も戀の淺薄なるものである。戀の悲しみを知らぬ人には戀の味は話せない。

泣いて泣いて泣きつくして別れた二人には、又逆も言ひ表はすことの出來ない嬉しさを分ち得たのである。

五

翌晩省作からおとよの許に手紙がとゞいた。

「前略お互に知れきつた思ひを今更話合ふ必要もない筈ですが、何だかわたしは唯おとよさんの手紙を早く見度くてならない、わたしの方からも一刻も早く申上度いと存じて筆を持つても、何から書いてよいか順序が立たないです。

昨夜は實に意外でした、どうせしみ〴〵と話の出來る場合ではないけれど、少しは話もしたかつたし、それにわたしはおとよさんを悅ばせる話も持つて居たのです、溜りに溜つた思ひが一時に溢れた故か、唯おど〳〵して咽せて胸の內は無茶苦茶になつて、何の話も出來なく、折角おとよさんを悅ばせようと思つてた話さへ、思ひださずに了つたは、自分ながら實に意外でした、乍併胸一ぱいに痞へて苦くて堪らなかつた思ひを、二人で泣いて一度に泣き流したのですから跡の愉快さは筆にはつくせません、これはおとよさんも同じことでせう、昨夜おとよさんに別れて歸るさの愉快は、まるで體が宙を舞つて流れるやうな思ひでした、今でも未だ體がふは〳〵浮いてるやうな思ひで居ります、私のやうに仕合せなものはないと思ふと嬉しくて嬉しくて堪りません。

これから先どういふ風にして二人が一緒になるかの相談はいづれ又逢つての上にしませう、あなたを悅ばせようと申した事は、母や姉は隨分不承知なやうですが、肝心な兄は『お前はおとよさんと一緒になると決心しろ』と言うてくれたのです、兄は元からおとよさんが大變氣に入りなのです、もう私の體は大した故障もなくおとよさんのものです、ですから私の方は、今あせつて心配しなくともよいです、それに二人に就いて今世間が少しやかましいやうですから、こゝ暫く落ちついて時を待ちませう、其れにしてもおとよさんには又おとよさんの考がありませう、おうちの都合はどんな風ですかそれも聞き度いし、わたしはおとよさんの手紙を早く見たい」

省作の手紙はどこまでも省作らしく暢氣なところがある。其又翌日おとよから省作に手紙をだした。

「妾から先にと思ひましたに、まづあなた樣よりのお手紙で、妾は醉はされて了ひました、出しては讀み出しては讀み、差上げる手紙を書く料簡もなく、昨夜一ばん埒もなく過ごしました、先夜はほんとに失禮致しました、唯悲しくて泣いた事を夢のやうに覺えてる許り外の事は何も覺えてゐません、あとであんまり失禮であつたと思ひました、それもこれも悲しさ嬉しさ一度に胸にこみ合ひ止め度な

くなつた故と御赦し被下度、省さま妾は此頃無しやうと氣が弱くなりました、あなたさまの事を思へば直ぐ涙が出ますの、それに就けても有難いお兄様のお詞、あなたさまの方はそれで安心が出來ます、

妾の考へには深田の手前秋葉の手前（淸六の家）あなたのお家にしても妾の家にしても、私共二人が見すぼらしい暮しを近所にして居つたでは、何分世間が惡いでせう、して見れば二人はどうしても故郷を出退く外ないと思ひます、精しくはお目にかゝつての事ですが東京へ出るがよいかと思ひます。

それにつけても妾の家ですか、御承知のとほり親父は誠に片意地の人ですから、迚も妾の言ふことなどは聞いてくれさうもありませぬ、それに昨今どうやら妾の緣談ばなしがある樣子に見えます、又間違ひの起らぬうちに早くといふやうな事をちらと聞きました、何といふ情けない事でせう、省さんが一人の時分には妾に相手があり妾が一人になれば省さんに相手がある、今度漸く二人がかうと思へば、直ぐに妾の緣談、妾は身も世もあらぬ思ひ、生きた心はありません。

けれども省樣、此上どのやうな事があらうと妾の覺悟は動きませぬ、體はよし手と足と一つ〳〵にちぎりとらるゝとも妾の心はあなたを離れませぬ。

からは覺悟してゐますものの、いよ〳〵二人一緒になるまでには、どんな艱難を見ることか判りませぬ、何卒妾の胸の中を察して下さいませ、常にも似ず愚癡許り申上失禮致候、こんな事申上ぐろにも心は慰み申候、それでも省さまといふ人のある妾決して不仕合せとは思ひませぬ」

種蒔の支度で世間は忙しい。枝垂柳もほんのり青みが見える樣になつた。彼岸櫻の咲くとか咲かぬとかいふ事が話の問題になる頃は、都でも田舍でも、人の心の最も浮立つ期節である。

某の家では親が婿を追出したら、娘は婿について家を出てしまつた、人が仲裁して親はかへすといふに今度は婿の方で歸らぬといふとか、某の娘は他國から稼ぎに來てる男と馴合つて逃出す所を村界で兄に抑へられたとか、小さな村に話の種が二つも出來たので、固より浮氣ならぬ省作おとよの戀話も、新らしい話に入り換つて了つた。

六

珊瑚樹垣の根には蕗の薹が無邪氣に伸びて花を咲きかけてゐる。外の小川には處々隈取りを取つて芹生が水の流れを狹めてゐる。燕の夫婦が一番ひ何か頻りと語らひつゝ苗代の上を飛び廻つてゐる。かぎろひの春の光り、見るから暖かき田圃の遠こち、二人三人組をなして耕すもの幾組、麥畑をきるもの菜種に肥を注ぐもの、田園漸く多事の時である、近き畑の桃の花、垣根の端の梨の花、昨夜の風に散つたものか、苗代の周りには花びらの小紋が浮いて居る。行儀よく作られた苗坪は早や一寸許りの厚みに綠を盛上げて居る。燕の夫婦はいつしか二番ひになつた、時々綠の短册に腹を擦つて飛ぶは何の爲めか、心長閑に此の春光に向はゞ、詩人ならざるも暫く世俗の紛紜を忘れ得べきを、春愁堪へ難き身のおとよは、とても春光を樂しむ一人ではない。

男子家にあるもの少なく婦女は養蠶の用意に

忙しい。おとよは今日の長閑さに蠶籠を洗ふべく、嘗て省作を迎へた枝折戸の外に出て居るのである。抑へ難き憂愁を包む身の、洗ふ蠶籠には念も入らず幾度も立つては田圃の遠くを眺めるのである。玆から南の方へ十町許り、廣い田圃の中に小島のやうな森がある、そこが省作の村である。木立の隙間から倉の白壁がちらちら見える、それが省作の家である。

おとよは今更の如く省作が戀しく、紅淚頰に傳はるのを覺えない。

「省さんはどうして居るかしら、手紙のやりとり許りで心細くて仕樣がない、かうしてお家も見えてゐるのに、兄さんは、二人一緒になると決心しろつて、今でもさう思つてて下さるのかしら」

おとよは口の底でかういつて省作の家を見てるのである。緣談の事も愈々事實になつて來たらしいので、おとよは俄に省作に逢ひ度くなつた。逢つて今更相談する必要はないけれど、苦しい胸を話したいのだ。十時も過ぎたと思ふに蠶籠は未だいくつも洗はない。おとよは思ひ出したやうに洗ひ始める。恰好のよい肩に何かしらぬ海老色の襷をかけ。白地の手拭を日よけに冠つた、顋の邊の美しさ。美しい人の憂へてる顏は可哀想で堪らないものである。

「おとよさんおとよさん」

呼ぶのは嫂お千代だ。おとよは返辭をしない、しないのではない出來ないのだ、何の用で呼ぶかといふ事は解つてるからである。

「おとよさんおとつさんが呼んでゐますよ」

枝折戸の近くまで來てお千代は呼ぶ。

「はい」

おとよは押出した樣な聲で漸くの事返辭をした。十日許り以前から今日あることは判つて居るから十分の覺悟はしてゐるものの、今更に腹の煮え切る思ひがする。

「さあおとよさん一緒にゆきませう」

お千代は枝折戸の外まできて、

「まあえい天氣なこと」

お千代は氣樂に田圃を眺めて、只ならぬおとよの顏には氣がつかない。おとよは餘儀なく襷をはづし手拭を採つて二人一緒に座敷へ上る。待ちかねてゐた父は、獨りで元氣よくにこにこしながら、

「おとよ玆へきてくれおとよ」

「はあ」

おとよは平生でも兩親に丁寧なんだ、殊に今日は話が話と思ふものから一層改まつて、疊二疊半許り隔てて父の前に坐した。紫檀の盆に九谷の茶器根來の菓子器、念入りの客なことは聞かなくとも解る。母も座に居つて茶を入れ直してゐる。おとよは少し俯向きになつて膝の上の手を見詰めて居る。平生顏の色など變へる人ではないけれど、今日はさすがに包みかねて、顏の血の氣が失せ殆ど白蠟の如き色になつた。

自分獨りで勝手な考へ許りしてる父はおとよの顏色などに氣はつかぬ。さすがに母は見咎めた。

「おとよお前どうかしたのかい、大へん顏色が惡い」

「えゝどうもしやしません」

「さうかいそんならえいけど」

母は入れた茶を夫のと娘のと自分のと三つの茶碗について配り、座について茶話を聞かうとして居る。

「おとよ外の事ではないがの、お前の緣談の事に就てはづれの旦那が來てくれて今歸られた處だ、お前も知つてるだらう、早船の齋藤よ、あの人にはお前も一度位逢つた事があらう、お互に何もかも知れきつてる間だから、誠に苦なしだ、此月初めから話があつての、向うで言ふにやの、おとよさんの事は能く知つてる、只おと

よさんが得心して來てくれさへすれば、來た日からでも身上の賄もして貰ひたいつての、それは執心な懇望よ、向うは三度目だけれどお前は二度目だからそりや仕方がない、三度目でも子供がないから初縁も同じだ、一度あんな所へやつてお前にも氣の毒であつたから、今度は判つてるが念の爲に一應調べた、負債などは少しもない、地所はうちの倍ある、一度は村長までした人だし、まあお前の婿にして申分のないつもりぢや、お前はあそこへゆけば此上ない仕合せとおれは思ふのだ、それでもう家中異存はなし、今はお前の挨拶一つで極るのだ、はづれの旦那はもうちやんと極つたやうなつもりで歸られた、おとよ、よもやお前に異存はあるまいの」

おとよは人形のやうになつてだまつてる。

「おとよ異存はねいだの、なに結構至極な所だから極めて了つてもよいと思つたけど、お前は六づかしやだからな、かうして念を押すのだ、異存はないだらう」

まだおとよは默つてる。父も漸く娘の顏色に氣づいて、むつとした調子に聲を強め、

「異存がなけら極めてしまふど、今日中に挨拶と思うたが、それも何かと思うて明日中に返辭をする筈にした、お前も異存のある筈がないぢやねいか、向うは判りきつてる人だもの」

おとよは漸く體を動かした。ふるへる兩手を膝の前へ突いて、

「おとつさんわたしの身の一大事の事ですから、どうか挨拶を三日間待つて下さいませ」

おとよは稍々ふるへ聲でから答へた。さすがに初めからきつぱりとは言ひかねたのである。おとよの父は若い時から一酷もので、自分が言ひだしたら跡へは引かぬといふことを自慢にしてきた人だ。年をとつてもなか〳〵其性は止まない。おれは言ひだしたら引くのはいやだから、成べく人の事に口出しせまいと思つてると言ひつゝ、餘り世間へ顏出しもせず、家の事でも、さういふつもりか若夫婦のやる事に容易に口出しもせぬ。さういふ人であるから、自分の言つたことが、聞かれないと執念深く立腹する。今おとよの挨拶ぶりが、不承知らしいので内心もう非常に激昂した。殊に省作の事があるから一層怒つたらしい。顏色を變へて、おとよを疾視つけてゐたが暫くしてから、

「うむ、それではきさま三日立てば承知するのか」

おとよは默つてゐる。

「とよ默つてゝはわかんね、三日經てば承知するかと言ふんだ、なあおとよ、吾が娘だからお前は能く物の解る女だ、かうして、おれ達が心配するのも、皆お前の爲を思うての事だど」

「おとつざんの思召しは有難う思ひますが、一度わたしは懲りてゐますから、今度こそ吾身の一大事と思ひます、どうぞ三日の間考へさして下さいませ、承知するともしないとも此の三日の間にわたしの料簡を定めますから」

父は今にも怒號せんばかりの顏色であるけれど、問題が問題だけにさすがに怒りを忍んでゐるらしい。

「こちから明日中に確答すると言つた口上に對し又二日間挨拶を待つてくれといふことが言へるか、明日中に判らぬことが、二日延べたとて判る道理があんめい、そんな人を馬鹿にした樣な言を人にいへるか、いやとも應とも明日中には確答してしまはねばならん。おとよ何とかもう少し考へやうはないか、兩親兄弟が同意でなんでお前に不爲を勸めるか、先度は親の不注意もあつたと思へばこそ、是非齋藤へはやりたいのだ、どこから見たつて不足を言ふ點がないではないか、生若いものであると料簡の見留めもつき惡いが齋藤ならばもう安心なものだ、どうしても承知が出來ないか」

父は沸える腹をこらへ手を握つて諭すのである。おとよは瞬きもせず膝の手を見つめたまゝ默つてゐる。父は最早堪りかねた。

「愈々不承知なのだな、きさまの料簡は知れてゐるわ、直ぐにきつぱりと言へないから、三日の間などとぬかすんだ、目の前で兩親をたばかつてやがる、それでなんだな、きさまは今でもあの省作の野郎と關係してゐやがるんだな、ウヌ生巫山戯て……親不孝もののめが、此上にも親の面に泥を塗るつもりか、ウヌよくも……」

おとよは泣き伏してる。父はこらへかねた憤怒の眼を光らしいきなり立上つた。母もあわてて立つてそれにすがりつく。

「お千代やお千代や……早くきてくれ」

お千代も次の間から飛んできて父を抑へる。お千代は漸く父をなだめ、母はおとよを引立てて別間へ連れこむ。此場の騒ぎは一まづ濟んだが、話は此の儘濟むべきではない。

七

おとよの父は平生殊におとよを愛し、おとよが一番能く自分の性質を受け繼いだ子で、女ながら自分の話相手になるものはおとよの外にないと信じ、兄の佐介よりは却ておとよを賴母しく思つてゐたのである。おとよは父とは能く話が合ひこれまで殆ど父の意に逆つた事はなかつた。おとよに省作との噂が立つた時などは母は大に心配したに係らず、父はおとよを信じとよに限つて決して心配を掛けるやうな事はないと、人の噂にも頓着しなかつた。果して省作は深田の養子になりおとよも何の事なく歸つてきたから、やつぱり人の惡口が多いのだと思うてゐた處、此上もない良緣と思ふ今度の緣談につき、意外にもおとよが強固に剛情な態度を示し、それも省作との關係に依ると見てとつた父は、自分の希望と自分の仕合せとが、根柢より破壞せられた如く、落膽と憤懣と慚愧と一時に胸に湧き返つた。

さりとて怒つて許りも居られず、憎んで許りも居られず、忌々しく片意地に癇張つた中にも娘を愛する念も交つて、賢いやうでも年が若いから一筋に思ひこんで迷つてるものと思へば不憫でもあるから、それを思ひ返させるのが親の役目との考へもないではない。

夕飯過ぎた奧座敷には、兩親と佐介と三人火鉢を擁してゐても話にはずみがない。

「困つたあまつ子が出來てしまつた」

天井を見て嘆息するのは父だ。

「おとよはおとつさんの氣に入りつ兒だから、おとつさんの言ふことなら聞きさうなものだがな」

「お前こんな話の中でそんなこと言ふもんぢやねいよ」

「とよは一體おれの言ふことに逆つたことはないのに、それに此の上ないえい嫁の口だと思ふのに、あんな風だから、そりや省作の關係からきてるに違ひない、お前女親でゐながら、少しも氣がつかんといふことがあるもんか」

「だつてお前さん、省作が深田を出たといつてから未だ一月位にしかならないでせう、それですからまさか其間にそんな事があらうとは思ひませんから」

「おッ母さん人の噂では省作が深田を出たのはおとよの爲だと言ひますよ」

「ほんとにさうかしら」

「實に忌々しいやつだ、婿にも貰へず嫁にもやれずといふ男なんどに情を立ててどうするつもりでゐやがるんだろ、そんな馬鹿ではなかつたに、惜しい緣談だがな、斷つちまふ、明日早速斷る、それにしてもあんなやつ、外聞惡くて家にや置けない、早速どつかへ遣つちまへ、忌々しい」

「だつておまへさん、まだはつきりいやだと言つたんぢやなし、明日中に挨拶すればえいですから、猶よくあれが胸も聞いて見ませう、それに省作との關係もです、嫁にやるやらぬは別としても糺さずに置かれません」
「なあに駄目だ〳〵あの様子では……人間も馬鹿になればなるものだ、つく〴〵呆れつちまつた、どういふもんかな、世間の手前もよし、あれの仕合せにもなるし、向らでは懇望なのだから、殘念だなあ」
父はよく〳〵嘆息する。
「だから今一應も二應も言ひ聞かせて見て下さいな」
「おとよの仕合せだと言つても、おとよがそれを仕合せだと思はないで、たつていやだと言ふなら、そりやしやうがないでせう」
「だれの目にも仕合せだと思ふに、それをいはれもなく、兩親の意に背くやうな、そんな我儘はさせられないよ」
「させられないたつておッ母さんしやうがないよ——」
——佐介、馬鹿いひをるな、おまへなどまでも、そんな事いふやうだから、こんな事にもなるのだ」
「吾身の一大事だから少し考へさして下さいと言ふのを、なんでもかでもすぐ承知しろと言ふのはちつと非度いでせう」
「それでは佐介、きさまもとよを齋藤へやるのは不同意か」
「不同意ではありませんけれどそんなに厭だと言ふならと思ふんです、おとよの肩を持つて言ふんぢやありません、おとつさんのは言ひ出すとすぐ片意地になるから困る」
「なに……なにが片意地なもんか、とよのやつの厭だと言ふにや曰くがあるからだ、厭だとは言はせられないんだ」
「佐介、もうおよしよ、これでは相談にはなりやしない、ねいおまへさん、お千代が能くあれの胸を聞く筈ですから、此話は明日にして下さい、湯がさめてしまつた、佐介茶にしろよ」
父は益々六づかしい顔をして居る。なるほど平生おれに片意地なところはある、あるけれども今度の事は自分に無理はないのみか家中悦んで、滞りなく纏まる事と思ひの外、本人の不承知佐介も乘り氣にならぬといふ次第で父は劫が煮えて仕方がない。知らず〳〵片意地になりかけてゐる。呆れつちまつた、どうしてあんな馬鹿になつたか、もう駄目だ斷つてしまふ、かう口には言つても、自分の思ひ立つた事を、どんな場合にも直ぐ諦めてよす様な人ではない、いろ〳〵理窟を捻くつて、根氣よく初志を捨てたいのが此人の癖である。おとよは是れからつらくなる。
　お千代は力になる話相手ではないが惡氣のない親切な女であるから、嫁小姑の仲でも二人は仲よくしてゐる。それでお千代は親切に眞におとよに同情して、かうなつて隱したではよくないから、包まず胸を明かせとおとよに言ふ。おとよもさうは思つてゐたのであるから、省作との關係も一切明かしたうへ、
「妾は不仕合せに心に染まない夫を持つて、言ふに言はれないよく〳〵厭な思ひをしたもの、懲りたのなんのつて言ふも愚かなことで……何んの爲に夫を持ちます、妾は省作といふ人がないにしても、心の判らない人などの所へ二度とゆく氣はありません、此の上妾が料簡を換へて外へ緣づくたなら、妾のした事はみんな徒になります、妾の爲〳〵と心配して下さる兩親の意に背いては、誠に濟まない事と思ひますけれど、これ許りは神様の計らひに任して戴きたい、姉さんどうぞ堪忍して下さい、妾の我儘には相違ないでせうが、妾はとうから覺悟を極

めてゐます、今更どのやうな事があらうと脇目を振る氣はないんですから」

お千代は譯もなくおとよの爲に泣いて、眞からおとよに同情してしまつた。其夜の内にお千代は母に話し母は夫に話す。燃えるやうなおとよの詞も、お千代の口から母に話す時は、大半熱はさめてる、更に母の口から父に話す時は、全く冷靜な說明になつてる。

「なんだつて……茲で嫁に出れば淫奔になるつて……、馬鹿々々しい、てめいのしてる事が大の淫奔ぢやねいか、親不孝者めが其儘にしちや置けねい」

兎に角明日の事といふ事で此夜はお終になつた。

八

朝飯になるといふにおとよは未だ部屋を出ない。お千代が一人で働いて、家中に御ぜんをたべさせた。學校へゆく二人の兄妹に着物を着せる。座敷を一通り掃除する。其内に佐介は鍬を肩にして田へ出てしまふ。お千代はそつとおとよの部屋へ這入つて、

「おとよさん今日はゆつくり休んでおいでなさい、竈は私がこれから洗ひますから」

さういはれても、おとよはさすがに寢ても居られず部屋を出た。一晩の内にも痩せが目につくやうである。父は奥座敷でぼん／＼煙草を吸つて母と話をして居る。おとよは氣が引ける譯もないけれども、今日は又何といはれるのかと思ふと胸がどきまぎして朝飯につく氣にもならない。手水をつかひ着物を着替へて、其儘お千代が竈を洗つてる所へ往かうとすると、

「おとよ」

と呼ぶのは母であつた。おとよは昨日と稍同じ位置に座につく。

「おはやうございます」

とかすかに言つて、兩親の詞をまつ、我が親ながら顏見るのも怖ろしく俯向いてゐるのである。罪人が取調べを受ける時でも、これだけの苦痛はなからうと思はれる。おとよは胸で呼吸をして居る。

「おとよ……お前の胸はお千代から聞いて、すつかり解つた、親の許さぬ男と固い約束のあることも判つた、お前の料簡は十分に判つたけれど、能く聞けおとよ……こゝにかうして並んでる二人は、お前を産んでお前を今日まで育てた親だぞ、お前の料簡にすると、兩親は子を育てても其の子の夫定には口出しが出來ないと言ふことになるが、そんな事は西洋にも天竺にもあんめい、そりや親だもの、可愛子の望みとあれば出來ることなら望みを遂げさしてやりたい、かうしてお前を泣かせるのも決して親自身の爲でなく皆なお前の行末思うての事だ、えいか、親の考へだから必ずえいとは限らんが、親は年をとつていろ／＼經驗がある、お前は賢くても若い、それで我子の思ふやうに許りさせないのは、これも親として一つの義務だ、省作だつて惡い男ではあんめい、惡い男ではあんめいけど、向うも出る人おまへも出る人、事が初めから無理だ、許すに許されない二人の內所事だ、いはゞ親の許さぬ淫奔といふものでないか、えいか」

おとよは此時はら／＼と淚を膝の上に落した。淚の顏を拭はうともせず、脣を固く結んで頭を下げてゐる。母も可哀さうになつて眼は潤んでゐる。

「省作の家にしろ家にしろ、深田への手前秋葉への手前、お前達の淫奔を許しては第一家の面目が立たない、今度の齋藤に對しても實に面目もない事でないか、お前達二人は好いた同士でそれでえいにしても、親兄弟の迷惑をどうする氣か、おとよお前は二人さへよければ親兄弟

などはどうでもえいと思ふのか、出來た事は仕方ないとしても、どうしてそれが改めてくれられない、省作への義理があらうけれど、それは人を以て話の仕樣はいくらもある、これまでは親兄弟に對して能く筋道の立つてたお前、此位の道理の聞き判らないお前ではなかつたに、どうもおれには不思議でなんねい、おれはよんべちつとも寢なかつた」

かう言つて父も思ひ迫つた如く眼に涙を浮べた。母はとうから涙を拭うてゐる。おとよは固より苦痛に身をさゝへかねてゐる。

「それもこれもお前が心一つを取直しさへすれば、おまへの運は勿論、家の面目も潰さずに濟むといふものだ、省作とてお前がなければ又えい所へも養子に行けよう、萬方都合よくなるではないか、こゝをおとよ篤く聞き別けてくれ、理の解らぬお前でないのだから」

父の詞がやさしくなつて、おとよのつらさはいよ〳〵せまる。おとよも言ひたいことが胸先につかへてゐる。自分と省作との關係を一口に淫奔といはれるは實に口惜しい。さりとて兩親の前に戀を語るやうな蓮葉はおとよには死ぬとも出來ない。

「おとつさんの仰しやるのは一々御尤もで、重々妾が惡うございますが、おとつさんどうぞお情に親不孝な子を一人捨てて下さいまし」

おとよはもう意地も我慢も盡きて終ひ、聲を立てて泣き倒れた。氣の弱い母は、

「そんならお前のすきにするがえいや」

「うむ、立派に剛情を張りとほせ、そりやつらい處もあらう、けれども兩親が理を分けての親切、少しは考へやうも有りさうなもんだ、理も非もなくどこまでも、我儘でとほさうといふ了簡か、よしそんなら親の方にも又料簡がある」

かういひ放つて父は足音荒く起つて出てしまふ。無論縁談は止めになつた。

省作といふものがなくて、おとよが只齋藤の縁談を避けたのみならば、片意地な父もさうまで片意地を言ふまいが、人の目から見ればどうしてもおとよが、好きな我儘をとほした事になるから、後の治まりが六づかしい。父は其後も幾度か義理づめ理窟づめでおとよを泣かせる。殺してしまふと騷いだのも一度や二度でなかつた。只さへ剛情に片意地な人であるに、此事許りは自分の言ふ所が理義明白聊かも無理がないと思ふのに、之れが少しも通らぬのだから、一筋に無念でならぬのだ。これ程明白に判り切つた事をおとよが勝手我儘な私心一つで飽くまでも親の意に逆ふと思ひつめてゐるからどうしても勘辨が出來ない。只何といつても吾が子であるから仕方がなく結末がつかない計りである。

おとよは心はどこまでも強固であれど、父に對する態度は又どこまでも平和だ、只、

「妾が惡いのですからどうぞ見捨てて下さい」

と許り言つてる。惡いと知つたら、なぜ親の詞を用ゐぬといへば泣伏してしまふ。

「齋藤の縁談を斷つたのはお前の意を通したのだから、今度は相當の縁があつたら父の意に從へと言ふのだ」

それをおとよはどうしても、ようございますといはないから、父の言ひ狀が少しも立たない、それが無念で堪らぬのだ。片意地ではない、家の爲めだとはいふけれど、癇がつのつてきては何もかもない、我意を通したい一路に落ちてしまふ。怒つて呆れて諦めてしまへばよいが、片意地な人は幾ら怒つても諦めて初志を捨てない。元來はおとよを愛してゐたのだから、今でもおとよを可哀想と思はないことはないけれど、一寸片意地に陷ると吾子も何もなくなる、それで通常は決して無情酷薄な父ではないの

である。

おとよは誰の目にも判る程やつれて、此幾日といふもの、晴々した樣も花やかな笑ひも殆どおとよに見られなくなつた。兄夫婦も母も見て居られなくなつた。兄は大抵の事は氣にせぬ男だけれど其れでも或時、

「おとつさんのやうに、さう執念深くおとよを憎むのは一體解らない、死んでもえいと思ふ位なら、おとよの料簡に任してもえいでせう」

かういふと父は、

「うむ、そんな事いつてさん〴〵淫奔をさせろ」

九

世は青葉になつた。豌豆も蠶豆も元なりは莢がふとりつゝ花が高くなつた。麥畑は漸く黄ばみかけてきた。鰌とりのかんてらが、裏の田圃に毎夜八つ九つ出歩るく此頃、蠶は二眠が起きる、農事は日を逐うて忙しくなる。

お千代が心ある計らひに依つて、おとよは一日つぶさに省作に逢うて、將來の方向に就き相談を遂ぐる事になつた。それは勿論お千代の夫も承知の上の事である。

爾來殊におとよに同情を寄せたお千代は、實は相談などといふことは第二で、餘り農事の忙しくならない内に、玉の緒かけての戀中に、長閑な一夜の睦言を遂げさせたい親切に外ならぬ。

お千代が一緒といふので無造作に兩親の許しが出る。

直ぐさういふのだからどうしやうもない。殊にお千代は極端に同情し母にも口說き自分の夫にも口說きして竊に慰藉の法を講じた。自ら進んで省作との間に文通も取次ぎ時には二人を逢はせる工夫もしてやつた。

おとよはどんな悲しい事があつても、つらい事があつても、省作の便りを見、稀にも省作に逢ふこともあれば、悲しいもつらいも、心の底から消え去るのだから、餘計目に見る程泣いて許りはゐない。例の仕事上手で何をしても人の二人前働いてゐる。

父は依然として朝飯夕飯の度に、あんな奴を家へ置いては、世間へ外聞が惡い、早くどこかへ奉公にでもやつて終へといふ、母は氣の弱い人だから、心におとよを可哀想と思ひながら、夫のいふ詞に表立つて逆ふことは出來ない。

「おとよを奉公にやれといつたつて、おとよの替りなら並の女二人傭まねぢや間に合はない」

いさくさなしの兄は只さういつたなり、それやいけないとも、さうしようともいはない。飯が濟めばさつさと田圃へ出て終ふ。

かねて信心する養安寺村の蛇王權現にお詣をして、歸りに北の幸谷なるお千代の里へ廻り、晚くなれば里に一宿してくるといふに、お千代の計らひがあるのである。

其日は朝も早めに起き、二人して朝の事一通りを片着け、互に髮を結び合ふ。おとよと一所といふのでお千代も娘作りになる。同じ銀杏返し同じ袷小袖に帶も稍々似寄つた友禪縮緬、黑の絹張の傘も揃ひの色であつた。緋の蹴出しに裾端折つて二人が庭に降りた時には、きらつく天氣に映つて俄にそこら明るくなつた。

久し振りでおとよも曇りのない笑ひを見せながら、猶何となし控目に内輪なるは、聊か氣が咎むる故であらう。

籠を出た鳥の二人は道々何を見ても面白さうだ。道端の家に天竺牡丹がある、立ち留つて見る。霧島が咲いてる、立ち留つて見る。西洋草花がある、又立ち留つて見る。お千代は苦も荷もなく暢氣だ。

「おとよさんこれ見たえま、おとよさんてば、此の綺麗な花見たえま」

お千代は花さへ見れば、そこに立ち留つて面白がる。さうしてはおとよさん見たえまを繰返す。元が暢氣な生れで、未だ苦勞といふことを味はないお千代は、おとよを折角玆まで連れて來ながら、おとよの胸の中は、なか〳〵道端の花などを立ち留つて見てるやうな暢氣でないことまでは思ひ遣れない。お千代は年は一つ上だけれど、戀を語るにはまだ〳〵子供だ。

おとよはせうことなしにおちよの跡について無意識に、まあ綺麗なことといひつゝ、撥を合せてゐる。蝙蝠傘を斜に肩にして二人は遊んでるのか歩いてるのか判らぬ樣に歩いてる。おとよはもうもどかしくてならないのだ。

おとよは家を出るまではでるのが嬉しく、家を出て暫くは出たのが嬉しかつたが、今は省作を思ふより外に何のことも頭にない。お千代の暢氣につれて、心にもない詰らない面白く感ぜぬ事にも作り笑ひして、うはの空に歩いてゐる。おとよの心には唯省作が見えるばかりだ、天竺牡丹も霧島も西洋草花も何もありやしない。

「省さんは先へいつたのかしら、それとも未だ跡から來るのかしら」

かう思ふのも心の内だけで、うかりとしてゐるお千代には言うて見やうもなく、時々目をそらして跡を見るけれど、それらしい人も見えない、ぶら〳〵歩けば却て體はだるい。

「おとよさんもう妾少しくたぶれたわ、そこらで一休みしませうか」

お千代の暢氣は果しがない。おとよの心は一足も早く妙泉寺へ往つて見たいのだ。

「でもお千代さんこゝは霧島のはづれですから、家の子はすぐですよ、妙泉寺で待合はせる筈でしたねい」

かういはれて漸くの事いくらか氣がついてか、

「それぢや少し急いでゆきませう」

家の子村の妙泉寺は此界隈に名高き寺ながら、今は仁王門と本堂のみに、昔の俤を殘して境内は庭を掃ふ人もない。殊に本堂は屋根の中程が落ちて屋根地の竹が見えてゐる。二人が門へ這入つた時省作は未だ二人の來たのも氣づかず、頻りに本堂の周圍を見廻し堂の樣子を眺めて居つた。省作は固より建築の事などに、それほどの智識があるのではないけれど、一種の趣味を持つて居るだけに、一見して此の本堂の建築樣式が、他に異なつて居るに心附き、思はず念が這入つて見て居つたのである。

「こんな立派な建築を雨曝しにして置くに非度いなあ、近郷に人のない證據だ、此の郡の恥辱だ、隨分思ひ切つたもんだ、縣廳あたりでもどうにかしさうなもんだ、つまり千葉縣人の恥辱だ、非度いなあ」

省作はこんなことを獨りで言つて、待合せる戀人がそこまで來たのも知らずに居つた。お千代が、ポン〳〵と手を叩く。省作は振返りて出てくる。

「省さん暢氣な風をして何をそんなに見てるのさ」

「何さ立派な御堂があんまり荒れてるから」

「まあ暢氣な人ねい、二人はさつきから玆へきてるのに、ぼんやりして何なんか見てゐて、二人の事なんか忘れつちやつてゐたんだよ」

お千代は自分の暢氣は分らなくとも省作の暢氣は分るらしい。省作は微かに笑ひながら二人の所へきた。

思ふこと多い時は却て物はいへぬらしく、省作はおとよに物もいはない。おとよも顏にうるはしく笑つたきり省作に對して口はきかぬ。唯おとよが手に持つ傘を右に左に譯もなく持替へてるが目にとまつた。なつかしいといふ氣持のない心は、お互の詞に依つて疏通せらるゝ場合が多いが、それは尋常の場合に屬することで

あらう。

今省作とおとよとは逢つても口をきかない。お千代が前に居るからといふ譯でもなく、お互に拘泥てる譯でもない。物を言はなくとも滿足が出來たのである。なつかしいといふ形のない心が、詞の便りをからないで滿足に融合が出來たからである。

お千代と省作との間に待つたとか待たないとかいふ罪のない押問答が暫く繰返される。身を傾ける程の思ひは却て口にも出さず、そんな埒もなき事をいうて時間を送る。戀はどこまでももどかしく心に任せぬものである。三人は茲で辨當を開いた。

十

のろい足だなあ、二三度省作から小言が出て、午後の二時頃三人は漸く御蛇が池へついた。飽き〳〵するほど日の永い此頃、物考へなどしてどうかすると午前か午後かを忘れる事がある。まだ熱さに苦しむといふほどに至らぬ若葉の頃は、野遊びには最も愉快な時である。三人一緒になつてから、おとよも省作も心の片方に落ちつきを得て見るものが皆面白くなつてきた。おのづから浮き〳〵してきた。目下の滿足が樂しく、遠い先の考へなどは無意識に腹の外へ片寄せて置かれる事になつた。

これが省作おとよの二人ぎりであつたらば、かうはゆかなかつたかも知れない。そこにお千代といふ、はさまりものがあつて、一方には邪魔なやうな處もあるが、一面にはそれが爲めにうまく調子がとれて、極端に陷らなかつた爲め、思つたよりも今日の遊びが愉快になつた。初めはお千代の暢氣が目についていたに、今は三人稍々同じ程度に暢氣になつた。けれども省作おとよの二人には別に説明の出來ない愉快のあるは勿論である。物の隅々に溜つてゐた塵屑を綺麗に掃出して掃除したやうに、手も足も頭もつかへて常に屈まつてたものが、一切の障りがとれて暢々としたやうな感じに、今日程氣の晴れた事はなかつた。

御蛇が池には未だ鴨がゐる。高部や小鴨や大鴨も見える。冬から春までは幾千か判らぬ程居るさうだが、今日も何百といふほど遊んで居る。池は五六萬坪あるだらう、一寸見渡したところかなり大きい溜水である。水も清く周圍の岡も若草の綠につゝまれて美しい。渚には眞菰や葦が若々しき長き輪郭を池に作つてゐる。平坦な北上總には兎に角遊ぶに足るの勝地である。

鴨は眞中ほどから南の方人のゆかれぬ岡の蔭に集つて何か聞き分けのつかぬ聲で鳴きつゝある。御蛇が池といへば名は恐ろしいが、弱い女小兒の遊ぶにもよろしき小池に過ぎぬ。

湖畔の平地に三四の茶屋がある。中に水に臨んだ一小廬を湖月亭といふ。求むる人には席を貸すのだ。三人は東金より買ひ來れる菓子果物など取擴げて湖面を眺めつゝ裏なく語らふのである。

七十許りな主の翁は若き男女の爲めに、自分が此地を銃獵禁制地に許可を得し事情や、池の歷史さては鴨獵の事など話し聞かせた。其中には面白き話もあつた。

「水鳥の類ひにも操といふものがあると見えまして、雌なり雄なりが一つとられますと、跡に殘つたやもめ鳥でせう、外の雌雄が組をなして樂しげに遊んでる中に、一つ淋しく片寄つて哀れに鳴いてるのを見ることがあります、さういふことが折々ありまして、あゝあれはつれあひを捕られたのだなといふことが直ぐ分ります、感心なもので御座います」

此の話を聞いておとよも省作も涙の出でん許りに感じたが、主が席を去るとおとよは堪りかね、省作と自分との此の先に苦勞の多かる

べきをいひ出でて嘆息する。お千代も省作に向つて、

「省さんも御承知ではありませうが、齊藤の一條から父は大變おとよさんを憎んで、未だに十分お心が解けないもんですから、それは〳〵おとよさんの苦勞心配は一通りの事ではなかつたのです、今だつて父の機嫌がなほつてはゐないです、おとよさんもこんなに痩せつちやつたんですから、可哀想で見てゐられないからうちと相談してね、今日の事をたくらんだんです、隨分あぶない話ですが、あんまりおとよさんが可哀想ですから、それですから省さん今夜は二人で能く相談してね、かうといふことを極めて下さい、おまへさんら二人の相談がかうと極まれば、うちでも父へ何とか話のしやうがあるといふんですから、ねい省さん」

省作も話下手な口でかういつた。

「お千代さん、いろ〳〵御親切に心配して下さつて、いくら有難く思つてるか知れやしません、私は晴れておとよさんの顔を見るのは四箇月振りです、痩せた痩せたといふけれど、こんなに痩せたとは思はなかつたです、さつき初めて妙泉寺で逢つて私は實際驚いた、私はもう五六日の内に東京へ往くと決心したんです、お千代さんもおとよさんも安心して下さい、うちの兄はかういふんですから。省作おとよさんはどういふ氣である、お前の決心はどうだ、おれの覺悟はいつかも話したやうに、ちやんと極つてるど、お前の決心一つでおれはいつでもえい、此の間おツ母さんにも話して置いた。其から私がこれこれだと話すと、うんそりやよからう、若いもんがうんと骨折るにや都合がえい、おれは面目だの何んぼくだのといふことは言はんがな、そりや東京の方が働きがひがあるさ、それがやさうと決心して、成るたけ早く實行することにしろ、其からお前にいうて置くことがある、おれにも大した事は出來んけれど、おれも村の奴等に慾が深い深いといはれたが、其お蔭で五六年丹精の結果が千五百許り出來てる、之をお前にやる分にや先祖の財産へ手を付けんのだから、おれの勝手だ、お前もそんつもりでな、東京で何か仕事を覺えろ……おとよさんのおとつさんが、六づかしい事をいふのも、つまり吾が子可愛さからの事に違ひあんめいから、そりや其内どうにかなるよ、心配せんで着々實行にかゝるさ。兄はかう言ふんですから私の方は心配ないのです、佐介さんにお千代さんから、能くさう申して下さい、おとつさんの方も何分賴みます」

お千代は平生妹ながら何事も自分より上手と敬して居つたおとよに對し、今日ばかりは眞の姊らしくあつたのが、無上に嬉しい。

「それではもうおとよさん安心だわ、これからはおとつさん一人だけですから、うちでどうにか話するでせう、今日はほんとに愉快であつたわねい」

「ほんとにお千代さん、おとつさんを何時までああして怒らして置くのは、妾は何程つらいか知れないわ、おとつさんの言ふ事にちつとも御無理はないんだから、どうにかしておとつさんの機嫌を直したい、妾は……」

「そりやおとよさんの苦心は察するよ」

省作はお千代とおとよの顔を見比べて、

「お千代さん、おとよさんは少し元のおとよさんと違つてきたね」

「どう違ふの」

「元はもつと、きつぱりとしてゐて、今の樣に苦勞性でなかつたよ、近頃は馬鹿に氣が弱くなつた、おとよさんは」

おとよは、長くはつきりした目に笑を湛へて側を見てゐる。

「それも省さんがあんまりおとよさんに苦勞さしたからさ」

「そんな事はねい、私はいつでもおとよさんの言ひなりだもの」
「まあ嬉しいあんなこといつて」
「そんなら省さん、なぜ深田へ養子にいつた」
お千代はかう言つてハ、、、、と笑ふ。
「それもおとよさんが行けつて言つたからさ」
「もう止めだ〳〵、こんなこといつてると、鴫に笑はれる、おとよさん省さんさあ〳〵蛇王様へ行つてきませう」
三人はばた〳〵外へ出る。池の北側の小路を西について七八町廻れば養安寺村である。追ひつ追はれつ、草花を採つたり小石を拾つて投げたり、蛇が居たと言つては三人がしがみ合つたりして、池の岸を廻つてゆく。
「省さん蛇王様はなで皺の神様でせうか」
「なぜだか神様のこたあ私にや解んねい」
「それぢや蛇王様は皺の事計り拜む神様かしら」
「そりや神様だもの拜めば何でも御利益があるさ」
「なんでも手足がなほれば、足袋なり手袋なり拵へて上げるんださうよ、ねい省さん」
「さつきの爺さんは大へん御利益があるつていつたねい」

三人は罪のない話をしながらいつか蛇王權現の前へくる。それでも三人は頗る眞面目に祈願をこめて再び池の周りを駈け廻りつゝ愉快にとう〳〵日も横目になつた。

十一

東金町の東端から北幸谷の岡へ、少しく經上つた所に一區をなせる勝地がある。三方岡を圍らし、[illegible]子の大鏡を投り出したやうな三角形の小湖水を中にして、寺あり學校あり農家も多く旅店もある。夕照りうらゝかな四圍は若葉を其水面に寫し、湖心深然として人世以外別に天地の意味を湛へて居る。

此の小湖には俗な名がついてゐる。俗な名を言へば清地を汚すの恐がある。湖水を挾んで相對して居る二つの古刹は、東岡なるを最福寺とかいふ。神々しい松杉の古樹、森高く立ちこめて、堂塔を掩うて尊い。

桑を摘んでか茶を摘んでか、笊を抱へた男女三四人、一隅の森から現はれて最福寺の前へ降りてくる。

お千代は北の幸谷なる里方へ歸り、省作とおとよは湖畔の一旗亭に投宿したのである。首を振ることも出來ないやうに、身にまとはつた苦しき問題に惱みつゝあつた二人は、其惱みを忘れて茲に一夕の平和を得た。風に[illegible]れて港に入りし船の如く、激つ早瀬の水が、僅かなる岩間の淀みに、餘裕を示す如く、二人は茲に一夕の餘裕を得た。

餘裕を以て満たされたる人は、想ふに却て餘裕の意味を解せぬのであらう。餘裕なき境遇にある人が、偶かに餘裕を發見した時に、初めて餘裕の趣味を適切に感ずることが出來る。

一風呂の浴みに二人は今日の疲れを癒し、二階の表に立つて、別天の湖光に對した、[illegible]な青年、清秀な佳人、今は決してあはれな可哀想な二人ではない。

人は身に餘裕を覺ゆる時、考へは必ず我を離れる。

「おとよさん一寸えい景色ねい、おりて見ませうか、向うの方からこつちを見たら、又此度面白いよ」

「さうですねい、妾もさう思ふわ、早くおりて見ませう、日のくれない内に」

おとよは金鍍の足に紅玉の玉をつけた釵を插し替へ、帯締直して手早く身繕ひをする。そこへ二十七八の太つた女中が、茶具を持つて上つてきた。茶代の禮をいうて丁寧にお辭儀をす

る。

「出花を入れ替へて參りましたさあどうぞ……」

「あ今おりて湖水のまはりを廻つてくる」

「お二人でいらつしやいますの……そりやまあ」

女中は茶を注ぎながら、横目を働かして、おとよの容姿を覗る。おとよは女中には目もくれず、甲斐絹裏の、しやら〳〵する羽織をとつて省作に着せる。省作が下手に羽織の紐を結べば、おとよは物をも言はないで、其紐を結び直してやる。おとよは身のこなし、しとやかで品位がある。女中は感に堪へてか、お愛想か、

「お羨しいことねい」

「アハヽヽヽ今日はそれでも、羨しいなどといはれる身になつたかな」

おとよに改めて自分から茶を省作に進め、自分も一つを吸つて二人は直ぐに湖畔へおりた。

「どつちからいからうか」

「どつちからでもおんなしでせうが、日に向いては省さんいけないでせう」

「さう〳〵それぢや西手からにしよう」

箱のやうな極めて小さな舟を岸から四五間乘り出して、釣りを垂れてゐた三人の人がいつのまにか居なくなつてゐた。湖水は漣も動かない。

二人がどうして一緒にならうかといふ問題を暫く跡に廻し、今二人は戀を命とする途中で、戀を忘れた餘裕に遊ぶ人となつた。これが眞の餘裕といふのかも知れぬ、二人はひよつと人間を脱け出でて自然の中に這入つた形である。

夕靄の奧で人の騷ぐ聲が聞え、物打つ音が聞える。里も若葉も總てがぼんやり色をぼかし、冷かな湖面は寂寞として夜を待つさまである。

「おとよさん面白かつたねい、こんな風な心持で遊んだのは、ほんとに久しぶりだ」

「ほんとに省さん私もさうだわ、今夜は何んだか、世間が廣くなつたやうな氣がするのねい」

「さうさ今まではお互に自分で自分をもてあつかつて居たんだもの、それを今は自分の事は考へないで、何が面白いの、かにが面白いのつて、世間の物を面白がつてるんだもの、あ宿であかしが點いた、おとよさん急がう」

戀は到底癡なもの。少しさゝへられると、直ぐ死にたき思ひになる。少し滿足すれば直ぐ總てを忘れる。思慮のある見識のある人でも一度戀に陷れば、痴態を免れ得ない。此夜二人は只嬉しくて面白くて、將來の話などしないで寢て終つた。翌朝お千代が來た時までに、兎に角省作が先つ一人で東京へ出ることと此月半に出立するといふ事だけ極めた。おとよは省作を一人でやるか、自分も一緒に行くかといふことに就て、早くから考へて居たが、つまり二人で一緒に出ることは穩かでないと思ひさだめたのである。

十二

はづれの旦那といふ人は、おとよの母の從弟であつて薊といふ人だ。世話好きで話のうまい處から、能く人の仲裁などをやる。背の低い顏の丸い中太りの快活で物の解つた人といはれてる。それで齋藤の一條以來土屋の家では、例の親父が怒つて怒つて始末にをへぬといふことを聞いて、どうにか話をしてやりたく思つてるものの、おとよの一身に關することは、世間晴れての話でないから、親類とてめつたな話も出來ずに居つた處、省作の家の人達の心持が、すつかり知れて見ると、いつまでこうしては置けまいと、お千代がやきもきして佐介を薊の方へ賴みにやつた。薊は早速其晩やつて來た。固より親類ではあるし、親しい間柄だから先づ酒といふ事になる。主人の親父とは頃合ひの飲み相手だ。薊は二つめにさゝれた盃を抑へ、

「時に今日上つたのは、少し願ひがあつて來た

話ぢやから、あんまり年はねい内に話して終ふべい、おツ母さん、おツ母さんあなたにも茲さ來て聞いて貰べい、お千代さん、一寸おツ母さんを呼んで下さい」
おとよの母はいろ／＼御心配下すつてと辭儀をしてそこにすわる。
「御兩人の子に就ての話だから、御兩人の揃つた所でなけれや話は出來ない」
薊の話には工夫がある。男親一人に頑張らせないといふ底意を諷してかゝる。
「時に土屋さん、今朝佐介さんから荒まし聞いたんだが、一體おとよさんをどうする氣かね」
「どうもしやしない、親不孝な子を持つて世間へ顏出しも出來なくなつたから、少し小言が長引いたまでだ、いや薊さんどうもあなたに面目次第もない」
「土屋さんあなたは、能く理窟を言ふ人だから、薊も今夜は少し理窟を言はう、私は全體理窟は嫌ひだが、相手が、理窟屋だから仕方がねい、おツ母さんどうぞお酌を……私は今夜は話がつかねば喧嘩しても歸らねいつもりだからまあゆつくり話すべい」
片意地な土屋老人との話はせいては駄目だと薊は考へてるのだ。
「土屋さん、あなたが私に對して面目次第もないといふのが、どうも私には解んねい、齋藤との縁談を斷つたのが、なぜ面目ないのか、私は齋藤から頼まれて媒妁人となつたのだから、此の縁談は實はまとめたかつた、それでも當の本人が厭だといふなら、もうそれまでの話だ、斷るに不思議はない、そこに不面目もへちまもない」
「いや薊只齋藤へ斷つただけなら、決して面目ないとは思はない、内所事の淫奔がとほつて、立派な親の考へがとほせんから面目がない、あなたも知つての通り、あいつは親不孝な子ではなかつたのだがの」
「少し待つて下さい、あなたは無造作に淫奔だの親不孝だのと言ふが、そこがおれにや、やつぱり解んねい、おとよさんは今でも親孝行な人だ、私がさういふ許りではない世間でもさういつてる、私の思ふにやあなたが却て子に不孝だ」
「どこまでも我儘をとほして親のいふことに逆ふやつが親不孝でないだろか」
「親のいふこと即ち自分のいふことを、間違ひないものと目安を極めてかゝるのが抑々大間違ひのもとだ、親のいふことにや、どこまでも逆つてならぬとは、孔子さまでもいつて居ないさうだ、幾ら親だからと云て、其子の行末まで親の料簡次第にしようといふは無理ぢやねいか、況して男女間の事は親の威光でも強ひられないものと、神代の昔から、百里隔てて立話の出來る今日でも變らぬ自然の事だ」
「なによそれが淫奔事でなけれや、それでもえいさ、淫奔をして居つて我儘をとほすのだから不埒なのだ」
「まだあんな事を言つてる、理窟をいふ人に似合はず解らない老人だ、それだからあなたは子に不孝な人だといふのだ、生きとし生けるもの子をかばはぬものはない、あなたには吾が子をかばふといふ料簡がないだなあ」
「そんな事はない」
「ないつたつて、現にやつてるぢやねいか、吾が子をよく見ようとはしないで、惡く／＼と見てる、いはゞ自分の片意地な料簡から、おとよさんを強ひて淫奔ものにして終はうとしてる、何んといふ意地の惡い人だらう」
此一言には老人も少しまゐつた。慥に腹ではまゐつても、なるほどさうかとは、口が腐つてもいへない人だ。餘程困つたと見え、獨りで酒を注いで飲む手が少し顫へてる。まあ一つといつて盃を薊にさす。

「そりや上屋さん、男女の關係ちは見やうに依れば、皆んな淫奔だよ、淫奔であるもないも唯精神の一つにあるだよ、表面の事なんかどうでもえいや、つまらん事から無造作に料簡を動かして、出たり引つこんだりするのが淫奔の親方だよ、それから見るとおとよさんなんかは、かうと思ひ定めた人の爲めに、どこまでも情を立てて、親に棄てられてもとまで覺悟してるんだから、實際姿にも話して感心してゐますよ」

「飛んでもない間違ひだ」

老人は鼻汗一ぱいにかいた顏に苦しい笑ひをもらした。おとよの母も茲で一寸口をあく。

「薊さんほんとに家のおとよは今では可哀想ですよ、どうかおとつさんの機嫌を直したいと許りいつてます」

「ねいおッ母さん、小手の家では必ず省作に身上を持たせるといつてふさうだから、茲は早く綺麗に向うへくれるのさ、おッ母さんには御異存はないですな」

「はあうちで承知さへすれば……」

「上屋さんもう理屈は考へないで、私に任せて下さい、若夫婦は勿論おッ母さんも御異存はない、すると老人一人で故障をいふことになる、そりやよくない、さあ綺麗に任して下さい」

老人は又一人で酒を注いで飲む。さうして薊に盃をさす。

「どうです上屋さん……省作に氣に入らん所でもありますか。なかには惡口いふ者もあるが、公平な目で見れば此町村千何百戸の内で省作位出來のえい若いものはねい、それや才のあるのも學のあるのもあらうけれど、出來のえい氣に入つた若いものといへば、あの男なんぞは申分がない、深田でも大變惜しがつて、省作が出た跡で大分揉めたさうだ、親父は何んでかでも面倒を見て置けといふのであつたさうな、それもこれもつまりおとよさんの爲めに、省作も深田に居なかつたのだから、おとよさんが親に棄てられてもと覺悟したのは決して浮氣な沙汰ではない、現に齋藤でさへ、私が此の間、逢つたら、いや腹立つ所ではない、僕も一人には死なれ一人には去られ、かうと思ひこんで來てくれる女がほしいと思つてゐた處でしたから、却ておとよさんの精神には眞から敬服してゐます、どうです、それを面目ないの淫奔だつて、現在の親が我が子に惡口をいふたあ、隨分無慈悲な親もあればあつたもんだ、いや上屋惡くはとるな」

薊は詞を盡し終つて老人の顏を見てゐる。煙草を一服すふ。老人は一言も答へぬ。

「どうですまだ任せられませんか、もう理屈は盡きてるから、理屈は拔きにして、それでも親の掟に協はない子だから棄てるといふなら、此の薊に拾はして下さい、さあ上屋さん何とかいうて下さい」

「いや薊さんそれほどいふなら任せよう、確かに任せるから、親の顏に免じて少し筋道を立てて貰ひたい」

「困つたなあ、どんな筋道か知らねいが、眞の親子の間で、そんな六づかしい事をいはないで、どうぞ上屋さん何にもなしに綺麗に任せて下さい、おとよさんにあやまらせろといふなら、どの様にもあやまらせう」

「どうか旦那、もう勘忍してやつて下さい」

「てめいが何を知る、默つてろ」

薊も長い間の押し問答で、糠に釘打つやうな不快に先つきから餘程[illegible]が[illegible]いてきてる。もどかしくて堪らず醉つた酒も醒めて終つてる。

「どうです上屋さん、もうえい加減にうんといつて下さい、一體筋道とはどういふ事です」

「筋道は筋道さ、親の顏がたちさへすればえい、親の理屈を丸潰しにして、子の我儘をさせますことは……」

[illegible]も際立つて高い、[illegible]身を屈して老人を見下してゐたが、

「うむ、自分の顔の事許りいつてる、おれの顔をどうする、此の薊の顔はどうするつもりだ、勝手にしろ、おッ母さんとんだお邪魔をしました」

薊は身を翻して降口へ出る。母は跡からすがりつく。お千代も泣きつく。おとよは隣座敷に啜り泣してゐる。薊は一寸中戻りしたが、

「歸りがけに今一言いつて置く、親類も糞もあるもんか、懇意も絲瓜もねいや、えい加減に膝手をいへ、今日限りだ、もうこんな家なんぞへ來るもんか」

薊は手荒く抑へる人を押し退けて降りかける。

「薊さんそれでは困る、どうかまあ怒らないで下さい、とよが事は兎に角、どうぞ心持を直して歸つて下さい」

お千代は唯しがみついて離さない。薊は漸く再び座に返つた。老人は薊を見上げて、

「馬鹿に怒つたな」

「おらも喧嘩に來たんぢやねいから、歸られるやうにして歸せ—」

[illegible]はは頼るうとかつた。とう〳〵話は極つた。おとよは省作の爲めに二年の間待つてる、二年經つて省作が家を持てなければ、其時はおとよはもう父の心のまゝになる、決して我意をいはない、と父の書いた書附へ。おとよは爪印を押して、再び酒の飲み直しとなつた。俄に家内の樣子が變る、祭と正月が一度に來たやうであつた。

十三

薊が一切を呑込んで話は無造作にまとまる。二人を結婚さして置いて、省作を東京へやつてもよいが、どうせ一緒に居ないのだから、當六の前も遠慮して、家を持つてから東京で祝儀をやるがよからうといふことになる。佐介も一夜省作の家を訪うて、其のいさくさなしの氣質を丸出しにして、省作の兄と二人で二升の酒を盡し、おはまを相手に踊までをどつた。兄は佐介の元氣を愛して大に話口が合ふ。

「あなたのおとつさんが、いくら八釜しくいつても、二人を分けることは出來ないさ、いよいよ聞かなけれや、おとよさんを盜んぢまふまでだ、大きな人間一人位は騙り取つても盜み取つても、罪にならないからなあ」

「や親父も一寸意地の張がはづれちまへば跡はやつぱりいさくさなしさ、何んでこんごろはをかしい程おとよと話がもてるちこつたハヽヽ、ハヽ」

佐介がハヽヽヽヽと笑ふ聲は、耳の底に響くやうに聞える。省作は夜の十二時頃醉つた佐介を成東へ送りとゞけた。

省作は出立前十日許り大抵土屋の家に泊つた。おとよの父も一度省作に逢つてからは、大の省作好きになる。無論おとよも可愛くてならなかつた。あんまり變り樣が烈しいので家のものに笑はれてる位だ。

省作は田植前鎮の盛りといふ故郷の初夏を跡にして成東から汽車に乘る。土屋の方からは、おとよの父とおとよが來る。小手の方からは省作の母が孫二人をつれおはまも風呂敷包を持つて送つてきた。おとよは勿論千葉まで同行して送るつもりであつたが、汽車が動き出すと、おはまは豫て切符を買つて居たと見え遮二無二乘込んで終つた。

汽車が日向驛を過ぎて、八街に着かんとする頃から、おはまは泣き出し、自分で自分に抑へられないさまに、あたり憚らず泣くのである。これには省作もおとよも殆ど手に餘して終つ

た。なぜそんなに泣くかといつて見ても、固より答へられる次第のものではない。尤もおはまは、出立といふ前の夜に、省作の居間に這入つてきて、一心籠めた面持に、

「省さんが東京へ行くなら是非妾も一緒に東京へ連れていつて下さい」

といふのであつた。省作は無造作に、

「うむ、おれが身上持つまで待て、身上持てば屹度連れていつてやる」

おはまは其儘引下つたけれど、どうも其時も泣いたやうであつた。おはまの素振りに就て省作もいくらか、氣づいて居つたのだけれど、どうも仕様のない事であるから、おとよにも話さず、其のまゝにして居たのだが、愈々といふ今日になつて此の悲劇を演じて終つた。

「あんまり人さまの前が惡いから、おはまさんどうぞ少し靜かにして下さい」

強くおとよにいはれて、おはまは兩手の袖を口に當てて強ひて聲を出すまいとする。抑へても抑へ切れぬ悲痛の泣音は、かすかなだけ却て悲しみが深い。省作は其不束を咎むる思ひより、不愍に思ふ心の方が強い。おとよの心には多少の疑念があるだけ、直ちにおはまに同情はしないものの眞に悲しいおはまの泣音に動かされずには居られない。仕方がないから、佐倉へ降りる。

奥深い旅宿の一室を借りて三人は次の發車まで休息することにした。おはまは二人の前にひれふして只管に詫びる。

「妾はこんなことをするつもりではなかつたのであります、思はず識らずこんな不束なまねをして、誠に申譯がありません、おとよさんどうぞ氣を惡くしないで下さい」

といふのである。おはまは十三の春から省作の家に居て、足掛四年間のなじみ、朝夕隔てなく無邪氣に暮して來たのである。おはまは及ばぬ事と思ひつゝも、いつとなし自分でも判らぬまに、省作を思ふ樣になつた。乍併自分の分に對し、決してとりとめた考へがあつた譯ではない。唯急に別れるが悲しさに、我識らず此の不束を演じたのだ。

固から氣の優しい省作は、おはまの心根を察してやれば不愍で不愍で堪らない。さりとておとよにあられもない疑ひをかけられるも苦しいから、

「おとよさん決して疑つてくれな、おはまには神かけて罪はないです、こんなつまらん事をしてくれたものの、何だか私は可哀想でならない、私の居ない跡でも決して粗末にせず、おはまにはこれまでの通り目をかけてやつて下さい」

おとよはもうおはまを抱いて泣いてる。吾が玉の緒の斷えんばかり悲しい時に命の杖とすがつた事のあるおはまである、外の事ならば我身の一部を割いても慰めてやらねばならないおはまだ。

おはまの悲しみの所以を知つたおとよの悲しみは小説書くものの筆にも書いて見やうがない。

三人は再び汽車に乘る。省作は何かおはまに遣りたいと思ひついた。

「おとよさん私は何かおはまにやりたいが、何がよからう」

「さうですねい……さう〳〵時計をお遣んなさい」

「なるほど私は東京へゆけば時計はいらない、これは小形だから女の持つにもえい」

驛夫が千葉々々と呼ぶ。二人は今更にうろたへる。省作は屹となつて、

「二人は茲で降りるんだ」

（明治四十一年四月）

老獸醫

一

糟谷北醫は、去年の暮押詰つてから、此外手町へ越して來た。入口は黒板塀の一部を切明け、形許りといふ門構だ。引違に立てた格子戸二枚は、新しいけれど、如何にも、出來の安物らしく立附が甚だ惡い。向つて右手の門柱に看板が懸けてある。板も手拵であらう、字も勿論自分で書いたものらしい、素人臭い幼稚な字だ。

「家畜診察所」

とある大字の傍に小さく「病畜入院の求めに應じ候」と書いてある。板の新しいだけ、猶更安つぽく、尾羽打枯した、糟谷の心の荒みがあり／＼と讀まれる。上り口の淺い土間にある下駄箱が、門外の往來から見えてる。家は隨分古いけれど、根繼ぎをした許りであるから、兎も角も數年間の狂ひは無ささうだ。

入口の障子を明けると、三坪程な板の間がある。そこが病畜診察所兼藥局らしい。更に入ると突當りが病室でもあらう、犬の籠猫の箱などが三つ四つ、隅に重ね上げてある。

外に六畳の間が一間と、臺所附二疊が一間ある。是で家賃が十圓とは、驚く程家賃も高くなつたものだ。それでも他區に比べると、未だ大變安いと云つて、糟谷は悦んで越して來たのである。

糟谷は二男芳輔三女禮の親子四人の家族であるが、其四人の生活が、今の糟谷の働きでは、なか／＼骨が折れるのであつた。

平顏の眼の小さい脣の厚い、見た通りの好人物、人と話をするに必ず、にこ／＼と笑つてゐる人だ。何程心配な事があつても、心配といふことを知つてゐさうな風のない人である。

細君はそれと正反對に、色の青白い、細面な寂しい顏で、用談の外は餘り口はきかぬ。聲を立てて笑ふ樣な事は滅多にない。さうかと云つて、ツンと澄してると云ふでもない。

それは、前途に多くの希望を持つた、若い時代には、隨分一に澄した人だと云はれた事もあつた。實際氣位高く振舞つて居た事もあつた。併乍今の此の人には、そんな内心に幾分自負して居ると云ふ樣な氣力は影も留めては居ない。氣立つて默つて居た、昔の俤が只其形許りに殘つてるのだ。

天性陰氣な此の人は、人の目に立つ程、愚痴も惱みも云はなかつたものゝ、内心には實に長い間の、苦悶と怨恨とを續けて來たのである。今は苦悶の力も盡き果てて、眼に氣張りの色も消えて終つた。

生れが生れだけに何處となし、人柄なところがあつて、寂しい面ざしが一種あはれに見える。もう／＼吾が世は駄目だと深く諦めて、成るまゝに身をも心をも任せて終つたといふ風である。それでもさすがに、茲へ移つて來た夜は、誰に云ふとはなく、「引越度に家が小さくなる」と獨言を繰返して居つた。

糟谷は明ければ五十七歳になる。細君はそれより十一の年下とか云つた。糟谷は此處へ越して來て、生活の道が成立したかと云ふに、未ださうはいかぬらしい。

糟谷が上京以來、絶えず同情を寄せて、懇ろに交つて來た、當區の畜産家西田と云ふ人が、糟谷の現状を見るに忍びないで、遂に自分の手近に越さしたのであるが、糟谷が此に住んで居つ

た、新小川町の兎に角中流の住宅を出でて、家賃十圓といふ今の家に移つて來たに就いては、一場の悲劇があつた結果である。

二

糟谷は明治十五年頃から、足掛十二年の間、下總種畜場の技師であつた。其頃種畜場は農商務省の所管であつた。糟谷は三十になつた許り若手の高等官として、周圍から多大の希望を寄せられてゐた。新しい學問をした獸醫は未だ少ない時代であるから、糟谷は獸醫としても當時の秀才であつた、快濶で情愛があつて、少しも官吏風をせぬ處から、場中の氣受も近郷の評判も頗る宜しかつた。近郷の農民は最屓の欲目から、糟谷は遠からず乾度場長になると信じて居つた。

糟谷は西洋葉卷を口から離さないのと、下手の横好に碁を打つ位が道樂であるから、老人側にも若い人の側にも褒められる。時間の許す限り、糟谷は近郷の人の依賴に應じて家畜の疾病を見てやつて居た。職務に忠實な考から許りではないのだ、無邪氣な農民から、糟谷さん糟谷さんと持て囃されるのが、單調子の人好しの糟谷には嬉しかつたからである。

梅の花櫻の花の長閑な村々を、栗毛に額白の馬を乗廻した糟谷は、當時若い男女の注視の焦點であつた。糟谷は種畜場に居つて、公務をとるよりは、村落へ出て農民を相手に働くのが、何時も愉快に思はれてきた。さうしてかういふ事が、自己の天職から見ても却つて尊いのぢやないかなど考へながら、益々乗氣に爲つて農民に親しむ事を勉めた。

糟谷は出る度に行く先々で、村の青年等を集め、農耕改良は必ず畜産の發達に伴ふべき理由などを説き、文明の農業は耕牧兼行でなければならぬといふ事などを頻りに説き聞かせ、養雞をやれ、養豚をやれ、牛は必ず洋牛を飼へと勸めた。人望のあつた糟谷の話であるから、近郷の農民は競うて家畜を飼うた。

糟谷は此間に、三里塚の一富農の長女と結婚した。今の細君がそれである。細君の里方では、糟谷を偉い人と思ひ込み、猶出世する人と信じて、此結婚を名譽と感じて娘を嫁し、糟谷の方でも只良家の女といふ事が有難くて、無造作に此結婚は成立した。それで男も女も戀愛に關する趣味には何等の自覺もなかつた、精神上から見ると、誠に無意味な淺薄な結婚であつたけれど、世間の眼から羨望の中心となり、一時近郷の話題の花であつた。そして糟谷夫婦もたわいもない夢に醉うて居つた。

三

過渡期の時代は餘り長くはなかつた。糟谷が眼前咫尺の光景に現を拔かして居る間に、背後の時代は容赦なく推移して居つた。札幌農學校や駒場農學校あたりから、續々として農學士、獸醫學士の新秀才が出てくる。勝島獸醫學博士が駒場農學校の將に卒業せんとする數十名の生徒を率ゐて種畜場參觀に來られた時は、教師は勿論生徒に至るまで糟谷の如き殆ど眼中になかつた。

糟谷が自分の周圍の寂寞に心附いた時は最早晩かつた。糟谷は遙かに時代の推移から取殘されて居つた。場長の位置を望むなど實に思ひもよらぬ事と思はれてきた。今の現在の位置すらも、そろ〳〵搖れ出した樣な氣がする。物に屈託するなど云ふ事はとんと知らなかつた糟谷も、俄かに[illegible]の案じ難く屢々寝られない夜もあつた。糟谷は或夜又例の如く、心細い思案に責められて寝られない。

成程自分は迂濶であつた、國家の爲めといふことを考へて働いた、畜産界の爲めと云ふ事

も考へて働いた、人の爲めと云ふことも考へて働いた、けれども只自分の爲めと云ふことは、殆ど胸中になく働いて居つた、何と云ふ迂濶であつたらう、もう間に合はない、何もかも間に合はない。

糟谷はかう考へながら、自分には兒供が二人あるといふことを強く感じて、心持よく睡つて居る妻子を顧みた。長男義一は肥太つて赭々しい赤い顔を、蒲團から落してすや／＼眠つて居る。妻は三つになる次男を、さも可愛らしさうに胸に抱きよせ兒供のもぢや／＼した頭の毛に、白くふつくらした頬をひつけて何の苦のない面持に眠つて居る。糟谷は愈々寂しくて溜らなくなつた。

自分に何等の悪意は無かつたものの、妻が自分に嫁ぐに就いては自分に多大な望を囑して來たことは承知してゐたのだ。とう／＼此の地に出た時にも、自分は調子に乘つて氣休めを云うた事もあつたのだ。結婚當時からの事を種々回想して見ると、妻に對しての氣の毒な心持、舅姑に對して面目ない心持、一々自分を苦しめるのである。彼等が失望落膽すべき必然の時期は最早眼の前に迫つて居ると思ふと、耳が煮え返つて千切れる心持がする。自分は何等犯した罪はないと考へても、それが爲めに苦痛の事實が輕くなるとは思へないのだ。

糟谷は又自分に結婚するに就いても其當時餘りに思慮の無かつた事を今更の如く悔いた。家とか位置とか云ふことを、互に目安にせず、云はゞ人と人との結婚であつたならば、自分の位置に失望的な變遷があつたにしろ、共に相憐んで、夫婦といふものの情合に依つて、失望の苦も忍む處があるに違ひないだらうが、それが今の自分には殆ど望が無いばかりでなく、却て夫婦間に起るべき厭な、云ふに云はれない苦痛の爲めに、時代に捨てらるゝ寂しみが一層苦しいのである。それもこれも考へれば皆自分の迂濶から求めた事で免れやうのない所謂自ら作れる禍だ……

戀愛などと云ふこと只々馬鹿氣てると許り思つて居たが、戀愛の乏しい結婚は更に馬鹿氣て居つた。馬鹿氣て居ると云ふよりも、今は其淺薄な結婚の爲めに、溜らない厭な苦しみをせねばならぬ事になつた。

かう思つて糟谷は又妻や子の寢姿を見遣つた。何か重い物でしつかり抑へてゐられるやうに妻や兒供は寢入つて居る。

愈々自分も非職となり、出世の途が絶えたと極つたら、妻はどうするか、彼の兩親はどういふ態度をするか、かういふ時に夫婦の關係はどうなるものかしら。いつその事別れて終へば却て氣は安いが、矢張り男の子二人の鎹が不本意に夫婦を繋いで置くのだらう。

「仕樣がないから──どうすることも出來ないから」「よんどころないから諦めて居る」と云ふ樣な心持で、如何にもつまらない冷かな家庭を作つてゐねばならないのか、嗚呼考へるのも厭だ……

うつかりして過渡期の時代に居つたといふのが、つまり思慮が足らなかつたのだ……茲を止めたからとて、妻子を養つてゆく位に困りもせまいが、仕方がない、どうなるものか益のない考はよさう。

考に勞れた糟谷は、我知らず嗚呼々々と嘆聲を洩らした。下女が起きるなと思つてから、糟谷は僅に睡つた。

四

翌朝は漸く出勤時間に間に合ふ許りに起きた。餘程顏色が惡かつたか「どうかなさいましたか」と細君が咎める。糟谷はうんにやと云つたまゝ井戸端へ出た。食事も急いで出勤の支

度にかゝると、二人の兒供は右から左から父に纏はる。

「お父さんお父さん」

「とんちやんとんちやん」

糟谷は今日に限つて、それが五月蠅くて溜らないけれど、子煩惱な自分が、毎朝必ず出勤の前に、かうして兒供を寵愛して來たのであるから、無心な兒供は例の如く父に可愛がられようとするのを、どうも叱り飛ばす事も出來ない。

「今日は遲いから急ぐだ」と少しむづかしい顏をしても兒供は聞入れさうもしない。糟谷は益々むしやくしやして、手を出す氣にもならない。

「ねいあなた一寸抱いてやつて下さいな、ほんの少し、ねいあなた一寸」

細君から手移しに押付けられて、糟谷はせうことなしに笑つて、せうことなしに芳輔を抱いた。それで直ぐ又細君に返した。糟谷は此間にも細君の目をそらして、是等無心の母子を竊み見たのである。さうして寂しいはかない苦笑が、胸に込み上げて來るのである。心臟の動氣が息の詰る程烈しく、自分で自分の身が支へて居られない樣になつた。糟谷は「もう遲いつ」と落附かない素振りを詞にまぎらかして外へ出た。外へ出るが否や糟谷は涙をほろ〳〵と落した。今少しの處で妻に涙を見られるところであつたと、糟谷は心で思つた。

糟谷は事務所の入口で小使を見た。小使は何時も丁寧に挨拶するのだが、今朝は直ぐ側を通りながら挨拶もせずに行つて終つた。糟谷は厭な氣持がした。事務所へ這ひつて見ると、場長初め同僚までに一種の目で自分は見られてる樣な氣がする。いつもは、

「糟谷さんかうして下さい」とか、「これはこれして置きませうかね」とか、打解けて無造作に云ふところも、妙に改まつて命令的に事務の話をするのである。糟谷はもう落ついて事務がとれない。或は非職の辭令が場長の手許まで來てでも居やせぬかとも考へる。まさかにそんなに早く止められるやうな事もあるまいと思ひ直して見る。糟谷は平氣で仕事をしてるやうな風を裝ふて、机に向つて居る時には解り切つてる事をわざ〳〵立つて行つて同僚に聞いたりして居る。場長が同僚と話をして居るのに、聲が低くて能く聞きとれないと、胸騷ぎがする。其間にも昨夜考へた事を切れ〳〵に思ひ出さずには居られない。人々が各々默して仕事をしてるのを見ると、自分は除けものにされてるのぢやないかと云ふ考を禁ずることが出來ない。

場長が何か聲高に近くの人に話すのを聞くと、來月に入ると早々に、駒場農學校の卒業生の一人技手として當場へ來るとの話であつた。糟谷は覺えずひやりとする。それから千葉縣の某も埼玉縣の某も非職になつたと云ふ話をして居る。それは皆糟谷と同出身の先輩で糟谷の知人であつた。糟谷は今の場長の話は遠廻しに自分に諷するのぢやないかと思つた。

糟谷はつく〴〵と、自分が過渡期の中間に入用な材となつて、假小屋的仕務に當つた事を悔んだ。涙がいつの間にか瞼を潤して居た。

糟谷がぼんやりしてゐると、場長初め多くの事務員は、皆書類を片づけて退場の用意をする。其譯の解らなかつたから、糟谷は狼狽へてきよろ〳〵して居る。漸くのこと人々の口氣で今日の土曜日といふに氣づいた。糟谷は今が今まで今日の土曜日といふことを忘れて居つたのだ。

糟谷は土曜と知つて目が覺めたやうに起ちあがつた。成程さうであつたな、すつかり忘れてゐた、兎に角都合がえい、それでは今日早速上

京して、あの人に相談して見よう、時重先生が心配してくれ、屹度どうにかなる、東京に居ることになれば位置が低くても勉強が出來る、成るべく非職などいふ辭令を受取らずに、轉任したいものだ、飯くつて直ぐと出掛けよう。

糟谷はかう考が定まると、よろめく足を踏みこたへた樣に、體のすわりが附いた。踏出す足にも力が這ひつて、大に元氣づいて家に歸つて來た。

「とんちやん、とんちやん」と云ふ聲も、いつもの如くに可愛かつた。糟谷が芳輔を抱いて奥へ上ると茶棊仲間の老人が坐りこんで居る。

「今日は先生、是非共先日の復讐をする積でやつて來ました。から少しぽか〳〵暖くなつて來ますと、どうも家に許り居られませんから」

老人は糟谷の浮かない顏などには一向氣もつかず、獨手に自分の云ひたい事を云つて居る。糟谷は役所着の儘で東京へ行くつもりであるから、洋服を脱がうともせず、兒供を抱いたまゝ老人と對坐した。

「これは折角の御出陣ですが、實は其の一寸東京へ行つてくるつもりで……甚だ殘念だが……」

「いやそれや殘念ですな、日歸りですか」

「今夜は歸れません」

「それぢや今日中に東京へ行けばえい、二三席勝負してから出掛けても遲くはない、うまく云つて逃げようたつてさうはいかない」

農家の樂隱居に、糟谷が今の腹の解る筈がない。糟谷は苦しく思ふけれど、平生心置きなく交つた老人であるから、さう嚴しくも斷れない、且つ又餘り俄に變つた態度をして、今の自分の不安心を氣取られやせまいかといふ樣な、淺薄な見えもあつた。とう〳〵二三盤打つことにした。人間も糟谷のやうな境遇に落つるとどつちへ向いても苦痛に許り出逢ふのである。

糟谷は其夕刻上京して、先輩時重博士を訪ねて希望を依賴した。

「うむ、今少し勉強するにはそれや勿論東京へ來る方が得策だ、位置を望まないと云ふならば、どうとかなるだらう、併し君達のやうに、間に合せの學問をした人は皆困つてるらしい、今少し勉強するのは最も必要だね」

糟谷は柄にないお上手を言つたり、自分ながら冷汗の出る樣な、輕薄な物言ひをしたりして、何分賴むを數十遍繰返して辭した。

「これでも高等官かい」糟谷は自分で自分を嘲つて、時重博士の門を顧みた。何に時重さん位と思つた時もあつたに、今は時重と自分との間に、餘程な距離であることを思はない譯にいかなかつた。妻子を振り捨てて、斷然學問の仕直しをやつて見ようかしら、そんならば慥かに人を驚かすに足るな、やつて見ようか、面白いな斷然やつて見ようか、二人の兒供を妻の奴が連れて三里塚へ行つてくれると都合がえいが、承知しないかな、獨身になつて今一度學問がやつて見たいなあ、兒供は一人だけだなあ、一人の方は妻が連れていくに極つてる、一番斷然としてやつて見ようかな。

糟谷は苦しまぎれに、そんな考を起して見たものゝ、それも長くは續かず、直ぐ又ぐつたりとなつて、時重博士が云つてくれた「どうとかなるだらう」を便りに僅に安心する外はなかつた。

よく〳〵糟谷は苦悶に疲れた、遠い先の事は兎に角、何か少しの慰藉を得て、僅かの間なりとも、此の疲れの苦しみを忘れる娛樂を取らねば、迚も堪へられなくなつた。酒好きならばこんな時には直ぐ酒に走る處だが、糟谷は酒は少しもいけない。糟谷はとう〳〵神樂坂に親しい友人を訪ねた、とうして勉めて、自分が苦勞してる問題に離れた話に興を求め、殊更にたわ

いもない事を騒いで、一局笊碁を樂しんだ。翌日も笊碁を樂しんだ。

糟谷は其後日曜度に必ず上京して居つた。種畜場近郷の農家から、牛が少し惡いから來てくれの、碁會をやるから來てくれのと頻りに云うて來たけれど、一切村落へ出なかつた。土曜日日曜日を窺つて、遊びに來るものがあつても大抵は避けて逢はないやうにした。胸中に深刻な痛みを覺えてから、氣樂な悠長な農民を相手にして遊ぶに堪へられなくなつたのである。

糟谷は遂に東京に位置を得られない中に、四月上旬非職の辭令を受取つた。

五

農商務省にも出た、警視廳へも出た。何れも餘りに位置が低いので二年とは居られず止めて終つた。其内府下の牛乳搾取業者の一部が主となつて、畜産衛生會といふものが出來た。丁度糟谷が遊んで居つたを幸に、其主任獸醫となつた。糟谷はこれ以來榮達の望を絶ち碌々たる生活に安じて終つた。愛想よくいつもにこにこして、葉卷の煙草を横にくはへ、笊碁を打つて不平も愚癡もなかつた。

只一度細君に對しては、最早自分は大きい望のない事をさらけだし、今の自分に不足があるならばどうなりともお前の氣儘にしてくれと云うた。其後は細君から不滿を訴へられても相手にならず、冷かな氣まづい素振をされても、平氣に見流して居つた。さうして新小川町に十餘年居つた。

糟谷は愈々平凡な一獸醫と估券が定まつて見ると、どうしても胸が治りかねたは細君であつた。どうしてもこんな筈ではなかつた、三里塚界隈での富豪の長女か、何だつて只の一獸醫の妻となつたか、縱令種畜場は止めても東京へ出たらば高等官の端くれ位にはなつて居れる事と思つて居つた、只の町獸醫の妻では親類に合せる顏もないと思ふから、どう考へても明らめられない。それで明けても暮れても鬱々樂しまない。何かと云つては月の内に一度も二度も里方へ相談に行く。何程相談を繰返しても、三人の兒持となつた女は最早動きは取れない。いつもいつも父母兄弟から相も變らぬ氣休めを云はれて歸つてくる。運が惡いのだ間が惡いのだ、若くて死ぬ人もいくらもある世の中だ、明らめねばなるまい、明らめるより外に道はない、かう百度も千度も繰返して、我れと自分を諫めて見ても、なか／＼其日が面白いといふ氣になれないのだ。

糟谷は細君がどういふ事を仕ようと厭な顏もしないから、さすがに細君も時には自分の我儘を氣づいて、「妾が何分性分が惡いものですから、妾も自分の性分惡いことは心得てゐますけれども、どうも其の今日を面白く暮すと云ふ氣になれませんで、始終あなたに失禮ばかりして居りますけれども」などと詫言しに詫言を云ふことさへあるのである。

種畜場以來此人を知つて居る人の話を聞くと、糟谷の奧さんは、種畜場に居た時分とは殆ど別人の様に荒ざしくなつて終つた、以前はあんな寂しい人ではなかつたと云うて居る。

これ許りは親の力にも及ばないとは云ふものの、娘が苦悶の爲めに荒ざしまで變つたのを見ては、實の親として心配せぬ譯にはゆかない。結局兩親は自分達の隱居金を全部娘に與へて、

「二人の男の子を努一ぱい教育しなさい、さうして吾が世を明らめて二人の子の出世を樂しめ」と諭したのである。糟谷の妻もやつと前途に一道の光を認めて、僅に胸の治りがついた。長らくの曇りも漸く薄らいで、糟谷の家庭に僅

かな光と醒まりとが出來た。其青年生命の方も相當に收入がある。只近所から「糟谷の奥さんは陰氣な人ねい」と云はれる位の事で六七年間は薄温い平穏な月日を經過した。

長男義一は十六歳になつて、愈々學問は駄目だと極りがついた。北海道に走つて農夫をして居る、三田塚の兩親も相次いで世を去つた。跡取りの弟は糟谷を馬鹿にして、東京へ來ても用でも無ければ寄らぬといふことも解つた。細君の顔はより甚しく青くなつた。

六

十一月も末であつた。木枯が靜かになつたと思ふと、風色した雲が低く空を閉ぢて雪でも降るのかしらと思はれる不快な午後であつた。糟谷は机に向つたなり目を空にして茫然考へて居る。細君は火鉢に突伏し、兩手を袖に入れたまゝそれを胸に合せ、目を固く閉ぢて、殆ど人形の様に坐つて居る。此人をモデルにして不滿足といふ題の書なり彫刻なり作つたならばと思はれる。二人は暫くの間口も利かなかつた。

三女の綾子が歸つてきて「お父さん只今、お母さん只今」とにこ／＼してお辭儀をしても、父も母もはいとも云にない。綾子は兩親の顔をちらと見たまゝ次の間へ出て終つた。續いて芳輔が歸つて來た。兩親の所へは來ないで、臺所へ這入つて、何かくど／＼下女にからかつて居る。

「芳輔が歸つたな、芳輔……芳輔」

「今日はほんとに、生やさしい事ではあなたいけませんよ」

「こら芳輔……」

父の聲はいつになく荒かつた、芳輔は上目使に兩親の顔を竊み見しながら、體をもぢりもぢり座敷の隅へ坐つた。坐つたかとするともう外見をしてる。母なる人は無言に起つて、芳輔の手を捕へて父の近くへ引寄せた。

「芳輔……お前は今日家へ來しなに小川さんに逢つたろ」

「知りません」

「さうか、小川さんはお前の學校の保證人だぞ、學校からお前の事に就いて、二度も三度も話があつたと云つて、今日はお前の事に就いて色々の話をして行かれた。今歸つたばかりだ。貴樣と行き逢ふ筈だが、いやそりやどうでもよいが、貴樣はいくつになる」

芳輔はかう云はれて少し父を侮るやうな冷笑を目に浮べる。

「自分の子の年を人に聞かれたつて……」

「こら芳輔そりや何の事です、お父さんに對して失禮な」

「だつてお父さんはつまらないことを聞くから……」

「だまれ此の野郎……」

兩親はもう手もふるへ聲もふるへて直ぐには次の詞が出ない。母は瞬きもせず我子の顔を視つめて居る。

「芳輔、貴樣は何もかも覺えがあるだらう、今日小川さんの話を聞くと、小川さんはお前の爲めに三度も學校へ呼ばれたさうだぞ、昨日は校長まで出てきて、今一度芳輔の兩親にも話し、本人にも諭してくれ、今度不都合があれば直ぐ退校を命ずるからと云ふ話であつたさうな、どんな不都合を働いた、義一はあの通り物にならない、跡は貴樣一人を便りに思つてれば、此始末だ、警察からまで、貴樣の爲めには注意を受けてる、夜遊びと云へば何程云つても止めない、體は五尺も六尺も延される、學校の成績が悪いのも當り前の事だ、十五になつたら十六になつたらと思つて見てれば、年をとる程悪くなる、お母さんを見ろ、貴樣の事を心配してあの通り

痩せてるわ、もうその位の歳になつたらば、兩親の苦心も少しは解りさうなものだ」

「お母さんはもとから痩せてら……」

母はこのぞんざいな芳輔の詞を聞くや否やひいと聲を立てて泣き伏した。父も顏靑ざめて言句が出ない。

「お父さんわたし少し用がありますから錦町まで行つて來ます」

さう云つて芳輔は立ちかける。何事にも思ひ切つた事の出來ない糟谷も、餘りに無神經な芳輔の物言ひに嚇とのぼせて終つた。

「此の野郎巫山戲た野郎だ……」

猛然立ち上つた糟谷は我子を足もとへ引倒し、所嫌はず拳骨を打下した。芳輔は殆ど他人と喧嘩する如き語氣と態度で反抗した。手足をわな／＼さして見て居つた彼の母は、力のこもつた決心のある聲を潛めて、あなた殺して終ひなさい、殺して終ひなさい、罪はわたしがしよひます殺して終つて下さい、もう生き甲斐のない私、あなたが殺されなけれや私が殺す……から叫んで母は奥座敷へ飛び去つた……禮子と下女は泣聲上げて外へ出た。糟谷も殺すの一言を耳にして思はず手を緩める。芳輔は殺せ殺せと叫んで轉倒しながらも、眞に殺さんと覺悟した母の血相を見ては、忽ち色を變へて逃げ出して終つた。

禮子は外から飛び込みさまに母に泣き縋つた。一所懸命に泣縋つて離れない。糟谷も座につきながら勵聲に妻を制した。隣家の夫婦も飛び込んできて漸く座は治まる。

糟谷は未だ手をぶる／＼さしてる。禮子は只がた／＼顫へて母を見守つてゐる。母は殆ど正氣を失つて物凄じく只ハアハア、ハアハアと息をはずませてる。判然と口を利く者もない。

漸くの事糟谷は、

「増山さん(隣の主人)いやはや誠に面目もない次第で、何とも申上げやうもありません」

「いやお察し申上げます、如何にもそりや……誠にお氣の毒な、併し糟谷さん餘り無分別なことをやつて終つては取返しがつきませんよ、奥さんは餘程興奮していらつしやるから、少時お寢かし申したがよろしいでせう」

「どうも面目ありません」

殆ど人の見界もない様に見えた細君も、禮子や下女や増山の家内から、いろ／＼慰められて云ふがまゝに床についた。やがて増山夫婦も歸つた。跡へ深川の牛乳屋某が來る、子宮脱が出來たからと云ふので車で迎へに來たのである。家の有様には氣がつかず、さあ／＼と急き立てるのである。糟谷はとつおいつ、挨拶の仕様にも窮して居たり起つたりして居た。

子宮脱は彼是六時間以上になると云ふ。一體高い牛だから、氣が氣でないといふ。糟谷は行かれないとも云へず、危險な意味ある妻を下女と兒供とに任せて出るのは如何にも不安だし、糟谷は途方に暮れて終つた。折よくもそこへ西田がひよつこり這入つて來た。深川の乳屋も知つてる人と見えやあと挨拶して遠慮もなく上つて來た。

「一家でしたな、えい鹽梅であつた、實は頃合の家が見つかつたもんですからな……」

西田の聲がして家の中の空氣は見る間に變つて終つた。陰鬱な空氣が見る間に薄らぐ様な氣がした。糟谷は手短に今日の出來事から目の前の窮狀を西田に語つた。

「うん、君も可哀想な人だな、成程奥さんも無理はない、嗚呼奥さんも可哀想だ」

涙もろい西田は、もう目を潤した。禮子も出て來て默つてお辭儀をする。西田は起ちながら、

「子宮脱なら成丈け早い方がえいでせう、糟谷君職務は大事だ、僕が留守をして上げるから、

直ぐと深川へ出掛け給へ」

西田はから云ひ捨てて細君の寢間へ這入つた。細君も同情深い西田の聲を聞いてから、夢から覺めたやうに正氣づいた。さうして這入つて來た西田に起きて禮儀をした。

「今糟谷君から掻いつまんで聞きましたが、さう一筋に思ひ詰めんがようございますよ」

細君は「有難うございます」と細い聲で云つて潸々と泣くのである。

「それぢや西田さん一寸行つて來るから賴む」

と糟谷は唐紙の外から聲をかけて出て終つた。西田は細君に對し、外手町に家のあつた事、本所へ越してからの業務の方法、其外玆の家賃の滯りまで辨濟して上げると云ふ事まで話して、細君を慰めた。兒供を立派にして自分が仕合せを仕ようと思うても、それは當にならないから、何でも人間の仕合せと云ふことは、自分に出來る事の上に求めねばならぬ、兎角無理な希望を持つてると、自分のする事にも無理が出來るから、無理と苦しみを求める樣になるなどと話されて、細君も只管西田の好意に感じて胸が開いた。

燈つく頃に糟谷は歸つてきた。西田は歸つて終ふに忍びないで、留つて話することにする。

夜になつて禮子や下女の笑聲も漏れた。細君も起きて酒肴の用意に手傳つた。

糟谷は飮めない口で西田の相手をしながら、今行つて來た某氏の家の慘狀を語つた。

一人息子に嫁をとつて、孫が一人出來たら嫁は死んだ、間もなく息子も病氣になつた、丁度今日某博士といふのがきた、病氣は胃癌だと云はれて、家中泣きの淚で居た、牛の方は造作ないけれど、息子は助かる見込がない、お袋が前掛けで淚を拭きながら茶を出したが、何處にもよい事許りはないと、しみ〴〵糟谷は嘆息した。

西田は挨拶の仕樣がなく、

「僕のやうな友人があるのを仕合せと思つてるさ」と投げ出すやうに云ふ。

「ほんとにさうでございます」

と細君は如何にも詞に力を入れて云つた。芳輔は十時頃に臺所から上つてこつそり自分の部屋へ這入つた。パチリ〳〵と碁の音は十二時過ぎまで聞えた。

(明治四十二年三月)

花と煙

富士見野のちぐさの秋を雲とぢて雨寒かりしゆふべなりけり

諏訪の神のみすゑの子等と秋深き富士見野の花にいにしへ語るも

富士見野を汽車の煙の朝なづみ我が裳裾邊の花は露けく

富士見野はまだ露居れど八つが岳の雲開き來て花見え渡る

湯田中の河原に立ちて飯綱峯や妙高の山くろひめの山

黑姫は越のこひしき鯖石のわが思ふ人の鄕の上の山

北信濃にとはに燃え立つ淺間山秋の蒼そらにけぶりなづめり

澄む空に霜枯つづく輕井澤うす暮るるおくに家まほろ見ゆ

歸りせく寂しき胸に霜枯の淺間のふもと日も暮るるかも

霜枯野のうすくらがりに大けき悲しき山が煙立て居り

ここにして信濃に別る淺間山汝が悲しきをとはに泣くべし

(大正元年)

水籠

表口の柱へヅウンヅシリと力強く物の障つた音がする。

此の出水をよい事にして近所の若者どもが、毎日いたづら半分に往來で筏を漕ぐ。人の迷惑を顧みない無遠慮な奴どもが、又筏を居の柱へ突き當てたのぢやなと、から思ひながら窓の格子内に立つた。固より相手になる手合ではないが、少し叱りつけてやらうと考へたのである。

格子から予がのぞくとたんに、板塀に取附けてある郵便受箱にカサリといふ音がした。予は早くも郵便を配達して來たのぢやなと氣づく。

此二十六日以來三日間といふもの、總ての交通一切杜絶で、郵便は勿論新聞さへ見られなかつた際ぢやから、郵便配達と氣づいて予は頗る嬉しい。此の水の深いのに感心なことと思ひつつ、予は猶豫なく其郵便をとりに降りる。郵便箱へ手を入れながら何の氣なしに外を見る。前に表の柱へ響きをさしたのは、郵便配達の舟が觸れた音でありしことが解つた。

郵便の小舟は今我が家を去つて、予に其後背を見せつゝ東に向つて漕いで居る。屈折した直線の赤筋をかいた小旗を舷に插んで、船頭らしい男と配達夫と二人、漁船やら田舟やら一寸判らぬ古ぶねを漕いで居る。水はどろりとして薄黑く、浮苔のヤリが流れる方向もなく點々と青みが散らばつて丁度溜り水のやうな濁水の上を、元氣なくゆら〳〵と漕いでゆくのである。

いやに蒸苦しい南風が猶天候の不穏を示し、生赤い夕燒雲の色も何となく物凄い。予は多くの郵便物を手にし乍ら暫く此の氣味わるい景色に心を奪はれた。

高架鐵道の堤とそちこちの人家ばかりとが水の中に取殘され、其隙間といふ隙間には蟻の穴ほどな餘地もなくどつしりと濁水が押詰まつてゐる。道路とは云へ心當てにさう思ふばかり、立てば臍を沒する水の深さに、日も暮れかかつては、人の子一人通るものもない。活動ののろい郵便小舟が猶ゆら〳〵漕ぎつゝ突き當りのところを右へまがつた。薄黑い雲に支へられて光に力のない太陽が、此の水につかつて動きのとれない一群の人家を空しく遠目に視て居られる。一切の草木は病み萎れて衰滅の色を包まず、徒に太陽を仰いでゐても、今は太陽の光も之を救ふの力がない。予は身にしみて寂しみを感じた。

靜かといふは活動力の休息である。靜かな景色には動くものがなくても感じは活き〳〵として居る。今日の景色には靜かといふ趣は少しもない。活動力の凋衰から起る寂しい心細いといふ樣な趣を繪に書いて見たらとんなであらうなどと考へる。

茫々しい濁水の爲めに、人事の總てを閉塞され、何一つすることも出來ず空しく日を送つて居るは、手足も動かぬ病人が只息の通ふ許りといふ狀態である。

家の中でも深さは股にとゞくのである。之を得避くる事も出來ないで、巢を破られた蜂が、其巢跡に空しく屯して居る如くに、このあばら屋に水籠して居る予を他日に見たらば、どんなに寂しく見えるだらう。

乍併われと我を客觀して見れば又一種得難

い興味もある。人間の體で云へば病氣ぢや、火難が家の死であらば水難は家の病氣ぢやなどと空想に耽りながら予は假床へ歸つた。假床といふは臺所の隣間で、南へ面した一間の片端へ桶やら、箱やら相當に高さのあるものを並べ立てて、古柱や梯子の類をよろしく渡した上に戸板を載せ、それに疊を敷いたものである。疊も漸く四疊しか置けない。それに夫婦のものと兒女三人下女一人都合六人が住んで居る。手も足も動かせない生活ぢや。立てば頭が天井へつかへる。夜になれば蚊が居る。此四疊のお座敷へ蚊帳二つりといふ次第ではないか。動けないだけに仕事もない。着た儘でねる、寢た儘で起きて居る。食物は兄の家から總てを屆けてくれる。子供を水へ落さない樣に注意するのが最も重要な事件位のものぢや。赤ん坊は心配はないが木綿子の覺束なく立つて歩くのが秒時も目を離せない。今日は木綿子が能く寢たから天井板を綺麗に掃除したとは細君の詞である。今日は腰卷を五遍換へましたとは下女の愚痴である。それも其筈ぢや。湯を沸して茶を一つ飲まうといふには、火を擁へる材料拾集の爲に擔當者が腰卷一つはどうしても濡らさねばならない。それが三度はきまりで外に一度や二度は水へ降りねばならぬ。で天氣がよければよいが天氣が惡ければ、迚も茶を飲むなどいふ奢りは許されない。今日位の天氣ならばラクだとは異口同音の悦びぢや。追ッつけ夕飯を屆けてくる時刻と鐵瓶の湯が快活に沸き立つて居る。予は同人諸君からの見舞狀を次ぎ〳〵と見る。彼是して家の中は薄暗くなつた。

「おとつさん水が少し引いたよ」

「ウンさうか」

「あの垣根の竹が今朝は未だ出なかつたの‥‥それが今はあんなに出てしまつて五分許り下が透いたから、なんでも一寸五分位は引いたよ」

「なる程さうだ、よい鹽梅だ。天氣にはなるし少しづつでも水も引けば寢ても寢心がいゝ」

「さつきおとつさん面白かつたよ、ネイおつかさんほんとに可笑しかつたわ、大きな鰻、惜しい事しちやつたの、ネイおつかさん‥‥」

「お妙さん鰻がどうした」

「鰻ネ大きい鰻がねおとつさん、あの垣根の杭のわきへ口を出してパク〳〵水を飲んでゐるのさ、それからどうして捕らうかつて、皆が相談してもしやうがないの、それからおふじが米ざるを持ちだして出掛けたら、おふじが降りると直ぐ鰻はひつこんでしまつたの、ネイおふじ鰻ならどうかして捕れたんだよ」

「さうかそりや惜しいことをしたなア、蒲燒にしたら定めて五人でたべ切れない大きいものであつたらう、おとつさんに早くさう云へばよかつたハヽヽ」

「おとつさん譃でないよ、ネイおふじほんとネイおつかさんも見てゐたんだよ」

おふじは腰卷の濡し損をしてしまつたけれど、其次手に火を起したから、鐵瓶の湯が早く煮立つた。それでは鰻が火を起した譯ぢやないかと、予が笑へば、木綿子まで人眞似に高笑ひをする。住宅の病氣も今日は稍良好といふ日ぢや。いやに熱苦しい南風が一日吹通して、餘り心持のよい日ではなかつたけれど、數日來雨は降る水は増すといふ、堪らぬ不快な籠居をやつてきたのだから、今日は只もう濡れた着物を脱いだやうな氣分であつた。それに日の入りと共にいやな南風も西へ廻つて空の色がよくなつた。明日も快晴であらうと思はれる空の氣色にいよ〳〵落ちついて熱のさめた跡のやうな心持で體が輕くなつたやうな氣がする。金魚が軒下へ行列して來る。鮒が時々プクプク浮泡を吹く。鰻まで出て芝居をやつて見せたといふ有樣だつたからまづ〳〵これまでにはな

い愉快な日であつた。極端に自由を奪はれた境涯に居て見ると、らちもない事にも深き興味を感ずるものである。
　人間の家も飯を炊かぬものであると、朝にも晩にも頗る氣樂にゆつくりしたものだ。
「もうランプをつけませうか」
「まだよからう」
「それでも餘程暗くなつてきましたから」
「どうせ何が出來るでなしそんなに早く明かしをつける必要もないぢやないか」
　こんなちもない押問答をして時間を送つて居る。
　表のガラス戸にがちやんと突當つたものがある。何かと思ふ間もなくシヅ／＼とガラス戸を押あけて人が這入る、パシャン／＼水音をさして半四郎君が臺所へ顔を出した。
「コリャ思つたより深い、隨分非度いなア」
「半四郎さんどうも御苦勞さま、とんだ御厄介で御座います、そこらあぶなう御座いますからお氣をつけなすつて……」
「いやア今日は君が來てくれたか、どうです隨分深いでせう、上げ椽は浮いてしまつたし、ゆか板も所々抜けてるから、君うつかり歩くと落ちるよ、なか／＼あぶないぜ」
「コリャ劍呑だ、なにもう大丈夫、表の硝子一枚破りましたよ、車へ載せて來ましたからつい梶棒を硝子戸へ突き當ててしまつたんです」
「なアにようございますよ、硝子の一枚ばかりあなた……」
「隨分御困難ですなア」
「いや有がたう、まアこんな始末さ、それでもお蔭さまで飢と寒さとの憂がないだけ、まづ結構な方です、君人間もこれだけ装飾をはがれると餘程奇怪なものですぞ、此上に寒さに迫られ飢に迫はれたら全く動物以下ぢやな」
「さうですなア向島が一番ひどいさうです、綾瀬川の土堤がきれたといふんですから堪りませんや、今夜は又少し増して來ませう、明朝の引潮にやいよ／＼水もほんとに引き始めるでせう」
　半四郎は飯櫃と重箱と外に水道の水を大きな牛乳罐二本に入れたのを次々と運んでくれる。今夕の分と明朝の分と二回だけの兵糧を運んでくれたのである。まア話してゆき給へといふても腰をかける場所もない。半四郎君は餘り暗くならぬ内にと云うて歸つてゆく。ランプをつける。半四郎君の出てゆく水の音が闇に響いて、カバン／＼と妙に寂しい音がする。濁水の動く浪畝にランプの影がキラ／＼する。全くの夜となつた。そして夜は目に映るものの少ない爲か、日に見た日暮の趣にくらべて今は寂しいといふより靜かな感じが强い。其靜かさの强みに、五六人の人の動きも其話聲もランプの光に、鐵瓶の煮え音までが、靜かに靜かにと上から壓へつけられてゐるやうである。却て少しの光や音や動きやは、其靜かさの强みを一層强く思はせる。濕り氣を含んだランプの光の下に浮藻的生活のわれ／＼は食事にかゝる。佃煮と煮豆と漬菜といふ常式である。四疊の座敷に六人が居る格で一膳のお膳に七つ八つの碗茶碗が混雜を極めて据ゑられた。他目とは雲泥の差ある愉快なる晩餐が始まる。一切の過去を忘れて只其現在を當と觀ずれば、如何なる境地にも樂しみは漂うて居る。予は麥酒を抜かせる。
　木綿子の擧動には憂悶の念はない。行きたいやうにゆき動きたいやうに動いてる。父の顔を見母の顔を見姉の顔を見、煮豆佃煮の御馳走に滿悦して、腹の底を傾けての笑ひ、有りたけの聲を出しての叫び、此人の爲に誰も彼も、總ての憂事を忘れさせられる。天地の寂寞も水難の悲慘も木綿子の心をば一厘たりとも冒すことは出來ない。吾身の存在すら知らない絶對

無我の幼兒は、眞に不思議な力がある。天を活かし地を活かし人をも活かすの力を持つて居る。他目に解せられない愉快な晩餐といふも全く木綿子の力である。

あぶないてば木綿ちやん、といふ呼び聲は此會食中に許りも十度も繰返された。あぶないとは何の事か木綿ちやんの知つた事ではない。木綿ちやんの行動は天馬空を行くが如くで、四疊であらうが、百疊であらうが、木綿ちやんにそんな差別はない。人を活す力を持てる木綿ちやんは、又人を殺す力も持つてる。木綿ちやんが寐ない内は誰も寐られないのである。若しも木綿ちやんがわれ〳〵の不注意の爲に、この水に落ちて死ぬやうな事でもあつたら、少くも予一人は精神的に死するに極つて居る。木綿子は其の幼い手足を投げ出して、今は眠についた。窓先で枝蛙が鳴く。壁の透間でこほろぎが鳴く。彼等は何を感じて寂しい聲を鳴くのか。空は晴れて肌寒く夜は漸く更け渡つたやうである。

（明治四十年十一月）

自作自評

ぬば玉の夜の起居の春ごころおのづから
　思ふ梅のまがきを

釜の煮えのおほに鳴りつつ春と思ふ心は
　みちぬ夜のいほりに

此の歌は春夜の趣といふ天然を主として作つたものではない。天然の趣を描寫せうとして作つたのではなく、嗚呼春だなと作者の心に感情の動きが起つた當時の主觀情趣を歌つたつもりである。乍併春夜といふ天然の情趣が副産物として是等の作歌の上に伴ふべきを考へて作つたことは勿論である。

春の葉の若やぐ森に浮く煙吾がこふる
　人や朝かしぎする

作者の考を少し言はして貰ひたい。此の歌に於て作者の所謂吾が戀ふる人といふを、純君は人妻と見られ、里靜君は下女と見られ、茂吉君はたゞ田園生活の少女と見られた。歌評の面白みはかういふ處にあると思うて愉快だ。作者も默して居られぬ所以である。下女娘は言ふまでもなく、細君も勿論飯をたく。奧樣御深窓、時には朝炊をするのも事實であらう。予は奧樣令孃の朝炊など最も興味が深いと思ふ。併し茲で奧樣と言ふは人妻の意味ではない。朝炊と言へば、直に下女女房と極めて終ふのは、詩人の考としては餘り單純過ぎはしないか。戀人はどこまでも戀人である。神言寄せて成立つた戀仲は、さう無造作に人中へむき出しにされるものでない。兩親と雖も我が子の戀人を知らない場合が多い。然るに歌の批評者が、只朝炊すると詞だけを見て直に、人妻であらう、いや下女であらうとの詮議は、少々岡燒の氣味といはねばならぬか。隣席に女の話聲がする。其の聲のみを聞いて、下女か令孃か細君かを判ずるは、聽覺神經の靈能に待つ外はない如くに、此の歌の戀が、卑しい戀か美しい戀かは、此の歌の歌柄に依つて判じて貰ふより外はない。作者が只告白して置きたいのは、此の歌の音調の示せる如く平和な戀である。世間へ知れて恥しいといふ戀でもなく、前途に不安のある戀でもない。相當の時期に達すれば周圍から羨まるべき間柄である。目下の處少しの都合にて女は叔父の家に居るので、朝炊の手傳もさせられて居る。作者の心にはそれが聊か可哀想に思はれる。其の樂しいやうな苦しい苦痛が此の歌の心である。

（『短歌研究』より）

大雨の前日

此頃は實に不快な天候が續く。重苦しく蒸熱くいやに濕り氣をおんだ、强い南風だ。さうして又、僅かの出來事に無數の惡魔が駈出して來た樣な、にく〳〵しい土色した雲が、空低く散らかり飛び駈けつて、引切りなしに北の方へ走り行く。時々空が暗くなつて雲が濃くなると一頻りづつ必ず雨を降らせる。

こんな天氣が今日で三日目だ。意地惡く息の長い風だ。人間は嘆息する、呼吸が爲に息苦しいこと夥しい。此夜明けには止むだらう、此日の入りには止むだらうも皆空だのみであつた。予は今朝になつて著しく神經の疲勞を覺えた。深刻に出水の苦痛を恐れて居る予は、八月といふ月の此天候に恐怖を感ぜずには居られなかつたのである。

早く新聞を手にした兒供達はいづれも天氣豫報を氣にして見たらしく、十四と十二と七つとの三人が揃つて新聞を持つて來た。三人は予の左右に屈み加減に兩手を突いて等しく父の前に顏を出すのであつた。予も新聞を取るや否、自然に氣象臺員の談話といふ項目に眼は走つた。直ちに眼に入るのは、低氣壓、颶風等の文字である。予は寧ろこれを讀むのが厭はしかつた。兒供等は父がそれを讀んで、何とか云ふのを待つものらしく三人共未だ何とも云はずに居る。予は殊に兒供等の前で其氣象臺員の談話を讀むのが何となく苦痛でならない。それで予は眼を轉じて別項を讀み始めた。十四の兒はもどかしくなつてか、

「お父さん『あらし』になるの……」

いふと等しく、

「あらしになりやしないねいお父さん」

と、十二のが口出した。

「お父さん水が出るかい……」

かういふのは七つの兒であつた。

「大丈夫ねえお父さん」

十二のが二人の詞を打消す樣にさういつた。

「うん大丈夫だよ、新聞にあることは當てになりやしないよ」

父はかう云はない譯に行かなかつた。

「ほんとに大丈夫お父さん……」

十四のは不安さうに父の顏を見上げる。

「うん雨は少し降るだらうけれどね大風は吹きやしないだらうよ。そつだから大丈夫だよ」

「新聞にさう書いてあるの……」

「うん」

「そらえいこつた」

七つのはさすがに安心してから叫んだ。

「わたい大水が出れば大島へ逃げていくだ……」

初めから大丈夫だねい大丈夫だねと云つてた、十二のが、矢張安心し切れないと見え、さう云ふのであつた。予はしやうことなしに、新聞の記事をよい加減に讀み聞かして、これだからそんなに心配しなくともえい、と諭した。併し予の不安は兒供等を安心させるのに寧ろ苦痛を感ずるのである。

「水が出るにしたつて、直ぐではないねいお父さん」

十四のは、どうしても安心し切れないで、さういふのであつた。予は少しく叱る樣に押へつけて、

「今夜にも此風さへ止めば大丈夫だから、そんなに心配することはないよ」

予はかう云つて、兒供等には次へ出て遊べと

命じた。兒供に安心させようとする許りではない、自分も内心には、氣象臺の報告とて必ずしも信ずるに足らない、よし大雨が一日一夜降つたにせよ、逃出さねばならぬ様な事は有るまいと、强ひて自分の不安をなだめる、自然的心理の働きが動いたのである。乍併自分が心から安心の出來ないのにどうして兒供等を安心させることが出來よう。次へ起つた三兒の後影は如何にも淋しかつた。予は坐して居られない程胸に苦痛を覺えた。予は起つて庭から空模様を眺めた。風は昨日に増すとも靜まる様子は更に無い。土色雲の惡魔は益々數を加へて飛び駈つて居る。どう見ても一荒れ荒れねば天氣は直りさうもなく思はれる。予は又其空模様を永く見て居るに堪へないで家に入つた。妻も入つて來た。三人の兒の姉等二人も入つて來た。又々互に不安心な事を云ひ合つて、我れと我が不安の思ひを増す様な話を暫く喃々した。果ては予はどういふ事があらうと仕方がない、益の無いくよ／＼話はよせと一喝した。

風の音許り外に騒々しくて、家の内には元氣よく騒ぐものもない。

平生は鐵工所でどんがんする鎚の音、紡績會社の機械のうなり、汽笛の響、有らゆる諸工場の雜多な物鳴り等、大都會の騒々しさも、今日は一切に耳に入らない。只ごうつと吹く風の音、ばら／＼つと板屋を打つ雨の音に許り神經は昂進るのである。新聞も讀掛けてよした。雜誌も讀掛けた儘投げてやつた。

余はつく／″＼と、こんな土地に住まねばならぬ我が運命を悲しまない譯にゆかなかつた。同時に我れながらさもしい卑屈な感想の湧き起るのを禁じ得なかつた。

平生財を作るにも最も拙な癖に、財力の威德を尊敬することを知らなかつた報いだ。貧はこれほど苦しくないにせよ、災害から受くる損傷は苦痛でなければならぬ。現に苦しみつゝある我が愚を憐まない譯に行かない。我に千四五百圓の餘財があるならば、こんな所に一日も居やしないが、千四五百の金は予の今日では望外の事である。予は財なきが故に、時々云ふに云はれない苦悶をせねばならぬ、厭ふべき此土地に囚れて居ねばならないのである。

今少し貨殖の道に心掛ければよかつた。思へば自分はどう考へても迂愚であつた。

予はこんな風に、今更考へても何の役にも立たない愚な事を考へずに居られなかつた。つまらない。實につまらない。何だ馬鹿々々しい。實にくだらないなア。

俄に氣づいてちらんと自分を嘲り叱つて見ても、不安は依然として不安で、今の苦悶の中から、心を不安境外へ拔け出ることはどうしても出來ない。

今茲へ來て何を考へたつて役には立たない。未だ雨も降らないのに、出水を心配するなどは猶更無駄な話だ。かう思ひつゝ何も考へない事にして、仰向に踏んぞりかへつた。さうして兩足を伸し腹部も十分に張つて見たけれど、心のくもつて居る様な胸の苦みは少しも減じなかつた。予はほと／＼自分の體と自分の心との取扱に窮して終つた。さういふ内に、何と云つても兒供は兒供でどんな面白い事があつたか、苦の無い笑聲を立てて騒ぎ出した。予も亦不思議と其聲に搖られて、心の凝りが聊か柔かになつた。

大雨は其夕から降出した。雨の音はさながら惡魔の叫喚だ。日に見た惡魔が今は我家の周圍に肉迫し來つて、耳に近く其叫喚の聲を聞く心持がした。

（明治四十三年十月）

水害雜錄

一

臆病者といふのは、勇氣の無い奴に限るものと思つて居つたのは誤りであつた。人間は無事を希ふの念の强ければ、其の强いだけそれだけ臆病になるものである。人間は誰とて無事を希ふの念の無いものは無い筈であるが、身に多くの係累者を持つた者、殊に手足まとひの幼少者などある身には、更に痛切に無事を願ふの念が强いのである。

一朝禍を蹈むの場合にあたつて、係累の多い者程、慘害は其慘の甚しいものがあるからであらう。

天災地變の禍害と云ふも、之れが單に財産居住を失ふに止まるか、若くは其身一身を處決して濟むものであるならば、其悲慘は必ずしも慘の極なるものではない。一身係累を顧みるの念が少ないならば、早く禍の免れ難きを覺悟したとき、自ら振作するの勇氣は、以て笑ひつゝ天災地變に臨むことが出來ると思ふものの、絕つに絕たれない係累が多くて見ると、どう考へても事に對する處決は單純を許さない。思慮分別の意識からさうなるのではなく、自然的な極めて力强い餘儀ないやうな感情に壓せられて勇氣の振ひ作る餘地が無いのである。

宵から降出した大雨は、夜一夜を降通した。豪雨だ……そのすさまじき豪雨の音、さうして有所方面に落ち激つ水の音、只管事なかれと祈る人の心を、有る限りの音聲を以て脅すかの如く、豪雨は夜を徹して鳴り通した。

少しも眠れなかつた如く思はれたけれど、一睡の夢の間にも、豪雨の音聲におびえて居たのだから、固より夢か現かの差別は判らないのである。外は明るくなつて夜は明けて來たけれど、雨は夜の明けたに何の關係も無い如く降り續いて居る。夜を降通した雨は、又晝を降通すべき氣勢である。

さん／＼耳から脅された人は、夜が明けてからは更に目からも脅される。庭一面に漲り込んだ水上に水煙を立てて、雨は篠を突いてるのである。庭の飛石は一箇も見えてるのが無いくらゐの水だ。いま五六寸で床に達する高さである。

もう疊を上げた方がよいでせう、と妻や大きい子供等は騷ぐ。牛舍へも水が入りましたと若衆も訴へて來た。

最も臆病に、最も内心に恐れて居つた自分も、側から騷がれると、妙に反撥心が起る。殊更に落ちついてる風をして、何程增して來た處で溜り水だから高が知れてる。そんなにあわてて騷ぐに及ばないと一喝した。さうして其一喝した自分の聲にさへ、實際は恐怖心が搖いだのであつた。雨は益々降る。一時間に四分五分位づつ水は高まつて來る。

强烈な平和の希望者は、それでも、今にも雨が靜かになればと思ふ心から、雨聲の高低に注意を拂ふことを、秒時もゆるがせにしては居ない。

不安――恐怖――其の堪へ難い懊惱の苦みを、此の際幾分か紛らかさうには、體軀を運動する外はない。自分は横川天神川の增水如何を見て來ようと我知らず身を起した。出掛けしなに妻や子供達にも、いざと云ふ時の準備を命じた。それも準備の必要を考へたよりは、彼等

に手仕事を控けて、徒らに懊悩することを輕めようと思つた方が多かつた。
　干潮の刻限である爲か、河の水は未だ意外に低かつた。水口からは水が随分盛に落ちて居る。玆で雨さへ歇むなら、心配は無いがなアと、思はず嘆息せざるを得なかつた。
　水の溜つてる面積は五六町内に跨つてる程廣いのに、排水の落口といふのは僅に三ケ所、それが又、皆落口が小さくて、溝は七まがりと迂曲して居る。水の落ちるのは、干潮の間僅かの時間であるから、雨の強い時には、降つた水の半分も落ちきらぬ内に、上げ潮の刻限になつて終ふ。上げ潮で河水が多少水口から突上げる處へ更に雨が強ければ、立ちしか間に此一區劃内に湛へて終ふ。自分は水の心配をする度に、此處の工事をやつた人の、馬鹿々々しきまで實務に不忠實な事を呆れるのである。
　大洪水は別として、排水の裝置が實際に適して居るならば、一日や二日の雨の爲に、此町中へ水を湛ふる樣な事は無いのである。人事僅に至らぬ處あるが爲に、幾百千の人が、一通ならぬ苦みをすることを思ふと、斯の如き實務的の仕事に、只形許りの仕事をして、平氣な人の不信切を嘆息せぬ譯にゆかないのである。

　自分は三ケ所の水口を檢して家に歸つた。水は三ケ所へ落ちて居るに係らず、吾庭の水層は少し増して居つた。河の水はどうですかと、家の者から口々に問はるゝにつけても、玆で雨さへ小降りになるなら心配は無いのだがなアと、思はず又嘆息を繰返すのであつた。
　一時間に五分位づつ増してるから、これで見ると床へつくにはまだ十時間ある譯だ。何時でも疊を上げられる用意さへして置けば、住居の方は差當り心配はないとしても、もう捨てて置けないのは牛舍だ。尿板の後方へは水がついてるから、牛は一頭も殘らず起つてる。さうして其後足には皆一寸許りづつ水がついてる。豪雨は牛舍の屋根に鳴音烈しく、一寸した會話が聞取れない。愈々平和の希望は絶えさうになつた。
　人が、自殺した人の苦痛を想像して見るにしても、大抵は自殺其のものの悲劇をのみ強く感ずるのであらう。併し自殺者其人の身になつたならば、我と我を殺す其實劇よりは、自殺を覺悟するに至る以前の懊惱が、遙かに自殺其のものよりも苦しいのでなからうか。自殺の凶器が、目前に横たはつた時は、最早身を殺す恐怖のふるへも靜まつて居るのでなからうか。

　豪雨の聲は、自分に自殺を強ひてる聲であのだ。自分は猶自殺の覺悟も定め得ないので、藻搔きに藻搔いて居るのである。
　死ぬと極つた病人でも、死ぬまでに猶幾日かの間があるとすれば、其間に處する道を考へねばならぬ。況や一縷の望を掛けて居るものならば、猶更其覺悟の中に用意が無ければならぬ。
　何程恐怖絶望の念に懊惱しても、最後の覺悟は必ず相當の時機を待たねばならぬ。
　豪雨は今日一日を降りとほして更に今夜も降りとほすものか、或は此の日暮頃にでも歇むものか、若くは今にも歇むものか、一切判らないが、其降止む時刻に依て恐水者の運命は決するのである。いづれにしても明日の事は判らない。判らぬ事には覺悟のしやうもなく策の立て樣も無い。厭でも中有につられて不安狀態に居らねばならぬ。
　乍併牛の後足に水がついてる。眼前の事實は、最早何を考へてる餘地を與へない。自分はそれに促されて、明日の事は明日になつてからとして、兎も角も今夜一夜を凌ぐ畫策を定めた。
　自分は猛雨を冒して材木屋に走つた。同業者

の幾人が同じ目的を以て多くの材料を求め走つたと聞いて、自分は更に恐怖心を高めた。

五寸角の土臺數十丁一寸厚の松板數十枚は時を移さず、牛舎に運ばれた。勿論大工を呼ぶ暇は無い。三人の男共を指揮して、數時間豪雨の音も忘れるまで活動した結果、牛舎には床上更に五寸の假床を造り得た。かくて二十頭の牛は水上五寸の架床上に爭うて安臥するのであつた。燃材の始末、飼料品の片づけ、爲すべき仕事は無際限にあつた。

人間に對する用意は、先づ疊を上げて、襖障子諸財一切の始末を、先年大水の標準に依て、處理し終つた。並の席より尺餘床を高くして置いた一室と離屋の茶室の一間とに、家族十人の者は二分して寢に就く事になつた。幼いもの共は茶室へ寢るのを非常に悦んだ。さうして間もなく無心に眠つて終つた。二人の姉共と彼等の母とは、此の氣味の惡い雨の夜に別れ〴〵に寢るのは心細いと云うて、雨を冒し水を渡つて茶室へやつて來た。

それでも、是れだけの事で濟んでくれゝば有難いが、明日はどうなる事か……取片づけに掛つてから幾度も幾度も云ひ合うた事を又も繰返すのであつた。跡に殘つた子供達に呼び立てられて、母親は寂しい影を夜の雨に沒して去つた。

遂に其夜も豪雨は降りとほした。實に二夜と一日、三十六時間の豪雨は如何なる結果を來すべきか。翌日は晃々と日が照つた。水は少しづつ增して居るけれど、牛の足へも未だ水はつかなかつた。避難の二席にも未だ五六寸の餘裕はあつた。新聞紙は諸方面の水害と今後の警戒すべきを特報したけれど、天氣になつたといふ事が、非常に我等を氣強く思はせる。よし河の水が增して來た處で、どうにか凌ぎのつかぬ事は無からうなどと考へつゝ、懊惱の頭も大いに輕くなつた。

平和に渇した頭は、到底安んずべからざる處にも、强ひて安居せんとするものである。

二

大雨が晴れてから二日目の午後五時頃であつた。世間は恐怖の色調をおびた騷ぎを以て滿たされた。平生聞ゆるところの都會的音響は殆ど耳に入らないで、浮かとして居れば聞取ることの出來ない、物の底深くに、力强い騷ぎを聞く樣な、人を不安に引入れねば止まない樣な、深酷な騷ぎがそこら一帶の空氣を振蕩して起つた。

天神川も溢れ、竪川も溢れ、横川も溢れ出したのである。平和は根柢から破れて、戰鬪は開始したのだ。最早恐怖も遲疑も無い。進むべき所に進む外、何を顧みる餘地も無くなつた。家族には近い知人の二階屋に避難すべきを命じ置き、自分は若い者三人を叱して乳牛の避難にかかつた。豫て此所と見定めて置いた高架鐵道の線路に添うた高地に向つて牛を引き出す手筈である。水深は猶ほ腰に達しない位であるから、敢て困難といふほどではない。

自分は先づ黑白斑の牛と赤牛との二頭を牽出す。彼等無心の毛族も何等か感ずる處あると見え、殘る牛も出る牛も一齊に聲を限りと叫び出した。其の騷々しさは又自から牽手の心を興奮させる。自分は二頭の牝牛を引いて門を出た。腹部まで水に浸されて引出された乳牛は、どうされると思ふのか、右往左往と狂ひ廻る。固より溝も道路も判らぬのである。忽ち一頭は溝に落ちて益々狂ひ出す。一頭はひた走りに先に進む。自分は二頭の手綱を採つて、殆ど進退の道を失つた。さうして自分も乳牛に引かる勢に驅られて溝へはまつた。水を全身に浴みて終つた。若い者共も二頭三頭と次々引出し

て來る。

人畜を擧げて避難する場合に臨んでも、猶濡るゝを恐れて居つた卑怯者も、一度溝にはまつて全身水に漬つては戰士が傷ついて血を見たにも等しいものか、玆に初めて精神の興奮絶頂に達し、猛然たる勇氣は四肢の節々に振動した。二頭の乳牛を兩腕の下に引据ゑ、奔流を蹴破つて目的地に進んだ。斯の如く二回三回數時間の後全く乳牛の避難を終へ、翌日一日分の飼料をも用意し得た。

水層は愈高く、四ツ目より太平町に至る十五間幅の道路は、深さ五尺に近く、濁流奔放舟を以て渡るも困難を感ずる位である。高架線の上に立つて、逃げ捨てた我家を見れば、水上に屋根許りを見得るのであつた。

水を恐れて雨に懊惱した時は、未だ直接に水に觸れなかつたのだ。それで水が恐ろしかつたのだ。濁水を冒して乳牛を引出し、身も其濁水に沒入しては最早水との爭鬪である。奮鬪は目的を遂げて、牛は思ふまゝに避難し得た。第一戰に勝利を得た心地である。

洪水の襲撃を受けて、失ふところの大なるを慨恨するよりは、一方のかこみを打破つた奮鬪の勇氣に快味を覺ゆる時期である。化膿せる腫物を切解した後の痛快は、稍自分の今に近い。打擊は固より深酷であるが、きびくと問題を解決して、總ての懊惱を一掃した快味である。我家の水上僅に屋根許り現はれ居る狀を見て、聊も痛恨の念の湧かないのは、其快味が暫く我れを支配して居るからであるまいか。

日は暮れんとして空は又雨模樣である。四方に聞ゆる水の音は、今の自分には最早壯快に聞えて來た。自分は四方を眺めながら、何とはなしに天神川の鐵橋を渡つたのである。

うづ高に水を盛り上げてる天神川は、盛に濁水を兩岸に奔溢さして居る。薄暗く曇つた夕暮の底に、濁水の溢れ落つる白泡が、夢かのやうにぼんやり見渡される。恐ろしいやうな、面白いやうな、云ふに云はれない一種の強い刺擊に打たれた。

遠く龜戶方面を見渡して見ると、黑い水が漫々として大湖の如くである。四方に浮いてる家棟は多くは軒以上を水に沒して居る。成程洪水ぢやなと嗟嘆せざるを得なかつた。

龜戶には同業者が多い。未だ避難し得ない牛も多いと見え、そちこちに牛の叫び聲がして居る。暗い水の上を傳つて、長く尻聲を引く。聞く耳のせゐか溜らなく厭な聲だ。稀に散在して見える三つ四つの燈火が殆ど水にひツついて、寂しい光を漏して居る。

何か人聲が遠くに聞えると耳を立てて聞くと、助け舟は無いかア…助け舟は無いかア…と叫ぶのである。それも三回許りで聲は止んだ。水量が盛んで人間の騷ぎも壓せられてるものか、割合に世間は靜かだ。未だ宵の口と思ふのに、水の音と牛の鳴く聲の外には、餘り人の騷ぎも聞えない。寥々として寒さうな水が漲つて居る。助け舟を呼んだ人は助けられたか否かも判らぬ。鐵橋を引返してくると、牛の聲は幽になつた。壯快な水の音が殆ど[illegible]を支配して鳴つてる。自分は眼前の問題にとらはれて我知らず時間を費した。來て見れば乳牛の近くに若者達も居ず、我が乳牛は多くは安臥して食み返しをやつて居つた。

何事をするも明日の事、今夜は是でと思ひながら、主なき家の有樣も一見したく、自分は再び猛然水に投じた。道路よりも少しく低い我家の門內に入ると足が地につかない。自分は泳ぐ氣味にして臺所の軒へ進み寄つた。

幸に家族の者が逃げる時に消し忘れたものらしく、洋燈が點して釣り下げてあつた。天井

高く釣下げた洋燈の尻に殆ど水がついて居つた。床の上に昇つて水は乳まであつた。醤油樽、炭俵、下駄箱、上げ板、薪、雜多な木屑等有ると有るものが浮いて居る。どろりとした汚い惡水が、身動きもせず、ひし／＼と家一ぱいに這入つて居る。自分は猶一渡り奥の方まで一見しようと、洋燈に手を掛けたら、どうかした拍子に火は消えて終つた。跡は闇々黒々、身を動かせば雜多な浮流物が體に觸れる許りである。それでも自分は手探り足探りに奥まで進み入つた。浮いてる物は胸にあたる額にさはる。疊が浮いてる簞笥が浮いてる、夜具類も浮いてる。それ／＼の用意も想像以外の水で悉く無駄に歸したのである。

自分は此全滅的荒廢の跡を見て何等悔恨の念も無く不思議と平然たるものであつた。自分の家といふ感じがなく自分の物といふ感じも無い。寧ろ自然の暴力が、如何にもきび／＼と殘酷に、物を破り人を苦しめた事を痛快に感じた。やがて自分は路傍の人と別れる樣に、其荒廢の跡を見捨てて去つた。水を恐れて連夜眠れなかつた自分と、今の平氣な自分と、何の爲に然るかを考へもしなかつた。

家族の逃げて行つた二階は七疊許りの一室であつた。其家の人々の外に他よりも四五人逃げて來て居つた。七疊の室に二十餘人、其間に幼いもの三人許りを寢せて終へば、他の人々は只膝と膝を突合せて坐し居るのである。

罪に觸れた者が捕縛を恐れて逃げ隱れしてる内は、一刻も精神の休まる時が無く、夜も安くは眠られないが、愈々捕へられて獄中の人となつて終へば、氣も安く心も暢びて、愉快に熟睡されると聞くが、自分の今夜の狀態はそれに等しいのであるが、將來の事は未だ考へる餘裕も無い、煩悶苦惱決せんとして決し得なかつた問題が解決して終つた自分は、此數日來に無い、心安い熟睡を遂げた。頭を曲げ手足を縮め海老の如き狀態に困臥しながら、猶氣安く心地爽かに眠り得た。數日來の苦惱は跡形も無く消え去つた。爲に體内新たな活動力を得た如くに思はれたのである。

實際の狀況はと見れば、僅に人畜の生命を保ち得たのに過ぎないのであるが、敵の襲撃が飽くまで深酷を極めて居るから、自分の反抗心も極度に興奮せぬ譯にゆかないのであらう。何處までも奮鬪せねばならぬ決心が自然的に强固となつて、大災害を哀嘆してる暇がない爲であらう。人間も無事だ牛も無事だよしと云つた樣な、爽快な氣分で朝まで熟睡した。

家の鷄が鳴く、家の鷄が鳴く、といふ子供の聲が耳に入つて眼を覺した。起つて窓外を見れば、濁水を一ぱいに湛へた、我家の周圍の一廓に、ほの／＼と夜は明けて居つた。忘れられて取殘された鷄は、主なき水漬屋に、常に變らぬ長閑な聲を長く引いて時を告ぐるのであつた。

三

一時の急を免れた避難は、人も家畜も一夜の宿りが漸くの事であつた。自分は知人某氏を兩國に訪うて第二の避難を謀つた。俠氣と同情に富める某氏は全力を盡して奔走して呉れた。家族は悉く自分の二階へ引取つてくれ、牛は回向院の庭に置くことを許された。天候情なく此の日亦雨となつた。舟で高架鐵道の土堤へ漕ぎつけ、高架線の橋上を兩國に出ようといふのである。我に等しき避難者は、男女老幼、雨具も無きが多く、陸續として、約二十町の間を引ききりなしに渡り行くのである。十八を頭に赤子の守兒を合して九人の子供を引連れた一族も其内の一群であつた。大人は勿論大きい子供等はそれ／＼持物がある。五ツになるのと七ツ

になる幼きものどもが、我儘も云はず、泣きもせず、覺束ない素足を運びつゝ泣くやうな雨の中を兎も角も長い〱高架の橋を渡つたあはれさ、兩親の目には忘れる事の出來ない印象を殘した。

もう家族に心配はいらない。これから牛と云ふ事で其の手配にかゝつた。人數が少くて數回に牽くことは容易でない。二十頭の乳牛を二回に牽くとすれば、十人の人を要するのである。雨の降るのに然かも大水の中を牽くのであるから、無造作には人を得られない。某氏の盡力に依り漸く午後の三時頃に至つて人を頼み得た。

成るべく水の淺い道筋を選ばねばならぬ。それで自分は、天神川の附近から高架線の上を本所停車場に出て、横川に添うて竪川の河岸通を西へ兩國に至るべく順序を定めて出發した。雨も止んで來た。此間の日の暮れない内に牽いて終はねばならない。人々は勢込んで乳牛の所在地へ集つた。

用意は出來た。此上は鐵道員の許諾を得、少しの間線路を通行さして貰はねばならぬ。自分は驛員の集合してる所に到つて、かねて避難して居る乳牛を引上げるに就いて茲より本所停車場までの線路の通行を許してくれと乞うた。驛員等は何か話合うて居たらしく、自分の切願に一顧をくれるものも無く、挨拶もせぬ。

如何でせうか、物の十分間もかゝるまいと思ひますから是非お許しを願ひたいですが、それに此直ぐ下は水が深くて到底牛を牽く事が出來ませんから、と自分は詞を盡して哀願した。

そんな事は出來ない。一體あんな所へ牛を置いちやいかんぢやないか。

それですから是れから牽くのですが。

それですからつて、あんな所へ牛を置いて屆けても來ないのは不都合ぢやないか。

無情冷酷……然かも橫柄な驛員の態度である。精神興奮してる自分は癪に障つて堪らなくなつた。

君達は一體何處の國の役人か、此の洪水が目に入らないのか。多くの同胞が大水害に泣いてるのを何と見てるか。

殆ど口の先まで出たけれど、僅にこらへて更に哀願した。結局避難者を乘せる爲に列車が來るから、歸つてからでなくてはいけないと云ふことであつた。それならさうと早く云つてくれゝばよいのだ。さうして何時頃來るかと云へば、それは判らぬといふ。其實判つて居るのである。配下の一員は親切に一時間と經ない内に來るからと注意してくれた。

彼是空しく時間を送つた爲に、日の暮れない内に二回牽く積であつたのが、一回牽き出さない内に暮れかゝつて終つた。

馴れない人達には、荒れないやうな牛を見計らつて引かせることにして、自分は先頭に大きい赤白斑の牝牛を引出した。十人の人が引續いて後から來るといふ樣な事にはゆかない。自分は續く人の無いに係らず、眞直ぐに停車場へ降りる。全く日は暮れて僅に水面の白いのが見える許りである。鐵橋の下は意外に深く、殆ど胸につく深さで、奔流しぶきを飛ばし、少の間流に溯つて進めば、牛はあわて狂うて先に出ようとする。自分は胸きりの水中容易に進めないから、しぶきを全身に浴びつゝ水に咽せて顏を正面に向けて進むことは出來ない。漸く埒外に出れば、それからは流に從つて行くのであるが、先の日に石や土俵を積んで防禦した、其石や土俵が道中に散亂してあるから、水中に牛も躓く人も躓く。

我が財産が牛であつても、此困難は容易なものでないにと思ふと、臨時に頼まれて然かも馴れない人達の事が氣にかゝるのである。自分は

暫く牛を控へて後から來る人達の樣子を窺うた。それでも同情を持つて來てくれた人達であるから、案じた程でなく、續いて來る樣子に自分も安心して先頭を務めた。牛數十頭を回向院の庭へ揃へた時は恰も九時であつた。負傷した人も出來た。一回に恐れて逃げた人も出來た。今一回は實に難事となつた。某氏の激勵至らざるなく、それで漸く缺員の補充も出來た。二回目には自分は最後に廻つた。悉く人々を先に出しやつて一渡り後を見廻すと、八升入の牛乳鑵が二つバケツが三箇殘つてある。これは明日に入用の品である。若い者の取落したのか、下の帶一筋あつたを幸に、それにて牛乳鑵を背負ひ、三箇のバケツを左手にかゝへ右手に牛の鼻綱を取つて殿した。自分より一歩先に行く男は初めて牛を牽くといふ男であつたから、幾度か牛を手離して終ふ。其度に自分は、其牛を捕へやりつゝ擁護の任を兼ね、土を洗ひ去られて、石川と云つた竪川の河岸を練り歩いて來た。もう是で終了すると思へば心にも餘裕が出來る。

道々考へるともなく、自分の今日の奮闘は我ながら意想外であつたと思ふにつけ、深夜十二時敢て見る人もないが、我が此の容態はどうだ。腐つた下の帶に乳鑵二個を負ひ三個のバケツを片手に捧げ片手に牛を牽いてる。臍も脛も出づるがまゝに隱しもせず、奮闘と云へば名は美しいけれど、此醜態は何のざまぞ。

自分は何の爲にこんな事をするのか、こんな事までせねば生きて居られないのか、果なき人世に露の如き命を貪つて、こんな醜態をも厭はない情なさ、何といふ卑き心であらう。

前の牛も我が引く牛も今は落ちついて靜かに歩む。二つ目より西には水も無いのである。手に足に氣くばりが無くなつて、考は先から先へ進む。

超世的詩人を以て深く自ら任じ、常に萬葉集を講じて、日本民族の思想感情に於ける、正しき傳統を解得し繼承し、依て以て現時の文明に聊か貢獻する處あらんと期する身が、此醜態は情ない。假令人に見らるゝの憂がないにせよ、餘儀なき事の勢に迫つたにせよ、餘りに犧牲の露出である。こんな事が奮闘であるならば、奮闘の價は卑いと云はねばならぬ。併し心を卑くするのと、體を卑くするのと、いづれが卑いかと云へば、心を卑くするの最も卑むべきは云ふまでもないことである。さう思うて見れば我が今夜の醜態は、只體を卑くしたのみで、心を卑くしたとは云へないのであらうか。併し、心を卑くしないにせよ、體を卑くした其事の恥づべきは少しも減ずる譯ではないのだ。

先着の伴牛は頻りに友を呼んで鳴いて居る。我が引いてゐる牛もそれに應じて一聲高く鳴いた。自分は夢から覺めた心地になつて、覺えず手に持つた鼻綱を引詰めた。

四

水は一日に一寸か二寸しか減じない。五六日經つても七寸とは減じて居ない。水に漬つた一切の物未だに手の着け樣がない。其後も幾度か雨が降つた。乳牛は露天に立つて雨たゝきにされて居る。同業者の消息も漸く判つて來た。龜戸の某は十六頭殺した。太平町の某は十四頭を、大島町の某は犢十頭を殺した。我一家の事に就いても種々の方面から考へて慘害の感じは深くなる許りである。

疲勞の度が過ぐれば却て熟睡を得られない。夜中幾度も目を覺す。僅な睡眠の中にも必ず夢を見る。夢は悉く雨の音水の聲である。最も懊惱に堪へないのは、實際雨が降つて音の聞ゆる夜である。我が財産の主腦である處の乳牛

が、雨に濡れて露天に立つて居るのは考へるに堪へない苦みである。何とも譬へ樣のない情なさである。自分が雨中を奔走するのは敢て苦痛とは思はないが、牛が雨を浴みつゝ泥中に立つて居るのを見ては、言語に云へない切なさを感ずるのである。

若い衆は代り〳〵病氣をする。水中の物も何時まで捨てては置けず、自分の爲すべき事は無際限である。自分は日々朝草鞋をはいて立ち夜まで脫ぐ遑がない。避難五日目に漸く牛の爲に雨掩が出來た。

眼前の迫害が無くなつて、前途を考ふることが多くなつた。貳拾頭が分泌した乳量は半減した上に更に減ぜんとして居る。一度減じた量は決して元に恢復せぬのが常である。乳量が恢復せないで妊孕の期を失へば、乳牛も乳牛の價格を保てないのである。損害の程度が稍々考量されて來ると、天災に反抗し奮鬪したのも極めて意義の少ない行動であつたと嘆ぜざるを得なくなる。

生活の革命…八人の兒女を兩肩に負うてる自分が生活の革命を考ふる事となつては、胸中先づ悲慘の氣に閉塞されて終ふ。

殘餘の財を取纏めて、一家の生命を筆硯に託さうかと考へて見た。汝は安心して其決行が出來るかと問うて見る。自分の心は卽時に安心が出來ぬと答へた。愈々餘儀ない場合に迫つて、さうするより外に道が無かつたならばどうするかと念を押して見た。自分の前途の慘憺たる有樣を想見するより外に何等の答を爲し得ない。

一人の若い衆は起きられないと云ふ。一人は遊びに出て歸つて來ないと云ふ。自分は蹶起して乳搾に手をかさねばならぬ。天氣がよければ家內等は運び來つた濡れものの始末に眼の廻る程忙しい。

一家浮沈の問題たる前途の考も措き難い目前の仕事に逐はれては其儘になる。見舞の手紙見舞の人、一々應答するのも一仕事である。水の家にも一日に數回見廻ることもある。夜は疲勞して座に堪へなくなる。朝起きては、身の內の各部に疼痛倦怠を覺え、其の業に堪へ難き思ひがするものの、常よりも快美に進む食事を取りつゝ一度草鞋を踏みしめて起つならば、自分の四肢は凜として振動するのである。

肉體に勇氣が滿ちてくれば、前途を考へる悲觀の感念も何時しか屛息して、愉快に奮鬪が出來るのは妙である。八人の兒女があるといふ痛切な感念が、常に肉體を興奮せしめ、其苦痛を忘れしめるのか。

或は鎌倉武士以來の關東武士の稟性が、今猶自分の骨髓に遺傳して然るものか。

破壞後の生活は、總ての事が混亂して居る。思慮も考察も混亂して居る。精神の一張一弛も固より混亂を免れない。

自分は一日大道を濶歩しつゝ、突然として思ひ浮んだ。自分の反抗的奮鬪の精力が、これだけ強堅であるならば、一切迷ふことはいらない。三人の若い者を一人減じ自分が二人だけの勞働をすれば、何の苦勞も心配もいらぬ事だ。今まで文藝などに遊んで居つた身で、これが果して出來るかと自問した。自分の心は無造作に出來ると明答した。文藝を三四年間放擲して終ふのは、聊かの狐疑も要せぬ。

肉體を安んじて精神を困めるのがよいか、肉體を困めて精神を安んずるのがよいか。かう考へて來て自分は愉快で堪らなくなつた。我知らず問題は解決したと獨語した。

五

水が減ずるに從つて、跡の始末もついて行く。運び殘した財物も少くないから、夜を守る考

も起つた。物置の天井に一坪に足らぬ場所を發見して茲に蒲團を展べ、自分はそこに横たはつて見た。これならば夜を茲に寢られぬ事もないと思つたが、茲へ眠つて終へば少しも夜の守りにはならないと氣づいたから、夜は泊らぬことにしたけれど、水中の働きに疲れた體を横たへて休息するには都合がよかつた。

人は境遇に支配されるものであると云ふことだが、自分は僅に一身を入るゝに足る狹い所へ横臥して、不圖夢の樣な事を考へた。

其昔相許した二人が、一夜殊に情の高ぶるのを覺えて殆ど眠られなかつた時、彼は嘆じて云ふ。かういふ風に互の心持よく圓滿に樂しいといふ事は、今後今一度と云つても出來ないかも知れない、いつそ二人が今夜眠つたまゝ死んで終つたら、是に上越す幸福はないであらう。眞にそれに相違ない。此のまゝ苦もなく死ぬことが出來れば滿足であるけれど、神樣が我々にさう云ふ幸福を許してくれないかも知れない、と自分もしんから嘆息したのであつた。

當時は只一場の癡話として夢の如き記憶に殘つたのであるけれど、二十年後の今日それを極めて眞面目に思ひ出したのは如何なる譯か。考へて見ると果して其夜の如き感情を繰返した事は無かつた。年一年と苦勞が多く、子供は續々と出來てくる。年中齷齪として歳月の廻るに支配されて居る外に何等の能事も無い。次々と來る小災害のふせぎ、人を弔ひ己を悲む消極的營みは年として絶ゆることは無い。水害又水害。さうして遂に今度の大水害にかうして苦鬪して居る。

二人が相擁して死を語つた以後二十年、實に何の意義も無いではないか。苦しむのが人生であるとは、どんな哲學宗教にも云うてはなからう。然かも實際の人生は苦しんでるのが常であるとは如何なる譯か。

五十に近い身で、少年少女一夕の癡談を眞面目に回顧して居る今の境遇で、是をどう考へたらば、茲に幸福の光を發見することが出來るであらうか。此の自分の境遇には何所にも幸福の光が無いとすれば、一少女の癡談は大哲學であると云はねばならぬ。人間は苦しむだけ苦しまねば死ぬ事も出來ないのかと思ふのは考へて見るのも厭だ。

手傳の人々がいつのまにか來て下に働いて居つた。屋根裏から顏を出して先生と呼ぶのは、水害以來毎日手傳に來てくれる友人であつた。

(明治四十三年十一月)

「奥の細道」

「奥の細道」はさすがに感慨の溢れた句を以て滿たされて居る。才を弄して徒らに多作をせぬ、抱負と自重とが、一句々々に窺はれて敬服に堪へないものがある。

世の人の見付けぬ花や軒の栗

句才を恃み技巧を喜ぶ作者であつたなら、から平易に詠じることをせぬであらう。感嘆の情を曲折なく歌つた處に餘韻がある。聲調にどことなし響のあるのは之れがためであらう。平凡とか陳腐とか云ふことを許り氣にして居る人達には餘り面白く感じない句であらうが、作者の嘆聲がありありと讀者に聞えるやうな味ひがある。

笠島はいづこ五月のぬかり道

「笠島はいづこ」の一語如何にも詞が自然で嘆息の有の儘である。かねてなつかしく思つて來た藤中將實方の遺蹟、聞けばそれ程遠くもないと云ふが、此の五月雨には[illegible]ないとの嘆息を、其のまゝに何等の句作の巧もなく敍したのである。着想も修辭も極めて平凡なものであるが、嘆息其の儘の表現に、同情せずには居られない味ひがある。([illegible])

柿本人麿論

始め[illegible]

藤原宮御宇天皇代

藤原宮御宇は持統天皇の御代である。

過近江荒都時　柿本朝臣人麿作歌

天智天皇六年、飛鳥岡本の宮より、近江の大津宮に遷都せられ、僅に五年にして天皇崩御、翌年五月大海人大友二皇子の事あり、大海人皇子は飛鳥浄御原宮に位に即かれたので、ここに大津宮は荒都と見做したのである。

玉手次。畝火之山乃。橿原乃。日知之御世從。阿禮座師。神之盡。樛木乃。彌繼嗣爾。天下。所知食來。天爾滿。倭乎置而。青丹吉。平山乎越。何方。所念計米可。天離。夷者雖有。石走。淡海國乃。樂浪乃。大津宮爾。天下。所知食兼。天皇之。神之御言能。大宮者。此間等雖聞。大殿者。此間等雖云。春草之。茂生有。霞立。春日之霧流。百磯城之。大宮處。見者悲毛。

たまだすき　畝火の山の　橿原の　ひじりの御世よ　あれましし　神のこと　こと　つがの木の　いやつぎつぎに　天の下　しろしめしける　虚みつ　大和を置きて　青丹よし　奈良山を越え　いかさまに　おもほしけめか　天ざかる　ひなにはあれど　石走る　近江の国の　ささなみの　大津の宮に　天の下　しろしめしけむ　すめろぎの　神のみことの　大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここと云へども　春草し　茂く生ひたる　霞立つ　春日のきれる　ももしきの　大宮ところ　見ればかなしも

此の[illegible]、先づ其の文字と訓方とを正しておかなければならない。此の長歌は諸本に甲と乙との差が甚しい。何れを正しいと容易に定めかねるのであるが、其の[illegible]穏當に近く[illegible]定ある外はない。[illegible]「天下所知食來」の[illegible]には「天下所知食之乎」とある。古義などには此の方をとしてゐる。併しこれは「所知食來」の方がよい。[illegible]代々の天皇が悉く天下を知ろしめしてきた、其の大和を置きて云々との歌意であるから「知ろしめしける」の方がよい。[illegible]「青丹吉平山越」一本には「[illegible]平山越而」とあるが、「平山乎越」といふ[illegible]

[illegible]

[illegible]の間に[illegible]。[illegible]雖不有[illegible]あるとしてあるが意味のない事であるから[illegible]。元来此の二句は無くてもよい詩である。ひなにはあれどと云つても、ひなにはあらねどと云つても、作者の心持次第、何と云つても差支のない處であるから、殊更に落字があるなどと詮議する必要はないのである。「春草之茂生有。霞立春日之霧流」の四句別本には、「霞立春日香霧流。夏草香。繁成奴留」とある。古義に從つたとしとし、宣長の重[illegible]亦考には前のをよしとしてある。[illegible]宣長の説[illegible]つた。それで[illegible]に少しく考へねばならぬは、他

所の相違には大抵、寫し誤りの爲に文字の違つたものと思へるが、此の四句の相違は、決して寫し誤りではないから、必ず二樣に傳つたものと見るの外は無い。作者か始め「春草之茂生有」と作つて後に「霞立春日香霧流」と訂正したものか、或は始め「霞立春日香霧流」と作つて後に「春草之茂生有」と訂正したものかは、今判定する由がない。予の私見を以て見れば、人麿の作風は頗る言語の跡を弄んだ跡があるから、或は「春草之茂生有」の句を平凡なりとして、「霞立春日香霧流」と後で直したのかも知れない。評して云へば「霞立つ春日か霧れる夏草か繁くなりぬる」たとは、頗る淺薄なひねくりと云はねばならぬ。要するに何れを人麿の本意と輕々しく決定することは出來ないのである。けれど、二樣の傳へがある以上は、自分の宜しいと信ずる方を採るの外はない。從て評釋も予の良いと思ふ方に就いてするの外はないのである。此の長歌の大意は、

畝火山の橿原に宮を定め給へる皇祖の御世より、あれましし神のことごとくが、次々と天下を治め來れる、其の大和を置きて、奈良の山を越え、如何なる思召にか、近江の國の大津に御遷りありて、ひなではあるいたことに天下を治め給ひけむ、神の尊の大宮は、此處と聞くけれど、見れば春草がいたく茂りつつ荒れて居る、霞立つ春の日のかすめる、大宮の跡處を見れば悲しい。

と云ふのである。

予が人麿の作歌につき、多くの不滿を感ずる樣になつたは、餘程以前よりの事である。子規子世を去りて未だ間もなき程の頃からと記憶する。爾來人麿の作歌に注意を絶たないのである。考究熟索如何に考へても、人麿の作歌は世に買被られて居るとの念が去らないのである。予は必ず一度大いに人麿の作歌に就いて論ずる所あらんとの覺悟ありしも、予の境遇を以て人麿の作歌を論ずるは、其の責任の極めて大なるを感ずるものから、容易に筆を下し得なかつたのである。然るにたまたま萬葉新釋の稿を進めて、人麿の作歌に到着したのである。予は今此の稿に臨んで、愈多年胸中に蓄積せる問題を解決せねばならぬことの容易ならざるを思うて、覺えず戰慄したのである。此の長歌を評すれば、自然人麿を論ぜざるを得ない。歌人が人麿を難ずるは、宗教家が宗祖を難ずるの感がある。

予は稿に臨んで、數日猶一行を綴ること能はず、毎日萬葉集を手にして、徒に幾十回、漸く意を決し、書くことを得たのである。

賀茂眞淵は晩年に及びては上つ代の歌を味ひ見れば、人麿の歌も巧を用ゐたる所、猶後[illegible]につく方なり[illegible]と云はれ、人麿の歌にも猶[illegible]足らなかつた[illegible]明にして居る。さすがは眞淵翁である。[illegible]懷や詩品を察するに難からざるも、[illegible]惜しかつたは、翁自ら選べる晩年の歌は、[illegible]に遇うて居つた事である。從て現存の[illegible]中には、其の見識に伴うた作歌がない。[illegible]な翁の意見も多く世に知られずに終つた。[illegible]春海の徒は[illegible]より凡庸で、老師の高[illegible]を得るに至らなかつたのが遺憾と云はねばならぬ。

予が人麿の歌に對する不滿の點を云へば、

(一)[illegible]りあつて質[illegible]に伴はざるもの多きこと。

(二)[illegible]が往々[illegible]に一致せざる事

(三)[illegible]の自然的發現を[illegible]せずして形式に傾き[illegible]を悅べる[illegible]ある事

(四)[illegible]に往々[illegible]を認め得る事

如此[illegible]に人麿の作歌[illegible]と

なると、[illegible]しては[illegible]に人[illegible]

恐れがあるから、以上の考を以て此の長歌を評することとする。猶一言して置きたきは人麿の歌に不滿があると云うても、人麿の歌悉くが面白くないと云ふのでは勿論無いのである。人麿の歌にも隨分物足らぬ歌があると云ふに外ならぬのである。

此の長歌を篤と熟讀吟味して見ると、言語が徒らに豐富で、内容は甚だ貧弱なものである。闇雲と枕詞を使用して居るが、其の枕詞が殆ど虚飾的に配列されてある感がある。虚飾的言語が多過ぎる爲に、作者の嘆息した情意の動きを感ずること甚だかすかなのである。

此の評釋を始めてから、長歌六七篇あつたが、此の歌程實質の乏しい歌はない。額田王の、春山の花と秋山の紅葉とを判じた長歌は、其の折已に云へる如く、最も作爲を以て勝れた歌で、實質的内容の無い作であるが、それでも言語の飾りが少く、一貫せる意義は全篇に充實して居るから、少しも讀者に空虚の感を起させない。然るに此の長歌は、第一に意義の統制が十分でないのに、虚飾的枕詞が亂用されて居るから、殆ど内面空虚の感がある。情調の弛緩甚しく、熟讀して漸く其の意義を解し得る譯であるから、迚も一讀して刺戟を得られるやうな纏つた情調は現れて居ないのである。

第一皇祖の事蹟を歌ひ起すに、「畝火の山の橿原の日知りの御世云々」とは餘り餘所々々しく餘りすらすらと敍し過ぎて重みが無い。從て語調にも又少しも力といふものが無い。其の次の、「あれましし神のことごと樛木のいやつぎつぎ云々」も餘り引き延し過ぎて冗漫に陷つて居る。詞を綾なした技巧許り耳立つて、皇祖より歷代の神々が次ぎ次ぎ天下を治めるといふが如き、尊く嚴々しき感じは少しも現れて居ない。くどくどしい飾詞を交へて事細かく云ふから、調子が纖弱になるのである。卷首にある雄略天皇の御製中、

虚見津。山跡乃國者。押奈戸手。吾許曾居。師吉名倍手。吾己曾座。云々。

其の語調の重々しく而かも強き彈力あるを見よ。試みに比較せば、「あれましし神のことごと樛の木のいや次ぎ次ぎ云々」如何に語調の纖く弱きかを知ることが出來よう。樛の木のなどいふ詞此の場合實に無要なる贅語ではないか。歷代の御門を神と云へる詞の次へ、樛の木のいやつぎつぎとは、實に莊嚴な意義とこれを表示せんとする言語との關係を無視した言使と云はねばならぬ。作者が自ら歌はんとする感情には何の頓着もなく、只其の詞の口音に調子を取つて、つがの木のいや次ぎ次ぎと續けた人麿の考が解らない。枕詞は即ち飾詞で直接に意義の働かぬが常であれど、さりとて飾詞であるからとて、漫に亂用すべき筈のものではないこと云ふまでもない事である。例へば「虚見津山跡乃國者」と云ふ場合には、虚見津と云ふ枕詞が甚だ適當せるを感ずるのは、詞の意義が大和を主とせるに依るものか。詞は少しの相違なれど、「虚見倭乎置而」と云ふ時には、虚見津なる飾詞の感じが著しく前とは變つて居る。思ふに「大和を置きて」といふ詞の意義は大和を主と云へる詞ではない。即ち「大和を置きて云々」と云へる其の「置きて」と云へる意義が主である實用語であるから、そこに飾詞を用ゐるのが已に無意味な事であるのだ。されば、虚見津なる詞が、前者に適して後者に適せぬのであらうと思はれる。

此の長歌前大半の意は、皇祖神武天皇以來歷代の天皇悉くが、天下を知ろしめした其の大和の國を置いて、如何なる思召で大津宮へ遷らせ給へるのか、との意であるから、此の意味をもつと刺戟強く簡潔に云へばよいのである。

然るに其の意味とは寧ろ間接な、「玉手次畝火之山」とか「橿原乃日知之御世」とか冗漫に締りなく言語を配列するから、調子に勢も響も無いのである。「倭乎置而」といふ詞は、前十句の意を此の一句に受けた程の重い詞であるのに、それと對句的に「平山乎越」の一句を置いたは何の爲か。此の一句は全く孤立の一句であるのを、此所へ插入した作者の考が解らない。此の長歌の內容から云へば、「平山乎越」など必要は少しも無いのだ。强ひて無理に拵へた對句の、寧ろ內容の統制を妨げるものなることは前に屢云うてある事である。「天離夷者雖有」も前にも云へる如く、殆ど此所に無要な詞である。「八隅知之吾大皇王」又は「現津神」「神ながら神さびいます」など歌はるる天子が、大和より隣境近江位へ遷都せられたとて、天離鄙であるのないのといふ事前後つり合のとれない云ひ方である。要するに贅語に過ぎない。以下「石走近江」だの「樂浪の大津」だのと、何でもない事を物珍らしさうに、長々と平凡な言語を列べてゆく作者の精神が甚だ解らない。作者の造語ででもあれば兎に角、斯る平凡陳腐な詞を列べたのでは、詞の綾にもならない。

試みに無要に感ずる詞と、無要に見えて却て働く詞との差別を云ふならば、中皇命使間人連老獻歌の內、「朝獵爾今立須良思、暮獵爾今他田渚良之」これらの詞、「今立たすらし」と云ふ意味の上に「朝獵夕獵」などいふ詞を用ゐるは、全く無要の詞に似て居るが、此の歌の解の所に云へる如く、天皇の御獵に立ち給ふさまの物音、頻りに聞えきて心せはせはしく浮立つさまが、此の無要に似た詞の調子に依て現れて居るのである。されば、一見無駄詞に見えても、決して無駄詞でなく生々と働いて居る詞である。これに比べると、「石走淡海國乃樂浪乃大津宮云々」の如きは、一見した處では、有要な詞の如く見えるが、詞書で已に大津の宮といふ事は判つて居る。大津と云へば近江といふ事も判り切つて居る。この判り切つてる事を、事々しく飾詞まで添へて述べ立てるのは全く無要の贅語で、冗漫ならざるを得ないのである。猶言へば近江の國の大津の宮といふ詞には其の地名を說明した外に何等の詩趣の容積はないのである。容積のない言語即ち虛詞である。其の虛詞に冠するに一々枕詞を以てする。それでは內容の充實しやうもなく、調子の緊張しやうもない。是れを以て見るも人麿は慥に歌を拵へた弊に陷つた人である。「大宮者此間等雖聞大殿者此間等雖云」の句は作者は正しく其の地を踏んで親しく宮地の跡を見て居るさまである。然るにも係らず、「石走る近江云々さざ波の大津云々と如何にも、餘所々々しい詞つきではないか。意義の脈絡も言語の調子も甚だ亂雜である。「春草之茂生有霞立春日之霧流」も荒都の形容として餘りに平凡である。「百礒城之大宮處見者悲毛」此の句の場合に「百礒城之大宮」など云ふは矢張枕詞の濫用であらう。大宮といふ實體的の場合にこそ、百敷といふ枕詞もきくのである。荒都に歸した大宮の跡處といふ所にまで、百敷などと飾詞を用ゐる必要はあるまい。枕詞も此の如く場合嫌はず用ゐては全く無要の長物となるの外はない。

人麿は言語の綾を悦ぶの弊に陷り、淺薄な形式趣味に憧憬した跡があると見ては居つたが、是程に言語を亂用して居るとは思はなかつた。つまり言語を綾なす技が其の弊を導いたのである。

更に、猶一つ此の長歌の大體に就いて評するならば、前半に天智天皇が、何故に神武天皇以來歷代都された大和を置いて近江へ遷都されたのか、如何なるお考でありしかと怪しみ、後

[illegible]の御代から天下を知ろしめした大宮の跡が[illegible]のを見るに悲しいといふのである。此の前半と後半との關係から合して見れば、歴代の皇都に背いて遷都された大津の宮を嘆くといふ意である。[illegible]、前[illegible]、[illegible]は評するけれど此の前[illegible]きことではない。されば荒都を見て遷都を[illegible]した[illegible]は、中興の大業を[illegible]の業績は、讃すべき[illegible]の都の荒廢を[illegible]としても[illegible]天皇の御代の宮に對[illegible]の大宮の宮々と讀むのではなくとも、[illegible]具體的に云はば作りものなどと思はれる。前半は只如何に歴代の宮を遷されたかを序しも、後半は只天下を知ろしめした跡の荒廢に荒れたといふだけには、感懐の[illegible]に餘りある用意さる。人麿の意力も疑はれるのである。全篇を通じて理想の云ふべきなく、感情の表現もせたかである。從つて首尾一貫せる強い調子でない。無駄な句が多くて音調も乏しい。前に云つたが如く、文彩餘りありて實感に乏しきを憾むものである。而かも此の一篇においては、其の文詞も遂に成功したものではない。

反歌

樂浪之。思賀乃辛崎。雖幸有。大宮人之。船麻知兼津。

さざなみの　しがの辛崎　さきくあれど　大宮人の　船まちかねつ

一首の大意は、しがの辛崎はかはりなく都のあつた昔のままであるとも、都の無い今は大宮人の舟遊びすることもないといふ意で、それを擬人法にいひ[illegible]つたのである。

左散難弥乃。志我能大和太。與杼六友。昔人二。亦母相目八毛。

ささなみの　しがの大わだ　淀むとも　昔の人に　またも逢はめやも

一首の意は、しがの大曲（わだは水の流の曲りところをいふ）が淀むとも、已に都のない今となりては、大宮人の昔の人に又逢はれることはないといふのである。此の歌も前の歌と句法は同様の擬人法で、辛崎や大曲を心のある人のやうにして、榮えた昔を戀しがる心をあらはしてゐる。

二首同じ調子であるから合せて批評して置く。此の短歌二首はさすがに人麿の詩想を思はせる歌である。而も整へた内容を十分に纏めて居る。作者の情調も、整へ整つた調の上に現れて居るので、此の二首の短歌は決して長歌の比ではない。

擬人法の作物は、多くは才氣が目立つて拵物の嫌味に陥るのが常であるが、此の二首の如きは才藻と情調と能く一致して、一首の全體には何處となく、作者の感動せる心のさまが現れて居る。擬人法だからとて、作者の感動した心の調子が自然に現れて居れば、決して拵物の感じには墮らない。此の二首の如きは能く擬人法の成功したものである。長歌の構想の複雑なるに對し、反歌の二首は全く理智を離れて、現在の光景に感興の誘因となつて居るから、感じの纏りもよいのである。技巧の上にも表現の上にも遺憾なく成功せる二首の如きは、正しく人麿の人麿たることを思はせるのである。然し此の如く婉轉なる巧者な作法は、其の弊を流し易く、人麿其の人の如きも、此の上手な手法が累して、其の作品に幾分の匠氣を離れ得ざりしことを注意して置かねばならぬ。

（昭和四年十二月）

短歌

〔明治三十三年〕

牛飼

牛飼が歌よむ時に世のなかの新しき歌大
いにおこる

鎌倉懐古

焼太刀のほさきかませる皇子の御面偲ば
ゆ岩屋をろがめば

あだつ國蒙古の使時もおかずはや打ち
斬れとたけびけむかも

元の使者すでに斬られて鎌倉の山のくさ
木も鳴りふるひけむ

たぐひなきいさを立てたりし時宗の奥津城
どころ問ふ人もなし

こほろぎ

[illegible]

うからやから皆にがしやりて獨り居る水
づく庵に鳴くきりぎりす

[illegible]こえれば夜もすがら屋根の
裏べにこほろぎの鳴く

くまも[illegible]ちず家は水に浸れば夜戸に
よりてこほろぎの鳴く

只ひとり水づく荒屋に居殘りて鳴くこほ
ろぎに耳かたむけぬ

牀の上に牀をつくりて水づく屋にひとり
し居ればこほろぎのなく

ぬばたまのさ夜はくだちて水づく屋の[illegible]
さびしきこほろぎのこゑ

物かしぐかまども水にひたされて家ぬち
静かにこほろぎのなく

まれまれにそともに人の水わたる水音き
こえて夜はくだちゆく

さ夜ふけて訪ひよる人の水音に暫しこほ
ろぎ聲なきやみぬ

水つ[illegible]音もせずさ夜ふけて暫しこほ
ろぎの鳴きさぶるかも

〔明治三十四年〕

[illegible]　二首

龜井戸の藤も終りと雨の日をからかささ
してひとり見に來し

池水は濁りににごり藤なみの影もうつら
ず雨ふりしきる

〔明治三十五年〕

鎌倉なる大佛を[illegible]
る短歌　[illegible]

かまくらの大きほとけは[illegible]雲をみ笠と著
つつよろづ代までに

もろもろを救はむためと御佛の大き御
像ここにまつりし

みほとけの[illegible]の御光の[illegible]は
ち[illegible]にろぶとふ

こしかたのかさなる罪も御佛の光に消
えて消えざらめやも

[illegible]田の[illegible]のほとりによろづ代といます御
佛[illegible]みほとけ

〔明治三十六年〕

蛙　[illegible]首

さ夜ふけて寝ざしらに[illegible]く蛙[illegible]つとも
きこゆ二つともきこゆ

雨[illegible]戸おし庭うち見れば月くもり[illegible]の蛙
もおうげに鳴く

天地の春たけなはにをちこちと蛙鳴く野や晝しづかなる

青野原川ひと筋のながき日をものさびしらに鳴く蛙かも

〔明治三十七年〕

小園秋深し

朝なさな露の寒きにわが園の秋草なべてさびにけるかも

葉鷄頭をいやしとを云へ秋ふけて色さびぬれば飽かなくおもほゆ

秋草のいづれはあれど露霜に痩せし野菊の花をあはれむ

〔明治三十八年〕

無一塵庵歌稿　抄錄

釜は初代寒雉の作、茶碗は本阿彌光甫の作、草庵の重寶なり　錄九首

冬の夜のさ夜靜まりて釜の煮えさやさや鳴るに心しまりぬ

爐に近く梅の鉢置けば釜の煮ゆる煙がかかるその梅が枝に

此釜の煮えをしきけば秋の夜の蟋蟀が鳴くに似てを偲ばゆ

赤樂の色の潤ひ言に言へず繪にもうつせぬ境にしありけり

赤樂のゆたけき形の大き境徳川の世の盛おもほゆ

靜

さ夜ふけの空のしらしら霜白き月夜入江を人渡る見ゆ

浦遠く人等數多が小夜ふけに物も語らずしづしづゆくも

沖とほく夜舟の笛の音曳くやとよみは波の上渡り來も

霜けぶる入江遠舟火を二つ波も動かず小夜ふけにして

ゆきすぎし旅の人どち夜烟に驛遠のきぬ見れど見えなく

天地は眠にしづみ小夜ふけて海原遠く月朱にみゆ

〔明治三十九年〕

蓼科游草　抄錄

九日（八月）の夜、蓼科山の麓なる湯川の里に藤原志都兒を訪ふ。明る日予は志都兒に迎へられて瀧の湯に投ぜり。日毎に近き丘の上に遊びつつ、はがきといふものに珍らしき草花など寫して人々の許につかはしぬ。草のままに書き添へたる歌若首　錄五首

蓼科の山の奧がとおもひしをこは花の原天つ國原

うつそみの世の人われはひさ方の天の原なる花の名に知らず

天つ野のこの國びとは極しめて花は手折らず顧みもせぬ

下界の人の子われはゆくゆくと見る花ごとに折らまくするかも

天の原くしき花草のみさはにしてわが知る花は少なかりけり

合歡木

秋立つと未だいはなくに我宿の合歡木はしどろに老いにけるかも

秋の色に老いし合歡木の葉しかすがにほ宵々に眉作るあはれ

庭の木のさびれ合歡木の葉しひたぐる風ものものし荒れ來るらむか

此ゆふべ合歡木のされ葉に蜘蛛の子の巣がくもあはれ秋さびにけり

〔明治四十年〕

水籠十首　錄六首

八月二十六日、洪水俄に家を浸し、床上二尺に及びぬ。みづく荒屋の片隅に棚やらの怪しき床をしつらひつつ、家守るべく住み殘りたる三人四人が爲に十日許の水ごもり、いぶせき中の歌おもひも敢か心なぐさのすさびにこそ

水やなほ增すやいなやと軒の戸に目印し

つつ穩安からず
ものはこぶ人の入り來る水の音の室にとよみて闇靜すも
物皆の動きを閉ぢし水の夜やいや寒む寒むに秋の蟲鳴く
一つりのらんぷのあかりおぼろかに水を照らして家の靜けさ
からす戸の窓の外のべをうかがへば目の下水に星の影浮く
庭のべの水づく木立に枝たかく青蛙鳴くあけがたの月

〔明治四十一年〕

心の動き　錄六首

天つちのなしのまにまに鳴く蟲や咲く百草や彌陀を知るらむ
うつそみの八十國原の夜の上に光乏しく月かたむきぬ
まなかひに見えて消ゆともおのが光立てて消えなば悔いはあらめや
よき日には庭にゆさぶり雨の日は家とよもして兒等が遊ぶも
暫くを三間うち拔きて夜ごと夜ごと兒等が遊ぶに家湧きかへる
悦びをさながら聲にさけびつつ嬉しむ兒らにまつはる花むら

採草餘香　錄四首

夜ふかく唐辛子煮る靜けさや引窓の空に星の飛ぶ見ゆ
冬の夜の夜のしづまりにぺんの音耳に入り來つ我がぺんの音
秋更けて日和よろしき乾草のうましきかをり小屋に滿たせり
朝ぎよめ今せし庭に山茶花のいささか散れる人の思ひや

〔明治四十二年〕

春來

ぬば玉の夜の起居の春ごころおのづからおもふ梅のまがきを
雨やみて戸におとづるる風のむた寒さはゆりぬこの春の宵
春めきしこの一夜さに梅もやとこころ動けば書讀みがたし
さねさす相模の國の海の邊をおもひは馳けるその海のべを
釜の煮えのおほに鳴りつつ春とおもふ心はみちぬ夜のいほりに

二月二十八日九十九里濱に遊びて

人の住む國邊を出でて白波が天地雨分けしはてに來にけり
天雲のおほへる下の陸ひろら海廣らなる涯に立つ吾れは
天地の四方の寄合を渚にせる九十九里の濱に貝拾ひ居り
白波やいや遠白に天雲に相逢こまれり目もかすみつつ
高山も低山もなき地の果は見る目の前に天し垂れたり
春の海の西日にきらふ遠かにし虎見か崎は雲となびけり
砂原と空と寄合ふ九十九里の濱行く人ら蟻のごとしも

三月六日獨鶯を聞く

あたたかき心こもれるふみ持ちて人思ひ居れば鶯のなく
このあした小雨の庭に鶯やわか嬉しみをゆりつつ鳴くも
をさなげに聲あどけなき鶯をうらなつかしみおり立ちて聞く
朝霧に鳴くやうぐひす人ならば我れ常世

邊に家居せりけり

片側にたなごころなす我庭をみな[illegible]しも

[illegible]来鳴くうぐひす

鶯や背戸を近く汝が囀らふ[illegible]しき

に我れまけはてぬ

信州數日　抄録

[illegible]日八月、我等に[illegible]科の[illegible]

[illegible]共に[illegible]會[illegible]數日、

予は[illegible]科山[illegible]思ふ心いよい

[illegible]

思ひこひ生の結かけし葛科に老のこもり

を許せ山賤

葛飾にわかこひ來れば山つみのお花畑は

[illegible]もなく

ひさかたの天の遠けく[illegible]かに山は晴れ

たり花原の上に

秋草は千草が原と咲きさかり山なほ蒼し

八重[illegible]

信濃には八十の高山ありと云へど女の神

山の葛科ねれは

[illegible]をいくにさむと思ひつつ見つつも

とまる人の花原

[illegible]秋の夜の澄み[illegible]まれ

し[illegible]

山深き世に遠ざかれや蟲の音もあまたは鳴

かず月はさやけき

さびしさの極みに堪へて天地に寄する

命をつくづくと思ふ

〔明治四十三年〕

浮藻　（四首）

五月二十四日七枝子一周忌

み佛と離りし御名をささげ持ち吾がにひ

室にうつしまつりぬ

鵠の池はうづめて無しと云へど浮藻の

みだれ目を去らずあり

今日の日の夕ぐれ時と思ひくればつめた

き膚のありありと見ゆ

濁水の池を八十たび悔いめぐり歎きみ

しかど履物もなく

水害の疲れ

水害の疲れを病みて夢もただ其の禍の

夜の騒ぎ離れず

水害のこのあれを未だかへり得ず假住の家

に秋寒くなりぬ

四方の河溢れ開けはもろもろの叫びに充

ちし闇の夜の中に

針の目のすきまもおかず押し浸す水を

恐しく身にしみにけり

この水にいつこの宵と夜を見すれば我家

の方にうべやおきし鶏

闇ながら夜はふけにつつ水の上にたすけ

呼ぶこゑ牛叫ぶ聲

あつさの霜葉

飯綱のすそ野を高み秋はれに空とほく見

ゆ飛驒の雪山

ひさ方の天の時雨に道いそぐおく山道を

うらさびにけり

霜がれの天の高はら飯綱野の山口のとに

鳥居立ちたり

くさまくら戸隠山の冬枯の山おくにし

て雨にこもれり

うす日さす梓の紅葉しかすかに今かくる

らむただよふ天雲

おく山にいまだ殘れる一むらのあづさの

紅葉雲に匂へり

くぬぎ原くま笹の原見とほしの冬がれ道

を山ふかく行く

〔明治四十四年〕

冬のくもり

霜月の冬といふこのごろ只曇り今日もくも

れり思ふこと多し

我がやどの軒の高葦霜がれてくまりに立

てり葉の音もせず

冬の日の寒きくもりを物もひの深きところに寂しみて居り

獨居のものこほしきに寒きくもり低く垂れ來て我家つつめり

ものこほしくありつつもとなあやしくも人厭ふこころ今日もこもれり

裏戸出でて見る物もなし寒む寒むと曇る日傾く枯芝の上に

曇り低く國の煙になづみ合ひてさむざむしづむ霜月の冬

よみにありて魂靜まれる人らすらもこの寂しさに世をこふらむか

我がこもり深くいたらば土の底となる汝に靈通はむ

よみにありて思ほすらむこのうつそみの國を忘れて思はずし

天地も今ふ時あるをうつそみとよみとは遂に合はず悲しも

富士見野にて

富士見野は野をさはなりの花園に時雨の雲かかりゆきよし

秋草の花に雨ふす小松原木の子もさはに秋の茸は

すむ空ゆやがて這ひ來し白雲は人を花野にこめてつつめり

旅急ぐ我も行き得ず君も來ず秋草の花に立ちて歎くも

三日月湖にて

ひさかたの三日月の湖ゆふ暮れて富士の裾原雲しづまれり

夕ぐれの三日月のうみ雲しづみ胸しづまりぬ妹に逢ひし夜は

ここにして妹が戀しも夕雲のおりゐ沈める高野原の湖

秋の花の三日月の湖をあくがるる心きはまり死なむとおもひし

我が命

今の我れに侍ることを許さずば我が靈の緒は直にも絶ゆべし

苦しくも命はりつつ世の人の許さぬ罪を悔ゆる淵もなし

生きてあらむ命の道に迷ひつつ侍るよりも人に許さず

わが罪を我が悔ゆる時わが命如何にかなるらむ哀しよ吾妹

世に怖れつつ暗き牢獄に我が命僅かに生きて息づく吾妹

明るみに心怖ぢ怖ぢ胸痛み間なく時なく我れは苦しよ

悲しみを知らぬ人等の荒らけき聲にもわれは死ぬべく思ほゆ

世の中を怖ぢつつ住めど生きてあれば天地は猶吾を生かすかも

〔大正元年〕

招魂歌

あはれ究一郎、命を現世に寄すること僅に十三日、幽かに弱かりし汝が靈魂、今いづれのところにか迷ふ。明界の一員として、名は國籍に記されたるも、哀れみ、汝が佛と汝が名とを求むるもの、この世に於て只汝が父と母とのみ。我れ茲に高く汝が名を揭ぐ。究一郎、幽魂速かに汝が父母に歸れ。

いきの緒のねをいぶかしみ耳寄せて我が聞けるとにいきのねはなし

かすかなる息のかよひも無くなりてむくろ悲しく永劫の寝まり

よわよわしくうすき光の汝がみたま闇かに物に觸れて消にけり

かくまでにうすき命を汝[illegible]なにて汝れに寄すりけむ

汝がいのち夢と湊しき母の子よ母を離れて汝は寂しかり

朝しぬ日に[illegible]

なりし汝れよ吾が子と思へど
はらからの八人のことも夢のごといのち
かそけくみたま消ぬらむ
ほそほそと香の煙のかすかなりし汝が玉
の緒をつくづくと思ふ
春寒の小夜の火桶を灰掻きつつ胸のおく
がに汝が見ゆるかも
世に生くる命の力よわかりし汝が泣聲
を思へば悲しも
うらがなしくとはに眠れるその目を今
ひとたびと覆の衣取り
おもかげや神と尊くにほへりし淡しきみ
目をとはに偲ばむ

ほろびの光

おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとし
とと柿の落葉深く
鶏頭のやや立ち亂れ今朝や露のつめたき
までに園さびにけり
秋草のしどろが端にものものしく生きを
榮ゆるつはぶきの花
鶏頭の紅ふりて來し秋の末やわれ四十九
の年行かむとす
今朝の朝の露ひやびやと秋草やすべて幽
けき寂滅の光

静なる家　〔大正二年〕

おとろへし蠅の一つが力なく障子に這
ひて日はしづかなり
死にたるとおもへる蠅のはたき見れば
畳に落ちて猶うごめくも
廁に來て靜なる日と思ふとき蚊の一つ飛
ぶに心とまりぬ
壁の隅に蚊のひそめるを二つ三つ認めそ
のまま廁を出でし
物忘れしたる思ひに心づきぬ汽車工場は
今日休みなり
七人の兒等が遊びに出でて居ずおくに我
れ一人瓶の山茶花
日影去りて冷たくなりし靜けさを惜しむ
思ひに默坐つづけぬ
勾玉と鈴と柱に掛りありて床の山茶花我
れに靜けし

ゆづり葉の若葉

世にあらむ生きのたづきのひまをもとめ
雨の青葉に一日こもれり
ゆづり葉の葉ひろ青葉に雨そそぎ榮ゆる
みどり庭に足らへり
わかわかしき青葉の色の雨に濡れて色よ
き見つつ我を忘るるも
雲明るくゆづり葉のみどりいやみどり映
ゆる閑かを小雨うつなり
みづみづしき葉のくれなゐ葉のみどりゆ
づり葉汝は戀のあらはれ

小天地

松杉三十四本の植込に、いくつかの飛石、ささやかなる我小庭にも春の訪ひ來るを見る

朝起きてまだ飯前のしばらくを小庭に出
でて春の土踏む
まづしきに堪へつつ生くるなど思ひ春寒
き朝を小庭掃くなり
三四日寒氣のゆりし濕めり土清めなが
て生ける思ひあり
海山の鳥けものすら子を生みて皆生きの
世をたのしむものを
兒をあまた生みたる妻のうらなづみ心ゆ
く思ひなきにしもあらず
朝さえを靄とはなりぬ町のとよみ久常の
ごと我が小庭かな
漬物の汁に事足るあさがれひ不味しとも
せぬ兒等がかなしも
いとけなき兒等の睦びやしが父の貧しき
も知らず聲樂しかり

年譜

元治元年（一歳）
八月十八日、上總國山武郡成東町殿臺に生れた。伊藤良作の四男で末子である。

明治十年（十四歳）
一二年佐瀨春圃の塾に通つて漢籍を學んだ。

明治十四年（十八歳）
春上京、明治法律學校に入學したが、眼を病んだので秋には退學歸鄕した。

明治十八年（二十二歳）
十一月、上京、實業家として立たうとして、牛乳搾取場に雇はれた。

明治二十二年（二十六歳）
春、本所茅場町三丁目十八番地に牛乳搾取業を始めた。十一月、妻とくと結婚。

明治二十六年（三十歳）
この年から、伊藤並根について茶の湯を學んだ。同時に和歌も學んだらしい。

明治三十年（三十四歳）
この頃から二三年間、桐の舍桂子（關澄氏）の月次歌會に出席した。岡麓氏と初めて相識つたのはその席上であつた。

明治三十一年（三十五歳）
二月、新聞「日本」に「新自讚歌」と云ふものの發表せられたのを見て、伊藤春園の名を以て之を非議し又自己の和歌上の見解を述べて投書した。之は正岡子規の「歌よみに與ふる書」のいまだ出でざる前であつた。子規は、三たび歌よみに與ふる書の中に歌の調について春園の說を引いて評して居る。更に「人々に答ふ」の中にも駿臺小隱に代つて春園の說を評して居る。

明治三十二年（三十六歳）
五月、「日本」に長歌一首反歌二首を投じた。「さちを」の號を用ゐて居る。子規の周圍には根岸短歌會が四月から開かれて居つた。

明治三十三年（三十七歳）
一月二日、初めて正岡子規を訪ねた。これは一月一日の「日本」に子規の選した募集短歌「新年雜詠」に自作三首が採錄されてあるのによるのであらう。此の年「心の花」「大帝國」等に歌に關する意見を發表した。

明治三十四年（三十八歳）
二月、「ほととぎす」に「牛舍の日記」を載せた。三月から六月まで「心の花」に「新歌論」を發表した。十一月から翌年三月まで「讀新派和歌評論」を「心の花」に發表、所謂連作論はこの中に初めて論ぜられて居る。

明治三十五年（三十九歳）
一月、「俳星」に「根岸庵訪問の記」を載せた。「再び歌の連作趣味を論ず」を「心の花」四月號に發表。九月十九日正岡子規逝去。

明治三十六年（四十歳）
六月から長塚節、岡麓等と「馬醉木」を發行し、主に編輯のことに從つた。「新佛教」に「仁德天皇之御歌」を寄稿した。此の年の歌論中、「神樂催馬樂管見」は「心の花」に、「萬葉論」「新古今集愚考」等は「馬醉木」にのつた。

明治三十七年（四十一歳）
二月から「馬醉木」に「萬葉集通解」（後の「新釋」）を連載し始めた。此の年の歌論、「[illegible]漫草」、「上田秋成の歌」等がある。

明治三十八年（四十二歳）
此の頃から綱島梁川の信仰に傾倒して、殊に「歎異抄」を愛讀した。五月、「ほととぎす」に

寫生文『千本松原』を發表した。

明治三十九年（四十三歲）

一月、小說『野菊の墓』を「ほととぎす」に發表した。是は四月單行本として刊行された。

十二月、小說『[illegible]』を「馬醉木」に載せた。此の年『與謝野晶子の歌を評す』その他の歌論があつた。

明治四十年（四十四歲）

三月から本所の[illegible]歌會[illegible]、四十二年まで續いた。七月から「日本新聞」の[illegible]集短歌を選する。十月、「[illegible]歌と[illegible]」良寛の歌』を、十二月、「[illegible]」を「日本新聞」に連載[illegible]

明治四十一年（四十五歲）

一月、「馬醉木」を廢刊し、その事業を[illegible]が編輯する「アカネ」に引き繼ぐ[illegible]した。二月、「アカネ」に[illegible]、アカネとは關係を斷つに到つた。[illegible]藏眞[illegible]から「アララギ」を發行した。此の年[illegible]、四月[illegible]、十月[illegible]、十二月號[illegible]

明治四十二年（四十六歲）

五月二十四日[illegible]連中[illegible]に[illegible]て[illegible]を東京に移し、[illegible]

[illegible]月號『陽炎』、九月[illegible]、十月[illegible]、「アララギ」元月[illegible]感[illegible]、「新小說」[illegible]「文章世界」二月號『新萬葉[illegible]』、「中央公論」三月號『老獸醫』等。

明治四十三年（四十七歲）

五月茶室を庭中に建てて唯眞閣と名づけた。八月洪水、浸水床上四尺[illegible]一家を擧げて回向院畔に避難し、暫く[illegible]川畔に假住居をしなければならなかつた。「ほととぎす」に發表された大[illegible]の前日『水害[illegible]錄』等はその時の事實を書いたのである。歌論に『柿本人麿論』等がある。

明治四十四年（四十八歲）

三月から七月まで長篇小說『分家』（百十回）を「東京日日新聞」にのせた。是の年の小說[illegible]「ほととぎす」二月號『提灯』『[illegible]を書く[illegible]』、十月號『合歡木』、「婦女界」七八月號『[illegible]』[illegible]

明治四十五年・大正元年（四十九歲）

四月、牛込市外大島町に移轉した。[illegible]年の小說、「アララギ」二月號[illegible]、六月號『[illegible]』、『女』等[illegible]

と歌の生命』『叫びと話』『叫びごもり』『[illegible]作の歌に就いて』『表現と提供』『我が命』に就いて』等。此の頃から「アララギ」周圍の人々とも歌の上に意見の隔りが次第に深くなつて居た。

大正二年（五十歲）

三月、本所茅場町に殘つて居た住宅をも賣り、一家は大島の牛舍の方に移つた。ただ茶室だけは[illegible]して[illegible]間はそこに來て讀書した。

五月[illegible]、「日本人」に『御製より觀奉り[illegible]』、「文章世界」に小說『落穗』を[illegible]。七月[illegible]日午前二時大島町の家で[illegible]を發し、[illegible]絕命した。翌日遺骸を[illegible]知友門人等通夜し、[illegible]の墓地に埋葬した。[illegible]『叫びと話』等[illegible]、無一塵庵主人、[illegible]八、[illegible]別號である。

長塚節集

序

長塚節は明治十二年四月三日、茨城縣結城郡岡田村字國生に生れた。父を源次郎といひ、母をたかといふ。水戸中學在學中、神經衰弱症のため中途退學し、東京に上つて治療靜養し、その間に「新小説」その他の雜誌に短歌などを投稿してゐた。

そのうち、「日本新聞」に正岡子規の『歌よみに與ふる書』(明治三十一年)といふ論文が載り、ついで、『人々に答ふ』等の文章が載つたので、潜心それを讀み、子規の歌を盡く諳記するまで讀んだ。

さうして遂に、明治三十三年三月二十八日、二十二歳にして正岡子規の門に入り、主として和歌、それから俳句、寫生文を學んだ。子規歿後、雜誌「馬醉木」に據つて、短歌、歌論、寫生文を發表し、「アララギ」が發行になつてから、それに據つて主に短歌を發表した。

節は家にあつては農事を勵み、竹林の栽培をなし、村里の青年の向上を計つた。また旅行を好み、東北から西海まで足跡が及んで居り、短歌長歌の主な部分はこの旅行から資料を得て居る。明治四十四年十一月、喉頭結核と診斷されて、以來、東京、福岡、京都の諸專門家の治療を受け、大正四年二月八日、行年三十七歳で、九州帝國大學醫科大學附屬病院で歿した。

節は、正岡子規のはじめた根岸短歌會の歌人として、寫生流萬葉調の歌人として、不易の作を幾つも殘した。その歌調森嚴にしていやしくもせず、一讀堅くるしきまでに緊張した歌を作つてゐる。そして常に空想を排して實事に卽いた。晩年、氣品、冴えといふことを唱へ、それを說くに東洋美術の眞髓を以てした。晩年の作、『鍼の如く』二百有餘首は、その唱道を具體化したものである。

節の本領は和歌にあるが、子規の唱へた寫生文から入つて遂に小說を作るに至つた。世に、寫生文派の小說、「ホトトギス」派の小說といふのは卽ちそれである。寫生文家として、寒川鼠骨、坂本文泉子、寫生文派小說家として、夏目漱石、高濱虛子、伊藤左千夫等と並び稱せられた。

短篇には、『芋掘り』『開業醫』『おふさ』『教師』『隣室の客』『太十と其犬』『燒炭のむすめ』などがあり、長篇には『土』がある。『炭燒のむすめ』は節の小說に手を染めた初めのもので、假潔簡潔と文章を煉つた、その苦心について節自身幾たびも話したことがある。長篇『土』は、田園農夫の生活を描寫したもので、これは、いまでも讀者が絕えない。

節は、『土』完成後、刑務所内に於ける一人の罪人の顚末を書きたいと云つてゐた。これは實際に本づいた材料を貰つたのであつたが、刑務所内のことを實地に經驗しなければ到底書けぬと云ひながら其儘になつてしまつた。

節の小說は、本邦自然主義の盛な時代にあつたので、その觀相、手法の點に於て、その方嚮の稍異るところがあり、ために當時にあつては、餘り節をして有名にしなかつたものである。また、今から顧みて、その文體などにも、人の謂ふ寫生文派の相通ずる偏癖も幾分無いことはない。

併し節のものは、正直に細かく實際を見ることに心掛け、大家の野心なくして平凡なものは平凡のままに書いたから、規模の雄大な點に乏しいけれども、節歿後もはや可なりの年月を經てたほ色の褪せるやうなことはなく、却てこのごろになつて世人から顧られてゐるのは愉快なことである。

昭和五年四月

齋藤茂吉

芋掘り

一

小春の日光は岡の畑一杯に射しかけて居る。岡は田と櫟林と鬼怒川の土手とで圍まれて、他の一方は村から村へ通ふ街道へおりる。田は岡に添うて狹く連つて居る。田圃を越して竹藪交りの村の林が田に添うて延びて居る。竹藪の間から草家がぽつ〳〵と隱見する。箒草を中途から伐り放したやうに枝を擴げた欅の木がそこにもこゝにもすく〳〵と突つ立つて居る。田にはもう掛稻は稻で稻を掛けた竹の「オダ」がまだ外されずに立つて居る。「オダ」には黄昏に鴫でも來て止る位のことであるだらう、見るから寂しげである。鬼怒川の土手には篠が一杯に繁つて居るので近くの水は其蔭に隱れて見えぬ。のぼる白帆は篠の上に半分だけ見えて然かも大きい。土手の篠を越えて水がしら〳〵と見えるあたりはもう遙かの上流である。だから篠の梢を離れて高瀬船の全形が見える頃は白帆は遙かに小さく疊まつて居る。土手の篠の上には對岸の松林が連つて見える。更に其上には筑波山が一脚を張つて他の一脚を上流までのばして聳えて居る。小春の筑波山は常磐木の部分を除いては赭く焦げたやうである。其蒼い頂上に點を打つたやうに觀測所の建物がぽつちりと白く見える。稍不透明な空氣は[illegible]針の尖でつくやうに其白い一點を際立つて眼に[illegible]ぜしめる。櫟の林は此の狹く連つて居る田と鬼怒川との間をつないで横につゞいて居る。田も遙かのさきは櫟林に隱れて、鬼怒川も上流はいつか櫟林に見えなくなる。櫟の木はびつしりと赭い葉がくつついて居る。岡の畑は向うへいくらか傾斜をなして居るので中央に立つて見ると櫟の林は半隱れて低い土手のやうに連つて見える。林の上には兩毛の山々が雲を戴いてそれがぼんやりと白い。此の如き周圍を有して岡の畑は朗かに晴れて居るのである。土は乾き切つて既に二三寸に延びた麥は岡一杯に薄く綠青を塗つたやうである。そこにもこゝにも百姓が小さく動いて居る。麥をうなつて居るものもあるが大抵は芋掘りの人々である。四五人の手で芋を掘つて居る畑の縁には馬が茶の木に繋いであつて俵が轉がつて居る。此俵があれば遠くからも芋掘りの人々であることが解る。馬は退屈まぎれに茶の木をむしることがある。其時一人が駈けて來て轡をがちんと一つ極めつけて叱り飛ばせば復たおとなしくなつてばさり〳〵と尾を動かして居るのである。各自の手もとは忙しい。然し岡は唯長閑なさまにある。日は稍傾いた。忽ち筑波山の絶頂から眩い光がきらきらと射して來た。毎日同一の時刻に此光は此岡へ強く射しかけて來る。百姓の或者は筑波山で火を燃すのだらうなどといつて居る。然しそれは觀測所のガラス窓が日光を反射するのである。岡の畑に變化が起つたとすれば其時間に唯是丈である。ガラス窓の反射はやがて消えてしまつた。芋掘りの人々は勿論此光に知らなかつた。兩毛の山々がぼんやりした日は西風が吹かないので隨て暖かい。暖かい日は土いぢりの芋掘りには此上もない日和である。[illegible]次とおすかも街道へおりる口の小さな畑で芋を掘つて居る。[illegible]づかりの[illegible]は葉へ大見[illegible]あて[illegible]次の芋畑へも散らばつて居る。若いよわ〳〵しい小麥が生え出して居る。小麥は芋の間に二畝

づつ蒔かれてある。芋の莖はぐつたりと萎でたやうである。傍へて見ると芋は恐ろしい強情なものであつた。秋の風が日となく夜となく根氣よくいひ寄つてもどうしても厭だ／＼といひ通して首を横にばかり振つて居た。秋風が腹を立てて其廣い葉を吹つ裂いてもたうとういふことは聽かなかつた。それが秋の或夜に一夜そつと眞白な霜が天からおりたら理窟はなしにぐつたりと俛いてしまつたのである。おすがは芋の莖を菜刀でもとから切つて先へ出る。菜刀といふのは庖丁のことである。後から勘次が鍬のさきで芋の株を掘り起す。ぴか／＼と光る鍬の先をざくつと芋の株へ斜に突き立ててぐつと柄を捩ちあげると大きな土の塊がふはりと浮きる。鍬をそつと拔いて他の株へ移る。小芋へ障らぬやうに極めて丁寧に掘つてはさきへ／＼行く。おすがは莖を切り卸ると後へもどつて掘つてある大きな土の塊を兩手で二尺許り揚げてどさりと打ちつける。こまかな土が崩れてこぼつた芋の塊から白い毛のやうな根がぞろつとあらはれる。それから芋と芋とを兩手の平でぶりぶりとはがしてやがて俵を立てて入れる。さうして穴の土を手のさきでならして先の塊をほぐす。乾いた畑に凹つた丸い穴のあとが一つづつ殖えて行く。日光が其土をあとから／＼とこまかに乾かして行く。芋の株を掘り畢つた時に勘次は鍬へついた土を草鞋の底でこき落して茶の木の株へ腰をおろした。鉢卷をとつて額を拭つて居る。小春の暖かさはちく／＼と痒いやうに暑いやうに毛穴から汗がにじみ出すのである。おすがも勘次の側へ來た。うつぶしに屈つて居た爲かおすがの顏もほてつて居る。村の若者が一人馬へ大根を積んで來た。若者はぱかぱかと四つ脚の拍子よく步せて行く馬の後から手綱を延して附いて行く。

「どうした、奴等がつかりしたか」

勘次を見て若者はいひ捨てゝ去らうとした。勘次はそれには頓着なしに

「大根一本おいてけ」

立ちあがりながら叫んだ。若者は

「どう／＼どうよ」

馬の口もとを止めて、ぎつしり括つた荷繩から一本引つこ拔いて

「そら二人で喰ふんだぞ」

と勘次を目掛けて抛つた。大根は茶の木へがさりと止つた。勘次は菜刀で大根をむいて噛りはじめた。大根には幾らかの辛味がある。勘次の乾いた喉にはそれでも佳味かつた。其所へ又一人鍬を擔いで田圃からあがつて來たものがある。

彼は勘次を見ると

「なんのざまだ奴等アハヽヽ」

唐突に惡口をいひ出した。

「いゝから羨むなえ」

勘次はすぐにやり返す。

「篦棒いつまでたつても夫婦にも成れねえやうな奴等なんでやつかむかえ。田舎奴きかなけりや喉ッ首でも押してやれ。やくざな野郎だあ」

平生惡口をいひ合うてる間柄だけに思ひ切つた憎まれ口を叩いて去つた。おすがは彼が來た時すぐに立つてうつぶした儘てつきのやうに土の塊をほぐして芋をぼり／＼とはがして居た。勘次も別に氣にするやうでもなくおすがと別のうねの芋をはがして俵へ入れはじめた。

二

勘次とおすがの間柄は久しいものである。それで今では拾て手のない日蔭者といふ形に成つて居る。

百姓の間に生れた子は隨分粗末な扱ひである。お袋が畑で仕事をして居れば笠の中へ入れて畑境の卯つ木のもとへ捨てておく。泣いて

泣いて火のついたやうに泣いても滅多に構へつけることもない位だから随て營養も不足なのか六つ七つまでは發育の悪い子も數々あるが、手足がついたとなると容赦もなくこき使はれるので其故か十七八に成ると驚く程立派な體格を持つやうになる。それと同時に女の一人位は拵へるのである、假令そんなことが無いにしても同年輩の誰彼と乾度夜遊に出掛ける。それがだん／＼募つて來ると村の隅から隅までふらふらと押し歩いて小娘でもある家の風呂を覗くといふやうになる。余次も年頃來た時には自然夜遊に屈託した。さういふ場合に兩親はどうするかといふと、自分が以前に其覺えがあつて格別悪いこととも思はないし一向平氣といふのではないが仕方がないといふ位なものだ。それだから繩の一房も綯ひ出すとか朝草の一籠も餘計に刈るとか仕事に差支がなければ我に一言もしみ／＼した小言などはいはぬが普通である。余次が夜遊に屈託した頃余次の家からでは離れて居るが同じ村のうちで幾らか暮しの樂な因業者の夫婦があつた。代々其家は仙右衛門といつたので其が訛つて「センネモドン」と呼ばれて居た。何時の間に誰が發議したか所謂小若い衆と稱する余次等の仲間が其家に悪戯をはじめた。丁度霜が二三度おりた頃で宅地へなつた柿で串柿を拵へて日南の壁へ吊したのがあつた。串柿は下で胡麻の殼を焚けばいつの間にか落ちて了ふといふので或夜そつと其串柿を外して散々いぶして復たそつと掛けて置いた。案の如く柿はそれから一つ落ち二つ落ちて今年の柿はどうかしたといふうちに滿足に好上つたものはなくなつた。固より悪戯されたといふことは知らう筈がない。悪戯としては極めて成功したのである。悪戯者はつけあがつた。或時麥や麁朶や日頃汗水垂らして掘つた木の根などが壁に堆く積んであつたのを大勢で持ち運び／＼入り口の戸を閉して一杯に積んでおいた。翌朝水汲みに出ようとした女房が見付けて騒ぎになつた。夫婦は火のやうになつた。口もきかずに半日かゝつてもとの壁際へ積み直した。若い衆の悪戯であることは分明であるが扨て手の出しやうがない。深く遺恨に思ひながら我慢をしてしまつた。おすがの家は此の仙右衛門の家からうしろで屋敷つゞきである。其近邊では一寸物持で土藏も一つは立ててある。近所隣のものは皆おすがの家の風呂を貰ひに來る。仙右衛門の女房が或晩風呂を貰ひに行くと若い衆がそこらに出沒して居るのを見た。そこで早速おすがの兄貴に告口をした。兄貴が誰だ／＼といひながら裏戸へ出るとばた／＼と五六人で逃げ出す足おとがした。然し此風呂場迄追はれるのは始終あることで追ふ者も長追はしない。それは自分の家の娘に間違があつてはならないといふのだから娘が湯上りの赤い顔をして何處でも縫つて居ればそれで安心が出來るからである。逃げた若者は暫く藪にでも隠れて居てはのこ／＼と出て來る。仙右衛門の女房は蟲喰だらけの菜漬が甘いといふのでむしや／＼嚙つて喰べ居つたので一番あとではひることになつた。裸になつたまゝがらつと裏戸を明けて風呂場へ出掛けて行つた。おゝ寒いといひ乍ら風呂の蓋をとつて手拭持つた手を突込んだ。さうしてアッと驚いた聲で怒鳴つた。風呂の湯がちつともなくなつてるといふ騒ぎである。寒さが急に身にしみて慄へて居る所へ庭の藪から一人飛び出して土だらけの大根を後から首へぶつ掛けて逃げ出した。女房は激怒したはずみに裸のまゝ闇の中を追ひかけた。さうして何かへ躓いてどうんと酷い勢で轉がつた。忽ち三四人の聲でわあと怒鳴つて逃げてしまつた。そこでおすがの兄貴へ告口をしたのは仙右衛門の女房であるといふことを傭人から聞いたので若い者は風呂の

栓を拔いてそれから大根を背負はして、豫め二人で頰冠を持つて居て追つて來る所をぐつと頸を引つ捉つたから足を採はれたのである。女房は口惜しくて翌日は起きなかつた。然し此事があつてから芝居はすつかり止んだ。それは間へ人が立つて兎に角若い衆へ謝罪つてどうか芝居はしないでくれと年嵩の二三人に賴んだからである。勘次も此の芝居の仲間であつたがいつかおすがの家の傭人と別懇になつた。時には傭人の部屋へもぐり込んで泊つて行くこともあつた。以前は大勢で押し歩いたが此度一人でおすがの家のあたりへ行つて襤褸を被つて立つて居るのが常のやうになつた。おすがが風呂へはひると其側へ行つては只立つて居る。おすがは默つてぼちり／＼と手拭の音をさせながら成丈長湯をするやうになつた。時にはおすがが流し元で洗ひ物をして居ると窓から竹棒を出して知らせをすることもあつた。二人は遂に襷と兵兒帶とをとりやりして型の如き關係が結ばれてしまつた。若い女の多くは男に執念くつけまはされゝばそこは落花流水の深い仲に陷るのである。互に決して離れまいといふ約束のもとに體につけた一品が交換される。孰れが厭になつても此一品が相手にあるうちは事件はこじらける。女が親達などに强ひられて嫁にでも行かうとなつた時には男は女をおびき出すことがある。其所には何方から人が挿つてごつたすつたの揚句になつて結局は不承で女が嫁に行く。そこは財産のある方から幾らかの手切が出るといふ掟きになる。手切の多少で二晩や三晩はごた／＼で過る。それでも古來の習慣で此僅少な黄金の威力は、大抵の紛擾を解決せしめることが出來る。それが勘次とおすがの間はこんな庖丁で南瓜を割る位な手ごたへでは濟まぬ強い關係が結ばれたのである。然し此時はまだおすがの家の傭人より外には二人の間を知るものがなかつた。暫時にして若い衆の間にそれが響いておすがを狙ふ者はなくなつた。やがて波動の如く其が村一杯に擴がつた。それでもこんなことは特別の事件が惹き起されなければ人の注意に値せぬのが一般の狀態である。此の如くにして幾日は過ぎた。

或早朝のことである。時候はまだ寒さが拔けぬ頃だ。勘次は深い心配な顏で綽名が四つ又で通つて居る男の所へ來た。四つ又は豚の仲買をして小才が利くので豚での儲は隨分大きい。あれで博突が好きでなければ身上が延びるのだと評判されて居る。勘次の親爺と殊の外別懇である。

「勘ら何だえこんなに早く」

と四つ又は聞いた。

「おらちつと賴みたくつて來たんだ。おら『ツァア』に知れたらおら打つ殺されつかも知んねえ」

「なにして又打つ殺されるやうなことに成つたんだ」

「ゆんべ遊びに出て襤褸なくしつちやたんだ。おすがら內の土藏ん所け置いたの今朝盜まつたんだか何んだかねえんだ。それからおらうちへ歸れねえ」

「なんだそんなことかおれが謝罪つてやつから待つてろ」

四つ又は勘次の家へ行つた。お袋は竈に木の葉を焚いて居る。爺が今ふう／＼と吹いて居る。四つ又はすぐに庭へ行つた。さうして

「『ツァア』おら何でもえゝからおれがいふことを聽いて貰れてえんだ」

突然にかういひ出した。「ツァア」といふのは子が其父に對する稱呼であるが四つ又は格別の懇意である上に年齡が違ふから時としてはかういふこともあるのである。一つは戲談をいふのが好きな性質から四つ又は何時もこんな調子で勘次の親爺に對する。

「なんでえ朝ッぱらから」

とおやぢは不審相にして半はいつもの戯談でもいはれるやうに微笑しながらいつた。

「ニツァア」に打つ殺されつかも知んねえて心配してんだから謝罪りに來たんだ。なんでもかんでも聽いてもらあなくつちやなんねえんだよ」

「解らねえなひどく」

「いやわかつてもわからねえでも世間態もよくねえんだ。實は兼次がことだが おらぢへ來て……」

「あの野郎奴ほんとに夜遊ばかりしてけつかつて」

「さうニツァア」等怒つからしやうがねえ。ゆんべ褞袍盜られつちやつたといふんだがな。人のうちへ忍び込んでどうしたのかうしたのつて人聞きもよくねえ噺だからまあ餘り騷がねえ方がえゝんだ。褞袍の一枚位仕方あんめえ。此れまでそんなことあつたんぢやなし、いふこと聽いたらよかんべえ」

「それぢや任せべえ。兼こと連れて來てくろ」

此れで褞袍の一件は濟んだ。其褞袍は其後盜んだ奴が元の所へ捨てて置いたので再び兼次の手にもどつた。兼次はそれを引被つて依然としておすがの許へ通つて居た。

三

暑さが漸く催して此から百姓の書入時といふ茶摘の頃までは何の事もなかつた。春も八十八夜となつて草木のやはらかな緑が四方を飾るやうになるとみじめな姿で顧みられなかつた畑のへりの茶の木のめぐりも赤い襷の女共が笑ひ興じて俄かに賑かになる。さあ焙爐の爐をかくのだといふうちに茶の葉が延び過ぎるといふ騷ぎである。兼次の家でも茶の葉が強くなつて、もう一日捨てておいたらとてもよりつからぬといふので隣近所と「イヒドリ」をして兎にも角にも一日に摘みあげる手筈をした。親爺は朝から焙爐へかゝつて居る。「イヒドリ」といふのは手間の交換でそつちからこつちへ一日仕事に來ればこつちからも一日仕事に行くことである。其頃兼次の家では婆さんが長らく老病に罹つて居た。丁度其日は起きられなくなつたといふので忙しい仲ではあるが急に醫者を迎えて一里ばかりさきの醫者の所まで行かねばならぬことになつた。親爺は毎日茶を煉る暑い焙爐の前で働いたので幾分ならずもう疲れて居る。焙爐を兼次に任せて一休めながら一寸行つて來ようと思つたのであつたが兼次がいきなり

「ツァアおれ藥貰ひに行つて來べえ」

とやつたのでそれでも自分が行くとはいはれぬので澁々と兼次を出してやつた。街道は岡を越えて行く。畑には麥の穗が一杯に出揃つて快げに戰いで居る。麥の花がところ〲に白く畑から拔け出してさいて居る、畑の境の茶のうね〲には白い卯木がならんで麥の穗の上にふは〲と動いて居る。そこからは僅かな畑の若木が麥の穗末のやはらかな色から色を傳はつて來る。雲雀からも上からもむう〲と暖いとうして暑い氣が蒸し〲て遠きあたりはぼんやりと霞んで居る。若い者の心はもうそは〲して落ちつかない。兼次は急いで行つて來た。然し歸りには此間の褞袍は宜しく通過することが出來なかつた。おすがは五六人連で茶摘をして居る所へ引つ掴つてしまつたからである。女連は一畝の茶の木を向ひ合ひになつて手も忙しく摘んで居る。爪先の音がぷり〲と小刻に刻んで聞える。兼次は摘まれながら自分も茶を摘んで乘氣になつて騷いで居る。

「兼ツつあんはおすがさんげばかし構つてねえでおら方へも來たらよかつぺなア」

といつたのはおすがの向うに居た女である。

「ほんとだおいとさん、可笑しかつぺなア」

少し離れた方からも聲がした。
「そんなら行くべえ」
と兼次はおいとの方へ茶の木を押し分けて行つた。
「やだよう、兼ツつあん、畑アれこんなに土だらけにして」
と難癖を出したのはおいとの隣に下枝を摘んで居た一番小さな子であつた。兼次が其子の籠へ土足を踏込んだのである。
「駄目だよ、悪戯のすんだよ、誰だかはどうかしてんだからなア、おいとさん」
又さつきの少し離れた方から聲がした。此は稍年増のお安であつた。
「おらげもすけたらよかつぺなア兼ツつあん、」
「[illegible]からよ」
とお安は又からかふ。兼次はお安の方へ行く。
「あらまあ、兼ツつあんはこんなに小姑婿ンがやして居られねえな」
おいとがこんどは苦情を持ち出す。茶の木に添うては[illegible]の蔓がある。小姑を交ざし作りの豌豆か小麦の莖にからみながら立ちあがつてしをらしい花をびつしりとつけて居る。
「そんなに摘みえゝとこぼかし摘んで兼ツつあんはやだよおら、構まれえよ」
お安がつゞいて苦情を持ち出す。兼次はお安の肩を叩く。
「おゝいてえまあ、おれことぶつ飛ばしたんだよ、誰もこんなことかはぶたれえんだんべえな」
「さうだんべえなアアハヽヽ」
みんなが一度に笑出す。おすが許りは默つて居る。こんなことで兼次は散々に戯どつた。空には雲雀が交るがはる鳴いて居る。おやぢが叱る急げ/\といふやうに喉が裂ける程鳴いて居る。それでも兼次は頓着なしに指の先の青くなるまで茶を摘んで居た。漸く氣がついた時に一散走りに走りつゞけて家に歸つた。幾ら駈けても後れた時間の取り返しはつかぬ。兼次の姿が見えると親爺は
「何してけつかつた、ぶつ殺されんだ」
と怒鳴つて棒を持つて飛び出した。兼次は恐くなつて逃げた。若いだけに足が達者である。親爺が門へ出た時にはもう前の林へ姿は隱れてしまつた。親爺は苦々の茶がにげつくので何處までも追ひつめる譯には行かなかつた。兼次が薬買ひに出た跡で手に觸る茶の葉をいぢつて居たのであるが強くなつた葉はいくら焙爐の上で押し揉んでも容易によりつかぬ。焙爐の火力を強くして其等がさく/\な茶を乾かした。疲勞は其睡眠を促した上に焙爐の蒸し暑さは一層彼等の腹をむか/\させたのである。隣近所の二三人が出て漸く兼次を見つけた。さうして例のやうに四つ又へ誘を頼んだ。四つ又はぶらりとやつて來た。
「『ツァア』獨で大儀かつぺ」
「こはえな
「うんこはえ筈だ、つまんねえ稼ぎ出すから」
「何よ又そんなことゆつて」
「なにつて兼ことぶつころすなんて喚いてんぢやねえか」
「此忙しいのにあんまりのさくさして居やがつて小世話焼けたからよ」
「のさくさしたつて『ツァア』がにや分んめえ。先生がほかさ行つて居なかつたんで待つてたんだつて云ふんだぞ。『ツァア』行つたつて先生が居なくつちや駄目だんべ。それも聞きもしねえでぶち殺すなんてそんな短氣出すもんぢやねえよ」
お袋は晝間の茶の滑味噌の豆を煮つて居たが圍へ其豆を入れて四つ又へ出した。さうして
「本當におらぢの『ツァア』は短氣なんたから」
と獨言のやうにいつた。

「えゝからわッら知りもしねえ癖に」
とおやぢは又かアつとしてお袋を叱りつけた。

「それさうだからえかねえ。婆さまこと見ろまアおれが鹽梅悪いから當てつけに兼こと怒んだ。一層おら死んだ方がえゝなんて云つてら。そんだからおれげ任せろよ。隣近所の暇つぶした丈でもつまんめえぢやねえか」
四つ又は殻竹割である。短氣なおやぢを威したり賺したりいひくるめるのは村でも此の四つ又一人なのである。

「うんそれぢや任せべえ」
といふことに成つた。

「そんだから愚圖々々しねえで何時でもおれが云ふことア聽くもんだよ」

「おめえぢや仕やうがねえへ、、、」
此が笑つて收ると四つ又は兼次を連れて來た。さうするとおやぢは

「此葉揉んでくろ、兼」
といつたやうな譯でさつきの顏とは別のやうである。

四

其後いさくさはなかつたが兼次は依然としておすがのもとへ忍んだ。それではおすがの家で捨て置くまいと思ふ筈だがおすがのお袋は少し愚圖な氣のいゝ女で唯娘が可愛くて兼次との間を裂かうなどといふ料簡は微塵もない。寧ろ村の評判の通り却て兼次の手引をしてやる位なものである。おすがの親爺は夜になればいつでもぐでん／＼に醉拂つて前後も知らずに轉がつてしまふ。兄貴は若い嫁と裏の中二階へ昇つて寢てしまふ。それに傭人が兼次の邪魔をしないといふことに極つてるのだから摑まつた追はれたといふ騷ぎも聞かなかつたのである。然し村の噂が高くなると共に親類縁者の少しは小口の聞けるといふ手合が捨ておけないといふことで相談をした結果、それでも兼次の家は財産は足らぬが貰ふといふなら一層の事おすがをやつたらよからう。嫁にとらぬといふならすつぱり手を切つて兼次をよこさぬやうに掛合はなければならぬと決した。おすがの叔父に伊作といふ博勞がある。此が又兼次の親爺と別懇だ。親爺は恐ろしい馬好で春も暖かになつて毛[illegible]拔け代つて古い毛が浮いたやうに幾らか殘つて居るのを見ると堪らなくなつて往來へ引き出しては撫でさすつて居るといふ程なのだから自然博勞の伊作が別懇になつた譯である。だから村では四つ又を除いては立入つた噺の出來[illegible]の伊作である。伊作は一寸親族の惣代といふ[illegible]目で前條の掛合をした。然しそれは無駄であつた。伊作は四つ又程には[illegible]んでかゝることが出來ないのと、事件が[illegible]まつて甚だ手[illegible]であつたのとで親爺の返[illegible]はきつぱり[illegible]にもみであつた。嫁に貰ふことは首を切られても出來ないといふのである。いひ出したらもう後へは引かぬのが此の人間の性質である。否此の家は乾度かういふ性癖の人間が生れるので此は血統である。伊作は古革の[illegible]幾ら煙草を[illegible]つて見ても名案は出ない。[illegible]をさげた譯だが喧嘩にもならぬから引つ込んでしまつた。[illegible]族等は其頑固なのに激昂した。小波瀾が[illegible]ねば濟まぬやうな状態になつた。斯の如き[illegible]に好いた同士の執るべき唯一の名案は[illegible]の男女の間に實行されて[illegible]らない、一先づ手に手をとつて出奔するといふのがそれである。少し愚圖なお袋はどうかして兼次とおすがを一緒にしたいといふ心から自分の入智慧で[illegible]がすことにした。兼次は[illegible]こつそり[illegible]を抱へ出した。それから二三日たつて兼次が見えなくなつたといふ噂が立つた。其時兼次はおすがの家の土藏の二階に隱れて居てお袋の[illegible]

で凌いで居たといふのである。三日たつてから日の暮れるのを待つて二人はお袋の生家の鬼怒川の向うの或村へ行つた。表向から駆落となると一方の仲へ人が立つて話がつくといふのが一般の順序であるが、例の如く四つ又が其役目を頼まれた。其頃は梅雨に入つて百姓の仕事が一つあつても足らぬといふ時であつた。暇の仲間で百姓は餘りせぬ四つ又はこんな時の仲裁の役目には屈強だ。梅雨に入つてから珍らしく四方からきら／＼と晴れて心持のよい日であつた。四つ又はぶらりやつて來た。親爺は丁度田の畔塗から上つて來た處だ。四つ又の畔から腰一面泥だらけになつた脚は廐の柱に繋がれた儘ではたゞ鬱陶しいと見えて時々ぶる／＼と泥をたゝいては煩さゝうに一塊の青草を鼻の先でしきり／＼嚙んで居る。口から青い汁がはみ出して居る。廐の柱には天秤にする樫の棒が挾めてぎつしりと縛りつけてある。親爺は藁で括つた股引が股から下は泥だらけになつて頰にも衣服にもはねに泥が乾いて居る。家のうらで廐の側には葵の花が五六本立ちあがつてさいて居る。此葵は夏になれば屹度こゝに咲くので裏戸が開け放してあれば往來からでもすぐ目につく。卵屋の葵がさいたと人々は見て通る。葵は此の家の四季を通じて第一の飾りである。葵の側には此の稀な晴天を幸にお袋が一寸の暇を偸んで洗つた仕事衣が干竿に掛けてある。卵屋といふのは此の家の綽名で幾代か前に卵の商ひをしたものがあつたとかで今に至るまで村では卵屋と呼んで居る。

「代搔いたのか」

四つ又は廐の所へ行つて問ひかけた。親爺は暇さへあればかうして廐へ行つて馬の食ひ振を見て居るのである。

「やつと今をへた處だ」

親爺は簡單にかういつて井戸端へ行つた。股引の泥をざつと洗つて家にはひる。四つ又も其後に上り框へ腰をかける。

「どうした兼が居なくちや仕事が出來ねえかんべ」

「そんでもどうやらかうやら代だけは出來た」

「忙しい所で濟まねえが今日はおれも賴まれたから來たんだ。惡く思つちや仕やうねえぞ、斷つて置くからな。どうしたもんだいまあ、おすがこと貰あも出來ねえ、兼次が足も自分の持物ぢやねえから止める譯にや行かねえつて伊作男げ斷つたつちいんだがそれも隨分酷え噺ぢやねえか。それに二人はどうしたつて切れねえ緣だ。困つたものだぞありやあ。逃げたものはそれや手分けして搜せばどこに隱れたつて分るにや極つて居るやうなものの連れて來た所でおめえら方がちやんと極つてなくつちや女の方の身分になつても餘り慰みものにされたやうで世間へ顏向も出來ねえな。何もそんなに頑張らねえで一層のことおすがこと貰つちやつたらどうだ」

「此あえ親類うちから世話されたこともあんだが檢査めえだからつて斷つたんだから其方へ對したつて一寸お前の騷ぎぢやねえ」

「徴兵檢査ツてゆつてもあと三十日か四十日で大概どうか極らな、そんで兵隊に出たにした所で兩方で極めてだけ置く分にや差支あんめえ。そんなことゆふな理窟つちいもんぢやねえか」

「おらどうせ馬鹿だから構はねえが、どうしたつてうんたあ云はれねえ」

「酷くをかしなことといふんだな、そんぢや外に氣にらねえことでもあんのか」

「氣にらねえたつて餘り人を馬鹿にしべえと思ふんだ。おらぢの野郎が甘口だつて何もお袋まで一緒に成つて人の相續人に障るやうなことして呉れねえてもよかんべと思ふんだ。おらどう

せ馬鹿だから理窟なんざあ解らねえがさうぢやあんめえか。此間だつて鎌が出だす晩にも後で氣がついて見りや裏の垣根のあたりに二人ばかりうろ〱して居たんだがおらちやんと見當がついてんだ。それぢやおれだつていめえましかんべえ。なあにあんな野郎うちに居なけりや居ねえたつて困らねえから、云ふこと聽かなけりやぶち出すだけだ。おれ幾ら體が弱つたつてあら位な小わつぱにやまあだ自由にされねえ積だから」

「そんなに怒つて騒がねえたつておすがことせえ貰へば怨みもつらみもあんめえ。あつちのお袋だつておすがも可愛いし鎌次も可愛いしなんだからこつちせえ譯がわかれば仲よく暮せるつちいもんぢやねえか」

「檢査濟まねえうちはどうしたつて貰あねえから駄目だよ」

四つ又もどうせ駄目とは思つてもいふだけのことは云つて見ようといふ譯なんだが然しかう出ては槍が降つても迚ても駄目だ。四つ又もそれは知つて居る。

鎌次の家の庭には垣根について栗の大木がある。松と松との間にあるので枝が一方庭の方へばかり延び出して垂れ下つて居る。房の如く長い花が一杯に白く咲いて居る。白い毛の生えた大きな毛蟲が葉をくつて枝の先にくつついて居る。栗毛蟲は構はずに置けばみんな葉を骨ばかりにしてしまふ。鎌次の兄の太一が毎日長い竹竿で其栗毛蟲を落して居る。栗毛蟲は強くしがみついて容易に離れないのを太一は氣長に叩いて落ちたのを足で踏み潰す。太一は此を近來の役目のやうにして飽きもせずにやつて居る。鎌次には男の兄弟が三人もあつたのだ。一人は十になるかならぬで鬼怒川で溺死をした。其次は此の太一である。此も十位の頃から癲癇になつた。病氣が屢々起つてから彼は只ぼんやりとしてしまつた。病氣の起る間が遠ざかれば時としては木の根を掘りに行くこともあつたり一日かゝつて米の一臼位は舂くこともあるが、何處でぶつ倒れるか分らないので殊にお袋の心配は止む時がない。彼は人さへ見ればにや〱と笑つて居る。彼は不具な體でありながら年頃來てからは草刈の娘などに戲談をいふこともあるやうに成つた。娘等は往復共にいゝ慰み物にして太一にからかふ。此を見てつらいといつて涙をながすのはお袋である。こんな不幸な出來事から家の相續をする者は鎌次より外には無くなつたのである。其大切な鎌次が浮かれ出したのだから非常な打擊であるといはねばならぬ。それがおすがのお袋が指金で此間の晩も垣根の所にうろついて居たのはお袋がお安といふ女を連れて來て居たのだと思つて居るので親爺はもう心外で堪らぬのである。太一は五六日前に隣の五右衞門風呂で病氣が起つて踏板を踏み外して足のうらへ五十錢銀貨位の火傷が出來たとかで變な歩きやうをしながら今日も落花と毛蟲の糞との散らばつた庭に立つて栗毛蟲を叩いて居る。彼はやがて其竹竿を入口の廂へ立て掛けてぼんやりと立つて此の掛合の後半を聞いた。さうして四つ又が持て餘して雙方とも暫く無言であつた時に

「エヘヽヽヽ嫁さま貰つてやれ」

といつて脇を向きながらにや〱と笑つた。竈の前に心配相な顏をして茶を沸して居たお袋はたぎつた湯を急須にさして上り框へ持つて來た。さうして四つ又の前へ對して極り惡相にして

「太一、わりや默つてろ」

と叱りつけた。

「へゝゝおつかあ」

と太一は又にや〱と笑つた。忰は噺の途中から顏がほとつて來て目の玉まで赤くなつて

居る。四つ又は暫くたつて又

「そんなやどうしても今は貰おねえんだな」

といつた。

「どうしてもおら駄目だよ」

返辞は淀みがない。

「検査さへ濟めば嫁の世話しても怒るめえな」

念を押す。

「怒らねえとも」

簡單だ。

「ようし話を纏つてやつたな。そん時はおすがこと世話すつかも知んねえかんな」

四つ又はこんなことで此場は手を引いた。此の表沙汰の掛合があつてから十日ばかり經つて兼次は親爺と一所に自分の家で働いて居た。卵屋は他人へ對しては恐ろしい意地も張りも強い人間であるが兼次がことゝなると大抵のことは忘れてしまふのである。四つ又は其所の呼吸を知つて居るので元の鞘へ收める役目は彼に丈は容易なことであつた。

五

おすがの家では又村の親族が來つて智慧を絞つた。どうしても此に二人の間を離れさせるのが專一である。それにはおすがを隱すことだと評判の伊作の婆で村の親族の一人が引きとつた。唯の夜遊でさへ村中押し歩くのだから兼次がおすがを喚き出すのは牡犬が牝犬を捜すよりも速かであつた。おすがはそれから見習奉公といふ名義で隣村の大盡へ預けられた。然し兼次が其大盡の垣内へ忍び込んだのはおすがが行つた其日の晩であつた。其晩兼次はひどい目に逢つた。傭人等が豫め兼次の來ることを知つて主人へ竊に告げたのである。嚴重な主人は傭人に命じて庭の闇へ追ひつめさして捉へた。兼次は地べたへ手をついて謝罪つた。門の外へつき出されてはふ／＼の態で歸つて來た。此娘と前栽物は其村の若い衆のものだといふ諺が古くから村には傳はつて居る。維新の頃までは若しも他村の男が通つてでも來れば其村の若い衆の繩張を冒したことに成るので散々に叩きのめして其上に和談の酒を買はせたものだといふ。それ程のことはもうないが今でも一つは嫉妬心から一つは惡戯半分から追ひまはすことは往々である。兼次が酷い目に逢つたのも傭人にこんな心持があつたからである。おすがも翌日暇が出た。遉にしを／＼として風呂敷包を抱へて歸つて來た。二人の間に就いては百方策が盡きた。遂に村の旦那へ持つて行くことに成つた。旦那といふのは祖先の餘光によつて村の百姓をば呼び捨てにするだけの家柄である。大抵の出來事が公に判明しなくなると屹度旦那の許で裁判を乞ふのが例になつて居る。兼次のことでは旦那も首をこきおろしながら考へたがやつはり困つた。卵屋の頑固には聞いて見なくても分つて居る。一先づ本人共の意見を聞かうと最初におすがを呼んだ。おすがはもう埒もない。離れたくないのは山々だけれど離れろといへばそれも素直にいふことを聽くのである。尤も旦那の家へ呼ばれて叱をされるといふことは生來嘗てないことで唯恐れてどうもかうもいふことは出來ないのだが眞實死ぬの生きるのといふ程の決心はないのである。おすがはまだ十七にしか成らぬ。次には兼次を呼んだ。卵屋が又變た料簡を起しても困るからとお内儀さんの機轉でお安を使つて或日の晝飯の仕事休みに裏庭へ連れ込んだ。お安はおすがと茶摘をして兼次を騒がしたことのある女である。お内儀さんは篤と譯を說いて、此所ですつぱり手を切つてしまふ決心はないかといふと

「わしやどうしても思ひ切れましねえ」

と彼は斷乎としていひ放つのである。お内儀さんも成程と困つた。

「それ程ならきうとして私も心配してやらうが
お前の親爺もあの通りで兵隊前は駄目だといふ
のだが、幸ひ檢査も濟んでお前も輜重輸卒と
極つたのだからもう先が見えてるんだ。其時に
成つてからなら嫁の相談も出來るしそれまでの
所の辛抱だからどうしたものだ。長いやうでも
一年足らずだ。さうしてどこにも障りのないや
うにしたらどうだ
勘次も此には少し我を折つた。
「それぢやわしも其積りで辛抱して働きませ
う」
「さうかさうして見れゝば仲裁人の顏も立つ
し、親爺の心も解けるといふものだ。愈それ
と極まれば東方へ勘次が思ひ切つたと表面話を
して一先づ安心をさせるのだが、それには私が
一應お前とおすがを遠にしてやるからそこで內
實は決して心變りはしないといふ約束をして
おくがいゝ。少し辛抱するうちには兵隊も濟む
し其上でなら私らも共々心配をして乾度一緒に
してやるが、おすがが其間に辛抱が出來なけり
やそれこそ夫婦になつても賴みに成らない女だ
から其時は未練はない譯だがどうだ勘次さうで
はないかい」
「さうでがす。なあに辛抱しらんねえやうな
女ならわしうつちやつちめえますあ」
「それでは私がお安を使つておすがを呼び出す
やうにしてやるから其時今いつたやうな手筈に
したがいゝ。其代り乾度辛抱をしなくつちや駄
目だよ」
「辛抱するつてなつた日にやわしも乾度辛抱し
て見せますから」
勘次は元氣よく家の仕事をして居た。其頃は
土用に入つて間もないのであつたが畑の大豆は
莢が急に膨れる。青々とした稻草の根元まで暑
さがしみ透つて鰌が死ぬといふ位で。百姓
は晝は裸に襦袢を着て仕事をする。夜は裸で
蚊帳の中に轉がる頃であつた。其日は丁度祇園
祭の日であつた。地上には到る所に強い日光
を遮る爲に重く深い緣が其手を擴げられるだ
け擴げて繁茂して居る。其でも彼日蔭の潛れた
畑の陸稻は日中は暑へ堪へずに葉先が巻れてし
まふ。面倒な日が西の林に落ちた時にやつと
日光を遮る一日の役目を果した草木は快げ
に葉々と蘇へはじめる。それから幾十分の後に
漸く百姓の暇な時間が來るのである。然し今
日は祭の日であるだけに前日に仕事の一日晝を
つけて遊ぶものは朝から遊んで居る。十五夜の
月が強く青い滑かな夜の空を昇つて欅の木の
梢からおすがの庭を照して居る。庭の柿の木は
葉がきら／＼と晒れたやうに月光を浴びて居
る。空は見るから涼しげであるが一日照りつけ
た太陽のほとぼりはまだ蒸してどこの蔭へ行つ
ても堪へられぬ程である。かういふ時はどこの
家も開け放してある。おすがの家は煙がこもつ
て其煙が蚊を防はつて靜かな夜の中へ彷徨つて
行く。其間から呼ばれて來て居る村の連中が四
五人で此の噎つぽるやうな煙の中に坐つて酒
を飲んで居る。家のものは忙しく働いて居る。
今夜の催しを打つて居る所なのだ。男は裸で
ある。女も襦袢一つである。竈の前ではお
すがが豆腐を茹でゝ居る。湯がぶうつと立つ
てこぼれ出すと大急ぎに手桶の水を一杯注ぐ。
泡は忽ちに引込む。茹だつた豆腐は叉手で掬げ
て手桶へ入れて井戸端へ行つて冷たい水で晒し
て「しようぜ」へあげる。「しようぜ」といふのは
極めて淺く作つた大きな籠である。笊といふよ
りは旅の大にして淺きものである。井戸端で少
し暇どると鍋底を焦つて居る男があとが出來た
と怒鳴る。こんなことでおすがには少しの暇も
ない。竈の煙が家一杯にこもつて居るので
ある。お安が勘次を連れておすがを誘ひ出しに
來たのは此時である。勘次は竹藪の蔭へ潛ませ

てお安は用のある折で行つて見たが全く隙がない。兼次は我慢をして居ればよいものを蚊には螫される、足には痺れがきれる、もどかしく成つて遂そこらをうろついた。其姿をちらりと家のものが見た。兼次ならどうも飛んでもねえことだと、熬豆をかじりながら饂飩をすゝつて居た親族のものはさつきの酒がまはつて居るので下駄を穿いて出だすのもあつた。お安が折角やきもきしても此夜は目的を達することが出來ずにしまつた。内儀さんはそれでは自分のうちへ呼んで逢はせるやうにでもしてやらうといつて居ると二三日たつて兼次はおすがの家で捉まつたといふ噂がはやくも聞えた。内儀さんの苦心もなにも滅茶々々に成つてしまつて事件は又もとへもどして了つた。

「なんちい馬鹿だんべえなあ」

とお安はいま／＼しがる。外の人々に肚が立つといふよりは呆れて物がいへなくなつた。

其うちに笑止な出來事が起つた。盆閒が過ぎてから十日ばかりたつてからである。或朝親爺は

「兼、今から支度しろ、われ見てえなものはおらぢへは置けねえからどこへでもうつちやらなくつちやなんねえ、一緒に行け」

と親爺は兼次を連れて出た。お袋は餘りの突然なことにあとで獨りで泣いた。晝近くなつて兼次はひよつこり歸つて來た。どうしたのだと聞くと境街道へ連れられて二三里も行くと

「われがことはこゝでうつちやんだ。境へ行くなら此れ眞直だ」

といつて小遣錢をくれて放されたのだといふ。それで親爺の姿が林の角に隠れた時に自分は林傳ひに先廻りをして來たのだといつた。

お袋は仕方がないから暫く親類にでも厄介に成つて居ろといつて自分の巾着をはたいて兼次を出してやつた。親爺は晝過になつて歸つて來た。お袋は

「おら兼こと可愛いからあとで泣いたよ」

とつく／＼いつた。此のお袋が今日まで家内に風波を起さないのはおとなしく我慢をして居るからなので、嘗て怨みがましいことをいつたことは無かつたのである。

六

此の事のあつてから幾らもたゝぬ内におすがの姿も村には見えなくなつた。兼次が連れ出してしまつたのである。能く／＼聞いて見ると此もおすがのお袋が一つで旅費までやつたのだといふことだ。彼等は兼次の叔父が聟に行つて居る栃木の在へ辿りついた。叔父は國元へ手紙を出した。返事に至極簡單で唯捨てゝ置いてくれとあつた。さうかといつて其儘にはおかれぬわけで叔父は追々相談に來た。然し其處は前段の始末で手のつけやうがない。それから村に居た時分に懇意にした博勞の伊作の處へ行つたがおすがの家でも親族や兄が不服なので駈落するやうな不埒なものはもどすことは出來ないといふことであつた。叔父もそれでは自分が暫く預つて置くことにする外はないと兼次のことに就いては深い骨折をしてくれた四つ又にも逢つて此後とも一切の心配を頼むといふやうに云ひ置いて三日ばかり暇どつて歸つた。叔父のもとでは二人は甚だ愉快な月日を送つた。雑木林を借りて木の根を掘り起してそこへ作つた陸稲をたべた口には栃木在の米は實にうまい。おすがの家には土蔵まであるがそれでも日常は石臼で挽いた麥を交ぜた飯をたべて居る。百姓の生涯の希望は大抵鹽鮭を菜にして米の飯をくふやうに成つて見たいといふ以上はないといつてもいゝ位である。叔父の家は暮しがゆるやかであつたので彼等が口腹の慾を満足させるには十分であつた。少くとも兼次には叔父が肉身であること

とおすがが一緒であることとで薩張もう苦勞はなかつた。おすがは兼次について居るので幾らか肩身の狹い心持はするが辛いことはちつともなかつた。彼等は精一杯働いた。叔父も忙しい時に思ひ掛けぬ手が殖えたので竊に慊んで止めておいた。秋がふけた。さうして稻刈の時節になつた。故鄕では俎板へ鼻緒をすげたやうな「ナンバ」といふものを穿かなければ刈れないやうな深田もあるが、こゝでは草履穿きで稻刈が出來る。田の中で稻扱をする。仕事がどれでも愉快である。赤城の山に雪が積んで冬が來た。其時彼等二人の間にはぢつとして居られぬ心配が湧いた。其心配といふのは改まつてのことではないが此頃に成つてどうにもしやうがなくなつたのである。駈落する以前からおすがは身持に成つて居た。おすがも初は我慢をして居たが此頃では體が兎角大儀になつた。叔父も疾からそれは知つて居るが百姓をするものは明日分娩する其晩まで跣足で仕事をする位のことは普通であるのだからそこは少しも苦勞はないのと一つは愈々腹がかうだからといふ時に返してやらなければ彼等雙方の家で仲々引きとるのに故障をいふだらうといふことでおすがには成るたけ樂な仕事をさせて止めて置いた。冬も寒が來て田圃の榛の木には春の用意に蕾がふらふらと垂れはじめた時にもうこゝらでいゝと思案をして叔父は二人を返してよこした。博勞の伊作へも手紙をつけ四つ又へもこま〳〵と自分の筆の立つだけは書いた。其は自分が行かねば濟まぬわけだが、かういふ日蔭ものを連れてのこのこ村へはひることも極りの惡いことだによつて二人だけ返すのだがどうか惡く思はないでどんなにでもいゝから心配をして貰ひたい。後で卵屋が愚圖々々いふ時にはわしがそこは引きうける。若し只今にも自分が行かねば駄目といふなら葉書をくれゝば直にも飛んで行くからといふのであつた。二人はどこへも手賴る所がないので四つ又の家へ轉がり込んだ。四つ又も困却したが乘つた船で止むを得ない。先づ伊作へ談じて見たがどうも唯ではおすがも戻れない。思案の末におすがの家の前の仙右衞門へ少しの間といつておすがを賴んだ。一つは仙右衞門の家は廣い割合に少勢であるのと一つはすぐ前のうちへ置いたならば朝夕おすがの姿を見るうちには兄貴もさう六ケ敷ことばかりもいはれなくなるだらうしお袋が愚圖だから誰も因業もいつては居られまいといふ見込をつけたのである。おすがの身の處置をつけて四つ又は卵屋の方へ手を出した。四つ又は隨分此の事件では厄介な役目であるが、四つ又でなければ出來ないと村からいはれて居るのが心中竊に自慢なのである。或晩遲く彼は卵屋へ行つた。此頃は毎日村のどこからかとん〳〵と箱篩の音が竹藪を洩れて聞える。田舍の正月が近づいたので其用意に蕎麥や小麥や蜀黍の粉を挽くのである。卵屋でも此晩蕎麥粉を挽いてる所であつた。お袋は顏から衣物から埃のやうに粉を浴びて筵の上で箱篩の手を動かして居る。兼次は癲癇持の太一と二番挽の糟を挽いて居る。四つ又はくゞり戸開けてはひるとすぐに石臼へ手を貸した。石臼はぐる〳〵と輕くめぐる。

「寒い思ひして態々節挽の傭に來たやうなもんだな」

と四つ又は笑ひながらいふ。

「當てにもしねえ傭が出來ておれは此れだからうめえな―」

と卵屋も相槌打つて勢よく然かもそろ〳〵と石臼をめぐす。暫くで蕎麥の糟は全く穴へ掻き込み畢つた。石臼は其儘幾つかごろ〳〵とめぐして此れで蕎麥挽はやめた。お袋は箱篩の手を止めて上り框の冷え切つた火鉢へ粗朶をぼちぼちと折り焚べた。煙が狹い家に薄く滿ちた

時に火鉢へは燠が出來て焼けた鐵瓶がちう／＼鳴り出した。
「構はねえで歸つておくんなせえ」
と又四つ又はお袋へ挨拶する。
「貰ふなあしたでもえゝんでがすから」
とお袋は石臼臺の粉を桶へ移して莚を掛ける。卵屋は裏戸口の風呂で暖まる。
「篦棒に寒い晩だなどうも」
と又四つ又は火鉢へ手を翳す。
「雪がちら／＼して來たから寒い筈だ」
と卵屋は湯から出て土間で褌をしめながらいつた。さうして
「茶よりや蕎麥掻でも拵えろな腹あつためるにや蕎麥掻の方がえゝや」
といふと
「蕎麥掻はえゝな、そんだが鰹節はなにか土佐節か」と四つ又は唾を呑れる。
「へゝたえしたことをいふな、何處で聞いて來た」
「どこつておら土佐節でなくつちや食つたことあねえんだ」
百姓の家に松魚節のあらう筈はないのである。四つ又はこんなことでそろ／＼戯談から口火を切る。鐵瓶の湯が沸つたのでお袋は二つの茶碗へ箱蓋から附木で蕎麥粉をしやくつて移す。鐵瓶の湯を注いで箸で掻き交ぜる。お袋は小皿へ醤油を垂らして出す。
「こら饂飩粉ぢやあねえかあんまり白えな」
「四つ又もちつと眼がチクになつたな。そりや一番粉で糠がへえられねえだ。昔かんべえ」
「うん、ずうつとから喉からほか／＼して來たな」
蕎麥掻の茶碗へ湯を注いで四つ又はふう／＼吹きながら飲んで愈々噺を持ち出した。
「おれがいふことはもう聞き飽きたんべ、おれも呆れた。そんでも此んでも聞いてもらあなけれあなんねえだ」
「又爺が噺か、その噺ならしねえでもれえてえ」
「それだからおれが聞いてくろうつていふんだよ。おすがの腹がえかくなつて今落ち附になつて歸つて來たんだが、どうも此までとは違つてこんだあ捨てて置けねえこつたから向うの親類でも困つてんだ。おすがも五六日こつち小便も近くなつたといふんだから今夜にもあぶねえんだ。それがうちへ寄せられねえんだから今出來る子供の産す場所がねえ譯なんだ。此所のところはまあどうしたもんだな」
「どうするつておら駄目だよ」
「まあようく考えて見てくんねえか、自分の息子が人の大事の娘を引張り出して隨分世間へも外聞を暴して揚句の果が孕ませてそれでこつちぢや嫁に貰ふことも出來ねえが、些意もつけられねえ、腹の子供がどうなつてもえゝつて云ふんぢや向の身に成つても一分立たんべと思ふんだな」
「些意なんざあ文久錢一文でもおら出せねえよ。向で欲しけりやおら彼の野郎奥れつちやつて構あねえ。おら相續人なんざあ外から養子したつてえゝと思つてんだ。おら旦那にいはれたつて聽かねえから駄目だ。旦那に怒られて村に居られなくなりや居られねえたつて構はねえんだから」
「酷くわからねえんだな」
遠の四つ又も遂にむつとしてかういつた。卵屋はもう目の玉まで火のやうに赤く成つて居る。
「そりやおれ惡かんべえ。惡くつたつておらさうかたあ云はねえんだから、どうぞおれげは其噺はしねえでくろ」
といひながら火鉢の向うへごろりと轉がつて何とも返辭をしない。胸には激しい動悸が打つ

て居る。豆ランプの薄闇い光が其燃えるやうな顏をてらして居る。四つ又は手持不沙汰にして居たがやがて裏戸口から小便に出る。雪はいつの間にか地上一杯に白くなつて外は薄明くなつて居る。廐の側には落葉が堆く積んであつて其上には雪がさら／＼と微かな音をさせて白く積りつゝある。馬は人の近づいたのを見てがさ／＼と敷き込んである落葉を踏みつけながらフ、フ、と懷しげに鼻を鳴らして馬塞棒から首を出して吊つてある飼料桶を鼻づらでがたがたと動かして居る。お袋は四つ又の後から出て

「どうぞ惡く思はねえでおくんなせえ。本當にいつでもあゝだから困んだよ」

「思はねえにもなんにも、ありや癖だから」

「そんぢやえゝかなあ」

といつてお袋は少し躊躇して

「さうとあの爺は煩ひでもした樣子はあんめえかねえ」

「なあに眞ツ膨れに肥えて來、からなんにも苦勞することはねえよ」

「おらあまあ獨りで心配なんだよ。眠つても眠れねえことがとろつ日だよ」

「困つたもんだよ本當に」

四つ又は火鉢の前へもどる。さうして

「ツアアー」

と一聲大きくいつて

「おれも三春へ行つて見てえ積だが、こんだ行く時こや一緒にすべえぢやねえか。豚も醬油粕が高くつて困つてる所へ四掛や五掛の相場ぢや割に合はねえからな」

かういふと卵屋はむつくり起き上つた。

「本當に行くんぢやあんめえ」

「本當だともよ、駒なら草だの藁だのばかし喰はせてみつしら使つて二三年もたてばたえしたもんだな」

「四つ又でも三春へ行つちや目うつりして買ひてえと思ふんだ」

「戯談いつこらそんなことにや おくせは取らねえんだぞおらなんざあ、あぶねえな、豚の手にやいかねえから見ろよ」

爺はいつか睡かになつてさつきの不機嫌もどこへか行つてしまつた。

「それぢやどうしても兼こたあうつちやんだな。おら今夜はどうでもかうでもうんと云はせべえと思つたんだが當が外れた。雪で歩けなくなつちやつまんねえからおら歸るぞ、そんぢや、兼次はうつちやるんだな、家へ一人で歸るならおら今夜でもいゝけよ」

「うんさうかわかつた」

こんなことで此場は濟したが四つ又もおすがの身の始末には困つた。博勞の佃作とも相談をする。兎に角急場凌ぎの策をとらなくては成らぬことに落著つた。其頃仙右衛門とは道一重向隣の屋號を松山といはれて居た家があつた。何か事情があつて家族を連れて他へ移住をすることに成つて家から持地からおすがの兄貴に賣つて立ち退いた。その空家で商をさせるのが好策だといふので兄貴へ渡りをつける。ところがなか／＼承知しない。ごつたすつたやつてたうとうそれもおすが自分等へ少しの間其家を貸してくれろといふのでやつとのこと納得させておすがを松山の家へ入れた。仙右衛門も近所の義理で漸々おすがを世話して居たから重荷を卸したやうな心持がした。四つ又もあとではどうでも先づ目先の才覺が首尾よく運んだのでほつと息をついた。

七

おすがは女の子を産んだ。他には介抱の仕手

もないので、お袋が公然朝から晩までつめ切つて世話をする。嫂も行つて粥でも煮てやるといふわけで、行掛に兄貴も見て居られぬといふことになつた。四つ又の斡旋はすつかり其間に當つた。おすがのもとへは宗次もいつか入りこんだ。さうして松山から買つた畑を譲つてもらつて自分の喰ふだけの働きをすることにまでなつた。赤子は笑ふやうになつた。只さへ少し愚図なお袋は、もう可愛くて迚にも手放すことが出來なくなつて、二人が仕事に畑へ出れば自分は子守をして居る。赤子が泣けば畑へ抱いて行つて乳を飲せる。おすがの兄貴も忙しい仕事の時には宗次を連れて來て働かせるといふやうに成つた。雙方の間は理窟なしに甘ましいのである。斯くして時日は經過した。然し時としては村で口の悪いものは

「兄貴も除り構はねえから仕やうがねえ。どうも宗次をおすこへ入れて置くといふのは卵屋の面を踏みつぶすやうなものだ。あれぢや仲人お袋が立つても嘴の届かねえな無理もねえ譯だ」

と噂をすることはある。旦那のお内儀さんも或時四つ又に向つて

「あの宗次が一件だがね。お前方の指図で松山のうちへ入れたんだ相だがどうもあれが卵屋では心外に思つてるらしいんだがね。此はお前方にも不似合な計らひだと思ふやうだがまあ一體どうした譯なんだね」

「どうもさういはれるとわし等は誠に悪い者に成る譯なんですが、あの時は全く今夜にもあぶねえといふ腹なんですから始末に困つて一先つまあさうしたんです。卵屋が宗次がことは全くの處呑んでもしまひてえ程可愛いんですがわし等がいふことを聞くとおすが等が方に負けたことになるといふ意地づくなんですから仕やうがねえんです。意地づくでは死んでも負けられねえといふんですからね。それ程可愛い息子のことなら諦めがつき相なものですが息子は可愛いし先は憎いしで理窟をいはれればごろつと寝てしまふんですからわしも手古摺つたんですよ。初めは兵隊が濟めば嫁を世話しても苦情はねえことに念はついたんで、たゞ今おすが餘ンまりこぐらけたんで云ひ出すことも出來ねえんです」

四つ又は頭を掻きながらかういふのである。此も無理のない理窟だ。おすがのお袋の料簡を聞いて見ると此は單純なものだ。

「四つ又へ頼んでおくんですから何とかして呉れんでせうが本當に困つたもんでさどうも」

こんなことに過ぎない。

「赤んぼはそれでも丈夫かい」

といふと

「へえ爺によく似てまさ」

平氣でいつて居る。おすがの親爺に此ことを話すと

「世間は角を立てゝはうまく行きませんよどうも。お互に丸く行くことでなくちや困りますよ」

こんなことで濟んでるなら人が其々心配をする必要はないのである。

それから兄貴へ

「あの一件も困つたものだな」

といふと

「困つたものですよ」

といふから

「お前もあゝして二人を引きつけて置くのでは迚ても埒明きさうはないからお前もおすがを捨てることにしてそれで他から拾ふといふことにしたらどうにか示談が出來相なものだと思ふがどう考へて居る」

斯ういふと

「わしは決してうちへは寄せねえといつたんで

おや。實は松山のうちへわしが夜は泊りに行き行きしたんですが毎晩も行つてらんねえから時々お袋等が泊りに行くこともあつたんでがす。さうするとお袋なもんですからおすがも狐鼠々々はひり込むやうに成つたんでさ。それでもはじめはわしこと見ると逃げたんですから。兼次もわしに掟まつた時二度と決して足踏はしませんて證文張つたんでがす。わし今でもちやんと持つてまさあ。そんだからわしはうつちやつた譯なんでがす」

「いやうつちやつた譯でも二人のことをお前の家へ仕事に使つたりして居るのでは駄目ぢやないか」

といふと

「忙しい時はほかから手もねえもんでがすからねえ」

どれを叩いてもちつとも要領を得ない。

おすがは自分の思つた男とお袋の膝もとに居るのだからちつとも心に苦勞がない。兼次も好いた女と世帶を持つて女の家の貢ぎをうけて居るのだからこれも苦勞はない筈だが唯親爺が出逢がしらに短氣を起しはせないかといふ懸念があるばかりであつた。それも今では安心が出來た。或日のことである。田圃でばつたり親爺にでつかはした。親爺は手織木綿の小ざつぱりした半纏を着て首へ風呂敷包を括つて居た。兼次はぎよつとした。それでもこちらから

「ツアア何處へ行く」

と言葉を掛けたら親爺は微笑しながら

「うん、絲染めによ」

といつてすた〳〵行つてしまつた。かういふ間に始終ひとりで氣を揉んで居るのは兼次のお袋である。親爺が短氣を出すから少しも喙を容れずに我慢して居る。相手になるのは意固持の不具者ばかりである。一目見たい孫も表向き抱いて見ることも出來ない。人に賴んで兼次へ衣物をやつたり汁の身の葱や大根をやる位に過ぎぬ。

「おら一日でも思ひに々々としたことはねえんだよ」

と十九夜講で女房達の落合つた時には遂洩れることがあるのである。

「おらまあほんにあれがこつちや「ツアア」に隱してなんぼ足袋刺してやつたか知んねえんだよ。氷つた所をおより〳〵押し歩いちやあ足袋も草履も一晩しか持たねえんだよ」

聽き手があればしみ〴〵とこぼした。村の同情は此のお袋の一身に集つた。事件の推移はこんな風で野原が腹を煮やすことのある外表面甚だ平靜のうちに時日が經過して行く。

世間は復た春が蘇生つた。鬼怒川の上手の篠の上には白帆を一杯に孕んで高瀬舟が頻りにのぼつて、船頭は胴中をかいた儘時々舵へ手を掛けただけで舟は緩かにざぶ〳〵と水に逆つてのぼつて行く。冬の辛さがこゝで一度に取り返されるので此の南風の味を占めては迎へても職業がやめられぬといふ時節である。鶯の中には鳥馬がそつちへこつちへ移りながら下手な鳴きやうをして菜の花から麥畑へ遊びに出る。兼次は此時懲役として召集された。本來ならば自分の家からほんの隣になつた人々に送られて鬼怒川の渡しへかゝる筈であるのだが彼は規則にも其假住居から立つて行かなければならぬことに成つた。其朝彼は自分の家の近所へだけは暇乞に出た。其態度は狼狽して居た。隣の家では土間へ置いた汁鍋がひつくりかへつて居たので不審に思つて居たが、あとで兼次が隣のうちのバケツーを引つくりかへして來たといつたのを聞いたのでそれが兼次の仕業であつたといふことが知れた。有繋は勘當を受けて居る身であるだけに落つかれぬのだらうと人々は噂をした。此の外には一つも話頭に上ることはない。麥が刈

られてさうして椋鳥が群をなして空を渡る頃勘次は歸つて來た。村のうちには毎日麥搗く杵の音が大抵をゆすつてどこかに聞える。勘次は其麥搗の一人に成つた。麥は夜中から搗きはじめて晝になれば各八斗の量を搗きあげる。椋鳥はしら／＼明に西から疾風の響をなして空を覆うて渡る。さうして夕陽の沒する頃西へかへる。空を遥かに飛ぶ時に麥搗は杵持つ手の右と左を持ち換へながら今日も日和だと叫ぶ。椋鳥が少なくなつて稲刈になつた。刈田の跡の水のやうな冷たい秋が暮れて又冬が來た。雲雀がよわよわした羽をひろげて切ない鳴きやうをして林から刈田を飛びめぐる。さうして寒さは又小春にかへつて人々は岡の畑に芋を掘つて居るのである。

短い日は村の林の梢に開いた土手のやうな夕雲に眞倒に落ちつゝある。横にさす光は麥の葉をかすつて赭い櫟の林が一しきり輝いた。林つへりの冬の木の花は白々と光を帶びて居る。筑波山は見る／＼濃い紫に染まつて來た。秋の末の晩稲を刈る頃から夕日のさし加減で筑波山は形容し難い美しい紫を染め出す。百姓に聞いて見れば當てそんな筑波山は知らぬといふ。知らぬといふのは於ものことである。日が落ちて殘曛がなほ明かな數十分間は彼等の仕事が尤も捗どる時である。晩餐の支度をするために女等は今どこの畑からも一人づつ立つて行く。女等が去つてから百姓の手もとが漸く薄闇きを感じた。頰白が寂しく桐に桑の枝を飛びめぐる。百姓は自己以外には頓着なしにせつせと芋を俵へつめて居る。勘次はおすがが歸つてから車へ俵を積んで引き出した。田圃を越えて坂へ掛つた時には少し積み過ぎた芋俵は彼の力には餘つた。ほつと腰を延して居ると突然後から

「それ／＼うんと力んで見ろ」

といふ聲がして車が急に輕くなつた。坂の上で振り返つて見たら芋俵を馬に積んで來た勘次の親爺が持つて居た手綱を放して後押してくれたのである。

「誰だと思つたら「ツァア」か」

と勘次は心の底から嬉し相にいつた。馬は獨りで勢よく右の方へぱか／＼と走つて行く。親爺は馬のあとから駈けて行く。勘次は腰をくの字に屈めながら足に力を入れて左へ曳いて行く。村の竹林から昇つた青い煙は畑の百姓を迎ひにでも出たやうに幾條も棚引いて田圃から岡まで屆かうとして居る。其時黃昏の中を百姓は田圃から相前後して歸つて來る。何處ともなく鷺がさゝと鳴いて去つた。百姓の後姿を村の中へ押し込んでやがて夜の手は田圃から畑からさうして天地の間を掩うた。

（明治四十一年三月）

即景

鬼怒川の堤の茨咲くなべにかけりついばみ川すずめ啼く

鬼怒川のかはらの雀かはすずめ桑刈るうへに來飛びしき鳴く

（明治三十九年）

晩春雜詠

鷽鳥の春がたけぬと鳴く聲に森の樫の木脫ぎすてにけり

うそどりよ汝が鳴く時ゆ我が好む枇杷のはつかに青むうれしも

（明治四十年）

開業醫

一

或田舍の町である。東通りの或一部を覗くと洗張屋が一軒在つて、布を張つてあつて其庭先から青菜の畑があるといふので、そこらをうろつく雞の群が青菜の畑へ出るとほう／＼と雞を追ふ百姓の叱り聲が聞かれる。春になると其の畑からさうしてそこらあたりに隠れて居た青菜が一時に黄色な頭を擡げてすつと爪立てをしてそれから白桃の花が垣根に咲いて、洗張屋は庭の短い青草に水を滾しながら引つ張つた布を刷毛でこすつて居る、とかういふ町の或横町である。其角に毀れた酒藏が悲しげに立つて居る。此藏を建てた老人が太い木の杖を突いて乞食のやうな姿で歩いて居たのはまだ近い過去のことである。酒の仕込時といふと何かの季節であるが、大竈の前へ筵を敷いてそこへごろりと成つて薄蒲團を一枚かぶつて夜を明すといふ位であつた。それが一旦眼を瞑つたら非道な金貸に其藏はそつくり奪はれてしまつた。其後金貸は自分が招いた或事件の爲めに苦役に服して長い間入牢して居るので酒藏へは手のつけるものも無い。草が蓬々と生える。瓦はこける。壁は崩壞する。大桶が幾つとなく壁の崩壞した所からあり／＼と見える。丁度脊骨瘍といふ病に罹つたらこんな姿であらうかと思ふ程凄じい形である。横町へ長い板塀は柱が朽ちてるのでふは／＼として時々其一部が倒れる。それを誰かが起しては繩で縛つて置くので繩の新しい結び目がそこにもこゝにも作られてある。此の板塀を前にした一構へ、それはさつきの洗張屋の庭先の青菜の畑から雞を追ふ叱り聲も時々は微かに聞かれるあたりであるが、そこに近頃開業した醫者がある。表の格子戸から患者が出入する。夜になると患者の控室になつて居る表の座敷の釣りランプの下で箱火鉢に倚り掛りながら藥局生が中央から分けた髮を光らせてハツクを披いて見て居る。其側に火鉢を少し離れて醫服を著けた儘の若い主人が新聞を大きくあけて見て居ることがある。凍てがひどい冬の或晩のことである。同年輩の三十恰好の男の客があつた。控室の次の六疊の間で二人は炬燵をかけて居る。主人の醫者はまだ冷たい櫓の下で新聞紙の小さく折つたので頻りに炭を煽いで居る。藁屑の交つた粉炭の塊りは蒲團の裾から少し煙を立てる。炬燵の火がぱちぱちと起り掛けた時に醫者は醫服をとつて客の後ろの折釘へ掛ける。客と相對して居る壁間にはガラス張りの額が二つ懸けてある、一つは主人の醫者が卒業の際に撮つた中學の寫眞で一つは千葉の醫學校の卒業證書である。炬燵の側のランプの光が一方の額のガラス板から客の目へきら／＼と反射する。頭を轉へやるとランプの光は又一方のガラス板から反射する。そつちを見こつちを見して居ると醫者は和服に着換へてぐる／＼と無造作に兵兒帶を締めながら

「君何だい」

と炬燵へはひる。衣物は唐棧の洗濯しでメリヤスのシャツは目に立つ程垢づいて居る。シャツは二枚も重ねて居るので手首の所が思ひ切つて不恰好に太く成つて居る。藥局生は揃ひの相馬燒の茶器に茶を入れて來る。盆を下に置いて立ちながらだらりと下つた前髮の額が茶碗を引きずつて行つた。茶を一杯啜つて

「こりや冷たい、どうも書生と二人切りだから不自由で仕やうがないよ」

と主人の醫者は苦笑した。さうして

松田、おい松田―

と喚んでついと表の座敷へ行つて

「しるを一つとつて來てくれないか、おいひよつと立つてランプへぶつつかつちやいけないぞ」

といつた。藥局生はがらりと格子を開けて出て行く。主客の間には炬燵の火力が増すに連れて雑談が始まる。時々其癖の髭の先を撚りながら主人の醫者がいふ。髭の先をちよりちよりと撚る時に若い者に普通なすぐに得意になる時である。客は平打の白い羽織の紐を手の平でふはふはと弄かしながら嫣然として居る。炬燵の側に引きつけられた臺ランプの光がぼんやりと丸く大きく天井へ映つて居る。其丸い光が静かに人を見おろして居る、格子戸ががらりと開いて汁粉が來た。亂暴な運びやうをしたと見えて椀の蓋は傾いて汁が蓋を傳ひてこぼれて居る。

「よけりや君みんなやつてくれ給へ」

主人がいふと

「大抵あるのぢや困らないぞ」

と客はふうふうと汁を吹きながらたべる。若い主人は箸も持たずに一寸一口やつて箸を右へ拭ひながら先刻からの雑談をつゞける。

「寄宿舎を出て素人下宿に居た時だ、其下宿といふのは表は蒸屋で隠居夫婦が内職にやつて居るのであつた。生徒といふと大抵は放蕩して居るといつていゝ位であるのに僕はまだ其頃は模範にされて居たのだから特別に待遇されて居たのであつた。其時分僕の二階に先生が暫く下宿をして居た。先生はヂストマの研究で學位を授かる筈になつて居たのだけれど自分の家から出ると方位が悪いとかいつてお母さんが心配するので孝行な人だからお母さんのいふ儘に別居して居たらしいのだ。何でも一の酉の晩であつたらしい。僕の部屋へ多勢集まつて互に肉とか酒とかを買つて來て牛飲馬食會をやつた。初めは遠慮して居たがたうとう詩吟もやれば劍舞もやる大騒ぎをしてしまつた。先生は二階に勉強をして居たのた。他の生徒は歸つてしまふのだから平氣だが僕はこんな散亂してぽつつり獨りで殘つて見ると先生が非常に迷惑であつたらうとも思ふし一寸済まない心持にも成つたから火鉢を持つて二階へあがつて行つた。火鉢に火が盛に起つて居たからである。さうすると先生は僕の顔を見ると突然

「君は成績の悪い生徒だらう」

といふ。僕は一寸癪に障つたから

『如何にも成績の悪い生徒でありませう、然しながら今日まで席順は八番九番を下つたことは唯一回もありません』

とかう昂然としていつた。先生も少し當てが外れた。

『それでも生徒の身で酒を飲んで騒ぐ抔といふのは宜しく無い。そんなことでは腦を悪くして將來到底いかんだらう』

といふので平凡な講釋である。それから僕は他の生徒の如く蔭に隠れてはしない。公然として愉快をとるべき時にはとるといふので非難すべき處はあるまいといふと

『だがそれはそれとして君は僕と約束をしないか』

といふ。何だか分らなかつたが大にしませうといつたのである。

『それぢや僕の指揮に從つて勉強しないか』

といふので他に返辭もないから又大に仕ませうといつたのだ。先生は殊の外滿足である。其頃ペストの流行があつたので先生は興に乘つてペストの話を一時間もつゞけた。聽いて頭は痛むしちやんとして聽いて居なくちや成らないだ

りひどい辛抱をさせられた。先生の噺が途切れた所で僕はランプの始末を忘れて居たと急に氣が付いたやうなことをいつて二階を降りた。それからといふもの夜は十時となると必ずランプを消さなくちやいかんといふことで少しでも遲くなると

「おい君、こくふ田君まだ起きてるのか」

と二階梯子段から呶鳴る。初めは先生は國府田をこくふ田といつて居た。朝は五時といふと先生が呶鳴る。

『こくふ田君まだ眠いか』

といつてどん／＼と戸を叩く。二階の窓の戸である。忽ち響くから起きずには居られない。規律の立つた人だから、逼でも捨てては置かぬ。先づさうされたから自然勉強も出來るし先生も隨つて非常に身を入れてくれる。卒業の後には助手にしてやらうとまでいつて居たものだ。それが先生がまだ下宿に居るうちにたうとう墮落してしまつたのだからいひやうは無いのである。遊びに行くのが面白く成つたのだから駄目なのである。それでも先生の目につく處では勉強しなくちや成らなかつたから先生の下宿に居るうちはまだよかつた。夜は十時にならぬうちにランプを消して置く。それには豫め戸を少し開けて置いて蒲團にくるまつて居る。梯子段からのぞいて先生のランプが消えると其時すつと拔けて塀を乘り越えて出て行く。さうして夜の明けぬうちに歸つて冷たい蒲團へもぐり込んで居る。先生はちつとも知らないから五時になると戸を叩く。まだ眠いかといつてはどんどんと叩く。實際眠いのだから隨分苦しかつた。或晩のこと例の如く塀を越えて遊びに行つて居るとヂャン、ヂャンと半鐘が鳴る。何處だといふとどうも僕の下宿の近くらしい。しまつたと思つてせつせと驅けて來た。見ると近くは近くだが僕の下宿ではない。藝者町だといふので飛んで行つて見たくて堪らない。所が下宿の婆さんに掴まつた。まあよく戻つてくれました。内では書生さんがみんな出てしまつたので私一人ではら／＼して居たんです。なんぼあなたが心強いか知れません。どうぞ私を助けると思つて居て下さい。先生もお宅が心配になるからつてお出掛になつた處です。どうぞ後生ですからと袂をぎつしり捉へて離さない。窓は一杯に赤く焦げて火の子がもろ／＼と吹き上つて居る。ごう／＼といふ騷ぎが聞える。醫學校の生徒が飛び込んで藝者の三味線を擔ぎ出した杯といふことであつたさうだが僕は其時氣が氣でない。だが仕方がないから婆さんと表に立つて居ると先生も其内に歸つて來て僕の居たことを非常に悦んだ。先生は僕をすつかり信じて居たのだから慌てて驅けて來て婆さんにつかまつたのだとは思はない。外の書生は飛び出すのに僕一人が守つて居たのは感心だと思つたらしかつた。そこになると先生は甘いのである。其後先生は方位の何かが解けたのだら、自宅へ引き移つた。荷物を運ぶ手傳をして日曜一日を潰した。先生が居なくなつてからはもう僕は自由自在である。然し報いは覿面で俄然三十六番に落ちてしまつた。先生は驚いた。たが其時は病氣であつたからといふので一時先生を瞞着して居た。それでも何時までも欺きおほせることは出來なかつた。或時先生の試驗があつた。口頭で應答するのだからどうにか先の奴の眞似をして僞つたが遂うつかり間違つてしまつた。發疹窒扶斯と腸窒扶斯との鑑別診斷でぐつと行詰つてしまつた。ほんの少しの事であつたが分らなかつた。先生は嚴い人だ學問の方になると非常に鋭敏だから到底欺くことは不可能であつた。君は墮落したなと先生は唯一言いつた。僕は冷水を浴せられたやうに竦んだ。さうしてちらりと先生の顏を見上げると先生は

姿勢正しく直立した儘ぢつと僕を睨んで居た。先生はそれつきり云はなかつた。僕は身體がひどく小さく蹙められたやうで氣が遠くなつたやうで他の生徒の密かに冷笑するのをやつと聞いたのであつた。

千葉も最初は愉快であつた。學校の庭から遠く海を隔てた相州あたりの山々を得意になつて望んだもんだが卒業の時にはたうとう六十八番に下落してしまつたのである。どうかすると大に發奮することがあつたが一旦堕落してはもう再び舊位置にかへることは出來ないものである。借財を背負つた身體を兄に曳かれて千葉を出たといふ姿で父兄への信用は其時失墜してしまつたのだ。迂濶なことであるが父でも兄でも僕が褌一つなくなつて埃だらけな酒樽の轉がつて居る所にぼつきり居ようとは思はなかつたのである。料理屋でも無闇に貸すのですつかり重荷を背負つたのであつた。今日こんなに郷里へ燻ぶつて束縛されて居るのも其時の祟りなのである」

若い醫者は一寸口を噤んで碗の底に吸ひ殘した汁粉の汁を右の手から吸つて妙な手つきで左の手で箸を持つて冷たくなつた餅を噛つた。さうして汲んであつた冷たい茶を啜つた。此時まで臺ランプの下で右の肘を突いて身體を横にして聞いて居た客は徐ろに起きて一つ殘つて居た汁粉の碗へ手を懸ける。碗のいとじりが小きた餅を膝の上に擱いた。客は醤油の浸みた茶漬を旨さうに噛んでやがて冷えた鐵瓶から急須へ注いで其鐵瓶を炬燵の火へ懸けた。さうして

「君足を出して引つくりかへしちやいけないぜ」

といつた。

「僕もこんな所で開業する料簡はなかつたんだがな」

と若い醫者はハンケチで髭を扱きながらいつた。

「然し事情といふものはすつかり自分を弱くしてしまふもんだからな」

若い醫者の顔には此時僅かながら苦痛が浮んだ。

天井の丸い明りはほつと息をついたやうな形で、さつきの位置から依然として二人を見おろして居る。

二

若い醫者はその先を續ける。

「一年志願もらちもないものであつた。學校ではうつかり落第すると醫者に成り損ねる心配もあるが志願兵では三等軍醫に成れなかつた處でどうといふこともなし百姓等と一所になつて上等兵位にこづかれてゐるのだから呑氣にも成れないのだ。先づ辛抱して居るのは二週間位なものだ。そんな覺悟だから豫備隊の見習士官に憎まれてしまつた。軍隊といふ處は上官に一旦睨まれるとそれが始終附き纏つて仕やうのないものだ。何とかいふと僕をがみがみいふ。器械體操の鐵棒でも隊の中では僕がうまい。教育係の軍曹も要領は僕にならへといふ位であつたが見習士官は[illegible]ある所ではない。そんなことぢやいかん、眼付がいかんといふ。僕は脊が低いのだから鐵棒へ飛びつくにも上目を使はなければならない。銃を立てても銃口が耳のあたりまで來る。練兵の時でも低い奴は態度がまづい。僕が短い足で歩く工合はあぶなさうな容子だといふのでミスター薄氷と綽名された位だからどうしても上目使ひになる。それを眼付がいかん態度だからいかんといふ。或時は梁木を渡れといふ渡らぬといふ。梁木といふとあの高い橋のやうなのがさうだ。僕は決して渡らぬといつてひねくれてやつた。すると

一同を整列させて置いて見習士官がいふには國府田志願兵は臆病である。恐らく學校に居た時は外科と解剖は落第點であつたらうとからだ。それからいやそれは大に違ふ。私は外科と解剖は必ず滿點であつたのでそれが不審であるならば私の學校へ照會して貰ひたいと喧嘩を買つたら大に閉口した。或時は又からである。整列した前に立つて『汝の劍を以て罐詰を切れといはれたらどうするか』といふ問を其見習士官が發した。劍は軍人の精神であるといふことを注入されて居るので皆切らんといふ方へ手を擧げる。僕は擧げない。なぜ擧げないと詰問する。それから若し狂人にもあつて汝の劍を以て罐詰を切れ、然らざれば直ちに汝を殺さんと迫られた時に其狂人が自分より遙かに力强いものであつた時には徒らに生命を損するよりも寧ろ我が帶劍を以て容易な罐詰を切らむと欲するものでありますとやつた。衝突といつたら何時でもこんな愚にもつかぬものであつた。僕の居た室は以前は倉庫であつたらしかつた。或晩酒保から源氏豆を一袋買つて來ておいて消燈後に二三人で噛つた。同室の一等卒にやればよかつたが遣らなかつたので其奴が密告をした。軍曹がやつて來て誰か豆を噛つたものはないかといふ。ないといふとそれでもぼり〳〵音がしたさうだ怪しからんといふのでランプを點けると寢臺の下に生憎二つ三つ落ちて居たので散々こづかれた。こんなことを眞面目に繰り返し繰り返し六ケ月經過した。然し階級制度だけに六ケ月を經過した時には僕等は一躍して軍醫生といふので曹長の資格を保つやうになつた。もう自由に診察も出來る少し羽が擴がつた。丁度實彈演習で習志野へ行軍があつた時だ。結婚したばかりの中尉であつたが病氣屆を出して行かない工夫をした奴があつた。僕が診察の番に當つて居た。軍醫仲間の相談の結果何でも乾度彼奴は假病に相違ない。本官の奴等平生傲り威張り散らすから少し懲らしてやれといふので僕が行つて見ると大層裝つて居るが假病である。それでも其一日だけは見逃して次の日から練兵に出してやることにした。僕は竊に冷笑しながら營舍の側をぶら〳〵歸つて來ると

『おいこら軍醫生一寸待たんか』

といふ。後を向くと大隊長が窓から首を出して居るのであつた。此大隊長は特務曹長あがりでいゝ加減の老人である。赤銅のやうな顏で目玉がぐり〳〵して居る。眉が毛蟲のやうで白かつた。中尉の病氣はどんなのかと聞くのであつた。いゝ加減いふうちに段々ばれさうになつた。大隊長なか〳〵旨いことを聞く。

『熱はどうした』

とさういふ意外なことをきく。

『左程ありません』

といふと

『どの位か』

と突つこむので僕はうつかり

『當り前でございます』

とやつてしまつた。大隊長非常に怒つてしまつた。

『何を云ふかッ』

と今にも攫みかゝりさうな劍幕だ。失策つたと思つたが據ないから暫く立つて居た。すると

『何を愚圖々々しちよるか、行けッ』

と叱るのである。

『えゝ一寸申上げます』

それから斯ういつて見たが聞かない。

『そんなこと要らん、何故行かんか』

と呶鳴る。

『あゝたとへば咽喉加答兒といふ病氣がこゝにあるとしますれば此にも熱はあるのであります。さういふ熱に對しては唯今のやうな言葉が

私共學校社會には普通に用ゐられて居るので
ありますが……
と出任せを言つた。詐人といふものはそこに到ると淺薄である。騙されたとは知らない。
「さうか、それは僕が悪かつた。實業社會の通用語といふことは知らなかつた。今のは氣の毒なことであつた」
といつて六ケ敷い顏が急に解けてしまつた。
それからといふもの大隊長は僕を信用して時々診察させる。喘息持で惱むのであつた。
「どうも熱があつていかん」
といつてはいつもそれを苦にして居る。熱も無いやうなのを、喧苦にして居るのだから、初めは不審に思つて居ると、自分で計つては苦にするので、よく驗温器を檢べて見ると、よくよく古い狂つたので平熱でも八度近くまで昇る。七度から以上は熱だと聞かされて居たので頻りに苦にして居たのであつた。
軍隊ではこんなことで日を暮して、一年は過ぎてしまつた。然化して通つたといつてもいゝので、それでもどうにか終末試驗に及第もするし心に苦痛といふことは感じないでしまつた。然し此期間に只一つ非常に困つたことがあつた。僕が少し罪を作つたやうなことがあつたので、それも罪といふ程のことではないが、其起りといへば千葉に居た時のことであつた。自分の不成績を少しく恥ぢて一奮發して見る氣に成つた時のことだが、惡友を避ける爲めに在の百姓家の一間を借りて居た。海岸であつた。暑中休暇の後であつたといふのは庭に射干の葉叢があつたので記憶して居る。子供の時分垣根に簇生して居た射干の花を母が切つて佛壇へ供へるので射干の花が僕の腦裡に深く印象されて之を好むやうに成つたのであつた。其射干の花が皆萎に成つて居た頃に其百姓家へ移つたのであつた。蜀黍の穗が高く延びて海が青く光つて穗の揺れる頃まで居た。船橋蛤といつて居るあたりの太いのは大抵この入海でとれる。朝よりも學校の歸りに見ると海は餘計青く光つてそこには白帆が散らばつて居るのであつた。其時分僕は分家といふことは決してすべきものでないといふ觀念を持つた。それは僕の居た隣に本家と分家とがあつた。さうしてそれが互に仇敵の如く相反目して居た。本家が衰運に傾いて居るのを分家が快げに見て居る。本家へは執達吏が來ることがある。さうすると女房や娘が僕の處へ泣いて來る。それを見て僕は只理窟はなしに分家といふことは絶對に惡いものだと感じたのであつた。だから今自分が斯うして父の家の近くに分家するやうに成らうとは寸毫も思ひ懸けないことであつたのだ。其時分はいゝ口があつたら養子に出てもいゝといふやうなことを心では思つて居た。僕の小學時代からの友人で、君も知つてるだらうあの館野である。其親戚で八王子に開業して居た醫者で近頃郷里の川越在へ戻つて居るのがある。隨分資産もあるしそれに一人子の娘が非常にいゝのだが行く氣はないかと其館野から勸められた。噺に興が乘つて遂行つて探偵して見ようといふことに運んだ。暑中休暇を利用して富士登山といふ扮裝で行つた。先方が何も知らぬうちならば探偵の積りもいゝが其娘が館野の從姉妹位に成つて居る家へ二人で行つて探偵の料簡であつたといふのは當時若かつたからとはいひながら滑稽至極なことであつた。途中は川越まで汽車であつたから實は草鞋の底も汚れないので少し極りが惡い位であつた。有樣に躊躇して日沒近くなつて其家へ行つた。館野は僕の平生に似合はぬといつて笑つた。醫者の家は相應な構へであつた。二階へ案内されてさうしてすぐに行水を使つた。糊のきいた肌ざはりのいゝ浴衣に換へさせられた。どうも館野が前に手紙で知らして置いたら

しいので後で考へて見ると餘り何事も行き届いて居た。家の屋根は草葺で厚い廂が二階の窓へ覗き込んで居た。窓から近所の家の棟が見えて棟には青い草が一杯茂つて居る。赤い百合の花が其青草に交つて咲いて居る。どの家を見ても皆さうである。唯赤い百合の花はないのもあつた。下女が茶を出してくれる。茶菓子を撮み乍ら窓外を見て居ると夕日が横に遠くから其青草へ射し掛けて赤い百合の花が光つた。さうして居ると左方の梯子段を静かに登つて來る足音がして何だか知らぬがかちん〳〵といふ微かな響が此も梯子段から聞える。横を向くと室内はもう薄闇くて外の光を見て居た眼には俄にぼんやりとした。梯子段から若い女がランプを持つて上つて來た。ランプを右の手に臺を左の手にして居る。ランプの丸いガラスの笠とほやとが觸れるのでかちん〳〵と微かに鳴つたのである。ランプを持つた手は肩のあたりで握つて居る。僕の處からでは女の顔は丸いガラスの笠で稍隠された。それでもランプの光を強く受けた頰の一部は際立つて白く見えた。化粧をして居るのであつた。館野はこつそり僕の脊をつゝいた。家の娘であつたのだ　化粧映えがしたのか美しかつた。館野のいふのは謔ではなかつた。やがて酒が出る。主人も娘のお母さんといふ人も出て非常に款待した。時々お母さんが蚊を追うてくれる。娘はお酌をしてくれる。僕は却て包圍されて居るやうに感じた。然し存分に飲んだ。館野は後に家のものは此の遠慮なしの態度が大に氣に入つたのだといつた。其晩はそこへ泊つた。すると館野はどうだと聞く。それは娘はいゝ慥に氣に入つたのである。其前髪のあたりに插した短册のやうなのが幾つもひら〳〵と垂れた古風な簪がランプの光にぎら〳〵と光つて一層しとやかに見えた。二十位ではあつたかも知れぬ。白地の浴衣に赤い帶を締めて一つ二つは若く見えたやうであつた。僕はどうして連れて來られたか不思議に思ふ程であつた。然し熟考して見ると養子に出ていゝも惡いも一向まだ父へ打ち明けて意見を聞いたのではない。假令自分がよからうといつて見ても父が許さねば無効である。さうなると慥な諾否はいへなくなる。何故それでは川越あたりまで行つたかといふと斯の如き待遇を受けようとは思はず一つには唯娘が見たい位に過ぎなかつた。餘りに單純であつた。大に困却したから其翌日は逃げようと決心した。所が雨である。一日是非延ばしてくれといつて朝から酒を出す。娘が三味線を弾く。でもそれは落付いた弾きりであつた。娘は相方自の單衣であつた。白粉を落した處は却て光が見えて服装のためか前見たよりも一つ二つはませて居た。館野が一つに成つて娘を止める積りであつたから到頭立つことは出来なかつた。僕はいゝ加減惘れられるやうにと思つて有りたけの襤褸をまけ出してしまつた。其次の朝はどうしても逃げようと思ふと僕の着物が汗に成つて居るから洗濯してあげるためきつき聞いつけた所である乾くまで待つてくれといふのである。すると又雨、又雨といふので六日も居てしまつた。六日の間は氣燥してであつたがそれでも娘に待遇されるのは嬉しかつた。僕は直ちに帰省した。館野と別れる時に假令養子に行くにしても此から先き二年間の學資を出すことゝそれから放蕩して拵へた借財を返却してくれることとでなくちや厭だといつた。大抵それ程のことをいへば呆れてしまふことゝ思つたからである。所が館野の手紙ではどうもあゝ腹を割つていふ人でなくては頼もしくないから將來の金は幾らでも出す、それから是非骨を折つてくれといはれるし、それに娘が大に君に傾倒して居るのだがどうだいといつて來た。僕も案外だ。それ

を二日措きに三日措きにはいつて來る。どうも挨拶に困るから返辭をよこせといつて迫る。遂には貧家に娘を可哀想だと思はないかと露骨に攻め掛ける。其手紙をうつかり父か母かに見られたら大變だから配達の來る度に注意して居た。さうして熟考して見たら一家の事情が到底許さないことに成つたから惡しからず思つてくれ、僕は凡そ何日頃千葉へ立つ、それにしても僕の立つた後、手紙が來ると非常に困るから手紙はよこしてくれるなと書いてやつた。其言葉はそれつきりに成つてしまつた。忘れたやうに成つて居たのだ。それが驚いたことに二年經つて志願兵で赤坂の聯隊に居る處へ其醫者の弟だといふのが突然尋ねて來た。まあ極つた挨拶をしてもぢ／＼しながら其人がいふのには其後醫者の家ではまだ養子が定まらぬ、娘はあなたの方がどうか僕に縁りのつかぬうちは他の縁談は聞かさないでくれといふ次第だといつて

「枉げてもどうか兄の一家のものを安心させて戴くことは出來ますまいか」

　といふ至極穏かな申出である。僕は今までそんなに心掛けて居られたかと思ふと吃驚もするし氣の毒でもありどうといつてうまい挨拶も出來兼ねるので

『一家の事情が當時許しませんものでしたから……いやどうもこんな所で何も差上げるものも御座いませんがどうか』

　といつて酒保へ連れて行つた。外に方法も無かつたからである。

『それでは只今に成つては事情お運び下さる譯にまゐりますまいか、私が斯うして參りますのはよく／＼のことでございますが』

　と哀訴するやうな仕方である。僕は此の期間を過ぎれば獨逸へ留學したい心算であるし、千葉での不勉強をどうにか償ひたいと思ふのだから五六年は暇どれることと思ふといふやうな苦しい嘘を吐いて其場は紛らしてしまつた。それが二度も尋ねて來られたのだから僕も要らざる罪を作つたものだと思つて當時は非常に神經を惱した。其娘はどうしたか懸念に思ふのはそれ許りだがどうにか養子も極まつたのだらう。僕の耳には其後聞いたことがない。尤も彼とは逢ふ機會もなくて過ぎてしまつたのである」

　夜はふけた。夜番の鳴子の響が遠くから段々近くなつてさうして格子戸を開けてはひつて來るかと思ふ程八釜しく響いてやがて又遠くなつた。夜番の鳴子は板へ鐵の短い棒をつけたのでそれを紐で背のあたりへ背負つて居る。歩くに連れて棒が動く其度にがら／＼と鳴るのである。藥局生はもう眠つた。微かに鼾の聲が聞かれる。若い醫者はランプへ眼を注いで居たが

「何だか明るくないな、僕の書生は少し事情があつて世話して居るんだが然し怠けていかん」

　かう呟いてランプのほやを拔かうとする。熱いので一寸手を引つこます。

「そりやかうすれば熱くないんだ」

　と客は下の膨れた處を持つてついとほやを拔いた。火はふら／＼と搖れながら油煙を立てる。天井の丸い光は同時に消えて無くなる。心の燃え糟の炭のやうになつて口金へひつついてるのを客は火鉢から火箸を出してごり／＼と擦つてほやを挿す。ランプの光は一際明るくなつて天井には再び丸い光が映つた。

三

　話は連續する。

「開戰は志願が濟んで幾干も經たぬうちであつた。召集されて行つたのは横須賀の衞戍病院であつた。横須賀には二ヶ月程居た。横須賀の北の山の手で坂を上つて行つた處に海軍の兵曹長の留守宅があつた。そこに暫く厄介に成つ

た。其頃はもう三等軍醫になつて居た。そこらは別莊か料理屋位がある處であつたが、兵曹長が或小金持の隱居と懇意をして居たので此の住ひは其の隱居の別莊であつたのを借りたのであつたさうだ。兵曹長は佐世保勤務であつた。兵曹長といふと陸軍の少尉位の格だから餘りいい生活ではなかつた。家は八疊の間を僕が占めて次の間が六疊それから茶の間といふ小さな作りであつたが、金持の新築だけに小ざつぱりとして心持のいい建築であつた。家族は細君と娘きりである。細君は四十一二にも成つたらうか娘は十九とかいつた。二人では淋しいといふので僕を置いたのであつた。二人共非常に親切であつた。僕も遠慮なしにして居ると細君は宅の者のやうな心持がする、どうぞ何でも柳子にやらしてくれといふのであつた。柳子といふのは娘である。當時は戰爭で人氣が湧き立つて居る上に、自分等が軍人の家族ではあるしそれに兎に角僕が軍醫であつたりしたものだから、自然普通の人に對するとは感情が違つて居たかも知れぬ。其頃は蚊帳を吊つて居た。茶の間には細君と次の間には娘が寢た。雨戸を立てる程の贅澤はなかつた。障子の儘で暑い時だからそれを引いて置かない。僕は出勤が早かつたからよく眼が覺めた。娘が起きて雨戸を二三枚開けて、それから蚊帳の釣手を外す。僕の枕元が戸袋であつたから假令まだ眠つて居た時でもがらがらと戸があくと乾度眼があいた。娘は寢間着で蚊帳を畳んで蒲團をあげて着物を着換へる。それからそつちこつちの戸をあける。隔ての障子があいてゐるので毎朝それがはつきり見られるのであつた。かうして居るうちに僕は其娘を悪くは思はぬやうになつてしまつた。然し以前放蕩をして居た時でも只の女に關係することは罪悪であると深く觀念して居た程であつたから實際此の娘に對しても非常に自ら抑制して顔にも出さなかつた。時々は以前の癖の藝者を買つたりして鬱を晴らすこともあつた。一時二時と夜更しをして歸ることがあつたがそれを娘は何時でも起きて待つて居て世話をしてくれる。尤も兵曹長も酒を飲んでは夜遅くに歸ることが度々でそれを娘がいつも介抱してやつたのだと細君はいつた。或晩僕は酒をしたゝかやつて料理屋から車に乘せられて戻つた。坂の下で車をおりて一人で庭の木戸を明けて戸袋の所へ行つて雨戸を開けようとした。爪先でがりがりと音をさせた。

『國府田さんでございますか』

と娘の聲がする。

『どうも遅くなりました』

と僕がいふとばたばたと急いで足音をさせてかちりと掛金を外してがらりと雨戸を開けてくれた。月は細い庇から少し縁側へかけて白い光を投げた。此の夜は非常によく月が冴えて居た。腰をおろして靴を脱いで居ると

『おゝまあ涼しさうな』

といふ聲が頭の上でした。仰いで見ると娘は雨戸の縁へ手を掛けて伸びあげるやうな體つきをして月を見て居た。僕は腰を懸けて居たから月が庇から二尺ばかり離れて居たが娘は立つて居るので月は庇へ隠れて見えなかつたのであらう。僕は上らうとして靴をぬぐと娘の足へ觸れた。娘は氣がついたやうに

『あれ私がしませう』

と靴をとつて戸袋の側の下駄箱へ入れた。ふと見ると障子の所に何か草花を插して花瓶が置いてある。どうも射干らしいので何だときくと

『あゝ左樣でございました、一寸ランプを拜借致します』

と障子の内側の机に載せてあつた僕のランプを點けて立つた儘引つ込ませてあつた心を出

してそこへ差しつけた。射干の花であつた。此は大好きの花であるといふと

『あの先刻用事があつて町へ參りましたらこんな花がありましたので買つて參つたのでございます。さうしますと母が其では國府田さんに插してあげたらよからうと申しますので插して見ましたのでございますがお氣に召しますかどうかお尋ねしてからと思ひまして此所へ出して置きましたのでございます』

といつてランプを机へもどして蚊帳の釣手を一隅外してその射干の花を掛物の側へ置いた。僕は射干の花を見ながら正服をとる。娘は側に居て一々それを折釘へ掛ける。シャツをとると

『少し汗に成りましたから明日洗濯致しませう』

と丸めて障子の外へ出した。さうして

『一寸お待ち下さいまし。只今お冷を持つて……』

と言ひ捨てて急いで臺所に行つて金盥へ水を一杯汲んで來た。

『どうぞお拭きなすつて』

手拭が浸してある。其時机の上のランプは障子へくつつけて閾の上へおろしてあつた。僕は雨戸の間から外の月夜を見つゝ手拭で汗を拭く。汗の身體を拭き畢つたら急に心持がせいせいとした。金盥の水を庭へ捨てようとすると娘は

『それは私が』

といつて下駄箱から下駄を出して庭へおりた。低い四つ目垣には白い草夾竹桃の花が一簇さいて居る。娘は金盥の水を手の先で草夾竹桃の根へ掛けた。更に葉から花へ掛ける。水の掛つた葉はきら／＼と月の光を宿す。垣根の先には横須賀の市街が只一目で其先には海が一杯に月光を反射して銀の板の如く見える。走水から掛けて盆石の如き猿島が攫めさうである。娘は白地の浴衣に一杯に月光を浴びて金盥を手に提げた儘

『おゝいゝ月だこと』

と獨言をいひ乍らきら／＼と光る白い花簇の側に佇んだ。手に提げた金盥もきら／＼と光を放つて居る。僕は恍惚として此の冴えた外の月夜を見た。さうして自分でランプを机の上へもどして蚊帳の一隅を釣つてもぐり込んだ。娘は再び雜巾で緣側を拭いて雨戸をそつと立ててかちんと掛金をかける。蚊帳へはひると有繫に暑苦しいので

『うゝん』

と唸るやうな聲を出してごろ／＼して居ると娘は又臺所へ行つて何かこと／＼音を立てて居る。

『柳や國府田さんはお歸りなすつたのかい』

此時細君の聲がした。

『大層召して入らつしやるやうでございますからさつきの氷がまだ解けますまいと思つて……』

娘の聲が微かに聞かれた。さうしたら氷袋へ氷を入れて折つた手拭と一つに盆へ乘せて持つて來て僕の枕元からそつと蚊帳へ入れてくれた。かういふことをして貰ふことは心の底から僕は嬉しかつたが然し一方に甚だ氣の毒に感じたから

『どうぞ休んでくれませんか』

といつた。娘は

『消しませうか』

と机の上のランプの心を引つこませて立つた。次の間は障子が開けた儘であるから娘の蚊帳がはつきり見える。さつきまで蚊帳へはひつて居たと見えて蒲團はまくつて後にあつて二分心のランプが其の蚊帳の中にあつて其側に雜誌のやうなものが開けてある。こちらのランプ

が消えたので次の間は餘計に明かになつた。娘は向うの裾をぱさ〳〵とあふつてついと蚊帳へはひる。まだ帯をしめた儘である。蒲團をのべて蚊帳の外へ出る。蚊帳の向うはランプを手前に置いてあるから只青く見えて居る。さらさらと帯を解く音のみが聞える。軈て白い手を裾から差し込んでランプを外へ出した。それと共にぼんやりと娘の屈んだ姿が表はれた。ランプが消えて家のうちが全く闇くなつた時ぱさぱさと復た蚊帳の裾をあふる音がしてさうして絹枕がぎり〳〵と微かに鳴つた。其夜は酷く寝苦しくて神經が興奮して居た。娘もどうしたのか時々寝返りするのを聞いた。僕は此夜からひどく煩悶した。それでも其時は出征したいのが山々で衛戍病院長と喧嘩した位であつたし其家に居たのも其間久しくなかつたから到頭踏み外す心配もなくて濟んだ。全く僕の命を與へられずにしまつたのが幸ひであつた。それから幾らも經たぬうちに僕は出征したのである。横須賀の停車場へ見送りに出てくれた人の中には砲臺長もあつたが日記に堀江令嬢とあるのが此の娘のことである。それからはもう四年にも成るが其月夜のことは思ひ出すとすぐに眼の前に浮ぶ。或は生涯僕の記憶を離るゝことがないだらうと思ふのである。懐かしいのは其月夜である。

出征の途中内地は唯がや〳〵と過ぎた。玄海灘へかゝる。天氣晴朗で波は靜かであつた。沖に泛んで居る漁師が運送船の通過するのを見て板子の下から魚を出しては海へはらり〳〵と投げて大手を擴げる。甲板では此を見て一齊に喝采する。水は空と相接して二つながら青い。兵卒の中には船が構はず進行して行くとあの空と水との間に挾まつてしまはないだらうかと懸念して居る奴があつた。七日目で青泥窪へついた。負傷兵の後送されて來るのに遭ふ。其中に一人知つてる奴があつた。汚い服の胴一杯に血が凝結して居る。數分間彼の噺を聞いた。

或夜夜襲の命が下つた。砲臺からは機關砲を熾に浴せかける。土地へぴつたり伏しても自然の傾斜は頭が斜に上を向いて居る。其うち左の足がどさりと地べたへ叩きつけられたやうに感じた。そつと身體を探つて手を觸れて見るとぬるぬるとする。覺えずやられたといつた。尤も傷はどう成つて居るのか自分には分らない。繃帶を出して縛らうとすると後に居た戰友が俺がやつてやらうといふので足を投げ出して居ると其奴が急にぐつと闇い重みで自分の痛い足へのし掛つた。何をするのだといつても返辭がない。右の足でつゝいて見ても動かない。怪しんで頭へ手を掛けて見るとぬる〳〵と血が流れ出して居る。驚いて能く〳〵見ると腦天をやられて居た。それから暫く恐ろしくなつて疼痛も忘れて漸くのことで左の足を拔いてそれでも銃だけは放さずに匍ひながら下りて來た。ごろごろして動かないのは味方の死體である。それからどこを匍ひめぐつたか平らな處で穴があつたから逃げこむやうにして夜の明けるのを待つて居た。機關砲が時々桝から豆を戸板へまけるやうに烈しく聞える。生きた思ひはなかつた。夜が明けて見ると砲臺に近い瓜畑で穴は砲彈の爆發した迹であつた。支那人が一人斃れて居る。死骸の傍を探しに來て流彈を食つたのであつたかも知れぬ。瓜の花が血で赤くなつて居たといふ。自分の身體も一面に染んで居る。自分の上へ乘り掛つた戰友の血である。自分のは頭へ貫通銃創を負うて居たのであつた、とかういふ噺であつた。後では何でも平氣であつた。其時はみんな噺でも[illegible]が引き締るやうに感じた。旅順へついて間もなく横須賀から手紙が來た。僕等の衛生隊で内地の手紙を受取つたのは僕が一番早かつた。急に故鄕か

[illegible]
は得意になつて報道した。それはかうである。
[illegible]
あつた。滑稽なことには其息子が花林糖賣であ
つた。少女に至るまで僕には心を置かなくなつ
[illegible]容易
に入[illegible]
二人で住んで居る家があつた。ペラ〳〵した唐
[illegible]

たものはあるまいと思つて居ると隊中の評判
にな[illegible]
[illegible]
もうすぐに手紙になつて横須賀へ行つた。こち
[illegible]
一冊の本に綴つたのをよこしてくれた。自分で
[illegible]
するのは夜間のことであるから夜になつて運ば
[illegible]
して置く。應急手當といつても[illegible]で一々傷を
[illegible]
ぬ。テントの外にある負傷兵は毛布も無けれ

ば[illegible]もない。

『水が欲しい』

『繃帶がきつい』

『血が出てしやうがない』

[illegible]

『擔架ア』

[illegible]
顏で洗ふのであるからシャツへは冷たい水が浸
[illegible]
ぬ道理である。それで唸つたり泣いたり[illegible]
るものであつた。然し此の月夜も亦既に四年の
[illegible]
一身は心と共に變化した。女の一身も變化した
[illegible]

一體此所へ開業するといふことが僕の本意ではなかつたのだ。だが七十になる父と喧嘩をすることも出來ず、自分の從來の失業も段々と自分の我を鈍らして到頭僕を下落さしてしまつたのだ。何だか急に落伍者になつた心持がする。それに隣づかりが皆子供の時分からの知合ひだからどうも自分から大人らしく感ぜられぬ、先生といはれるのもいふのも調和が惡いといつたやうなものである。かういふことがある。此のすぐ隣へ竹藪の先はお寺の境内で大きな榎の木が一本ある。枝が隣に出て居て低りいゝので其の實が黒くなると小學校の生徒がつけこんだ。僕の實は旨いので砂糖の實といつて居た。學校の歸りには後夜荷物を背負つた儘登つては枝と枝とを渡つて歩いた。砂糖の實には椋鳥が群集して騷ぐのであつた。然し學校の放課後といふと何時も椋鳥は遠い空へ逃げて移るのであつた。僕も傍目行つた。然しこつそりと行つた。落ちたら危險だからといふので枝が乾るからであつた。然し實であるとは葉まつてなかなか落ちないが砂糖の實では其時葉までならなければ分らぬので頭一杯たべては平氣な顔で家へ歸るのであつた。さうすると何時か母が寺男へ頼んで置いたと見えて寺男が庭でも掃いて居るとすぐに追出される。居なければ登つてたべた。それを或時荷物は背負つて居たから取られなかつたがうつかり下駄を持つて行かれた。非常に驚いて謝罪つたが聴かない。僕は到頭泣き出してしまつた。さうしたら寺男は笑ひながら下駄を出して僕の身體を左の手で抱いて僕の足を盥へ入れて洗つてくれた。此の男が今でも存命になつて生きて居る。此間指を腫らして診てくれといつて來た。さうして砂糖の實の話をして何時の間にこんな先生さんに成つたかといつて涙を流した。かうしたことで郷里に居て嬉しいこともあるが又郷里の者が來ることも多いのである。…若いうちは愛するに限るだ—

かういつて主人は息をつく。

四

一病院へ勤務したのは二ヶ月である。衛戍病院は日光が吹きつけるであつたけれど寒冷の気を凌いで來た爲めか寒いとは思はなかつた。僕は外科の主任を託せられた。其時[illegible]後して看護婦長が來た。此は[illegible]に乘つて出征した女で年齢も二十五六の體格もがつしりした中々な[illegible]などへ遣らせるのは惜しい位な女であつたが、以前病院に居たこともあるし郷里が近いといふので院長の懇請を容れたのだといつた。看護婦長が連れて來たのだといつて一ケ月許りして僕の外科室附に山田といふ看護婦が來た。其前にも外科室附が一人あつたが僕が赴任して間もなく赤十字社の病院へ行く積りで試驗を受けたが落第したとかでそれで外聞が惡いとかいつて病院を出てしまつた。然し此の女は感服しない女であつた。後から來たのは性質が柔順でそれに十日でも二十日でも後れて來るとそこに多少の遠慮もあるかして[illegible]の方が非常にいゝ。患者でも[illegible]ないものはない。[illegible]出して置くなると火鉢へ火を[illegible]して置く。それで患者からの[illegible]物でもあると[illegible]へ持つて來る。[illegible]だから[illegible]室内に必要なものは[illegible]なく整理して置く。僕はいゝ看護婦がきてくれたものだと思つた。[illegible]なく[illegible]が丸ぽちやの色白な愛嬌のある女であつた。僕は仕事が[illegible]で愉快であつた。[illegible]を使用して驚かしてくれようといふ様な功名心もあつたが女を相手にして居るのは[illegible]であつたのだ。[illegible]な境遇に係係なく働いて居たものけなげく女を見るとどれを見ても好く見えた。丁度[illegible]

旋の途中汽車が遼陽の停車場へつくともう日本の女が居た、其時には満載された兵卒が一時に勇み出して汽車もひつくりかへる様な勢ひであつた。白い服を着て立ち働く看護婦も其當座僕の目には大抵よく見えたのである。手術の暇に僕が椅子に凭れて居ると看護婦は一々丁寧に器械をガラス戸へ入れる。汚れ目のない服をきりつと締めて居る。僕はそれを餘念もなく見て居るのであつた。バケツを提げて出て行く時に看護婦は扉をそつとしめながらちらと僕を見て行くことがある。さういふ時には空のバケツを提げて戻つて來て扉を開けてはひつて來る時には何となく一寸赤い顔をするのであつた。さういふ女であつたから僕は心から敬へもした。兎に角外科室はいき／＼して居るやうに感じた。だが世間といふものは迂濶に行かないもので尤もそれはずつと後になつて知つたのだが其時分薬局生や其他の奴がどうも僕と其看護婦との間が變だといふ疑惑を抱いて蔭では騒いで居たさうだ。僕等は實際に於て疚しい所のあつたのではなしそんなことはちつとも知らずに居たのである。固よりそれだから遠慮をしてどうといふことはなかつた。それを猶更ら不埒だといふので蔭では頻りに業を煮やして居たさうだ。或時妙なことから僕はそれを知つた。其頃病院はまだ新築して無かつたから宿直の醫員も薬局生も寝室は一つであつた。或晩僕が宿直であつた。うと／＼して居ると薬局生の一人が騒ぎ出した。それは彼の蒲團が一枚どうかして無くなつたといふのである。さうして其蒲團が僕の上に掛けてあつたことが發見された。僕の夜具は何時も僕の看護婦がとつてくれる。其晩はどうしたことか故意にやつたのではなかつたのであらうがうつかりした間違ひをでかしたのである。一室のものは騒ぎ出した。明白地にはいはぬが當てつけらしく變だ怪しいと喚鳴る。喚つては僕に見られると蒲團をかぶる。ランプが消えると足でどた／＼と蒲團を叩く奴がある。僕は變な奴等だと思つたが然し默つてしまつた。其翌日看護婦は僕に何ともいはなかつたが非常に氣の毒さうにして小さくなつて居るのが著しく分つた。彼は其騒ぎを松田から聞いて知つたのださうだ。突然松田といつても分るまいが今僕の使つて居る松田であるが其時分は病院に居たのである。氏家の生れで山田と同郷であつたから外の奴より懇意にして何事も打ち明けて居たらしい。山田は鹿沼へ養女に行つて居たので以前は知らぬ同士であつたが同郷といふ觀念は互に懐かしがらせたと見えるのである。僕は山田の容子を見てしおらしい女だと思つた。其後又こんな事があつた。宿直部屋で骨牌をやるとかで皆集つた。看護婦も集つた。其時丁度ランプで書物を見て居る。騒がれるのは迷惑であつたからふとそんなことは詰らないぢやないかといつた。すると薬局生等はふいと立つて行つてしまつた。他の看護婦も立つてしまふ。山田が獨り殘つた。酷く心配さうな顔をして暫く坐つて居た。白い服をとつた彼は其服装が當直の身でないことを證據立てた。彼は僕の夜具をのべて去つた。それから蒲團の中で書物を讀み續けて居ると薬局の奴等が酒を飲んで來た容子でどた／＼と踏ん込んで來た。突然ランプを吹つ消した。さうして亂暴をはじめる。僕は激怒したから何をするんだと立ち上つて呶鳴りつけた。さうすると先生は病院の風紀を害するからだといふ奴がある。何を害して居るのだと詰問すると看護婦と變ぢやないか、無作法にもいふのである。僕は山田が置いて行つてくれた枕元の燐寸を探つてすりつけた。さうすると有繋に極りが悪くなつたと見えて一時に逃げて行つてしまつた隣室へ行つて狡い奴だといつて松田を起して

居る。松田は看護婦との關係から自然彼等の仲間入をしなかつたのである。僕が今あれを世話して居るのも其時分の緣故があるからである。僕は其晩はじめて彼等が此程猜忌の眼を以て見て居たのであつたかと驚いたのである。然し此事から其後までもどう云ふものか彼等に對しては自分から身を引いて避けて居た。軍隊に居た時分の心持にはなれなかつた。さうして何となくさういふことのある度に一層小さくなつて心配さうな顏をして働いて居る山田のことがいぢらしくて堪らなかつたのである。其後僕が宿直の晩であつた。酒を飲んで來て遂に松田へうつかりしたことをいつてしまつた。それは自分は山田を欲しいと思ふのだが一つ聞いて見てくれないかと露骨なことをいつたのである。然し酒が醒めてからは自然忘れたやうに成つて居ると或晩松田が相談したいことがあるからと誘ふので蕎麥屋へ行つた。松田は例の件ですがといひ出す。あれから早速本人に打ち明けると身分が違ふのであるから到底駄目なことと私は思ふけれど先生のたつての望みとあれば私の一身はお任せ申します。然し私には關係のある人もあるから其方へ手紙を出して見なければならぬと初めはかういふ挨拶であつた。一週間たつたら手紙が來た。もう私の身は私の自由に成つたどうか先生へ挨拶をしてくれと女はかういふのである。先生も其積りで居てくれと松田は述べるのであつた。僕はどうして松田抔へそんなことを打ち明けていつてしまつたのであつたかと彼の挨拶を聞かされては驚かざるを得なかつた。能く聞いて見ると女は氏家から養女に遣られたのださうだ。其成長するに隨つて不幸な一家は沒落した。主人が死ぬ時に鹿沼に病院を開いて居た人が緣故の關係でもあつたか死後の一家を託した。それで彼は其病院の養子であつた一少年と一つに成るとか成らぬとか兎に角一生のことに就いて助言を得るだけの契約があつたのである。それで今東京に出て大學の助手をして居る其の養子に手紙を出したのである。其醫者といふのは本來必ず彼を迎へようといふ意志もなかつたらしいので、良緣があるならば其方へ身を任せたがよからう自分は生涯の相談相手たることに變りはないからといふ返事であつた。然しかういふ相談を掛けた以上もう彼は其の養子に身を任せるといふことは義理の上にも出來なく成つたのであるから先生も能く考へてくれと松田は平生にませたことを附け加へた。僕はそんなことに成らうとは寸毫も思つて居なかつたのだから困却してしまつた。それから僕は郷里に在る父が頑固で到底貧窮の子女を容れ能はぬことや家庭が隨つて六かしいことや種々の情實を打ち明けて自分は山田を惡くは決して思はぬけれども成就しない緣と信じて居るからどうか其積りで居てくれと松田へ斷つた。僕は苦しかつた。其夜の酒は更に旨くなかつた。何故松田へ賴んだのであつたらうか然し賴んだことに誤りはない。矢張り僕には女に對して未練があつたのかも知れぬ。病院に奉職してからの僕はどうしても變であつた。其後松田は女へ斷りをいつたことと思つたがそれでも氣がかりであつたから直接自分の事情を打ち明けた。女は疾に松田から聞いて知つて居る。最初から到底及ばぬ事と思つて居たのだから怨みに思ふ事もないといつた。然し僕が一言の失策をしみ〴〵と詫びた時にうつ向いた彼の白い頰に涙が二三點煮染んだ。僕は何となく果敢ない可哀想な感じがした。さうして自分も彼の一身の爲めには一肌拔いで世話してやらなければ成らぬと其時心に深く思つた。松田は此の事のために女が非常な煩悶をしたことを語つた。然し自制心の強い看護婦は舉動に何の變化もなく依然として

忠實に働いて何處までも愼ましいのであつた。一人でも他人が側に居ると愛嬌のある彼は元氣よく笑ふのであるが僕と二人の時は打ち解けることもないといふ姿であつた。それが何となく齒痒いやうなもどかしいやうな感じがした。二人の關係は截然と極つたにも拘らず病院のうちの嫉妬は止まなかつた。藥局生は遂に庶務に迫つた。庶務のものは僕に一言もせずに彼を隔離室へ轉じた。僕は心中不滿に堪へなかつたがぢつと一言もいはなかつた。然し隔離室は裁判所に勤務して居た兄の夫婦と共に借りて居た家のすぐ近くであつたので彼は僕の家に往復した。僕を訪ねたのではない。其ずつと前からの懇意で姉を訪ねて來るのであつた。姉とは姉妹のやうであつた。姉は時々あれを妻にしたらよからうとまでいつた位である。兄にも勸めた。兄は僅かに可否の判決は下さなかつたが彼を愛して居ることは姉に劣らなかつた。姉は僕が一家の事情まで打ち明けたこと抔は素より知らう筈がない。却て僕が最初から冷淡であつた樣に見て居たかも知れない。山田は姉と逢へば心底から快活に打ち解けて居た。それが僕獨りになると紙一枚の隔てがあるやうな態度であつた。其癖痒い所へ手の屆くやうに親切であつた。隔離室へ移してもさうであつたから他の嫉妬は益々募つた。憐れな看護婦は到頭そのために解雇されて宇都宮を去らねばならなくなつた。其時姉と散々別れを惜んだ。二日間姉は彼を引き止めておいた。さうして停車場まで見送つた。本當に汽車に乘る時の容子はお氣の毒なと姉は歸つていつた。僕も其日は缺勤してしまつた。暫くして姉のもとへ手紙が來た。其後上京して芝口の或商家へ奉公に住み込んだ。おかみさんといふのは家附の娘でそれでヒステリーであるから我儘な人である。此迄は下女が皆勤まらなかつたさうであるが私には少しも苦には成らぬ。近頃はおかみさんが怒らなくなつたというて旦那から譽められる。それでお內儀さんのお供をしては時々見物に出られるので今の所は何も不足もないから安心をして貰ひたい。只あなたにお目に懸れぬのが遺憾だといふのであつた。先生へも宜しくといふ一句があつた。僕は此一句が非常に滿足であつた。さうして其手紙を繰り返して見た。姉は現在の彼の身の上を心の底から悅んだ。此丈けのことならどうでもないのであるが事件といふものは不思議に發展して行くのである。

翌年の一月である。用があつて歸省した。用はそこ〳〵に達して三日程の猶豫があつたから急いで上京した。女の許へは手紙を出して本郷の西片町に居た鹿沼の病院の養子だといふ醫者の處で落合ふやうにといつてやつた。彼は病院に居た時には相應の口から數次緣談があつたのであつた、それを皆拒絶した。彼は何時も餘り打ち解けることはなかつたのであるが拒絶したといふ時には乾度手柄さうに僕へ語るのであつた。それも今のやうに奉公をして居るのも僕の爲めであると思ふと濟まぬ氣がとめどもなく起るので以前から關係のある醫者に打ち明けた相談をして彼を賴まうとしたのであつた。それも一つであるが實際僕は逢ひたかつたのだ。それなら一人で逢へばよかつたものを其氣は付かずに只一身の世話をすることにばかり腐心して居た僕は餘りに正直一途であつた。極めてやつた時刻には僕は西片町へ尋ねて行つた。其醫者とは初對面であつたのだ。それを臆面もなく行つたのは僕の頭も變に成つて居たのである。格子戸を開けて案內を求めると女の下駄が一足爪先を揃へて脫いである。玄關の折釘には吾妻コートとショールとが懸つて居る。帽子と外套とをとつて此も折釘に掛けながらショールを握つて見た。女は疾から待つて居た

のである。僕が座敷へ通つた時に彼はきちんと坐つて居た居ずまひを更に改めた。看護婦の白い服を脱げばいつでも唐棧の衣物であつた彼が纔の間にすつかり身なりの改まつたのには驚かずには居られなかつた。さうして座に在る間絶えず女へ目を注いだ。僕は主人へ相談を仕掛けた。歸する處は氣の毒な彼の一身をどうかしてやつてくれといふに過ぎないのである。其時主人は彼との關係を具に語つた。主人も漸く三十位な男であつた。穩かな性質らしかつた。然し餘り氣乘りはしない容子であつたが寧ろ此は當然のことといはなければならぬ。主人と山田との關係は密接であつたのだ。それだから僕との關係に就いても態々手紙の往復があつたのである。若し頼むといふことになれば先方から僕に向つてすべきことであつて赤の他人から自分の深い緣故のある人間の事を殊更に依賴されるといふそんな矛盾したことがどこにあるものか。相談は不得要領に畢つた。主人は僕等の關係に疑ひを抱いて居たのであらう。始終腑に落ちぬといふ風であつた。是も咎めることは出來ない。西片町を出たのは夜の十時過ぎであつた。女はもう芝へ歸るには餘り遲くなつた。僕は主人が必ず彼を泊れといふのであらうと思つた。それを何とも云はぬ。もう深い關係のある仲と思つたのだから男と一所に出る女を留めるといふことは實際出來なかつたのであらう。女も不精無性にコートを着てショールを掛ける。僕も跋が惡く格子戸を開ける。女はつゞいて格子戸を立てる。主人はランプを持つた儘默つて玄關に立つて居た。外は寒い晩であつた。ぼつり／＼と森川町の通りまで出た。急に正氣づいた樣に街頭のともし灯が輝いて見えた。後を見ると女はしよんぼりとして兩袖を胸の所に重ねてうつ向きながら附いて來る。何處か宿屋へ泊らなければならぬと思つたが店の明りが眩いやうで何となく氣が咎めるやうでどの店へもはひることが出來なくて唯うかうかと歩いて居た。ぞろ／＼と人通りの繁きなかを電車がぐわう／＼と過ぎて行く。電車に乘る氣もつかず當もなく歩いて行つた。それから戻つて切通しの坂へかゝつた。坂が闇く成つた時後を見かへると二間許り後から小刻みに刻みながら足を運んで女は附いて來る。態と池の端へ出た。夜の寒さは闇い空から急に押へつけて來たやうに感じた。到頭上野まで來てしまつた。停車場の横町で思ひ切つて宿屋の閾を跨えた。表のガラス戸を開いて僕がはひると女は躊躇して居る。僕はこつちへはひらないかといつた。西片町を出てそれまで一言もいはなかつたのである。番頭の挨拶は元氣であつた。案内されたのは少し離れのやうになつた部屋であつた。二間あつたやうであつたが隣の間には客はなかつた。何となく安心が出來るやうな氣がした。番頭に少しはかりの心付をすると番頭は二人を見てへえ／＼と頻りにお世辭をいふ。僕はすぐに風呂に暖まつて來ると電燈の下に堅炭がかんかんとおこつて居る。茶が茶碗に汲んである。縕袍に着換へて火鉢の前に坐つて少し冷めた茶を啜る。女は火鉢の側へも寄らず座蒲團の上へも乘らず堅くなつてうつ向いた儘である。風呂はどうしたと聞くと延べませうといふ。病院に居た時には打ち解けないといつても此程ではなかつた。僕も手持不沙汰に火鉢へ手を翳す。女中を呼んで酒を命じた。女中は出はひり毎に堅くなつて坐つて居る女の姿を不審さうに見て居た。さうして草履の音が態とらしくばた／＼と聞えた。酒を二三杯引つ掛けて僕は火鉢の側へ寄つたらどうかといつた。漸く彼はすりよつた。それを敷いたらよからうといつたら漸く座蒲團を半分ばかり膝の下へ入れた。さうしてぢいつとして居たが

『あの先生は田端に御親戚がございますさうですが』

と漸くのことでいつた。兒がそこにも一人あるのだといふと

『昨晩は田端へお泊りなのでございませうね』

重ねてきく。

『さうだ』

と僕は何氣なしにいつた。

『お兄さんのお宅へお歸りになりますと宜しいのでございますのに私のために無駄な費用をお遣ひ遊ばして誠にどうも相濟みません。』

と彼は妙に改まつたことをいひ出した。尤も彼は病院に居た時から非常に義理堅い女で誰れが何かやると屹度返禮をした。餘り氣の毒だから滅多に物もやれぬと姉はいつて居た位なのであつた。彼はからいつて

『あの私の分は私に用意がございますから』

と更にいふ。僕は

『馬鹿な、そんな心配をすることはないさ』

といつて笑ひながらぐつと杯を引つ掛けた。それからといふものは女は少し打ち解けて徳利を取り上げて漸く酒をさした。二本の徳利が空になつたけれど僕の心は混亂して居たので微醺をも帶びない位であつた。大分時間が經つたらしい。内も外もひつそりとして居る。唯時々停車場の機關車がぴゆうと鳴つてどろ／＼と遠く響くのみである。呼鈴を押すと番頭が來る。

『へえ、お床は御一所に致しませうか』

と番頭は閾へ手をつく。

『いゝや』

と僕は急に慌てゝ右の手を延べて疊を指しながらいつた。

『へえ／＼』

と番頭は愛嬌を作つてやがて夜具を運んで來る。

『あのうランプを持參しましてございますから、エヽ御用の節は何時でもどうぞベルをお押し遊ばして……エヽ便所はすぐこちらでございますから……エヽ明日は汽車にお召しになりませんでエヽ左樣でございますか……それではお冷を只今持參させますからエヽそれではごゆつくり……』

といつて番頭は去つた。女中がやがて盆へ土瓶とコツプとを持つて來て枕元へおいて默つて障子をしめ乍ら女の姿をちらりと見て行つた。便所へ立つてもどると電燈が消されてランプが點けられてあつた。さうしてランプは余の枕元で室の隅の方にくつつけてあつた。薄闇い方で女は僕の洋服を疊んで居るのであつた。僕は床の上に胡坐をかいて見てると女はランプと反對の隅へ行つて羽織を脱いでそれから着物を脱いで襦袢の片袖を脱いで床の上の寢間着に着換へた。さうして羽織を疊んで上衣を疊んで襦袢を疊んだ。襦袢の袖は非常に派手な美しいもののやうに見えた。僕は襦袢の袖を眺めると

『あの此の間お内儀さんのお供をして參りました時此切がありましたのでまあ綺麗な友禪だと申しますとそんなによければ取つてお行きと申して下すつたのでございます。尺が少し足りませんので袖が短うございます』

といつて赤い襦袢で一寸顏を掩うた。前にもいつたやうに其内儀さんといふのはヒステリーで氣分のいゝ時はそれや此やと女中をいたはつてお供で出る時には何かと買つてくれる。主人も内儀さんの機嫌がよければ喜んで竊に心付するといふので近頃懷は温かである。それで貰つたり買つたりで漸く此頃では身の廻りも一通りは出來たのだといふのである。それで此の友禪の襦袢は内儀さんの供をする時には何時でも着て出るのだといつた。彼は着物の噺から一層打ち解けた。僕が心中頻りに苦悶して彼の

一身に就いて將來の決心を慥めようと思つて有繋にいひ出し兼ねて居るとは知らずに威勢よく蒲團の上に蹶りあがつた。それでも僕が默つて居れば其の間彼も默つて居る。噺は暫時途切れた。電燈の光に比してランプの光は薄闇い。もどかしく成つた。

『此後はどうする積りだ』

と僕は突然聞いた。其聲は僕の耳にも穩かならず響いた。彼は暫く默つて頭を垂れて居たが更に其儘うつぶしてしまつた。僕は片隅のランプをとつて二人の近くに置いた。さうして明るく心を出した。女の束髪は僕のずり出した膝近くにうつぶして居る。女は軈て顏を揚げた。ランプが餘り近くに置かれてあつたのに氣がついて思はず

『まあ、あなた』

と女はいつて顏を赧らめた。彼があなたといつたのは前後に此時のみである。然し僕は堅唾を吞んで女の返辭を待つて居たのである。戲談の沙汰ではない。僕の顏は恐ろしげであつたらう。女は僕の顏を見ると急に色を變じた。復た突つ伏して微動もしない。僕は餘りに寒からうと思つて後の夜着を掛けてやつた。三十分も經つたかと思ふ頃女は起きあがつた。怨を含んださうして遣る瀬のないやうな顏をして只一目僕を見上げてすぐにうつ伏した。

「どうにか私の一身は私が始末をしますから先生はどうか御心配下さらぬやうに……」

と慄へながら微かにしかもきつぱりと女はいつた。さうして近くに置いたランプの光は女の膝にこぼれた涙にきら〱と映つた。僕はまたいぢらしく成つて心が鈍つた。餘り過激ないひやうをしたことを悔いた。どうにかするといふ其の事が若い女の一身には至難のことである。それを捨てて見て居るといふことは僕にはどうしても濟まされぬ。後に知人に此事を噺したらそれは君には女とすつぱり離れてしまふのが心殘りなのであつたらうといつて笑つた。さういふことも當時の心の裡には潜んで居たかも知らぬ。それで其時女に對する僕の方針が定まつて居たかといつてもそこには何物もなかつた。決心がどうだと聞かれたとて女の心に何の定まつた考へがあらうか。腹藏なくいへば二人の間には意識されなかつた一種の強い粘着力が潜んで居た、のである。要領を得なくてもどうでも二人で相對して居ればそれで其時は氣が濟んだのである。實際病院を出た當時十分彼の一身に落付が出來て再び僕に遇ふことも無いといふやうになつたであらうならば僕は果敢ない心持がしたであらうと思ふ。ランプに照らされて居る女の横顏を見おろしながら謝意に滿まされつゝ腕を拱いて居た。ふと横を向くと二人の姿がぼんやり障子に映つて居る。思はずはつとした。立つて障子を開けて見廻した。夜は益々靜かで今は機關車の響も聞えない。便所へ立つてもどつた時僕は身體が非常に冷却して居たことを心附いた。女は依然として死骸の如く動かぬのであつた」

五

「翌朝僕は急に宇都宮へ立つた。恐懼と不安との念に駈られつゝ病院へもどつた。其夜の行爲に對して僕には心に解決のつけやうがなかつた。同行の兄は檢事であつたので自然僕も兄の同僚と交際があつた。煩悶した結果遂に兄の同僚の二三の人に窃に判斷を求めた。或者は其夫婦が愛して居るなら好配偶であるから公然細君にしたがよいといふ。或者は事情がどうであるならば斷然排斥しなくてはいかんといふ。僕の心には排斥するといふことがどれ程難事であるかといふことは明瞭に分つて居る。實際に於て惜しい心は十分である。然し怒つた末には人の心

にもない處置をしてしまふことがあるので僕も一方病院の者や知人などに對しての恥辱をも感じたので途中ぶれかぶれで思ひ切つた手紙を出した。郵便函へ入れてからもその手紙の處置に對して不安の念に驅られて居た。僕の心は寂寞としてとりとめもないむしやくしやしたものであつた。女の手紙がすぐに來た。非常に怨んで居る。それは知れきつたことだ。手蹟を見ると松田が書いた手紙である。松田も疾に病院を出てしまつて居た。僕等の關係から居惡くなつてしまつたのだ。後に松田に聞いて見ると其時女は神田に居た松田を尋ねて行つたさうだ。さうして散々泣いたさうだ。一所に成らうとは初めから思つては居ないのだけれど今になつてさう不人情に捨てられたのでは酷い。今さら心が咎めるから許婚の處へ知らぬ振りをして行く譯にも行かぬ。それではあんまりだといつて泣いた。松田は女に泣かれて他の下宿のものへ身がなけたといつた。松田は女に賴まれて其時怨みを書いたのであつた。僕は衷心から悔悟した。さうしてすぐに自分の不人情を詫びてしまつた。此時ばかりは自分で自分を不人情の極だと思つた。手紙の端へは其うち逢はれることもあらうし其時に何事も腹を割つて噺をしたい。此の間の手紙は自分の眞意ではないといふやうなことを具さに書いてやつた。すぐに二月は來た。山田から又手紙が屆いた。郷里の生家に久々で行く序でがあるからお目に掛ることが出來るだらうといふのであつた。或日病院の方に暇があつたから石橋の停車場から一里半程在の元の看護婦長を訪ねていつた。其家も醫者であつた。看護婦長は氣象の勝れた女であつたから病院内の折合ひが面白からぬことがあつたので病院長が留めるのも聽かずに出てしまつたのであるが僕に一遍はどうか來てくれと再應の手紙であつたから行つたのである。此處へも山田から手紙があつた。それは暫くのことでお目に掛つてそれから宇都宮へ行くといふ文意で明日が丁度其日に當つて居た。僕は思はず時間を過して大急ぎに停車場へ驅けつけた。今一足で汽車に乘り後れる所であつた。漸く車掌に押し込まれた時には暫く胸がせか／＼して居た。宇都宮へついて出口の方へ急いで行かうとすると僕は驚いた。丁度僕が通り過さうとした或室から一番後れて出た女がある。山田であつた。石橋へは降りずにこゝまで來てしまつたらしい。狐につまされたやうに思つて物も云はずに出口を出た。それから停車場の待合で少時話をした。まだ先刻まで明日看護婦長の所へ行くものと思つて居たのに同じ列車で此所へ降りようとは餘りに突然であつたといふと彼は電報で知らして置いたのだがといふ。電報は石橋の在へ出た後へついたのである。尤も僕の宿所へ打つたのではなく彼も僕も知合ひの或處へ打つたのであつた。それで電報を受取つた人は散々僕を尋ねたさうである。人の惡い病院の奴は僕の行先を明かさなかつた、それに僕の家へは其人は憚つて來なかつたのだといふ。其時の事は能く記憶して居る。停車場を出た時には寒い空風が乾き切つた市中を吹き拂つて稍〻鎭まつた時であつた。既に山に傾いた夕日は凡ての物を黄色に染めて居た。道路からさうして市中の白い壁まで橙色の光を浴びて居た。女は化粧をして居た。其橙色の夕日が西を向いて行く彼の一身へ一杯に投げ掛けて居て美しく見えた。僕は別に何の考へもなく自分の家へ連れ込んだ。停車場で偶然遭つたから連れて來たといつた。事實は其通りであつたけれど僕等の關係を寸毫も疑ふ念のない兄や姉に對しては心に恥ぢない譯には行かないのであつた。姉の悦びは非常であつた。さうして女だけに彼の服裝から其順境らしいのを

見てとつて心から愉快らしかつた。兄も僕に對して些つとも疑念を挾まぬやうであつた。僕も女を連れ込むといふのは呑氣なものであつたが兄も呑氣であつた。姉が心からの饗應を受けて山田は三日泊つて居た。錢湯へも姉と一所に行つた。借家は病院の近くで錢湯へ行くのには病院の前を通らねばならなかつた。漸く噂を止めて居た奴等は又姉と歩いた彼の姿を見てそれから以前と異るあでやかさを見て想像して居た二人の關係に誤りはなかつたといつて俄かに騒ぎ出した。此時は既に僕の心には彼等の疑ひを心から打ち消す資格はなかつた。それでも以前からの關係であることを彼等の心に慥められるのが遺憾であつた。三日の間僕は女と打解けて語らなかつた。三日の間に兄夫婦の疑ひを招くべきことは寸毫もなかつた。彼がもう歸らうとした時に僕にしみ〲噺をしたいが二三日暇取ることは出來ないかと竊に聞いた時幾日でも居りませうといつた。彼は鄉里へ急いで行くといつて居たのに又三日居てしまつた。五日でも七日でも居たかも知れぬ。僕の留まつて居れといふ言は彼は心の中で宇都宮へついた時から待つて居たであつたらう。姉の處に居たのではない。姉には暇を告げて出た。いくら辭退しても聽かずに停車場へ見送つた姉の手前を兼ねて已むなく汽車に乘つた。次の間本へ下車して竊に諜し合せて置いた士族町の或家へ戻つた。三日前に彼が電報を打つた家である。僕は彼に逢つたら到底別れねばならぬ運命であるから相互に納得の上泣くだけは泣いてもきつぱり手を切つてしまはうと篤と噺をする積りで其いひ樣も心の中であれこれと考へて居つたのであつたが停車場へ突然彼の化粧した姿を見た時には恍惚としてそれも此も忘れてしまつた。姉の手前を兼ねた三日の間はもどかしい歯痒い時間であつた。彼が表面姉のもとを去つた日の午後には少なからず不安の念を懷きつつも病院の用はそこ〳〵にして車で士族町へ馳けつけた。もう手切れの噺どころではない。しみ〲何をいつたのであつたか今ではちつとも記憶して居らぬ。彼は三日間一歩も外へは出なかつた。僕も三日といふもの碌々病院にも居ないで其家へ泊つて居た。兄も姉も彼が汽車で立つたことを信じて居たので二人がこんなことをして居ようとは毛程も勘付かなかつたのである。何事も暴露した現在でも此時のことだけは兄夫婦は知らずに居る。女か僕かが知らさなければ兄や姉の耳へは達する筈がないからである。何故といふのは兄は其後遠方へ轉任になつたのである。此三日の間に山田は何處までも女らしい、身も心も捨てて僕のいふが儘になる柔しい女であることを今更のやうに感じた。一言でも自分の身の上を訴ふることはなかつた。かういふ不運ないぢらしい女を僕は從つた。遂に捨ててしまつたのである。僕は心にもない薄情な人間になつてしまつたのである。三日目の朝に歸らうと思つたが遂に悶々と暇どつてしまつた。人目を忍んで日の暮合ひ頃の汽車で立たせた。停車場のランプの光は寂しかつた。殺風景な汽車の扉ががたぴしと立てられて車掌の呼子がぴり〳〵と鳴つたら汽車は夜の中へ大急ぎで紛れてしまつた。僕は宅の者へ挨拶するために士族町へもどつた。一月に女を後にして來る時は心は疑懼と不安とを感ずるのみであつたが其夜女に去られた時はつく〴〵心の寂寥たるを覺えた。別れる時に僕は無理に少しばかりの小遣ひをやつた。彼はそれを燃えるやうな赤い錢入へ入れた。どういふ積りであつたかそれは別に紙へ包んで其錢入へ入れたのであつた。

病院の新築は落成して二ヶ月經たつた。表の鐵の垣根へ垂れた柳が黄色い芽を吹いて世間

が急に悴らしく成つた。四月の中旬であつた。理想通りの外科室で自分が主任で手術を施すのを僕は其時大得意であつた。心は其方へ屈託して居た。丁度其時赤十字社の總會があつたので急に出席することに成つた。上野の花よりも何よりも上京して見ると氣掛りな山田に逢ひたくて堪らなかつた。二月に別れてから兎角身體の工合が惡いといつて其處は幾らか心得があるから仔細に容態を書いてよこしたことがあつた。其後二三度よこしたがどうも益々容子が變なのであつた。さういふ譯で折角可愛がつて惜んでくれた芝の商家も暇をとつて十幾年目とかで邂逅したといふ兄の家で厄介に成つて居る。芝の主人が殊に目を掛けてくれたので思ひの外の貯へもあるから當分の所では兄にも迷惑は掛けない。芝のもとの内儀さんが二三度訪ねて來てくれたことがある。氣分のよい時は是非相手に來てくれというてくれるが遂身がひけて行かれぬ。兄の家が申上げるも恥かしい程みすぼらしい家といつてよこしたことがある。汽車が上野へつくとすぐに其家を尋ねて行つた。猿樂町の狹い路地で漸く探し當てた。穢い衣物を着た工女らしいのが四五人でせつせとボール箱を貼つて居る家であつた。彼の兄といふのも性質の惡さうな人間ではなかつたが長い間貧乏な生活をして居ると見えて悲しげな餘裕のない容貌をして居た。僕は一寸躊躇した。破れた障子を開けて薄暗い店先を覗いた時せつせと刷毛を使つて居た兄といふのは怪訝な顏をし一刷毛を持つた儘つくづくとこちらを見た。名刺を出した時に何か合點したらしく二階へ向いて女の名を喚んだ。宇都宮からお出でに成つたよといつた時梯子段から女の裾がちらりと見えて急に又引つ込んだ。さうして暫くたつて山田は降りて來た。彼の手紙にあつた通りのみすぼらしい店の客としては僕の洋服姿は不似合であつたかも知れぬ。工女は怪しさうに見ながら身體をずつと前へ屈める。其後をやつと通つて險難らしい梯子段をあがつた。穢い二階であつた。疊に蒲團が疊んだ儘である。女の荷物であるらしい柳行李が白く鮮かである。狹い路地には二階建が相對して居るので此所の二階も光線が疎い。女は坐つた儘其稍穢い綿入の前を氣にして頻りに合せて居る。僕のために衣物を換へる暇がなかつたらしい。さうして先刻梯子段をおり掛けて躊躇したのは大方帶を締めたのであつたらうと僕は思つた。大きな柳行李には麻繩が掛けてある。僕は穢い二階を見てぼんやりして居た。女のいふに身體が引き續き工合が惡い。時々ボール箱の手傳ひをすることもあるが此の三四日は酷く吐氣がして碌々物もたべられないで寢たり起きたりして居た。先生のお出でに成るのは存じて居ましたがこんなに早いとは思はないので着物も着換へずに居て本當に只今は慌てましたといつた。髮も亂れては居ないが油氣が失せて居る。薄紅かつた頬も褪めて肉も落ちたやうである。其容態はどうしても姙娠の兆候が十分である。僕は前々からの手紙でそれは確めておいたものの變つた姿をかうして眼前に見ると此先き彼の一身はどうなるものだらうかといふ考へがすぐ胸をついて出る。女はかういふ住ひを見られるのが身づまりであるといふ容子がありありと見えてうつ向き勝ちである。さうして穢けた綿入を着た所は病院に居た時の貧しい姿にかへつて見えた。僕は矢張り氣になるから此の先きどうして行く積りだと此度は陰かに聞いた。するとかういふのも私の運でありますから決して先生をお怨み申しません、私の一身は私がどうかして行きませう、どうか先生は私のことはお忘れになつて奥さんをお極めになつて頂きますと矢張り一月に言つたやうなことをいつて縞の褪めた膝の

上にぼろ〳〵と涙を落した。迚も成就せぬ縁であるといふことは疾に僕からいつてある。それにも拘らずこんな情けない境遇に彼を陷らしめたものも全く僕の罪である。女の無言でうつ向いて居る時僕も唯腕拱いて默して居た。からいふ時間の長い程自分の心に慰藉を與へられるやうな感じがするのであつた。自分も女もはじめて苦い經驗を嘗めたのである。然し僕は散々放蕩もした揚句である。女は今年は二十三でこれまでも悲慘な境遇は經て來たのであるけれど身持は堅固で過して來たのである。放蕩をしたことのある人間に其位の鑑定のつかぬ理由があるものか。他人の間にのみ交つて二十三までも處女で居た彼は稀な女でなければならぬ。それが苟且にも身動きの出來なく成つたのは全く僕の罪であつた。彼の兄夫婦は好人物であることが分つた。尤も僕の土產物も僕に對する態度に幾らか變化あらしめたのも事實に相違ない。女房は二階へ茶を持つて出た。さうして女に向つて二階に許り居ては氣が鬱していかぬから先生と散歩でもして來てはどうかと勸めた。僕等の關係は疾に知つて居ることとは思つたがから揶けて出ようとは意外であつた。尤も女は兄に身を寄せる時にけ仔細に今の境遇を明かしたことであらう。それを知つて居る兄夫婦も彼の身を輕くするまでの間だけでも僕の手を切つてしまつては其は始末に困難せねばならぬ。此は少し物の道理を辨へたものの知らぬ筈はない所である。女は軈て鏡を取り出して髮を結んだ。左の手で髮の根元をぎつと一つに握つて櫛を持つた右の手で前へさらりと打ち返した。さうして二梳き三梳き油をつけて梳く、額に皺を作りながら少しうつ向きになつて髮の形を鏡に映しつゝ結んだ。前髮が鬢へかけてふはりと膨れて居る。少時髮を鏡に映し乍ら散らばつた品を疊紙に片づけて石鹼の箱を持つて油に成つた手を洗ひに梯子段を降りて行つた。容子が少し活氣づいたやうに見えた。僕は獨り殘つた時自分の顔を鏡に映して見た。まだ顔が青ざめて居るのを知つた。女は綿入を蒲團の上に置いて柳行李から出した晴衣に着換へた。手を洗ひながら涙の顔も洗つたと見えて心持のせゐかつや〳〵して來た。化粧はしなかつたが美しさは見違へる程に成つた。二人は手を携へて出た。さうして上野から淺草の公園をぶらついて其晩は淺草へ泊つてしまつた。東京には四日許り居た、田端に居た兄の宅へは行かずに女を連れて散歩してはそこゝと行き當りに泊つた。其間女はもう泣かなかつた。自分の宿料を出さうともいはなかつた。いくら何といつても兄さんの所に唯世話に成つて居るのも身がひけるだらうといつてやつた小遣ひも氣の毒さうにはしたが拒むこともしなかつた。其時は赤い錢入は持つて居たが別に紙へ包むといふ手數もしなかつた。僕は彼の貯へが乏しいことを悟つた。更に懷中の許す限り若干の錢を與へた。僕も彼の姙娠した手紙を見て懊惱した時や、二階で果敢ない姿を見た時とは違つて手を携へて散歩するのは有繫に愉快であつた。女も愉快であつたに相違ない。然し其時はもう二人の最後であつたのだ。僕は其時限り逢はぬやうに成らうと思つて別れはしなかつたのである。宇都宮へ歸る時に山田が姙娠した事情を逐一田端に居た兄に思ひ切つて明かしてしまつた。自身に度々上京して女を見舞ふことは到底不可能である。さうかといつて女が不憫で捨てては置けなかつたからである。兄は一言も僕を責めなかつた。加之自分が後には其女を引きとつて必ず分娩させてやるから其邊は苦にすることはない。幸ひ自分には子がないから出來た兒は自分等の手で育てようといふのであつた。僕は心から兄に感謝した。僕は非常に

安心して病院へ歸つた。六月に復た上京した。勿論其間に女からの手紙はあつた。僕はまた逢へるからというてやつた。女は待つて居たのである。僕も一つは自分、職業柄で能く女の身體の健康も確めたいと思つた。自分も病院を出て七月には開業する運びに成つたので其準備のために出京したといふこともこまごま噺して見たく、此は直接噺をしたいと思つて手紙ではいつてやらなかつたことではあり其他心にはいろ／＼のことも思つて田端へついた。先づ兄から其後の女の容子を聞いてからにしようと思つた。それといふのは手紙にはいつてよこさぬけれど或は女の周圍に變化がないとも限らぬ。若しさういふことがあつた場合に突然胸を痛めるよりも兄に聞いて覺悟をしてからにしたいと思つたからである。此が畢生の失策であつた。兄はもう斷然逢ふなといつた。逢へば未練が増すばかりである。どうで一所に成れぬものなれば態々深みに落ちることでもあるまい俺が女を世話する都合もあるからといふのであつた。僕はがつかりした。何事にも勇氣が失せたやうに感じた。さうして兄の意志に逆はぬことが女の一身の爲めでもあると思つたから全く兄に從つて女を再び訪ねなかつた。然し東京は詰らなかつたから急に用を達して歸つてしまつた。歸りの速かなのを兄は悦んだ。僕がどれ程落膽したかといふことは兄は果して想像したであらうか。尤も若い同志が相談の上に手を切る抔といふことは到底それは不可能である。是非共それには他人の手を借らねばならぬ。兄はそれを知つて居た。いや誰でもそれは知つて居る。僕自身でもさうなければならぬことといふのを知り切つて居る、然しもう此が別れといふことを互に呑み込んだ上に十分名殘を惜んで見たかつた。兄は二人の恩人である。されど此だけのことをさせてくれなかつた一段はどうしても僕には不滿である。僕はそれから失意のうちに豫定の如く七月を以て開業した。僕は戰地から歸つた時はどこかで病院を開くといふ大志を懷いて居たのだがそれが僅か一年半でこんな間に合せの醫院に燻るやうに成つてしまつた。父は頑固な人で何でも自分で設計してしまふ。二言目には財政が許さないからといふ。此間も友人が來て君のやうな外科思想のあるものがどうしてこんな外科室を拵へたかといつた。父はつましい人だ。人から來た手紙の封筒でも乾度裏返しにして使用する。さういふ心掛だから餘裕もない身上から僕等を成業させたのでそこを思へば逆ふことも出來ないのである。僕の心の弱くなつたのは自分でも驚かれる。母が今病氣である。其病氣は決して輕くない。それで母の命のあるうちにどうしても嫁をとれと半分は無理に極められてしまつた。それはまだ遂近頃のことである。其相談のあつた時は僕は非常に苦しんだ。憐れな看護婦はまだ身輕には成つて居らぬ。兄の許に引きとめられて居るものの心には僕を手頼つて居るには相違ない。彼が將來を案じて心で泣いて居る時に自分が蔭で配偶を探すといふことは知られぬにしても心が咎めて其氣には成れないのである。然し薄弱なる人の心は忽ちに變化する。數次强ひられるうちにはいくらかそこに傾いて來る。さうしてかういふ女はどうかといはれる時、其女はどういふ女であらうかといふ懸念がふと浮んで來るやうに成る。かう傾いては僕の心は敗北したのである。さうして何にも六かしい註文はせずに人のよからうといふことをいゝとして殆んど人任せに極めてしまつた……—

　若い主人は此まで噺を續けて更に

「それは山田の方がずつといゝんだがな、なにもう構はない……だがあれも臨月だ、今夜にも

知らせがあるかと思つてるんだ、それは父には祕密だがな……母の看護をさせるならあれなら此上もないのだが、然し女も身持では他人の世話どころではないから、どつちにしても駄目なことだ」

と途切れ途切れに獨語した。さうして

「君これは必ず祕密にして居てくれなくちや困るぜ、世間へ知れても體裁が惡いし、そんな噂が立つと緣談などといふものは躓き易いものだしな、何もそれは自分の失策を隱して、先を欺くといふ譯ではないが、病氣の母に心配を掛けたくないからな、母はもう今に嫁に世話に成れるといふやうなことをいつて悦んで居るのだからな」

若い客は此時まで身體を橫にして肘を立つて頭を掌で支へながら聞いて居たが起き上りながら

「うん、そりやさうだ、然し君の所へ來たものは却て仕合だと僕は思ふぜ」

といつた。

「なぜ」

と主人は問ひ返した。

「なぜつて君はそれ程女といふものを果敢ないものと思つて居るのだから他の者よりは同情が多い譯だらうと思ふのだ」

若い客がいふと主人は又憐れな女の上を語る。

「だから僕は六かしい事はいはないし、山田の手紙も此間みんな燒いてしまつた。……だが其後數次の手紙は來たのだ。大抵松田へ宛てて來たのだが、私の事は御心配なく先生はどうか奧さんをお探しなすつて下さいといふので、僕の手紙も欲しいやうな書き振りだが僕は餘りやらないやうに仕て居た。近來はもうよこせなくなつた、兄へ遠慮しなくちやならないからな」

「田端に居るんだな」

客はきいた。主人は

「うん、もう田端へ行つて二ケ月に成るだらう、身輕になればあれは私自身でどうにか身を立てます、さうして浮いた心のないことを先生へお目に掛けますと、手紙ではいつて來てあるが、配偶が出來たといつたら、さすがに泣くんぢやないかと思ふんだ。自分が今結婚をすると極つて居ても、女にさういはれるのは惡い心持はしない。女だとて將來どうなることか分りやしないが、何だか斯う獨身で居てくれゝばいゝやうな感じがするんだ。人のものにすると思ふと惜しいな」

とかういつて

「然し男が生れても女が生れてもあれに似てればいゝ子だらうと思ふんだ。私は何だかいゝ子が生れさうに思はれますつて女の手紙には書いてあるよ」

と微笑する。

「だがな隱し子だから當分顏も見ることが出來ないや」

と主人いひ畢つた時

「そりや女はもつと酷いだらう、生涯逢はれないかも知れないぢやないか」

と若い客は言下にいつた。

「病院に居た時分にはな、他人がよくなつて退院するのがあると神經質の奴は無闇に羨んでばかり居るので馬鹿なことだとけなして居たものだが矢つ張り自分が心配で堪らない時は人がみんな平氣な顏をして居るやうでどうも羨ましい心持になるよ……だが君等はまあいゝな」

主人はいつた。

「君まあ苦しめるだけ苦しんで見給へ。さうすれば自分に幾らか慰めることが出來るといふものだらう。それもさ他人のことだからまあいへるやうなものだが……いや然し他人のことゝいふと表面ばかり見るからよく見えるのだ。誰れ

でも君が裏面をさらけ出したら全く清潔なものと
いふのは無いかも知れないぜ」

　客は慰めるやうにかういつた時主人は急に自分の同情者を得たといふやうに

「君にも何かあるかい」

　と問うた。

「まあそんなことはどうでもいゝや、だがもう何時だ、一時かいや一時過ぎだぜ」

　客は兵兒帶から時計を出してかういつた。向うの酒藏が繁盛してあるなら今頃は賑かな醗母より唄が聞かれる筈なのであるが今はそれもない。只しん〳〵として恐ろしい靜かな夜である。耳もとではランプの心の底の油を吸ひあげる音が微かに聞かれる。ランプの焔がまたゝいたので今までしんみりと二人を見おろして居た天井の丸い光がゆら〳〵と搖れた。夜番の鳴子が遠くから聞えてやがて横町へはひつたと見えてがら〳〵と急に大きな八釜敷い音を立てた。

（明治四十二年一月）

早春の歌

天の戸ゆ立ち來る春は若雲に光どよもし
浮きただよへり
春立つと天の日渡るみむなみの國はろか
なる空ゆ來らしも
若雲のそぐへを見れば立ち渡る春はまど
かにいや遙かなり
おのづから滿ち來る春は野に出でて我が
此の立てる肩にもあるべし
おほどかに春はあれども搖り動く榛が花
にも滿ち足らひたり
そこらくの冬を潛めて雪のこる山の高嶺
は浮き遠ぞきぬ
いささかも春蒸す土のぬくもればゐさら
ひ輕み雲雀は立つらむ
麥の葉は天つひばりの聲ひびき一葉一葉
に搖りもて延ぶらし
おろそかにい行き到れる春なれや青める
草は水の邊に多し

（明治四十年）

初秋の歌

小夜深にさきて散るとふ稗草のひそやか
にして秋さりぬらむ
植草ののこぎり草の茂り葉のいやこまや
かに渡る秋かも
目にも見えずわたらふ秋は栗の木のなり
たる毬のつばらつばらに
秋といへば譬へば繁き松の葉の細く遍く
立ちわたるめり
馬追蟲の髭のそよろに來る秋はまなこを
閉ぢて想ひ見るべし
外に立てば衣うるほふうべしこそ夜空は
水の滴るが如
おしなべて木草に露を置かむとぞ夜空は
近く相迫り見ゆ
からくして夜の涼しき秋なれば晝はくも
ゐに浮きひそむらし
うみ苧なす長き短きけぢめあれば晝はま
さりて未だ曇けむ
芋の葉にこぼるる玉のこぼれこぼれ子芋
は白く凝りつつあらむ
青桐は秋かもやどす夜されはさはらさは
らと其葉さやげり
烏爪の夕さく花は明け來れば秋をすくな
み萎みけるかも

（明治四十年）

おふさ

刈草を積んだ樣に丸く繁つて居た野茨の木が一杯に花に成つた。青く長い土手にぽつ/\と際立つて白く見える。花に聚つて居る蟲の小さな羽の響が恐ろしい唸聲をなしつゝある。土手に添うて田が連る。石灰を撒いて居る百姓の短い姿がはらりと見えて居る。白い粉が煙の如く其手先から飛ぶ。こまやかな泥で手際よく塗られた畦のつやゝかな濕ひが白く乾燥した田圃の道と相映じて居る。蛙が聲の限り鳴いて居る。田の先も對岸も皆畑である。畑は成熟しつゝある麥の穗を以て何處までも掩はれてある。麥の穗は乾いた土の如くこまやかに見える。桑畑が其間にくつきりと深い綠を染め拔いて居る。さうして村々の森がこんもりとして畑を限る。遠い森は麥の中に沒しつゝある如く低く連つて蒼く垂れた空に強い輪郭を描いて居る。鬼怒川は平水の度を保つてかういふ平野の間をうねり/\行くのである。ヤマべを啄む川雀が白い腹を見せつゝ忙し相にかい/\と鳴きめぐる。ひらりと身を交して河原に近い淺瀬の水を打つて飛びあがる。午時を過ぎた日の光を浴びて總ての物が快く見える。髪結のおふさはいそ/\として土手を北へ一直線に歩きつゝある。中形の浴衣の上には白い胸掛を掩うて居る。おふさが此の土手を北へ通ふ時は屹度器量一杯の支度である。白い胸掛は見るからはき/\として小柄なおふさを三つも四つも若くして見せた。油や櫛や職業に必要な道具の小さな包を左に抱へて右に蝙蝠傘をさして居る。普通人に異つた枯燥した俤がないではないがおふさに心配は見えない。土手を北へ通ふ時おふさの顏は晴々しい微笑を含んで居るのである。小娘でもするやうに肩の蝙蝠傘をくるくると廻す。おふさは二十六である。短い道芝の間に白い足袋が威勢よく運ばれて行く。土手の果には鬱然たる森が有つて其森から手を出した樣に片側建の人家が岸に臨んで居る。川はぐるりと左へ曲折する。それで三四の白壁が遠くから河岸を陽氣に見せる。廻漕店の前には土手の下に高瀬船が聚つて居る。土手を斜に側つた坂には高瀬船へ積み込む米俵が順序よく轉されつゝある。あたりには土管やら空な酒樽やら雜多の物品が廻漕店の庭へ續いて土手の往來をせまくして居る。おふさは蝙蝠傘を窄めて人足の間を過ぎた。惡戲好な人足共はおふさの後からぶつ切つた樣な短い詞で揶揄つた。然しおふさの耳には何にも感じない。さうして足早に歩き出して向うの理髪床の店へはひつた。おふさが遙々と長い土手を通ふのは此の店があるからより外に何等の理由も想像されぬ。店には五十近い女房と一人は二十位な一人は十四五の娘とで働いて居る。男の職人は交らない。おふさは女房と顏を見合せて唯あどけなく嫣然とした。さうして椅子を廻らせて居る客の後から姿見へ自分の姿を映して又嫣然とした。器量一杯の支度を映して見ることがおふさには非常に嬉し相である。おふさは蝙蝠傘と包とを網を吊つた棚へ乘せた。女房も他の二人も白の仕事衣を纒うて居る。それが痛く汚れて居る。おふさは小娘の肩をそつと叩いて、糊付けた自分の胸掛を一寸抓んでそれから小娘の仕事衣を抓んで喉の底から搾り出す樣な妙な聲を出して又あどけなく嫣然とした。小娘は

「えゝよ、何でもおほきなお世話だよ—

と振り廻る様に體をゆすつて、危げに使つて居た剃刀の手を止めて一寸舌を出して見せた。おふさは揶揄ふ様なあまえる様な態度で又妙な聲を出して嫣然した。

「そんなことするもんぢやねえ、お民は」

此も剃刀を使つて居た娘のお道がたしなめる様にいつた。お民は

「さうだよ、本當にえゝんだよ」

おふさの方を向いてかういつた。女房は頻りに鋏の音をさせながら前で拂ひあげる様にしては髮の先を少しづつ斬つて居る。目をしかめつゝ一心に鋏を使つて居る。暫くして理髮を畢つた小學校の教師らしい客が棚の荷物を抱へて立つた。おふさはしげ／＼と客の顏を見る。客は店先の柱に吊つた籠の雲雀に一寸目を注いで離て去つた。洋服に下駄を穿いた後姿が姿見の向うへ遠くなつて外れてしまつた。おふさは教師の後姿を見て居たが又喉底から搾り出す様な聲をさせて女房が忙し相な鋏を止めてこちらを見た時自分の頬を撫でたり、教師の後姿を指したり、さうして拇指を出したりした。主婦さんは頷いて見せた。おふさの態度はそは／＼として來た。

「あの先生こと、どうしたもんだい」

お民は白い布を折つて竿へ掛けながらいつた。

「さうなもんかえ、庄さんに似て居るつていふんだぞ、少しえゝ男を見りやかうやつて拇指を出して騷ぐんだもの、庄さんが氣にばかり成つて居るんだから」

お道はいつた。さうして

「さうだなあおつかさん」

女房の方を向いていつた。

「庄さんはそんぢや罪だな」

お民はませたことをいつた。

罪だ／＼と人のいふのを聞いて居てお民は口眞似にいつたのである。おふさは水槽の蓋を開けて見て水が無くなつたとお民へ手で知らせた。お民がぼんやり立つてゐるのでおふさは手桶を提げて立ち掛けた。女房は

「お民々々」

と急に叱るやうにいつた。お民は引つたくるやうに手桶を取つて往來を横ぎつて走つて行つた。土手の降口でぐるりと裾をかゝげた。其姿が土手の下へ隱れた時おふさも往來を横ぎつて走つた。さうして川を見おろして立つた。理髮床の店からは川の水は見えない。對岸の村が淺い木立の緑をかぶつて、それがおふさの立つて居る往來の端とくつついて見える。木立の間に隱見する二三軒の障子が目に立つ。川の曲折したあたりから水は竪にしら／＼と遠く見え渡る。おふさが辿つて來た土手も青く一目に走つて居る。其遙かに先から今白帆が二つ上つて來る。白い番の矮鶏が土手の下からおふさの足許近く表はれた。鷄冠にくつつく程一杯に背負つた尾が軟風に吹かれてひら／＼と動く。甲走つた聲で雄鷄が鳴いた。後へ反つて嘴を開いて小さな喉が裂け相にして二聲三聲鳴いた。さうして又白い尾をひら／＼と吹かれながら矮鶏は土手に隱れた。土手の中腹の青草を足で掻いては餌を求めて歩くのである。お民はのぼつて來た。手桶を土手の上り口へ置いて手を掛けた儘大儀相にして一寸休息した。おふさはお民へ片手を貸して手桶を運んだ。其間土手の往來はがたくり馬車が蹄に埃を蹴立てて過ぎた。人が通つた。荷物を山のやうに積んだ車が行つた。走るものは一瞬間止まるものは永久に疎末な姿見の鏡裏に其形體を印する。往來が途絶えた時鏡裏は平靜である。唯尤も近い入口の柱に吊つた籠の雲雀のみは茶碗の粟をこぼしつゝ逆立つた頭の毛を天井の網に突き當て／＼もがいては絶えず鏡裏に活動して居る。水槽

の水が滿ちて更に川から手桶が運ばれた時おふさはバケツに雜巾を浸して水槽からさうしてそこゝを拭いて歩く。おふさは又一隅に吊つてあるランプを外して見る。ホヤの曇りを拭つて心を出して見て剪を入れる。さうしてランプを以前の釘に掛けて手の臭を嗅いで見る。

「本當にえゝや、助からあ」

お民は斯ういつて石鹼を出してやつた。おふさは石油臭い手を洗つてそれから顏を洗つて又姿見へ自分を映して惚れ〲と見る。

「よつぽど庄さんには焦れて居るんだなあ」

お道がつく〲と見ていつた。暫く途切れた客の後から一人の男がずつとはひつて來てどつかり椅子へ腰を卸しながら

「おゝ髭だ」

胴間聲を出していつた。

「おゝ髭だ」

とお道はすぐに眞似をして

「大層威張つてどうしたもんだえ」

と笑つた。男は首筋を椅子へ凭れさせて微笑して居る。日に燒けた額がてら〱と光つて見るから丈夫さうな男である。紺の筒袖で無造作に三尺帶を締めて居る。一杯に開けた胸には毛がふさ〱と生えて居る。彼は高瀬船の船頭である。彼は其ばり〱した鬚面へ刷毛で石鹼を塗られたにも拘らず、おふさへ何か手眞似で揶揄つた。おふさは何と合點したのか變な歪んだ顏をして指を二本鼻の下へ當てた。

「さうら二本棒だつて云はれてらあ、默つて居ればえゝのに」

お道が船頭をたしなめる樣にいつた。彼は又何かいはうとしたが剃刀持つたお道の手が唇を押へて居たので聲が出ない。

「剃刀で切つちまあぞ、饒舌くると」

皆がどつと笑つた。おふさの顏は又晴々とした。

「此の着物はえゝ柄ぢやねえか」

お民が羨ましさうにいつた。

「みんな出入の所から貰あんだとよ、本當にええやな」

お道もいつた。

「そんなに欲しけりやおれが呉れてやらあ、亭主にうつちやられたら尋ねて來る方がえゝや」

「八釜しいよ、又はじまつた」

二人は斯ういつて又どつと笑つた。此の店へ來る客の多くは船頭や人足や百姓等である。此の地方に特有な粗暴な言語が絕えず交換されるのでかういふ應答も少しも不思議に思はれて居らぬ。おふさは姿見の後へ引つ込んでぐるりとからげた裾を外して帶を締め直してさうして又店先で茫然として往來から遠くを見渡して居る。女房の客は髮が刈り畢つた。白い布が毛だらけに成つた儘そつと解かれる。おふさはふとそれを見ると女房の手から其白い布を取つてばさ〱と毛をはたく。女房は小さな布を前へ一寸掛けて客の口のあたりを濡らす。それから剃刀を合せて切味を手の平で試しながら椅子の側へもどる。

「此の女はこりや何だい、嚊かい」

三十五六の髭のある其客が聞いた。横柄らしい、稅務署の官吏でもあらうかと見える男である。

「へえ嚊ですかね、旦那は知らねえんでしたかね」

「うん、俺は知らん」

「能く此所へ來るんですがね、こゝらぢや知らねえものは有りませんぜ」

「さうか、尤も俺はまだ此所へ來て二箇月だからな、それで此の女はどうかしたといふのか」

客は先刻からの傍の噺に釣り込まれて居たのでおふさに就いて聞き出した。女房は左のモミアゲを剃り落して剃刀の返しを使ひながら

「これでも一度は亭主を持つたんですがうつちやられたんでさ、それで自分ぢやさうは思つて居ねえんですからね―

「どこだい、まあ此の女は―

客はまだ戯談半分の態度で聞く。女房は剃刀に氣を取られて半は氣勢の抜けたやうに語る。

「此の川西なんですがね。お袋が放埒でね。お袋の亭主に成つたのが、酒屋者で越後から來て婿にはひり込んだんだといふ噂でしたね。わたしは別段能く知りませんがね。これが又猫の樣におとなしいんだつていふんですから、それでまあ嚊が増長したんですね。藏では親方株に成つて居たつちふことだが、旦那等は能く藏のことは知つてる筈ですが、杜氏とか何とか云つてましたね。それで働いちや持つて歸るのを、留守に成ると飲んだり打つたりといふんですからね。亭主もまさか男だから怒らねえこともねえんでせうけれど、そこらの處は知りませんがね。なんでも亭主は苦勞性なんで、酒が心配で内へは滅多に歸れねえで居るもんだから、いゝ幸にしちや男を拵へてねえ、此唖が出來ていかく成つてからさうだつていふんですから、それでいゝ年をして自分の息子の樣なねえ床屋の職人と巫山戯てからつきり値はねえんですよ。そんなんだから亭主にこれがね餘ッ程大きく成つてからだといふんですが、出つちやつたんですと、そこへ行くと身元の知れねえ遠國者は思ひ切が能うがすかんね。それでもまさか子供は可愛いから手當にするんだつて拵へた財産は置いて行つたんですと、私は能く知りませんがね。それで床屋の職人だつて身持は能くねえし、お袋も幾らか外聞を考へたんでせう、手を切る積りに成つたんだけれど唯ぢや職人がうんと云はないんです。それで酷いんですね、店を持たせるからつて、此の唖をくつつけてまあ此處へ店を出したんですね。其頃は内がどうにか成つたつていふ噂ですが、これは二十四でされ其時にね。これはいゝ者持つたと思つて一所懸命でさね。其うちお袋は死んぢめえました。飲んだのが障つたのに極つてまさ。職人は庄さんていふんですが、さうなりや何でこんな唖なんぞう守つて居るもんですか、茶屋女を受け出してね、これは家へ暫くやつて置いて筑波向うへ行つちまつたんでさ、それでもこれはうつちやられたとは思はねえんですから……―

剃刀は顎を滑かにさうして徐ろに走る。女房は顎を大事に抱きあげるやうにして自分の首を曲げて剃刀を動かす。おふさは此の間手拭竿の手拭をもち出したり、流しと洗つたり、毛屑を掃いて見たり、ちよい／＼と手を動かして居る。お道の手が明いて客が少時途切れた。おふさはお道を姿見の後へ導いた。棚の包をとつて髪結の道具を出す。鐵瓶の湯を注いで毛の癖揉をはじめた。船頭も姿見の後へ腰をおろして暫く新聞紙をがさつかせて居たが横に成つていつか眠つてしまつた。

「何でもうつちやられた時は泣いて／＼ひどかつたさうですね。獨ぼつちでほんとに不便なものでさね。さういつても近所隣といふものも身内といふもんもあるし世話はしたさうですがね。仕やうがないから、亭主が仕込んで置いた髪結をやらせることにした譯なんですね。剃刀の使ひ方なんざまあ一寸は出來るやうに仕込んで置いたもんだから、今ぢやたいした役に立つてこれもいつて見りや亭主のお蔭ですがね。さうすると三月ばかり經つてひよつくり亭主が歸つて來たんで、さうしたらもう離れつこなしなんです。それをどう騙したか甘く騙して又行つちまつてね。何でも貧乏で暮しが出來ねえから遠くへ行つて稼いで來なくつちや成らねえんだとね、稼いで錢が溜つたら歸つて來て復店で

働くんだからお前も稼いで待つてろとね、かう呑み込ませたといふんですが私も深いことは知りませんがね。さうなんでせうよ、それからといふものは一所懸命に錢を溜める料簡に成つてる容子なんですからね。初のうちは皆可哀想だつて餘計な賃錢をやつたり、着物なんぞ呉れたりして面倒見たんですがね。此の浴衣だつて貰つたにや相違ねえんです。それが駄目なんです。亭主がね時々來ちや騙して巾着をはたいて持つてつちやあんですからね。亭主が困るから來るんだと思つてるんでせう、それから持つてる丈はみんな遣つちまあんでさあ。そんなこつたから亭主も極りが惡くつて村へは行かねえで、途中へ呼出しを掛けてさらしちや二三日遊んで行くんです。それが知れてからといふものは、皆錢はくれても、本人に持たせねえやうにして置くさうですよ。それで此の店で復た稼ぐんだと聞かせられてからは時々かうして來ますがね。朝のこともあるし、今日のやうに晝過に成ることもあるし、來ちやそつちこつち掃除して行くんですから、内の子供等は助かる譯ですが、どうで駄目なことを本當に思つてるんですから不便なものでさね。亭主にばかり一心に成つて居て片輪ものといふものは仕樣のないもんでさね。他人がなにと教へて見た所で本當にしませんし、揶揄つたら面倒だし、それよりか嬉しがるやうなことに仕向けた方が當り障りがありませんからね——」

女房は語り續ける。

「そりや何かい、亭主といふ奴はどんな奴か知つてるかい」

客も此度は釣り込まれたらしい。

「それがね旦那、その亭主は庄さんていふんですがなか／＼いゝ男でね、一寸お世辭もいゝし、つきあつちや惡いことはまあ有りませんよ。此店だつてね隨分やつて行けるんですが、身持が修らねえで——尤も此頃はお上で八釜敷から打つこたあ止めたやうですが、前々からサガりもそつちこつちあつて居惰いも居惰いんでせうしね、それにおんなじものなら口の利ける者の方がいゝに極つてますからね。戯談には片輪者は情が深過ぎて困るの、それに何故だか冷たいから厭だのて庄さんはいつてる位なんですからね。それでもまさかに可哀想だと思はねえことも無えんでせうし一人ぼつちなのも知つてるんですから、うつちやつて心持のいゝ筈はねえからまあ一つは容子見に來なくても居られねえんでせうね」

「然し錢を握つて行く處は[illegible]い奴ぢやないかな」

「それがね旦那、乾度庄さんに此店へ呼出しちや行くんですが、みんなに揶揄はれて弱る時もありますよ。逃口上だか知れねえが庄さんがいふのには錢を貰つた方が本人は上機嫌だし、こつちには惡くもねえし、却つて兩爲めだから預つて置くといふんですが、さうはいふものゝ庄さんは惡い人間にや見えませんね。まだ精々三十二三四でなか／＼捨てたもんぢやありませんよ。全く過ぎもの亭主ですから、餘り過ぎた亭主もよしあしでさね」

剃刀は頬のすべてを反覆して走つた。女房は剃刀に氣を取られて無遠慮に饒舌る。ぞんざいな仲間を日夕相手にして居るので全くぞんざいに成つて居る。おふさは元結の端を綿切鋏で噛み切つた。

「なんでも思ひ出しちや此處へ來るんでせう。掃除をして置いて亭主に褒められたい一心ですからね。さうしちやかうして器量一杯の支度をするんですからね。洒落るといふことは他人が教へなくつても獨りで知つてるから恐ろしいものですよ。尤も饒舌らねえのだから解らねえといへば解らねえやうなもんですがね」

女房は更に

「どつちにした處で生殺で罪は罪でさね、旦那」

と最後の一句を續けた。白い布が胸から除かれた。

「旦那洗ひませう」

客は長い時間から椅子を離れた。客は滑かに剃られた顏を拭きながらふと姿見の間から、長火鉢の側で髮を結つて居るおふさを見た。

「仲々これはうまいもんだな」

銀杏返しが一つの髷を形づくられた。

「悧巧ですからね。此で口が聞ければたいしたもんだが惜しいことに……」

女房は椅子に倚つた客の髮を綺麗に梳き取りながらからかういつた。さうして

「何時でも來ればかうしてみんなの髮を結つて歸るんです。其代りね、金鍔を禮錢位と思つて貰つてやるんですが、それがどれ程いゝ心持なんですかね、其の嬉しい容子を見ちやなんでなくつても貰つて遣るの外しかありませんね。どうも不自由なせゐか、子供見てえな處がありますからね。なんぼなんでも當り前なら二十六にも成つて金鍔位ぢやそんなに騙されやしませんからね」

といつた。高瀨船が一艘ついたと見えて白帆が一つ土手にくつついて止つた。大きな白帆は遠い野を掩うて姿見へ大きく映る。白帆は力なく川にぐつたりとする。曳綱が解かれたと見えて白帆はくた／＼に成つて更にすつと下つた。こつうんと丸太を投げた樣な響が土手の下から近く聞えた。すつと立つた檣を殘して姿見には復たすぐに川がしら／＼として土手が青々として村から野から一杯に映る。鏡裏の雲雀が止まず動いて居る。客の髮に油をつけて幾度となく櫛を入れられた。女房は白い布をとつてぱさ／＼と襟のあたりを叩いた。客は一遍顎を撫でて姿見を見て立つた。女房は茶を汲んで出す。暫く客が途切れた。突然に半ば頭を剃り殘した六つ位の小坊主が泣き／＼駈けて來た。入口の柱のもとで頻りに雲雀に聲へ屆かぬ手を延してには地團太踏んで泣きわめく。婆さんが一人あとから走つて來て小坊主を抱へようとする。小坊主は婆さんの手にはおへぬ。雲雀は驚いて羽叩きして騷ぐ。店の者は皆笑つた。

「そらおまはりさんだぞ」

と婆さんは威す。小坊主は泣きを沈めた。おふさは髮を結び畢つて一寸店を覗いた。さうして女房へ妙に手眞似をする。何か子供にくれてやれといふものらしい。女房は唯頷いて見せる。小坊主は漸く婆さんに引かれて行つた。

「此れで子煩惱ですからね」

と女房は客へいつた。

「二十六だといつたかな。それにしては若いな。口が利けたら相應に騷がれたんだらうな」

「氣味が惡いから手出しはしませんね。それに今ぢや亭主ばかり氣に成つて居るから尚更つことでさあね」

「此店に何時して來たんだい。大分辛苦だな」

「もう二年ですよ。私もうちは二三里あるんですが妙な事でしてね。親方が放埓なもんですからね。餘計者を引きずり込んだりしちや、私も面白かあ有りませんからね。到頭こつちへ分れたんでさ。借家でしたが今ぢや主さんから道具一式讓られたんですから、もう大丈夫です。弟子もね、女の子の方が扱ひいゝもんですから、みんな女ばかしにしてね、これで結構やつて行けますから」

「女ばかりだからまあ感心なものさな。それでも今は親方と往復はあるのかい」

「なに時々來ますがね、八釜敷ことばかりいつて仕樣がねえんでさ、とつくからもう[illegible]

るやうなことはありませんがね、いゝ年しちや獨の方がいゝ位なもんですよ。口論したいことはねえんですがね、あんまりだと我慢出來なく成りますからね、それでも駄目でされ、女の方が惡いとしかいはれねえんですから―

女房はぼさ〳〵した顏で煙草を吸ふ。

「それでも私は子供が一人ありますからね。えさうです男です。あと一年で卒業ですから電信局へ勤が出來るんです。此までは私も一心に成つて送りました。それ一人が手頼ですからね」

からいつて火皿へ紙を押込んでぐりつと廻して煙脂のついた紙を火鉢の隅へ棄てて詰つた羅宇をふうと吹いた。

「こんだお民結つてもらへ」

女房は呶鳴つた。客は

「いや、おほきに」

と横柄に挨拶して出て行つた。

おふさは稍膨れた包を抱へて鬼怒川の土手を歸りつゝある。上機嫌な容子があり〳〵と見える。膨れた包は金鍔である。それをおふさは大事相に抱へて居る。おふさの心は的確に知る由はない。密封した箱に小石や木片や硝子の破片や雜多の物を入れて此をがら〳〵と振る時に中なるものが小石であり木片であることを其一つが想像しえたとしても全部を知ることは能はぬであらう。おふさの心はそれである。おふさに對する何人の想像も確かであるとは斷言が出來ぬ。然しながら此の土手を通ふ時は平生の僻んだ容貌がなくなつて唯そは〳〵と燥げである。靜かに考へる時は皆おふさを哀だと思ふ。逢うて語る時は皆笑つて揶揄ふのである。それが孰であるにしても亭主の噂を聞かされることが非常におふさには快く見える。三十は女の頽齢である。其三十を眼前に控へた身を以ておふさはあどけなく土手を往復する。南風が軟かに且つ涼しく野茨の花に吹き渡る。透徹せる蒼い天は此の青年の如き地上の草木を保護するためガラスの蓋を掩へるが如く見える。野茨の花の開く數日間が一年の内に於て尤も爽快で且つ四圍が不安の念を起させない時期である。太陽は此の大地を暫時も離れ去ることを惜むものの如く萎れ兼ねて躊躇して居る。此の如き間に在つて麥の穗のみは悲しい色を浮べつつある。萬物に活力を與へて強く照らす日の光に堪へ兼ねるものの如く麥の穗は焦げたやうに黄變しつゝ行くのである。日の射し加減でまだ青味を含んだ麥の穗に其僻をほのかに浮べる。斜に渡る日の光は更におふさのあどけない頰をしげ〳〵と覗いた。

（明治四十二年九月）

秋雜詠

葉鷄頭の八尺のあけの燃ゆる時壁の夕は
　いや大なり

ひさかたの天を一樹に仰ぎ見る銀杏の實ぬ
　らし秋雨ぞふる

秋雨のいたくしふれば水の上に下うきみ
　だり見つつともしも

こほろぎの籠れる穴は雨ふらば落葉の戸
　もてとざせるらしき

鬼怒川は空をうつせば二ざまに秋の空見
　つつ渡りけるかも

鬼怒川を夜ふけてわたす水棹の遠くきこ
　えて秋たけにけり

稻刈りて淋しく晴るる秋の野に黄菊はあ
　また眼をひらきたり

鵯のひびく樹の間ゆ横ざまに見れども
　青き秋の空よろし

（明治四十一年）

教師

　此の中學へ轉任してからもう五年になる。子供が三人出來た。三人共男ばかりである。此の外には自分に何の變化も無い。依然として理化學の實驗を反覆して居る。自分は一體褊狹な人間なのであらう、同僚ともそんなに往復はない。田舍の教師抔といふものはてんでみじめな情ない人間が寄合して居るに過ぎない。俸給の不足だとか同僚に對する嫉妬の惡評だとかいふことを能く口にしたがる。それを聞くのが自分には厭なのだ。然し生徒は好きだ。自分は邊幅を飾らない。髮は三分刈と極めて置く。髭なんぞは立てたことがない。それで生徒も最初のうちは自分の風采が揚らないので少しづつ輕蔑しかけたものもあつたが現在ではみんなが能く服從してくれる。教授上に忠實を心掛けて居るのが自分の唯一の誇りである。中學の教師は比較的時間に餘裕を存して居るのだが、それでもやりやうによつて仲々忙しい。暇を拵へては釣竿を擔いで出懸ける同僚もあるんだが、そんな餘計なことはしなくてもいゝだらうと思つて居る。斯ういふ連中は能く泣き出さないばかりに生徒に苛められる。それといふのもみんな自分が惡いのだ。中學の教師は又よく更迭する。此處では大分新陳代謝が行はれた。然し彼等に對する自分の記憶は甑のやうなものだ。殘つて居るものは味噌でいつたら滓ばかりだ。だが唯佐治君ばかりはいつ迄經つたとて到底自分の腦裡を去らぬであらうと思ふ。どうかすると長身瘦軀の佐治君が涙を落しながら椅子に倚つて居る容子があり〳〵と見える。何の力が自分にかういふ強い印象を止めたのであらうか、凝然と考へてでも見ようと思ふと却て解らなく成る。佐治君は哲學科出身の文學士である。社會學を專攻したのだといつた。佐治君は何時でも底深く沈んで居るやうな態度、其長い體をぐつたりと二つに折つて椅子に倚つて居る。さうして目を瞑つて居る。佐治君の髮はどんな時でも能く櫛が入れられてある。洋服でもすつかり體にくつついて居る。固より其周圍は極めて清潔で且つ整頓されてあつた。佐治君はそれで獨身の生活をして居たのである。自分には彼の凡てが能くさうされたものだと不審に思はれる位であつた。だが佐治君には毫もハイカラな分子は交らない。自分の性格は全く佐治君とは相反して居た。どうしてか自分は放任的でテーブルの上でもごつちやである。教室でもよく試驗管を壞すので會計の方でぐづ〳〵いひたがる。書記の今井君は別段懇意だから小言が餘計に出る。内へ歸つてもさうだ。惡戯者ばかりだから障子は何時も穴だらけだ。自分は近頃寫眞といふ道樂を覺えた。少しの餘裕があると器械を擔いで出掛ける。寫眞をはじめてから滅切忙しくなつた。學校の方を疎略にすることは自分の主義に反して居るからだ。道樂といふと語弊があつていかぬが自分が寫眞を始めたのは理化學の應用といふことに興味を持つたからである。自分は不器用だから碌なものは出來ない積ではじめたのだが近來は少しは美的思想も發達して來たやうに感ぜられる。世上に發表された有らゆる印畫がどうも自分の製作を越えて居るものが少ないやうに思はれて來た。自分は近傍一二里の間はどんな小徑でも跋渉して見た。能く散歩に出た同僚が又かといつた樣な眼で自分を見るのに出會つた。だが途中で佐治君に一回でも逢つ

たことがない。佐治君は滅多に外出しないのである。下宿の婆さんがいふのに敎頭が時々訪ねて行く。其時は乾度碁を打つ。碁を打たなければ讀書をする。さうしては机へ肘を懸けて唯ぢつとして何だか考へてばかり居る。それは優しい人だがちつとも打解けないので氣が置けるといふことであつた。自分は訪問が嫌だから二三週佐治君と往復したに過ぎぬ。下宿屋の婆さんは自分が嘗て妻を喚び寄せる間暫く居たことがあるので途中で遭つても婆さんは話しかける。自分には碁を打つやうなそんな悠長なことはとても我慢がしきれぬ。自分は疎放な人間である。だが此でも敎育者の義務といふことを知つて居る點に於て誰にも劣らないといふ自信を有して居る。卒業生の貧乏な者の爲めには有力者に說いて學資を出させて置くのがある。五年居るうちには地方の父兄に知人も出來てる。それで自分は敎育者の義務を果すのには一所に長く在る事が第一の條件だと思つて居る。此だけは佐治君に愧ぢない積である。佐治君は在職一年で九州へ去つてしまつた。其僅い一年間自分は一緒に生徒の監督をした。それで相互に意見を交換する必要と機會とがあつたのだ。其短い間に必要から尤も相接近したので佐治君に就いての觀察も怠らなかつたのである。佐治君の瞑想に耽つて見えるのは哲學を研究して居る者に通有な狀態だと思ふから格別不審にも思はなかつた。だけれども下宿屋の婆さんがいつたやうに何處かに解れ難い處があつた。無頓着な方の自分にさへさうだから他の同僚の多くは日々の辭令の外に隻語をも交さなかつた。佐治君は生徒に讀者の多い中學世界へ青年訓といつたやうなものを始終書いて居た。書く事は眞面目だが內容は自分を甚だ感服せしむるに足るものがなかつた。佐治君はまだ大學を出たばかりである。生徒としての經驗はあつても敎師としての觀察はまだ淺い。自分のやうに十年實際に臨んで居るものの眼からは徹底しない處があつた。或時雜誌の方から自分へも寄稿を依囑して來て報酬のことまで書き添へてあつた。それで筆を執れば原稿料を得られるのだといふことも知つて居た。佐治君は其報酬によつて收入の幾分を增して居るのだといふことも勢ひ想像された。佐治君は他の類似の雜誌へも寄稿して居たのである。報酬を欲するのだらうといふ想像が微かに佐治君の人格を疑はしめた。自分はどうかすると暫く此の念を深めて佐治君に對して輕侮の念を起すこともあつたが、面前に其沈んだ姿を見る時はすべてが消散してしまつた。佐治君は迚でも輕むべき人でなかつた。佐治君の人格を疑つた自分の不明は後に至つて深く悔いた。佐治君は他人の誹笑することがどんな心理狀態に在るのか解釋の出來ない朗かな光明の方面には寸時も其心を住せしむることの不可能な人なのであつた。

其頃同僚の一部に惡戲が流行した。特色のある連中は大抵輕佻に傾せられた。惡戲の發頭人は自分と書記の今井君とである。自分は到底活動せずには居られない人間なのである。今木君といふのは尊大なので同僚の冷笑を買つて居た。生徒の父兄が面會にでも來ると反身に成つて控室を出る。それが滑稽なので時々揶揄つてやる。今井君は器用な性質なので父兄の名字をそつくり眞似して名刺を拵へる。それを小使に持たせてやる。さうすると今木君は例の如く出て來てはそこらを彷徨ついて極り惡る相にしてもどつてしまふ。其容子を見たいばかりの惡戲なのだ。今木君は怒るかと思ふと怒りもしない。といふのは今木君は暫く生徒に苛められる仲間なので免職になつたら明日からも困窮するやうな身の狹い人間だからだ。さう思ふとそんな惡戲をするのは罪なことなのだが其

頃はそれが行はれた。そんなことは今では止んだが其頃は暫く續いた。書記室へ行くものは自分が居たら書記の今井君と二人で冷かさずには措かなかつた。だが佐治君に對しては今井君も一言を發することも出來なかつた。佐治君が其弱々しい痩軀を靜に運んで來ると今井君の態度が急に改まつて了ふ。傍から見て居ると滑稽な位であつた、自分はこんな巫山戯たことをしても責任は全うする―足るべく十分の勉强を繼續して居た。佐治君は英語を擔當した。英語は生徒に左程趣味あるものではない、それで佐治君に就いて生徒は所謂鹽加減を見はじめた。佐治君は生徒を叱咤する樣な人ではない。生徒は與し易いやうに思つて居たらしかつた。丁度二學期の初に就職したのであつた。天長節の式場で佐治君は演說した。其聲は低かつたが徹底して自ら人をして傾聽せしめた。生徒は感に打たれた。自分も演說の上手なのに吃驚した。能く聞いて見るとそれも其筈で佐治君は熱心な基督敎の信者である。日曜日の演壇に立つたことも數次であつたのだ。

時候は漸く寒くなつた。ガラス窓の外には櫻の枯木が空つ風に搖られて居る。ベース、ボールの選手が乾燥したグラウンドに各自その脊力を振つて居る外は屋外に人を見ることが少なくなつた。ストーヴの側には何時でも數人づつ職員の或者が雜談して居る。ストーヴは確に佐治君と自分とを接近せしめた。自分は教育上に就いて佐治君と語つた。さうして意見が能く一致した。自分は同僚の大部分が教育に就いて何も考へて居ないことが癪に障つて居たけれど佐治君に遭ふまでは沈默を守つて居た。自分は教師といふものは換言すれば畑の南瓜位なものだと思つて居る。悧巧なものは餘り無いものである。此の二三年間には大分更迭があつた。去つたものは成熟した南瓜ともぎとられた樣なもので後任者は蔓の先へ膨れた青い南瓜だ。どうも段々教師の値打が下落して行くのだから仕方がない。爛熟になつた奴はてんで腐つて落ちた南瓜なのだ。自分はこゝで忌憚なく所信を發表すれば校長無用論を唱道する。大きな一室を占領して毎日何をして居るのか聞いて見たくなる。それで南瓜の熟したか熟しないかも分らずに居る。自分は百姓の家に生れたから能く知つて居る。西瓜にした處で庖丁で裂いて見なくつたつて指の先で彈いて見れば出來たか出來ないか乾度知れる。校長は鼻へ插して嗅はせて見なけりや南瓜の味が分らないのだから困る。其が證據には校長會議など大袈裟な場所へ出て何を齎したか。旅費日當の遣ひ殘りで細君の土産を買つたつて教育上の成績には成るまいぢやないか。金錢が欲しけりや寧ろ教育者を止めてお店の番頭になるがいゝ。前垂掛けた方が餘程増だ、とかういふ風に横道へ外れて自分は遠慮もなく饒舌つた。いつも佐治君は能く聞いて呉れるので自分は思はず興に乘じてしまふことがあつた。佐治君の沈んだ低い聲は自分に壓せられて畢つて自分のいふが儘に聞いて居なくては成らなかつた。自分の罵倒が騷しい時佐治君は少し困るやうであつた。さうして自分が金錢が欲しけりや商人になれといふ時にはどういふものか佐治君は顏を赤くするやうに見えた。ぐつたりとした體が更に俯向くやうに思はれた。自分は異樣に何物かが佐治君の心裡に伏在して居るのぢやないかとも思つた。或は金錢を議ずることの野卑なのを羞ぢるのではないかと思つたので、それからは金錢に就いては餘りいはぬやうにして居た。

西風が總ての梢を吹き拂つて、更に木の葉が地上の一隅に聚合して居るのを見出しては執念く搔き亂して居る。獦子鳥や鶸が木の葉の如く西風に吹き飛ばされんとしつゝある。自分は此

種の渡り鳥が殘酷なからいふ風に吹かれる爲めに何を求めて態々此地に來たであらうかと疑ひたくなる。裸になつた樹木は、各特有の姿態を現はして廣潤な平地に人目につき易く突つ立つて居る。寫眞道樂の自分には絶好の季節である。滿地の緑が日に美しい時は寫眞道樂の冬である。寫眞には色彩が出ない。光線が段々の眼底に落つるのと乾板の上にレンズを透す時とは其現象が違ふ。乾板は餘りに鋭敏で又遲鈍である。明晴の度が強過ぎる。それでどうも現在の寫眞術に於ては我々は冬の木立が撮り易いのである。寫眞狂の連中は寫眞を繪畫と顚頓させる。美術の範圍に進めると力んで居る。又寫眞は藝術盲目だと排斥して居るものもある。自分にはどうでもいゝ。自分が面白く感じて居ればそれで滿足なのだ。缺點は幾らもある。除き去るべき必要はある。又早晩除き去られねばならぬのは勿論である。それは自分等の責任でもなければ義務でもない。自分等は唯器械を擔いで歩いて居ればそれでいゝのである。冬は一切の動物が萎縮する。同僚にも散歩するものを見なくなつた。佐治君には固より逢はない。自分は一枚でも滿足な種板が欲しいので短い時間を節約して冬と甚だ親密に成つた。街道を挾んで赤楊の林木がすく〳〵と立ちならんで居る。街道の傍に一區域をなして菜畑がある。周圍に靑いものは其畑だけである。靑菜は軟かに見えるけれどそれがどうしてもさびた冬の色である。荷馬車が悠長に赤楊の間を過ぎて行く。自分はかういふ處へ出ると原板に映ぜしむべき形體の外に色彩の美といふことを感ぜずには居られない。佐治君は恐らくこんな處を見たことはないのだらうと思つた。佐治君に強ひてでも散歩の趣味を養つたならば虛弱な身體を健康に向はしむることが出來るだらうと思つた。自分は勸めて見たが佐治君は默して頷くのみである。

或る日曜日であつた。自分は思ひ切つて遠くへ出て見ようと思つて生徒を二人ばかり連れて出掛けた。田圃のあたりをぶらついて居るうちに西風が吹き出した。日光續きの山の上に泥の塊を圧板へぶつつけた樣な雲の浮んだ日は屹度後に西風が吹くのであるが其朝は心付かずに出たのが失策であつた。寫眞はもう駄目になつたので折よく來かゝつた馬車に乘つてもどることにした。馬車は止つた。八人乘の馬車へはもう六人詰つて居る。生徒の一人を歩かせねばならぬ。自分は一寸困つた。さうすると端に居た小豆色の頭巾を冠つた女が

「窮屈なのはお互ですよ、一人位どうかなりますわね、構ひませんお乘んなさいよ」

さういつて

「みなさん少しお詰めなすつて下さいな」

客の方へ命令でもする樣にいつた。少しの空席が出來たので生徒も漸く乘ることが出來た。自分は女に會釋した。

「いゝえあなたどう致しまして」

と女は無性である。馬車は田圃を越えて堤へ出る。乾燥した街道は風の爲めに塵が立つたやうである。とある村で馬車が止る。御者は馬の口をしめす。同時に向ふからも一臺の馬車が來て立場の前へ止つた。立場の婆さんは煙草盆を出してそれから九人前の茶を汲んだ。頭巾の女は

「さあ皆さんどうですか」

と左の手に盆を持つた儘懷から煙管を出して膝の上の煙草盆から火を點けた。みんな煙管を出してもどつて近所の雜貨か一つ燐寸の箱に吸ひ付けた時女は帶の間から二錢の銅貨を出してほうと盆へ載せて

「はいお婆さん下げておくんなさいよ」

馬車は復た塵の立つてる中を軋りはじめた。

棒のやうに眞直な街道の傍には榿の若木が暫く續いて其下にはぽつ／＼立つて居る枯芒が切な相にゆらついて居る。處々の桑畑には白い絲のやうな若い木が立つて居る。桑の木のうらには小鳥の止つたやうに落ち殘つた枯葉が二三枚づつ着いて居る。其枯葉を烈しい西風が吹き散らさねば止むまいと絶えずゆさぶつて居る。遠くの林は空に吹き立つた埃の爲めにぼんやりとして居る。反對の方向へ他の馬車も動き出した。馬車は黒い塊の如く段々埃の中へ小さく成つて行く。女の卷煙草の煙が自分の顏へ五月蠅くかゝる。女は漸く氣がついて

「まあどうしたんでせう、本當に濟みませんね」

女はいきなり吸ひかけの卷煙草を捨てた。煙草は道の端へさうして畑の方へ吹き攫はれながら僅かに煙を立てる。馬車は其の煙に遠ざかつてずん／＼と走る。

自分は此の日目的の獲物はなかつたけれど天然の變化に對する興味を以て失望することはなかつた。桑の枯葉や女の捨てた卷煙草の煙をも見遁さぬやうに注意力の加はつたことを自覺して快感を禁じ得なかつた。此の日は又自分に嘗てない人間に對する興味をも感知した。車中の女――小豆色の頭巾をかぶつた其婀娜な女でなかつたならば、其女がいつたのでなかつたならば、それでなくても窮屈な八人乘の馬車へ更に一人を乘り込ませることを他の客は肯じなかつたのであらう。自分は女の勢力といふものをつく／″＼と感じた。自分の見る處では女は何處かの酌婦でなければならぬ。尤も嫌な階級の女である。然しどういふものか車中では其女に對して自分は毫も惡感を催さなかつた。のみならず後に至るまでさうである。自分は其女のはき／＼した仕打のために愉快であつた。あばずれた女であるに相違ないことは知つたけれど自分の感情は其爲に損はれなかつた。自分はどうして其女が自分の心を捕捉したかを不審に思つた。自分の心は其時平生の權威を保つに足らぬ大なる缺陷を生じて居たのだ。徒歩の覺悟であつたならば三里の道程は自分等三人に於て素より何でもないのだ。馬車に乘らうとしたのが自分の心を其時薄弱なものにして畢つたのだ。馬車を止めて乘らぬと斷つてしまふこともちよと決行し難い。さうかといつて生徒を殘さねばならぬ。自分獨り歸り去ることが自分に苦痛である。それで自分は困つた。馬鹿げたことであるがそれが咄嗟の間である。思案の餘裕はないのだ。意外にも婀娜な女が自分を滿足させてくれた。自分は感謝せざるを得なかつた。女は自分の心の缺陷に投じたのである。それから其の車中に在つた短い時間が女を自分の眼に映ぜしめた總てであつたのと小豆色の派手な頭巾が顏の面積を狹くしたのとが惡感を起させる動機を與へなかつたのであらう。それから頭巾といふ派手な色彩が又惡感を未發に防いだに相違ない。頭巾は女の顏の惡い部分を除却した。自分は寫眞と同じことだと思つた。レンズを透して原板に映ずる物象、單に其物象だけに就いて自分等は發見することに苦心して居るのである。原板に映ずる以外のものがどんなであつてもそれは構はぬ。レンズが肉眼より重寶な所はそこだ。素人に寫眞を見せると屹度此は何處だと聞く。何處だつてそんなことを聞く必要は無いんだ。素人は屹度それに極つて居るけれども撮つた寫眞は見せたくなる。それでさう聞かれると一寸癪に障る。變なものである。とかういふことを自分は考へた。考へることは自分には滅多ならず無いことだ。此も佐治君の感化であつたかも知れぬ。淺薄なことを考へたからとてそれは自分だけに仕方がない。自分は埃の立つ麥畑さへ興味を發見する

様に成つたのを衷心悦んで居る。さうして佐治君にも天然を味はしたいと思つた。佐治君は一度も天然を語つたことが無い。自分は女に逢つて種々なことを考へて見てから其女に對する追憶に興味を持つやうに成つた。獨身の生活をして居る佐治君が果して女といふ者に對してどんな思想を懐いて居るかが疑問に成つた。其翌日佐治君へ一日の始終を語つた。佐治君のいふ處は自分をして益々疑を深くせしめた。悲觀が私の總てであります。花が開いても凋落の時が來ることを思うて之を見るに忍びません。見ても何等の快感が起りません。それでありますから冬の天地程切實に私に悲痛の感を與へるものはありません。到底悲痛は私の全身を支配して居るのですといふのであつた。自分は落花の後に來る深緑や熾烈な日光の萬物を生育する無限の活力やさうして我々がそこに眼を放つ時に全身がむづ／＼する程強烈な感を起すことなどを主張して見たが佐治君は冷かなること石の如くであつた。車中の可憐な女に就いて自分は大なる發見でもした如く其感想を語つた。佐治君は一言も發しない。遠い處を尋ねるかと思ふ樣に佐治君はしんとした。涙が[illegible]で組んだカフスを滑つてストーヴに落ちた。熱した鐵板は直ちに其涙を蒸發させた。自分は意外であつた。其時自分は涙の蒸發したことにふと意を注いだことによつて僅に自分の心を外らした。佐治君は到底了解すべからざる人格である。いやそれが當然だらう。佐治君は哲學者たるべき人である。自分等が淺薄なことをいつて見たつてどうなるものか。自分は専ら自分の本領たる理化學の方面に向へばいゝのである。教育者としては佐治君と意見の交換もしなければならぬ。それ以上は僭越だ。自分は何故に理化學を選んだ。學資の缺乏から早く專門に向はなければならぬ事情もあつたのだけれど、空を論ずることが多岐多端に流れて單純な自分の性情が到底それに堪へることも出來ず、又それを好まなかつたからである。眞は唯一であるといふことは天人の間に通ずる大法則である。理化學が尤も適切に之を説明し得る。そこがきびびして自分にはたまらず愉快だからである。自分の本領は涙がストーヴに落ちて蒸發することに意を留める處にあるのだ。無益なことはもう思ふまい。とかう心づいてから佐治君と接近はして居たが深く立ち入つていふことは無かつたのである。

學年試驗も畢つて三十幾人の卒業生が送り出された。卒業證書の授與式に臨んで校長の陳腐な演説があつた。一體此の中學の校長は體軀の矮小なのがみじめだ。何時でも狐疑して居るやうに人を見て居る。此が不快である。虚位を擁して居るのが人をして輕蔑せしめる。校長は卑である。佐治君も演説した。青年に對する一片の訓示で特に奇拔なものではなかつたが其沈痛な低い聲が自分の胸を刺戟した。佐治君の人に強ふることの無い態度が自分を傾倒せしめた。其内に百五十人の新入生が皆鈎合はぬ新調の制服をつけてぞろ／＼と登校した。さうして無邪氣な顔をならべた。自分は此の少年に何物かを注入してやりたいと思つたから自ら請うて其一組の監督を受持つた。佐治君も新入生の組を受持つた。依然として佐治君との接近は保たれた。佐治君に對して居ると自分は何とはなしに曳きつけられるやうな心になつて、時には自分の心理狀態に疑を挾んで見たくなることもあるやうに成つた。然し疎放な自分の性格は改らなかつた。惡戯は時あつて行はれた。暑中休暇は其年から短縮されて九月に入ると直ぐに各教室は開かれた。自分は此の夏例の器械を肩にして鬼怒川の上流に溯つた。鬼怒沼山を攀ぢて雜草の叢に淺く湛へた鬼怒沼を探檢した。周圍

の同林と實習の[illegible]背黒板に[illegible]しまつた。さうして渚が[illegible]川と今人の[illegible]關係もないこと[illegible]。[illegible]東の野に放長して比較的近頃まで然かも坦々たる常津街道[illegible]にも拘らず、今まで知らずに居つたことを自分[illegible]、不知の山水を自由に其[illegible]に紹介すること、手前で[illegible]あることを[illegible]た。[illegible]の大なる自然に[illegible]時に[illegible]レンズを以てして有眼中の[illegible]百萬分の一をも[illegible]せしめることの出來ないことを[illegible]つた。[illegible]間が大自然の間に介在して[illegible]一つの[illegible]るには[illegible]の努力を要する[illegible]といふやうなことを[illegible]はしめた。さうして此の[illegible]を出る[illegible]の[illegible]百萬分の一でもいゝから摑へて行かうと思つて改めて[illegible]の念が起つた。[illegible]の數枚を費し盡した。[illegible]實想を根本から打破して[illegible]を出た。それと共に自分の[illegible]力の意外に[illegible]であつたことを[illegible]めた。[illegible]手の目に焼けたのが自分にも目に立つた。授業の開始されたのは黒板の[illegible]また畢らぬうちであつた。家に歸つて見ると黒板は[illegible]た、と時間とを費したことの徒爾ならざるを思はしめるものがあつた。自分は自分の技倆を信じていゝと思つた。學校では博物の沼崎君が古い麥藁帽子をかぶつて學校園に其姿を曝して居る。佐治君は依然として石の如く瞑想に耽つて居る。佐治君を見ると自分は折角養ひ得た氣力が減入る樣な心持がしてならぬ。自分の休暇中に於ける活動を誇つて見たい積であつたが、自分は控へてしまつた。それで佐治君が此の夏を如何に銷したであらうかといふ疑問が起つたので自分は聞いて見た。一寸歸省しましたと極めて單純な挨拶であつた。佐治君は少し顔を赤らめた。此は佐治君の癖らしい。ぐつたりと萎れた樣な佐治君に其先を追求する念慮は起らぬ。自分は飽氣なく思ひながら過して居た。其内に書記の今井君から自分は佐治君が他へ轉任することに內決してあることを聞いた。在職が短日月であつたがそれだけでは自分には唯少しく意外に感ずる位であつたであらう。今井君は俸給の增額されたことをも語つた。自分は全く疑問を喚び返した。雜誌の寄稿者たる佐治君に對して消滅しつゝあつた疑問が卒然として再起した。教育者として濫りに金錢に拘泥することの陋劣なるを痛罵した時に、顔を赤らめた微かな事柄が火の如く自分の眼に映じた。此の休暇中に轉任の運動をしたのかも知れぬ。自分へ谷へ能はなかつたのも内に疚ましきことがあつたからではなかつたらうか。自分は屢教育ある基督教徒の[illegible]き墮落を耳にしたことがある。其記憶が一層自分をして佐治君に對して不快の念を增進せしめた。自分は勞ひ冷かなる眼を以て佐治君を見ない譯には行かなかつた。さうして淺薄な自分が[illegible]して絶對に金錢の誘惑を拒斥し得るかといふことの反省もなかつた。又佐治君に對する疑惑が甚だしき惡意をない嫉妬の念を加味して居ることをも自覺しことが出來なかつた。自分は旅行することが好きである。興に乘じて人に語ることもある。然し人が興に乘じて自分へ旅行の噺をするにそれが同輩のものであつた時にはそれに釣込まれると共に心に一種の寂しさを感ぜざるを得ぬ。自覺せぬ嫉妬の念に驅られるのである。輕侮する佐治君に對しても自分には繰り棄てられるやうなさうして名狀し難い微かな寂しさを感じたのである。當時自分に反省と思索との習慣が少しでも養はれて居たならば佐治君に對して自分の[illegible]に支配されるやうなことは無かつたであらう。轉任の噂があつてから一ケ月過ぎた。其間路

傍の人の如く冷淡であることを持續した。自分は悔いて憚ぢざるを得ない。

其頃はまだ惡戯は止まなかつた。數學の教師の大森君がフロックコートを新調した。今井君が洋服屋から探知したのである。狹い所だから何でも隱せたものでない。此の事實は自分等に絕好の材料を供給して且つ奇拔な考案を浮べしめた。今井君が小使に大風呂敷を持たせて大森君の家から其フロックコートを取寄せた。大森君の命令だといはしたので細君は何の氣なしに大きなボール箱へ入れた儘持たしてよこした。丁度自分の時間が二時間ばかり暇だつたので書記室で考案を凝した。大森君は職員中第一の肥大漢で、教授の時間でもボールドの前に立つて居るのを大儀だといつて止むを得ぬ外は椅子へかゝつて居る。又寬濶な日本服が着心がいゝといつて此まで決して洋服に成つたことがない。殊に夏は年齡の割合に禿げた頭からたくたくと汗を流して苦しんで居る。其代り冬は滅多にストーヴの側に寄らぬ。脂肪に富んだ手を出してどんな時でも胼がきれぬといつて誇つて居る。大森君は比較的短[illegible]なので袴を鳩尾の下で締めて居る。其容子が滑稽である。自分等は其體へ洋服を着せて見たいといつてはよく揶揄つた。大森君はどうしてもだぶつかせた日本服を脱がぬ。揶揄はれる度に禿げた頭を手の平で叩いては抗辯する。然し式場に列席するためにはフロックコートの必要が生じた。といふのは大森君は漸次俸給を增して資格に相違を生じたからである。大森君は案外正直な人だ。自分等を驚かしたのは其ズボンの太いことである。慥に自分の兩脚を容れて餘裕があつた。自分は小使に命じて何でもいゝからと短い棒を何本も持つて來さした。さうして兎に角帳簿や足の太いなりに組み立てた。特に腹へは新聞紙を卷いたりして其特色を發揮せしめるには容易ならぬ苦心を費した。自分は偶然の思付からフートボールの革袋をむいてゴムへ一杯に空氣を吹き込んだ。それへぐりぐりと目や鼻や口を描いた。大森君の特色の一つである禿を誇張して髮を描いた。人の頭らしく成つた大きな赤い玉を落せば床板の上を跳ね歩いた。それをそつと据ゑた。さうして此の異樣な人物は書記室に隣した宿直室を獨り[illegible]した。自分に成功すべき惡戯を滿足した。今井君が名刺を模造した。給仕が丁寧に持つて行つた名刺は大森君を欺いた。大森君をおびき出す前に幾度か宿直室は覗かれた。[illegible]軀に似合はぬ大森君はそゝくさとして居る。名刺を持つて何處だくといひながら書記室へはひつて來た。今井君はこんな時に澄し切つて居ることの出來る人である。今井君は宿直室に待たせて置いたからといつた。宿直室へ生徒の父兄を待たせて置くといふことは有るまじきことである。大森君は惡戯とは思はなかつたからうつかりガラス戶を開けた。其處[illegible]異樣の人物は大森君を睨み落した。大森君が其癖の禿げた頭を手の平で叩いた時自分は迚もたまらなくなつて書記室を飛び出して仕舞つた。大森君は有繁に苦笑しつゝ去らざるを得なかつた。大森君が去つてからも書記室ではみんな腹を抱へた。自分はまた宿直室を覗いた。突然書記室のガラス戶を開いて佐治君がはひつて來た。佐治君は何か今井君と語つた。今井君が自分を喚んだ時自分はぴたりとガラス戶を閉てた。どうしたことか自分は惡事でも發見された樣に感じた。好い鹽梅に室內の惡戯は佐治君の目には觸れないやうであつた。今井君は先生が何か君に用がある相ですと自分を見ていつた。今井君は自分等に對する時は君といふのだが佐治君に對しては先生と敬稱して居る。佐治君は自分等のどこか落付かぬ容子のあるのが異樣に思はれたのだらう。お忙しいならば後

便といつて去つて畢つた。佐治君が何で自分を態々尋ねるのか不審であつた。自分に佐治君に疎かつた。佐治君の心裡を忖度して悪意を以て疎んじたのだ。だが佐治君の悄然たる後姿を見た時には自分は何となく哀れつぽく懷かしい思がふと心の中に起つた。其の日の放課後に自分は悪戯に費した時間を塡補するために多忙であつた。理化學の教室で或る實驗に從事した。器械の装置が畢つたので自分は椅子に倚つて暫く窓外を見た。沼崎君は襯衣一つに成つてホーレーキを擔いで學校園を歩いて行く處である。ホーレーキといふのは立鎌と熊手とを背中合せにくつつけて拵へた農具である。近頃までかぶつて居た古い麥藁帽子は棄てていつもの鍔のさがつた冬の帽子である。幾年たつたのか褪めきつて居る。帽子の形が茸の様だ。今井君はすぐに赤ハッと綽名した。赤ハッといふのは初茸に類似の茸で此の地の方言である。夏が過ぎたら復た沼崎君は赤ハッに成つた。沼崎君がホーレーキを擔いで出るやうに成つてから雜草が除かれた、倒れかゝつたコスモスの花にも大抵杖が立てられた。コスモスの花は空に浮いたやうにふはり咲き出した。自分も小さな庭へコスモスを植ゑて置く。コスモスは白い花が一番目に立つ。赤い花は少し陰氣である。自分の庭のに學校のよりもいゝ。だが多數に在るのと遠くから見るのは學校園の特色で沼崎君の手柄である。給仕がそつと扉を開けてはひつて來た。實驗中はうつかりはひるのを許さないことにしてあるので給仕はよくそれを守る。何だと自分はぶつきら棒に聞いた。彼は佐治君が會ひたいといふことを告げるためによこされたのだ。それで忙しいかどうかと聞くのである。大森君などであつたらいきなりはひつて來るのだが、佐治君はそれだけ遠慮深い。自分は不審に思ひながらもすぐに來てくれと傳へてやつた。佐治君は靜にはひつて來た。自分は其綺麗に磨かれた靴が目に入つた。佐治君には閑雅な趣がある。日頃悪感を懷いて居たけれどかうして面接して見ると自然と自分に畏敬の念を起させる。自分は從來濫りに人を蔑視したがる癖があつた。それで居て相手の方から折れて口を利かれると機先を制せられたやうで且つ自分が餘りに力瘤を入れ過ぎたことが妙に極りの悪いやうに感ぜられてこつちが卻つて閉口して畢ふ。佐治君に對しても受身になつてしまつた。自分は立つて椅子を讓つた。佐治君の人を畏敬せしめる態度は自分をして無意識にかういふ動作を起させた。然し佐治君は辭退した。自分は更に再三薦めた。然し長軀を屈して受けなかつた。自分は自分の腰を掛けるものがないことに氣が付いた。室内には椅子が一脚しかなかつたのだ。佐治君は一脚の椅子に自分のみ身を寄するやうな人ではない。自分はつと立つて小使と呶鳴つた。小使は慌てて駈けて來た。椅子を持つて來い、急ぎだ〳〵と命令した。小使は椅子を持つて廊下を傳つて來る。面倒臭いので自分は駈けて行つてひつたくるやうにして教室へもどつた。佐治君は却て氣の毒相な顔をしてテーブルの前に立つて居たがあたふたとはひつて行く自分を迎へ見て少し其の位置を轉じた。自分はすぐに其椅子を佐治君の傍に据ゑた。佐治君は自分が椅子につくのを待つて漸く腰を卸した。いつもの如く俯向いて居る。

「お忙しい所でしたらうか」

佐治君は重く口を開いた。

「いゝえなに用があるといふ譯ではないです」

自分はかういつた。

「お宅へおもどりのお邪魔をしても相濟みませんが」

其の低い聲が尚沈んで心もとなげである。

「えゝ決して、暢氣なんですからそんなことは

ないです」

　自分は勢かういはなければ成らなくなつた。佐治君は例の如く力の抜けたやうに椅子に倚りながら暫時無言であつたが

「私はもう此の中學を去らなければ成らなくなりましたが、それに就いては此の一年間最も親密な御交際を頂いたあなたへ心殘りのないやうに申上げて置きたいことがあるのです、お聞きくださるでせうか」

「何でもどうぞ」

　自分は丸太でも投げ出した様にかういつた。さうして餘りに曲のないのに氣が付いて椅子を少し後へずらしてすつと自分の破れた靴を引いた。

「それは私の過去から現在に接續して居る運命であります。此の學校にもせめて三年も奉職して居ることが出來ましたならば幾らか義務を果すことが出來たでありませう。僅に一年で去るのは私の心に濟ぢない譯には行かないのであります。然し私の境遇は私を驅つてかういふ方向に赴かしめたのであります。現在に於て私の身を處する最善の方法はこゝを去ることなのですから仕方がありません。此は私のすべてをお話し申さねばわかりませんけれど……」

　兩手を拱いて首を低れた佐治君は其柔和な小さな目を閉ぢた。

「私は高知の、士族といつても極めて小身な貧しい家に成長しました。私が中學にはひる年頃に成つた頃はもう私の一家は糊口することだけが苦痛でありました。私はそれでもどうかして高等の學術を修めたいといふ希望が絶えず小さな頭を往來して居ました。其頃市中に相應な財産を所持して居た商人がありました。私は其商人の養子に成りました。そこには娘が一人あつたのです。私の父は昔氣質な義理堅い頑固な人で、其時町人の家へ養子にやることは成らんと拒んだのでしたけれど然し父は私を愛して居ました。さうして私の切なる希望を達せしめる方法、即ち私の長い將來の學資を得せしめるのには其商人に託する外に何も思案はなかつたのです。私は其頃の不完全な小學に於ては成績の佳良な生徒であつたのです。商人――私が今養父と呼ばねばならぬ人は金錢を擁して倨傲でありました。貧乏士族の子ではあるが性質が惡くないやうであるから養子にしてやるのだといふのであります。養父がこれ程のことをいふのを父は有繋に知りませんでした。舊藩の時代に於ける士族の壓迫に對する怨恨が一つは養父の念頭を去らなかつたのでありませう。私の一家は事實の上に町人の實に壓服したのであります。自分の財産は、一人の人を教育するために何も増減する處もないから、それだけの金錢は捨てた積でくれてやるのだと養父は酒を飲んではいひました。頑固な私の父が其當時私を養子にやるに就いてどうして自分を枉げましたか、又到底相容れざる私の父から養父はどうして私を貰ひ受けましたらうか。私は性質が全く母に似たのであります。母は女らしい人でした。女らしいだけに遠い將來を慮れと望むのはそれは無理でした。それ故私の希望は直ちに母の希望でありました。母は泣いて私のために父に訴へたのです。又他に人があつて私を頻りに養父に薦めたのでした。私はどうして頑固な父、反對も顧慮しないで養父の許に走つたのでせう。母の同情が私の心を丈夫にする第一の味方でありました。さうして倨傲な養父の許に甘じて居りましたのも一念學問のみ志したからであります。學問といふことは學校を順序よく經過して行くといふことより外に觀念はなかつたからであります。さうして養家を離れては私の目的を遂げる方法が絶無であると信じたからであります。母の性質を

享けた私は現在は官吏であります、嘗て人と相爭ふことを能くしません。遂に少年の虚榮心が私を盲目にして養家に逆つたのであります。養家の娘に對する私の情は遂に深く私を其家に結びつけました。無邪氣に戲ぐべき少年の時代に私は早く婦女子の情味を知つたのです。私はそれに就いて何も意識しては居ませんでした。娘は私の妻として最初から定められたのであります。娘は私に優しくしてくれました。私は小さな心にも糊口の苦しみを刻まねばならぬ家庭を離れて周圍はすべて華やかな家族の間に介在して唯愉快でありました。それが私の最も幸福な時代でありました。幸福な時代であつたことを追憶する時幸福は既に去つて畢つて居るのであります。私が異性に婦女子の情味を知つたのも果敢ない少年の一夢に過ぎませんでした

自分は佐治君に引き入れられるやうに感じた。始終俯向いて居る其顔を見つめて居た。

養父は投機的な人でした。悲運は養家を襲ひました。投機の失敗は急激の打撃でありました。養父は殆んど狂奔しました。然し及びません。一家は一人の心から破れました。それでもその時はまだ表面だけはどうにか繕つて行くことが出來たのであります。其うちに私は中學課程を終りました。私の妻は乳兒を抱きました。泣き叫ぶ兒を抱いて妻は立ち働かねばならなくなりました。私は父として其泣く兒を擁しながら、机の前に坐することもありました。順序として私は高等學校に進まねばなりません。私は約束が履行さるべきものと思つて居ました。然し養父に酒の勢を藉りて私を突き放しました。今日以後は一錢も學資として支出することは出來ぬといふのであります。薄弱な私は妻と相抱いて泣きました。父は之を聞いて激怒しました。それ故自分は最初に拒絶したのである。最早一刻もそんな人でなしの家に置く譯には行かぬ。早速離縁させると敦圉くのです。尤も父の感情は五年間一度も和らげられなかつたのです。養父は一回も父を訪ねないばかりか、父がたま／＼私に遇ひに來ましても、多忙だといつて挨拶もせぬことがありました。みんな金錢から來る倨傲の態度でした。父は齒噛みをして怒りました。さうしてお前が可愛いからおれは默つて居る。おれはまだこれ程の侮辱を蒙つたことはない。以前ならば一刀のもとに切り捨てるのだといひました。養父は義理といふものの上には驚くべき放膽な人であります。それでも私は妻を捨てて父の命に從ふことは、其苦痛が許しませんでした。私は養家に對して五年間の恩義があります。私の妻が私に對して貞淑であることは既往も現在も變りはありません。私は泣いて幾度父の家に往復したでせう。私に於ける斯ういふ結果は父の怒を餘儀なく鎮めました。養家の境遇が私を見棄ててから、私は他に學資を仰ぐべき道を求めねばならなくなりました。私を救ふ人は唯一人あればよいのであります。私は世間が意外に狭いことを知りました。微細な私といふ一人が、人の視線に洩れることは當然のことであつたのでせう。然し遂にその人が有りました。私は妻子に別れて岡山へ赴きました。單純な寄宿舎の生活は始まりました。私はこれから孤獨の境涯に移つたのです。岡山に居るうち養父は、益自暴自棄に陷りました。店は全く人の手に歸して私が最初の休暇に歸省した時には小さな假住居に一夏を過しました。飢渇が目前に迫るやうになりました。貧窮は私の幼時から經驗した處でありますが。私の成長した家は私を教育することさへなければ、どうにか糊口の道は立つのです。貧窮は家族の者に於て常態であつたのです。然し養家の落魄は痛く私を悲ましめ

ました。私は斷然私の學資の一部を割いて、妻に送ることに決心しました。一部といつても僅かに三圓に過ぎません。此の三圓が私の他借の學資に於ては非常の減額であります。それと同時に妻の爲めには心强い收入でありました。私の子は此がために成長したといつても過言ではありません。私はまた其頃から飜譯や其他のことで雜誌へ寄稿しはじめました。茶話會一席の會費に過ぎぬ收入が私の一家を潤しました。一身は別離して居ても妻と苦痛を分ちたいといふのが私の念慮であつたのです。

「私の恩人は遂に私を捨てませんでした。私は大學へ進みました。其頃の私の一家はもう形容が出來ません。養父は依然とした投機的の成功を夢想して豪語して居ます。家族とは殆んど交渉がなくなりました。私が大學へはひつてから妻は幼い子を抱いて上京しました。落魄の身を故鄕に曝すことが堪へなかつたのと、一つは私を見ることの機會があるといふ心の慰藉があつたからであります。東京からは歸省するといふことは私には出來なかつたのです。私の長い暑中休暇は、悉く糊口の資を得る爲に費されました。私は遠く離れて居るために妻を忘れようとはしません。だから妻の近く來たことが幾分私の心を丈夫にしました。然し私は憔悴した顏を見ることは却て苦痛の種でありました。妻は裏長屋の一隅に潛んで居ました。僅かばかりの賃仕事をして居たのですけれどもそれで糊口の出來ないのは勿論のことであります。私は止むなく學資の內から其時六圓づつ割いて與へました。雜誌へ筆を執ることも絕えず止めませんでした。此が私の家族に取つては重大な資本でありました。此は私の成績に少なからぬ影響を齎らせました。其時まだ表面の成績といふことを冷視する程に私の修養は積んでありません。私は時々妻に會ふ機會はありました。然し妻の姿は只私を泣かせるだけであります。それよりも私の心を抉つたのは私の幼い子であります。高等學校に在學中私の子は腦膜炎に罹りました。幸に生命は繋ぎましたが、土地に良醫がなかつたのと落魄の境涯とで十分の加療が出來なかつたのです。其爲め病後の私の子は白癡のやうになりました。女の子が六つといへば相應に物心がつかなければならぬ年齡であります。然し私の子はまだ言語も不明であります。到底發達の見込はありません。妻が私に一身を捧げ憐みを請ふ有樣は私をしていぢらしく思はせます。だが私は私の子に對して眞心からの愛情が薄いのです。多年別離して居たことが愛情を薄きしむ動機を與へたかつたのでせう。私が强ひて抱かうと思つても恐れて近づきません。數々其子の歡心を買ふ方法をとつて見ましても、すべての機能の遲緩した私の子は他の幼い子に見る樣に快く懷くといふことはないのであります。それでも私の子であります、仕方がありません。子に對する妻の苦心を私も身に分たねばなりません。遂に屢父からは離婚を迫られました。然し私に子のあるといふことが何時でも父の口を鈍らせました。かういふ間にも養父の態度は益々父の律儀な怒に火を點じました。父は我慢し兼ねた時に其離婚のことを私へ劇しく迫つて來ます。私は止むなく本姓に復歸することにだけは成りましたが然し私は落魄の故に貞淑な妻を捨てることは出來ません。私が岡山に往つた頃知名の牧師が來られたことがあります。私は其牧師の演說を聞いて感動しました。さうして其師の宿所を訪ねました。それから私は深く基督教を信ずるに至りました。妻を去ることを基督教は大なる罪惡として戒めて置きます。故に私が父から受ける壓迫を知つて居ます。時にはあなたの將來のために私を捨てくださいと要

求することがあります。此が女の口から泣かずにいはれませうか。私が妻を去る時には妻は即時に此の世の人ではありません。妻は死を決して居ます。自分の子を抱いて深夜に彷徨つたことが幾度だか知れないといひました。懐にした剃刀をとつて死なうと決心して見ても子を殺すに忍びなかつたといひます。私の妻は意志の薄弱の女であります。動機を與ふれば死するにちつとも遅疑しないでありませう。さうすれば私は更に殺人の大罪を犯さなければ成りません。此が私に忍ばれませうか。私のかういふ境遇から私の斷念は思索に耽る習慣がついて居ました。私には功名心は沒却することが出來ません。だから學び研究の餘地、多い學科を選びました。さうしてまだ發達の途上に在る社會學が私の心を惹いたのです。卒業してからも私は直ちに收入の方法を立てなければならないのでありました。一つは私の虚弱な身體を少しでも改善の途に赴かしめるには田舎が最もいゝと信じましたから私は此の中學へ赴任することに成りました。赴任と共に妻は高知へ歸らせました。妻子と同棲することには父の頑强な反對があつたからであります。父に對する遠慮から故郷とはいひながら妻を遠くへ逐うたのです。それと共に一方には妻を慰めるために俸給から十二圓を割いて送りました。妻は高知へ去る時決して泣きませんでした。妻の鋭くなつた眼光は却て私の心を強く刺戟しました。さうして妻に送るべき十二圓は私の收入から分割し得べき最大限度であります。私はまた恩人へ學資の返濟をしなければならぬ義務を有して居ます。私は更に父母、老後を慰めるために若干を割いて居ます。私の生活が此でどれだけの餘裕がありませう。それで止むを得ず雜誌の寄稿に勉強しました。私の周圍と私との間が圓滑にして幾らでも社會に接近せしめるには切實に正當な方法から得る金錢の必要を感ぜしめます。私の家族に福音を齎すものは金錢の外に何もありません。私は此の暑中休暇に上京して或る講習會に臨みました。其時知人から此の程設立になつた九州の商業學校に教職を執ることを勸誘されました。俸給の増額が心を惹きました。私は講習會の畢ると共に其報酬を旅費にして歸省しました。故郷に近く關東を去るといふことに依つて父の心を動かしました。哀訴の結果私の妻子を迎へることの承諾を得ることに成功しました。私の收入は一ケ年に就いて二百四十圓を増すことになりました。私も教育者として金錢を目的とすることの卑劣な行爲であることを知らないものではありません。それで九州に去ることは一たび私の良心を苦めました。然し私の行爲は罪惡ではないと思ひ返しました。それは妻子を復活せしむることが出來るからです。家庭を形ることによつて妻は長い間煩悶から救はれます。唯頑固な私の父は妻子と同棲することを許容する條件として父が義父との交際を絶對に拒絶することに就いて決して容喙してはならぬといふことでありました。私が父に服從してもしませんでも兩方の父は到底妥協を全うすることは出來ないのです。それは私が苦慮しても及びません。私は私の憐むべき妻を救ひ得たことを以て滿足せねばなりません。俸給の増收はまた私の恩人に對する義務を果す時間を短縮することが出來ます。貧窮な父の老後を慰めるに大なる便宜を有します。かうして私は斷然九州に去ることを決しました。然しながら教育者として僅に一年で辭し去るといふことが私の良心に創痍を蒙らしめねばなりません。私はあなたに羞ぢなければなりません。無言で去るに忍びません。それ故私はこれだけを聞いて頂きたいと思つたのでした……

佐治君は姿勢を少しも崩さない。其低い聲が自分の教室の内に充滿して强く自分の耳を刺戟するやうに感じた。佐治君に此の如き事實が存在して居ようとは夢想だもしなかつた。自分は佐治君を疑つて居たことの不明を衷心から羞ぢた。佐治君に於てはじめて人格といふものを認め得た如く感じた。自分は此から後の佐治君が漸く幸福の生涯を送りうべきものと想像せられた。さうして其一事を以て佐治君を慰めようかと思つた。然し自分は佐治君のために心から身體から捉へられて自分は竦縮んだやうな狀態に在つた。一語をも發し得なかつた。自分も俯向いて沈默を守つて居た。

「然し私の煩悶はそれでも永久に去りません」

佐治君の聲がひどく自分に響いた。

「私は父の條件に就いては暫く忍びませう。私の家庭に於ける煩悶は永久に去ることはありますまい。私の嗜好は碁を打つ以外には何もないのです。私は睡眠狀態に在る時の外は絶えず私の腦髓を苦めて居ます。私の腦髓を苦しめねば私は寂しさに堪へません。碁は私の腦髓を休ませるものではありません。私の一日は責任ある時間を除いてはすべて苦悶であります。私には以前から一種の癖があります。衣類も唯一着でも品質の善良なるものを丁寧に所持して居ることに滿足したいのであります。器物の如きものでも見て快いものでなければ私は日常の使用に堪へません。順境に立つて私が專門の學術を攻究することが出來たとしても到底私は間斷なく腦力を消耗して行かねばなりません。さういふ時にせめて妻の容貌が美しかつたならば私は妻に對することによつて私の疲勞を恢復することが出來るでありませう。他に嗜好のない私には妻の美貌といふことが私を慰むべき唯一の條件であるのです。だが私の妻は見るも厭はしい醜婦であります。逆境に立つて苦闘した結果内に潜んで居た鞏固な意志が歴々として容貌の上に表現されて來ました。私は妻に逢ふ時最初の一瞬間は必ず嫌惡と恐怖との念を起さないことはありません。家庭を形つたならば生活の安心から幾分女らしい優しさを恢復することが出來ませう、其他に於ては年齢が絶對に許しません。從來私は妻の爲に悲しみ妻を救ふことにのみ專ら私の心を傾けて居ました。さうして稍恢復した私の運命は私と同棲せしめることになりました。それと同時に私の心には切實に妻を厭ふの念が湧起しました。私は九州に去ることに依つて愁眉を開きうる筈でなければなりません。然しながら妻に對する煩悶は私の心を更に掻き亂しました。私は此の幾年來自分自身のすべてをも公平に判斷しうると思ふ程煩悶に伴ふ思索と考慮とを重ねて來ました。それでも私には私の家庭に光明を發見することは出來ないであります。妻は商人の家に唯一人僅な少時を送つただけであります。俗用の書狀だけでも私の代筆が出來るならばまだしものことでありますが、私の机の上の整理さへ安心して任せることは出來ません。私の後天性の道義心は頑强な父の反對をも顧みず此の如き絶望に近い妻と共に家庭を形らせるのです。さうして私は白癡に等しい私の子を發達せしめるために父たるものゝ義務として能ふ限りの力を盡さねばなりません。養家に人となつた當時の私は妻の愛情を味ひ得た外どうして私の眼が美を分ち得たでありませう。私は後日の悔を貽すことに餘りに無邪氣であつたのであります。私は不滿足の妻を腦裡に浮べては絶えず憂鬱に陷ります。妻と私との間を繋いで放たないものは一片の道義心に過ぎません。私の信ずる程度に於ける基督教は毫も私の煩悶を解決してはくれません」

涙がぽろ／＼と憔悴した頬を傳はつて流れた。

「此の數年來私は幾度私の境遇に就いて心のうちに解決を求めたか分りません。さうして何時でも無效に畢つて居るのであります。私の理性が築き上げたものを感情は直ちに根柢から破壞し去るのであります。破壞されつゝ私は身を處理し來つたのであります。私は煩悶して憂鬱に陷る時そこに私の住居を求め得る如く感ぜられます。憂鬱の狀態が私に快感を與ふる樣になりました。私の身體は同時に損はれなければ成りません。悲しい快感を得るために私の細胞は減少します。私は私の肉を殺がねばなりません」

佐治君は暫く默した。

「私はすぐに福岡へ移ります。私の去つた後聞いてくれる人がありましたらどうか私を語つて下さい。私は從來嘗て人に打明けたことがありませんでしたが、あなたにだけはお話せねば心が濟みません。」

又暫く間を置いて

「どうも御迷惑なことでしたらう」

佐治君の噺は途切れた。自分はかういふ場合どうか挨拶していゝか分らなかつた。實際の處自分の心は弱いのである。自分は唯困つてしまつた。ふと見ると窓の外から沼崎君がホーレーキを擔いだ儘微笑しながら覗き込んで居る。放課後にも學校に止つて日を暮すことのあるのは沼崎君と自分ばかりである。

「君はまだかい」

沼崎がいつた。

「もう歸らう」

自分は答へた。三人は一緒に學校の門を出た。

自分は家に歸つてからもぼつとして同情に堪へぬ佐治君の身の上を思つて居た。自分は座蒲團を枕にしてごろりと横に成つた。妻は私をどうしたのかと疑つた程である。自分は從來なかつたことが頭を往來した。心理狀態の變化を自覺した。自分の少年時代からの友人で文藝といふ方面に志した男がある。二年前に逢つた時彼は頻りに人生の意味といふことを語つた。自分には固より解らない。又解らうともしなかつた。彼は市ケ谷とか牛込とかの見附を始終往復したといつた。あの見附の附近には大雨の後などにはよく土手の半腹が墜落するのを見る。それから土手の榎の木には鴉がとまる。落葉の後には寄生木のホヤがあからさまに見える。少年が空氣銃を持つてそこらを彷徨ふ。或日そこを過ぎると少年の空氣銃が一羽の鴉を打つた。鴉はすつと落下した。土手に近づいた時鴉は最後の力を揮はんとして羽を動かしたが其體は枯芝の中にどさりと大きな響を立てた。少年が驅けよつて捉へた時鴉は悲しい聲をあげて鳴いた。此の見附の現象に何等かの意味があるやうに感ずるといふのであつた。自分はそれは引力の作用だといつた。地殼の一部に空虛を生じた時陷落といふ現象の生ずるのは當然のことである。ホヤの木があつても何でもないぢやないか。鴉が落ちた時に大きな響を立てたのは落下率が加はつたからだと半分は戲談にいつた。此でも自分は天然を愛すること位は知つて居るのだといふと彼は天然の皮相を見たつて何になるといつた。去年の夏に逢つた時彼は又いつた。此の間或る不幸な女に逢つて其經歷を聞いた。女は泣いて訴へた。自分は其時女に向つて徒らに慰安の道を求めるよりも悲しめるだけ悲しんで運命に服從しなさい。さうすれば生存の意味が深くなる。それと同時にあなたの値打が増すのだといつてやつたといつた。自分にはどうしても分らん、君等はつまらぬことに苦勞したものだとさういつてやつた。さうすると

彼は君は百姓のことを知つて居るだらうといふから勿論だといつた。百姓が作物を栽培することに僞があるかといふからそれは神聖なものだといつた。百姓のすべては努力に在るぢやないかといふから努力の最高位に居るものだらうといつた。さうすれば神聖なる努力だらう。百姓は苗の一把は惜むまい。然しながら此を田に植ゑた時其一株を踏まれても怒るだらう。穗が出て花が咲いた時は一夜の嵐にも心を勞するだらう。稲が竹竿に掛けられた時更に之を惜むの度は加はるだらう。籾が玄米になつて玄米が更に白米に變じた時はどうである。白米の一粒だに惜まるゝ所以のものは百姓の力が段々そこに加はるからである。即ち神聖なる努力の値打である。物質の値打ではない。籾からさうして白米に至る程物質は却て減却しつゝあるではないか。神社であつても佛閣であつても莊嚴の氣人を壓するものは之を造營した各々の人及び補修の繼續せる長い時の間之に奉仕する人々の敬虔なる態度の具體的表現である。人の力が人を壓するのである。君は態度といふことが解らぬと見える。研究する目的物の最も大なるものは天文の學だらう。小なるものは檢微鏡の學だらう。さうして兩者の間に値打の差別があると思ふか。そこに差別を見出さぬのは目的物に對する研究者の敬虔なる態度の全く同一なるが故である。學問といふものは神聖なる努力の結晶であると彼はいつた。自分はそれはそれに相違ないが、同一の努力をしても成功するものとせぬものとが有るぢやないかといつたら、それは天分の問題だ、各自に天分を盡すまでのことだ、其盡すといふ處が神聖なる努力だ、其態度に値打が存在して居るのだと彼はいつた。それぢや下手に生れた者に損ぢやないかといふと、損益といふ語はそんな處へ用ゐるものぢやないと彼はいつた。彼は又十日徒手安坐して之を一年半年若くは一ヶ月後に回顧してそこに何物がある。唯一日の旅行で十分である。努力は孰れに多い。追憶の分量が孰れに多い。さうして其旅行に事件が加はれば加はる程、苦痛が加はれば加はる程、其事件や苦痛に對して旅行者の心理の働きが波打てば波打つ程そこに分量も意味も値打も生じて來るのぢやないか。意味ある人生、値打ある人生を微細な一點にも發見するのが我々の本領である。さうしてそれに努力することに依つて我々の意味も値打も増して來るのだといつた。自分は少し茶化して聞いて居た。小學校の生徒にでもいつて聞かせるやうにいふのが面白くなかつたからである。少年時代から隔てない間柄ではどうも頭にはひり憎いものだ。だがこんなことも其後はすつかり忘れて居た。佐治君の噂を聞いてふつと思ひついた。どうかすると二十年も前のことをふつと思ひ浮べることがある。心理學者は此の狀態を何とかいつて居るのだらう。佐治君を見るとひどく自分がちつぽけな樣に見えてならぬ。大學出身は幾人か見た。佐治君のやうな人には逢はぬ。それで居て佐治君は絶えず家庭の煩悶ばかりして居る人だ。狹い一局部に限られて居る人に過ぎないのだ。そこには何があるのだらう。自分はぐたりと成つた儘起きられなかつた。

翌日佐治君は生徒に告別の挨拶をして早く歸つた。自分は放課後鬼怒川の上流の寫眞二三葉を懷にして佐治君の下宿を訪うた。荷物は大抵通運に託したといつて室内がからりとして鞄一つだけが殘されてあつた。佐治君は鞄の中から白い晒しの切を出して茶器を拭つて茶を侑めた。自分が寫眞を出して見せると佐治君は熟視した。鬼怒川の上流は天下の絶勝であることや、殊に豪雨の後に於ける水勢の劇甚なことや、自然の絶大なる威力が山谷の民に迷信

を抱かせて居ることや種々なることを語つて見た。佐治君は

「私は自分の境遇と性情とがかういふ深山を跋渉することを許さないだらうと思ひます。あなたに依つて此の大觀に接することを得たのを感謝致します。私は固より美を好むものであります。美術といふものの如何なるものなるかも學んで居ります。然し私の心は一方に非常な薄弱なものでありますが、錐を以て穿たねば痛みを感ぜぬ程强烈な刺戟にも堪へて居ます。私は現在の畫家の描いた多くの誇張した山水畫を見ることを好みません。誇張が繪畫の要素の一つであることは私も信じて居ます。然し現在多くの繪畫は誇張に伴ふ浮薄と虚僞との惡感を催さしむるのであります。だがあなたの寫眞は私の前に眞實といふものを現はしてくだすつたのです。眞實は私に於て第一の滋味であります」

といふ意味のことを語つた。

「東怒川の分ならば幾らもありますが宜ければ今夜印畫して置きませう。明日會へお出掛の序に一寸寄つて見て下さい」

自分は更に

「どうかあちらへ御出でに成つたら勉めて郊外の散歩でもなすつたらどうですか、あなたの健康は必ず恢復されるに極つて居ると思ふのですが」

と極めて普通なことをいつて見た。

「御忠告に從ふやうに心懸けませう」

佐治君はぼさりとしていつた。

次の日は日曜日であつた。職員間には佐治君に對する送別會が催された。自分は昨夜印畫に時間を費したので起きたのは十時であつた。空はからりと晴れて狭い庭のコスモスの花が氣輕相に見えた。自分は水洗ひした印畫を緣側へならべ干した。それが乾いたので自分はガラスの定規で端を切つては臺紙を貼りつけた。そこへ佐治君が訪ねて來た。佐治君は庭から通した。座敷のうちは雜多の寫眞や古い臺紙や新聞紙やごつたに散亂して居た。潔癖な佐治君は坐るに快くなかつたのであらう。此の日は自分の妻は同僚の細君同士に何か寄合があるとかで不在であつた。自分は冷えた茶を侑めた。佐治君は箱からぶちまけてあつた寫眞を一枚々々と見て居た。自分は其間に水洗ひがよく出來てなくても變色することや、糊が惡くても矢張り變色するといふことやそれから此の貼り附けることが米國では一つの技術と見做されて居ること杯を語りながら一心に手を動かした。時間が大分經つた。日が斜に射し掛けて來たやうである。自分の手もとも薄闇くなつたかの樣に心得た時玄關でおとづれる聲がするやうに思はれた。

「どなたかお出でのやうですが」

佐治君は注意してくれた。

「こんちは」

といふ低い丁寧な聲である。自分は其儘立つて見た。庭の竹垣からすく〳〵と立つた陰氣な赤いコスモスが一杯に日を浴びて居る。其蔭にぼんやり立つて居るのが見えた。出て見るとみすぼらしい爺さんが何か天秤棒を卸して居た。

「何だい」

自分はいつた。

「へえ、鰌ですが、これつきりで、安く致して置きますから……」

哀れつぽい爺さんである。

「幾ら目あるか掛けて見ないか」

自分は財布を出しながらいつた。爺さんは腰へ插した秤を出して籠を引つ掛けて秤の棒を目よりも高く揚げた。

「おい爺さんそれぢや餘ンまりはねるぞ」

「へえ〳〵」

と爺さんは少し分銅を動かす。どうも變である。爺さんはやがて

「旦那どうぞ見ておくんなせえまし」

自分へ秤の目を讀めといふのである。爺さんは又自分が出した小笊へ鰌をあけて更に濡れた竹籃を掛けてさらして正味が幾ら有るかと聞くのである。

「二百四十五匁だ、それで相場は幾らだい」

「へえ、六掛でがすが今日は荷ばたきですから五掛五分の勘定でようがす」

「六かしい勘定だな、十三錢四厘七毛五朱か、爺さんそれぢや分るまい、十三錢五厘やらう、さあ二十錢銀貨だぜ此は」

爺さんは銀貨を受取つて暫く目の近くへ持つて行つてへりをこすつて見たりして穢い財布を空に成つた籠から出してざら〳〵と錢を手の平へまけた。

「旦那どうぞこれからお剩錢だけをとつて頂きてえもんですが」

「お前私に取れといふのか、それぢや六錢五厘だよ、あゝもうとつたよ」

爺さんは文久錢の交つた小錢を又ざら〳〵と財布へ入れて長い紐をくる〳〵と絡んだ。

「まあお珍らしい、あなたお出で下すつたのでせうか、大層遠方へお出でなさる相ですが、……そこへお立たせ申してどうしたんでございませう」

妻の聲で挨拶して居るのを聞いてふと見ると妻は二人の子を連れて歸つて來た處である。何時の間にか佐治君が竹垣の側に立つてこちらを見て居るのである。送別會の時間が切迫したので暇を告げようと思つて出て來たのであつたらう。

「あなたまあ一寸おあがんなさいまし、お茶でも召し上つて下さい」

妻はお世辭をいつて居る。自分は氣がついたから

「どうもうつかりして居て御迷惑でしたらう。私は寫眞を二三枚仕上げてあとから行きますからどうか一足先へ行つてください」

「さつきからお出でくだすつたのでせうか、私は唯今お出でになつたばかりだと思ひました」

妻は佐治君へ挨拶しながら自分の方へ近づいた。妻に抱かれた子は生えはじめた白い歯を出して佐治君へ向つて兩手を振りながら母の手の上で立つたり屈んだりして嬉々として騒ぐ。

「本當に此の子は人怖ぢがないのですから、まあどうしたもんでせう此の容子は」

佐治君へ挨拶して妻は

「今日も奥さん方で大笑ひなのねえ」

と獨りでいつた。さうして自分を見て笑ひながら

「あなた厭だ、小笊なんぞ持つてどうしたんでせう」

妻の腰にくつついてた次男は小笊の中を見せろとせがむ。小笊を次男の頭へ持つて行くと鰌の水がぽたりと垂れる。首を縮めて甘えた聲を出して騒ぐ。そこらの子供と遊び暮した板面者がまた一人門から駈け込んだ。下駄を一間もあとへ飛して駈けあがつた。佐治君はまだ去らずに居る。

「いま鰌を買つた所さ」

自分は爺さんのことを妻に語つた。

「お爺さんお前さん眼が惡いの」

妻は改まつて聞いた。

「へえ、わしも近頃すつかり見えね。もおんなじに成つてしめえまして―」

「そんなことでお前さん胡魔化されやしないかね」

「結構これで出せえすりや煙草錢にや成りますからね、有難えもんでがす。旦那方わしの顏を知つてますからなんだかんだ氣をつけてくれま

す、なあにわしがたべるだけなら日に二合もいりましねえから」
能くねえまあ、お前さんそんな年に成つてもう商ひに出なくつてもいゝだらうがねえ」
妻は同情してから聞いた。
「わしも息子は早く持つたんでがすが一人前になつたと思つたらころりやられちやつて、倒見たのがわしのくされでがす、それから貰ひ子をしましてね、二十五まで育ててうつちやられつちめえました、思ひ出すと忌々しいことでがすが、嫁を取らねえで置いたのが間違でがしたんべか、到頭女に騙されて連れ出されてしめえました。足尾の銅山に稼いで居るつてちらつと聞いたこともありましたが、殘せるやうだら結構でがすが、殘りやしますめえ、食つて通るだけならこつちに居たつてよさ相なもんでがすが、此も好きだやしやうがあせん、何も其女だつて女房にしちやなんねえといふ譯でもねえのに、わしもこれ息子が生きてりやこんな目にや逢はねんでおすが、こりやいゝ野郎でがしたよ」
爺さんは天秤を杖に突きながら
「何でも實子でなくちや駄目でがす、自分の子供が寶でがす」
呟くやうにいつた。
「お前さん、足尾に居るのが分つたら連れて來たらどうなの」
妻はいつた。
「こんな厄介者の處にや戻つちやくれますめえ、わしもはあつくん〳〵忌々敷くつて、七十からに成つてからいに足腰がきかなくなつてからうつちやられちやみじめなもんでがす、わしも此で幾らも擔いちや出ねえでがすが夜は隨分草臥れます、去年と今年ぢや大變な違えでがす、爭はれねえんもんです、一年たあいはれません、わしも何處でのたるか知れたこつちやありましねえが此も因緣だと覺悟はして居ますのせ……仕様があせん、私もはあ野郎がこたあ諦めましたから……」
自分も妻も唯爺さんを見て立つた。佐治君も竹垣の側に立つた儘凝然として居る。日は漸く闇くなりかけた。爺さんは見えない目を睜つた。
籠の繩を天秤の端へ絡んで暫く思案したやうにして居た。
「心得違えせえなけりや憎い野郎ぢやあがあしねえが、なあに手前だつて碌な目にや逢はれねえから駄目でがさあ」
爺さんは急に氣がついたやうに
「有難うごぜえました」
といつてのめり相な體へ天秤を擔いだ。
「また買つてあげるからお出でよ」
妻は後から聲を投げかけた。
「へえ〳〵どうぞ」
爺さんは竹の杖を突いてよぼ〳〵と出て行つた。佐治君も續いて出た。二人の姿は程なく薄暮の中に隱れた。夜は段々濃く、立つて居る自分を壓して閉ぢた。

（明治四十一年十月）

雜詠

篠の葉のしげれるなべに樒さきさびしき
庭のうぐひすの聲
新墾の小松がなかに作りたる三うね兩う
ねの豌豆の花
青葱の花さく畑の桃一樹しげりもあへず
毛蟲な喰ひ
桑の木の茂れるなかに吹きいでて仄かに
見ゆる豌豆の花

（明治三十八年）

隣室の客

一

私は品行方正な人間として周圍から待遇されて居る。私が此處にいふやうな秘密を打ち明けても私を知つて居る人の幾分は容易に信じないであらうと思はれる。秘密には罪惡が附隨して居る。私がなぜそれを何時までも藏して居ないかといふに、人は他人の秘密を發くことを痛快とすると同時に自分の隱事をもむき出して見たいやうな心持になることがある。そこには又微かな興味が伴ふのである。

私は山に遠い平野の一部で、利根川の北に僻在して居る小さな村に成長した。村は靜かな空氣の底に沈んで櫟林に包まれて居る。私の村は瘠地であつたので自然櫟林が造られたのである。丈夫な櫟の木は伐つても／＼古い株から幹が立つて忽ちに林相を形つて行く。百姓は皆ひどい貧乏である。だが櫟がずん／＼と瘠地に繁茂して行くやうに村には丈夫な子供が殖えて行く。或時は其聚つて騷ぐ聲が夕燒の冴えた空に響いて遠く聞えることがある。私は自分の村を好んで居る。さうして櫟林を懷かしいものに思つて居る。櫟林は薪に伐るのが目的なので團栗のなるまで捨てて置くのは一つもない。それで冬になつて木枯が吹きまくつても梢には麁い枯葉がぴつしりとついて居る。春の日が錯綜した竹の葉の間を透して地上に暖かな小さな玉を描くやうに成つてすべての草木がけしきばんで來ても、櫟の枯葉は決して落ちまいとしがみついて居る。「ぢい」と細い聲を引いて松雀がそこに鳴くやうになれば地上には幾らかの青味を帶びて來る。然し櫟林は依然として居る。四月になつて、春がもう過ぎて畢ふと喚び掛けるやうに窮屈な皮の間から手を出して棕櫚の花が招いても只凝然として死んだやうである。諦めたやうに棕櫚の花がだらけて、春はもうこぼれたやうに殘つて居る菜の花にのみ俤を留めて來た時其麁い枯葉を咄嗟に振ひ落して蘇生つたやうになる。さうして僅か四五日のうちに新樹の林になるのである。いつ一見れば春といふ季節は櫟林と何等の交渉もない。

私は此の植物に同化されたといつていゝのであらうか、私の一身は極めて櫟林の生態に似て居る處がある。さう自覺した時私は櫟林が懷かしくなつた。隨つて櫟林に向つていつも注目を怠らない。春雨が滲み透つた梢の麁い葉が、頭を擡げ出した麥の青さと相應じて居るのに見惚れることすらあるのである。然しこんな下等な樹木を好んで居るといふものは恐らく他にはないであらう。

私は櫟林が春と交渉がないといつた。然しながら長い春の間には櫟も他の樹木の如く皮と幹との間から水分を吸收する生理作用を怠らない。私の一身も春といふ期間に於て索莫たる境涯に住つたのである。それでも櫟が竊に水分を吸收して居るやうに、私にも亦隱れた果敢ない事柄がある。私がはじめて此の世の空氣を吸うて泣いた聲は私の家では四十八年目に聞かれた聲であつた。其時母の乳が乏しかつたので普通ならば「さと子」といつて他の家へ託される筈なのであるが、私の爲めには特に乳母が抱へられた。どういふものか私の家へ來る乳母の乳が止つて畢つたので前後十一人の乳母が交代された。其頃はそんなことの出來る程私の家

には僥倖があつたのである。十一人目の乳母が虚弱な私を育てた。乳母は田舍には滅多に無いといはれた位器量のいゝ女だといつた。私も幼い時には非常な綺麗な子であつたので、後には女に好かれるといふやうなことを能く見る人がいつた相である。これはずつと後になつてから聞いたのであるが有繫にそれを聞くことは不快ではなかつた。私には又かういふことがあつた。私はふと一人の女を見るのが好きになつた。女は私よりも五つ六つ年嵩で、私は十一二であつた。私は其頃近い町の親戚の家から學校へ通つて居た。稍暑い日に女は蝙蝠傘を翳していつでも同じ時刻に學校の前を往復するのであつた。女は何かの稽古にでも通つて居るらしかつた。私は暇があれば學校の門に立つて見た。唯其女を見るのが好きであつたまでである。私が其時少年の身でさうした心持で立つて居ようとは人の知る筈はないのである。其癖私は其頃にまだ他人が女を批評していゝとか惡いとかいふのを聞いても、どんなのがいゝのか惡いのか分らなくてさういふのを不審に思つて居た位なのであつた。それで其女のことは其後久しく忘れて居た。ふと思ひ出してからは屢記憶から喚び返す。すらりとした矢絣の單衣姿で縹の蝙蝠傘をさして居る。日光が仄かに蝙蝠傘を透して化粧した顔が薄らに青く匂ふ。私が最初に思ひ出した時には女の姿はそれ程に明瞭ではなかつた。それがだん／＼記憶を反復して居るうちに女の姿がはつきりとかう極つて畢つたのである。私は兎に角こんなことであつたから性情が何等の抑制もなく行つたならば曠野のうちに彷徨ふやうな索莫たるものではなかつたであらう。私は病氣の爲めに斷然廢學せねば成らぬやうになつた。其時私はまだ二十にもならなかつた。私は復た榛林に沒却して此の靜かな村の空氣を吸はねばならぬことになつた。全く孤獨の境涯に移つた。日さへ明ければ田畑に出る百姓は私の相手ではなかつた。心身共に疲勞した私と何時までも相對して居てくれるものは樹木の外にはないのである。それからといふものは厭だと思つて居た榛の木もだん／＼に好きになつた。私は健康の恢復しかゝるまで數年間徒然として過した。其間女といふ念慮の往來したことはあるが自分ながら明かにどうといつて述べて見る程のこともない。私に妻帶を勸める人もあつたが其噺を運ぶのには私の心は餘りに沈んで居た。私が周圍から品行方正な人間として待遇されて居たのも當然である。私の斯ういふ狀態を持續して居たのは病氣といふ肉體の缺陷と私を挑發する機會が一度も與へられなかつたからとでなければならぬ。私の村に相手になつてくれるものがないといふのは私と百姓との間には生活狀態から自然著しい隔てを生じて疏通し難い點が多い爲めである。百姓の子でも麥の穗に滿ちた畑の中に働いて居る時や、熊手を持つて榛林の間を落葉掻に行く處をちらりと見た時や其姿が有繫に目をひくことがないではないが、それは唯一瞥した感じに過ぎないので、暫くも私の心を動かすには足らぬのである。私の生涯の春もこんなであつたけれど[illegible]い樹が葉を振ひ落したやうに時期が來つて忽ちに變化した。さうして人一倍の陋劣な行爲を敢てしたのである。それは私の家に一人の女が來たからであつた。

二

私の村の學校の教師に溝口といふ老人があつた。彼はみじめな殘骸をそつちへこつちへ逐ひやられて到頭邊鄙な私の村へ逐ひつめられたのであつた。自ら士族だといつて居たがさういふ僻もあつた。擊劍をしたこともあつたといふて

だらけの手の甲を見せることがあつた。目もどうかするとぎろりと光ることもあつたが生活の壓迫からいつとはなしにさもしい心が出たと見えて酒でもやるとへこ〳〵と頭を下げるのであつた。遅くまで子があつたと見えて夫婦共に七人の家族だといふことを聞いて居た。老朽の教師の俸給で七人の糊口は容易なことでないのだから到底好きな酒までには及ばないのである。然し性來の子煩惱と見えて能く生徒の世話をするといふので父兄とは懇意にして居た。そつちこつちと訪ねては酒にありついて居た。さうして其歸りには茄子でも芋でも其季節のものを貰つて提げて行く。自分の小さな風呂敷包を首へ括つて兩腋へ大きな南瓜を抱へて行くこともあつた。よろ〳〵として行く處を見ると遊戲に耽つて居る村の子供が騒ぎながら先生の後に附いて部落の境まで行く。風呂敷が解けて茄子でも芋でも轉げ出すと教師は慌てて拾つては袂へ入れる。生徒はわあと先を爭うてそれを拾ふ。先生は更に慌てる。生徒は各手柄でもしたやうにそれを先生へ返すのである。斯ういふ教師が其頃まだ世間に存在して居たといふのは不審に思はれるやうであるが、それを譏つて畢ふことか忽ち其一族に悲慘な目を見せなければならないので情實といふものが幸に餘命を繋がしめて居たのである。庭に散つた木の葉がそつちこつちと掃き寄せられるやうに自己の運命の終局までには幾多の學校を移つて歩かねばならぬ。然しかういふ教師は役に立たぬ割合には父兄の間には氣受がいゝ。それといふのは子煩惱で能く生徒の世話をするのと應對が碎けて居て他の教師のやうなツンとした所がないからである。百姓の目には袴を穿いてる教師の地位は立派なものである。だからさういふ人間から親しい言葉を掛けられるといふことが彼等には滿足なのである。私は此の教師を憫むべきものと思つて居た。私の家は父母と私と唯三人のみの家族であつたから此の教師の私の家を訪問すべき機會は少なかつた。それでも時々來ることは來た。如何にも控目にして居る容子を見ると私の母は不取敢酒を出さぬ譯には行かなかつた。其歸る時には又野菜の一包が彼の手に在つたのである。或時彼はまた非常に恐縮した容子で私の家へ來た。酒が其元氣を恢復した時に私の母へ嘆願があるといひ出した。それはかうであつた。彼の長女で、彼の妻の郷里の知合の人が媒酌で其近村へ嫁に行つたのがあつた。それが一年ばかりになるのだがどうしても亭主が厭だといふので遁げて來て畢つた。それが途近頃のことである。假令下女奉公をしても酌婦に賣られても亭主の側へもどるのが厭だといつて聽かぬ。厭だといふものを無理に逐ひ歸して間違があつたら取り返しのつかぬことである。酌婦に落ちぶれさせることも忍びられない。さうかといつて自分の家へ置いたのでは其の日其の日に困つて畢ふ。どうかあなたの家で暫く預つて下女代にでも使つておいて貰ひたい。針仕事は一人前のことは差支ないからといふのであつた。私の母も氣の毒に思つたし、僅に三人の家族のうちでそれも私の父は大概他出して居るので家に在るものは母と私と二人のみで、傭人が寂しい夜をやつと賑はして居たに過ぎない不自由だらけな生活であつたのだから、針仕事の出來るといふのを幸に一時預つてやらうといふことに成つたのである。私も其時どういふものか私の家に女が一人殖えるといふことが決して惡い心持はしなかつた。それで私は其次の日の夕方それがどんな女か見たいやうな氣もしたので行つたこともない教師の寓居へ用をかこつけて行つて見た。ひどい穢い住居であつたがそれでも厭な心持も起さずに歸つて來た。學校は私の家からでは大分

隔つて居たので教師の寓居も遠かつた。二三日して母といふのが其女を連れて來た。女の弟といふ小さな子も一緒に手を引かれて來た。母といふのは教師とは大分年齢が違ふやうに見えた。さうして教師の無頓着なのと違つて仲々一癖あり相な容貌であつた。女は其夜から私の家の人となつた。私の情史の第一頁が此れから染められるのである。女は既に男といふものゝ間に築かれてある一重の垣が除かれた身であつたのである。女はおいよさんといつた。二十一だとかいつたが少し大柄であつたので二つ位は隱して居るかと思はれた。おいよさんにはくつきりと色の白い所が第一の長所であつた。夜になると能く臥しランプの側で髪を束ねた。以前熱病に罹つたことがあつて其後髪の毛が恢復しないのだといつて夜束ねにても目になる丈耳のあたりへ短い毛が少しこけて居るのであつた。おいよさんには何處といつて格別にいゝ所はなかつたが人の心を惹くのは其涼し相な目であつた。然しするりと横を見た時には意地の張つた女であるといふことを思はしめた。それは貧乏な家庭に成長した丈に野卑なさもしい處もありはあつたが、それは極めて冷静に見ていつたことで母も私も同情して居たのである

からそんな缺點を見付けよう抔といふ念慮は其時ちつとも持たなかつたのである。教師の子だけに手紙を書くことが女としては達者であつたのも母の心に投じたのであつた。おいよさんは毎日針仕事と炊事の手傳とをして居た。唯時々その大柄なのには似合はず加減が悪いといつては臥せることがあつた。教師はおいよさんが來てから遠い處を能くおとづれた。好きな酒も非常に遠慮して時には遁げるやうにして飲まずに歸ることもあつた。さうして一おいよさんが平生から虚弱であつたことをいつて母へ哀訴するやうに頼んで行くのであつた。教師の腰の低い割合におよいさんにはツンとした所があつた。我儘に育てられた女であつたのだ。尤も此は私がおいよさんと別れてから母も私も思つたことである。私の病氣のために心配した母はおいよさんにも深く同情したのである。障子の蔭で針仕事をしながら

「おいよさんもお若いに困りますね。それに何だか思はしくないんですつて、お父さんも大抵の苦勞ぢやないんでせうね。あなたも我慢することは出來ないんですかね」

私の母がいつたことがあつた。

「どうしても私厭なんでございますから」

暫くたつてからおいよさんの[illegible]でからいつた。

「それでもあちらでは戻したいといふんぢやありませんか」

「どうでございますか」

「此間あちらから人が來た相でしたね」

「そんなことを父が申して居りましたが」

「籍はまだ送つてないんだつてましたね」

「まだこちらにございますから私さへ戻らなければそれまでなんでございます」

「そんなことを聞いては何ですがそれには譯もあるんでせうがね」

「私どうしても厭なんでございます」

私は襖を隔ててかういふことを聞いたことがある。私は耳を欹てた。おいよさんは戸籍は送つてないといつたけれど夫のある女である。夫のある女といふものは決して善い感じを與へるものではないのである。然し私に近くおいよさんの居ることは私に少しも不快の感を起させない。おいよさんが私の家に少し落ち付いた頃私は其涼し相な目を見てふと何處かで見たことがありはしないかと思つた。追求の念が絶えず私をそゝつておいよさんの顔を見させたのである。おいよさんはこれを何と思つたか、私が

おいよさんを見る度においよさんも私を見返すのであつた。

三

其頃からでは餘程前のことであつた。或遠方の姻戚に葬式があつたことがあつた。夏といつてもまだ暑いといふ頃ではなかつたが、竹の筒には百合の花が供へられてあつた。藪の草の中などにはまだ山百合が膨れ出しもしなかつた位であつたから、草花の好きな私は其白い花が何といふ百合であるかと見て居たのであつた。其土地は私の村とは違つて樹立も稀に只田が濶々として何處にも日が一杯に射して居た。そこらの庭の隅には其白い百合がぎつしりと花を持つて簇生して居るのを見た。田が連つて居る土地だけに私の村のやうではなくどこにも空地といふものは極めて少なかつた。棺が庭へ卸された時見物に集つた村の者と客とが庭にぎつしり詰つた。私は垣根の側に混雜を避けて居た。私の側には見物の女が三四人居た。私はうつかりして居ると其中の一人があれと吃驚したやうにいつた。私に一番接近した十五六の女の子の背負うて居た乳飲兒が其女の子の肩へ挂けて白く乳を吐いた。さうして其とばしりが私の紋付の羽織へかゝつたのであつた。女の子は赤い顏をして居る。後へ廻した片手を外して手袋で私の羽織を拭かうとする所であつた。私は手巾を出してそつとふいた。女の子は挨拶のしやうもなく唯はら〳〵して居た。日がすぐに羽織を乾して乳の痕がうすく袂に印された。私はふと又肩の處に褐色の粉がぽちつと附いて居るのに氣がついた。指の先で彈いて見てもそれでも微かに粉が殘つて居た。其時私の側からもう距つた先刻の女の子を人越しに見た。乳飲兒が白い百合の花を持つて居る。其百合の花粉が私の肩に觸れたのであつた。女の子は唯それだけのことで私の記憶に存して居る總てのことはなかつたのである。だから其後更に思ひ出すことも無かつたのであるが、おいよさんを何處かで見たことのある女のやうだ、[illegible]て居た末到頭これが記憶から喚び起されたのであつた。おいよさんはさう思つて見ると其時の女の子である。或時私はそれとはなしに其土地に居たことがあるかないかと聞いて見た。さうして其子がおいよさんであることを知つた。それにしても私は其時の女の子と今のおいよさんの容子が何處から何まで變つて居るのに驚いた。[illegible]夏[illegible]は其儘になつて居た。私のやうな淺[illegible]の土地に居るものは晴衣の[illegible]を用ゐ[illegible]ことはそれは滅多にないことなので幾年でも仕立[illegible]た儘に保存されて居るのである。乳の痕が微かに見えて居た。私はおいよさんに見せ[illegible]目を瞬るのを見た。かういふ些細な事實がおいよさんと私との間を近くすることを進めた。それからといふものはお互に幾分遠慮がとれて來たのであつた。おいよさんが來てはかり[illegible]はまだ單衣で[illegible]。風呂敷包を一つ持つて[illegible]くの叔母の所へ客に行くといつて出て[illegible]來たのだからといつて、おいよさんは紺と白の洗ひ晒しの中形の單衣と二枚より外持つては居なかつた。[illegible]肩に[illegible]挂にならない[illegible]おいよさんは[illegible]人目をひくのであつた。紺[illegible]不似合な[illegible]別人のやうになるのであつた。私も涼しくなつたのでおいよさんは其紺絣[illegible]着るやうに成つた。私はそれを[illegible]不滿足に見て居た。たかこれまでも私に[illegible]一つの[illegible]つた。一人の女を始終見て居るとする[illegible]えて[illegible]なくなつてくれないと[illegible]ながら見ては又見るのである[illegible]つても[illegible]目に[illegible]度毎[illegible]心挂けるのであつた。私は[illegible]れたことに[illegible]めたといへばいへるのであるが、おいよさんの[illegible]

絣の姿もだん／＼見づらくないやうになつた。おいよさんは私の冬着の支度に骨折つて居た。或日私が秋草の植込に水を注いで居た。私のやうな邊鄙な土地で秋草を作らうといふものは私の外には一人もないのである。私はそれを自慢の一つにして居たのである。

「あなた一寸お出でなすつて下さい」

　おいよさんは呼びに來た。座敷へ行つて見ると

「これを通し一見て―」

縫ひ上げた綿入を二つ襲ねておいよさんは私の後へ廻つた。

「どうするんだい」

　どうするか私に分らないことはないのだが、默つて立つて居るのが極りが惡いやうな氣がしたのでかういつたのである。私はどこまでも初心であつた。

「こらまあどうでもようござんすよ」

　おいよさんは構はずに着物を私に引つ掛けさせて、後で膝をついて裾を合せて引つ張つて見たり、前へ立つて袖を横に引つ張つて見たりして白いしつけ絲をとつて口に入れては齒で嚙みながら

「もう何處へ行つてもようござんすよ」

　おいよゝんは着物をとりながら私を見て嫣然とした。おいよさんは遠慮がとれると共に私に對してはきぱ／＼して來た。私の家庭に於ておいよさんは便利な人になつた。特に私には日常のすべてに於て女といふものゝ便利なことをつくづくと感ぜしめた。

　秋も冷かになつた。教師はよく來たがおいよさんの爲めに袷の用意をして來ない。母はどうで屆けてよこす見込はないのだらうと唐棧の袷地を買つてやつた。夜ランプの下でおいよさんが袷地をいぢりながら母へ義理を述べた時には私は心竊にうれしかつた。次の日においよさんは反物の尺を測つて一寸考へて復た測つてそれを裁たうとして居ると、教師からだといつて近所から行く生徒が手紙を持つて來た。おいよさんは反物を擴げた儘すぐに封を切つた。暫く物案じをして居たがすぐに其所を始末して母へ暇を告げて出て行つた。おいよさんは其日は歸らなかつた。次の日も歸らない。おいよさんの針仕事は依然としておいよさんが束ねた儘そつくりと母の側に置かれてある。私の心は何んだか形容し難い寂しさを感じた。此の時限り私はおいよさんに別れたのではない。それにも拘らず私はおいよさんに對して前後に此の時程果敢ない思をしたことがない。どうしても心が騷いでならないのであつた。おいよさんは三日目の夕方私が跣足で秋草へ水をやつて居る所へ風呂敷包をかゝへてもどつて來た。

「まだ極りがつかないもんですから人が來たんだつていひました。私はいつだつておなじなんですから駄目ですよ」

　かういつて

「それでもね、私が置いて來た着物は二枚ばかりとどきました。私がこゝへ來て居ることは來た人も知らないんですからね。どこへ行つて居るんだつて頻りに聞いた相ですよ」

　おいよさんは淋しく笑つた。どうもはき／＼として居ない。おいよさんは又何かいはうとしたが傭人が畑から歸つて來たので私のもとを去つた。私はおいよさんを見てひどく不安に感じた。それでも其夜ランプの下で自分の袷地を裁つて威勢よく箆をつけて居るのを見て少し心がゆつたりしたやうであつた。おいよさんの家からはそれつきり何ともいつて來なかつた。おいよさんは依然として私に便利な人であつた。私は外出する度竊においよさんの用を達してやつた。私は自分から何か欲しいものはないかと聞いてやるのであつた。赤い綿フラン

ネんだゝメリンスの半襟だの私はおいよさんの爲めに買つて來た。おいよさんのはき／＼した態度は初心な私の眼を遁うたのである。

或晩私は便所へ立つた。便所の戸を開けようとした時私はおいよさんの部屋の障子が一杯に明るくなつて居るのに氣がついた。便所に近い六疊の間がおいよさんの部屋にあてられてあつたのである。夜はもう何時位であつたか知れなかつたが秋雨が止まず降り注いで居る。廂を掩うて居る桐の木がもう落葉して居るので其落葉へ雨はばしや／＼と打ちつける。廂へもじとじとと打ちつける。さうかと思ふと草鞋で歩いて來る足音のやうにしと／＼と遠い響が聞えて來る。蟋蟀が滅入るやうに鳴いて居る。さういふ錯雜した響の中に夜はしんとして更けつゝあるのを感ぜしめた。便所を出る時にもおいよさんの部屋は障子が一杯に明るくなつた儘である。暫く立つて見たが障子の内は唯靜かである。おいよさんはどうして居るのであらうか、或はうつかり眠つて畢つたのではなからうか、眠つたとすると枕元へ引きつけたランプは危險である。それで私は障子に近づいて外からがた／＼と輕く障子を動かして見た。起きて居るならば何とか驚いて聲を立てる筈であるのに一向返辭もない。私は流石に心が咎めながら到頭障子を開けて見た。おいよさんは熟睡して居る。こちらを向いてさうして蒲團の外へ延した右の手から雜誌が披いた儘こけて居た。大縞の浴衣を着たしどけない姿で肩が掛蒲團から脱け出して居た。枕元の二分心のランプは心が一杯に出て油煙が微かにホヤの上に立つて居る。さうして室内はほのかに臭くなつて居た。おいよさんは深夜に障子を開けて私がはひつて來たとは知らない。さうして輕く體に波を打たせながら息づく外に微動もしない。ランプの光はおいよさんの無心な白い顏を見守つて居る。私は立つたまゝ堅くなつたやうになつて見おろした。おいよさんの口もとの筋がどうしたのか少しぴく／＼と動いた。私はつとしやがんでランプの心を引つ込めた。裾がおいよさんの手に觸れた。おいよさんはぎよつと目を開いた。さうして驚いた機會にすつと一時に息を吸ひ込んで、まあと一聲出して打消すやうに手を擧げた。おいよさんは手を引きながらランプのホヤを倒した。おいよさんは慌てて身を起しかけた。其時はもう私が火を吹つ消したのでおいよさんの姿は唯目前に見えなくなつてしまつた。それと同時に生暖い風がふはりと私の肌に感じた。

四

翌朝目が醒めて見ると秋の日が障子の腰にかつと光を投げ掛けて居た。私は暫くもぢ／＼して天井の木理を見つめて居た。以前からどうかすると酷く體がつかりして居て唯ぼうつとして時間を過すのが屢であつた。これは私が病氣の爲であつた。小勢であるだけ私の家はひつそりして居るのであるが今朝はそれが殊更靜に感ぜられた。障子の外では庭で傭人が陸稻を扱きはじめたと見えてぼり／＼と輕爽な音が聞える。又目を眠つて居ると襖がそつと開いたやうである。ふと見るとおいよさんが私の部屋の外へ塵拂と箒とを掛けに來たのである。おいよさんが箒を取りに來た時は私はまだ熟睡して居たらしかつた。襖をそつと締める時おいよさんは冠つて居る手拭の下から私を見て嫣然とした。おいよさんが嫣然とする時には屹度口が小さく窄まつて鼻の處に微かな皺が寄るのであつた。私は身内がだるくなつて居るので、其時はおいよさんを見て厭な心持――厭といふ程でもないが――がした。庭先から聞える慵い稻扱の音を聞きながら又うと／＼して漸く起き

たのは十時近くであつた。毎朝の習慣で私は便所へ立つた。窓の障子を開けて見ると西に聳えた杉の梢と檜が一二尺ばかり間を隔てて廂にくつつからうとして居る。其間から空が見える。霜の降りが強かつたので秋の空は研ぎ出したやうに冴えて見える。杉の木の間から見える空も青く光つて居る。横からも竪からも秋の空が窓を覗いて居るやうである。廂の上に立つた桐の木へ、啄木鳥が一羽飛んで來た。丈夫相な爪先で幹にしつかりとつかまりながらぼく/\と嘴で叩いては時々きゝと鳴く。さうして幹をめぐりながら上端へのぼつて行く。私は凝然として見て居た。私は以前病氣で居る間からぼうつとして畢つて居る時は或物に目をつけると專心したやうに何時までも見て居るのが癖であつた。其ぼうつとして見て居ることから他へ移る運動が懶くてたまらぬのであつた。其時もさういふ心持で啄木鳥に見入つたのであつた。威勢のいゝ啄木鳥は赤い腹を出したり黒い背を見せたりしてぼく/\と幹をつゝいて居る。其姿は赤い半股引を穿いて尻をねぢあげて大形な眞白の羽織を引つ掛けたやうである。さう思つて見るとぐつと後へ首を引いては嘴が痛からうと思ふ程ぼく/\と強く叩く其動作がひどく滑稽で私は思はず興味を持つた。私はぼうつとして何かに興味を持つて來ると先から先へと瞑想に耽つて畢ふことが度々であつた。私は足が痺れたので漸く便所を出た。自分の部屋の障子を開けると空はからりとしてすべてが皆きら/\した日光を浴びて居る。傭人は四人で向合になつて陸稻を扱いて居る。各左手に摑んだ陸稻の束をほぐしてはぶり/\と扱いて居る。女が一人其扱いだ藁を小さな束に揃へて居る。小さい蜻蛉が薄い羽を日にきらめかしながらすいすいと飛びめぐつて居る。庭におりて見ると杉の梢にも蜻蛉の羽がきら/\と光つて見える。私は水浴をするために楊枝を使ひながら井戸端へ行つた。其所には井戸端を繞うて葉鷄頭が簇生して居る。赤い葉が日に眩きばかり燃え立つて居る。白い手拭を冠つたおいよさんが葉鷄頭の蔭に洗濯をして居る。盥の中には私の着物がつけてあつた。朝から暖かなのでおいよさんは例の浴衣を着て居た。私が井戸端へ立つと

―汲みませう―

おいよさんは急いで水を一杯汲んでくれた。私はおいよさんのする儘に任せた。釣瓶の水がぼんやり立つて居た私の下駄へざぶりとかゝつた。

―まあ濟みません、私が後によく洗つて干して置いてあげますから―

さういつておいよさんは手拭の下から私をちらりと見た。只水を汲まして貰つた丈で何でもないことである。然し私は其時おいよさんに對してどういふものか心が臆したのであつた。おいよさんも言葉遣がいくらか違つて居た。私はふと傭人を見た。二人がこちらを向いて居る。二人はこちらに後を見せて居る。其一人は煙管を手にし、今一人がにこ/\しながら私の方を見た。私にはそれが嘲弄されるやうに感じられた。群つた葉鷄頭で私の方からはすかして見えるけれどずつと離れた庭の中央からは決して私等二人は猶更見える筈はないのである。彼等同士が喋舌つては笑つて居たに過ぎないのであつた。それでも私は其時厭な心持がしたのであつた。水浴をしてから幾らか爽快になつた。私は跣足になつて雨に倒れかゝつた秋草に杖を立てたりした。門の側のカナメ垣の外へいつも來る商人が天秤をおろして近所の百姓と噺をして居るのが私の耳にはひつた。見ると百姓は商人の荷から生薑の束を引き出してまけろといふて居る。不作だから不廉いことは

ないと商人はいつて居る。時節が後れたから[illegible]が堅くても不味いといふやうなことを声高にいつて百姓は生薑を買つた。

「生薑位はおめえ只ぶん投げて行くことにしてもいゝんだ」

百姓がいふと

「商人がおめえそれで立ちきれるかい」

と天秤を杖につきながら商人がいつた。

「おめえそれでも今の嚊持つ時にやどうしたつけ」

「又そんなこと、つまんねえことをいふなよ」

「それだつておめえが通つて來る時にや俺はなんぼおめえがことをかばつてやつたか知れめえ。又おめえも能く追出され〳〵してな」

百姓は暫く笑つたが間を措いて

「あんな時からぢやおめえも年とつたな」

「年もとらな」

二人は戯談半分にこんなことをいつて笑つて居る。かういふ野卑な對話でも私は平生ならば幾分の興味を持つたであらうが其日はいつまでも聞いて居ることが出來なかつた。其日は兎に角私に不快の感を與へることの多い日であつた。おいよさんは洗濯物を葉鷄頭に添うて干した。私は白い衣物を葉鷄頭の側に干すのが好きであつた。おいよさんは私の下駄を洗つて軒下へ干してそれから例の如く針仕事に掛つた。おいよさんの態度は私にはちつとも變つて居るやうに見えなかつた。私も二三日して體の工合から心持がせい〳〵として來た。さうしてそれから私等二人は屢〻人目を忍ぶやうになつたのである。數月は經過した。其間おいよさんは私にさへ能くかう平氣で居られると思はれる程素振には出さなかつた。後になつて見ると私も隨分匿情といふことではおいよさんに劣らなかつたと思はれる。世間に隱さうといふ念慮が私の心に强かつたからである。私は其間どういふものかおいよさんに對して熱烈な情を燃やしては居なかつた。唯おいよさんを遠ざけることは私に悲しかつた。長い月日の間には各自の缺點が分つて來る。心の遠慮のとれた間柄になつてからはおいよさんに我儘な所もあつた。窮迫した家庭に成長したからだと思はれるだけ野卑な處もあつた。私はすべてを心に承知して居て厭にもならずに關係を續けて居たのである。一種の惰性であつたといはねばならぬ。

五

おいよさんの父なる教師の身には必然の運命が來た。其職を罷められたのである。憐むべき教師は自分の妻の郷里に身を落ち付けるといふことになつた。私の母へはくれ〳〵もおいよさんを賴んだ。おいよさんの一身は私の家でどんなにしても處理してくれるやうにといふのであつた。其後もおいよさんは別に變つたこともなく私の家に在つた。時節はだん〳〵寂しくなつた。葉鷄頭も其他の秋草も皆ぐつたりとして了つた。落葉が雜木の梢から[illegible]どこの庭にも散らばつた。干葉や籾の莚にも夕日の射す頃には小さな欅の葉が輕く轉がつて居る。落葉が大抵掃き蒐められて秋草は刈り去られてからしくなつた庭の蒼い空のもとにからりとして來た。世間は改まつた。おいよさんは自分の家から持つて來た古い綿入羽織を引つ掛けて居た。私の母から與へられた[illegible]の袷の上に其古ぼけた羽織を着るのは不恰好で又憐げであつた。私の母はまた羽織の材料を見つけてやつた。それが仕立て上げられた時おいよさんの容子がきりゝとなつた。櫟林には到る處に[illegible]が出された。此は落葉を猥りに搔るなといふ標である。[illegible]が其[illegible]い落葉を輕く踏んで[illegible]は[illegible]行き[illegible]つた。おいよさんと私との間には人知れず苦惱が起つた。おいよさんの身體の工合が變に成つた

といふことである。半信半疑のうちに一ケ月待つて見た。どうしても懐胎したらしいとおいよさんも心配な顔をして私に語つた。私も自分の身の破綻であるやうに思はれて窃に其處分を考究した。おいよさんは時々朝から臥せることがある。私は心配になるからだらうと思つてそつと枕元に行つて見るとおいよさんは其一塊肉のために私に訴へるのであつた。さうしてかうなるのもあなたが惡いのだと私を責めることもあつた。けれどもおいよさんの臥せつて居ることは體の加減が惡いからだらうと人は思つて居るのだからそんな疑を抱かれることはないと私は思つて居た。私はそれとはなしにそこらで懐胎した女の思ひ切つた身の處分法を聞いた。其度毎に私はおいよさんに告げて其おつと目を据ゑて身にしみたやうをするのを見た。一ケ月はまた經過した。けれどもおいよさんの體は常態には復さなかつた。其内に田舎の正月が近づいて來た。おいよさんは正月になつたら母の郷里へ行つて來たいといつた。おいよさんは或日人の居らぬ處で私に錢をくれといつた。それは小遣としては少し多過ぎた請求であつたが、衣服一枚拵へたいのだといふのを聞いてそれにしては餘りに少ないのではないかと思つた。私はせがまれては快くはなかつた。然し物蔭に立つてぢつとおいよさんの目を見る時は變な心持になつて畢ふので私は此の請求もすぐに容れたのであつた。おいよさんは近いといつても河を渡つて行かなければならぬ或町へ反物を買ひに行つた。私はおいよさんが行くことに就いて苦心した。さうして口實を授けた。私にもずるい考が起るのであつた。おいよさんの妹で看護婦に成つて居るのがあつてそれが遠くへ行つて居る。其妹から數日前に封狀が届いて居る。それでは其中に封じてあつた爲替を取りに行くのだと私の母へはいつて行けとから教へたのであつた。おいよさんの反物は柄は絣であつたが翳せば見え透くやうな安物であつた。おいよさんは仕立を近所の少しは針仕事の出來る女へ頼んだ。これが二人の間を疑はしめる材料を提供したのであつた。おいよさんには冬衣のさつぱりしたものは一枚もなかつた。有繋によごれた着物で郷里へ行くことを羞ぢたのであつた。おいよさんは正月の上旬に霜の上解けないうちといつて未明に人力車で出て行つた。おいよさんが行つてからも私はひどく不安の念に驅られて居た。おいよさんは出て行く前に私の腹は私がどうにかします、私も知つて居ますからといふのであつた。どうする積かと私は聞いて見たら、知合の女に密に處分をしたものがある。其家へ客に行つてどうとか思案を借りて見る積だといつた。私は惡いことだとは思つたが、どうにかそれが人知れずに葬つて畢へるならばと有繋に思はぬ譯には行かなかつた。世間へどうしても知らしたくないといふ念慮が先に立つて私はそれを抑制する言葉が私の喉から出なかつたのである。おいよさんが行つてから心は少しも安まらなかつたが、此の前おいよさんが其家へ行つた時程に私に寂しい心を抱かせなかつた。

おいよさんが行つて幾日かたつてから私が茶の間の火鉢の側で新聞紙を見て居ると母は竊に私へいつた。あたりには人は居なかつた。母はかういつた。それは能く聞いて見ねば分らぬことではあるが、おいよさんの針仕事をした女の竊に耳打する所によると二人の間に疑はれて居る。外にどうといふことはないが近頃おいよさんが其の女に逢ふと懐胎した時はどうしたらいゝだらうといふやうなことをよく聞くのである。一度や二度のことではないのでそれがどうも變である。尤も懐胎したとすれば誰のつやが善過ぎるからしかといはれぬが、大事をとる

ならばおいよさんは再び戻さぬ方がよいかも知れぬといつたといふのであつた。母はそれで其女に二人の間は人目につくやうなことでもあつたかと聞いて見ると何にも別にないといつた。それでは決して人には語つてくれるな、私もさういふことがあらうとは思はずに居たのだから能く聞いて見るからと其女の口止をしたのであつたといつた。私は其時唯無言で家蔭の端柱がほろりと崩れるのを見て居た。無言の自白は母の心を和げた。さうなれば私にも思案はあると母はいつた。私の隱れた惡才が窮策を運らした。欺きおほせるだけ人を欺かうとしたのである。一つにはおいよさんがそれ程欲しい女ではないが此儘別れて畢ふのも惜しいし、身體の容子も聞いて見たいしそこには色々あつたのである。それで私は母にかういつた。竊においよさんの家へ行つて身體の容子がどうであるか見て貰ひたい。さうして別に變つたことがなかつたら、まだ針仕事をして貰ひたいからどうとも其處はいひやらがあらうから再び私の家へ來るやうにいつて見て貰ひたい。連れて來て二三ケ月も置いたならば近所の人の疑も薄らぐに相違ない。耳打した女へは或はさうかとも思ふから又連れて來て二人の容子も能く見たいと思ふのだからとかういつて置けば其内に慥にさうと疑を容れることも出來まいからと私は母へ迫つた。私の母は怜悧な女であつたけれども私のこんな淺猿しい事を聽いた。私はそれでも決しておいよさんと關係はせぬといふ事を母へ誓つた。母は竊においよさんの家へ行つておいよさんを喚び寄せる事にした。おいよさんは風邪を引いたといつて臥せつて居たけれども別に變つた事はなかつたと母はいつた。私はそれを聞いて胸を痛めた。さうして更に安心した。おいよさんと私との間はまた以前に戻つてしまつた。それを私の母は疑はない。母は私にのみは尊い盲目であつた。私は情を通じて居たけれども私の理性の強い抑制は以前よりも冷靜な關係を持續させたのである。私はもとからおいよさんに執着して居なかつた。人目の蔭でおいよさんの目を見る時は私の心は變になるのであつたが私はどこまでも隱匿しようといふ念慮が強く働いて居た。二人は到底別れねばならぬ筈に極つて居るのだから愈別れとなつた時は決して私に思を殘してはならぬといふ事まで數次おいよさんに斷つて置いたのである。さういふ口の下から私は其關係を續けて居たのである。此が凡人　淺猿しさである。

懷胎にも僅の光が射し透すやうになつた。私はおいよさんを返す氣になつた。私の情が冷かであつたから隨つておいよさんにも餘所餘所しいところが出て來た。さうすればまた私の心にはおいよさんに不快な所が見えて來る。我儘に育つたと思ふやうな所も明かに分かるやうになつたのである。母は後の憂のないやうと竊に貯へて置いた手切の金を私に渡した。私の母は何處までも知らぬ分で其金も私の苦心から出たことにした。別れ噺も私から持ち出した。一ケ月たつうちにおいよさんも其積りになつた。私の家へ來てからおいよさんには着物が殖えた。いよ／＼歸ることになると着物を包む風呂敷もない。私は他出した時萌黄の木綿を一反買つて來てやつた。おいよさんは一心にそれを縫つた。大きな包がおいよさんの部屋に置かれた。噺がすつかり極つて畢ふと何となく又心が惹かされた。無理に逐ひやるのが氣の毒のやうにもあつたのである。私はおいよさんの部屋に忍ぶことを抑制し得なかつた。加之私は手切のことでまだ噺があるからと母を欺いて遠慮もなくおいよさんの部屋へ行つた。其頃おいよさんは加減が惡いからといつては部屋に籠つて居た。私の母は有繋に氣が揉めるのだら

うといつた。最終の日が來た。雨の降る日であつた。おいよさんはしをらしく母へ挨拶した。母も丁寧に時儀をした。私は側にそれを見て居た。車の幌を掛けて出たので村の人々には私の村を離れて行くおいよさんの姿は見られなかつた。おいよさんとはそれつ切り逢つたことがない。然しおいよさんの噂はまだ少し殘つて居る。其後おいよさんから手紙が來た。封筒には私の友人の名が書いてある。私は心もとなく封を切つて見た。又懐胎したやうに思はれる。先のは幸にこつそりと始末した。此度はもう引き續き身體が悪いので危險なことを冒すことは出來ぬ。それにしても今一度相談がしたいから、こつちへ來て逢つてくれと媾曳の場所まで書いてあつた。私も困却して了つた。逢つてやらねばなるまいかと思つたが、何だか闇い深い穴へでもはひるやうな氣がして恐怖心が私を躊躇させた。手紙がまた來た。一旦手は切つたけれど、其時はかういふ體になつて居ようとは思はなかつた。それをすげなく拒ふのは無情だといつて散々に怨んだ手紙である。私も思案のしやうがないので母へ打ち明けた。母も非常に心配した。深い歎息をついた。私は母の容子を見るのがつらかつた。母は幾度も手紙へ目を通した。然しまだ考へやうもある。此の手紙には一旦手を切つたと書いてある。此も後の證據に保存して置かねばならぬ。それからあれの母といふのが尋常ではないらしいし、又どんな奴が智慧を貸さぬものでもない。能く容子を探つてからにしなければならぬ。それにしても家に居ない方が却ていゝかも知れぬ。何處かの海岸へでも行つて保養かたがた暫く居て來たがいゝと私の母はいふのであつた。私はそれから常陸の平潟の港へ身を避けた。私はそこで又一人の女を見た。

六

其頃は時候も梅雨期の終に屬して居たので世間が鬱陶しかつた。障子の紙がゆるんで雨がしとしとと降つて居た。轉地した二三日はひどく落付かなかつた。それでも變つた土地の狀況がだん／＼私を紛らせた。平坦な土地のみを見て居た私にはすべてが目を惹いた。海岸は皆一帶の丘阜である。其丘阜を丸鑿で刳りとつたやうな小さな入江が穿たれてある。入江に添うて港の人家が建てられてあるのである。人工を加へた一筋の街道が此港と丘の後の村々との間を僅に繋いで居る。港の町の大部分は其窮屈な海岸から逃げ出したやうに延び出して其街道を挾んで居る。宿は此小さな入江を一目にした三階建であつた。私の案内されたのは二階の中の間である。座敷の障子を開けておけば雨の入江が勾欄から見える。然し小さな入江は窮屈に見えた。入江を抱へた丘の一端は拳のやうに一段高い。其處に立つて居る一簇の老松の梢には夕方になれば鴉が四方から集つて鬱陶しい雨に打たれながら騷ぐ。梢に棲みつくまでは飛び交し飛び交し騷いで居る。二三日の間は此の鴉の騷ぎが私の心を引き立てた位であつた。一日空の模樣がよくなり掛けたので私はすぐに散歩に出た。入江の岸を傳うて臭い漁師町を越して丘の間を小徑の導くまゝに行つた。小徑は貝殼の白く散らばつた畑の間の窪みである。ぼつ／＼と穴が明いたやうに空には青い所が見えて來た。丘の間からところ／＼行手に青い煙の立つて居るのが見える。其煙は空へ明いた穴に吸はれるやうに眞直に立ち騰つて行く。空の穴は心持よくずん／＼と擴がつて行く。煙がすぐ近くに見えて小徑がめぐつたと思つたら丘の上へ出た。畑がひろ／＼と見渡される。目の前には穢い着物を着た女が其火を燃やして居るのを見た。それは麥の束であつた。穗先へ火のついた

麥束を片手に翳して燃やしながら、片手に別の束をとつて其燃やして居る穂先から火を移す。めろ〱と燃えはじめたかと思ふと焦げた麥の穂がぼろ〱と落ちる。短くなつた燃えさしの麥束はぽつと傍へ投げ棄てる。そこにも煙はうすく立つ。女は燃やしては棄て〱非常に忙しげに手を動かして居る。私はふと燃えさしの麥束の散らばつたあたりに地にひつついて白い花の簇がつて居るのを見た。それは野茨の花であつた。軟かな長い枝がつやゝかな緑の葉をつけてすつと偃ひ出して居る。燃えさしの火が白い花を焦して居た。高低のある丘にはそこにもここにも麥を燒く煙が穏かな空氣に浮んで行く。畑の女はたま〱の晴を見定めて麥の仕納をして畢はうといふのらしい。私はかういふ農事の仕方を此時はじめて見た。私は珍らしさに暫く立つて見て居た。空は一杯に晴れた。青葉に日は暑く照つて來た。私は爽快な丘の上を歩いた。海が丘の先に見え出した。海は一足毎に前に擴がつて來る。蟠屈した松が斷崖に臨んで居る。私は好奇心から松の枝を攀ぢて見た。瞰おろすと波は唯白い泡である。岸に立つて見る波は大きいのも小さいのも必ず立ちあがつて來る。瞰おろす波は唯白い泡がざわ〱と動いて四方へ擴がるのみである。私は暫く其綺麗な白い泡の變化を見て居た。遠くを見ると褐色の斷崖が連つて沖に相對して居る。打ちつける波が描く白い一線が水陸を畫して居る。そこを去る時私はふと枝の間から近くに船の泛いてるのを見た。麥を燒いてる女に聞いて見たらそれは松魚船だといつた。こんな所で松魚が釣れるのかといつたら、そこでは松魚を釣る餌にする鰯を網ですくつて居るのだといつた。此から松魚が運ばれるのだと私は心に勇んだ。濱はこれまで不漁であつた。私は此の日はすべてが快かつた。さうしてもう歸らうと思つて見ると一段低い畑に婀娜な女が立つて居た。此の女が沖を遠く見て居たのである。私が小徑へおりた時女も畑からおりて來た。私は此の女が私の隣座敷の客であつたことに氣がついた。さうして女がどうしてこんな所へ來たものかと不審に思つた。だが私が窮屈な宿の座敷を出て散歩したことの愉快であつたことを思つた時その不審は晴れた。女も退屈まぎれに出たのだらうと思つた。女は私に近よつた時急に兩手の袖を重ねて胸を掩うた。さうして餘所を向いた。私は其日から隣座敷に心をおいて見るやうになつた。私の座敷は前にもいつたやうに二階の中の間で女の座敷は突き止りであつた。襖一枚が二つの座敷を隔てゝ居る。私は宿へついた時から隣座敷に女の客があることを知つて居た。只婀娜な女だと思つて居た。丘の畑で逢つてから急に私の注意が促されたのである。

其次の日から空がまた六かしくなつた。私は濕つぽい室にばかり籠つて居た。身體がだるくなつて半日位うと〱と横になつて居ることもあつた。隣座敷の女も滅多に障子の外へさへ出ない。それでふつつりと音沙汰もない。大方此も臥せつて居るのだらうと思はれるが私には女の座敷を覗く機會がない。一つの廊下が兩方の座敷を境してどちらの障子も其柱に建てつけてある。私は其柱から先へ理由もないのに一歩でも越えることは出來ない。越えて行つて見たとしても隣の座敷はひつそりと障子が閉ててあるのであつた。それでも女が二階をおりて用達しに行くのには私の座敷の前を通らねばならぬ。其の時女は乾度袖で胸を掩うて居る。隣の障子がそつと開いた時いつでも私は目を欹てる。どうかすると女は障子を開けた儘私の座敷の前を通らぬことがある。私が障子の外へ出て見ると勾欄に兩手をついて入江を見て居たのが障子をはたと締めて引つ込んで畢ふ。

其時でも乾度着物で胸を掩ふのである。散歩から歸つて見ると女は帳場の脇で新聞紙を見て居ることゝある。女は隣座敷に唯一人である。女一人で居るといふことがどうも私の腑に落ちぬ所であつた。さうかといつて女は決して賤らしい點はなくしをらしい容子であつた。或日隣の座敷では何かさら／＼と卷紙でも卷いて居るやうな音が微かに聞えた。やがてぱちりと蓋を擱く音がしてそれからかたりと硯箱の蓋を落す音がした。ひつそりとした隣の座敷からは茶碗へ湯を汲む音さへはつきりと私の耳に響くのであつた。私の懐疑心は隣の座敷に對して神經を鋭敏にして居たのであつた。やがて女は一封の手紙らしいものを持つて、着物で胸を掩ひながら私の座敷の前を通つて二階をおりて行つた。二三日たつてから私は少しの雨間を見て散歩に出た。復た此の間の畑へ行つて見た。青い煙も立つて居らなければ、百姓の女も見えぬ。燃して棄てた麥束は此の間の儘ぐつしりと濕つて居る。僅かの間に白い野菜の花もなくなつた。懶げな海と相接して雲がどんよりと低く垂れて居る。私は寂しさに堪へなかつた。宿へもどつたのは正午少し過ぎであつた。隣の座敷には草履が二足脱いであつてひそ／＼と噺をして居るのが聞えた。私が自分の座敷の障子を開けてはひつた時噺は少し途切れたやうであつた。軈て又以前よりもひそ／＼と語りはじめたやうである。女中が私へ晝餐を持つて來た時、隣の障子が開いて女は一人のお婆さんと階子段をおりて行つた。お婆さんは私の座敷をちらりと見て會釋して行つた。田舍の人としては品のいゝ怜悧相な人であつた。髮は油が乘つて居たが半分程は白いやうであつた。私はあのお婆さんは今日はじめて來た客かと女中に聞いて見た。女中はもう二三度來たことがあるので、隣の女もあのお婆さんが連れて來たのである。女はもう三週間ばかり隣の座敷に居るのである。さうしてお婆さんが來るといつでも此所の主人とお婆さんとで頻りに相談をして居るのだといつた。まだ海水浴といふ時節でもないから客も少ない此の港の宿に保養であるとしてもあの女は不思議である。私は箸をとりながら尚女中に聞いて見た。唯手持無沙汰にして聞くよりもかうして膳に向いて聞くのは私には張合があつた。

「私もよくは知りませんがね、あの方はお氣の毒なんですと」

女中は丸盆を膝に立ててからいつた。

「お前知つてるかい、それを」

私は聞かないわけには行かなかつた。

「本當はね、私知らないんですがね、さういふことといつてますんですよ」

「誰がいつてるんだい」

「此所の旦那さんが他人でないんですつて、旦那さんがね、あのお婆さんと噺しちや困つたなんていつてますよ、それだけですよ」

私は土瓶から注いだ茶を一口に飲み干した。

「あの方あれで二十四ですつて、別嬪でさあね」

女中は盆を立てた儘いつた。其噺は要領を得なかつたが此の宿が女と親戚の間柄であるといふのを聞いて私は女が一人で身を託すことの出來る理由を知つた。隣の座敷へは其夜お婆さんが泊つた。其次の日もお婆さんは歸らなかつた。隣の座敷ではよくひそ／＼と噺をした。私はお婆さんが帳場で主人と噺をして居るのも見た。其時お婆さんも主人も唯煙草の煙を吹いて居るものゝ如くであつた。私は鬱陶しい宿の退屈に堪へないので思ひ切つて雨の中をそこからでは遠くもないといふ炭坑を見に出掛けた。二日ばかりで雨は晴れた。私は山の途中から光る海を見た。山を出て宿へついたのは日

が後の丘に傾きつゝある時であつた。小さな入江には松魚船が五六艘泛んで居る。船は皆帆を張つたやうに建てた檣へ網を干してある。入江を抱へた岡の松にはもう鴉が塒を求めて騒いで居る。岡の出鼻から突然船が現れた。裸の漁師が掛聲をしながら櫓を押して居る。船は船と船との間を矢の如く入江にはひる。櫓の手が止ると船は惰力を以てずうつと汀まで進む。汀には港の人が集つて居る。濱の子供が幾十人となく人々に交つて居る。私は暑いので荷物にして來た着物を宿の店先へ投げて濱へ駈けつけた。やがて船からは松魚をぽん／＼と淺い水に投げる。船からおりた漁師が裸のまゝ松魚の尻尾を提んで砂の上に運ぶ。幾十人の濱の子は水にひたりながら先を爭うて松魚を運ぶ。松魚は十づつ其頭を揃へて砂の上にならべられる。人々が騒々しく其松魚を圍んで立ち塞がる。幾十人の子供は裸のまゝ一齊に聲を立てて叫びはじめた。

「くなんしよ／＼」と叫ぶ。後には只「なんしよなんしよ」と聲を限りに叫ぶ。手傳つた駄賃に松魚を呉れと叫ぶのである。立ち塞つた人々は其叫聲には頓着なしに松魚の處分をしてずんずん外へ運んで行く。やがて一尾の松魚が子供の一人の手へ渡された。子供は直ちに走つて行つてしまつた。私が宿へもどる時彼等は松魚を錢に換へたと見えて各一文二文と分配しつゝある所であつた。數日前とは異なつて港は何となく活々として來た。私は再び宿へもどつて來た時、宿の前には何かの肉であらうと思はれる纎維のやうな黄色な然かも大きなもの浮んで居るのを見た。半ば岸へ揚げられて波にゆられて居る。それが酷い臭氣を放つて居た。

「どちらの方へ、はあ炭坑へお出でになりましたか」

主人は私へ挨拶する。私は帳場の前へ一寸坐る。此間のお婆さんはまだ歸らなかつたと見えて帳場の側に坐つて居た。お婆さんは自分の前の煙草盆を私の方へ移して輕く會釋をした。

「大分濱らしくなつて來ましたね」

私も主人へ挨拶した。

「えゝこの鹽梅ぢや此からよからうと思ふんですがね、これで少し續いてくれなくちや困りますからね」

「馬鹿に臭いですな」

と私がいつた時主人は机の上に披いてあつた帳簿をはたと閉ぢて

「今も其噺をした所ですが、此は鯨の肉ですがね、どうも日數がたつて居ますからすつかり腐つて居るんです。そこらに浮いて居たのを引つ張つて來たんですが肥料ですな」

主人はかういつて更に

「どうぞまあ、お二階で御ゆつくり」

といつた。又た威勢のいゝ掛聲がして松魚船がはひつて來た。私はつと店先へ立つて松魚の人だかりを見た。

「此の臭が厭だつていふんだからね」

お婆さんが主人に向つていつてるのを聞いた。

隣座敷はひつそりとして居る。女中が茶を持つて來たので、私は默つて隣の座敷を指して肘を頭へあてて女は寝て居るかと聞いた。

「しよつちうなんですよ、それに今日はね、此の臭が厭だつてね、吐いたんですよ。本當に此の臭は厭ですわね」

女中はこつそりとかういつた。私はふと女が懐胎して居るんぢやないかと思つた。さう思ふと酷く人に身を避けて居るやうなのが思ひ合される。

「これぢやないか」

と私は手で腹を描いて女中に聞いた。女中は冷かに微笑しながら

「そんなことといふと旦那に叱られますがね、本當にをかしんですよ、それだがまだ見た處ぢや分りませんわね」

私へすりよつて小聲でいつた。

お婆さんが梯子段を昇つて來たので女中は慌てて行つて畢つた。

「只今はどうも」

とお婆さんは私に挨拶した。隣の座敷ではお爺さんの低い聲が聞えた。

「どうだね、お前まだいけないかい。それぢやあつちの都合もあるから私は行くからね……」

あとの方は能く聞えなかつた。更に低く女の聲がしたやうであつたがそれはちつとも分らなかつた。やがてお婆さんは小さな包を持つて出た。

「またお目にかゝります」

とお婆さんは私に挨拶して行つた。私は障子を開けて入江を見て居るとやがておばさんの車が威勢よくから〳〵と走つて行つた。

其夜私は目が冴えてまじ〳〵と雜念に驅られたのであつた。隣座敷の女が懷胎して居ると氣がついた時私はおいよさんに對する心配が募つて來た。手紙にあるのが本當であればおいよさんの身體にはもう變化が起りかける時期である。おいよさんも隣座敷の女のやうに陰氣にならねばならぬであらう。平生から虛弱な身體ではましてさうなければなるまい。おいよさんは正月に行つた時も懷胎して居た。さうして人知れず恐ろしい罪を犯して身輕になつた。ほつと息をつく間もなく又懷胎して畢つたのである。私等はよく〳〵運も惡いのであつた。おいよさんはもう此度は身體が恐ろしくてそんなことは出來ないというて獨で苦しんで居るのである。隣座敷の女はどんな事情が纏綿して居るであらうか。おいよさんのやうな境遇に在るのではなからうかと私には思はれてならぬ。さうしておいよさんのしたやうな罪を犯す念慮もなく又さういふ方法も知らず唯沈んで居るのであらう。それを思ふと私は窃に慚ぢ入らねばならぬ。然しおいよさんの心持になつて見ると私は一概においよさんを壓しに畢ふ氣にはなれぬ。おいよさんは夫を嫌つて逃げて來たのである。それが一家の事情から今では其夫の村に近く住まねばならなくなつた。懷胎してはもう私の家には居られないのである。そこはどういふことにしても體面上私の家ではおいよさんを置く譯に行かないからである。さうかといつておいよさんは恥を曝して嫌つた夫の近くに居ることが出來ようか。さうして思案の末に嘗て自分が知合であつたといふ女を訪ねる氣になつたのである。おいよさんはそれつ切り私の家に來なかつたならばもう心配を招くことはなかつたのである。然し私も喚んで見たかつたし、おいよさんも來ることが自由でなかつたばかりに更に又苦勞の種が播かれたのである。おいよさんは私の冷かな情に弄ばれたのである。私は到底卑劣である。私の母は能く穿鑿して見ねば容易な判斷は下せないといつたが私はどうしてもおいよさんを信じて私も亦十分に苦しんでやらなければおいよさんに濟まぬ。私はいつそおいよさんが逢ひたいといつた場所で逢つてやればよかつたとかういふ懺悔に私は此の夜いつになくおいよさんに同情が湧いた。私は港へ來てからもおいよさんとの交渉がどうなつたか思案しない日はなかつた。私の鬱して居た心は餘計に雨を厭うたのであつた。私はおいよさんの身の始末に思ひ及ぶと隣座敷の女に對してどういふものか微かな恐怖心を抱くやうになつた。

七

次の朝私は疲れたやうになつて起きられなか

つた。漸く眼が醒めた頃女は障子の外を通るやうであつたがそれからはひつそりとして居るか居ないか分らぬやうであつた。私が起きた時女中は隣の座敷へ來て女の容子を聞いて居る樣であつた。軈て女中は階子段から番頭を喚ぶと番頭は小綺麗な蒲團を抱へて上つて來た。隣の座敷では番頭と女中とが其蒲團を敷き換へて居る樣であつた。私が障子の外へ出て見た時女は座敷を出て勾欄に近く入江を見て立つて居た。寢くたれた浴衣に肉色の扱帶をしどけなく垂れて居る。髮もさらりと耳のあたりへこけていつもより顏が蒼味を帶びて見えた。私を見て慌てて座敷へもどつて障子の蔭へあちら向に立つた。しどけない姿が少し障子の外へ出て見えて居た。番頭はお世辭をいうて居る。

「昨日はあの臭ひで大分お困りでござんしたらう。醜いものでござんすからね。それでも夜のうちに片付けて畢ひましたからもう臭いやうなことはありません。今日は海も風がようござんすから誠にせい〳〵致して居ります。此分では後に又松魚船が參ります」

女はそれに對して何とかいうて居るがそれが極めて低い聲である。私は耳を峙てて聞くのであるが、いつでも女のいふことが能く分つたことはない。丁度私は磁石に吸はれたやうに隔ての襖へ耳をつけ聞いても聞きとれぬ程女は靜にものいふのである。私はいつでもじれつたい心持になるのであつた。番頭は威勢よくものをいふ。蔭で聞いて居ても女の氣を引き立ててやらうといふのらしかつた。

「先頃こゝへ鯨があがりましてね。それが鯱に攻められたんですがね、此時は大騷ぎでした」

女中は私の座敷の前で柱へつかまりながら勾欄へ腰を掛けた。

「港の船は殘らず出拂ひです。この沖で見つけたんですから私も乘つて行つて見ました、が其時は鯨はまだ死にきりませんでした。鯨といふ奴はあれでみじめなもので何も防ぎ道具といふ物がないんですから、鯱に攻められた日にやどうすることも出來ないんですね。唯まあ逃げる丈なんですね。鯱の方は何百匹だか分りやしません。斯う背中に角のやうな鰭があるんですが、そいつを水の上に出して一杯に鯨を取卷いて居るんです。あれを見ちや鯱もなか〳〵大きなもんです。鯱鉾とは丸つきり違ひまさあね。其うちに潛水器をかぶつてもぐつて見た奴があるんですが、鯱はみんな鯨の頭の方へばかり集つて居て鯨の肉を食ひ取るんださうです。それで尻尾の方へは決して行かないんですからね。尻尾で一つ彈かれたら何でもまた堪りませんから、鯱もそれは知つてるんですね。そこは漁師ですからね、[illegible]鯨へ綱を掛けて、そいつを船へ繋いで曳いて來たんです。鯱も人間には構はなかつたさうです。もう此の港の口へ近づいて來たとなつたらそれでも鯱はずつと沖へ引つ返して行きました。さうかと思つて居るとその中の一番大きなのが二三匹角を立てて戻つて來ましてね、殘念だといふんでせう、鯨を一食ひ食ひ取つて行きました。これにはみんな驚きましたね。何しろ鯨といふ奴は大きいものですから、港へはひらないので其まゝ置いたのですが、それがあなた明日の朝見ると、夜鯱が來たと見えて鯨の肉がしたゝか喰られて居るんです。一日に百五六十貫づつも食ひ取るんですからね。さうかといつてそこらに其肉が浮いてるんですから食つて畢ふ譯でもないんです。一體鯱といふのは酷いもんですね。そこら一杯水は赤くなりましてね。その時の[illegible]目に掛けたいやうでしたな」

障子の外へ膝をついて[illegible]つた。私も閾の所までずり出して其[illegible]聞いた。

「番頭さん見たやうなことをいつてどうしたもんだ」

女中はすぐにからいつた。

「何だい私行つたぢやないか、交ぜつ返しちやいけないよ」

「それだつて番頭さんは船に弱いんだつて歸つた時は眞蒼でしたよ。ようく御覽になつたのはうちの旦那さんでさね。おゝ厭な番頭さんだ」

女中はからいつて笑ひながら逃げて行つた。

「本當に口の惡いおきんどんでしやうがない」

番頭も笑ひながら

「まあどうぞ御ゆつくり」

といつて立つた。

「大分お暑くなつて參りましたな」

私へもお世辭をいうて去つた。それから隣の座敷には別に變つた事もなく女は矢張り滅多に座敷の外へ出ないのであつた。尤も空がすつかり切上つて夏の日が急に暑く照らすやうに成つてからは女の座敷も障子が開けてあつた。私は女の座敷を一目見たいと思つたが遂に一足も境の柱を越した事がない。まして障子が開け放しになつてからは、私は自分の座敷の前の勾欄から海を見て居る時、僅に其座敷を振り返つて見る事にさへ恐怖心を抱いて居た。女は日に幾度も私の座敷の前を通る。女の前には私の座敷は少しの隱す所もない。隣の座敷は私の爲には全く祕密である。私はしをらしい其女が心憎かつた。私は宿の女中にも戲談すらいはなかつた。私は隣の座敷へひどく氣兼があつたからである。私にそれだけの愼んだ態度がなかつたならば女は隣の座敷を移したかも知れぬ。私は其時に人目を避けたがる女を他へ追はなかつた程靜肅な客であつた。私は隣の女が餘りにひつそりとして居るので、却つて私の心が刺戟された。私は夜になつて眼を瞑るといろ〳〵と雜念が起つておいよさんのことを考へ出さずには居られなかつた。私はおいよさんに就いては困つては居たのだけれども此の宿へ來て、ひそりとした隣の座敷が私をそゝるやうになつてから一層恐怖心が增して來た。私の心はひどく弱くなつたのである。

或日の午後であつた。私は麥藁帽子一つで散歩に出た。宿の店先から左へとつて行くと後の丘の續きが崖を造つて立ち塞つて居る。そこには洞門があつて街道が通じてある。洞門をくゞつて行くと平潟の入江に似て更に小さな入江がある。小さな入江のほとりには漁師が小さな村を形つて居る。街道の端には「コマセ」といふ微細な蝦のやうなものが干してある。「コマセ」の臭氣が鼻を衝いた。此の漁村は九面といつてもう國が異つて居る。短い洞門をくゞれば直ぐに磐城の國であるといふことが散歩の度に私の興味を湧かせるのであつた。又洞門が暗い口を向けて居る。そこを出るとからりと海が見渡される。此から私は坂路を勿來の關の跡へ行つたことがある。此の日は街道に從つて海岸を行つた。關田の濱が弓なりに私の前に展開して來た。小さな溝のやうな流が濱豌豆の花が簇がつて咲いて居る砂にしみ込んで末のなくなつて居るあたりから下駄を手にして汀を歩いた。ばしやりと碎ける波の白い泡が幾らか勾配をなして居る砂濱の上をさら〳〵と輕く走りのぼる。土地の人は此所を「ウタレ」というて居る。足が時々冷たい泡にひたる。私がぶら〳〵と歩いて居ると私の後から「ウタレ」を傳うて來るものがある。此は白い泡に從つて行つたり來たりしつゝこちらへ走つて來る。私は立つて待つて居た。竹を弓のやうに曲げて弦を張つたやうに網が張つてある。其異樣な網で泡立つた淺い水をすくつて其水と共に走る。右の手ですくつて左の手の笊のやうなものへ叩く。私は近よつて笊の中を覗いて見たら小さな蝦のやうなものが

跳ねて居た。此も「コマセ」といつて此は人間が喰べるのである。あの船で捕るのが沖「コマセ」といつて糠のやうにこまかなさうしてそれが肥料に成る「コマセ」だといつた。汀に近く五六艘の小舟が平らな波に乘つて白帆を張つて居る。見ると「ウタレ」に近い暗礁の上に一人釣をして居るものがある。波が其巖を越えてざらりと白綵を懸ける。それが落ち切らぬ内に又あとの波が越える。釣する人は波の越える度に片足を揚げると波は其足の下を越える。巖越す波に攫はれぬ樣にかうするのだらうと思ひつゝ絕えず然かもゆつたりと波を避けつゝある其容子を見乍ら暫く立つて居た。波はゆら〳〵とゆるく私の眼の前に膨れて更にそれが低くなつて汀にばしやりと白い泡を碎く。膨れあがつた波の面には更に幾つもの小さな波が動いて一度必ずきらきらと暑い日光を反射する。弓なりの網を持つた人はもう遙かに「ウタレ」を走りつゝ小さくなつて居る。其先には平潟の入江の口から遙かに遠く橫はつて見える小名濱あたり一帶の土地が手を出したやうに突出して居る。私は磯を傳うて尙ほ進んだ。だん〳〵行くと「ウタレ」に近く大きな栅があつた。それが此の空濶な濱にたつた一つぽつりと立つて居る。以前鹽をとつたことがあつたと見えて栅には鹿朶が載せてある。此の濱を往來する人が盜むこともないと見えて鹿朶はそつくりとしてあるやうに見える。雀が栅に聚つて騷がしく囀つて居る。雀がどうしてこんな所に鳴いて居るのであらうか、雀は蛇が乾いた砂を渡らぬことを知つてさうして此の栅に其子を育てようと云ふのであらうか。雀は便利な人の檐端を恐ろしい蛇の爲めに追はれたのである。それにしてもどうして此の栅が棄て去られたのであらうか、恐らく失敗のなごりであらう。私は砂を攫んで投げて見た。雀は一齊にばあと飛んで松原を越えて行つた。此の空濶な濱を控へて後には一帶の松原が濃い綠を染めて居る。日がいつかぼんやりとなつて薄い雲を透して見えながら雨がはら〳〵と落ちて來た。私はざくり〳〵と踏み止りのない砂の上を松原へ駈け込んだ。さうして私は松の根方に一人の女の俯伏して居るのを見て喫驚した。只凝然として見て居たが服裝もしやんとしたどうも見たことがあると思つたら僅に私の隣座敷の客であつた。女はどうしてこんな所に來たものであつたかと狐につまされたやうに思つた。女は大儀相である。私はそれを見棄て去ることが出來なかつた。

「どうかしましたか」

と私は聞いた。暫くたつて女は私の聲を聞いて顏をあげた。いつもより蒼白い女も、喫驚したやうであるがそれでもしをらしく落付いて居つた。

「いゝえ、どうも致しませんが、少し……」

と云ひ淀んで居る。

「それでもどうかなすつたんでせう」

私は下手な聞き樣をしたものである。

「少し氣分が惡うございまして」

女はいつものやうに低い聲である。

「腦貧血でも起したんぢやないか」

私は獨でかう呟いた。

「胸が少しいけませんでしたが、もう落付きました」

「どうです少し背中でも叩きませうか」

「いゝえもう決して」

女はかういつてそつと首を擡げた。どうしたものか女の眼は淚でうるんで居る。女の困憊するので私は唯立つて見て居た。私は女が更にひどく悶えて居ても實際は女の體へ手を觸れることが出來ないで唯はら〳〵して居たかも知れぬ。私は此の女にひどく恐怖心を抱いて居たからである。女は起ちあがつた。單衣の砂を叩

いて前を合せた。さうしてほつれた髪を兩手で掻き上げた。雨はいつか晴れて居た。雨の粒ははら／＼と乾いた砂の上にまぶれて濕つた位に過ぎなかつた。あたりにはみやこ草の花が砂にひつついて黄色にさいて居る。こぼれ松葉がみやこ草にもばらりと散つて居る。女は立つて蝙蝠傘を杖づいて歩き出した。私も無言の儘女の先に立つて歩いた。私は漸く小徑を求めて松原から街道へ出た。小徑の雜草が着物の裾にさはる。月見草が私等二人を見て居るやうにところ／＼雜草の中から首を擡げて居た。私は車夫が空車を曳いて來るのがあつたら女を乘せて歸さうと思つたが街道の途中に車はなかつた。少し行くうちに幸ひ藁屋の小さな茶店があつたので私はそこへ女を休ませた。私は茶店の婆さんから清心丹を貰つて女にやつた。暫くたつ內に女の顏色も恢復して來た。私は婆さんへ少しばかりの心づけをして茶店を立つた。女は有繫に帶の間から錢入を出したのであつたが私は無理にもどさせた。やつとのことで勿來の停車場へついた。上りの列車を待つ間私は態と女に離れて居た。女も凝然と腰掛けた儘いつまでも俯伏して居た。列車の窓から見ると日は青草の茂つた丘のあなたに隱れて其光を沖一杯に投げて居る。海の水は深い碧である。沖の小さい白帆が日に眩きばかり夕日の光を反射して居る。列車に乘つたかと思つたらもう關本の停車場である。私は人力車を呼んで女を乘せた。此の時女はもう餘程恢復して居た。私は女の後から徒歩で急いだ。女の車が田圃を遙かに越えて丘の間に隱れるまで私は速い歩調を止めなかつた。

八

次の日女は一日座敷を出なかつた。尤も朝の內私の座敷の外へ來て昨日の義理を述べた。白地の絣の上に帶はきりゝと締めて居た。大抵の女はかういふ場合には笑顏を作つて挨拶をするのであるが、女はいつものやうに沈んで居る。もとより慌てた態度はなくしつとりと落付いて居る。私は却て此の女に對して心がおづ／＼として居た。さうして私は別に何にもいはなかつた。何とか女に重い口を開かせるだけのことが出來たのだと後には思はれるのであるが其時は唯堅くなつて居た。其日散歩に出て見た。濱で搗布を燒いて居る煙が重さうに靡いて居た。穢い漁師の女房は、海から搗布を刈つて來てぶつ／＼と火で燒く。其灰が沃度の原料である。空の模様が幾らか變になつたやうに思はれた。夜に成つたら入江のうちには船が一杯に詰つた。宵の口どの船からも小さな松明の火がともされた。舳に立つた漁師が手に翳してぐるぐると廻轉させて其火を水に投じた。其夜は闇かつた。空には幾らか雲が飛ぶやうに見えた。沖は「シケ」であるといつていつもよりどう／＼と騷がしい響をおくつて來る。入江の口に打ちつける波が唯白く見えた。私はランプの下にごろりと成つた儘大地の底からゆすつて鳴る樣な濤の響を聞いて居た。ふと表にがや／＼と人聲がしてやがて遠くなつて畢ふのを聞いた。帳場へおりて見ると主人は居なかつた。何でも難船があつたといふのである。店先を人が忙しく走せ違つて居る。どこがどうして居るのか私にはちつとも分らなかつた。暫く店先を出て立つて居ると港の磯にどつと篝が燃えあがつた。然し篝が其光の及ぶ範圍內に動いて居る人々を明かに見せる丈で一向にあてどもない。篝に近くに行つて見た時船が一艘おろされるやうであつた。私は漁師町の方へ駈けて行つて見た。行き止りが闇くなつて居るばかりでそこには何の容子もない。引つ返して駈けて來ると、提灯が潤門の方へ向つて走せる。潤門からも提灯が

走つて來る。提灯と提灯と何か罵るやうにいつて走せ違つた。私も洞門に向つて進んだ。下駄の音が洞門の内側に響いてこん〳〵と鳴るのを聞いた。九面の漁村へ出た。白い波が窮屈な入江の口から押し込んで來るのが見えた。がやがやと人聲が騷がしい。ほつかりと火が光の空へぬけて居る。私は凸凹の道を曲折しつゝ漁師の家の間を過ぎて行つた。闇のなかに人とぶつからうとする。行つて見ると庭に篝が焚いてあつて人が一杯に其火を取り捲いてがや〳〵と騷いで居る。人越しに見ると裸になつて居る四五人が筵の上に腰をおろして慄へ乍ら焚火に手を翳して居る。難破船の漁師が此處へ救はれたのだといつた。其なかに十三四の男の子が交つて居る。焚火に手を翳しながら哀れな顏をして周圍の人だかりを見まはして居る。他の漁師共はさまで驚いた容子もない。皆茜の褌をしめて居る。私は意外に感じた。私の側に立つて居る漁師の女房らしい女が噂をして居る。土地に特別な荒い言葉で罵るやうに語つて居る。私はそこへ口を出して聞いて見た。これは小名濱から今朝船を出した漁師であつたが平潟の港にはひらうとしたのであつたが夕方から波が荒かつたしそれに闇かつたので途々船底が暗礁へさはつた。船は暗礁へ障つたらもうすぐにばら〳〵になつて畢ふ。漁師はそれでも皆板子を持つて波に突きのめされつゝ泳いだ。一人やつと上陸したので此村から救ひの船が出た。聲をたよつて救ひ上げた。皆救はれたが唯一人見えぬ。十三四の子でさへ命を拾つたのに其漁師はどうしても此處へ上陸せぬ。平潟へも上陸せぬといふ。波を避け損つて深く捲き込まれたものであるかも知れぬ。其漁師は此の子の父であつた。救はれた時少年は口が聞けなかつた。庭へ焚火をして漸く温めてやつた時彼は頻りに其父のことばかり聞いて居たといふのであつた。焚火には薪が投げられた。焔がばつと燃えあがる。ぼう〳〵と音をたてて燃えあがる。焔の光は周圍に人が描いて居る丸い輪の内側を明かに照して居る。人々の顏が赤く恐ろしげである。私は後に居てさへ顏の熱いのを感じた。私が戻つて來た時平潟の篝は既になくなつて唯どう〳〵と濤の響を聞くのみであつた。主人はまだ歸らぬと見えて宿の帳場も寂しかつた。

座敷へもどつた時女は一枚細目にあけた雨戸の隙間から暗い入江を見て居る所であつた。女は私を振り向いて今夜の模樣を聞いた。女はこれまで私と口を開いたことが一度しかないのであつた。私は其時女に近づいた。さうして悉皆私の見たことを語つた。閾に近いランプの光が浴衣姿の女を美しく見せた。今夜も女はきりゝと帶を締めて居た。

「可哀想な人もあるものでございますね」

女はいつた。女の瞬つた目には涙の滲るのを見た。さうして女は暫く横を向いてしまつた儘であつた。難破船の噺ばかりでそんなに悲しくなる筈はないと私は不審に思はれた。私は立つて雨戸の隙間から外を見た。一杯につまつた松魚船が暗の底にぼんやりと眠つて居る外何にも目に入るものがない。私は氣がついて自分の座敷へもどらうとした時ふと女の座敷を見た。蒲團の上に枕の倒れて居るのがちらりと見えた。私は此の宿へ來てから一度も女の座敷を覗いたことがなかつたのである。私は何となく心に不安を感じた。夜中にうと〳〵として居ると一しきりどこともなく人聲が騷がしく聞えたやうに思つたが私はそれつきり眠つて畢つた。

明くる朝起きて見ると空は拭つたやうに晴れて居た。港の松魚船はもう一艘も居ない。みんな夜中に漕ぎ出したと見える。ざや〳〵と濤

く私の耳にはひつたのは其時の騷ぎであつた。

私は洞門をくゞつて又九面まで行つて見た。今朝はもうひつそりとして唯干した「コマセ」の臭ひが鼻を衝くばかりであつた。波もさら／＼とゆるやかである。散歩からもどつて來ると隣の座敷には客が一人殖えたやうである。聞いたやうな女の聲で威勢よく語つては時々笑聲も交る。女の聲といふのは此間のお婆さんであつた。女が階子段をおりて行つた時お婆さんは私の座敷の方へ來て

「先日はどうもまあ、あれが飛んだ御厄介になりました相でございまして、どうもねえあなた、獨でそんな所迄本當に私もびつくり致しましたよ。どうかするとまあそんな事を致すんでございますから」

お婆さんはかういつて

「あのお立て換へがあります相ですが―」

と帶の間から巾着を出さうとする。

「いゝえ決してそんなこと、そりやいけません」

私は無理に押し留めた。

「それぢやどうも相濟みませんでございますね―」

お婆さんはすぐに

「ですがね、あれも漸く片がつきましてね―」

と分らぬことをいうて獨で悦んで居るやうである。これまでとは違つてそは／＼して居る。女は階子段を昇つて來た。氣がついて見ると今日はきりつと晴衣に着換へて居る。髮にも櫛の目が通されてある。

お婆さんは聞いた。

「車はもう來たかい」

「まだのやうでございますが―」

低い聲であるが分明と女はいつた。がら／＼と表に空車の音がして女中は軈て知らせに來た。

「それではどうもなが／＼御厄介になりましたが……―」

お婆さんは私へ挨拶をする。女も後から挨拶する。女は着物を着換へたせゐか何となくはきはきしていつもより美しく見えた。私が店まで送らうとするとお婆さんはたつてとめる。私は態と遠慮して勾欄に近く立つて居た。翳した二つの蝙蝠傘が軒の下から現れて忽ち他の軒へ隱れて畢つた。私は隣の座敷を覗いて見た。火鉢も茶器もちやんと隅にくつつけてあつて唯からりとして居る。番頭はすぐに塵拂と箒とを持つて來て隣の座敷を掃除した。

「旦那、こちらはゆるつとして居ますからこちらのお座敷になすつたらどうでござんす。これからもう海水浴のお客さんがそろ／＼參りますから、今のうちいゝ座敷をおとんなすつた方がようござんすぜ」

と番頭は注意してくれた。然し私はそこへ移る氣にはなれなかつた。私は女に對して非常に遠慮して居た。座敷にも私は遠慮がない譯には行かなかつた。ひつそりとして居るので隣の座敷は却つてまた女が居るやうな心持がしてならぬ。私は其夜もひどく寂しい隣の座敷を控へてつく／＼と思案した。お婆さんは女の身は片がついたといつて悦んで居た。恐らくもう心配がなくなつたのであらう。女がはき／＼として見えたのも其爲めではあるまいか。それにしてもおいよさんの方は母がどう運びをつけて居るのであらうか少しも分らないのである。隣の座敷の女に逢つてから私はひどく心が弱くなつておいよさんに對する心配も増して來た。私が遙々此の港まで身を避けて居るのに女は私に苦悶させようとして待つて居たもののやうであつた。私には他の理由は少しも分らないので唯片がついたといつて悦んで見せに行つて畢つた。私はどこかへ打棄つてしまはれたやうな心持になつた。私は快々として居た。一日間

を隔てて母から手紙が届いた。私は心もとなく封を切つた。手紙にはかうあつた。あのことは鶴に極りをつけた。歸つて來ても誰に義理をいふ必要もない。唯知らぬ顏をして居ればいいのである。歸りたければ歸るがいゝ、逗留して居たければいつまででも居るがいゝといふのであつた。私は此の時つくゞゝ母の慈愛といふことを感じた。私はすぐに宿を立つことに決心した。其日のうちに上りの列車に乘つたのである。隣の座敷にはまだあとの客は這入らなかつた。

其後おいよさんはどうなつたか知らぬ。私が歸つた時母は何も知らないで居れといつた。私は母に強ひて聞く勇氣もなかつた。それでも一年許りの間はおいよさんから何とか六かしいことでもいつて來やしないかと懸念がないではなかつた。私はずつと後になつてふと村の内外に當時おいよさんとの噂が立つて居たことを聞いた。實際あつたことでなければ其噂はいつか消滅して畢ふから後になれば分るといふことを人が一般にいつて居る。私の賢明な手段は私の噂を葬つてしまつた。さうして今では村の内外に私を疑つて居るものがなくなつた。私はおいよさんとの間の行爲を罪惡だと知つて居る。然し私はそれを羞ぢるよりも先づうまく隱しおほせて私の身を保ち得たことを心竊に悦ばぬ譯には行かぬ。私は僅に危い刃の先を免れたのであつた。世上を顧みても自分の非行を衷心から懺悔し得るものが果して幾人あるであらう。私はもうおいよさんに未練はない。今日まで思ひ出させては私をじれつたくさせるのはおいよさんではなくて隣座敷の女である。女はいつまで經つても私には了解が出來ぬ。女は到底解けない謎である。私はうつかり女に手を出すことはもう一度で懲りた。私の心をいつまでもじらすのはその隣室の客である。

（明治四十三年一月）

濃霧の歌

明治四十一年九月十一日、上州伊香保の宿より[illegible]を求めて榛名山を越ゆ、[illegible]相馬嶽の[illegible]を過ぐるにたまたま濃霧の來り襲ふに逢ひければ乃ち此の歌を作る

群山の尾ぬれに秀でし相馬嶺ゆいつ湧きいでし天つ霧かも

ゆゆしくも見ゆる霧かも倒に相馬が嶽ゆ搖りおろし來ぬ

はろばろに匂へる秋の草原を浪の偃ふごと霧せまり來も

ひさかたの天つ狹霧を吐き落す相馬が嶽は恐ろしく見ゆ

おもしろき天つ霧かも束の間に山の尾ぬれを大和田にせり

秋草のにほへる野邊をみなそこと天つ狹霧はおり沈めたり

榛原に天つ狹霧の奧を深み和田つみそこに我はかづけり

うべしこそ海とも湛へ來る天つ霧には今日逢ひにけり

うつそみを掩ひしづもる霧の中に何の鳥ぞも羽立てて鳴く

しましくも狹霧なる間は遠長き世にある如く思ほゆるかも

ひさかたの天の沈霧おりしかばこころも疎し遠ぞける如

常に見る草といへども霧ながら目に入るものは皆珍しき

はり原の狹霧は雨にあらなくに衣はいたくぬれにけるかも

おぼほしく掩へる霧の怪しかも我があたり邊は明かに見ゆ

相馬嶺は已に過ぎしかば天つ霧おり居へだたりふたたびも見ず

（明治四十一年）

太十と其犬

一

太十は死んだ。

彼は北のおつつあんといはれて居た。それは彼の家が村の北端にあるからである。門口が割合に長くて兩方から竹藪が掩ひかぶつて居る。竹藪は亂伐の爲めに大分荒廢して居るが、それでも庭からそこらを陰鬱にして居る。おつつあんといふのはをぢさんでもなく又おとつつあんでもない。其處には敬稱と嘲侮との意味を含んで居る。いつが起りといふこともなくもう久しい以前からさうなつて畢つた。彼は六十を越しても三四十代のもの、時には二十代のものとのみ交つて居た。彼の年輩のものは却て彼の相手ではない。彼は村には二人とない不男である。彼は幼少の時激烈なる疱瘡に罹つた。身體一杯に疱瘡が吹き出した時其鼻孔まで塞つてしまつた。呼吸が逼迫して苦んだ。彼の母はそれを見兼ねて枳椇の實を拾つて來て其塞つた鼻の孔へ押し込んでは僅かに呼吸の途をつけてやつた。それは百舌が木の葉を蹴落す冬のことであつた。枳椇の木は竹藪の中に在つた。黄ばんだ葉が蒼い冴えた空から力なさ相に竹の梢をたよつてはら／＼と散る。竹はうるさげにさら／＼身をゆする。落葉は止むなく竹の葉を滑つてこぼれて行く。澁い枳椇の實は霜の降る度に甘くなつて、軈て四十雀のやうな果敢ない足に踏まれても落ちるやうになる。幼いものは竹藪へつけこんでは落葉に交つて居る不恰好な實を拾つては嚙むのである。太十も疱瘡に罹るまでは毎日懷へ入れた枳椇の實を嚼んで居た。其頃はすべての病が殆ど皆自然療法であつた。枳椇の實で閉塞した鼻孔を穿つたといふことは其當時では思ひつきの輕便な方法であつた。果物のうちで不恰好なものといつたら凡そ其骨のやうな枳椇の如きものはあるまい。其枳椇の爲に救はれたといふことで最初から彼の普通でないことが示されて居るといつてもいゝ。蘇生したけれど彼は滿面に豌豆大の痘痕を止めた。鼻は其時から酷くつまつてせいせいすることはなくなつた。彼は能く唄つたけれど鼻がつまつて居る故か竹の筒でも吹くやうに唯調子もない聲を立てるに過ぎない。性來頑健な彼は死ぬ二三年前迄は恐ろしく威勢がよかつた。死ぬ迄も依然として身體は丈夫であつたけれど何處となく窶れ切つて見えた。それは瞽女のお石がふつつりと村へ姿を見せなくなつたからであつた。彼がお石と馴染んだのは足かけもう二十年にもなる。秋のマチといふと一度必ず隊伍を組んだ瞽女の群が村へ來る。其同勢のうちにお石は必ず居たのである。晩秋の收穫季になると何處でも村の社の祭をする。土地ではそれをマチといつて居る。マチは村落によつて日が違つた。瞽女はぐる／＼とマチを求めて村々をめぐる。太十の目には田の畔から畑から庭からさうして柿の木にまで挂けられた其年の收穫を見るより瞽女の姿が幾ら嬉しいか知れないのである。瞽女といへば大抵盲目である。手引といつて一人位は目明きも交る。彼等は手引を先に立てて村から村へ田圃を越える。褰げた裾から赤いゆもじを垂れてみんな高下駄を穿いて居る。足袋は有繫に白い。荷物が圖拔けて大きい時は一口に瞽女の荷物のやうだといはれて居る其紺の大風呂敷を胸に結

んで居る。大きな荷物は彼等が必ず携帶する自分の敷蒲團と莚とである。此も紺の袋へ入れた三味線が胴は荷物へ載せられて棹が右の肩から斜に突つ張つて居る。彼等は皆大きな爪折笠を戴く。瞽女かぶりといつて大事な髪は白い手拭で包んでさうして其髷へ載せた爪折笠は高く其位置を保つて居る。覗いたやうに折れた其端が笠の内を深くしてそれが耳の下で交叉して顎で結んだ黑い毛繻子のくけ紐と相俟つて彼等の顔を長く見せる。有繫に彼等は見えもせぬのに化粧を苦にして居る。毛繻子のくけ紐は白粉の上にくつきりと強い太い線を描いて居る。削つた長い木の杖を斜について危げに其足駄を運んで行く。上部は荷物と爪折笠との爲めに圖抜けて大きいにも拘らず、足がすつとこけて居る。彼等の此の異樣な姿がぞろ／＼と續く時其なかにお石が居れば太十がそれに添うて居ないことはない。然し太十は四十になるまで恐ろしい堅固な百姓であつた。彼は貧乏な家に生れた。それで彼は骨が太くなると百姓奉公ばかりさせられた。彼はうまく使へば非常な働手であつた。彼は一剋者である。一旦怒らせたら打つても突いてもいふことを聽くのではない。性癖は彼の父の遺傳である。だが嘗て亂暴したといふこともなくてどつちかといふと酷く氣の弱い所のあるのは彼の母の氣質を稟けたのであつた。彼の兄も一剋者である。彼等二人は兩親が亡くなつて自分等も老境に入るまでしみ／＼と噺をした事がない。さうかといつて太十はなか／＼義理が堅いので何事かあると乾度兄の家へ驅けつける。然し彼は何事に就いても少しの意見もなければ自ら差し出てどうといふこともない。氣に入らぬことがあれば獨でぶつ／＼と怒つて居る。さうした時は乾度上脣の右の方がぴく／＼と釣つて恐ろしい相貌になる。彼の怒は蝮蛇の怒と同一狀態である。蝮蛇は之を路傍に見出した時土塊でも木片でも人が之を投げつければ卽時にくる／＼と捲いて決して其所を動かない。さうして扁平な頭をぶる／＼と擡げるのみで追うて人を嚙むことはない。太十も嘗て人を打擲したことがなかつた。彼はすぐに怒るだけに又すぐに解ける。殊に瞽女のお石と馴染んでからはもうどんな時でもお石の噺が出れば相好を崩して畢ふ。大きな口が更に擴がつて鐵漿をつけたやうな穢い齒がむき出して更に中症に罹つた人のやうに頭を少し振りながら笑ふのである。然し瞽女の噂をして彼に揶揄はうとするものは彼の年輩の者にはない。隨つて彼の交際する範圍は三四十代の壯者に限られて居るのである。以前奉公して居た頃も稀には若い衆に跟いて夜遊びに出ることもあつた。彼も他人のするやうに手拭かぶつて跟いて行つた。歸る時にはぼさ／＼として獨であつた。若い衆はみんな自分の女を見つけると彼を棄てゝそこらの藪や林へこそこそと隱れて畢ふ。太十はどの女にも嫌はれた。丁度水に彈かれる油のやうであつた。それでも彼は其間は收拗よく馬を曳いて出た。彼は紺の腹掛にその長いツツポ襦袢を着て三尺帶を前で結んで居た。襦袢の襟を態と開いて腹掛の丼を現はして居た。彼は六十過ぎしても大抵は其時の馬方姿である。生來酒は嫌な上に女の情といふものを味ふ機會がなかつたので彼は唯働くより外に道樂のない男であつた。其勤勉に報いる幸運が彼を導いて今の家に這つた。彼は養子に望まれたのである。其家は代々の稼ぎ手で家も屋敷も自分のもので田畑も幾分で作るだけはあつた。手際にすれば寡な身上であつた。夫婦は老いて子がなかつた。彼はそこへ行つてから間もなく嫁をとつた。其家の財産は太十の緣談を容易に成就させたのであつた。

二

太十が四十三の秋である。彼は遠い村の姻戚へマチ呼バレといつて招かれて行つた。二日目の日が暮れてから歸つて來た。隣村の茶店まで來た時そこには大勢が立ち塞つて居るのを見た。隣村もマチであつた。唄ふ聲と三味線とが家の内から聞えて來る。彼はすぐに瞽女が泊つたのだと知つた。大勢の後から爪先を立てて覗いて見ると釣ランプの下で白粉をつけた瞽女が二人三味線の調子を揃へて唄つて居る。外の三四人が句切れ／＼に囃子を入れて居る。狹い店先には瞽女の膝元近くまで聞手が詰つて居る。土間にも立つて居る。さうして表の障子を外した閾を越えて往來まで一杯に成つて居る。太十も其儘立つて覗いて居た。斜に射すランプの光で唄つて居る瞽女の顏が冴えて見える。一段畢ると家の内はがや／＼と騷がしく成る。煙草の煙がランプをめぐつて薄く擴がる。瞽女は危げな手の運びやらをして撥を絃へ插んで三味線を側へ置いてぐつたりとする。耳にばかり手頼る彼等の常として俯向き加減にして凝然とする。さうかと思ふとランプを仰いで見る。死んだ網膜にも灯の光がほつかりと感ずるらしい。一人の瞽女が立つたと思ふと一歩でぎつしり詰つた聞手につかへる。瞽女はどこまでもあぶなげに兩方の手を先へ出して足の底で探るやうにして人々の間を拔けようとする。惡戯な聞手はわざと動かないで彼の前を塞がうとする。馴れた瞽女は倒れ相にしては徐に歩を運ぶ。體がへな／＼として見える。大勢はそこから假聲を出して揶揄はうとする。かういふ果敢ない態度が酷く太十の心を惹いた。大勢はまだがや／＼として居たが一人の手から白紙に包んだ纏頭が其かしらの婆さんの手に移された。瞽女は泊めた家への謝儀として先づ一段を唄ふ。さうして大勢の中の心あるものから纏頭を得て一くさり唄ふのである。三味線の胴が復た膝にもどつた。大勢は森とした。其一くさりが畢ると瞽女は絃を緩めて三味線を紺の袋へ納めた。さうして大きな荷物の側へ押しやつた。大勢はまたがや／＼と騷がしく成つた。其時夜は深けかゝつて居た。人はだん／＼に去つて狹い店先はひつそりとした。太十はそれでも去らなかつた。店先へぼつさりと獨で立つて居ることは出來ない。横手の流元の引窓から彼は覗いた。唯一つの火鉢へ三人が手を翳して居る。他の瞽女はぼつさり懷手をして居る。みんな唄の疲れが出たせゐか深い思に沈んだやうにして首をかしげて居る。太十は猶ほ去らうともしなかつた。突然戸が開いた。太十は驚いて身を引いた。其機會に流元のどぶへ片足を蹈ん込んだ。戸を開けたのは[illegible]の女房であつた。太十は女房を喚んで[illegible]盥を借りようとした。商賣柄だけに田舍者には叮嚀に氣持く利く女房は自分が水を汲んで[illegible]に[illegible]しながら、片片の足袋を脱がして家へ連れ込んだ。太十がお石に[illegible]込んだのは此夜からであつた。さうして二三日歸らなかつた。女の切な情といふものを太十は盲女に知つたのである。目が見えて態度のはき／＼とした女は少年の頃から決して太十の相手ではなかつた。太十もそれは知つて居る。知つて居るといふより諦めて居た。それよりも猶ほ女のつれないといふことが彼には當然のことなのでそれを格別不足に思ふといふことはなくなつて居たのである。女房とすら彼は餘所目には打ち解けなかつた。朝夕顏を見合はす間柄はそんなに追從いふことの出來ないのは當然である。だが其兒とさへ睦まぬ太十だから、どつちかといへばむつつりとした女房は實際こそつぱい間柄であつた。孰れの村落へ行つても人は皆惡戯半分に瞽女を弄ばうとす

る。瞽女もそれを知らないのではない。然し彼等は其僅少な金錢の爲に節操を犧しつゝある。瞽女でも相當の年頃になれば人に譽められたいのが山々で見えぬ目に口紅もさせば白粉も塗る。お石は其時世を越えて散々な目に逢つて來たのである。幾度か相逢ふうちにお石も太十の情に絆された。さうでなくても稀に逢へば誰でも慇懃な語を交換する。お石に逢ふ度に其情は太十の腸に浸み透るのであつた。瞽女は秋毎に村へ來た。さうしてお石は屹度其仲間に居たのである。太十は後には瞽女の群をぞろ〳〵と自分の家へ連れ込むやうになつた。女房は我儘な太十の怒癖を怖れて唯むつつりして默つて居た。然しお石は義理を缺かなかつた。其大きな荷物の中から屹度女房への苞が出された。女房も後には其見えない女の前に蕎麥の膳を運んでやるやうになつた。一つには何處へも出たことのない女の身にはなまめかしい姿の瞽女に三味線を彈かせて夜深までも唄はせることがせめてもの鬱晴しであつたからである。

三

或秋のことであつた。お石は子犬を懷へ入れて來た。子犬は古新聞紙へ包んであつた。子犬は古新聞紙にくるまつて寢て居た。懷から出すとぶる〳〵と體を振るやうにしてあぶなげに立つ。悲しげな目で人を見た。目が淚で濕ほうて居た。雀の毛を挘つたやうに瘦せて小さかつた。お石は可哀想だから救つて來たのだといつた。太十は獨で笑ひながら懷へ入れて見ると矢張りくるりとなつて寢た。鍋の破片へ飯をくれたが食はない。味噌汁をかけてやつたらびしや〳〵と嘗めた。暫くすると小さいながら尾を動かしてちよろ〳〵と駈け歩いた。お石が村を立つてから犬は太十の手に飼はれた。太十は從來農家の附屬物たる馬と雞との外には動物は嫌ひであつた。猫も二三度飼つたけれど皆酷く窶れて鳴聲も出せないやうに成つて死んだ。猫がないので鼠は多かつた。竹簀をかぶつた太十の家は內も一杯煤だらけで晝間も闇い程である。天井がないので眞黑な太い梁木が縱横に渡されて見える。乾いた西風の烈しい時は其煤がはら〳〵と落ちる。鼠のためには屈竟な住居である。それでも春から秋の間は蛇が梁木を渡るので鼠が比較的少ない。蛇は時とすると煤けた屋根裏に白い體を現はして鼠を狙つて居ることがある。さうした後には鼠は四五日ひつそりする。收穫季の終が來て蛇が閉塞して畢ふと鼠は蕎麥や籾の俵を食ひ破る。それでも猫は飼はなかつた。其太十が犬だけは自分で世話をした。壞れた箱へ藁しびを入れてそれを圍爐裏の側へ置いてやつた。子犬はそれへくるまつて寢た。霜の白い朝彼は起きて屹度犬の箱を覗く。犬は小さいながら成長した。春らしい日の光が稀にはほつかりと射すやうになつて麥がみづみづしい靑さを催して來た頃犬は見違へる程大きくなつた。毛が赤いので赤と呼んだ。太十が出る時は赤は屹度附いて出る。附いて行くのではなくて二町も三町も先へ駈けて行く。岐路があると赤はけろりと立つて太十の追ひつくのを待つて居る。太十が左へ向けば其時一散に左へ駈けて行く。太十は左へ行く時には態と右の方へ足を運ぶ。赤がばら〳〵と駈けて行くのを見て左の方へ歩いて行くと赤は暫く經つて呼吸せはしく太十を求めて駈けて來る。かういふ惡戲を二度も三度も繰り返して居る太十の姿を時として見ることがある。赤は煎餅が好きであつた。赤に煎餅を食はせて居る太十の姿がよく村の駄菓子店に見えた。燒けの透らぬ堅い煎餅は犬には一度に二枚を嚙ることは出來ない。顎が草臥れて畢ふのである。唾欲し相にして然かも鼻をひく〳〵と動かす犬を見て太十は獨で

笑ふのである。赤は恐ろしい人なつこい犬である。後足で立つて前足を胸に屈めていつまででも立つことが出來た。さうしては何か欲しいといつては長い舌を出してぺろり〳〵と自分の鼻を嘗めた。太十が庭へおりると唯悦んで飛びついた。うつかり抱いて太十はよく其舌で嘗められた。赤は太十をなくして畢つてぼさ〳〵と獨で歸ることがある。春といつても橫にひろがつた薺が、枝を束ねた桑畑の畝間にすつと延び出して僅かに白い花が見え出してまだ麥が首を擡げない頃は其短い麥の間に小さな體にしては恐ろしげな毛を頭に立てた雲雀がちよろ〳〵と駈け歩いて居る。赤は雲雀を見つけるとすぐ其後に土埃を蹴立てて駈けて行く。雲雀は低く飛んでは遙かに先へ行つて畑の境の茶の木の株に隱れたり又飛んだりして遁げて歩く。赤が吠える聲は忽ちに遠くなつて畢ふ。頰白が桑の枝から枝を渡つて懶げに飛ぶのを見ると赤は又立ちあがつて吠える。桑畑から田から堀の岸を頰白が向の岸へ飛んでなくなるまでは吠える。さうして赤は主人を見失ふのである。さういふ時には尻尾を脚の間へ曲げこんで首を垂れて極めて小さみに歸つて行く。赤は又庭へ雀がおりても駈けて行く。庭の桐の木から落ちたサヽキりが其長い髭を徐ろに動かしてるのを見て、赤は獨で勇み出して庭のうちに輪を描いて駈け歩いた。さうしては足で一寸サヽキリを引つ返して其髭の動くのを見て又ぱら〳〵と駈け歩いたことがある。聟の文造と畑へ出ることもあつた。秋蕎麥の畑には唯一杯に花が白かつた。赤は地鼠の通つた穴を探し當てたものか蕎麥の中を駈け歩いた。赤の體が觸れて蕎麥の花が先へ先へと動いた。暫く經つと赤はすつと後足で蕎麥の花の中から立つ。さうして文造を見つけていきなりぱら〳〵と駈けて來る。鼻先は土で汚れて居る。赤は恐ろしい威勢のいゝ犬であつた。さうして十分に成長した。夜はよく足音を聞きつけて吠えた。晝間でも彼の目には胡亂なものは屹度吠えられた。次の秋のマチが來た。太十は例の如く瞽女の同勢を連れ込んだ。赤は異樣な一群を見て忽ちに吠え迫つた。瞽女は滑稽な程慌てた。太十は何といふことはなく笑つた。さうして赤を叱つた。赤は甘えて太十に飛びついた。更に又瞽女の一人にも飛びついた。瞽女はきやつと驚いた。お石は自分の犬がこんなに威勢よく大きくなつたのを知つて悦んだ。お石は赤を抱かうとして其手を長い舌でぺろぺろと嘗められた。威勢のいゝ赤は其から幾年間を太十の手に愛育された。太十とお石との情交は移らなかつた。お石は顏に小さい皺が見えて來てもう遠くから白粉は塗られなかつた。盲目の衰へ易い盛りの時期は過ぎ去つて居るのである。其でも太十の情は依然として深かつた。

四

彼がお石を知つてから十九年目、太十が六十の秋である。彼はお石を待ち焦れて居た。其秋のマチにも瞽女は隊を結んで幾らも來た。其頃になつてからは瞽女の風俗も餘程變つて來て居た。幾らか綺麗な若いものは三味線よりも月琴を持つて流行唄をうたつて歩いた。さうして目明が多くなつた。お石は來なかつた。それつきり來なくなつたのである。太十は落膽した。迷惑したのは家族のものであつた。太十は獨でぷつ〳〵いつて當り散した。村の者の目にも悄然たる彼の姿は映つた。惡戲好のものは太十の意を迎へるやうにして共に悲んだ容子を見せてやつた。太十は泣き相になる。それでもお石の噂をされることがせめてもの慰藉である。みんなに揶揄はれる度に切ない情がこみあげて來てさうして又胸がせい〳〵としたりした。其秋かららげつそりと寂しいマチが彼の心に反覆され

た。威勢のいゝ赤は依然として太十にじやれついて居た。太十は數年來西瓜を作ることを繼續し來つた。彼はマチの小遣を稼ぎ出す工夫であつた。それでもそれは單に彼一人の丹精ではなくて瞽の文造が能くぶつ〳〵いはれながら使はれた。お石が來なくなつてから彼は一意唯錢を得ることばかり腐心した。其年は雨が順よく降つた。彼はいつでも冬季の間に肥料を拵へて枯らして置くことを怠らなかつた。西瓜の粒が大きく成るといふので彼は秋のうちに溝の底に靡いて居る石菖藻を泥と一つに搔きあげて乾燥して置く。麥の間を一畝づつあけておいてそこへ西瓜の種をおろす。畑のめぐりには蜀黍をぎつしり蒔いた。麥が刈られてから日は暑くなる。西瓜の嫩葉は赤蠅が來て嘗めてしまふので太十は畑へつききりにしてそれを防いだ。敏捷な赤蠅はけはひを覗つて飛び去るので容易に捕ることが出來ない。太十は朝まだ草葉の露のあるうちに灰を掛けて置いたりして培養に意を注いだ。やがて畑一杯に麥藁が敷かれた。蔓は其上を匍つた。蔓の末端は斜に空を向いて快げである。纖巧な模樣のやうな葉のところ〴〵に黄色な花が小さく開く。淡綠色の小さな玉が幾つか麥藁の上に輕く置かれた。太十は畑の隅に柱を立てて番小屋を造つた。屋根は粟幹で葺いて周圍には蓆を吊つた。いつしか高くなつた蜀黍は其廣く長い葉が絶えずざわついて稀には秋らしい風を齎した。腹の底まで涼しくする西瓜が太十の畑に轉がつた。太十は周圍の蜀黍に竹を縛りつけて垣根を造つた。日はまだ非常に暑かつた。怖る〳〵首を擡げた蜀黍の穗がすぐに日に燒けて鳶色に變じ出した。太十は番小屋の穢い蚊帳へ裸でもぐつた。西の空に見えた夕月がだん〳〵大きくなつて東の空から蜀黍の垣根に出るやうになつて畑の西瓜もぐつと蔓を突きあげてどつしりと黄色な臀を据ゑた。西瓜は指で彈けば濁聲を發するやうになつた。彼はそれを遠い市場に切り出した。晝間は瞽の文造に番をさせて自分は天秤を擔いで出た。後には馬を曳いて出た。文造はもう四十になつた。太十は決して惡人ではないけれどいつも文造を頭ごなしにして居る。晝間のやうな月が照つてやがて舊曆の盆は來た。太十はいつも番小屋に寢た。赤も屹度番小屋の蔭に足を投げ出して居た。

或日太十は赤がけたゝましく吠えたのを聞いて午睡から醒めた。犬は其あとを吠えなかつた。太十はいつでも犬に就いて注意を怠らない。彼はすぐに番小屋を出た。蜀黍の垣根の側に手拭を頰かぶりにした容子の惡い男がのつそりと立つて居る。それは犬殺しで帶へ插した棍棒を今拔かうとする瞬間であつた。人なつこい犬は投げられた煎餅に尻を振りながら犬殺しの足もとに近づいて居たのである。犬殺しは太十の姿を見て一足すさつた。

「何すんだ―

太十は思はず呶鳴つた。

「殺すのよ―

犬殺しは太いさうして低い聲で應じた。

「殺せんなら殺して見ろ―

太十はいきなり犬を引つつるやうに左手に抱へた。

「見やがれ殺しはぐりあるもんか―

犬殺しは毒づいて行つてしまつた。太十の怒つた顏は其時恐ろしかつた。赤は抱かれて後足をだらりと垂れて首をすつと低くして居た。荒繩で括つた麻の空袋を肩から引つ懸けた犬殺しの後姿が見えなくなつてから太十は番小屋へもどつた。赤は太十の手を離れるとすぐにさつきの處へ驅けていつて棄てられた煎餅を嚙つた。太十はすぐに喚んだ。赤は長い舌で鼻を嘗めながら驅けて來て前足を太十の體へ掛けて

攀ぢのぼるやうにしていつものやうに甘えた。

夜になつて文造が番小屋へ來た。それは犬殺しが何處かで赤犬の肉を註文されて狙ひをつけたのだから乾度殺してやるとそこらで放言して行つたといふことを知らせる爲めであつた。文造は心底から大事と思つて知らせたのであつたが然し此は知らなかつた方が却て太十にも犬にも幸であつたのである。實際其頃は犬殺しの徘徊すべき時節ではなかつた。暑い時には大切な毛皮が役に立たぬばかりでなく肉の保存も出來ないからである。太十はそれを知つて居る。さうして肉の註文を受けたことが事實であるとすれば赤は到底助かれないと信じた。赤犬の肉は黴毒の患者に著しい效驗があると一般に信ぜられて居るのである。太十は酷く其胸を焦した。

五

次の日に懇意な一人が太十の畑をおとづれた。彼は能く來た。さうして噺が興に乘じて來る時不斷用に割つた西瓜が彼等の間に置かれるのである。白い部分まで齒の跡のついた西瓜の皮が番小屋の外へ投げられた。太十は指で彈いて見て此は甘いと自慢をいひながらもいで來ることもあつた。暑い日に照られて半分は熱い西瓜でもすぐに割られるのであつた。太十の鬱いで居る容子は對手にもわかつた。

「おつつあんどうかしやしめえ」

對手は聞いた。太十は少時默つて居たが

「いつそのこと殺しつちまあべと思つてよ」

ぶつきら棒にいつた。

「何よ」

と對手はいつた。然しそれが餘り突然なので對手はいつものやうに揶揄つて見たくなつた。

「まさか俺がこつちやあるめえな」

とすぐにつけ足した。

「どうせ犬殺しの手にかけるなら自分でやつちまつた方がいゝと思つて……」

太十は口をしがめた。

「それぢや、おつつあん赤か、どうしたんでえまあ」

太十は犬殺しの噺をした。對手の心裏にふとそれを殺してやらうといふ念慮が湧いた。其肉を食はうと思つたのである。赤犬の肉は佳味いといはれて居る。それも他人の犬であつたらさういふ念慮も起らなかつたであらうが、裏心非常な苦惱を有して居れば居る程太十の態度が可笑しいので罪のない惡い料簡がどうかすると人々の心に萌すのであつた。

「殺しちまあ」

太十がいつた其聲は顫へて居た。犬の身に起つた不幸な出來事は薄弱な太十の心を掻き亂して畢つた。彼は殺すと口には斷言した。然し彼の意識しない愛惜と不安とが對手に愁訴するやうに其聲を顫はせた。殺すなといへばすぐ心が落ち付いて唯其犬が不便になつたのである。然し對手は太十の心には無頓着である。

「おつつあん殺すのか」

斯ういふ不謹愼なひやうは餘計に太十を惑はした。

「さうよな」

と太十は首をかしげた。

「どうせ駄目だから殺しつちまあべ」

威勢よくいつた。さうかと思ふと暫く沈默に耽つて居る。

「殺した方がよかんべな」

投げ出したやうに低い聲でいつた。其處には對手に縋つて留めてくれといふ意味もあつた。だが殺すなといふ聲は太十の耳に響かなかつた。

「それぢや思ひ切つてやつちまあんだな。どうせ見こまれちや駄目だからな。おつつあんさう

するんだな」

太十は返辭をしなかつた。然し彼の薄弱な心は大きな石で壓へつけられたやうに且つ釘付にされたやうに、彼の心の底にはそれが又厭であつたけれどさうしつかと極められて畢つた。彼の心は劇しく動搖して且つ困憊した。

「それぢや三次でも連れて來べえ」

對手は去つた。太十は一隅を外した蚊帳へもぐつた。蚊帳の外には足が投げ出してあつた。蠅が足へたかつても動かなかつた。犬は蔭の濕つた土に腹を冷して長くなつて居た。二人は來た。三次は左の手を赤の腹へ當ててそつとあげた。後足は土について居る。赤はすつと首を低くしていつもの甘えた容子をした。犬には荒繩が窃にかけられた。犬は驚いてひい／＼と悲愴な聲を立てた。三次が手を放した時犬は四つ足を屈めて地を偃ふやうに首を垂れて身を蹙めた。さうして凝むやうに白い眼で三次を見た。

「おつつあん」

犬がひい／＼と鳴いた時太十はむつくり起きた。彼の神經は過敏になつて居た。

と先刻の對手が喚びかけた。太十はまたごろりとなつた。

「おつつあん、縛つたぞ」

三次の聲で呶鳴つた。

「いゝから此れ引つこ拔くべ」

といふ低い聲が續いて聞えた。

「おつつあん、此のタンポク引つこぬくかんな」

其聲が太十の耳に強く響いた。然し彼は默つて居た。一人は蜀黍の垣根に打ちこんであつた棒を拔いた。三次は握つて居た荒繩をぐつと曳くと犬は更に大地へしがみついたやうに身を蹙めた。三次が棒を翳した時繩は切れさうにぴんと吊つた。其の瞬間棒はぼくりと犬の頭部を撲つた。犬は首を投げた。口からは泡を吹いて後足がぶる／＼と顫へた。さうして一聲も鳴かなかつた。

「おつつあん、うまくいつちやつた」

と先刻の對手は釣してある蓆から首を突つ込んだ。蚊帳の中は動かない。彼は太十の蚊帳をまくつた。太十は凝然と目をしかめて居る。

「おつつあん、ありやどうしたもんだんべな」

「埋めてやつてくろえ

太十はやつとそれだけいつた。

「それもさうだがな、片身に皮だけはとつて置いたらどうしたもんだ」

「どうでも仕てくろえ」

蚊帳の中は依然として動かなかつた。二人は用意して來た出刃で毛皮を剝きはじめた。出刃が喉から腹の中央を滑つて走つた。ぐつたりとなつた憐れな赤犬は熟睡した小兒が母の手に衣物を脫がれるやうに四つの足からさうして背部へと皮がむかれた。致命の打撲傷を受けた頭のあたりはもう黒く血が凝つて居た。裸にされた犬は白い齒が食ひしばつて目がぎろ／＼として居た。毛皮は尻からぐる／＼と卷いて荒繩で括られた。さうしてそれが番小屋の日南に置かれた。太十は起きた。毛皮は耳がつんと立つて丁度小さな犬が蹲つて居るやうに見える。太十はそれが酷く不憫に見えた。彼は悄然として毛皮を手に提げて見た。

「おつつあん可哀想になつたか」

と二人はいつた。

「それぢやあとはおらが始末すつからな」

棒をそこへ投げ棄てて二人は去つた。血は麥藁の上にたれて居た。三次の手には荒繩で括つた犬の死骸があつた。太十はあとでぼつ／＼として居た。彼は毛皮を披いて見て居た。彼は思ひついたやうに自分の家に走つて木の枝と鉈とを持つて來た。蜀黍の垣根に插つた竹の端を伐つて釘を造つてさうして毛皮を其壁へ貼りつけた。悲しい一日が太十の番小屋に暮れた。

其夜彼は眠れなかつた。妄念が止まず湧いて彼を惱した。うと〳〵として居ると赤が吠えながら駈け出したやうに思はれてはつと眼が醒めたり、鍋の破片へまけてやつた味噌汁をぴしやぴしやと嘗めて居る音が聞えるやうに思はれたり、自分の寢て居る床の下に赤が眠つて居るやうに思はれたりしてならなかつた。彼は更に次の日の夕方生來嘗てない憤怒と悲痛と悔恨の情を湧かした。それは赤が死んだ日に例の犬殺しが隣の村で赤犬を殺して其飼主と村民との爲に夥しくさいなまれて、再び此地に足踏みせぬといふ誓約のもとに放たれたといふことを聞いたからである。彼は其夜も眠らなかつた。一剋である外に缺點はない彼は正直で勤勉でさうして平穩な生涯を繼續して來た。殊に瞽女を知つてからといふもの彼は彼の感ずる程度に於て歡樂に醉うて居た。二十年の歡樂から急轉して彼は備さに其哀愁を味はねばならなくなつた。一大憤懣は相尋いで起つた。

六

夜毎に月の出は遲くなつた。太十は精神の疲勞から其夜うと〳〵となつた。惡戯な村の若い衆が四五人其頃の闇を幸に太十の西瓜を盜まうと謀つた。太十の西瓜はこれまで一つも盜まれなかつたのである。彼等の手筈はかうであつた。二三人は晝間見ておいた西瓜をひつ抱へてすぐに逃げる。他のものは態と太十を起して蚊帳の釣手を切つて後から逃げるといふのであつた。太十は其夜喚んでも容易に返辭がなかつた。それ故さういふ惡戯さへしなかつたならば翌日たゞ太十の怒つた顏を發見するに過ぎなかつたのである。盜んだ西瓜は遙かに隔つた路傍の草の中で割られた。彼等は膝へ打ちつけて割つた。さうして指の先で刳つては食つた。水分があとに殘つて滓ばかりになつても彼等は頓着せぬ。彼等には西瓜の味よりも寧ろうまく盜んだことが愉快に思はれるのである。かうして汚れた西瓜の無殘な形骸が處々の草の中に發見されるのである。西瓜がなくなつて雜談に耽りはじめた時

「あれ」

と一人が喫驚したやうにいつた。

「どうした」

「何だ」

罪を犯した彼等は等しく耳を欹てた。其一人は頻りに帶のあたりを探つて居る。

「何だ」

「どうした」

他のものは又等しく折返して聞いた。

「錢入どうかしつちやつた」

其の聲はいたく慌てて居た。

「あれ落つことしちや大變だ、何處へなくしたつけかな」

何幾度かそこらを闇にすかしても見た。然しそこらにそれが落ちて居る理由がなかつた。彼等は其夜其まゝ別れて畢へばまだ〳〵事は惹き起されなかつたのである。彼は家に歸れば直ちにそれを發見したのである。彼は忘れて出たのである。其夜彼等が聚合したのは全く惡戯のためであつた。惡戯は更に彼等の仲間にも行はれざるを得なかつた。

「そりや畑へ落して來たぞ」

他の一人がいつた。

「どこらだんべ」

落したと思つた一人は熱心に聞いた。

「西から三番目の畝だ、おめえが大いのを抱へた時ちやらんと音がしたつけが其時は氣がつかなかつたがあれに相違ねえぞ、こつそり行つて探して見ろ」

太十が復た眠に就いたと思ふ頃其一人は三番目の畝を志して蜀黍の垣根をそつと破つては

ひつた。他のものは垣根の外でひそ〳〵と笑ひながら見て居た。蚊帳にくるまつた時太十は激怒した。蚊帳の釣手を作つてまた横になつたが彼は眠れない。自分にも聞かれる程波打つた動悸が五分十分と經つうちにだん〳〵低くなつて彼は漸く忌々しさを意識した。さうして彼は西瓜は赤が居ないから盜まれたと考へた。赤が生きて居たら屹度吠えたに相違ないと思つた。さうして彼は赤を殺して畢つたことが心外で胸が一しきり一杯にこみあげて來た。彼は強ひて眼を瞑つた。威勢がよくて人なつこかつた赤の動作がそれからそれと目に映つて仕方がない。赤がいつものやうにぴしや〳〵と飯へかけてやつた味噌汁を嘗める音が耳にはひつたり、床の下でくん〳〵と鼻を鳴らして居るやうに思はれたり、それにむか〳〵と迫つて來る暑さに攻められたりして彼は只管懊惱した。遠くの方で犬の吠えるのが聞える。それがひどく彼の耳を刺戟する。さうかと思ふと蜀黍の垣根の蔭に棍棒へ手を掛けて立つて居る犬殺しがまざ〳〵と目に見える。彼は相の惡い犬殺しが釣した蓆の間から覗くやうに思はれて戰慄した。彼は目を開いた。柱に懸けたともし灯が薄らに光つて居る。彼は風を厭ふともし灯を若木の桐の大きな葉で包んだ。カンテラの光が透して桐の葉は凄い程青く見えて居る。其の青い中にぽつちりと見えるカンテラの焰が微かに動き乍ら蚊帳を覗いて居る。ともし灯を慕うて桐の葉にとまつた轡蟲が髭を動かしながらがぢや〳〵と太十の心を亂した。太十は煙草を吸はうと思つて蚊帳の中に起きた。蜀黍が少しがさ〳〵と鳴るやうに聞えた。太十は蚊帳を透して見た。其時月はすべてが熟睡した頃とこつそり姿を現はしかけて居た。畑がほのかに明るくなりかけた。太十は動くものを認めた。彼の怒は彼の全心を掩うた。彼は後の方からそつと蚊帳を出た。前方を注視しつゝ草履を穿くだけの餘裕が其時彼の心に存在した。彼は蓆を押して外へ出た。棍棒が彼の足に觸れた。彼はすぐにそれを手にした。さうしていきなり盜人に迫つた。其時は既に盜ではなかつた其不幸な青年は急遽其蜀黍の垣根を破つて出た。體は隣の桑畑へ倒れた。太十は一歩境を越して打ち据ゑた。其第一擊が右の腕を斜に撲つた。第二擊が其後頭を撲つた。それがそこに何も支ふるものがなかつたならば怪我人は卽死した筈である。棍棒は繁茂した桑の枝を傳ひて其根株に止つた。更に第三の打擊が加へられた。さうして赤犬を撲殺した其棍棒は折れた。惡戲の犧牲になつた怪我人は絕息したまゝ仲間の爲めに其の家へ運ばれた。太十は其夜も眠らなかつた。彼は疲勞した。

七

怪我人は蘇生した。續いて腦振盪を起した。其家族は太十を告訴すると息卷いた。其間には人が立つた。太十の姻戚も集つて見たが怪我人の倒れた側に太十の強く踏んだ足跡と其草履とがあつたので到底逃げる處を打つたといふ事實の分疏は立たぬといふのを聞いて皆悄れて畢つた。其内怪我人の危險狀態は經過した。然し全治までには長い時間を要すると醫師は診斷した。告訴を受ければ太十は監獄署の門をくぐらねばならぬと思つて居る。彼はどれ程警察署や監獄署に恐怖の念を懷いたらう。彼はそれからげつそりと窶れて唯とぼ〳〵とした。事件は內濟にするには彼の負擔としては過大な治療代を拂はねばならぬ。姻戚のものとも話つて家を掩ひかぶせた其の竹や欅を伐ることにした。彼は監獄署へ曳かれるのは身を割られるよりもつらかつた。竹でも欅でも何でも惜しくないと彼は思つた。だが其頃はまだ竹や木を伐採するには季節が早過ぎたのと一つは彼の足もとをつけ込

むとで商人の値段は皆廉かつた。有繋に彼も躊躇した。恐怖心が湧起した時は彼には惜しい何物もなかつた。それで居て彼は蚊帳の釣手を切つて愚弄されたことや何といふことはなしに只心外で堪らなくなる。商人は太十に勸めた。太十はそれが餘りに廉いと思ふとぐつと胸がこみあげて

「構はねえ、おら伐らねえ」

と呶鳴つた。

「おれが死んぢまつたらどうも出來めえ」

と更に彼は自暴自棄にかういふやうになつた。唯一人でも衷心慰藉するものがあれば彼は救はれた。習慣はすべての心を痲痺した。人は彼に揄揶ふことを止めなかつた。さうして彼の恐怖心を助長し且つ惑亂した。彼は全く孤立した。

其日は朝から焦げるやうに暑かつた。太十は草刈鎌を研ぎすましてまだ幾らもなつて居る西瓜の蔓をみんな掻つ切つて畢つた。さうして壻の文造に麥藁から蔓から深く掘り込んでうなはせた。文造はぢり／＼と日に照りつけられながら、時節でもない畑をうなつた。太十には西瓜畑が見ることさへ堪へられなかつた。彼は物狂ほしくなつた。彼は鎌をぶつりと番小屋の屋根へ打ち込んだ。薄い屋根を透して鎌の刃先は牙の如く光つた。彼は蚊帳へもぐつてごろりと横になつて絶望的に唸つた。彼は白晝の光を厭つて目を瞑つた。靜かで且つ暑い番小屋には鎌の刃先が凄く白く光つた。文造は止めず鍬を振つて居る。其暑い頂點を過ぎて日が稍斜になりかけた頃、俗に三把稻と稱する西北の空から怪獸の頭の如き黑雲がむら／＼と村の林の梢から突き上げて來た。三把稻といふのは其方向から雷鳴を聞くと稻三把刈る間に夕立になるといはれて居るのである。雲は太く且つ廣く空を掩うて一直線に進んで來る。閃光を放ちながら雷鳴が殷々として遠く聞えはじめた。東南の空際にも柱の如き雲が相應じて立つた。文造は此の氣象の激變に伴ふ現象を怖れた。彼は番小屋へ駈け込んで太十を喚んだ。太十は死んだやうになつて居る。

「北の方はひでえケイマクだ、おとつつあん遁げたらよかねえか」

「うるせえな」

太十は僅にかういつた。彼は精神の疲勞から迚ても動く氣になれなかつた。雲は地上に近く掩ひかぶさつてあたりが薄暮の如く闇くなつた。頰白は塒を求めて慌ててさまよつた。冷氣を含んだ疾風がごうと蜀黍の葉をゆすつて來た。遠く夕立の響が聞えて來た。文造は堪らなくなつた。彼は鍬を擔いで飛び出した。それと同時に屋根へ打ち込んだ鎌の切先が文造の額に觸れた。はつと押へた時文造の手の平は赤くなつた。犬の血に尋いで更に文造の血が番小屋に灑がれた。雨の大きな粒がまばらに蜀黍の葉を打つて來た。霧の如く白雨の脚が軟弱な稻を蹴返し蹴返し迫つて來た。田圃を渉つて文造はひた走りに走つた。夕立がどつと來た。黃褐色の濁水が滾々として押し流された。更に強く更に烈しく打ちつける雨が其氾濫せる水の上に無數の口を開かしめる。忙しく泡を飛ばして其無數の口が囁く。さうして更に其無數の囁が騷然として空間に滿ちる。電光が針金の如き白熱の一曲線を空際に閃かすと共に雷鳴は一大破壞の音響を齎して凡ての生物を震撼する。穹窿の如き蒼天は一大玻璃器である。熾烈な日光が之を熱しては更に熱する時、冷却せる雨水の注射に因つて、一大破裂を來したかと想ふ雷鳴は、ばり／＼／＼と乾燥した音響を無邊際に傳へて、總て其玻璃器の大破片が落下したかと思はれる音響が、づしいんと大地をゆるがして更にどろ／＼と遠く消散する。雨は飛散する玻璃の

粉末の如く空間に濺つて電光に輝く。熾烈な日光が更に其大玻璃器の破れ目に煌くかと想ふ白熱の電光が止まず閃いて、雷は鳴りに鳴つて雨は降りに降つた。さうしてからりと晴れた時、日はまだ西の山の上に休んで閉塞し困憊せる地上の總てを笑つて居た。文造が畑に來た時いつも遠くから見えた番小屋の屋根はなかつた。小屋は燒けて居た。四本の柱は焦げた儘地に立つて居た。其他は灰になつて濕つて居た。家族のものが驅けつけて夕日の光に灰を掻き分けた時、仰向になつた儘爛れた太十の姿を發見した。有繋に雷鳴を恐れたと見えて兩手は耳を掩うて居た。屋根の裏に白い牙をむいた鎌が或は電氣を誘うたのであつたらうか、小屋は雷火に燒けたのである。小屋に火の附いた時はもう太十は何等の苦痛もなく死んで居た筈である。たつた一人野らに居た一刻者の太十はかうして僅かの間に彼の精神力を消耗した。更に大自然の威力は氣象の激變を驅つて眇たる彼の恐怖心に强烈なる壓迫を加へた。同時に其單純な生涯から葬り去つた。犬の毛皮を貼つた板は俯向に倒れて居た。さうして板の裏が僅かに焦げて居た。

(明治四十三年二月)

雲の峰

おしなべて豆は曳く野に雲の峰あなたにも立てばこなたにも見ゆ

雲の峰ほのかに立ちて騰波の湖の蓴菜の花に波もさやらず

(明治三十七年)

晩秋雜詠

即興十八首

芋がらを壁に吊せば秋の日のかげり又さしこまやかに射す

秋の日に干すはくさぐさ小鍋干す箒ぐさ干す張物も干す

葉鷄頭に藁おしつけて干す庭は騷がしくしておもしろきかも

葉鷄頭は籾の莚を折りたたむゆふべゆふべにいやめづらしき

荒繩に南瓜吊れるうつばりをけぶりはこもる雨ふらむとや

はらはらと櫃の實ふきこぼし庭の戸に慌しくも秋の風鳴る

おしなべて折れば短くかがまれる茶の木も秋の花咲きにけり

茨の實の赤びあけびに草白むみぞの岸には稻掛けにけり

黄昏の霧たちこむる秋の田のくらきか方へ鴫鳴きわたる

こほろぎははかなき蟲か柊のはなな散りても驚きぬべし

紅の二十日大根は縄のごとなかむなにして秋行かむとす

咲きみてる黄菊が花は雨ふりて濕れる土に映りよろしも

此頃は食稍もうまし秋茄子の味もけやけし足らずしもなし

繩結ひて絲瓜を浚てし水際の落ち行くごとく秋は行くめり

夜なべすと繩綯ふ人よ鍬掛の鍬の光はさやけかるかも

美しき籠の黄菊のへたとると夜なべしするを我もするかも

蔕とればほけて亂るるさ莚の黄菊が花はともしかかげよ

障子張る紙つぎ居れば夕庭にいよいよ赤く葉鷄頭は燃ゆ

(明治四十年)

炭燒のむすめ

一

低い欅の木に藤の花が垂れてる所から小徑を降りる。炭燒小屋がすぐ眞下に見える。狹い谷底一杯になつて見える。あたりは朗かである。トーン〱といふ音が遙に谷から響き渡つて聞える。谷底へついて見ると紐のちぎれさうな脚絆を穿いた若者が炭竈の側で樫の大きな榾へ楔を打ち込んで割つて居るのであつた。お秋さんが背負子といふもので榾を背負つて涸れた谷の窪みを降りて來た。拇指を肋の所で背負帶に挾んで兩肘を張つてうつむきながらそろそろと歩く。榾は五尺程の長さである。横に背負つて居るのだから岩角へぶつつかりさうである。尻きりの紺の仕事着に脚絆をきりつと締めて居る。さらして白い顏へ白い手拭を冠つたのが際立つて目に立つ。積み重ねた榾の上へ仰向になつて復た起きたら背負子だけが仰向の儘榾の上に殘つた。お秋さんは荷をおろすと輕げに背負子を左の肩に引つかけて登る。こちらを一寸見てすぐ伏目になつた。矢つ張そろ〱と歩いて行く。榾を運んで仕舞つたら楔で割つたのを二本三本づつ藤蔓の裂いたので括りはじめた。兩端を括つて立て掛ける。餘つ程重さうである。これが即ち炭木である。女の仕事には隨分思ひ切つたものだと思つた。

小屋へ腰を掛けて居ると鶺鴒が時々蟲を銜へて足もとまで來ては尾を搖しながらついと飛んで行く。脇へ出て見ると射干が一株ある。射干があつたとて不思議ではないが爺さんの説明が可笑しいのだ。山の中途でいかな時でも水が一杯に溜つて居るので一杯水といつてる所がある。そこに此草があるので、極暑の頃になると赤い花がさくのだと頗る自慢なのである。それで唯赤い花がさく草と思つて居るに過ぎない。可笑しいといつてもこれだけだ。

谷底の狹いだけに空も狹く見える。狹い空は拭つたやうである。其蒼天へ向いてすつと延びた欅の木がある。根の生え際が小屋の屋根からではずつと上にあるので猶更に延びて見える。梢で小鳥が啼き出した。美音である。何だと聞いたら爺さんが琉璃だといつた。さうして解らぬことをいつた。小屋へ二つもくふのは珍らしいことだ。一つがくふと安心だと思つて鶺鴒がまたくつたのだ。つまり人間を手頼るのである。然しあんまり覗くと蛇が狙つていかぬ。かういふことを云つたのである。不審に思つたから再び脇へ出て見たら、杉皮が僅に雨を覆うて居る檐端の手の屆く所に鳥の巢が二つならんである。射干のすぐ上である。子鳥はどつちも毛が十分に延びて居る。巢は思ひの外に粗末で草がだらけ出して居る。曩に出て見たので見つかつたことと思つたに相違ないのだ。早合點をしてあんなことをいつたのだ。自分は竊に微笑せざるを得なかつた。辨當をつかふのでお秋さんがお茶を汲んで山芋を一皿呉れた。お秋さんは草鞋をとつた丈で脚絆の儘疊へ膝をついて居る。自分へ茶を出すため態々あがつたのだ。なぜだといふと土瓶へ二度目の湯をさしたらすぐに草鞋を穿いたからである。山芋は佳味かつた。山芋の續きが猪へ移つた。清澄には猪が居る。猪は山芋が好きで見つけたら鼻のさきで掘つて仕舞ふ。「うつかりすると曲角などで鼻のさきを眞黑にしたのに出つかはすことが

あります」とこれは爺さんの愛嬌噺である。「あの雨の降る日などにはそこらの木まで猿がまゐります」とお秋さんが傍からいつた。お秋さんは滅多にいはぬ。自分は何か物をいはして欲しかつたのだから、絲口が開けた樣に思はれてこれだけが滿足であつた。射干が急に延び出して赤い花が目前に開くのを見る樣な心持である。これが谷の二日目である。

二

炭を出す所である。炭竈の口を突き崩したら焔がぽつと一時に吹き出した。自分は思はず後へ下つた。炭竈のなかは眞赤ならちに黃色味を帶びた烈々たる凄じい火である。樅の二間餘の棒のさきへ鍵の手をつけたのを以て爺さんがそれを掻き出さうとする。炭竈の前は眉毛も焦げるかと思ふ程熱い。こんな大きな棒が果して使ひこなせるものかと怪しみながら見て居ると、天井から藤蔓で自在鍵のやうなものをさげた。樅の棒はこれへ乘せ掛けたので差引が容易になる。案外な工夫である。これだから重い方が落ちついて扱ひいゝのだと笑ひながら鍵の手を眞赤な炭に引つ掛ける。炭の折れることがあるとかちんと石のやうな響がする。樅の棒は見るうちに火がついてぽつぽと燃える。燃えても構はずに掻き出す。遂にはじうつと傍の流へ突つ込んで、更に水に浸して置いた鍵の手で掻き出す。少し掻き出すと一つに寄せてそれへ灰を掛ける。一遍出したら爺さんの顏も燒けた樣に眞赤になつた。何時でも拔いだことの無い臘虎の帽子をとつてだら〳〵と流れる汗を拭いて居る。臘虎の帽子は毛が七分通も落ちて居て汗の爲に餘つ程堅くなつて居るだらうと想像されるだけの品である。

お秋さんはどこからか青葉のついた小枝をがさがさといふ程掻つ切つて來た。炭は既に灰から掻き出されてあつたがお秋さんは直炭の碎けを篩ひ始めた。乾燥し切つた灰は容赦もなく白い手拭へ浴せかゝる。それで粉炭がどれだけ有つたといふと俵の底が隱れるだけであつた。直に炭を俵へつめる手傳にかゝる。青葉のついた小枝はぐるつと丸めて俵の尻へ當てるのであつた。

お秋さんはこんなに忙しく仕事をして居たと思つたら、ふと見えなくなつた。自分は谷が急に寂しくなつた樣に感じた。尋ねるといふでもなく昨日炭木の運ばれた窪みを登つて行つた。眞急な崖へ瘤のやうにいくつもぼく〳〵出た所に、草鞋で踏んだ樣に土のついた趾がある。瘤へ手を掛け足を掛け登る。お秋さんはそこの窪みに獨で枯木を挽いて居た。傍にはもう十本ばかり薪が積んである。窪みは深さも大きさも皿程である。密生した樹立は雫も滴るかと思はれて薄暗い。自分は薪へ腰を掛けた。お秋さんの手拭の絲目の交叉して居るのまでがはつきり見えるまでに近寄つた。お秋さんは兩足を延して左を枯木へ乘せて居る。鋸を押したり引いたりする毎に手拭の外へ垂れた油つ切れたほつれ毛がふら〳〵と搖れる。懶い樣な鋸の音の外には何の響も無い。お秋さんは異樣な眞面目な顏で鋸から目を放さない。自分も腰を掛けた儘ほつれ毛と白い襟元とを見詰めて居るばかりである。物をいふのも惡いが默つて居ても却て極りが惡い。構はずにずん〳〵話を仕掛けたら善いぢや無いかといつたつてそりやさうはいかぬ。兎に角自分から口火は切つた。どんな事で口火を切つてどんな懺悔に進行させたかといつたつてそれも言へぬ。お秋さんは餘計にはいはぬ。何處までも愼ましいのである。唯かういふことがあるのだ。此山落では虹をあんご」といふことや、蟷螂をけんだんぼうといふのだといふことやである。それから茸採り

に行つて澤山あるといふことを「へしもに〳〵ある」といふのだといふことであつた。これでは失はずにはゐられなかつた。自分は忘れた時の爲めにと思つて手帳を出したら偶然どこかの盆踊唄といふのが書いてあつたのを見つけた。「ことしの盆はぼんとも思はない、からやが焼けて、もかりがぶつこけて、ぼん帷子を白できた」といふのである。これを聞かしたら「ぼん帷子を白できた」といふのを繰り返しながら暫くは鋸の手を止めて居る。さうして自分を見た時にはいくらか寂しみを帯びた温かい微笑を含んで居つた。此所にもこんなのが有りますといつて「大澤行川の嫁子にならば花のお江戸で乞食する」といふのを低い聲でいつた。謠つたのではない。謠へば面白いのだが、お秋さんには迚てもそんなことを爲せて見ようつて出來ないから駄目だ。それどころではない。少し聞き取れぬ所があつたので折り返して聞いたら赤い顔をして仕舞つたのである。これが谷の三日目である。

三

一日抜けて五日目になる。宿で麥酒の明罎へ酒をこめて貰つた。八瀬尾へ提げて行くのだ。爺さんの晩酌がいつも地酒のきついので我慢して居るのだと知つたからである。樟の造林から廻る積りで道を聞いて行つた杉の木深い澤を出抜けたら土橋へは出ないで河の岸へ降りて仕舞つた。變だと思つたが向うの岸に人の歩いたといふ樣な趾が見えたから水を渉つて行つて見た。芒や木苺が掩ひかぶさつた間に僅に身を窄めて登るだけの隙間がある。段々行くと木苺の刺が引つ掛る。荊棘はいよ〳〵深くてとても行かれる所でない。酒の罎も岩へ打つつけたらそれ迄である。木苺を採つて食つた。黄色い玉のふは〳〵として落ち相になつたのは非常に甘い。木苺といつても六尺もあるのだから手を延して折り曲げねばならぬ。ふと自分の近くの青芒の上に枝がかぶさつて眞黄な花のさいてゐるのに氣が着いた。皂莢のやうで更に小さい軟かな葉が簇つて花はふさ〳〵と幾つも空を向いて立つてゐる。すぐさま枝に手を掛けると痛い刺が立つた。放さうとしても逆さに生えた刺なのですぐには放れぬ。漸くで二房三房とつた。豆の花と同じ形のが聚つてゐるのである。少し隔つてから振り返つて見ると滴る樣な新緑の間にほつ〳〵と黄色い房のあるのは際立つて鮮かであつた。あとで聞いたら雲實とも黄皂莢ともいふ花であつた。

岸が高いのに水が淺いといふのであるから兎にも角にも川をのぼつて行くことにした。樟の造林へは諦めをつけたのだ。季節は急に暑くなつて一兩日このかた單衣に脱ぎ替へたのであるから水を行くのは猶更心持がよい。ころころといふ幽かな樣な聲がそこゝに聞える。ぼしやぼしやと音を立てて行くと近い聲がはたと止つて何か知らぬが水へ飛び込むものがある。能く見ると底に吸ひついてゐる。そつと近づいて急に上から押へつけて捉へた。鮭に似て痩せこけたるものだ。自分は必ず河鹿であると悟つた。河鹿に極つてゐるのだ。圖解以外に河鹿を見るのは今が始めてで素より捉へて見たのもはじめてである。幽かなやうな聲は河鹿の聲であつたのだ。自分は嬉しくて堪らなかつた。水の淺く且つ清いにも拘らず河鹿は底に吸ひつくと隠れた積りでぢつとして動かぬ。自分は面白い儘に二三匹ばかり採つた。さうして水際に生えてる蕗の葉を採つてそつと包んで蕗の葉で括つた。疎らな杉の木立の中に絲のやうな菜種のひよろ〳〵と脊比べをして咲いて居る所へ出た。此處までは二三日前に來たことがあつたから八瀬尾の近いことも分つて安心をした。お秋

さんは一人で醋酸石灰――之はどういふものかといふと炭竈の煙を横につないだ土管のなかを潜らせれば、煙は其間に冷却して煙り臭いひどくすつぱい液體になる。其すつぱいことといつたら顫へあがるやうだ。これが木醋といふので、これへ石灰を中和して仕上げたのが醋酸石灰で曹達で仕上げたのが醋酸曹達となるのだ。説明はもう十分として置く――を造つて居た。酒の罎はお秋さんの手へ渡した。お秋さんはまあ濟みませんといひつゝ丁寧に辭儀をしてすぐに炭竈の方へ行つた。河鹿は傍の水へ放した。鳴けばお秋さんが聞くのだ。毎日自分と一所にお秋さんの許へ落ち合つた島の人は此日はとう／＼來なかつた。島といふのは佐渡のことで、佐渡の國から造林の見習に來て居る男で、佐渡には金北山といふ山がある筈なのにどうしたものかこんな山へ來てこれ程大きな峻しい山はまだ見たことが無いといつて驚いて居る男である。苗字が「けら」といふのだとかで蟲のやうな面白い人ですねとお秋さんがいつた男である。此男が來なかつたので何故だか心持がよかつた。

お秋さんは自分が樟の造林へ行かれなかつたことを非常に氣の毒に思つたらしかつた。爺さんも爐の側へ來て居てお秋さんの弟に案内をさせようといふのである。爺さんは小屋へ來れば乾度爐の側に坐る。暑くつても坐る。弟といふのは體が圖抜けて大きいのでまだ十五だといつても自分よりは目から上程も大きい。のつそりとして草履の下へ入れた小石をごり／＼とこすつてゐて行くとも行かぬともいはぬ。恥かしいのだ。お秋さんが脇へ連れて行つて何かいつたらそれで行くといふことに成つた。草履の丈夫なのをと探して居る。かうして居る所へ汚い着物を着た十三四の男の子が山桑を摘んで網に入れたのを背負つて登つて來た。お秋さんの側に寢て居た白犬が其子の足もとへ突然噛みつく様に見えた。男の子は泣き出し相になつて自分等の所へ駈けて來た。お秋さんは赤い顔をして微笑しながら白を叱つた。叱つたといつてもやつとのことでいつたまでだ。白は再びお秋さんの側へ寢た。男の子の手に持つて居るのを取つて見たら楢の柔かに延び出した小枝のさきに青い團子のやうなものが二つくつついて居るのである。楢の木にはよくあるのである。お秋さんはそれを見て「ふぐり見た様ですね」といつた。自分は意外であつた。お秋さんは眞面目である。能く聞いて見たらふぐりといつたのは鳶のふぐりといふことで蟷螂の卵のことだ相である。

四

六日目は谷も畢りの日である。此日は極めてはや／＼行つた。自分は既に八瀬尾の谷を辭する積りであつたがお秋さんが自分の爲めに特に醋酸曹達を造つて見せるといふ事であつたから一日延すことにしたのである。お秋さんはもう仕事場に支度をして居る。爺さんは竈の側であつたが何か冴えない顔である。聞いて見ると小さな變事が起つたのだ。それは琉璃の子が一匹[illegible]りに居たくなつたといふ事なのである。夜明に蛇が來たに違ひない。昨日籠へ取らうと思つて居たのに少しの油斷でいま／＼しいことをしたと惜しまれる。親鳥は低い木の枝に止つてまだ騒ぎがやまない。怒を含んだ形であらうか、上へ反らした尾を左右へ動かして居る。鶺鴒までが小さな聲で鳴きまはつて居る。

此日は忙しくないと見えて爺さんは爐の側に居て種々な雜談を仕掛ける。何時か杢瑞の方は忘れて山口屋の風呂は世間に二つはあるまいといふ様なことをいつて笑ふ。自分の宿のかみさんといふのは、大變な氣違で、犬に床まで敷いてや

るといふ位な變な人間であるから風呂までが變つて居るといふ譯ではあるまいが兎に角變つて居るのである。表の障子は崖と相對して崖には洞穴がある。風呂は其洞穴の中だ。宿の女に案內されて闇い所へ這入つた時は妙な心持であつた。着物を脫げといはれて見ると板の間がある。ぼんやりながら段々に物が見えて來るといふわけで、六疊間位に刳り拔いてあるのが焚火の煤で餘計に闇くなつて居るのだ。誰でもはじめは妙な心持がするであらう。

お秋さんの造つた曹達は純白雪の如き結晶である。これは食料の醋酸を造る原料である。下手がやると醬油のやうな色になることがある相だ。曹達を造つたら暇に成つたと見えて小屋へ來て腰を掛けた。手拭を外した所を見ると髮はぐる〳〵卷で、今日は珊瑚のやうな赤い玉の簪を一本插して居る。自分は考へた。お秋さんはまだ年が若いのであるに草鞋拵で毎日毎日仕事に日を暮して居るのである。欲しいものがあつたとて此狹い谷底にばかり住んで居る身に何の役に立たう。手拭だけが身だしなみである。白い手拭は平生に於ける唯一の裝飾品である。仕事といふのが隨分骨が折れる。薪を採つてそれを眞木割で裂いて干して置く。石灰に塊があれば臼で搗いて置く。忙しい暇には炭俵を坂の中途の小屋まで背負ひあげる。醋酸石灰でも曹達でも特別の技倆があるので其製品は名人で賣り出されて居るのであるが、一日の給料といつたら僅に二十錢に過ぎない。それで老父を助けて忠實に勞働して居るのである。お秋さんは鼻筋の慥な稀な女である。然し世間の若い女の心に滿足と思はるべきことは一つも備はつてない。から思ふと何となく同情の念が思はず起るのである。

自分が暇を告げて出たらお秋さんは背負子を負うて坂の中途まで行つて居た。坂を登らうとする時自は追ひ返されて降りて來た。自分は忽ちに追ひついた。さうしてお秋さんは何處まで行くのか知らんが、歩かれるだけ一所に步く積りで成るべく靜に足を運んだ。お秋さんは「私と一所では暇がとれて迷惑でございませう」といつて頻りに急ぐ。身一つでも容易でないのに能くも足がつゞくものだと思つた。「此所へ鹿が立つて居たことがあります」と杉の木の下でいつた。そこには刺がびつしり生えて白い花のさいた極めて小さな木があつた。眞赤な枸杞の實のやうなのがたつた一つ落ち殘つて居る。珍らしいから一枝折つたら「ありどほしの花でございます」とお秋さんが又いつた。坂を登り切つたら流石に息苦し相に胡蝶花の花の疎らな草の中へ荷を卸した。背負子を負ふために殊更小さな綿入のちやん〳〵を引つ掛けたので體が何時もより小柄に見えた。手拭をとつたら顏が赤らんで生え際には汗がにじんで居た。うらゝかな日に幾らかの仕事をしてぽつとほてつて來た時は膚の色の美しさが增さるのである。白いものは殊更に白く見える。「あれこんな所に藤の花が」と樅の木を見てお秋さんがいつた。藤は散つたのもあつて房はもう延び切つてゐる。

樟の大木が掩ひかぶさつて落葉の散つてある所を出拔けると豁然として來る。雨方が溪谷で一條の林道は馬の背を行く樣なものだ。雨側には樅の木の板がならべて干してある。いくらかの臭みはあるが眞白な板は見るから爽かな感じである。足もとから谷へ連つて胡蝶花の花がびつしりと咲いて居る。「あなた一寸待つて下さい」といはれて振り返ると「大層臭いやうですがアルコールは零れはしますまいか」といふのである。背中の甕の中には木醋から採つたアルコールが入れてあつたので、體の搖れる度にいくらかづつ吹き出すのであつた。お秋さんは

右の手を拔いて左の肩で背負子を支へて左の膝を曲げてそつと地上に卸した。持つてゐて呉れといふので自分は背負子を支へてゐる。一寸引つ立てて見たら重いのに喫驚した。お秋さんは手頃の石を見付けて來て栓を叩き込んだ。

小さな山々が限りもなくうね／＼と連つて居る。格外の高低もない。峰から峰へ一つ／＼飛び越して見たいと思ふ程一帶に見える。渺茫たる海洋は夏霞が淡く棚曳いたといふ程ではないがいくらかどんよりとして唯一抹である。ぢつと見て居ると何處からか胡粉を落したといふ樣にぽちつと白いものが見え出した。漁舟である。二つも三つも見え出した。白帆はもとからそこにあつたのだ。尚ぢつと見つめて居るとぽちつと白いのが段々自分へ逼つて來るやうに思はれる。遠くはすべてがぼんやりである。谷の梢や胡蝶花の花や樅の眞白な板や近いものは近いだけ鮮かである。さうして最も近いものはお秋さんである。お秋さんは背負子を岩の上に乘せてくるりと背中を向けて背負つた。

妙見越を過ぎると頂上で、杉の大木が密生して居る。そこにも羊齒や笹の疎らな間をほつほつと胡蝶花の花がさいて居る。一層しをらしく見える。清澄寺の山門まで來ると山稼ぎの女が樅板を負うたのや炭俵を負うたのが五六人で休んで居る。孰れも恐ろしい相形である。山稼ぎの女はいくらあるか知れぬがお秋さん程のものは嘗て似たものさへも見ないのである。彼等とならんだお秋さんは恰も羊齒の中の胡蝶花の花である。寺の見收めといふ積りで山門をのぞいて見たら石垣の上な一畝の茶の木を白衣の所化が二人で摘んで居る所であつた。山門の前には茶店が相接して居る。自分は一足さきに出拔けて振り返つて見たらお秋さんは背負子を負うた儘婆さん達に取り卷かれて話をして居る。たま谷底から出て來ると互に珍らしいのだ。お秋さんは人に好かれるといふのは極つて居ることなのだ。攫へて放されないのだらうと思つた。自分は規則正しく植ゑられた櫻の木の青葉の蔭に佇んで待つて見たがどういふものかお秋さんは遂に來ない。然し茶店まで戻つて見るといふこともしえなかつた。自分は急に油が拔けたやうな寂しい心持になつて宿へ歸つた。

清澄山は自分にはすべてが滿足であつた。然しお秋さんと言葉を交して別れなかつたことはどうしても遺憾である。針へ通した絲のうらを結ばないやうな感じである。

（明治三十九年七月）

房州行

二十四日、清澄の八瀬尾の谷に炭燒を見に行く

清澄の山路をくれば羊齒交り胡蝶花の花さく杉の芝生に

樟の木の落葉を踏みて下りゆく谷にもしげく胡蝶花の花さく

二十八日、清澄の谷に河鹿を探りてよめる歌八首のうち

萱わくるみちはあれども淺川と水踏み行けばかじか鳴く聲

黄皂莢の花さく谷の淺川にかじかのこゑは相喚びて鳴く

鮠の子の走る瀬清み水そこにひそむかじかの明かに見ゆ

我が手して獲つるかじかを珍らしみ包みて行くと蕗の葉をとる

かじか鳴く谷の茂りにおもしろく黄色つらなる猿かけの花

さるかけのむれさく花はかじか鳴くさやけき谷にふさはしき花

八瀬尾の谷に日ごと炭燒人をおとづれてよみし歌のうち一首

こと足りて住めばともしも作らねど山に薯蕷掘り谷に蕗探る

（明治三十八年）

佐渡が島

一　濱茄子の花

佐渡は今日で三日とも雨である。小木の港への街道は眞野の入江を右に見て磯について南へ走る。疎らな松林を出たりはひつたりして幾つかの漁村を過ぎてしと〳〵と沾れて行く。眞野の入江は硝子板に息を吹つ掛けた樣にぼんやりと曇つて居る。其平かな入江の沖には暗礁でもあるものと見えて土手のやうに眞白な波の立つて居る所がある。遠くのことであるから唯眞白に見えて居る丈でちつとも動く樣には見えぬ。此入江を抱へた臺が鼻の岬が遙かに南へ突出して霧の如く淡く見えて居る。沖の白い波が遠ざかつてしまつて更に幾つかの村を過ぎると對岸の長い臺が鼻の岬もだん〳〵に後へ縮まつて外洋がぼんやりと表はれ出した。だら〳〵坂を上つたらすぐ足もとに小さな漁村があつた。汀には家をめぐつて林の如く竹が立ててある。竹は枝も拂はずに立ててあるのであるが悉く枯れて居るので葉は一葉もついて居らぬ樣である。此所は既に外洋を控へて居るので潮風を防くために此の如きものが一杯に立てられてあるものと見える。佐渡は到る所が物寂びて居るが此の漁村はまた格別である。秋といつてもまだ單衣で凌げるのに此濱は冬が來たかと思ふ程荒涼たるさまである。村へおりると穢い家ばかりで中に一軒夫婦で網絲のやうなものを縒つて居る所があつた。そこで土地の名を聞いたら亭主が皺嗄れた聲で西三河といふ所だといつた。ふと檐端を見ると板看板に五色軍談營業と書いてある。軍談師が內職に絲を縒つて居るので軍談師だから聲が變なのだと思つた。夫でも五色軍談が了解されぬので再び聞いて見ると三味線なしで語るのが只の軍談で三味線のはひるのが五色軍談だといつた。余は更にそれでは此の女房が三味線を彈くのだなと心の中に思つた。

此の漁村についてすぐに徒渉しえらるゝ程の小川があつて形ばかりの橋が架つて居る。橋を渡ると海中には突兀として岩石が峙つて居る。あたりのさまが此のなだらかな一帶の浦つゞきには極めて稀である。左は丘陵が直ちに海に迫つて急に低くなつて居る。低い所が汀でそこに街道が通ずる。路傍を見ると漸く乳房のあたりまであるかなしの灌木がむら〳〵と簇がつて居る。其灌木の眞青な葉には赤い花が咲き交つて居る。此が玫瑰の花で玫瑰の木は枝も葉も花も一切が薔薇の木と異ならぬ。唯海邊に自然に生長して居るだけ枝も葉もひねびて一段の雅致を帶びて居る。枝には刺があるので余はそつと指の先で花を折つたら花がほろりと草の中に落ちた。腰を屈めて落ちた花をとらうとすると何だか世間が急に靜かになつた樣な氣がした。不審に思うて立つて見ると世間が復た素の如くにざあ〳〵と騷がしい。此は歩いて居る間は雨が笠に打ちつけるので耳もとが絶えず騷がしかつたのだが腰を屈めると笠が竪になつたので急に靜かさを感じたのであつた。笠が竪になるまで空を仰いで見たら矢張り靜かになつた。濱茄子の花は採れるだけ採つて雨の濕ひを保つて手帳へ挾んでシャツの隱しへ押し込んだ。

小木の港へ辿りついたのは黄昏近くであつた。相川の町では木賃のやうな宿へ泊つて流石に懲り〳〵したのであつたから此所では見掛の

一番いゝ宿へ腰をおろした。女が表の二階へ案内する。すぐにランプを點けて來た。室内が急に明るくなる。此宿はまだ新築して間もないと見えて木柱から疊から頗る清潔で心持がよい。掃除したランプのホヤが殊に目につく。女は更に茶を出して呉れる。氣がついて見ると此女に驚くばかりの美人であつたのだ。まだ二十には過ぎまいと思ふ。佐渡のやうな豫想外に寂しい島へ渡つてこんな美人に逢はうとは全く思ひも掛けぬ所であつた。美人といふ以外に此女を形容の仕様はない。余は一日雨を凌いだ爲め單衣もズボン下も濡れきつて旅裝が一層みすぼらしくなつて居るので此女に對して何となく極りの惡いやうな心持がした。障子を開けて女の出て行く所を見ると紺飛白の單衣の裾に五分ばかり白いものの出て居るのが目についた。女の出て行つたあとで余は直ちに帯を締め直した。然し一日尻端折つた單衣の縮んだのはどうしてもうまくは延びなかつた。さうして余は手帳に挾んであつた玫瑰の花を出して一つ一つランプの下に並べた。障子を開けて出ると帳場がすぐ下に見おろされる。此帳場といふのは天井を一つぶち拔いてあるので其天井は二階の天井と一つに成つて居る。夫故二階の客間から出ると勾欄があつて勾欄の下に帳場が見おろされるので帳場の棧敷から土間を見るやうに出來て居るのである。帳場のさきには勝手が見える。竈の傍ではさつきの女が串へ立てた魚の切身のやうなものを燒いて居たがそれを箸でおさへて皿の上で串を拔いたら箸を外して四つに折つて帯の間に挾んだ。左にお鉢を抱へて右に膳を持つて立ち上つた。余はそつと障子を締めて蒲團の上へ坐つた。此夜は客といふのは余一人であるので別に支度もしなかつたから冷たくなつたが此で我慢をして呉れというて茶碗には小豆飯が堆くつけてある。女を見ると紺飛白の單衣に白地を重ねて居るのであつた。さつき裾から白く見えたのは此白地の丈が長かつたからに相違ないのだ。紺飛白も幾度か水をくゞつて紺が稍うすぼけて居る。此野暮臭い支度をして居ながら女は端然として坐つて居る。やつぱり美人である。余が箸を手にした時に女は玫瑰の花に氣がついてそれを手にとる。共に何處で採つた花かと聞くので余は途中の何とか河の濱岸でとつたのだといふと「美しいものでございますノ、花といふものは、花を見て居るとなんにも要らんやうな氣が致しますノ」といひながら指の尖で花瓣を掻き分けながら鼻へあてたりして「こんないゝ花が濱邊にひとりで咲くのでございませうか」といつて嗅いで居る。女は指の先までも色が白い。「葉も賤しい葉ではございませんノ」といつて感に堪へたまゝである。花を抱へるやうに出た葉はぎつしりと幾重にも重つて居る。其紅さはともし灯の光に更に鮮かである。余は此女が花の美しさを褒めようとは寧ろ意外であつた。余は小豆飯に箸をつける。菜は冷たい丸煮で極うまくもない。堆い小豆飯には[illegible]團塊した。小豆飯の塊が思はずほろりと膝へ落ちた。見られはしないかと思つてみると美人は玫瑰の花を手にした儘落した小豆飯には氣がつかぬ樣子である。

二　美人

翌朝女が茶を持つて來た處を見ると折目のついた紺飛白の單衣に帯をきりつと締めて裾に白地が覗き出しては居なかつた。[illegible]支度した後女は余を導いて三階にのぼつて行つた。三階は雨戸が立てきつた儘で暗い。障子だけがほのかに白い。雨戸の隙間から細くさして居る光は障子へ赤く映つて居る。女は南の戸袋の所でサルを外して戸を一枚あける。雨の霽りで

戸は意外に堅くなつて居る。兩手へ力を入れて漸くのことで二尺ばかりあけた時に女の手の平は赤くなつた。外を見ると明るい空は青く澄んで一片の雲翳もない。佐渡は漸く晴れたのである。三階の下からは瓦屋根がつゞいて其先は小さな入江である。碇泊して居る船の檣が汀に近く五六本立つて居る。昨日の浦といふのが此の入江のことである。入江の右は畑らしい岡が岬のやうに出て其先に樹立の繁茂した小さな島がある。女は岡を指して「アレは畑でございますがノ、アノずつと出ました先の蔭の所は磯でございましてアノ島は矢島經島と申しましても一つは此所からでも隱れて見えませんが其島と丁度向合つてせなに居ります所に冷たい水が湧いて出ますので夏になりますと小木のものがあの處へ素麺冷しにまゐります」といふた。必ず素麺を持つて遊びに行くといふのが感じがいゝ。余は此の女に白地の浴衣を着せて白い手拭をかぶせて素麺をさらさして見たいものだと思つた。三階から見る小木の港は新築した家ばかりで三階のすぐ下には僅ばかりの空地があつて燒木杙が立つて居る。傍には小さな土藏が燒け殘つたといふやうに壞れた壁が赤く焦げて居る。女のいふに小木の港は遠からぬ前に大火があつた。火は此の燒木杙の邊から發したので此宿は眞先に燒けて家人は何一つ救ふことが出來なかつたとのことである。「單衣位でございますとノ、どうもなりますが冬の物はよう出來ません」と女はいふのである。女の衣物も丸燒になつたのである。女は余が今日の行く先を尋ねるので余は赤泊の濱まで行く積であるが途中に大崎といふ所がある筈だから其所で博勞の家をたづねようと思ふのである。其博勞といふのは此佐渡へ渡航の汽船で知己になつて夷の港では枕をならべて泊つた事があるのだといふことまで噺をすると赤泊ならばもう近い故ゆつくりしても決して大事ないといつて更に「博勞さんといふのは小柄で大きな聲を出す人でございませう」といつた。さうだそれで厭な男だといふと「アノ博勞さんが何時か途中から雨に逢うたと申しまして蓑を頭からかぶつて參つたことがございます。佐渡には道中蓑と申すのがございましてノ、大きな荷物の上から掛けましても荷物が濡れんやうに出來て居りますのでございます。博勞さんは頭から冠りましても泥を引き擦るやうになりますので蓑が歩くやうだと申してみんなが笑ひましたのでございます」と女は思ひ出して堪らぬといふ樣に笑つた。余は思はず女を見ると女も同時に余を見た。見た目にはまだ笑を含んで居る。余等は二尺許に開けた雨戸の間から顔の擦れ合うた儘外を見て居たのである。向き合うて見るとあんまり近いので急に何だか面ぶせに感じたので余は視線を逸らして其口もとを見た。口には鮮かに紅がさしてある。余は此の如き場合の經驗を有して居らぬので只兀然として女のいふことを聞いて居るのである。女は唯無邪氣に避らふ所もないやうた態度である。それ丈余は更に平氣で居憎い氣持がした。譬へていへば女は凌　霄である。凌　霄はふしくれ立つた松の幹でも構はずに絡みかゝる。松の幹がすげなく立つて居てもずんずんと匍ひのぼつて梢からだらりと蔓を垂れて其處に美しい花を開く。其花は此女が一つ噺をして又噺をするやうに落ちては開き落ちては開いて自ら飽くまでは其赤い大きな花が咲いて止まぬ。余は自ら凌霄にからまれた松の幹のやうな感じがした。凌霄のやうだと思ひながら復た女を見ると此度は四本の指を前へ向けて勾欄へ兩手を掛けて一心に燒木杙を見おろして居る。余は其白い横顔をしげ〳〵と見守つた。さうして此優しい靜かな昨日の浦を前にして何時までも唯立つて居たいやうな心持がした。

其時丁度帳場で呼ぶ聲が幽かに聞えた。倦かぬ美人は三階を去つてしまつた。余も二階へ還つて冷え切つた茶を喫つた。

雨掛の荷物を手に提げて梯子段をおりて行くと女は既に洗濯してすつかり乾かした脚絆を出してくれた。底の拔けた足袋も一所に置いてある。足袋にはまだぬくもりが殘つて居る。今まで火へ翳して乾かしてあつたに相違ない。女は更に土間へおりて新しい草鞋の紐を通して小さな木槌で其草鞋をとん／＼と叩いて呉れた。さうして余の後ろへ廻つて雨掛の荷物の上から蓙を着せてくれようとする。然しこの着せて貰ふことだけはしなかつた。何故だか默つて着せてもらふことがしえなかつたのである。其時の心持は後では自分にも分らぬ。蓙だけは昨日の雨でぬれた儘強ばつて居る。草鞋の代が幾らかと聞いたら此は一足進上するのであるから代は要らぬといふ事であつた。女は又赤泊の街道へ出る處まで教へてくれるといふので二三町余と共に附いて來た。電信柱から左へ曲ると此からは一筋道で赤泊より外には何處へも行きやうはないからどうぞゆつくりお越しなされと辭儀をする。余は此時もしみ／＼美人だと心に深く思ひ乍ら女の姿を見た。

街道は磯へ出る。薄霧の中に越後の彌彦山が眞向に見えてそれから漸く下つて稍遠く米山が見える。其に大きな島の如くに聳えて居る。海は極めて平らな凪である。渚の岩のめぐりに纔に動く波が日光を受けて金の輪を投げたやうにきら／＼と光る。汀に近い蕎麦畑には蕎麦の花が眞白に咲き滿ちて居る。さら／＼と輕くさし引く波が其赤い莖のもとへ差し込んでは來ないかと思ふ程汀に近い畑である。

三　南瓜

街道は小山の間に入る。羽茂川に添うて行くと少しばかりの青田があつて青田へは小さな瀧が落ち込んで居る。瀧の側からは杉の大木が聳えて其杉の木には蔓が流れたやうに藤の實の莢が夥しく垂れて居る。丁度そこへ來かゝつた老人が頻りに合掌して其瀧を拜んで居る。余は此の老人に大崎はまだ遠いかと聞いたらウン此かこれは御來迎の瀧だといつた。老人は耳が遠いのである。大崎の爺の家はまだ遠いのかと大きな聲でいつたら老人はにこ／＼笑ひながら此から少し先へ行けば大崎になる。牛でも買ひに來たか、まだ二十にはなるまい、能う來たなうといひ捨てて去つた。羽茂川に添うたまゝ街道は狭い峡間になる。峯傍に大崎へ標を打つて居る桶屋があつたので聞いて見ると、爺の家ならば後へ戻つて坂の上の高い所に見えるのがさうだといつた。桶屋のいふまゝに戻つて見ると住み捨てた大きな草家の側に坂がある。其をのぼり切ると二本の梨の木が南方からすつと空へ延びて其梢の木には梯子が掛つて居る。梨の青い葉がばら／＼と散らばつて居る。爺は丁度日に近い縁側に足を投げ出して梨を剝つて居る所であつた。余の姿を見ると能う來たなうと例の大口を開いて皮膚を剝き出しながら懐いたといつたやうな顔をしていつた。彼と爽の湊の宿屋で別れたのは四日前である。別れる時に若し自分の土地へ通りかゝつたならば立ち寄つてくれと彼はいつた。余は乾度と誓つた。彼は其後毎日他出をするのであるからあとへからいふ人が來たなら湯へ案内をして返せといひ置いては出たのだといつて獨で住んで居る。縁に顔を曝させて庭を見ると一枚の筵につやゝかな若莢の豆をならべて其上に赤く熟した[illegible]が二挾、りばかり干してある。庭の先には胡瓜に手を延てた畑元か下葉は黄色に枯れて實はまだなつて居る。爺は縁の端に背を向いて、赤泊は此から案内してあげる。赤泊の宿屋のとつつあんに話

ら物を語つて御山話が好きだ。丁度家の前へは最後の仲間が牛買に來て明日あたりは歸るといつて居たから俺が話をして其處へ乘せてあげる。まあゆつくり休息して行け、といふので兎に角こゝで草鞋をとつてある。部屋のうちは仕事着やら汚い着物やら雜然に引つ掛けてある。天井からは煤が垂れて居る。其煤の天井から吊つてある鍋棚も漆で塗つたやうである。其欄には蝮蛇の皮を剝いて干したのが竹串に立ててある。此部屋で白いものは此の蝮の皮ばかりである。今とつた梨だといつて博労が籠のまゝ余が前に梨を勸める。自分はさつきの噛りかけた一寸手でこすつて皮の儘むしやりと噛りつづける。余は拇指の爪が、非常に延びて居たので其爪の先でほつり／＼と皮をむいて見た。鋏の頭のやうな小柄が一つ／＼膝の間へ落ちる。博労は氣の長いことをするなアと見て居たが、庖丁を出すのであつたと此時漸く穢けな庖丁を手でこすりながら出して呉れた。梨はがり／＼と石のやうな梨であつた。博労の娘らしい十三四の子が裏戸から南瓜を抱へてはひつて來た。博労はあゝ丁度いゝ處だ生憎嬶さんが居ないからと自ら立つて爐へ榾を焚きつける。爐は余が居る板の間に近く一段低く造つてある。娘は默つて南瓜を切りはじめる。堅い南瓜は小さな手の力では容易に刃が立たぬ。布巾で庖丁の背を押したら漸く二つに割れた。娘は自在鍵を一尺ばかり下げて鍋を懸ける。黄色に刻んだ南瓜が鍋一杯に堆くなつて蓋はぬれた儘南瓜の上に乘せてある。榾は鍋の尻から四方に溢れて鍋蔓の高さまで燃えあがる。遙かなる地の底からでも出るやうな微かな湯氣が黄色な南瓜の中から騰りはじめる。鍋は沸々として煮立つと突き上げられて居た蓋が自ら鍋と平らにさがる。娘は榾の先を長い火箸で突つ返して其處へ出したら焔が一しきり燃えあがつた。娘は小さな體へ小さな筒袖を着て突き膝をして居る。細い襟から白い可愛らしい頸を出して居る。此が博労の娘かと思ふ程可愛らしい子である。火箸を持つた手を見ると指の先が赤く凍つて居る。鍋は更に沸々として汁のとばしりが四方に飛ぶ。余は南瓜が佳味さうだといつたらこんなものが好きなのだらうかと不審さうに娘がいつた。不味いものが好きなら佐渡の婿になつて十日も居るがいゝと博労は大きな口を開いて笑ひながらいつた。榾の煙が靡いたので娘は長い火箸へ手を掛けたまゝ笑つて目をしがめて遙か後ろへ斜めに身を反らした。

四　牛の荷鞍

博労に附いて小山を辿る。素足に草鞋を穿いた博労の後には漸く馬道が出來て居てはつきりと白く腹を持つて居る。其物を見ながら附いて行く。博労は此邊に[illegible]港へ渡る汽船の甲板でも遙に此谿谷はとらなかつた。博労の立ち止つた所から下に深い谷が開けた。遙かに木立の繁茂した間から一掴りの白絲を又幾つかに裂いて懸けた位な瀑が見える。瀑は隨分の長さのやうであるが上部も下部も枝に遮られて見えぬ。此が博労自慢の白い尾の瀑である。博労に瀑壺まで行く氣があるかと聞く、あて余は是非其處行つて見たいものだといふと彼はすぐに高麥の花を掻き分けておりはじめた。高麥の花に頗る急斜面で[illegible]おりたければならない[illegible]しない。谷へおりると水を渉つて行く。水流は至つて淺い。石があれば石から石を跳ねて行く。水の深い所は岸の芒の根へ草鞋を踏んがけて行く。芒の根は草鞋が辷る。博労の辷つたあとは更に辷る。其辷つた時には薊でも芒でも攫んで體を支へねばならぬ。佐渡貉といふ位で此邊にはむじなの穴が仰山あつたものだがみんな獵師が打つてし

まつて今では一つも居なくなつたと博勞が獨言のやうにいひながら行く。漸く瀑の下まで行きついた。仰いで見るとこゝではさつき木の枝で遮られた下の部分だけが見えるのであとはちつとも分らぬ。惜しいことには水が足らぬといふと雪解の頃ならさつきの處から見るのに水は多し木の葉はなしそれは立派なものだと博勞は辯解する。荊棘の間をもとへもどる。體を屈めると荷物がぶらつと胸へさがつて薦が前へこける。からげた尻へは岩打つしぶきが冷々とかゝる。博勞は別な方向をとつて芒の中をのぼる。手で押し分けた芒は足で二足三足踏みつけて進む。余は芒が再び閉ぢないうちと博勞の後へくつついて行く。うつかりすると博勞の薦で目をこすられる。漸く小徑へ出た時には余の指からは血が少しにじんで居た。小さな水田のある所へ出た。小山の上であるから水田といつても籾の筵を五六枚干した位しかない。荷物は其田の畦へ捨てて博勞の導く儘に木に縋り乍ら行くと瀑の落口へ出た。瀑は此の田の傍を走る幅二尺ばかりの流の水である。大きなしなの木が瀑の上から谷へかけて斜めにさし出て居る。小柄な博勞は猿の如くすら〳〵としなの木の梢にのぼつた。余もつゞいて登つて見た。二人の重量で梢はゆさ〳〵に搖れる。足のうらは直に深い谷で恰も宙に乘つたやうな感じである。此の深い谷の向うの瀑に相對した處はさつき瀑へおりた山腹でびつしりと蕎麥の花がさいて居る。一帶に山々は蕎麥でなければ豆が作つてある。然らざれば茫々たる芒である。博勞のいふ所によると「山を薙り倒いて置いて枯れた所で火を點けてそこへ蕎麥でも豆でもばらつと撒いておくのだ」といふことである。さう思へば蕎麥の花の中には焦げた木が所々立つて居る。宙に乘つて見おろす瀑は上部の僅かが見えるだけである。此の瀑は孰れにしても厄介な瀑であるといはねばならぬ。瀑を後にして行くとすぐに小さな池がある。池には太藺が茂つて其下には盥を伏せた位な小さな島の形がある。此島といふのは由來のある島なので此の小さな島から不思議にも清水が湧いて出るがいくら旱でも此の水だけは決して乾かぬと博勞がいつた。更に博勞が語るに此の池のほとりで一人の山伏が咒文を唱へて居たことがあつた。其時丁度牛を曳いて草刈に來て居た子供等が其咒文を聞いて居たことがあつたが山伏が去つてから牛の荷鞍を卸して其荷鞍を叩きながら山伏の眞似をして吹鳴つて居ると荷鞍が草の上から踊り出して其儘水中で島に化してしまつたといふ荷鞍の島はこれである。

五位鷺が一羽おりて太藺の蔭にぢつとして居る。折柄俄雨が一方から水面を鳴らしてさあつと降つて來た。鷺がすうつと飛び出して岸から垂れた小枝へ移つた。雨の脚が過ぎると水面はまた一方から靜かになる。汀には木の葉の滴が水に大きな輪を描いて水馬が小さな輪を描いて居る。

五　漁村の能

俄雨のあとの草にはきら〳〵と日の光がさす。兩方から小徑を埋めて傾いた芒の穗を薦ですつて行く。博勞の跳ね返した芒が時々ひやりと頰へあたる。だん〳〵小山の頂を行くと芒の穗の上に海洋が表はれてやがて一目に見えるやうになつた。海洋は日光のさし加減と見えて唯紺碧である。あなたには彌彥山が襞一つ一つも數へることが出來る程近く見えて、其後ろに連亙して居る越後の山々も今日は明かである。余等が歩いて居る小山の裾に迫つて三角形の眞白な帆を掛けた船が一つ徐ろに其紺碧の水を辷つて走る。白帆も日光のさし加減と見えて眩きばかりかゞやく。博勞は明日も日和だとい

つた。芒の穂を分けながら山をおりる。海が一歩づつ狭くなつて木立のあなたに全く見えなくなつた時に僅かばかり水田のある所へ出た。博労は突然あゝ能があるといひながら駈け出した。余は合點が行かなかつたが一所に駈け出した。田に添つて茂つた深い木立に入らうとした時に余の耳に幽かな笛の音が聞えた。木立に入ると大きな寺がある。本堂の廊下には人が一杯になつて見える。本堂の左右には婆さん達が小さな店を出して菓子や草履を並べて置く。平内さん能か來たがもう二番済んだと其の内の一人の婆さんが博労を見掛けていつた。アゝさうかと博労は口癖の大聲を出して俺が赤泊へお客さんを案内して來たといひながら素足の草鞋をとる。余もごた／＼と一緒に固まつて居る下駄の間に足を踏ン込んで草鞋の紐を解く。[illegible]の小物を手に提げて段を昇らうとして見ると立ち塞つた人の頭の上に紙が貼りつけてある。番組と書いてあつて三番目には三井寺とある。博労は荷物をこゝへ賴むがよいといつて余の荷物をとつて自分の草鞋と余の草鞋とを一つに括つて婆さんに渡した。ぎつしりと詰つた人の後に二人は漸くに立つた。見ると此の本堂といふのは普請したばかりでまだ壁の上塗もしてない。

中央の板の間を殘して左右はそこにも人がびつしりと坐つて居る。廊下も前の人は皆坐つて居る。女や子供も交つて居るが膝へ抱かれた子供迄が大人しくして居る。正面には白の幔幕が張りつめてあつてチョン髷結つた七十以上と見えるひよろ／＼した老人と若者とが麻裃をつけて端然として居る。鼓が足もとに置いてある。幔幕の際には此外坐つて居るのが四五人ある。板の間のこちらの隅には青竹を折り曲げて櫓の形に組んだものが立つて居て小さな釣鐘の形が下つて居る。釣鐘からは長い紐が垂れて居る。本堂のうちは此丈である。軈て老人が鼓を膝へとると若者は鼓を左の肩へとる。赤い紐がだらつと老人の膝からさがる。老人は笹の葉を押し挟んだやうな掛聲をしぼり出して右の手を徐ろに一杯に舉げて打おろすと鼓はハチッといふ音がする。若者は太い聲を掛けて[illegible]に打あげると此れはポンと鳴つた。互に鼓を打つて居ると左の方の幔幕がまくれあがつたと思つたら網代の笠をかぶつて右の手に青笹を擔いで一人現はれた。此が三井寺の狂女といふのだと心のうちに思ふ。狂女は造りつけたやうな姿勢でそろ／＼と[illegible]二間ばかりで板の間へ出る。板の間へ出るとこちらを向いて以前の速度を以て歩いて來る。狂女の衣裳は燦として美しい。然かも古色を帶びて居る。左の手は四本の指を揃へて袖口をぎつと押して突つ張つて居る。板の間を摺つて一歩々々と踏み出す白い足袋の先が目につく。青笹も[illegible]つて居て[illegible]を見ると下は濃い萌黄に[illegible]だ假面である。白く塗つた假面にこれも古色を帶びて居る。假面に鉢卷した紐がばらつと後ろへ垂れて居る。假面から少し下へ顎が出て見えるが其顎から汗がぽたぽたとこけて來る。後ろの幔幕に隔いて居る男が時々白紙を以て後ろから[illegible]を拭いてやる。狂女は白い足袋の先を踏み出し／＼[illegible]き謠につれて板の間を徘ひめぐる。[illegible]い運動であるが骨が折れるかして舞ひながら手元が絶えずぶる／＼と震へて居る。三井寺では子役が居ないのですかといふ聲が余の耳もとで聞えたので振りかへると余の側に坐つて居た一人が相手に噺をしかけたのである。之がさうですと相手はすぐ眼の前を指す。成程子役は閾一つを隔てて見物と並んで坐つて居るのであつた。相手は更に「アレは小木の酒屋だ相ですね」と狂女をさしていつた。余は此れを聞いてさつき博労をたづねる時分に太夫へ客を打込んで居た酒屋のことを思ひ出してあゝいふ

職人仲間にこんなものがあるのかとゆかしい心持を禁じえなかつた。軈て狂女が二三歩すさつて中繋持つた右の手と右の足とを突き出した腰をぐつと後へ引いて假面が屹と青竹の櫓を見あげた時にアヽいゝと際どい聲が又余の耳許で響いた。見ると博勞が向鉢卷をした首を曲げて反齒の口を開いて見とれて居るのであつた。三番叟が濟むと本堂一杯であつた見物が一齊にわあ〳〵と騷がしくなつた。更に番組は鉢の木が濟むと板の間の四隅には荒繩を引つ張つてランプが吊された。見物が漸く動かいて余等の前は疎らになつた。余は閾際まで進んだ博勞を見ると何時の間にか胡麻鹽頭の男と話をして居たが余を見ると明日は此人が牛を越後へ積んで歸るといふから乘せていつて貰ふことにしたがよいと其男に余を紹介した。二人は牛がどうとかいふことを符牒交りに云うて平内さんが相手の袂へ手を入れて二人で握り合うたと思つたら平内さんは其癖の大聲を出してそりやあんまり安く買つたなあといひながら口を鉗んで向鉢卷した頭の横に曲げた。又鼓が鳴つて舞辨慶がはじまつた。板の間に居る辨慶と幔幕がまくれて出た靜とが悠長に應答をする。辨慶は八字に髭のある大柄な男で時々瞼をぱち〳〵と叩く。靜が板の間の中央に蹲ると後ろの幔幕の際に居た男が金烏帽子をかぶせた。其男がどうも見たことのある顏だと思つたら此れは小木の宿屋の主人であつた。袴をつけて端然たる姿が餘り變つたので一寸見には分らなかつたのである。余は此れを博勞に話すとアヽ鉢の木の仕手を舞うたのがさうだ。どうも能う舞ふといつた。烏帽子をつけた靜が白い足袋の先をそつと出し〳〵舞ひめぐる。四隅に吊つたランプの光が烏帽子に輝き衣裝に輝いて美しい。アレは小木の石屋でワキなら何でも舞あるのだと博勞が語る。靜が去つて知盛の幽靈が薙刀を振り廻して出た。薙刀は時々ランプを叩きさうになる。其度毎に薙刀の刃がぴか〳〵と光る。能く見ると銀紙が貼つてあるので處々皺がよつて居る。長い髮をかぶつて伏目に荒れ廻る知盛の顏は赤い布で包んである。辨慶が頻りに珠數を押し揉んでは押し揉む。博勞は此時突然「此辨慶は數の房を振るすべ知らん」と叫んだ。余は辨慶に聞えはせぬかと心配した。板の間近く膝に抱かれて居た子供が薙刀に驚いたはずみに持つて居た梨を落した。梨はころ〳〵と板の間の中央まで轉つて行つた。外はまだ黄昏である。婆さん達の店が片づけにかゝつて居る。余は先程婆さんの箱の中に竹の葉へ乘せた長饅頭のあつたのを見ておいたのでそれを一包買つてやつた。婆さんは此れはダンゴといふのだといつた。草鞋も足袋も手に提げたまゝ博勞に隨ひ、案内されて行く。本堂の庭から石段をおりる。途々聞くと佐渡には二流の能の先生があつた。此の博勞の平内さんも若い時分には先生に跟いて歩いたことがある。其後平内さんの先生の方は斷絶してしまつて今日の一味だけが立派に立つて居る。然し平内さんの先生には名作の翁の假面が秘藏してあつた。百兩の値打はあると一口にいつて居たのであるが五六年前の洪水で家も藏も流されて其假面も一所に失つてしまつた。それは海へ落ちたのであつたと見えて後に磯へ打ちあげられたのを漁夫が拾つたけれど其時には鼻も缺けて元の姿はちつともなかつたといふのである。余は實際能を見たのは生來此の日がはじめてである。然かもかういふ佐渡島の片邑に能の催しがあらうなどとは夢にも思ひ設けなかつた所である。其見物人といふのが大抵は百姓や漁夫のやうなものであるから夫れが子供に至るまで靜肅にして居たのは意外であつた。其役者といふのが鍛冶屋や宿屋の主人などでありながら相應に品位を保つて見え

るのも向鉢卷をとつたことのない博勞の平内さんが能の知識のあるのを見ても此の島の人の心に優しい處のあるのが了解される。博勞が遭うて其日から懇切であるのも宿屋で出掛に必ず草鞋を一足くれるのも小木の宿屋の美人が洗濯をしておいてくれたのも皆此の優しい心の發動でなければならぬ。佐渡といふと昔は罪人の集合所であつたやうに思つて居たのであるが清潔なる島の空氣は彼等の感化のためには穢れなかつたと見えるのである。博勞は此夜も余と共に泊つてしまつた。

此所は越後の寺泊と相對した赤泊の漁村である。

六　草鞋

夜明にうと〲として居るとばら〲と雨が廂を打つ。又うと〲としてふと枕を擡げると博勞は既に起きて蒲團の上に煙草をふかして居る。まだ雨だらうかと聞くと日和だ〲と障子を開けて見せる。さつきのは通り雨であつたのだ。客がみんな爐の側に集つた。越後の博勞だといふ胡麻鹽頭の男も此の宿に泊つたと見えて爐の側へ來て居る。客の膳が悉く爐のほとりへ運ばれる。宿の亭主も一所に飯をくふ。亭主といふのは五十恰好の恐ろしい噺好きの男で一箇目には饒舌つて居る。相手が皆去つてしまつたら余を捉へて饒舌る。佐渡といふ所は氣候がいゝ上に桑が自然に生えて居るのだけれど惜しいことに養蠶に熱心するものがない。まあ氣候がいゝから何も知らずに飼つても二年や三年は當るが其うちに癖がはひるともう呆れてしまふといふので情ないことだ。本當に此所へ來て養蠶をしようと思ふものがあれば五枚や十枚の種紙ならば人が手傳つても桑位は摘んでやる。兎に角人氣がいゝのだから人の桑だつて少しばかり摘んだのでは泥棒だなどと騷ぐものはないとこんなことを饒舌る。客の膳が引かれて給仕の女房がお鉢を隅へ押しつけて去つたのも知らずに饒舌る。亭主は一人でお鉢を引きつけて盛つては喰ひ盛つてはくひ五杯六杯とくふのである。余は博勞の平内さんと宿の裏へ出る。うらはすぐに汀で船が一艘繋いである。牛がぞろぞろと曳かれて來る。孰れも人の腹あたりまでしかない小さな牛である。孤島の産物は孤島相應の價格しか持つことが出來ないものと見えて此間中から見る牛は殆ど狗ころでもあるかと思ふ程小さなものばかりである。亭主は此所でも饒舌りはじめた。佐渡の牛は草鞋を穿かなくても自由に山坂を歩く。それが便利だといふので信州飛驒の國へ賣れる。飛驒の國へ牛を曳いて行つたものは谷を籠で渡されることがあるが渡しの途中で綱がだん〲たるむとみんな眞蒼になつて籠が向うへついた時にはもう死人のやうになつてしまふ。此所の人はどこへ出るにも船だから海はちつとも驚かないが飛驒の籠渡しでは慄へてしまふ相だと亭主はいつた。岸から船へ板を渡して水夫が三人ばかりで牛を船へ引つ張り込む。牛は板を渡つても船へはどうしてもはひるまいとする。さうすると一人の水夫が後から牛の臀をぐつと持ち揚げて押し込む。一杯に糞のついた臀でも構はずに持ちあげる。牛が悉く積まれた時余は平内さんに別れを告げて船へ乘つた。平内さんは此時は鉢卷はして居なかつた。水夫の一人は余の草鞋を汀の水でざぶ〲と濯いで船へ抛りつけてくれた。十一反の白帆が檣に引き揚げられると船はゆら〲と岸を離れる。舳からとり舵と船頭が大聲で呶鳴ると舵がぎいつと鳴つて舳が南の米山へ向いた。船はゆるやかに搖れて搖れる度に赤泊の漁村の上に五寸一尺と連山が聳えて來る。南方の艫から屋根を葺いたやうな櫓といふものゝ一端は拵はれて居る。其櫓の中心か

ら檣が立つて居る。余は櫓へ乗つて檣のすぐ下で横になる。空は水の如く澄んで居る。海は空の如く靜かである。空氣は冷かである。此の冷かな空氣を透して日光がぢり〳〵とさす。白帆は余が爲に日覆の如く此の日光を遮るのである。白鳥の翼でなでるやうな軟風が時々そよそよと渡つて來る。白帆はふつと膨れると耳もとで帆綱がぎり〳〵つと鳴つてやがてばさ〳〵とたるむ。船頭は余の近くで舵へ手を掛けて悠然と煙草を燻らして居る。余は日のあるうちに寺泊へつけるかと聞いたらいゝや此牛は柏崎へ積んだのだ。さうさ此の鹽梅では夜中でなければ柏崎へはつけまいといふのである。赤泊を出帆する時に舳を米山に向けたのを變だと思つたのであるが此れは以ての外の失策をしてしまつた。寺泊へ渡つて日頃目について居た彌彦山へ登らうと思つて居たのであるが柏崎からでは十一里も戻らねばならぬ。もう悔いても間に合はぬ諦めるより外はない。余は荷物を枕にしてうと〳〵となる。海は極めて靜穏であるが沖へかゝつてからはノタといふ波が大きく搖れるので船が大きくゆらり〳〵と搖れる。搖られながらうと〳〵となつて居ると帆綱が絶えずぎり〳〵つと軋つては白帆がばさ〳〵とたるむ。醉醒に水は毒だようと舵取の唄ふ追分の聲が耳に響く。突然にもう國境は越したかなと一人の水夫が呶鳴つた。余はむつくり起きて見ると佐渡は驚く許り遠くなつて土手のやうに山が連つて居る。彌彦山は岩の崩れた跡も明かに見えるやうに近よつて居る。米山はまだぼんやりとして南方遥かに遠い。櫓の下で牛がどた〳〵と騒ぎ出した。水夫が三人同時に覗き込んで際どい聲で呶鳴りつけた。牛はぴつたり靜かになつた。余も櫓から覗いて見ると牛はひし〳〵と二側につめられて角がごつしり艫の所で横木に括られてある。此時まで余と枕合になつて居た胡麻鹽頭の博勞がむつくり起きて突然にどうだといふと舵とりの男は佐渡あらしならいいが南だからどうも駄目だ。出雲崎へ向けて見ても煽られるんだから今日は柏崎は御免だ。出雲崎へつける位なら一層寺泊の方がよからうといふと運賃が十五圓ばかり狂ふがいゝや仕方がねえと胡麻鹽頭のフケを掻き落しながら博勞がいつた。どうやらこれでは寺泊へ行けるらしい。最初の目的が達せられるかと思ふと心中竊に悦ばしさを禁じえなかつた。あんまり彌彦山が近くなつて居たと思つたのも道理であつた。寺泊へついたのは五時頃である。磯へつくと船はぐるつとめぐされて艫が波打際まで突きあがる。余は[illegible]と荷を投げ出して草鞋と荷物とを手に提げたまゝ波の引いた途端に磯へ飛びおりた。一日の航海中牛は遂に一聲も鳴かなかつた。

佐渡を見ると悠然として海を掩うて長く横はつて居る。大きな盥に水を一杯に汲んで鍋蓋を浮べれば鍋蓋のとつ手を横から見たのが佐渡が島である。鍋の底から燃えあがつた焔のやうな夕燒の空が佐渡を包んで不穏な海一杯にきらめいて居る。佐渡は余がためには到底忘れられぬ愉快な境であつた。翌日は雨であとの一日丈が晴れたのであるが其雨の日に相川の金坑を見てこんなことがあつた。初めは工場の殺風景に驚いたのであつたが泥を溶いたやうに濁つた濁川といふ小さな溪流の岸に沿うて行くと高い支柱を建てて大きな箱戸樋が連つて居る。箱戸樋は溪流について屈折して走る。所々僅に紅した蔦の葉が支柱に絡んで戸樋を傴うて居る。疎らに立つた芒の穂が戸樋に屆かうとして傾いて居る。白い雨が蔦の葉をぬらして芒の穂に打ちつける。余は秋寂びた雨の中に立つて此の戸樋を流れるものは何であるかと思つた。戸樋は泥土の如くに粉碎された鑛石が水と共に送

られて居るのであつた。即ち金銀の水であるといふことが出來るのである。自分の頭の上を金銀の水が絶えず流れて居るのかと思ふと鑛山が急に美化されてしまつたやうに感ぜられた。佐渡は此の如くにして到る所余がために裝飾されて居るかとも思はれる。外見は凡そ佐渡ほど寂びた所は少なからう。然しながら仔細に味うて見ると余はまだ佐渡ほど美しい分子を有して居る所に逢うたことがない。佐渡は博勞だけでも十分であるが唯博勞だけでは鼠地の切れのやうな感じを免れぬ。佐渡が島では小木の港で美人に逢うた。美人は鼠地へ金絲銀絲で刺繍つた牡丹の花である。さうして博勞の娘はつやゝかな萱草の葉へ干した淡絲で刺繍つた莟でなければならぬ。美人はたゞちらりと見て朝はなれてしまつたので何といふ名かそれも知らぬ。宿屋の娘であつたか女中であつたかそれもしかとの判斷は出來ぬ。余は何故匆卒に其宿を立つてしまつたのであつたかとそれも分らぬ。毎日〳〵不快な宿を逃げるやうに立ち去るのが旅中殆十日の習慣になつて居たからであつたらう。然し兎にも角にも昨日の浦を見おろしながら美人と噂をした。其噂は勿論氣なかつた。惜しいはかないやうな思が心の底に潜んで居る。牡丹の花のうらを透して見ると金絲銀絲は亂れて居る。余が美人を憶ふ時には幾分の亂れを生ずる。其心の亂れは牡丹の金絲銀絲が亂れて居る如く唯美しくあるべき筈の亂れである。余はかういふ想に耽りつゝ踵が[illegible]へ掻きあげられるまで荷物と草鞋とを手に提げたまゝ呆然として立つて居た。水夫の濯いでくれた草鞋はすつかり乾いて居る。佐渡の形見として余の手に殘つたものは小木の宿屋の美人がともし灯のもとにゆかしがつた手箱の間の玫瑰の花と此草鞋とのみである。草鞋も小木の美人が槌で叩いてくれた草鞋である。紺飛白の褄から白地の覗き出した美人の姿はすぐに眼前に浮ぶ。然しそれはもう過去の記憶である。現在のものは此の草鞋のみである。歩いて〳〵底が拔けて足のうらが痛くなつてならぬまでは此の草鞋ははき通して見たいやうに思ふ。草鞋の底が拔ければ髮の毛の亂れのやうに藁が四方へはみ出す。それでもぎつしり結んだ紐は手で解かねばいつまでも足について決してとれるものではない。此草鞋の紐はどうしてもぎつしり結んで置かねばならぬ。余はかう思ひながら靜かに暮れ行く小泊の磯の砂濱へ笠も蓙も荷物も投げ出して後ろに草鞋の紐を結んだ。

（明治四十年十月）

暮春の歌

さびしらに母とふたりし見る庭の雨に向ひ
　伏すやまぶきの花

山吹のはなの黄葉をそこらくに洗ひおと
　して雨ぞしきふる

もろもろの庭の梢は雨そそぎうち搖る
　までその葉茂れり

水づけば濯ぶるものと木の杪も雨しふれ
　ればいやふくよかに

雨ふりてさびしき庭も耬斗菜の一むらゆ
　ゑに足らずしもなし

あらかじめ搾てりし雨をことごとく土に
　返して依はゆくめり

菜の花の乏しき見れば春はまだかそけく
　土にのこりてありけり

すがすがし樫がわか葉に天響き聲ひびか
　せて鳴く蛙かも

車前草の花が咲かむと嬉しとてかはづは
　雨にきほひてや鳴く

蛙らはみな塗り込めの畔越えて遠田こち
　田と鳴きめぐるらし

やはらかに繁き林が梢よりほがらほが
　らと春は去ぬらむ

（明治四十一年）

菜の花

一

奈良や吉野とめぐつてもどつて見ると、僅か五六日の内に京は目切と寂しく成つて居た。奈良は晴天が持續した。それで此の地方に特有な白く乾燥した土と、一帶に平地を飾る菜の花とが、蒼い天を戴いた地勢と相俟つて見るから朗かで且つ快かつた。京も菜の花で郊外が彩色されて居る。然し周圍の綠が近い爲か陰鬱の氣が身に逼つて感ぜられるのである。余は直ぐに國へ歸らうかと思つた。然し余の好奇心は余を二三日引き留めた。それは太夫の道中といふことを土産噺に見物して行かうとしたからである。其間の二三日、余はそこゝと郊外をぶらついた。何處もさびしかつた。仁和寺の掛茶屋に客を呼ぶ婆さんの白い手拭も侘びしさを添へた。明日は道中のあるといふ日の夕方である。余は市中で桐油と麻繩とを買つてもどつて來た。さうして障子のもとで獨り荷造をした。外套や其の他の不用に成つたものを小包にして故郷へ送る爲めである。黄色な包が結び畢つた時一寸心持が清々した。さうして暫く立てた膝へ兩手を組んだ儘徒然として狹い室内を見渡した。余の部屋は二階の一間で、兩方から汚い唐紙で隔てられてある。飾といつては何もない。隣室はどちらも商人が泊つて居る。折々は帳合するのも聞えるが、商人は能く用達しに出掛けると見えて大抵はひつそりとして居る。今もひつそりである。火鉢の藥鑵が僅に夕方の寂寞の中へ滲入る樣に鳴り出した。ランプが點された。蛸と蒲鉾の晩餐も出た。低廉な宿料に當て嵌めて料理屋から仕出をとるのだといつて此宿の惣菜にいつもたからと極り切つて居る。軈て夜具も運ばれた。余は例の如くランプを持つて火鉢と一つに窓の障子のもとへ居を移す。夜具は室内を占領して畢つた。疎末な夜具の上には友禪の掛蒲團が一枚載せてある。此の一枚の掛蒲團が宿の余に對する特別の待遇である。余は障子に倚りかゝつて、つくづくと侘びしさを感じながら其派手な模樣を見詰めて居た。下女が慌しく梯子段を昇つて來た。西陣の河井さんから電話で只今伺ひますからといつて來たといつた。此の下女といふのは近在からでも傭はれて居ると見えて、田舍臭い、一寸聞きとれぬことをいふ女である。余がいふことも解り憎い所があるとかいうて、自分も解らぬことをいうて能く吹き出した。罪はないが快い女ではなかつた。余は直ぐに夜具を片付けさせた。暫くたつて下女はガラスの皿につまらぬ菓子を持つて來た。さうして此邊には何處にも碌な菓子は無いのだといつて又失笑する。河井さんが來た。河井さんは自分の宅へ連れて行くから此處は直ぐに立てといつた。余は突然なのに驚いた。然し再三の勸誘に、余は其好意に從ふことにした。さうして勘定書を命じた。河井さんは今度ふとしたことで知己に成つた人である。梯子段を靜かに昇つて來たのは意外にも春さんといふ女であつた。春さんは直ぐに立つといふのを聞いて、意外な顏をして去つた。さうして暫くして勘定書を持つて來た。春さんは時々帳場に坐つて居るのを見ることがある。宿の緣者であると下女から聞いて居る。十八位な可憐の少女である。余が奈良の地方へ行く前に居たのは下の部

屋で、そこに行燈にさつぽりとして居た。さうして給仕番は春さんであつた。春さんは膳を運ぶ前に必ず余の都合を聞きに來た。其時は障子をそつと開けて、一寸首をかしげて物をいふのであつた。春さんは木綿着物で袖口が幾らか擦れて居た。海老茶の疎い絞りの帯を締めて、萌黄メリンスの前掛をして居る。髪はいつもちやんとして居た。春さんが朝枕元の火鉢へ火を持つて來る時に余は乾度眼から醒めた。其時春さんは能く市中の女に見るやうな紺飛白の筒袖を上張りにして居た。余はぼんやりした眼にいつも其つやゝかな髪を見上げるのであつた。宿には盲目の男の子があつて、能く電話口で大きな聲をして居るのを見た。或晩余は帳場へ用があつて行つた時、其子が頻りに主婦さんにせがんでは春さんの手に縋つて居た。春さんと風呂にはひりたいといつて居る。忙しいからといつても聞かずにせがんで居る。春さんはまだお給仕が濟まぬといつて當惑らしかつた。余が春さんといふ名を知つたのは此の時である。奈良から戻つて見ると余の部屋には何處かの商人がはひつて居た。さうして余は此の二階の汚い一間に案内されたのである。余は變な厭な心持がした。春さんは以前の姿で働いて居た。然しもう余の部屋へは再び出なくなつた。余は更に此の宿が侘びしかつたのである。春さんは今其風情ある首のかしげやうをして勘定書を出した。春さんが去る時河井さんは合乘を一挺とつてくれといつた。又階子段に足音がする。春さんかと思つたらそれは春さんではなくて宿の主婦さんが剰錢を持つて來たのであつた。河井さんと余とは別に荷もなくて幾分かたつた。車が來た。余は河井さんの後から立つた。さうしてわびしかつた部屋を一通ふりかへつて見た。二人は臺所を抜けて店先へ出る。帳場に居た主人が土間へおりて挨拶をする。下女も出る。春さんも襷を外して兩手の先に縮みながら辭儀をする。河井さんの肥つた體は車に隙間をなくした。余の風呂敷包と蝙蝠傘とを春さんが出してくれる。河井さんが一言島原といつた。車夫はへえと首肯いて梶棒をあげる。車が軋り出した時に後に三四人の挨拶の聲が聞えた。漸くして余は烏丸五條の侘びしかつた商人宿を立つた。然し自分ながら餘りに突然であつたので何だか殘り惜いやうな落付かぬ心持もした。外は闇夜である。車は威勢よく東本願寺の前へ出て、廣い通を停車場の方へと走るやうであつた。

二

車は更にぐる／＼と廻り／＼行くやうであつた。暫くするうちに容子の變つた處へ出たやうに思はれた。それでそこもひつそりとして居た。河井さんが一寸車夫に挨拶をすると車は少し威勢が出た。さうして轍ががら／＼と敷石を軋つたと思つたら直ぐに梶棒がおろされた。玄關へ上る。余は車夫が出して呉れた風呂敷包と洋傘とを手にした儘立つた。一人の婆さんが出て河井さんと何かいうた。河井さんは直ぐに左手の大きな間へはひる。余も後からはひる。荷物を入口へ置いて中腰に坐つた。其處はがらんとした大きな部屋である。一帶に煤びて居る。明りがきら／＼と光るにも拘らずぼんやりとして居る程煤びた大きな部屋である。向うの隅の方には菰かぶりの酒樽が立てならべてある。中央でさうして一方の壁に近く非常に太い柱がある。余はすぐに其柱の蔭に派手な着物のなまめかしい女が一人坐つて居るのを見た。河井さんは太夫を見たことはないかといつた。余はないといふと河井さんはつと立つて其女の手を執つた。女は片手を執られた儘時儀をするやうにしとやかに前へ屈んだ。幾ら手

を曳いても立たうとしない。柱の蔭に成つて居た髪が前へ屈む度にともし灯の光に觸れる。さうしてきら／＼と白く光る。一枚に花簪を插して居たのである。簪はひら／＼と搖れながらきら／＼と光る。能く見ると女の着物は赤と青との思ひ切つた大きなだんだらの絞りである。さうして脊から包んだ扱帶の端がふさふさと餘してある。河井さんが立つてこちらへ戻つた時、女は扱帶と袂とを膝へ乘せてもとの如く柱の蔭にしやんとして畢つた。余は女が太夫であることを悟つた。それと共に余は遊女といふものゝ女らしいしとやかさを意外に感じた。

暫くして二階へ案内された。先刻の婆さんが余の荷物と洋傘とを持つて跟いて來る。大廣間である。表の窓の障子に近く燭臺が二つ置かれて蠟燭がともされてある。手焙が一つ傍にある。燭臺も手焙も古い朱塗である。婆さんは余の荷物を部屋に相應した其大きな違棚へ乘せた。蝙蝠傘も棚へ立て掛けた。汚い風呂敷包の荷物が不調和に感ぜられた。室内はうつすらと煤びて居る。蠟燭の煙が僅に立つて居るのを見ると其煙の爲めに煤けたのに相違ない。それにしても蠟燭がどれ程こゝにともされたことであらうかと驚かれる。河井さんは此所は緞子の間であるといつた。建具には皆緞子が張つてある。さうして此も皆ほんのりと時代を帶びて居る。地味な支度の三十恰好の女が出て挨拶をした。河井さんは此がおゑんさんといつて別嬪の仲居だといつた。女は仄かに嬌羞として打ち消すやうに輕く手を擧げた。鼻筋の透つたきりゝとした女である。酒が運ばれた。小さな手提げのやうな器が共に運ばれた。女は其器から小皿を出した。河井さんは此の人が門日道中を見物に來るから能く注意してくれと余を紹介した。女はさうどつかというて小皿を出した手を止めもせず、丼のかき餅をさらりと十ばかりづゝ盛つて河井さんと余との前へ置いた。此が肴であるとすると其あつさりしたのに驚かれる。河井さんは一二杯より外に傾けぬ。余も一杯を過す事は出來ない。河井さんは意外に無言の人である。大廣間は唯しんとしすぎて居る。其の上周圍のどこにも爪彈の聲だに聞えぬ。拍子拔のやうな心持で居ると、窓のすぐ下でパタ／＼と戸板を手の平で叩くやうな音がした。余は耳を峙てた。今太夫が此の家へ來るのだと河井さんがいつた。さうして太夫の長持を舁ぎ込む時にああいふ音をさせるのだといつた。どうしてさういふ音がするのか其説明は余には十分には了解されなかつた。余は後の障子を開けて外を見た。往來を隔てゝ高くアーク燈が立つて居る。其丸いホヤから四方へ投げ出す強い光であたりが燦々として居る。アーク燈の傍に大きな柳が一株すつと立つて枝を垂れて居る。柳は其葉を以てふつくりと包まれて居る。ホヤに觸れるばかり近い枝は強い光の爲に少し白つぽく見える。陰翳をなして居る所が却て青い。さうして總てが靜寂の極さ光を有して居る。アーク燈の光を離して見ると暗い空は大きな綾、雲、滑かに見える。余は其形容し難い空の色々に見惚れた。河井さんは此の空の色を葡萄紫だといつた。蛙の聲が噪雜して遠いやうに且つ近いやうに響いて空に浮んで聞えて居る。仲居のおゑんさんが階子段から呼ばれて去つた後に別な仲居が代つた。おゑんさんよりも年は少いが痘痕のある品下つた女である。おせいさんといつた。おせいさんは騒ぐ方の女である。ふと聞くとしんとした往來から下駄を引き摺るやうな響が輕くからり／＼と聞えて來る。快い響である。河井さんは太夫が來たのだといつた。余は表を見下した。格子に遮られて能くは見おろせなかつた。きら／＼と光るのに花

簪である。アーク燈の光を一杯に下から反射する花簪は柱の蔭に居た太夫のよりも立派に見えた。からり〳〵といふ輕い響と共に花簪が移り行く。さうしてすぐに廂に隱れてしまつた。其時着物のだんだらであるのがちらりと目に着いた。河井さんは太夫の下駄はこんなに大きなのだと手で形を造つた。此の位はありますと仲居のおせいさんも手で形を造つて見せた。太夫が客の前へ坐つて裲襠をすつと脱ぐ處は風情のあるものだと河井さんはいつた。それから先刻の太夫のはあれは略裝だといつた。春の夜はまだふけなかつた。然し其夜はそれで歸つて來た。おせいさんが余の荷物を持つてくれた。車は二臺であつた。下駄が爪先を揃へてある。荷物を蹴込へ入れた時はじめて荷物が自分へ返つたやうな心持がした。車は又闇夜を走つた。余は今夜の家が揚屋といふものであつたことや夜の淺いにも拘らず土地柄にも似合はずしんとして居たことの不審なことや、ちらりと見た二人の遊女のことや思ひ掛けなかつたことを心に[illegible]きながらに夜の闇を運ばれた。二條の城であらうと思はれる甍が見えて[illegible]て車は何處も同じ樣な町の或軒下へ着いた。

三

翌日河井さんは余の爲に車をとつて呉れた。自分は河内國から來る商人を待合せる約束なので遺憾ながら行けないといふのであつた。さうして角屋といふて尋ねて行けといつた。西陣を出たのは午頃であつた。二條の城の附近をめぐつて場末の汚い溝のほとりを過ぎたりして島原までは長い道程であつた。大門の前にはもう乘り捨てた人力車がごた〳〵して居る。大門といふのは瓦葺の古い建物で大きなものではない。其前の空地も隨つて狹いので後から〳〵と車は込み合うた。巡査が險に車夫を叱る。大門をくゞると兩側の家屋の前には棧敷が作られて道が狹められてある。棧敷は大凡余が腰のあたりまでしか無いといふ程低い。東國に生長して宮角力などに能く造られた二間梯子を挂ける棧敷ばかりを棧敷と思つた目には一寸異樣に感ぜられた。赤い毛布で[illegible]られてもう席に就いて居る人々もある。席に就かうとする人々もある。棧敷の後の店には膳や碗や皿を忙し相に[illegible]つて居る店がある。それでも何處にも喧囂の響を聞かぬ。棧敷の前には更に道を狹くして低い丹欄が植ゑならべられてある。花にもう過ぎかけて居る。人がぞろ〳〵と繰り込んで來る。余は大門から突き當つて左へ曲つていつた。角屋の玄關には四十年輩の男が二三人で下足を預つて居る。脊にぞろ〳〵と上る。余は仲居のおゐんさんを尋ねた。[illegible]がごたごたと忙しいなかを低い聲でおゐんどん〳〵と呼んで行つた。少時立つて[illegible]さんは余を一室へ導いた。[illegible]おゐんさんは急ぎ足で出て來た。濃い紅をした口に帶止を銜へて兩手を後へ廻して居る。一寸會釋をして帶を締め畢つた。それから帶止をぱちんと合せた。おゐんさんは地味な縞柄の着物である。能く見ると胸には仄かに白い紋が[illegible]つ浮んで居る。おゐんさんの白粉は[illegible]施されてある。其巧な化粧はおゐんさんを一層美しくした。おゐんさんは一寸其所を外したと思つたら、小さな盆へお茶を持つて來た。十枚ばかりの煎餅が添へられてある。余は茶を一杯啜つて何處か見物するのに善い處はないかと聞くとおゐんさんは思ひ立つたやうに余を表の大廣間へ案内した。そこには人がもう大分詰つて居る。おゐんさんは何處でもそこらに居て呉れといつて又あたふたとして居る。さうしてほんまに鈍氣臭うおまつせといひ捨てて去つ

た。見物の人は余の前に四側ばかり席に就いて居る。余は暫時暇取つて居るうちに人に席をとられて畢つたのである。後から／＼と席が塞つた。大廣間の後に立てられた金屏風も取拂はれた。表には丁度肘を凭れさせる位の高さに闌があつてそこには勾欄が造られてある。余の側に居た二人の男が惜いことに此所では太夫の足が見えないといふ樣なことをいつて居る。どこかの商店の手代らしい男である。余は立膝をして覗いて見たが成程往來の土は見えない。往來の向側は板塀で青竹の埓が造られてある。そこにも見物人が立つて居る。塀からすつくり立つたアーク燈の丸いホヤが白く冷た相に見える。昨夜見たのである。其傍に柳は南風を受けてふはり／＼と枝が亂れて居る。南風は漸く柳の枝に吹き募つて來る。埃が立ちはじめた。埓の内には人が殖えて來た。座敷の客も殆んど一杯に成つた。後から強い力を以て壓されるので後を見ると人々が皆立つて居る。室内はだん／＼騷々敷なつて來た。余の前には幼兒を抱いた一人の女が居た。幼兒は人々の騷々しさにおびえたと見えて火の付いた樣に泣き出した。女は恐ろしく心配さうな顏をしてやつとのこと後へ出て行つた。余は其空席へ進んだ。

漸く往來の土が見えるやうに成つた。後から壓す力が強く成るので前の客も立たねばならなくなつた。立つては復た坐る。其度に余は段々前へ進んだ。前が立てば勢ひ後から罵る不平の聲が少しく出る。余は立つた時に何か頭へ障つたことを感じた。見るとずつと後に居る印半纏の男が竹の短い竿を二本繼いで其先へ白い手拭をつけて人の頭をそつちこつちと撫でるのであつた。一時はそれでも落付いた。さうして又立つた。ぼく／＼と頭へ當るものがある。驚いて見ると隣に居た男がひよつと頭を引つ込ませて此も不思議相に後を見る所であつた。風呂場の掃除をするタワシでもあらうか、竹の先へ棕櫚の毛を束ねたのを以て以前の印半纏の男が立つてる人々の頭を端から端へと叩くのであつた。拍子木の音が遠くやがて近く往來から響いて來た。室内が靜まつた。余の側へそつと摺れるものがあるので見ると、仲居のおゑんさんが折つた紙を渡さうとするのであつた。おゑんさんは愛嬌作つて會釋しながら人を分け／＼出て行つた。何かと思つて開いて見ると薄墨の木版刷で太夫の名が連ねられてある。上下二段である。余の側の手代らしい男が覗き込んで上の段だけが道中に出るのだといつた。拍子木が復た遠くから近くへ響いて來た。客は更にひつそりと成つた。空は曇つて南風は益々吹き募る。冷然として居るアーク燈の白いホヤを、しどろに亂れかゝる柳の枝が長い手で時々抱かうとして居る。客は皆退屈相に成つた。それでも向うの埓の内の見物人は極めておとなしく立つて居る。其なかに年増の主婦さんらしいのが一人居る。最初から極めてつゝましく立つて居る。室内の騷々しさをすぐ眼前に見て[illegible]することとも無くつゝましくして居たのである。[illegible]も此の主婦さんの身にとつたならば埓の内に立ち盡して居ることが大勢の前に曝されて居るやうな心持であるかも知れぬ。余は其つゝましい主婦さんと、其頭の上に垂れ[illegible]柳の枝とを見守つた。余が座に就いてから時計を見ると三時間も過ぎ去つた。[illegible]の拍子木が近く響いた。もうすぐだと手代らしいのが囁いた。[illegible]の勾欄の左の端にすつと人物が現れた。[illegible]子といふのが七八人紅白の綱で、造花の山のやうに飾つた花籠の車を曳いて居たのである。[illegible]て徐ろに足を運ぶ。花籠は其の勾欄の下を[illegible]しながら過ぎて行く。此が[illegible]であつた。間が暫く途切れる。勾欄の外れへ小さな[illegible]が二人ならんで現れた。態とらしい化粧と懐手をし

で左の肘を張つて足もと危く然かも勿體らしく歩を運ぶ、處とは背様で可憐である。禿が座敷の前へ來ると、勾欄の端に太夫の姿が現れた。前に結んで兩方へ張つた錦襴の大きな帶と、褐緒の裲襠とが目を射る。萌黄の法被を來た老人が後から長柄の傘をさし掛けて居る。傘には太夫の定紋が大きく描かれてある。傘の下には極端に裝飾された太夫の首が造り付けられた樣に前面を正視して居る。思ひ切つて大きく結うた髮には鼈甲の大きな簪が十七本、下へ向け上へ向け左右から刺されてある。丁度熊手のやうであるといへばそれが却て適當した形容であるかも知れぬ。厚化粧は盛り上げの如くである。目は眩惑を保たうとする如く寸毫も他に轉せぬ。是も懷手をした左の手が肘を張つて居ると見えて左の袂が突つ張つて居る。右の手は結んだ帶の下へ隱してある。裾はきりつと吊り上げてある。褄からは赤い長襦袢が踵を覆ふて垂れて居る。余は苦勞をして太夫の足もとを見た。太夫は長襦袢の裾から黑塗の大きな下駄を覗出す。からりと外から大きく地をすつて立てた足の爪先へ斜に揃ゑる。暫く過ぎて眞直に向け直す。又暫く間を置いて別の足を蹴出す。八文字を踏むといふのは此だと余は心に合點した。下駄は三個所斜に鋸を入れてあるので丁度三枚の齒があるやうに見える。手絡にするやうな赤い切の緒でそこに小さな白い足が乘せてある。蹴出す度に赤い褄から白い足の爪先が三四寸見える。足には足袋を穿いて居ない。坐つた時見ると太夫は帶から上だけが勾欄の上に出て居る。八文字を踏む毎に、しつかと姿勢を保つた體がゆらりと搖れる。余は勾欄から見るのは丁度山車の人形が車の軋るにつれてゆらぎながら進んで行くやうなものだと思つた。行き過ぎた後の背には赤地に黑の籠縁をとつた小判形の前垂のやうなものが一枚にさげてある。それには太夫の名が金糸で一字々々文字に縫つてある。禿が後姿を見せると太夫がゆつたりとふれるのである。一人の太夫を見送つて暫く過ぎると又以前の如き禿が出て太夫が山車一人づつ、我が眼前に勾欄の上を過ぎて行く。一定の間隔をとつて人形の如き太夫は過ぎて又過ぎる。姿勢はどれも同一である。唯髮の結ひやうが違つてきら〳〵と花簪を一面に飾つたのがある。化粧は皆胡粉の盛り上げのやうである。余は仲居のおゑんさんの化粧を巧と感歎したのであつたが太夫に比しては光を失はねばならぬ。あの支度では顏が小さいと支度に負けていかぬ。顏が小さいとあの髮に負けて薩張り引立たぬといふやうなことを余の傍の手代らしい若い人が囁いて居る。余は之を聞いてさうかと心に思つた。見物人は皆太夫の姿に見惚れる。向うの埒の内に立つて居る主婦さんは一際つゝましげに見える。空はだん〳〵低くなつて南風は愈吹募つた。白いホヤを抱かうとする櫻の枝が寸時も休まず亂れて居る間に前後十三人の太夫が過ぎた。十三人の次に現れたのが最後の太夫である。關物には小太夫と書いてある。此は禿が八人で、八人が背に小太夫のしるしをした小判形を垂れて居る。小太夫の髮は根から二つに別つて後に長く垂らしてある。藍色の切で中央を卷いて、赤い裏の厚紙で四斗形に二個所まで包まれてある。其上に大きな鼈甲の櫛が唯一つ載せてある。此の髮は慥にすべての太夫を壓倒して十分である。禿も裲襠も眩きばかりの錦襴である。五枚の重ねた着物の裾が段々に褄を見せて吊り上げられてある。五枚の褄が五色である。五色の褄には更に裲襠の褄が襲ねてある。彼は容貌も態度も他の十三人を壓して見えた。見物人の視線は一齊に小太夫に從つて移つて行く。小太夫が過ぎると後から見物人が船の後を追ふ浪の如く道を埋めた。座敷の人々も

息をついた。思ひ〳〵に立つのも倚どつかと坐して居るのもある。少し茫然としつゝ余も立つた。人々と此の家の一間々々を見て歩いた。余はふと茶盆を持つたおゐんさんを遠くから人越しに見た。おゐんさんは余を見て人の間を掻き分けるやうにして來て余に茶を侑めた。おゐんさんの化粧は矢張り巧で且つ美しいのであつた。漸く人々が歸りかける。余はおゐんさんを尋ねて再び逢つた。壬生寺へ行く道を聞いた。おゐんさんはまだ狂言は見られるだらうと、此處からかう裏門を出て千本通をずつと行けばよいと懇に敎へてくれた。余はおゐんさんのいふ通りに千本通といはれた田圃をずん〳〵と辿る。廓の外はすぐに田圃である。田圃へ出て外から見ると島原は唯時代を帶びた地味な一郭であるに過ぎぬ。菜の花が田圃に近く續いて強い南風にゆさぶれて居る。泣き出し相に低い空が西の山々とくつついて薄靄をまけたやうに山々を更にぼんやりとさせて居る。山の間へ狭く平地が走つて居る。菜の花は斷續して其平地の限りにぼんやりと見える。白く乾いた田圃の地は吹き立てられて、菜種の葉が一枚々々皆白く其埃を浴びて居る。足もとの溝には水の上にも埃が浮いて居る。前後に人がぞろ〳〵と歸りつゝある。田圃の遙か先には菜の花の上に甍が聳えて見える。それが壬生寺であらうと思ひつゝ余は急いだ。余は歩きながら太夫のことを心に浮べた。緞子の間で河井さんは此處へ太夫を坐らせればよいのだといつた。道中の姿を見ると太夫が一人でも徒らに廣い座敷は塞るのだといふことを合點した。太夫は全身人工的に裝飾されて居る。然し唯一點素肌を見せるのは足の爪先三四寸である。太夫が皮膚を誇らうとする處はこの三四寸以外にはない。黑塗の大きな下駄に乘せて赤い裾から蹴出す足はくつきりと白く且つ小さく見えねばならぬ。さうして太夫は恐らく常人の思ひ知らぬ程其足の爪先に苦勞するのではあるまいか抔と思ひつゝ歩いた。余の前に噺しながら行く二人連がある。能く見ると先刻の手代である。先代の小太夫はよかつたと一人のいふのがちらりと耳にはひつた。余は道中の最後に出た小太夫のきらびやかな姿を思ひ浮べて且つ其先代の小太夫といふのを想像して見た。壬生寺であらうと思ふ甍がだん〳〵大きく見えて來た。余はふと切な相にゆさぶれて居る菜の花を後にして路傍に一人の乞食が坐して居るのを見た。老年の男の乞食である。蓬々として髮が亂れて居る。彼は人の近づくのを見て埃の中へ額をすりつける。逆立つた前髮には埃がついて居る。先へ行く人々は此の乞食に目もくれない。余は何となく哀れつぽくなつて錢入の口を開いて銅貨を一つ投げてやつた。彼は又埃へ汚い額をすりつける。余は少し歩いて顧みた。後からすぐ女が五六人來掛る。彼は之を見て前へ屈んでは又屈んで憐みを乞うて居る。乞食の前に來た時女は各自に錢入の口を開いた。彼は投げ出された錢を右の手に攫んだ儘女の過ぎ去るにも拘らず更に幾度となく埃へ額をすりつけた。余は之れを見て居て理由もなく唯うれしかつた。其瞬間余はなぜだか自分が大きな手柄でもしたやうな心持がした。余は實に此れ程の快感を味ひ得たことは嘗て多く記憶から喚び起されないのである。

（明治四十二年八月）

雜歌

嵐山に雨後の花を見て妓竹子に與ふ

時じくに散り來る花の笹の葉につきてはとれぬ思ひぞわがする　（明治四十一年）

鍼の如く

其一

一

秋海棠の畫に

白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり

りんだうの畫に

曳き入れて栗毛繫げどわかぬまで櫟林はいろづきにけり

夜半ふとおどろきめざめて

無花果に干したる足袋や忘れけむと心もとなき雨あわただし

二

上州入山の山中にて

唐黍の花の梢にひとつづつ蜻蛉をとめて夕さりにけり

歸路

うなかぶし獨し來ればまなかひに我が足袋白き冬の月かも

たもとほり榛が林に見し月をそびらに負ひてかへり來われは

博多所見

しめやかに雨過ぎしかば市の灯はみながら涼し枇杷うづたかし

肥後に入る

球磨川の淺瀬をのぼる藁船は燭奴の如き帆をみなあげて

三

山吹は折ればやさしき枝毎に裂きてもをかし草などの如

西瓜割れば赤きがうれしゆがまへず二つに割れば矜らくもうれし

菜豆はにほひかそけく膝にして白きが落つも莢をしむけば

そこらくに藜をつみて茹でしかば咽喉こそばゆく春はいにけり

おしなべて白膠木の木の實鹽ふけば土は凍りて霜ふりにけり

枳殼さびしき枝の葉は落ちて骨ばかりなる冬の霜かも

楢の木の嫩葉は白しやはらかに單衣の肌に日は透りけり

芝栗の青きはあましかにかくに一つ二つは口もてぞむく

松が枝にるりが竊に來て鳴くと庭しめやかに春雨はふり

草臥を母とかたれば肩に乘る子猫もおもき春の宵かも

移し植うと折れたる枝の錢葵は插すにこちたし棄てまくも惜し

藁の火に胡麻を熬るに似て小雀の騷ぐ聲遠く霧晴れむとす

洗ひ米かわきて白きさ筵にひそかに棕櫚の花こぼれ居り

四

楢の木の枯木のなかに幹白き辛夷はなさき空蒼く潤し

落栗は一つもうれし思はぬにあまたもあれば尙更にうれし

秋の日は枝々洩りて牛草のまばらまばらは土のへに射す

柿の樹に梯子掛けたれば蔀越しに隣の庭の柚子黄み見ゆ

雀鳴くあしたの霜の白きうへに静かに落つる山茶花の花

藁掛けし梢に照れる柚子の實のかたへは青く冬さりにけり

倒れたる椎の木故に庭に射す冬の日廣くなりにけるかも

あをぎりの幹の青きに涙なすしづくながれて春さめぞふる

冬の日はつれなく入りぬさかさまに空の底ひに落ちつつかあらむ

桑の木の低きがうれに尾をゆりて鵙も鳴かねば冬さりにけり

五

病院の生活も既に久しく成りける程に、四月二十七日、夜おそく手紙つきぬ、女の手なり

春雨にぬれてとどけば見すまじき手紙の糊もはげて居にけり

五月六日、立ふぢ、きんせん、ひめじをん、などくさぐさの花もて來てくれぬ、手紙の主なり、寂しき枕頭にとりもあへず

藥壜さがしもてれば行く春のしどろに草の花活けにけり

草の花はやがて衰へゆけども、せめてはすき透りたる壜の水のゐたらしきを欲すと

いささかも濁れる水をかへさせて冷たからむと手も觸れて見し

いつの間にか、立ふぢは捨てられきんせんはぞろりとこぼれたるに、夏の草なればにや矢車のみひとりいつまでも心强げに見ゆれば

朝ごとに一つ二つと減り行くになにが殘らむ矢ぐるまの花

俛首れてわびしき花の耬斗菜は萎みてあせぬ矢車のはな

風邪引きて厭ひし窓もあけたればすなはちゆるる矢車の花

快き夏來にけりといふがごとまともに向ける矢車の花

五月十日、復た草の花もて來てくれぬ、鐵砲百合とスウヰトピーなり、さきのは皆捨てさせて心もすがすがしきに、いつのまにか大きなる百合の蕾ひそかに綻びたるに

こころぐき鐵砲百合か我が語るかたへに深く耳開き居り

十一日の夜に入り始めて百合の蕾りの高きを聞く、此夜物思ふことありけるに明日の疲れ恐ろしければ寝まざれとも催眠劑を服す、入院以來之にて二度目なり

うつつなき眠り藥の利きごころ百合の薫りにつつまれにけり

六

病牀にひとりつれづれを慰めむと杜といふ紙を求めて四方の壁を色どりしが

壁に貼りしいたづら書の赤き紙に埃も見えて春行かむとす

貧しき人々の住む家なれば、僅にあたり草生ひたれども目てとることもなたぞと見ゆるに

窓の外は甍ばかりのわびしきに苦菜ほうけて春行かむとす

窓の硝子に溜ことに拭へども、そともは手もとどかねばいささかの曇りたれども晴るることもなし、春暮れむとして空さだまらず

硝子戸の春の埃をあらはむと雨は頻りに打ちそそぎけり

窓を壓して梧桐の木わだかまれり、はじめのほどに

春雨になまめきわたる庭の内に愚かなりける梧桐の木か

とよみおきけるが今は梢のさやぎも寓し

窓掛はおほにな引きそ梧桐の嫩葉の雨はしめやかに暮れぬ

藥滴瓶のかたへゆがみたるに身を横たふることも餘りに日のかさなれば其の單調なるにたふべくもあらず、まして爽かなる夏の既に行きいたれれば

梧桐の夏をすがしみをりをりは疊の上にねまく欲りすも

熱少したかけれどもたえたえ出でありくこともあり

あかしやの花さく陰の草むしろねなむと思ふ疲れごころに

其二

一

五月二十二日夜こころに苦悩やみがたきこと起りて

小夜ふけてあいろもわかず悶ゆれば明日は疲れてまた眠るらむ

おそろしき鏡の中のわが目などおもひうかべぬ眠られぬ夜は

よしといへば水には足はひたせどもいたづらにして小夜ふけにけり

すべもなく髪をさすればさらさらと響きて耳は冴えにけるかも

やはらかきくくり枕の蕎麦殻も耳にはきしむ身じろぐたびに

ゆくりなく手もておもてを掩へればあな頬はし我が手なれども

手紙の端しに必ず癒えよと人のいひこすことのしみじみとうれしければ

ひたすらに病癒えなと おもへども 悲しきときは飯減りにけり

窓外を行く人を見るに、既に夏の衣にかへたるがおほし

咳き入れば苦しかりけり暫くは襲ねて居らむ單衣欲しけど

菖蒲湯に身をいたはることも七十日にあまりたれど、自ら幾何も快きを覺えず

頬の肉落ちぬと人の驚くに落ちけるかもとさすりても見し

いぶせきに明日は剃らなと思ひつつ髭の剃杭のびにけるかも

二

物質上の損失はおほくは同情者の手によりて容易に補給せらるべきも、精神上の缺陷は同情者の手によりて凡て直ちに解決せらるべきものなるべからず。如何に深厚の同情と雖も其效果は概ね甚だ僅少なるべきなり、然れども其效果の僅少なるが爲めに遂に人間至高の價値を沒却すべからず

いささかのことなりながら痒きとき身にしみて人の爪ぞうれしき

健康者は常に健康者の心を以て心となす、もとより然るべきなり、只羸弱の病者に莅む時といへどもいくばくも異る處なきが如きものあるを憾みとすることなきにあらず

すこやかにありける人は心強し病みつつあれば我は泣きけり

三

病院の一室にこもりける程は心に惱むことおほくいできてまなこの痒むばかりなればいまは只よそに紛らさむことを求むる外にせむ術もなく、五月三十日といふに雨いたく降りてわびしかりけれどもおして歸郷す

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども

小さなる蚊帳こそよけれしめやかに雨を聽きつつやがて眠らむ

蚊帳の外に蚊の聲きかずなりし時けうとく我は眠りたるらむ

三十一日、こよひもはやくいねて

厨なるながしのもとに一つ居て蛙鳴く夜を蚊帳釣りにけり

鬼灯を口にふくみて鳴らすごと蛙はなくも夏の淺夜を

なきかはす二つの蛙ひとつ止みひとつまた止みぬ我も眠くなりぬ

短夜の淺きがほどになく〳〵蛙ちからなくしてやみにけらしも

夜半月冴えて杉の梢にあり

小夜ふけて厠に立てばものうげに蛙は遠し水足りぬらむ

六月一日、あたりのもの見ていまさらに目にめづらしければ出でありく

麥刈ればうね間うね間に打ちならび荳は生ひたり皆かがまりて

幼きものの仕業なるべし

垣根なるうつ木の花は扱き集めてぞろり
と土に棄てられにけり

夕近くして雨意おほし

雨蛙しきりに鳴きて遠方の茂りほの白く
咽びたり見ゆ

いささかは花まだみゆる山吹の雨を含み
て茂らひにけり

二日、雨戸あくるおとに目さむ

おろそかに蚊帳を透してみえねどもしづ
く懶く外は雨なりき

やがてしげくふりいづ

つくづくと夏の緑はこころよき杉をみあ
げて雨の脚ながし

泥のぬかり足駄の歯にわびしけれど心ゆくばか
りのながめせむとてまたいでありく

鉈豆のものものしくも擡げたるふた葉ひ
らきて雨はふりつぐ

車前草は畑のこみちに槍立てて雨のふる
日は行きがてぬかも

庭の枇杷今年ばかりは珍らしく果多し

枇杷の木にみじかき梯子かかれどもとる
とはかけじいまだ青きに

雨をようこぶこころを

蕗の葉の雨をよろしみ立ちぬれて聴かな

ともへど身をいたはりぬ

我が草苺を好むこと度を知らずともいひ
つべし、未だ甚だしく體力の衰へざりし
程は一度に五合にのぼらざれば胸の爽か
なるを覺えず、然かも日には幾たびとな
くこれをくりかへして飽くこともなかり
き、さるをことしは家を離れて久しくな
りけるに市場に出でたるは嘗て手にだも
觸れむとせざれば、日頃はさびしくあか
しけるが、いまはうれしきは門の畑なり

たらちねは笊もていゆく草苺赤きをつ
むがおもしろきとて

いくたびか雨にもいでて苺つむ母がおよ
びは爪紅をせり

草いちご洗ひもてれば紅解けて皿の底に
は水たまりけり

三日微雨、人にあふことといできたれば車に乗か
けて出づ、鬼怒川をわたる

みやこぐさ更紗を染めし草むしろかこか
にぬれて霧雨ぞふる

口をもて霧吹くよりもこまかなる雨に
薊の花はぬれけり

鬼怒川の土手の小草に交りたる木賊の上
に雨晴れむとす

四日、晴れて俄に暑し、風邪引くことの
おそろしくてためらひ居けるをいまはな
かなかに心も落ちゐたれば單衣になる

とりいでて肌に冷たきたまゆらはひとへ
の衣つくづくとうれし

くつろぐと足を外に向けころぶせば裾よ
り涼し唯そよそよと

さやげども麥稈帽子とばぬ程みむなみ吹
きて外はすがすがし

暑きころになればいつとても痩せゆくが
常ながら、ことしはなして胸のあたり骨
あらはなれど、單衣の袂かぜにふくらみ
てけふは身の衰へをおぼえず、かかるこ
といくばくもえつづくべきにあらざれど
猶獨り心に快からずしもあらず

單衣きてこころほがらかになりにけり夏
は必ず我れ死なざらむ

其三

六月九日、夜下關の港にて

うつらうつら髪を刈らせて眠り居る足を
つれなく蚊の螫しにけり

鋏刀もつ髪刈人は蚊の居れどおのれ螫さ
えねば打たむともせず

四日間の旅を經て十日といふに博多につく、十
一日朝、千代の松原をあるく

夏帽の堅きが鍔に落ちふれて松葉は散り
ぬこのしづけきに

十二日

蚊帳の中に瞼とぢてこやれども蚊に螫さ
れ居し足もすべなく

蚊の螫しし足を足もてさすりつつあらぬ
ことなど思ひつづけし

十四日

脱ぎすてて脇のあたりがふくだみしちぢみの單衣ひとり疊みぬ

此の夜いまさらに旅の疲れいでてきにけるかと覺えられて

たまたまには蚤とり粉など賣りありく淺夜をはやく蚊帳吊らせけり

低く吊る蚊帳のつり手の二隅は我がつりかへぬよひよひ毎に

十七日、日ごろ雨の中を病院へかよひゐけるが、此の日は殊にはげしく降りつるに、四日間の汽車の窓より見て到るところおなじく愉快にして目をよろこばせしもの唯夥しき茅花のみなりけるをなつかしく思ひいづることありて

稚松の群に交りてたはむれし茅花も雨にしをれてあるらむ

はろばろに茅花おもほゆ水汲みて笊にまけたる此の雨の中に

泣くとては瞼に當つる手のごとく茅花や撓むこのあめのふるに

病室みな塞りたれば入院もなり難く、久保博士の心づくし暫くは空しくて雨にぬれて通ふ

すみやけく人も癒えよと待つときに夾竹桃は綻びにけり

二十日、漸くいぶせき旅宿をいでて病院の一室に入る、二日三日の程にくさぐさ聞き知りて馴れ行く、病院の規模大なればば白衣の看護婦おほただしく行きかふ、皆かひがひしく立ちはたらくところ服裝のためなればか年齡の相違のごときも俄にはわかち難く、すべて男性的に化せられたるが如く見ゆれども

たまたまは絣のひとへ帶締めてをとめなりけるつつましさあはれ

二十四日夜、また不眠に陷る

いづべゆか雨洩りたゆく聞え來てふけしく夜は沈みけるかも

小松崎ゑたる狹き室をへだてて外科の病棟あり、痛し痛しと呻く聲きこゆ

夜もすがら訴へ泣く聲遠ざきて明けづきぬらし雨衰へぬ

二十五日、ベコニヤの花一枝を挿し換ふ、博士の手折りたるなり、白き一輪挿は同夫人のこれもベコニヤの赤きを活けてもてきてくれたるなり、二十六日の朝、看護婦の掛を外していにけるあとにおもはぬ花一つ散り居たり

悉く縋りて垂れしベコニヤは散りての花もうつぶしにけり

ちるべくも見えなき花のベコニヤは頭の裾などふりにけらしも

ベコニヤの白きが一つ落ちにけり土に流れて涼しき朝を

寢臺の下のくらきを掃ふこともなく看護婦のよひごとに吊りければ蚊帳の中に蚊おほくなりて、此の夜もうつらうつらとしてありけるほどふけゆくままに一しきり襲ひきたれるに驚く

ひそやかに螫さむと止る蚊を打てば手の痺れ居る暫くは安し

聲掛けて耳のあたりにとまる蚊を血を吸ふ故に打ち殺しけり

七月一日、朝まだきにはじめて草履はきておりたつ、構内に林いくらか松林あり、近く海をのぞむ

月見草芽まぬほどと蛙鳴くころをたづねて松の木の間を

畑の外には畑ありて南瓜つくることおほし、我酷だこの花を愛す

ただひとり南瓜畑の花みつつこころなく我は鼻ほりて居つ

前後に人もなければ心も閑き松の林に白き浴衣きたりけることの故はなくして唯冷やかにうれしく

朝まだきまだ水つかぬ浴衣だに涼しきおもひ松の間を行く

ただ一つ松の木の間に白きものわれを涼しと膝抱き居り

ころぶしてみれば梢は遙かなり松かさが動くその雀等は

松かげの蚊帳釣草にころぶしていささか痒き足のばしけり

かくのごと頰すりつけてうなづけば蚊帳釣草も懷しきかも

窓外

ほぷらあと夾竹桃とならびけり甍を越えてほぷらあは高く

四日深更、月すさまじく冴えたり

硝子戸を透して蚊帳に月さしぬあはれといひて起きて見にけり

小夜ふけて窓に蚊帳にさす月をねむれる人は皆知らざらむ

さやさやに蚊帳のそよげばゆるやかに月の光はゆれて涼しも

目さめてさまざまのことを思ふ

かかるとき扁蒲畑に立ちなばとおもひてもみつ今は外に出でず

七日

よひよひに必ずゆがむ白蚊帳に心落ちゐて眠るこのごろ

白蚊帳に夾竹桃をおもひ寄せ只こころよくその夜ねむりき

厭はしきは蚊帳の中の蚊なり

はかなくもよひよひ毎に蚊の居らぬ蚊帳なれかしとおもひ乞ひのむ

其四

一

七月十七日、構内の松林を徊徉す、煤煙のためなればか、梢のいたく枯燥せるが如きを見る

油蟬乏しく松に鳴く聲も暑きが故に嗄れにけらしも

いづれの病棟にもみな看護婦どもの其詰所といふもの窓の北陰にささやかなる箱庭の如きをつくりてくさぐさの草の花など植ゑおけるが、夕毎に三四人づつおりたちて砂なれば爪こまかなる熊手もて掃き清めなどす、十九日のことなり

水打てば青鬼灯の袋にもしたたりぬらむたそがれにけり

かかる時女どもなればみなみなさざめきあへるが、ひとり我がために撫子の手折りたるをくれたれば

牛の乳をのみてほしたる壜ならで插すものもなき撫子の花

此の花をみなすべてのものの中に野にあるなでしこを第一に好めるよしいひければ

なでしこの交れる草は悉くやさしからむと我がおもひみし

壜に活けたるままにして

なでしこの花はみながらさきかへて幾日へぬらむ水減りにけり

撫子はいまに果敢なき花なれど捨つと言にいへばいたましきかも

二十日の夜ひとつには暑さたへがたくして夜もすがら眠らず、明方にいたりて蛙の聲を聞く

快くめざめて聴けど鳴く蛙ねられぬ夜のあけにのみきく

さわやかに鳴くなる蛙たとふれば豆を戸板に轉ばすがごと

朝のうち必ず一しきりはげしく咳出づることありて苦しむ

暁の水にひたりて鳴く蛙すずしからむとおもひ汗拭く

二

蚊帳釣草を折りて

暑き日はこちたき草をいとはしみ蚊帳釣草を活けてみにけり

こころよく汗の肌にすず吹けば蚊帳釣草の髭そよぎけり

夜になれば我がためにの、は必ず看護婦の來て蚊帳をつりてくるるが例なり

蚊帳釣るとかやつり草を外に置くが務めなりける我は痩せにき

蒸くが如き日てりつづけばすべての病室のつきそひの女ども唯洗濯にいそがはし

粥汁を袋に入れて糊とると絞るがごとく汗はにじめり

おもひ待てども蟬の聲をきかず

板のごと糊つけ衣夕まけて松に乾けど蟬も鳴かぬかも

庭の松の陰に午後になれば朝顔の鉢をおくものあり、他の病室の患者の慰めなりといへどもひとの枕のほとり心づかざれば未だみしともなく

朝まだき涼しき程の朝顔は藍など濃くてあれなとぞおもふ

偖に浚ぎよきは朝まだきのみなり

蚤くひの趾などみつつ水をもて肌拭くほどは涼しかりけり

夕に汗を流さむと一杯の水を被りて

糊つけし浴衣はられし蚤くひのこちたき趾も洗はれにけり

涼味漸く加はる

松の木の疎らこぼるる暑き日に草みな硬く秋づきにけり

三

二十三日、久保博士の令妹より一莖の桔梗をおくらる、枕のほとり俄に蘇生せるがごとし

ささやけきかぞの白紙爪折りて桔梗の花は包まれにけり

桔梗の花ゆゑ紙はぬれにけり冷たき水のしたたれるごと

桶などに活けてありける桔梗をもたせりしかば紙はぬれけむ

目をつぶりてみれば秋既に近し

白埴の瓶に桔梗を活けしかば冴えたる秋は既にふふめり

しらはにの瓶にさやけき水吸ひて桔梗の花は引き締りみゆ

桔梗を活けたる水を換へまくは肌は涼しき曉にしあるべし

我は氷を嚙むことを好まざれど

暑き日は氷を口にふくみつつ桔梗は活けてみるべかるらし

氷入れしつめたき水に汗拭きて桔梗の花を涼しとぞみし

すべもなく汗は衣を透せどもききやうの花はみるにすがしき

二十四日の夕、偶々柵をいでて濠邊に行く、群れ居る人々と草履ぬぎて淺き波に浸る、空の際には暗紫色の靄の如きが棚引きたるに大なる日落ち懸れり、凝視すれども眩からず、近くは雨をみざる兆なり

抱かばやと沒日のあけのゆゆしきに手圓ささげ立ちにけるかも

濠を遠く北にあたりて叢茂りて草もおひたれば行きて探りみむと思へどこのあたり嘗て撫子をみずといひにければ

おしなべて撫子欲しとみえもせぬ顏は憂へず皆たそがれぬ

構内にレールを敷きたるは濠へゆくみちなり、雜草あまた茂りて月見草ところどころにむらがれり、一夜蟋蟀をきく

石炭の屑捨つるみちの草むらに秋はまだきのきりぎりすなく

きりぎりすきかまく暫し臀据ゑて暮れきとばかり草もぬくめり

きりぎりすきこゆる夜の月見草おぼつかなくも只ほのかなり

白銀の鍼打つごとききりぎりす幾夜はへなば涼しかるらむ

月見草けぶるが如くにほへれば松の木の間に月缺けて低し

八月一日、病棟の陰なる朝顏、三日はかりこのかた漸くに一つ二つとさきいづ

嗽ひしてすなはちみれば朝顏の藍また殖えて涼しかりけり

三日夕、整形外科の教室の陰に手をたてておびただしく絡ませたるをはじめて知る、餘りに日に疎ければ

朝顏の赤は萎まずむき捨てし瓜の皮など乾く夕日に

四日

あさがほの藍のうすきが唯一つ縋りてさびし小雨さへふり

彼の垣根のもとに草履はきておりたつ

朝顏のかきねに立てばひそやかに睫にほそき雨かかりけり

六日

かつかつも土を僂ひたる朝顏のさきぬといへば只白ばかり

其五

一

八月十四日、退院

あさがほは蔓もて偃へれおもはぬに榊の
枝に赤き花一つ

十六日朝、博多を立つ、日まだ高きに人吉に下車し林の温泉といふにやどる、暑さのはげしくなりてより身はいたく疲れにたりけるを俄に長途にのぼりたることなれば只管に熱の出でむことをのみ恐れて

手を當てて心もとなき腋草に冷たき汗は
にじみ居にけり

十八日、日向の小林より乗合馬車に身をすぼめてまだ夜のほどに宮崎へ志す

草深き垣根にけぶる烏瓜にいささか眠き
夜は明けにけり

霧島は馬の蹄にたててゆく埃のなかに遠
ぞきにけり

十九日、宮崎より南の方折生迫といふにいたる、青島日睫の間に横はりてうるはしけれど、此の日より驟雨いたりてやがて連日の時化に變りたれば、心落ち居る暇もなきに漁村のならはし食料の需もなければ

かくしつつ我は痩せむと茶を掛けて硬き
飯はむ豈うまからず

酢をかけて咽喉こそばゆき芋殻の乏しき
皿に箸つけにけり

二十五日に入りて、雨は更に戸を打つこと劇しくして止むべきけしきもなし

痺れたる手枕解きて外をみれば雨打ち
亂し潮の霧飛ぶ

嚙みさ嚙み疾風は潮をいぶく處に衣も
疊もぬれにけるかも

二十六日、漸くにして晴る、宿は松林のほとりに獨離れて建てられたるが、道も庭も松葉散り敷きてあたりは狼藉たり

木に絡む絲瓜の花も此の朝は萎えてさき
ぬ痛みたるらむ

おなじく松林のほとり、少し隔てて壁くづれ落ちてかつかつめ住みなしたるあれ、けさは殊に凄じきさまに

しめりたる松葉を竈に焚くけぶり絲瓜の
花にまつはりてけぬ

二十七日、宮崎にのがる、明くれば大淀川のほとりを徜徉ふ

朝まだきすずしくわたる橋の上に霧島ひ
くく沈みたり見ゆ

三十一日、内海の港より船に乗りて吹毛井といふところにつく、次の日は朝の程に鵜戸の窟にまうでて其の日ひと日は棧上にいねてやすらふ

手枕に疊のあとのこちたきに幾ときわ
れは眠りたるらむ

頗る身をおこしてやがて呆然として遠く目を放つ

うるはしき鵜戸の入江の懐にかへる舟
かも沖に帆は滿つ

落にちかく棚を掩ひて一樹の松そばだちたるが、枕のほとりいつしか落葉のこぼれたるをみる

松の葉を吹き込むかぜの涼しきに喉びて
われはさめにけらしも

二日、油津の港へつきて更に飫肥にいたる、枕流亭にやどる、欄のもと僅に芋をつくりたるあり、心を惹く

ころぶせば枕にひびく淺川に芋洗ふ子も
が月白くらけり

四日、油津の港より乗りて外の浦といふところへわたる、漸くにして探しあてたるはわびしき宿なれども、靜かなる入江もみえたれば、もとより戸は立てしめず、閨の際に枕したれば月はまどかにして蚊帳のうちをうかがふ

幮越しに雨のしぶきの冷たきに二たびめ
ざめ明けにけるかも

六日、波荒き海上を折生迫の漁村にもどる、此の夜おもひつづくることありてふくるまで眠らず

草に棄てし西瓜の種が隱りなく松蟲きこ
ゆ海の鳴る夜に

八、陰晴定めなき季節のならはし、雨をりをりはげしく障子を打つ

横しぶく雨のしげきに戸を立てて今宵は
蟲はきこえざるらむ

九日、再び時化になりたればまた宮崎にのがる、人のもとにて梨瓜といふを皿に盛りてすすめらる、此の地方西瓜を産することおびただし

瓜むくと幼き時ゆせしがごと竪さに割か

ば偸らまからむ

十三日、漸く折生迫にもどれば同人の手紙などとどきて居たるを一つ一つと披きみてはくりかへしつつ

とこしへに慰もる人もあらなくに枕に潮のをらぶ夜は憂し

むらぎもの心はもとな遮莫をとめのことは暫し語らず

夜は苦しや眠りに落つるまで蟲の聲々あはれに懐しく

こほろぎのしめらに鳴けば鬼灯の庭のくまみをおもひつつ聴く

こほろぎはひたすら物に怖づれどもおのれ健かに草に居て鳴く

十四日

蝕ばみてほほづき赤き草むらに朝は歎ひの水すてにけり

午に近くたまたま海岸をさまよふ

草村にさける南瓜の花共に疲れてたゆきこほろぎの聲

海もくまなく晴れたれば、あたりは、只一時に目をひらきたるがごとし

鯛とると舟が帆掛けて亂れれば沖は俄かに濁くなりにけり

豊後國へわたる船を待たむと此の日内海にいたりてやどる

此の宵はこほろぎ近し廚なる笊の菜などに居てか鳴くらむ

十八日、昨日別府の港につきてけふは大分の郊外に石佛を探り、汗流して歸れるに、夕近くなりて慌しく肌衣とりいだす

こころよき刺身の皿の紫蘇の實に秋は俄かに冷えいでにけり

二

二十二日、博多なる千代の松原にもどりて、また日ごとに病院にかよふ

此のごろは淺蜊淺蜊と呼ぶ聲もすずしく朝の歎ひせりけり

三十日、雨つめたし、百穂氏の秋海棠を描きたる葉書とりいだしてみる、庭にははじめてさけりとあり

うなだれし秋海棠にふる雨はいたくはふらず只白くあれな

いささかは肌はひゆとも單衣きて秋海棠はみるべかるらし

ゆくりなくも宿のせまき庭なる朝顔の垣をのぞきみて

秋雨のひねもすふりて夕されば朝顔の花しぼまざりけり

十月一日、庭のあさがほけさは一つも花をつけず

朝顔の垣はむなしき秋雨をわびつつけふもまたいねてあらむ

病院の門を入りて懐しきは、只雞頭の花のみなり

雞頭は冷たき秋の日にはえていよいよ赤く冴えにけるかも

十日、再び秋草のたよりいたス、萎えたるこころしばらくは慰む

刈萱と秋海棠とまじりぬと未だはみねどかなひたるべし

わびしくも痩せたる草の刈萱は秋海棠の雨ながらみむ

日ごろは熱たかければ、日ねもす蒲團引き被りてのみ苦しみける程に、もとより入浴することもなかりけるが、たまたま十八日の朝まだき、まださくやらむと朝顔のあはれに小さくふふみたる襄戸をあけていでゆく

浴みして手拭ひゆる朝寒みまだつぼみなりそのあさがほは

小さき蚊帳のうちに獨りさびしく身を横たふるは常のならはしにして、また我が好むところなるに、ましてここは藪蚊のおほきところなれば只いつまでも吊らせてありけるが

幾夜さを蚊帳に別れてながき夜のほのかに愁し雨のふる夜は

古蚊帳のひさしく吊りし綻びもなかなかいまは懐しみこそ

三

吸入室の窓のもとに、一坪ばかり庭の砂掻きよせて苗を挿してありけるが、夏の日にも枯れず、秋もたけて漸く一尺餘りになりたればいまは日ごとに目につくやうになりけるを、十一月十一日、折から時雨の空掻きくもりて騒がしきに

はらはらと松葉吹きこぼす狭庭には皆白

菊の花さきにけり

次の日、庭は熊手もてくまもなく掻きはらはれたれど

白菊のまばらまばらはおもしろくこぼれ松葉を砂のへに敷く

十四日、夜にいりて雨やまざれど俄に思ひ立つことありて久保博士をおとなふ

しめやかに雨の淺夜を籠ながら山茶花のはなこぼれ居にけり

俄に九度近くのぼりたる熱さむることもなく、三十日ばかりの間は只引きこもりてありければ、常は季節に疎しともおもはざりける身の、山茶花の花をみることはじめてなればいま更のごとく驚かれぬるに

吸物にいささか泛けし柚子の皮の黄に染みたるも久しかりけり

幾時なるらむ、めざめて雨のはげしきおとをきく

松の葉は復たこぼるらし小夜ふけて廂に雨の當るをきけば

十五日、ふと彼十坪に足らぬ裏の庭を見下すに、そこにも若き木の一本はありて

ひそやかに下枝ばかりにひらきたる山茶花白くこぼれたり見ゆ

山茶花はさけばすなはちこぼれつつ幾ばく久にあらむとすらむ

十六日、このころ熱低くなりたれば、始めて人をたづねていづ、空晴れて快し

不知火の國のさかひにうるはしき背振の山は暖かに見ゆ

ひとの垣に添うてゆく

山茶花はあまたも散れば土にして白きをみむに垣内には立つ

雀の好む木なればか必ずさへづりかはすをみる

山茶花に雀はすだくときにだに姿うつくしくあれなとぞおもふ

わかき女のさげもてゆくものを

手に持てる茶の木の枝に括られて黄に凝りたる草の花何

十九日、復たいでありく、朱欒の青きがそこここの店に置かれてまだ一つ二つは殘りたらむとおもふに、梢に垂れたるは皆既にいろづきたるにおどろく

竿に釣りて朱欒のうへの白足袋は乾きたるらし動きつつみゆ

二十二日、觀世音寺にまうでむと宰府より間道をつたふ

稲扱くとすてたる藁に霜ふりて梢の柿は赤くなりにけり

彼の杳然たる古鐘をあふぐ、ことしはまだはじめてなり

手を當てて鐘はたふとき冷たさに爪叩き聽く其のかそけきを

住持は知れる人なり、かりのすまひにひとしき庫裏なれども猶ほ且かの緣のひろきを愍む

朱欒植ゑて庭暖き冬の日の障子に足らずいまは傾きぬ

二十五日、氣候激變してけさもはげしき北吹きてやまず、ささやかなる店に蔬菜のうれのこりたるも哀れなり

うるほへば只うつくしき人參の肌さへ寒くかわきけるかも

二十六日、百穗氏の來状に接す、室内低く垂れて庭に落葉を焚くなどあり

幾ばくの落葉にかあらむ掃きよせて竈には焚かず庭にして焚く

落葉焚きて寒き一夜の曉は灰に霜置かむ庭の土白く

二十九日、筑後國なる松崎といふところに人をたづぬることありて、つとめて立つ、おもはぬ霜ふかくおりたるに此の如きは冬にいりてはじめてなりといふ

芒の穗ほけたれば白しおしなべて霜は小笹にいたくふりにけり

此の日或る禪寺の庭に立ちて

枳椇ともしく庭に落ちたるをひらひてあれど咎めても聞かず

たまたまは椏の楔をうちこみて樅の板挽く人もかへりみず

十二月七日、程ちかく欅をおほく植ゑたるあり、けふは塀の外に散り敷ける落葉を掃きて、松葉のまじりたるままに火をつけて燒く

そこらくにこぼれ松葉のかかりゐる枯枝も寒し落葉焚く日は

いささかの落葉が燒くろいぶり火に烟は
白くひろごりにけり

夜にいりて寒氣も激しくなりたれば戸にはやく立てさせて

時雨れ來るけはひ遙かなり焚き棄てし落
葉の灰はかたまりぬべし

八日

松の葉を繩に括りて賣りありく聲さへ寒
く雨はふりいでぬ

朝まだき車ながらにぬれて行く菜は皆白
き茎さむく見ゆ

四

大正三年六月八日、山崎をすぎて雨おほいに到る

天霧らふ吹田茨木雨しぶき津の國遠く
暮れにけるかも

九日、三たび播州を過ぐ

播磨野は朝すがしき淺霧の松のうへなる
白鷺の城

同二年四月十五日夕、空には朝來の雨なごりもなく、汽車はところよく伯耆の海岸に添うて走る

そがひには伯耆嶺白く晴れたればはらら
に泛ける隠岐の國見ゆ

十七日、出雲の杵築にいたり大社に賽す、其の本殿の構造、簡易にして素朴なれど、しかもこれを仰ぐに彼の大國主の天の瓊矛を杖いて草昧の民の上に君臨せる俤を只今目前にみるのおもひあり

久方の天が下には言絶えて嘆きたふとび
誰かあふがざらむ

十九日、よべはおそく香住といふところにやどりて、應擧の大作をみむとつとめて大乘寺を訪ふ

菜の花をそびらに立てる低山は櫟がした
に白はだらなり

（大正三年）

俳句

白菜や間引き〳〵て暮る秋
七年の約を果すや暮の秋
散りぬべき柳の秋の毛蟲かな
花煙草葉を掻く人のあからさま
藁灰に筵掛けたり秋の雨
豆引いて莠はのこる秋の風
わかさぎの霞が浦や秋の風
佐渡について母への狀や秋の風
蓼の穂に四五日降つて秋の水
此村に高音の目白提へけり
鳴きもせで百舌の尾動く梢かな
柿くふや安達が原の百姓家
柿赤き梢を蛇のわたりけり
芝栗や落ちたるを拾ひ枝を折る
錐栗やここに二つを珍らしむ
芭蕉ある寺に一樹の柚子黃なり
一うねは桐の木蔭の黃菊かな
わせ刈つて鴫の伏す田となりにけり
狼把草の花さく頃や稲日和
掛稲の下や茶の木の花白し
飛騨人の木を流す谷の紅葉かな
蟲ばみし櫻なりしが紅葉かな
松間やほがらかにして櫨紅葉
胡麻干すや實勝になりし木芙蓉
茸狩や櫨の紅葉に來鳴く鳥
足もとに光る茸や夜山越え
木瓜の子や葉は皆落ちて秋の霜
稲を扱く藁の亂れや赤蜻蛉

南禪寺所見

亂れ伏す小萩がしたや鉋屑

霞が浦

白帆遙にわかさぎ船や蘆の花

格堂除隊

營を出てさやかに秋の瀬戸の海

秋水は發せり

我喚ぶを後も向かず秋の人

（明治三十七年）

年譜

明治十二年（一歳）
四月三日、茨城縣結城郡岡田村國生に生る。長塚源次郎の長子なり。母たか子。

明治十四年（三歳）
「百人一首」を諳誦し、「いろは歌」を確實に讀む。

明治十六年（五歳）
學齡に達せざれども國生小學校に入學す。

明治二十二年（十一歳）
國生小學校卒業。下妻小學校高等科に入學。

明治二十六年（十五歳）
下妻小學校高等科卒業。水戸中學校に入學。

明治二十八年（十七歳）
夏、鹽原溫泉に赴き療養す。

明治二十九年（十八歳）
腦神經衰弱のため水戸中學を退く。この頃より和歌を作る。夏、鹽原に療養。秋、再遊す。

明治三十年（十九歳）
春、上京、山田病院に入院。夏、草津に療養、滯留十一週日。

明治三十三年（二十二歳）
三月二十八日、初めて東京根岸に正岡子規を訪ふ。三十日再訪。席上『竹の里人をおとなひて』十首を作る。四月、根岸庵の歌會に列す。七月、左千夫と日光に遊ぶ。

明治三十四年（二十三歳）
萬葉集及び記紀の歌を研究し、多く長歌を作る。作歌は「日本」に發表す。

明治三十五年（二十四歳）
四月より（短歌）『うみ苧集』を「心の花」に。五月、（短歌）『四月の末には京に上らむと云々』を「日本」に。九月十九日子規の死に遭ふ。

明治三十六年（二十五歳）
一月、（短歌）『狂體十首』を「日本」に。六月より根岸短歌會にて、「馬醉木」を發刊、左千夫、秀眞、麓等と共に編輯の一員たり。創刊號に（短歌）『萬葉卷の十四』を發表す。七月より八月關西に遊び、歸路三河、伊豆に遊ぶ。八月より（歌論）『東歌餘談』を「馬醉木」に。十一月、（短歌）『西遊歌』を、十二月、（寫生文）『月見の夕』（隨筆）『竹の里人』を、何れも「馬醉木」に。この頃多く「櫻芽」の號を用ゆ。

明治三十七年（二十六歳）
二月、（歌論）『萬葉口舌』（寫生文）『土浦の川口』、四月、（寫生文）『利根川の一夜』（短歌）『榛の木の花』、五月、（歌論）『萬葉口舌』、七月、（歌論）『歌の季に就て』、八月、（短歌）『夏季雜詠』（歌論）『竹の里人選に就て』を、何れも「馬醉木」に。五月、（歌集）『竹の里人選歌』根岸短歌會より出づ。

明治三十八年（二十七歳）
一月、（歌論）『寫生の歌に就て』（短歌）『秋冬雜詠』、二月、（歌論）『萬葉口舌』（俳句）『十二章』、四月、（歌論）『枯桑漫筆』、五月、（寫生文）『才丸行き』（短歌）『春季雜詠』（歌論）『歌譚抄を讀みて』を、何れも「馬醉木」に。五月下旬房州を一周、六月歸郷す。途中、清澄山八瀬尾の谷に炭燒を見一週日を送る。この頃より改良炭燒を研究し、庭前に炭竈を築き醋酸石灰の製造を試む。七月、（短歌）『房州行』（短歌）『炭燒くひま』を「馬醉木」に。八月、房州より中山道を京都に出で、關西を巡遊して九月歸郷。同月、（歌論）『枯桑漫筆』、十月、（短歌）『羇旅雜詠』を何れも「馬醉木」に。

明治三十九年（二十八歳）
一月、（長詩）『鬼怒沼の歌』、二月、（短歌）『氷塊一

片』、三月、（寫生文）『痍のあと』（短歌）『亂礁飛沫』を何れも「馬醉木」に。六月より七月、常陸平潟港に療養す。七月、「炭燒のむすめ」を「青果」の號を以て「馬醉木」に。八月より九月、東北、信越を巡遊、佐渡に渡りて歸る。十月、（短歌）「青草集」、（寫生文）「須磨明石」を「馬醉木」に。

明治四十年（二十九歲）

三月、（寫生文）「鉛筆日記抄」『濱の冬』、五月、（長詩）『雲雀の歌』（短歌）「早春の歌」を、何れも「馬醉木」に。十月、東北に遊ぶ。十一月、『佐渡が島』を「ホトトギス」に發表す。

明治四十一年（三十歲）

一月、（長詩）『獨り』（短歌）『初秋の歌』を「馬醉木」終刊號に。二月、（短歌）「晩春雜詠」を「アカネ」創刊號に。三月、『芋掘り』を「ホトトギス」に。（寫生文）「白甜瓜」を「アカネ」に。四月、關西に遊ぶ。同月、（寫生文）『松蟲草』を、六月、（短歌）「暮春の歌」を、七月、（短歌）「手紙の歌」を何れも「アカネ」に。九月、榛名を越え、草津より切明溫泉に遊ぶ。十二月、陸中平泉に遊ぶ。

明治四十二年（三十一歲）

一月、『開業醫』を「ホトトギス」に。三月、（寫生文）『旅の日記』を「アララギ」に。八月、「菜の花」、九月、『おふさ』を「ホトトギス」に。十月、東北に遊ぶ。「教師」を「ホトトギス」に。

明治四十三年（三十二歲）

一月、「隣室の客」を「ホトトギス」に、（小品）「愛せられざる花」を「アララギ」に。二月、「太十と其犬」を「ホトトギス」に。六月より（長篇小說）『土』を「東京朝日」に。八月、痔疾の外科手術を受く。（短歌）『乘鞍岳を懷ふ』を「アララギ」に。冬、岐阜及ぶ京都に遊ぶ。此行、岐阜にて竹林研究をなす。

明治四十四年（三十三歲）

春、堆肥の研究をなし、竹林栽培に着手す。七月頃より咽喉に痛みを覺ゆ。十一月、上京、岡田和一郎博士の診察を受け喉頭結核と診斷せらる。十二月、根岸養生院に入院。

大正元年（三十四歲）

二月、（短歌）『わが病』を「アララギ」に。此月根岸養生院を退院。三月一旦歸鄕。更に名古屋、月ケ瀨、笠置を經て、京都に入り、京都大學病院に入院す。四月、（短歌）「病中雜詠」を「アララギ」に。京都大學病院を退院後、吉野に遊ぶ。九州大學に赴き久保亥之吉博士の診察を受く。鹿兒島方面に遊ぶ。五月、宇土より長崎に航し、福岡に歸り再び久保博士の診察を受く。此月、『土』春陽堂より出づ。

六月、對馬に遊び、七月、福岡を出立、途中諸地に歷遊、九月、歸鄕す。この頃より特に佛畫、佛像、釣鐘等に興味を持ち、多く古社寺を訪ふ。十一月、上京、岡田氏に就て岡田式靜坐法を始む。

大正二年（三十五歲）

三月、二度福岡に赴き久保博士の診察を受く。四月福岡發、關西、山陰に遊び歸鄕す。八月、『芋掘り』春陽堂より出づ。十一月、上京、金澤病院に入院。

大正三年（三十六歲）

一月、退院、歸鄕。三月、橋田內科醫院に入院。五月、退院。此月より（短歌）『鍼の如く』を「アララギ」に。六月、三度福岡に到り、久保博士の診療を受け、九州大學病院に入院。八月、退院、日向青島に遊ぶ。九月、福岡に歸り、市外東公園平野屋に滯在、久保博士の治療を受く。

大正四年（三十七歲）

一月、（短歌）『鍼の如く其五』を「アララギ」に。四日九州大學病院に入院す。二月七日夜、昏睡狀態に陷り、八日午前十時死去。九日、茶毘に附し、十二日遺骨鄕里に歸る。三月十四日葬送。法諡秀岳義文居士。

高濱虛子集

いさよの室秋冷やとりの雨
元りのもとに父母出しきもしろかり
大寒で握折思ふ下さそ抑
いへのこのさまを侍るやさく好
むし人をそれをたは吹て氣あす
家女もに往はぬ深き深し
うたねを吹起されて桜かけ
金屋に推しへしそせけしさくけ

虚子

落葉降る下にて

私は今或溫泉に來て居る。此溫泉には二十年程前に一度來たことがある。其は或大病をした擧句であつて、其時は醫者から一度見放された位であつたのが、幸に快方に向つて、其恢復期を此溫泉で過ごしたのであつた。二十年程前といふとまだ私は二十を澤山越してゐなかつたので、私は早婚ではあつたが、其頃はまだ乳吞兒が一人ある位のものであつた。

其頃私はこゝの溫泉につかりながら心は歡喜に充ちてゐた。すんでの事で死ぬるのであつたのが命をとりとめた、といふ喜は喩へるにものが無かつた。私は每日何をするといふ事無く、唯ぼんやりと溫泉につかつて、洋々たる春のやうな前途を自分で祝福してゐた。家庭には漸く此頃片言交りに喋り出した子供を抱いて若い妻は私の歸るのを待つてゐたし、其頃私のやりかけて居つた事業も豫想したよりは都合よく運びかけてゐたので、其も此際一發展すべく私の歸京を待つてゐるやうな始末であつた。此際半月や一月歸るのが後れたところで家庭の方も仕事の方もさうたいした不都合があるといふでは無し、其よりも十二分に健康を恢復して、今後素晴らしい活動をせなければならぬといふやうな、何事につけても前途にのみ希望を繫いだ心の張りを持つて悠々と此溫泉に漬つてゐたことを私は稍ゝ古い昔の事のやうに思ひ出すのである。十年や二十年昔の事でも、恰も昨日の事のやうに思ふといふのが世間の常であるが、私はどういふものだか、其が十年や二十年よりも、もつと古い事のやうに思ふのである。

今此宿に來て見ると、矢張り溫泉は昔の通りの溫泉、庭の大木は昔の通りの大木、裏を流るる川は昔の通りの川、周圍を取圍んでゐる山も昔の通りの山、溫泉客を此處に運んで來る乘合馬車のラッパの響さへ昔の通りの響である。が、其でゐて、其二十年前の事を思ひ出して見ると、其はもう古い〳〵昔の事のやうに思はれて、何だか違つた世の中の出來事のやうな心持さへするのである。隔世の感といふのは大方斯ういふ心持をいふのであらう。

今度來た私は鞄に一杯詰め込んで來た仕事の事のみを氣にしてゐるのである。今の私に前途といふやうなものがあるであらうか、考へて見れば無いことも無いやうであるが、其を考へてゐるよりも目の前に迫つて來てゐる仕事の方が強く自分を壓迫して來て、唯其にのみあくせくしてゐるのである。此宿の一間に陣取つて、此處で愈ゝ若干日を過ごすことゝ極めた時も第一其山の形も水の形も餘り眼に入らなかつた。唯私の眼の前には仕事を詰め込んだ鞄が控えてゐる許りであつた。

同じ溫泉を浴びながらも私は昔の心持を呼び起さうとさへ思はなかつた。あの頃唯一人の乳吞兒を抱へてゐた妻も今はもう六人の子持ちである。もう皮膚にも光澤が無くなり髮の毛も薄くなつた中婆さんである。其頃緒につきかけて有望なるものゝ如く思はれてゐた事業はどうであつたか、幾多の波瀾を經た後格別目ざましい事も無しに現在ある通りの狀態である。今になつて見るとあの當時若い心を躍らした程のものでは無く、元來事業其ものが平々凡々たる詰らない事業であつたことが判るのである。

其でゐて私は每日々々其仕事に逐はれて、其積り積り溜り〳〵した仕事を此鞄の中に詰め込

んで此温泉に落延びて來た始末である。温泉に這入るのも餘り運動を缺いて腹が空かぬので仕方無しに、運動代りに這入るのである。出て來るとすぐ日受のいゝ座敷に陣取つて仕事に取りかゝる。流石に山間であるから朝晩は冷えるけれども晝中は暖か過ぎる程暖い。

　私の部屋の前には大きな槻の木がある。其が盛んに落葉してをるのが明け暮れ眼に入る。風の吹く時などは目覺しい勢で大空から降つて來る。私の部屋の疊の上にもいつもから〳〵になつた奴が轉げて居る。

　私の部屋は川に臨んでゐて、部屋と川との間に狭い往來があるので、其處を通る人が私の部屋から見下ろされる。――私の部屋は往來より少し高くなつてゐる――或時見るともなしに見て居ると別に變つた風體といふではないけれども、何となく一目見て忘れることの出來ぬやうな四十四五の神經質らしい男がふと目に留まつた。其日浴場に行つて見るとちやんと此宿の湯風呂の中に首だけ出して漬つてゐた。別に人の顏を見るでもなく、同じ方を見詰めて靜かにぢつと漬つてゐた。が、忽ち非常な勢ではね上るやうに湯壺から出て、石鹸を頭の先から足の尖迄一度に塗つて、手桶に酌んだ湯を腦天からぶつかける容子などが餘程せつかちのやうに見えた。かと思ふと又湯壺の中に漬つて極めて悠長に手足を延ばしてゐた。稍ゝ瘠せ地の皮膚のかさ〳〵してゐるのが目に立つて見えた。

　其日は其ぎりで物も言はなかつたが二三日して又同じ浴場で出逢つた。少し湯がぬるかつたので熱い元湯を出さうと思つて私は其人に一寸斷つた。

「少し熱い湯を出しますがよろしいでせうか。」

「よろしうございます。」

　其男は早口であつた。其から大分熱くなつた湯に漬つた時其男は其かさ〳〵した皮膚を眞赤にしてゐた。

「少し熱くし過ぎましたかしら？」

「いえ、結構です。」

　其男は矢張り口數が少なかつた。其日は其限りで物も言はなかつた。

　仕事が運びかけたので少し落著きが出來て來た。其處で仕事の合間々々に私は此文章を書いて見る氣になつたのである。私は何を書くか判らぬが、唯考へ出した事、見聞した事などを順序も無く書いて見ようと思ふ。

　私は十八の年に父を亡くしたのであつたが、其時醫師は何故に此父を殺したのかと唯醫師を怨めしく思つた。父は胃癌であつたのだから如何なる名醫が出て來ても助かる筈は無かつたのであるが、其當時の私は父は死ぬべき人でなかつたのを醫師の不行屆から殺したのだと考へた。理窟では人は死ぬるものだといふ事位百も承知してゐたのであるが、感情上どうしても自分の父が死ぬるものだとは考へられなかつた。其時醫師が私の顏色を見て其座を外したのも尤であつた。私は其醫師を撲り殺して遣り度い位に考へたのだもの。血相の變つた青年の顏を見て醫師が恐れを爲したのも尤な次第であつた。其から後私は隨分親戚のものや友人の死ぬるのを見た。母が死んだ時には仕事の都合で歸省することが出來なかつて、其死目に逢はなかつた。神田の牛肉屋で友人と一緒に酒を飲んだあゝ飯を食つてゐる所へ死去の電報が來たので私は飯を吐き出して泣いた。長病であつたので、いつ死ぬるかといふ事は固より豫期されなかつた。しかし折も折、牛肉で酒を飲んだ擧句飯を食つてゐるところへ此報知を得たので私は自分の淺ましさを振り返つて口惜しかつた。私は友人に禮を失することなど忘れてし

まつて、自分が主人であり乍ら、自分と一緒に牛肉を食つて酒を飲んだ友人が腹立たしくなつて、碌に友人には物も言はずに自分の家へ歸つて來て獨りで足りるだけ泣いた。其程ではあつたけれども此時は醫師を恨むやうな心持は無くつて、母は早いか遲いか死なければならなかつたもの、其が死んだのだとすぐあきらめてしまつた。澤山自分に親しいものが死んだ擧句、もう感情上にも自分の骨肉の死も世間の人の死と同樣拒むことが出來ぬものと觀念したのであつた。ところが其考へが、自分の子供の上には又一應後戻りがして、私は殆ど最近に至るまで自分の子供は死ぬるもので無いやうな心持がしてゐた。私の第二女は壯健に生れついたのが、生れて間も無く百日咳に取つつかれ其擧句が肺炎になつたので、一時はもう助からぬもののやうに醫師は言つてゐた。親戚のものなども、もう私にあきらめた方がよからうなどと言つたが私はどうしても自分の子は死ぬるものではないと思つた。僅かに死なないといふ自信があつた。其で私は自分一人が其子を引受けて夜の目も寢ずに介抱した。醫師は私の氣違ひ染みたのに少しあきれてゐた。けれども其結果其子は助かつた。其から隨分長い間病弱の兒であつたが、もう尋常を卒業するのも間も無い昨今の年になつて餘程強健になつた。其から後に生れた兒も、強健に生れて置きながら兎角風邪がもとで肺炎などになつて、又か〱と思ふ位であつたが、矢張り、自分の子供は死ぬるものではない、といふ自信は強烈であつた。さうして又實際皆助かつた。皆相當に強健な兒に育ち行いた。ところが此自信も最近に至つて崩れてしまつた。といふのは私の六番目の子、其は女にすると四番目に當るのであるが、其第四女が、これは他の子供と違つて少し月足らずに生れたらしく、生れ乍ら弱かつた上に又例の肺炎にかゝつて、其結果腦も少し惡くしたらしく、三つになつてまだ足も立たず首も据わらぬ位であつたが、其が到頭梨の花の咲いてゐる時分に死んでしまつた。其前から私は此子供はもう到底助からぬものだと觀念してしまつた。其でも初めて肺炎になつた時は、矢張り前の多くの子供と同じやうに是非助ける積りで火鉢を入れて一室をぬくめたり、濕布をしたり、吸入をしたり、あらゆる手段を盡したが、其結果腦を惡くしたらしく、肺炎はなほつても低能兒みたやうな風になつてしまつた。其後醫者に聞いて見ると、もう斯る肺炎の療法は舊式になつてゐるので、矢張り換氣法をよくして、なるべく自然に則る方が、あとの結果がよいやうだと言つた。骨肉も何ほ死ぬるものだといふ事は父母の死以來一應合點されてゐ乍ら、其が自分の子供の上になると、何の理窟無しに決して死なぬといふ堅い自信を持つてゐたものが此時以來がらりと崩れてしまつたのである。春になつてから肺炎が再發して、呼吸の數が四十になり六十になり八十になり、脈の數が百になり百二十になり百五六十になり、まだ齒も十分に生えてゐなかつた齒ぐきで苦痛の餘り母の指に食ひついた、といふやうな事を聞いた時、私はもう其子の顏を見るに忍びなかつた。其子の介抱は妻に任せつきりにして表から歸つた儘すぐ座敷の机の前に坐つてしまつた。

「相變らず苦しさうです。少し見てやつて下さい。」と妻は言つた。其には私の冷淡を怨むやうな語氣が見えた。私は机の前を立上つて奧の間に行つて見た。其子は睡つてゐるのであらう、呼吸の度に頭の動くのが見えて、見るからに苦しさうである。斯る時小鼻を出來るだけ膨らませて、腫れ塞がつた肺臟に一生懸命に空氣を吸込まうとする努力は私の幾度となく他の子供の肺炎の時に實見したところで、其は見

てゐる方が一層苦痛を覺えるのであつた。が、此時は正面廻つて最早其を見るに忍びなかつた。私は其儘又座敷の机の前に坐つてしまつた。

此態度が妻には不平であつた。其も尤の事であつた。今迄の子供の病氣の時には殆ど妻には關係させない位にして私一人で介抱に當つて來たものであつた。其が此子供に限つて、妻に一任して振り返らうともしないといふ事は隨分慘酷な事のやうに解せられたであらう。又慘酷なことかも知れなかつたのである。けれども此時分からの私には、もう死ぬるものを強ひて抱き止めようといふやうなそんな熱は無くなりかけてゐたのである。

「凡てのものの亡びて行く姿を見よう。」

私はそんな事を考へてぢつと我慢して其子供の死を待受けてゐたのである。

呼吸を引取る朝は大分喉が樂さうで、肺部の腫が減じかけて痰が分解しかけたのだらうと思つた。けれども脈がだん／＼と微弱になつて來て頼み少なく思はれた。醫者はヂキタリスを用ゐてゐたので、もう其が今日位から利くだらうと言つた。其が切めてもの頼みであつた。子供は此日から私の机の置いてある座敷の方に移された。暫くの間非常に靜かに眠つてゐるので私は妻に勸めて二人で表の空氣を吸ひに出た。豆の花の咲いてゐる田圃路を一町許り歩いて歸つて見ると、病兒の傍には長女が坐つてゐた。

「時々妙な聲を出しますよ。」と長女は氣味惡さうに言つた。成程丁度風が空洞に當つて鳴るやうな不思議な聲を出した。呼吸を引取つたのは其から間も無い事であつた。抱き上げると一層苦しげに體を藻掻くので此一兩日は抱かなかつた。其爲め呼吸を引取る時も別に抱き上げようといふ心持が妻にも起らぬらしかつた。私も抱き上げてやれと妻に言はなかつた。三歲の少女は父母にも抱かれずに、風の空洞を吹くやうな聲を殘して其儘瞑目してしまつたのである。

葬儀萬端は私一人でした。人に賴んでやつて貰はねばならぬといふ程私の心は取亂してゐなかつたのである。

私は其後度々墓參をした。

凡てのものの亡び行く姿、中にも自分の亡び行く姿が鏡に映るやうに此墓表に映つて見えた。「これから自分を中心として自分の世界が徐々として亡びて行く其有様を見に行かう。」私はぢつと墓表の前に立つていつもそんな事を考へた。

「何が善か何が惡か。」

「善惡不二」と言つたり「不思善不思惡」と言つたりする佛家の言を自分勝手に解釋して其頃の自分の心持にぴつたりとはまるやうに思つたのも其頃であつた。「善人すら成佛す、況んや惡人をや」と言つた親鸞上人の言葉が流石に達者の言として染々と受取れたのも其頃であつた。

ぢつと考へて見ると私の頭の中には種々葛藤があつた。之を明るみに出して見たら自分乍ら鼻持ちのならぬやうなものが澤山ありさうに思へた。「さながら成佛の姿なり」と言つた佛家の言をこゝでも思ひ出して、即ち此善惡混淆、薰蕕同居の現狀其まゝが成佛の姿だと解釋した。頭の中許りで無く、私の世間で遣つてゐる仕事、善か惡か正か邪か。凡て其等も疑問とせなければならなかつた。私は其をも同じやうな考の下に正とも邪とも善とも惡とも考へようとはしなかつた。諸法實相といふのはこゝの事だ、唯ありの儘をありの儘として考へるより外は無いと思つた。

月給を貰つて會社の社員になつてゐる以上

其會社の規則に背いたら免職されるのは當然の事である。其と同じく社會、國家の一員である以上、其社會、國家の種々の規則に背いた時其制裁を受けるのは是亦當然の事といはねばならぬ。けれども私は私の考へてゐる事遣つてゐる事をすぐ其世の中の規則で律し度いとは思はなかつた。世の中の規則で律しられるのは固より當然の事として恨まないが、自分で其を律して見る氣にはなれなかつたのである。自分は自由に考へよう、自由に遣らう、さうして善ければ社會的、國家的に榮えるであらう。惡ければ社會的、國家的に亡びるであらう。さながら山の起伏、水の流れ、其を眺めるのと同じやうに自分の事を眺めて見よう。私はそんな事を考へてゐた。

子供が死んでからもう一年半にもなる。自然私がそんな考に住してからもう一年半になる譯である。さうしてどちらかといふと、私の事業は其一年半の間にいくらか歩を進めた。一向榮えない仕事も此一年半の間には比較的成功をした。が、たとひ幾ら成功しようともいくら繁昌しようとも、私は一人の子供の死によつて初めて亡び行く自分の姿を鏡の裏に認めたことはどうすることも出來ない。榮えるのも結構である。亡びるのも結構である。私は唯ありの儘の自分の姿をぢつと眺めてゐるのである。

仕事は相當に運んで行つた。

或夕方私は窓に肱を凭せてぢつと其邊の景色を眺めてゐた。部屋の前の欅の落葉は此二三日最も盛んに降り注いでゐたと思つたが、もう梢に殘つてゐる葉は餘程少なくなつてゐた。其でも風が吹く度に其殘り少なの葉を倘ほ見事に振り落すのであつた。其から此欅の隣りに今迄は殆ど常磐木かと思はれる程な青い色をしてゐた榎の葉が此頃少し黄色を帯びて來た事が明に看取された。欅や榎は殆ど同時に落葉するものかと考へてゐたが、之で見ると大分遲速があるといふ事が判つた。

欅の殘りの落葉が川面におつかぶさるやうに降り込む。其川を隔てた向う岸の一軒の板葺屋には壁に「おもちや御土産いろ〳〵」などと書いた板が打ちつけてあつた、其はおもちや屋の裏手になるのであるが私の泊つてゐる此宿の客に見えるやうに其處に板が打ちつけてあるのであつた。其隣りは藝者屋で、これも裏側だけが見えるのであるが、時々三味や太鼓が鳴るといふ外、一見してどうしても藝者屋とは思へなかつた。庭には霜枯れのした菊のあるのが破れた垣の間からちらついて、其上には洗濯物が干してあつた。其三味や太鼓も滅多には鳴らなかつた。少し川上の方には水車があつて、其は休む時無しに絶えず回轉してゐた。霜の澤山降る朝などは其邊の板葺屋も庭も畑も石も、凡て天地一面に眞白になるのであるが、其中で此水車だけはいつも水に濡れて黑い色をして廻つてゐた。私は草臥れた仕事の手を休めてぼんやり其等の景色を眺めてゐると、其水車の手前の板橋の上を足早に歩いて來る一人の男が目に入つた。其男は彼の湯風呂の中で逢つた男であつた。

丁度私のゐる部屋の前に來た時一寸帽子を取つて辭儀をした。

「私の座敷はこゝです。お立寄り下さいませんか。」と私から聲をかけた。

「有難う。」と言つて其男は其處に立ちどまつた儘私の方に背を向けて矢張り私の見て居つた方向を見た。

「貴方は何處にお泊りですか。」と私は其男の宿をたづねた。

「私は一軒家を借りて家族と一緒に住まつてゐ

ます。」

「今橋を渡つてお出でのやうでしたが、川向うにお住ひですか。」

「さうです。あの水車の向う側の家を借りてゐます。」

日がだん／＼と落つるに從つて南の山の上の雲は眞赤な夕焼がし始めて、毎日續く此頃の天氣が、明日も又好晴であることを堅實に保證するやうに見えた。其夕焼を見上げた其男の顏はいつもよりは赤く彩られてゐた。

「一寸温泉に這入つて來ます。左樣なら。」と言つて其男はさつさと足早に行つた。宿の温泉に來るのかと思つたら、川中に在る外湯に這入つて行つた。

「兎に角變つてゐる。」と私は思つた。職業は何だらう。官吏の非職とか、會社を辭職して慰勞金を貰つたとか、そんな風の人かも知れぬが、どうもさうらしくないところもある。何だらう。」と一寸判斷がつかなかつた。

其から數日經つて私は夕飯後山腹の松林のところを散歩した序に一つの徑を尙ほ辿つて登つて行くと、其處に怪しげな或場所のあるのが眼にとまつた。遠方からでも其臭氣で其がすぐ火葬場だといふ事が判つた。私はどういふものだか火葬場には非常に縁が多い。流行病で亡くなつた私の兄を初めとして親戚のものや友人などを大分火葬場に連れて行つた。現に去年亡くした私の子も矢張り火葬場に連れて行つたのである。いくら設備がよく出來てゐるにしてもあの一種の臭氣だけは遠方から鼻につく。況して此處の火葬場は全く野天で、松林の蔭になつてゐる或空地に溝が掘つてあつて、其邊は灰ともつかず人の脂ともつかぬやうなものが黑ずんだ色をして一面に土地を染めてゐる許りであるので、其臭氣は大分遠い處から私の鼻に傳つて來たのである。

「こんな所に火葬場があるのか。」と私は東京近傍の設備の十分に出來て居る火葬場許りを見て居つたので、此荒寥たる光景を見て凄愴の感に打たれた。其時ふと眼にとまつたのは其溝のやうに掘つた穴の一方に小さい棺の置かれてあることであつた。

「おや棺が置いてある。」と私は其を凝視した。人も何もゐない此火葬場に唯棺が裸の儘で一つ置かれてあるといふ事は少なからず私の心をおびやかしたのであつた。

「どうしたのであらう。」

さう思ひ乍ら私は近づいて見た。其は小さい棺であつた。まだ生後一二ケ月しか經たない位の赤ん坊を入れたものと受取れた。其にしても此棺を此處に持つて來た人はゐないのだらうか。隱坊はゐないのだらうか。私は再び其邊を見廻して見たが、其らしい人はゐなかつた。

私は心を落着けて四邊の容子を見た。其處に小さい一つの建物があつた。建物といふよりは盆の聖靈棚のやうな簡單なものに屋根だけはついてゐた。さうして其棚の上に一つの位牌のやうなものが置いてあつた。夕暮の光にすかして見ると「釋迦牟尼佛」と書いてあつた。其邊は埃だらけであつたが、其でも其前には線香立てがあつて、其に一束の線香が燻つてゐた。これで見ると今は人がゐないけれども、此處に此線香を供へた人が最近迄居たことだけはたしかに想像された。線香は硬い濕つた灰の中に亂雜に立てられたので、おもひ／＼の方向に向いて、其中には消えたのもあつた。

私はやつと其「釋迦牟尼佛」といふ字に見入つた。其は誰が書いたのか下手な粗末な字であつたが、其場合いかにも權威ある貴い字に見られた。此棺の中に這入つてゐる子供は誰の子供か、どういふわけで斯く淋しく此處に棄てられてあるのか、其はどうであらうとも、兎に角此

處に居る釋迦牟尼佛は其絕對の權威で此あはれな子供の亡骸を護つて居るやうな心持がした。萬卷の經文の中に出て來る釋迦牟尼佛よりも、此場合此位牌の上に現はれて來てゐる釋迦牟尼佛は絕大の力があるもののやうに私には受取れた。

暮れやすい日はもう大分其邊を薄暗くして來たのであつたが、其時片方の手に提灯をさげ片方の手に一束の薪を持つてひよつこり其處に現はれた一人の人があつた。提灯はまだ灯がともつてゐないので近よる迄其がどんな人であるか判らなかつたが、近よつて見て初めて五十餘りの男であることが判つた。

「今晩は。」と男は私の顏をしげ／＼見乍ら挨拶した。一體私が何者かといふ事を餘程不審に思つてゐるらしい容子であつた。

「こゝは火葬場だね。」と私は態とそんな事を言つて見た。其が此憐れな男の不安を打消すことにならうかと考へたからであつた。

「さうです。燒場ですよ。」

果して男は、私が散步の序に偶然斯んな處に來會はせた浴客であるといふ事を合點したらしく、落著いてさう答へた。

私は何處迄も散步客のやうな風を見せようとして當ても無く其邊をぶら／＼してゐた。さうして見るとも無く其男のすることを見てゐた。

男は先づ片方の手に提げてゐた薪を地上に下ろして、提灯を松の木にぶら下げた。其から其薪をほどきかけたが大分手許が暗くなつて來てゐるのに氣が附いたらしく立上つて其松の枝にかけた提灯を取り下ろして其に火をつけ始めた。マッチをする時其大きな鼻と巖丈な手とが明かに照らし出された。

火のともつた提灯は置場所に困つて又もとの松の枝にかけられた。其は大分距離があるので其男の手許を照らすには十分でなかつた。

其でも其覺束無い光の下に其男は萬事を取運ぶのであつた。先づ懷から二三本の蠟燭を取り出して地上に置いた。其は此提灯の蠟燭が盡きた時の準備と思はれた。其から先にほどきかけた薪の處ににじり寄つて其中から蓆の切を四五枚選り出して傍に置いた。薪許りかと思つたら其蓆の切も一緒に縛られてあつたのである。

男は其から溝の所に置いてあつた棺を抱くやうにして片側によせて、其溝の底に先づ蓆の切を三枚許り置き、其上に薪を交叉するやうに積重ね、其上に又彼の棺を抱くやうにして載せ、更に其上に殘つた薪を積重ね、其上に最後に蓆の切の殘りをかぶせた。

倂し男は一向火をつける容子が無かつた。さうして尚ほ其近處を立去らずにゐる私を又不審さうに眺め始めた。

「お前は賴まれて燒くのかね。」と私は又近よつて行つてたづねた。

「いゝえお前さん、これは私の孫の佛樣です。」と其男は不興さうに言つた。

「さうか、お前の孫さんなのか。可哀さうに。何病で死んだのかね。」

「矢張り腦の病氣だね。僅か三日許りの患で取られました。」と顏を曇らせた。

私は線香がもう燃え切つてしまつてゐる彼の建物の方を見た。提灯の光は其處迄屆かぬので、唯黑い小さな建物がぼんやりと見える許りであつたが、其暗闇の中にも彼の釋迦牟尼佛と書かれた文字が明かに目に映るやうに思はれた。

私は此哀れなる男が其棺の下の蓆の切に火をつける前に其松林の蔭を出て歸路についた。山を下りながら後をふりかへつて見ると淋しい提灯の火影がものの陰になつたり現はれた

りした。

彼の湯壺で逢つた男には其後逢はなかつた。或時又散歩の序に彼の水車小屋の處へ出て其らしい家を心當てに探して見た。門や柱は大破の儘になつてゐる一軒の家に菅原といふ門標が出てゐた。門内には彼の藝者屋の裏庭に在るやうな霜枯れの菊が五六株あつた。私は大方此内であらうと思ひ乍ら通り過ぎた。

其日部屋へ話しに來た番頭に彼の菅原の事を聞いて見た。何事をも早呑込する番頭は、私が彼の湯壺の中で逢つた男が菅原其人であるかどうかを慥かめる前に、滔々と菅原の事に就いて話した。

「あの菅原さんは何です。奥さんに關係したことか、其とも何か金錢上の事か、どうもあの方には何か祕密があるのだらう、といふ評判です。退役軍人だとかいふ噂がありますが、どう見てもさういふ柄には見えません。初め御夫婦連れで手前方へお見えになりまして半月位御逗留でしたが、一先御歸京になつて、其から又お見えになつて、今度はあの家を借りてお住ひになつたのです。もう半年もいらつしやいますでせう。奥樣はよほどお美しい方です。……」

そんな事を立てつゞけに喋つたが、つい彼の湯壺の中の男が菅原であるかどうかは聞くことが出來なかつた。けれども何か祕密のある男のやうだといふことが、ふと彼の男の神經質らしい額に一層暗い影を投げた。

其晩の事であつた。警鐘が鳴つて「火事だ火事だ。」と騷ぐ聲が聞えた。雨戸を開けて見ると水車場のすぐ向側と覺ゆるところに火が燃え上つてゐた。

「菅原の家に相違ない。」と私は直覺的に思つた。「祕密のある男」と言つた番頭の言葉がすぐ其火事と結びついて、其處に何か變事が無けりやならぬやうに思はれたのである。菅原夫婦の屍が火中から出る事をも想像して見た。夫婦は已に逃走して此地にゐない事をも想像して見た。

が、翌朝になつて聞いて見ると、其は菅原の家では無かつたさうである。水車場の向うのやうに見えた火は夜だから近く見えたので半町も離れてゐたのださうである。

私は、ふと菅原の上にこちらから強ひて異變を設けつゝあつたのだといふ事に氣がついてをかしくなつた。其上彼の湯壺の中で出逢つた男が果して菅原かどうか、其さへ確定したわけではないのだと思ふと噴き出しさうにをかしくなつて來た。

其後又菅原の門を通つたが、菊が一層霜枯れてゐる許りで門標にも其他にも何の異變も無かつた。又彼の男の無事な後姿をも二三度見かけた。

却つて一つの變事ともいふべきは、いつも私の部屋の前を手拭をさげて通つて居た三十七八の正直さうな少し足の惡い一人の男が或日巡査に腰繩を打たれて引張られて行つた。聞けば近處の百姓で、彼の水車場の向うにあつた火事の放火犯人といふ嫌疑でつかまつたのださうである。其も何か遺恨の放火であるらしいといふ事であつた。

槻はもう夙くに枯木になつてしまつて僅に茶殼のやうな葉が二三枚ヶ枝の尖にへばりついてゐる許りであるが、彼の遲れて黄葉した榎が、もう二三日前から落葉しはじめて、今日あたりは少しの風にも持ちこたへられないで、綱を投げるやうに降りそゝぐ。

前の山の櫟林ももう赤つ茶けた色になつて、

半分許り落葉した木の間には汚い山の地膚を見せてをる。山脈は其から左へも右へも延びてゐて、其右に延びた、中腹迄位になつてゐる邊の柞林の向うに彼の火葬場の松林は見える。

すぐ川向うには例のおもちや屋、藝者屋の裏側が並んで、其周りの空地には四五匹の雄犬が一匹の雌犬を取り圍んで今朝から喧しく吠え立ててゐる。よく見ると其中にも雌の歡心を得てゐる犬とゐない犬とがあつて、怪しげな遠吼のやうな聲を出して吠え立ててゐるのは其のゐない方の犬であることが判る。

川上の水車は相變らず廻つてをる。其水車小屋の蔭に彼の萱原の家はある。

午前七時頃に漸く山を離れた太陽はだん／＼と中天にのぼりつゝある。

私は是等の景色を眺めながら近頃妻の私に言つた言葉を思ひ出してゐた。

「私は其が不平なのです。」

其は私が、

「僕は此頃子供が病氣した場合に以前程一生懸命に介抱する氣にはなれない。」と言つた時に言つた言葉であつた。

眼の前の山川は其上に藝者屋やおもちや屋や水車小屋や萱原の家や、あの湯壺の中に居た男や、拘引された男や、火葬場や、其火葬場にゐた男や、赤つ禿げた櫟林や、坊主になつた槻や、落葉を降らす榎や、其等のものを靜かに載せて、凡て時の移り行くのに任してをる。

「何が善か何が惡か。」

山川が靜かにありの儘を其等の上に載せて居れば時は唯靜かに其等のものの亡び行く姿を見せるのみである。其處に善も無ければ惡も無い。私はたゆまうとする心を振ひ起して鞄の中の用事を片づけるより外に道はなかつた。

（大正四年十二月）

朝顏日記（抄）

八月二十七日

早起、面影橋より戸塚橋を散歩。

朝露や脊丈にあまる蕣

痩馬に車繫ぐや雞頭花

何草ぞも蝸牛の葉を食うて居る

蕪村七部集を寫す。

母上に無事を知らする手紙の端に、

朝顏の花咲かぬ間に起きもする

露石、笑門にも手紙出す。

常盤會寄宿舍に小田を訪ひ森々と三人與梧桐の寓に至る。「加茂物狂」を歌ふ。小田歸る。三人豐國に飲む。

八月二十八日

菊坂の新聞縱覽所に緑雨の「門三味線」を見る。鳴雪先生を訪ふ。牛伴松山より來りて席に在り。俳談。

歸路一發に會す。

四谷に瓢笑門を訪ふ。笑門は古白の校友なり。

一夕舊を談ぜん事を約し今日其約を履むなり。談遺[illegible]の事に及び夜に入つて歸る。笑門月を背にして途まで送る。

八月二十九日

蕪村七部集を寫す。

手をそれて飛ぶ秋の蚊の行衛かな

中庸を讀む。

八月三十日

鳴雪・句集に妄評を試む。翁の命に從ふなり。即事

朝顏の花べたり落ちて虻おきかへる力無し

露石より返翰來る。

薄暮謠をうたふ。謠了りて心地善き事いはん方無し。

朝顏の垣根暮れたり雨の中

風流懺法

横河

今朝阪東君が出立するのを送られて和尚サンもあまり行けぬ口に一杯過ごされた。阪東君が出立したあとで和尚サンは暫く火燵櫓に頤を乘せて居られたが、其内、一寸一睡りしますわ。」ところりと横になられた。

叡山の横河中堂の政所に余はもう四五日滯在して居る。偶ゝ京都に來た阪東君は昨日余を尋ねて登山して昨夜は和尚サンと三人枕を並べて寢たが、今朝東塔西塔を一見して無動寺から白川口に下つて京に歸る筈で出立した。余も明日は下山して阪東君と一兩日京都で同遊することに約束したのである。

横河は叡山の三塔のうちでも一番奥まつてゐるので淋しい事も亦格別だ。二三町離れた處にある大師堂の方には日によると參詣人もぼつぼつあるが、中堂の方は年中一人の參拜者もないといつてよい。大きな建物が杉を壓して立つて居る。四方の扉は皆締切つてあるので中は眞暗だ。只正面に一尺角許りの穴が開いて居るので其處から中を覗くと、其眞暗な中に常燈明が淋しくともつて居る。政所は其中堂を十間許り離れた處に別棟になつて建つて居る。其處に和尚サンが下男も置かずに一人で自炊して居られる。余も自炊の手傳ひをしながら四五日滯在して居るのである。

和尚サンは蒲團から丸い頭だけ出して海老のやうになつて寢て居られる。もうぐう〳〵と眠られた樣子だ。此和尚サンのお勤めは每日一時間半づつ中堂で看經をせられることだ。其外に何も用事は無い。其看經も時は一定してゐない。朝でもよい晝でもよい晩でもよい。要するに一時間半さへ勤められゝばよいのだ。だから眠い時は朝からでも眠られる。淋しい境涯だが又氣樂な境涯だ。

余は和尚サンの部屋を出て玄關の並びの自分の部屋に戻る。机に凭れてぢつと耳をすます。靜かだ。今は嵐の音も聞えぬ、鳥の聲もせぬ。何だか靜かさが極點まで達してもの凄いやうな氣もする。程なくポツリ〳〵雨垂れらしい音が聞える。驚いて障子を開けて見るといつの間にか雨が降つて居る。軒の小坊主が光つては落ち光つては落ちて居る。寒い。障子をたてる。

其から二時間程余は用事をしてゐて何事も忘れてゐた。ふと氣がつくと和尚サンはまだ寢て居られる。雨はまだ靜かに降つて居る。臺所に物音が聞えるやうだ。不思議に思つて行つて見ると、暗い臺所に白い衣を着た小僧サンが一人居る。流しの前に立つて何物か洗つて居る樣だ。よく見ると今朝よごれた儘の茶碗や皿を置いて置いたのを洗つて呉れてゐる樣だ。小僧サンは余の方を向いてニッコリ笑つたが辭儀もしない。

「君は何處の小僧サン。」と余が聞くと、

「大師堂。」と大きな聲で答へて、

「どうして昨日湯に入りに來なかつたの。」と友達のやうな口をきく。

「風邪をひいてゐたからサ。」

「折角僕がわかしてやつたのにナア。」

「君がわかしてくれたのか、其はすまなかつた。此次は這入るヨ。」

「僕はあすうちへ歸るのだヨ。」

「君のうちはどこ。」
「僕のうちは東京、だけれど京都に伯母サンがゐるの、あすは伯母サンのうちへ行くの。」
「伯母サンのうちは京都のどこ。」
「祇園町。」
祇園町とは一寸意外であつた。
「祇園町といふのは何處。」と試に聞いて見る。
「祇園町を知らないのか。馬鹿だナア。」と小僧サンは甚だ輕蔑した調子で、
「君はいつまで此處に居るの。」
「僕か、僕も明日京都へ行く積りなの。いゝヨこゝに拭巾があるから拭くのは僕が拭くヨ。」
「まア貸したまへ僕が拭いてやらア。明日京都へ行くのか。此次は這入るナンテ、今度いつ湯がわくと思つてゐるのだ。間抜けだナア、五日目五日目で無けりやわかないのだヨ。」
機鋒鋭くして當るべからずだ。
「さうか、其ぢや大師堂のお湯にはもう這入れないね。困つたナア。」
「困らなくつたつていゝや。アンナ汚ない湯に這入らなくつたつて京都にいくらでもいゝ湯があらア。君、湯は東京より京都の方がいゝヨ。京極にいゝ湯があるぜ、蒸氣でわかすのだヨ。」
「君はいつ小僧サンになつたんだい。」
「二月。」
「二月つて今年の二月かい。」
「ウン。」
「東京にはいつまで居たの。」
「去年まで。尋常を卒業するとコチラへ來たの。君、櫻田小學校知つてるかい。僕あそこに行つてたんだヨ。山崎や戎田は今年高等二年になるんだつて威張つてらア。このあひだ手紙をよこしたヨ。字ナンカ矢つ張り下手だア。ネー君、いくら威張つたつて字の下手なのは見つとも無いや。」
小僧サンは茶碗や皿を戸棚に片附けて臺所を掃除して、ズン〳〵余の部屋に這入つて來る。
「君勉强してゐるのかい。君全體何しに來たの。遊びに來たのかい。……馬鹿だナア。コンナもの書いてらア。全體何の畫だい。下手だナア。僕の方がよつぽどうまいや。」と火鉢の向うに坐つて机の上に置いて置いたノートブックを開けて痛罵を試みはじめる。
暗い臺所から明るい部屋に來て見ると小僧サンはなか〳〵美少年だ。年は十二三で、色白で、目が大きくつて、口元が締まつて居る。
「よう君、何を書いたんだい。密境の畫だつて。こんな密境があるものか。馬鹿だナア。礎盤がこんなに小さくて、腕がこんなに大きくつてどうするんだい。」
元來畫心の無い余が文字代りに急いで書き取つた圖を散々に攻撃する。
「一朝念觀世音、暮念觀世音、念々從心起、念々不離心」……ヤーイ十句觀音經なぞ書いてらア、間抜けだナア。……「こんな處へ落ちたら死にますエ」……「強儀な事したもんだつせ」……こんな事書いてるのかい。こんな事書いてどうするんだい。本當に馬鹿だナア。」と余の顔を見る。大きな目に冷笑の光を漲らせて居る。
「全體君は何だい。何を仕事にしてゐるんだい。妙な事を書き留めとくんだナア。」と獨り言のやうにいひながら、紙の間に插んであつた鉛筆を取つて余の顔を寫生し始める。一寸窄目を使つては書き一寸窄目を使つては書く。
「駄目だナア、君は動くから駄目だ。こゝの和尚サンを書いて見ようか。こゝの和尚サンは大きな頭をしてゐるだらう。こんな頭だぜ。それからねえ、耳がこんなに……まるで蝙蝠のやうだぜ。僕は和尚サンと向き合つてるといつでも頭と耳許り見てやるのだ。君々。」とだん〳〵聲を張り上げて來て、

「それからねえ君、和尚サンの耳は動くぜ。不思議だぜ。どうかしたはずみにぴこ／＼と猫のやうに動くんだもの、僕ア不思議だと思つちやつた。」

和尚サンは「ウーン。」と蒲團の上に白い片肱を突き出して片々の手で擦つて居られる。

「コセ／＼、ソンナ人の惡口をいふものぢやない。君は腕白だナア。」と余は最中を一つやる。

「有難う。」と早速一つ頰ばる。余の飮みさして置いた茶碗の上に冷たい茶を注ぎ足して飮む。

和尚サンは、

「アヽよく寢たこつちや。」と欠びをしながら起き上られる。

「一念、來てゐたか。お客樣の邪魔をしてはいかぬぞ。」

「邪魔なんかするものですか。」と手帳の上に和尚サンの欠びの圖を書いて顏中口にする。さうして其口から棒をひいて「一念キテイタカ、オ客サマノジャマシテハイカヌゾ」と書いて、又耳から棒を引いて「コノ耳ウゴク」と書く。余は覺えず噴き出す。一念は知らぬ顏をして、

「寶珠院サンは今日午から下山る積りだから、さういつて吳れといひましたヨ。」と一寸和尚サンの方を見てすぐ今度は眼鏡を掛けた和尚サンの似顏を描く。見ると成程鼈甲緣の大きな眼鏡を掛けて和尚サンは何か書つけを見て居られる。

「けふは十二日だな。」と迂遠なことをいはれる。

「十四日ですよ。」と余は答へる。

「十四日か。もうさうなるかな。あなたが來たのがをとゝ日であつたかな。」

余はもう五日間滯在して居る、其を一月程にも覺えるのに和尚サンは呑氣なことをいはれる。

「あなた蕗の薹お好きか。納豆はどうかな。」

「納豆は閉口ですが、蕗の薹は結構です。」

「それではあすお歸りまでに蕗の薹の田樂を一つ拵へて上げう。けふは雨だから困るが、兜率谷の方に行くと蕗の薹が澤山ある。あすの朝天氣になつたら一念一つ取つて來てんか。」

一念は聞かぬ風をして「明治二十八年十月二日生一念」と鉛筆を壓へ附けて四角な字をノートに書いて居る。

「蕗の薹の田樂といひますのは。」

「蕗の薹を串にさして味噌を附けて燒くのぢや。よほど香りのえゝものぢや。蕗の薹が嫌ひで無けりやキッと賞翫おしるぢやあろ。」

「そりや結構でせう。兜率谷といふと惠心廟のさきの方ですね。ぢや私が取つて來ませう。」

余はこゝに來てから全く精進料理許りを食つて居る。それも煮豆にお湯葉に味噌が主で、豆腐汁やほうれん草のしたし物などは坂本からの好便に豆腐やほうれん草が屆かなけりや食ふ事が出來ん。左樣な中に蕗の薹の田樂は聞いただけでも珍味だ。もう其香が室内に滿ちてゐるやうな氣がする。

一念は余の机の上を搔き探してゐたが、

「これ、君何だい。」と安全剃刀に目を留める。

「剃刀だよ。」

「剃刀だつて。馬鹿だナア。こんな剃刀で君は髯を剃るの。うまく剃れるかい。」と頻りにひねくつて見て居る。

「一念、御邪魔をせんやうにして、少し臺所の事でも手傳つてくれよ。」

「一念君は最前もう大分働いてくれました。茶碗や皿をすつかり洗つてくれました。」

「さうであつたか。其は御苦勞であつた。序に氣の毒だが、茶釜に一杯お湯をわかして吳れまいか。」

一念はだまつてまだ剃刀をいぢつてゐる。

「どうやつて研ぐんだい。」
「斯うやるのサ。」と余はやつて見せる。
「馬鹿だナア。」と再び受取つて、
「君いつ剃つたの。今剃つて見たまへな。よう、剃らないのかい。馬鹿だナア。」と感心する時も不平な時も「馬鹿だナア。」といふ。
「一念、お湯をわかして呉れまいか。」と和尚サンはゆつくりと又くりかへされる。
「君、和尚サンが何かいつて居られるぢやないか。」
「剃つて見ないのかい。間抜けだナア。」と一念はいかにも殘り惜しさうに剃刀を見返りながら臺所に立つて行つた。程なく茶釜の下を燻し始めたらしい、松葉のぱち〳〵といふ音が聞える。
「中々才はじけた小僧サンですね。」
「どうも徒らで困りものだ。其代りお經もよく覺える、役にも立つ。育てやうによつたら立派なものになりますやろ。……大變降るやうだな。阪東サンはお困りぢやあろ。もう十一時か。」と和尚サンは火燵から出て脊延びをせられる。大きな頭が日についてをかしい。一念は何をしてゐるのか只松葉のはねる音が聞える許りだ。
和尚サンは火燵櫓をのけられる。其跡がすぐ爐になる。其處に鐵瓶をかけて其邊の埃を拾うては爐の中にくべられる。
「お茶を入れう。仕事の切れ目ならお出でんか。」
「頂戴しませう。」と爐の向う側に坐る。
「わしは冬でも籐枕をするので……けふはどういふ工合であつたか頭がしびれたやうだ。」と下にしてゐられた右側を掌で擦られる。見ると枕の角の痕が赤く頬に殘つて居る。
「寢がへりもなさらず片側許り下にしていらしつたからでせう。」
「寢がへりといふものは平生からあまりしませぬで。戒律に頭北面西右脇臥といふ事がやかましくいうてあるが、頭北面西は間取りの都合などで嚴密には行かぬにしても、僧は大概右脇臥といふ事だけは守つてをる。殊に仰臥は非常に嫌ふので、仰向けに寢ると淫心を起こすともいふし、淫を鬻ぐものは仰臥するともいふし、兎に角其は必ず避くべきことになつて居る。其理由は兎も角、出家が大の字になつて寢るのはあまり見つとも無いものでな。」と和尚サンはきびしよの終りの一二滴を余の茶碗と御自分の茶碗とに等分に落される。鐵瓶の湯氣が眞直ぐに登つて和尚サンの顔のあたりで消える。
「和尚サンおいくつです。」
「わしかな、もう丁度ぢや。」
「五十ですか。」
「さうぢや。もう來年位からは小僧か男を一人置かぬと、自炊が億劫ぢや」
「さうでせうとも。一念サンは寶珠院サンの御秘藏ですか。」
「寶珠院は持てあまして居るのぢや。わしに預つてくれともいうとるのぢやが、わしの手にもあまりさうぢやて。ハヽヽヽ。」と最中の壞れてゐるのを掌に載せて丁寧にたべられる。爐の縁にこぼれたのを指尖でおさへて口へ持つて行かれる。
「和尚サン、お湯が沸きましたよ。サヨナラ。」と一念の聲がする。
「さうか、其はお世話であつた。もう午ぢや。茶漬なと食べて行かんか。……ア、さうおしっ一念々々。」と延び上るやうにして大きな聲を出される。成程、和尚サンの耳は少し動く。ノートに書いた一念の畫が思ひ出されてをかしい。併し一念はもう裏口から歸つたものと見えて返辭が無い。

一力

仲居のお艷に、

「其が名高い赤前垂れかね。」と聞くと、お艶は一寸氣取つて蠟燭の心を切つて、
「さうどす。これは一力ばつかりに限つた事やおへんけど、斯うやつて帶に挾む工合が他樓とは違うてますのや。」といふ。阪東君が、
「一寸立つて見せたまへ、長いのかい。」ときくと、お艶はだまつて立つて、帶に挾んであるのをはづして見せる。大幅の緋の縮緬を二枚合はせた廣いのが、チャンと並べた足を隱して幔幕のやうに疊の上に垂れる。廣い座敷に林のやうに立つて居る蠟燭の光りがこの赤前垂れ一つに集まる。其時向うの銀紙で張つた衝立の陰から今日四條の繪店で見たやうな舞妓が一人現はれる。同時に衝立の中から、
「三千歳はん上げます。」といふ聲が聞える。舞妓は余等の前に指を突いて、
「姉はん、今晩は。」とお艶に會釋する。厚化粧の頰に靨が出來て、脣が玉蟲のやうに光る。お艶の赤前垂れの赤いのが此時もとの通り帶の間に疊まれて、極彩色の京人形が一つ疊の上に坐つて居る。
「お前いくつ。」
「十三どす。」
「本間に可愛い兒どすやらう。私等毎日見てますけど、見る度に可愛て可愛てかなひませんわ。」とお艶は銀煙管に煙草をつめる。
「其帶は妙な結びやうね。」
「これどすか、かうやつて、こゝをかう取つて、こつちやに折つて、かう垂らしますのや。」と赤いハンケチを膝の上でたがねて見せる。白い指が其ハンケチにからまつて美しい。
「何といふの其名は。」
「だらり。」
「簪の名は。」
「京風。」
「櫛は。」
「これどすか。」と白い手を前髮の後ろにやつて、
「花櫛、これは前髮くゝり。あなた何書いとゐやすの。」と余のノートを覗き込む。
「三千歳はん、今日虛空藏樣へお詣りやしたか。」
「ハー。」
「何というてお拜みた。」
「阿呆どすさかいに智慧おくれやす、ちうて。」
銀紙の衝立の陰から又人形が一つ出る。
「松勇はんあげます。」
「姉はん今晩は。」と三千歳に並んで坐つて、
「今日お詣りやしたか。」と三千歳の手を取つて自分の膝の上に置く。
「ハー。」
「歸りしなにあとお向きやへなんだか。」
「向かしまへなんだ。」と三千歳は靨の上を兩手で壓へる。
「面白さうなお話ね。」と聞くと、
「虛空藏樣に詣つて戻り道にあと向くと智慧かへしますてやわ。あの染菊はんな、つい忘れてあと向かはつて、歸らはつてから阿呆にならはつたて、おゝいや。」とお艶がいふ。
「いやらし。」と三千歳と松勇は同じやうに眉をよせて同じやうに背中の帶に手をやる。一つの絲で二つの人形が一所に動いたのかと思はれる。ちりけ元から垂れた帶は松勇のが殊に長く疊の上に流れて居る。
「其帶は何といふ結びやう。」と又松勇に聞いて見る。
「これどすか、だらり。」
「簪は。」
「京風。」と同じ事をいふ。
銀紙の衝立の陰から今度は人形が二つ出る。
「喜千福はんあげます。」
「玉喜久はんあげます。」

「姉はんおほきに。」

「姉はんおほきに。」と二人並んで燭臺の向うに坐る。此方の二人が鏡にうつつたやうによく似て居る。

「二人の帶は。」と又聞くと、

「これどすか、だらり。」と喜千福が玉喜久を見る。

「髷は。」

「京風。」と玉喜久が喜千福を見る。

「同じ事お聞きやす。」と三千歳は笑つて又ノートを覗き込む。

「喜千福はん、あんたの顏見て書いとゐやすわ。妙に顏にお書きやしたえ。」と三千歳がいふ。皆が笑つて喜千福の顏を見る。

「おゝ晴れがまし。」と喜千福は長い袂の中程で顏をかくして、

「姉はん、藝子はんは。」

「お花はん貰ひにやつたの、もう來やはるやろ。あんた都踊りにお出るのン。」

「ハー。」

「踊りばつかり。」

「踊りと鼓。」

「三千歳はんは。」

「踊りばつかり。」

銀紙の衝立の陰から今度は五十餘りの藝子が出る。

「お花はんあげます。」

「姉はんおほきに。」とお艶に會釋して坐ると、

「姉はん。」

「姉はん。」

「姉はん。」

「姉はん。」と四つの人形が先を爭つて、老妓にお辭儀をする。

子供衆が蠟燭の數を殖やす。お花が三味線を取つて「京の四季」を唄ふ。四人が袂をそろへて舞ふ。四人共皆美しい。中でも三千歳が一番美しい。其がすむと今度は三千歳が一人殘つて舞ふ。

『牡丹に戯れ獅子の曲』とお花が少し皺嗄れてゐながらよく通るいゝ聲をふりしぼつて唄ふ。

『日前の奇特新たなり』と愛で合の手があつて三千歳は扇を逆手に持つてきり〳〵と廻る。

『暫く待たせ玉へやと』と其から調子が進んで來て、

『獅子とらでんの舞樂のみぎん』の處でパタパタと勇ましく拍子を踏む。余は便所に立つ。

梯子段を降りる。いつの間にやら醉うたと見えてひよろ〳〵とする。後ろからお艶が、

「あぶのつせ。」といひ乍らついて來る。

『獅子の座にこそなほりけれ』といふ聲がかすかに後ろで聞える。下座敷も三所程で賑やかだ。

手水をすませて手を洗つて居ると、

「君來てるのかい。」といふものがある。ふりかへつて見ると一念だ。

「祇園町知らないなんて誰いつてらア。君今日下山たのかい。」となつかしさうに寄つて來る。

「君の下山た翌日に下山たのサ。……こゝが伯母サンのうちかい。」

「さうぢやないんだい。」

「僕の座敷に來たまへナ。」

「厭だ。」

「なぜ。叱られたら僕が詫びてやるから來たまへ。」と手を取つて連れて戻る。

「玉椿の八千代までもと契りし仁(合)西國順禮サーサ御咏歌……」と松勇が踊るのをお花は地を彈いて居る。余が一念を連れて來たのを見てお花は唄ひながらニヤリと笑ふ。喜千福も玉喜久もニコリとする。お艶もホヽヽと笑ふ。よく見ると余の顏を見て笑ふのではなく、三千歳と一念の顏を見くらべて笑ふのだ。

「一念はんおいなはつたン。旦那はん知つとゐ

るの。」と三千歳は一念を小手招きして其傍に坐らせる。一念も大人しく其傍に坐る。

「旦那はん、あんたはんどつから其御夫婦連れといやしたの。」とお艶がいふ。

「何これが御夫婦なのかい。」と余は驚いて二人を見る。

「あたい一念はんに惚れてるのどつせ。皆なでお笑ひやす。お笑ひたてかまへん。ナアそやおへんか一念はん。」と三千歳は可愛い口をむつと閉ぢて一座を見る。

「えらいおのろけ、かなはんな。」とお花は撥で空を煽ぐ。一念は余のノートを取上げて、

「またこんな事かいてるナ。」「ウーンと首ふつて君何の事。」「きといたつて君何の事。」

「きとおゐやしたといふ事をさういひますがな。」と三千歳は美しい顔を一念にすりつけるやうにしてノートを覗き込む。

「さつきもいろ〳〵書いとゐやした。この畫けつたいな畫やおへんか。」

「下手な畫だねえ。これ誰を書いたのかい。三千歳さんかい。」

「喜千福はんどすがナ。旦那はん喜千福はんが好きやさかいお書きやしたのどすやろ。何どす其畫は。大きな頭の坊さんや事。其も旦那はんがお書きやしたんか。さうか一念はんか。さうかそれが横河の和尚さんかア。横河の和尚さんそないに頭大きいのン。耳もそないに大きいのン。いやらしやの。」「コノ耳ウゴク。」ほんまに耳が動くのン。けつたいな事。松男はん、横河の坊さんの耳が動くて。けつたいえないか。」

「けつたいえなあ。一念はんほんまに動くのか。さうか、妙な耳えなあ。」

「一念はん。尋常卒業おしたんか。」

「したヨ。三千歳サンは。」

「しました。去年。一念はんは。」

「僕も去年。」

「さうか同じやな。一念はん優等か。」

「僕は一番だつたよ。すつかり甲だつたよ。」

「さうか、おゝえら。」

「三千歳サンは。」

「一年の時はお尻から三番目やつたのが、二年から本園に四番になつて、卒業する時もやつぱり四番どした。乙が一つあつたん。

「何が乙だつたの。」

「體操。」

「三千歳さん、斯ういふ字知つてるか。」

「知りまへん、そんなむつかしい字。一念はん知つとゐるか。」

「横河首楞嚴院の楞の字だヨー

「そんな坊さんの事知りますもんか。ソンナラ一念はん斯ういふ字知つとゐるか。」

「そんな變梃な字知るかい。」

「[illegible]、といふ字どすがな。」

「そんな藝者の事なんか知つてたまるかい。其なら斯ういふ字よめるかい。」

「むつかしい字えな。知りまへん。」

「蘇悉地經といつてね三部經の一つだヨ。」

「そんなら一念はん斯ういふ字知つとゐるか。書いてしまふまで見んと置きや。」と長い袖でノートを隱すやうにして何やら書く。花櫛が灯に光つて美しい。

「さあお見。これ何といふ字どす。」

「馬鹿だナア。へのへのなんか書きやアがつた。」

「君達は僕のノートをオモチャにするんだナ。よろしい。其を横河の和尚サンに送つて一念は嫁サンがあつて二人でこんないたづらをしました、とさういつてやるよ。いゝかい。」

「いゝやい。間抜け。」

「一念はんの事お告げやしたらひどい目に合はせまつせ。今度お出でやしたら殺したげまつ

せ。」
「こはい事。旦那はん、こはいこつちやおへんか。三千歳はんに殺されたら痛い事どすやろ。」
一赤い血が出ないで白い血が出るかも知れない。」
「なんぼなとおなぶりやす。ナア一念はん二人でひどい目に合はしたげまほナア。」
一間拔けの顏を僕が書いて見ようか。そらこんな四角な顏だらう。」
「そや〳〵。」
「こんなに眼尻が下つてらア。」
「そや〳〵。」
「こんなに鼻がふくれてらア。」
「そや〳〵。」
「こんなに頭が尖ンがつてらア。」
「そや〳〵。」
「こんなに首が延びてらア。」
「そや〳〵、本間によう似てるわ。松勇はんお見んか。旦那はんの顏によう似てますやろ。一念はんは畫が上手えなあ。」
「さう男はんの傍にばつかりゐんと、ちとお立ちたらどうえ。今からさう浮氣おしるとお母はんにつげるえ。」
一いやな姉はん。いらとくれやしたらするのに。囃子どすか。あたし太鼓どすか。松勇はん一緒にしまほ。」
囃子が始まる。三千歳と松勇の太鼓に喜千福と玉喜久が二挺鼓をうつ。ヤー、ハー、イヤー、と黄色い聲をふりしぼつて、チンポポ、デンデコデンと鳴らす。お花と今新たに加はつた小末といふ若い藝子が地を彈く。阪東君が醉つて手拍子を打つ。其度に體が前後に搖れる。
「小原女の踊が見たいナ。」と阪東君が醉眼を開く。お花が三味線を取り上げると、今度は小末が踊る。
『わしが在所は京の田舍の片ほとり、八瀬や小原に牛引いて(合)柴うちばんしよぎ頭に一寸載せ(合)梯子買はんせんかいな、くるみ買はしやんせエ(合)エ、、、、(合)空が曇れば雪がちらちらと(合)それぢやたまらぬ熱燗でのめ、眞赤に醉へばそこらへぶつ倒れ(合)それぢや色氣もこひけもないわいな(合)おこしてやんなあエ(合)エ、、、、、(合)』
一念も三千歳も並んで大人しく見て居る。小末といふのは十七八で、髮は江戸ッ子の島田に結つて縞飛白の着物に厚板の帶を小意氣にしめて居る。其が手拭で頰被りして小原女になつた姿は、今迄極彩色ばかりであつた中に又さつぱりと美しい。
「君食はないか。」と刺身を取つてやる。
一僕は坊主だから食はない。」
「其で君三千歳サンに惚れられたり、小末サンに見とれたりしていゝのか。」
一何いやがるンだい。」といひながら三千歳の前に皿にある林檎の切れを取つて食ふ。
一中のえゝ事。」と松勇が逃腰をしていふ。
「よろしおすやろ。」と三千歳はツンとすます。
『手を引いて、グードバイして二足三足、別れとも無い胸の内……』といふ今度は今めかしい唄をお花がうたつて玉喜久と松勇が踊る。其内小末と喜千福も一所に踊り出す。そこがいかん、こゝがいかんとお花が直す。
『手を引いて、グードバイして二足三足……』と同じ唄が何遍といふ事なくくりかへされる。まるでお稽古が始まつた樣だ。しまひには阪東君が立つてをどり出す。不器用な踊り工合がをかしい。お艶が笑ふ。
下から仲居のみねが、
「一念はん。伯母はんが迎へに來やはりましたえ。早うお歸り。」といつても一念はだまつてゐる。
一互に見合はす顏と顏、といふ處で阪東君の眼

つきがをかしいといふて皆がどつと笑ふ。一念も笑ふ。
「おい一念作、伯母サンが迎へに來なすつたつていふぢやないか。叱られぬやうに早く歸りたまへ。そらお土産だ。」と今持つて來た許りの生菓子を半紙に一包やる。
「叱られたつていゝやい。」とお菓子をひつたくるやうに取つて、
「もう君横河へは歸らないのかい。僕明日歸るのだョ。」といつてお菓子を兩手に持つたまゝ歸りかける。
「一念はん、ハンケチ貸しまひよか。」と三千歳は立上つてハンケチを振る。一念は一寸振りかへつたが知らぬ風をして踊りの中をかけぬけて歸つて行つた。
京都名物のむし鮓が來て藝子も舞妓も仲居も寄つてたかつて食ふ。
「三千歳はん、一念はんが歸らはつて淋しおすやろ。胸につめん様にお上り。」
「おほきに。」
「利口な小僧だナア。三千歳サンが惚れるのも無理は無い。」
「お父つあんもお母はんも無いのやてな。可哀想やおへんか。どうして横河みたいな淋しい處へ伯母はんがやりやはつたんやろ。」と三千歳は沈んで居る。
横河の夜は更けにくかつたが祇園の夜は更けやすい。
「ハ――イ――」といふ子供衆の長い返辭が樓中に響きわたつて聞える。
（明治四十年四月）

看病日記（抄）

母の病を看るひま〳〵に、幼かりし時經書の素讀などせし古き小さき机を取り出でゝ上に四五枚の白紙を置き、心動けば筆取りて自他の句を書いつけ侍る。

明治三十一年五月二十八日
閻王の鏡のもとに夏書かな　虚子

小生近況
椅子を置くや薔薇に曙のふるゝ處　子規
蟲のつく夏萩の芽を剪りすてぬ　同
近來雨天多く庭に出られぬには閉口致候

五月二十九日
傘棚に古傘多き時雨かな　虚子

老母を大切にせよとありて
一匹の蚊にも心をつけたまへ　骨子

六月四日
夏の風淋しき蝶を見たりけり　虚子

六月七日
東雲神社に子規を聞きに行く
まだ鳴かぬ一番星やほとゝぎす　虚子

六月十日
蚊遣火や緣に置いたる馬の沓　虚子
蚊遣火やこの時出づる蚊喰鳥　同
老ぼれし犬と月見る蚊遣かな　同

六月十三日
苔清水毒ある蜘の行方かな　虚子
音たてゝ清水湧き出る葎かな　同
毒水と名づけられたる清水かな　同
旅人の飲み行く裏の清水かな　同

六月十四日
へご鉢の水まさりけり五月雨　虚子

六月十九日
茨の花門を出でざる十日かな　虚子

六月二十日
茨の花牛を殺してもてなしぬ　虚子
薔薇の花樂器いだいて園に出でぬ　同

斑鳩物語

上

法隆寺の夢殿の南門の前に宿屋が三軒ほど固まつてある。其の中の一軒の大黒屋といふうちに車屋は梶棒を下ろした。急がしげに奥から走つて出たのは十七八の娘である。色の白い、田舎娘にしては才はじけた顔立ちだ。手ばしこく車夫から余の荷物を受取つて先に立つ。廊下を行つては三段程の段階子を登り又廊下を行つては三段程の段階子を登り一番奥まつた中二階に余を導く。小作りな體に重さうに荷物をさげた後ろ姿が余の心を牽く。

荷物を床脇に置いて南の障子を廣々と開けてくれる。大和一圓が一目に見渡されるやうない眺望だ。余は其まゝ障子に凭れて眺める。

此の座敷のすぐ下から菜の花が咲き續いて居る。さうして菜の花許りでは無く其と點綴して梨子の棚がある。其梨子も今は花盛りだ。黄色い菜の花が織物の地で、白い梨子の花は高く浮織りになつてゐるやうだ。殊に梨子の花は密生してゐない。其荒い隙間から菜の花の透いて見えるのが際立つて美しい。其に處々麥畑も點在して居る。偶ゝ燈心草を作つた水田もある。梨子の花は其等に頓着なく浮織りになつて遠く彼方に續いて居る。半里も離れた所にレールの少し高い土手が見える。其土手の向うもこゝと同じ織物が織られてゐる樣だ。法隆寺はなつかしい御寺である。法隆寺の宿はなつかしい宿である。併し其宿の眺望がこんなに善からうとは想像しなかつた。これは意外の獲物である。

娘は春日塗りの大きな盆の上で九谷まがひの茶碗に茶をついで居る。やゝ斜に俯向いてゐる横顔が淋しい。さきに玄關に急がしく余の荷物を受取つた時のいき〳〵した娘とは思へぬ。赤い襦袢の襟もよごれて居る。木綿の着物も古びて居る。それが其淋しい横顔を一層力なく見せる。

併しこれは永い間では無かつた。茶を注いでしまつて茶托に乘せて余の前に差し出す時、彼はもう前のいき〳〵した娘に戻つて居る。

「旦那はん東京たつか。さうだつか。ゆうべ奈良へお泊りやしたの。本間になア、よろしい時候になりましたなア。」と脱ぎ棄てた余の羽織を疊みながら、

「御參詣だつか、おしらべだつか。あゝさうだつか。二三日前にもなア國學院とかいふとこのお方が來やはりました。」と羽織を四つにたゝんだ上に紐を載せて亂箱の中に入れる。

余は渇いた喉に心地よく茶を飲み干す。東京を出て以來京都、奈良とへめぐつて是程心の落つくのを覺えた事は今迄無かつた。余は膝を抱いて再び景色を見る。すぐ下の燈心草の作つてある水田で一人の百姓が泥を取つては箕に入れて居る。箕に土が滿ちると其を運んで何處かへ持つて行く。程なく又來ては箕に土をつめる。何をするかわからぬが此廣々とした景色の中で人の動いて居るのは只此百姓一人きりほか目に入らぬ。

娘は縁に出て手すりの外に兩手を突き出して余の足袋の埃を拂つて又之を亂箱の中に入れる。

「いゝ景色だナア。」といふと直ぐ引取つて、

「此邊はなア菜種となア梨子とを澤山に作りまつせ。へー燈心も澤山に作ります。燈心はナー、

あれを一遍よう乾かして、其から叩いてナー、それから又水に漬けて、其から長い錐のやうなもので突いて出しやはります。其から又疊の表にもしやはりまつせ。長いのから燈心を取りやはつて短いのは大概疊の表にしやはります。」

「疊の表には藺をするのぢやないか。燈心草も疊の表になるのかい。」

「いやな旦那はん。燈心草といふのが藺の事たすがな。」と笑ふ。余は電報用紙を革袋の中から取り出す。娘は棚の上の硯箱を下ろして蓋を取る。

「まア。」といつて再び硯箱を取り上げてフッと輕く硯の上の埃を吹いて藥罐の湯を差して墨を磨つて呉れる。墨はゴシ／＼と厭な音がする。

電報を認め終つて娘に渡しながら、

「下は大變多勢のお客だね。宴會かい。」と聞く。娘は電報を二つに疊んで膝の上に置いて、

「いゝえ。皆東京のお方だす。大師講のお方で高野山に詣りやはつた歸りだすさうな。今日はこゝに泊りやはつてあした初瀬に行きやはるさうだす。今晩はおやかましうおますやろ。」と娘は立たうとする。電報は一刻を急ぐ程の用事でもない。

「初瀬は遠いかい。」とわざと娘を引とめて見る。

「初瀬だつか。」と娘も一度腰を下ろして、

「初瀬はナー、そらあのお山ナー、そら左の方の山の外れに木の茂つたとこがありますやろ……」

と延び上るやうにして、

「あこが三輪のお山で、初瀬はあのお山の向うわきになつてます。旦那はんまだ初瀬に行きやはつた事おまへんか。」

「いやちつとも知らないのだ。さうかあれが三輪か。道理で大變に樹が茂つてゐるね。それから吉野は。」

「吉野だつか。」と娘は電報を疊の上に置いて膝を立てる。手摺りの處に梢を出してゐる八重櫻が娘の目を遮るのである。余は立上つて縁に出る。娘も余に寄り添うて手摺りに凭れる。

「そら、此向うに高い山がおますやろ、霞のかかつてる。へーあの藪の向うだす。あれがナー多武の峰で、あの多武の峰の向うが吉野だす。」

娘は櫻の梢に白い手を突き出して、

「あの高い山は知つとゐやすやろ。」

「あれか、あれが金剛山ぢやないか。あれは奈良からも見えてゐたから知つてる。」

娘は手摺り傳ひに左へ／＼と寄つて行つて、

「旦那はん、一寸來てお見やす。そらあそこに今鴉の飛んでる下のとこ。さうだす、あの百姓家の左の方にこんもりした松林がおますやろ。そやおまへんがナー。それは鐵道のすぐ向うだすやろ。それよりももつとずつと向うに、さうだすあの多武の峰の下の方にうつすらした松林がありますやろ。さう／＼。あこだす。あこが神武天皇樣の畝火山だす。」

娘の顏はます／＼いき／＼として來る。畝火山を教へ終つた彼はまだ何物をか探して居る。彼の知つて居る名所は見える限り教へてくれる氣と見える。

「お前大變よく知つて居るのね。どうしてそんなによく知つて居るの。皆な行つて見たのかい。」

「へー、皆んな行きました。」といつて余を見た彼の眼は異樣に燃えてゐる。

「さう、誰と行つたの、お父サンと。」

「いゝえ。」

「お客さんと。」

「いゝえ。そんな事聞きやはらいでもよろしまんがナア。」と娘は輕く笑つて、

「私の行きました時も丁度菜種の盛りでたア。

さう／＼やつぱり四月の中頃やつた。」と夢見る如き眼で一寸余の顏を見て、
「旦那はん、あんたはんお出でやすのなら連れていておくれやすいな。ホヽヽ、私見たいな者はいやだすやろ。」
「なぜだす。」
「いやでもないが、こはいナ。」
「なぜでも。」
「なぜだす。」
「こはいぢやないか。」
「しんきくさ。なぜだすいな、いひなはらんかいな。」
「いゝ人にでも見つからうもんなら大變ぢやないか。」
「あんたの。」
「お前のサ。」
「ホヽ、馬鹿におしやす。そんなものがあるやうならナー。……無い事もおへんけれどナー。……ホヽヽヽ、御免やすえ。……ア、電報を忘れてゐた。お風呂が沸いたらすぐ知らせまつせ。」と妙な足つきをして小走りに走つて疊の上の電報を抄ふやうに拾ひ上げて座敷を出たかと思ふと、襖を締める時、「本間におやかましう。御免やすえ。」としづかに挨拶してニッコリ笑つた。
「お道はん／＼。」と下で呼ぶ聲がする。
「へーい。」といふ返辭も落ついて聞えた。
お道さんが行つたあとは俄かに淋しくなつた。きのふ奈良でしらべた報告書の殘りを認める。時々下の間で多勢の客の笑ふ聲に交つてお道サンの聲も聞えるが、座敷が別棟になつてゐるのではつきりわからぬ。
夢殿の鐘が鳴る。時計を見るともう六時だ。
漸く風呂が沸いたと知らして來た。其はお道さんでは無く、此家の主婦であらう、三十四五の髮サンであつた。晩飯の給仕に來たのもお道さんで無く此髮サンであつた。
此髮サンの話によると、お道サンといふのは此うちの娘でなくすぐ此裏の家の娘で、平生は自分のうちで、機械機を織つて居るが、世話しい時は手傳ひに來るのだ、との話であつた。
「へい、此邊でナー、ちつと澁皮のむげた娘はナー、皆南の方へ行きやはります。南の方といふのはナー、下市、上市、吉野あたりだす。お道はんも一寸行てやはりましたが、お父つあんが一人で年よつてるさかいに半年許りで歸つて來やはつた。へー、何だす。そりやナー若い時はナー。そやけれどお道はんに限つてそないな事はありまへんやらう。ホヽヽ。」とお髮サンは妙な眼つきをして人の顏を見て笑ふ。

中

翌日午前は法隆寺に行つて、午後は法起寺に行つた。これで今回官命の役目は一段落となるのである。法起寺は住職は不在で、年とつた方の所化も一寸出たとの事で、十五六になるのつそりした小僧が炭をふう／＼吹いて灰だらけにした火鉢を持つて來て、ぬるい茶を汲んで來て主ぶりをする。取調の事は極めて簡單で直ちに結了する。塔の修覆が出來てからまだ見ぬので庭に出て見る。腰衣をつけた小僧サンもあとからついて來る。白い庭の上に余の影も小僧サンの影もくつきりと映る。うらゝかな春の日だ。三重の塔は法隆寺の塔を見た目には物足らぬが其でも蟇股や撥形の手はれぬ推古式のところが面白い。余はふと此塔に登つて見度くなつた。
「小僧サン、塔に登りたいものですが……」
「塔にお登りやすの、きたなうおまつせ。」といひながら無造作に承諾してもう鍵を取りに行く。頭に手をやつて見たり、腰に手をやつて見たり自分の影法師を面白さうに見ながら悠々と

して庫裡の方に行つた。
直下に立つて仰ぐと三重の塔でも中々高い。三重目の欄干のところに雀が群がつて飛んで居る。立札を讀むと特別保護建築物で一年餘を費して修理したとある。別に立札に内務省の下賜金が二萬何千圓とある。此地はもと聖徳太子の御學問處で、推古天皇の御創立になつた官寺で、昔はたいしたものであつたのだらうが、今は當時の建物として此塔許り殘つてゐて他は見すぼらしい堂宇許りだ。とても法隆寺などには比べものにはならん。

小僧サンが悠然として鍵を持つて來て、いきなり塔の扉に突ッ込む。ゴトンと音がして大きな扉ががた〱と開く。冷たい風が塔の中から吹く。安置されて居る佛體は手や足の無くなつてゐる古佛でこれも推古時代の彫刻かと思はれる。小僧サンはもう梯子を登つて居る。

此梯子は高さ一間半許りの幅のせまい勾配の急な梯子で、一歩踏む度に少しゆらぐ。余は元來臆病な方だが今更止めるわけに行かぬので小僧サンのあとについて登る。戸をがら〱と開ける音がする。埃が落ちて來るので閉口しながら仰向いて見ると、天井に二尺角程の小さい穴があいて居る。小僧サンは今其穴に體半分を突込んで足を二本宙にぶら下げて居る。おやおやと思つて見て居るうちに體操のやうな事をしてヒョイと上に飛び上る。余は恐る〱登つて其穴の處に達し漸く頭を突込んで上を見上げると驚いた。余は塔の中の構造も普通の家と同じに一階二階と其々天井のやうなものが出來てゐることと思つてゐたに、天井は一階のところに在る許りで、見上げると此上はもう頂上まで筒拔けで、中央の大きな柱が天にまで達するかと思ふやうに高い。小僧サンはもう第二の短い梯子を登つて右から左にかゝつてゐる木を輕業のやうに兩手をふつて渡つてゐる處だ。

余は穴に頭を突込んだまゝ、

「小僧サンもうよしませう。」といふ。小僧サンは不平さうに、

「折角こゝまで來たんやよつて上りなはれ。」と横木の上に立つたまゝ下を見下ろして居る。何だか此際小僧サンに無限の權威があるやうに思はれて仕方なしに上ることにする。小僧サンは今體操をするやうなことをして此穴を上がつたが、其穴已に余に取つて大困難だ。頭の上に斜に横たはつてゐる木に手をかけて見る。木が大きくて手のさきがかゝる許りだ。指のさきに懸命の力を籠め一方左の手を其木にかけ、右の腕でべたりと天井の上を壓へると埃だらけで紋附羽織がだいなしになる。漸く天井裏に登る。

其から第二の梯子は無造作に登れたが、小僧サンが手をふつて渡つてゐた横木の上に來て途方に暮れる。何かつかまへるものが無いと足がふるへて顛倒しさうだ。頭の處に併行した大きな木がある。兩手をぐつと上げて此木を握る。足の方も見ねばならず手の方も見ねばならず、上目を使つたり下目を使つたり一分きざみに渡つて居ると忽ちゴーといふ地鳴りのやうな音がする。何事かと思つて立どまつて見ると一陣の風が塔に吹き當る音であつた。ゆれはしないかと中央の大きな柱を見ると大船の帆柱よりも大きいのが寂然として立つて居る。漸く意を安んじて横木を渡つてしまふと、サア行き詰りになつてしまつてどうしてよいのかわからぬ。梯子もなく、別に連絡して居る他の木もない。俄かに恐ろしくなつて來てもう空目を使つて小僧サンを見る勇氣もない。

「小僧サン、これからどうしたらいゝんです」

小僧サンの聲は思はぬ方から聞える。

「其上の木にまたいで上りなはれ。」と極めて易

易たる事のやうにいふ。其がさう易々たる事なら何も小僧サンを呼びはしないのだが、これはいよ／＼窮地に陥つた事だと泣き度くなる。仕方なしに兩方の手で上の木に抱きつくやうにしてやつと這ひ上る。羽織の袖が何かにかゝつたらしいのを一生懸命で振り切る。一息ついて上を見上げると上はまだなか／＼遠い。下を見下ろすと下ももうなか／＼遠い。もう下りるのも上るのも同じく命がけだと覺悟を極めて未練なく登ることにする。

小僧サンは立どまつてはふりかへり、ふりかへつては歴階して上つて居る。余もまけぬ氣になつて登る。

「こゝの欄干のところにしまひよか、露盤のところに出なはるか。」と小僧サンが上の方から呼ぶ。露盤の處から九輪の處に首を突出す事が出來るといふ事は曾て聞いた事もあつた。小僧サンは其處までも行く氣と見える。其處まで行くうちには余はもう手足の力を失つて途中から轉落するに極つてる。

「欄干のところで結構です。」

「さうだつか。露盤のとこに出ると畝火の方がよく見えまんがなア。」

畝火は宿屋の二階からでも見えぬことは無い。こちらは其どころでは無いのだ。小僧サンはどうするかと氣が氣でなく見て居ると、やつと露盤の方は斷念したと見えて、欄干の方に出る小さい窓を開けて居る。

小僧サンは其窓を大佛殿の柱くゞりといつたやうな風に這うて出る。余も漸く其窓に達して、今度こそすべり落ちたら百年目と度胸を据ゑて這うて出る。窓の外は三重目の小さい回廊で欄干を握つて立つと、ニチャ／＼と手につくものがある。見ると雀の糞だ。其邊眞白になつて居る。さつき雀の飛んで居つたのが此處だなと思ふ。小僧サンに並んで欄干を掴まへて下を見下ろす。

自分の足下には二重目の屋根が出て居る。此處に立つて下を見下ろすのは想像してゐた程に恐ろしく無い。小僧サンに跟いて回廊傳ひに東の方に廻つて見る。宿屋の二階で見た菜の花畑はすぐ此塔の下までも續いて居る。梨子の棚もとび／＼にある。麗かな春の日が一面に其上に當つて居る。今我等の登つてゐる塔の影は塔に近い一反ばかりの菜の花の上に落ちて居る。

「又來くさつたな。又二人で泣いてるな。」と小僧サンは獨り言をいふ。見ると其塔の影の中に一人の僧と一人の娘とが倚り添ふやうにして立話をして居る。女は僧の肩に凭れて泣いて居る。二人の半身は菜の花にかくれて居る。

「あの坊さん君知つてるのですか。」

「あれなあ、私の兄弟子の了然や。學問も出來るし、和尚サンにもよく仕へるし、おとなしい男やけれど、思ひきりがわるい男でナー。あのお道といふ女の方がよつぽど男まさりだつせ。あのお道はナア、親にも孝行で、機もよう織つて、氣立もしつかりした女でナア、何でも了然が岡寺に居つた時分にナア、下市とか上市とかで茶屋酒を飲んだ事のある時分惚れ合つてナア、それから了然はこちらに移る、お道はうちへ歸るししてナア、今でもあんなことして泣いたり笑つたりしてますのや。ハヽヽ。」と小僧サンは無頓着に笑ふ。お道は今朝から宿に居なかつたが今こゝでお道を見ようとは意外であつた。殊に其情夫が坊主であらうとは意外であつた。我等は塔の上からだまつて見下ろして居る。

何か二人は話してゐるらしいが言葉はすこしも聞えぬ。二人は塔の上に人があつて見下ろして居ようとは氣がつくわけも無く、了然はお道をひきよせるやうにして坊主頭を動かして話し

て居る。菜の花を摘み取つて髮に插みながら聞いてゐたお道は急に頭を振つて包みに額を推しあてて泣く。

「了然は馬鹿やナア。あの阿呆面見んかいナ。お道はいつやら途中で私に遇ひましてナー、こんなこといふてました。了然はんがえらい坊さんにならはるのには自分が退くのが一番やといふ事は知つてるけど、こちらからは思ひ切ることは出來ん。了然はんの方から棄てなはるのは勝手や。こちらは焦れ死にに死ぬまでも片思ひに思うて思ひ抜いて見せる。と斯んなこという てました。私お道好きや。私が了然やつたら坊主やめてしもてお道の亭主になつてやるのに。了然は思ひきりのわるい男や。ハ、、、」と小僧サンは重たい口で洒落たことをいふ。塔の影が見るうちに移る。お道はいつの間にか塔の影の外に在つて菜の花の蒸すやうな中に春の日を正面に受けて居る。涙にぬれて居る顔が菜種の花の露よりも光つて美しい。我等が塔を下りようと彼の大佛の穴くゞりを再びもとへくゞり始めた時分には了然も纔に半身に塔の影を止めて、半身にはお道の浴びて居る春光を同じく共に浴びてゐた。了然といふ坊主も美しい坊主であつた。

下

其夜晩酌に一二杯を過ごして毛布をかぶつたまゝ机に凭れてとろ〳〵とする。ふと目がさめて見るとうすら寒い。時計を見ると八時過ぎだ。二時間程もうたゝ寢をしたらしい。昨日に引きかへ今日は廣い宿ががらんとして居る。客は余一人ぎりと見える。靜かな夜だ。耳を澄ますと二處程で筬の音がして居る。

一つの方はカタン〳〵と冴えた筬の音がする。一つの方はボットン〳〵と沈んだ音がする。其二つの音がひつそりした淋しい夜を一層引き締めて物淋しく感ぜしめる。初め其筬の音は遠い樣に思つたがよく聞くと餘り遠くではない。余は夢の名殘りを急須の冷たい茶で醒ましてぢつと其二つの音に耳をすます。

蛙の聲もする。はじめ氣がついた時は僅に蛙の聲かと聞き分くる位のひそみ音であつたが、筬の音と張り競ふのか、あまたのひそみ音の中に一匹大きな蛙の聲がぐわアとする。あれが蛙の聲かなと不審さるゝ程の大きな聲だ。晝間も燈心草の田で啼いてゐたがあんな大きな聲のはゐなかつた。夜になつて特に高く聞えるのかも知れぬ。一匹其大きなのが啼き出すと又一つ他で大きなのが啼く。又一つ啼く。しまひには七八匹の大きな聲がぐわア〳〵と折角の夜の寂寥を攪き亂すやうに鳴く。其でも蛙の聲だ。はじめひそみ音の中に突如として起つた大きな聲を聞いた時は噪しいやうにも覺えたが、其が少し引き續いて耳に慣れると矢張り淋しい。ひそみ音の方は一層淋しい。氣の勢か筬の音もどうやら此蛙の聲と競ひ氣味に高まつて來る。カタンカタンといふ音は一層明瞭に冴えて來る。ボットン〳〵といふ音は一層重々しく沈んで來る。

お髮サンが床を延べに來る。

「旦那はん毛布なんかおかぶりやして、寒おまつか。」

「少しうたゝねをしたので寒い。それに今晩は馬鹿に靜かだねえ。お道さんは來ないのかい。」

「今晩は來やはりまへん。そら今筬の音がしてますやろ、あれがお道はんだすがな。」

「さうかあれがお道さんか。」と余は又筬の音に耳を澄ます。前の通り冴えた音と沈んだ音とが聞える。

「二處でしてゐるね。其に音が違ふぢやないか。お道さんの方はどちらだい。」

「そらあの音の高い冴えた〳〵した方な、あれが

お道さんのだす。」

「どうしてあんなに違ふの。機が違ふの。」

「機は同じ事たすけれど、筬が違ひます。音のよろしいのを好く人は筬を別段に吟味しますのや。」

余は再び耳を澄ます。今度は冴えた音の方にのみ耳を澄ます。カタン〳〵と引き續いた音が時々チョッと切れる事がある。絲でも切れたのを繋ぐのか、物思ふ手が一寸とまるのか。お髪サンは敷蒲團を二枚重ねて其上に上敷きを延べながら、

「戰爭の時分はナア、一機の織り賃を七十錢もとりやはりましてナア、へえ繃帶にするのやさかい薄い程がよろしまんのや。其に早く織るものには御褒美を呉りやはつた。其時分は機もよろしうおましたけど、もう此頃はあきまへん。へーへあんたはん一機二十五錢でナア、一機といふのは十反かゝつてるので、なんぼ早うても二日はかゝります。」

お髪サンは聞かぬ事まで一人で喋舌る。突然筬の音に交つて唄が聞える。

『苦勞しとげた苦しい息が火吹竹から洩れて出る』

「お道さんかい。」と聞くと、

「さうだす。えゝ聲だすやろ。」とお髪サンがいふ。余は聲のよしあしよりもお道サンが其唄をうたふ時の心持を思ひやる。

「あれでナア、筬の音もよろしい唄が上手やとナア、よつぽど草臥れが違ひますといナ。」

「あんな唄をうたふのを見るとお道サンもなかなか苦勞してゐるね。」

「ありや旦那はん此邊の流行唄だすがナ、織子といふものはナア、男でも通るのを見るとすぐ惡口の唄をうたうたりナア、そやないと惚れたとかはれたとかいふ唄ばつかりだす。」

俄かに男女の聲が聞える。

「どこへ行きなはる。」

「高野へお參り。」

「ハヽア高野へ御參詣か。夜さり行きかけたらほんまにくせや。」

「お父つはんはもう寢なはつたか。」

「へー休みました。」

高野へ參詣とは何の事かと聞いて見たら、

「はゞかりへ行くことをナア、此邊ではおどけてあないにいひまんのや。」とお髪サンは笑つた。よく聞くと女の聲はお道サンの聲であつた。男の聲は誰ともわからぬ。長屋つゞきの誰かであるらしい。

筬の音が一層高まつて又唄が聞える。唄も調子もうき〳〵として居る。

『鴉啼迄寢た枕元櫛の三日月落ちて居る』

お髪サンは床を延べてしまつて、机のあたりを片づけて火鉢の灰をならして、もうランプの火さへ小さくすればよいだけにして、

「お休みやす。あまりお道サンの唄に聞きほれて風邪引かぬやうにおしなはれ。」と引下る。

酒も醒めて目が冴える。筬の音を見棄てゝ此儘寢てしまふのも惜しいやうな氣がする。晝間書きさして置いた報告書の稿をつぐ。ふと氣がつくといつの間にやら筆をとゞめて、きのふのお道サンの喋舌つた事や、今日塔から見下ろした時の事やを回想しつゝ筬の音に耳を澄まして居る。又唄が聞える。

『大分世帶に染んでるらしい目立つ鹿の子の油垢』

調子は例によつてうき〳〵として居るが、夜が更けた勢かどこやら身に入むやうに覺える。

これではならぬと更に稿をつぐ。

終に暫くの間は筬の音も耳に入らぬやうになつて稿を終つた。今日で取調の件も終り、今夜で報告書も書き終つた。がつかりと俄かに草

臥れた樣に覺える。

火を小さくして寢衣になつて蒲團の中に足を踏み延ばす。篠の音はまだ聞えて居る。忘れてゐたが沈んだ方のもまだ聞えて居る。

眠るのが惜しいやうな氣がしつゝうと〳〵とする。ふと下で鳴る十二時の時計の音が耳に入つたとき氣をつけて聞いて見たら、沈んだ方のはもう止んでゐたが、お道サンの篠の音はまだ冴え〳〵として響いてゐた。

（明治四十年五月）

法隆寺の鐘

これも法隆寺の話だ。山門を這入ると直ぐ右側に寫眞や、寶物の說明や、くさ〴〵のものが並べてあつて、蒲團を掛けた小さい猫火鉢が置いてあつて、人は居らぬ。案内者が「八さーん。」と呼んだが返事が無い。鐘がゴーンと鳴る。案内者はだまつて猿臂を延ばして戸棚の横から長い鍵を出して我等の前に立つた。我等は塔を見上げ、山門を見かへりつゝ其後について行く。案内者は金堂の横の扉に鍵を突込んでコツン〳〵とこねくるがどうしても開かない。鐘がゴーンと鳴る。案内者は鍵を突込んだまゝ鐘樓の方へ行く。見ると二階建のやうになつてゐる鐘樓の下に袴とも腰衣ともつかぬやうなものを腰に纏うた一人の男が長い綱を持つて立つて居る。我等も案内者のあとについて行く。男が綱をゆるめたと見ると鐘がゴーンと鳴る。「八さん、開けておくれ、わたしが其間撞いてるさかい。」と案内者は代つて綱を持つた。寺男は默つて綱を渡して金堂の方に走つて行つた。案内者は一二三四と口のうちで撞木の搖れる數を數へて五つ目に綱をゆるめる。さうすると撞木が鐘に當る。ゴーンと鳴る。嘗て佛蘭西から日本の美術を調べに來て居た人が特に此寺の鐘を賞めてゐた事を思ひ出す。見上げると、他の寺の鐘樓とは違つて露出してゐる鐘ではないから薄暗いが、細長い形をしたあまり大きくない鐘で、青い錆が品よく古色を呈して居るのが窓から差入る光線で朧氣ながら見える。撞木が鐘に當るとゴーン、ゴーウ〳〵〳〵ゴーウと靜に遠く傳はる響きにも上代の音がある。余はどうか僕にも一度撞かして吳れぬかと案内者に賴んで、敎はるまゝに一二三と數をくりつゝ五つ目に大きく引いて綱を離した。撞木が當るは當つたが纔に音を發した許りで涼しい清い梵音は出なかつた。殘念に思つて今一度と數をくつて又綱をゆるめた。前よりは稍々善い音を出したがそれでも心耳を澄ます音ではなかつた。同行の把栗が、僕にも一つ撞かして吳れ、と綱を持つて撞いた。余同樣に力無い響きであつた。漸く金堂を開けた寺男は歸つて來て、「そんな撞き樣をしてはどもならん。」と綱を取つて代つて撞いた。鐘の音は再び澄んだ力ある音に歸つた。我等の撞いた鐘の音を法隆寺の村人は何と聞いたらう。田を耕しながら其力の無い音に耳を欹てて、佛力の俄に斯くも衰へたるかと定めて驚いた事であつたらう。併し其は唯三突きであつた。四突き目は再び元の音に戻つた。嗚呼此の靈鐘を瀆した罪は深い。併し、法隆寺始まつて以來佛法の泯ぶる迄此寺の鐘は何萬遍鳴るであらう、何億遍鳴るであらう、何億遍でも善い、其うちの二遍だけは余が撞いた鐘の音だと思ふと嬉しい。若し次の世に此罪深い余が萬々一にも佛の國に生れる樣な事があるならば、其は僅かに此二突きの鐘の音による事と信ずる。

此村は稲も法の響きかな

俳諧師

一

明治二十四年三月堺和三藏は伊豫尋常中學校を卒業した。三藏は四年級迄忠實な學校科目の勉强家で試驗の成績に第一位を占める事が唯一の希望であつた。それがどういふものか此一年程前より試驗前の勉强は一切止めた。この卒業試驗前は近松の世話淨瑠璃を讀破した。試驗の答案は誰よりも早く出して殘つた時間は控室で早稻田文學と柵草紙の沒理想論を反覆して精讀した。

三藏の父は竹刀を提げて中國九州を武者修行に廻つて廢藩後も道場を開いて子弟を敎育したといふ武骨一片の老人で、三藏は其の老後の子であつたに拘らず家庭の敎育は非常に嚴格であつた。「三藏炭取りを持つて來い。」といふ聲にも「やつ。」と竹刀を握つて立合つた時の氣魄が籠つてゐるので、三藏は覺えず言下に「はい。」と蹶起せねばならぬやうになる。「三藏此手紙を高木へ持つて行てくれぬか。」といふ聲はゆつたりしてゐるが三藏は其手紙を受取るや否や下駄を突掛けて駈け出さねばならぬほど其聲に威嚴がある。さうして其謹嚴な半面には又他愛も無い愛情がある。三藏が中學校に這入つて後迄も、外出して歸つた父の袂からは紙にくるんだ煎餅位のお土産が出ぬ事は稀であつた。父が亡なつてからも同じく嚴肅な兄の膝下に保管されて、さうして際限も無い老母の愛に甘やかされて、三藏は人に對して極めて柔順で素直で氣が弱くつて、さうして何處か我儘で敗嫌で、虛榮心の強い性質に育て上げられた。

兄は「金儲けには醫者がいゝよ、醫者にならぬか。」と勸めた。三四年前或寺を借りて毎月演說會をした仲間は「君は政治家になる筈では無かつたのか。」といつた。三藏は醫者は思ひもよらぬ、金なんか儲けなくつてもよいと思つた。政治家は初め其の花やかな點が心を牽いたが、後になつて雪中梅や佳人の奇遇で想像してゐたのとは違つてゐる事がわかつて來て政治家も面白くないと思つた。かくて三藏は文學者と決心した。文學は束縛の少ない自由の天地である上に又政治についで花やかな天地である事も三藏の心を牽いた一つの原因であつた。

松山一の老舖のある料理屋に同窓生の祝賀會が開かれる。御詠歌の上手な同窓生の一人が「普陀落や岸うつ波」と茶碗を箸で叩いて唄ふと、小さいおもちやの傘と、これも箸を杖の代りに持つていゝ、をばさんと仇名のある滑稽家の栗田が妙な身振りをして「順禮に御報捨」と可愛らしい聲を出す。こゝまでは趣向が出來たが「今日はまた夫の命日、お手のうち進ぜませう。」といふ塗盆を持つて立つて行く役割に當るものが一人も無い。三藏は乾いた口を開けて「僕がやらう。」といふ。「君が遣るか。」と栗田が眞面目な顏をして驚く。茶碗が鳴る。「普陀落や岸うつ波」と唄ふ聲が響く。いゝ、をばさんは目をしよぼしよぼさせ乍ら首をかたげ「順禮に御報捨」と絲のやうな聲を長く引つ張つてゐる。いざとなると三藏は喉が詰つて口がきけぬ。いゝ、をばさんは又「順禮に御報捨」と改めていふ。三藏はまだ默つてゐる。「馬鹿！」といふものがある。「自分で遣ろといはねばいゝのだ。」といふものがある。餘興は其のまゝにつぶれて三藏は面目を失ふ。

ぱつと咲いた櫻はぱつと散る。蚊いぶしの煙の中で三藏は露伴の風流佛を愛讀する。

二

瀨戶内海の波は靜かだ。夢のやうに寄せて音も無く白砂の上を走る。只時々囁く如く聞ゆるのは渚に捨てゝある碇にあたつて碎くる波の響であらう。堅田の浦の汀の石に立つて近江の湖を見た時と、三津の濱の捨舟の端に腰打ち掛けて瀨戶内海を眺めた時といづれを湖いづれを海と見定めがつかう。其三津の濱に門司を出た汽船が著く。一日に一度著くこともある。二度著くこともある。艀は旅客と行李を積んで汽船に運ぶ。汽船は其靜かな鏡の面に渦を卷いて大阪に向ふ。

四年間一番の席を獨占して卒業する時も一番であつた中尾市太郎は藝者屋の息子である。市太郎の姉二人とも藝者をしてゐる。一人の妹も藝者をしてゐる。姉妹の稼いだ金は市太郎の教科書となり制服となり月謝となり、其月桂冠となり、さうして又東京の高等工業學校を志望して上京する其學資となり旅費となる。三津の濱の波打際に立つてゐるのは、沖遠き雲の峰に打映えて赤、紫、淺黃、三本の蝙蝠傘、少し離れて大小いろ〳〵の麥藁帽。其中には三藏もゐる、三藏を蹴落して二番になつた加藤もゐる、四番の平田もゐる、をばさんもゐる。中尾も加藤も平田もをばさんも新らしい活動の世界を波の彼方に描く。中尾は甲板で帽子を振る。加藤も平田もをばさんも帽子を振る。勝つて歸り給へと帽子を振る。勝つて歸るよと帽子を振る。紫、淺黃、赤、三本の蝙蝠傘からも眞白き手に各〻ハンケチを振る。勝つてお歸りよとハンケチを振る。三藏は獨り目をねむつて解放の世界を波の彼方に描く、中尾の振る帽子、加藤、平田、をばさんの振る帽子、三人の姉妹の振るハンケチを見て三藏も亦知らず識らず帽子を振る。而も勝つて歸り給へといつては振らぬ。負けて歸り給へといつて振るのでも無い。三藏はたゞ帽子を振る。中尾が振つてゐる間振る。加藤、平田、をばさんが振つてゐる間振る。三人の姉妹が振つてゐる間振る。

中尾につゞいて誰彼が出發する。三藏の家の庭に向日葵が一度廻ると三津の濱に二艘の汽船が著いて三藏は一册の小說を讀み終る。八月に入つてからは自ら筆を取つて書く。主人公は大江山の麓の村から離緣になつて歸つて來たといふ自分の家の西隣の家の娘で、一枚書いては消し二枚書いては消し十枚にならぬうちに筆を中止する。三藏の愛讀する風流佛の作者露伴は二十一歲で露團々を處女作として出した。二十一歲迄には處女作を出さねばならぬと考へる。

三

大阪商船會社の綠川丸が、三藏、加藤、平田、をばさん等の一行を神戶に送り、汽車が更らに是れを京都に送つたのは、四條の磧にまだ川床が殘つてゐて枝豆賣の赤い提灯が篝火の中を縫つて步く八月の末であつた。

三藏が朝顏の花と夕顏の花の間に立つて、故鄕の垣根から自分の未來に首を延して何か判らぬものに望みをかけてゐた時は、目の前にぱつと蛤の口から出た蜃氣樓のやうなものが棚引いて其中に畫の如き京都があつた。

扨て今は親しく其京都の土を足で踏んで七條の停車場からガラ〳〵と車にゆられて、三藏等より一年先に卒業して既に高等學校に在學してゐる先輩の上長者町の下宿に著く。加藤も平田もをばさんも著く。其下宿といふのは全くの素人屋で、明治二十四五年頃は吉田町の專門の下宿屋でも一ケ月三圓五十錢、それで十二疊の

大廣間を一人で占領してゐるやうな時代であつたので、一ヶ月炭油共に三圓といふ安直下宿に先輩は古びた神棚の下に易者のやうな顏をして机の前に坐つてゐた。尤も是は一人の先輩で、他の一人の先輩は其向ひの、これも素人屋で姉小路といふ、昔は御所勤めをしてゐて今でもMiss綾子だといふ四十七八の顏に白粉をこてこてと塗つた、べら〳〵べら〳〵と口中を泡だらけにして喋舌り立てる其綾子さんの監督の下に赤い机掛を掛けてチョコナンと坐つてゐた。三藏一行の所置は萬事此二先輩に依囑してあつたので、二先輩は彼方へ行き此方へ行き今更のやうに兩家の主人公と談判を始めてゐる。

加藤も平田もいゝいゝをばさんも神棚よりは寧ろMiss綾子の方に心を傾けて、めい〳〵行李の中から出した菓子折を一つ宛持つて行つて敬意を表する。三藏も同じく行李の中から一つの菓子折を取り出して遅れ走せながら敬意を表する。綾子の方は相好を崩して喜ばれつゝ「狹らてもだんないのならいくたりなとお出でやす。奥村さんへもちとお行きんと惡いさかいに其處はあんじよう此方で話極めます。心配せんときやす。」といふやうな事をいはれる。

聽て談判の結果、加藤、平田、いゝいゝをばさんの三人は首尾好く綾子の方の家と極つて、三藏獨り奥村と定まる。實はをばさんも奥村の方であつたのを「あら、私や厭よ、泣こかしらん。」といふやうなことを言つて旨く交渉をつけたのである。

三藏は行李に凭れて、古ぼけた障子を眺めて、國を出づる時門に倚つて自分を見送つた老母の白髮を思ひ浮かべる。先輩増田はと見ると相變らず神棚の下の薄暗い机の前に坐つて、長煙管を詰めながら、目は机上の日出新聞の上に落してニヤ〳〵と笑ひながら讀んで居る。

増田と共に臺所の前に並べてあるお膳の前にかしこまつてお椀の蓋を開けると、中には松葉昆布に小さい椎茸が一つ這入つてゐる。其他は皿に砂の如くこまかく刻んだ菜漬が一つまみ入れてあるばかりで、御飯も針のやうに硬い。

四

翌日加藤、平田、いゝいゝをばさん一行が、高等學校を見に行かうと三藏を誘ひに來る。嚮導者は綾子さんの方にゐる先輩山本で、増田にも行かぬかと勸めたが「山本が居ればいゝだらう、行つて來給へ。」と相變らず長煙管に煙草を詰め乍ら神棚の下の暗い机の前に坐つてゐる。山本は此處が御所だ、此處が丸太橋だ、彼處が下加茂で、糺森があれだと一々教へて呉れる。三藏も加藤も平田もいゝいゝをばさんも只感心してふん〳〵と聽いてゐる。

三藏は國を出てから落著かぬ。綠川丸の甲板で加藤等と舳の碇綱に腰を掛けて、來島の瀬戸を越えてから穩か過ぎる程穩かな航海に退屈して各々未來の希望を語り合つた時は、加藤は加藤、平田は平田、をばさんはいゝいゝをばさん、三藏は三藏とチャンとめい〳〵の方向は前途の如く明かで、一舉手一投足も各々意味あるが如く他を見自己を解釋してゐたのであるが、扨て播磨灘の夢覺めて汽船が神戸についてからは、加藤も無い平田も無いいゝいゝをばさんも無い三藏も無い。孰れも只周圍の勢力に制せられて殆ど無我夢中で今日迄來た。鴨川堤を離れて吉田町に曲りかけた時、三藏は漸く我に歸つたやうな顏をして「山本君、叡山はどの山かい。」と聞いた。「叡山かい、叡山はそれさ。」と山本は顋で東北隅に聳えてゐる山を指した。「あれが叡山か。」と三藏は感心する。國に居て夢想してゐた京都と、現在踏んで居る京都とは今迄全く別のものであつたのが此時漸く一つのものにならうとする。而も今見る叡山はたゞの山だ。五色の土で作り上げてゐた腦中の山とは色も違ふ形も違ふ。びた

りと一つにならうとして一度は接近したものの容易には一つにならぬ。又「鞍馬はどれかい。」と聞く。「鞍馬かい、鞍馬はあれさ。」と今度は左の手を上げて北方の山脈の中に稍高くなつてゐる一峰をさす。「あれが鞍馬か。」と三藏は又感心する。加藤や平田は此問答には無關係で「行軍は何日位かい。」「演説會は各級は一人づつかい。教師から指名するの？生徒から志望するの？」などと各〻質問を發してゐる。三藏は又是等の問答には無關係で「愛宕はどれかい。」と同じやうな質問を繰返す。「愛宕かい。」と山本は面倒さうに言つて「此處からは御所の森の蔭になつて見えん。」と素氣なくいふ。「さうかい。それではもつと向うへ行つたら見えるね。」と三藏は執拗く聞く。「え丶？」と山本はうるささうに振り向いて、其拍子に「あ丶見え出した見え出した。それ、あの森の外れに見える尖つた山さ。」と西方の天を指す。京都の三つの高山は此に於て三藏の頭に深く〳〵印象される。其れと同時に一つにならうとして容易に一つにならなかつた理想と現實の二つの京都の、一方の色がだん〳〵薄くなつて來て、他の一つの色がだん〳〵と濃くなつて來て、昨日下りた七條の停車場から、上長者町、御所、鴨川、其れに此の三つの山を結びつけた方の京都、其のまざ〳〵とした現實の京都が三藏の鼻の尖にぶら下る。

五

赤い煉瓦の建物、是も現實の高等學校が又目の前に横はる。嘗て寫眞で見てどんなに立派なものであらうかと想像してゐた程では無かつたが、それでも門前に立つて見ると流石に大きい。山本が無造作に這入りかけるので「這入つても構はんのかい。」と三藏は一寸躊躇する。制服に制帽を著けた一人の生徒が三藏等には一瞥をも呉れずについと門を出て行つてしまふ。「構ふものか。這入りたまへ。」といつて山本は先きに立つ。

生徒の控室には二月許り前に出した掲示が其儘になつてゐる。『加納教授本日休み』『豫科一年甲組金曜時間割左の通り順序變更、三角、體操、物理、(阪)英語、獨逸文法』それから又『本科一年乙組茶話會第三土曜樵餘亭にて開會、幹事』『高知縣人會、今週金曜午後三時より、吉村方にて』『理事改選左の通り更任、平泉八郎、才松道雄、遠山武、撃劍部』などといふ張出しも其處に殘つてゐる。加藤や平田やをばさんは面白さうに其れを見てゐる。彼等が三津の波打際に立つて波の彼方に想像してゐた活動競爭の舞臺が今目の前に現前してゐるのである。今控室には三藏等一行の外一人の人影も無い。廣い建物が寂寞としてゐる。けれども二月許り前に過ぎ去つた競爭活動の足音の音が是等の掲示を通して遠き彼方に響くのが聞えるのである。軈て又數日ならぬうちに新らしい競爭活動の潮が押寄せて來る其響をも是等の掲示を通して聽き取ることが出來るのである。三人の顏には若い血が漲り輝く。

獨り三藏は何處となく一種の壓迫を感ずる。嘗て目をねむつて心で見た其理想郷も今目の前に現前して見ると、矢張り束縛の多い壓力の強い競爭激甚の社會であるらしい。彼は昨日下宿の競爭で眞先に敗北して、今此の控室に立つて既に堪へ難き壓迫を感ずる。三藏の顏には潤ひが無い。すご〳〵と山本のあとについて其日は吉田町から東山一帶を散歩して、草臥れて上長者町の宿に歸る。

三藏は其後一年間、束縛の多い學制の下に、自由の境界を夢想し乍ら絶えず絶えず壓迫を感じてゐた。其一年後の成績は六十幾番といふのであつた。加藤、平田、をばさん等とは各〻志望する學科が違つてゐたが、加藤は十番以内、

平田は二十番以内、三藏の眼中になかつたをばいさんですら三藏よりは成績が善かつた。三藏は加藤や平田やをばさんに逢ふのすら厭ふやうになつた。

三藏の俳諧的生涯は此後に始まる。こゝに其一年間に於ける出來事の一二を陳べる。

六

明治二十四年の秋の末の出來事一つ。

お向うの姉小路では綾子の方が朝から晩迄のべつ幕なしに喋舌るので、勉强家の加藤や平田は居たゝまれずなつて轉宿してしまつた。從來から居た先輩の山本とをばさんとが綾子の方に生花を習つてゐるといふ其秋の初頃、奥村のうちでは増田は相變らず神棚の下に坐つて、此頃は長煙管に煙草を詰めながら妙に首を傾げて物案じをしてゐる事が多い。さうして時々ニヤニヤと齒をむき出して笑ふかと思ふと長煙管を突き出してポンと遠方の火鉢にはたいて、大きな煙の棒を兩方の鼻の穴から出しながら筆を取つて紙に向つて何やら書く。三藏が「増田君何をしてゐるのかい。」と聞いても増田は默つてゐる。

又此頃増田のところへ遊びに來る二十四五の商賣人らしい男が一人居る。頭を丁寧に分けた角い帶を締めた男で、其男が來ると増田は例の物案じを始める。其男も亦物案じを始める。二人で手を拱いたり、天井を仰いだり、口を開けたり、鼻の上をさすつたりなどして無言である。さうして増田は相變らず時々ニヤ〳〵と笑つて紙に何か書きつける。其男も亦手帳を出して鉛筆で何か書きとめる。それから其物案じがすむと碌々話もせず其男は歸つてしまふ。時としては毎日のやうに來る、少くとも一週間に一度は來る。二人で散歩などに出る事もある。

或時増田の留守の時其男が來た。それから三藏と十分許り話をして歸つた。京都辯の穩かな物をいふ人で、此頃は時候が善いから嵯峨野あたりへ散歩に行つたら善からう、あまり勉强して體を傷はぬやうにしろ、などといつて歸つた。三藏はなつかしい親切な人だと思つた。それから増田と一緒に何をやつてゐるのかと聞いたら、何詰らぬ事でと笑つて、俳句ですといつた。俳句とは聞きかへすと、發句の事ですと說明した。それで三藏は増田の物案じは發句を作るので、此男は發句友達だといふ事を初めて了解した。

秋の末になつてからであつた。其男が二週間許り來なかつた。さうして或日増田が例の神棚の下に坐つて驚いたやうな顏をしてゐる處へ三藏が歸つて來た。それから増田は斯んな話を三藏にした。「あの男ね、よく僕のところへ來た。あれは君俳句の好きな男でね、同好者が五六人ある。其中でも最も熱心な男であつたのだ。句作も上手であつてね、趣味もよく解つてゐた。それにあの男が昨日捕まつたのだ。驚いた事にはあれが掏摸であつたのだ。しかも當局者間では有名な掏摸ださうだ。それで僕等仲間の者には少しの損害も與へなかつたばかりか、親切ないゝ男であつた。掏摸にあんな風流心があるとは驚いた。それにも一つ面白い事は、東京の新聞に此頃俳句の出てゐるのがあるがね、七條の停車場に置いてある其新聞の俳句が此二三ケ月必ず切り拔いてある。誰の仕業か餘程氣を著けてゐても判らなかつた。ところがそれが矢張りあの男であつたさうな。あの男の俳號かい。卜翁といふのさ。」と重たい口を開けていつになく熱心に話した。此時は齒をむき出して笑ひもしなかつた。

それから増田が物案じをすることも稀になつた。熱心な友を失つて少し氣拔けがしたのであらう。三藏は松山に居る頃故人五百題は見た

事があつた。けれども發句にはたいした興味が無かつた。獨逸の文法に苦しめられつゝあつた此頃は小說の事もあまり深く考へなかつた。まして俳句の事などは此時はまだあまり意にも留めなかつた。三藏は妙な人があるものだとたゞ卜翁といふ人を不思議に思つて、あの親切さうな穩かな人が有名な掏摸かと、其人が俳人であるといふ事よりも其方が寧ろ強く心を牽いた。

七

二十五年冬(一月)の出來事一つ。

うと〳〵してゐた耳で時計の音を數へる。七、八と途中から數へ始めて九、十、十一、十二、十三、十四と際限も無く鳴る。十五、十六と數へてしまつて、何の事だ、まだちつとも眠つてはゐなかつたと思つたのに、うと〳〵として居たのだな、と初めて氣がつく。大方今のは十二時であつたらう。此頃どうも寢つきが惡くて困る。きのふ加藤に學校で逢つたら、君此頃大變顏色が惡いよ、ちと鐵棒にでもぶら下つたらどうかといつた。あすは日曜だから一つ散歩に出掛けうか。散歩なら何處に行かうか。東山はもう二三度行つたし、西山の方も卜翁にすゝめられて一度行つたし、行くのなら北山の方へ出掛けうか。馬鹿に寒いやうだが雪にでもならねばよいがと、三藏は蒲團を頭から被つて縮かまつた。時計のきち〳〵いふ音も遠くなつたと思ふうち一時の鳴るのは聽かずに寢た。

翌朝寢坊をして起きると、今朝迄まだ降つてをつたといふ雪が霽れて、午前九時頃の日が日當りの惡い座敷の一枚の障子に半分ばかり當つてゐた。三藏は朝飯を濟ませて、行李の中から松山から持つて來てまだ一度も締めなかつた脚絆を出して締めて、草鞋を一足買つて來て穿く。

それから雪を踏んで出町橋を渡つて鴨川傳ひを北へ取つて、山端を過ぎて八瀨を過り大原の里へ行く。京都の市中で見る大原女より此八瀨大原の里で見る大原女の方がなつかしいやうに思はれる。去年の秋嵯峨を散歩した時も斯ういふ時に發句でも作れたら面白いだらうと卜翁を思ひ出したが、此日も亦思ひ出す。其後增田の話ではあの卜翁はもと靜岡の男であつたのが東京にも暫く居つたので、其時分發句を作り覺えて、それから京都へ來て、寧ろ卜翁が中心になつて五六の同好者が出來た位であつたのだとの事であつた。三藏は、それにしてはあの言葉つきが全く京都人らしく聞えたのが不思議だといつたら、增田は、又あれで江戶詞も大變旨いさうだよといつた。そんな事を三藏は思ひ出しつゝ足に任せて步く。頭に黑木や風呂敷やいろ〳〵なものを載せて續々と大原女が來る中に、角に赤や黃ろい木綿を卷きつけた美しい牛も澤山來る。

三藏は東山を散步した時は勿論、此秋西山へ出掛けた時もいゝ心持はしたが、それでも今日のやうな心持はしなかつた。今日は何だかのんびりした生れ更つたやうな心持がする。何故だらうと三藏は考へた。尋中を卒業した當時の心持も餘程ゆつたりしてゐたが、其時とは又大變趣が違ふ。時計を出して見ると十二時を過ぎてゐる。朝飯を食つてまだたいした時間も經たぬのにもう空腹を覺える。三藏は掛茶屋に腰を掛けて握飯を取出して食ふ。叡山は降起した背中を三藏の方に向けてゐる。三藏は其の大きな叡山の麓の小さい掛茶屋の床几に自分は今腰かけてゐるので叡山の大に比べると自分は今豆人形の樣に小さいと思ふと、一種の悲しいやうな快感が腹の底から湧き起つて來る。さう思つて手にしてゐる白い握飯を見ると、此處から見た叡山と同じやうな三角形をしてゐる握飯の、白い上にも眞白い米の粒々として相重

なつてゐるのが涙が零れるやうに面白い。三藏は暫くそれを眺めてゐて、其飯の白いのにも負けぬ白い歯を徐ろに其一角に當てる。氷のやうな冷たさがぢつと其歯に浸みる。

擲げ出した草鞋の爪先を小さい川が流れてゐる。岸の枯草には雪が積つてゐて汀には氷が張つてゐる。三藏は又此川に沿うて流るゝ時の悠遠を想うて、此狹い山間に歴史が印した足跡を繰る。

「寂光院はまだ遠いですか。」と三藏は茶店の婆さんを顧みる。

「寂光院さんどすか。もうすぐどす。そこの橋をお渡りやしたら、小さい徑が分れとりますさかい、其處を右へお出でやすとお寺があります。其れが寂光院さんどす。」と婆さんは答へる。

八

寂光院の門はひたと鎖してある。戸の透間から内を覗いて見ると、庭一面の雪で、木の根や石の上から丸く持上つた雪が他の木の根石の下までふつくらと積つてゐて、たゞ其木の葉の尖から落ちた雫が點々と其上に少しの痕をとゞめてゐるばかりである。加茂川堤から八瀬大原に這入つてからも、たゞところ〴〵に僅かの雪が消え殘つてゐたばかりであつたのに、今渡つた小川の板橋から此門に來るまでの徑も草鞋を埋むるほどの雪があつたし、更に此戸の透間から見ゆる庭の雪は一層の深さのやうに見える。彼の板橋を第一の關門として、此山門を第二の關門として雪の深さを增してゐるやうに見える。

四邊は寂寞として靜かだ。耳を澄ますと僅かに木魚の音が聞える。三藏は暫く默つて其木魚の音を聽いてゐたが、寒さが足の尖迄浸み渡るやうに覺えた。寂光院は尼寺の筈だ。人の世に負いた尼が人の世に柵を隔て門を鎖して、斯る寒き雪の日をも行ひ澄してゐるのかと思はれた。木魚の音は靜かに響く。三藏は終に戸の透きに口を當てて案内を請うた。

「御免。」「頼みます。」と幾度呼んでも返辭が無い。木魚の音が尚靜かに聞える。三藏は此まゝ引き返さうかと思うたが、終に握り拳を戸に當てて叩いた。初めは輕く叩く。返辭が無い。終には烈しく叩く。まだ返辭が無い。朽ちた戸の碎けよとばかり叩く。

木魚の音が止んだ。三藏は又叩く。木魚の音が又響き始めたと思ふと他にも幽かなる物音が聞える。耳を澄ますと人のけはひである。僅なく細目に開けた雨戸の透きに尼の白衣がほのめいて「どなたどす。」といふ。三藏は戸の節穴に口をつけて「私は學生ですが、どうかお寺を拜まして下さいませぬか。」といふ。雨戸は開いたままで尼の姿は隱れる。木魚の音が又止む。暫くして木魚の音が又響き始めたと思ふと今度は下駄の音が内玄關の方に聞えて、やがて其處の戸が開く。

朽戸をあけた尼は十七八の見にくくない顔立である。默つたまゝで三藏を導く。其白衣も其白足袋も雪に映えて汚れ目が目立つて見える。三藏は其後姿を見て、殊に脊の低い、丸めた頭の形の稍〻いびつなのに目を留めて哀れに思ふ。尼は急に後ろを振返つて「石の上をお歩きやす。」といふ。雪は飛石をも隱して積つてゐる。けれども尼の足の痕が無慙に雪を踏みにじつて其處を飛石といふ事を明かにしてゐる。三藏は其尼の足痕を歩く。

九

三藏は内玄關の上り口に腰を掛けた。かじかんだ手で草鞋の紐を解く。尼が汲んで來て呉れた古盥の底の方に僅かばかりある水に足をつけ

る。突然後ろから一條の水が盥の中に落ちる。三藏は驚いて見上げると、鐵瓶の口から沸つた湯が盥の中に注がれてゐるのであつて、彼の尼が默つて後ろに立つて居る。冷たい雪の中に暫く立ちすくんで、今は又其雪より冷たい水の中に足を浸けて、倘其邊の空氣の冷え切つてゐる中に、一條の熱湯が湯氣を棚引かせながら鐵瓶の口から出てゐるのは、牢獄の壁から洩れる一點の日の光りよりも此場合三藏に取つてなつかしいものであつた。三藏が見上げた時の尼の顏は先に戶を開けてくれた時よりは優かに美しかつた。それに先に三藏が見にくく哀れに思うた脊の低いのも頭のいびつなのも此時は目に立たぬ。三藏は思はぬ賜物に少し狼狽へて「もう結構です、水で結構です。」と早口に辭退した。尼は無造作に「さうどすか。」とすぐ鐵瓶の湯を止めてさつさと臺所の方へ行つてしまつた。

再び出て來た尼は先きに立つて三藏を導く。先づ本尊の前に立つて「本尊は阿彌陀如來、聖德太子の御作。」と說明する。金閣や銀閣の小僧がする棒讀みのやうな說明とも違ふが、其言葉のうちには何の暖か味も無い。さつきにから時々耳に這入つてをつた木魚の音は今直ぐ目の前に聞える。暗い小さい禮盤の前に七十許りとも見ゆる小さい尼が、首を前に垂れて猫脊を後ろに突き出して、口のうちでは殆ど聽き取れ難いやうな讀經をしてゐる。懶い目で一寸三藏を振り返つて見たが、すぐ又正面を向いて讀經を續ける。若い尼はこちらへと導く。

佛壇の中に二體の像がある。其一つは建禮門院の御像、他の一つは阿波の內侍の像、茶色の法衣に當る處にも蟲の穴が澤山見えるが、胡粉で塗つてある。汚れてゐ乍らも白く拜まるゝ御顏にもところ〳〵に蟲の穴がある。「女院が御手づから張らせられる張子の御像。」と說明する阿波の內侍の像は、顏は少し赤味を帶びて木像の脊は女院のよりも低く見える。三藏は源平盛衰記で讀んだ大原御幸、國に居た時耳にした事のある謠曲の大原御幸の文句が入り交りて思ひ出される。先に內玄關で感じた空氣の冷たさ、其れと同じやうな空氣の冷たさを先の本堂でも感じ今又此室でも感じる。人の世を橋にて隔てて門を鎖ぢて隔てた此深雪の中の寂光院には人の世の暖か味は先の鐵瓶の湯の外には何物も無い。

ふと見ると尼は右の脚が痛むのであらう、兩手で壓へて顏を顰めてゐる。三藏は「どうかしましたか。」と優しく尋ねたが尼は其言葉を有難く思ふやうな風も見えず「リョウマチどつしやらう。」と餘所々々しくいつて「しやうが無い。」と打棄つたやうな獨り言をいふ。

十

尼は今開け差した雨戶に凭れて三藏の傍に立つ。兩手を雨戶の上に重ねて其上に頰を載せて、痛む右脚を少し浮かせて三藏の見る庭面を只茫然と見てゐる。若しこれが綠の長き髮を束ね美しき衣を着てゐる俗世の娘であるならば、斯る姿勢は寧ろ妖艷に過ぐる程のものであらう。而もいびつな頭に汚れたる白衣、其れに背に負ふ帶も無い爲めに低い脊が愈々低く見える此の比丘尼には何の色氣も艷氣もない。

三藏は謠曲大原御幸の文句を胸のうちで繰る。「池の漣波にゆられて」とある池はと見ると、只雪ばかりの庭の面にも少し低まつた處があるのを大方それであらうと考へる。『岸の山吹咲き亂れ』とか「汀の櫻散り敷きて」とか「青柳絲を亂し」とかある晩春初夏の景色は此落寞たる雪の中で固より想像することは出來ぬ。「一宇の御堂あり、甍破れては霧不斷の香をき」とある其御堂は軈て此古寺かと思ふと、其中に斯く立つて居る自分や尼の姿が顧みられる。

三藏は嚢に玄關で美しと見た尼の顔を今は軒淺く、殊に雪の上を辷つて來る明るい光りで高からぬ鼻薄い眉や、大きな口光澤の無い皮膚等をあらはに見て最早美しいとは思はなかつた。『賤が妻木の斧の音、梢の嵐猿の聲』とあり『女院は上の山へ花摘に御出にて』とある後ろの山はと三藏は右手に柱を握つて體を前に延ばす。白く雪を載せてゐる百姓家の屋根の上にこれもまだらに雪をいたゞいた山が見える。『花筐肱にかけさせたまふは』とある女院の其山の岨傳ひに下り來るところを想像して見ると哀れにも靜かな景色である。

尼は雨戸を締めて三藏が聊かの志を紙に包んで渡すのを受取つて臺所の方へ行く。軈て「餅が焦げてまつせ。」と言ふ聲がする。「さうどすか。かやしておくれやしたか。おほきに。」といふのは他の尼の聲だ。

三藏は草鞋を穿く。尼は後ろに立つて淋しく見送る。三藏が玄關を出ようとする時幽かに餅の焦げる匂ひがする。

三藏は彼の朽ちた門を出て、雪の細道を歩いて、彼の小川の板橋を渡つて、其から又寂光院を顧みた。古き物語のあとの古寺を訪うて三藏の頭にしみ〴〵と殘つたものは彼、若き尼と鐵甁の湯と餅の焦げる匂ひと、それに今一つ彼の木魚を叩きつゝあつた猫脊の老尼の三藏を振返つた懶い目とであつた。

三藏は其翌日三角の宿題をやらされて一時間黑板の前で立往生をした。

十一

二十五年初夏の出來事一つ。

或夕暮三藏は京極から四條の方へ散歩に行つた。三藏は時々買物に寺町へ行く事はあるが京極へは滅多に行く事はなかつた。京極の錦魚亭でたゞ一度善哉を食つたのももう大分前の事である。三藏は今宵珍らしく獨りでぼつ〳〵と京極を歩く。大變な人出で「お這入りやーす。」と言ふ寄席の呼聲も人の呼吸でむれたやうな中から響く。三藏は人に行き逢つて立止まつたり、後ろから來る男に肩で押し除けられたりし乍ら歩く。どういふ譯だか今宵は一種の暖か味を覺える。此雜沓が少しも癪に障らぬばかりか目に入るものが皆一種の好意を以て三藏を迎へるやうに感ぜられる。冷たい奥村の古座敷、神棚の下に寂然として坐つてゐる增田の後ろ姿、然らざれば饒舌の綾子の方。メリンスの厭に赤い山本の机掛等が始終目に離れなかつた約一年間の淋しい心持が、どういふものか此時は全く忘れられてしまつて、今迄古い土塀の日陰にばかり居たものが、初めて暖かい花園に立つたやうな心持がした。故郷に在る時すら未だ感じた事の無い人懷しいやうな心持が胸に溢れてゐる。

鮨屋と小間物店との中に押しつぶされたやうになつた小さい這入口に赤い紙で縁を取つた横長い行燈が額のやうに掛けてあつて、其れに鶴澤小梅とか豐竹玉之助とか豐竹玉子とかいふ名が肉の太い字で大きく書いてある。三藏は此狹い入口の奥に寄席があるのかと思つて見てゐると三味線の音が思はずも鮨屋の二階から聞える。鮨屋の二階が寄席になつてゐるものと見える、職人のやうなものが這入る。遊び人のやうなのも這入る。餘程下等な寄席と見えて見なりの惡い者ばかり這入る。三藏は人に押され乍ら此處を立去らうとしてふと見ると自分の同級の學生が二三人が今此寄席に這入らうとしてゐる。其内の一人は今迄着てをつた制帽を脱いで懷の中に捩込んで這入つた。三藏はあつけに取られて見てゐると、いゝをばさんらしい人が一人の娘を連れて這入つて行つた。確かにいゝをばさんらしいので三藏は覺えず延び上つて見たが、少

し違ふところもあるやうで、はつきりはわからなかつた。をばさんが此頃自分の下宿してゐるうちの娘が美しいと言つて自慢してをつたが若しあの娘が其れであらうか。いくら平氣なをばさんでも其娘を連れて歩くなどいふ事はあるまいと三藏は考へた。

三藏は心地よく人の氣に醉うたやうで、帽子を懐に捩込んだ友達や、娘を連れてゐたをばさんらしい人を見たことも矢張り暖かい感じになつてしまつて、歩くともなく京極を歩いてゐるうちにいつしか四條通りに出た。四條通りは京極よりは道幅も廣いし人通りも比較的少ない。三藏は一寸立止つてどちらに行かうかと思つたが、南座の芝居の幟や四條橋畔の明るい電氣燈が今宵は殊に三藏の心を牽き附ける。三藏の足は知らず識らず東に向ふ。

十二

此夜は色々の物が三藏の目に留る。紅屋の看板の紅で書いた字が心を牽く。呉服屋の店頭に吊してある色々の小切が目の前にちらつく。牡蠣飯屋を出て行つた若い夫婦の女の蝙蝠傘が美しいと思ふ。四條橋畔の電氣燈のハッと明るい下に今向うから此方へ來る二三人の女の顏が目に入る。一人の女は女中らしい顏立で下脹れの品の惡い顏ではあるが、それでも色が白いのとぱつちりとした目で見るともなしに三藏の顏を見た其目附が心を牽く。今一人の女は瘠せこけて顏の色艶は無いが、鼻の高い、目に張りのある、眉毛の凛とした三十四五の奥樣らしい婦人で、鬢のほつれ毛を長い瘠せた指で掻上げた其顏を氣高いと思ふ。今一人の女は藝者だ。艶々した髪を一絲亂さず結ひ上げた島田の、長い髱が鳥の尾のやうに後ろに出てゐる。其れに準じてグイといなした襟と、又其の反比例に前へ突き出した首とが水際立つて美しい。擦れ違ひさまに妙な匂ひが三藏の鼻を撲つ。鳥打帽子を被つた三藏が同じく明るい電氣燈の下で大きな目をして驚いてゐる隙に、是等の人は忽ち行き過ぎて新らしい人が續々と明るい顏を電燈下に曝す。

鴨川の兩岸の燈が仕掛花火のやうに水に映つてゐる。物音がざッと三藏の耳に集まつて來る。三藏はふら／＼と橋を渡る。

橋を渡り終つて橋畔の電燈を後にすると、少し燈火の光が弱くなつたと思ふ間も無く南座の前の電燈が又ハッと昔よりも明るく街上を照らす。多勢の男や女やが皆顏を上げて繪看板に見とれてゐる。繪看板の框の赤い色と其前に突き出して交叉してある紫の旗とが中心になつて、其外に種々の色が錯綜して、其色の中から拍子木の音や三味線の音が聞える。三藏は其繪看板を見てゐる女の髷の高低に目をすべらしてふと一人の少女に目を留める。

矢張り立止つて繪看板を見てをつたのが、何とか言ひ乍らつゝいと歩きかける。美しい雛樣のやうな著物を著てゐて頭にも櫻のやうな簪を插してゐる。三藏はこれが舞子だと氣がつく。さうすると又其あとから一人出て來る。一人かと思つたら二人連れである。あとの一人は前の一人のあとを追ひかけて、二人で手を組んで、又何とか言ひながら一緒に繪看板を振返つて行く。

南座の前を通り過ぎると兩側の家の軒下に悉く角い行燈が出てゐる。三藏は道の中央を通り乍ら左右を振返つて其行燈を見る。三味線の音がところ／＼で響く。人がぞろ／＼と其行燈の陰を歩いてゐる。表を覗いてゐる女の影が欞子の内からほのめく。三藏は「外は十夜の人通り」といふ紙治の文句を讀んだ時の心持が思ひ出されて身に入みる。其人通りの中にちらと又さきのやうな舞子の姿が認められる。箱屋を

連れた一人の藝者が横町に曲る。四辻に立つて三藏は前後左右を振返る。どの町も〱皆同じやうに角い行燈が軒並に點つてゐる。

三藏は歸途で、ふと尋中卒業の時の祝賀會の事を思ひ出した。さうして自分から進んでお弓をやらうと言ひ出した當時の心持が思ひ出された。三藏は京都へ來てから獨逸語や三角に苦しめられていつの間にか其時分の心持は忘れてしまつてゐたのである。

十三

其夏の休暇には大方皆歸省した。加藤も平田もいゝいゝもをばさんも綾子さんの家に居た山本も歸省した。歸省しなかつたのは增田と三藏ばかりである。三藏は六十幾番といふ札を提げて歸るのを面目なく思つたばかりでなく、此夏は自分の不成績であつた第一の原因の獨逸語を勉强し度く、それには此地でなければ教師が無いと考へたからであつた。增田は「歸つたつて面白くない。」と言つて去年も歸らなかつた。今年も同じ事を言つて歸らうともしなかつた。

三藏は獨逸語の教師のうちへ行く〱と言ひ乍ら一週間許り空しく過した。それから漸く賴みに行つたら、其教師は避暑ゞゝ何處かへ旅行したといふ事で折角の計畫が畫餅に屬したけれども三藏はそれを殘念とも思はなかつた。

風通しの悪い奥村の座敷で增田と三藏とは每日只ごろ〱して日を暮してゐる。增田は時々例の物案じをしては日中は大概晝寢をする。肌を脫いだまゝ古びた疊の上に仰向けに轉がつて、少し飛び出た前齒を開けつ放しにしてすうすう寢る。三藏は晝寢は嫌ひだ。行李の中に收めてあつた小說などを取り出して見る。暫く忘れてをつた興味が呼び起される。此一年間の學校生活がつく〱つまらなかつたと考へる。去年故鄕の書齋で近松世話淨瑠璃以下を讀破したあの勇氣が今日まで續いてゐたらと考へる。其時書きかけた小說の原稿を取り出して讀んで見る。自分ながら旨い處があると思ふ。あの時分から續いて筆を操つてゐたらたしかにもう一二篇の作物は出來てゐたらうと殘念に思ふ。露伴に負けぬ氣で二十一歲迄にはと思つてゐた其歲ももう半年足らずのうちに來る。斯うしては居られぬやうな氣がする。

增田が物案じをしてゐる隙に三藏も筆を取つて紙に向ひ始めた。寂光院の若い尼を主人公にして、其若い尼と四條で見た舞子とを姉妹にして趣向を立てたのだが筆が澁つて一寸も運ばぬ。

東京に居るといふ增田の友達から近日遊びに行くといふ報知が來た。增田の話す處によると此友達といふ人は俳句が上手なばかりでなく小說も作るさうで、行く〱は文學者として立つ人ださうだ。增田は法學部で無味乾燥な法理や條文を研究してゐる人だから其人が俳句を作るといふ事は左程三藏を刺戟もしなかつたが、自分と同じく小說を作る志望の人が矢張り俳句を作るので、しかも上手だと聞いたので三藏は俳句其ものの上にも多少尊敬を拂ふやうになつた。さうして竊に其人の風采を想望して心待ちに待つてゐた。

十四

此增田の友達は五十嵐透といつて、俳號を十風といつてゐた。增田とは三年許り前東京の英語學校で知り合ひになつて、それから增田は京都の高等學校の法學部に入り、五十嵐は江田島の海軍兵學校に入つたのであるが、五十嵐は其翌年から肺病になつて兵學校は退校せねばならぬ事になり、豫て好であつた文學の方に轉ずるやうになつた。此男は何かにつけてカンラ〱と玉盤を打つやうな響をさせて笑ふのが常で、

馬鹿に涙脆くつて腹も立てやすい代りに機嫌も治りやすい。俳句を作り始めた頃は仲間中の第一の天才といはれ、小説を書いてもオリジナルな處があるといふ評判であつた。ところが一年許り前から道樂を始めて、國許に五十嵐の成功を待焦れてゐたお母さんから、なけなしの財産をすつかり捲き上げて遊蕩費にしてしまひ、何でも目下吉原の何樓とかの女郎を身受けするとかいつて騷いでゐるといふ噂を此頃増田は聞いたのであるが、其實此女郎といふのは京都の六條の珠數屋の娘で、かなりの身代であつたのが破産した爲めに吉原に賣られ、此頃年期が明けて廢業する、それを或小官吏と競爭してゐたのである。此の女郎は源氏名を司といつて小華奢ながらもお職を張通してゐた。丸ツポチャの、顔の割合に口の大きい、笑ふ時はあまり口が擴がりすぎて相形が崩れる嫌ひにあるが美人たるを失はぬ。人の好い張りの無い、朋輩には司さん司さんと可愛がられてゐたが、よくあれでお職が張れたものだと陰口を利く者もあつた。五十嵐と小官吏とが互に實力を盡し合つて鞘當てをする。司は兩方共に公平に待遇する。小官吏の方は大人しい、五十嵐は屢々癇癪を起して當り散らす。小官吏の方はいつも優しい。五十嵐の方は優しい時は度を外れて優しい。司は廢業間際になつて五十嵐の手に歸した。

五十嵐十風は其廢業した司事靜岡しづ子を手裡に收めて意氣揚つて七條の停車場に下りた。迎へに來て居つた増田に「これは僕の妻で。」といつて引合はした。増田は稍々出張つた齒をむいて挨拶し、しづ子は大きな口を開けて會釋した。十風は一先しづ子を親許へ屆けてそれから増田の家へ行くと言つた。増田はお向うの姉小路の家を暫時五十嵐の爲に周旋した。翌日五十嵐は鞄一つを提げてやつて來た。

三藏は畏敬して五十嵐を迎へた。五十嵐の色の白い、脊の高い、咳をし乍らも聲の高い、元氣のよいのが先づ三藏を壓服した。それから文壇の話になると、紅葉にも露伴にも會つたことは無い、逍遙鷗外も知らぬ、僕は文學者は誰も知らぬ、たゞ仲間の四五人と遊び半分に研究してゐるだけだと言つた。其無造作に開け放しな所が又三藏を牽きつけた。山本の机の前に坐つてはゐるが、其擧動といひ風采といひ山本とは大變な相違で、豫々幅を利かせてゐたメリンスの赤い机掛が急に色があせて日陰者になつたやうに見えるし、綾子の方の饒舌も五十嵐のカンラカンラといふ高笑に氣壓されてしまつて更に活氣が無い。五十嵐は又増田に對しては俳句に就ての談話で持ち切る。別に高ぶる風もないがそれで居て權威がある。三藏は其俳話に聽き惚れた。

十五

奥村の座敷は夏でも暗いに引換へ、姉小路の家は朝日夕日が斟酌も無く射し込む。「京都といふ處は暑い處だ。」と五十嵐は大きな聲を出して歎息する。さうして奥村へやつて來て「おい増田、俳句でも作らうかい。ぢつとしてはゐられないぢやないか。」と言ふ。増田は先刻から神棚の下で眠さうな眼附をしてゐる。「何んだ、居眠りをしてゐるのか。さあやらう〳〵。」と自分から題を出す。斯んな調子で毎日百句位は作る。増田が長煙管に煙草をつめ乍らゆつたりと句作するのと反對に五十嵐は額をしかめて其邊を睨みつめ又胡坐をかいたまゝ騷がしく貧乏搖をする。それで増田が漸く二句作る間に五十嵐はもう三四十句作つてゐる。さうして「これは暑い。貴樣の家も馬鹿に暑い。」といつて其邊を見廻し「不景氣な神棚だなあ。」などと言つてカンラ〳〵と笑ふ。それから「己はもう御免だ。厭になつた。」とばたりと筆を投げて立上つ

たと思ふと、天井に屆きさうな長い手足を延ばして背延びをする。それから三藏の机の上を覗いて見て「堺和君、君も俳句でも作つたらどうです。さう勉强ばかりしてゐると病氣になりますぞ。」と言ふ。三藏はさつき五十嵐が來る迄は竊に故人五百題を出して句案を試みてゐたのであつたが、五十嵐が來たので慌てて五百題を本箱の中に投げ込んで、手に當つたエノック、アーデンを開けてゐたのである。「五十嵐君、敎へて呉れますか。」「別に敎へなくたつて君、少しやつて見給へ。すぐ出來ますよ。」「だつてまだ何にも知らないんですもの。」「それぢや僕が題を出すから、どんなものでも構はん、兎に角作つて見給へ。」それから三藏は題を出して貰つて初めてやつと一句を作つた。五十嵐は「これは旨い。初めからこんな句が出來れば立派なものだ。大いにやり給へ。」といつて油を澆ける。今迄はやり度い乍らも躊躇して居つたのが、これから俄に景氣づいて三藏は朝から晩迄十七字を並べる。五十嵐は頻りに讃める。終に增田と三人で同じ題で句作する迄に進む、五十嵐の讃める句は增田よりも三藏の方に多くなる。「矢張り文學者は違ふわい。」と增田は齒をむいて苦笑する。三藏は五十嵐に俳號をつけてくれぬかと賴むと、五十嵐は「俳號なんかどうでもいゝさ。君の好きなのをつけ給へ。」と言ふ。「だつて僕には旨くつかないんですもの。」と三藏はあまえたやうな口を利く。五十嵐がいろ〳〵考へた末「考へたつて駄目だ。僕は五十嵐の十の字と嵐の風の字を取つて十風としたのだが、どうだ君、三藏の音を其のまゝに山僧としては。」と言ふ。三藏はも少し優しい名と思つたが、兎に角尊敬する先輩十風の命名であるから異議なく其號を用ゐることにする。又增田が花翁といふ尤もらしい俳號であることも三藏は此時初めて知つた。

十六

五十嵐十風は夜になると每日のやうに細君の方へ出掛けて細君と一緒に四條から京極あたりを散步する。時として二三日歸つて來ぬ事もある。何處へ行つたのかと思ふと三井寺から唐崎の松を見に行つたのだと言ふ。それから「あいつが君、唐崎の松に失望してねえ、もう己と一緒に散步に行くのは厭ださうだ。それから君、唐崎なんかへ行くよりは西石垣の何處とかへお茶漬を食べに行く方がいゝさうだ。」と例の高調子で言つて「增田今日嵐山へ行かうか。嵐山へお茶漬でも食ひに行かうか。堺和君はどうだ。君も一緒に行かう。」と言ふ。

增田と三藏とは同行に決して五十嵐について行く。五十嵐は「一寸君待つてゐて呉れ給へ。」と或町角に二人を殘して置いてコン〳〵咳をしながら亂暴に新足をして或る一軒の格子戸の前に立止つたかと思ふと、長い首をかゞめて其格子戸をくゞつて這入つて行つた。中々出て來ない。やつと出て來たのを見ると細君と一緒だ。三藏はまだ女と一緒に出步いた事などは無い。其五十嵐に引き添うてこちらに步いて來る脊の低い細君の姿を見るとはつと心が躍るやうに覺える。殊に吉原の女郞であつたといふ事は增田から聞いてゐるので、何だかぢつと見るのが目ぶしいやうな氣持がする。細君は例の大きな口を開いて挨拶する。三藏は眞赤になつて「私は堺和三藏といふものですが、いろ〳〵五十嵐君に御世話になりまして。」と堅い挨拶をする。それから四人で車を連ねて嵯峨に向ふ。眞先の車が五十嵐、それから增田、三藏は一番あとの車に乘つて、增田の麥藁帽越しに細君の細張りの紫色の蝙蝠傘をつく〴〵美しいと思つて厭かず見る。五十嵐は時々振返つて細君に何か言ふ。細君の車夫は氣を利かして前の車に追ひつ

いて暫く併行して行く。此時車夫の足は一齊に遲くなる。それから急に又早くなつたと見ると以前の如く車は一列になつて五十嵐は意氣揚々と眞先に風を切り、細君の絹張りの蝙蝠傘は其あとにいら／＼する夏の日を心地よく反射してゐる。

斯くて四人は三軒家に上る。細君は小さく坐つて疑ひ深いやうな眼附をして一寸周圍を見廻す。座蒲團や煙草盆を運んで來た女中は皆言ひ合はしたやうに怪訝な眼をして細君を見る。三藏は氣をつけて見てゐると二人の女中が隣の間で耳打をしてフンといつたやうな冷笑を洩らしたりなどする。細君がもと女郎であつたことが直ちに女中達の眼に映ずるものと見える。さう思つて見ると細君の顏は馬鹿に淋しい。五十嵐の顏にも黑い雲が翳つてゐるやうな感じがする。三藏の頭は義憤を起す。「おい／＼姉さん姉さん其方にも座蒲團をあげぬか。」と三藏は突然叱りつけるやうに言ふ。女中はじろりと三藏と細君の顏を見較べて「おしきやす。」と澄まし切つて言つて一寸襟をいなす。三藏は益々躍氣になつて「あなたお敷きになつてもいゝぢやありませんか私も失禮してゐます。」と不器用に言ふ。細君は其大きな口をハンケチで壓へ乍ら一寸五十嵐の顏を横目で見て座蒲團の端へ僅かに膝を載せる。三藏は「もつとずつとお敷きになつたらいかゞです。どうか／＼。」としつこく繰返す。細君は術なさうに五十嵐の顏を横目でチョイ／＼見ながら默つてゐる。

十七

嵐山の翠微、其前を廣々と流れてゐる桂川の白砂、吐月橋を渡る人、此方の岸に繋ぐ筏、それから白い手拭を被つて櫻の葉蔭に立つてゐる畑の媼等、是等が一幅の畫圖になつて目の前に展開されてゐるのを五十嵐は柱に背を凭せて昂然として眺めてゐる。態と細君の方へは一瞥をも呉れずにゐるが、耳は絶えず細君を中心とせる其場の光景に引立てられてゐる。三藏が頻りに蒲團をすゝめる其初心な擧措がくすぐつたいやうな心持がするのをぢつと辛抱してゐる。増田は脚に凭せた肱の上に顎をのせて無頓著にもう物案じを始めてゐる。

酒肴が運ばれる。増田は「僕は飲めん。」と言つて大きな竹の子を一口に頰張る。五十嵐は大いに飲む。「増田貴樣は相變らず飲まんな。己か己は大いに飲むサ。病氣が何んだ。やツつけるサ。」と言つて少し咳をし「塀和君、どうだい君は。君なんかには餘り酒は勸めない方がいいけれども、飲めるなら少し位いゝだらう。」と言ふ。さうすると細君がハンケチで燗德利を握つて三藏にお酌する。五十嵐の顏はだん／＼青白くなつて眼がきら／＼と光つて來る。細君の方を向いて「貴樣も飲まんか。いやに澄まし込んでるねえ、氣取つたつて駄目だよ。ハヽヽヽハヽ」と笑つて「こいつがねえ増田、いつか醉つぱらつて腰が立たなくなつてねえ、くす／＼泣き出しやがつて、其ざまつたら無かつた。今日は厭に澄ましてやあがる。これでも素人と見せる積りだから可笑しい。」と言つて又咳き入り乍ら笑ふ。細君は「好かないねえ、此人は。」とつい下卑た言葉を使つたが「御酒を飲むといつでもあんな事を言つて仕方がありませんのよ。」と急に言葉を改める。三藏はさつき五十嵐が「君なんかには餘り酒は勸めない方がいゝけれど。」と言つたのが少し癪に障る。盃が空になると細君がすぐ氣を利かしてついで呉れるのを感謝して頻りに飲む。大いに醉ふ。細君の前にもいつの間にか盃がある。さうして見る度に空になつてゐる。三藏は頻りと注ぐ。細君が「いえまだあります。」と辭退するのを「まア／＼。」と頻りに勸める。細君は五十嵐の耳に口を寄せて何

事をか囁き、笑ひかけた口を急にハンケチで隠して眞面目な顔に戻る。五十嵐はハッハッハと開けつ放しに笑ふ。それから三藏に「塀和君、今こいつが斯んな事を言つたよ。」と言ふ。細君は「アラ、およしなさいよ。」と顔色をかへて五十嵐を睨む。

十八

五十嵐は構はずに「ねえ塀和君。」といひかける。細君は「アラ、いけませんツてば。およしなさいよツ。」とハンケチを五十嵐の眼の前でチラチラと振り動かして揉み消さうとする。五十嵐は面白がつて「こいつがねえ君、君をねえ……」と又言ひかける。細君は「厭な人、知らないツ。」と慳貪に言つて眞白な眼をして五十嵐を睨みつける。後ろを通る女中どもはさげすんだやうな眼附をして細君を見下して行く。三藏は「何か僕についての批評かい。それは聞き度いねえ。」と膝を乗出す。頭元まで眞赤になつて、胡坐をかいた膝の上に兩肱を乗せてふら〳〵と體を動かし乍ら微笑を含んで五十嵐と細君の顔を等分に見る。細君は默つて息をつめて五十嵐の顔を見てをると五十嵐は無造作に話し出す。細君は手を出して五十嵐の口に蓋をせうとしたがもう及ばなかつた。「君が女郎買でも始めたら屹度半可通になるとこいつが言つたぜ。ハヽヽ」と五十嵐は笑ふ。細君は「うそですよ〳〵。皆自分であんな事言ふのですよ。」と言つて急がしく三藏の顔色を窺ふ。増田は一寸齒をむいて笑つたが、斯んな問題は鳥の影が過つた程にも其頭には殘らぬ。又欄干に凭れて後の上にかゞんで何物か洗つて居る畑の嫗の白手拭に目をやる。五十嵐は言葉を續ける。「第一君、女に座蒲團を勸めるのでも酒を注ぐのでも、あゝ執拗く言つては駄目だよ。又『お敷きになつてもいゝぢやありませんか。』などとあゝ重々しくお終ひまで言つてしまつては駄目だよ。『お敷きなさいな。』といふ位に輕く言つてあとは知らん風をして居る處がいゝのだよ。執拗いのだけは止めんと嫌はれるよ。ハヽヽヽヽヽ。」と言つて座蒲團以來むづ〳〵してゐた溜飲を下げて五十嵐はカラ〳〵と笑ふ。細君も終に大きな口をぱくりと開けて堪へ切れずに笑ふ。

十九

五十嵐は三藏の顔色を見て急に笑ふのを止めて「おい塀和君、君怒つたのかい。」と言つた。

細君は「だからおよしなさいといつたのぢやありませんか。」と言つて一寸ハンケチで五十嵐を打つ眞似をしたが手持無沙汰に三藏の顔を見て「戯談ですよ。氣にお掛けなすつちやいけませんよ。あのチョイと姉さん、お熱いのを一つ。」と言つた。女中は「お銚子どすか。」と言つた。

増田はだまつてゐた。

五十嵐は又重ねて「塀和君、本當に君怒つちやゐないの。それならいゝが、そんな下らぬことを眞面目に怒つちやいかんよ。」と言つて、それから暫く默つて時々咳をし乍ら冷たい酒を又續け様に飲んだ。細君は「すぐお熱いのが來ますけれど。」と言つて燗徳利を取上げて三藏の顔を見た。五十嵐は、増田、何句位出來たい。君は無愛想な男だなア、少し話もしろよ。」と言ふ。細君は「本當に増田さんは發句に御熱心ですことね。」とばつを合はす。「熱心な癖に下手さ。ハヽヽ。」と言つて五十嵐は強ひて景氣をつけるやうな笑ひ方をする。増田は齒をむいて笑つて「馬鹿をいふな。」と暢氣にゆつたりと言ふ。細君は「もうそんな口の惡いことはおよしなさいよ。」と言つて「又増田さんにも怒られますよ。」といはうとしたのをぢつと堪へる。「熱いのが來ましたから。」と言つて細君は三藏にさした。三藏は受けた。五十嵐も亦飲み始め

た。それから急に眞面目な顔になつて「垪和君、僕はねえ、白狀するが、もう僕の生涯は駄目だねえ、もう濁水だねえ。今僕の夢想する世界は斯う、眞白な岩の間から白い眞砂と共に流れ出てゐる清水のやうな境界だねえ、どうかさういふ境界に立戻り度いと思ふのだが、もう駄目だ。」といつて目の中に涙を浮べて居る。三藏は其五十嵐の言葉に突きつけられて耳を欹てた。

二十

「垪和君などはまだ少しの濁りも無い、所謂清水の境界だ。羨ましいな。増田でも垪和君でも一旦僕等の眞似をしようものなら忽ち取返しのつかぬことになつてしまふ。餘程氣を附けないと險難だよ。」と五十嵐は言葉をついでぢつと考へてゐたが、急にカンラ〳〵といつもの通りの高笑ひをして「併し勝手だよ。垪和君でも墮落したけりや勝手に墮落するサ。世の中が何んだあ、つまらない。やッつけるサ。おい貴樣も飲めよ。」と五十嵐は手づから細君に酌をし「垪和君、君まだ怒つて居るのか。」と言ひながら又三藏にも酌をする。

三藏は瞬きもせずに五十嵐を見詰めて居る。先つきから既に五十嵐の眼に在つた涙は、だんだん量を增して來て溢れさうになつてゐる。細君は懷から大きな紙の束を出して其內の一枚を脣で巧みに取つて、其儘下目を使つて再び其紙の束を懷中に收め、それから脣に殘つた紙を手に取つて盃を拭く。拭き乍ら「何でせうね、此黑いものは。垪和さん、あなたのにも附いてゐやしませんか。」と覗き込む。三藏は自分の盃を見ると、成程今飲み干したばかりの盃に何處かの煙突から飛んで來た煤かと思はるゝやうなものが附著してゐる。細君は又先のやうにして一枚の紙を取出し三藏の盃を拭いてやり「あなたのは。」といつて五十嵐のを見「厭あねえ、あなたお酒と一緒に飲んでしまつたのね。」と言つて艷な眼附をして五十嵐を見る。此時五十嵐の眼は細君の大きな丸髷の赤い手絡に止つて涙の底に別樣の光りを漂はす。

二十一

五十嵐は京都で世帶を持つ積りだといつてゐたが、はき〳〵と其運びをするでもなかつた。嵐山行きの費用は細君が帶の中から男持の蟇口を出して支拂ひ、其後夫婦連れで例の西石垣の千本へお茶漬を一度食べに行つた時も、同じく細君の帶の間に藏めてあつた蟇口の中から支拂はれたのであつたが、京都へ來る爲め五十嵐が何某との連帶で非道工面をして借りた高利の金は此時もう殘り少なになつてゐた。其後は五十嵐も前程氣燄が上らなくなつて時々長い體を八疊の座敷一杯に延ばして天井を見詰めて居る事もあつたが、いつの間にか細君も姉小路の方へ來て夫婦で同居するやうになつた。夏休みも殘り少なになつたから、赤い机掛の主人の山本も程なく歸つて來るであらう、歸つて來たら早速明けて貰はにやならんと綾子さんからは二三度注意を受けた。五十嵐は或時夫婦連れで一日家を探しに出歩いて暮方飯を食はずに綿のやうに草臥れて歸つて來た。晝飯は饂飩を二杯づつ食つて探し歩いたのであるが二人の氣に入る家は無かつた。氣に入る家は敷金が高かつたり、家主の方で夫婦の風體をつく〴〵見て既に先約があるなどといつて斷つたりなどするので一軒も探し當てずに歸つて來たのである。

翌日になるともう五十嵐は家を探す勇氣が無い。三藏は昨日夫婦連れで家を探しに出たと聞いた時、エノック、アーデンにある鳥の巢のやうな棲家といふ其のネストライクといふ形容詞が思ひ出されて羨ましいと思つたが、實際五十嵐の身になつて見ると、家を構へたところで、其

敷金はどうする、世帯道具はどうする、米代はどうすると考へると何の成算も無いので、家を探しながらも、萬一どうかした事で契約でも出來たら扨てどうしてよいのだか困つた事だと思ひ乍ら歩いて居たので、三藏の想像したやうな樂しい心持は更に無かつた。況して今朝になつて見ると何の爲めに昨日は歩いたのだか殆どわけがわからぬのに氣が附いて、出來るだけ朝寢をして寢返りばかり打つてゐたが、十時頃俄に蒲團を蹴つて起き出でて、今日は獨りで大阪へ行つて來ると言ひ出した。それから旅費をこしらへる爲めに細君を親許へやつて細君の著替を一枚質屋に曲げ込ませて、其金を握つて晝頃出掛けた。大阪には五十嵐の叔父に當る人が居て此頃は殆ど絕交同樣になつてゐるのを今日は押しかけて訪問する積りである。

細君は晝過ぎ一人ぼんやりと座敷の眞中に坐つて居たが、戸棚の中に仕舞ひ込んであつた自分の小さい鞄を取り出して、其鞄の中に直かにごろ〳〵と入れてある櫛や簪や笄や鬢附などを取り出して、斯んな髮結道具を入れて置く疊紙を一枚張らうと思ひ立つた。

殆ど空になつて同じく其鞄の底に投げ込んであつた財布の底に五厘錢を一つ見出して近處で姫糊を買つて來て、綾子さんの大きな皿と刷毛とを借りて來て、鐵瓶の湯を加へて糊を薄く溶いた。それから同じく其鞄の中に何かがくるんであつたあまり皺の寄つてをらぬ一枚の古新聞を取り出してこれを其疊紙の心にせうと決心した。扨て萬事整つたが此心の上に張る反古が無いのに頓と困つた。增田さんか堺和さんに貰つて來ようかと腰まで上げかけたが、急に思ひ附いたものがあつて、今度は五十嵐の方の大きな鞄を開けて何物かを探し始めた。

二十二

細君が五十嵐の鞄の底から取り出したものは大きく卷いた二束の文殼である。これは過去一年間に五十嵐と細君との間に取り交はされた艷書の殼である。細君は其二束を兩手で一緒に取り上げたが、やがて一束の方は再び鞄の底に戾し、一束だけを持つて座敷の眞中に歸り、一番上側に卷いてある二本の手紙をする〳〵とほぐし取つて讀むともなしに見る。これは新らしい方で、廢業する一月程前に細君から五十嵐に出した、文面の意味は取敢へず來て吳れぬかといふに過ぎぬ簡單な手紙であつて、文字は幼い字體の平假名が薄墨で亂暴に書いてある。細君は此手紙を書いた時の事を思ひ出すと今この姉小路の座敷に斯う坐つて居ることが夢のやうに思はれる。丁度この手紙を書き掛けた時であつた、妹株になつてゐる術代といふ女郎が流連の客が今漸く飮みつぶれて寢てしまつたといふので、眞晝間の白粉はげのした淺ましい睡むさうな顏を障子の間から突き出して「姉さん、五十嵐さんあれから來ないの、隨分ね。だけどもうたつた一月だわ。お樂しみね。あゝあゝ私なんかつまらないわ。まだ一年半もあるんだもの。」と言ひながら體は矢つ張り障子の外に置いたまゝ首だけ簞笥の上に飾つてある緣喜棚に向けて「姉さん。あれ私に頂戴ね。そら其福助さ。一體誰に貰つたのさ。私其のおでこに惚れちやつたんだもの。はゝゝゝ。」と肩で障子を開けて這入つて來て、懷手をした儘で長火鉢の向うに坐つて「だけどねえ、姉さん、姉さんが行つてしまふと私淋しいわ。」と甘えるやうに言つて自分の手紙を書くのを見てゐた。それから自分は手紙を出してしまつて、長火鉢を挾んで向ひ合つて其日はいろ〳〵淋しい話をした。「馬鹿に淋しい日だわねえ。」と言つて障子を開けるとしと〳〵と雨が降つてゐて、程なく五十嵐が傘の雫でつい濡らしたとか言ひ乍ら、櫻餅を一

籠手土産に持つて來て呉れた。手紙を見たかと言ふと、見ないと言ふ。「それでは行き違つたのね。あなたの方から思ひ立つて來て呉れたのだと尙嬉しいわ。」と言つて上り花を入れ替へてそれから三人で櫻餠を食べたつけ、などと細君の聯想は果てしも無く進みつゝ、手は其手紙の皺を延ばして無造作に其れを二つに破り、扨て糊をつける臺に困つて一寸其邊を見廻し、山本の本箱の蓋を外して來て、其れを裏返して置き、其上に手紙の切れを置いて糊をつけ、其れをべたと新聞紙の上に張附ける。裏側に糊を附けた爲めに『そんなにじらすのはつみだわ』といふ文字が陽はに上向いて出てゐて、これはまづいと氣がつき、今度は文字の方に糊を附けて張附ける。次にほぐし取つた手紙は五十嵐からよこしたので、これは五十嵐が通ひ始めた頃の手紙で、（いつか二人で此手紙の束をすつかり讀んで見たことがある、其時順序が滅茶苦茶になつたのである。）五十嵐に似合はん猫を被つた穩かな文句が並べてある。細君は又其れを幾つかに破つて一々糊をつけて新聞紙の上に張附ける。

左の二の腕の所が痒い。細君は刷毛を口にくはへて糊のついた手の甲で左の袖をまくり上げて痒い所を散々に掻く。

漸く半面を張り終つた頃細君は今の身の上を考へて豫期してゐた程でなくつまらぬと思ふ。此考は此間から屢々起る。けれども吉原に居た時よりは樂だと思ふ。まアどうかなるだらうと考へて大きな欠びをする。疊紙を拵へるのもそろ／＼厭になる。其處へ三藏が這入つて來る。

二十三

三藏は「十風君留守ですか。」と言つて其儘歸らうとする。細君は出てゐた膝頭サンを一寸隱して「話してらつしやいな。」と今糊を含ました刷毛を一枚の手紙の上にべたと下し乍ら、目は其刷毛の方を見たまゝで言ふ。三藏は立ちはだかつたまゝ「すぐお歸りでせうか。」と言つて細君を上から見下す。「大阪へ行くつて晝頃から出掛けましたから今日は遲いでせうよ。」と言つて糊を附け終つた紙の上の兩隅を兩方の手の二本の指で摘み上げて目の高さまで上げたのを下へ下さうとしたはずみに、ぶら下つてゐた下の片隅がべたりと折れてくつつく。細君は「一寸憚り樣。」とか何とか刷毛の柄を口にくはへたまゝ判らぬことを言つて空目を使つて三藏の顏を見る。三藏は狼狽へて兩膝を突いて、兩方の手を突き出して細君の摘み上げて居る上の兩隅を自分で摘まうとする。細君は首を振つて眉を寄せ、頤で下の折れ目を指す。三藏は漸く氣がついて慌しく其折れ目を直さうとすると、糊で柔かくなつてゐた紙が破れてしまふ。三藏は「これは惡い事をしましたね。」といつて細君の顏色を覗ふ。細君は口にくはへてゐた刷毛を取るが早いか、ぷつと噴き出して「堺和さんがあまり慌てるからサ。」と言ふ。「全體何をしてゐるのです。」と三藏は頭を掻きながら聞く。「疊紙を張つて居ますのサ。」「さうですか。」と言つて三藏は手紙の束に目を止める。「大變な手紙ですね。」「これ？　も一卷あるのですよ。皆、あの人からよこしたのと、こちらからやつたのとですよ。」と細君は自慢らしく言つて次の手紙を又二つに破つて糊を附ける。「そんなにしてしまふのは惜いぢやありませんか。藏つといたらいゝでせう。」と言ひ乍ら今糊を附けた下に光つてゐる文字を見る。是は細君のであらう。何處か五十嵐に似たやうな字體で而も妙椰な假名が行もしどろに認めてある。三藏は女郎の手紙といふものは今初めて見る。而も今日の前に此手紙の筆者其人が其れを無造作に引裂き糊を附けて疊紙を張つて居るのを物珍らしく見る。

洗ひ白けた平常衣の浴衣に毛繻子の帶をお髪さん結びに結んで、肩から下は赤い物一つ止めずげそりと物淋しいのに、いつもの通り赤い手絡を掛けた丸髷の艶々しく大きいのが格段に目につく。「藏つとくつてもう斯うなつたら反古だわ。塀和さんなんかこれからだけれど、私達はもうおしまひですわ。」といつて又上の兩隅を摘んで上げたのを三藏は今度は氣を利かして早く下の兩隅に手を添へてやる。「さうやつていたゞくと大變樂ですこと。」といつて細君は又文束から次の一枚の手紙をほぐし取りながら「あのね塀和さん、あなたもどうせ行らつしやるでせうけれど吉原のお話をしませうか。」「えゝ。」と三藏は少し顏を赤くして耳を欹てる――併し吉原の話も詰らないのね。それよりも古宮といつてね。古宮の話あなたあの人からもうお聞きなすつて。まだ？ 私實はこちらへ來るか、古宮の方へ行からうかと廢業る一月程前迄迷つたのですけれど、たうとうこちらへ來るやうになりましたの。全くをかしなものね。どちらかといへば私あの人よりも古宮の方が好きな位であつたのですけれど、全く妙なものね。」と細君は刷毛を動かしながら喋舌る。三藏は細君の顏と手附とを見ながら聽いて居る。

二十四

「困つたのは古宮とあの人とが落合つた時でした。餘程氣骨を折つても、惡くすると、兩方共の機嫌を損ねつちまつたりなんかして、本當に弱りましたわ。それでも、あの人も古宮といふものがあることは廢業る三月程前迄は全く知らなかつたらしいのですし、古宮の方は何それよりも少し後れて感づいたらしかつたです。まあそれ迄はいうても扱ひやすかつたですが、困つたのはそれからでした。いつかあの人が流連をしてお拂ひが足りなくなりましてね。私の身のまはりのものも大概無くしてしまつてゐるし、どうすることも出來ず、馬を引いて歸るのも見つともないし、丁度古宮が來て居たものですから少し自分に入り用があるからと言つて無心を言ひますとね、古宮は『五十嵐が來て居るぢやないか。無心なら五十嵐に言つたら善からう。』なんて皮肉を言ひますのをやつと泣いたり怒つたりして機嫌を取つて漸く聞いて貰つて其れでそつとお拂ひを濟ませて『どうやら工面が出來て內證の方は濟ませたから安心おしなさいな。』つて言ひますとね、五十嵐は『どうして工面が出來た。工面が出來る譯が無いぢやないか。今廊下で古宮の奴に遇つたつけが、貴樣古宮に出して貰つたのだな。怪しからん。己を侮辱してゐる。そんな金は叩き返してしまへ。』などと言つて大きな聲をしてわめき立て、しまひには私の髮を揮つて引摺つたりなんかするんですよ。私を撲つのこそまだいゝけれど、大きな聲をして古宮に聞えたら大變だと、あの時は本當にハラハラしましたつけ。……えゝ？ それからツて？」と細君は三藏の顏を見て「塀和さん大變御熱心ね。あなた斯んな話聽いて面白いの？ 人の惚氣なんか聽いて腹は立たないの？」とぱくりと口を開けて笑つて、空目を使つて暫く天井を見詰めながら、「ねえ塀和さん、それから。」なんて聞くのはおよしなさいね。兎に角あなた五十嵐と私はラヴァーの間柄ぢやありませんか。アイ、ラヴ、ユーになるとね、さういふあと程餘計に仲がいゝものよ。」と言つて細君は又大きな口をぱくりと開けて笑ふ。三藏は何だか飜弄されたやうな氣持がして少し顏色を變へかけた時、表の戸ががらりと開いて其處へぬつと立つたのは五十嵐である。

二十五

五十嵐は不思議な眼附をして此一座を見る。

殊に其のぎら〳〵光る眼は先づ艷書の束に止まり、細君の手許から、張り掛けられた唐紙、それから又三藏の首筋に及ぶ。細君は「大變早かつたのですね。」と少し驚いて五十嵐を見上げる。五十嵐の嚮走つた聲が晴天の霹靂と破裂する。「貴樣ッ。何をして居るのだ。」「唐紙を張つて居たのです。」「馬鹿ッ。恥を知れよ恥を。人の前で斯んな物を出し散らかしてッ。」と其處に轉げてゐた文束を取つて細君に擲げ附けると、細君の前髮の邊にはたと當つて櫛が飛ぶ。「斯んな物を馬鹿なッ。」と唐紙を八ッ裂きに裂いて其れを丸めて又細君に擲げ附ける。細君は青い顏をして口をむつと閉ぢ目をショボ〳〵させながら默つてキチンと坐つて居る。細君は五十嵐が腹を立てて物を擲げ附ける時や、長い骨々した腕で搏つ時はいつも斯ういふ態度で居る。又髮がほつれて額にかゝつて懈れ氣にションボリと坐つて居る細君の凄艷な姿は能く五十嵐の心を柔らげるに足るのである。三藏は「十風君、亂暴をしてはいかぬ。僕が此處へ來たのが惡かつた。」と言ひながら立ち上つて五十嵐の手を支へる。此時五十嵐の心はもう少し折れかけてゐる。「君は心配せんでいゝよ。」と僅かに笑ひを洩らして三藏の顏を見「馬鹿野郎が、自分の身分を恥づる事を知らないのか、情けない奴が。」と嵐の吹き留めに其處に在る糊の皿を足蹴にしてひつくりかへし、眼の中には涙を一杯に溜めて居る。細君はまだ默つて木像の如く坐つて居る。「奥さん雜巾は？」と三藏は覆つた糊皿を見て心配さうに細君の顏を見る。「堺君、そんな事に君心配すなよ。君のやうに氣分が弱くつてはいかぬよ。」と言つて五十嵐は三藏の肩に手を置いて「此間の發句は出來たかい。さうかそれでは見てやらう。」と言つて三藏が懷から出す句稿を受取つて例の赤い机掛の前に體を擲げ附けるやうにして坐る。

細君は漸く體を動かし始めて、覆つた糊を拭き取つたり、飛び散つた文殼を纏めたりして、鼻を啜り上げながら其邊を片附け始める。

其夜五十嵐は莽と細君を抱き締めて寢る。斯る事のあつた夜はいつもさうである。

二十六

五十嵐は昨日七條の停車場迄行つて其處で俳友の一人の佐野四澤に逢つた。佐野といふ男は嘗て五十嵐と一緒に兵學校の試驗を受けると言つてをつたこともあつたが併し間際になつて止めた。それがいつの間にやら或商館に這入つて、頭を綺麗に分けて雪駄を穿いて前垂を掛けて居た。それで昨年など五十嵐と一緒に遊興んだことも度々あつた。「君が司と駈落をしたといふ事も聞いたが、まだこちらでまごついてるのか。」と佐野はいきなり大きな聲を出す。それから二人で近所の牛肉屋に這入つて酒を飲んで、五十嵐は昨今の窮境を話して大阪行きの理由までぶち明けた。佐野は「旨くやつてるなア。『手鍋提げても』てなことを實行してゐやあがる。司は素人になつても美しいだらう。いゝしやぐまと丸髷とどちらがよく似合ふ？ 兎に角こゝいらでまごついてゐるのはよせよ。早く東京へ歸つたらどうか。丁度商館の方に人が入用なんだ。君も發心しろよ。己は俳句も金を儲けてからだと觀念した。アイスの方は今幾ら位ある。それつきりか。意氣地がねえなあ。それ位の事にくよ〳〵してやがるのか。大阪行きも貴樣のやうなぶつきら棒では想像するに談判破裂だな。よせ〳〵。下宿の拂ひなど旨くごまかして置いて兎に角歸京つて來いよ。萬事それからの事にしろ。汽車代位司にどうかさせろ。髮でも切つて髢にでも賣らせるがいゝや。」と帶の間から金時計を出して「オヤもう三時だな。己か、己は今朝著いたのだが、もう此汽

車で歸京らにゃならぬ。どうだ當分己の部下で辛抱しては。一年も辛抱すればどうにかなる。」と立ちかゝつて「貴樣これで勘定して置いて吳れ。もう時間が無いから失敬する。」と五圓札を疊の上に放り出して置いて段梯子をとん〳〵と降りる。五十嵐は「佐野の奴、人を馬鹿にしてゐやあがる。」と腹が立たぬでもないが、少し煙に卷かれ段梯子の降り口まで見送つて行つて長い體を突立つたまゝ「賴むとすれば二三日內に歸京らう。」と言ふ。佐野は「ウンさうしろ。あの何に……」と一寸言ひにくさうに言つて「細君に宜しくいつて吳れ。」ともう〳〵と行つてしまつた。五十嵐は一人もとの座に戻つて其處に擲げ出されてある五圓札を見るといま〳〵しくなる。「畜ッ食へ。」と舌打をしてぢつと考へて居たが別に仕方も無い。女中を呼んで疊の上に置いたまゝの五圓札を顋で敎へると女中は何とか愛嬌を言つて持つて行く。

女中が持つて來た釣錢も其處へ置いて置く譯にも行かん。財布を開けると今朝細君の着物を曲げ込ませて拵へた銀貨が淋しく底の方に光つてゐる。其上に厭々乍ら其釣錢を投げ込むと急に光るものの數が殖える。五十嵐は又厭々乍ら其財布を懷に押込んでもう大阪にも行かず家へ歸つて見ると前回に陳べたやうな細君の淺ましい癡態を見て癇癪玉が一時に破裂した。併し其暴風雨の跡はからりと晴れて今朝になつて見ると佐野の高慢もそれ程もう癪に障らぬ。晝飯には昨日の財布を細君に持たせて近處の鮨を買はせにやる。さうして二人で旨く其鮨を食つてしまつて、それから佐野に「兎に角賴む。どうか工面して二三日うちに歸京する。」といふ意味の手紙を書いた。

二十七

五十嵐十風は增田や三藏に迷惑を掛けて姉小路の拂ひをすませて遂に細君を連れて東京へ歸つてしまつた。其時增田や三藏に「これから俳句を添削して貰ふのには東京の文科大學に居る越智李堂が善からう。此男は人物が立派で、自ら我等仲間の中心になつて居る。僕から照會してやつて置くから君等からも手紙を出して依賴してやり給へ。」といつた。其から三藏は直ちに增田と連名の手紙を認めて賴んでやつた。李堂からは直ちに返事が來た。增田は「字體が十風に似てゐる。」と言つただけで別に意にも留めなかつたやうだが、三藏は筆蹟が見事で文句も莊重だと思つた。さうして深く〳〵又李堂という人を敬慕した。程なく學校が始まつて獨逸語は愈々六つかしくなる。物理の敎師が變つてペラ〳〵英語で講義するので三藏は又これに惱まされる。土曜の午後になると生き返つたやうな心持で增田と二人で句作する。さうして直ちに李堂に批評を賴んでやる。李堂からは直ぐ懇切な批評を加へてかへす。或時返事が少し遲れた事がある。どうしたのかと待兼ねてゐると、『頃日、當地小說熱盛んにして同志のもの數人と小說會を組織す。殆ど每日會開催する程の盛況なり。山僧君は小說にも意ある由十風より傳承せり。若し學課の餘暇あらば何にても宜し御寄送を望む。』といふやうな事が書いてあつた。其次の手紙に又「山僧君學課御多忙の由御察し申す　一方に小說盛んなると共に他方に亦俳句會も成立せり。從來の同人の外に或一團體と合同して近來は運座といふものを催せり。此運座なるものゝ方法等說明したけれど書端意を盡し難し。近日同人のうち篠田水月(早稻田專門學校に在り)御地に罷越すやう申し居れり。其節は名所舊蹟御案內賴む。當地の俳況及運座の方法等直接水月より御聽取被下度候。』とあつた。

それから篠田のまだ來ない前に李堂から又葉

書が來た。『同人中の先輩奥平北湖先生二三日うち御地を過らるゝ筈、或は貴寓を訪れらるゝも知れず。山紫水明の地に於ける一夕の雅會を想望して健羨に堪へず。』と書いてあつた。其手紙の着いた翌日の四時頃であつた、表にがらがらと車が止まつた。程なく「御免。」と改まつた聲が聞えたと思ふと、續いて「私は奥平北湖と申す者でやすが、こちらに増田花翁、堺和山併といふ人が下宿をして居りますか。それでは一寸お取次を。」と急き込んだやうな聲で、それで非常な高調子だから座敷に手に取るやうに聞える。三藏は飛び出て來て「どうかこちらへ。」と案内する。増田は自分の敷いてゐた汚い毛布を延べる。

見ると北湖先生は痩せこけた脊の高い紋附羽織を着た五十近い老人で、薄い顎鬚を神經的に引張りながら「李堂でやすか。文學に熱心なことは非常なものでやすな。私と李堂とは同郷でやして私の監督してゐる寄宿舍に李堂が居つた頃から私もつい仲間に引張り込まれて、俳句では李堂のお弟子でやす。それでは一題やりませうか。私は七時いくらかの汽車ですぐ國の方へ立つ積りでやすが、今は何時でやすかな。」と帶の間の時計を探される。前にぶら下つて垂れてゐるに拘らず、頻りに狼狽へて帶の中を探される。漸く探し當てられて「もう四時が近いでやすな。それでは私が題を出しませう。少し早いやうでやすがもう秋にしますかな芒はどうでやせう。」と言つて増田の出した半紙を一枚取つて其れを二つに折り、三藏の硯箱の中から一本の筆を取出して、尖の堅くなつてゐるのをいきなり硯池に突き込んで、もう早や何か書かれたが、薄墨がにじんで大きな染みが半紙に出來る。

二十八

北湖先生は客膳を召し上る。「私は胃が惡いので蒟蒻だけはいけませんてや。」と言つて絲蒟蒻の上に止まつたやうに乘つかつてゐる三切許りの堅い肉を齒をむき出して噛まれてゐたが遂に噛みこなし切れず膳の上に吐き出された。「先生、生卵はいかゞです。」と三藏が言ふと「鷄卵でやすか、鷄卵も一つはよござい ますが、二つ以上食ふと不消化でやすな。いえ、もう結構。」と茶をかけて堅い飯をざぶ〳〵と搔き込まれる。御飯は五分もかゝらぬうちに濟んでしまつて、先生は「芒はなか〳〵むづかしいでやすな。山僧君のお句のうちではこれが面白いでやすな。花翁君のではこれがえゝやうですな。」とそれから二人の句を一々批評されて「私は猿蓑が好きでやして、中でも凡兆の句が純客觀的で面白いと思ひますてや。」とそれから又凡兆の句の面白味を丁寧に説明される。十風は只いいとか惡いとかいふだけであつたが、先生のは一々理由を説明される。三藏は進んで質問を始めようとしてゐると先生は帶の間から又時計を出して見られて「六時でやすな。これは大變だ。停車場迄一時間ではむづかしいでせう。」と俄に狼狽せられる。「一時間あつたら大丈夫です。」と二人が言つても先生は尚狼狽へて居られる。何か頻りに探して居られるので「何か有りませんですか。」と聞くと「いや有りました〳〵。」と蟇口を懷から出されて忽ち疊の上にざら〳〵と明けられる。さうしてその中に車夫に拂ふだけの小錢があるのに安心されて、又其れを搔き集めて蟇口の中に拾ひ込まれる。それから「いやどうもお世話でやした。」といそがしく車に乘つて歸られた。

三藏は其夜三人の句を列記して李堂の許に送つた。而して「北湖先生の教へによつて得る處頗る多く候。殊に凡兆の客觀的の句の面白味を承りたるは有益に存候。」といつてやつた。李堂からの返書に「北、先生は凡兆の句に

よつて悟入されたり。大兄が同じく凡兆の句より悟入するも、將た去來の句よりするも、其角の句よりするも、嵐雪よりするも、許六よりするも其は御隨意なり。但し大兄の句が客觀趣味に缺如する處多きも事實なり。御工夫を要す。』とあつた。其から三藏は今迄の自分の句に慊らずなつて頻りに客觀的の句と思はるゝものを作つた。所が李堂からは以前と反して振はぬ振はぬといふ小言ばかりが來る。三藏は大いに煩悶する。増田は別に何事にも感心もせぬ代り別に何等の變化をもせぬ。從前の通りの歩調で徐々と進んで居る。暫くの間三藏は俳句も詰らぬと思つて學校の課業の方を勉强せうと思ひ立つた。併し學校の課業も矢張面白くない。殊に獨逸文法の無趣味で繁雜なことは堪へられぬ程である。

來る〳〵といふ噂ばかりで延び〳〵になつてゐた篠田水月が紅葉を見旁々愈々行くといつて來た。

二十九

三藏は獨逸文法に屈託した結果此頃終に或獨逸語の先生のうちへ通學するやうになつた。其先生といふのは獨逸の書物の飜譯などをして著述を仕事として居る人で、或人の紹介の下に一人位なら教へてやつてもよいとの事で三藏は二月程前から通學するやうになつた。渥美雨雄といつて、脊の低い、まる〳〵と肥え太つた、髯の無い四十四五の人で、今年十八になる先妻の娘と三十許りの細君と、下女一人といふ暮しで、明け暮れ書物を開けてはペンを握り洋紙の原稿紙に細字で何か書いて居る。平生は無口で挨拶も碌にしないが、晩酌を始めると俄に口が辷り出して頻りに氣焔を吐く。書生時代の苦學した經驗談から、時としてお酒がきゝすぎると道樂話迄が始まる。三藏は一週間に二日、午後七時から行く事になつてゐるのだが、時々まだ最中のところにぶつつかつて忽ちとつつかまる。「まア君二三杯はいゝや。若いものが澤山飲むのはいかぬ少しは許す。」などと言つて强ふる。細君が傍から「あなたのは許すのではなくつて無理にお勧めなさるのだわ。塀和さんは本當にいゝ迷惑ですねえ。」と氣の毒さうに言ふ。段々馴染が出來て來ると「君僕處へ來る日だけ飯を食はずに來るサ。御馳走は無いが、飯の暖かい吹いて食ふやうな奴だけ食はしてやる。」と主人公が言ふ。これには細君も早速贊成して「さうなすつたらいゝでせう。どうせ先生に捕まつてお相手をさゝれるなら御飯をたべずにいらつしやい。お手料理のオムレツ位拵へますわ。」と言ふ。「お前のオムレツは堅いばかりだが、其の、飯の暖かいやつを食はしてやる。釜から直きに取つてぶう〳〵吹き乍ら食ふので無くつちや本當の飯の味は無い。」と主人公は頻りに飯の暖かいのを吹聽される。其次の日は仰せに從つて食はずに行く。お約束通りオムレツが出來てゐる。其れから相變らず二三杯は許すといつて十杯以上も强ひられる。さうしてしまひには成程ぶう〳〵吹かねば食はれぬやうな釜から直きに取つた暖かい飯を食はされる。いつでも庭に立つて庭の竈にかゝつてゐる釜の處へ往來してお給仕をするのが女中のお常の役目である。お常の差支へる時は令孃が代る。

令孃といふのは鶴子さんといつて主人公に肖て脊は低いが顏立は美人だ。高等女學校を去年卒業して其れからは裁縫ばかりを習つてゐて滅多に表にも出ぬ位にして繼母の膝下でやかましく躾られてゐる。三藏はなんだか極りが惡いので鶴子さんの方は見ぬやうにしてゐるが、鶴子さんの方でもつんとして知らぬ風をして居る。

或日の事主人公は「君は俳句とやらを作るさ

うだが面白いものかね。東京の親戚のやつに篠田正一といつて、君より四五歳年上の青年があるが、それが矢張俳句を作り居る。四五日中に行くといつて來た。あいつが來たら君のいゝ友達になるだらう。」と話した。此の正一といふのが不思議にも李堂から兼て紹介して來てゐた水月の事であるらしい。

三十

鶴子さんには先頃縁談の口があつた。烏丸通りの或扇屋で、財産はある、男は中學校を出たきりではあるが立派な性質だとの事であつたが鶴子さんは厭だといつた。細君は「そんな我儘なことを。」と心の中では考へたが肝腎の主人公が「厭ならよすがいゝ。」と頓著しなかつたので話は其儘になつた。其後お常が買物に出た足を態と遠廻りをして其扇屋の前を通つて内を覗いて見ると、薄暗いやうな老鋪の暖簾の中に赤いものゝ澤山ついて居る若いお嫁さんの影がちらと見えた。姿も十分には見えなかつたのであるが、お常は竊に鶴子さんに、それは〳〵目附の涼しい、髮の美しい、そして脊のすらりと高い、女が見ても惚れ〴〵するやうないゝ新造であつたと吹聽した。鶴子さんはそれを聞いて何だか其嫁さんの顔を穴の明く程見てやり度いやうな氣持がした。それから或時今度は自分で其店の前を通つて見た。が氣が引けてはつくり内を覗き込むわけに行かぬ、例の暖簾の内の薄暗い店に三四人の番頭の坐つてゐた事と大きな大黒柱が暗い中にも黒光りに光つてゐたことだけちらと眼に止まつたばかりで、何だか氣が急かれて逃げるやうに通つてしまつた。あの時自分が承知さへしたら此のうちの主婦になれるのであつたかと思ふと大きな建物が覺えず振りかへられる。けれども鶴子さんは其軒に出てゐる古風な大きな看板、暖簾の内の暗い光り、古びた空氣を考へて厭だ〳〵と頭を振つた。如何に美しい新造かも知れぬが此のうちへ來た人なら大概想像がつく。もう其顔は見ないでも多寡が知れてゐるやうな氣がしてさつさとうちに歸つた。さうして扇屋の前を通つたことなどは曖にも出さず、縫物の殘りの袖をつけてしまつて其夜は自分の部屋に引込んで机の前に坐つて讀書をした。

机は白い木にまだたいした汚れも見えぬ。只或時零した赤インキがところ〴〵に染みを拵へてゐる。毛絲の敷物の上に乘つてゐるランプは曾て主人公が使つてゐた舶來の空氣ラムプで、鶴子さんが俯目になつて本を見て居る額の、ふくれて稍〻亂れた毛筋の中に其明るい光りが惜し氣もなく射し込んで、其額髮の下に美しい曲線を描いてゐる額の、其生毛に近い邊に光りの中心を漂はせてゐる。白い額の其光りの中心に當つてゐる處は大理石の如く輝いて、其下に細い乍らも黒い眉をくつきりと見せてゐる。其眉を越えて別に流れた曲線は、長く走るべき勢ひを短く收めて、すぐ其處に涼しい輝いた眼を藏して、其眼の爲めに針頭の塵をも防がうと矢並を揃へた睫は、鶴子さんが瞬きする度に動いて、今其處に靜まつた塵を拂ふ。鶴子さんの目はひたと書物を見てゐる。

書物は何某の家政學である。四號活字で括弧が多い。鶴子さんは細い指を脣に當てて頁を繰つてゐたが、終に掌が口を掩す。眉が八の字になつて、大理石に皺が出來、露の白玉が兩方の眼に宿る。鶴子さんは四號活字の書物を伏せて雜誌を手にする。雜誌は女學雜誌である。眼は若松賤子の名をたづねて表裏の目次をさまよふ。

三十一

鶴子さんとお常とは初冬の暖い日和に今日は

二人で留守居をして洗ひ張りをして居る。今張つてゐるのは木綿のごつ〳〵した田舎縞で、これは三藏が綿入羽織が一枚欲しいと思つて「綿入の表物が羽織になるものですか。」と渥美の細君に聞くと「兎に角お持ちなさい。大勢手がありますから隙のある時に拵へてあげませう。」と親切にいはれるので、三藏は行李をひつくりかへして手當り次第に一枚の綿入を引出して持つて行つた。細君は風呂敷を明けて見て、をかしいのを忍んで奥へ持つて行つたが、鶴子さんとお常とはこれを見て耐へられずに噴き出した。古びた田舎縞でそれに袂の尖に大きな焼焦げがある。折角羽織を拵へるのにこんなものをと細君も思つたが、書生さんは其無頓著なところがいゝのだと思ひかへして「これを洗ひ張りをして何とか工面をして焼焦げを隠すやうにして御覧なさい。」と細君は鶴子さんに命じた。鶴子さんは其袂の中が大きくふくれてゐるのは何が這入つてゐるのだらうと手を入れて見ると鼻紙の丸めたのが十許り這入つてゐたので又著物を擲げ出して笑つた。併し取敢へず其日ほぐすのだけほぐして置いた。其れを昨日洗つて今日張板に張つて居るのである。

お常も張板を並べて紅絹の裏地を張つて居る。これは鶴子さんの綿入の裏である。今鶴子さんは一枚の張板に例の焼焦げのある袖を張付けて日南に立てかけ乍ら「随分ひどい焼焦げねえ。」と言ふ。「思ひ切つて焼いたものですねえ。」とお常は言つて、自分の張つた紅絹裏の張板を今鶴子さんの立てかけた張板の横に並べて置いて「此裏も随分いゝ色になりましたねえ。」と鶴子さんに並んで縁に腰かけて両方を見較べて「いゝ御夫婦だ。」と言つてぷつッと噴き出す。「何をいふの お常は、厭な人。」と鶴子さんは笑ひもせずに庭に下りて今お常の立てかけた紅絹裏の方を三四間離して置く。「あれ、そんな積で申したのぢやありません。」「だつて餘まりだわ。」「そんな事仰しやるのはお嬢様に其氣がおありなさるからですわ。」「何とでもお言ひ、本當に厭なお常つたらない。」と鶴子さんは顔色を變へて怒つて居る。

お常は三藏を好いたらしい人だと思ふ。自分の方が二つか三つ年上らしいけれどなんだかあゝいふ人と夫婦になつて「お前さん。」では勿體ないから「あなた。」とか何とかいつて、木綿の著物でももつと小ざつぱりしたものを著せて、自分も生え際は薄いがそれでも満更で無い髪を丸髷に結つて、あの人と二人で寫眞を取つたり巫山戯たりして見度いと思ふ。

二人は暫く默つてゐたが、默つてゐる中に、今迄爭つてゐた勢は拔けて鶴子さんの方から口を利く。「お常。」「はい。」「もう何時だらうねえ。」「さあ何時でございませうねえ。もう三時が近い位でございませうか。」「さう。ぢや急がうね。」「急ぎませう。」と二人は既に乾いたらしい他の張板のをめくつて又田舎縞と色の褪せた紅絹裏とを張る。「お嬢様、堀和さんはお幾つでせう。」「私知らないわ。」「二十歳でせうか、二十一でせうか。」「聞いて御覧な。」「厭なお嬢様、そんなに仰しやらなくつてもいゝぢやありませんか。」と今度はお常が脹れて、張つてしまつた張板を手荒く持つて垣根の方へ行く。鶴子さんの盥の中には襟だけ殘つてゐる。お常は「私はすみましたですが、あなたは？」ともう機嫌を治して盥の中を覗き込む。「おや其れだけ殘つたんですか。それでは丁度いゝ、あすこが空いてゐますから。」と其襟を受取る。紅絹裏の張り擴げられた片隅に田舎縞が小さく張り交ぜられる。

三十二

篠田水月が來た。其日の晩餐には三藏も招か

れた。いつもは臺所のちやぶ臺で食ふのを、此日は座敷に膳を据ゑてチャンとお客様になつて款待された。床前に水月、其横に三藏、其れに對して主人公、主人公と三藏の間にビールの瓶を控へて坐つてゐるのが鶴子さん。主人公の背中の處には少し古びた金屏風が立ててあるのを、主人公は時々其れに背中を凭しかけようとしては止める。御馳走は例の細君の手料理の西洋料理で、旨いオムレツはもうすんで三皿目のシチウを今三人で最中食つてゐる。鶴子さんはビールの瓶を兩手で握つて水月の突出したコップにつぐ。眞直におづ／＼と突出してゐるコップに八分目位つがれて泡がコップ一杯に湧いたのを水月は靜かに膳の上に置く。鶴子さんは次に三藏につぐ。三藏は恭しくコップを右の手で持つて左の手を一寸添へて受ける。ビールが勢ひよく瓶から迸り出て瞬く間に一杯にならうとするので三藏はコップを引く。其拍子にビールはしたゝか疊の上に零れる。三藏は慌てて袂から鼻紙を出さうとしたが、それよりも早く、白い絹のハンケチが惜し氣も無く、其黄金色のビールの中に浸されて、其のハンケチを握つて居る美しい指にはビールの色よりも濃く鮮かに黄金の指環が光つてゐる。水月は眼鏡越しにじろりと其手許を見て、鶴子さんの電の如く閃いた空眼とはしなく逢つて互に避ける。鶴子さんの机の上に在つた空氣ラムプよりも一層大きくて明るい空氣ラムプが其のビールの零れた邊を中心にして其光景を明かに照し、又金屏の邊に漂ふ他の光りは主人公の黑い影を朧に屏裡に映してゐる。主人公は「どうした。ビールを零したのか。これお常。」と言つても返辭が無い。「お常――ツ。」と大きな聲を長く引く。十分にビールを含んだハンケチは盆の上に置かれて、疊はお常が持つて來た雜巾で拭ひ取られる。三藏は「不調法をしまして。」と恐る／＼鶴子さんの顏を見る。鶴子さんは默つて一寸會釋をしたばかりである。

　三藏は鶴子さんに拵へて貰つた袷羽織を著て居る。お常は疊を拭き乍らちらと其羽織の紐を見る。三藏は初めて其羽織を著た時紙縒を紐にしてゐた。それを見兼ねてお常は自分の針箱の抽斗からなま／＼しい青い色をした毛絲の殘りを見出して短い紐を編んでやつた。三藏は素直に其紐を締めてゐる。お常はそれを見る度に嬉しいと思ふ。

　水月は主人公が大きな聲をしてカラ／＼と笑ふ時淋しく幽かに微笑む許りですぐ眞面目な顏に戻る。

三十三

　翌日三藏は水月を案内して糺の森から朱の玉垣の加茂の社、それから吉田村の學校、黑谷から眞如堂、若王子、永觀堂、南禪寺と伴れて歩いても水月の方からはあまり口を利かぬ。それでも三藏の方から文學に關する事を尋ねると考へ／＼話す。併し其の答は三藏の問うた心持とはぴたと合はぬ事が多い。水月は加茂の社の前に立つた時も、黑谷の石段を登る時も、南禪寺の疏水工事を見た時もいつも同じやうな顏附をして居て、只三藏が歩く足に連れて歩き、三藏が立止まる處に立止まる。

「水月君、それは何ですか。」と三藏は水月の手に握つて居る新聞紙包を聞く。水月は一寸考へた末口を噤んで只微笑を洩したばかりで返辭をせぬ。それから疏水について歩き乍ら暫くして「水月君、發句は御出來になりましたか。」と三藏は又口を切る。水月は又一寸考へた末「出來ませんでした。」と言つて「山僧君、出來ましたか。」と今度は水月の方から問を發する。それから山僧は出來た句を三四句話す。水月は其れを聞いても善いとか惡いとかいふ批評はせぬ。

「其れは李堂が讃めるでせう。」とか北湖先生が取るでせう。」とか「其れは十風當込みですね。」とか言つて、それから又思ひ出したやうに「花翁君は今日どうしました。」と聞く。「少し風邪をひいて今日はよう參りませんでした。」と三藏は答へる。水月はもう默つてしまつて何も言はぬ。

「三十三間堂邊迄行きますか。」と三藏が聞くと「どうでもようございます。」と水月は氣の無いやうな返辭をする。「それとも歸りますか。」と三藏が重ねて聞くと「歸つてもいゝです。」と矢張り氣の無い返辭をする。三藏は困つたが終に歸ることにする。

渥美の家が近くなつた頃、水月は突然口を利く。「山僧君。」「何ですか。」「僕昨夜夢を見たです。面白い夢でしたよ。」「へえ、どんな夢でした。」「僕の腰に花が咲いたのです。」「へえ。」と三藏は驚いて暫くしてから「どんな花でした。」と聞く。「何だか妙な花でした。折るとポキリポキリと丁度飴細工か何かを折るやうに折れるのです。それから折るとすぐ又あとから同じやうな花が咲くのです。折つても／＼あとからあとからと咲くものですから弱りましたよ。」増田の前では常に自ら詩人らしい心持がしてゐた三藏も、水月の前に立つと忽ち俗人に墮したやうな心持がする。三藏は水月の横顔を見る。日を受けてキラ／＼と光つてゐる眼鏡の奥に細い芒のやうな眼尻が見える。水月は又「僕は此間海に這入つて、いろ／＼の魚の額の前で頻りにピョコ／＼頭を下げて謝罪をした夢も見たです。」と言ふ。右の手にはまだ確と彼の新聞紙包を握つてゐる。

三十四

鶴子さんはお母さんに髮を結つて貰つてゐる。古びた小さい鏡臺が障子の前に置かれてある。此鏡臺は亡くなつたお母さんのである。今度の細君の鏡臺は別に新らしいのがある。「其方をお使ひな。」と細君は言ふのだが鶴子さんは必ず其古びたのを使ふ。鶴子さんは其鏡臺の前に坐つて居る。細君は今髮を解いて梳櫛を入れてしまつて雲脂落しをして居る。鶴子さんは心地よささうに顔を顰めながら、兩手には新聞紙を持つて雲脂を受けて居る。「大變な雲脂だねえ。」と細君は言ふ。「ア、痒い。其處が堪らないのですよ。」と鶴子さんは右の眼を絲筋のやうにして左の眼で一寸鏡を見る。曇りの無い鏡の面には惜し氣も無く顔を蔽うて垂れた房々した黒髪が映つてゐる。此時鶴子さんの眼には自分の顔が何處となく佚に見える。いつか惚れ／＼と見た洗ひ髪の藝者の姿を思ひ出して又自分の影に眺め入る。細君はいつの間にかもう梳櫛を取つて梳櫛を揃める。今迄顔の兩側に亂れてゐた髮が細君の左の手に握られて、や二梳三梳梳き始められる。今迄ばらりと額をかぶつて大きく見えてゐた髷が急に淋しく細くなつて梳かるゝ度に片方の眼が僅かに釣り上る。鶴子さんはいつも此時の癖で我乍ら飽かず眺める。此時水月と三藏とは歸つて來た。

「おや早やお歸り。」と細君は左の手は矢張り髮を握つたまゝ右の櫛を持つた手を止めて二人の顔を見る。水月は一寸微笑をして會釋をしたばかりで座敷の方へ行き過ぎようとする。「[illegible]さん[illegible]りですが貴方お茶を入れて持つて行つて下さいな。今お常は使ひにやつたし、一寸私たちも手が塞がつてゐますから。」と細君は何氣なく無造作にいふ。三藏は、おや此處で頂戴しませう。水月君此處へ坐つてはどうです。といつも細君の坐つてゐる長火鉢の前に坐る。水月は默つて其向側に坐つて一寸鶴子さんの方を見る。長火鉢の五徳の上には小さい鐵瓶に何か切の湯つてゐる湯がふつ／＼と沸つてゐる。一寸

ぐ其れは下しますよ。」と細君は片梳を終つた髪をだらりと後に垂らして其金盥を取りに來る。三藏は茶を入れる。

　鶴子さんは初めて長火鉢の方を一寸ふりかへる。視線は三藏の茶を入れる姿を過つて水月の横顔に及んだ時、細君の金盥の緣を袖で握つて此方へ來る顔にひたと逢ふ。鶴子さんの眼は鏡裡の我影に戻つて容姿を正す。口を正しく結んで眉と眼との間に距離を置く。細君は癖直しを始める。鶴子さんは自分の横顔を見てゐる二人の青年がある事を意識して居る。其二人の青年が如何なる眼附をして自分を見て居るかが鶴子さんに取つての問題である。其問題が心を占める度ごとに鶴子さんは鏡裏の自分の影を見る。

三十五

　細君は癖直しをすませて又洗櫛で梳き直す。多い髪の毛は一度窄まつて細君の手中に收まり、更に展れて鶴子さんの背中に流れる。美しい黑髪は新たに油の光りを添へて梳櫛は心地よく走る。鶴子さんは右手に元結を持つて肩の處に差し出す。鶴子さんの眼は鏡に映る細々とした自分の手首を見て、此の手首を見つゝある二青年を想像する。細君は先づ前髪を取る。「それでは少し右が多いやうですわ。」と鶴子さんの脣は鏡の中で動いて、又此聲を聞く人のある事を意識する。

　細君は鬢を分ける、中をとる、髱を取る。黑髪が五つに分れて、分れ目に青みがかつた白い地が縱横に見える。髱を拵へる。鬢を拵へる。「右の鬢が少し上りはしませんですか。」「さう、これではどう？」「それで丁度ようございます。」「左は？」「結構です。」元結は二本三本と細君の手に渡つて其片端は口に銜へられキリリと締める音が三藏の耳にも響く。鶴子さんは自分から毛筋で鬢を脹らませ、鬢櫛で鬢を掻く。目と手が同時に動いて鶴子さんの心は只鬢に止まつた時、水月の鼻は痛に油の香を嗅ぐ。

　銀杏返が恰好よく出來上る。細君は默つて道具を片づける。鶴子さんは「有難う。いゝ氣持に出來ましたわ。」と兩手は交番に後ろに翳されて鏡裏の影は二重三重に重なる。細君はがさがさと油の手を反古で拭く。鶴子さんは又鬢櫛で鬢を掻く。髪形がチャンと出來上ると正しい生際が目立つて見える。

　鶴子さんは立上つて鏡臺を片づける。鏡臺は天井を映し障子を映し、又ちらと鶴子さんを映して簞笥の上に置かれる。「お常は どうしたんだらうね。」と細君は時計を見る。「大變遲うございますね。私御飯の支度にかゝりませうか。」と鶴子さんは髪屑や元結の切れを掃き乍らちらと水月や三藏を見る。「さうね。二人ともお腹が減いたでせうねえ。お常に歸りに牛肉を買はすことにして置いたのですが。」と細君は戸棚から菓子器を出して「まアこれでも食べて辛抱してゐて下さいな。鶴ちやんお座敷の方へ持つて行つておくれ。」といふ。鶴子さんは座敷に座蒲團を敷く。火鉢に赤くなつてゐる大きな火を灰の中から掘り起して其れに一つ黑い炭を添へる。

三十六

　水月は二日の滯在ですぐ歸京するやうな話であつたのが、三日目になつてから俄かに半月許り此方に居る事にしたと言ふ。何が氣に入つたのか判らぬが毎日ポカンと出て行つてポカンと歸つて來る。手には始終彼の新聞紙包を持つて居る。併し只持つてゐるだけで其れをどうするでも無い。「あれから別に面白い夢は御覽にならぬですか。」と或時三藏が聞くと、暫く考へた末微笑して「夢は別に見ないです。併し小說の趣向がどうやら纏りかけたです。」と言ふ。

「どんな趣向ですか。」と三藏は熱心に聞いたが水月は微笑してゐるばかりで何ともいはなかつた。

鶴子さんは夜になると箏を温習へる。今迄は温習へる事もあり温習へぬ事もあつたのが、水月が來てからは毎晩温習へる。夜になると水月は又必ず歸つて來る。三藏も大概毎晩のやうに來る。二人は話が無いと題を出して句を作る。鶴子さんは自分の部屋で低聲に唱ひ乍ら彈く。水月は考へてゐるやうな考へてゐないやうな顔附で、一句も出來ぬ時もあり、出來る時は二三十句立ち所に出來る。其中には三藏の思ひも寄らぬやうな句がある。

十日目であつた水月は愈〻小説の趣向が纏つたといふので、筆を取るのには此家に居ては氣兼だからといつて翠朝から數屋町の柊屋の靜かな一間を借りて移ることになつた。其晩は例の茶ぶ臺を取り圍んでの小宴ではあるが三藏は亦お相客として招かれた。「どんな趣向かね。」と主人公は大分滑かになつた口許に微笑を含んで聞く。水月は此夜はいつになくはき〳〵とものを言ふ。「心中です。」「心中？ 心中は不贊成だね。も少し社會的に活動する人間でも書いて見てはどうかね。」「書けりや書いてもいゝですが僕には書けないです。」「それは困るね。そこでどんな奴が心中するのかね。」「文學者と草刈娘とです。」「ハ、ア、草刈娘は古風でいゝ。文學者といふのはどんな人だ。君のやうな人かね。」細君が傍から「あんな口の惡い事を。」と氣の毒さうに言ふ。水月は一寸考へて「矢張り僕自身になるでせう。少しは性格の違つたものにするつもりですが。」と言つて眞面目な顔をしてゐる。三藏は默つて二人の話を聽いてゐる。此日は鶴子さんもお常も二人ともお給仕についてゐる。お常は庭に立つて例の釜から取つて食ふ熱い御飯のお給仕をする。三藏の茶碗には贔屓ぶりに釜の眞中のところを入れる。鶴子さんは銚子を握つて主人公にお酌しながら其話を聽く。「心中」と聞いた時少し顔を赤くして極り惡げに一寸細君の顔を偸み見たが「矢張り僕自身になるでせう。」といつた時目を瞠つて水月を見た。

三十七

翠朝水月は柊屋に移つた。筆を取る邪魔をするでもないと思つて三藏は四五日無沙汰をした。六日目の日曜日の朝行つて見ると水月は自分の部屋の下の庭に蹲んで何事をかして居る。見ると白い新しいハンケチを平べつたい庭石の上に置いて其上を小さい石ころで叩いてゐるのである。「水月君何をして居るのです。」と三藏が聞くと、水月は眼鏡越しに三藏を見上げて「昨日思ひ立つて高尾へ出掛けたです。もう大方枯葉に近くなつてゐた中に一二本眞赤に紅葉してゐたのがあつて其葉を取つて歸つて今日ハンケチに叩いてゐるところです。一寸失敬します。」といつて又コツ〳〵と叩く。三藏は暫くボンヤリと廊下に立つて其れを見下ろしてゐる。

暫くして水月はハンケチを擴げて見る。覺束無き扇の裏繪といつたやうに僅に赤い色が映つてゐる。又元のやうにしてコツ〳〵と叩く。一人の女中が廊下を來る。「旦那私があおよう叩いてあげますさかい、ほつといてお座敷へお出でやす。」と言ふ。水月はまだコツ〳〵と叩く。三藏は一人で部屋に這入つて女中の汲んで行つた茶を飲み乍ら其邊を見廻す。机の上には書き掛けた原稿がもう山のやうにあることと想像してゐたに、殆ど原稿紙らしいものも見えぬ。只何か原書が一冊擴げてあつて色鉛筆が轉つてゐる。暫く其處に在つた新聞を讀んで待つてゐると、水月は漸くハンケチを擴げて眺めながら這入つて來る。三つ許りの覺束無き裏繪の中に一つはつきりした紅葉の形が眞赤に映つてゐる。

「大變よく映つたのがありますね。」と三藏が言ふと「漸くわかりました。紅葉によつて旨く映るのと映らぬのとがあるやうです。これに君俳句を書きませんか。」と言ふ。「僕は駄目です。君書いたらいゝでせう。」「何でもいゝです二人で書きませう。いつか鶴子さんが發句を書いて呉れとかいつてゐたからこれでもやりませう。」と言つて硯箱を疊の上に下して「まあ君書き給へ。」と三藏の方に向ける。「僕は駄目です。それより君小說は出來ましたか。」「小說ですか。」といつて水月は暫く默つてゐたが、冷やかな微笑を洩らして「あの小說は止めました。第一あの趣向は陳腐でものになりません。」と投げ出したやうに言ふ。「さうでは無いぢやありませんか。止めるのは惜しいですねえ。少しはお書きになつたんですか。」「少し書きかけはしましたが駄目です。」と言つて又淋しい微笑を洩らす。

三十八

「其書きかけはどうなすつたです。」と三藏は聞く。水月はハンケチを取り上げて日に透かして見たり、赤い上を輕く撫でて見たりしてゐたが「君あれから渥美へ行きましたか。」と話を外らす。「二度行きました。昨夜行つた時、先生は篠田はあれから一度も來ないが、小說を熱心に書いて居るのだらうか。と言つていらつしやいました。」と三藏は答へる。水月は小說といふ詞が出る度に厭な顏をする。此間主人公の前で得意になつて趣向を話した時とは大變な相違だ。

「あれが駄目なら、外のものをお書きですか。」と三藏は又聞く。水月は例の如く暫く默つて後「君は矢張り小說家になる積りですか。」といつて三藏の顏を見て居たが「僕には小說は書けないやうだから、もう創作は止めようかと思ふです。」「それでは何をおやりですか。」「サア。」と水月は自ら疑ふやうな口吻で「何をやりますかな。」といつて又淋しい笑ひをする。

いつもの通り話が途切れると又句を作る。水月は平生と違つて熱心に苦吟して居るのに、今日は容易に句が出來ぬらしい。二時間程もかゝつて出來上つたのを見ると別人らしい程まづい句ばかりだ。三藏は「どれがいゝのです。」と聞くと「僕は中で此句が得意です。」といつて一二句指示する。見るといつもの通りの奇想でもなく平凡な事が難澁な調子でいつてゐる。三藏は不思議に思ひながら默つて聞いてゐると、俳句に就ては一度も得意らしい事をいつたことの無い人が、此日に限つてくど／＼と說明などをして聞かす。

晝頃になつて歸らうとすると「君今日渥美へは行かないですか。」と水月が聞く。「行かうとも思つてゐなかつたですが、行つてもいゝです。」「それではこれを鶴子さんに上げてくれませんか。」と水月はさつきの紅葉を染めたハンケチを差出す。「俳句は書かないんですか。」「よしませう。」と言ひ乍ら机の抽斗から一本の手紙を出して「それからこれを一緒に鶴子さんに渡してくれませんか。」と言つて差出す。見ると丁寧な草書で『渥美つる子さま御許　篠田正一』と書いてある。

三十九

水月の手紙を三藏の手から親しく受取つた鶴子さんは狼狽へた。鶴子さんはお常に代つてラムプ掃除をして居つたところへ、三藏はつかつかと來て手紙とハンケチとを渡した。鶴子さんは怪んで手紙を手にしたが宛名と裏書とを見てクワツと赤面した。さうして「厭よ畑和さん。厭よ／＼。」と早口に言つて二つ共其處に擲り出してしまつた。三藏は格別氣にも止めず此處迄懷にして來たのであつたが今此場合になつて初めて若い男から若い女に送る手紙の特別の

意味を了解したやうな心持がした。さうして水月の此大膽な行爲が羨ましいやうにも思はれた。鶴子さんはホヤを拭く。ホヤは指の及ぶだけ曇り無く拭はれる。しかも鶴子さんの心はホヤには無くて只狼狽へてゐる。

三藏は其足ですぐ主人公の書齋に行く。鶴子さんはおど〳〵として前後左右を見廻す。細君の足音が此方に聞えた時手紙とハンケチとは急がしく袂の中に隱されて石油が油壺の中に注がれる。細君の足音が次の間で止まつて其處でお常との話聲が聞えた時鶴子さんは又其襖の方を振返る。襖が開く。鶴子さんは左あらぬ振をして反古で油壺を拭く。短い心は今鶴子さんが捻る螺車で少し捻上げられて底を離れる。這入つて來たのは細君かと思うたらお常であつた。「お孃樣もう私の手があきましてすから致します。どうも有難うございました。」と言ふ。「いゝよ、もうすぐ濟むから。」と鶴子さんは鋏で心を剪る。

三藏は間も無く歸つた。鶴子さんはラムプ掃除を終へて自分の部屋に這入つた。初めて心が落著いたやうに覺えて大きな息をする。さうして袂からまづハンケチを出して見る。覺束なき紅葉の色が糊の多い白い地の上に五つ六つ染め附けられてゐて只鮮かに赤いのは其中の一つばかりである。これに何の意味があるのか解釋のしやうも無い。ハンケチを再び袂の中に收めた手は今度は手紙を取出す。墨色の濃い正しい文字は自分の名を表に見せて下に『樣御許』とあるのが何となく艶めかしい。心は騒ぎながら封を剪る。取出された手紙は短い。薄桃色の雁皮に次の如く認めてある。『小野の朝風が塚に生ひけん草を男郎花とよび、女の塚なるをこそ女郎花とは呼べ。我が文ぞ僞りなる。あな物狂ほし。此筆を燒き此塚を築き一葉の舟を江河に流せば、舟は斷崖の下を流れて舟中に二人の影あるべし。御かへり言こそ待たるれ。かしこ。』

四十

其夕方であつた、細君は鶴子さんに斯んなことをいつた。「篠田さんから何かいつてらつしやりはしなかつたかい。」此間は非常に鶴子さんを驚かした。鶴子さんは此場合自分の潔白を表白する外に方法は無いと考へた。自分の書齋に走つて行つて彼の手紙を細君の前に突出した。

細君は手紙を受取つて驚いた。細君の鶴子さんに聞いたのは斯る重大の問題では無かつたので、篠田の宅から綿入を一枚正一に拵へてやつて呉れぬか、御面倒だが鶴子さんのお手あきに仕立てて頂き度い、此事は正一にも言つてやつて置いたから直接にお願ひに出るであらうといふやうな意味の手紙が來た。其れについての話であつたのが、意外にも薄桃色の雁皮に、艶かしい文句で意味は十分に解らぬが『御かへり言こそ待たるれ』とあり「かしこ」とあり『樣御許』とある、讀めぬ處は如何に艶めかしい文章であらうかと推し量らるゝやうな手紙が突出されたので細君は仰天した。それから「お前は何と返事をしたかい。」と聞いた。「返事なんかは出しはしませぬ。」と鶴子さんは答へた。「それはよく出しませんでした。此手紙は私が預つて置くから。」と言つて細君は疑ひ深いやうな眼をして鶴子さんを見た。鶴子さんは眉を顰めた。

水月の手紙は主人公に致されて細君と二人の前で浮世の審判を受けて「怪しからぬ。」といふ事に判決を下された。尤も主人公にも手紙の意味は十分に了解されなかつたのであるが、矢張り鶴子さんにも細君にも重きを置かれた「御かへり言こそ待たるれ。かしこ。」「樣御許」といふ文字と薄桃色の雁皮といふことが重要な意味に解釋されたのであつた。それから『鶴子にまで御差出しの手紙に就て御話申上度事あり御來

宅待上候。」といふ罫洋紙に亂暴にペンで書かれた手紙が其日水月の案頭に落ちた。水月はこれを開封して見て例の淋しい笑ひを洩らした。

四十一

水月は渥美より手紙を受取つた翌日は例の新聞紙包を手に持つて京都市中を彷徨うて居つた。それから其日の夜汽車で東京へ歸つてしまつた。渥美へは何の挨拶もしなかつたが、三藏には「今夜歸東。」といふ四字だけ認めた葉書を出した。それから例の新聞紙包は濱名湖の眞中で汽車の窓から湖の中へ投げ込んでしまつた。此新聞紙包が何であつたかといふ事は水月と濱名湖の外は知るものが無い。

三藏は其葉書を受取るや否や梓屋へ行つて見たが固より居る筈は無い。其足で渥美へ行つて見ると、細君が頭から「堀和さん、貴方あんなお使ひなんかをしてはいけませんよ。」と笑ひ乍らいふ。三藏は一昨日手紙を鶴子さんに手渡しする時初めて自分の使が格段な意味のものであることを了解して、思はず手を頭にやつて恐縮する。殊にあの手紙の件が早や細君に知れて居ようとは意外であつたので目を瞠つて其顏を見る。「先生はあんな手紙をよこす篠田も固より怪しからぬが、使に立つ堀和も堀和だといつて大變立腹してゐますよ。」と細君は言ふ。三藏は「さうですか。」と益々恐縮して、どうしてあの手紙がさう早く兩親に見つかつたであらう、鶴子さんの見て居る處へ細君でも突然這入つて行つたものか、と只驚いて居た。鶴子さんがこれを細君の前に突出したといふ事は固より三藏の想像の外にあつたのである。

「篠田君は參りましたか。」と三藏は恐る／＼聞く。「いゝえ。先生があの手紙を見ると直ぐ呼びにやつたんですけれどもまだ來ませんのですよ。」

「さうですか。」と三藏は又驚いて水月の既に東京に歸つた事を話した。「マア、さうですか。」と細君も目を丸くして、何といふ我儘な失敬な人であらうと顏色まで變へた。「先生は御在宅ですか。」と三藏は又恐る／＼聞く。「いゝえ。まだ歸りません。もうすぐ歸るでせう。」と三藏の顏を見て「後生ですから、これから鶴子の部屋などへは行かぬやうにして下さいな、私の手拔けになつて先生から叱られますから。」と言ふ。三藏はまごついて「決してそんな事は。一昨日もお部屋へ行つたのではありません。あのラムプ掃除をしていらつしつた時に。」「何にせよ、氣をつけて戴き度いものですね。」と細君の顏色はだん／＼險惡になつて來る。三藏は居たゝまらずなつて、此上先生に歸られたら大變だと、そこ／＼に挨拶をして逃げるやうにして歸つた。歸りがけに氣がついたのは鶴子さんの部屋では例の箏の音の悠長に響いてをつたことである。

三藏は橫町の曲り角で大きな風呂敷包を抱へて歸つて來るお常に出逢つた。お常は突き出すやうに不恰好に其風呂敷包を抱へて眞赤な顏をして三藏に目禮した。さうして三藏が矢張り青色の毛絲の羽織の紐を締めて呉れてゐるのを見て此上無き滿足を覺えた。

四十二

京都の今年の冬は格段に寒い。三藏は國許から新たに屆いた綿入羽織に、鶴子さんに拵へて貰つた袷羽織を二つ重ねて丸くなつて小さいラムプの下で勉強した。渥美の主人程の空氣ラムプは駄目としてもせめて鶴子さん位の明るいのが欲しいと思はぬでも無いが、又此暗い侘しいのにも俳味が無いでも無いと諦めて、燈下にすり寄せるやうに書物を置いて勉強をした。

水月が風の如く去つてからは東京との俳交も暫く杜絶え三藏は只學校の課業にのみ沒頭して居つた。例の手紙以來渥美へも教授を受けに

は行くが三昧の方でも態と家人と親しむのを避け、渥美一家の方でも何處となく籬を造るやうに見えて、例の吹きながら食ふ暖かい御飯も此頃は頂戴せぬやうになつた。鶴子さんは時々襖を隔てて三藏の聲を聞かぬことも無く、三藏も次の間に鶴子さんの足音と想像されるものに耳を欹てぬことは無いが、顏を合はすことも言葉を交はすことも無く、めい〳〵別々の月日を過してゐた。

此寂寞たる冬籠のうちに三藏の心の底に穩かならぬ或考が萌して來た。一生懸命に勉強しても國に居た時分程頭はどういふ譯だか働かぬ。字引を引いても屢々字を忘れる。數學の興味は殆ど零となる。新たに來た物理の教師の原語で口授するのが氣に食はぬ。ギューリツキといふ瘦せて帆柱のやうに脊の高い亞米利加人の、人は善ささうだが、いつも洟水を垂らし乍ら面倒臭い發音を強ふるのを下らぬことだと思ふ。國の中學に居た頃ノイスといふ體格のいゝ英人が常に「マイ、ボーイ、カム、ヒヤ。」などと言つて自分を教壇の上に立たせて發音をさせ「ヴェリー、グード。」などと腹の底から唸り出すやうな聲で讃めてくれたことを回想すると、此頃は只英語の發音だけでも遙に人後に落ちたやうな氣がして穩かで無い。此夏以來十風、北湖、水月などの絶え間無き來訪を受けた頃は、斯う續け樣の訪客では學校の方が困ると思ふやうな考が浮び乍らも彼諸氏と交遊する快味の爲めに其學校課業の痛苦は紛らされてゐたが、此頃のやうに又其方にばかり沒頭して見ると前よりも一倍の苦痛が身を襲ふやうに覺える。此鹽梅では前の學年試驗の成績は何でも六十番位であつたが、今度は及第すら覺束無いと思ふ。未來を想像するとぢつとして居られない。立上つて室内を散步する。此時其弱い心の奧底から火の如き力で呼號するものは現狀打破の聲である。退學！ 退學！ と三藏は下讀みしかけた書物をばたりと伏せて瞑目する。李堂、北湖、十風、水月等の人々が遙に東京の空から手を上げて自分を招いて居るやうに思はれる。嘗て三津の埠頭に立つて京都の天地を翹望した如く今は京都の古家の一間に籠居して東都の空を望むのである。

四十三

二十一歳の新年は煩悶の中に迎へた。奧村の爺さんが大奮發をして大きな蛤のお汁を拵へて呉れたのも喉を越し兼ねた。姉小路の綾子さんが伊勢物語とかの骨牌を取るからといつて三度も呼びに來たが三藏は行かなかつた。增田が白粉を塗られて眞面目な顏をして歸つて來たのもをかしくなかつた。二十一歳！ 是れ正に待ちまうけて居た處女作を出すべき年ではないか。冬季休業中に脫稿せうと思つて筆を取つたが例の如く澁滯して例の如く三回限りで筆を投げた。鶴子さんの箏が聽き度いと思ふ。正月禮に行つた時には細君獨りに逢つたぎりで物足らなかつた。其のうち骨牌を取りますからと細君はいつたが別に案内も來ない。今日あたり押し掛けて行つて見ようかと思ふが主人公や細君と話をして歸るだけでは更に面白くない。それよりも京極を散步する方がまだ幾らか心が慰む。京極から四條に出て四條の小橋を渡つて大橋を渡つて祇園の社を拔けて清水に行つて歸る。其歸り道も亦祇園を通る。昨年の初夏此處を通つて初めて人懷かしいやうな想ひが胸に溢れて、軒並の行燈が一々暖かい呼吸をしてゐるやうに覺えた其時の懷ひが又胸に湧く。十風が來てから以來俳句が自分の心を支配し、俳人との交遊が何よりの興味であつたので、十風の細君の嬌態も鶴子さんの妙なる箏の音も、十風、水月の言行が三藏を支配する以上には出なかつたのであるが、今亦此灯の街を步くとそ

ぞろに當時の心持が思ひ出されて東村の座敷の冷たく薄暗いのが堪へられないやうな氣持になる。女郎買とかいふものがして見度いやうな氣持もする。しかしそれは恐ろしい。又賤しむやうな心も同時に起る。その角い軒行燈の下から若々しい女の聲に送られて出る嫖客の姿を見ると馬鹿な奴がと爪彈きし度くなる。十風の細君の事を想ふ。東京の吉原といふ處を想像して見る。此祇園の百倍の繁華を描く。十風は其處で一代の色男を氣取つたのだと思ふとえらいやうな氣もする。自分も曾て福地櫻癡が吉原に在つて藝妓の膝に枕しながら日々新聞の社說を草して新聞社に送るのを常としてゐた、といふ談話を快として、どうかさういふ眞似をやつて見度いやうな氣がする。三藏はそんな事を考へつゝ足に任せながら四條の大橋にかゝり小橋を渡り遂にすご／＼と東村に歸る。こんな事をして冬季休暇は空しく過ぎて又課業が始まる、つまらぬ、苦しい。止めつちまへと思ふ。自由の天地、文學の大自在の境、それは祇園の社前に僅か許りあるやうであるか、ずつと飛んで東京の方を望むと乾坤に瀰漫してゐるやうに思はれる。早く飛んで其處に行き度い。今日も三角の宿題が出來ぬので立往生をした。今日も英語の下讀みをせぬので「そんな字を知らんやうでは駄目だ。」などとどなられた。斯んな事で苦しむのは實際愚なことだ。處決、處決！と三藏は頭をいだいて考へる。

四十四

三藏は時々自分は神經過敏だ、これでは成らぬと考へることもある。同級生のうちなどには至つて暢氣に出來上つてゐる人もある。宿題が出來なからうが、教師に皮肉をいはれようが、銃の臺尻位で少々なぐられようが一向に感じない。三藏はさういふ人を羨ましく思ふ。自分でも神經さへ遲鈍にして居ればどうやら斯うやら現狀を維持して、たとひお尻から一二番といふ處でも兎に角かじりついて卒業が出來ぬことは無いと思ふ。現に自分より出來ぬ人は級中に尙ほ澤山あるのだ。けれども三藏はどうしてもさうづう／＼しい人間になれない。其のづう／＼しい人を賤しむのではない。いつも成績のいゝこせ／＼と一生懸命に勉強して居る人より此種の人の方が却つて偉いやうにも思はれるのであるが、それで居てどうしても自分はさういふ人になれん。尋中では常に級長ばかりをして居つた、其虛榮心が今でもつき纏ふ。學校生活は下らぬと考へ乍らもそれでも級中の上位に居つてぐつと他人を下目に見るのならば強ちそれを厭ふ心も起らぬのだらうが、今の三藏は最早足場を立て直すことの出來ぬ程弱者の地位に落ちた。少なくとも自分はさう認めてゐる。さうしてそれは虛榮心が許さぬ。

弱い人がせつぱ詰まると前後不覺に行動する。三藏は保證人に談判し國許の兄に強制的に同意を得て退校屆を出してしまつた。出してしまつてがつかりした。熱の醒めた病人のやうに力無い眼で前後左右を顧みた。心細いやうな心持もする。又氣樂なやうな心持もする。或時は又愈々意味ある生活に步を轉じたのだとも意識する。一番に此結果を東京の俳友に報告する。いづれも驚いた手紙をよこして、これからどうする積りか、どうして飯を食ふ積りか、といふやうなことを質問して來たものもあつた。又中には其勇氣に感服するといつて來たものもあつた。三藏はどうして飯を食ふ積りかといふ質問には礑と當惑した。實はどうして飯を食ふかといふ事を考へて退校したのでは無かつた。只せつぱ詰まつて退校したのであつた。飯を食ふことなどの問題は其後に決すべき問題だと思つてゐた。然るに退學の報告に對して早

くも飯問題を提出されうとは三藏は豫期しなかつた。今僕の心を支配するものはどうして飯を食ふかの問題では無く如何にして先づ一篇の小說を草するかに在ると返事してやつた。又勇氣に感服するといつて來た朋友には、自分は今大海に漂へる一孤舟の身となつた、萬里泊舟天草洋といふ詩の句が何故か頻りに愛誦さるゝといつて返事を出した。

四十五

渥美から葉書が來て、至急來いとの事であつた。三藏は此一月許り無沙汰をして居つた。行つて見ると主人公は澁い顏をして「今日初めて聞いて驚いたが、惜しい事をした。これからどうする積りか。」との質問であつた。「小說家になります。」と三藏は答へた。「君はまだ二十一歲では無いか。それで小說家になれる積りか。」と鬚の延びた顋を撫で「ゆく〳〵はなれるとしても目下の處どうして衣食する積りか。」と主人公は附加へた。「兎も角上京する積りです。それから若し國許から金が貰へねば學僕になつてもよし、それも駄目ならば何とかして自活の途をつける積りです。」と言つて三藏は心のうちで、小說を書いて其原稿料を得る事をも計算のうちに入れてゐた。「さうか、それぢや遣つて見るサ。」と言つて主人公はもう匙を投げてしまつたらしい。それから暫く經つて「いつ上京する積りだ？」と聞く。「三四日のうちに出發する積りです。」「さうか、それぢや今晚飯を食つて行き給へ。」「はい有難うございますが少し急ぎますから。」「さうか。」と何となくよそ〳〵しい。臺所では細君とお常とがひそ〳〵話して居る。お常は殊に驚きの眼を輝かして居る。「マア何といふ堀和さんでせう。屹度何かに迷つていらつしやるのだわ。」「本當に惜しい事をしたものね。もう少しの辛抱だのに。」「旦那樣がよく〳〵言つて聞かせておあげなすつても駄目でせうか。」「一も二もあゝ狂つて來ては迚も駄目だらうね。」細君が拵へたコーヒー茶碗をお常が持つて立たうとする。鶴子さんは默つて二人の話を聽いて居たが「いゝわ、一寸座敷に御用があるから私持つて行くわ。」と言ふ。「あゝさうですか。」とお常の顏はサツと赤くなる。鶴子さんは座敷に行く。三藏はかしこまつて坐つて居る。主人公は口をむつと閉ぢて三藏の顏を見て居る。鶴子さんは後れ毛の多い白い頸脚を突出して三藏にコーヒー茶碗をすゝめる。三藏は會釋しながらも倘其頸脚、稍ゝ紅を潮した頰、素直に高まつた鼻を見る。鶴子さんに水月の手紙を渡してから以後初めて今日逢ふのである。二三ケ月の間に少なからず﨟たけたやうに思はれる。自分に對し終つてから今度は又主人公に差出す。其目にはたじろがずコーヒー茶碗のみを見てゐて口もキチンと引締つてゐる。三藏は自分は學校を途中で退いた日蔭者であるといふ事を今鶴子さんの前で著しく感ずる。何となく小さくなつて坐る。鶴子さんは持場に沈着に自分の役目を果して物靜かに立つ。

三藏が歸る時分に庭の[illegible]の前に居たお常は戸の透きから見送つて其のションボリと淋し氣に歸つて行く後姿を哀れに思ふ。

四十六

同鄕人會を繰り上げて三藏の爲めに送別會を開かうとして平田や加藤やをばさんは盡力して居つたが、其事を增田から漏れ聞いた三藏は俄に行李を納めて其前に出發してしまつた。其事を傳へ聞いて平田や加藤などは何故堀和は此頃あんなにひねくれたのであらう、文學者といふものは皆あゝいつた風になるものなのかしらと眉を顰めた。そんな始末であつたので渥美へもあれつき

り挨拶にも行かず、京都の天地を後に、尻に帆掛けて出發したのであつた。汽車が逢坂山を越えて瀨田川を渡つて、未知の山水を送迎し始めてから三藏は血液が湧くやうに覺えた。この感じは嘗て瀨戸内海の船でも經驗した。併しあの時は天下晴れて太陽の明るみの下で其熱を受けて湧く水のやうな感じであつたのが、今度は光線の通らぬ地底の水の地熱によつて熱するやうな感じである、だん／＼進んで京都が遠くなるに從つて自分の體が膨れ上つて來るやうに覺える。さうして京都の方を振返ると高等中學も其生徒も澤美の主人公も鶴子さんも小さい／＼豆人形のやうなものになつた如く覺える。

驛々で乘降する百姓の言葉迄が、だん／＼活氣が出來て來る。姉小路や奥村や學校近邊の文房具を賣る店の人々等の言葉とは大變な違ひだ。サアこれからだと思ふ。これから本當に文學者になるのだ。二十一！　正に處女作を出すべきの歳！　東京へ降りて扨て誰を訪はうか、李堂か！　未だ面識無い人を驚かすのも穩かでない。北湖先生？　これは餘り年齡の相違が劇しいからよさう。十風？　水月？　此の二人の中で取敢へず十風を選ぶ。

ふと目がさめると汽車は箱根のトンネルに這入つたり出たりしてゐる。もう夜中であつて、殊にいつの間にか雨が降り出して風さへ添うたので只物凄い。穴を出ると車窓のガラスを強く吹く風が霰のやうな雨をぶつ付ける。穴の中に這入ると轟然たる響が耳を聾するばかりである。車中の人は皆寢て居る。三藏は今獨り醒めて居る。俄に心細い。自分と反對のガラス窓に朧氣に自分の顏が映つてゐる。自分の形の左上部に赤いものが映つてゐる。これはランプの影だ　其赤い色は馬鹿に氣持の惡い陰氣な色だ。おまけに其れがちら／＼と動く。其動く度に自分の影法師もビリ／＼と震へるやうに動く。汽車が穴を出る。すさまじい音をしてガラス窓が一時に鳴る。又穴に這入る。陰に籠つた地獄の響が聞える。

目を瞑つてうつら／＼とし乍ら此晦冥の天地轟々たる夜陰の響と惡戰を續けてゐるやうに感ずる。目を開けると赤い火が窓の外で搖れてゐる。自分の影法師も其光りを受けて薄赤い色をして搖れてゐる。

夜明けに新橋へ着いた。箱根で夢みた晦冥の天地は消え失せて今はあかるい市街が目の前に現前したが、まだ雨は盛んに降つてゐる。どちら向いて行つたらよいのか方角がたゝぬ。兎に角小石川武島町三番地と車夫に命じて乘る。

四十七

「おい車屋。僕はまだ朝飯を食はぬのだから、饂飩屋があつたら教へて呉れぬか。」と幌の中で三藏は言つた。松山の車でも京都の車でも前掛の上から往來はよく見えるのであるが、東京の車は目より高く前掛が掛つてゐるので何物も見えぬ。「ようがす。」と車夫は景氣よく言つて、ごろごろと下したと思ふと「饂飩のかけを一つ。お早く願ひます。」と三藏の代りに言つてニヤリと笑ふ。饂飩屋の男も笑ふ。三藏の其傍に車夫は腰かけて雨に濡れた手で煙管を握つて煙を吹く。漸く饂飩を食ひ終つて又車に乘ると、車夫は又幌で包んでしまつてごろ／＼と挽く。電信柱が無暗に澤山ある處を通る。洋館造りの軒がちら／＼と見える、橋の上でも通るのかと思ふやうな音がする。向うから來る車の幌が一寸見えて行き過ぎる。ヤア、ヨイといふやうな掛聲が時々聞える。三藏が車中から見聞することは是位のものに過ぎぬ。凡そ一時間近くも乘つたらうと思ふ時車夫は梶棒を握つたまゝ立留まつて「武島町三番地といひましたね。」と聞く。「さうだよ。」と三藏は幌の中で返辭をする。

「一寸聞いて來ませう。三番地は廣いから何の邊だか。」と車を下したまゝで車夫は何處かへ行く。三藏は心細いやうな氣持がして待つて居ると暫くして車夫は歸つて來て「旦那困りましたぜ。其の五十嵐さんと仰しやる方は昨日築地の方へ引越されたさうです。どうしますそちらへ行きますか、それとも外に知合ひはないですか。」「さうか困つたなあ。」と三藏はつく／＼困る。雨はざあ／＼と降りしきる。水月も此間轉居したばかりでたしかには覺えないが、麹町區一番町の十二番地であつたやうに記憶してゐる。「其築地へ行くのと麹町區一番町へ行くのと此處からはどちらの方が近いかね。」と聞く。「左樣さね。」ともう梶棒を握り上げて突立つて居る車夫は「まア折角五十嵐さんを訪ねて來たのだから築地へ行つて見ますかね。二丁目の二十番地ださうですから。」と言つてもうごろ／＼と挽きかける。又一時間足らず乘つてゐると、車夫の足が緩やかになつて「二丁目二十番地、この邊の筈だが。」と其邊を二三度往來して探して「旦那愈〻困りましたねえ。五十嵐なんていふうちは一軒もありやしないですよ。仕方が無いから麹町の方へでも出掛けますかねえ。」とがつかりしたやうにいふ。三藏は困つた。麹町の方も番地がうろ覺えなので、京都などと違つて斯う判りにくいのでは險難だと思つて、北湖先生の監督して居られる寄宿舍に、李堂の紹介によつて俳交を訂してゐた鈴木蓬亭の居ることを思ひ出し、寄宿舍ならば判りやすくもあらうし又轉宅することもあるまい、そこに行かうと決心して、本郷西片町の育英會寄宿舍に行くことを命じた。車夫は「よいしよ。」と草臥れたらしい掛聲をかけて又ごろ／＼と挽き始めた。

四十八

漸く「育英會寄宿舍」とある大きな表札を見た時三藏は蘇生したやうに覺えた。車夫の請求する儘に六十錢を支拂うて蓬亭に面會する。丁度十風位の年輩で顏の四角な色の黑い、其癖眼の鯨のやうに小さい、いつも怒つたやうな口つきをしてものを言ふ。「何十風が轉居した？　そんなことは無い。現に昨日僕は逢つたがそんな話は無かつた。築地へ轉宅した？　そんな馬鹿なことがあるものか。假りに轉宅するとしても築地へ行く譯は無い。そいつは君を田舍者だと見込んで車屋が旨くやつたんだ。ハヽヽヽハ。幾ら取られた？　六十錢？　ハヽヽヽ。」と蓬亭は腹を抱へて笑ふ。見ると其鯨のやうな眼に涙を溜めて他愛もなく笑つて居る。「此寄宿舍に人を泊める譯には行かぬから己十風のうちへ連れて行つてやらう。まア湯にでも入つて來い。其棚の上に己の手拭と石鹼とがある、此處の表を右へ行つて左へ曲ると錢湯がある、わからないか。迷ひでもすると困るが氣の弱い奴だなあ。それぢや己一緒に行つてやらう。」と二人で錢湯に行く。三藏は體中に石鹼を塗つて眞白になつて洗ふ。蓬亭は力瘤の這入つた左の腕をウンと突き出して右の手に石のやうに固く丸めた手拭を握つてしつ／＼と洗つてゐたが、左の腕を洗つたばかりでドブンと湯槽の中につかつて、もう出て顏を拭く。錢湯から歸り路に寄宿舍の棟續きの北湖先生を二人で訪うたがお留守であつた。「草臥れたらう。君勝手にしてゐて呉れ。寢るなら其處の戸棚から蒲團を出して敷いて呉れ。書物なら其處に積み重ねてある。己は一寸仕事を片づけるから。」と言つて原稿紙を机の上に置いてせつせと書く。見るうちに一枚二枚とあまり消す字もなくすら／＼と筆が運べるらしい。三藏は羨ましさうにそれを見てゐたが少し眠くなる。積み重ねてある書物の中から小説史稿といふ一册を引拔いて讀む。果して最前の車夫が自分を騙したの

だとすると怪しからぬ奴だと思ふ。さう思ふとあの言葉附から眼つきなどに氣に食はぬところが澤山あつた。東京の土を踏むや否や忽ち車夫にやられたと思ふと情ないやうな心持もする。三藏はこんな事を考へながらうつら／＼として居ると「おい居眠りなんかするのなら蒲團を敷いて寢たらどうか。寢る程では無い？ それなら晝飯でも食つて十風のうちへ出かけようか。今日は日曜だからうちに居るだらう。」とそれから二人で食堂に行く。食堂といふのも古びた疊の敷いてある八疊二間に食卓が置いてあつて大きな飯櫃がどかんと据ゑてあつてめいめい肩から突込むやうにして御飯を掬ふのである。御飯が濟んで三藏は蓬亭の下駄を借りて、蓬亭は同宿生の一人の下駄を突掛けて十風を訪ふ。

四十九

小石川區武島町三番地五十嵐透といふ表札がちやんと出てゐる。「おい轉宅はしないよ。」と笑ひながら蓬亭はがらつと戸を開けて「居るかッ。」と大きな聲をする。返辭が無い。「留守かッ。」と一層聲を張り上げる。あわたゞしく襖が開いて細君がぬつと顏を出す。細君は昨夜十風と一緒に食ひ殘した薩摩芋を今御飯代りに食べて居つた所なので「居るかッ。」と蓬亭にどなられたので狼狽へて湯呑に湯をついで其れを飲みかけた時に「留守かッ。」と又大きな聲をされたので返辭をする間が無しに飛び出して來たのである。「おやッ。」とびつくりして「まあいつ入らしつたの。」と蓬亭には挨拶せずに大きな口を開けて三藏の方に笑顏を向ける。「留守ですか。」と蓬亭は澁面を作つて聞く。「はい一寸出掛けました。まアどうぞお上り下さいまし。先日は失禮致しました。あれからお腹工合がお惡かつたと聞きましたが、如何でいらつしやいます。」と膝を突いて改めて蓬亭に挨拶をする。「そいつは困つたなあ。何處へ行つたんです。」「すぐ御近所の矢張り商館に出てらつしやる方のお家へ上つたんですから、程なく歸りますでせう。まアお上りなすつて下さい。あの堀和さんもお上りなさい。」ともう立ち上つて座敷の方の襖を開けて床前に座蒲團を敷く。「それでは僕一寸此近處に用事があるから、其處へ行つて歸りに寄る。君は上つて待つとれ。」と命令するやうに言つて蓬亭は出て行く。

「本當に堀和さん暫くぶりね。あなた御飯すんで？ 本當。今度何しにいらしつたの？ まあさうなの。それぢや私の家に當分ゐるといゝわ。」と細君は煙草盆を持つて來たりお茶を酌んで來たり立つたり坐つたりして愛想をする。三藏は嬉しく思ふ。蓬亭に逢うた時も嬉しかつたがそれでも生面である。此處へ來て細君に逢つてからは俄に心が弛んで故郷へでも歸つたやうな氣持になつた。それから一番に車夫にやられた話をする。「前にわかつてゐたら迎へに行つて上げたのに。そりや本當に困つたでせうねえ。でもまあそれだけで濟んで好かつたわ。朦朧組といつてね吉原へ行く車屋なんかには手の附けられないのがありますつてね。」といつて細君は鬢に一寸手をやる。今迄氣が附かなかつたが袖口の少し切れてゐるのが目に留まる。氣をつけて見ると着物ばかりで無く障子の古びやうから中床の上の落寞とした模樣など餘程貧しげに見える。只髮だけは艷々と結つて舊の如く大きな丸髷に燃え立つやうな赤い手絡のかゝつてゐるのが他に反映して殊に目に立つ。それから「蓬亭さんは本當にむつツとした人ね。宅のもぶつきら棒だけど、蓬亭さんよりはあれでもまだ愛嬌があるわ。」と言つて笑ふ。其時表で「御免下さいな、姉さんおうち？」と言ふ若々しい女の聲がする。

五十

三藏との話を途中から端折つて「あゝうちよ。」と細君はいきなり腰を浮かせ「梅ちやんお這入りな。」と言つて暫く自分の聲が向うに屆いたかどうかを聞き定めるやうな眼附をする。その時「お客様なの？」と言ふ聲がもう襖の向うでして透間からちら〳〵と動くものが三藏の目に映る。三藏は見るとも無しに見ると、上になるほど開いてゐる透間の、足の方ははつきり判らぬが帶の赤いのが取手の邊にほのめいて、それからずうと上にきら〳〵と光つてゐる片方の眼が自分を見下してゐるのに氣がつく。「いゝわ。お這入りな。ねえ堀和さん、いゝわねえ。」と細君は言ふ。三藏は何とも辨へ兼ねたが「どうか。」と言つて頭を下げた。「本當にいゝの？」と何甘えたやうな聲が聞えて襖は漸く五分位の幅に開かれる。片方の眼であつたのが兩方の眼になつて、鼻と口とが其下に見えて、襦袢の襟の若々しく紫色なのと帶の赤いのとが殊に目に立つ。「厭な人ねえ。恥かしいの？」と細君は梅ちやんに言ひながら眼は三藏の顏を見て笑ふ。三藏は最前からまごついて居たのが此時赤面して「何ですか。」と言ふ。「あなたに言つたのぢや無いのよ。」と今度は三藏に言ひながら其癖梅ちやんと顏を見合せて笑ふ。梅ちやんも襖の陰で笑つたが「それでは御免なさいな。」と急に眞面目な顏をして座敷に這入つて襖に背中を磨り附けるやうにして坐る。此梅ちやんといふのは嘗て第二十二回に一寸記述したことがあつた廓名を梅代といつてゐた細君の妹女郎であつたが此頃自分より年下位の或洋服屋とかの若旦那に身受されて此の近傍に圍はれてゐるのである。「あのね堀和さん、此梅ちやんとはね、私が吉原にゐた時分姉妹のやうにしてゐたのですよ。此方はね、宅のお友達で京都からいらしつたのよ。」と細君は雙方を引合せて急須に湯を入れに立つ。梅ちやんは三藏を見ると額に汗をかいて固くなつてゐるので「此人はまだ初心だよ。」と思ひながら同じく默つて坐つてゐる。細君は最前食ひかけの燒芋を新聞紙に乘せたまま持つて來て「堀和さんも梅ちやんも食べないの？」といひながら一本長いのを三藏に突き出す。「梅ちやんお上りな。」と梅代の方へは新聞紙のまゝ一寸突きやつて、自分は兩肱を兩膝の上に突いて體を前にかゞめながら細君は皮をむく。「さう。おいしさうなお芋ね。あなた如何です。」と三藏の方に會釋して梅代は恐ろしいものをこは〴〵摘むやうな指つきをして、其癖中で上等らしいのを目早くえりわけて、それから細君と同樣に兩膝の上に兩肱を突いて前かがみになつて皮をむく。此時三藏は梅ちやんの横顏を初めてしみ〴〵と見る。鼻は細君より少し低いが口許は細君のと反對に可愛らしくちんまりして顏立ちは全體に惡くない。只皮膚の荒れてゐるのと生え際の薄いのとが目に立つて見にくい。それでも頭は細君同樣つや〳〵した丸髷に結つて矢張り赤い手絡を掛けてゐる。

五十一

暫く二人でお芋を食べ乍ら喋舌る。三藏にはわからぬ話が多い。默つて聞いてゐると欠眠くなる。十風は歸つて來ない。菁亭も來ない。便所に行く。掃除が屆かないのか汚ない事甚だしい。鼻緒の赤い草履が片方は戶に挾まつてゐて片方は壁の隅つこの方に裏返しになつてゐる。手水鉢には杓が無い。手拭は古びてゐる。いつ掃除したともわからぬ庭には隣の庭から流れて來る雨水が溜つてゐる。一時明るくなつてゐたと思つたに雨はじめ〳〵と降つてゐるのである。三藏は暫く椽に立つて鬱陶しい庭を眺める。もう春の末であるのに花らしいものは一つ

も庭に無い。若葉した錦木らしい木が板塀に壓しつけられるやうになつて茂つてゐる。縁日で買つて來たらしい鉢植が四つか五つあるがいづれも今は何も生えてゐないで雨水が溜つてゐる。此の鉢植をぢつと眺めてゐて三藏は淋しい心持になる。急に故郷が戀しいやうな考が頭の中を過る。其時座敷で大きな笑ひ聲が起る。取り亂したやうな締りの無いやうな笑ひ聲で、一遍靜まつたのが又抑へきれぬやうに起る。三藏は我に歸つて耳を欹てる。「本當に綺衣さんほどだらしのない人は無いわねえ。」と梅ちゃんが言ふ。「あの人でもこれがあるんだから不思議さ。」と細君が言ふ。「これ。」と言つた時手附か何かで符牒でもしたらしいが三藏にはわからなかつた。障子を開けて座敷に這入る。二女の眼が三藏に集まる。「堀和さん退屈でせうねえ。もう歸つて來さうなものだのに。」と細君は言ふ。「本當に靜かな方ねえ。」と梅代は三藏を目の前に置き乍らほめる。「まだ堀和さんは綺麗なものよ。ねえ。」と細君は妙な笑ひやうをして三藏の顏をちらと見て「まだ遊蕩に行つた事なんか一度も無いでせう。きつと。」と梅ちゃんの方を見て言ふ。「まあ。さうなの。」と梅代はさも〳〵驚いたやうな顏をして言つて「感心ねえ。」と感服する。「だけれど、其内覺えまさあねえ。」と細君は三藏の爲めに辯護するやうに言つて「ねえ梅代さん、堀和さんには錦絲さんがきつといゝわ。」といふ。「さうねえ。そりやあきつといゝわ。」と梅ちゃんは笑ひながら言ふ。細君はぱくりと大きな口を開けて笑ふ。三藏は又眞赤になる。何だか愚にされたやうな心持もする。が同時に又其の錦絲とかいふ女はどんな女であらうと想像して見る。尚續けて其女に就ての話が出るかと心待にしてゐるともう二人の間には外の話が持出されて又締りの無い聲をして笑ふ。梅ちゃんの膝もいつの間にか少し崩れて足の腹の汚ないのが三藏の方に突き出されて居る。

五十二

漸く十風が歸つて來て二女は臺所に退去する。蓬亭も歸る。三人で寢轉んで話す。「僕に少し餘裕があれば君一人位食はしてやることは何でも無いが、佐野の奴の幕下で十五圓の給料では遣り切れないからねえ。」と五十嵐は大きな聲で言つてカラ〳〵と笑ふ。相變らず目の中には悲痛な色が見える。「併し貴樣のは自業自得だ。うんと苦しむがいゝさ。」と蓬亭は底力のある聲で十風に言つてそれから三藏の方を振向き「五十嵐はこれでも未だ自分で苦しむだけの勇氣があるが、君は駄目だらう。食客になると言つた處でさう容易に食客になれるものでは無し、小說を書いて飯を食ふなどといふ事は思ひもよらぬ事だし、學校生活が厭なら圖書館にでも通つて少しは勉強する必要もあるし、旁々國許から續いて學資を送つて貰ふやうにしたらどうか。君からよく事情を打明けて國許へ相談してやれ。若し其れが出來ぬなら李堂か北湖先生位から照會して貰つてやらう。其れから其問題の落著する迄此處に厄介になつて居るがいゝ。其間の食料位己がどうかしてやる。」と蓬亭は無愛嬌な顏をしてゐ乍ら親切に言ふ。其れから其日は行春の競吟をやる。「貴樣此頃駄目ぢやないか。」と蓬亭は十風に言つて「山僧の方が大分旨いぞ。」と一々三藏の句を批評する。其夜は蓬亭の御馳走で牛肉を食つて落語を聽いて蓬亭は寄宿舍に歸り、十風と三藏とは十風の家に歸る。蓬亭と十風とは落語を聽き乍ら頻りに笑つて興に乘つて居つたが三藏は少しも面白くなかつた。「君にはまだ解るまい。落語の面白味が解るやうにならねば駄目だぞ。」と蓬亭は言つた。

それから三藏は十風の家に四五日ごろ〳〵し

て居た。國許から返事が來て「高等中學退學は今になつて考へても殘念至極だが最早致し方がない。此上は目的通り早く立派な小說を書いて文名を中央の文壇に馳せるやうにしろ、澤山の學資は出せぬが月々八圓宛は送る。足らぬ處は自分で補充の途を講じろ。」とあつた。それで下宿に居ては迚も足りぬから當分五十嵐の家に同居することになり、月々四圓宛食料を入れることにした。

李堂にも面會した。北湖先生も訪問した。水月にも逢つた。圖書館にも行つて見た。圖書館では何を讀んでいゝのか見當がつかなかつた、只手當り次第に文學書を一二冊借りて讀んで見た。淺草にも行き奧山の見世物をも觀た。見世物は皆面白いが中でも玉乘が一番面白いと思つた。

李堂の家で運座があつた。初めて運座といふものに列した。三藏は意外にも二番であつて成績がよかつた。又二句許り非常にいゝ句だといつて李堂に激賞された。三藏は運座といふものは面白いものだと思つた。

五十三

十風の暮し向きは餘程不如意に見える。或日細君が「堺和さん一寸十錢貸して下さいな、丁度今細かいのが無くつて困つてるのだが。十錢が無けりや二十錢でもいゝのよ。」と言つて借りに來た。其顏には穩かならぬ色が見えてゐた。其日も其翌日も返さなかつた。三四日經つてから漸く「堺和さん此間は難有う。つい〳〵忘れてゐて濟みませんでした。」と言つて光るものを無造作に三藏の机の上に置いた。其晚はいつに無い御馳走があつて十風は咳をし乍ら頻りに盃を重ねる。さうして三藏にも强ふる。それから「金が欲しいなあ。僕あ今は何にも欲しくない只金が欲しい。どうかして金儲けがし度いなあ。山僧君、君も文學なんか止せよ。はゝゝ。僕は豫言する。君でも僕位の年齡になつたら、屹度金が欲しくなるから。……只欲しくなるばかりぢやない金以外に欲しいものが無くなるから。……君には言はなかつたが此四五日なんか全く無一文だからやり切れないだらう。大概な物は曲げ込んでしまつてあるしねえ。今日やつと給料を前借りして來て一息を吐いた處なんだ。それも君、もう三月分許り前借してゐるんだからねえ。はゝゝゝ。」と十風は細君が三藏から二十錢借りた事は知らんで居るらしい。

それから暫く經つて十風と細君との間には雪駄に就て熱心なる談話が交換される。「あの佐野さんのは本當にいゝわ。あれになさいな。」「あれは高價さうだ。いくらするだらう。」「壹圓位のものだわ。」「壹圓？ そいつは驚くねえ。月給十五圓で壹圓の雪駄か。」「だけれどもあれ位のにして置けば三月や四月は穿けるわ。」「それもさうだねえ。」其夜夫婦連れで直ちに雪駄を買つて歸りランプの下で手から手に取り交されて「あの三圓のは本當によかつた。あれにし度かつたわねえ。堺和さんこれ幾らに見えます。」三藏は困つて「僕には判らんですねえ。」と言ふ。「まあ言つて御覽なさいな。」「一圓より上？ 下？」「判らんですねえ。」と三藏は更に標準が立たぬので正直なところを言ふ。「これでも壹圓二十錢よ。三圓のはそれはいゝですよ。佐野さんのはあれよりもまついわ。」十風は醉が醒めるに從つて雪駄についての興もさめて長い體を仰向けて寢て目を瞑つて居る。壹圓二十錢の雪駄を買つて得意な細君、みすぼらしい姿をして格別不平もいはぬ細君、毎日佐野の下に使はれて口を餬するだけの收入も無い境遇、此頃は小說は固より俳句すら作る勇氣のない墮落、肺病、貧、闇といふやうな感じが今身を襲ふ。ふと目を開けて見るとランプの下に壹

間二十錢の雪駄が輝いてゐる。自分の生命は固より一家の運命は今繫つて此雪駄にあるやうな心持がする。

それでも翌朝になると十風は其雪駄を穿いて出勤する。さうして何處やら得意な心が動く。細君は席に出入する時の十風の時めいた姿を此雪駄一つで取り返したやうな心持がする。それから長火鉢の前に獨り坐つて一時間も灰を掻きならし乍らぼかんとして考へるとも無く考へた末、又お芋でも買つて來て食べようかと思ふ。

五十四

三藏は又小說に筆を執りはじめた。が例によつて澁滯して筆は容易に進まぬ。「堀和さんお茶が這入つたからいらつしやいな。」と細君の聲がする。筆を投げ捨てて出掛ける。細君の話は大概極まつてゐる。朋輩女郎の話で無ければ「二食に鹿尾菜」といつたやうな所謂苦界の勤めの悲しい回想談である。三藏が或時思ひ切つて「一度は行つて見度いな。」と言ふと、細君は意を得たらしくぱくりと口を開けて笑つたが、其癖「およしなさいよう、熱くでもなつたら大變だわ。」と言つて不贊成を唱へた。「熱くさへならなけりやいゝでせう。」と三藏は言つたが細君は相變らず大きな口を開けて笑つてゐるばかりで何とも言はなかつた。

「十風君酒を飲まうか。」と三藏の方から言ひ出すことがある。「飲んでもいゝさ。」と十風は答へるが心の中で「もうあの酒屋も貸してはくれまい。」と考へる。「ぢや飲まう。僕が買つて來よう。奥さん德利を借して下さい。」と三藏は自分で出掛ける。それから二人で飲む。ビールの空瓶に一杯の酒を瞬く間に飲んでしまふ。「おい三河屋へ行つて當つて見ろ。」と少し醉うた元氣で十風は無理なことを言ふ。「迚も駄目ですよ。此間はお味噌まで斷られたのですもの。」「もう無くなつたのですか。金ならこゝに在る。奥さん御苦勞ですがそれではこれを持つて行つて下さい。」と三藏は財布を其儘細君に渡す。それから二人は文學上の氣焰を吐き合ふ。十風は嘗て書かうと思つた小說の趣向を話す。三藏は面白い面白いと頻りに歎美する。それから今度は自分の書かうと思ふ趣向を話す。十風はそれを振つてる、しつかりやり給へと勵ます。何でも文學界を我黨で占領する時が來ねば駄目だ、さうだとも互に調子づいて來る。二度目の酒も飲み盡した頃、「おい堀和を一度連れてつてやろか。」と十風は細君に言ふ。細君は「およしなさいよう。」と言つて笑ふ。初心な三藏が初めて女に接する時の容子が想像されて、見度いやうな心持がせぬでも無い。其上一度戰場を經て來た古兵としての十風も細君も此新兵に對して一種の誇を感ずるので連れて行つて見度い心持もする。けれども細君は十風の同伴することは斷じて承知が出來ぬ。「堀和さんをだしに使つて自分で遊ぶ積りだわ。」といふ考がすぐ其瞬間に起つて、細君は妙な眼附をして十風の顏を見る。此眼を見る時はいつもくすぐつたいやうな氣持がして十風は覺えずハッハッハと高笑ひをする。これがもう細君の妙な眼附が功を奏した證左になる。三藏は此間の錦絲とかいふ女郎の名まで思ひ出して竊に十風の談話の進行を待つて居るが、十風はもう鼾を掻いて寢て居る。三藏も亦醉に敵しかねて眠る。細君は皿も茶碗も汚れたまゝで臺所に置いて一摘みの漬菜を指で摘んで口へ入れ德利の底に殘つた冷たい酒を一息に飲む。十風は明方に苦しさうに咳く。

五十五

北湖先生と三藏とは或日何處かへ散步の歸り日本橋通二丁目の横町に這入つて、宇治の里御茶漬とある格子戸造りのうちに這入る。「あ

のうしんじよわん盛を一つ、それからゆばうまにを一つ……あのう。」と北湖先生は急がしげに財布を懐から出して其中から長い指で二十錢銀貨を一つ摘み出されたが三藏の方を見て「山僧君あなた酒はどうやらでやすな。少しはいけますか。」と調子の高い聲で早口にいはれる。三藏は今朝から北湖先生のコンパスの長い脚で大股に歩かるゝのについて歩いておまけにもう一時を過ぎてゐるし、願くは牛肉か何かのぢやあぢやあ煮え立つ強い匂をかぎ度いのであるが「私は此宇治の里が昔から好きでやしてな。どうでやす一つお附合ひなすつては。」といはれるので、どんなお茶漬か知らぬが仕方なしに辛抱する事と觀念して這入つたのである。扨てお誂へはと聞いて居るとしんじよとやらの椀盛にゆばの甘煮とやらでやれ／＼と思つて失望を重ねて居る矢先酒とあつたので俄に勇氣を恢復したやうに覺える。「少々は飲みます。」と景氣よく答へる。「其れでは姉さん御面倒さんやが、これでお酒を。」と二十錢銀貨をポンと臺の上に投げられる。十二三の小女が命を聞いて銀貨を握つて立つ。「これが山僧君面白いでやせう。あそこにも張出してある通り、酒に限つて前錢で無いといけぬ事になつてゐるのは。詰り此處は七錢でお茶漬が食べられる、其のお茶漬といふのが今持つて來るとすぐ解りますが一寸した煮〆と煮豆といり豆腐と漬物と飯とで、其上に椀盛だとか甘煮だとかいふものが三四品だけ別に出來る事になつてゐる、其れで飯を食つて歸るだけの料理店なので、酒は餘分の註文になる、其餘分の註文をするのには前錢で無けりやならぬ、あの今出した金で酒を買つて來てさうして飲ませて呉れといふ譯になるのでやすな。又此處に限つてあの酒は德利に入れずに屹度土瓶に入れて來る。其れも表向は何處までも酒とせず茶として取扱ふらしいです。面白いでやせう。」と北湖先生は頻りに興に乘つてゐられる。三藏は「さうですねえ。」とひもじいのを堪へて返答してゐる。其內膳が來る。成程土瓶が來る。蒟蒻や燒豆腐の煮〆を食つて土瓶の酒を飲む。俄に勇氣が出る。椀盛が來る。これが即ちしんじよなるものであらう。「何も淡白でいゝでやすな。」と言つて北湖先生は其のしんじよに大きな齒形を殘して盛んに召上る。「此淡白な物を食ふ所が日本人の特色で、脂こい物を好む西洋人はどうしても夷狄でやすな。どうでやす。あなた却々酒がいけますな。餘り澤山は勸めぬ方がえゝが、此殘つてゐるだけはお上りなさい。」と土瓶を三藏の膳の上へぽたんと置かれたかと思ふと「姉さん御飯を。」といはれる。御櫃が早速來る。北湖先生は杓子を突込んで一すくひすくつて召上る。「これは少し硬いよ。」と顔をしかめられたが瞬く間に其一杯は食べてしまはれて、二杯目をよそはれる時、杓子でぺた／＼と飯を叩いては担返し、担返しては叩かれる。「斯うすると少しは柔くなりますてや。」と言つて又二杯目を瞬く間に召し上る。

五十六

一鉢の牡丹が床に置いてある。一輪の深い濃い殷紅色の大きな花は既に半ば崩れて三四片鉢の上に零れ、鉢に餘つたのが二三片更に床の上に零れてゐる。雄蕊も亦半ば摧けて黃い花粉が散亂してゐる。「牡丹散つて打重なりぬ二三片、といふ蕪村の句は此所でやすな。」と北湖先生は楊枝で齒をつゝき乍らいはれる。三藏は少し葉蔭になつてゐる他の一輪をなつかしく見る。最前此處に來た時はまだ堅い蕾だと思つてゐたに今氣がついて見ると既に三分方開花してゐる。見る／＼うちに花瓣は脹れる。新らしい光澤のある大きな瓣が相擁いてゐたのが手をゆるめる。去年の冬より蓄めた力が此一時に發

現するやうに花は満身の力を籠めて開く。今まで葉蔭にあつた莟は程なく一本の枝頭に大きな黄金の盤と輝いて、其莟を隠してゐた二枚の葉は三枚の花瓣の爲めに忽ち壓伏される。「先生牡丹の莟が開きました。」と三藏が言ふ。手帳を出して今日散歩で得た句を推敲して居られた北湖先生は「はゝあ。」と手帳を開けたまゝ牡丹の方に目をやつて、「成程、これは美しいでやすな。」と一寸賞美されたがすぐ又手帳の方に見入らるゝ。三藏は尚熱心に牡丹を見る。開いた花瓣は空中に所謂蓮華を聳かして尚此莟の開くを見よと微動を示してゐる。腹が満ちた上に醉をも發して今元氣の充満した三藏は此牡丹の力に感嘆して見てゐる。盃の底にある一二滴のしたゝりを音をたてゝ啜る。小説が書き度いと思ふ。こゝまで考へて急に勇氣の頓挫を感ずる。半ば萎れた牡丹は又一瓣をほろりと零して十風の細君を思ふ。梅代を思ふ。まだ見ぬ錦絲を想ふ。妖艶の痴態を憚りも無く見せつけてゐる。十風の現在と自分の未來を想像して墮落を想ふ。見ると北湖先生は痩せた額をしかめて眉の邊に大きな皺を寄せ尚句の推敲に餘念もない。腹も充ちた上に醉をも發した三藏は少しうつとりとする。「小僧君の得意な句はどういふのでやすか。」といふ北湖先生の聲に呼び醒まされて手帳を取出して二三句の批評を乞ふ。「面白いでやすな。それは新らしい。」と頻りに讃められる。三藏は尚得意な句を手帳の中から探し出して讃辭を待つ。今度は又先生の句をも評する。議論をする。三藏の頭はいつの間にか俳句で占領されて歸路は北湖先生の宅に寄つて更に句作に耽る。

五十七

「堺和さんがねえ、昨日態〻十二錢返しに行つたんですつて。格子までゞサ。それから上りもしないで歸つて來たんですつて。全く初心ね。」と細君は笑ふ。十風はハヽヽヽと噴き出して「錦絲が立てかへたのか。」「さうなの。」「此頃頻りに行くぢやないか。」「何でももう三四度は行らしつたでせう。」「誰が伴れて行くのだらう。」「どうも一人らしいですよ。今日も通帳を借せといつてあの洋服を質屋に持つてらつしやいましたよ。洋服は澤山借しませんよ、木綿でも和服の方になさいといつたんですけれど和服ではもう入質る物が無いのですつて。あの調子だと此月の食料など怪しいものだわ。どうかしないと困るわ。」と細君は顔をしかめる。「ハヽヽヽ」と十風は三藏の初心なのを可笑しがつて又噴き出す。「あれから三四度も行つたのか。全體行つてどんなことをして居るだらう。」「さうねえ。」といつて細君は笑ひ乍ら考へる。自分の出て居た時分出逢つた事のある初心な客の事を思ひ出してゐるらしい。其細君の顔を見て居た十風はハヽヽヽと最前來のと違つて又異様の笑ひやうをする。細君は驚いて十風の顔を見る。ハヽヽヽと十風は更に異様な笑ひやうをする。細君はよく此笑ひの意味を知つてゐる。十風の心に多少嫉妬の心の動いた時必ず一二度斯ういふ笑ひやうをしてそれから何でも爲すこと言ふことが荒々しくなるのが常である。「何がそんなにをかしいの？」と細君の方でも聲を荒らげて先づ其鋒鋩を挫かうとする。暴風の前の靜かさのやうで氣持が惡い。「怪しいわ、思出し笑ひなんかして。」と細君は十風の手を握つて眼の色にものを言つて見せる。十風は大きな舌打を二度許りしてまだ默つて居る。「厭な人舌打なんかして。そんなに私が厭ならどうかするといゝわ。あの誰やら？　さう〳〵長春とかいふ女義太夫と取つ替へるといゝわ。くやしいッ。」と細君は何所までもかさにかゝつて出

る。其眼には十分の優しい光りを見せる。細君が廓に居た時の事を回想する素振りが見えると十風の心にはすぐ不安の念が起る。それには自分の競爭者であつた古宮に對する嫉妬心も手傳ふ。又今の境遇の貧しさから起る僻みも交る。細君はこれに對する呼吸をよく心得て居る。「ねえ。長春から又手紙でもよこしたの？商館の方へでも逢ひに來たの？こりやをかしい、默つて居るのはをかしい。おや笑つたのは猶をかしい。さうに違ひ無い。くやしいツ。」と言つてくすぐる。十風の不安の念はいつの間にか頭の中を過ぎ去つてしまつて遂に又こらへ切れずにハヽヽヽと笑ふ。もうからりと晴れたいつもの笑ひやうである。程なく手拭と石鹼とを提げて湯に出掛ける。あとで細君は長火鉢の前に膝を崩して坐つて眉根に皺を寄せる。いつまで貧乏をして居るのだらうと思ふ。だつて今更どうすることも出來ないわと思ふ。どうかなるやうになるのさといふいつもの考に到著する。蚤がむづ／＼と這ふ。細君は指尖に唾をつけて其痒い處を探る。

五十八

其夜十一時過ぎ若竹が終ねてぞろ／＼と人の出る中に十風夫婦と三藏とが居る。「堺和さん行き度くは無いの？」と三丁目の角を曲る時に細君は笑ひ乍らいふ。いゝ、いづくら横町を通る頃はまだ大勢の人であつたが砲兵工廠の長い塀に添うて富坂を上る頃には淋しくなる。「山僧君あまり熱心になつちやいけないよ。君のやうに眞面目なのは一番險呑だからなあ。第一君、女郎が立替へたりする事は極めて普通の事なんだ。それも澤山なら兎も角、十二錢許り立替へて貰つたつてそれを感謝して態々返しに行くなんて餘り初心過ぎるぢやないか。ハヽヽヽ。」と十風は笑ふ。三藏は默つて返辭をせずに歩く。暫く歩くにつれて先刻迄自分の頭を支配してゐた小光の事が又思ひ出される。竹本小光といふのは今日の眞打であつた。十風がよく賞めてゐた長春といふのは切前を語つた。其長春が高座に上つた時十風と細君との無言の間の暗闘が餘程をかしかつた。中入になつてから「どこがいいの。」と細君は冷淡に言つた。「ハヽヽヽ。」と十風は先づ笑つて「第一あの眼附がいゝさ。」と言つた。「さう。」と細君は餘所々々しく返辭をして「堺和さんあなたどう、私あんな眼附大嫌ひだわ。助倍つたらしい。」と厭さうな顏をして言つた。客の多くは長春を聽きに來たものと見えてぞろ／＼と歸つた。十風も歸らうと言ふのを細君は承知しない。「私は長春なんか聽きに來たのではないわ、私は小光を聽きに來たのだわ。」と言つて動かない。愈々切になつて小光が出た。三藏は初めは何とも思つてゐなかつたが、聽くに從つて節回しが旨いと思ふ。又聲が本當に修練した聲だと思ふ。頗る感服する。長春などの比では無い。それに拘らず客の半分程はもう歸つてしまつた。大いに同情の念に堪へん。年齡はもう二十四五でもあらう。それとも七八かも知れぬ。まだ十七八の長春なんかに比べると稍々姥櫻の感にあるがそれでも少し苦走つた顏立がまだ若々しく美しい。下足を受取り乍らも恍惚として心は小光の邊に飛ぶといつたやうな心持でぼんやりして表に出た。先刻細君が「堺和さん行き度くないの？」と言つたのもあまり強く頭には響かなかつた。

五十九

十風に北海道の支店の方へ行つて見てはどうかといふ話が佐野からあつた。「東京の本店に居てはとても當分の處俸給がむづかしい。北海道で辛抱する覺悟なら七圓增して二十二圓は出せる。其れも永くとは言はない先づ二三年だ

ね。司にもよく因果も含めて一つ奮發しろよ。」と佐野は言つた。十風の頭には此頃もう金より外に問題は無い。「己は行き度いが兎も角歸つて相談せう。」と言つて歸つて來た。細君は「北海道？」と先づ驚いた。「札幌？　函館？」と三藏は傍から聞いた。「函館さ。」と十風は答へて、且薫漬物で茶漬を搔込んで、質の出し入れに許り苦心してゐるやうでは東京に居ようが札幌に居ようがたいした相違がある譯では無い。七圓でも給料が上つて少しでも生活難が輕くなれば、其れが何よりだと心で考へる。「物價は高いとはいふものの東京程ではないさうだし、少しは氣樂だらうと思ふ。どうだ行くと極めちやあ。」「さうねえ。」と細君は鼻の穴に白い人さし指を入れたまゝ親指で顋を支へて考へる。「二十二圓貰へりや少しは樂は樂ね。でも冬は隨分寒いんでせう。」「そりや寒いに極まつてるさ。」「行くとなれば何時立つんです。」「何でも急に行つてくれとの事だ。店員が少ない上に急に缺員が出來たのださうだから。」「さう。」と細君の顏色は冴えない。何だか一座が白けて陰鬱な氣が室内に籠る。三藏も默つて考へてゐる。細君の顏を見る。細君の顏の何處やらに小光に肖た所がある。目許でも無い口許でも無い。さうだ生え際だ。揉上げの邊から生え際がよく肖てゐる。あれから三晩續けて行つて愈々其の技倆に感服する。三藏はぢつと細君の額に見入つてゐる。細君の顏色は益々冴えない。十風の癇癪は遂に破裂する。「貴樣ッ厭なのか。」細君は默つてゐる。「己が生活に苦しんでゐる事が貴樣には解らんのかッ。怪しからん奴だ。」段々急込んで來てコン〳〵と咳をする。目に涙が一杯たまる。傍らにあつた茶碗をはつしとぶつつける。細君の柔かい肩に當つて音を發する。細君は怨めしさうに十風の顏を見る。目には光りがある。さうして言葉は落著いてゐる。「行きますわ。何處へでも行きますわ。」さういつて耐へ切れずに泣く。「何にもあなた一人苦しんでいらつしやるのではないぢやありませんか。」此言葉は十風の胸を貫く。倚風丈高になつてゐる十風の眼には涙が愈々漲つて來る。

六十

十風夫婦は愈々明日立つといふ事になつて、其前の日梅代が來た。旦那について此間暫く旅行してゐたとかで手土産をも持つて來た。「北海道つてあの金龍さんのとこなんでせう。」と梅代は十風に聞く。「金龍？　さう〳〵あれは北海道の女だつたね。」と十風は餘所々々しく返辭をして手紙を書いて居る。其れは李堂に宛ててだ。此頃李堂と十風との間は自ら疎遠になつてゐる。李堂は十風の墮落を歎息してどうかして其れを激勵せうとして極端な忠告をも試みた。十風は其手紙を引裂いて腹を立てた事もあつたが二三日して感謝の手紙を出した。けれども自然兩者の間に隔てが出來る。此頃は漸く三藏によつて互の消息が判る位で、殆ど二人の間の交通は絕えてゐた。三藏は其れを心配してゐるがどうも致し方が無かつた。李堂は又三藏が十風の轍を踏まなければよいがと竊に憂慮してゐたが、只三藏は十風に反し日に增し俳句が上手になるので先づ〳〵安心してゐた。肝腎の小說の方は書くとか書いてゐるとか言つてゐる許りで少しも進行せぬらしいが、それでも俳句に十分の進境が見えるのは頼母しいと思つてゐた。

扨て十風は今度出發前一度李堂に逢ひ度いと思つたが、どうも氣分が進まぬので手紙を送つて別意を敍することにした。李堂に對して手紙を認める時には、流石に人よりも天才を以て許され自分も亦竊に任じて居つた當年の意氣が呼び戾さるゝ。一婦人に對する癡情から今自

分は北海道に迄落ちて行かねばならぬのかと思ふと情無いやうな腹立たしいやうな心持もする。梅代は其れに頓著なしに又話し掛ける。「それつてばねえ五十嵐さん、此間池永さんに逢つてよ。それ金龍さんが初會惚をして大騷ぎをした。濱町邊の若旦那とかいつた二十四五許りの……」五十嵐が默つてゐるので、「姉さんあなた知つてるでせうあの池永さんサ。」「アヽアヽ。」「此間汽車に乘り合はしてね。向うも慥か氣がついたらしかつたけれど、これが。」と小指を出して「居たので濟ましてるのサ。本當にをかしかつたわ。だけれど金龍さんが騷いだのも無理は無いわ、全く意氣ね。」「おや／＼八ちやんも岡惚？」「アヽ。」「やり切れ無いねえ。」ハヽヽヽと二人寄るといつもの通り底のぬけたやうな笑ひやうをする。十風は厭な顏をして手紙の封をする。「北海道の方はまだ寒いだらう。胴著が一枚欲しいがあれだけ出して行からか。」と十風は細君の顏を見る。「外のものと一緒に這入つてるのだからあれだけ出すにしても利子が大變だわ。」と細君は十風の顏を見る。三藏は何だか足らぬ勝ちの旅支度を氣の毒に思うてゐたので「胴著なら僕のをやらう。」と言つてガランとして行李の中に轉がるやうに這入つてゐたのを出して來る。見ると絹ではあるが餘程古びたもので襟垢のしたゝかに附いてゐるのが目に立つ。細君は「さうだけれど[illegible]さんも又要る事があるでせう。そんなにして戴かなくつてもいゝのよ。ねえ貴方。」と言つて目くばせをする。「さうとも。有難うだが仕舞つて置いてくれ給へ。」と十風も襟垢には少し閉口する。「なに僕は要らないのだ。それでも無いよりはいゝだらう。」と三藏は眞面目だ。「だけれど……」と細君は再び辭退せうとするのを「全く要らないのです。お持ち下さい。」と三藏は飽迄も勸める。「さう。では……」と細君は不精無性に受取つて「戴いときませうかねえ。」と情なさうに又襟垢を見る。「全く御親切だわねえ。」と最前から容子を見てゐた梅代はをかしいのをこらへてばつを合はす。

六十一

十風夫婦は愈々北海道に行つた。三藏は其日新聞や書物をつめた行李を車に乘せて、自分はランプを提げて車のあとについて本郷臺町の下宿に移つた。下宿屋は五室許りほか無い。三藏の部屋は二階の四疊半で、天井が低い上に三尺の中押入が不恰好に突き出てゐる。障子を開けると桐の葉がかぶさりかゝるやうに茂つてゐる。三藏は其暗い障子に向つて机を据ゑて頬杖に突いて考へる。十風のうちに居た時は四圓の食料を拂つたり拂はなかつたりしてゐながら國から送つて貰ふ八圓の金では足らぬので著書は大概曲げ込んでしまつた。此處の下宿料は四圓五十錢其上炭油茶等皆別に支拂はねばならぬとなると八圓では迚もやり切れさうに無い。それで別に收入の途があるでも無し節約するより外に仕方が無い。又いつまでも斯んなにぐづ／＼して日を暮らしてゐるわけにも行かぬから早く一篇を公にし度い。今度をいゝ機會にして一勉強せうと決心して、毎日五時間は必ず讀書若くは創作を試むることとして三四日は一途に勉強した。尤も筆を取ると例によつて澁る。まゝよと書物を開いて讀む。只讀む。手當り次第に讀む。四五日目に少し厭になる。俳句を作る。面白い。近作百句を李堂に送つて評を乞ふ。李堂は大いに其れを激賞して來る。圖に乘つて又作る。又褒められる。興の無い讀書に耽るよりも遙に面白い。育英會寄宿舍も近くなつたので北湖先生、逢亭をも訪問する。逢亭は新聞社に通勤して歸つて來ると一葉集を讀んでゐる。芭蕉の戀を研究して見るのだ

といつて「紅梅や見ぬ戀つくる玉簾」などといふ戀句に就ては格別の見解を持つてゐる。三藏は大いに感心して自分も一つ其角の句でも研究して見ようと思ひ立つて李堂から其角や花摘などを借りて歸つて讀んで見たが何處から歩を進めてよいか見當がつかぬ。夕方になると何となく淋しくなる。何處かへ出掛け度い。李堂を訪はうか。育英會へ出掛けうか。久振りに水月に手紙を書かうか。どれもあまり氣乘りがせぬ。考が錦絲に及ぶ。行き度い。併し金が無い。念の爲め蟇口を開けて見る。二十錢ある。二十錢では錦絲は斷念せねばならぬ。第二に小光！さうだ、神田の小川亭に掛つてゐる。彼女を聽きに行かう。いま點けたばかりのラムプをもう吹き消して出掛ける。

中入がすんで例の如く御簾が上ると小光が見臺の上に美しい髷を見せて辭儀をしてゐる。「語ります太夫竹本小光、愈々辨慶上使の段東西東ザーイ。」と拍子木がなる迄、小光は見臺の横から偸み見をするやうにぢつと客の方を見る。これは小光の癖であるが、今日はどういふ譯だかその視線がぢつと三藏の方に向いてゐて動かない。三藏はまぶしいやうな氣持がする。それから小光は顏を上げて三味線の調子を合せながらも何時々三藏の方に流眄をくれる、其夜は醉うたやうな心持で歸つて來る。翌日又出掛ける。昨夜と同じ處に坐つてゐると果して又鋭い秋波をあびせかけられる。

六十二

一週間許り三藏は一日も缺かさず小川亭へ通つた。毎日同じ處に坐つて同じやうに秋波を浴せかけられてそれで滿足して歸つて來た。今夜は止めうと考へることもあるが晩飯が濟んでラムプに火を點す頃になると淋しくなる。行き度い。矢張り大勢の人のぞは〳〵と往來してゐる小川町邊が戀しい。「らつしや――い。」と言ふ力強い下足番の聲が聞き度い。御簾の奥に灯つてゐる灯火がなつかしい。御簾が上つた瞬間にさつとなげかけられる小光の眼の光り！

ラムプの火を小さくする。どうせうかと今一度躊躇する。終に思ひ切つてフッと吹き消す。危げな段梯子をひよく降りる。「又お出掛け？」と女將さんが言ふのを聞き流してついと出る。お茶の水橋を渡つて小川町に突進する。それから本郷の通りをぐん〳〵と歩く。

三藏は或時蓬亭に熱心に小光を紹介した。是非一度聽きに行き給へといつた。蓬亭は一馬鹿な。高が女義太夫だ。あんな奴は君藝者や娼妓も同じ者だ。關係なんかしてはいかんぞ。」と大きな聲で目を三角にして叱りつけた。さうしてハヽヽヽと噴き出すやうに笑つて「君のやうな初心な男は險難だぜ、自分で注意しないと。小説家になるには女に近寄る必要もあらうが、少し横著な心を持たんといかん。女義太夫を藝術家だなぞと考へてゐるやうでは險難でしやうが無い。ハヽヽヽ。」と又大きな聲をして笑うた。それから「僕は三四年前大阪に居た頃親戚の藝者屋の家にゐてあゝいふものの内幕はよく知つてゐる。其爲め道樂をせうといふ考は餘り無いし、した處で別にたいした刺戟も受けない。君等でも内部の事情を知るのはよいが溺れてはいかんぞ。」と蓬亭は荒々しい言葉で而もいつもの通り親切な忠告をした。

六十三

小光は小川亭が濟んで吹拔亭へ掛つた。三藏は近くなつたので得意になつて行つた。其次は本所の廣瀬亭といふのへ掛つた。本所といふ處へはまだ一度も足を踏み入れたことが無かつた。町名も人に聞いて出掛けた。此邊と思ふ處を探し廻つたが寄席らしいものが無い。交番

で聞く。「此邊に廣瀨亭といふ寄席はありませんか。」巡査は怪し氣な目をして三藏を見下してゐたが「ある。」と言つたばかりで口を閉ぢて默つてゐる。「どう行つたらいゝですか。」と聞く。「ウ、廣瀨亭か。」と言つて又一寸默つてゐたが「この先の四ツ角を右へ曲つて行くとすぐ右側。」と餘所見をし乍ら低い聲で言ふ。大分薄暗くなつた町を心細く思ひ乍ら行くと四ツ角に出る。右へ曲ると角い行燈が見える。行つて見ると果して竹本小光と大きな字で書いてある。這入る。若竹や小川亭や吹拔などは學生が多かつたが此處は職人や老人などが多い。遙々本郷西片町から出掛けて來た書生さんは誰の目にも目立つと見えてじろ／＼と人が見る。三藏は帽子を目深に被つて立て膝を兩手でだいて小さくなつて坐る。今迄の寄席は皆廣かつたのでいつも三藏の坐る處から高座までは大分距離があつたが、此の廣瀨亭は狹い。後ろの方に坐つても高座はすぐ鼻先にある。高座からもすぐ目につくと見えて皆三藏を見る。小光の弟子で光花といふ切前の前を語つた子供上りの丸つぽちやなどはぢつと三藏の方を見て罪の無い笑顏すら見せた。「あの人は何處へでも來るのねえ。」と若し樂屋で皆が自分を評し合つてでもゐはしまいかと考へて三藏は極まりが惡かつた。中入に便所へ立つ。此處の便所の位置は樂屋の横手に在る。三藏は何心なくつッと這入らうとするとパタ／＼と小刻みの草履の音が聞えて內から戶が開く。見ると小光だ。白粉でよごれた平常衣の襟をくつろげて今化粧を終つたらしい首を突出してゐる妖艶な姿に見とれる間も無く「お待遠樣。」とろく／＼三藏の顏は見ず嗄れたやうな聲で挨拶し乍らついと擦れ違つた。

六十四

李堂を中心にしてゐる俳諧黨の活動は漸次步を進めて來た。李堂は今一年といふ處で大學を止めて新聞記者となつた。既に其前から其新聞紙上で俳話を公にして元祿の俳句の復興を唱道してゐたのであるが、新聞記者となつてからは愈々其旗幟を明かにして盛んに論陣を張つた。從つて三藏も時々俳話や俳句入りの紀行文のやうなものを其新聞に載せる事もあるが、夜になると相變らずランプを消しては出掛ける。廣瀨亭から芝の琴平亭、四谷の喜よし亭、牛込の和良店、淺草の東橋亭、麹町の青柳亭、小石川の初音亭と東京市中の主な寄席は大概知らぬ處が無い位に小光の跡を追うて出掛ける。尤も日を經るに從つて藝術家小光の神聖も段々疑はれて來る。印袢纏を着た男が大きな鮨皿を景氣よく肩の上に支へて樂屋に這入るのを見たことも五度や六度では無い。或時側の內弟子の光花が自分の坐つてゐる席の後ろの障子の透間から「旦那只今は有難う。」といふので驚いて振返ると、何の事だ自分の横に坐つてゐる角帶を締めた若旦那らしいのが鷹揚に振返つて點頭く。すると光花が「おッ師匠さんが一寸樂屋まで來て下さいましつて。……えゝすぐなのよ。」と言ふ。すぐ行くかと思つてゐると態と十分も經つてから悠々として出掛けて行つたのなぞを見た事もあつた。其後よく氣をつけて見ると偶然にも自分の坐りなれた處はさういふ馴染客が坐る處らしく、自分獨りの爲めの秋波かと思つたのが何ぞ計らん此邊一帶のものの上に公平にあびせかけらるゝものならんとは。三藏は少なからず氣色を損じた。さうかといつて其日から斷然足を運ばぬことに極めたといふわけでも無い。相變らずランプを消しては出掛ける。

六十五

二十一歲の暮には流石に感慨が多かつた。三藏は處女作をどうする？と自分で自分を責め

たが何程を取る勇氣が無かつた。二十二歳の新年は水臭いやうな下宿屋の酒をよく飲んだ。俳句は作ることは作つたが去年程は作らなかつた。ラムプを消して出掛けることは依然として變らなかつた。

或晩蕎麥屋で二合餘りの酒を飲んで思ひ切つて早く出掛けた。けふからは茅場町の宮松亭にかゝつてゐるのである。まだ暮れ切らぬので閾の上に燈が高く點つてあるのが目につくばかりで下足は一足も掛つてをらぬ。三藏は躊躇した。と同時にすぐ此寄席の隣に草津といふ料理屋のあることを思ひ出した。此瞬間に三藏の頭には大膽な考が閃く。別に考慮する迄も無く寄席の前を通り過ぎた足がすぐ草津の門を這入る。「らつしやーーい。」といふ下足の男の勇ましい聲が打水のしてある玄關横から起ると、一人の女中がちらと姿を見せて「おやお客樣。」と獨り言を言つて「どうか此方へ。」と澄した顏をして先きに立つ。

廊下傳ひに行つて段梯子を登る時三藏は氣がついて內懷に手を入れて見る。ある〳〵。銀貨や紙幣で脹れた蟇口がちやんとある。三藏は育英會寄宿舍の賄方と心易くなつて其周旋で或金貸しから今朝十圓の金を借りたのである。

三藏は初めて料理屋に登る。同級生の會合などで一二度行つたことはあつたが一人で登つたのは初めてである。女中はまだ十八九の一寸垢拔けた女であつたが相變らず澄した顏をしてゐて口數を利かぬ。「おあつらへは？」と料理札を突きつけたまゝで冷淡に餘所見をして居る。三藏は困つたなあと思ふ。

六十六

程なくあつらへた肴が二三品載せられて膳が運ばれる。女中は默つたまゝで酌をする。三藏はつゞけ樣にひつかける。一向醉はない。女中はいつまでも默つてゐる。だまつて銚子を取上げて酌をして其まゝ立上つてつんとして行つてしまつた。

大いに悄げて居る處へ、ばた〳〵と足音がして障子ががらりと開いたと思ふと「おや。お德さんは居ないのですか。」と景氣のいゝ聲がする。見ると五十餘りの小さな銀杏返を結つてゐる女中で、見苦しい顏ではあるが前の女中とは全く違つて生き〳〵としてゐて愛嬌があるので三藏は覺えず釣り込まれて「さつきから獨りぼつちサ。」「まアさうですか。それは濟みませんでしたねえ。」といひ乍ら自分で這入つて來て、一寸襟をいなし乍ら銚子を取つて「お一つ。」と酌をする。三藏は受けて「あの女中お德さんといふのかい。」と聞く。「さうですよ、いゝ女でせう。」「さうねえ。」「まあ何處へ行つたんでせう。」「すぐお德さんをよこしますよ。」といひ乍ら立上る。三藏は慌てて留めて「あゝう一寸君に聞いて見たい事があるのだが、……君の名は何といふの？」「厭ですよ、どんな大事件號外附錄の用事かと思つたら、私の名？……聞いてびつくらしちやいけませんよ。これでもお若よ。ハヽヽヽヽ。」と又立上らうとする。「一寸待つてくれ給へ。實は其の、隣の寄席にかゝつてゐる女義太夫ねえ。」と三藏はお若の顏を見る。お若は腰を下して呑込顏に「はあ〳〵。誰かお馴染があるの？　呼びにやりませうか。」「實は其の、馴染といふわけでも無いのだが突然呼んでも來るものだらうか。」と三藏はきく。「來ますともさ。」とお若は無造作に言つて「誰です。」ときく。「小光と。」「小光ですか。」とお若は一寸考へて、「兎も角言つてやつて見ませう。」と言ふ。「小光は此處へ來た事があるかね。」と三藏はきく。「えゝ〳〵よくいらつしやいますよ。大人しいお師匠さんですよ。」と言ふ。

六十七

「本當にお氣の毒樣ね。」とお若は三藏の顏を一寸見た目を外らして銚子を取上げ「明晩もう一度いらしつて下さいな。明晩ならきつと來られると申しますのですから。」と酌をする。三藏は「あゝ明日又乾度來るよ。どうだ一杯やり給へ。」と盃をさす。「さう。有難う。」とお若は一寸襟をいなし乍ら受取つて「全く當てにしてゐた人の來ないのはくやしいものね。私でも覺えがあるわ。ハヽヽ。お德さんお銚子のお代り。」最前からお德も來てはゐるのだが三藏がお若一人を相手にしてゐるので、詰らなさうにお若の後ろに坐つてゐたのが空いた銚子を持つて立上る。お若はお德の後ろを見送つて「あなた本當にまだ小光さんに逢つた事無いのですか。さうですか。それでは他の方には？英之助さんにも？小米さんにも？それつてば小米さんはもうお腹がこれだつて本當なのでせうか。」と兩手で膝を抱へるやうにして見せて「はあ、さうなの。相手は御醫者樣だともいふし學生の方だともいふし、どうせさうはつきりわかりつこは無いでせうよ。何にせよ隨分早いのね。まだ十八にもなりますまいにね。…小光さん？小光さんは堅氣でせう。えゝ〳〵あまり厭な噂は聞きませんよ。」お若は盃をかへして、顏をしかめながら一寸櫛で頭を掻いて「そりあねえ、どうしても商賣が商賣ですから。いくら堅氣だといつたつてさうお邸のお孃樣のやうには行きませんや。…」お德は新らしい銚子を持つて來てお若に何か耳こすりをする。「ああさう。」とお若は態と大きな返辭をして「どうしませうねえ旦那、今下にお座敷のあいた藝妓が一人居りますんですつて。其れでも呼びませうか。」と言ふ。三藏は大いに困る。どう返辭をしたものか無愛想なお德の顏と汚ないお若の顏とを見較べてゐた時廊下に急がしい足音が聞えたと思ふと他の女中の聲で「お德さん、お師匠さんがお見えになりましたよ。」といふ。三藏もお若もお德も思ひがけが無いので驚いて振り返ると「御免下さい。」と靜かに障子を開けて現はれたのは小光である。「おやまあお師匠さんですか。」とお若は立上つて「よくいらしつて下さいましたのね。どうかこちらへ。」とさつきから敷いたまゝで空しく人待顏であつた座蒲團を三藏の傍に敷く。「まあ旦那でいらしつたんですか。どなたかと思ひましてね。お斷り申しましたですけれど何だか氣になりまして、一寸御挨拶だけに。どうも姉さん有難う。姉さん有難う。」と二人に挨拶してお座に坐つたまゝ一寸こぼれた鬢を掻き上げる。

六十八

小光は總髮の銀杏返しに結つてゐるのが似つぼくて、薄つすらと白いものゝついてゐる顏の廣々としてゐるのも美しい。三藏はランプを隔ててちら〳〵と見る。これは高座では判らなかつたが薄い雀斑がある。顏といへば顏だがそれも其上に無造作に薄化粧をしてゐるのが却つて美しくも見える。「旦那お盃をお師匠さんへ。まあお師匠さん其處では困ります。お傍へ行つて上げて下さいな。それは大變なお待兼ねなんでしてね。ホヽヽヽ。」とお若は今までと違つて少し品をして笑ふ。三藏は此のお若の言葉を聞いて小光はどんな顏をしてゐるであらうかと額に其方を見ると少し潤ひのある眼に優しい光りを湛へてぢつと自分の顏を見入つて居た小光の視線とはたと出逢つた。三藏は盃をさす。お若は酌をし乍ら「ねえ、どうか、いえそこでは困ります。はあお邪魔ですわ。ホヽヽ。」と笑つて「私の傍に居て下すつては全く邪魔ですわ。」と繰返す。「まあ隨分邪險な姉さんね。」と

小光も笑ひながら立上つて「ぢやお邪魔にしない方のお傍に參りませうね。」となれ〳〵しく三藏の傍に少し蒲團をよけて坐る。小光は盃を兩手に持ちながら「旦那今晩聽きに來て下さいましね。」とぢつと三藏の顏を見て言ふ。「あゝ行くよ。今晩は何やらだつたのね。」「酒屋ですわ。」「酒屋か、酒屋は僕大好きだ。」「さう。」と小光は嬉しさうに言つて盃をかへす。三藏は受取つて「其處へ遊びに行つてもいゝの。」と又出し拔けに聞く。「はあ、どうか。」と小光は輕く點頭く。

六十九

「御免下さい。」といふ聲がして障子が開いたので三藏は我に歸つて其方を見ると、ぱつちらした眼の側の丸つぽちやの光花で、「おツ師匠さん一寸……。」といつて小光の顏色を伺つて居る。「何ですね。お行儀の惡い。」と小光はたしなめるやうに言つて口許には微笑を湛へてゐる。光花は「旦那暫く。」とろくに三藏の顏も見ずになれ〳〵しく挨拶して「姉さん今晩は。」と二人の女中に會釋をする。「さあこちらへお這入りなさい。本當に可愛いのね。」とお若とお德が言ふ。「こちらへ這入り給へ。」と三藏も言ひながら何をしに來たのかといぶかしさうに其顏を見つめる。「もう時間なの？」と小光は口輕く聞く。「はあ。」と光花は簡單に答へる。「まアお迎へにいらしつたの。」とお若は言つて、光花の少し首を斜に、肩から曲げるやうにして點頭くのを見て「さうですか。御苦勞樣！ 本當にだんだんいゝ子におなりですこと。お樂しみですわねえお師匠さん。」と小光の顏を見る。

小光と光花とはお若とお德とに送られて賑やかに歸る。三藏は獨り茫然と後に取り殘されて冷えた盃の酒をぐいと飮む。

お德ばかりが歸つて來て、「お師匠さんの御馳走は折に詰めて持たしてやりませうね。」と例の通り不景氣に言ふ。

七十

其夜三藏は既に小光が高座に現れてから後宮松に行つた。小光はテンテン〳〵と彈き乍ら今這入つて來た三藏の方をぢつと見る。それから間も無く、今頃は半七さん、と目を瞑つてさはりを語り出す。一時三藏が法外遲く來たのを訝し氣に見て居つた聽衆も今は皆高座の方を見上げて熱心に聽く。三藏は殆ど空席の無い片隅に小さくなつて坐る。いつも聽き惚れる嬌音は相變らず身に入むやうに聞えるが、其上今宵は一種不思議な心持がする。今まではいつも感服して聽き乍らも心の底に何やら不滿足な塊があつた。其れが不思議な事には今は全く溶けて無い。それから又聽衆の中の氣障な奴の行爲が今宵に限つて少しも癪に障らぬのが不思議だ。

ざら〳〵と御簾が下りた時三藏は我に歸つて群衆と共に立上つた。下宿に歸つて蒲團の中に這入るとまだ醉うてゐる。ぐつすり眠る。

翌朝下宿の婆さんに呼び起されて驚いて眼を覺すと奧平さんといふ方がいらしつたといふ。北湖先生らしい。三藏ははつとする。實は北湖先生に十圓の借金がある。それも先生の手許が有福であるわけでは無く色々工面をして融通をして貰つた金で是非今日中に返金せねばならぬ義理合になつてゐる。昨日育英會寄宿舍の賄方の周旋で或金貸から借りた十圓の金、實はこれは北湖先生に返金する積りで調達したのであつた。併し其金はもう四圓餘りを餘すのみである。三藏は宿醉の痛い頭を抱へて飛び起きる。

「これは安眠を妨害しましたな。」といひながら北湖先生は狹い四疊半の這入口で帽子を脱がれ

る。「實は昨夜地方の俳人の一水が來て、もう明日は歸るといふので一會催してやらうかと思つたので、今朝一寸李堂の家へ行つて今歸りがけでやすてい。李堂も隨分寢坊ぢやが、山僧君も却々お負けんよ。」と入口に立つたまゝで高い聲をせられる。三藏は一言いはれる度にびくびくし乍ら蒲團を片づけて席を作る。北湖先生は帽子を膝の上に置いて坐りながら「此間蓬亭から聞いたのでは大分此頃お月並るといふ評判ぢやが本當でやすか。何とやらいふ名ぢやあつたよ。さう〳〵錦絲々々。も一人の方は‥‥あれは私も聽いた事のある娘義太夫ぢやがひよつと名を忘れたよ。誰やらであつたよ。‥‥」と獨りで考へて居られる。

七十一

北湖先生は月並といふ言葉を動詞に使つて其上に「お」といふ敬語を加へ、「お月並る。」とか「お月並た。」とか言つて他の事を冷やかされるのが得意である。三藏も散々に此手で惱まされる。「決して月並むわけでは無いのです。小說を書くのにはどうしても‥‥」などと辯護して見るが我乍ら甚だ氣勢が揚がらぬ。先生は相變らず帽子を膝の上に置いた儘で「其錦絲とかいふのは十風の細君の妹とかいふ事でやすな。本當の妹なのか、それとも妹分といふわけでやすか。」「妹分なんで。」「十風の友達といふ處で大いにもてるでやせう。」「健康は至りでやすな。時に十風からちと便りでもありますか。」「此間もちよつとありました。非常に寒いさうで體工合がよく無いから歸り度いやうに言つて來てゐました。」「さうでやせう。あの體で北海道は少し無理でやすな。併し十風の境界は却々古風でえゝ。あの斯う顏の丸い。」と今迄帽子を握つて居られた兩手を御自分の長い顏の前に持つて來て丸い形を造られる。「頤の短い。」と御自分の長い頤を平手で切落すやうな仕ぐさをせられる。「口の大きい。」と今度は御自分の口の邊で前と同じやうな大きさの圓をこしらへられる。「あの細君が時々廓言葉か何か使ひ乍らも大いに世話女房がられると、十風は又十風で、あまり男振りはえゝ方では無いが、併しあれで却々意氣でやすてい。我等仲間では矢張り一番つゝころばしの資格があるでやすな。其の十風が病氣で寢て居ると細君は甲斐々々しく介抱をおしる。それを氣の毒がつて十風が何とか優しく言ふ。細君は窘める。其れから又ひよつとした事から怨む。怒る。所謂癡話でやすな。一寸お癡話りるが直ぐ又仲がよくなる。却々古風でやすな。」と北湖先生は御自分の頭に[illegible]や、娘節用を讀いて十風夫婦をも頻りに古風がられる。三藏は艶種が幸ひに十風の方に外れたので少し安心してゐると、「時に山僧君はどうでやす。一つ錦絲と二人で十風の向ふを張りては。それともあの娘義太夫の方‥‥何とやらいひましたな。さう〳〵小光々々。錦絲より小光の方でやすか。こりや或は山僧君の方が十風以上の艶福かも知れんてい。」と直ぐに又惡謔に來る。三藏は大いに恐縮する。殊に「十圓十圓」と心の底で囁くので先生の方では戯談に言つて居られる事が一々ひし〳〵とこたへる。終に怺へ切れずに「實は先生今日御返金するお約束をして置きましたもの、どうか今四五日御猶豫を願へますまいか。」と思ひ切つて切り出す。「あの金は私がある所から借りた內をあなたに融通したのでやして。」「はい。」「實は私の方もまだ調達しかねてをるので昨日此の月末迄延期して貰ふ事に先方へ賴んで置きましたやうな次第で。だから山僧君のも月末までで結構でやす。どうか其時には間違はぬやうに賴みます。」といはれる。三藏はほつと安心する。先生は時計を出して見て「あらもう十時ぢやよ、こ

りやいかん。これからまだ松翠のうちに三壁のうちに優化のうちへ廻らにやならん。それぢや二時から來て下さいよ。どうもお邪魔でやした。」とつかはと出て行かれる。段梯子を半ば位降りられた頃「こりやしもた。」と上つて來られる「何かお忘れ物ですか。」と聞くと、頻りに袂や懐を探して居られたが「あゝさう〳〵今日は持つて來なんだのぢや。」と言つて又急がしさうに降りられる。

七十二

十風夫婦は此年の暮北海道を去つて東京では誰にも逢はずに京都へ來た。北海道の寒さが非常に十風の健康を損じたのと何かの事件で佐野と爭つたのが原因である。間も無く蓬亭が佐野に逢つた時「十風の野郎無責任で困らしやあがる。」と言つて佐野にひどく怒つてゐたといふ事だ。

京都へ來てから間も無く十風は或會社の臨時雇となつたが其れも喧嘩して止めた。それから或通信社へ這入り直ぐ又或新聞社の會計方に轉じた。北海道で喀血してから身體はだんだん衰弱する。京都へ來てからも發熱する事は屢々であるが其れでゐて亂暴に酒を飲む、金がある時は登樓などもする。「京都といふ處は遊ぶにはしみつたれな處だが、己等の様な貧乏人が遊ぶにはいゝ處だ。」などと言つて流連などすることもある。細君は「又今日も歸つて來ないんだよ。本當に人を馬鹿にしてゐる。」と考へながら雨戸の透間の白んでゐるのを見て又空閨に二度寢をする。初めの間は心から腹も立つるし殆ど命がけに嫉妬も燒いたが此頃はもう根氣負をして仕方無いわと絶念めてゐる。十時頃になつて本當に眼が覺める。それからお茶を沸かしてお茶漬を食べる。漬物を出すのも面倒なので梅干で食べる。十風は其日は夜になるまで歸つて來ない。どうしたといふんだらう餘りだわとむかむかするが、又、仕方無いわと絶念めて財布の底を探ると十錢銀貨が一つあるので急に輕燒を燒かうかと思ひ立つ。お隣に輕燒を燒く道具があるので借りに行く。それから砂糖を出さうと思つて戸棚を開けると蟻がついてゐる。それを見てもう輕燒も厭になる。それから道具をお隣へ返しに行つて夷子座の話が出たのでそれに油を賣つて歸る。歸つて見ると十風は酔ひ潰れて倒れてゐる。痩せた額の筋がいら〳〵と緊張してゐる。細君は默つてつんとしてゐる。十風は一寸目を開けて細君を見たが再び目をつむつてこれも默つてゐる。こんな有様で流連をした事は遂に二人の話題に上らずに濟む。それでも時々は眞面目に夫婦で談合することもある。「あの静ちやんの家の赤ん坊ねえ、可愛いでせう。」「うん可愛い兒だ。」「彼兒を誰でも欲しい人があつたら遣るといふんですつて、貰つて育てて見ようかしら。」と言ひかけて考へる。「さうか。」と十風も眞面目に「子供が一人あつたら賑かだねえ。貰つてもいゝなあ。」とこれも一寸考へる。それから二人とも暫く無言でゐて「まだ新聞社は給料を増してくれないのですか。」と細君は櫛卷のほつれた鬢を掻き上げる。「[illegible]野がいろ〳〵心配して呉れてゐるがまあ駄目だらう。」と十風は咳き入る。こんな事を暫くしんみりと話した擧句には十風の態度に激變を來すのが常である。ハ、、、と先づ大聲を上げて笑つて「それでお前子供を育てる柄だと思つてるのか。」といふかと思ふと「子供を育ててどうする氣なのだ。それより鋏子の小岸でも連れて來よう。小岸に墨でも磨らして……」と言ひかけて自分が大文學者になつて唐木細工の大きな机に凭れて絨毯の上に坐つて小説を書いてゐる所をちらと默想する。「墨位私が磨つて上げるわ。」と細君は櫛卷を手で撫つてぐら〳〵と

動かし乍ら顔をしかめてつんとする。大概斯うふ事が落ちである。

七十三

其れから十風は東京の俳友などとは全く交際を絶つて了つて一年餘り新聞社の會計で辛抱して居たが遂に其れをも止めた。同じ新聞の三面記者をして居つた星野といふ男も同時に止めて二人で或會社を創立するといつて頻りに奔走して居つた。これから二月許りが十風の全盛時代で俄に美しい服裝をして大きな名刺を拵へて月極めの車夫を置いて毎日の樣に駈けずり廻つて居つた。細君は十風程景氣はよくなかつたが其れでも二人で八新の料理を取寄せて食つた事もある。或日は又急に車を連ねて何處かへ出掛けた事もある。輕燒の道具を持つてゐる隣の家などでは「五十嵐さんは株か何かで旨い事しやはつたんやろ。」と噂してゐた。又「五十嵐の奥さんは此頃見違へるやうに美しうならはつた。」と評判してゐた。櫛巻に埃が掛るのも平氣でゐる程取亂してゐたのが俄に薄化粧までして生々してゐる處を見ると、五つか六つは若くなつたやうに見える。細君は「會社が會社が。」と肴屋や豆腐屋にまで吹聽して、心のうちでは矢張宅の人は働きがある、どうして今迄あの働きを見せてくれなかつたのだらうと思ふ。只細君が稍〻不平なのは何々會社假事務所といふ立派な札が星野の家の門口に掛つてゐることで、どうしてあの表札を宅の表に掛けないのだらう。宅の人の話によると一番主な事をして居るらしいのにどういふわけだらうと平かで無い。其れから或時此話を十風にすると「馬鹿なことをいふな。」と顔色が變つて「そんな下らぬ事を氣にするより少し己を慰める工面でもしろよ。一日走り廻つて歸つて來ると、ぐつたりと草臥れてしまふ。好きなものの一つ位拵へて置く氣がつかないのか。」と腹立たしさうに言つたがそれでも平生のやうに癇癪筋をいらいらさせるほどには怒らない。それからコンコンと咳き乍ら「宅で出來ない時は八新へでも言つてやつたらいゝだらう。」と言つた。細君は其日は早速車夫の庫さんを使ひにして三鉢許り命合けてやつて、翌日からは何か一つづつお手料理を拵へて十風の歸るのを待つことにした。

或時十風は夜遲く酒氣芬々として歸つて來て「星野の奴はひどい奴だ。人間で無い。」などと口を極めて罵りながら細君にも八つ當りをした。以前には有り勝の事であるが此頃では珍らしい現象なので細君は心配してその理由を聞いた。が十風はいはなかつた。翌日はいつもより早起をして出掛けて行つて其夜又遲く歸つて來た。酒氣は相變らずあつたがもう昨夜のやうには怒らなかつた。併し其以後細君の手料理は無駄になる日の方が多く、一時遠ざかつてゐた茶屋這入が又頻繁になつて來た。一時熱心の光りに充ちてゐた十風の眼には又悲痛の色が見える。

七十四

二ケ月後には細君の口から又會社といふ言葉を聞くことが出來ぬやうになつた。終日駈けずり廻つてゐた十風は朝から晩迄自宅にごろごろして癇癪ばかり起してゐるやうになつた。主として創業費を支出した某氏は非常に星野、五十嵐兩人の行爲を立腹して訴へるといふ評判もあつたがどうやら沙汰止みになつたやうだ。十風は星野を怨んでゐた。全く自分は星野の爲めに賣られたのだといつてゐた。其れは事實であつた。けれども其の賣られたといふ事がわかつて後十風が星野と共に殆ど茶屋に入りびたつて居た事も亦事實であつた。

誠に短い間の果敢ない夢であつた。其夢の

醒めかけた頃十風は又激しい喀血をやつた。それからげそりと衰へて床に就いた。
明治二十八年五月三藏が漸く十風の住所を探し當てて尋ねて來たのは其の十風の喀血後三月ばかり後の事である。三藏は第四回內國勸業博覽會の通信員を新聞社から囑託されて京都へ來て先づ何よりも早く十風の起居を明かにし度いと望んでゐたのであつたが初めの間は住居さへ判明しなかつた。それを此日は漸く尋ね當てて來たのである。
十風は三藏を見るや否や急に顏をそむけた。それから聲を出して泣き出した。頰の肉はゑぐり取つたやうに落ちて頭と眼が目立つて大きく見える。漸く泣くのを止めて「よく來てくれた。僕はもう駄目だよ。」といつて冷やかに笑つた。「そんな事があるものか。」と三藏はいつたが續いていふべき言葉を知らなかつた。病人の著てゐる蒲團だけ流石に小ざつぱりとしてゐたが其他のものは目も當てられぬ有樣であつた。以前東京で三藏の同居して居つた時も貧乏な暮しではあつたがそれでも何處やらにまだ明るい處があつた。今は見るものが皆暗い。大きな口をぱくりと開けて「おや塀和さん。」と言つた細君の聲は昔とあまり變りは無いが、三藏を子供扱ひにした當年の活氣が少しも無い。「まあ美しい林檎ですこと。」と三藏の手土產の風呂敷をほどいて籠のまゝ十風の眼通りに置く。十風は大きな眼でぢつと其れを見て「一つむいて吳れ。」と言ふ。「僕がむいて遣らう。奧さんナイフを借して下さい。」と三藏は言ふ。細君は齒のこぼれた大きな庖丁を持つて來る。三藏は持ちにくさうに庖丁を持つてむく。長い皮が疊につくまで細君はぼかんと眺めてゐたが急に思ひ出して盆を持つて來る。十風は旨さうに食ふ。顳顬の筋の動くのがいたましく目立つて見える。細君はぢつと三藏を見てゐたが「塀和さん本當にあなた此頃立派におなりでしたのね。」と言ふ。
それからいろ〳〵東京の事を聞く。三藏は李堂、蓬亭の從軍したことなどを話す。其日は順序の立たぬ昔話に十風も大分元氣が出て來て「まるで君滅茶さ。昨日に古新聞を賣つて漸く藥を買つたさ。ハヽヽヽ。」と昔のやうな投げ出したやうな笑ひやうをした。

七十五

其後三藏は屢々十風を見舞うた。或日一人の髯を生やした、金緣の眼鏡を掛けた色の生つ白い三十餘りの人に出逢つた。十風は「これが星野君だ。」と三藏に紹介した。そして其談話の中に頻りに其厚意を感謝する口吻が見える。嘗ては「星野が全く僕を陷いれたのだ。」とまで話した事のある人をと三藏はをかしく思つた。十風の病勢は段々面白くない。近頃は熱の高低が激しくつて食慾が減退して愈々衰弱を增すばかりである。或日十風の眠つてゐるとき細君に「失禮ですが此頃の經濟はどうしてやつてゐるのですか。」と三藏は聞いた。細君は「星野さんが全く親切なんですの。」といつて「人は見かけによらんものね。道樂もんでしてねあの人は。さうよ。宅を伴れてつたのも大概あの人なんですけれど、それで心は矢張り親切なのね。」と心から感謝し居つた。三藏は、それでは以前十風にかけた損害を償ふ積りで病中の補助をしてゐるのであらう、と考へた。其れから半月許りの間先づ十風の病勢は持合つてゐたが此頃は醫者から談話を禁ぜられた。十風は「馬鹿な。話をせずにどうして生きてゐられるものか。」といつて態と長い話をしてさうしてほろほろ淚を流し乍ら咳き入つた。其頃から不思議な事には今まで櫛卷ばかりであつた細君が艶々とした丸髷を結つてゐる日が多いやうになつた。
それから或月夜の晩三藏は十風を訪はうと思つ

て歩いてゐると向うから月光を正面に浴びた色の白い美しい婦人が一人來る。餘程美人らしいと三藏は凝視し乍ら近づいて見ると驚いた、其れは十風の細君であつた。「あゝ貴方でしたか。」と三藏は立止つた。「おや堺和さんなの。びつくらしたわ。」と細君も立止つて「何處へいらつしやるの？　宅？」と聞く。「えゝ。」と三藏は答へて「あなたは？」「一寸使ひなの、すぐ歸りますから、お先へ行つてて下さいな。」と言ふ。それから五六間も行つた時細君は急に走り戻つて來て「堺和さん私に此處で逢つたといふこと宅に言はないで置いて下さいな。此頃病氣の所爲だか馬鹿に疑ひ深くつて本當に困るのよ。」と顏をしかめる。月明りの爲めか此間頃の細君とは見違へるやうに色が白い。それに物言ひに活氣があつて小石川時代が思ひ出される。其夜は十風は珍らしく熱が無いといつて大變元氣がよく此頃手傳ひに來た細君の從妹とかいふ十五六の小娘に足を摩らせ乍ら三藏と快談した。「細君は？」と聞くと「一寸醫者の家へ遣つた。」と無造作に答へた。間も無く細君は歸つて來たが「おやいらつしやい。」と澄まして三藏に挨拶して茶を汲んで來る。月明りで見た程では無いが、それでも顏には白いものを塗つてゐる事が明かだ。

七十六

その夜は格別變つた事なく三藏は只雜談して歸り、それから三日目の夜又訪問すると此日は前日と違つて何となく一座の光景が穩かで無い。細君の顏には矢張り白いものが見えて髮も丸髷に今日結ひ立てのやうである。それでゐて頰には涙のあとがあつて何處となくそは〳〵としてゐる。十風はと見るとこれも頰に涙痕があつて大きな眼を開けてぢつと天井を見詰めてゐる。三藏が枕許に坐つてからも暫く無言でゐたが、突然「酒が飲み度いなあ。」と獨り言のやうに言ふ。それから又暫くして「堺和君、君一人で枕許で飲まんか。何だか淋しくていかん。」と低い聲で言ふ。「あゝ飲んでもいゝ。」と三藏は逆はぬやうに言ふ。「おい〳〵。」と十風は細君の顏を睨みつけるやうにして「酒を持つて來い。」と嚴かに言ふ。「お酒？　有りません。」と細君も稍々荒々しくいふ。「無けりや買つて來い。」と愈々急調になる。「だつてお金が……」と細君はいひさして默る。「何、お金が無い？　馬鹿ッ。」と泣きさうになつて「金が無い？　馬鹿が……」と何か更にいはうとしてコン〳〵と咳き入る。「金なら少々は僕の所にある。」と三藏は自分の財布を出しかけると十風は痩せた幽靈のやうな手を振つて何コン〳〵と咳く。細君は後ろに廻つて背中を摩る。十風は其手を拂ひ除けうとしたが力が足らぬ。痩せた大きな頭を枕から落して敷布團に顏を埋めるやうにして咳く。こんな激しい咳は初めて見るので三藏は狼狽する。小娘に醫者のうちへ行つて來いと命ずる。小娘が立ちかけると十風は又痩せた長い手を振つて止める。十分間程も咳き入つた末漸く靜まる。平生は青白い顏が薄赤くなつて汗が流れる。細君は自分の袂から出したハンケチで親しげに其汗を拭いてやりつゝ眼をうるませてゐる。十風は瞑つてゐる眼を大きく開けて細君の顏を見て又「馬鹿ッ。」と一言いつて危く咳が出ようとしたのをぢつと堪へて又眼を瞑る。涙が瞼の間から溢れ出る。三藏は事の原因を解し兼ねて甚だ手持無沙汰に默然として坐つてゐる。十風は死んだもののやうに寂寞として目を瞑つた儘ぢつとして居る。細君も默つて只靜かに背中を摩つて居る。其のうち十風の口は少し開く。眼も白味を見せて少し開く。疲勞の爲めに眠つたものと見える。其顏を見ると全く死の相だ。二三日前に比べると段が落ちて惡くなつ

たやうだと三藏は哀れに思ふ。其のうち十風は俄に眼を開けて三藏を見て「此奴が君以前やつた商賣をして僕の藥代を拵へてゐやあがる。恥を知らぬにも程がある。……早く死に度い、あゝ僕は早く死に度い。……」といつて又咳き出す。曩の咳よりも激しく咳く。細君は狼狽へて又背中を摩る。三藏はいふべき言葉を知らぬ。兎も角小娘を醫者のうちへ走らす。

七十七

それから二日目に十風は遂に死んだ。死ぬる前も何が原因であつたかわからぬがひどくじれて最後の喀血をやつて間も無く瞑目した。三藏は其前日十風の眠つて居る間に細君に聞いて見た。「十風君がいつた事は全體どうしたんです。」細君は少し狼狽へたが「全く邪推なんですよ。星野さんはあの會社の方が失敗になつて誠に氣の毒だから及ばず乍ら補助するといつて親切に世話して下さるんですのに。其れを妙に言ふのですから本當に困つてしまひますわ。私は何といはれたつて構はんですけれど若し星野さんにでも聞えたら大變だと思つてそればかり心配でなりませんわ。」と辯護した。それだけの辯護ではどこか三藏の腑に落ちぬ處もあつたが何にせよ垂死の病人を目の前に控へてゐる事であるから三藏も其以上は問はなかつた。又十風も其以後ものをいへば必ず咳くので殆ど口を閉ぢてしまつたので其問題は再び持出されずに濟んだ。それで介抱は細君が出來るだけの事をして居る。醫者がもう今明日が判らんと注意してから殆ど夜の目も合はずに介抱する。星野も屢々見舞に來る。さうして三藏などの氣の附かぬ處にまで氣を附けてよく世話をする。三藏はどうも星野を此病人の傍で見る事を好まぬ。けれども肝腎な病人はあまり其れを厭がる風も見えない。却つて其好意を感謝して居る樣なところも見える。眞相を明かにせずにゐて兎や角いふべきで無いと三藏は默つて居た。十風の死後も殆ど星野が中心になつて世話をする。細君は泣くだけ泣いて青白い顏をして尙まめまめしく働いて居る。國許からは一人親戚の人が上京して白骨として持つて歸ることになる。其親戚の人の話では十風の母堂も昨今重體で、目下の處では兩方の葬式を一度に出すやうになるかも知れぬとの事で、細君のことに就ては母堂を初め親戚のものは正當の妻と認めては居らぬ、殊に五十嵐家の遺産といつては殆ど透が蕩盡してしまつて全く無一文といふ有樣だから、當人の爲めをいつても無關係なものとして今後の一身を處理する方がよからうとの事であつた。細君が白骨に別れる時の悲みは稍々取亂した程であつた。遺稿整理は君の方でやつて呉れとの星野の依賴で三藏は何かと調べて見たが殆ど遺稿といふやうなものは無かつた。細君の話に其後俳句を作つたこともあつたやうだが書留めて置く事などはしなかつたとの事だ。

それから尙半月許り三藏は京都に居つた。十風の細君は間も無く親許に引取られたと聞いたが三藏は或日今出川通りではたと出逢つた。矢張り美しい丸髷に結つて薄化粧をして年にしては派手な著物を著て元氣よく三藏に挨拶して行つた。三藏は寧ろ其末路を思うて哀れを感じた。

七十八

此頃は京都にも大分俳人が出來て時々俳句會が開かれる。三藏は博覽會雜記といふ短文を新聞に送る他は別に用事も無いので俳句會には缺かさず列席する。其のひまに又舊友をも訪問する。大方は皆東京に行つて大學に這入つてゐるが中にまだ殘留して居るものもある。三藏は別に俳諧師にならうと思つたわけでも

無く、又特に意を傾けて研究したといふわけでも無く、只李堂などに讃められるのが面白いので、小說を書かうと思つても出來ず、酒色にも飽くことの出來ぬ其鬱結を散ずる爲めにやつてゐたのであるが、それでゐて此地の俳句會などに列席して見ると、いつの間にやら俳諧道の先達になりすましてゐるのに我ながら驚く。まだ小說は書き度いと思ふ。けれども亦俳諧師として推重されるのも嬉しい。いゝ句が出來るのも愉快だ。

或日渥美の主人から三藏の許に手紙が來た。僕の舊友が君等のお弟子ださうで僕も仲間に引込まれた、俳句の話が聽き度いから今日午後から來てくれ、といふ文意である。これは愈ゝ意外だ。鶴子さんはどうしたらう。お常はまだ居るか知らんとなつかしく思ひながら案内を乞ふと細君が自ら玄關に出て來て「おや堀和さんですか。」となつかしさうにいふ。それから主人公の書齋に行くと、今一人來客があつて、其れも主人公位の年輩で髯をひねり乍ら「山僧君といふのはこんなに若いのか、これは驚いた。」と大きな聲をして笑ふ。それから「いやなか〳〵むづかしいものだが併し又面白いものだ。」と前置を置いていろ〳〵質問を發する。それから三人で二三題作つて更に其句の批評などして夕飯の御馳走になる。主人公も飮む。お客も飮む。二人は盃を擧げ乍ら幼稚な議論を鬪はす。それから二人では水掛け論だから一つ先生に聞いて見ようなどといつて三藏に審判を乞ふ。三藏は以前獨逸語の書生として釜から取る熱い御飯を頂戴して居つた時に比べて其變化に驚き乍ら馳走になる。主人公とお客とは頻りに飮む。三藏は臺所に退いてなつかしい中庭の竈を眺めながら鶴子さんやお常の事を聞く。鶴子さんは三藏が京都を去つてから間もなく或工學士の細君になりお常は去年の暮まで續いて此家に居たが此春丸太町の或家へ嫁入つたさうで「お常はあれから後もよく貴方の噂をしてゐましたよ。」と細君は附加へて言ふ。三藏は其夜渥美に泊る。

* * * * *

水月は此年の秋自殺した。三四年間殆ど俳人としての交通を絕つてゐたが、三藏は京都から歸つて間も無く久振りに出逢つて其風采言行の非常なる變化に驚いた。以前は一見異常なる哲學者肌の人と思つたのが極めて穩かな平凡な人になつてゐた。「近來俳句は如何です。」と三藏が聞いたら「近頃二三句作りました。」といつて思ひ出し〳〵其句を話した。三藏は全く月並であるのに驚いた。其れから最も三藏を驚かしたのは「僕は自殺せうと思ひます。」といつたことだ。けれども其態度が極めて平靜で更に大問題と思へぬやうな口振りであつたので三藏は初めこそ驚いたがたいして氣にも留めなかつた。二人は不忍池畔を散步したが氷月に上つて汁粉を食つた。其時大きな地震があつて水月は逸早く跣足のまゝ庭に飛び下りた。さうして「死なうと思つてゐるのに地震が恐いのは不思議だ。」と獨り言をいひながら又座敷に上つて汁粉の殘りを啜つた。其時の勘定は强ひて水月が拂つた。歸路三藏は水月に妻帶してはどうかといつた。水月はさういふ事を聞くとすぐ目の前に饑餓に迫つてゐる妻子の狀態が描き出されると言つた。其れから切通しの坂の上で別れた。其後二三日してピストルで前額と延髓とを一發づつ打つて自殺した。

續俳諧師

——文太郎の死——

一

豫て手紙で言つて來て居つた春三郎の兄の佐治文太郎の上京が事實となつて現はれて來た。上野の停車場に文太郎を迎へに行つた春三郎は自分の兄が斯く迄に田舍者だとは思はなかつた。古風な綿ネルのシャツを着て大きな鞄を重さうに提げて人込みの中をうろ〳〵としてゐた。それから漸く春三郎を見つけて、

「おゝ春三郎か。」と言つた人の善ささうな顏には嬉しさが包み切れなかつた。

「私持たう。」と言つて春三郎が其鞄を受取らうとした時、

「なあにいゝよ。」と言つて渡さうともしなかつた。文太郎は兄乍ら自分は春三郎より智慧も學問も劣つたものだと考へてゐて常に弟を尊敬して居た。弟に此重い鞄を持たすのは思ひも寄らぬと考へて手を振つた。それから二人で停車場を出た時、

「どうだ春三郎、己まだ晝飯を食はぬのだが、二人で暫くぶりに一緒に遣らうぢやないか。」と言つて取附の安料理屋へ這入つた。それから、

「お前何か食ひ度いものはないか。」とか、「さうか、よし〳〵お前が嗜なものなら食らう〳〵。」とか言つて何でも春三郎のいふなりになつて文太郎は嬉しさうに盃をあげた。それから國許ではだん〳〵暮しが困難になつて多勢の子供は養ひ切れぬから愈〻出京する事に決心したといふ事などを話した。少し醉うた頰には酒が上つてゐたが、がさ〳〵した光澤の無い皮膚には淋しい影が漂うて居た。

「お前の言つて來て呉れた下宿屋は至極思ひつきだと思ふ。もう今度は己も身を落してかゝるより外には道が無いと思ふのだが、國では何分思ひ切つた事は出來ん。どうしても上京することと決心したやうなわけだ。そこで下宿屋だが、相當の賣家とか貸家とかいふものはあるものだらうね。」

春三郎は時々盛春館の女將に聞いた事位の外に下宿屋に就て何の知識も無かつたのだが、愈〻の場合には萬事女將に周旋して貰ふ事に豫〻約束がしてあるので力強く返辭をした。

「そりや幾らでもあるものでせう。又極親切な或下宿屋の女將を私知つてゐますから。」

「さうか、そりやあ何よりぢや。お前の學問の邪魔をしてはすまぬが、これからいろ〳〵世話にならにやならぬ。」

二

文太郎は芝に在る細君の親戚の家へ行つて泊つた。其翌日春三郎を猿樂町の山本の家へ訪ねて來た。

「私は春三郎の兄でございます。」と文太郎はいかにも田舍者らしく丁寧に挨拶した。照ちやんは此が春三郎の兄さんかと少し意外らしく目を瞠つた。

「弟がいろ〳〵御世話になりまして。」と文太郎はお霜婆さんに挨拶しながら不思議さうに照ちやんを見た。

「どう致しまして、手前方こそ佐治さんにはいろいろお世話樣になりまして、此間此娘の病

氣の時も一方ならぬ御厄介を挂けました。」とお霜婆さんも照ちゃんをふりかへつた。

「春三郎、暫く來なかつたので方角がわからなくて困る。お前閑なら少し一緒に歩いて吳れぬか。」と文太郎は照ちゃんにも一應丁寧に挨拶した後春三郎に言つた。

「えゝようございますとも、序に盛春館へも參りませう。」と春三郎は一緒に表へ出た。其時帽子やステッキを取つて春三郎に渡す照ちゃんの容子を文太郎は又不思議さうに見た。

一町許り二人は無言で歩いたが、

「時にあの婦人はあの家の娘子か。」と文太郎は春三郎の顔を見た。

「えゝ。」と言つた春三郎の顔は覺えず赤くなつた。

「それであの家の御家族はお母さんとお二人ぎりか。」

春三郎は其處で家族の模樣をはじめ自分の留守番に行つた理由から照ちゃんの病氣の事もすつかり話した。唯自分と照ちゃんとの關係だけは話さなかつた。文太郎は、

「さうか、成程さういふわけか。」と萬事合點が行つたらしく、人の善ささうな顔に其上の疑點を挾まうとはしなかつた。自分より學問も才智も勝れた弟に間違があらう筈は無いと心で極めてしまつた。

文太郎は東京の變化が珍らしいので、二三個處を面白さうに見物した後春三郎に盛春館へ案内された。

「一寸御免下さい。」と言つて立つたり坐つたりして何事にか忙しさうにして居る女將を尊敬の眼を以て見乍ら、

「なかなか遣手らしい女將さんだねえ。これでは餘程儲かるだらう。」と文太郎は春三郎に囁いた。其忙しい事が一かたづき片付いた後女將は、

「どうか、こちらへ。」と二人を空室に案内して豫て春三郎から賴んで置いた貸下宿の事を委細話した。それから又下宿屋を始めるに就ての心得も概略話した。

「其貸下宿といふのはすぐ近處ですから兎も角御覽なすつたらいゝでせう。」と言つて女將は二人を案内して表に出た。

三

「春三郎、昨日の料理は旨かつた。流石東京ぢや。今日も一つ何處かで食らうか。」と文太郎は今の貸下宿がもう自分のものに極つたやうな心持がして晴れ晴れした顔をして言つた。

「えゝさうしませう。」と春三郎も景氣よく答へた。

二人は今日は牛肉屋へ上つた。

「此牛肉屋もなかなか立派だ。額も油繪を挂けてゐるね。」とコローム版の古びた額を文太郎は感心して見た。それから今の貸下宿を借りるとして一番に手を入れねばならぬのは壁や襖だと考へた。嘗て自分の田舍の家の壁や襖を張替へて見違へるやうになつた事を回想した。

文太郎は矢張り昨日の如く盃を舉げるのが非常に樂しさうであつた。さうして、

「流石に東京だ、牛肉も旨い。」と舌を鳴らして食つた。それから國許の家を賣つてあの貸下宿の雜作を買ひ取る件などを相談した。

何でも春三郎の言ふ事を信用する文太郎は初めから盛春館の女將を疑はなかつた。

「親切な女將だと弟はいつた。が、實際逢つて見ると親切な許りか、氣が利いて居て遣手らしい。」と一々敬服した。

「女將さんが雜作が餘り高いから負けさすといふ話であつたがさう行けば結構だ。」と殊に又それを賴母しく思つた。

「此間から聞かうと思つて居たのですが嫂さん

は下宿屋に賛成なのですか。」と春三郎は聞いた。

「嫂さんはあの通り餘り健康な方でないから第一東京へ來るのが厭らしいが、併しもう觀念して居るさ。」と文太郎は無造作に言つた。けれども其顏は少し曇つた。

それからいろ／＼今迄苦辛した生活難の話をして、家のほかもう殆ど財産は無くしてしまつたと言つた。春三郎が十歳前後の頃迄はまだ可なりの財産があつたのだが、其後種々の事業に手を出して大概は他人の爲めに損をした。尤も文太郎自身も茶屋酒を飲んで愉快を盡した事があつたのだといふやうな噂もあつたが、それも大概他人の爲めに遊ばされたのであつた。今年三十八になるまで何一つ彼に取つて成功と認められ愉快と感ぜられた事は無かつた。彼も其事を話して、

「今度はもうどんな事があつても成功せなけりやならん。國に居つても種々考へたが下宿とは思ひつかなかつた。いゝ事をお前は思ひ附いて呉れた。あの女將さんの家で月に三十圓の利益があるといふ話であつたが、さうするとあの貸下宿の方でも二十圓位はあるだらう。二十圓で無く十圓でも利益さへあれば結構だ。毎月食ひ減して行くのに比べたら往く前に樂しみがあるといふものだ。」と一時曇つた顏が又樂しさうに晴々とした。

春三郎は此神様のやうな人（春三郎はさう思つた。）の前に立つて彼の一事だけ包み隱して置くのは何となく心に忍びぬやうに思つた。遂に思ひ切つて口を切つた。

「實はねえ、兄さん。……」

文太郎は驚いて春三郎の顏を見た。

「あの婦人をねえ。……」

「あの婦人とは。」と文太郎は判じ兼ねた。

「あの山本の娘です。あれを私貰ひ度いと思ふのですが、兄さんは御異存無いでせうか。」と春三郎は極めて落著いて言つた。春三郎が餘り落著いて居つたので、

「そりやあもう……お前が信用する女なら……己は別に……」と文太郎の方が却て狼狽した。

四

文太郎は豫て知合であつた同鄕の先輩を訪問して其先輩から田舍者のぽつと出が下宿業などを營む事の危險な事、盛春館の女將をも餘り信用しては險呑な事、春三郎が此頃山本一家の爲めに誤られつゝあるのではないかといふ事などを忠告された。

文太郎は上京後萬事好都合に運ぶのに頗る勇を爲して居つたが此忠告を聞いた時は一時大に落膽した。俄かに東京が恐ろしくなり、前途が暗黑になり、自分のやうなものが馬車や人力車が走せ違ふ此都會に居るのが抑もの間違で、矢張り靜かな故鄕に引込んで居る方が安全なやうな心持もした。殊に又大事な弟の身の上が心配で、若し山本一家の爲めに騙されてゐるのが事實としたなら棄て措かれぬことだと胸を痛めた。けれども、其後お霜婆さんや照ちやんと屢々逢つて話して見ると文太郎の眼には少しも惡人のやうには見えなかつた。又春三郎からより／＼に不幸なる山本一家の内情をも聞いて自分の身に引き較べて同情した。盛春館の女將とも屢々會見を重ぬるに從つて其親切を疑はうとしても疑ふ事は出來なかつた。遂に女將の盡力の結果三百五十圓といふ雜作を二百五十圓迄に負けてもらふ事になつて愈々例の貸下宿を借りる事に相談が極つた。唯先方の都合もあり、此方も準備の時日を要するので旁々授受は二月後といふ事になつた。文太郎は一應歸鄕した。

文太郎が歸鄕してから一月は瞬く間に經つ

た。山本の家の狭い庭にも一本の小さい櫻の樹があつて今が滿開であつた。或日お霜婆さんは留守であつて春三郎と照ちやんの二人は縁端に立つて默つて此櫻の花を見て居た。

「ねえ貴方。」と照ちやんは瞬し乍ら春三郎を見た。春三郎は默つた儘で笑顔を作つて照ちやんに答へた。

「私ねえ。此頃少し體工合が變なんですよ。」と言つて照ちやんは俯いた。照ちやんは先刻から櫻の花を見て居たのではなかつた。照ちやんの見て居たのは櫻の花を透しての曇つた空であつた。

五

其夜春三郎は寢られなかつた。耳を立てるとお霜婆さんの鼾の外に照ちやんの幽かな寢息も聞えた。春三郎は蒲團から顏を出して闇の室内を見廻した。

春三郎はつく〴〵淋しさを覺えた。孤獨の感に堪へなかつた。賴み難き照ちやんの寢息に耳を傾けた。

けれども翌朝早く暗いうちに目が覺めたのは照ちやんであつた。今少し眠らうと思つてもどうしても眠れなかつた。

其後春三郎は機會を得てお霜婆さんに打明けて話した。お霜婆さんは已に其下心があつたものと十分春三郎には想像されてゐたに拘らず、意外にも極めて眞面目な調子で、母らしい威嚴を保つて、

「もうさうなつた以上は仕方がありませんけれども困つた事になりましたのね。餘所の手前もある事ですから、殊に大阪の兄はさういふ方には喧しい方ですから……」と言つた。

六

春三郎は又照ちやんの兄の常藏に手紙を出した。常藏の返事はお霜婆さん宛のと春三郎宛のとが同時に來た。其春三郎に宛てた手紙の中には、『愚妹如きものが貴下の戀人たることを得るのは非常の光榮といはねばならぬ。唯既に姙娠したといふ事だけ殘念に思はぬでも無いが、これも致し方が無い。』といふやうな意味の事が書いてあつた。

お霜婆さんは常藏の手紙を受取つた日春三郎に斯う言つた。

「常藏からの手紙に、貴下へは直に申上げたからといふ事でございますから別にもう申上げません。此上は不束ものでございますが何うか幾久しくお見棄てないやうに照の一身はお賴み申します。」さう言つてお霜婆さんが頭を下げた時春三郎も頭を下げた。照ちやんも稍後れて極りわるさうに頭を下げた。それから其日は小さい德利に一本の酒を三人で酌み交はした。

其翌日照ちやんは丸髷に結つた。照ちやんは急に細君らしくなつて赤い手絡が目立つて見えたが春三郎はもとの通りのつんつるてんの書生さんであつた。

七

春三郎は已に一度文太郎に手紙を出した。其には主として照ちやんの姙娠の事を書いて遣つた。其時の文太郎の返事は斯うであつた。

「委細承知した。お前の信ずる女とお前が結婚することに己は少しも異論は無い。若し其が爲めに金が入用なら少々は送る。心配せずに言つてよこせ。』と細々と親切に書いてあつて、終りの方に、

『若し萬一どうかした都合で山本の方に異議でも起り、お前が困る場合には、子供は己が引取つてやる。其邊も決して屈託すな。』と斯んな事も書いてあつた。

春三郎は父文太郎に宛てて手紙を書いた。其手紙には一後の概況を報じて遣つて其中に斯ういふ事を書いた。

「扨て私の折入つてのお願は、私に極めて少額でもいゝから或資金を貸して戴き度い。私は其金で商賣をやらうと思ひます。」と斯んな事をも書いた。

お霜婆さんは兎も角二人を表向の夫婦にして「目出度い〳〵。」と盃を下に置いた時ほつと息を吐いた。何事も失望に慣れた頭には、照ちやんが角かくしをした姿を見ぬのを殘念だと思つたのも束の間であつた。

「まあ〳〵よかつた。これで夫婦中さへよければいゝ。」と考へた。大きな眼鏡を推けたまゝ次の間から襖越に座敷の二人を見て滿足らしい顏をした。

郵便が二通來た。一つは文太郎からで一つは常藏からであつた。文太郎のは此間の手紙の返事であつた。

「お前の折入つての願といふのは承知したが、どれ程入用か至急知らせて吳れ。出來るだけは融通せう。」とあつて次に又、

『此は決してお前達に强ふる譯では無い、唯ほんの相談で、それも今手紙を書きながら思ひ附いた程の事だから、若しお前達二人のうち一人でも氣が進まぬやうなら必ず心配なく斷つて貰ひ度い。……』と念の入つた前置があつて斯ういふ事が書いてあつた。

八

其相談といふのは大略斯ういふ事であつた。

『下宿屋を讓受けるのももう半月許り後の事だが、早々多勢の子供を連れて出掛けるより、子供と嫂さんは今暫時國許へ置いて己は單身で上京して三四ヶ月は一人で遣つて見る積りで居る。だからお前等夫婦も小間物店や荒物店を出すよりも寧ろ同居をするとしてはどうか。さうすればお互に力になる事が出來て心丈夫だと思ふがどうであらう。但し吳々も强ふるのでは無い。厭なら心配無く厭と言つて吳れ。』とあつた。

大體斯ういふ意味の事であつた。

春三郎は此手紙を見て文太郎が今度の下宿屋で最後の一戰を試むる積りで居ながらも多勢の子供と病身な嫂とを控へて居て心細く思つて居る容子をあり〳〵と想像した。どうしても今度は兄を成功させて遣らねばならぬ、といふことは已に屢ゝ起つた考であつた。此時も亦其考がむら〳〵と起つた。

嘗て此衣食問題は春三郎の心を悶えさせたが、其はより重大な戀の問題で暫く忘るゝとも無く忘らされてゐた。けれども今になつて見ると戀の結果は矢張り衣食問題であつた。殊に從前よりはより切迫した問題であつた。彼は一も二も無く兄の意見に贊同せうと思つた。彼は手紙を畳み乍ら照ちやんに、

「お前下宿屋の女將さんになるのは厭か。」と試に戲談らしく言つて見た。

「何にでもなりますわ。」と照ちやんも戲談らしく答へた。

春三郎は次に常藏の手紙を開封した。之は簡單な走り書きで、

『實は段々事態切迫し今後如何なる結果生ずるやも計り難きにつき一寸歸京萬事御相談致置度存候。明夜遲く新橋著の豫定。萬事拜眉。』

とあつた。

「大阪の兄さんが今夜一寸歸つていらつしやるさうだ。」

「おやさう。」と照ちやんは嬉しさうな顏をした。

「事態が切迫したとあるがどんな事になつたのであらう。」と春三郎は心配さうな顏をした。

「まあさうですか。」と照ちやんも同じく心配さ

うな顔をした。二人とも暫く默つてゐた。春三郎の顔は逸早く衣食問題に戻つた。春三郎は今度は嚴肅な口調で、
「國の兄さんが下宿屋を一緒に遣らぬかと仰しやるのだが、お前遣つて見る氣があるかい。」
と照ちやんの顔を見た。
「何でも私に出來ることなら遣りますわ。」と照ちやんも今度は眞面目に答へた。

九

事件は急轉直下した。其夜歸京する筈の常藏は歸京しなかつた。其翌日常藏は拘引されたといふ飛報があつた。お霜婆さんは皺の多い顔に又血を上せて騷いだ。春三郎は常藏の會社の上役の所へ事情を聞きに行つた。詳しい事は判らなかつたが、何でも委託金費消の罪名で、其實會社の爲めに行使した賄賂を自分一人で背負つてしまつたのだといふ事であつた。尤も一部分は自分一己の遊蕩費に使つたのだといふ噂もあつたさうだが、其にしても常藏にして若し辯護せうとすれば幾らでも辯護の餘地はあつたのだ。唯其を辯護することにすると會社の重役に迷惑を及ぼすので、常藏は一人で背負つてしまつたのだ。其處がえらいと其上役は頻りに感服してゐた。
家族の處分問題になると上役は、
「兎も角お霜さんは家へ引取りませう。」と言つた。
失望に馴れたお霜婆さんはあきらめが善くつて餘り厭な顔もせずに四五日經つてから上役の家へ手傳旁々行つた。

十

文太郎は間もなく上京した。それから見學の爲めに軈て自分のものとなる下宿（松葉屋）に寢泊りする事にした。春三郎夫婦も愈々文太郎を補助して營業を共にする事に極めて荷物を纏めて引越した。
お霜婆さんの取亂さなかつたのと反對に照ちやんは常藏の拘引騷ぎから頻りに鬱いで居た。春三郎はそれを意氣地が無いと苦々しく思つた。
「何故そんなに鬱ぎ込んで居るのだ。暢氣に鬱ぎ込んで居る場合では無いぢやないか。」と勵ますやうに言つた。
「何も暢氣になんか鬱いでゐやしませんわ。」と照ちやんは恨めしさうに春三郎の顔を見て言つた。
「そんな事をくよ／＼思つて居るより一つ大奮發をして下宿屋を遣つて見ようぢやないか。嫂さんがいらつしやる迄はお前が主婦の積りで居なけりやならぬ。」と又激勵するやうに言つた。
「遣れるだけ遣りますわ。」と照ちやんは從順に言つた。けれども淋しさうな賴り無ささうな顔色であつた。
照ちやんは松葉屋に這入つた時眉間を曇らせて其邊を見廻した。上り口には亂雜に草履が脱ぎ棄ててあつた。盛春館などとは違つて障子もなくすぐ其處が居間になつて居た。長火鉢が一つ置いてあつて其向うに坐つてゐたのが女將であらう、長煙管で煙草を吹かせ乍ら立て膝をして居た。人相の惡い厭な女だと照ちやんは思つて居た。長火鉢を隔てて坐つて居た二人の書生は下宿人であらう、妙な眼附をして照ちやんを見た。春三郎と照ちやんとは文太郎が假りの居間にして居る六疊の室に這入つた。
「愈々照ちやんの世話にならなけやならぬ。」と文太郎は第一に言つた。二三日うちには自分のものになつて愈々奮鬪を始めるのだと思ふと文太郎は何かにつけて心が引立つた。殊に細君の上京する迄何よりの賴みは春三郎夫婦であつた。文太郎は二人の顔を賴母しさうに見た。

文太郎も春三郎も照ちゃんの勇ましい答を待設けて居た。けれども照ちゃんは何とも答へなかつた。悲しさうな顔をして古びた天井を見上げた。猿樂町の家は狹かつた。けれども小ざつぱりした家であつた。照ちゃんは此天井や壁を見廻して何とも知れぬ悲しい心持がした。

春三郎は不快を覺えた。照ちゃんに代つて勉めて景氣よく、

「さうですとも、當人も其氣で大に奮發して居ります。」と答へた。

文太郎の引立つた心には何事も愉快に感ぜられた。照ちゃんも春三郎も自分同樣勇を爲して居るもののやうに見えた。

十一

照ちゃんは其翌日から臺所に出て襷がけになつて下女に交つて膳拵などの練習をした。女將は初め照ちゃんが感じた程厭な女でもなかつた。それから斯んな事を教へて吳れた。

「御飯は少し硬い位の方がお客が澤山食べないから德用よ。それからお汁は餘り度々拵へると損よ。お汁があるとどうしても御飯が澤山行けるからね。さうさ一寸言や豆腐糟のやうなものが一番兩爲さ。うまく煎ればなか〳〵おいしいものだし、それで御飯には直ぐ響くからね。何でもさういふ事に氣を附けないと迚もお前さん此商賣は遣れないよ。」それから又斯んな事も話した。

「三番のお客は見榮坊でね。晩のお菜は香物だけでもいゝからお晝の辨當にはお肴か肉を附けないと機嫌が惡いのさ。さうさ、何でも市役所の土木係とかださうで、あのよく道を直す時工夫と一緒に立つて居る洋服を著た人があるでせうあれだあね。時々は工夫の辨當の方に御馳走がある位ださうだから無理も無いのさ。それから七番の夫婦連れね。あの内儀さんは姙娠でね。それはひどい惡阻さ。それで我儘で何を買へ彼を買へと家の女中許り使つて、此方の忙しい時であらうが何であらうが考へ無しなんだから遣り切れないやね。」

女將は斯ういふ事を喋り乍ら手ばしこく大きな飯櫃から小さな飯櫃に飯を入れたり、女中が下げて來た膳をすぐ洗つて拭巾で拭いたかと思ふと、もう其上に菜を載せたり茶碗を乘せたり目まぐるしく働いて居た。それから、

「今度お前さん之を一番へ持つて行つて御覽なさい。」と女將は照ちゃんに一つの膳と飯櫃とを突附けた。照ちゃんは躊躇したが、已むを得ず女中の竹がするやうに膳の上の茶碗や皿やを片寄せて其一隅に飯櫃を載せて段梯子を上つて其を二階の一番へ持つて行つた。一番の客人といふのは髭の生えた人で、粗末な火鉢の上に自分で買つて來た藥罐を掛けて之も自分で買つて來た茶器で仔細らしく茶を入れて居る處であつたが、

「姉さん、今度の炭はくすぼつていかんね、こんな炭は困る。」とむつかしい顏をして炭取を突出した。照ちゃんは其を提げて段梯子を下り乍ら厭あな心持がした。が同時に又兄の事や母の事や自分の今の境遇やが一時に思ひ出されて、

「さうだ。厭でも應でも辛抱しなけりやならぬのだ。」と考へた。

文太郎は誰よりも早く起きて表の掃除から雪隱の掃除迄一人で遣つた。春三郎は帳場に坐つて帳面の附け方を教はつた。

十二

愈〻明日から松葉屋は自分のものとなるといふ前夜文太郎は萬事の引繼を受けた。それから今迄の主人が客室の方に移つて文太郎や春三郎や照ちゃんが居間の方に這入つた。居間と

いふのは八疊であつたが汚い事は一層であつた。いつ頃から疊替をせぬのか波打つたやうになつて居る上に處々破れたのが反古で張つてあつた。臺所道具は固より油蟲の無暗に澤山居る長火鉢や、觀世撚で縛つた十露盤や蓋の無い硯箱迄一切を讓受けた。

翌朝文太郎はいつもより一層早く起出でた。さうしてもう雨戸をがら〳〵と繰つた。まだ東雲の光が一筋か二筋絲のやうに隣の屋根の物干を這つて居る頃であつたが文太郎は此光景を希望に充ちた目で眺めた。これから奮鬪するのだと思ふと雨戸を繰る手に力が溢れるやうであつた。客人の中には餘り早い雨戸の音に夢を破つたものもあつた。

春三郎も照ちやんも文太郎が起きたのに寢てゐるわけには行かなかつた。臺所には昨夜の燻ぼつたラムプが其儘にぶら下つて居た。兎も角其に灯を點けた。棚の上には膳が並べてあつて片方には飯櫃が積み重ねてあつた。昨夜寢たのは一時を過ぎてゐた。今朝はまだ四時を打つた許りであつた。睡眠不足の頭にはこれだけを意識して照ちやんは暫くぼんやりと突立つてゐた。文太郎は雨戸を引いてしまつていつの間にかもう竈に火を焚きつけて居た。

「照ちやん、今日はいゝ天氣らしい。商賣始の日が上天氣は緣起がいゝ。」と極めて愉快さうに言つた。

「さうで御座いますねえ。」と照ちやんは尙ぼんやりした頭で答へたが、竈の向うに煙の爲めに顰めてゐる文太郎の顏が、薪の火影に赤く光つて居るのを見て急に心が引締るやうに覺えた。それから漸く味噌汁の實にと若和布を小桶の水に浸けた。

春三郎は昨日迄文太郎の役目であつた表の掃除をした。今迄餘り勞働をした事の無い腕には竹箒を持つのも樂では無かつた。漸く表の掃除を終へてこれから雪隱の掃除に挂らうとする時、自分は何故に斯んな仕事を遣らうと思ひ立つたのであらうかと考へるとも無く考へて見た。

下女の竹は當分居殘る事に相談が極つて居た。其竹の起出たのは五時を過ぎて居た。さうして口のうちで何かぶつ〳〵と怒つて居た。何を怒るのかはつきり判らなかつたが何でも照ちやんなどが度外れに早く起出たのが不平らしかつた。其うち廊下で腹立たしさうな客の聲が聞えた。

「おい、手水の水が無いよ。」

文太郎が狼狽へて、「はい。」と答へる前に、

「お竹〳〵。」と客は繰返して呼んだ。

「少し待つてらつしやい。すぐ持つて行くから。」とお竹は馴れ〳〵しく答へた。

十三

客室で手が鳴る時には文太郎が一番に大きな聲で「はい。」と答へた。けれども客の方では「お竹お竹。」と萬事お竹でなければ間に合はなかつた。恰もお竹が主人で其他のものは居候のやうな有樣であつた。殊に又お竹を通して客は種々の不平を申込んで來た。其は菜が前よりはまづくなつたとか、靴の掃除がぞんざいだとかいふやうな不平であつた。靴の掃除は主として文太郎がした。十分に念を入れてするに拘らずかゝる不平が聞えた。けれども文太郎は怒らなかつた。

「かしこまりました。十分氣をつけます。」とお竹をして返答せしめた。お竹は店へ來ては客の惡口を言つた。客の所へ行つては店の惡口を言つた。文太郎の眞面な返辭をお竹は輕薄な言葉で客に傳へた。

春三郎には下宿して居る客人のどれもこれもが自分よりは劣つた人のやうに思はれた。文

太郎が其人々の靴を懸命に磨いて居るのを見て情無く思つた。文太郎の他の用事に携はつて居る時は已むを得ず春三郎自身が磨かなければならなかつた。春三郎は其人々の爲めに磨くと思ふと腹が立つた。兄の爲めに磨くのだと思つて僅に我慢した。けれども春三郎の磨いた靴は文太郎の磨いた程光らなかつた。客人はお竹に向つて、

「斯んな磨きやうでどうなりや。」と叱りつけ乍ら橫柄に其靴を穿いた。

照ちやんの顏色は段々惡くなつて來た。朝など頭痛がすると言つて青白い額にいら〳〵筋を立てて居る事もあつた。夜寢床へ這入つてから春三郎の手を自分の腹に持つて來て、

「此頃どういふわけだか此處が斯んなに冷たくなるのよ。」と言つた。腹の眞中が掌程の廣さ冷え切つて居る。

「お腹の子が死んでゐるんぢやないでせうか。」と怨めしさうに言つた。春三郎は此頃の照ちやんの活氣が無いのを見て頗る物足らなく思つて居た。一度照ちやんに對すると自分自身が靴を磨く時の不平や雪隱を掃除する時の苦痛やは忘れてしまつて、我等が下宿屋を遣るのは一つは兄の爲め又一つは我等自身で新らしい運命を開拓するが爲めではないか。それに照ちやんはもう弱りかけた。無責任極まる。と直ぐ例の狂氣じみた癇癪を起した。

「勇氣が無いからだ。」と叱りつけた。

「だつて斯んな體なんですもの。一生懸命に遣る積りなんだけれど……」と照ちやんは涙ぐんだ。其時は春三郎は何處迄も承知しなかつた。が、斯く現在腹の眞中の冷たく冷えてゐるのを知つた時流石に驚いた。其翌日早速醫者のうちへ診て貰ひに遣つた。醫者は暫く安靜にして居なければ流産する虞があると言つた。照ちやんは汚い八疊の間に寢た。

十四

盛春館の女將は下宿が文太郎の手に渡つた日から每日一度は顏を出して何かと注意をした。文太郎は忙しい中を一寸表に出たと思つたら柱掛になつて居る長い鏡を買つて來て其を店の正面の柱に掛けた。其の邊一面に燻ぼつた古びた中に獨り此鏡許りが今めかしく輝き渡つた。文太郎は又極めて不思議な形をした柱時計を買つて來て其を又其鏡の上に掛けた。これで一層此柱は時めいて、家に居る下宿人も、表から這入つて來る人も皆此比例の取れぬ二つの道具に目を注がぬものは無かつた。文太郎はせつせと客人の靴を磨き乍ら目は此時計と鏡とにとまつて罪の無い誇を覺えた。盛春館の女將が來た時、

「女將さん、此二つを昨日買つて來ました。なかなかいゝでせう。」と文太郎は言つた。女將は、

「大變面白い形の時計ですことね、まあ鏡もいい鏡だ。」と已むを得ず讃めたが其顏は曇つた。暫くしてから、

「併しねえお兄さん。金が殘つてゐれば少しでも殘してお置きなさる方がようございますよ。」と言つて斯んな贅澤な物は成るべく買はずに置けと忠告した。

照ちやんは女將を何よりも賴りに思つた。眞青な顏をして臺所の眞中で途方に暮れて居る時など女將が折よく來合せて自分の事のやうに手傳つて吳れるのを心より嬉しく思つた。女將は又春三郎が無器用な手附で膳を拭いて居るのを見た時など、

「まあ不思議ねえ、家のお客樣の頃は自分の蒲團さへ上げなかつた人が。」と笑つてそれに代つた。

照ちやんが臥つてしまつてから春三郎は一倍

の苦痛を感じた。文太郎の顏に失望の色は隱されなかつた。春三郎は其を見て殘念に思つた。けれども文太郎は不平らしい顏はしなかつた。照ちやんの臥つた日からお竹を使つて臺所の事を自分で遣つた。お竹はぶつ〳〵言ひながらそれでも相當に働いた。さうして客の處へ行つては、

「斯んな妙な下宿屋つてありやあしないわ。」

と不平を零した。

彼此するうち半月餘りも經つて兄弟とも大分下宿の事に馴れた。以前程大騷をしなくとも用を辨ずるやうになつた。照ちやんは蒲團を被つて終日八疊の室に心細さうに寢て居た。

文太郎はいろ〳〵考へた末、照ちやんが此鹽梅では迚も主婦として働けさうにない、どうせ連れて來ねばならぬ妻の事であるから一日も早く連れて來る事にせうと決心した。

十五

照ちやんが今日は少し氣持がよいからといふので不味い顏をし乍ら臺所に出て手傳つて居た日であつた。文太郎は春三郎に斯う言つた。

「照ちやんがあの體で無理をしてだん〳〵惡くなつても困るし、どうせ嫂さんも早いか晩いか來ねばならぬのだから、一つ至急に歸鄕して家族を纏めて來うかと思ふが、どうであらう。」

春三郎は卽答し兼ねた。

「まあ考へて見て呉れ。どうなとお前の意見に從ふから。」と文太郎は言つた。

春三郎はくれ〴〵も照ちやんの役に立たぬのを殘念に思つた。けれどもさういふ自分自身も斯ういふ仕事には全く不適當であることをつくづく悟つた今日になつてはもう文太郎の意見に逆つて此上照ちやんを鞭撻して自分等夫婦でやつて見ようといふ勇氣も起らなかつた。遂に、

「ぢやあ嫂さんに來て戴くことに願ひませうか。」と春三郎は言つた。

文太郎は早速其日の夜汽車で國へ立つた。東京へ來た許りの文太郎は才智も學問も自分より勝れたと信ずる春三郎の言ふ事は一も二もなく聽き、又萬事春三郎に賴るやうな傾があつたが、扨て實際事に當つて見ると春三郎はまだ全くのお坊ちやんで少しも役に立たぬのを見て失望した。春三郎にも失望し照ちやんにも失望した文太郎は唯無暗に働いた。利害得失を靜かに打算することの出來ぬ文太郎は斯る際に自分自身の體を粉にして働くより外取るべき方法は無かつた。文太郎は最後の望を自分の妻に繫いで國に歸つた。

照ちやんは一二日起きて働いて居たがすぐ又床に倒れてしまつた。春三郎はお竹を腫物に障るやうにして使ひ乍ら自分で飯も焚き菜も煮た。お竹はぶつ〳〵と怒つてゐて春三郎のいふ事は少しも聞かなかつた。春三郎が、

「今日の菜は牛肉にするから買ひに行つて來て呉れ。」と賴んでもお竹は返辭もしなかつた。それから三番の客の處へ行つて斯んな事を言つた。

「たつた一人で遣り切れないわ。臺所の事もしなけりやならないし、お座敷の方の事もしなけりやならないし、給料はもとの通りで斯んな馬鹿馬鹿しい事あ有りやあしない。それに何だか家内がごた〳〵してゐて此鹽梅ではいつ迄續くんだか知れたもんぢやない。旦那が國へ歸つたといふのも逃げたのかも知れないわ。」それから其日の夕方一寸先の主人の家へ行つて來ると言つて出たつきり歸つて來なかつた。

春三郎は到頭獨りぼつちになつてしまつた。其夜客室で手が鳴ると『はい。』と無精な返辭をして春三郎が面を出したので客人は皆厭な顏をした。

十六

翌朝になつてもお竹は歸らなかつた。昨夜春三郎が寢たのは一時を過ぎて居た。それから今朝は四時に起きた。自分で飯も焚き味噌汁も拵へた。扨てこれから膳を出すといふ時になつて、ふと照ちやんの知らん風をして八疊の室に寢てゐるのが癪に障つた。今迄は醫者の注意もあるし癪に障つた事のある時も成るべく我慢してゐたのだが、此時ばかりはどうしても我慢が出來なかつた。行きなり蒲團の上から照ちやんの腰のあたりと思ふ處をうんといふ程足蹴にした。照ちやんは昨夜夜中神經が昂つていろんな事が氣になつて眠れなかつた。今曉の光に青白い死人のやうな貌をして口を開けて眠つてゐた處であつた。春三郎は行きなり、

「起きないとなぐるぞ。」と叫んだ。照ちやんはあつけに取られて居たが、其の青白い顏に少し血の氣を見せて稍怒を含んだ聲で、

「起きなけりやならんのなら起きますよ。そんなに人を蹴つたりなんかしなくつたつてもいゝわ。あゝ痛。お腹の赤ン坊を責め殺す積りなんかしら。」

春三郎は赫と怒つた。

「何だ責め殺すだ。己が何を責めた。自分の無責任な事を棚に上げて置いて何をいふ。糞ツ。貴樣のやうな奴は頼みにはしない。」

さう言つた儘突立つて暫く睨み据ゑてゐた。

照ちやんは何故自分は斯んな下宿屋のやうな事を遣らなけりやならんのであらうかと其が根柢に於て疑問であつた。

「遣らなけりやならん事なら遣りますわ。」と春三郎にも答へ又自分自身でもさう考へては居たが其根柢に疑問があるだけに春三郎が待設けて居た程乘氣にはならなかつた。睡眠不足や過勞の爲め體を損じてからは此頃はヒステリーを起してしく／＼一人泣いて居る事もあつた。

春三郎も亦何故に下宿屋を遣るのかと聞かれたら、兄の爲め、自分等の新らしい運命を拓く爲めと答へるだけで、其以上の質問には答へる事は出來なかつた。兄を補けるにしても補けやうは幾らでもある。自分自身新らしい運命を拓くにも幾らでも方法がある。果して下宿屋が最善の方法か。是等の疑問には答へる事は出來なかつた。彼は唯無暗に下宿屋を遣らうと決心したのであつた。此點に於て彼の性質は文太郎に似て居た。彼はいつも文太郎の思慮が足らぬのを氣の毒に思つて居た。さうして自分が同樣の性質であることに氣が附かなかつた。

其日は殆ど狂氣のやうになつて何も彼も一人でした。客膳の上げ下げもした。客室の掃除もした。ランプ掃除もした。例の七番の夫婦連の使ひ歩きもした。岡持を持つて豆腐屋へも行つた。照ちやんはげえ／＼吐げ乍ら一日苦しんで居た。

十七

其翌日から盛春館に賴んでちびを手傳に來て貰ふ事にした。ちびはまだ十四で其に年よりも柄の小さい方であつたがそれでも三十餘人の下宿人のある盛春館で訓練されてゐるだけあつて此十餘人の松葉屋位其小さい手一つで輕々と切廻した。春三郎は以前盛春館に下宿して居た時などちびなどは人間扱にはしなかつた。ちびなるものの存在をすら認めなかつた。然るに今目の前に活動してゐる彼はどうであらう。殆ど松葉屋を一人で背負つて立つて居た。春三郎はうつて變つて世の中にちび程賴母しいものは無いやうに思つた。

ちびは鼻歌を謠ひながら何の苦もなささうに臺所で働いてゐた。それから客室で手が鳴ると「はいー。」と無造作な鋭い聲をして、段梯子

を輕々と走り上つた。さうして客人をものの數ともせぬやうな口を利いて却て客人に喜ばれて居た。ちび一人の爲めに松葉屋が俄に生々として下宿屋らしくなつた。

いゝちびが來て以來春三郎の心は大分落著いた。竊に照ちやんを足蹴にした事を後悔するやうになつた。

「今日はどうだ。少しはいゝかね。」と枕許に坐つて優しく尋ねた。照ちやんは久しぶりに春三郎の優しい顏を見て蘇つたやうに覺えた。

「有難う。今日は大分氣持がいゝわ。」

　さう答へた顏には微かな微笑さへ漂うてゐた。

　それから二三日して照ちやんの顏色は大分よくなつて、譯もなくしく／＼泣くやうな事も無くなつた。さうして病後の體を力めて力一杯働いて居た。春三郎はそれを見て今これだけ力める位なら何故せつぱ詰つた場合に獻身的に働いて呉れなかつたのかと恨めしく思つた。お竹に逃げられた時は春三郎に取つては絶體絶命の時であつた。照ちやんは假令臺所で卒倒する迄も此際病を力めて補けて呉れるべきだと春三郎は考へた。ところが照ちやんの方では病氣の自分に此頃に限つて優しい言葉を掛けて呉れぬ春三郎を怨んでゐた。春三郎の期待する處と照ちやんの希望とは餘りに離れてゐた。春三郎が照ちやんを足蹴にまでして激怒して居る心持は照ちやんの解せぬところであつた。春三郎が怒れば怒る程照ちやんは怨んだ。照ちやんは赫と逆上せて本當にお腹の赤ン坊を殺す積りではないかとまで疑つた。これで春三郎の狂氣じみた癇癪が益々募れば照ちやんのヒステリーは愈々重くなる許りであつたらう。が、幸なことにちびが來た。ちびは二人に取つての救世主であつた。先づ春三郎の心は彼の爲めに柔いだ。さうして其春三郎の優しい一言は忽ち照ちやんを蘇生せしめた。春三郎が照ちやんに獻身的の働――其んな大きな事を望んだのは間違つてゐた。照ちやんは唯春三郎の優しい一言に蘇つて働くのであつた。

十八

　春三郎は照ちやんが起きた翌日から輕微な發熱で床に這入つた。矢張り過勞の爲めであつた。照ちやんの臥床中春三郎が竊に不平を抱いてゐたのと反對に照ちやんは心から氣を附けて春三郎を勞つた。春三郎が其に對して優しい感謝の辭を與へれば與へる程照ちやんの顏色は冴々とした。ちびは春三郎をば、「佐治さん、――もと[illegible]春館に下宿してゐたので、さう呼びならはしてゐた――そんなお味噌の擂りやうして駄目だわ。」などと言つて輕蔑して居たに拘らず、照ちやんには、「女將さん女將さん。」と何事も一々相談して遣つた。其爲め春三郎は寢てゐても下宿の事は無事に運んだ。

　春三郎は昨日迄自分で奮鬪した臺所の物音や客の出這入の音等を今は遠く隔つた世の響のやうな心持をして聞きながら、瞬く間に劇變した自分の運命を考へるともなく考へた。自分は何故に常藏の家に同居し遂に照ちやんと今日のやうな關係になつたかを考へた。自分などよりは遙に世に劫を經た常藏が巧みに自分を導いたやうにも解せられた。けれども自分が好んで深みにはひつたといふ方が穩當らしく思はれた。此の下宿屋を遣つて今日の苦痛を嘗めることも亦文太郎からの勸めによつたとは言へ大部分は自ら好んで渦中に投じたのであつた。心を靜めて考へて見ると誰をも恨むことはなく唯自ら責めるより外は無かつた。

　其翌日もう解熱したのを幸に起き出でた。

　其後四五日は彼が下宿營業に携はつてから最

も氣乘のした日であつた。照ちやんも稍日に立つ顏を拵へて、額に青い筋を立てて機嫌よく働いた。おいは例の通り鼻歌を謠ひながら氣輕く働いた。此の調子ならば兄夫婦が居なくとも結構これ位の仕事は遣りおほせて見せると春三郎は愉快に感じた。

併しそれも長くは續かなかつた。肝腎なおいが病氣に罹つたので又途方に暮れねばならなかつた。

十九

春三郎は竈の前にしやがんで飯を焚いて居た。おいを使に出したので自分で水加減をして焚きつけた。此頃は飯を焚くのも上手になつた。おいや照ちやんが焚く飯は目分量で水加減をしたり、薪もよい加減に突込んだりするので出來不出來があるが、春三郎のは嘗て教はつた通り一々物差を浸けて或目印の處迄ちやんと水の來るやうにするし、火を燃すにも薪の立て掛けやうから、木片に火を移す工合迄、これも教はつた通り一定してゐるので、決して出來不出來はなかつた。今日も其順序に則つて、木片の火が勢よく薪に移るのを愉快に眺めて居たところへ、おいは使から歸つて來た。

照ちやんは春三郎に、

「あの女（おいの事）がお腹が惡いやうですよ。今朝からもう七八度も手水に行つたでせう。」と言つた。手水から出て來たおいの顏を見ると成程いつもより惡かつた。よく聞いて見ると使に出た間も二三遍は下痢したと言つた。額に手を當てて見ると少し熱があつた。使に出た間も定めて苦しかつたらうといふと、

「そんなでもなかつたわ。」と言つておいは存外平氣であつた。けれども早速近處の醫者の家へ遣つた。赤痢に變性せぬやうに注意しろと醫者は言つた。此事を盛春館に知らせたら、手少なの處に病人は困るだらうと言つて女將は直ぐにおいを引取つて呉れた。

二十

春三郎は體の孱弱なのに拘らず今迄餘り病氣にはかゝらなかつた。打臥したところでほんの風邪とか腹下しとかで二三日すれば大概癒つた。だから病氣といふものに就てたいした不便を感じたことはなかつた。殊に何も仕事を持たなかつたので少し加減が惡いと氣が附けば直ぐ臥つて靜養することが出來た。盛春館に居た頃隣室に日給の腰辨が居た。此人は病氣を何より恐がつて、少し頭でも重いと餘所目にも氣の毒な程苦い顏をして居た。其癖少々の熱位は推して出勤した。其爲め些細な風邪をこじらせて肺病にならねばよいがと獨りで氣を揉んで居た。春三郎は馬鹿な男だといつも其思慮の無いのを氣の毒に思つてゐた。

ところが下宿屋の主人となつて以來、病氣といふ事は大問題になつた。自分の病氣ばかりでなく他人の病氣も大問題になつた。以前のやうに病氣になればすぐ床を延べて靜臥するといふやうなことは思ひも寄らぬ境遇となつた。照ちやんの病氣でもおいの病氣でも忽ち此機關の運行に大影響を及ぼすのだから寒心せざるを得なかつた。春三郎はおいの腹下しを知つた時大打撃を感じた。早速醫者に見せて服藥させ、車に乘せて盛春館に歸してから臺所の中央に立つて、忽ち其晝膳の事に當惑した。實は照ちやんも昨日あたりから少し横腹の筋が突張ると言つて居た。段梯子を上り下りして膳を運ぶのは餘程苦しからうと想像された。おいあるが爲めに滑かに運んでゐた機關が忽ち又以前の如く大故障を生じさうに見えて安き心も無かつた。兎も角釜の熱い飯を飯櫃に移して、いつも日曜の御馳走に極つて居る絲蒟蒻と牛肉

とを鍋で煮た。

二十一

其日の夕方車ががら／＼と三臺門前に止つたと思つたらそれは文太郎と嫂のお金と四人の子供とであつた。文太郎はにこ／＼し乍ら下から二番目の子供を抱いて眞先に這入つて來た。

「そらこれが坊のお家だよ。」と言つて其子供を店に下ろした。子供は大きな目をして其邊を見廻した。其あとから上の子供が二人田舍者らしい服裝をして這入つて來た。最後に元來病身なお金が汽車に弱つて殊に血色の勝れぬ顏をして下の乳飮兒を抱いて這入つて來た。これも田舍風の丸髷に田舍好みの生々しい色をした手絡を掛けてゐた。

客が二人表に出ようとしたが此の一行に遮斷せられて突立つた儘ぼんやり眺めて居た。文太郎は氣がついて、

「やあ、これはどうも、さあどうぞお通り下さいまし。さあお前等こちらに寄らないか。」とお金や子供を片方に寄せるやうにした。子供は皆恐ろしさうな眼附をして二人の客人を眺めた。お金は慇懃に腰を曲めて家中の女儀らしい態度で會釋をした。此二人の客人は文太郎歸鄕後に下宿した人であつたので此一行を此家の主と知るよしもなく不審さうに眺めて表に出た。

春三郎は膳を洗つて居た手を止めて飛んで出た。前に報知も無かつたので、豫期しなかつた援軍が突然現れたやうな心持がして覺えず涙ぐまれる程嬉しかつた。

「大變遲くなつて氣の毒をした。定めて待兼ねて居るだらうと思つて氣が氣で無かつたのだがね。」と文太郎は春三郎の勞を犒ひ顏に斯う言つた。其實後片附をする、親戚へ挨拶廻りをする、何や彼やで一日も休息無しに文太郎は駈けずり廻り漸く出京する運になつたのであつた。

文太郎は春三郎の顏の著しく衰へてゐるのに驚いたが、春三郎は又文太郎の眼のいつもより一層落窪んでゐるのを氣の毒に思つた。

お金は春三郎にも一別以來の時儀を詳しく陳べた。それから照ちやんにも初對面の挨拶を念入りにした。周圍の騷々しい物音で其しとやかな低い稍田舍訛の言葉は半分も照ちやんには聽取れなかつた。二處で同時に手が鳴つた。文太郎はもう大きな聲で「はい。」と返辭をした。

二十二

文太郎は大概の出來事は時々遣した春三郎の手紙で知つて居たが、固より最近の出來事であるちいの病氣の事は知る筈がなかつた。

「其は定めて困つたらう。早速桂庵へでも賴めばよかつたに。」と文太郎は言つた。春三郎は桂庵といふもののある事は固より知つて居た。其處へ賴めば下女が來てくれるといふ事は氣附かぬでもなかつたが、何だか見ず知らずの女が突然遣つて來てどんな事を振舞ふかも知れぬと思ふと恐ろしいやうな心持がして賴まうとも思はなかつた。兎に角下女が無くては困るからといふので、文太郎は疲れた體を休めようともせず、其夜盛春館に行つて種々禮も陳べ、女將と相談の上或る桂庵に賴みに行つた。

其夜はお金と四人の子供は早くから寢かせた。お金は枕につきはしたが矢張り汽車に乘つて居る時と同じやうな心持で、これが自分の家とはどうしても思へなかつた。汚い襖や壁や、取亂らした棚の上やが皆見馴れぬもの許りで、其上絶えず喧嘩でもして居るのかと思はれるやうな表の人聲や其他雜多の物音が耳について眠らうとしても眠れなかつた。さつき一寸見た臺所の光景や店の有樣が目の前に浮かみ出て、自分にあんな仕事が果して出來るであらうかと危まれもした。照ちやんも亦文太郎に勸められ

て床に就いてお金と少し離れて寢て居たが其照ちゃんの亂れた束髪は又お金の眼に恐ろしく映つた。

「兄さん、今晩は早くお寢みなさい。」と春三郎は勸めた。

「さうか、それぢや明日からは己が代るから今晩だけ賴まう。」と言つて文太郎も床に這入つた。

春三郎は獨り店に坐つて夜の更けるのを待つて居た。十時を過ぎたがまだ歸らぬ客が二人あつた。此夜は靜かであつて餘り客室で手も時らなかつた。八疊の室にはいかにも疲勞したらしい文太郎の高い鼾が聞えた。其内子供の泣聲がして、

「誰が〳〵。」とそれをすかすお金の聲が聞えた。其泣聲はやがて物で蔽ひかぶされるらしいのは乳房を含めるのであつた。其泣聲が漸く靜まつたと思ふ頃又別の泣聲が起つた。それは下から二番目の子の聲であつた。今度は今迄鼾の聞えて居た文太郎の聲で、

「屎が出たいのか。よし〳〵。」と言つて卽て其子供を抱へて眠さうな顏をして出て來た。それからまぶしさうな眼をして時計を見上げて、

「もう十一時が近いぢやないか、眠いだらう。」と氣の毒さうに春三郎に言つた。卽て小便をさせて再び床に這入つたと思ふともう又文太郎の高い鼾が始まつた。春三郎は四人の子を抱へて此營業を遣らねばならぬ兄夫婦の勞苦を思ひ遣つた。

二十三

翌朝春三郎や照ちゃんの起き出でた時分には文太郎はもう竈の下を焚きつけ、表の掃除もすませて居た。春三郎の床を離れる時分にお金ももう目を覺して居たが下の子が泣くので乳房を銜めて居た。あとの三人の子は思ひ〳〵の顏をして思ひ〳〵の容子をしてまだ熟睡して居た。

それから三十分もしてお金は漸く末の子を寢かしつけて臺所に出て來た。汽車の疲勞がまだ癒えず體がふら〳〵するやうに覺えて苦しいのを我慢して手傳つた。

「まあ嫂さん今朝は休んでいらつしやい。」といひ乍ら春三郎は晝立をした。

其内四人の子が順々に起き出でたのでお金は暫くの間其世話にかゝらねばならなかつた。春三郎は又四人の子持で此營業は容易なことではないと思つた。

桂庵から下女を一人連れて來たのは午少し前であつた。ぽつと出らしい下女で以前のお竹などとは大變な相違であつたが斯んな女なら使ひやすからうと文太郎も春三郎も思つた。午飯から膳を運ぶにも湯を運ぶにも早速此下女を使つた。

下の子二人は孰れもよく泣く子であつた。上の二人の兄妹は恐る〳〵手を引き合つて表に出て往來を眺めてゐた。

二十四

文太郎が歸つてから松葉屋は暫く小康を得た形であつた。新來の下女のお高は妙に言葉尻の上る田舍辯で時々無作法なことを言つたりぽんやりして氣の附かぬ事も多かつたが、それでも全くの初心で少しも磨れてゐない上に力惜しみといふ事をしなかつた。ちびい程に切廻すことは出來なかつたが又ちいいよりは間に合ふ點も多かつた。それ故お金は四人の子供の世話に手を取られてしまつてゐても左程差支へるといふやうなことはなかつた。——上の二人の子供は間も無く學校へ行くやうになつた。下の二人は相變らずよく泣き立てたが春三郎も照ちゃんもだんだん其泣聲になれた。春三郎や照ちゃん許り

でなく下宿人一同も俄に二人もの泣聲が一時に響き始めたので初めの間はぶつ／＼不平を言つてゐたがそれも間も無く問題にしないやうになつた。――けれどもお金は、元來日の長いゆつたりした田舍の家中町で暮して來たのが、俄に都の中央で下宿營業といふやうなごた／＼した食物商賣に携はつたのであるから、假令文太郎其他が萬事を引受けて遣つては呉れるもののどうも心から此營業に安んずる事が出來なかつた。弟嫁の照ちやんも惡い人でないことは判つた。けれども全く育ちも違へば性質も違つて、國の隣家の内儀などに對する程にも打解けられないやうな心持がした。上の二人の子供に見苦しくないやうに袴も著けてやり髪も結つてやり――其髪は田舍染みた髪であつたが――學校に出してしまつてから下の子の世話をし乍ら、時々淋しさうな悲しさうな眼附をしてぢつと考へてゐる事などもあつた。

文太郎は何を考へる間も無く猶々氣になつてゐた壁の修覆を思ひ立つた。壁の修覆と言つても塗替へるとなると大變であるから豫ての計畫通り壁土のやうな色をした洋紙で一面に張り詰める事を思ひ立つた。

其を思ひ立つてから文太郎は一倍の勇氣を振ひ起して一應仕事が片づくと二三服急がしさうに煙草を喫んで、煙管を置くが早いか刷毛と糊を溶いた皿を持つて部屋々々を廻つた。

「三番を行つて見て呉れ、見かへるやうに綺麗になつた。」と文太郎はにこ／＼して春三郎に言つた。行つて見ると成程てか／＼光つた洋紙で一面に張り詰められてあつた。

二十五

春三郎は文太郎が一生懸命に壁張りに從事して居る間いつも帳場に坐つて店番をして居た。或日其處へ、

「遲くなりました。」と言つて一人の小僧がガラスを嵌めた小さい額を持つて來た。これは昨夜文太郎が湯から歸つた時、

「古道具屋に油畫の額があつたのを冷やかしたら負けたから買つて置いた。ガラスを代へさす事にして置いたから明日持つて來るであらう。」と話した其であつた。春三郎は其を見て嘗て文太郎が東京に來た時分自分と一緒に牛肉屋へ上つた時此と同じやうなコローム版の額を見て、

「此牛肉屋もなか／＼立派だ。額も油繪を掛けてゐるね。」と言つて感心した事があつたのを思ひ出した。實際文太郎はそれ以來是非一枚あの牛肉屋で見たやうな油繪の額が欲しいと思つて居たのだが嘗て柱掛の暦を買つて[illegible]の女房に注意されてから殆ど斷念して居たのを昨夜ふと又出來心で所謂此の油繪の額を買ふ事にしたのであつた。春三郎は此の話を聞いてコローム版と今も一生懸命に客室の壁を張りつつある文太郎の後ろつき――骨張つた手――とを想像して結びつけて見て、かゝる時いつも覺ゆる一種の淋しさを覺えたが、彼は筆を棄てて取敢へず其額を携へて文太郎の處へ持つて行つた。それから階段に上つて更に爪立てをして苦しさうに刷毛を使ひつゝあつた文太郎の後に立つて、

「兄さん昨日の額が來ました。」と春三郎は言つた。

「さうか。」と言つて急いで其額を見下ろした文太郎の顏は嬉しさうに輝いだ。

二十六

春三郎の爲めには一年よりも長いやうに思はれた一月が漸く經過して月末の計算をする事になつた。文太郎も春三郎も嬉しいやうな恐ろしいやうな心持がした。前の松葉屋の主人が

一切の營業道具と共に譲つて行つた珠の大きい桁の少ない、片隅の壞れたのが觀世撚で絡つてある十露盤を文太郎が持つと春三郎は帳簿を繰り擴げて讀み上げた。

「十二錢五厘也。」と春三郎は必ず「也」の字を附けて仔細らしく讀んだ。自分の書いた字は横綴の大福帳には不似合なやうな字ではあつたが其でも容易く讀む事が出來たが、自分の病氣で寢て居つた時や其他の場合に時々照ちやんなどの附けた字には讀みにくいのが多かつた。屢〻照ちやんを臺所から呼び附けて、

「斯んな判らん字を書いて置くから困る。それにこれには日附が落ちて居る。などとぶつ／＼と口小言を言つた。又文太郎の方は短い大きな指で不器用に珠を彈き乍ら、

「あゝ一寸待つて呉れ。三に七たすの十と。それから幾らやらと言つたね。七錢九厘か。」と言つて舌打をして、「しまつた。少し間違つたやうだ。面倒だが一度初めから遣つて呉れんか。」などと度々置き直したりすることもあつた。それから又割算の九九は文太郎も春三郎も二人共覺えて居らぬので、割算となると春三郎が別に紙の上で俄に筆算を遣るのであつた。斯んな事の爲めに正しく計算を仕終るのは容易の事ではなかつた。

掛の時計や鏡や文太郎等の旅費等を初めとして近くは壁を張る紙やコローム版の額等に至る迄、性質上創業費中に繰り込む事の出來るものは成るべく繰り込む事にした。創業費にしようが何にしようが結局費たる事に變りはないのであるが成るべく此月の支出を少くして帳面上利益を見るやうにし度いと苦心したのであつた。――が、其にも拘らず遂に二十圓程の損失になつた。殆ど客室といふものもなく特別の支出といふべきものは大概創業費の方に計上してあるのに其に二十圓の損失では今後どうしたら利益を見るやうになるものか一寸見當が附かなかつた。何か計算のしやうに手落でもあつたのではあるまいかと春三郎は再び遣り直して見たが別に氣附く點も無かつた。文太郎は非常に落膽して、

「此商賣が駄目では己もう愈〻お終ひだ。」と言つて凄いやうな顏をして笑つたが、

「仕方ない。まあ遣れるだけ遣るのさ。」と立上つたと思ふと又客室へ行つて壁張りを續けた。嘗て言つたやうに文太郎は斯る時靜かに思慮を廻らして善後策を考へる事等は思ひも寄らなかつた。其日以來彼は以前にも増して身を粉に働いた。

二十七

文太郎は此營業が果して利益があるか無いかといふ事を考量してから後決斷したわけではなかつた。春三郎からの手紙に「下宿屋といふものは利益のある商賣の由に候御上京の上は其でも遣つて御覽になつてはいかゞ。」とあつた其を見た瞬間に、下宿屋といふ商賣は利益のある商賣だと呑込んでしまつたのであつた。固より時々疑惑を挾まぬでもなかつたが春三郎の手紙を見た時の先入の感じが力強く其を排斥した。扨て營業に取りかゝつて見ると春三郎も照ちやんも嘗て自分が豫想して居つたほど役にも立たず、又待設けて居つたほどの意氣込も無かつたので文太郎は失望し、扨て最後の希望を妻のお榮の上に繋いで國から連れて來たのであつたが、もと／＼柔順に教育された女だけに別に反抗するやうな事も無く出來るだけの事は遣るやうであつたが、これも亦何處となく氣乘のしない風が見えて文太郎は慊らず思つて居た。けれども斯る場合文太郎はいつでも自分が車輪に働くことを以て其不平を慰めた。倘ほ又少し心に餘裕のある場合には此の自分の生

命の繋つてゐる——もうこれが最後の運だあしだと心得てゐる——下宿屋、即ち此の粗末な古びた建物を飾ることを以て慰藉とした。それで彼は不思議な形の時計を買ひ、柱鏡を買ひ、コローム版を買ひ、洋紙で壁を張つた。——彼の服装はいつも變らぬ古びた木綿著物であつたがそれを飾らうといふ念は起らうともしなかつた。

月末の計算が二十圓弱の損失と極つた時文太郎は暗い穴に落込んだやうな心持がして、雨方の耳が一時に鳴り出したやうに覺えた。此時の失望は以前春三郎や照ちやんやお金などに對して起した失望などとは比較することも出來ぬ程大きなものであつた。自分の前途が俄かに暗黒になつたやうに覺えた。お前の命はもう無いと運命の神から見離されてしまつたやうな心持がした。彼は殆ど無意識に立ち上つた。さうして刷毛を取つて洋紙に糊を附け始めた時もまだ自分は今何をして居るかといふ事を十分に覺えてゐなかつた。けれども彼は一生懸命に張つた。目はぎら／＼輝き顔の筋肉は引緊つてゐた。其日以後彼は以前より一層早く起き夜も遲く寝るやうにして働いた。壁を張る事も矢張り日課のやうにしてやつた。唯以前には其間は何時も樂しさうで一壁済む度ににこ／＼し乍ら暫く其を眺めるのが常であつたが、其以後はさういふ心の餘裕は無くなつたやうであつた。張る時もいつも苦い顔をして居つた。さうして張つてしまつてからも其を樂しげに眺める事はしなくなつた。

二十八

けれどもそれより二三日後の事であつた。文太郎は盛春館を訪問して女將から盛春館も先月末は利益が少なかつたといふ事を聞いた。其上女將は斯う言つた。

「まあお兄さんさう初めから旨くは參りませんよ。幾ら上手に遣る積りでもどうしても初めは手落のあるものでしてね、責めて半歳は辛抱なさらんと巧者にはなれません。私等でもどうやら利益を見るやうになつたのは六七ケ月してからの事でしたからね。」さうして二十圓位の損ですんだのならまあ成績の善い方と思はねばならんといふやうな事をも言つた。

失望することの早い文太郎は又得意になることも早かつた。

「成程そりやさうでせうな。初めから利益を見ようといふのは少し慾張り過ぎましたかな。」と初めて合點が行つたやうな晴れ／＼とした顔をしてから／＼と聲高く笑つた。

「まあ其れ位慾張つてらつしやる方がようございますわ。」と女將も笑つた。

「其に女將さんところ迄そんなに不成績であつたとすると……」と文太郎は重ねて言つて、「諸式がそれだけ上つたのでせうか。」と首を傾けた。

「えゝ／＼そりやもう此頃の上りやうといつたら大抵ぢやありませんからね。」と女將は點頭した。

「御同樣に困りますねえ。」と文太郎は歎息するやうに言つたが、内心には、

「それならば今少し物價の下落する時が必ず來ないとは言へぬ。それ迄の辛抱だ。これが自分との遣りやうが下手な爲めの不成績だと大に落膽せなけりやならぬが、原因がさういふ風に外に在るとすれば決して落膽するには當らぬ。」と考へたので愈々活氣が出來て來た。初め來た時は何所となく滅入つて居たが歸る時分には例の人のよささうな目尻に皺を寄せてにこ／＼してゐた。それからちびに向つて、

「もうすつかりいゝかね。お前には留守中大變世話になつたさうだね。まあ少し待つてゐてお

呉れ。其うち儲かつて來たらお嫁入衣裳の一枚位はきつと拵へて上げるから。ねえ女將さん、是非いゝお婿さんを世話しなけりやなりませんね。」と何時にない戲談などを言つて、

「あら厭だ。お婿さんなんか厭なこつた。」とおいだがまだ子供々々した顏を赤く染めたのを愉快さうに見乍ら上機嫌で歸つて行つた。

二十九

春三郎は文太郎の留守中の如きは骨身を削る位に辛勞したに拘らず尙ほ二十圓の損失を見るやうになつたので、文太郎が反動的に努力するのと反對に一二日はぼんやりして日を暮らしてゐた。さうして文太郎が盛春館の女將の話を聞いて歸つて、俄に機嫌よくにこ〳〵した顏に戻つて、春三郎にも其事を話したに拘らず、春三郎の失望は容易に恢復しなかつた。

春三郎は心身共に非常な倦怠を覺えた。これは必ずしも失望のみが原因で無く、文太郎の歸る迄は凡ての責任が自分に繋つて、其上過勞をすればする程神經が興奮して狂氣染みる迄活動してゐたのが、此頃は文太郎が萬事を遣つて呉れる許りか下女のお高がよく役に立ち、照ちやんも相當に働き、嫂のお金もすこしづつ馴れて手助をするので、春三郎は殆ど手持無沙汰な位暇になつたので、今迄の疲が一時に出て、節々の痛をさへ覺え、少し熱があるかと思ふ位に體がだるく頭もぼんやりして眠いやうな落込むやうな心持がして、帳場に坐つて帳面をつけるのさへ苦痛なやうになつた。或日試に體溫を計つて見ると僅に一度餘りではあつたが熱があつた。

文太郎は盛春館の女將の言葉で元の如く景氣づいたやうであつたが、それでも何處となく不安な考が時々頭の底に萌した。唯其考が一寸でも起つた時は四邊が全く暗黑になつてしまふやうでぢつとしてゐる事が出來なくなる、其處で强ひて其を拭ひ消さうと力めた。

「此月は小だねえ。一日だけでも大變な違ひだからね。」と其一日の爲めに此月の利益を賴むやうな口吻で春三郎に言つた。

「さうですねえ。」と春三郎は言つたが氣乘がしなかつた。

「お前此頃どうかしたんぢやないか。」と文太郎は或時不審して聞いた。

「たいした事は無いやうですが、少し許り熱があるやうです。」

「そりやいかんぢやないか。此頃は手も揃つてゐるし、少しも早く臥つたらよからう。」と文太郎は心配さうに言つた。

三十

醫者は春三郎の體が非常に疲勞してゐるから當分靜養する必要があると忠告した。文太郎は其を聞いて非常に心配して、もう當分下宿屋の事には關係しないやうにして體を樂にしてゐよと勸めた。春三郎は寢たり起きたりしながらぼんやりして日を暮らしてゐた。

或時春三郎は何となく呼吸苦しく五體の痛を覺えて、はじめて熱の上つてゐるのに氣がついた。體溫器を挾んで見ると九度近くあつた。手を叩いて照ちやんを呼んで熱ざましを服用した。照ちやんは、

「まあ目の中まで眞赤ですわ。どうしてそんなに熱が上つたのでせう。」と心配さうに言つた。

春三郎は手傷を負うた勇士が槍を杖ついて戰場に向ふやうな心持で得意らしく口許に微笑を湛へて照ちやんを見上げた。さうして大きな息を鼻の穴から洩した。

「どうなすつたの。苦しけりや頭でも冷やして上げませうか。」と照ちやんは再び心配さうに春三郎の顏を覗き込んだ。

三十一

春三郎の高い熱は四五日續いた。醫者は脾臟が大きくなつてゐると言つた。春三郎は其間始終何物かと奮鬪を續けてゐるやうな心持がした。其うと〳〵してゐる耳にも臺所や店の物音は斷えず聞えた。照ちやんが介抱にかゝりつ切りになつた上にやれ氷を買つて來い藥を取つて來いとお高を使ふのでどうしても臺所の方が多少ごたついた。

「お高〳〵。」と下女を呼んだり、

「四番でお手が鳴るぢやないか。」とお金に警告したりする文太郎の大きな聲も聞えた。お金は朝早く眠がる二人の子を學校に送り出す迄が大抵の世話ではなかつた。其上、下の二人の子が相變らずよく泣き立てるのでそれを叱るつゝましげな聲にもどこか尖つた處が出來て來た。

「斯うまあ代りあつて病氣ばかりしてゐては仕樣がないのね。」と照ちやんは足を擦り乍ら歎息した。春三郎は此時萬年町とか鮫ケ橋とかいふやうな貧民窟に自分等も生活してゐるやうな心持がしてゐた。さうしてざあ〳〵と雨の音が聞えてゐるやうに思つた。多くの勞働者と共に暗い空を見上げて、いつ晴れる事かと不安を覺えつゝあつた。其耳元に照ちやんの聲は響いたのであつた。半睡の狀態より覺めた春三郎は照ちやんの顏を見上げて、

「何？」と問ひ返した。

「斯う弱くつては貴方も仕樣が無いのね。」と照ちやんは染々と言つた。

「雨は降つてゐないのか。」と春三郎は耳を欹てた。

「厭あねえ、そんな事を言つて。いゝお天氣ぢやありませんか。」と照ちやんは熱にほてつた春三郎の顏を恐ろしさうに見た。春三郎は苦しげに寢返りを打つて兩手の置場處が無いやうに並べて疊の上に投出した。

「どうなすつたの。冷えますよ。」と照ちやんは春三郎の蹴み拔いだ蒲團をかけた。

三十二

程なく病苦は熱の下降と共に頓に薄らいだ。春三郎は一方ならぬ疲勞を覺えた。それから二三日は唯こん〳〵と眠る許りであつた。例の臺所の物音や子供の泣聲は以前と變らず響くのであつたが、彼はもう其を暗い音とは聞かなかつた。其間に彼は此頃の奮鬪的の生活とはかけ離れた平和な夢を屢〻見た。全く他愛の無い無意味な夢が多かつた。或時は無駄話をしながら玉川沿と思はるゝやうな芒の中を歩いて居つたこともあつた。或時は故鄕の暗いやうな靜かな古家に亡くなつた母も居れば照ちやんもゐていつ迄經つても夜の更けぬ秋の夜長を澁茶を飮んで語り合つてゐるやうなこともあつた。

文太郎は非常に春三郎の病氣を心配して曉方など自分が起き出てから四五分の間其寢息を覗つて見るのが常であつた。又夜になつて照ちやんのいぎたなく熟睡して、春三郎の呼ぶのにも返辭せぬ事などがあると、文太郎も晝の疲勞に口を開けて大きな鼾をかいて寢てゐるのが、はじめ二三度は斯ういふ遠慮ともつかぬ聲を出し郎て愕然として跳ね起き、

「どうした〳〵。苦しいか。」と言ひ乍ら心配さうに春三郎の顏を覗き込んだ事なども屢〻あつた。さうして醫者が、

「もと餘り健康で無い體で俄に慣れない勞働をなすつたのと其上睡眠不足などが原因で餘程體を壞していらつしやる。是非當分靜養する必要がありますな。」と言つたのを聞いた時文太郎はつく〴〵考へた。

「弟の體は大事な體だ。學問も智惠も自分よりは遙に勝れてゐる弟の體を斯んな仕事の

爲めに傷はしては申譯が無い。」と。其處で或日春三郎の枕許に坐つて斯う言つた。

「幸に熱が下つてまあ安心したが、醫者もいふ通り是非當分保養しないと迚もお前の體は恢復しない。今迄手傳つて貰つたのでもうどうか斯うか己等夫婦で遣つて行けさうだ。照ちやんも段々身重になつて來て斯ういふ仕事をするのは無理だから、何か一つ別の仕事を遣つて見てはどうか。急ぐ事ではないが店の事を氣にして無理に早く起きたりすると惡いから兎も角話して置くのだがね。」

春三郎は此話を聞いた時、今の自分の心の奧底を文太郎に洞見されたやうな心持がして覺えず其顏を凝視した。併し文太郎は唯一途に弟の體を心配して眞心籠めて話してゐるのであつた。例の正直な顏にさういふ皮肉な影は探しても見當らなかつた。

三十三

文太郎は春三郎夫婦の出て行つたあとを想像して見た。一番に氣になるのはお金であつた。お金は元來性質に多少險しい處のあつた女かも知れなかつた。けれども武士氣質の嚴格な父母の膝下に教育されて其險しい處は心の底深く叩き匿されてゐたのであらう、文太郎の家へ嫁入つて來てからもさういふ處はあまり現はれなかつた。だん／＼家計が思はしくなくなつて後も四人の子の世話を一手でする取込んだ中に家中の內儀としての品位を保つだけのしとやかさは失はなかつた。處が東京に來て俄に此の過激な下等な——お金は何の爲めに斯んな食物商賣のやうなことをしなければならぬのか、それがどうしても腑に落ちなかつた。第一商賣といふ事が自分は好ましくないのだが、其商賣のうちでも事を缺いで斯んな下等なものを特に選んだ夫の心が合點が行かなかつた。殊に又夫に此の仕事を勸めた春三郎の心が判らなかつた。——職業に携はつてから、久しく其心の底深く隱れてゐた險しいところが少しづつ表面に現はれて來るやうになつた。初めは自分でも氣が附いてこれではならぬと心を取り直さうと試みもしたのであつたが、何分にも朝暗いうちから夜遲く迄、田舍では想像もつかぬ騷がしい物音の中に在つて、多勢の人の世話をする上に四人の子供の世話もしなければならぬので、氣を落着ける間といふものは殆ど無く、自然々々に心は荒み弛んだのであつた。けれども春三郎や照ちやんの前では倘ほ包み憚る處があつて主として文太郎の前に其變化は著しく現はれた。文太郎は初めは腹立たしくも覺えたが、もと／＼お金には無理な仕事であつたのだとあきらめて大概な事は我慢して居た。唯或時、

「何故春さんは斯んな商賣を私等に勸めなすつたのでせう。其にしてはお照さんが少し氣を入れて働いて下さればいゝのに。私一人苦しい目に逢ふのだわ。」とお金が言つた時文太郎はくわつとして、

「何を下らぬ事をいふ。」と其處にあつた茶碗を取るより早く抛りつけた。幸に怪我は無かつたが其時お金の目には深い／＼怨の色が宿つた。さうして其後は文太郎にもあまり突掛らぬ代り獨り塞ぎ込んでゐる事や子供に當り散らす事が多かつた。春三郎夫婦が出て行くとして一番にお金の事が文太郎の氣に掛つたのは此の爲めであつた。

三十四

春三郎は文太郎から靜養の勸告を受けて後いろ／＼と獨りで煩悶した。一方には一度投じた此の勞働的生活を離れともないと思つた。然るに一方では何處となくもう此苦しい下宿業

業に飽いたやうな心持がした。

　文太郎はいつもの通り大きな聲をして、

「お高〳〵。お高は何處に居る。」と呼んでゐた。「八番さんにお客様だよ。一寸伺つておいで。」其聲が止んだと思ふ間も無く、何處かの部屋で勇しい拂塵の音が聞えるのはもう文太郎が其部屋の掃除に行つたものらしかつた。

　其夜の事であつた、文太郎が芝の親戚の家へ行つて三十圓の金を調達して來たのは。其三十圓の金を枕許に置いて文太郎は春三郎に湯治を勸めた。春三郎は自分夫婦が今になつて此の兄の營業を見棄てるのでさへ心苦しいのに、況して湯治などに行くのは思ひもよらぬ事だと思つた。それで遂に、それでは其金を貰つて別に小さい家を持つて家計を立てて見ようかといふ事を相談した。文太郎は、

「さうだ。其もよからう。湯治に行つた積りで一月位ぶら〳〵してゐて見ろ。」と無造作に贊成した。

　扨て別に一家を構へるとなると一月位は遊ぶとしても行く行くは何か仕事を見出さねばならない。春三郎は其を考へて懊惱した。照ちやんは、

「下宿屋でさへなければ、どんな苦勞でも私するわ。」と嬉しさうに言つた。

三十五

　其後照ちやんは俄に元氣づいたやうに見えた。さうして閑さへあれば棚の上に抛り上げたまゝになつてゐた自分の持物の埃を拂つたり中のものを整理したりしてゐた。以前照ちやんが此家に引移つて來た時は、何故に此の下宿營業に自分は從事せなければならぬのか其意味さへ十分に判らず、其上常藏の變事とか姙娠とか種々の事件が一時に起つたので、殆ど茫然として其邊の道具を掻集め手當り次第に此家へ運んだのであつて、其後も棚の上に抛り上げたまゝ手を附ける暇も無かつたのであつたが、其を暫くぶりに取出して整理するといふ事は此頃に覺えぬ靜かな樂しい心持であつた。

　之に反してお金は、今度の事を文太郎から言ひ聞かされた時、

「憖他人を交ぜず、自分等夫婦だけで遣る方が却ていゝかも知れぬわ。」と考へもしたが、どうも春三郎夫婦の仕打が十分に胸に落ちなかつた。

「兎に角宅の人に此の營業を勸めたのは春さんではないか。それでどういふ話合であつたのか自分は離れてゐたのだから知りやうは無いが、何でも宅の人の口振りでは、兄弟夫婦が力を合はせて遣るといふ事らしかつたのに、まだ二月にもなるかならぬのに、早や二人で逃げ出して、此の多勢の子持の自分に何も彼もおつかぶせてしまふといふのは隨分蟲のいゝ話ではあるまいか。殊にいくら姙娠だつて彼の照ちやんの我儘つたらありやしない。あれを默つてゐる春さんも春さんだ。また何かにつけて妾許りを叱つて春さん夫婦の事となると大騷ぎをする宅の人も宅の人だ。」と此頃又頭痛勝ちの青い顔に深い怨の色を浮べたが、流石に見苦しく其を舉動には現はさなかつた。さうして照ちやんのもう此方の仕事には氣が添はず何かそは〳〵としてゐるのを心の底で腹立たしく妬ましく思ふのであつた。

　春三郎は嘗て「新生活に入るのだ。」と決心して非常な勇氣を鼓して此の下宿營業に從事した當時の心持を回想して、どうも此まゝ此家を出て行くに忍びぬやうにも思つたが、一方には早く平和な新らしい住家を見出し度いやうな遣瀨の無い心持もして、床拂ひをしてから間も無く貸家を探しに出歩いた。

　文太郎は例のコローム版の額も昔の神棚の横

に推けたまゝで此頃は餘り其を眺めうともしなかつた。客室の壁張りも紙が無くなつたのを界に一先づ中止した。さうしてなるべく儉約をせなければならぬといつて自分では殆ど漬物許りで飯を食ふやうにして、たゞ時々大福餅を買つて來て其を子供にも食はせ自分でも食ふのを何よりの御馳走にして居た。

三十六

春三郎は或日貸家札を眺めて神田錦町の裏通に立つた。貸家札には四疊半に三疊に二疊とあつた。路次を這入つて突當りより一軒手前の左つ側に此頃建つたと思はるゝ小ざつぱりした家が其であつた。大家さんを尋ねあてて家賃は四圓五十錢敷金は二月分といふ事を聞いた。案内されて中に這入つて見ると、疊も新らしく、今迄の松葉屋の八疊などとは比べ物にならなかつた。春三郎は理想的の平和な新らしい住家を見出し得たやうに覺えて直ちに契約した。猿樂町に居た時は恰も山本の家に寄寓してゐた形であつた。父松葉屋は戰場であつて住家ではなかつた。彼は照ちやんと共に初めて此に住家らしい住家を造り得るのだと思ふと嬉しさが込上げて來た。

三十七

二度目の月末の計算を終へてから春三郎は轉宅する事にした。其決算の模樣は先月末の如く觀世撚で綴つた十露盤を文太郎が持つと春三郎は「何錢何厘也」と「也」の字を附けて讀上げた。割算になると急に紙の上で筆算を遣る事も前と變らなかつた。さうして其結果矢張り十五圓といふ損失になつた。

「矢張り損か。」と文太郎は落膽した。

「それでも先月より五圓だけは少なくなりましたね。」と春三郎は慰め顔に言つた。

「それはまあさうだ。盛春館の女將さんの言つた通り半年やそこいらは損失と極つたものとすれば、責めて五圓だけ減つたのを取り柄にでもするかね。」と言つて淋しく笑つたが、「實際此月なんか子供等に迄ろく〳〵肴や肉は食はさなかつたのだがね。」と悲痛な色が眉宇の間に現はれた。春三郎はもう此上慰むべき言葉を見出さなかつた。腹の中では我等夫婦が別居すればそれだけ食扶持其他が減ずる譯だから少くとも十圓位は違ふやうになるだらうと考へもしたが其は口には出さなかつた。

文太郎は暫く忘れてゐた暗い穴に落込むやうな心持を又新らしく思ひ出したが、之を忘れるには外に方法が無かつた。

「仕方ない、遣れるだけ遣るさ。」斯くして再び身を粉に働くのであつた。

翌月の一日春三郎は遂に錦町の家へ移つた。文太郎は棚を釣つたり竈を買つて來たりする世話までして、斯う言つた。

「これは中々いゝ家だ。此處を病院の積りにして精出して保養をするがいゝ。」

三十八

お霜婆さんは松葉屋迄二三度來た事があつた。いつも照ちやんの元氣に働いて居る時であつたので安心して歸つた。それに上役の子供のうち誰か一人を必ず連れて來たので大興長話はせずに歸つた。常藏の事には餘程心を痛めてゐるらしかつたが餘り愚癡は竝べなかつた。

錦町に移つてから轉宅の事をお霜婆さんに報ずる序に、子供などは連れずにゆつくり遊びに來いと言つて遣つた。それに拘らずお霜婆さんは矢張り子供を連れて遣つて來た。さうして嬉しさうに其邊を見廻して、

「これでこそ新夫婦の住居らしい。」と漸く松葉屋の羈絆を免れた照ちやんの身の上を喜ぶら

しかつた。

春三郎夫婦は長火鉢とか茶簞笥とか其他大方の小道具を大概山本から譲り受けて使用してゐる此新家庭にお霜婆さんも引取り度いと思つたが、それは目下の處文太郎に對して實行しにくいやうなところもあるし――文太郎に話したら却て心置なく賛成したかも知れなかつたが――又お霜婆さんの方で承知しさうにも見えなかつた。春三郎夫婦は一方には文太郎夫婦の其後の苦闘を想像して氣の毒に思ひながら、從來未で嘗て覺えなかつた平和な樂しい新生活に入つた。

「貴方、赤ん坊の著物を買ひに行かうと思ふのですが、どんな柄がいゝか、一緒に行つて見て下さいな。」照ちゃんは甘えたやうな聲を出して斯ういふと、春三郎は暫く躊躇してゐたが遂に同行し、小川町通の呉服屋の店前に、例のつゝんゝゝつるてんの書生と腹の大きい女とが赤ん坊の著物の柄を選り分けた事もあつた。今度は、

「おい今晩寄席に行かないか。」と春三郎の方から切り出すと、

「だつて暢氣なやうで兄さんに惡いわ。それに今晩は久しぶりにお刺身を取らうかと思つてゐたのだから。」と照ちゃんは一應不承知を稱へたが、遂に刺身は斷つてお茶漬を掻込んで、其代り二人で寄席に行つた事もあつた。

三十九

「自分は何時迄も兄に厄介を掛けてゐるわけには行かん。三十圓の金も到底長くこの生活を支へる事は出來ん。一日も早く衣食の道を見出さねばならぬ。」と斯ういふ考は此頃の春三郎の弛んだやうな頭の中にも絶えず往來してゐた。唯それにしても如何なる職業を見出すべきか、其を決するのは容易ではなかつた。松葉屋を訪問して文太郎の辛勞を見て歸つた時と、朝寢の目をこすつて靜かな障子の日影を眺めた時とは其考が一致しなかつた。其結果此頃になつて漸く一條の活路を見出した。それは或事業に携はることであつた。下宿屋の如き勞働生活でなく、春三郎に適當した事業であつた。

四十

それから春三郎は一心に其事業に沒頭した。某の店の番頭なるものに逢つて賣捌上の相談をした。此の番頭は今迄に春三郎の逢つた事のない種類の人であつた。皮膚は生白くつて光澤が無く、笑ふ時は猿のやうな聲を出して並びのいゝ白い齒を見せるのが癖であつた。大概な場合は笑つて居て、「御尤で。」とか、「いかにも。」とか他愛もなくいふのであるが、一旦利益上の問題になると顔の筋肉が俄に引締つて、奥底の知れぬやうな怪訝な眼附をして、「はい。」と一言人を冷殺するやうな厭な返辭をした。

それから今迄表を通つて亂雜な器械の音許り聞いてゐた或工場にも出入りした。其處には髭を生やした、色の燻つた、齒の汚い、それに何を聞いても明確な答を與へぬ、さうして追求しても外の用事をしてゐて圖々しく知らぬ風を装ふ人であつた。

斯ういふ人々に出逢ふ度に春三郎は心細く思つた。下宿營業に携はつた時、自分は初めて世の中に飛び出したのだ、漸く世の中といふものが判つた、といふやうな心持がしたが、扨て更に別種の方面にぶつつかつて見るとどうして世の中は判つたやうでまだなか／＼判らなかつた。けれども心細い半面には未見の地に足を踏入れたやうな大膽な勇を覺えた。

かゝる間に松葉屋では三度目の月末計算をやつた。今度は帳面上では三圓某の利益を見ることになつたが九番の客が下宿料を拂はずに四五日前出た切りで歸つて來ない――あと

に殘つたのは新聞紙の一束と、單物が一枚にシャツが二枚這入つてゐる古びた行李許りであつた――ので其を差引くと矢張り十圓足らずの損失となつた。

春三郎の事業は種々の故障があつて中々容易く運ばなかつた。春三郎は朋友から借りた資金を食ひ込んだ。松葉屋の計算は相變らず損失が續いた。照ちやんの腹はだん／＼せり出して來た。

四十一

八月の盛暑の頃であつた。春三郎が暫く無沙汰をした揚句に松葉屋を訪ねると、文太郎は晝寢をしてゐた。それからお金は斯んな話をした。

「どういふ譯ですかね此頃は三番と四番と五番とに南京蟲が出るやうになりましてね。えゝさうです、初めは四番にゐたお客樣が多分持つてらしつたんでせうけれど半月も經たぬうちに三番にも五番にも擴がつてしまつたんです。此塩梅だと瞬く間に家中に擴がつてしまふかも知れぬといつて兄さんが大變心配なすつていろ／＼藥を買つて來て撒いても見なすつたけれど全く駄目なんです。そこで貴方三番のお客も五番のお客も此間夏休みで國へ歸ると言つて出てしまはれたんですが、大方南京蟲の爲めに轉宿しなすつたんでせうよ。そんな風になつて段々お客が減つては大變だから、どうか此の夏休みの部屋の空いてゐる間に撲滅してしまひ度いといふので、到頭貴方、兄さんが裸になつて夜中起きてらしつて、ちくツと南京蟲が兄さんの體を食つた處を捕まへる事になすつてね、もう彼此十日餘りも毎晩のやうに起きてらつしやるんです。初めのうちはどうしても旨く捕まへる事が出來なかつたさうですが段々上手になつて、昨晩なんか十五匹も捕まへたと言つて今朝も威張つてらつしやいました。さうですとも、私もそんな事をして體を毀しては大變だからと言つて止めるのですけれど例の一途でね、なか／＼私のいふ事なんかお聞きにならないんですよ。春さんからもよく話して見て下さいな。」お金は心配さうに斯う言つた。

さらぬだに此頃の松葉屋の空氣はだん／＼冷たく室内の光はだん／＼暗くなるやうな心持がして、例の時計も柱鏡もコローム版の額も文太郎が之を買つた當時の得意氣な色はもう止めぬやうになつた。お金の顏や姿からも以前のつゝましやかな內儀らしい氣色は漸次消え失せて、粗野な、荒々しい容子が目につくやうになつて來た。毎月末の計算は大方損失で、彼の芝の親戚で借りた三十圓も春三郎が朋友から借りた事業の資金のうちで融通するまで支拂ふことが出來なかつた。文太郎は相變らず骨身を惜まずに働きはした。けれども未來の希望がだん／＼薄くなつて來て、殆ど絕望的に、唯手足を器械的に働かして居るに過ぎぬ事が多かつた。此文太郎の淋しい心持は春三郎は十分知つてゐた。けれども春三郎の力でどうすることも出來なかつた。今の所春三郎は唯一途に事業の方を成功させるより外道が無かつた。此の事業さへ成功すれば文太郎の窮境を救ふ方法はいくらでもある事と考へた。斯して春三郎は唯專念に奔走してゐたのであつた。今春三郎はお金の話によつて、覺えず文太郎の夜中目を怒らして南京蟲と奮鬪しつゝある絕望的の顏を世界終末の圖の如くに目の前に描き出した。

四十二

一寸考へると隨分馬鹿氣た話であつた。南京蟲を撲滅するに適當な藥が無いと言つた處で何も裸になつて夜中起きてゐる必要は無かつた。けれども春三郎はそれを馬鹿氣てゐるとは

考へなかつた。世の中の總ての事に敗北して來た文太郎が、今度こそと志した下宿營業も亦遂に同樣の運命と略相場の極まり掛けた今日如何にして此の悶を遣るべきか。文太郎は例によつて奮闘を續ける外に方法を見出すことが出來なかつた。實に此の南京蟲狩も亦其奮闘の一つであるに相違ないと春三郎は考へた。文太郎は正直に一途に骨身を殺いで働いて居るに何者の狡兒か寄つてたかつて彼を不運の淵に陷いれうとする。目に其形は認めぬけれども周圍は皆僞敵のやうな心持がしてゐる矢先に此の南京蟲が現はれた。文太郎は責めて此の蟲に向つて勝利を希つた。生藥屋で二三品の藥を買つたがどれも此も無效であつた。此上思慮ある謀を廻らすことは文太郎に取つて寧ろ苦痛であつた。若かず裸になつて自分の體を蟲に食はせて生體を見屆けた處で捕獲するには。これ程確實で痛快な方法は無いと思つた。そこで連夜彼は奮闘を續けた。此の奮闘は苦痛といふよりは寧ろ一種の慰藉であつた。一夜に十五匹をも捕まへた時の心持は彼が未だ何物にも經驗する事の出來なかつた勝利の味を初めて味ひ得たのであつた。「今朝も威張つてらつしやいました。」といふお金の言葉は正しく此の淋しい詩を示して居ると言つてよかつた。春三郎は斯る意味に於て此の南京蟲捕獲の奮闘の光景を世界終末の圖の如く物凄く想像したのであつた。太陽の光が赤く燒けたやうな色に減退した下に人間が最後の奮闘を爲しつゝある圖、カンテラの薄赤い光の中に骨立つた裸の男が光澤の無い皮膚に汗を流しつゝ一昆蟲と奮闘を爲しつゝある處の圖、兩者の間にたいした差違は無いと思つた。

其うち文太郎は眼を覺まして出て來た。頭は暫く刈らぬと見えて蓬髮が長く延びてゐるので顏が小さく病人らしく見えた。それに目の中は赤く血走つて毛穴の汚れた青白い皮膚には脂が冷たさうに光つてゐた。粘つた口に二三服煙草を喫んで、

「時にお前の事業はどうなつた。何か故障でも起つたのではないかい。昨夜も南京蟲狩を遣り乍らひよつと氣になつたので今日は聞きに行かうかと思つてゐたのだ。」と心配さうに言つた。斯く〳〵の手順になつてゐるのだといふ事を話すと、

「さうかそりや結構だ。お前の事だから旨く遣る事とは思つてゐるが時々氣になつての。」斯く言つて全く安心したやうに心地よく笑つた。

四十三

春三郎に曾て松葉屋の營業に忠實した如く又此新事業に猛進するより外もう取る可き道は無いのであつた。

斯して愈々九月一日を以て緒についた。

事業は案外の好成績であつた。

十月の末に照ちやんは分娩した。お霜婆さんは暫くの間手傳に來た。照ちやんが產褥に就いてから春三郎は又下宿屋當時のやうな種々の不便を經驗することになつた。殊にお霜婆さんが二日許りして歸つた後は已むを得ず襁褓の洗濯をもした。赤ン坊の糞が飴のやうに粘著してゐる上に自暴に石鹼を塗りつけてごし〳〵と洗つたりもした。

四十四

松葉屋の暗い冷たいやうな感じとは反對に春三郎の家は狹い乍らも明るく暖く、照ちやんの顏にも春三郎の顏にも生き〳〵した色が見えてゐた。

「まあ春さんが働き口があるから斯ういふ事になつて來たのだ。お前は仕合せだよ。」とお霜婆さんは照ちやんに言つた。お霜婆さんは斯く照ち

やんの身の上を喜べば喜ぶ程常藏の今の境遇を悲しむ情も亦自ら禁ずる事が出來なかつた。尤も常藏に就ては辯護、差入れ其他萬事上役に任してあるので唯時々の手紙を見て僅に安否を知る位に止まつてゐた。斯してお霜婆さんは宮詣が濟むまで赤ン坊の世話を見てそれから上役の宅へ歸つた。
「此機會に斷つてしまつたらいゝでせう。」と春三郎は言つた。
「そりや私だつて孫の世話をする方が幾ら樂みか知れないけれど、それでは義理が濟まんから。」と言つてお霜婆さんは聞かなかつた。けれども其後照ちやんが少し腹をいためたとか、今日は忙しいとか言つて何かにつけてお霜婆さんを呼び附けた。お霜婆さんも其都度又喜んで來た。
松葉屋の方は盛春館の女將の言つた通り半年過ぎた後は漸く損失が少くなつて帳面づら丈けでは四五圓の利益を見る月すらあつた。文太郎は非常に喜んで、
「流石に盛春館の女將さんは旨いもんだ。ちやんと言ひ當てたから豪い。」と言つて嬉しさの餘り頻りに盛春館の女將に感服してゐた。春三郎もそれを聞いて嬉しく思つたが、此頃だんだん文太郎の皮膚の色が惡くなつて、少し痩も見え、どことなく元氣も銷沈してゐるのを氣にして、時々牛肉位は食ふやうにしたらよからうと注意した。
「そんな事をしたらお前、折角の利益がすぐ又無くなつてしまふぢやないか。ハヽヽヽ。」と淋しく笑つたが、「けれども子供にだけは月に一二度位は食はせて遣ることにせうかねえ。」と思ひ入つたやうに言つた。さうして其後逢つた時、
「此間お前があんなに言つたので、二三日前ひよつと思ひついて馬肉を食つて見た。少し臭いが併しなか／＼食へるよ。子供なんかも喜んで食つた。」と言つた。けれども亦其次ぎ出逢つた時は、相變らず色の惡い皮膚をして元氣が優れぬやうであつたが、
「馬肉も一度や二度はいゝが度々は矢張り駄目だね。」と笑つた。もう馬肉は懲りて止めたものと見えた。それかと言つて牛肉を食ふ容子などは更に見えなかつた。
事業の方は漸く盛大に赴くやうであつた。
赤ン坊は滯りなく肥立つた。唯乳が不足するので牛乳で育てねばならなかつた。牛乳を蒸す器械を買ふ時に照ちやんは餘り高いからよさうと言つた。春三郎はいくら高くつても生の牛乳を子供に飲ますことは出來ぬと言つて其を買つた。照ちやんは蒲團でくるんだ赤ン坊を更にねんねこで負つて表の井戸の水も酌むし板間の雜巾がけもした。
赤ン坊の秀子はだん／＼に成人してふら／＼と歩くやうになり、お霜婆さんも遂に同居するやうになり、晩飯の食卓を照らす灯火は明るく、秀子を中心に一家が笑ひ崩れる事も珍しくなくなる程事業はだん／＼歩を進めて、折節の北清事變が多少經濟界に影響を及ぼしたに拘らずかなりの成績をあげた。
斯る同じ狀態を持續して其翌年も半ば以上を過した八月の末頃であつた。暫く無沙汰をしてゐた文太郎から葉書が來た。見ると稍震へた字で斯うあつた。
『小生十餘日以前より發熱、八九度の間を上下して今に解熱せず、少し御相談致し度、御閑暇ならば御光來を待つ。』

四十五

春三郎は取敢へず行つて見た。此日は殊に蒸し暑い日であつたが例の八疊の室に文太郎は薄い蒲團を延べて裸體になつた儘暑苦しさうに

寢てゐた。筋肉に弛みが見えて青白い皮膚に光澤が無かつた。

「春、失策つた。」と春三郎の顔を見ると行きなり文太郎は大きな聲で言つた。體の上部は肌脱ぎになつてゐるに拘らず、腹部には厚ぼつたいものを卷き附けて、更に尺幅の廣いフランネルの切を後から股をくゞらせて臍の邊まで當てがつて其端を片方の手で握つてゐた。

「下痢でもするのですか。」と春三郎は其大きな聲に一驚を喫して聞いた。

「此間何も敷かずに晝寢をして腹を冷やしたのが因らしい。」といかにも殘念さうに言つて文太郎は彼の股をくゞらせて居たフランネルを力を入れてぐつと引締めた。二本の脚も露出したまゝ投げ出してゐた。

「それで醫者は何といふのですか。」

「醫者はマラリヤだといふのだがね、これ見て呉れなか〳〵熱が下らない。」と言つて文太郎は枕頭に自分で亂雜に書き留めた體温表を示した。熱は頑固さうに三十八度一二分から九度四五分の間を毎日のやうに上下してゐた。こんな激しい熱でゐて自分で體温表を認めてゐるのを春三郎は哀れに思つた。

「腹を冷やしたのが因でマラリヤといふのは變ですね。下痢は激しいですか。」

「下痢は餘りしない。唯時々腹が痛くつて困る。それに食慾が無くつての。」と眉を顰めた。それから俄に噴き出すやうに笑つて、「昨日餘り何も食へぬから鮨が食ひ度いと思つて醫者に内々で食つたところがさあしまつたね。直ぐ胸が閊いて吐き出してしまつた。」其笑つた顔は衰へてゐるに拘らず目の縁など熱の爲めに赤く色づいてゐた。

春三郎は母の命を取られたチブスを病氣の中で最も恐るべきものとして嫌つてゐた。さうして少し熱の頑固な病人を見ると直ぐチブスではあるまいかと想像して怖氣立つのが常であつた。嘗て照ちやんの病氣もさうではあるまいかと一時は心配したがそれは幸にさうではなかつた。今文太郎の此熱もどうやら疑へば疑はるゝ點の多いのに少からず心を痛めた。さうして兎も角も今一人確かな醫者に見せてはどうかと勸めた。文太郎は、

「其も物入りだからね。」と淋しい眼で一寸春三郎の顔を見た。春三郎は、

「馬鹿な、命に代へられますか。」と言つて早速車を命じて或國手を訪問した。車の上でも春三郎の心は騷ぎ立つて容易に靜まらなかつた。國手は幸に在宅であつて目前には往診して遣るとの事であつた。

國手を待ち兼ねて春三郎は文太郎の傍に坐つた儘恐ろしい想像を廻らしては打消してゐた。其時文太郎は斯んな話をした。

四十六

「實はお前にもゆつくり相談せうと思つてゐたのだが、一時漸く利益を見るやうになつたのも僅の間であつて近頃の景氣では迚も此商賣では食つて行くだけの事も難かしい。いつかお前とこ ろに掛けた厄介もまだ其儘になつてゐるし、其他二三軒も同様の始末だし、僅かばかりあつた娘さんのものも皆質屋に入れてしまつたし、先々月あたりからは月々の諸拂も滯り勝ちの有様で、もう今度といふ處まで行き詰めてしまつた。矢張り此商賣も駄目であつたね。」

文太郎は此の二年間の奮鬪も從來の各種の事業と同様に遂に失敗に終つた事を考へて熱にほてつた頰にほろ〳〵と涙を傳はせた。春三郎は覺えず暗い室内を見廻した。自分が其に從業して居つた時取り散らしてあつた机の上が其時の儘に取り散らしてあつた。此の机の上を片附ける餘裕すら無しに文太郎は[illegible]を續けて

來たのだと考へると、春三郎は涙ぐまずに居られなかつた。

「其處でお前に相談し度いといふのは、もう此上は仕方が無いから思ひ切つて一つ身を落して見ようかと思ふのだがどんなものであらう。」

「身を落すといふのは？」と春三郎は病人の顔を見詰めて聞いた。

「屋臺店で餅屋でも遣つて見ようかと思ふのだ。」

春三郎は此の悲しい言葉を聞くに堪へなかつた。力めて戲談にして笑つてしまはうとしたがそれは無益の努力であつた。

「屋臺店は僅かの損料で日借りが出來るし餅の買入れも知れたものだから資本といふ程のものは殆どいらないし、それに其日の利益だけで燒芋でも買つて子供に食はせて置くとすれば第一氣樂なのが何よりだ。」

此の「氣樂なのが何よりだ。」といふ言葉は一層悲痛な響を春三郎の耳に傳へた。文太郎はもう奮闘に飽いたのだ。飽いたといふよりも疲れ切つたのだ。子供の口にせめて馬肉でも食はさうといふ考のあつた時はまだ今日に比べて多少の勇氣があつた。燒芋で饑を凌がすので滿足して唯氣樂な事を欲するやうになつたのはもう全く勇氣を銷耗し盡して心身共に疲れ切つたといふ證據であつた。見ると文太郎の眼の涙はいつの間にか乾いてしまつて曇つた瞳で熱心に春三郎の顔を見詰めてゐた。春三郎は慰むべき言葉を見出すのに苦しみつゝ唯國手の車の響を今か今かと待焦れた。

四十七

夜の八時頃に國手は漸く來診した。さうして診察の結果、

「これはマラリヤではない、チブスだ。」と診斷した。國手は風邪とチブスとの間に別に輕重をも認めぬやうな無造作な口吻であつたが、春三郎は戰々兢々として唯此一撃を恐れつゝあつたので體の肉の慄くのを覺えた。暗い灯火の下に稍落つかぬ樣で國手の宣告を待ちつゝあつた文太郎は、

「チブスですつて。これは怪しからん。」と非常に興奮した調子で言つて絕望したやうな物凄い笑ひ方をした。國手は赤十字社病院に關係があるところから文太郎は翌日其病院に入院することに極つたので、春三郎は其夜は一先歸宅した。

松葉屋を表に出ると淸い涼しい風がさつと膚に當つた。今迄熱臭い蒸れたやうな空氣を吸うてゐた春三郎は蘇つたやうに覺えた。浴衣がけに團扇を持つた健康さうな人がぞろ〱と明るい火の町を歩いてゐた。春三郎は土地を踏む足が一高一低でまだ本當に心が落著かぬやうに思はれた。

「チブス？　いかに忌むべき病名であらう。母も此病氣の爲めに取られた。憐れむべき兄――神の如き兄――も亦此病氣の爲めに殪れるのではあるまいか。」と此處迄考へて來て、まだそんな不愉快な事を考へる可き場合ではなかつたと急いで其を打消した。さうして入院するとなると附添うて看護をするのは誰であらう。子持の姉、而も今では肝腎な女將たる姉は迚も松葉屋を出ることは出來ぬ。さうなれば自分より外にない。宜しい自分で遣らう。」と斯う決心すると漸く心が落著き始めた。次に問題は金の事であつた。「入院料、是はどうしたものであらう。今は施療患者は滿員だ、三等は空いてゐるだらうと思ふが若し塞がつてゐたら二等になるかも知れぬと國手は言つた。よろしい。二等でも宜しい。」此時春三郎は一種の誇ともいふべき滿足を覺えた。彼の事業を經營する以前は此の東京で十圓の金の融通も容易ではなかつた。

たとひ一時の急を救ふに過ぎぬとは言へ取引先で百圓二百圓の金の調達は左程困難とは思えなかつた。若し金ある爲めに文太郎の病氣を救ひ得るとすると此一事だけでも相當に意味ある仕事を爲し得たことになる。春三郎の心は愈く落着いた。

四十八

春三郎が家に歸つた時、お霜婆さんと照ちやんとの間には嬉しいやうな悲しいやうな談話が交換されてゐた。お霜婆さんは今日上役の家を訪問して常藏の出獄のもう半月の後に迫つてゐることを聞いて來たのであつた。之より先、常藏は第一審で有罪と決し、二審三審を經て矢張り原裁判通りに判決され遂に一年餘の刑に問はるゝ事となつて昨年の今頃既決監に移されたのであつた。其出獄の時如何に痩せ衰へて居るであらうかといふ考へは口には出さなかつたが母娘の胸には同時に起つた。

「けれども無事に出られるのを何よりの仕合せと思はねばならん。今後の兄さんの一身は心配すな、決して惡いやうには取計らはんからと仰しやつて下さるから其點もまあ大船に乘つた氣で安心してゐる。」と萬事上役の言葉にすがつてゐるお霜婆さんは斯う言つた。

「だけれど、もう會社なんかへは二度と這入らんやうにしたいのね。」と照ちやんは言つた。

それから母娘で、出獄する時分に著る著物を至急仕立てて送らうかと相談したり、歸京前に家を借りて置かうかとか、まあ此家に當分同居する方が善からうとか、そんな事を相談して流石に出獄の喜を包み切れずにゐるところへ春三郎は歸つて來たのであつた。

常藏の出獄の件は春三郎をも喜ばせたけれども、文太郎の病氣はそれ以上に母娘を驚かした。尙ほ當分病人に附きつきりで介抱するといふ春三郎の決心を聞いた時に母娘は傳染の危險をも考へたが、又嘗て照ちやんの病氣の時に春三郎が心切に介抱して呉れたことをも回想せずには居られなかつた。

「まあ、どうして其んな病氣に罹りなすつたのでせう。」と照ちやんは秀子に白い胸を開けて乳房を含ませながら言つた。

「少し手遅れなのが何より殘念だ。マラリヤだなんて近所の醫者がよい加減の事を言つてゐたらしいのだ。チブスならチブスとしてもつと早く其手當をせなければならなかつたらうに。」と斯くいひながら春三郎は照ちやんのはたけた胸や搔上げた髪に目を留めていつの間にか全く世帶染みて三年前の娘らしい面影の殆ど消えて無くなつてゐるのを見た。

四十九

取引先に一本の手紙を認めて照ちやんに持たせて遣つた。暫くして秀子を負つた照ちやんは返事を持つて歸つて來た。春三郎の要求した程は難かしいが責めて半額だけはどうかせうとあつた。春三郎は固より返事を豫想して態と大袈裟に二百圓の前借を申込んだのであつたから、半額だけといふことで別に驚きもしなかつた。

其夜は夜更をして事業の方の整理をした。二時が打つた時、

「まだお休みなさらないの。」とお霜婆さんは聲をかけた。お霜婆さんはいつも眠つてゐるのかと思ふと覺めてゐた、又覺めてゐるのかと思ふと眠つてゐた。眠と現との距離が極めて短く、熟睡といふやうな事は殆ど無いやうであつた。體の疲れ切つた老人になると誰も斯んなものであらうかと春三郎はいつも不思議に思つてゐた。

「えゝもう少し起きてゐます。」

其時もう幽な鼾は聞えてゐたに拘らずお霜婆さんは、

「さうですか。」と明かに返辭をした。さうして鼾はすぐ又聞え始めた。それから又間も無く、

「照や〳〵、秀が踏み脫いだよ。」と照ちやんを起す聲が聞えた。

暫くしてから春三郎は餘り鼠の荒れるのに劫を煮やして、

「シッ。」と聲高く追うた。お霜婆さんは、

「本當に腹の立つ鼠ですことね。」と響に應ずるが如く言つた。けれども一分間も經たぬうちに又例の幽な鼾を洩らした。

「もうお霜婆さんの命も長くはないのだ。」といふ考が春三郎の胸に浮んだ。

五十

翌朝早く春三郎は松葉屋に行くと文太郎の熱は矢張り八度四五分あつた。

「もう此頃は熱になれたから朝など九度以下になつて居る時は別に熱があるやうな心持はしない。」と文太郎は言つた。けれども衰へた目の緣の赤味を帶びてゐるのは昨日に異ならず、口を開けた時に荒れた白い舌の見えるのを春三郎は傷ましく覺えた。重湯は土鍋のまゝ枕許に置かれてまだ一口も飮まぬものらしかつた。

「貴方昨晩も食らなかつたし少し位食らんとお體がだん〳〵弱る許りですよ。」とお金は珍しく枕許についてゐて斯う言つた。此頃は客が減つてゐる方ではあるけれども文太郎の病氣以來はお金が萬事を主宰せなければならぬので殆ど染々枕許に坐つて介抱する間も無かつた。

「そりやいけませんよ。少しは自分でも奮發して食らなきやあ。」と春三郎も傍から言葉を添へた。けれども文太郎は、

「よし今少し經つたら飮む。」と言つて容易に承知しなかつた。

其中赤十字社病院から釣臺が來た。

「釣臺には及ばんと言つて置いたのに。人力車で行けない事はない。」と文太郎は不機嫌さうに言つた。

漸く重湯に口をつけたが茶碗に半分許りで止めた。それからお金が簞笥から出した洗張りをした田舍縞に著替へて床の上に坐つたまゝ淋しさうに其邊を見廻した。三人の子供は皆學校に行つてゐた。下の子供は一人の下女が連れて買物に行つた留守であつた。お金は手拭に塵紙に著替などを取り揃へて風呂敷に包んだ。

「おやまあどうなすつたんです。」と言つて這入つて來たのは盛春館の女將であつた。

「到頭入院するやうになりました。」と文太郎は女將の顏を見ると情なさうに言つた。

「まあさうですか。だけれどお兄さん、病氣をした以上は入院に限りますよ。一週間か二週間辛抱なすつたらすぐ御全快ですよ。」と女將は何も彼も判つたもののやうに挨拶をした。

「えゝ一日も早く癒つて歸ります。」と文太郎も快活に答へた。

軈て文太郎は春三郎が手を添へる間も無く突と立上つたと思ふとヒョロ〳〵とよろめいた。春三郎は急いで後から支へた。

「どうぞ旦那樣早くよくおなりなすつて。」と臺所から出て來た年雇の下女は涙乍らに言つた。

五十一

釣臺には赤十字社の徽章の附いた雨合羽がかかつてゐた。人夫は其雨合羽を取つて更に其下の蔽を揚げた。白い潔い蒲團の上に同じく白い切で包んだ枕が置かれてあつた。文太郎は仰向に寢て目を瞑つた。

釣臺が表の戸にかたつと當つた響を文太郎は

意識した。釣臺は愈ゝ動き始めたのであつた。

此時若し此病氣で自分は死ぬるのではあるまいかといふ不安の念が込上げて來たが釣臺はそれにも構はずずん〳〵と町へ出た。町の角に來た時年の若い下女は末の子を背負つて今買物から歸つたのがふと釣臺の傍に春三郎が附いてゐるのを見て目を瞠つた。末の子は何とも辨へず不思議さうに目送した。四人の人夫は二人づつ當に肩を入更へた。さつき少し降つた雨が上つて蒸すやうに暑いのに春三郎は汗を拭き〳〵釣臺の後に跟いて歩いた。さうして時々氣になつて釣臺の中を覗いて見ては、

「苦しくはありませんか。」と聞いた。

「いゝえ。」と文太郎は答へたが顏はいつもより一層赤く苦しげに見えた。

「これを上げませう。」と言つて春三郎は自分の手に持つてゐた團扇を薇の透きから文太郎に渡した。文太郎はそれを受取つてぱた〳〵と煽いだ。春三郎は此傷ましい釣臺を氣味惡げに目送する路傍の人を腹立たしく見返した。

或坂の途中で人夫共は釣臺を地上に下ろした。此の蒸すやうな大道に釣臺を下ろして何をするのだと春三郎は躍起になつて人夫を叱つたが、人夫は冷刻な顏に何の表情も無く悠々と緩んだ片隅の釣竹を直し始めた。

「兄さん氣分は惡くありませんか。」と春三郎は心に躍る怒を壓へて靜かに文太郎に聞いた。

「隨分暑いねえ。併し別に氣分は惡くない。」と文太郎は激しく團扇使をし乍ら答へた。

天氣の晴れ渡つた日だと日は盛んに照り附けても風があつて涼しいのに、今日は誠に生憎の天氣だと春三郎は最前から此の天候をも腹立たしく思つてゐたに、又途中で釣臺に故障が出來るなどよく〳〵の事だと、斯る事にまで不運の附き纏ふ此の病人を哀れに思つた。

本郷から澁谷迄は平生でも遠い路を此日は二倍にも三倍にも覺えた。哀れな釣臺が淋しく病院の門に舁き込まれて門内の廣い空地を横ぎつて玄關に置かれた時春三郎は蘇生したやうに覺えた。

「兄さん愈ゝ病院へ著きました。もう大丈夫です。」と釣臺の中に向つて言つた。文太郎は東か西かをも辨へず唯日の當らぬ涼しい空氣の中に舁き下ろされた事許りを意識してゐたのであつたが此の言葉を聞いて春三郎以上に蘇生の思ひをした。人夫が草鞋を脫いで廊下傳ひに釣臺を病室の口まで舁き込んだ時、白衣の看護婦が二三人ばら〳〵と現はれて、此の蒲團のまま寢臺の上迄運ばうではないかと相談した。文太郎はそれにも拘らず立上つてよろめきながら歩いた。其熱の上つた顏は汗ばんで肩で呼吸をしてゐた。

五十二

純白の切で蔽はれてゐる寢臺の上に横になるや否や白衣の看護婦は體溫器を挾んだ。文太郎は血走つた目を開けてきよろ〳〵と周圍を見廻した。白い壁が潔く光つて窓からは涼しげな庭の青葉が見えた。此處では已に幾多の人が呼吸を引取つたか知れない傳染病室も今迄の暗い不潔な八疊に比べて恰も宮殿のやうな心持がした。體溫器は熱が四十度三分に迄昇つてゐる事を示したに拘らず文太郎は苦痛を忘れたらしい調子で斯う言つた。

「あゝ此で樂になつた。」

醫師は聽診器を握つた儘醫局から出て來て直ちに診察した。其あとで看護婦は敏捷に立働いた。今迄春三郎は斯る物の存在をすら知らなかつた水枕を持つて來て文太郎の頭の下に當てがつた。次に氷嚢を釣り下げる器械を枕許に置いて其に惜げもなく氷を入れた二個の氷嚢をぶら下げて額に當てた。さうして心臟の上

にも別に一個を當てがつた。其都度、
「あゝいゝ氣持だ。」と心から嬉しさうに文太郎は言つた。それから心地よげに瞑つて居た目を開けて、
「春、斯う行屆いた介抱をして貰ふ事になつたら己は大船に乘つた氣でゐられる。それにお前は忙しい體だ。留守宅の營業の方も時々氣を附けて貰ひ度いから憖ひ歸つて呉れぬか。それに此處の費用萬端は……」と心配さうに言ひかけたのを春三郎は打消すやうに言つた。
「そんな事は氣にしないで置いて下さい。私もそれ位の融通はどうか斯うか附くやうになりましたから。それにまあ今日だけは兎も角泊つて行きませう。明日からは兄さんの方の模樣さへよけりや行つたり來たりする事にしてもいゝから。」
「それぢやさうして貰はうか。」と言つて又目を瞑つたと思ふと程なく目を開けて呼吸づかひは急がしいに拘らず熟睡した容子に見えた。春三郎は其間に事務室や醫局に往來して入院證を差入れたり醫者に病症の見込などを聞いた。さつき診察をした人は不在だとの事で年の若い脊の高い背廣の洋服を著た一人の醫者が、
「まだはつきりチブスと極つた譯でもない。明日あたり病菌の試驗をして見た上で決定します。さうしてチブスとなれば一定の時日を經過せなければ到底解熱するものではないのですから靜かに其經過を待つより外仕方が無い。」と極めて冷靜に言つた。さうして春三郎の、
「癒るでせうか、難しいでせうか。」といふ質問に對して、
「そりやあ未だ疑問だ。醫者はベストを盡すのみで、生死の豫言は出來ぬ。」斯う言つて同僚らしい同じく若い醫者と顏を見合せて得意らしく笑つた。其向うに椅子を並べてゐる他の醫者は皆此の問答に無關係なるものゝ如く冷やかに各〻の職務に鞅掌してゐた。

五十三

春三郎は一種の冷たい空氣が自分や文太郎を包んでゐるやうな心持がして、頼母しく思つた廣大な建物も何處となく頼りなく感じつゝ長い廊下を通つて病室に歸つて見ると、一人の看護婦が文太郎に藥を進めつゝあつた。
「よく召し上りました。それで今少し經つたら今度は牛乳を飮んで戴かなけりやなりません。」と看護婦は子供に對するやうな口吻で言つた。
文太郎は默つて點頭いた。
文太郎の顏色は相變らず赤く熱は上つてゐるやうであつた。けれども殆ど苦痛を忘れてしまつたやうに看護婦が口に入れて呉れた氷を心持よい齒音をして齧みながら春三郎に向つて斯う言つた。
「一睡りしたので大變氣分も落著いた。さつき今晩泊るやうにお前は言つたが、此容態ならもう大丈夫だから決してそれには及ばん。晩飯でも食つたら歸つて呉れ。若し急に用事でも出來たらあの三河屋であつたかね、彼處まで電話を掛けて取次いで貰ふ事にするから。」
春三郎は此の文太郎の元氣や看護婦の周到な注意を見てさきに醫局で受けた冷たい感じも忘るゝともなく忘れてしまつて再び此廣大な建物、完備した組織に信頼する念が強くなつた。それと同時に自分自身の疲勞をいくらか覺え始めて來た。昨夜の睡眠不足や、今日釣臺に跟いて暑い最中を氣を遣ひながら歩いた其等の疲勞がだん〳〵と出て來るやうに覺えた。今朝家を出掛ける時、
「貴方も亦あんまり體を使ひ過ぎていつかの松葉屋の時のやうに病氣になつてはいけませんよ。」と照ちやんの心配さうに言つた言葉も思ひ出された。

「歸つてぐつすりと熟睡して元氣を恢復した上で明日又來よう。」さう考へ出すともう晩飯を此處で食ふといふ餘裕もなくなつた。

「早く歸り度い。」といふ矢も楯も堪らぬやうな心持が込上げて來るやうに覺えた。

「それでは今日はこれから歸つて、明日朝早く來ませう。」と春三郎は文太郎の枕許に立つて言つた。

「あゝさうして呉れ。」と文太郎は機嫌よく目を瞑つたまゝで答へた。

春三郎は病院を出た時、昨夜松葉屋の門を出た時と同じやうな蘇生の思ひをした。

五十四

家へ歸つて見ると秀子は赤い鼻緒の下駄をくくりつけてお霜婆さんに手を引かれ乍ら嬉々として表を歩いてゐた。さうして春三郎を見附けると、

「とうちやん。」と飛び附いて來てぶら下つた。今晩は歸らぬ事と豫期してゐた主人が歸つたので照ちやんも狼狽するやうに迎へた。さうしてお霜婆さんは秀子の手を引いた儘すぐ近所の肴屋へ刺身を取りに行つた。晩酌の德利が主人の勞を犒ひ顏にいつの間にか銅壺に浸つてゐた。春三郎は病院の冷たい鬱陶しい心持と比べて此の家庭の平和な暖かな味に醉ふやうに覺えた。けれども元氣不元氣は扨置きあの大病人を唯一人病院に殘して來たといふ事は何となく穩かで無いやうにも思はれて多少の不安を其心に覺えずには居られなかつた。春三郎は盃を口にし乍ら戰場を逃れ歸つた兵士のやうな落著かぬ心持でゐた。

けれども草臥れてゐることも亦事實であつた。一合の醉が廻るか廻らぬうちにもう睡眠を催して死人の如く臥床の上に倒れた。さうして翌朝六時迄何事も知らず熟睡した。何か不穩な夢を見たやうに考へられもしたが思ひ出すことは出來なかつた。

翌朝は朝風に車を驅つて先づ松葉屋を訪うた。別に變りは無くお金も年輩の女中も唯文太郎の事を心配してゐた。春三郎はよい加減に慰めて置いて病院に車を向けた。

病室の戶を開ける時は萬一どうかした事が一夜の間に起りはしなかつたらうかと危まれたが、扨て內に這入つて見ると文太郎は昨日の如く氷嚢に頭を包まれ乍ら熟睡してゐた。春三郎は壁に掛けてある體溫表を見た。夜中に八度五分に下つた熱は今朝又四十度二分に迄昇つてゐるのに驚かれた。其他に別に異狀無く浣腸便一とある鉛筆の文字が目にとまつた。

五十五

其時一人の看護婦が兩手に湯氣の立騰る金盥を持つて這入つて來た。

「昨夜は如何でした。」と春三郎は其看護婦に聞いた。

「不穩でいらつしやいました。」と年の若い看護婦は稍高慢氣に答へた。此人は昨日見た看護婦とは別の人であつた。其若い高慢氣な看護婦はそれでも白衣の袖をまくり上げて甲斐々々しく腕先を現はしつゝ其金盥の湯で手拭をしぼつた。さうして、

「もし〳〵。」と病人を起して、

「お體を拭きますよ。」と注意した。病人は目を覺まして乾いた脣を乾いた舌で濕さうと力め乍ら首肯いた。さうして看護婦に枕許の水を口に入れて貰つてから漸くはつきりと目が覺めたらしく其邊を見廻した。

「お前早來たのか。」と顏を突出した春三郎を見て言つた。

「苦しくはありませんか。」と春三郎はさきの乾いた舌で乾いた脣を濕さうと力めた痛ましい

光景に心を打たれ乍ら勞るやうに聞いた。
「格別苦しいとも思はん。家に居た時に比べれば大變樂だ。」文太郎は斯く言つて二度目の氷を今度は自分で手探りに口に入れた。

斯る間に看護婦は手拭で文太郎の額や胸や手足やを拭いた。春三郎は看護婦の一見高慢らしい態度を初めは不愉快に思つたが流石に職務には忠實なのを心地よく覺えた。文太郎は、
「いゝ心持だ。」と拭はれた腕を目の前に突出して眺めながら言つた。

其日は格別變つた事は無かつた。彼の國手も今日は出勤して二三の若い醫者を從へて來診した。午前檢鏡の結果愈々チブスと極つた。病室の表に「佐治文太郎」と書かれた札の外に「病名チブス」といふ札が直ちに又掲げられた。もう全快に近づいて杖を突いて散歩をする他の病室の患者などは恐ろしさうに此戸外を通り過ぎた。

五十六

其日午後も文太郎は靜によく眠つた。唯牛乳や重湯などを今日は昨日程に飲まなかつた。憐れの子供に對する母のやうな口吻をする看護婦が、
「さあ召上れ。もう一寸。さうです〳〵よく召上つた。」などと骨を折つて勸めた。

それから其日も文太郎は昨日の時刻になると春三郎に歸ることを勸めた。
「又お前が病氣でもすると大變だ。昨夜など殆ど目も覺めなかつた位に已は熟睡したのだから傍にゐて貰ふ必要は無い。歸つてゆつくり休息して來て呉れ。」

春三郎も亦いつの間にか此處の重い空氣に壓迫されて耐へられないやうな心持がするのであつた。其日も亦歸つた。

翌日も亦前の日と同じ時刻に病院に來た。病室の戸を開ける時も昨朝と同じく萬一どうかした事が一夜の間に起りはしなかつたらうかといふ考が閃いて少し心臟の鼓動が高まるやうに覺えた。戸を開けて見ると文太郎は矢張り昨朝の如く一人寢臺の上に寢たまゝで室内は寂寞としてゐたが唯昨日と異るところはぱつちりと眼を覺してゐた。さうして春三郎を見ると行きなり斯う言つた。
「昨夜は弱つた。どういふものだか腹が痛んで二度許り注射をして貰つた。其に急に心細くなつて矢鱈に煩悶をした。……」斯う言ひ掛けて文太郎は眼を瞑つた。春三郎は其文太郎のものの言ひのどことなく判然せず少し舌の縺れる工合のあるのに一驚を喫した。さうして、
「さうでしたか、そりやいけなかつたですね。昨日歸らなけりやよかつた。」と心から後悔して言つた。
「已もお前を呼んで貰ひ度いと思つて度々三河屋迄電話を掛けて呉れるやうに看護婦に賴んだのだけれど看護婦がどうしても呼んで呉れない。それで到頭昨夜は看護婦と喧嘩をしてね。」

自分でも其舌の縺れ工合なのが氣になると見えて一寸言葉を切つた。さうして十分に口轡を した上舌を出して脣を嘗めた。春三郎は其舌を見て驚いた。心からかも知れぬがいつもより少し柴縮してゐるやうで餘程脣の方を内部へ曲げ込むやうにせねば舌が其に屆かなかつた。殊に舌も脣もがさ〳〵强張つてゐるのが見るからに傷しかつた。それから文太郎は又詰し續けた。
「『一人の看護婦の方は『すぐ呼んで上げます。』とかなんとか口頭許りで子供を瞞すやうな事をいふし、若い方の看護婦は『其では私の職務がどうだ。』とか高慢臭い事をいふし看病に障つたから『もう貴女方の世話にはならんから此部屋を出て呉れ。』と叱り附けた。ところが出るか

と思ふと容易に出ない。矢張り寢臺の傍に立つてゐるので愈ゝ癇癪が募つて來る。「目障りだから早く退かぬか。」と叱りつけたら今度は寢臺の後に隱れてゐてどうしても此部屋を出て行かない。…………」

五十七

「まだ其處に看護婦が居るだらう。」と文太郎は誰も居ない寢臺の裾の方を顎で指した。春三郎は此の突然の質問に覺えず文太郎の顏を凝視した。

「其處に隱れて蹲んでゐるだらう。」と文太郎は再び判然せぬ言葉で息卷くやうに言つた。

「いゝえ誰も居りはしませぬ。」と春三郎は漸く答へて續いて何とか言つて文太郎の心を沈め度いと思つたが適當な言葉が見出せなかつた。

「熱はどんな鹽梅です。」と獨言のやうに呟き乍ら春三郎は體溫表を見た。今朝の處にはまだ何も記してなかつた。看護婦の方で計りに來ないのか、或は計りに來たのを文太郎の方で拒絕したのか、何にせよ此大病人と看護婦との間にさやうな衝突のあるといふ事は甚だ困つた事だと春三郎は眉を寄せた。どうしたら善からうと唯當惑して體溫表の前に突立つた。

「今朝の熱はまだ取らないのだ。」と文太郎は冷かに言つて、

「自分では有るのだか無いのだか判らない。何でも昨夜は大變下降つたとかいふ事であつた。」と物言ひの判然せぬ口許を氣にするやうに掌で撫で乍ら又言葉を切つた。春三郎は我に歸つて體溫表を凝視すると、成程赤い鉛筆の線は急劇の變化を示して昨夜半の體溫は六度二分に下つて居た。六度二分といふと平溫よりもまだ低い位である。四十度二分から六度二分に急轉直下した赤鉛筆の破格に長い線は此現象の善か惡かを判斷する前に先づ春三郎の心を波立たせた。漸く心を取り靜めて脈搏の方の青鉛筆の線を見ると、これは赤鉛筆と勢を異にして百三十の數を示して居た。春三郎は體溫表の前を彈かれた如く離れて我知らず又文太郎の枕許に立つた。昨日迄頭の周圍を包んでゐた氷囊は全く取り去られて枕も丸枕に代つてゐた事が今になつて初めて目に留つた。つとめて平氣を裝うて其額に手を加へて見た。普通の人の額の冷たさに變つた物ないやうな冷たさを掌に覺えた。次に乾びた脣を擦りつゝあつた文太郎の手を取つて脈を見た。あるか無きか判らぬやうな小さい脈が一つ〳〵を數へる間も無く小刻に打つた。文太郎は朦朧とした瞳にぢつと春三郎を見て、

「脈はどうだい。自分で取つて見たが一向判らぬ。」と心許なさゝうに言つた。春三郎は何と答ふべきかを辨へず、

「兎に角に熱が下降つたのは何よりではありませんか。これなら全く平溫だ。」と心の動亂を隱して力めて平氣な風を裝うた。

「熱は下つたか知らぬが、どうも時々腹が痛くつて。」と文太郎は又絕え〳〵の聲で言つた。

五十八

斯く話すうち文太郎は春三郎の來たのに安心したが爲めかいつの間にか眠つたやうであつた。口を開けて眼を半眼に開けて鼾を立てゐるのか眠つて居るのか一寸見分けがつかなかつたが、「一寸醫局へ行つて來ます。」と言つた春三郎の言葉には返辭をしなかつた。春三郎は拔き足をして戶を開けて廊下に出た時暫く茫然とした。續いて、

「これは大變な事になつた。」といふ戰慄するやうな感じが全身に漲つた。わな〳〵と震へる足を踏占めて醫局へ行つた。醫局の戶を明けると多勢の醫者の眼は一樣に春三郎に集つた。春

三郎の眼が多くの醫者を見分ける前に其中の一人は、
「やあ。」と聲をかけた。見ると彼の年の若い春の高い背廣の洋服を著た醫者であつた。
「君ところへ使を出したところであつた。」といひながら空いてゐた椅子を春三郎に與へた。春三郎は如何なる言葉が此の醫者の口から出るかと堅唾を呑んで目を瞠つた。醫者は無造作に斯う言つた。
「腹膜炎を併發したやうですな。腸出血をやりましてね。それに心臟が非常に弱つてゐるから餘程氣を附けないと。」
「それでは昨夜から腹が痛むといふのは腹膜炎の爲めですか。」
「さうです。」と言つたきり醫者は後は默つて煙草を吹かした。春三郎の心の中は沸立つやうであつたが暫くいふべき言葉を知らなかつた。腹膜炎といふ病氣の性質は十分には知らなかつたが彼の中學校時代の朋友の一人が其病にかゝつて非常な苦痛を訴へた擧句遂に死んだ事だけを傳聞してゐた。腹膜炎と聞いた時今朝病室に這入つた時以來彼の心の中を彷徨しつゝあつた恐ろしい感じが愈々當面に迫つて來たことを知つた。
「それでは最う危篤といふ狀態なんですか。」と春三郎は血相を變へて聞いた。
「まあさういふ狀態ですな。」と醫者は投げ出すやうに言つた。春三郎は何といふ譯も無く腹立たしく、恰も醫者を自分の讎敵であるかの如く感じつゝ詰め寄るやうに聞いた。
「それでは全く絕望ですか。十中十迄悉く望が無いのですか。」
此間には醫者は困つたらしかつたが、斯う答へた。
「まあ十中七迄絕望ですが、三位の望はありませう。」
此の三といふ數字は何によつて割り出したのか恐らく醫者が當座逃れの遁辭に過ぎなかつたのであらう。けれども此場合春三郎に取つては之が責めてもの力綱であつた。
「さうですか、三だけの望はまだありますか。」と彼の眼は一種の輝を以て醫者を見詰めて言つた。
「えゝ三だけの望はあります。」と醫者は已むを得ず答へた。

五十九

春三郎の心の裡には種々の不平もあり種々の疑問もあつた。中にも、
「斯んな急劇な變化の起る病人ならば何故前から其だけの注意を與へて置いて呉れなかつたのですか。」とも詰問したかつた。
「度々腹痛を覺えるやうになる迄腹膜炎といふことを知る事が出來なかつたのですか。」とも聞いて遣り度かつた。
「何故に熱は俄然として平溫以下に下つたものでせう。」と其も不審し度く思つた。けれども是等の問題が其狼狽して居る頭に生じては消え生じては消えしつゝある時に「三の望はある。」といふ醫者の言葉を耳にしてもう其等の問題を提出する遑もなく絕望中の此一條の光明に縋つてどうかして今一度恢復させて遣り度いといふ希望に全心を支配された。
「それでは今後の看護上の注意は？」と春三郎は熱心に聞いた。
「まあ成るべく氣分を落著けていらつしやるやうに注意するのと今一つはどうかして少し滋養物を攝取されるやうに勸めることが大事ですね。」と醫者は言つた。
病室に歸つて見ると文太郎は前と同じく口も開け目も半眼に開けたまゝ熟睡してゐた。春三郎はつくぐ其顏を見た。心から此時は

全く死の相を現じてゐるやうに思はれたのを、
「そんな事は斷じて無い。どうしても恢復させねば置かぬ。」と心に誓つた。
　其日は前夜に眠らなかつた疲勞もあつたので、午過ぎまで安眠した。目が覺めたと思つた時文太郎は獨言かと思はれるやうに斯う言つた。
「己はどうやらした譯で此方へ來たのであつたね。」
　寢起であつた爲めかもの言ひが今朝よりは一層判らなかつたが多分此のやうに言つたものと春三郎は聽取つた。けれども此方へ來たといふのは此病院に這入つた事を言つたのか、國を出て東京へ來た事を言つたのかどちらであらうかと春三郎は一寸判じ兼ねた。意識は慥かなやうであつたけれども高い熱であつた爲め入院前後の事を覺えてゐないのか、それとも遙々國を出て此地に來て一途に下宿營業に苦しんだ擧句遂に此大病に取付かれたのを感慨の餘りに發した言葉であつたのか、孰れにしても餘り突然の質問であつたので春三郎は狼狽いた。
「此方と仰しやるのは此病院の事ですか。」と春三郎は聞いたけれども文太郎は默つてゐた。
「それとも東京の事ですか。」と春三郎は重ねて聞いたが文太郎はそれにも答へようとしなかつた。
　ふと見ると文太郎は又半眠に眠つた儘再び眠に落ちたやうであつた。春三郎も再び椅子に腰を下ろした。室内は寂寞として廊下を行く草履の音が一つ近づいたかと思ふと又遠ざかつた。

六十

　其日は午後二時頃に愈ゝ目が覺めて近頃にない好い心持だと病人は言つた。昨夜看護婦と喧嘩をした事なども殆ど忘れてしまつてゐるやうであつた。看護婦が來て藥を勸めると柔順に飲んだ。さうして脇の下に挾んで置いた體溫器がつい落ちてゐたのを氣の毒がつて、
「惡い事をしましたね。」と挨拶迄した。けれども例の若い高慢臭つた看護婦は何か含んでゐるやうな顏附をして自分の役目が濟むとついと出て行つてしまつた。母の子に對するやうな態度の看護婦も上部だけは矢張り丁寧であつたが何處にか前と違つた冷淡な影が潛んでゐるやうに春三郎には見えた。春三郎は斯る事に迄不運の附纏ふ文太郎の爲め耐へ難き寂寞を感じた。けれども文太郎は其等に頓著なく、
「幾らかよくなつたんだらうね。斯んな樂なことは近頃ない。」と氣も心も延び〳〵としたやうに言つた。舌の縺れることと脈の弱く早いことは依然として變らなかつたが所謂十中三の望に春三郎は愈ゝ憑みを掛けて文太郎の飲み度がらない牛乳をも言葉を盡して飲ませた。
　併し此平和は極めて短かつた。其夜から又激しい腹痛を訴へるやうになり、當直醫は屢ゝ來て注射をした。さうして注射で痛を忘れてゐる間だけ昏睡し、目が覺めると又痛を訴へた。
　翌日は晝間になつて同樣に苦痛を訴へたばかりか折角一度降つた熱が又四十度近くに昇つた。春三郎は夜の目も合はずに介抱した。
　文太郎の苦痛は日に増して増進した。腹部は遂に板のやうに腫脹して臍の如きは爪の痕程の痕跡となつてしまつた。斯うなると寢臺の上に釘附にせられたのも同樣で仰向に寢たつきり橫になる事も出來なくなつた。從つて背中も胴も痛むので病人は絕えず死力を出して寢返を打たうとすると其板の如く腫脹してゐる腹は遮二無二突張つて是亦耐へ難き痛を起すので已むを得ず又原の位置に復した。さうして、
「駄目だ。此痛をどうするのだ。」と文太郎は男泣に泣いた。

春三郎は病人の絶ゆる間の無い阿鼻叫喚の聲に自分も身を切られるやうに悶えた。或時、「何とか方法は無いのですか。」と唯手を束ねて病人の寢臺の傍に立つてゐる醫者を詰つた。其時醫者は何とも答へずに其儘病室を去らうとしたので、春三郎は堪えず其後を追うて、「全體此の病人をどうする積りです。」と居丈高になつて詰問した。醫者は冷笑を洩して春三郎の方を顧みもせず廊下に高い靴の音を立てて去つてしまつた。春三郎は手に刃を持つて居れば後から其冷刻な臭骸を屠つて遣り度いと迄逆上したが病人の事も氣になつて已むを得ず踵を返した。

六十一

其時病室に歸つて見ると看護婦がいつもの高慢らしき顏に似合はず少し物に恐れたやうな眞面目な顏をして何事をか文太郎と言ひ爭つてゐた。春三郎は彼の醫者に對する忿怒の情の收まらぬ胸を更に波立たせて容子を見た。

「自殺をするから刃物を持つて來いなんて仰しやるんです。」と看護婦は怯えたやうな、けれども同情の無い口吻で言つて春三郎に目くばせした。

「どうなすつたのです。氣分を落着けていらつしやらないといけません。」と春三郎は文太郎の手を取つて推靜めるやうに言つた。文太郎は、

「春、後生だ。どうか刃物を貸して呉れ。早く此の苦痛が逃れ度い。」と言つてはら〳〵と目から淚を落した。春三郎は狼狽へた。

「お前には迷惑は掛けん。己が自分で死ぬる。」と文太郎は朧氣乍らも力の籠つた言葉で重ねて言つた。春三郎は一種の鬼氣に襲はれて全身に粟を生じつゝ、

「いけません、そんな事は斷じていけません。」と強く文太郎の手を握つて答へた。暫く默つて春三郎の顏を眺めつゝあつた文太郎は、

「さうか、それも出來ぬのか。」と絶望したやうな悲しげな聲を出して行きなり毛布を頭から被つた。春三郎は形容の出來ぬ心持に暫く茫然として眺めつゝあると、だん〳〵毛布は頭上の方に幅を擴げて行つて、はつと思ふ間に其中にあつた手は枕許の手拭を摑まうとした。春三郎は再び一種の鬼氣に襲はれつゝ狼狽へて其手拭を奪ひ取つた。毛布の中ではすゝり泣く文太郎の聲が聞えた。

文太郎は暫く毛布を被つた儘動かなかつた。春三郎も默然として棒の如く寢臺の傍に突立つた。

此間に看護婦は醫局に急を告げた。二三の若い醫者を從へて來たのは初め文太郎を診た例の國手であつた。或大官の病を診る爲めに數日間何處かに旅行をして居るとの事であつたのが漸く歸京をしたものと見えた。

「少し腹が痛むさうだね。」と寢臺の傍に立つて靜かに彼の毛布を取つた。文太郎も流石に此聲を懷かしく聞いたのか、國手の爲すが儘に任しておつと目を瞑つてゐた。國手は同じ處に兩三度も聽診器を當て乍ら其顏はだん〳〵曇つた。國手は後で醫局に來るやうに春三郎に耳打して何事も言はずに歸つた。

此の頓服で文太郎の心は稍靜まつたのであらうかそれとも疲勞を極めたのであらうか暫く、靜平な狀態を續けて眠に落ちたやうであつた。春三郎が醫局に行つてゐる間看護婦は文太郎の寢臺の裾に椅子を置いて暫く容子を覗つてゐたが先刻來に引較べ餘り靜かになつたので欠伸を催した。彼はあたり憚らぬ大きな欠をして懷から袖珍の或醫書を取り出して讀み始めた。

六十二

國手は春三郎にもう危急は此の二三日に迫つ

てゐると言つた。それから、
―北茱伯爵の病氣を診に行つてゐた留守中であつたので殘念をした。」と附加へて言つた。それは自分が居さへすればも少し手當の方法もあつたらうといふやうな意味に取れた。茱伯爵の病氣と同時であつた事が文太郎の不幸であつたといふ意味にも取れた。さうして又文太郎の手當に落度があつたとしても、其責任は伯爵の病氣といふ事で十分解除され得るものの如く國手は信じてゐるものと取れた。春三郎は怨めしくも思ひ腹立たしくも思つたが今それを國手の前で陳述する心の餘裕を見出さなかつた。彼は空中を踏むやうな心持がしつゝ病室に歸つて見ると文太郎は此の二三日來珍らしく平穩なる眠に落つる事が出來たのが今や再び大苦痛の意識界に戻らうとしてゐる處であつた。看護婦は唯此病人は瀕死の人であるといふ事實の認識以外に何等の感情をも有する事なく彼の袖珍の醫書に目を曝しつゝあつたが、文太郎の苦悶の聲の漸く聞え始めたので又自己の職務に就くべき時が來たと感じてそれをポッケットに收めて立上つた。

阿鼻叫喚の幕は再び開始された。それから二日二晩疲勞の爲め時々三十分一時間昏睡に落ちる時がある外は殆ど苦悶の聲の絶ゆる時が無かつた。初めの間は其血を吐くやうな聲に春三郎は一々身を切られる如く感じつゝ生きた心持は無かつたが、睡眠不足と心配とから來る心身の疲勞と漸く其聲に馴れた神經の遲鈍とで遂には看護婦同樣唯器械的に看護をする迄となつた。

けれども文太郎が其大苦悶の裡に殆ど聞き取れ難き聲を絞つて、

「舟乘々々。」と連呼したのを聞いた時、春三郎は愕然として我に返つて、

「舟乘がどうしました。」と聞きかへした。が返答は無かつた。文太郎の意識は漸く朦朧として此も夢で言つたのか現で言つたのか溷濁した其眼は覺めてゐるのか眠つてゐるのか其すら判明しなかつた。けれども此言葉は甚く春三郎の心を掻亂した。文太郎は何と思つて舟乘々々と連呼したのであらう。此の地上の奮闘世界に飽き果てて、遠く塵界を離れた大洋の上に浮び、唯波濤を友とし檣頭を命とする單純なる生活に憧れた聲とも聞かれた。春三郎は考へた。

「併しながら舟乘も亦風浪と戰はねばならぬ。舟中の小天地に居る少數の人類とも戰はねばならぬ。」と。斯く考へて春三郎は憮然とした。文太郎は決して戰を回避しなかつた。彼は健氣にも人世と惡戰苦闘をして敗れ、今又最後に病魔と惡戰苦闘をして破れつゝあるのであつた。

文太郎は又斯う叫んだ。

「此の上生きたところが二十年だ。二十年が何だ。馬鹿な話だ。」と。

六十三

文太郎は遂に死んだ。締切れる數時間前お金や子供は寢臺を圍繞して喧い泣聲を浴せ掛けた。之が彼の最期に於ける責めてもの慰藉であつたらう。やがて看護婦は彼の屍に種々の侮辱を加へた。此斷末魔の苦みに食ひしばつた齒の間に、看護婦は鐵製の匙の形狀のものを當てがつて回轉した。ガリ〳〵と音を發して齒の間には空虛が出來た。無念らしく此の鐵製の捩子を噛んだ屍はやがて又裸にされた。續いて綿を以つて耳、鼻、口を初め體中の孔を悉く塞がれ、繃帶を以て四肢五體を包まれた。屍は斯る侮辱に反抗することも出來ず、彼等の爲すがまゝに動搖された。

春三郎は病室を出て月明りに庭に出た。四邊は寂寞として人影一つ見えず病院の夜半の淋しさを今更のやうに覺えた。彼はせき來る

涙を壓へることが出來ずペンチに凭れて心ゆくまで泣いた。涙は後から／＼と迸り出て暫く止める事が出來なかつた。

人の足音が聞えたやうに思つて顏を上げた。けれどもそれらしいものは見えなかつた。今迄氣が附かなかつたが此夜は寸翳の無い月明であつた。露が空中に滿ちて月光は物毎に煌いてゐた。春三郎は茫然として暫く大空を眺めた。

「兄の死は固より悲しい。けれども今病室に橫はつて居る彼の屍は實に美しい。恰も此の月明の空の如く美しい。彼の生涯は徹頭徹尾惡戰苦鬪の生涯であつた。さうして悉く失敗の歷史であつた。けれども彼の屍には一の汚點も無い。玲瓏玉の如く潔い。」

斯く考へる事が春三郎に取つて此上無き慰藉であつた。涙に濡れた顏を上げて月を見た。文太郎の死と此の月明と其處に何等かの神祕があるやうに思はれて暫く莊嚴の感に打たれた。

「國手が某伯爵を診る爲めに旅行をした其留守中に腹膜炎を併發した。某伯爵の病は恐らくは癒えたらう。さうして兄は遂に死なねばならなかつた。」春三郎は此時其某伯爵なる人を想像して舌打をした。「如何なる人か知らないが、美しい褥に橫はつて、妻子眷族に圍繞せられ、國手を東京より呼び寄せて、風清く水澄める畔に病を養ふ人は死ぬる壽命をも取り留むる人である。獨り夜半の病室に呻吟して冷刻なる醫師、看護婦と爭はねばならぬ人は生きる壽命をも殺す人である。」此に至つて春三郎は又深い悔恨の念の萌すを覺えた。「自分が本當に一生懸命になつて兄の看護に盡したのは醫師から難かしいといふ宣告を受けてからであつた。其以前は何故に屢〻此の病院を見捨てたのであつたらう。兄と自分と地を換へたら果して兄は自分の如く振舞つたであらうか。否。兄は如何なる場合にもそんな熱誠を缺く處の人では無かつた。自分は衷心此の月明に恥ぢねばならぬ。然り自分は衷心此の月明に恥ぢ兄の屍に恥ぢねばならぬ。」

彼は大地に喝と唾を吐いた。自分の體を此の月明の下に置くに忍びぬやうな心持がした。立上つて其邊を歩いた。二三本の玉卷芭蕉は月光を受けて劍の如く光つてゐた。彼は暫く其葉陰に佇んだ。空寂に堪へぬやうな感じが其胸を襲うて來た。何者か頻りに戀しくなつて來た。「何者であらう。」と彼は考へた。逝いた文太郎でもなかつた。秀子でもなく、照ちやんでもなかつた。

「常藏！」彼は最後に此人に想到して微笑した。「今日照ちやんからの便りに常藏は明朝歸京するとあつた。三年間の入牢に彼は如何なる修養を加へたであらう。明朝といふのももう數時間を餘すのみである。月光が稍薄れて已に東雲に近いやうな心持がする。彼に逢はう。さうして此空寂の情を遣らう。」春三郎は再び大地を歩き始めた。二三の木立を縫うて歩くうちふと一點の赤い沈んだ灯火を見た。それは豫て知つて居る死室であつた。病院で死んだ患者の屍を置いて一夜を守る死室であつた。文太郎の屍も亦此に運ばれべきものを既に前に一人の死者があつた爲め其儘病室に置かれたのであつた。心を留めて聞くと私な人語が其方向から洩れて來た。其屍を守る人の濕やかな私語と聞かれた。獨り病室に委棄されて冷血なる看護婦の手に守られつゝある文太郎の屍に想到して彼は率然として歩を病室の方に返した。

（明治四十二年一月より）

朝鮮

一

余等夫婦が下關の停車場に下り立つたのは上弦の月がもう淋しく雲間を出たり這入つたりして生暖い風の吹いてゐる一夜であつた。停車場では二時間足らず出船を待合はさねばならなかつた。此停車場で誰の眼にも著しく映ずるのは、壁上高く大きな黒板が並べ掛けてあつて、其に何丸々々と船名が誌されて、仁川行とか、釜山行とか、大連行とか、又其發著時間等の書かれてある事であつた。これは他の停車場では見る事の出來ぬ事で、愈々これから本土を離れるのだといふ感じを誰の心にも起さしめるのであつた。流石に妻は淋しさに堪へぬやうな顔をして余に寄り添ひ乍ら、

「この人達は皆釜山に渡るのでせうか。」と其處に雜沓してゐる多くの人を指して聞いた。

「無論さうだらう。この一室は皆關釜連絡船に乘る乘客許りだもの。」

「でも、あの大勢の家族連が飯櫃を紐でからげたのを持つて居つたり、一人旅らしい女が子供を背にくゝりつけたりしてゐるのを見ると何だかすぐ御近處にでも行くやうですわね。」

「さうさなあ、けれども其無造作なやうなところに淋しい慌しい心持があつて、本土を離れる人といふやうな感じが強いぢやないか。」

斯んな話をし乍ら二人の目は期せずして、十四五の小娘を連れた、とある老人夫婦の上に落ちた。老人は最前から切符賣下口に立つて何かくどく係員に質問して劍突を食つてゐた。老人は頭の後半にのみ毛があつて其が汚れ延びてゐて、同じく汚れた長い髯を生やしてゐるのが目に立ち、女房は痩せ衰へて立つてゐるにも堪へないやうに蝙蝠傘を突いてゐた。唯小娘のみは仕立下ろしらしい縞物を著て小ざつぱりとしてゐたが其でも顔は營養不足らしく青ざめてゐた。

「何か判る事なら貴方行つて教へてお上げなさいな。」と妻は見兼ねたやうに言つた。余が立上つて近よつた時老人は漸く賣下口を離れて此方に來た。事件はもう落著したらしかつたが、其汚れた長い髯を動かし乍ら獨りでぶつ〳〵と口小言を言つてゐた。

ざわ〳〵と俄に室内が動搖しはじめたのは驛員が切符を切り始めたのであつた。彼の老人はハガキを柱に當てて、筆を持つやうに鉛筆を以て、口をシヨボ〳〵させ乍ら一字書いては電燈の光に透かせて見てゐた。さうして驛員の切符を切り始めた事は親子三人とも氣が附かぬらしかつたので、余は改札口に出て行く序に、

「もし〳〵もう切符を切り始めましたよ。」と知らせて遣つた。老人は乙構さうに振り返つて暫くぼんやりとしてゐたが、やがて俄に氣がついたやうに狼狽へはじめた。さうして余等が改札口を出た時に彼等三人は行列の中に割込まうとしては他の人々に叱られてゐた。

プラツトフオームを出ると其處はすぐに棧橋になつてゐて、關門海峽の夜景が畫圖の如く目の前に展開され、バサツ〳〵といふ底力のある音の絶えず耳に響くのは、其處に横附けにされた小蒸汽の腹をうつ波の音であつた。

「全體どの船に乘るんでせう。」と妻は心細さうに前方を見渡した。今迄話に許り聞いてゐた海峽は想像してゐたよりも廣く、水を隔てて向

うに見ゆる帶のやうな火は門司の町と想像された。

一二等の客許り乘せた小蒸汽は間も無く棧橋を離れて門司の灯近く碇泊してゐる梅が香丸の方に月下の波を破つて進んだ。前の老人親子、子供を負つた一人旅の女、お鉢を紐で縛つた家族連等を初めとし多勢の三等客は皆後に取殘され此小蒸汽の再び棧橋に歸るのを待つのであつた。

梅が香丸は一個の「一灯の城」の如くがつしりとした船體に電燈の花を咲かせてゐた。船に弱い余等夫婦は其美しい船室の中に唯小さくなつて寐る許りであつたが、時々眼を覺まして見ると船は大きく搖れて、丸い小さい窓に玄海の星が瞬いてゐた。

二

愈々船が釜山に着いた時、余は妻と共に甲板に出て見て驚いた。棧橋を見下ろすと其處をぞろ／＼と歩いてゐる脊の高い白衣の人は皆朝鮮人であつた。

「あれが朝鮮人だよ。」といふと、青い顏をした妻は唯、

「まあ。」と言つて眺めてゐた。

一人々々皆煙管を銜へてゐるね。」とか、「皆小相撲のやうな頭をしてゐやあがる。」とか我等の傍の人は話し合つて笑つてゐた。彼等は背中に木曾の山人が背負つてゐるやうなものを背負つて其に荷物を乘せて運んでゐた。

やがて我等は船を下りて多くの旅客と一緒に海岸通りともいふべき町をぞろ／＼と歩いて停車場の方へ行つた。道傍に物を賣つてゐる多くの朝鮮人の中には女もあつた。彼等は兩方の脚をひろげるやうにして蹲踞み、前に大きな飯臺を置き、其周圍に集つてゐる多勢の朝鮮人に一々何物かを盛り渡してゐた。よく見ると其は饂飩のやうなものであつた。

家は皆日本風で店にゐる人も皆日本人であつた。其を見ると日本の内地にゐるのも同じ事であつたが、唯勞働者らしい朝鮮人がぞろ／＼と其店先を彷徨いてゐるのがいかにも植民地らしかつた。

停車場は日本の内地でも稀に見る位の立派な建物であつた。待合室に雜沓してゐる人は下關の待合室で見た顏が多かつた。老人親子も、子を背負つた女もゐた。唯飯櫃を縛つた一行だけは見當らなかつた。

朝鮮人の勞働者らしいものは此處にも盛んに出這入りして居た。其多くは子供であつた。或一人の子供の朝鮮人は重い荷物を背負つて這入つて來た。額から流れる汗を彼は其汚れた白い袖で無造作に拭いて、其荷物を腰掛けの上に下ろした。其處には夫婦連の商賣人らしい日本人が腰を掛けてゐた。男は財布から五錢銅貨を出して與へた。朝鮮人の子供は、其では規定の賃銀に足りないといふやうな顏付をして五錢銅貨を載せられた手を突出した儘で引込めようとしなかつた。商賣人は其手を拂ひ避けるやうにして、

「あつちへ行け／＼。」と言つた。朝鮮人の子供は、

「足りません。」と日本語で言つた。男は再び手で拂ふ樣にして、

「無い／＼。もう其より無い。」と言つて子供を突きのけるやうにした。子供は額から絕えず流れる汗を片方の袖で拭ひ乍ら矢張り突出した方の手を引込めようとしなかつた。時々橫眼を使つて其周圍に居た人の顏色を視ふやうにしてゐるのは何となく日本人に對し恐れを抱いてゐるやうにも見えたが、其でも突出した手の上には一個の白銅を載せた儘で決して引込めようとは

しなかつた。其時男は蟇口を開けて見せて、さつき遣つた五錢銅貨のほか、もう他に何も無いといふ事を知らせて又手を振つた。同胞人の此賤しむべき擧動を余は自分の事のやうに恥かしく感じた。其時さつきから此容子を笑ひ乍ら見てゐた三十足らずの垢膩のした女房は、靜かに自分の帶の間から蟇口を出して、其白い長い指で中を掻き探してゐたが、やがて五錢銅貨を摘み當てて、之を落すやうに子供の手の上に置いた。子供は初めて承知して其手を引込めた。余は此朝鮮人の子供の後影を人込の中に見送つた。朝鮮の男の子は一寸女の子と區別のつかぬのが多く、頭の髮は長く延ばして之を編んで後ろに垂らしてゐた。其に顏立も女の如く優しかつた。

妻はと見ると此事には少しも氣が附かぬらしく、すぐ隣に腰掛けてゐる他の一人の女と何か話をしてゐた。其女は一人旅で、大邱より十何里か田舍に這入つた慶州といふ處に夫を尋ねて行くのだと話してゐた。余は平生餘り壯健で無い妻の今回の長途の旅行に格別の疲勞を訴へぬのも不思議に思つてゐたが、今又此一人旅の女の青ざめた顏には男々しい決心の色の浮んでゐるのを見た。

三

余等は珍らしい窓外の景色を眺めてゐるうちに釜山から三四時間目にもう大邱の停車場に著いた。忽ち妻を取り巻く一團の人があつた。束髮に結つた五十餘りの婦人は小さい紋のついた古風な羽織を著てゐた。其は妻の叔母であつた。やゝ色の褪めた裾模樣のある晴著を著て、一番に妻に言葉を掛けた二十四五の婦人は妻の從妹であつた。其他多少の似寄りを持つた若い男女の顏が澤山にあつた。妻の叔父夫婦は日清戰爭當時既に釜山に移住して來てゐたので、余は凡て是等の人に初對面であつた。

妻は此一家族の詳しい話を今迄餘りしなかつた。けれども今度朝鮮に來ると極つてからぼつぼつ話した。何でも此叔母といふ人は、もと兎角の批評のあつた人で叔父が此叔母と一緒になるといふ事は親類中で異論を稱へた。けれども叔父は聽かなかつた。さうして叔母は從妹を産んでから間も無く叔父を見棄てて何處かへ逃亡してしまつた。其から叔父は後妻をも迎へずに哀れな生活をして從妹を育てて居たところが、其後六七年目になつて突然朝鮮から長い手紙が來た。其は叔母からであつた。其中には爲替も這入つてゐた。叔父は親類にも斷らずに從妹を抱いて朝鮮に行つた。親類と叔父との間には其以來音信が絶えてしまつて一時は生死すら判らなかつた。其時分の朝鮮は遠い隔つた國であつた。叔母が其地に渡つて六七年間何をしてゐたかが親類中の疑問であつた。實際此余等を停車場に迎へた若い男女の中には腹違への兄弟が二人あつた。其二人が又各ゝ父を異にしてゐるといふことであつた。けれども其後叔父夫婦は有福に暮してゐて、澤山の田地などを買つたといふやうな噂がぽつ／＼聞えはじめ、妻が余の家に來てから五六年目に、初めて其從妹から突然妻に當てて手紙をよこした。其は、十分とは行かぬが兎に角ひもじい目はせずに暮してゐると書いてあつた。さうして頻りに國許の親戚などの消息をなつかしがつて尋ねて來た。

妻は年老いた叔父を見て亡くなつた自分の父にそつくりだと言つてなつかしがつた。其叔父といふ人は六十を過ぎてゐたがいかにも好人物らしく、垂れ頰に始終微笑を湛へて酒許り飲んでゐた。さうして妻や從妹が情の迫つた話をしてゐるのを、別に感激した容子も無く聞いてゐた。有名な其叔母さんといふ人も余の目には平凡な人に見えた。さうして其多くの子供は皆

此父母に對して優しく親切であつた。父の異つた兄弟だといふやうな容子は少しも見えなかつた。

從妹の亭主だといふ人は下級の官吏らしく今は何處かに出張してゐると言ふことで留守であつた。一家の生活は決して富んでゐるとは見えなかつた。余等夫婦は兎に角此處に二三日滯在することにした。

或日妻は斯んなことを余に言つた。

「お久さんが、高麗燒のいゝものを澤山持つてゐるから若しあなたの旦那が欲しいとでも仰しやるのなら、良人が留守でもかまはんから讓つてあげてもいゝと言つてゐましたよ。」と。お久さんといふのは從妹の名であつた。余は別に陶器に趣味を持つてゐるといふわけでもなかつたが兎に角見せて貰ふ事にした。

お久さんは一々箱に這入つた古い陶器を澤山取出して見せた。さうして之は五十圓、之は八十圓などと其値段を言つて聞かせた。さうして今は迚も買はうと思つても無いもの許りで大方日清戰爭上りに手に入れたものだと言つた。

「これは此前○○伯爵に御覽に入れましたら、大變御所望だつたさうですけれど、良人は二百圓でも手離し度くないと申して居ります。」と言つてお久さんは、白い陶器の皿を見せた。さうして其が有名な白高麗であると說明した。其皿は余の眼にも立派なものと映つた。是等が皆お久さんのいふやうな値段のものとすると今見た丈けでも三四千圓のものはあると思はれた。見たところは貧しげな暮しであつたが成程斯ういふものが其財產かと感心した。さうして二十年も前から此地にゐる人がこれ位の利益を收めてゐる事は當然なやうにも考へられた。

「この邊のものなら一つ位お持ちになつてもよろしうございます。」とやがてお久さんは四つか五つの壺や皿を並べて余にすゝめるやうにした。

余は勸められる儘に其中の一つが欲しくなつた。

「頂戴するといふわけにも行かないから、失禮だが相當の値を拂ひませう。」と言つた。お久さんは、

「宜しいんですけれど……」と躊躇してゐたが、「さうですか、却つて御心配だと恐れ入りますから、其では半分だけでも頂戴しませうか。普通の相場は五十圓位だといふ事ですけれど、二十圓でも三十圓でも宜しうございます」

余は財布から三十圓の金を出して、一つの壺を受取つた。流石に立派な陶器の容易く手に入つたといふ事を嬉しく思つた。けれどもどういふものだか、余の差し出した三枚の十圓札を嬉しさうに手に受けた時のお久さんの顏を一目見た時には、余は物に魘はれたやうに惡感を覺えた。染々と厭だと思つた。お久さんの生際は脫け上つてゐた。お久さんの右の眉の上には半分眉に隱れた大きな黑子があつた。さうして込み上げて來る嬉しさを隱すやうな顏は薄氣味惡かつた。――これは餘談だが其後京城に行つて余は自慢半分に友人に此壺を見せた。さうして此は或商賣人の手から三十圓で掘り出したのだと言つた。ところが友人は其を手に取るや否や、「何だ斯んなもの。これは君日本から輸入した贋もので、五圓もしやしない。」と嘲るやうに言つた。此時余は彈かれたやうに感じたが、同時に彼の時お久さんの顏を厭だと思つた意味を直ちに自ら解釋することが出來た。

大邱では又古い友人で其片田舍に果樹園を遣つてゐる男を訪ねた。友人は朝鮮家屋に住まつてゐた。朝鮮家屋は如何なる大官の家でも棟の低い憐れな建物であつて、其中に衣冠束帶の朝鮮人が立つてゐるのを見ると、余はいつでも幼

い子供の書く畫を思ひ出した。子供はよく小さい家を書いて其中に大きな人物を書いた。朝鮮家屋の中に友人を見出した時も同じやうな心持がした。友人は眞黑な顔をし、細君の顔も日に焼けてゐた。果樹園は川に添うてゐて其處には林檎や苺が植ゑられてあつた。友人は三四年前此地に移住して來た。林檎の木は今年になつて初めて力ある花を著けた。苺は毎朝葉隱れに眞赤な球を連ねた。

友人は余を果樹園に導いた。さうして傍の石に腰を掛け乍ら色々の話をした。此處に果樹園を開いてから間もない事であつた。何處からともなく一匹の放れ牛が園内に飛び込んで來て折角植付けた許りの果樹を蹂荒しはじめた。主人は鐵砲に丸を籠めて其牛を打殺した。主人は私に韓人の亂暴を覺悟してゐたが併し韓人は少し許り牛の代償として遣つた金に滿足したらしかつた。さうして其後或日の事其韓人が突然遣つて來て主人の袖を引張つて放さなかつた。主人は腹を立てて其韓人を打つた。韓人は驚いて逃げ歸つたが、やがて今度は澤山の御馳走を皿に入れて持つて來た。前に頻りに袖を引張つたのは盆の祭に招待に來たものであつた事が初めて解つた。と斯んな事を話して主人は笑つた。

見渡したところの山々は皆禿げてゐた。けふは西大門に市が立つといふので、白い朝鮮服を著た男も女も向うの田舍道をぞろ／＼と絶間なく通つてゐた。男は悉く背にものを負ひ女は悉く頭の上に載せてゐた。廣々とした樹木の無い野中に此行列は長く見渡された。主人は、

「此市は月に一度立つので昔から有名なものだ。」と言つた。

此友人の家で余は一人の若い男に逢つた。主人の話すところによると、何でも主人の遠縁のもので、實際的に劇を研究するといふ主張のもとに、壯士役者の群に投じ、已にもう二年餘り地方を放浪したのが、此頃此地に渡つて來て、芳美團とかいふ一座に加はり、今は此大邱で打つてゐるのだといふ事であつた。

「矢張り舞臺にお出になるのですか。」と余は聞いて見た。

「私は作者になる積りですから、舞臺には止むを得ない時の外は出ません。」と其男は答へた。

「其なら東京にお出になる方が便宜ではありませんか。」

「ゆく／＼は出る積りですが、まだなか／＼其處迄參りません。」

主人が余を何某といふ文學者だと紹介した時其男はさつと顔を赤らめて驚きの目を瞠つた。さうして、

「私は先生のお作を殊に愛讀して居ります。」

と言つた。其から東京の新聞雜誌等に散見される文學上の問題につきいろ／＼の話を持出した。其男はさういふものをも一々精讀して居るものと見えた。よく話して見ると其も其筈で、此男は行李に一杯の新聞切抜を持つてゐると言つた。さうして旅から旅へ渡る時の彼の大事の荷物は其行李一つだと言つた。其から放浪生活の興味といふやうなものをも說いた。

「僕は際涯無き果迄人生を放浪して行くのだと思ふと悲痛に堪へぬやうな心持がします。ゴルキイの描いた人生の如く深刻ではないにしても其處に又他の境遇の人では想像の出來ぬ生活があります。其處の快味――其悲痛な快味は失禮乍ら先生のやうな順境にあられる方にはお判りが無からうと考へます。」

だん／＼話を聞いて行つて見ると初め此男は余の作物の愛讀者であると言つたが、實はあら

ゆるものの愛讀者であるらしかつた。言ひ換へれば、東京にあるあらゆる文學の讃美者であるらしかつた。彼は天下を横行してゐるに拘らず、東京といふ一聲の前には小さくなつた。さうして彼よりも學力の劣つた經驗の乏しい青年の文章でも、其が彼の尊重してゐる東京の新聞雜誌の上に活字となつて現はれたものである以上は少なからざる敬意を拂つてゐるらしかつた。余は東京に在つて、地方から出て來た文學志望の青年に度々出逢つた。其等の青年は東京に出さへすれば成功するものと心得てゐるのであつたが、其に反して此男は唯東京を恐れて遠くの方に眺めてゐた。

友人はビールを抜いた。三人は茶碗で飲んだ。男は醉が廻るに從つて、

「僕等の生活は悲慘です。」といふ事を繰返して言つた。

「併し私は必ず東京に行きます。今少し修養してから出掛けます。」と昂然として言つた。

「君はこれから北へ〱と行つて、鴨緑江を渡つて、ハルビンを經て、世界を一周してから東京へ行くがよからう。」と言つて主人は笑つた。

余は此男には最早大邱では出逢はなかつた。けれども後になつて京城でも平壤でも出逢つた。此男の名前は鶴見慶之助と言つた。

二日目の夜半大邱の府内に火事があつた。余は寢床の中に在つた儘で出ても見なかつた。唯小さい家が二三軒ボオッと燃えて其儘消えたものの如く想像された。此想像の火がいかにも哀れに淋しかつた。

二三日滯在してゐるうちに叔父の家の事情も大方わかつた。一時他に卒先して釜山で陶器商を營んだ頃は多少有福に暮したこともあるらしい。其頃釜山に於ける陶器商は三四軒程しか無かつたと言つた、けれども内地での失敗者が植民地に渡つて來て成功するのはまだ内地人の多く渡つて來ない間の事である。一旦内地の有力者が踵を接して來るやうになると彼等は往々にして又失敗者となるのである。言はゞ彼等は植民地開拓の先驅に使はるゝに過ぎぬのである。察する所叔父の一家も此例に洩れぬらしい。彼は遂に生活程度の方外に向上する釜山に住ひ兼ねて、其店は他のものに讓つて近く此大邱に移住したのであつた。けれども内地人大移住の流れは今日此大邱にも推し寄せて來てゐる。釜山を見棄てて大邱に移つた一家はやがて又遠からず北の方へ移つて行くべき運命を持つてゐるかの如く考へられた。

叔母は動物が其子を熱愛するやうに子供達を愛してゐた。子供達は家を離したものも、獨立し兼ねてゐるものも皆一所に集つてゐた。——例へばお久さんの腹異のすぐの妹は大分年の違つた雜貨商を亭主にしてすぐ隣の家に住ひ、一番下の男の子は一町と離れぬ或商店の小僧に住み込んでゐた。——釜山から大邱に移る時には其一族をあげて移住したのであつた。

叔父夫婦は今は何もしてゐなかつた。其程多くの貯蓄もあるわけでないが、唯多勢の子供がどうかかうか貢いでくれるので今は樂隱居だと叔母は言つた。出張勝の亭主を持つたお久さんは例の高麗燒を戸棚の中に積み重ねて叔父の家に同居してゐた。

四日目の朝余等夫婦は叔父の家を辭する事にした。其前夜一族のものが集つて酒を飲んだ。お久さんとお久さんの妹とが琴を合はせた。琴は生田流のけば〱しい節の著いたものであつた。妻も遂に勸められる儘に彈いた。余も妻の琴を聞くのは久しぶりであつた。

妻の琴は植民地の姉妹をして感嘆せしめた。此地に在る師匠は固よりの事、釜山に在る師匠

よりも立派だと言つた。其から生田流で斯ら彈くところは山田流であゝ彈くのだなどと姉妹で話し合つたり妻の滯在してゐる間是非敎へて貰ひ度いなどと言つたりした。今一度姉妹のを聞き度いと勸めたけれども二人はもう彈かなかつた。初め彈いた時の得意さは何處かへ消えてしまつた。

やがてお久さんの弟は、

「アラン〳〵……」と妙な悲哀な聲を出して朝鮮の歌の眞似をした。月夜などに此歌を聞くと亡國の音がすると言つた。其から又妓生の踊の眞似だと云つて妙な手つきをした。

叔母は此時突然余の方を向いて、

「貴方京城へ行つて餘り無駄なお金をお遣ひなさるな」と言つた。其年とつた顏は酒の爲に赤く燃えてゐた。さらして極めて肉感的に見えた。

其からお久さんの弟と、妹婿の年とつた雜貨商との間に大邱の妓生に就ての話が始まつた。一人は何とかいふ兩班の妾になつたのは美人であつたと言つた。他の一人は其よりも何とかいふ名の妓生の方が美人だと言つた。二人は同じ事を繰返して主張した。

斯る一家を取り卷いて更けて行く大邱の夜は淋しかつた。チゲ（朝鮮人の勞働者）は其淋しい町をうろ〳〵してゐた。此チゲは斯の如く一日町をうろ〳〵してゐて人に傭はれる事を待つてゐるので、若し一日傭うてくれるものがない時は何も食はずに其日は大地の上に寢るのであつた。太鼓の音が聞えるのは何處かと聞いたら誰かが芳美團一座の芝居だと答へた。

四

淋しいやうな賑かなやうな叔父の家を出て再び汽車に乘つた余等夫婦は互に暫くの間無言を續けた。窓の外に去來する山川は、木の無い山や堤の無い川であつた。——山は伐られた儘に打棄てられ、川の水は出る度に氾濫して位置を換へた。——さうして時々は菌が重り生えたやうな朝鮮家屋の貧しげな部落があつた。其朝鮮家屋の中には、白い鬚を垂らした老人が長い煙管で煙草を飲みつゝ茫然と外面を見て居た。

余は内地でまだ見る事の出來ぬ廣軌式の大きな汽車が——これも植民地的とでもいふのであらうか、全く實用一方な、殆ど裝飾の無い、例へば前立も錣も無い、唯長大な鐵の甲でも見るやうな感じのする汽車が——大きな動搖を爲しつゝ北へ〳〵と進みつゝある事を面白く思つた。さらして迅速に大陸に此鐵路を拓いた戰爭前後の日本人の力を思つた。

今汽車は山間の一小驛に止まつてゐた。其處は洵に淋しい山間の小驛であつて柵の外には白衣の朝鮮人が二三人突立つて如何にも無事に苦しむ人の如くぼんやりと汽車を見てゐた。其邊の畑の中には例の菌のやうな家が散在し、其等の家は大方小石を積重ねた一二尺の高さの垣にとり圍まれてゐた。其中に驛に近く瓦葺きの日本家屋が二三軒あつて其一軒の前には子供を負つた日本の女が日本服を着て、細帶をしめて、丸髷に結つて、下駄を穿いて立つてゐた。更に見て居ると驛員に切符を切つて貰つて汽車に乘り込む人々の中に日本人の小學生徒が三四人も居つて皆制帽を冠り鞄を肩に掛け、まご〳〵してゐる朝鮮人の間を突き拔けて汽車に走り乘つた。其中には色は褪めてゐたが蝦茶色の袴を穿いた女の兒も交つてゐた。彼等は汽車に這入つてからも其手に持つてゐる辨當で打ち合ひをしては汽車の中を走り廻つてゐた。

余は内地に在る間は我國民といふものを一民族として世界の多くの人間から切り放して考へようともしなかつた。從つて海外の發展といふ

事に就ても深い考慮を費した事も無く、陸海軍人の赫々たる功名に就ても世の多くの人の如くに醉はされなかつた。其が足一度海峽を渡つて朝鮮の土地を踏んでからは、全く矛盾した二個の考が絶えず起つた。其一は此衰亡の國民を憫む心であつて、路傍の石に腰掛けて煙管をくはへてゐるソクラテスのやうな老人は何故に他國人に征服されればならぬかと憫れに思つた。其二は斯く一方に被征服者を憫み乍らも、同時に此發展力の偉大なる國民を嘆美する心持で、「流石に日本人は偉い。」と初めて此爲す有る民族の上に、自己も其民族の一員としての抑へ難き誇を感ずるのであつた。斯くして此山間の小驛に於ける細帶の婦人も黑い顏の小學兒童も此時余が眼には唯賴母しい我國民として映つた。

五

京城の南大門に著いたのは夜であつた。永登浦に停車した時淋しい停車場許りを通過して來た余にはこゝが京城ではあるまいかと怪まれた程電燈の光が美しく眼に映つたが、扨南大門に著いて見ると流石に植民地の首府と首肯さるゝ程の電燈の數が輝き渡り、其に送迎の人も新橋以上かと疑はるゝ程の多數なのが旅客の心を浮き立たしめた。

「やあ來たね。」と余が列車を降りた時行きなり聲を掛けた一人の男は友人の石橋剛三であつた。

「君からも一度は來て見ろといふ勸誘を受けたし、星野も時々勸めてよこしたので到頭思ひ立つて遣つて來た。態々出迎へは恐れ入つたね。」と余は心から嬉しく思つた。

「星野も來て居たが、他にも一人迎へる客があるとか言つてゐたから其方に行つたかな。」と言つて剛三はステッキを突いた儘其大木のやうな體を人込の中に突立たせてゐた。余の後ろにゐた妻が漸く顏を出して挨拶すると、

「やあ、よくお出でになりましたね。」と剛三は微笑した。間も無く星野と他に一人の婦人とが我等の前に現はれた。

「よく來たね。來るといふ事が判つてから大に待つてゐた。奧さん、よく御出でになりました。たいして御疲れはありませんか。」と星野は言つた。

「それから奧さん、此方の奧さんは金夫人です。」と星野は妻に其傍の婦人を紹介した。

「お忘れになりましたでせう、平井の房でございます。」と言ひ乍ら其婦人は妻の手を握つた。

暫く無言であつた妻は、

「まあお房さんでいらつしやいましたか。」と握手に馴れぬ手を堅く握られた儘、唯驚きの眼を瞠つて其婦人の顏を見つゝ、「本當に暫くぶりでございましたのね、お手紙は戴いて居り乍らも、もう二十年もお目にかゝりませんでしたらうからね。」

「本當にねえ、十四五の年にお別れした限なんですもの。」と婦人は一寸言葉を切つて、「此間そちらに行くといふお手紙を戴いた時まあどんなに嬉しかつたでせう。今日か〳〵と毎日待ち暮して居りましたわ。」と二人は斯んな話を繰返してゐた。

此お房さんといふのは妻が幼馴染であつたのだが、其後別れ〳〵になつて暫く音信を絶つてゐるうちに、朝鮮人の妻となつて此地にゐることが判り、ふとした事から又手紙の遣り取りをするやうになり、今度來ると極つてからも妻はお房さんに逢ふことを一つの樂みとしてゐたのであつた。其朝鮮人といふのは、從五位勳四等の金成龍といふ人であつた。

余等は剛三の宿の南山樓といふのに星野に案内されて行くこととなつた。――剛三は外に廻る用事があつて停車場で別れた。――余等夫婦

と星野とが朝鮮人の車に乘つて大きな行李や鞄を股の間にはさみつゝある時に手車らしいゴム輪の車に乘つて我等の前を過り乍ら、
「いづれ明朝。」と輕く聲を掛けて頭を下げたのは金夫人のお房さんであつた。お房さんは自分の家は廣いから不自由さへかまはなければ是非來ぬかと勸めてくれたけれども余は辭退して兎も角一應南山樓に行く事に極めたのであつた。妻は田舍者が都會の人を見送るやうに茫然と其あとを見送つた。
朝鮮人の車はガラ〳〵と音を立てて繁華な狹い町を澁茶苦茶に驅けつた。若し星野が先導をしてくれてゐるのでなければ余等は何處に伴れられるのか判らなかつた。唯何物にか醉うたやうな心持で不愉快な朝鮮人の車の動搖のみを氣にしてゐた。さうして南山樓の二階の一間に星野と妻と三人で坐つた時、其處に出て來た女中を捕へて、星野はいきなり、
「これが南山樓のお京さんと言つて浪人仲間に有名な女なんだ。」と言つた。
「仰しやいませ。」とお京さんは、星野を叱るやうに言つて女客に馴れぬ眼を一寸光らせて妻を見た。お京さんの出て行つたあとで星野は、
「慥か此座敷だ、あの莞島事件の陰謀がたくらまれたのは。」と座敷を見廻し乍ら言つた。見ると欄間に掲げられた額は筆者の分らぬ書で、床の掛地は古びた馬の繪であつた。其額の書も、古びた馬の繪も、陰謀のたくらまれた座敷といふのによく調和して見えた。其から星野は又、
「それ、すぐ其處に見える山が南山だ。」と夜の空に黑く峙つてゐる山を指して、
「あの頂上に寺があつて巫女がゐる。そやつが君、日本人に隱れて、夜燈火で王宮に種々の通信をしたといふやうな話もある。さうさ山麓が所謂倭城臺で日本公使館のあつたところさ。」
と斯んな話もした。さうして一別以來の染々とした話は其後盃を取りかはしながら夜の更ける迄した。
其夜星野が歸つてから妻は旅中の重かつた丸髷を崩して櫛卷にすべく鏡に向ふのであつた。余は其後ろ影を見乍ら醉うた頭を枕に横たへ、さつき友人の話した莞島事件や南山の頂の尼寺から燈火によつて王宮に祕密の通信をするといふローマンチックな話を思ひ出した。妻は無造作に鋏を持つて二つか三つの元結を切ると、もうがくりと髷は崩れて、髷形は妻の手に、髮は左右の肩に垂れた。妻の髮は多くて長く癖の少ない毛だといふ事を余は嘗て屢〻聞いたことがあるやうに思ふが、今左右に垂れた其髮を見るのに其は哀れにも短かつた。余は一度去れば又來らぬ人生の春を思うた。
「おい、己が梳いてやらう。」と余は言つた。
「えゝ、どうかお願ひ申します。」と妻は笑ひ乍ら戲談のやうに答へた。
余は立上つて妻の後ろに立ち其手から櫛を受取つた。妻は驚いて鏡裏の影を見乍ら余の爲すが儘に任してゐた。短い髮でも持ち馴れぬ櫛は自由に動かなかつた。
「さう引張られては痛いわ。」と妻は髮の根を抑へた。
「己が梳くと又昔のやうに長くなるよ。」
「でも痛いわ。さうコツン〳〵頭に當てられちや尙いたいわ。」
「さうか、これなら痛くないだらう。」
「えゝ、でももう澤山ですわ。」と妻は手を出して櫛を受取らうとした。余は其を渡すまいと爭つた。鏡は此中老者の痴態を映して靜まり返つてゐた。

六

翌朝金夫人、即ち平井のお房さんから電話が

掛つて、早速伺ふべきのだが止むを得ぬ差支があるから午後伺ふと言つて來た。

南山は夢から覺めたやうな姿をしてすぐ窓の前に控えてゐた。妻の櫛卷の頭も憐れに淋しかつた。

「困つてしまふわ。髮結が來なくつて。」と妻は眉をひそめた。今朝早く來るやうにと賴んで置いたのが、朝飯を濟ませてもまだ來ないのである。お京さんの話によると、流石に此植民地の宿に女客はまだ少ないさうである。其等の不便は止むを得ない事であらう。結局妻は近處の髮結のところへ案內された。

余は剛三の部屋へ行つた。階子段を下りて又上つたところの八疊と六疊の二室を占領して其邊に行李や鞄は口を開けたまゝ取散らされてゐた。余は石橋一人だと思つて這入つて見ると、もう已に二三人の客があつて一面の碁盤を中に置いて、石橋と今一人の客とが對局してゐた。

「昨晚は。」と聲を掛けると、

「草臥れたらう。」と一寸石を持つた手を其儘休めて、余の方を見、

「坐りたまへ。」と言つた許りで、又盤面の方を向いて石を置いた。二三人の客はいづれも石橋によく似たやうな風采の男で余の這入つて行つたのを見たものもあつたが頭から見ようともしないものもあつた。殊に其中の一人は腹這ひになつて頰杖を突いて眼鏡越しに盤面を見乍ら盛んに助言をしてゐた。

「そりやいかん。そりやあ此方から押へなきやいかん。」と矢張り腹這つた儘で延上るやうにして剛三の下ろした石を摘んで置き直した。余は暫く茫然と突立つた儘で此一座の光景を眺めたがせう事なしに其處に坐つて矢張り盤面を見た。

「助言もいゝが、石を置き直すに至つては激烈だ。退韓命令に値する。ハッハッハ。」と豪傑笑ひをして初めて余の顏を見た一人の客は暫くの間じろ〳〵と人の造作を吟味した末、一言の挨拶も無しに又盤の方を向いた。

「今度は唯朝鮮の見物かい。」と剛三は再び石を下ろしながら言つた。

「まあさう言つたやうな譯さ。」

「そりやアいゝ。君のやうな文學者ももうそろそろ來るがいゝ。」

「君はもう大分久しく居るやうだね。」

「生意氣な事をしやあがる。」と其から暫く碁の方に氣を取られてゐて剛三は遂に此問に答へなかつた。

二人の石を下ろす速度は早かつた。さうして瞬く間に盤面が打ちつぶされた。一局が終れば余と對談するのであらうと待つてゐたのに其次も亦剛三が石を握つた。けれども流石に石を下ろす前に二三言話した。

「奧樣は草臥れはしなかつたか。」

「有難う。一寸今髮結に行つた。」

「今晚は己が案內してやらう。晚飯は他と約束せぬやうにして置け。奧さんは朝鮮料理は食へまいね。」

余が答へを躊躇してゐるうちに剛三は一人で斷定してしまつて、

「泉家がいゝだらう。此頃は彼處も大分繁昌するやうになつたから、いゝ座敷を取つて置かさう。おい。」と言つて今丁度障子を開けて這入つて來た一人の女中とも見えぬ、藝者らしい女に向いて、

「泉家に離れの座敷を開けて置く樣に電話を掛けとけ。人數？ 四五人と言つて置くさ。」

其時もう石をカチンと盤上に下ろして、

「今度は少し手答へのあるやうな碁を打て。」

七

午後訪ねて來た金夫人のお房さんは、

「私、斯んなに嬉しい事はありませんわ。」と心から嬉しさうにして妻と昔話に耽つた。妻は、

「どうしても田舎だわ。」と髪を結つて歸つた時鏡に向つて不平を言つてゐたが、余は何は扨て置き、あのべそッとしてゐた櫛卷があんなに房々とした鬢や髱を形成り得るのを不思議に思ひ、お房さんの何處となく朝鮮化してゐるやうに考へらるゝ扁平な額とを見比べつゝ二人の話を聞いてゐた。二人は、

「まあさうなのですか。」

「本當に夢見たやうですのね。」などと昔の遊び友達の消息を我を忘れて語り合つてゐた。お房さんの少し體をゆるがしてあまえるやうに言ふ態度は自ら人を牽附けるやうに出來てゐた。

其うち昔語は少し下火になつて會話は朝鮮の現代に移つた。お房さんは宿屋住居は女に取つては不便なことが多いものであるから、どうか姉妹の家と思つて自分の家へ泊ることにしては呉れまいかといふやうな事を言葉巧みに言つて其から斯んな事をも言つた。

「此地では婦人會といふやうなものも出來はしましたが、内地のに比べたらお話にも何にもならんさうでございます。それでも朝鮮人の奥さん方のうちにもよくものの分つた方もありますし、主な貴婦人方にも御紹介致す積でございますの。」

「いやですよお房さん、私のやうなものが。」と妻は顏色を變へて慌てて其を遮つた。

妻が慌てたのも無理は無い。彼が余の家に來てから交際社會といふやうなものに出たことが唯の一度でもあつたらうか。彼は女學雜誌の口繪などで、所謂交際社會の貴婦人といふやうなものを見た事はあるであらうが、其等の人とは住む世界が違つてゐるもののやうに思つて居る。其も其筈で彼の夫すら世の中の隅つこに小さい巢を作つて文學者といふ朧氣な看板を僅にぶら下げてゐるのに過ぎないのである。けれども余は傍から口を出して、

「そんな機會はまたと無いかも知れぬから少しお作をさせて貰つたらいゝだらう。」と勸めた。

「ですけれど私のやうなものが。」と妻は尙躊躇つた。

「あらいやですよ。あなたを御紹介して廻ることが私の誇ぢやありませんか。」とお房さんは例のあまえるやうな態度をした。

それから二人の間には又昔話がくり返され日暮近くなつてからお房さんは漸く歸つた。

八

其夜泉家の會合は譯もなく腹の皮をよつて笑つた。客が男女取り交ぜて五人のところに藝者が四人に幇間が一人來て唯賑かに騒ぎ立てた。

「一つやらさして貰ひまひよかいな。」と三幅といふ大阪辯の幇間は極めて素人臭い手品をした。手品が素人臭いばかりでなく、一體のとりなしが素人離れがしなかつた。其が却つてをかしいので皆がこらへずに笑つた。四人の藝者はいろ／＼のスタイルの顏を集めた許りでなく、言葉も藝もいろ／＼であつた。中に純粹の江戸ッ兒らしいのがあるかと思ふと廣島辯のもあり、大阪言葉の交つてゐるのもあつた。

「貴樣等はいろんな方面から流れ込んで來てゐるのだらう。」と冷かすやうにいふと、

「憚り乍ら皆京城ッ子よ。」と今迄廣島辯であつたのが答へた。其うち其處の襖を一枚外して、其向うに三幅と一人の藝者とが隠れ、

「出たり、ひつこんだり。そりや出た、ひつこんだ。」と一人の藝者が、チャラン／＼と單調な三味線をひくと、三幅と藝者とは其襖の陰から顏を出したり引込めたりした。其がをかしいの

で皆ほろ〳〵と涙をこぼして笑つた。唯其中に我等三人ほど笑はなかつたのは、一人の朝鮮人と彼の藝者とも何ともつかぬ石橋剛三の部屋で見た一人の女とであつた。

朝鮮人は一見内地人と餘り變らなかつた。稍、色の褪めたフロック、コートを著て膝を組んで、其膝の先に兩方の手を載せて唯時々ニヤ〳〵と笑つた。彼の眼は絶えず注意深く輝いて人の顏を注視した。さつき剛三は此人を余に紹介して、

「洪元善君は當年の志士さ。見給へ、あの歯は拷問の爲めにすつかり抜き取られてしまつたのだ。」と言つた。洵に歯はすつかり入歯であつて、其稍萎びたやうな口許には普通の人に見る事の出來ぬ傷ましい影が漂うてゐた。

「ねえ洪さん。その頃の事を考へると隔世の感があるだらう。」

洪さんは其傷ましい口許をすこし綻めて微笑しつゝ、

「さうでございますとも。夢のやうでございます。貴方にお目にかゝつた時分からでも大變な違ひでございますからねえ。」と極めて流暢な日本語で答へた。余の妻の如きは驚きの目を瞠つて洪さんの口許を見てゐたが、其口からかゝる流暢な日本語が出るのを見て更に驚きを重ねた樣であつた。其うち金夫人の話が持上つた時洪さんは、

「奥さんと金成龍の奥さんとお友達でいらつしやるのですか。金成龍の奥さんはえらい方でございます。子供は皆日本風に育てて家庭でも主に日本語の方を使つてゐます。」と言つた。どうして金成龍と結婚したのかを尋ねて見たら、

「金成龍は久しく日本に行つて居りました。閔妃事件の後でございました。其頃奥さんに貰つたのでございます。」と洪さんは事もなげに答へた。

「日本人で朝鮮人の奥さんになつてゐる人は澤山ありますか。」と聞くと、

「澤山ございます。」と洪さんは又事もなげに答へた。洪さんは誰からでも盃を受けると、

「さうでございますか。」と居住居を直して盃を受けた。けれども酒は多くは飲まず、彼のいたましい口許を引締め注意深い眼を輝かして偉り人程に笑はなかつた。

今一人余等程笑はなかつた女といふのは座中の藝者から姉さん〳〵と言はれてゐたが三味線をひくでも歌ふでもなかつた。唯藝者同樣石橋初め余等にもお酌をした。座中のどの藝者よりも遙かに美人であつて美しい江戸詞を使つた。唯騒ぎ落し笑ひ轉げた植民地の一夜に洪さんと此女とは何となく心を引締めるやうな違つた印象を與へた。

泉家の會合に笑ひ草臥れて歸つた夜は何も知らず熟睡した。唯夜中にハラ〳〵と裏の板屋を叩く雨の音がふと耳に入り、朝鮮といふところは滅多に雨の降らぬ所と聞いてゐたが爲めに其音が何となく心に留まつた。けれども翌朝目を覺まして見ると大空は透き通るやうに晴れ渡つてゐて、内地の秋の空よりも尚ほ清澄に見えた。さうして其空に一羽の鳥が飛んでゐた。

「鶴でせうか。」と妻は言つた。

「鶴にしては少し小さいやうだが。」と余も妻も共に暫く其鳥を見てゐた。鳥は唯一羽、遙かなる大空を急がず騒がず南山の空の方を指して飛んでゐた。長い羽を靜かに羽搏つてゐる趣が今朝の落著いた心持にしつくりとはまつて自ら其鳥の行方が眺められた。

午前の間は夫婦で星野の宅を訪問して歸つた。星野は會社の用事が非常に多忙なので市中の案内が出來ぬのが殘念だが剛三と金夫人とに萬事頼んで置いたと言つた。

午後金夫人から景福宮や其他にも御案内したいし、某貴婦人にも御紹介し度いといふ事を電話で言つて來た。妻は少し考へた末、

「どうしませうねえ。」と余に相談した。

「兎も角一度行つて見たらいゝだらう、お房さんも折角あんなにいふのだから。」と余は答へた。

「あなたは？」

「僕は石橋にでも案内して貰はう。お前はお房さんに連れてつて貰ふ方が便宜が多いだらう。」

「さうねえ、だけれど貴婦人に紹介して貰ふのは有難迷惑だわ。」

「其處は自由にしたらいゝだらう。けれどもどんなものか一二度紹介して貰つて見るのもよからうぢやないか。」

「さうねえ。」と妻は考へてゐたが、遂に、

「お供を願ひ度うございます。」と返事をさせた。

九

妻と余とは此日以後別々の行動を取るやうな機會が多くなつた。二人が或は一緒に或は別々に王宮其他に案内された事などは一々敍する事を止めて、四五日を京城に費した後の二人はいろ〳〵逢つた刺戟に何とも知れぬ心持のうちに彷徨うてゐた。大概な大きな建物にはまだ生々しい革命のあとを留めてゐた。日本人と外國人とのこんがらかつた爭鬪の歴史は大きな波の引いたあとの渚のやうに到る處にくさぐさの物語を殘してゐた。

或日珍らしく暇が出來たといふので星野に案内されて韓人町を歩いてゐると殆ど軒並朝鮮人の小店である中に、ふと一つの店先に日本人の子供と朝鮮人の子供とが、日本語半分、朝鮮語半分で話して遊んでゐるのを見出した。よく見ると其は日本人の小店で殆ど朝鮮人の店同樣貧しげな汚いもの許りを置並べてゐたが、其でも其品物の並べやうが朝鮮人よりも眞直ぐに整頓してゐるところが稍ゝ趣を異にし、三十餘りの女は汚い日本服を著て狹い帶を締め店の奥に坐つてゐた。さうして其女は小さな鏡を左の手に持つて、櫛を持つた右の手は埃だらけの其髮を梳きつけてゐた。髮は根の下つた蝶々髷であつた。星野は、

「もう斯うなつちや日本人の方が朝鮮人化してしまふのだ。」と言つて顔をしかめた。けれども此朝鮮町の中に在つて見るもの聞くもの悉く朝鮮のもの許りで、さうして朝鮮人同樣の汚い貧しい生活をしてゐて其でゐて矢張り日本の服を著日本の髮を結ひ、汚い埃の中に其髮を梳きつけてゐるのを見て余は必ずしも星野の言葉を信用しなかつた。其から暫く行くと、又一軒の日本人の店があつた。其は空氣銃を並べて向うには卷煙草やビール瓶や、いろ〳〵の物を立てて置いて、其を倒したものに其景品を與へることになつてゐるらしく、白い服を著た朝鮮人は大勢其店先に立つてゐた。一見朝鮮人と區別のつかぬやうな白い著物を著てゐた店の小僧は、

「君は屹度澤山倒すだらう。」と折節空氣銃を取り上げた一人の朝鮮人に油を掛けるやうに言つた。

「私ぺただから駄目だ。」と其朝鮮人は日本語で言つてねらひを定めて打つた。丸は卷煙草の箱に當つて危くゆれたけれども倒れなかつた。見てゐた朝鮮人は一齊に囃し立てて笑つた。其時、

「先生ですか。」と言つて突然後ろから余の肩を打つたものがあつた。見ると太郎の友人の果樹園で逢つた彼の新俳優の鶴見慶之助であつた。

「君もうこちらに來てゐるのか。」と余は驚いて言つた。

「えゝ先生にお別れした翌々日もう京城へ參つ

て開場して居ります。一つ新作の狂言を仕組み度いと思つて種を拾ひに歩いてゐるところです。」と言つて余の宿を聞いた。南山樓だと答へると、

「さうですか、其では今夜にもお伺ひ致します。明治座で開場して居りますからどうか一度は御覽にお出で下さいませぬか。」と言つた。

十

石橋剛三の部屋にゐた女の素性はお京の口から明白になつた。これは矢張り浪人仲間で剛三の親友であつた男が東京から連れて來た愛妾であつたのだが、其友人が此間或事情の下に滿洲に旅立つやうになつた。當人は深く決心するところがあつて、自分の愛玩して居つた書畫や骨董は一々友人に分配してしまつた。其から剛三には、

「君には骨董の代りに此奴を遣らう。」と言つて此お筆といふ女を連れて來た。

「馬鹿をいふ。」と流石の剛三も面くらつてゐたが、

「仕方が無い、兎に角預つて遣らう。」と言つて其儘引受けた。其友人は四五日前に滿洲に出發して、其からお筆は剛三の處に來てゐるのだ。

と以上はお京の話であつた。

「人を馬鹿にしてゐる。其で石橋は自分の妾にする積なのかい。」と余は聞いた。

「石橋さんは多分自分が金を出してやつて自前の藝者にでもする積なんでせう。貰つたのが災難でさあ。え丶、もとは新橋とかで一時は賣出した妓ださうです。泉家の蝶花さんや菊子さんは妹分になるんでせう。」

「道理で昨日泉家では皆姉さん〳〵言つてゐた。」

「藝はあるさうですし、あの顏ですから、出たら乾度流行るでせう。」

「自前として出すには大分金が入るだらう。石橋にそんな金があるかな。」

「さあどうですか。」とお京は氣乘りのせぬ返辭をした。

「お筆の事は捨置いてお京さんの身の上話を聞き度いね。僕の荒島事件など、お前は主な關係者の一人だといふぢやないか。」

「御戲談仰しやいませ。」と人を鼻であしらふやうにして、

「明治座でもお寄りなさい。さうしたら話してあげるわ。」と言ひ捨てて出て行つた。浪人仲間に名の高いといふ南山樓のお京さんも、植民地は植民地相應に、あの鶴見慶之助君などの一座を見たがるのかと、余は覺えず微笑を催して其あとを見送つた。

今一つお京さんに就て面白いのは、彼は男なれば石橋剛三の如きをも子供の如く取扱ふのであるが女となると余の妻の前などでもなんとなく勝手が違ふと見えて、存外眞面目にぎごちなささうにしてゐる事である。或時お京さんは余等夫婦の前でお給仕をし乍ら、默りこくつてゐるので、妻の方から話しかけた。

「伊藤さんもよく此宿にお見えになつたさうですね。」

「よくお見えになりました。」とお京さんは答へた。其から緒がほぐれて、お給仕の間お京さんは伊藤公の話をした。宋秉畯が何處かで演説をした時に、

「とうぐわん閣下並にそくん……」と言つたとかで、到頭己を青物にしてしまつたと言つて公爵は笑はれた事もあるなどと言つた。此話には妻も余も噴き出して笑ひ、話手のお京さんも笑つたが、其後のお給仕の時には又前の如く改まつてゐた。余一人の時向うより口を利いて人を愚弄するお京さんとは別人のやうに見えた。

剛三は何をしてゐるのか、何の爲めに滯在し

てゐるのか、余には殆ど解釋が出來なかつた。其はお京に問うても明瞭に答へなかつた。何か又莞島事件に類することを畫策してゐるのかとも疑つて見たがそんな容子も見えなかつた。うちにゐる事は少なく、ゐる時には必ず浪人組らしい男が二三人來て碁を打つてゐた。お京も時々其中に交つて無駄口を闘はしてゐた。例の女——お筆——は陣三の座敷にゐるよりも寧ろ帳場に坐つて女中の中に交つてゐる事の方が多かつた。

十一

妻は金夫人としてのお房さんの交際振りに感心してゐた。さうして又自分に對する舊交を重んじて何かと便宜を謀つてくれ大官夫人の前などでも旨く取りなしてくれるのを感謝してゐた。其爲め初め頻りに躊躇したのと反對に、此頃は大に氣乘りがして進んで此方から訪問することもあり、又時々は泊ることなどもあつた。其爲め余よりも寧ろ見聞が廣くなつて、徳壽宮内の石造殿がどうだとかソンタクホテルがどうだとか話してゐた。

「けれども、お房さんも隨分苦勞もあるらしいですよ。第一金成龍さんの弟さんが大變な道樂者で、何とかいふ妓生を受出すことになつたとかいふ噂もあり、其には金成龍さんも困つていらつしやいました。」などと話したこともあつた。

余も一度挨拶の爲めに金成龍氏の宅を訪問したが、所謂上流韓人の住居で大門を這入り、中門を這入り、石段を登つて、其處の應接間に通され、卓子の上で珈琲を飲んだり、人參茶を飲んだり、又日本流の茶を飲んだりした。此應接間は元來大廳と言つて一番の大廣間として宴會などの時に使用されるのを今の主人公が西洋まがひの應接間としたのであるさうな。——妻の話を聞くと夫人の居間は全く日本流の疊を敷き、掛地、生花、茶簞笥等悉く日本のもので装飾がしてあり、三人の子供の部屋も寧ろ日本風に出來てゐるとの事であつた。——けれども大門、中門の左右にある列房からは韓服を著た老若が長い煙管をくはへてぞろ／＼と出たり這入つたりしてゐた。是等の韓人は皆食客で少しにても縁の繋がつてゐるものは一族として皆家長の下に集つて來る習慣で、此家にも四十何人とかの食客がゐるといふ事であつた。

金成龍氏は洪さんとは大分趣を異にした人で、もう五十を過ぎた、年齢の割に額に皺の多い、洪さん程深刻な印象を與へぬ穏かな容貌の人であつた。尤も併合當時には、比較的重大な責任ある地位に在つて苦勞をした人であつたのだが、夫人の賢だつた運動が却て災を爲して、僅に從五位勳四等の宮内府の役人を贏ち得たに過ぎぬといふ噂もあつた。長く日本に居り、東京の地理は余の妻よりも詳しいさうであつたが、其でも文學といふ事になつては全く無知識であつた。文學者といふものは矢張り此國でいふ昔の文章家のやうなものと心得てゐるらしく、此が私の先々人の詩文を集めたのだと言つて黄表紙の一つの寫本を取出して來て見せたりした。さうすると余が妻の如きも所謂箋表を作り奏文を作る類の文章家の令夫人として此地の貴婦人間に紹介されてゐるのかも知れぬとをかしく思はれた。其日金成龍氏は、

「奥さんをお泊め申すこともありまして御迷惑でございませう。家内が其を何よりの樂みに致すものでございますから。」と言つた。其から又、

「今日は生憎不在でございまして、まことに殘念でございますが、私の弟が文學を好みますから、是非一度逢つて遣つて戴き度うございます。」と言つた。余は總てを快諾して歸つたが、

其弟といふのは妻の話した彼の遊蕩子の事であらうと思はれた。此日も妻は泊る筈になつてゐた。

其日宿に歸つて見ると余の部屋に鶴見慶之助が待つてゐた。さうしてお律とお京とは余の部屋に來て慶之助と話してゐた。二人は早くも慶之助の芳美團一座のものであることを知つて居るらしく、前日一二度見に行つたとかいふ其芝居が話題になつてゐたらしかつた。余が歸ると二人は間もなく下へ降りて行つた。

十二

「君が明治座にゐる芳美團の一人だといふ事を今の二人は知つてゐたのですか。」

「えゝ御存知でした。あの御姉人方はもう度々お見えになりましたから私の方でも存じて居りました。」

「さうすると君も此頃は舞臺にも出るのですね。」

「何分無人芝居の上に持つて來て、大邱から内地に歸つたものもありますし、今又一人病氣をして入院して居りますので遂に僕も止むを得ず登場するやうになりました。」と言つて優人として登場するといふ事を余の前では相變らず恥ぢて居るやうに見えた。

「先日話のあつた新作は出來ましたか。韓人町を寫すことは餘程面白いことと思ふが、第一言葉が判らぬから芝居にするには困難だらう。其に此邊に久しくゐる人は君等よりも大分通人だから、其人等に見せるには内地の事を寫すより却て骨の折れるわけだ。併し旨く行きましたか。」と聞くと、

「駄目です。先生の仰しやる通り、面白いことは面白いが手にをへません。矢張り小說でも燒直してお茶を濁して置く方が僕の身上でせう。」と言つて笑つた。此時氣がついたが彼は少しく酒を飲んでゐるやうであつた。力めて醉態を現はすまいとしてゐるが、目の白みに血走つたところがあつて、笑ふ時の顔が怪しく赤味を帶びてゐた。

余は暫く無言でゐると、彼は又文學談を始めた。けれども其は取るに足る談話ではなかつた。

「相變らず新聞の切拔をやつてゐますか。」

「えゝ、見たものは必ず切拔いて置きます。」

「僕は近來餘り新聞も見ないが、何か面白い文學界の出來事がありますか。」

「朝日新聞に出た漱石の文藝委員論が近來痛快だと思ひました。僕等のやうなものでも、あゝいふ議論を見ると一藝術家として自重せねばならぬ事を深く教へられます。何處迄も己を持して行く處は當代に匹儔無しですな。」と頗る敬服してゐたが、やがて余の記憶して居らぬやうな青年文學者の名をあげて、其人の前途が有望であるとか何某といふ小說家の何とかいふ作は其人の一轉機を示して居るものであるとか言つて余の意見を徵した。余は其には答へずに、

「明治座は矢張り毎日外題をかへるですか。今夜は何を遣ります。」と聞いて見た。慶之助は袂を探つてゐたが、一枚の番附を取出して、

「今夜のは大分芝居がかつた甘い物です。こんなものを先生に見られては閉口しますね。明晩は駄目ですが、明後晩からは一つ正劇に立戻つて多少文學的價値のあるものを出します。」と言つてしぶ〳〵其番附を出した。見ると「血染通雪」全八場幕なし、とあつて登場役者の名前が列記してあるが、丁度中央あたりに鶴見慶之助とあつて、上に「女賊北海のお龍」とある。

「君は女形をやるのですか。」と余は驚いて聞いた。

「僕は何でも遣ります、遊軍ですから。」と言つ

て笑つた。

「場割」とある處を見て行くと、「其八、雪中の枕橋に女賊の捕縛」などとあつて、此北海のお龍なるものが自ら主人公らしく見える。

「君が主人公ですね。」と余は又驚いて慶之助の顔を見ると、

「なアに主人公なものですか。」と慶之助は苦笑した。此時よく氣をつけて見ると目鼻立など尋常で、これで白粉を塗つて鬘を被つたら美しい女形になるかも知れぬと思はれた。

慶之助は歸りがけに懐から原稿紙に書いたものを取出して、

「發端だけですけれど、御覧下さるわけには參りますまいか。」と言つて小説の原稿らしいものを置いて行つた。

十三

其は春の夜のやうな感じのする一夜であつた。月は鐘路の上高く掛つて居て朝鮮人は小さい燈籠のやうな提灯を提げて、衣冠束帯で車を引いてゐるのもあれば、被衣を被つた女の其青い袖の中から白粉を塗つた白い顔を見せてぞろ〳〵と歩いてゐるのもあつた。余は石橋剛三と洪元善の二人に導かれて、徳壽宮の横から各國領事館――もとの公使館――のほとりを散歩して今此鐘路の通りに出たのであつた。剛三と洪さんの二人は先程から徳壽宮の高い石塀を見上げたり、白楊の茂つて居る各國領事館の瓦屋根を眺めたりして閔妃沒後の政變を話し合つてゐた。其話は余に判る事もあり判らぬ事もあつた。其より余は別の事を考へてゐた。殆ど二人の話を上の空に聞き乍ら別の考をいだきつゝ、いつとなく此鐘路の通りに出たのであつた。

今日慶之助が歸つた後で、余は彼の置いて行つた小説の原稿を讀んで見た。其は原稿紙五枚許りのもので何でも長篇の冒頭らしく見えた。余は近來自分で筆を取る事にすら餘り興味が無いのであるから況して人の小説を讀む事などに興味のあらう筈が無い。殊に頗る難澁な彼の文章を讀む事は堪へ難い苦痛であつたが、ふと氣まぐれに批評を試むる氣になり、出來るだけ細字で其餘白に自分の意見を書き加へはじめた。さうして二時間餘りを費して殆ど全紙面を書きつぶしてしまつた。彼の原稿に認めた文字よりも余の加へた字數の方が寧ろ多かつた。其處へ余を散歩に誘うたのが剛三と洪さんとであつたのだ。

鐘路の夜はまだ古い朝鮮の趣が七八分方殘つてゐた。剛三と洪さんとは默つて余を導いて、とある横町に這入つた。其は狭い町で丁度其町幅ほどの狭い川が流れてゐた。其處に這入つた時の心持は支那の詩で見馴れた狭斜といふ文字が思ひ出された。何々館といふ赤い文字の行燈が額のやうに掛つてゐた。其處には朝鮮料理屋が二三軒あつた。我等三人は其中の一軒に這入つた。

十四

妓生のうちの一人がまづ勸酒歌といふのを一節うたひ始めた。一句終ると他の二人も連吟した。其唄は抑揚の少ない、水の流れるやうな、淋し味のある唄であつた。三人とも此唄をうたひ乍ら余等三人に酒を勸めた。酒は粗末な日本の徳利に燗をした日本酒が這入つて居つた。

「この唄はいつでも歌ふねえ。日本でいへばお座つきのやうなものだらう。」と剛三は言つた。

「唄の意味はどういふのですか。」と其唄が終つてから余は洪さんに聞いて見た。洪さんは、「簡單に約めると斯ういふ意味になります。」と言つて散文的に譯してくれた。

「不老草を以て酒を醸し萬年盃に滿つる[illegible]

注ぎ、祝するに南山の壽を以てす……」

二人は余を正座に進めたので、余の後ろには凭れるやうな枕があつて、左右には肱を凭す枕があつた。此板も枕も緞子でくるんだもので、邯鄲の枕でとり圍まれたやうな心持であつた。三人の妓生は一人づつ客の傍に坐つて絶えず酌をした。彼等の坐るのは片方の膝を立てて紫の山を作り片方の足はゆるく投げ出して紫の丘を作つてゐた。

「貴樣等も食つたがいゝ。見てゐる許りぢや可哀想だ。」と言つて剛三は笑つた。洪さんは例の悲慘な口許で淋しく笑ひ乍ら其意味を妓生に譯して聞かせた。

「どうも有難う。」と一人は日本語で答へて笑つた。

「どうも有難う。」と他の二人も日本語を使つて互に顏を見合はせて笑つた。

ふと見ると眞丸い月が內庭の廂の間にかゝつてゐた。はじめより月だとは知り乍らも何か此部屋の裝飾のやうな心持がして確と月といふ觀念を得なかつた。卓の上の御馳走は神仙爐を中心にして日本では見たことのないやうなもの許りであつた。妓生の顏は人工的に美しく形づくられてあつた。壁間には支那の丸い團扇が掛けられてあつた。天井からは瓔珞のやうな飾の多い釣りランプがぶら下つてゐた。其間にふと目に這入つた月は、たしかに其を月だとは知り乍らも、其處に突立つた朝鮮人のボーイの黒い筒形の烏帽子の後ろに自ら畫かれた裝飾畫としか見えなかつた。

「今日は君の爲めに純粹の朝鮮踊を見せてやらうと思つて樂人を呼んで置いた。何か一つ遣れ。」と剛三は命令を下した。

樂人といふのは大方六十以上と思はるゝ老人許りであつた。其が部屋の隅の方に居並んで器樂を奏し始めると妓生の一人は男の服裝をし一人は女の服裝其儘で踊り始めた。踊といふよりも雅樂に近いやうな舞であつた。互に纏綿たる情を手足の運動に現はして、或時は抱擁して泣くやうな科もあつた。器樂は日本の樂器と似寄つたやうな形のものであつたが洪さんは一々其名を説明してくれた。十三絃の琴は一人の老人の膝の上に載せられて彈かれた。其を洪さんは伽倻琴だと教へてくれた。又支那でいふ琴瑟の瑟は此伽倻琴をいふのだと言つた。今一つ日本で篳篥のやうなものを洪さんは洞簫といふと言つた。

「さうすると客に洞簫を吹く者ありといふのはあれですね。」と聞くと、洪さんは、

「さうでございます。」と點頭した。

「あの長大な鼓のやうなものは何といふのです。」

「あれは矢張り長鼓と申します。」と答へて洪さんは熱心に此音樂を聞いてゐたが、

「この音樂も、此年寄が死んだら、どうなるかわかりません。もう幾人も居りませんから。」と云つて歎息した。長鼓は膝の前に置いて片方を手で打ち片方を撥で打つた。其長鼓をうつのは腰の曲つた七十許りの老人であつた。

器樂の節奏は悠長に續いて、男女纏綿の抱擁は三度も四度も繰り返された。ふと氣がついて見ると、後ろの高い窓に澤山の朝鮮人の顏が重り合つて渦卷いてゐた。渦卷いてゐるといふよりも重り合つてボンヤリと中を覗いてゐた。洪さんが言つたやうな郎て亡びて行く此器樂の音に引かされて彼等は此處に集ひ來つたものであらうか、其とも亦彼等の懶怡の時間を費すに此上無きものを見出していつ迄も其處に突立つてゐる積なのであらうか。何にせよガラスを透して見える澤山の顏の後ろには何等限りもなき多勢の人が殆ど門外迄も立ち盡して、此器樂の

音の聞える限りには立止つてゐるやうな心持がした。

此舞を男舞といふと洪さんは說明した。男舞が濟んでから妓生等は再び余等の間に坐つて酌をした。其間樂人の老人共はどこか物蔭に消えて無くなつてしまつてゐた。余の傍にゐた妓生は箸の先に一片の肉を挾んで余の顏の前に持つて來た。余は心得て口を開けると妓生は親が子にはごくむやうに其肉を余の口の中に落して吳れた。見ると剛三の傍にゐる妓生も同じやうな事をしてゐる。剛三の髭の生えた大きな口を無器用に開けてゐる處が餘所目にはをかしかつた。これも洪さんの說明によると、朝鮮の兩班どもは唯口を開けるばかりで、物を食はすから酒を飮ます迄悉く傍に在る婦人が之を司る事になつてゐるのださうな。余も剛三も矢張り其取扱を受けつゝあるのであつた。

妓生等は又唄を歌つた。其唄の調子もさきの器樂が余等に與へたと同じやうな平板な悠長な感じを與へるものであつた。其唄の意味をあとで洪さんが譯して聞かせた。

「玉の如き主を失つて、主の如き君に逢ふ。

主君か、君主か。誰か我知らん。」

余等は大分醉つた。剛三は先刻から僅に知つて居る朝鮮語は皆使つてしまつて、何か下卑た事を日本語で言つたが其は妓生には通じなかつた。

「君通辯して吳れ。」と剛三は洪さんに所望したが洪さんは其を厭とも言はず、落附いた言葉で、例の悲慘な口許を動かし、注意深い目で妓生の顏や余等の顏を等分に見乍ら通辯をした。妓生は矢張り日本の遊女などと同じやうに嬌笑を洩して何か其に答へた。其を洪さんは又前のやうに落附いた言葉で悲慘な口許を動かして日本語に譯した。其洪さんの口から譯されて出る日本語は何となく眞面目に響いて、余等は笑ひを待設けてゐ乍ら笑はうとは思はなかつた。之から推すと洪さんに譯されて妓生等の耳に傳はつた朝鮮語も恐らく剛三の口から出たものとは大分心持が違つてゐたらうと可笑しかつた。又政治家として雄辯家として私に自ら任ずる洪さんの身に取つて、斯る通辯の苦痛は想像に餘りあることであつた。其から又老樂人等は現はれて樂を奏し、僧舞といふ舞を一人の妓生が舞つた。之は僧が女に執著して墮落する狀態を寫したものとかで、初めは靜かなる音樂に連れて、手足を延ばしたり縮めたり暫く單調と見ゆる動作を續けつゝあるのが、終りに近くなると、樂人の打ちつゝあつた太鼓を二人の男が抱へて妓生の傍に持つて行き、妓生は撥を左右の手に持つて物狂ほしく其太鼓をうつ動作をした。余はもう其單調な器樂の音に稍ゝ倦いて彼の窓を見上げて見ると朝鮮人の顏は相變らず重り合つて靜かに此舞を見てゐた。

此時妓生の一人は彼の月を印したる內庭を隔てた別房の方を何か用ありげに時々注視してゐた。僧舞を舞つてゐる一人の妓生が、二本の撥を種々の形に動かし乍らだん〳〵急調に太鼓をうつ處は、洪さんは固よりの事、最前から其單調に稍倦んでゐた剛三も余も、流石に其舞に心を牽かれてゐたに拘らず、其一人の妓生は別房の方にのみ氣を取られてゐるらしかつた。さうしてまだ僧舞の終らぬ前に彼女は立上つて遂に其別房の方に行つてしまつた。洪さんは其後を見送つて苦笑した。

僧舞が終ると再び又新らしき燗德利が運ばれたが滿を引いて飮むのはもう剛三許りであつた。妓生は又唄を歌つた。例によつて洪さんは譯して聞かせた。

「一上

眼を覺して見れば主から手紙が來て居る。

中

百遍餘り讀んで胸の上に載せた。

下

格別重くないけれど胸が鬱陶しい。」

けれども一人の妓生を缺いて何となく其唄は淋しかつた。

「さつき向うへ立つて行つた妓生が素淡と言つて、もう老妓ではございますが、あれで有名な妓生でございます。あの妓生がゐないと此二人だけでは唄でも本當に面白くは聞かれません。」と洪さんは言つた。成程其素淡といふのはさつき男舞の時男の方になつたので、女の方になつた若い妓生に比べたら其技に餘程の懸隔のある事は余等の眼にも明かに映つた。けれども一寸見たところはまだ二十四五にしか見えなかつた。日本の女でも朝鮮の女の服裝をすると若く見えるといふやうな事を聞いた事はあつたけれども、老妓といふのは一寸受取れなかつた。

「あれでもう老妓なのですか。」と洪さんに聞いて見た。

「さうでございます。もう三十近くにでもなつたら朝鮮では老妓の方でございます。」と洪さんは答へた。

「奴さん頻りに別房に氣を取られてゐたやうだつたが色男でも來てゐるのかな。」と剛三は丹のやうに赤くなつた顏に子供らしい愛嬌を湛へて聞いた。

洪さんは例の悲慘な口許を皙くもぐ／＼させてゐたが、一寸眼を光らせて其別房の方を見て、

「あそこに來てゐるのが、あの金成龍の弟でがあるやうな事は今迄別に聞かなかつたです仕方の無い遊蕩兒でございます。素淡と關係が……」と言つた。金成龍の弟といふのは曾て金成龍から文學好として特に余に紹介する筈になつてゐるあの男の事に相違無かつた。

其うち知らぬ風をして歸つて來た素淡を捕へて、

「此馬鹿野郎、怪しからん奴だ。」と言つて剛三は盃をさした。洪さんは白味の多い眼を光らせて素淡の顏を見乍ら何か調戯つてゐるやうであつた。素淡は流石に少し顏を染めて其に答へてゐた。其うちに其ぼんのくぼ邊で束ねた髮にさしたものを拔き取つて洪さんに渡した。洪さんは其を余等に示しつゝ、

「此素淡はこれでも昔は從二品の位であつたので、其時にこれを皇帝から貰つたのださうでございます。」と言つた。手に取つて見ると純金で製へた笄のやうなものであつた。

其から又劍舞といふ舞を若い二人の妓生で遣つたが、餘り面白くも思はなかつた。其よりもこれから從二品の素淡の家を訪ふといふ事に評議が一決して其旨を素淡に通ずると、素淡は頗る迷惑らしい顏をして又別房の方を意味ありげに見た。けれども洪さんは承知しなかつた。

十五

表に出て見ると鐘路通りの人影は少なくなつて月は愈〻明るかつた。素淡は余等三人に交つて氣が進まぬやうな風に歩いてゐたが遂に立どまつて洪さんを呼止め何か囁いた。洪さんは容易に承諾するやうな風は無かつたが、卽て少し離れて立どまつてゐた余と剛三との方に歩いて來て笑ひ乍ら斯う言つた。

「素淡が申しますには、今夜は少し腹が痛くなつて來たから、どうか明日にして下さるわけには參りますまいか。」さう言つて洪さんは言葉を切つて余等の返辭を待つてゐた。剛三は、

「可哀さうに、到頭腹が痛くなりやがつた。もうよい加減にして放免してやるさ。」と言つて笑つた。見ると四五間離れた處に素淡は月の光を浴びてしよんぼりと突立つてゐた。襟元に束ねられた髮の自ら作つてゐる曲線の形が、

裾の方に擴がつて居る裳の流と共に遠目に面白く見られた。卽て洪さんが大きな聲で何とか言ふのに對して、此離れた人影は此方を注視して時々返辭をした。さうして丁寧に辭儀をして別れた。

余は何となく物足らぬ思ひがした。三人でとぼとぼと何の當もなく西大門の方に歩いた。洪さんは、

「此先に圓融社といふ芝居小屋がありますが、御覽になりますなら、お供致しませう。」と言つた。余は早速、

「其は是非お供を願ひませう。」と言つた。

「もう何時になるかな。」と剛三は時計を取出して月光に透かせて見た。それから、

「まだ割合早いね、十一時前だ。」と言つた。

三人は遂に其圓融社といふ芝居小屋の前に立つた。

小屋の前はまだ流石に賑かに見えた。余は、いつ迄も歡樂を追うて歩き廻つた書生時代の心持を呼び起しつゝ――十一時にならうが十二時にならうが、眠る事も疲れる事も忘れて、灯火のある處を追うて歩き廻つた其當時の心持を呼び起しつゝ――切符を買つて中に這入つた。

圓形の建物は西洋風を加味したものであつて後ろ程高くなつてゐる見物席には多くの朝鮮人が靜かに見物してゐた。舞臺には二人の總角と三人の大人とが向合つて、一寸聞くと盆踊の唄と思はるゝやうなものを合唱し乍ら、各々手に持つたり首に掛けたりしてをる樂器を騒々しくうち鳴らしてゐた。洪さんの話す處によると、此處は芝居小屋とはいふものゝ今は寄席のやうなものになつてゐるので、音樂もやれば妓生の踊もあり、支那人の手づまのやうなものもあるとの事であつた。余等は一番後ろの高い處に腰掛の空席を見出して坐つた。其處も朝鮮人が腰を掛けてゐたのが、余等を見て席を讓つたのであつた。見渡した處日本人は余と剛三許りで場内の朝鮮人は皆不思議さうに我等を見上げつゝあつた。又男女の席は嚴密に區分されてゐて、女の方の席にも存外多くの婦人が顔を列べてゐた。洪さんの話によると、是等は皆兩班等の妾であつて、一人も正しい細君は居らぬと言つた。

舞臺の騒々しい囃子は容易に終らなかつた。洪さんは、

「こんなものは仕方がありません、何か面白いものに早々換へればいゝに。」と氣をもんでゐた。けれども余は舞臺よりも見物席の方により多くの興味を見出しつゝ、彼等朝鮮人の男女が如何なる心持で是等の演藝を見て居るかを知り度いと思つた。彼等は靜粛にぼんやりと唯其音樂を聞いてゐた。丁度余等が見下ろす眞下の處には子供を負つた一人の總角が腰掛の上にうつ伏になつて寢てゐた。負さつた子供も其儘に寢てゐた。すぐ其横に腰掛けてゐる朝鮮人は長い煙管の雁首を膝小僧の上に載せて握り、時々口から煙を吹き出しながらいつ迄も靜かに舞臺の方を見てゐた。女の席の方も皆格別外見もせず種々の色をした裳を兩手で抱くやうにして一齊に舞臺の方を見てゐた。其時ふと、今丁度這入つて來て後ろの方の席に著かうとする一人の女が眼に這入つた。其は遠目ながら慥に素淡に相違なかつた。

彼のたしかに素淡に相違ないと思はるゝ女は余等が此處に在るものとは夢にも心附かぬらしく、暫く腰掛に腰を掛けてゐた後立上つて階段を下り、其處から舞臺を横ぎつて樂屋の方に行つた。見物席から樂屋の方に行くのにはどうしても舞臺の上を通らねばならぬのであつた。其時舞臺の上では、六人の妓生が牡丹の造花を中

央に置いて其周圍を踊り廻りつゝあつた素淡が其後を横ぎる時、其等の妓生は各〻素淡を見て會釋をした。其が舞臺の上であるのか、ただの場處であるのか區別がつかぬ程平氣な態度で會釋をした。

「奴は素淡ぢやないか。」と剛三は漸く其と氣附いたらしく言つた。

「素淡はあの金成龍の弟と一緒に來たのでございませう。あの『男の席』の後の方に腰掛けたのが其に違ひないやうでございます。」と言つて洪さんは其光る眼をぢつと其方向に遣つた。

舞臺の上の妓生の踊は先刻朝鮮料理屋で見た素淡などのに比べると何逹に幼稚なものであつた。六人の妓生は各〻一枚の牡丹を折つて其を翳して踊るのであつた。剛三はいつの間にか腕を組んだ儘で居眠をしてゐた。

一度樂屋に這入つた素淡はもう二度と見物席の方へは出て來なかつた。金成龍の弟もいつの間にか居なくなつてしまつたと洪さんは言つた。彼等は余等の來てゐる事に氣がついて又此處を外したものであらうと思はれた。

剛三は鼾をかいて寢てゐた。余ももう此處を出度いと思つたが洪さんは、此次が支那人の手づまで其が一番面白いからと熱心に待設けてゐたので歸らうとも言はずにゐた。

成程支那人の手づまは面白かつた。一人の支那人は不思議な大きな聲を出して何とかいふと朝鮮人は皆笑つたが、余には其意味が判らなかつた。

「あれは朝鮮語ですか。」と洪さんに聞くと、

「さうでございます。」と洪さんは答へた。やがて其支那人は一つの大きな茶箱のやうなものを持出して正面の机の上に据ゑ、其箱の中を見物人に示して何にも無い事を證明して置き、忽ち其中から種々のものを取出して見物の喝采を博した。空箱の中からものを出すといふ事は日本の手づまと變りはなかつたが、唯其函が極めて大きな函で、其中から取出すものも大きな枯れた鉢植や、大きな汚い壺などであることが日本の手づまの小綺麗なのと比べて大國的に見えた。殊に支那人は汚れ垢づいた服裝をしてゐたが、しまひには其上衣を脱いで肌を現はし、辮髪を蛇の如く首に卷きつけて其端を口にくはへなどして勢込んで遣るのが異樣に見えた。囃子は鉦や太鼓の這入つた極めて殺伐な騷々しいものであつた。朝鮮人の音樂や踊の單調で悠長なあとに出て來たので此刺戟の强い囃子や演戲は頗る人の心を引き立てた。

其次は又支那人の熊使であつた。一つのよく馴らされた熊が支那人の命令のもとに後足で立上つたり、つべ返りをしたり棒を遣つたり、其他いろ〳〵の藝當をして其都度杓に一杯づつの御馳走にありついて、異樣な聲をして吼えた。其聲はいかにも猛獸的で氣味惡く響いた。平生饑やされてゐて僅の御馳走にありつく爲めに種々の藝當をして悲しく吼え立つる猛獸の聲と、其猛獸を叱咤する支那人の聲と、其を喜んで囃し立つる朝鮮人の聲とが打交つて異樣な感じを人に與へた。見ると洪さんは頗る興に入つたらしく、今迄に餘り見たことのない熱のある顏附をして熱心に舞臺を見詰めてゐた。剛三は猛獸の聲にも負けぬやうな鼾をかいて熟睡してゐた。

熊使が濟んでから又朝鮮人か四五人舞臺に現はれて、例の樂器を鳴らして單調な音樂を奏しはじめた。余等は剛三を起して表に出た。月は傾きながらも愈〻明かに、夜涼は肌寒を感ずる程であつた。剛三は頻りに大きな欠びを大空に向つて連發してゐたが、これから突然素淡の家を驚かして遣らうといふ洪さんの動議に余が直ちに贊成したので、

一文學者と一緒に歩くのはもうこり〳〵した。」

と言つて笑ひ乍ら、其でも素直に人のあとに跟いて來た。

十六

朝鮮人は夜はいつまでも起きてゐて、朝はいつまでも朝寢をすると聞いてゐた。洪さんは眠さうな顏もせずに例の色の褪めたフロックコートを著た長い體を月下にとぼ〳〵と運ばせてゐた。剛三の欠びは何時か暫く止まなかつたが眠が醒め切つてからは又元氣が出た。

「今日は文學者を案內して遣る積であつたのが到頭文學者に引ずり廻される事になつた。不思議なところへ來たね。」と言つて其邊を見廻した。何でも鍾路の通りから橫に這入つたところで朝鮮家屋のみが並んでゐて、其町の突當りに宮殿や廟などに見るやうな赤く塗つた大きな門があつた。

「これはどこの門です。」と聞くと洪さんは、

「此門の後がさつき見た領事館になつてゐます。」と言つた。門にかゝつてゐる額は白く月の光に見えたが其文字は讀めなかつた。洪さんは其門に突當る前に更に小さい橫町に這入つた。其處も固より朝鮮家屋許りであつて、軒並の溫突からは煙も出ず、悉くひつそりと寢靜まつてゐた。

「此家が初月のうちでございました。」と洪さんは言つた。初月といふのは一番の美人といふ噂のあつた妓生で、近く朝鮮華族の何某に落籍されて妾となつたのだといふことは嘗て聞いてゐた。見ると穢い家で、これが果して妓生の家かと怪しまるゝ許りであつた。洪さんは更に余等を小さい橫町に誘つて、とある一軒の門の前に立止まり、暫くうちの容子を伺つて後其門を叩いた。家はまだ寢てゐなかつたのであらう、間もなく返辭があつた。家のうちに奧まつて聞える聲と、月下に立つて居る洪さんのあらはな聲とは其れから二三度推問答をした。其うち門を開けて姿を現はしたのは老婆でも下男でもなく、素淡其人自身であつた。服裝はさきの水色絹の上衣でも紫の裳でもなく上衣も裳も悉く眞白で、其が月の光を受けて我等を見上げた姿が、さきの初月の家同樣穢い朝鮮家屋を背景にして殊に艷に美しく見えた。さうして余等の何人であるかを慥かめた時、兩手を裳にかけて其を上にゆり上げる樣な動作をし乍ら、「アイゴー。」と泣きさうな聲を出した。

余は嘗て斯らいふことを聞いてゐた。或情夫が妓生のうちを訪ねた時、其門が締まつてゐたならば其は已に一人の情夫が來てゐるといふ證明になるので、あとから來た情夫は外から聲を掛け自分は今後れて來た爲めに這入ることが出來ぬのを殘念に思ふといふと、前から來てゐる情夫は、其は誠に氣の毒だ、自分はもうこれから歸つてもよいから、貴方代りに這入つて泊つたらよからう、と答へ、あとからの情夫、いや其には及ばぬ、自分はもうこれから歸るから幸福な一夜を靜かに眠めといひ、同じやうな謙讓ある言葉を更に二三度雙方より繰返し、結局あとから來た情夫の方が引返して歸ることになる、これが儀式のやうになつてゐるといふ、といふ話を聞いた事があつた。けれども此場合の光景は其とは全然相違してゐた。

余は今迄讀者に告げることをしなかつたが、洪さんの前後の容子から察すると、洪さんは或は素淡の情夫の一人かも知れなかつた。泉家では餘り笑ひもしなかつた洪さん、朝鮮料理屋に在つても初め剛三の下卑た洒落を厭々乍ら通辯した洪さん、何事にも冷靜に用心深く見えてゐた洪さんが、一旦金成龍の弟と素淡との關係を認めてからは何となく執念深く素淡のあとを追ふやうに見えた。彼の闘陣社に素淡の來るといふ事は恐らく洪さんの豫期してゐたところ

で、其爲め余等を茲處に誘つたものとも解釋することが出來た。此夜更けに此家へ來たのも亦略其心持を諒解することが出來た。
　素淡は暫く洪さんと話し合つてゐた。洪さん一人ならば兎も角余等二人の日本人の交つてゐるといふ事が素淡に取つては餘程の苦痛らしく見えた。彼等二人の話し合つてゐることが如何なる意味のものであるかは解らなかつたが此際余と剛三とはぼんやりと其談判の結果を待つよりほか致し方がなかつた。其時驚いたのは突然門内から衣冠束帶の朝鮮人の現はれ來つた事で其も一人や二人でなく殆ど四五人も引續いて現はれたのが、皆格別余等の方を見るでもなく、風の流れるやうに、知らぬ風をして表へ出てしまつた。
　多勢の朝鮮人の門外に流れ出たあとで余等は素淡に導かれて家へ這入つた。月光で見る内庭の模樣は十分に判らなかつたが、其は餘り廣くはなく夜目にも穢いやうに思はれた。其でも妓生の住居は普通の人の住居よりも美しいのだと聞いてゐた。之が美しい方ならば普通の人の住居の穢さが思ひ遣られた。素淡は先に立つて一つの離れのやうになつてゐる房に這入つた。
其處には照り返しの附いた眞鍮の燭臺に白い蠟燭が點つてゐて、今其處に坐つた素淡の横顏を明るく照らした。房は一間半の狹い室で一方に眞鍮の金具の著いた朝鮮式の簞笥が二棹並べてあつた。さうして其一つの方の簞笥は、上の戸袋の戸がガラスに彩色を施したケバ〳〵しいものであつて、其上には白粉の空瓶と思はるゝものが十許りも並べてあつた。
「これは朝鮮の女の癖でございます。何でも少し美しいものは無暗に並べ立てるので、何の趣味もありません。」と洪さんは言つた。古びたレッテルが行儀正しく正面を向いて揃へられた處はどうしても田舍の床屋などで見るやうな光景であつた。其他其處に置かれた鏡臺でも金唐紙のやうなものでも皆余が稚い時、年とつてゐた母のを見たことが思ひ出せるやうな油染みた古びたものであつた。白粉を白く塗つて髮を一絲亂さず綺麗に梳きつけた素淡と此鏡臺とはどうしても不調和に感ぜられた。先刻洪さんが素淡を老妓と言つた言葉が此鏡臺などに對しては決して不穩當でないやうにも思はれた。
　剛三が洪さんに渡した金を洪さんから受取つて素淡は庭に降りた。内庭を隔てゝ臺所や下人のゐる房などは別にあつた。素淡は其處に行つて何か命じてゐるやうであつた。
「こんな夜更けになつても食ふものを命ずることが出來るのですか。」と余は洪さんに聞いて見た。
「氣の利いたものは出來ませんでせうがビールに何か一つ位のお肴は出來ますでせう。」と洪さんは言つた。さうして素淡の居らぬ間に洪さんは、鍵のかゝつてゐない簞笥の抽斗や、鏡臺の抽斗や、其他戸棚や箱などの蓋を悉く開けて見た。大方たいした内容物は無かつた。鏡臺の抽斗からは雲脂のたまつた櫛や、手にするのも穢いやうな汚れた笄のやうなものが出た。余はさつき古びた鏡臺を見た時は幼い時見た母の鏡臺を思ひ出したと言つたが、此汚れた櫛や笄を見た時は亡くなつた祖母の鏡臺の抽斗を年經て後開けて見たやうな心持であつた。
「斯んな物がありました。」と言つて洪さんは何物かを剛三に渡した。見ると其は繪葉書のアルバムであつた。剛三は其を手に受取つたが二三枚開けて見て興味もなささうに下に置いた。續いて洪さんは一つの小さい函の中から花札を見出して其を余等の前に持出した。其は日本の花札であつた。剛三は其を取上げて、

「奴等これを遣るのかな。」と不思議さうに言つた。

「一體勝負事は好きでございますから盛んに遣ります。」と洪さんは答へた。軈て素淡は席に復して其處等に取散されてゐるものをちらと見たが別に何とも言はなかつた。チョンガーの運んで來た竹の脚の附いてゐる茶ぶ臺のやうなものを並べて其上にビールを三四本と蕎麥の鉢を人數程並べた。蕎麥は朝鮮蕎麥で唐辛子や芹などが澤山に這入つてゐた。

「お上りなさい。」と素淡は日本語で言つて笑つた。さうして又朝鮮語で何とか言つた。洪さんは、

「お口に合はんでございませうが召上つて下さい。」と其を日本語に譯した。

余等は下等なコップに濁つたビールを注いで貰つてガブ〱と飲んだ。蕎麥はつとめて食つたけれども唐辛子の辛い上に脂臭い臭氣があつて旨いとは思へなかつた。照り返しの光を半面に受けてゐる素淡と洪さんは其を旨さうにして盛んに食つた。

さつき洪さんが抽斗や戸棚を搔き探してゐた時余等の眼にちらと映じたものは、とある戸棚の中に深紅の夜具の積み重ねられてあつたことである。其時洪さんは朝鮮語で何とか言つて急いで其戸を締めてしまつた。今蕎麥を一箸二箸厭々作ら食つて其儘箸を投じた剛三は、のそのそと立上つたと見ると、いきなり其戸棚を開けて其深紅の夜著を引出した。素淡は、

「アイゴー。」と言つて箸を持つた儘あつけに取られて見てゐたが別にどうすることも出來なかつた。剛三は傍若無人に悠々と一枚の蒲團を延べて其上に横になつた。狹い部屋の片隅に斜に敷かれた赤い蒲團は面白く余の眼に映つたが、其よりも剛三の其上に仰臥して一言も發せず默りこくつてゐる容子が一段と興味があつた。剛三は慥に眠つては居なかつた。彼の眠は圓融社を出てから月下に連發した欠びによつて今は全く覺めてゐるに相違なかつた。彼の醉も亦冷たい月の光によつて冷却されたに相違なかつた。素淡が許の濁つたビールは幾ら滿を引いても再び彼の醉を呼び戻すには足らぬらしかつた。彼は覺醒した體を恰も眠れるかの如く赤い蒲團の上に横たへてゐるのであつた。彼は何をしに朝鮮に來てゐるか。殆ど彼を主謀者としての浪人組の活動は何を意味するか。彼は洪元善と何事を爲すべく結託しつゝあるか。其處の消息を知るものは此赤い蒲團の上の肉塊のみであつた。素淡と洪さんとは又朝鮮語で何か喋り合つてゐた。素淡と洪さんとが如何なる關係の下に在るかも亦余に取つて興味ある問題であつた。日韓併合の前後に續出した兇徒には必ず妓生が色彩を添へてゐるといふ事であつた。彼等は月下に笛を吹いて別れを惜んだとか、莘夜に船を盜んで共に姿を晦まさうとしたとかいふやうな物語めいたことを實行してゐた。けれども洪さんは斯る淺慮客氣の若者とは大分趣を異にしてゐた。彼は天下の大勢にも通じ世の辛酸をも嘗め盡してゐた。彼の目には余の如き文學者は固よりの事、剛三の如きすら恐らく小兒の如く映ずるのであらう。其抑へ難い内心の侮蔑は時々彼の言動に現はれようとしたが彼はいつも巧に其を韜晦することを忘れなかつた。而も此洪さんと從二品の素淡との間に何等かの關係を見出すことは、余の傳奇的の好奇心を滿足さすに十分であつた。余はさつき剛三の打棄てて置いた繪葉書のアルバムを見るともなく見つゝ私に二人の容子に注意してゐた。

アルバムを開けると劈頭第一に安重根の朦朧たる寫眞があつた。これは複寫に複寫を重ねたものが繪葉書に寫されてゐるのであつた。次に

は麻布の御用邸に在る王世子殿下の日本服を召した寫眞があつた。其次には鬚髯悉く白い伊藤公の寫眞があつた。其次には日本の子供の玩具を持つて遊んでゐる寫眞があつた。其次には素淡と同じやうな服装をした妓生の寫眞が五六枚もあつた。其次には赤坂萬龍の寫眞がこれも四五枚並べて挿んであつた。

繪葉書を見るのは其儘素淡の心を讀むやうな心持もした。劈頭に安重根の寫眞を見た時は彼女の穏かな顔のうちにも何處となく陰險な相が潜んでゐるやうに思はれたが、日本の子供の寫眞を見た時は又何國も同じ女の優しさを思ひ遣つた。見ると彼女は美しい顔に今は何の屈託も無いやうに極めて快活に打開けた容子をして渋さんと話してゐた。渋さんは余の方を振り返つて、

「素淡の素性を少し聞いて見ましたがお話し致しませうか。」と言つた。余はアルバムを下に置いて、

「其は面白さうですね。是非伺ひ度いものです。」と答へた。

「素淡は晋州の生れでございまして、十一の歳に妓生になり十五の歳に京城に出たさうでございます。宮中に出入するやうになりましてからは殆ど毎日のやうに宴會がございまして、つい草臥れた爲めに階の蔭に隱れて居眠りをした事もある位で、其頃は面白くもありましたが、辛い事も隨分辛かつたさうでございます。」と渋さんは歴史の話でもするやうな調子で話し出した。

「一體妓生が宮中に出入するやうになりましたのはごく輓近の事でございまして、宮中に出入さす爲めには位階が無くちやならんところから、此素淡のやうに從二品などといふ位を貰ふことになつたのでございます。」其から渋さんは余との話を中止して素淡に何か朝鮮語で言つた。素淡は立上つて、さつき渋さんの荒した其處らよりも大分奥まつたところから紙にくるんだものを持出して來た。受取つて見ると其は三枚の辭令書のやうなものであつた。其一枚には斯うあつた。

「今此
進宴教是時奉揮巾兼奉花差備女伶素淡從
自願免賤帖文成給者
光武六年六月　日
宮　内　府印

他の一枚は又斯うあつた。

「敕命
醫女素淡爲通政階者
光武六年六月　日
今此
進宴時擧行醫女帖成給事奉敕」

殘りの一枚は斯うあつた。

「敕命
醫女素淡爲嘉善階者
光武六年十二月　日
進宴擧行醫女帖加成給事奉敕」

渋さんは朝鮮式の白文を讀んで聞かせた。前に渋さんの言つた通り女伶としては宮中に出入することが出來ないので、初めは宮中の宴會の時に拭掃除をしたり花を生けたりした其女伶素淡の職を免じ新たに醫者として取扱ひ昇殿を差許す、其昇殿もだん〳〵位を進めると言つたやうな意味のものであつた。

其から余が二三の質問に對して渋さんは通辯をしてくれた。其に對する素淡の答へは斯うであつた。

「宮中に出入した時代は勿論の事、其後でもお蔭樣でまだひもじい目をする程生活に苦しんだ事はございません。けれども此お腹を惡くしてゐる事が今は何よりも苦しみでございます。この間も大漢病院に行つてお腹を割つて直して

貰ひ度いと申しましたら下のお腹なら直して上げるが上のお腹は直らない。食物を氣を附けたらよからうと申されました。昔からまだ此人と思ふお方には出逢ひません。此方から思ふお方は向うから厭と仰しやるし、向うから何とか仰しやつて下さるお方は此方から左程にも思はなかつたりして今に獨身で暮して居ります。どうか日本人のうちで心切なお方を見出して身を任せ度いと思つてゐます。……」

剛三は依然として眠れるが如く動かなかつた。彼は內地に在る時も其一擧一動は悉く探偵によつて警察に報告されてゐた。彼が何度料理屋に行つて何時何圓何十錢の支拂をし、女中に幾らの祝儀をやつたといふ事迄一々記錄に殘されつゝあつた。朝鮮に渡つて來てからも同より當路者の注意に變りは無からう。彼が某月某日の夜內地から來た文學者と洪元善とを拉して朝鮮料理から朝鮮芝居を經廻り、夜二更に及んで尙妓生素淡の家を出ずにあつたといふ事も、進んでは其素淡の家に在つて彼は財布から幾らの紙幣を摑み出して蕎麥四人前とビール何本を購はしめたといふ事も明朝を出でずして報告される事は疑ひも無い事であらうが唯其素淡の宿に在つて、赤い蒲團の上に仰臥して、木枕に載せた頭の中で何を考慮しつゝあつたかといふ事は或は其報告に洩れるかも知れなかつた。

素淡は面前に余を置いて、日本人に身を任せ度いなどとしら〳〵しい事を言つた時其顏にも、洪さんの顏にも冷笑の閃きが認められた。けれども余は其冷笑の閃きによつて侮辱を感ずるよりも、却て彼等二人の心中を揣摩し得る手がかりを得たやうに覺えて愉快であつた。寧ろ今少しかゝる動作の繼續せん事を希望したが、併し其は無益であつた。洪さんは例の注意深い目でちらと余の顏を見てすぐ其冷笑を悲慘な口許の皺の中に藏ひ込んでしまつた。其から又素淡の身の上話を切れ〳〵にした。其は親兄弟は尙晋州に在つて百姓をして居るといふ事や今は此京城に於ける妓生の副取締を命ぜられて居るといふやうな事であつた。

「此方は『春香傳』のやうな小說をお作りになる方だから、お前の身上話をして書いて戴くといゝと申しましたら、素淡はどうかなるべく善く書いて戴き度いと申しました。」と言つて洪さんは笑つた。

「『春香傳』位のものは妓生でも讀むのですか。」

「讀むどころでは御座いません。朝鮮假名の本もありますから其も讀みませう、けれども第一『春香傳』ほど一般に行はれる芝居は無いのでございますから、此素淡などは度々春香に扮した事もありませう。さつき團成社で御覽になつた妾などの中にも『春香傳』や『再生緣』や『紅蓮傳』などを繰り返し〳〵讀んで泣いたり笑つたりして日を暮し、夜になるとあゝいふ風に芝居に行くといふやうなのも澤山にあります。」

「日本の德川時代の女の草雙紙を愛讀した類ですな。」

「さうでございます。尤もさういふ妾はまあたちのいゝ方の妾で、酒を飮んだり博奕を打つたり猥な話をしたりして日を暮すものの方が多いでございませう。」

「素淡などが人の妾になつたらどちらの方でせうか、あの金成龍の弟の妾にでもなつたら。」

洪さんは朝鮮語で何か素淡に言つた。素淡は少し顏を赤らめ乍ら何とか返辭をした。

「金成植の妾になつたら、『春香傳』や貴方のお書きになつたやうなものや、其他ためになるものを讀んで貞淑な婦人として日を暮さうと思ひます。」と洪さんは自分がいふやうに直譯して聞かせた。

「金成植といふのは金成龍の弟の事ですか。」

「左様でございます。」

「金成植の妾になつたらなどと平氣でいふのですか。怪しからん奴ですな。」

「怪しからん奴でございます。」と洪さんは事もなげに笑つた。

十七

余等が素淡の家を出たのは二時を過ぎてゐたらう。鍾路の通りの巡査はラムプの光を余等の方に向けて怪しく目送したが別に誰何はしなかつた。明るい月はだん〳〵西に傾いたけれどもいつ迄も雲のかゝるといふやうな事は無かつた。京城の天地にいかに陰謀が行はれつゝあつた時でも大空の月は常に斯くの如く清明であつたらうと思はれた。

剛三は、もう歸らうと余が促した時、倒れ木を起したやうに立上つた。素淡と別れる時も彼は大きな手を差延べて握手した許りで、門を出てから此處に來る迄も其沈默を續けてゐた。余も別に無用の事を話し掛けもしなかつた。

洪さんはとある町角に來て立止つた。さうして、

「貴方がたはもうお歸りでございますか。」と剛三と余との顔を見、「それでは私は此處でお別れに致しませう。」と丁寧に辭儀をして横町に這入つた。彼は初めて通譯めいた幇間めいた不愉快な役目を免れ得たのを快とするやうに姿勢を正して横町の月に歩み去つた。其後影を目送した時余は多年志士を以て任じ來つた彼が今日の心情を悲しまねばならなかつた。

暫くしてから剛三は大人が小兒に對するやうな口吻で余を振返つて言つた。

「今夜は何か面白い事があつたか。材料になりさうか。」

余は取り敢へず、

「珍らしくつて面白かつた。」と答へざるを得なかつた。

「さうか。あんな事が材料になるのなら今度は又他の事を見せてやらう。」と何處迄も大人の態度を持して悠々として先に立つて歩いた。最前「文學者と一緒に歩くのはもう懲り〳〵した。」と言つたり、「今日は文學者を案内して遣る積りであつたのが到頭文學者に引ずり廻される事になつた。」と云つたりした事は忘れたやうな顔をしてゐた。

南山樓はまだ門を開けて余等を待つてゐた。お京は眠さうな顔をして出迎へた。さうして、

「貴方石橋さんのやうな惡友と一緒に出歩いてはいけませんよ。」と人をたしなめるやうに言つた。

「惡友なんて生意氣な言葉を知つてやあがる。」と剛三は笑ひ乍ら自分の二階の部屋に上つた。

余も自分の部屋に戻つて著物を著替へてゐるとお京はぶつ〳〵口小言を言ひ乍ら這入つて來た。

「これから又一杯遣るんですつて。本當に底拔けねえ。貴方にもいらつしやいといふのですけれど、もうお休みになつたと言つて置きませうね。」と一人で合點して歸つて行つた。

いつも相當に賑かな南山樓も流石にひつそりと寢靜まつてゐた。南山樓に歸つて更に德利を何本倒したといふ事迄當路者の問題になる剛三の境遇を滑稽なやうにも氣の毒なやうにも思つた。

床にもぐり込まうとしてふと見ると今日出る前に筆を加へた彼の慶之助の原稿が机の上に置かれてあつた。

十八

翌朝は草臥れて朝寢をした。一度眼は覺めたのであるが、ぼんやりと昨夜の事を考へ乍ら又

寢た。うと／＼し乍らも非常に身體の倦怠を感じて現と夢との境に苦痛を覺えるやうな狀態が續いた。愈ゝはつきりと眼が覺めたのはもう十時が近かつたらう。

金成龍の宅に泊つた妻はまだ歸らず、八疊の座敷の中央には余一人が寢てゐるのであつた。日は南の障子に當つてゐてうだつたやうな體を動かすのも乙構に覺えた。頭を枕に載せたまま回轉さすと、目に入るものは無落款の書と、古びた馬の繪と、床の間の隅に置かれた彼の贋物の高麗燒とであつた。

昨夜は日暮前から夜の二時迄も彷徨き廻つて、一時は眠い事も草臥れる事も忘れて、唯燈火を追ひ歡樂を追つた青年の昔に返つたやうな心持もしたのであつたが、其醉の全く醒めた今朝の心持は不愉快であつた。其處へお京が這入つて來て、

「おやもう御眼覺。もつとゆつくりとお寢みになればいゝに。石橋さんが、一杯遣つてゐるから貴方もお眼覺になつたらいらつしやいツて。」

と言ひすててもう手早く蒲團を片附けはじめた。

漸く顏を洗つて余は剛三の部屋に行く事にした。

廊下で逢つたお京は、

「おや、いらつしやるの。貴方は薄志弱行ね。奧さんがお留守になるとすぐ石橋さんに同化されてしまふのね。」と大きな聲で言つた。

剛三はチリの鍋を控へて小娘上りの女中に酌をさせ乍ら天下の大事を處理するが如き堂々たる態度で朝酒を飲んでゐた。小娘は鷲の前の鳩のやうに恐れ入つてお給仕をしてゐた。

「朝から遣つてるね。」と聲を掛けると、

「マア坐るがいゝ。」と顎で其邊を指した。小娘は俄に援兵を得たやうな眼附をして余の顏を見上げた。

「今朝は頭が痛くて氣持が惡い。」と余は獨りで顏を顰めると、剛三は其には答へずに旨さうにチリの豆腐を口に持つて行つた。昨夜の事などは最早忘れてしまつてゐるらしく唯チリの味のみが今の彼の心を支配してゐるやうに見えた。

お京は余の膳を其處に運んで來た。さうして小娘に代つて酌をした。

「石橋さん、貴方今日演說をするんですつてね。」

「うん。」

「およしなさいよ。貴方本當に演說が下手だわ。」

「失敬な事をいふ。貴樣等に上手下手が判るか。」

「判るわ、本當に見苦しい、およしなさい。」

剛三は苦笑した。流石にお京の前に据ゑると剛三の堂々の陣容も、稍ゝともすると亂れようとした。其處へ這入つて來たのはお笹であつた。

この間余は或僧に逢つて斯んな話を聞いた。自分が此京城に寺を開いてから取扱つた葬式は大概中年者である。小兒は時々ある。老人は殆ど絶無と言つてもよい。初めは不思議に思つたがよく事情を調べて見ると、其も其筈で第一老人は殆ど此地に居ない。此地に渡つて來て仕事をせうといふものは血氣盛な若いもの許りである。從つて死ぬるのも其中年者に限られてゐる。さうして之に關聯した悲慘な事は男に限らず女に限らず一人でも死んだもののある店には大抵翌日から其機關の運轉を中止せねばならぬ程切迫した狀態の下に在る。いはゞ男も女も精一杯以上の力を出して十二分の働きをしてゐるのであるから、夫なり妻なり一人を亡くした其店は忽ち器械を動かすことが出來なくなるのである。これは內地などで想像することの出來ぬ植民地の一特色であると、前にも言つた

やうに此地に渡つて來て仕事をしてゐるものは大槪一度は內地で失敗したものである。また家庭を作つた許りといふやうな若夫婦よりは所謂中年の壯者が多いのも其爲めであらう。さうして親戚も友人も內地に在る許りで彼等夫婦ものは其單純な家庭を提げて最後の奮鬪を試みに此植民地に渡つて來たのであるから、孰れか其一人を亡くして忽ち機關の活動を中止せねばならぬのも止むを得ぬ次第である。けれども斯く一方に內地の都會の民以上に逼迫した生活を試むるものがあるかと思ふと他方には又全く無爲徒食の遊民が大手を振つて大道をのさばり步いてゐるのも亦植民地の一特色である。單に口を緘して何事も言はぬ其報酬として或一大會社から數百圓の手當を支給されつゝある所謂寄生なるものがある。剛三の如きも如何なる處から其旅費を得て何を成す爲めに永らく滯在してゐるかは大いなる疑問であるが、兎に角京城の天地は彼を容れて知らん顏でゐる。彼のお筆の如きも矢張り其社會の罅隙に生存してゐる船蟲のやうな態度で何の憚るところも無く南山樓に出沒してゐるのであつた。

「お筆さん、今お歸りなの。」とお京は意味ありげにお筆を見上げた。

「はあ唯今。」とこれも意味ありげなる眼をお京に向いてばたりと剛三の傍に坐つた。

「兄さん昨晚大變遲かつたんですつてね。何處を彷徨いてらしつたの。」

「何處を彷徨いてゐようと入らんお世話だ。」と言つて剛三は笑つた。

「お盃頂戴な。」とお筆は剛三の手から奪ひ取るやうにして盃を取つて、「姉さん注いで頂戴。」

お京は默つて注いだのをお筆はすぐ美しい口に持つて行つて半分許り飲みほした。

「兄さん私今日醉ふわ。」

「勝手にするがいゝ。貴樣が醉はうが醉ふまいが己の知つた事ぢやない。」と言つて剛三は又笑つた。剛三の顏は漸く丹のやうに赤く染まつてお筆の青白い顏との對照が目立つて見えた。お筆は其から盛に盃を重ねた。其から三味線が持出されて初めはお筆が彈いて歌つた。終にはお京が覺束ない手つきで彈くのをお筆は口三味線で訂正し乍ら踊つたりした。泉家で三幅や京城藝者の落語や踊に剛三も余も腹の皮をよつた時、笑はなかつたのは洪さんとお筆とであつたが、流石にお筆の腕はたしかであつた。これたけの腕を持つてゐるお筆が彼の下劣な落語や踊に笑ふ事が出來なかつたのは道理あることであつた。さうして何故に彼女は今宵に限つて斯んなにはしやぐのか其理由は判らなかつたが此醉態のうちに却て彼女の淋しい一面を隱すことが出來なかつた。

十九

お筆の醉態は計らずも一座の興を呼んで剛三も余も暫くは笑ひ興じたが朝からの三味や踊は何となく淺間しく、間もなく其興も衰へて余は自分の座敷に歸つた。

金成龍の宅から電話がかゝつて來て今二三日是非奧さんをお泊め申すことにし度いから許して吳れと言つて來た。余は無造作に承諾を與へ、疊の上に橫になり乍ら又考へるともなく昨夜の事を考へて見た。

あの事は遂に尋ねても見なかつたが、彼の素淡の門から出た多勢の朝鮮人はあれは何であつたのだらう。あのうちに例の金成龍の弟の金成植といふ男もゐたのかも知れぬ。闇樂社に行つた時も朝鮮人は余等二人の日本人に席を讓り、素淡の家でも折角先に遊びに來てゐた彼等は余等の爲めに去つたのであつた。余は此に對して決して勝利を誇らうといふやうな念慮を起

すことが出來なかつた。寧ろ人の花園に足を踏入れたやうな心持で無用な行爲であつた事を後悔した。彼等朝鮮人は彼等朝鮮人として各〻愉快な自己の天地を作らしめよ。日本人が横合より其中に足を踏入れる事は何となく不愉快なことにも考へられた。素淡と洪さんが余に通じない朝鮮語で頻りに何かを語り合つてゐる處に余は多少の侮蔑を感じ乍らも抑へ難い同情をも惹起すのであつた。

余は斯る事を考へ乍らうと〱してゐるうちに遂に晝寢をしてしまつた。夜の更けた朝は幾ら朝寢をしても多少の頭痛を覺えて、氣分も不愉快であるのが常であるが、いつも其は晝寢によりて恢復された。目の覺めたのはもう日が西に落ちて涼し過ぎると思はるゝ風の簾を吹いてゐる頃であつた。頭は生れ變つたやうに輕くなつて、氣分も頗る壯快であつた。此頃修繕した美しい南山樓の湯槽の中で余は、思ひつきり手足を延ばした。其時、

「一寸旦那樣、其處に指環は無くつて。」と戸の透きから顏を出したのはお筆であつた。見ると流しに俯向けてある桶の上にまぶしく輝いてゐる寶石入の金の指環があつた。

「これだらう。」と余は取上げて見ると何金といふのであらうか、持重りのする純金の指環であつた。

余は湯を上つてからも静平な心持は暫く續いた。さうして私に慶之助の來る事を待設けてゐたが音沙汰も無く、又剛三もお筆もあれからどうしたか闃として聞くところが無かつた。お京も今日は休み番だとかで今朝の三味線以來姿を見せなかつた。晩飯の時になつて小娘の女中の話すところによると、今日は何處かに政談演説がある筈で剛三も其に出る事になつてゐたのが、其筋から禁止されたとかで、余の晝寢をしてゐる間に剛三は他の浪人組二三人の來訪を受けて一緒に何處かへ出て行つたといふ事であつた。

余は此夜は何となく寂寥を覺えた。昔下宿生活をしてゐた頃一夜寄席に行くと翌晩蟄居することに耐へられぬ淋しさを感じたが、其程ではなくとも、昨夜の紅燈綠酒に比して何となく寂寥を覺えるのであつた。十時を過ぎた頃から夜涼を追うて余は泥峴――本町通りを朝鮮人は斯く呼ぶ――を散歩した。もう人通りは出盛りを過ぎてゐた。兩側の店をも覗き倦いて余はふと彼の慶之助の一座が遣つてゐる明治座を立見して見ようと思ひ立つた。

二十

明治座は狹い小屋であつた。流石に電燈が明るく灯つてゐるので見物席の人の顏は一々吟味することが出來た。余は這入口に突立つてゐると直ぐ其處の桟敷から余を小手招きするものがあつた。見るとお筆とお京とであつた。余は此二人の席に割込むことを躊躇して後ろの方に小さくなつて坐つた。舞臺では何とかいふ一番目はもう濟んで、「喜劇隣同志」とかいふものが始まつてゐるらしかつた。詳しくは判らないが、目の縁を薄く隈取つた著物をつんつるてんに著た女中が一人で喝采を博してゐるところがどうしても喜劇の舞臺面であつた。余は少しもをかしみを覺えず寧ろ其くすぐりを不愉快に覺えたが座中の多くのものは聲を出して笑つてゐた。お筆もお京も言合はしたやうにハンケチを口に當てて體を前後に動かして笑つてゐた。今茶屋の女中が煙草盆と一緒に持つて來た番附を見ると、其は昨日慶之助が袂から出して置いて行つたあの番附と同じもので唯外題と役名とが違つてゐた。鶴見慶之助といふ二號活字の上に在る役名を見ると「妹　春野」と並べて「女中お

玉とあつた。よもやと思つて他を驗べて見たがもら其他に女中らしいものは無かつた。さうすると、今舞臺で俗惡な當込みをして喝采を博しつゝあるのがあの慶之助に相違なかつた。余は頗る意外の感に打たれて暫く茫然として其女中の動作を見てゐた。成程よく見て居ると其は慶之助に相違なかつた。

一篇の脚色は、隣り合つてゐる家の主人公が互に藝者狂ひをし、其細君達も共に嫉妬を燒いてゐるのを此慶之助の扮してゐる女中お玉が兩方の細君に入智慧をして一方の細君は僞病人になり、一方の細君は腹氣狂になり互に亭主を弱らせるといふ、極めて幼稚なものであつたが、植民地の男女は此脚色に醉はされて前後を忘れて笑ひ興じてゐた。

廻り舞臺の時に、庭に置いてあつた一つのテーブルを取除けるのを忘れた爲め其テーブルは舞臺と共に上手から正面の方に引摺られて來て遂に土間に顚覆した。其テーブルの上には一つの筒形の陶器の火鉢が載つかつて居たので其も灰煙をあげて顚覆した。同時に土間ではワッと子供の泣き聲が上つた。座中の人は皆立上つて其方向を見遣つた。テーブルは足を空樣にして墜落してゐたが、幸 其邊には人が少なく、子供が泣いたのもたいした怪我は無いらしかつた。座中の人は皆怪我の無かつた事を祝し合つて、別に道具方を咎める聲は聞えなかつた。さうしてすぐ熱心に、回轉された新らしい舞臺面を眺めた。

前幕の、女中が二人の細君に方策を授けるところは、未來の葛藤が豫想されて多少の興味もあつたが、後半の、二人の亭主が家へ歸つて來て二人の細君の狂態に手古摺るところは豫想程の事が無くつて殊に面白くなかつた。其舞臺の役者はつとめてをかしがらせようとして樣々の當込みをやつた。慶之助の下女は陰に隱れてゐ乍ら時々姿を現はして不思議な恰好をして見物人を笑はせてゐた。

其が濟んだのが十一時半頃でもあつたらうか。余はもうこれで終つたことゝ思つて歸り支度をしてゐると、まだ時間があるから更に二幕の喜劇を差加へて御覽に入れると、一人の役者が舞臺著のまゝ幕外に出て口上を言つた。座中の人は皆喝采した。朝鮮人は夜更かしをして朝寢をすると聞いたが、此地にゐる日本人も十一時半になつてまだ二幕の喜劇を差加へられて喝采する程夜更かしに馴れてゐると見えた。是等も星野の所謂日本人の朝鮮人化する一現象かとをかしく思はれた。

余はもう此芝居に飽いて表に出た。お雀やお京はまだなか／＼腰を上げさうには見えなかつた。

二十一

明治座を出てからもまだ宿に歸る心持にはなれなかつた。日暮近くまで午睡を貪つたので、眠くない爲めか、昨夜の清興を再び追ひ度いやうな心持に支配されてか、余は何とぼ／＼と往來を歩いた。月は曇るといふ事を知らぬやうに此夜も亦清光を放つてゐた。本町通りも大方はもう店をしまつて燈火を滅した爲めに、月は我物顏に光を增して戶の透き小溝の中迄を明るく照らしてゐた。余は本町通りを横ぎつて狹い川添町を北へ歩いた。

其處も日本人の店は大方寢靜まつてゐた。唯チゲが二三人門前に立つて何を當てといふ事もなくぼんやりと往來を眺めてゐるのもあつた。彼等は卽ち此大道に其チゲを下ろして地上に一夜を明かすのであらう。朝鮮人の店は、例の夜更かしをする彼等の習慣でまだ起きてゐるのも少なくなかつた。さうして彼等は狹い家の中は寢苦しい爲めに門前に筵を敷いて其上に夜

露を浴び乍ら寢るものも多いと聞いた。其に就いて、或人は斯ういふ事を言つてゐた。斯く大地の上に横臥して平氣なのは三代の修行を要する。といふのは、我等日本人は固よりの事朝鮮人でも父祖からして斯る經驗の無いものが遣つたならば必ず病氣になるが、祖父、父と斯る經驗を積んで來た其三代目の子はよくこれに堪へ得るに至ると。

斯る事を思ひ出しつゝ余は明るい川沿町を愈々北へ〳〵と歩きつゝあつた時、ふと後ろに人聲のするのを聞いた。これは慥に日本人の聲で而も女の聲であつた。其が甲高い聲ではあるが、何處か世間を忍ぶらしく極めて簡單に、而も其甲高い調子を力めて抑へたやうな所があつた。さうして其はたしかに、

「兄さん。」と聞えた。

余は覺えず振り返つて其方を見た。さうして道傍にぼんやり突立つてゐる朝鮮人の影と離れて、川に沿うた方を此方に歩いて來る女らしい一人の影を認めた。

「兄さん、一寸待つて頂戴な。」と再び前と同じく調子を抑へた聲が聞えた。余は何とも考へがつかなかつたが日本人で此邊にゐるものは前後を振り返つて見て余一人ほかなかつたので余は其儘立留つて其人影の近づくのを待つてゐた。

だん〳〵近づくに從つて萬一と思つた事が事實となつて現はれた。其はお筆であつた。彼は白粉を塗つた白い顏を月の光に曝しつゝ微笑を含んで近よつて來た。さうして、

「隨分早い足ね。」と息を切らして言つた。余は「兄さん。」といふ言葉を聞いた時、何處か近頃耳馴れた言葉のやうに思つたのは、今朝お筆が度々剛三に向つて發した言葉であつたが爲めであることを此時漸く合點した。さうして今迄は唯何事とも分かず佇んでゐたのであつたが、其が愈々お筆と判つてからは却て深い疑惑の雲に包まれざるを得なかつた。

「何か私に用事ですか。」と余は言葉を改めて聞いた。

「一寸御相談し度い事があるの。あゝ苦しかつた。兄さんが歸りなすつたことを後から知つたものだから急いで追附かうと思つて表に出て見ると、もう一町も前を歩いてらつしやるんでせう。其から急いで後を追つたんだけれど、憎らしいやうに兄さんの足が早いんだもの。」と言つて彼は又苦しさうに息を繼いで、

「あとから鶴見さんも來るのですから、一寸其家迄交際つて頂戴な。」と彼はもう余と肩を並べて歩き出した。余はどうしたものかと思ひ惑うたが、あとから慶之助が來るといふ事で略事情を諒解する事が出來た。さうして流石に夜更けて美人と歩く事を心が咎めて前後を見廻したが、道傍の朝鮮人は別に他を怪むやうな風も見せず唯ぼんやりと突立つてゐた。

お筆はとある軒ランプの出てゐる寢靜まつた家の前に立止つて、表の戸を叩き、

「一寸開けて頂戴な。筆です。」と呼んだ。寢ぼけたやうな女の聲がうちから聞えて樞を開ける音がした。

「どうも濟みません。」とお筆は言つた。余は四五歩後ろに引下つてお筆の後ろ影を見てゐた。

表の潛り戸を開けた女は左手に手燭を持つてゐた。戸を開ける迄は此手燭の光が如何に戸内の暗を照らして明るかつたかは想像の外であるが、今表の月光になれた目で其手燭を見ると其は唯小さい黄色い火の固りに過ぎなかつた。女は其火の固りを手に持つて月光の及ばぬ戸の内に佇み乍ら、

「お筆さんだつか。さあ這入つとお呉れやす。」と大阪言葉で言つた。其がいかにも睡さうな聲であつた。お筆は無言に身を引いて先づ余に這

入る事を勧めた。余は此際最早躊躇する餘裕を見出さず、其四角な黒い戸内の闇に身を入れた。續いてお筆も這入つて櫃は再び下ろされた。

「あとから鶴見さんが來ますからね。御面倒ですが……」とお筆は其女を顧みた。

「さうだつか。」と女は何鼻のつまつたやうな眠さうな聲で返辭をして掛けようとした掛金を見合はせた。さうして手燭を持つて先に立つた。手燭が狹い廊下を進むに連れて其光はだん／＼余の眼に馴れて黄色い團りと見えたのが溶けて動く焔と化した。一體が日本式の建築で廊下の片側には古びた障子が立ち並んでゐたが、其突當りの部屋は洋館贋ひの應接室のやうな所であつた。女は其部屋に余等を導いて、

「一寸此處に待つてておくれやす。」と其手燭を圓い卓の上に置いて立去つた。此時よく女の容子を見ると太つた腰に細帯を一つ締めてゐる許りの五十過ぎの醜い女であつた。

「濟みませんがね、水菓子にビールを。」とお筆は主ぶつて命じ余と、卓を隔てて粗末な籐の椅子に腰を掛けた。二人は暫くの間默つて蠟燭の火を見てゐた。其沈默の間は餘り長く續いたとは思はなかつたが、其間に余が頭には種々の考が走馬燈の如く過ぎ去つた。第一此家は何だらうと考へた。一體の容子は待合らしくもあるが其にしては餘りに殺風景であつた。眠さうに鼻をつまらせてゐる細帯姿の女は見るからに不愉快であつた。お筆の嬌態も今朝剛三の部屋で浮れ踊つた時は淺間しいうちに濃艶なところもあり淋しい處もあつて流石に人の心を牽くやうに覺えたが、此不思議な家に余を拉して計り知られぬ科をする彼女に對しては余は寧ろ深い疑惑を抱いて多少憎惡の念さへ起した。さきには慶之助があとから來るらしく言つたが其さへ今は當にならぬやうな心持がして蠟燭の火の照らす限りの此場の光景が凡て伏魔殿の如く余の眼に映つた。「貴方は薄志弱行ねえ。」と言つたお京の言葉が思ひ出された。余は何故にかゝる女と不用意に此家の戸をくゞつたのか。お筆と剛三との關係はたとひ噂の如く淡泊なものとしても友人甲斐も無い男と言はれて辯護の餘地が無いではないか。

此間お筆も亦沈默を續けてゐた。けれども其間彼女は何を考へつゝあつたらう。彼の眼は悲を表はしてゐるやうにも見えず、さりとて又別に喜に輝いてゐるやうにも見えなかつた。いはゞ斯る事を家常茶飯と心得てゐるらしく其長い睫の奥に大きな瞳は靜まり返つてゐた。

やがて、

「何だか立籠つてゐて厭に暑いのね。」と其邊を見廻したが、別に立つて其窓を開けるでもなかつた。

「ねえ、兄さん實はねえ。兄さんなんか言つては濟まないのですけれど石橋さんを兄さんと言つてるものだから矢張り……」と言ひ掛けて其大きな眼に俄に媚を含ませて余の顔を見た。手燭の灯は瞬くやうに動いた。

「そんなことはどうでもいゝが、全體どういふ相談なの。」

「さう改まつては話しにくいぢやありませんか。まあ其内ゆつくり話すわ。ぢやあ兄さんと言つてもいゝのね。嬉しいわ。」と言つて余の吸ひ掛けてゐる煙草を取つて其儘自分の口に持つて行つた。

女はアサヒビールに二つのコップを添へて持つて來た。さうして生憎水菓子は切れて無いと言つて安つぽい菓子を皿に一杯持つて來た。

「隨分不景氣ねえ。」とお筆は嘆息するやうに言つて、直ちにビールを注いで余にも勸め自分でも飲んだ。

「本當になあ、氣の利かん事て。」と女は相變らず眠さうな聲をしてゐた。さうして漸くラムブ

を持つて來たが其も不景氣に曇つてゐたので、
「そんなラムプより此手燭の方が風情があつていゝわ。ねえ兄さん。」とお筆は言つて暫て心を切つた。蠟燭の火は俄に明るくなつて誇り顔に大きく搖れた。女はラムプを持つた儘退却した。
粗末な菓子を口に入れるとボロ〳〵と舌の上で崩れた。其あとに飮むビールは唯不味い苦い液體であつた。けれどもせうこと無しに余はガブ〳〵飮んだ。お筆も余に酌をしては自分のコップに注いだ。其コップも半以上空になつてゐる事が多かつた。女は二三本の蠟燭とビールの代りとを持つて來た。
「博之助も來るか來ないか判らないだらう。それにもう大分遲くなつたやうだから歸らうぢやないか。」と言つて余は欠びをして見せた。お筆は女持の時計を出して見て、
「まだ一時にならないわ。どうしてもあとの喜劇が濟むのが一時半位になるでせう。今日兄さん大變よく辛抱をなすつたといふぢやないの。そんなに眠いわけにはないわ。」と承知しない。
「だつて眠いのだから仕方がない。」
「私も昨夜夜更かしをして寢坊をして起きて、見るとまだ兄さんは寢てらつしやるといふんでせう、濟まないと思つたけれどお先へ風呂に這入つたの。さう〳〵。」と思ひ出したやうに、
「此指環を兄さんに買つて貰つたわね。」と力めて嬌羞を裝うて他を見た。かゝる時蠟燭の光は晝間見た時よりもより多く若く彼女を見せるのであつた。此古狸が最前から頻りに少女らしく取做して嬌態を演ずるのを、余は腹立たしく思ひ乍らも倘ほ流石に其艶容に目を留むる事が多かつた。
「昨夜は何處で夜更かしをしたの。」
「矢張り此家で。」
「誰と。」
お筆は笑つて答へなかつた。けれども其が博之助であることは疑もない事のやうに思はれた。さうして余は唯二人の媒介のいゝ玩弄物に使はれてゐるのかと氣が附くと俄に腹立たしく、抑へ難い多少の嫉妬をも感じた。
いつの間にか醉うてゐた。余は立つて便所に行かうとした時、お筆は、
「便所？　おや御案内するわ。」と言つて手燭を取つて先に立つた。
お筆が一枚の戸を開けると驚いた。締出されてゐた月光は急にハッと明るい影を廊下に投げ込んで、暫く忘れてゐた其の清光を思はしめた。戸の外は廣々とした板間になつてゐて、洗面場もあれば男女の便所も二つ宛あつた。雨戸の無いガラス障子は惜氣もなく月光を導いて凡て其等の光景を明白に人の眼に映した。
お筆は其手燭を廊下に置いて、余の後ろを通つて自分も亦便所に這入つた。やがて冷たい月の光を浴びて、手洗ひの水に手を濡つた余の心は落著いてゐた。一枚のガラス障子を開けて外面を見ると、空は玲瓏として一抹の雲も無く、天涯の果の果迄も見透すことが出來た。此間或内地の旅行者に逢つた時、彼は此澄み渡つた朝鮮の空を眺めて、
「どうです此美しい空は。此空を見乍ら何で内地へ歸る必要がありませう。」と彼は熱情より出るやうな聲で斷り言つた。此人は實業家であつて、嘗て社會の寵兒であつたのが、ふとした事から今は日蔭の身に成つて頗る不遇の境にあつた。彼が内地の空を憎み此朝鮮の空を熱愛する心持の奥には淋しい響があつた。此時余はふと此人の言葉を思ひ出し、つく〴〵と其時の空を見入つた。何處で吹く笛であらう、時々吹き込む風に連れて斷續として淋しい音を傳へ

來つた。朝鮮人が往來に腰を据ゑて笛を吹いてゐるのはよく見る光景であつた。無器用に作つた粗末な笛も悠揚として迫らぬ路傍の人によつて吹きならされてゐるのを見ると余はいつも心を牽かれて顧るのであつたが、此笛の音にも覺えず耳を峙てて暫く我を忘れて佇んだ。お筆はいつの間にかもう便所を出て、手洗水に手を灌ぎ、ハンケチを口に銜へて鬢の後れ毛を搔き上げつゝあつた。さうして廊下には手燭の灯が殆ど光を失つたやうに、再び元の黄色い一固りの火となつて淋しく余等を待受けてゐた。

かゝる間に、月の影も蠟燭の光もお筆の心の上には何の影響をも與ふる事無く、彼は終始余に媚を呈して他の心を牽かうと力めてゐるらしく見えた。彼はいつ迄も余の傍に立つて鏡に向つて彼の容姿を繕うてゐた。初め蠟燭の火影に見た時彼の大きな瞳は長い睫の奥に古い沼の如く靜まり返つてゐると思つたのは束の間で其後彼の絶えず試むる表情は常に醉はんとして醉ふことの出來ぬを悲んでゐる余をして知らず識らず心を傾けしむる程の力を持つてゐたが、今月光を浴びて尚ほ恥ぢなき彼の媚態を見た時、已に醒めてゐた余の心は唯其を憎み憐むに過ぎなかつた。

「ねえ、何をぼんやり立つてらつしやるの。行きませうよ。」と彼女は遂に堪へ切れずなつて余を促した。余は別に其を拒まうともしなかつた。彼女は余が開け棄てた障子を自分で締めて、先に立つて手燭を取つた。戸が締められると廊下は又もとの闇になつて手燭の光は覺束なく余等を導いた。

應接室に戻つて見ると、例の粗末な菓子を盛つた皿と二本のビールの瓶と二つのコップとが空しく卓上に人待顏である許りで慶之助はまだ音沙汰も無かつた。余はもう此圓卓を隔てて彼女と對する變化の無い狀態に飽いた。飲み殘したビールを再び口にする勇氣も無かつた。

如何にして新たに局面を展開すべきかは直ちに余の心を見て取つたお筆の少なからず苦心するところであつたらしい。其處へ例の鼻の詰まつた女が顏を出して、

「今お使が此お手紙を持つて來ました。」と相變らず眠さうな顏を出して一本の手紙をお筆に渡して引下つた。お筆は、

「おや鶴見さんからだわ。」と其を披いて見た。さうして一讀したあとの殼を余に渡した。見ると成程例の原稿の文字と同じ慶之助の手で、

「今夜隣同志を演了致候上此病院に參り申候。兼て御話申上候事有之候春尾綠水は遂に危篤に迫り申候。今夜參るやら申上置乍ら右の次第にて御違約申候。不惡御思召被下度候。敬具

大漢病院にて

夜二時　慶之助

お筆樣」

とあつた。お筆は慶之助の來ないといふ事を最前からあまり氣にしてゐるやうに見えなかつた。此手紙を見た時も格別の表情を其顏に認める事は出來なかつた。

「春尾綠水とかいふのは矢張り役者なのかね。」

「何でもあの一座の立女形だとかで、鶴見さんは始終同じ部屋にゐて大變世話になつた人だとか言つてました。さう〳〵斯んな話を鶴見さんがしてゐましたわ。」と言ひかけて、一寸躊躇し、

「もう其春尾といふ役者は死んだのでせうか。」

と余の顏を見た。

「まだ此手紙の模樣では死んだとはないが、もう斯う話してゐるうちに死んだかも知れない。」

「いやだわねえ。」とお筆は椅子を急に余の傍に寄せて四周を見廻した。

「どんな話を鶴見がしたの。」

「鶴見さんは作者の方が本職なので鏡などは持つてゐないので、其春尾といふ人の置いて行つた鏡を其儘使つてゐるのですつて。さうして其春尾といふ人の役は大概鶴見さんが引受けて遣るものだから顔を作りながらもいつも氣がさして夜淋しい時などは何だか鏡に映つてゐる自分の顔が其春尾といふ人らしく見えて仕方がないんですつて。」と彼女は更に余の傍に身を寄せた。余が蠟涙の屑を焔の中に落すと、ヂヽと音を出して消えるかと思ふやうに暗くなつたのが忽ちぱつと明るくなつた。お筆は、

「厭よ。そんな事をしては。」と其聲は稍震へて、しかと余の手を握つてゐた。此時不思議にも向うの薄暗い壁の面に役者の顔かと思はるゝやうな病人らしい顔が余の眼に映つた。余は愕然として息を殺して暫く其を凝視したが間もなく其は全くの幻影に過ぎなかつたことを明にした。

「慶之助が來ないと極れば歸らうぢやないか。」と俄に頭の疲勞してゐる事を自覺した余は、最早何事を考へるのも懶く、唯もう今夜の舞臺を此儘に終局にすることを何より望ましい事に思つた。

「さう。ぢや車をさう云ふわ。」と彼女は強ひて其を拒まうとはしなかつた。さうして、

「本當に御迷惑でしたわね。けれども私大變面白かつたわ。」と言つた。初め余に相談があると言つた其相談は遂に彼女の口から出ずに終つた。出ずに終つた許りか、其事は頓と忘れたやうな顔をして澄ましてゐた。余も強ひて其を聞かうとは思はなかつた。

やがてお筆の命じた車は一臺ほか來なかつた。お筆はどうするのであらうかと疑つたが、併し其はどうでもよかつた。余は唯お筆の手から開放される事を此際何より嬉しく思つた。表の月は益〻冴えてゐて秋のやうな涼しさは人の肌に浸みた。

二十二

「昨夜は狐につまゝれたやうな心持であつたが、今朝になつて考へて見ると格別なことでもなかつた。」と余は其翌朝重たい頭を抱き乍ら蒲團の中で考へた。

斯の如く放縦な女は別に世間に珍らしい事も無いのであつた。試に余が彼女の術中に落ちて、あれ以上に事件が發展したとすればどうであつたらう、余に取つては大事件であるが、彼女に在つては餘りに平凡なことであつたかも知れなかつた。其にしても疑問なのは鶴見と彼女との關係であつた。たとひ放任して置くにしても自由に外泊を許すに至つては餘りに甚だしいと言はねばならぬ。鶴見は果して彼女の斯る大膽な行動を知つてゐて默せぬのであらうか、又一切知らずにゐるのであらうか。余は其を鶴見に問ひ質したものか、其とも知らぬ風をして打棄てて置くべきものか。と余は其處に重大な責任が生じた如く感じて一種の苦痛を覺えるのであつた。其處に這入つて來たのは例のお京であつた。さうして、

「貴方も隨分多情多恨ねえ。境さんがお歸りになつたら大變だわ。」と笑ひ乍ら脫ぎ棄てた儘になつてゐる昨夜の著物を疊みかけた。

「お前はあれからどうしたのだ。お筆許りが先に出たのか、お前も一緒に出たのか。」

「私はあとの喜劇を一幕だけ見て歸りました。鶴見が出なくつて面白くなかつたわ。」

「皆大變鶴見が贔屓なのね。」

「不思議なものですわねえ。貴方ところへ來た時に逢つてから皆自然贔屓になつたのですわ。」

「其前からも大分御贔屓らしかつたぢやないか。あの役者が何處がいゝのだらう。」

「役者らしくなくつて、初心な處がいゝんです

「で、其れはお筆さんの話ですが、私に喋舌らせて見たゞけで隣の役者より厭味がなくつて好きですわ。」

「あれで厭味がないのかな。」

「喇叭を吹いて帰るだけがどうしたといふんです、然りこそ雇つたものだわ。其に石橋さんにも惡いぢやありませんか。」とお京は眼を光らせて嘲る様に言ひ足した。

其處で余はお京に一部始終を話して、

「今言つた様な譯だから、全く罪はないんだよ。」と言つた。お京は始めの間は疑惑のやうにして聞いてゐたが、終には流石に余のいふ事が虚言でないのを合點したらしく、

「本當にお筆さんも困つたものね。あの滿州といふ昔話はお筆さんが三橋さんのお父さんの頃からよく出入りした方ですの。三橋さんも初めは嚴しくも言つたやうですけれど、後には默つて知らぬ風をしてゐたやうです。石橋さんもよく其を知つてゐるから初めから全く放擲らかしなの。其に石橋さんは全く色氣拔きで、ただどうかしてやらう位に考へてゐるのでせう。けれども石橋さんがどうかして逐る前に屹度お筆さん自身の方でどうかなるわ。其や御覧よ、見てゐて御覽なさい。」と笑つた。

「三橋といふ男はどういふ用事で滿洲へ行つたのかね。」

「いろ〳〵噂もありますけれど、大分借錢もあつたらしいですから實際どういふ用事で行つたものですか。兎に角滿洲に行つたのは本當でせう。其といへば何でもお筆さんも、もう朝鮮も詰まらん、滿洲にでも行き度いなんか言つてゐましたつけ。」

「其なら三橋さんに連れて行つて貰へばよかつたに。」

「大方三橋さんの方で御免蒙つたのでせう。」とお京は笑つた。

二十三

其處へ這入つて來たのは洪さんであつた。隣の古びた洋服を着て端然と坐つて挨拶をした。

「石橋さんをお訪ねしましたが、今朝早くお出掛けになつたさうでございますから、一寸お伺ひ致しました。」と言つて、口許の皺に一寸笑[illegible]の眼で他の室を凝視した。余は私に彼の夜の話を待設けてゐたお洪さんに對して何とも言はなかつた。唯余が、

「一昨夜は色々お世話になりました。大變面白うございました。」と挨拶したのに對し、

「どうも失禮致しました。」と[illegible]に答へたに過ぎなかつた。其は今日はいつもより特に[illegible]を崩して居るやうで、[illegible]の室に在つた時のやうな打解けた風は微塵も見せようとしなかつた。

「いかがです、お掛けになりませんか。」と余は其構に正座して居る洋服の膝を崩すことを勸めた。洪さんは、

「失禮致します。」と言つて其長い脚を組んだけれども、體はチャンと眞直ぐに立てて、兩手を正しく膝小僧の上に置いてゐた。夫から不とした事から話は[illegible]、所謂兩班とも[illegible]家庭の事になつた。洪さんは口を極めて其墮落を痛罵し、

「今朝も或人が來て貴族に對する種々の批評を致しますから、私は斯う言つて遣りました。貴族になつたことは朝鮮に取つて決して名譽とはいへない。彼等の子弟に一人として偉い人になるものがあらうか。彼等が家産を蕩盡して貧窮に陥るやうになるのも遠からぬ事である。再び其は爵位を貰ひ金錢を貰つたが爲めである。と斯う言つて遣りました。男も其で少しは意を[illegible]受けたやうでございました。」と言つた。

「貴族に對する批評といふのはどういふのですか。」

「矢張り阿諛追從の徒が爵位を得たといふ不平でございます。」と言つて自分の顏にも抑へ難き悲憤の色を閃かせたが、すぐ巧みに其を微笑の皺の中に包んでしまつた。此間或る人は洪さんに就て余に斯ういふ話をした。其人が或日朝鮮華族某氏の家に行つたところが丁度洪さんが來てゐて三人の間でいろ〳〵雜談をした末、主人は洪さんに向つて、

「ご前も今のやうな境遇では氣の毒だ。まあ少し辛抱しなさい。其うち郡守位には周旋して遣る。」といふやうな意味の事をいふと洪さんは頻りに叩頭して感謝の意を表してゐた。けれどもと〳〵其新華族某氏と洪さんとは人物の間に大變な段階がある。洪さんは一時排日黨であつたり、併合に反對したりした爲めに今でこそ貧乏して失意の地位に居るけれども、相當に學問もあるし、隨分凄い膽をも持つて居る男で、雄辯家としては朝鮮人中第一に推しても恥しくはない。其に反して主人に至つては學問も無したいした見識もなし唯オッチョコチョイで旨く某々等の手先に使はれたが爲めに爵位を贏ち得たのである。其オッチョコチョイの主人などにあんな事を言はれて其で感謝の意を表さねばならぬ洪さんも考へて見れば可哀想なものである。」と斯んなことを言つた。余は其話を思ひ出して、其悲憤の色を裹んだ微笑の皺を殊に氣の毒に思つた。洪さんは更に言葉を和げて、

「だから私は言つて遣りました。華族がどうだとか斯うだとかいふのはめい〳〵の私の不平です。阿諛追從といふのも反對黨から見た上の事で日本の當路者からいへば併合の衝に當つた彼等の勳功を認めるのに何の不思議がありませう。要するに其は朝鮮に於ては大問題ではない、大問題は千三百萬の百姓が此新政によりて皇澤に潤ふや否やにあると。」

「そこで結論はどうなるのですか。」

「申す迄もありません。以前は郡守が苛斂誅求を遣り、其上に又觀察使が遣りました。其處で朝鮮の百姓家に倉といふものはありません。若し倉といふやうなものがあつて其處に一俵でも貯があつたなら其は直ちに郡守に沒收されました。さういふ惡政の後に此新政が布かれたのでありますから、百姓はどんなに喜んでゐますか、其は喩へやうがございません。」と言つて人の顏色を伺つた。

「其で百姓の子弟といふやうなものに學問をするものがありますか。」

「ありますとも、朝鮮の人間は役人になるといふ事が何よりの名譽でございまして又無上の尊敬を世の中から受けるのでございますが、以前はチャンと階級が極つてゐて、兩班でなければ役人にはなれん事となつてゐました。其制度が壞れたのでございますから、百姓の子弟の希望は一番に役人になつて見度いので、親兄弟も亦其を希望して其爲めに家產を傾けて迄も學問をしようといふものが多くなりました。」

「日本の維新後と同じ事ですな。」と余は自分の幼い時を思ひ出した。士族は却て商業や農業を志して慣れぬ事に失敗し、商賣人や百姓は自分の子弟を官吏にして無上の光榮とした。今の朝鮮は丁度日本のあの時代に彷彿するのであらう。西洋で百年で遣つた事を日本では十年か二十年で遣つたやうに、朝鮮では又其を三年か五年に遣つて了ふのかも知れぬ。

「官吏以外のものになる爲めに學問するものはありませんですか。」

「今のところ有りましても僅々少數でございませう。」

「若し日本の社會と同じ徑路を辿るとすれば其うち、實業に志す爲めに學問するものも出來るやうになりませう。」

「さうでございませう。」と洪さんは答へたが其

は頗る冷かな答であつた。洪さんにしてからが政治以外には格別の趣味を持たないらしかつた。洪さんは又斯んな話をした。

「私ももと平安道のものでございますが元來平安道の人間は氣が勝つてゐまして、現に此間から出た刺客の類も皆平壤附近のものでございます。其處の青年が此頃よく訪ねて參りまして、多少過激な議論など致しますものがございますが、私は斯う言つて教へて遣るのでございます。今の滿洲を見るがいゝ。此頃滿洲に排日熱が盛だが、私にあれは支那が滿洲を失ふ前兆ではあるまいかと危んで居る。斯の如く排日思想を鼓吹せなければならぬやうになつたのは既に日本の勢力の底深く浸み込んでしまつた證據である。さうして排日の暴動などを遣れば遣る程却て滿洲の運命を縮めるのである。其證據は遠きに求めるに及ばぬ、足許の朝鮮を見るがよい。朝鮮の滅亡を早からしめたものは排日思想と無稽の妄動とであつた。お前等が國家の滅亡を殘念に思ふのは尤もであるが、天下の大勢はどうすることも出來ぬ。お前等は最早空論に日を消す時ではない。此上は唯國家有用の材となる事を心掛けねばならぬ。さうして一番の急務は日本語を研究せねばならぬ。お前等は一年でも一年半でも日本語を遣つて、其から官立の學校に這入り資格を取るやうにするがいゝと斯ういふ風に教へて遣るのでございます。」

「其で結果はどうなりますか。貴方のいふ事を聞く者の方が多うございますか。」

「十人のうち五人迄はいふ事を聞きまして、現に其結果として日語學校に這入つたものがもう澤山ございます。」

「日本語の普及といふ事は日韓人雙方に取り便宜なことでございますな。」

「さうでございますとも。それで此頃は世間一般に其事に氣が附いたらしく各種の夜學校などでも盛に稽古をしてゐるやうでございます。」

「失禮ですが、貴方の御子息はもうお幾つ位におなりですか。」

「十七になりまして大阪府の中學校に入れて居ります。泉州堺に知つた人があるものでございますから其處の中學校に通はせて居ります。」

「其他のお子さんは？」

「其他はずッと小さうございまして、五つの女の子と三つの男の子がございます。十二年間日本に放浪して一度も歸らなかつたものですから、總領との間が大變離れて居ります。」と言つて洪さんは淋しく笑つた。

二十四

「石橋さんがお歸りになりました。二三人お客樣がありますが、お構ひなければいらしつて下さい。」と小娘の女中が洪さんに傳達して來た。洪さんは了承して剛三の部屋に行つた。

昨日禁止された演說會といふのはどんな性質のものであつたのか知らぬが、其以來何となく風雲の急なものがあるらしく、剛三を中心とした浪人組の往來が頻繁なやうであつた。余は小娘に聞いて見た。

「お京さんはどうしたい。」

「石橋さんのお部屋にゐます。」

「石橋の部屋には多勢のお客がゐるらしいね。」

「えゝ。」

「大分昨日から騷いでるぢやないか。」

「えゝ、昨日の朝の間はお筆さんが踊つたりなんかして陽氣でしたわね。あれから晝後にたつて、三四人お客樣が入らしつて、御一緒にお出掛けになつて、夜遲くお歸りになり、今朝早く又お客樣があつて御一緒に御出掛けになり、今お客と一緒にお歸りになつたのです。お京さん六始終お座敷に行つてますから、詳しい事は判らぬけれど何だか少し容子が變よ。」とませた

口を利いて首をかしげた。

「お前の名を此間一度聞いたけれど忘れてしまつた。何でも珍らしい名だつたねえ。」

「私の名？　えゝ、本當に變な名ですわ。いゝとやです。」

「さう〳〵おとやさんか。おもしろい名ね。お前は忙しいのが好きだ、閑なのが一番いやだとか言つてゐるさうだね。感心な女だ。誰かいゝ旦那樣を周旋して遣り度いものだ。」

「あらいやだ。」と言つておとやさんは顏を赤らめて袖で口を隱した。

「おとやさん、あの表を通る物賣りは何といふのだい。『海鼠サリョー』といふやうに聞えるが、今頃海鼠があるわけも無し。」

「海鼠ぢやありません。玉子ですよ。」

「サリョーといふのは。」

「どういふわけですか、朝鮮人は皆しまひにサリョーをくつつけます。日本の物賣りが「入りませんか。」といふやうなわけではないのでせうか。」

「成程。」と言つて聞いてゐると又外の物賣りが來る。

「根深サリョー。おかみさん、根深の上等負けとくから買うておくれなさい。」と南山樓の裏口から呼んでゐる。是等の物賣りは今迄もよく來たのであるが今日程染々と聞いたことはなかつた。

「あれ等は皆朝鮮人かい。」

「えゝ、あれは二人共朝鮮人ですが、中には支那人も來ます。支那人のは尻が下らずにだんだん尻上りになりますからすぐ判ります。あゝ、あれがさうですわ、あの遠方に聲の聞えてゐるのが。あれが毎日來る支那人です。」

暫く待つてゐると其聲はだん〳〵近づいて來た。

「大根、葫蘿蔔、茄子。大根、葫蘿蔔、茄子。大根、葫蘿蔔、茄子。……」

其は極めて無器用に、而も精一杯に濁つた聲を張り上げて、殆ど休みなしに呼るので、朝鮮人の助詞や關係詞迄を省略せずに極めて悠長に呼んで歩くのとは全く趣を異にしてゐた。

「支那人と朝鮮人とはどちらが正直かね。」

「どちらですか。」とおとやさんは氣乘りのせぬ返辭をしたが、急に思ひ出したやうに、

「朝鮮人の方は、それは見えすいたやうな狡猾事をしますよ。去年の秋でした。一人の朝鮮人が柿を賣りに來ましてねえ、片方の籠のは八錢に片方のは五錢といふのを八錢の方を五錢に負ければ買つてやらうといふと、迚も駄目だと言つて歸り掛けて置き乍ら向うの路次に這入ると其五錢の方のを八錢の方の上に移して、『負けた。』と言つて歸つて來るのです。けれども罪は無いわ、こちらが知つて居た事が判ると、ニタ〳〵笑ひ乍ら歸つて行くんですもの。其にまた斯んなこともありましたわ。矢張り一人の朝鮮人が柿を賣りに來たのを宅の若い衆が戲談に其籠の中のを一つか二つ取つて逃げたところが、朝鮮人は籠を其處に置いた儘一生懸命に其若い衆のあとを追へて行つたのです。其留守に籠の中の柿をどうかされるといふ事は氣が附かないんですもの。まるで子供見たやうですわ。支那人になるとそんな事はないでせう。」と實例を上げておとやさんは明快な答を與へた。

「二人で何を仲よく話していらつしやるの。」とお京が顏を出して、

「あなたもあちらで一緒に御飯を上つてはどう。石橋さんがさう仰しやるんですよ。どうなさいます。こちらでおとやさんの御給仕で召上る方がいゝの。」

「あらいやだ。」とおとやさんは又顏を赤くして袖を口にやつた。

「石橋の方でさういふのなら一緒に食つてもいい。」
「おやあ、さうなさいました。」とお京は急がしさうに出て行つた。
「お箕さんはどうしたい。」と余はおとやさんに聞いて見た。おとやさんにませつくれた笑ひやうをして、
「どうなすつたか。昨夕からまだお歸りになりませんわ。」
「へえゝ、まだ歸らないのかい。何處に泊つてゐるのだらう。」
「深川でせう。」
「深川といふのは。」と余はしらばくれて聞いて見た。
「御存知の癖に。待合ですわ。」
「一人でかい。」
「どうか知らないわ。」とおとやさんは自分の事のやうに赤面し乍ら歸つて行つた。
　圓三の部屋に行つて見ると、例の如く圓三は床前に胡坐を搔いて堂々として控へて居ると、例の豪傑笑ひをする仲間が其れも亂雜に座を占めて相變らず碁盤を取出してゐた。けれども今は一局終つたところらしく、一人の客は碁盤の上に肱を突いて石を手まさぐり乍ら、道人つて行つた余を見て例の通り挨拶をせうともしなかつた。
「そんなに威張つてゐては御馳走が出せないわ。少し小さくなつて頂戴。」とお京はお膳を持つて突立つた儘大きな聲を出すと、
「小さくなれば驚いたねえ。」と寢そべつてゐた一人が先づ體を起して坐つた。
「上野さんあなた其碁盤を片附けて下さいな。」
「ハイ〳〵。」と例の碁盤に凭れてゐた客は命令の儘に其碁盤を座敷の隅に持つて行つた。
「さあ、貴方も少し小さくなつて。」と圓三を後へ退らせて、
「此處へ貴方がたお二人がいらつしやるといゝわ。」と人の後ろの方に相變らず威儀を正して控つてゐた洪さんと余との席を其横に作つて呉れた。
　めい〳〵の前に膳が据ゑられて、銚子も運ばれた。
「お京さん、もう始めてもよからうな。」と客の一人に戯談の樣に言つて盃をあげた。
「はあ、よろしい。」とお京は澄まして答へた。
「洪さんは日本料理と朝鮮料理とどちらがいゝかな。」
「どちらとも申されません。どちらでも御馳走のある方が結構でございます。藝者でも妓生でも別嬪の方がいゝのと同樣でございます。」
「ハヽヽヽ。」と席上の人は皆笑つた。今迄隅ッこにゐて有るか無きか判らなかつたやうな洪さんが俄に談話の中心になつた。
「洪さんの無くなつてゐた藝者は何とかいふ名だつたな。」
　洪さんはニタ〳〵笑つてゐて答へなかつた。
「あいつが今訪ねてでも來たら所謂左大人の尊號を奉らねばならぬ位の義理合にある人だらう。どうだな洪さん。」
「もう昨年ですか亡くなつたとかいふ事でございますから尊號を奉るにしても追贈の方でございますな。」と洪さんの眼中に相手の男などは無いやうな口吻であつた。

二十五

　景福宮は大院君が其の着座を排つて再建した宮殿だといふ事であるが、今は廢宮となつてしまつて主要たる殿堂の外は殆ど荒廢するに任してあつた。唯其中の慶會樓といふ建物だけは多人數の集會場として適當な爲めに今も屢〻官民の懇親會場として重寶がられてゐる

た。今日も式場は此樓上に設けられてゐて、樓下には妓生の舞踊場を作り、其周圍に澤山の椅子を並べてゐた。余が友人と到着した時は拋球戲と稱する踊が始まつてゐて、多くの人は之を取り圍んで見てゐた。椅子に腰を掛けてゐるのは主として今日の主賓たる實業團の人で其他に金筋や軍服の官職の人が多かつた。平の會員は其椅子の後ろに立ち並んで人の肩の上から辛うじて首を突き出してゐるものも少なくはなかつた。實業團の中に三四人の夫人が交つてゐる爲めに婦人の來會者も少なくはなかつた。余は妻が二列目の椅子に腰を掛けて金成龍夫人初め四五人の婦人の中に小さくなつてゐるのを見出した。同時に妻の方も余を見附けたものらしく一寸首を下げて會釋した。

余は妻を見附けた眼で間もなく素淡をも見附けた。素淡は拋球戲の中に交つてはゐなかつたが、樓の傍に幕うち廻して其處を妓生や樂人等の樂屋としてゐる處から出て來て、長鼓を打つてゐる或老樂人に何か耳打ちして又もとの樂屋の中へ歸つて行つた。其服裝は多くの妓生が天冠のやうなものを被り、五彩の色どり美しい長い袖の上衣を著て居るのに反して一昨夜彼の家に往つて著てゐたやうな純白の上衣に裳の色も目立たぬ淋しい色であつた。今此色氣を拔きにした、いかにも老妓らしく周到な彼女を見て、妓生組合の副取締を遣つてゐて、多くの妓生からは[illegible]さん樣として取扱はれつゝあるといふ洪さんの話が思ひ出された。

間もなく妻は其席を立つのが見えた。余も樓の外に出で、妻の來るのを待ち合せ、二人で池の畔を散歩した。眞四角な池には蓮の葉が浮いてゐて、水を拔いてゐる[illegible]もあつた。妓生の跡は見ずに此邊を散歩してゐる朝鮮人や軍人も多かつた。二人は並んで歩き乍ら斯んな話をした。

「さつき電話で何か妙な事を言つたね。」

「だつて毎晩お歸りが遲いつていふぢやありませんか。」

「誰からそんな事を聞いた。」

「だつて。」

其處で余は隱さずに一部始終を話した。

「まあお筆さんといふ人は隨分な人ね。」と妻は下すむやうに言つたきりで、其上を追求せうともしなかつた。

「お前の方はどうだ。又いろんな人に逢つたか。」

「えゝ、お房さんは熱心に案内してくれるんですけれど、私ももう大分草臥れちやつたわ。」

「いゝ[illegible]、[illegible]。今夜は四[illegible]人、[illegible]會合[illegible]ありませんで私も[illegible]行[illegible]事になつた。」

「明日は歸りますね。」

池を一巡して慶會樓に歸つて見ると、また拋球戲は[illegible]々として演ぜられつゝあつた。もう人の心は大分倦んで早く儀式の始まらんことを望んでゐるやうであつたが、また團長に當る或實業家の[illegible]が見えぬ爲めに其運びにならぬのだと或人の話してゐるのが聞えた。ふと見ると素淡は例の服裝の儘で樂人の傍に立つて同じやうな服裝をした二三人の妓生と共に拋球戲を見てゐた。さうして演戲しつゝある一人の妓生が極めて不器用に球を投げて其を落したのを見た時、口に手を當てすこし腰を曲めて笑ひつゝ後ろを振り返つた。其拍子にふと余の視線と合つて、はたと余を凝視した。余は、

「あれが素淡だ。」と妻に敎へた。妻は極めて冷やかな眼を以て其素淡の頭の尖から足の尖迄を見て、

「いゝ女だわ。」と言つた。

「金成植は來てゐないか。」

「いらしつた筈なんですが、まだ見當りません

わ。
「何か金成植と素淡との關係に就いて聞きはしなかつたかい。」
「あの女が關係があるんですか。」
「さうらしいんだ。」と言つて一昨夜見聞した事實を話した。
「まあさうですか。あの妓生ですか。」と彼女は萬事釋然としたやうな顏附をした。
地球戲に飽いたので余と妻とは澤山の模擬店の出來てゐる松原を散歩した。其模擬店は日本人の店が過半であつたが朝鮮人の店も多かつた。朝鮮人の店には男の朝鮮人が客を呼んでゐたが日本人の店は大方藝者が赤い襷を掛けて黃色い聲を出してゐた。ところが其日本人側の或ビール店に同じく赤い襷を掛けてビールを客に强ひつゝあるのは疑ふ方なきお筆であつた。お筆は何が故に彼のビール店などに立つて客を呼びつゝあるのであらう。先刻一寸剛三の部屋の入口で逢つたかと思ふと早くも此處で模擬店の女に化けてゐるに至つては驚かざるを得なかつた。其時一大音響が耳元に起つて場中の人一同の心を其方に牽き附けた。其は爆竹の響で式場の開會の合圖であつた。池の畔の草の上に赤い火の玉が走つては黃色い煙を立て、後れた一二發の音で其響は靜まつた。人々は皆慶會樓の樓上に登りつゝあるので、我等も亦其方に歩みを返した。妻はお筆に氣がつかぬらしかつたので余も默つてゐた。

慶會樓上の式場は殆ど人を以て埋められて居た。會員は立食の卓に著き乍ら主客の交換演說を聞くのであつた。余等は後れて上つた爲め片隅の卓に漸くありついたので、中央の卓上に交換されつゝある演說は雜然たる物音に妨げられて殆ど聞取れなかつた。唯頭の禿げた一人の老紳士が椅子の上に突立つてゐるのだけが眼に入つた。其は京城の民團長だと友人によつて敎へられた。其演說は存外永かつた。けれども冷肉を爭ひ食ふ方が急がしくつて其を聞いてゐるものは殆ど無ささうであつた。

ふと見ると民團長の禿頭はいつの間にかもう見えなくなつてしまつて、顏の大きい色の黑い、少し背の曲んだ老紳士が又椅子の上に突立つて口を動かしてゐた。民團長の演說は時々語尾だけが聞えてゐたが、此人の演說は徹頭徹尾聞えなかつた。
「あれは？」と余は傍の人に聞いた。
「實業團長の上林です。」と傍の人は答へた。
「あれが上林ですか。」と余は豫て名許り聞いてゐた有名な男を注目しながら凝視した。一見たゞの隱居さんのやうに見えたが、よく見て居るうちに何處やら利かぬ氣の癇癪持ちらしい眉根を寄せたり延ばしたりしてゐた。
「何でも今日の演說で、近頃內地の新聞で喧しい總督政治攻擊に就いて意見を陳べるやうに聞いてゐました。今其演說を遣つてゐるのではないでせうか。」と傍の人は言つた。果して其うち割れるやうな拍手が聞えた。もう濟んだのかと思つたら演說は尙ほ續けられつゝあつた。
「あ、黑木が來てゐますよ。」と傍の人は余に囁いた。見ると、一人の軍人が拍車の著いた長靴を穿いて手に鞭を持つてゐるのが、飛出たやうな目をむいて大きな口を動かしつゝ一人のフロックの男と何か頻りに話してゐた。其は食卓を離れた窓際で、其邊には人も稀に空氣が薄暗い式場の中に比較的明るく光線がさし込んでゐた。あの軍人が有名な黑木少將かと余はナイフの手を留めて其方を見た。
「今日は何か事があるかも知れませんぞ。」と傍の人は好奇の眼を瞠つて少將の行動を注視しつゝ、
「又總督政治反對の人等が今日をいゝ機會にし

て何か喋らうといふのではないかな。」と苦々しさうに言つた。拍手は頻りに起つて上林の演說はまだ續いてゐた。黒木少將は演說にも拍手にも全く無頓著で、極めて難かしい顏をし乍ら片手に鞭を打振り〳〵フロックと話を續けてゐた。會員は食つてしまへばもう用は濟んだといふやうな顏をして階下に降りて行くものと、いつ迄も意地汚く食卓にかじりついて葡萄酒ビール三鞭とありたけの酒をあふつてゐるものとがあつた。

余は黒木少將と上林とを二個の中心として其邊に漂ふ空氣に意を留めて見た。黒木少將は相變らず拍車の著いた長靴に床を踏み鳴らしながら鞭を打振り〳〵大きな口を開けて話してゐた。フロックはいつの間にか見えなくなつてゐて相手の人はもう屢々變つたけれども、少將は殆ど同じ所に突立つたまゝ颯爽たる意氣を示して場内を睥睨してゐた。若し少將が一度彼の鞭を揚ぐれば思はぬところから伏兵が起つて忽ち我等を包圍してしまふのかも知れぬといふやうな芝居めいた空想にも驅られるのであつた。

上林の演說は尙ほ多くの拍手を贏ち得つゝあつたが聞えぬのはもとの通りで少數の人の外は大概倦み疲れてぞろ〳〵と動搖を始めつゝあつた。其處へのそ〳〵と階段を登つて來たのは剛三であつた。五つ紋の羽織に袴を著けてゐる彼は微笑を含み乍ら一寸場内を見廻してゐたが、誰か知る人を見附けたらしく其方に步を進めた。黒木少將の傍を通る時彼は一寸帽子に手を掛けたが少將も輕く擧手の禮をした。

妻は余等の傍を離れて二三の婦人達と何事か話し合つてゐた。僅か數日のうちに大分知己が出來たらしく、又其應待振りなども稍々もの馴れて見えた。

盛な拍手が起つて上林の演說は漸く終りとなつた。上林の長い演說は實業家の立場からして總督政治を謳歌し、寧ろ内地新聞の無稽な攻擊を辯駁する意味のものであつて、而も聲の低い活氣の無い長い演說であつたが爲めに人は皆内地新聞の意見を代表する活氣のある反對演說を待設けてゐた。

けれども此は無益の待設けであつた。續いて立つたのは朝鮮華族の某氏で、其は實業團の來鮮を鮮人一同を代表して歡迎する意を述べ、同時に上林の言に同じて總督政治を謳歌するものであつた。惰氣は場内に瀰漫して會員の過半は階下に下り、止むを得ず場内に留まつてゐる人も其を聞いてゐるものはなかつた。黒木少將もいつの間にか影を隱し、剛三も二三人の人と談笑し乍ら場外に去つた。唯其演說を通譯するのが洪さんであつた事が余に取つては一つの興味であつて、例の古びたフロックを直立させて明晰な日本語を抑揚ある演說口調で吐朗々と陳べるところは、余等を園遊會などに案內した事に比ぶれば遙に意を得た事であらうとは思はれたが、何分原の演說が愚劣な爲めに少しも引立たぬので氣の毒であつた。

松林の模擬店は最前とは違つて大變な混雜であつた。到る處の店に客が充滿してゐたが、其でもめい〳〵自分の店に尙ほ客を引かうとして藝者どもは黄色い聲をふりしぼり出來るだけの愛嬌を振り蒔いてゐた。彼のお茶の店はと見ると或一つの大きな松を背にして、「アサヒ「サッポロ」等の文字を白く拔いた赤や青の小さい旗が澤山に飾つた假賣茶屋の軒が見える許りで、フロックや紋附の人垣で取圍まれてゐた。朝鮮人の店は自ら朝鮮人許りが集まつて頻りに日本人の客を呼んでゐるけれども大方躊躇して這入るものはなかつた。唯其店の色彩はさつき餘興場に居た妓生が矢張り人込みにもまれ乍ら首を突込んでゐることで、其水色の上衣や裳

は人の目を牽いた。又一隊の妓生はさきに余等夫婦の一廻りした蓮池の塀を二三人宛手を引いて漫歩し、老樂人は塀の角の石の上に長鼓や其他の樂器の包みを下ろしてめい〳〵長い煙管を銜へてゐた。遠くから見てゐると、古い畫卷に見る畫の如く、其上池塀に峙つてゐる慶會樓の丹碧の建物も矢張り其老樂人等にふさはしく今の代のものとは思はれぬやうな感じであつた。

「あれが黑木少將の馬だらう。」と一人の男はとある松の木の間を指して人と話してゐた。其邊には人立が少なく一匹の軍馬は手綱を雙方の松の樹に長く縛られて、前脚をあがいては土を掘つてゐた。

妻は金夫人等に導かれて或る模擬店の前にゐた。

「石橋はどうしたかな。」と余は其邊を見廻したが、とある鮓店の前に手に鮓を摘まみ乍ら人を相手に哄笑してゐた。

剛三は余の近づくのを見て、

「君は閔妃事件の跡を見たか。」と聞いた。

「僕はまだ見ない。」と答へた。

「おれが教へて遣らう。」と言ひ捨てて先に立つた。

二人はお筆の店の前を通つたがまだ客が澤山で、其女すら見ることが出來なかつた。剛三は其處にお筆のゐることは知らぬらしく、大きなステッキを打振り〳〵其店の方を振り返りもせずに過ぎた。

松原を出て荒廢した數多の宮殿の跡を通り過ぎ、殆ど後ろの山に取りかゝらうとするあたりに、又一つの池があつて、其池の後ろに同じく宮殿のあとと思はるゝ處があつた。剛三は其處に立ちどまつて、

「此處だ。」と言つた。四邊には我等二人の外に人影が見えず、後ろの小松山には靜かに風の渡る音が聞えて悽愴の氣が自ら人を襲うた。

剛三は其廢墟のあとに立つて、當年の歴史を話した。風が渡つて池上に立つ漣が透明な水の面に不透明な紋を作るのを面白く見乍ら余は其話を聞いた。剛三は一つの石の上に腰を下ろして、

「興亡の跡夢の如し、といふが、全くだね。後から見ると兒戲に類したと思ふ事が當年の人々に取つては命掛けの仕事であるし、當年の人に取つてはほんの朝飯前の仕事であつた事が後から見て青史に錄すべき大事業の事もある。閔妃事件の如きはどちらに屬する方か知らぬが、斯うやつて此舊蹟に來て見て追想すると、一種の悲劇とも考へらるれば、又一種の滑稽劇とも考へられる。此頃黑木等の遣つてゐることも僕等から見ると馬鹿氣切つてゐるやうに思はれるけれども、後年になつて見たら、あれで相當の仕事を遣つたことになるのかも知れぬ。個人の利害得失を忘れて考へて見ると世の中といふものは面白いもので、敵とか味方とかいふのも籤でも引いて假りに役割を定めてゐるやうなものだ。黑木と僕などは隨分いがみ合つてゐるが、斯くの如くして文明の進歩といはうか、國權の伸張といはうか、何等かさう言つた大目的の上には共に微力を盡してゐることになる。いはば國家とか文明とかいふ巨人は澤山の個人を犧牲にして其進むべき道に進みつゝあるのであつて、個人は自己の名譽とか職責とか責任とか敵愾心とかいふものに支配されて一生懸命になつてゐるが、月日が經つて見れば、何の事はない其運命の絲に操られてめい〳〵割當てられた役を遣つたに過ぎぬ。少し佛者の口吻めくが、斯ういふ舊蹟といふやうな所に來ると僕はいつでもさういふ感じを起す。文學者にはそんな感じは無いか。」

「無いところではない、僕等は舊蹟に來るを待

たず、人間の現實的の爭鬪にも全く同じ感じを起し、自分自身をも客觀視して敵味方の區別が無くなつてしまふ事が多い。其爲め政治家のやうな執念深い喧嘩は思ひもよらぬ。君等のやうな人にはそんな感じは毫末も無いものかと思つてゐたが、今君の話を聞いて頗る意外の感を起さざるを得ぬ。唯恐るるのはそんな感じを起すやうになつたのは石橋君の老境に入つたことを證據立てるのでは無いかな。」

「ハヽヽヽ。」と剛三は笑つた。其時又爆竹の聲が聞えた。式場は愈〻閉ぢられたと見えた。

剛三は立上つて、

「どうだ、もう少しは餓鬼共が退散したかも知れぬ。ビールでも飲まうか。」と足を返した。

松林の模擬店はまだなか／＼に賑うてゐた。お筆のビール店には先程ではないけれどもまだ相當に人がゐた。

「馬鹿野郎が、また物好きに下らぬ眞似をしてゐやあがる。」と剛三は笑つた。其時模擬店の中から現はれた一人のフロツクの男が、いきなり剛三に向つて、

「石橋さん、今日はお筆さんが大活動を遣つてくれました。」と言つて感謝した。

「又出娑婆つて却て御邪魔だつたらう。」と剛三は笑つた。

「貴方がたも今日は此店のお客様よ。」と二人にコップを渡してお筆は酌をした。見ると流るる汗を袖で拭いては後れ毛を掻上げ、戰場を經て來た勇士のやうな快活さを其美しい顔に現はしてゐた。

フロツクの主人は再び剛三に向つて、

「今日はお筆さんのお蔭で私の店が一番の繁昌でした。」と感謝の意を致した。

「いゝのよ、そんなに改まつて挨拶なんかしなくつても。……あそこに見えるのは洪さんぢやなくつて。一寸洪さん貴方代り上れな。」とコップを突出して呼んだ。洪さんは例のフロツク姿を直立させてのそり／＼と此方に歩みつゝあつたが、口許の皺に微笑を湛へて近よつて來た。

「早く入らつしやいな。私貴方に思ひざしよ。」とお筆はコップを洪さんの胸許に突附けるやうにした。

「さうでございますか。」と洪さんは慇懃に其コップを受けて、

「もう澤山でございます。」と兩手で其をさゝげるやうにした。

「厭な洪さんねえ、そんなに上げてしまつては注げないぢやありませんか。」とお筆は叫[illegible]に美しい皺をよせて兩肩を竦つて見せた。

「お筆さんは大變御機嫌が出ますね。今日はビール店の女將でいらつしやいますか。」と洪さんは皮肉な口許に深い皺をよせて言つた。

「今日は私の臨時の御店になつて戴いたやうな譯でして、いやもう無暗に一人の活動で店が繁昌致します。」とフロツクの主人は頭に手を遣つて商賣人らしい愛嬌を言つた。

「今日はビール店の女將で、明日は何になるんでせう。」とお筆は氣輕に笑ひ乍ら、其處に立寄つた五人連の客に一々コップを突きつけて、

「召上れな。」と嬌かしい唯一言で直ちに其人々を虜にしてしまつた。其處へ又手を引連れて這入つて來たのは一群の妓生で其中に素淡が交つてゐた。

「素淡が來たよ。」と余は剛三に注意した。

「おゝ素淡が來たね。一杯飲ませて遣らう。洪さん呼べ。」と剛三は命令した。洪さんは朝鮮語で何とか言つたが、妓生等は何ほ手を引合つて笑つてゐる許りで近よつて來なかつた。

「お筆さんがゐるので極りが惡いのでございませう。」と洪さんは諷諫のやうに言つた。

「厭な妓生だねえ。さあいらつしやいな。チヤプソーンソ。」とお筆は妓生連を手招きして

コップを出した。
「コーマナツ。」と素淡は先に立つて近よつて來て其コップを受けた。さうして女同志は何處でもするやうに初めて顔を合せた時お筆と素淡とは互に他の顔をじろ／＼と見た。其後ろを、斬髪して中折を被り、服には[illegible]服を著てゐる二人連が此方を見るでもなく唯無意味に通つた。
「あの右手の方が金成植でございます。」と洪さんは目送し乍ら余等に教へ、又素淡の肩を叩いて何とか言つた。素淡は知らぬ振りをして、朋輩の妓生からピンヘットを徴發して其を吸つた。
其は平凡な光景であつたけれどもお筆と素淡とを並べて見るところに少なからぬ興味を覺えた。お筆は手眞似と目色で素淡にビールを強ひたが、素淡も手つきと目色で其を辭した。お筆の黒い大きな瞳と素淡の單瞼の彫物のやうな眼とは互に共存する力の凡てを投げ合つて其處に重疊たる波瀾を醸作りつゝあるやうに余の眼には見えた。さうでなくてもお筆の大きな瞳は最前から其不斷の活動のひま／＼に猶ほありつたけの意味を他の心に注ぎ込まうとしつゝあつた。此時ふと見ると彼方の松蔭に集た人等の一團に交つて淋しげに佇みつゝ此方を見てゐるのは余が妻であつた。
余は彼時妻と二人で人の居らぬ方を散歩する機會を作つた。
「お筆には梟家で逢つた許りでまだろくに話をした事もないだらう。まだ店にゐるだらうから一緒に行つて見ようぢやないか。」と言つて見たが妻は、
「お鮓かお汁粉なら食べに行つてもいゝけれど、お酒はもう澤山。」と言つて承知しなかつた。さうして「今夜は素淡の家ですか。お筆さんと一緒ですか。」と戯談らしく言つた。
「二日ある事は三日あるといふが、今夜御三は東大門外の尼寺に行つて月を見ようといふので、僕と洪さんとお筆とが一緒に行く事になつたのだ。お前も行く氣があるならば一緒に行つて見てはどうか。」と勸めて見た。
「えゝ、行つて見度くもありますが、さつき話したやうな譯ですから今夜はよしませう。あとで又お話を聞きますわ。」と淋しく言つた。

二十六

余とお筆とは洪さんの案内で十七夜の稍ゝ缺けた月を東大門の壁上に眺め乍ら電車で清涼里へと志した。御三は所用がある爲めに一足遅れて後から行くとの事であつた。
東大門を出て清涼里に著く迄の路は並木の如く植ゑられた左右の楊柳が風を受けて泳ぐやうに動き、其楊柳の下を流るゝ清水は底の石の數へられるかと思はるゝ許りに月の光を受けて輝いてゐた。
「螢のゐさうな所だが居ないかな。」と余は其水の上を見た。
「あそこにゐるわ兄さん。」とお筆は楊の間を指して言つた。見ると月の明るさの爲めに螢は其光を失つてゐた。
「暗夜に來ますと此邊は螢の美しい處でございます。」と洪さんは言つた。余は京城を出る一歩で斯る趣のある景に接しようとは豫期しなかつたので、左右の景を送迎し乍ら電車の遅いのも氣にならずにゐた。
「あそこが此度の京元線の停車場になる處でございますから、愈ゝ開通しましたら清涼里は立派なところになります。」と月の明りに透かして洪さんは右手の切り開かれた低い岡のやうな處を指して言つた。いつかもう終點に達して余等三人は降り立つた。
其處に二三軒茶店のやうなものがあつた。い

づれも朝鮮人の家らしいと思ひ乍ら近よつて見ると其うちの一軒は「うどん、そば、ビール、正宗」などと怪しげな文字の張り紙がしてある日本人の茶店であつた。

「暫く來ないうちにもう日本人の茶店が出來て居ります。」と洪さんは言つた。よく見ると其茶店には已に二三人の日本人が這入つてゐるらしく脊の低い日本の女が店前に立つて我等を呼んだ。

「大分喉が渇く、茶でも飲んで行かう。」と余は先に立つて其店に這入つた。先客の三人は一つの粗末なテーブルを取圍んで饂飩を食ひつゝあつたが、余は別に其方に氣を留めず、別のテーブルの前に腰を下ろした。其時横合から、

「先生ではありませんか。」と其三人のうちの一人が聲を掛け、續いて又、

「あ、お筆さんですね。」とお筆を見て言つた。見ると其は意外にも慶之助であつた。

「や、君か。」と余は其變つた風態を眺めた。彼は白足袋の上に草鞋を穿いて、脚絆も穿かぬ素足を丸出しにして尻をからげてゐた。他の二人も似寄つた風態であつた。

「何處にいらつしやるの？」とお筆は突立つたまゝ不思議さうに眼を瞪つた。

「今日は大變な目に逢ひました。あの春尾緑水の死骸について來たんです。」

「まア厭だ。」とお筆は四邊を見廻して、

「到頭いけなかつたんですか。」

「今朝十時頃に息を引取りました。病院に長く死骸を置く譯にも行かず死骸を引取つて歸る家も無し、止むを得ず火葬場に持つて行つたところ、まだ二十四時間經過しないからと言つて受取つて呉れず、いろ〳〵騷いだ結果、この男が知り合ひなのを幸に清涼里の尼寺で預つて貰ふことになりました。」と連の一人を指して言つた。

「それではこれから尼寺迄行く所なの？」

「さうです。棺は先にかつがせて遣りました。此處迄ついて來たのですが、腹が空いたので一寸本店に立寄り、これから又追ひ附く積りです。」

「僕等も清涼里の尼寺に行つて月見をする事になつてゐるのだが、驚いたね、死骸と一緒の月見は。」

「怖いわねえ。」とお筆は戰慄した。

「尼寺と申しましても三軒許りありますから、其お寺に行かなくても宜しうございます。」と洪さんは口を挿んだ。

「少し急ぎますから、其では又向うでお目にかかります。」と慶之助は何となく落付かぬ風に挨拶して他の二人と共に先に立つて出て行つた。お筆は其尻からげの不思議な後ろ姿を見送つた。

一匹の螢は月の光を逃れたやうに此小さい板屋の中に吹き込まれ、家のうちを高く低く柔かい曲線を描いて飛んでゐたが、やがて又外に出てしまつた。

洪さんは慶之助と余等との邂逅を不思議さうに傍觀してゐたが何とも言はなかつた。

「何て厭なんでせう。幾ら隣のお寺でも死骸が置いてあると思ふとお月見なんかする氣にはなれないわ。」とお筆は暫く默つてゐた後嘆息するやうに言つた。さうして慶之助の事に就ては何とも言はなかつた。

「段々遲くなりますから出掛けようではございませんか。」と洪さんは促した。

表に出た。月は廣い道を照らして大分往手迄見る事が出來たが他に人影は見えなかつた。余は柩を追うて慌しく歩いて行く尻からげの男を想像して見た。

洪さんは案内者として先に立つて歩いたが、お筆は稍ともするとと後れようとした。さうし

て、

「兄さん、さう早く行つては厭よ。」と小走りに追ひついては余により添うて歩いた。

「まだ大分ありますか。」

「もう其處を左へ曲ると間もなくでございます。」と洪さんは答へた。

左側へ曲つた道は一層廣々とした大道であつた。

「これが閔妃の墓へ行く道でございます。尤も今は他へ移されましたから遺骸はもう此處に無いのでございます。」と洪さんは説明した。矢張り田圃が左右に茂つて廣い道の半分許りは夏草が生茂り、早や秋の蟲と思はるゝやうな蟲が鳴いてゐた。

「もう歸り度くなつたわ。」とお筆は殆ど余の手を握らん許りに寄り添うた。

「其處を右の小道に這入りますともう屋根が見える位でございます。」と洪さんは振り返つて言つた。さうして余とお筆との寄り添うてゐるのを見て口許の邊に微笑を湛へたが何とも言はなかつた。

余は此お筆の馴れ／＼しい態度にも昨夜程は煩はされなかつた。其は傍に洪さんがゐるといふ事も一つの頼みではあつたが、其よりもやがて後から來る韓の閔三を今夜の主人公としてゐるといふ事を力強く思つた。

やがて其小路を右折すると其處は爪先上りになつてゐて段々畑の間にぽつ／＼と人家もあつた。

「これが純粹の朝鮮の百姓家でございます。」と洪さんは言つた。大邱あたりで見た家と格別變つてゐるやうにも思はれなかつたが、其邊の光景がいかにも山家らしい趣があつた。半町も其小路を行つたと思ふ頃道傍に四角なものを下ろして其處に二三人の人が立つてゐた。若しやと思ひ乍ら近よつて見ると果して其は慶之助の一行で、道傍に下ろされたものは轎であつた。轎には白い布が掛けてある許りで他に何の裝飾も無かつた。お筆は遂に余の手を固く握つて息を殺して立留つた。

「どうしたのです。」と余は聞いた。

「大分舁ぎ通つたので、チゲが草臥れましてね。」と慶之助は淋しく笑つて、「どうかお先へいらしつて下さい。」と道を讓つた。

目のあたりに柩を見てからは、お筆許りでなく余もあまりいゝ心持にははなれなかつた。暫く行つてから後を振り返つて見ると彼等は今漸く歩き始めるらしい容子に見えた。

「もう其處でございます。」と洪さんは余等をつけるやうに言つた。小路は自ら余等を導いて一つの家の前に出た。其處が寺かと思つたら其は清涼亭といふ朝鮮料理屋であつた。

「此處でビールでも飲んでゐながら轎を待合せてはどうでございませう。寺はもう直ぐ其處でございますから。」と洪さんは其處の縁に腰を下した。余もお筆も並んで腰を下した。

清涼亭の主人であらう、兩班樣のやうな帽子を被り髯を生やした男が出て來て註文を聞いた。寺に行けば精進料理許りであらうから、此處で序に飯でも焚かして食つてはどうだらう、といふ洪さんの意見に從つて三人で上に上つた。さうして閔三の來ることを話して一人の男に立番をさせる事にした。何をするか解らぬやうな男がぐわ／＼と澤山にゐたが其中の一人が余を聞いて表に出て行つた。子供の泣き聲が聞えると思ふと其を叱る母親の濁つた聲と打ち叩く掌の音も一緒に聞えた。

「どんないゝ處かと思つたら隨分汚いところねえ。」とお筆はあたりを見廻した。我等の上つたところは一間半許りの温突で其壁の間は日本風を折衷した八疊敷位の部屋であつた。窓から

表を見て居ると、程なく慶之助一行が柩を取り圍んで過ぎるのが月明りに見えた。渋さんは彼等がどの寺に行くかを見て來るやうに亭の主人に命じた。例のぐわ〳〵と澤山に居る男の一人が又其あとについて行つた。

「石橋は此處に料理屋のある事を知つてゐるのですか。」

「御存知でございますとも。この前御一緒に來たこともございます。」

清涼里がどういふ所であるといふ事を知らなかつた時は一足後れて剛三の來るといふ事は殆ど普通の事として何の疑を挿む餘地も無かつた。併し實際來て見ると電車の終點から此處迄は可成の道程がある。其に我等と慶之助の一行の外朝鮮人の通るのにすら出逢はなかつた。剛三の事であるから一人月下にステッキをついて堂々と遣つて來ないとも限らぬが、たゞ何となく其は不慥な事のやうに思はれた。

三人は運ばれた神仙爐に箸を突込んでビールを飲んだ。昨夜の怪しげな家を怖いとも氣味が惡いとも思はなかつたお筆も今夜の此家には何となく落着かぬらしく、いつもの通り冴え〳〵した容子を見ることが出來なかつた。

「どうだ少し飲みたまへ。」と余は酌をした。

「石橋の兄さんはどうしたんでせう、遅いぢやありませんか。」とお筆は訴へるやうに言つた。

其處へ柩について尼寺へ行つた男は歸つて來て何か渋さんに報告した。渋さんは余等に次の如く話した。

「あの方々は三つある寺の一番向うのに行かれたさうでございます。其處が一番大きくて綺麗なのでございまして外に座敷もございますが、どう致しませう、外の寺の方がよろしうございませうか。」

「外のお寺の方がいゝわねえ。」とお筆は泣くやうに言つた。

「餘り穢くさへなければ外の寺の方がよくはないでせうか。」と余もお筆の言葉に逆はなかつた。渋さんの旨を奉じて其男は又寺の方へ行つた。

表に立つて剛三の來るのを見張つてゐる男は音沙汰もなかつた。渋さんも多少疑惑を抱き始めたらしく、其處にあつた木沓を突掛けて例のフロック姿の長い體をとぼ〳〵と月下に運んで表に出て行つた。余は剛三の事を思ふよりも寧ろ此山里の今夜の異つた光景に強く心を牽きつけられた。

其尼寺といふのはどの邊かはつきり判らぬが兎に角さきの男の往復の時間から考へて見ても遠くでない事が判つた。其役者の死骸が中有に迷うて同じ二三人の俳役者に護せられて其寺に一夜を過ごすといふ事も心の牽かるゝ出來事であるが男を男とも思はず世間を世間とも思はぬ莫連女も其一つの死骸を怖がつて何となく落着かぬ有樣のあるのも亦興味ある事のやうに思はれた。

「いゝ月だ。だん〳〵と月が窓から射込んで來たね。」と余は其月影を見た。いつの間にか余の左肩やお筆の右の袂の上に明るい光が影を落してゐた。

「本當にいゝ月だわねえ。けれども何だかしんとして心細いやうな晩だわねえ」とお筆は耳を澄ませた。何か物音と思はれたのは渋さんが木沓を引きずつて歩く音であつた。此方に歸るのかと思つたら其音は少し宛遠のくやうであつた。

「心細いところもあらうけれど、慶之助が餘り遠く離れてゐない寺にゐると思へば心丈夫なところもあるだらう。」と余は笑つて言つた。

「さうねえ、其は幾らか心丈夫だわ。」とお筆は戯れるやうに言つて余の手を取り、

「其に兄さんもゐなさるし……」と耳を澄ませて、

「あの音は何でせう。

「何の音だらう。遠くの松山にでも風の渡る音だらう。」

「あれは何の音？」

二人は覺えずハヽヽヽと笑つた。其は臺所と思はるゝ方に物を碎く樣な音のしたことであつた。續いて女の濁つた聲で何か罵るやうな聲が聞え、早口に喋るやうにいふ二三人の男の聲も聞えた。亭主は食卓を運んで來て其上に神仙爐を載せた。此天神指を生やした亭主は突立つた儘何か言つたけれども渋さんを缺いた此席には全く通じなかつた。彼は不器用に口を曲めてビールの瓶を覗き込み獨り合點したやうな顏附をして出て行つた。

間もなく渋さんは、再び尼寺に行つた男と連立つて歸つて來た。

「石橋さんはどうなすつたんでございますか。影も見えんやうでございますが……」と時計を出して見て、

「もう九時が近いやうでございます。尼寺の方でも待つてゐるさうでございますから、早く御飯でも食べて向うへ行つて待つやうに致しませうか。」と分別ありげに言つた。

「尼寺はどれに極りました。」

「一番手前のに極めたさうでございます。」

「其では死骸とは大分離れてゐるからお筆さんも怖いことはないだらう。」と余は笑つた。

「いゝわ、もう私觀念したから何處へでも行くわ。石橋の兄さんなんか來たくつてもいゝ。其代り醉ひませうね。」と神仙爐に箸を突込んで銀杏の實をより出しより出しして食つた。

亭主はビールの代りを持つて來た。だんだんと深く射し込んで來る月影を浴びながら三人は卓を圍んで飲んだ。我國の王朝時代の物語を讀むと京都の殿上人などの西山とか北山とかいふあたりに偶ゝ遊びに行つた時の記事などはいかにも物あはれに、恰も見も聞きも知らぬ異鄕に流寓したやうな心細さが敍してあるが、其程ではなくとも今宵の情景は何となく余の心をそゝつて其物語の樣を思ひ起させるのであつた。唐臼の音のごぼごぼと聞ゆる代りに、濁つた意味の判らぬ女の聲が聞えた。

表に見張をさせて置いた男はいつ迄も音沙汰がなかつた。こつちから何とか言はぬ限りは明日の朝迄でも見張つてゐるのであらうとをかしかつた。そんな事を話題にして笑つたりなどしつゝ神仙爐が空しくなる迄三人共に飲んだ。其處へ亭主は暖かさうに湯氣の立つてゐる飯を大きな鉢に入れて持つて來た。

料亭を出る迄劉三は終に來なかつた。表に出て見ると見張の男は往來の中央にしやがんで長い煙管を銜へてゐた。さうして渋さんから白銅一個を貰つた時初めて立上つて頭を下げた。

其處から少し急な坂になつて半町迄も行かぬうちに片々は谷になつてゐるやうな處に人家があつた。一見百姓家と餘り變らぬ麁末な家であつたが渋さんは、

「此處でございます。」と言つて立止つた。余は、これが寺かと稍ゝ驚いて其低い軒と低い門とを見た。けれども朝鮮の寺は殆んど料理屋も同じ樣なもので兩班などは妓生を連れて泊りに行くのだといふやうな話を聞いた事を思ひ出して、或は濃艶な若い尼が此門から出て來るのかも知れぬと半ば好奇心に驅られて待設けてゐると、やがて閂を外す音がして現はれたのは一見十二三の男の子かと疑はるゝやうな頭は五分刈にした、白い服を著た、年とつた尼であつた。月の光によく見ると年とるに從つて小さく

なつたといふやうな眼をショボ／＼させ乍ら、少し口を開けてぢつと我等を見乍ら何とか言つた。洪さんが簡單に其に答へると、其尼は我等に這入れといふやうな科をして見せた。

門内には二三坪許りの空地があつて其空地を隔てて一間半許りの狹い部屋が向ひ合つてあつた。老尼は先に立つて我等を其一つに導いた。

「こんなところですか。」と余は庭に立つた儘で其狹い部屋を覗き込んだ。

「私、此寺は初めてでございますが、併しどこでも大同小異でございます。」と洪さんは別に驚いたやうな風もなく落著いて言つた。

「私もう醉つちやつた。どこでもいゝわ、早く寢みませうよ。」とお筆は晝間からの草臥が一時に出たらしく、自分の體を持て餘したやうにどかと緣に腰を下ろして兩手に後れ毛をあげた。

お筆許りでなく余も大分醉つてゐた。もう月見どころの騷ぎでなく兎も角今夜を此處に遁して明くるのを待つより外に途はなかつた。

「南京蟲はゐないでせうか。」と余は上に上つてから其邊を見廻した。

「大丈夫でございませう。」と洪さんは冷かに答へた。下は溫突になつてゐたけれども何も焚いてなかつた。何か敷くものはないのかと聞くと其處に在る薄衾を掛けと老尼は答へた。さうして枕は木枕であつたが、其も素湯の宿の木枕とは違つて自然木の切端の中を少し許り刳拔いたものであつた。

「さういふ枕の割目などによく南京蟲は居るものでございます。」と洪さんは言つた。老尼は緣の下に大きな鉢のやうなものを置いて、其中に枯草を入れて火を附けた。溫突でも焚附けるのかと思つたらさうでなく、蚊いぶしをするのであつた。老尼は團扇で其煙を狹い室内に送り込むので呼吸をするのさへ苦しい位であつた。

「驚いたわねえ、私達を狐と間違へてるのだわ。」とお筆は情なさうに言つて、表に面してゐる小さい窓の方へ逃げて行つた。

「おや鶴見さんぢやなくつて。」と其時お筆は窓から外を見乍ら呼んだ。其に對する男の返事が聞えて即て門から這入つて來たのは慶之助であつた。

一通りいぶしたあとで老尼は外の窓も緣側の障子も締めるやうにと言つた。洪さんは老尼の命令通り兩方を締めてしまつた。慶之助も矢張り中に締込まれた一人となつた。

「君の方はどうだ。」と同じ災難に出逢つたものが其容子を聞き合ふやうな心持で余は聞いた。

慶之助は四邊を見廻して、

「これは清潔でございます。私の方の寺は非常に汚い上に、棺を置いた傍に三人寢るのだから大變ですよ。餘り苦しかつたから貴方の處へ出掛けて行かうと思つて表を通り掛つたところでした。」と答へた。

「ぢやあ此方に泊つてくといゝわ。」とお筆は戲談のやうに言つて、

「けふ貴方達はどうしたの。」

「私は春尾の代りに遣つて居ただけの事ですから、今日は他のものが代つて遣つてゐる筈です。」

「だつて貴方の外に役者らしい役者はないぢやないの。」

「戲談言つちやいけません。」と慶之助は心から恐縮したやうに言つた。

藥酒といはれてゐる朝鮮酒を洪さんの命令によつて老尼は持つて來た。其を又四人で飮んだ。

立籠められて蒸暑い室内に四人は唯醉ふ外に目的の無い人の樣に飮んだ。先には殆んど眠りこけさうになつてゐたお筆は一しきり慶之助を捕へて艶かしい戲談を言ひ乍ら酒の味も知らぬやうに飮んだ。慶之助は又昨夜來の疲勞を此

酒によつて回復せうとするらしく多く飲めぬ口にひつかけひつかけ飲んだ。

いつの間にか皆醉ひつぶれて寢てしまつた。慶之助の、

「私は歸ります。」と管を卷くやうに言つてゐたことも、お筆の、

「手枕にしてあげるわ。」と白い腕をだらしなく投げ出して締りなく笑つたことも、耳に殘つてゐるやうに覺えたが、余は引入れられるやうな心持に眠つてしまつた。ビールの醉に加はつた藥酒の醉は火の玉の如く體中を驅けめぐつて唯昏々と眠つた。

夢心地に痒いと思つて余は右の手をガリ〳〵と掻いた。僅かに目を明けて、フロックの儘仰向けに倒れて口を開けてゐる洪さんを一寸見たが、もう頭を動かして其以上を見る勇氣は無かつた。

翌朝眼を覺ました時にはもう誰も室内にゐなかつた。昨夜の月明りよりは稍と明るいかと思はるゝ位で、まだ短夜の明け離れ初めた頃かと思はれた。岑々と痛む頭を起して、余も表に出て見た。

昨夜は十分に見えなかつたが、今朝見ると此家の割合には大きな土間があつて、其處に五つ許りの甕と桶に堆く許り積み重ねた薪とがあつた。さうして其處に釜を立てて炊事をしてゐるのは昨夜の老尼と同じ服裝をして、足には草鞋を穿いてゐたが、凡そ五十許りと思はるゝ尼であつた。

表に出て見ると、室内に考へた程ではなく、もう夜は谷の森に明け放れてゐた。赤い汚れた上衣を着た十二三と、同じ服裝をした十許りの子供が二人、頭に水甕をのせて目の前の崖を上つて來た。見ると谷へ下つたところに一つの井戸らしいものがあつて其ほとりに洪さんもお筆も慶之助も立つてゐた。余は慶之助の事はもう忘れてゐた。彼も昨夜皆と一緒に醉ひ倒れたのであつたといふ事を彼を見て初めて思ひ出した。さうしてお筆の手枕を何うとか言つた言葉をも思ひ出した。慶之助は今お筆からハンケチを借りて顏を拭いてゐた。

「何の爲めに昨夜あんなに藥酒を飲ませたのだらう」と考へると其は狐につまゝれたやうな感じであつた。それでも涼しい朝風は頭の痛さを輕めて、此山峽らしい四邊の景色は騷立つた心を鎭めた。井戸の處から四五間下つた谷間に一軒の掘立小屋があつて其處に二人の白衣の人が臼を搗いてゐた。よく見ると二人共に尼で其一人の方は二十許りの[illegible]い若い尼であつた。其時[illegible]低い臼の音が此山峽の夜明けの心持を遺憾なく現はして耳に響く[illegible]の音よりも[illegible]つてなつかしいやうに覺えた。

二人の子供の水甕は谷の[illegible]を頭に載せて、先に上つて來た細道を今度はとぼ〳〵と下つて行つた。五分刈の頭である爲めに日本の子供に馴れた目はふと其を男の子かと思つたが、よく見ると何處となく優しげな處があつて、まがふ方なき女の子であつた。余も其あとについて其細道を下りて行つた。

いつか此方に上りつゝあつた洪さんと余は途中で行き逢つた。

「昨夜お休みになれましたか。」と洪さんは、聞きするやうに言つた。

「苦しい〳〵と思ひ乍ら其でも前後不覺に眠りました。」と答へた。洪さんは少し顏を上げるやうにして、

「こゝをカラーで擦んだに傷めました。」と襟首を出して喉笛の兩側の擦りむけたやうに赤くなつてゐるのを見せた。余は覺えず吹き出して笑つた。

井戸端に行つて見るとお筆も慶之助も余を迎

へて微笑した。お筆は少し俯向き加減になつて髱の形を直し乍ら、
「石橋の兄さん、到頭來なかつたねえ、ひどい人だわ。」と余に向つて叱るやうに言つた。
「昨夜は迚も彼方では狹くて眠れなかつたらうと思ひます。お蔭ですつかり元氣を恢復しました。」と言つて慶之助は大きく息を吸つて體操をするやうに兩肱を後ろへ張つた。
二人の子尼は井戸端に頭の上の甕を下ろして、丸い瓢を半分に切つたやうなもので、其溜り水を抄つては甕に入れた。其水底に沈んでゐた黑い蛙は傍の石を攀登らうとして落ちては長い脚を水の中に延ばして浮んでゐた。子尼は其に頓着なく其水を抄うては甕に入れた。さうして二つの甕に滿つると、相當に重みのあるのを彼等は巧みに頭に載せて、其水を一滴もこぼさぬやうに直立の姿勢を保つて前の細道を登つて行つた。やがて年上の方は余等が泊つた寺の門に這入り、年下の方はすぐ隣の門に這入つた。
「君の泊つてゐる寺は彼處ではないのだな。」と余は共に其子尼の行方を見送つてゐた慶之助に言つた。
「えゝ、もう一つ隣の方の門です。あの中の門の寺には昨夜私達の來ました時分鐵琴の音らしいものがしてゐました。大方他人の客が泊つてゐるのでせう。」と慶之助は答へた。
お筆は彼の掘立小屋に於ける二人の尼の臼を搗くのを見てゐたが、
「あれは何を搗いてるの？」と余の傍により添ふやうにして聞いた。
「米だらう。」
「だつて、日本では足で踏んで搗くわねえ。朝鮮では手で搗くの。」
「其處はどうか知らんが、あんな白いものは米より外にはあるまい。」
こんな話をし乍ら余は其冴えない、梟の低聲に呟いてゐるのかと思はるゝやうな人の心を滅入らす臼の響きに耳を澄ませた。
其時ふと見ると彼の中の寺の門から朝鮮人の男女が姿を現はして此方を見てゐた。一人はたしかに妓生に相違なく普通の女よりも派手に見えた。
「鶴見君、君のいふ通りあの者等が昨夕泊つたのだ。」と言つて余は其方を敎へた。
「あゝ成程あれ等ですな。今頃は暑い爲め餘りあゝいふ客がないさうですが、春や秋になるとあんな連込み許りださうですよ。」と慶之助は三軒の寺を見て言つた。
「さうすると我等のやうなものが來たり寺へ轉げ込んだりするのは大へん異數なんだね。」
「さうですとも、貴方がたは兎も角もして宿は異數かも知れません。お寺であつて宿の異數といふのも變な話ですけれど。」
余等はそんな話をしてそろ〳〵と坂道を辿りかけた。お筆も道傍の草の葉を一つ摘つて唄を破つては棄て乍ら余等のあとについて來た。其時彼等男女の客もそろ〳〵と門を離れ一寸細道を下りて來かけたが、近づいた時余は覺えず叫んだ。
「素淡！」さうして男の方を見ると是亦昨日松林の模擬店の前を通つて見覺えのある余成植であつた。
「あの妓生だわ！」とお筆も小聲で叫んだ。
素淡の方も氣が付いたらしく、何か言つて一寸立留り顏を赤めたが、其言つたことは余には解らなかつた。余成植は知らぬ風を裝うて余等を通り過ごした。
慶之助は自分の寺の方に一人別れて歸つた。
[illegible]さんにフロックの儘で仰向けに倒れて低い天井を眺めてゐた。

「洪さん、奇遇ですよ。向の寺に素淡と金成植が來てゐますよ。」

「さうでございますか。」と洪さんは起きかへり乍ら落着いて答へた。

晝飯は彼の草鞋を穿いた五十餘りの尼の手料理であつた。洪さんは、

「一向旨さうなものもございません。」と言ひ乍ら、彼れ此れと箸をつけた。悉く臭くつて食へさうなものはなかつたので、余もお筆も御飯許りを食つた。見ると庭を隔てた部屋では昨夜の八十許りの老尼と彼の米を搗いた小尼とが向き合つてこれも晝飯を食つてゐた。老尼はショボ〳〵した眼を瞬き乍ら何も屈託の無い人のやうに悠然として大きな匙を使つてゐた。さうして時々小尼と何か話し合つてゐるらしかつた。此方では洪さんが悲惨な口許を動かし乍ら不味さうに食つてゐた。

「洪さん、歸りませうか。」と余は箸を投じてから言つた。

「さうでございます。石橋さんはどうなすつたか。」と言ひ乍ら洪さんは時計を見て、「もう八時を過ぎました。」と言つた。

「おやあ歸りませう。」と余は早速立上つた。

尼は宿料といふやうなものを要求しなかつた。考へて見れば蒲團も火も何も無かつた。唯體を横たへたといふに過ぎなかつた。宿料の請求をせぬのも面白いと思ひ乍ら食料に多少の心附を添へて渡した。一人の尼は乞食が手を合はすやうに合掌して、

「タニダニ、コマプステダー。」とか何とか言つた。僧尼は非人乞食などよりも下等なものになつてゐるといふ話が思ひ出された。

三人とも流石に疲勞を感じて、何やら腹立たしい人のやうに無言で表に立つた。何か一言鄭之助に言つて歸らうかとも思つたが其も止めた。

ふと見ると彼の二人の尼が臼で米を搗いてゐる。其邊よりもまだ大分下手の方から谷川傳に素淡と金成植とはとぼ〳〵と歸りつゝあつた。我等の一行が見えた時彼等二人は横路に外れた。

清涼亭に寄つて見たが剛三は遂に來なかつたといふ事を彼の見張りの男は答へた。彼の男は十二時頃迄表にしやがんでゐたといふ事であつた。

閔妃の墓道である廣い通に出る前であつた、向うから粗末な麥藁帽を被つた商人らしい一人の日本人が遣つて來た。さうして其が不思議にも洪さんと知り合ひらしく二人で話をした。余とお筆とは四五間行き過ごして待つてゐたが洪さんはまだ話してゐた。洪さんと話し乍ら彼の男は鋭い眼を光らせて我等の方を見た。

「探偵だな。」と余はすぐ覺つた。さうして不愉快な感じを抑へることが出來なかつた。

「あの男を何だか知つてるか。」と余はお筆に聞いて見た。

「探偵でせう。」とお筆は平氣で答へ、「随分御苦勞な商賣ね。」と冷笑するやうに言つた。

二十七

南山樓に歸つて見ると、剛三は昨夜から歸らぬと言つた。

「貴方がたと御一緒ではなかつたのですか。」とお京は不審らしい顏をした。一應南山樓迄來た洪さんは、

「其では後程又伺ひませう。」と言つて歸つた。

「上野さんも今朝見えて何の話も無かつたが、をかしいのねえ。」とお京は尚剛三の行方を不審がつてゐた。

余はお筆と一緒に剛三の部屋に行つて見た。今朝はまだ掃除もしてないと見えて昨日の儘に散らかつてゐた。

「あゝ草臥れた、昨夜は散々な目にあつてよ。」とお筆は昨夜の始末を話した。「でも、お寺で雜魚寢なんか洒落てるわね。」とお京は笑つた。

余はそんな話よりも此剛三の部屋の模樣が何となく氣になつた。水に溺れたとか汽車に轢かれたとかいふ變死人の居間に這入つた時、凡て彼の生活がぷつりと中斷されたかの如き形になつてゐるのが妙に人の心を打つものであるが、恰もさういふ感じを起すのであつた。剛三は死んだのではあるまい。けれどももう永久に此部屋には歸らぬ人のやうに思はれて仕方がなかつた。

「あゝ眠い。」とお筆は、お京の肩に兩方の袂を重ねて其上に顏を推し當てるやうにして眼を眠つた。其がお京に對していかにも妹らしく見えた。

「本當に仕樣のない駄々ッ兒ねえ。夜遊をしては歸つて來ては眠い／＼といふ。」とお京は姉らしく叱るやうに言つて、「貴方ももうおよしなさい。今朝も奧樣から電話が掛つて來ましてよ。」と余をもたしなめるやうに言つた。

「兄さん、あなた眠くはないの。」とお筆は小さい眼を開けて言つた。

「眠い。僕も暫く寢よう。」と言つて自分の部屋に歸りお京の來るのを待たず自分で蒲團を引張り出してごろりと轉がつた。昨夜の薄べり一つで五體の痛かつたあとに蒲團の柔さは染々と肌に覺えられた。

「おやもう寢なすつたの。」と蒲團を延べに來たお京の這入口に立つて獨言を言つたことは耳に這入つたが其後の事は知らなかつた。

三日の疲勞が一時に出たやうに覺えて寢返りをするのは覺えてゐ乍らいつ迄も／＼眠りをつぎ足した。

妻は此日宿に歸つた。

二十八

其後數日間余は尚ほ京城に滯留してゐたが、剛三は遂に歸らなかつた。おとやなどは、「どうなすつたんでせうねえ。」と度々不審さうに言つたが、お京は其に就いては何事も言はなかつた。お筆は、

「私見棄てられちやつたやうな譯ね。」と戲談らしく態と拗ねたやうな顏をして見せた許りで、これも多くは言はなかつた。部屋は暫くまだ元の儘にしてあつた。

剛三の失踪といふ事は自然お筆を余の部屋に入れしめる機會を多くしたが妻は厭な顏をせぬ許りか、好んでよくお筆と話した。

「私貴女の踊が見度いわ。」

「えゝ大威張りでお目に掛けますわ。」と斯んな話をし合つて笑つてゐることもあつた。

慶之助は或日遣つて來て彼の草稿を持つて行つた。其歸る時にお京は口を開けたビール瓶を持つて客の座敷に行く所であつたが立どまつて、

「今晩見に行くわ。」と小聲で慶之助に聞えるやうに言つて一寸破顏した。慶之助は、

「どうか、是非。」と頭を下げた。其時お筆は居間の大きな火の無い火鉢の傍に他の女中等と輪を作つて坐つてゐたが、慶之助の方には眼もくれず、極めて尊大に取り澄まして知らぬ風をしてゐた。其が他の女中の手前を氣兼ねしたといふよりは眼中に慶之助風情は無いやうな素振であつた。

剛三が居なくなつたといふ事は當然お筆の境遇に一變化を來すべきであるに拘らずお筆は依然として傍若無人に振舞つてゐた。宿の主人も亦格別前と異るところなく其爲すが儘に任せてゐた。

或日洪さんが来た。此頃歯が痛んで頗る難儀をしたと言つて、肉の落ちた頬の片方を少し腫らせてゐた。

「私も二三日うちに平壌の方へ参る積りでございます。」

「長く御滞在ですか。」

「さうでございます。まあ二週間位の積りでございます。」

「それでは私ももう京城を立たうかと思つてゐますから或は又平壌でお目にかゝるかも知れません。」

「お宿はどちらになさいますか。」

「平壌へ行くなら松屋に行けと豫て石橋なども言つてゐましたから、其積りで居ります。」

「それでは私の方から、松屋へ、おたづね致しませう。」と斯んな話をして洪さんは帰つた。

京城は名残惜しくもあつた。けれども一日も早く此處を去り度いやうな心持もした。余等夫婦が南大門で人々に送らるゝ身となつたのは洪さんが立つてから二日目であつた。剛三が座敷を散らかした儘で蹤跡を晦ました程ではないけれども、お雅なり慶之助なり、素淡なり、金成植なり、凡てをあるがまゝにして出發するところに慌しい心持があつた。

例の飾りのない實用一方の、其自身が一つの武器のやうな大きな汽車は余等を載せて又北へ北へと走ることゝなつた。停車場に着く度に五分間の停車時間を余も妻も必ずプラットフォームに降りて歩いた。遠近の禿げた山々から想像外の冷たい風の吹いて来る事が車中の蒸れる様な暑さに困憊した二人を蘇生せしめた。プラットフォームを歩いて三等室の窓から見るともなしに中を見た時に何處か見たことのある三人の親子連れがあつた。やがて其は疑ひもなく彼の馬關の停車場で係員に劍突を食つてゐた老人夫婦と娘とであつたことに氣が附いた。

「何處か馬關でもお見受け申したかと思ふが何方へお出でですか。」と余は聞いて見た。

「滿洲へ。」と老人は答へた。筒の大きい[illegible]、を帯びた[illegible]であつた。よく聞いて見ると水原に次男があるので其處に今迄逗留してゐたが、奉天にゐる長男の許に行く處だと言つた。目の釣り上つた目の大きな娘は桃の皮を歯でむいては窓の外に吐き出してゐた。

二十九

汽車が平壌に著いたのは午後三時過であつた。暑い日の照りつけてゐる茫漠とした空地がすぐ停車場の前に擴がつてゐた。出迎へてくれた松屋の番頭は、

「もう一時間も致せば涼しくなります。」と言ひ乍ら極めて愛想よく揉手をした。

「此處は梅雨だと日中は京城よりも暑いだらう。」と余は殆ど往来の形を爲さないやうなほこ〳〵した土の上にいら〳〵した日光の照りつけてゐる其空地を眺めた。

「一體ねえ、其に丸で野原みたやうぢやありませんか。どこが町なの。」と妻は心細さうに言つた。之を立聞きしてゐた番頭は、

「新市街はこゝから二十町と申します。それでも車で参ればすぐでございます。でお荷物は。」と又揉手をした。此番頭は帽子に赤い帯をして其に松屋ホテルといふ文字を白く抜き出してゐた。其帽子の下から埃によごれた汗の流れ出てゐるのを白いズボンのかくしから取り出したハンケチで拭うて笑顔を作つた。余は二枚の切符を渡すと番頭は其を一寸推し戴くやうにして手荷物受取口へ行つた。

「いさましい番頭さんね。」と言つて妻は微笑んだ。何でも松屋は朝鮮で一番氣の利いた宿屋だといふ評判を京城で聞いた事があつた。南山

樓のやうなのが植民地を通じての宿屋の特色かと思つてゐたが番頭の容子からしてがまるで違つてゐた。

番頭が荷物を受取つてくれる間二人は日陰に突立つたまゝ唯ぼんやりと焼けつくやうな日光を見てゐた。何處迄が停車場の構内で、何處からが畑なんだか、草原なんだか、區別が附かず、唯一體に廣々とした空地のやうに見えた。さうして停車場を少し離れたところにトロッコでも運びさうな狭い二條のレールが敷かれてあつて、其に嘗て熱海鐵道で見たことのあるやうな人車の箱が四五輛も並んでゐた。今停車場を出た人は大概此箱の中に乗り込むと、汗と埃で黒くなつてゐる白衣の鮮人が二人此箱の後ろに手を掛けて走り出した。鮮人の走るあとに砂煙が騰つて其箱は忽ち遠ざかつた。其次の箱も定員の客が乗り込むと、同じやうにして發車した。

番頭は受取つた荷物を直ちに一人のチゲに背負はして余等の前に戻り、

「どうもお待たせ致して済みませんでした。お荷物は柳行李一個と鞄一個でございますな。慥かに宅のチゲに背負はせましてございます。」

と言つて二臺の車を我等の前に据ゑた。二臺の車共に松屋といふ二字を白く染め抜いた紫の旗を翻してゐた。

番頭が帽子を取つて軍隊式に腰を曲めてゐるのを後ろにして二臺の車は熱い日光の下を驅けつた。京城の市街ではまだ感じなかつた暑さで、油のやうな汗が自然に皮膚から染み出た。車夫は松屋の印袢纏を着て足には草履を穿いてゐたが、草履の尻がバタ／＼と跳ね上る度に輕い砂埃が脹脛の邊迄立つた。

「これが大陸的の暑さとでもいふのだらう。」と獨で考へた。京城の南大門の停車場を降りて狭い賑かな涼しい支那町をぶら／＼と驅けた時とは大變な相違であつた。往來は何處迄行つてもだゝ廣かつた。片側にポツリ／＼と粗末な日本家があつたが、其等は大方木賃宿のやうなものであつた。我等の車のあとからも又一臺の人車が來たが、あとを推してゐる鮮人が力が盡きて車の後ろに飛び乗り惰力で僅に動く時になると忽ち我等の車よりも後れた。

暫く行つてから横町に曲ると、此處は埃の立たぬ代り大きな石ころが往來中に敷いてあつて、其上を車夫は滅茶苦茶にひいた。

「大變な道だね。」といふと、

「此間政務總長がお見えになつた時修繕の爲めに入れたのでございます。それでもこれで餘程よくなつたのでございます。と車夫は呼吸を切らせ乍ら言つた。其道傍には朝鮮家屋と日本家屋とが交つて飛び／＼にあつた。とある二三軒の朝鮮家屋の前には雨水の濁つたのかと思はるゝやうな濁水の溝があつて、其處には朝鮮の女が衣を叩いて洗濯をし裸體の子供が泳いでゐた。

暫くして車は漸く松屋の前に着いた。忽ち玄關前に三四人の若い女中が現れて頭を並べてお辭儀をした。さうして其中の一人が帽子や傘を受取つて先に立つた。

通された部屋は十疊と六疊の二室を打通した廣々とした二階座敷であつた。

「大變な繁昌ですことね。」と妻は言つた。なる程どの部屋にも客がゐるらしく殆ど滿員かと思はれる位であつた。どんな人が泊つてゐるのだらうかと余は廊下を隔てた向ひ側の部屋を覗くやうにして見た。首筋の肉のだぶ／＼と肥え太つた浴衣を拔衣紋に着て向ふ向いて坐つてゐる一人と、頻りにしろ／＼と我等の方を見る五十餘りの小ぢんまりとした一人とが目に入つた。女中は「入らつしやいまし。」と改めて慇懃に挨

拶をして茶を酌んで出した。涼しい風がどこからともなく吹いた。余は浴衣に著替へて大きな座蒲團の上に胡坐をかき脇息に肱を凭せた時生き返つたやうに覺えた。

「お風呂を見て參りますから。」と女中は又一禮をして引下つた。間もなく宿の主婦が挨拶に來た。

「此お座敷は少し朝日がさしまして如何かと存じますが、何ならば明朝になりますと外に明くお座敷がございますからお取替致します。女中共は誠に不行屆のもの許りでございますがどうか御勘辨下さいまして……」と主婦らしい態度を保ちつゝ丁寧に挨拶をして、

「此お方樣が昨日お見えになりまして、若し御用がありますればこの肩書きのしてあるところに電話を掛けて戴くやうにとの事でございました。」と言つて一枚の名刺を出し、後ろの廊下に膝を突いて控へてゐる女中を振返つて、

「あゝさうかい。」と言つて改めて余等の方を向いて、

「どうかお風呂にお召し下さいますやうに、お案内致させます。」と又頭を下げて引下つた。名刺を見ると其は洪さんであつた。

二人共湯に這入つて出て來た時分にはもう天地が變つたやうに涼しくなつてゐた。手すりによつて表を見渡すと、この邊も尚ほ空地が多く、チャンと十字に道路は作つてあるが、草が生えてゐる許りで家は建つてゐなかつた。膳を運んで來た女中に、

「此邊はもう新市街のうちだらうね。」と聞いて見た。女中は、

「左樣でございます。詳しくは存じませんが何でも大同門通から此方が皆新市街だとか申すことでございます。」と答へて、

「御酒は如何致しませう。」と聞いた。

「貴方召上るでせう。」と妻は聞いて、

「どうか願ひます。」と女中に傳へ、

「一體の容子がまるで南山樓と違ひますのね。」と女中が行つたあとで妻は言つた。余は尚手すりに凭れたまゝで、

「全くだ、其にあたりの景色もまるで京城と違ふぢやないか。」と答へて、此曠野のやうな廣漠たる新市街を見渡した。舊市街によつた方と思はれる處には此處等あたりとは違つて大分人家があらうかと想像されたが、其でも京城のやうな繁華な模樣は見えなかつた。さうして緩い線を描いた一つの丘陵が其後を遮つて左手の方に延びてゐた。銚子を持つて來た女中に、

「姉さん、あの丘は何處になるね。」と聞いて見た。

「あれが牡丹臺になるのでございませう。」と女中は答へた。

酒を飲み乍ら女中に名を聞いた。女中は笑つて答へなかつた。國を聞いても答へなかつた。年は勿論答へなかつた。唯つゝましく笑つてゐる許りであつた。此夜余は餘り多くは飲まなかつた。妻にも二三杯すゝめ自分も七八杯を傾けた許りで止めた。

三十

翌朝洪さんに昨夜到著の旨を電話で報じると、洪さんは、御近處迄行く序があるから間もなく伺ひます、といふ返事であつた。

便所の手前のランプ部屋でランプ掃除をしてゐる男を見ると、昨日妻の車を引いた男に相違なかつた。頭を五分刈にしてゐるが餘りものを言はずニタ／＼と笑つてゐた。さうして一人の女中が、

「佐々木。」と呼捨てにすると、大きな聲で、

「ハイ。」と返辭をしてパタ／＼と廊下を歩いて臺所の方へ行つた。

朝飯の時の女中は昨日のとは違つてゐた。昨夜

日の女中は蒲團を上げたり掃除をしたりしたが、朝飯の給仕は別人であつた。これは昨日の女中に比べると老けてゐた。
「今便所に行く時見たのだが、ラムプ掃除をしてゐた男は昨日車を引いた男だね。」と余は此女中に聞いて見た。女中は笑ひ乍ら、
「左樣でございます。」と答へた。
「佐々木といふのだね。」
「よく御存じでいらつしやいます。」と女中は給仕の盆を膝の上に置いた儘こらへられぬやうに笑つた。
「車を引いた男つて貴方の車ですか。」と妻は言葉を挿んだ。
「いゝえお前のさ。」
「あの男日本人ですか、私朝鮮人かと思つた。」
「奥樣、朝鮮人なんでございますよ。」
「それで佐々木といふ名前なんですか。」
「いつの間にか皆が佐々木々々々といふと當人も返辭をするのでございますよ。」と女中は又をかしさうに笑つた。
「此家に朝鮮人は多勢ゐるかね。」
「あの男の外に三助と料理番とがさうでございます。」
「さうすると此料理も朝鮮人が拵へるのだね。」
「さうでございます。」
「昨夜食つた洋食なんか大變旨かつたぜ。」
「初め日本人の料理人が三年許り居りまして、其間始終一緒にゐてよく覺えたのでございます。朝鮮人はなか〳〵器用でございますよ。」と此女中は昨夜の女中よりもよく喋つた。昨夜の女中の名がお花で此女中の名がお桂であることも此女中の口から説明された。それでも南山樓のお京などとは全く樣子を異にして何處となく地味であつた。主婦も此二人の女中も皆信州のもので、殊に此お桂は主婦と親戚同樣のもので、松屋創業の時からゐるのだと言つた。
　お桂の去つたあとで妻と余とは何となく落著いた延び〳〵とした心持で斯んな事を話し合つた。
「いゝ宿ですわね。」
「ムヽ、いゝ宿だ。こゝに數日間滯在してゆつくり平壤を見物しようぢやないか。」
「えゝ、さう致しませう。でもあの往來と日中の暑さには閉口ね。昨日は私死にさうだつたわ。」
「けれども朝晩は又京城よりももつと涼しいやうぢやないか。日中晝寝をして朝早くと夜遲く遊ぶんだね。」
「此處は何か見るものがあるんですか。」
「朝鮮の京都といふ評判だもの、新市街は殺風景なやうだが多分舊市街の方にいゝ建物でもあるんだらう。澁さんでも來たらゆつくり聞いて見ようぢやないか。」
「えゝ。」
　廊下では一人の女中が何か朝鮮語交りで話してゐた。何とかでチーバリだとか何とかでチョツだとかよく耳にする朝鮮語に日本語を交へて話すのであつた。其で相手のものには判るらしく、ネエ〳〵と返事をしてゐた。其相手といふのは例の佐々木君であるらしかつた。
　其處へ澁さんの來た事をお花さんが知らせて來た。
　澁さんは相變らず例のフロツクを著て來た。
「一昨日お訪ね下すつたさうでして。」と余は挨拶した。
「毎日のやうに御近處迄參ります序でございました。」
「近處といひますと。」
「代議士で辯護士の松田さんの事務所でございます。此處から見えるでございませう。」と澁さ

んは正座したまゝ身をねぢて表を見た。大方空地である中に三軒の棟割長屋が程遠からぬ處に建つてゐた。「あの三軒のうちの眞中の家でございます。」

「へえゝ、あの長屋に辯護士事務所があるのですか。」

「さうでございます。」と言つて渋さんは笑つた。

「松田は私も知つてゐる男だ。さうすると貴方は訴訟事件で此方へお出でになつたんですな。」

「さうでございます。」

「それでは御多忙でせうな。少しお閑がありましたら又此地の御案内を願ひ度いと思つてゐたのですが。」

「よろしうございますとも。訴訟事件はなかなか容易にはかどりませんから、いつでも御案内致します。」

其から暫く石橋やお筆の噂などをして、兎も角今日午後五時前から牡丹臺に案内しようと言つて渋さんは歸つた。歸りにもう一度松田の事務所に寄ると言つてゐたので、妻と二人で手すりの處から見下ろしてゐると果して渋さんは例の姿勢で彼の三軒長屋の中央の家の格子を開けて這入つた。

「松田さんといふのはあの松田春子さんのお父さんですか。」

「さうだ。」

「へえゝ、こんなところで辯護士をしていらつしやるのですか。」

「棟割長屋の事務所は面白いね。」

「さうすると此頃ではお娘の方が有名なのですわね。」

「さうさ。あれで非常に子煩惱な男だからな。あの棟割長屋で朝鮮人を相手に金まうけをしてゐるところを娘に見せて遣り度いね。」

斯んな話をし乍ら餘所見るともなしに松田の事務所の方を見てゐた。二階といつても低い鐵格子の窓が一つ附いてゐる許りで其處には簾が釣つてあつた。隣の家の二階には鐵格子の中に一鉢の鉢植が置かれて裸の人の動くのがよく見えたが、松田の二階は簾のある爲めに唯何物かがほのめくやうに思はれる許りであつた。往來は日光の威力がだん〱と加はつて來て、白衣の朝鮮人の團扇を翳しつゝ通るのも稀になつた。余は松田の二階の暑さを思ひ遣つた。

松屋の門内から二臺の車が出た。車夫は昨日我等を引いた二人であつた。佐々木は帽子も被らずに相變らずニコ〱し乍ら炎天の下を驅けつてゐた。主婦初め、お桂お花、其他の女中も一齊に門前に出て見送りをしてゐた。

即て余の部屋に來たお桂に聞いて見た。

「今立つたお客さんは誰かね。」

「前の方が古田工學博士で後の方が古河さんの高橋さんでございます。」

「何しに來たのだらう。」

「何でも此近處の鑛山を見にいらしつたのださうでございます。四五日うちに又お歸りになる筈でございます。」

「へえゝ何の鑛山？銅かね、鐵かね。」

「金山だとかいふ事でございますよ。」

其日午後向う側の部屋の客は二人共西日をよけて廊下近く座を占めてゐた。其に余が目禮したのが緣となつて二言三言談話を交へた。

「もう長く御逗留ですか。」

「私共はもう一月許りも滯在してゐます。」と襟元の肉の段々になつてゐる肥えた方の男は答へた。立派な八字髭を貯へた四十近い客であつた。片方の小まめな客の方は五十前後で淋しい髭を貯へてゐた。此方は答へなかつた。

「平壤は隨分暑いやうですね。」

「殊に昨日あたりからひどくなりました。貴方は御漫遊ですか。」

「さうです。唯見物に參りました。」

唯これだけの談話であつたが、これがもとになつて渋さんの來る迄に又一度話をする機會があつた。其時は淋しい髭の小男の方もよく話した。

其は吉田工學博士の來て居つたといふ事が話題になつて、鑛山の話に移り、小男は斯う言つた。

「平安南道、黄海道、江原道あたりは全土が鑛脈だと言つてもいゝさうです。今度吉田さんの來たのも黄州の近傍に一つの大きな金鑛がありますのを、總督府が古河さんに遣らす考らしいです。迚も普通の人では手におへない程の大規模なものださうですからね。」

「貴方がたも鑛山に御關係ですか。」

「いゝえ……」と小男は笑ひ消した。

「何にせよ朝鮮政府時代では、外國に金銀などの出るのを惜んだ爲めに採掘を禁じたといふのですからな。清正や行長の踏んだ土地の下が皆金鑛や石炭礦なのだから面白いぢやありませんか。」と肥えた男が快活に話して笑つた。

「山林の方も鐵道沿線などこそ禿山許りですが、もう十里も内地に這入りますと忽ち鬱蒼とした森林に出喰はすのです。伐林事業もこれからですな。」と小男は又言つた。

「朝鮮といふ國は古い國で、もう荒され抜いた滓のやうな國かと思つてゐましたが、するとさういふ方面は全く手がつけてないのですな。古い國で新らしい國とでもいふのですかな。」と余も相槌を打つた。

其から其日は余も妻も晝寝をして、湯に這入つて、稍〻涼しくなつて來たのに蘇つた如く感じつゝあるところへ渋さんが豫定の時間よりも早く來た。向うの部屋の二人の客も我等と同時に晝寝をしたやうであつたが今は二人共目覺めて、これも涼しくなつて來るのに勢を得て、相變らず西日をよけて廊下近くに陣取りつゝ話してゐた。此時這入つて來た渋さんの形容枯槁といふやうな顏がどういふわけだか格別に衰へてゐるやうに余の目に映つた。けれども其油斷のならぬ眼附と一癖ある口許は相變らず人の注意を牽くと見えて、向うの二人の客は迂散らしく見送つた。

急いで晩飯を濟ませて三臺の車を命じた。表に出て見ると、まだ日は高かつたが、其でも昨日宿に著いた時刻よりは稍遅く、もう凌ぎ兼ねる程の日ざしではなかつた。

車は停車場と反對の方に驅けつた。もう殆ど一月も降らぬとの事で石の敷いてない此邊の路は車の轍を深く沒する程の泥がすつかり乾き切つてほこ／＼になつてゐた。三臺の車は其自身の影を隱す程の土埃を立てて驅けつた。

暫らく日本家屋の飛び／＼に建つてゐる處を驅けつた末、朝鮮町に這入つた。これはもう舊市街になるのであらう。朝鮮町は京城で見たのと同じ事に汚かつたが、やがて其町を抜けて他の町に這入ると其處は京城で見たことのない程殷賑な町で人通りも多かつた。

三十一

此殷賑な町は兩側共商鋪が軒を並べ、各鋪の内外は固よりの事、往來の中央迄人立ちがして、何となくどよめきを立つてゐた。殊にめいめいの口から出る言葉は意味は分らぬながらも鋭く響いて、曾て渋さんが平安南北道は多く壯士を産すると言つた言葉が思ひ出された。余を載せて先頭に進んでゐる日本車夫が、彼等を叱りつけて道を開く時、煙管を銜へた儘でじろりと他を見る男の顏は何となく物凄かつた。

縄を編んで拵へたやうな容物の中に四辻りも

瓦通りもの家が積上げてあつて、其奥には足を擴げて踏張り、長い煙管を銜へて横目に人を見てゐる男があるかと思ふと、其の低い鴨居を片手で支へ上げるやうにして片手で煙管を人でもなぐりさうな恰好に握つてゐるものもある。其家屋の前には酒樽があつて、二人許りの男は眼を赤く染めて白い齒をむいて往來を見乍ら談笑してゐるかと思ふと、其隣に金銀細工物とでもいひさうな店があつて二人の職工は、一生懸命に鎚を使つてゐて、其處に兩班らしく絹の上衣を著た男が悠然と其を見てゐた。其時余の車夫が「あぶないッ。」と日本語で叱るやうに言つて烈しく片方に突除けたのは子供を負つた女で、其女はたぢ／＼と殆ど倒れさうになつたのを漸く踏み止まつて口の中でぶつ／＼と小言を言つたが、周圍にゐる多くの朝鮮人は何とも言はなかつた。余は車夫が聲を出して彼等を叱りつける度に何となく氣が退けた。「朝鮮の市」とか「都會の少年」とかいふ言葉が頭に往來して此任俠氣を負ふ平壤の市人が、一旦何事にか憤怒して我等を包圍したら一溜りも無いやうな心持がし、余の後ろに續く二臺の車の音も頼母しくも聞え心強くも聞えたが、先づ何事もなしに進んで行つた。

此時ふと軒並の商舗を見て行く中に倉卒に見たら見落すかと思はれる位の小さい店ではあつたけれども、朝鮮人の店許りの間に突として日本人の店を見出した。はつと思ふ間に車は行き過ぎたので店に並べて賣つてゐたものが何であつたかは詳しく見定める間がなかつたが、矢張り朝鮮人相手に朝鮮の雜貨を賣つてゐるものらしく思はれた。若し表に遊んでゐる子供が日本の下駄を穿き日本の着物を着てゐなかつたら、或は軒並の朝鮮人の店と同樣に見て過ぎたかも知れなかつた。これによく似た光景は京城郊外でも時々見たが、其でも此處のやうに我等の外に一人半人の日本人も往來せぬ町に尚日本人の店のあるのを見たことは此時を以て初めとした。營業不足らしい其親子三人の顔も此場合何となく頼母しく思はれて振り返り乍ら眺め入つた。

暫く行くうちに夫婦と思はるゝ西洋人が、驢馬と小さい朝鮮馬に跨つて我等を追ひ越して行つた。其男の顔も女の顔も一寸見た目には卑しく見え服裝も貧しげに見えた。けれども我等三臺の車さへ目立つて見える此往來に此異人夫婦の馬上姿は市人の眼を峙たしめた。

此町は長い町であつたが、其が盡きると又淋しい町になり、軈て目の前に一つの丘陵が現はれた。丘陵は左に低く長く延びて右の方には稍小高く黄々と擴がつてゐた。車夫は勾配の急になつた道路を喘ぎ喘ぎ込んで十間許りも走り上つたが遂に其處に梶棒を下ろした。

「これがもう牡丹臺ですか。」と余は聞いた。

「さうでございます。牡丹臺の續きでございます。」と答へて洪さんは先に立つた。夏の綢張りの蝙蝠傘が輝いた日光を反射しつゝ、立木の無い赤土の山道を登つて行つた。

我等は暫く緩かな丘を登りつゝあると思ふ間に、一方は何十尺といふやうな高さの崖になつてゐて、其上に立つと一望數里に續く平野を見渡すことが出來た。洪さんは其崖を上から見下ろし乍ら、

「これ御覽なさい。考へのない人間にも困つたものではございませんか。ところ／＼に殘つてゐますやうに、此處は一面に城壁でございまして、立派な石崖が御座いましたのを、西洋人や日本人や兩班などが其石一つを一錢とか二錢とかで買つたものでございますから、チゲどもは皆爭うて此石を盜みました。難攻不落と言はれて居りました城の壁も、石崖が壞れた爲めに

愈々見る影も無いものになりました。」と、然として歎息するやうに言つた。

日の力が弱り始めると、暑さの退くのも僅しげに早い。いかにも古戰場らしい四邊の景色を余は心をとめて見つゝ、崖の上を歩いて丘のだん／＼擴がつてゐる方へ進んで行つた。

ふと見ると行手に當つて、遙か彼方の廢殘の石崖の上に立つて、夕日に小手を翳し乍ら此方を眺めてゐる絣綫を著流した一人の日本人があつた。我等が車を丘の麓に乘り棄ててから此處に來る迄數町の間、日本人は固より朝鮮人にも出逢はなかつた。――崖の下の平野の一部分に模範農場があつて其處に出入してゐる日鮮人を小さく見下ろした許りであつた――其處に突として此一人の日本人を見たことは寧ろ谷の跫音であつた。さうして近よつて見ると、其は洪さんの知人であつた。

「一兩洪らしい歩きぶりをする處が怪らしいと思つた。」と其人は重々しい口を開いて洪さんの瘦せた冷たさうな手を握つた。

「どうして君は此邊にまごついてゐたのだ。」と洪さんも手を振りかへし乍ら馴れ馴れしく言つた。

洪さんは二言三言其人と話したが、

「丁度いゝ男に出逢ひました。」と言つて此人を余等夫婦に紹介した。此人は朝鮮新聞の平壤支局長であつた。「大内君は戰爭通でございますから、私よりも適任者でございます。何卒得意な說明を一つ遣つてくれたまへ。」と洪さんは半分冷かすやうに言つた。支局長は口許に微笑を湛へた許りで明白な答を與へずに先に立つた。

洪さんと支局長とは何か話し合ひ乍ら城壁のあとに沿うて歩いた。其話は主として此邊の民間長連畢に就ての事であるらしかつた。余は妻と共に默つて其あとに從つた。

暫く行つたと思ふ頃支局長は立止つて、右の手で此あたりに珍らしい一つの密林を指して、

「あれが箕子陵です。」と言つた。

取り毀たれた城壁の傍に蔦蔓を留めてゐると思はるゝあたりに出ると一つの門が聳えてゐた。屋根の瓦はところどころ破損して、其其他の木材には蜂の巣のやうに穴が開いてゐた。

「これが普通門です。」と支局長は又說明して自ら其門扉の一つに觸つて見た。支局長の太つた指の先を入れても餘りある程の大きな穴であつた。我等は城門の上を石崖から石階へと迂廻しつゝあるのであるが、此城門の下を潜つて行く道の中にアーチ形の穴があつて、其處を二人の鮮人が何物をか背負つて通りつゝあつた。通り過ぎてから城門を振り返つて見ると「普通門」といふ額が掲げられてあつた。

「どうして此處に清兵は攻めて來たのでせうか。」と余は其時の地形を眺め乍ら聞いて見たが支局長は其には答へずに何ずん／＼と先に進んだ。さつき指さした箕子陵はすぐ足下に見えるやうになつて、老松の叢生した中に可なり大きな殿堂が見られた。洪さんは一切の說明を他に任して自らは知らざるもののやうに、瘦せた長い體を悠々自在に左右に振りつゝ我等の列を離れてとぼとぼと歩いてゐた。傍に暑さの退いた夕陽が日影は淋しく其横顏を照らし、いつも左程に烈しいとは覺えぬ額の皺が光線の工合でいたく目立つて見えた。妻は細顏りに夕日をよけて之も徐々として余について來た。

支局長は又一つ城門の見える、今迄來た丘のうちで一番高いかと思はるゝ處に來て立止つた。余も妻も洪さんも矢張り立止つて其周圍に立つた。主人の眼は例の通り支局長の口を開く前に先づ指した一つの方向に走つた。

「立見枝隊は此方面から來たですな。さうです、あの小さい山を越えて、それから此方に續いて

こちらの間道を突進して來たものらしいです。例の原田重吉の玄武門といふのはすぐ此下になりますが、もう立見枝隊が此城壁に肉薄した時分には、清兵はもう他の各枝隊の襲撃に堪へ兼ねて退却を始め掛けてゐたといふ事です。其で清兵はあの道を逃げたですな。それ、ずッと遠く迄續いてゐるあの一直線の道です。其をあの南方の山に待伏せした日本兵が夾擊したものですから堪らない、彼の有名な白馬隊は殆ど此處で全滅してしまつたので、馬の死骸だけで道を埋め、遠望すると恰も白い布を敷いたやうであつたといふ話です。」と言つて支局長は愉快さうに笑つた。眼前に廣々と開けてゐる景は恰もパノラマを見る如く、當時彼處や此處に其白馬隊や立見枝隊が描かれてないだけの相違であつた。其白馬隊の全滅したといふ一直線の長い道には眼界の及ぶ限り一人の人影を認めなかつた。

「實に立派な古戰場ですな。」と曾て關ケ原や桶狭間などの存外小規模なのに失望した事のある余は、此雄大なる景に打たれて思はず嘆賞した。

「私もさう思ひます。古戰場と申しましても實際行つて見ると失望するのが多いものでございますが、此處は眞に古戰場らしい心持のするところでございます。」と今迄默つてゐた澁さんも口を切つた。

「澁さんは西洋の古戰場も澤山御覽でしたらう。」

「西洋も見ませんが、ウヰートルローなどは一寸見に參りました。詰まらんところでございます。」と事もなげに言つた。

「其からあれが牡丹臺です。」と支局長は前面に峙つてゐる丘阜形の尖端を指した。

「其では此邊は牡丹臺のうちに這入らないのですか。」と余は自分の立つてゐる地點を振り返り乍ら聞いた。

「さうです。此邊は乙密臺といつてゐます。あそこ迄行つて見ませう。」と支局長は更に先に立つて行つた。先の場處から四五間も進んだと思ふと一つの城門に達して、其處に立つと北西の展望は稍ゝ缺ける代りに東方の景は新たに眼前に開けた。樓門の彈痕は彼の七星門に比べて尙ほ遙かに甚だしく、屋根の尖角なども慘酷に損壞してゐた。

「あの水は？」と余は初めて前面に展開された汪洋たる流れを見て驚いて聞いた。

「あれが大同江です。」と支局長は答へた。

「まあ行つていゝ景色なんでせう。」と妻は蝙蝠傘を疊んで其突き當りの彈痕だらけの樓門の柱に片手を掛けて、殆ど足下を流れてゐるともいふ可き幅の廣い水を見下ろした。夕日影はもう薄い明るい色を留めてゐる許りで暑さは全く跡を絶ち、冷たい風が乙密臺上の四人に吹いた。

「絶景ですな。」と余はもう古戰場といふ事などは忘れてしまつて、天の成せる自然の勝地として此水と此丘陵とを併せ考へた。

「あの建物は何でせう。」と妻は牡丹臺下の木の間がくれに見える古い建物を指した。

「あれは永明寺といふ古い寺で、あの大同江に臨んだところに稍ゝ離れてある一つの建物は浮碧樓と言つてよく文人墨客の遊びに來るところです。あそこに下りて見ませう。」と支局長は又先に立つた。澁さんは又默々と從つて我等と一緒に歩いてゐるといふ許りであつた。

其處をだらくと降りると、石垣の中に又一つのアーチ形の通路があつた。

「これが例の玄武門です。小さい門です。」と言つて支局長は笑つた。

「まあ、あの名高い玄武門といふのがこれなんですか。」と妻は蝙蝠傘を上げて高さをはかるやうにした。蝙蝠傘の柄の尖の金具はアーチ形の

天井にすぐ屆いた。余は日清戰爭當時、歌舞伎座に於て先代菊五郎が原田重吉に扮した事があるのを思ひ出した。其時大勢並んでゐる同じやうな兵隊の中から一人つか／＼と隊長の前に進んで行つて「中隊長殿、私が誓つて此門を開けます。私の一身は顧るところではありませぬ。固より國家に捧げた體でありますから。」といふものがあると見ると、其が菊五郎の原田重吉であつたので觀客は小屋も破れん許りに拍手喝采した。其は忘れもせん妻と結婚當時の事であつて、妻も大きな髷を結つて一緒に土間に坐つたのであつたが、常に小銃が豆を煎るやうに鳴つてゐるので、妻は、「マア怖いこと。」と私に余に寄り添ふやうにしたこともあつた。其時舞臺の下手に長谷川の大道具が拵へた玄武門は斯んな小さい門ではなかつた。と余は計らずも當時の事を回想して、彼の酢つぱいやうな物の爛熟したやうな香のする芝居の中の空氣を心に描いてゐると、妻は、

「大變な樂書ですわね。」と其邊を見廻した。なる程多くの內地人の拙い文字で天井にも兩側にも殆ど空地が無い程めい／＼の名が書かれてあつて、中には代議士の名もあり、天下無敵日北野雷風」といふやうな文字も見えた。

玄武門をくゞつて暫くだら／＼と坂路を下ると牡丹臺を後ろに乙密臺を右手に見上げたところに一つの廣い臺地に出る。其處に先に乙密臺から見下ろした永明寺や浮碧樓などの建物はあるのである。

浮碧樓といふ名は斷岸數丈の上に大同江の碧水を踏まへて浮めるが如く立つて居るといふ意であらう。樓上には浮碧樓といふ大字の額と、其景勝を說明した漢文の額とが掛つてゐたが今其額の後ろから一つの大きな蝙蝠が出て人を驚かした上に、何か小さいものを地上に落して羽音高く飛んだ。

「氣をお附けにならんと、南京蟲が取附きますよ。」と言つて支局長は微笑した。

「蝙蝠に南京蟲が居りますか。」

「居りますとも。此浮碧樓では先刻も言つた通り韓人がよく酒宴などを催すので其殘肴にありつく蝙蝠に自然南京蟲が移つたものらしいです。」

妻は韓人といふ言葉を聞く度に氣の毒さうに洪さんを見た。洪さんは知らぬ風をして大同江を見下ろしてゐた。

「まあ彼處に大きな島がありますわね。」と妻は洪さんに近づいて一緒に大同江を見下ろした。

「さうでございます。あれが綾羅島と申しまして名高い中洲でございます。昔此川上數里の所にありましたのが家も畑も其儘に、一夜の間に此處に流れて來たと申す傳說がございます。」

と洪さんは答へた。家といふのは數へる程ほかなく一面に平板な畑が見渡されたが、其等がいかにも土地と共に川上から流れて來たといふのに相應しいやうな靜かな太古の趣を具へてゐた。大同江の水は、此處から十分に見分けのつかぬ邊の川上から二つに分れて此綾羅島をとり卷いて流れ、此處より數町下の處で合流して汪洋として煙るが如く、南下してゐる。此方の岸が斷岸絕壁を爲してゐるのに對して水を隔てた彼方の岸は綾羅島と同じ高さの平地が數里に續いて、此變化を極めた江山の果が遂に靜かな長い裾を、遠くに見える低い一帶の山脈迄延ばせて居る。

「何だか此邊は妙に臭いのね。」と妻は石疊になつてゐる樓上を見廻した。余も最前から其臭氣を感ぜぬではなかつたが唯景色に眼を奪はれてゐて其を口にする遑を見出さなかつたのである。

「さうだ、何だか臭いね。」と初めて其邊を顧みた。

「酒の零れた匂ひでございます。」と待設けなかつた洪さんが其時突然横合から口を出した。見ると洪さんの顔には憧れるやうな色が動いてゐた。歌舞伎座の棧敷の敷物の酒に染みて腐つた匂ひに憧憬する余は此洪さんの心持に直ちに同感せずにはゐられなかつた。けれども鼻になれぬ此臭氣は幾度思ひ直しても矢張り不愉快な匂ひであつた。一羽の蝙蝠が今度は樓の天井から飛び出して大同江の上を渡り遠く綾羅島の上を飛んだ。三人は默つて其行方を見守つた。

「少しお休みになりませんか。」と後ろから支局長が呼んだ。

「お掛けなすつて下さい。」と續いて女の聲が聞えた。見ると此處から數間離れたところに一つの掛茶屋があつて、其處に支局長はもう腰を掛けてゐた。三人は終に其方に歩を運んだ。

小さい板葺の小店にはビール、サイダー、正宗、鑵詰類が並べてあり、其前の葭簀天井には例の赤や青の手拭のやうなものがぶら下つてゐた。何方を見ても日本で見ることの出來ぬ雄大な江山の中にチョンボリとこの日本風の掛茶屋の點出されたことも面白く思はれたが、其に我等を出迎へてゐた其三十餘りの女の美しく垢拔けのしてゐたことも亦目を牽いた。

「どうか、お掛けなすつて下さい。」と女は又愛嬌よく腰を屈めた。其白い齒の幽かに見えた時の顔は、暮の遲い夏の日をいつの間にか一刷毛掃いたやうな夕影の中に目立つて見えた。

支局長は此茶店の主婦とは古い知り合ひらしく何かと世間話のやうなことをし乍ら我等にビールをすゝめた。

「貴女はいつから此處に店を出してゐるんです。」と余は言葉を插んで聞いた。女は其郭然した曇りのない目を余の方に向けて、

「足掛け四年になります。」

「冬も此處にゐるのですか。」と其純粹の日本風の板屋であつて温突らしいものも見えぬ住居の冬の寒さを思ひ遣つた。

「さうでございます。最初の冬は耐らなく寒いやうに思ひましたが、二年目からは左程にも思ひませんでした。」と女は答へた。

「大同江も氷つてしまふといふ事だから此邊の土地なども凍つてしまふでせう。」

「其はもう土地の下三四尺から凍つてしまひます。」

「其頃は餘り客もないでせうね。」

「偶にぽつり／＼とある位のものでございますが冬中は先づ休みでございます。」

「此邊には他に人家らしいものも見えぬが、夜分など隨分淋しいでせう。」

「其も馴れますと何でもございません。」

「泥坊などは來ないですか。」

「一昨年の冬一度來た許りです。其も泥坊といふ程のものでもございませんでしたが……」と言つて女は板屋の奥に坐つて何かをしてゐる眼鏡を掛けた髯ムシャの男を振返つて見て笑つた。彼の美しい白い齒がさつと他の目に映つた。

「へえゝ、其はまだ聞かなかつたが、そんな事があるのかね。」と支局長も熱心に女の顔を見た。妻も洪さんも女の顔を見詰めたけれども、女は其儘口を噤んで話さなかつた。

「どんな風な泥坊であつたのです。無論朝鮮人でせうね。」

「さうでした。」と女は止むを得ぬやうに答へた。

「何人でした。」

「三人でした。も一人居つたやうでもありますが、私の眼にとまつたのは三人でした。」

「其で別に怪我はしなかつたですか。」

一たいした怪我もしなかつたですが、其時噛みつかれたので……」と言ひながら彼女は右の手の小指を見せた。其は關節のところが曲つた儘になつてゐて此郭然した眼、白い歯の女には相當しからぬ醜いものとなつてゐた。

「まあ。」と今迄默つて聞いてゐた妻は驚いたやうに嘆聲を洩らした。夕影は更に一刷毛々々と加はつて來るやうに何となく四邊がもの淋しく見えた。けれども眼前に展開してゐる大同江の水の上にはまだ明るい夏の日影が漲つてゐた。

此處迄話して來た女はもう此儘默つてしまふことは出來ぬと觀念したらしく遂に次の如く、一部始終を話した。

「私が氣がついたのは、もう宅が一人の賊に組み敷かれてゐた時なのですが、何でも其迄にも大分宅と賊とは爭つたらしいのです。」と言つて又板屋の方を顧みたが、髯ムシャの主人は彼の妻の話は聞えぬもののやうに知らぬ風をして下を向き、初めからの仕事を續けてゐた。「何にせよ賊は多勢だし宅は一人であつたものですから……何でも宅がふと眼を覺まして見ると一人の賊が立つてゐたので、宅はいきなり跳ね起きて其賊を投げたところが、後ろから別の賊が抱きついて其賊と上になり下になりしてゐる所へ前の賊も起きて來て手傳つたので終に組み敷かれたのですねえ。私が眼が覺めたのは其時でした。ラムプが消えて眞暗であつたものですから、宅がどうしてゐるか、賊が幾人だか其も判らず、唯ふと見ますと這入口に一人大きな男の立つてゐるのが薄明りに見えたので行きなり其處にあつた鑵詰を取つて投げつけますと、其男はパタ〳〵と逃げてしまつたやうでした。其時何處やらで呻くやうな聲がするので初めて氣が附き聲を掛けると宅が返事を致しました。上か下かと聞くと、下だといひます。其處で私は前後も忘れて其上になつてゐる賊に後ろから組附きますと、そのとき此指に噛み附かれました。さうすると又一人の賊が私を壁際に投げつけ、もう向うも怖くなつたのでせう、二人とも一緒に表に飛出して逃げてしまひました。其から漸くマッチを探し出してランプを點して見ますと、宅は貴方額から手から血だらけでございませう、賊は刀を持つてゐたのでございます。其から私も氣が附いて見ますと此小指が食ひ切られたやうになつてゐました。」と話し終つて流石に其時の心持を思ひ出したやうに呼吸をはずませてゐた。

「其はどうも大變なことだつたのね。其で御主人の怪我はどうであつた。ひどい事はなかつたかね。」

「十日餘りに癒つてしまひました。初め賊が一人か大勢か其を見極めずに行きなり一人を投げたのが誤りだつた、初めから三人もゐたと知つたら遣りやうがあつたと言つて宅は殘念がりますけれども、まあたいした怪我が無かつたのが仕合せでございます。」と女は又板屋の方を顧みた。

「今初めて聞いたが、危い事であつたですね。」と支局長も板屋の方を向いて話し掛けた。

「へい。」と男は初めて乙樣さうに顏を上げて眼鏡を光らせたが、髯にかくれた口に微笑を見せて又俯向いて仕事にかゝつた。髯の立派な割に鼻が低く額が狹く風采の上らぬ顏であつた。

「其後はもうさういふ事はありませんでしたか。」

「一度來て見て何も取るもののなかつたのに向うも吃驚したのでございませう、もう其からは一度も參りません。」と女は晴れやかに笑つた。

妻は深く此話に感動したらしく、

「まあよく初め此處に茶店を出すことをお思ひ立ちになりましたのね。」

「宅が斯ういふ所が好きなものですから、其に國を出る時、どんなことでもする覺悟で參つたものですから。」
「お國は何方でいらつしやいます。」
「大分縣でございます。」
「お子さんはおありにならないのですか。」
「ございませんのですよ。」
「まあ其では一層お淋しうございますわね。と熟々同情したやうに言つたが、「でも、こんないゝ景色を貴女方で占領していらつしやるやうなものですわね。」と又慰め顏にも言つた。夕暮の空に黑く峙つてゐる牡丹臺の巓から白い服を着た一人の韓人が此方を指して降りて來つゝあつた。澁さんは我等の會話には關係無き人のやうに其牡丹臺を見上げたり、大同江を俯瞰したりしつゝ、彼の悲慘な口許を緊く閉ぢてゐた。
女が向うに行つた時、余は支局長に聞いた。
「あの女の名は何といひます。」
「まだ實は名を聞いたことがありません、牡丹臺の茶店の女で通つてゐるものですから。」と支局長は微笑し乍ら答へて又此方に來た女に、「貴女は何とか言つたな、名は？」
「牧でございます。」と女は笑ひ乍ら躊躇もせずに答へた。
「お牧の茶屋か。」と余は此名を心の底に牢記するやうに口のうちで繰り返した。

三十二

一艘の船は今四人を乘せて大同江を下りつゝある。船頭は頭を五分刈にした若い朝鮮人であつたが、日本人と少しも變らぬ調子で日本語を話した。
「今は上潮のやうだね。」と支局長は言つた。
「さうです。」と船頭は答へた。
「上潮といふのは？」と余は不審に思ひ乍ら聞いた。「海がそんなに近いのですか。」
「海迄は七八里もありますが、此邊迄潮の滿干が影響します。」と支局長は答へた。上潮に逆つて漕ぎ下る船足の遲いことが此場合又なつかしいことの一つであつた。
船が綾羅島を離れうとする頃入相の鐘が水上に響き渡つた。ふり顧つて見ると乙密臺と牡丹臺との二尖峰は薄明るい大空に聳えてゐて、其兩裾の流れ合つた處に大地に埋まるやうに古い屋根を見せてゐるのは永明寺、其から離れて大同江に臨んだ高岸の上に夕影の中に浮み出た如く突立つてゐるのは浮碧樓であつた。
「あの休んだ茶店は？」と妻は心當てに見た。
「お牧の茶屋か。」と余は心の中で獨語した。
「あゝ、あれがさうですわね。」と妻は指した。浮碧樓の左手に當つて凡て雄大な蒼古な黑ずんだ色の中に白々とした輕げなものがチョンボリと目に映ずるのは慥かに其に相違なかつた。唯景色として見るのには或は其は目障りとなるであらうが、其中に賊と格鬪した明眸皓齒の一婦人がゐて、無人島に國旗を立てた人のやうに、淋しく勝ち誇つてゐることを思ふと誠に棄て難い眺めであつた。
暮鐘の渡る水の幅は下るに從つて廣くなつて來た。さうしていつともなく白い靄が遠く我等の行手を立て罩めた。
「あの船は何をしてゐるのですか。」と衣冠束帶の人が、お三輪の持つてゐるやうな絲卷を持つて絲を水中に下ろしてゐるのを見て聞いた。
「釣りをしてゐるのでございます。」と澁さんは口を開いた。
「さうだらうとは思つたのですが、いかにも悠長なものですな。眞逆漁師ではないのでせうな。」
「さうでございます。あれ等は樂みにやつてゐるのでございますが、中には漁師もございま

す。

我等の船は其釣船の横を通つた。釣人は長い袖をまくるでもなく、靜かに其絲巻を持つてゐた。魚が彼の針を引いた時彼は如何に其絲巻を取扱ふかを見ようと思つたが無益であつた。綸は靜かに水に落ちてゐる許りで水底の魚は彼を驚かさうともしなかつた。

斯様な船は他にも尚幾艘もあつたが、衣冠束帶の人を乘せてゐることは皆前の船に變らなかつた。大同江の廣い水は恰も竹の散葉を浮べたやうに輕々と是等の船を其江心に浮べてゐるのであつた。

右岸は彼の乙密臺の處から續いてゐる廢殘の城壁が尚ほ江に添うて下り、其下は切岸を爲して其處の岩壁に種々の文字が刻んであつた。其中に一際目立つて大きな文字は「玉流屏」の三字であつて、其處には我等の乘つて居るやうな輕舟が二三艘も繋がれ兩班らしいものが四五人宛分乘して、高聲に歌をうたつてゐた。皆赤く顏を染めて我等を見ると一際聲を張り上げて歌つた。

「あの歌は何といふ歌ですか。」と余は渋さんに聞いた。

「斯ういふ意味の歌でございますよ。」と渋さんは譯してくれた。

「上
神様にお願をかけて商賣に行つた。
中
小さな甕がだん／＼大きくなつた。
下
これは神様のおかげであらう。」

櫓をこぎ乍ら默つて渋さんの飜譯を聞いてゐた船頭は此時「ハ、、、、。」と笑つて、

「欲ばつた歌だ。」と恰も自分の國の歌を輕蔑するやうな調子で言つた。其言葉は渋さんのよりも調子のいゝ日本語であつた。

行手の白い靄はだん／＼と濃くなる上に、右岸に近く下る我等の船からは左岸の方を見ても薄い靄が掛つて、さなきだに廣い川幅は前にも倍して廣く、前途は茫邈として大海原のやうに見えた。

右岸の高い岸は城壁と共に少しづつ低くなつて來て、其上にポツ／＼と朝鮮人の家屋があつた。さうして白衣の朝鮮婦人は崖の細道を下りて水際に蹲踞んで洗濯をしてゐた。衣を石の上に置いて棒を持つた右の手を上げて其を打つ音が手に取るやうに聞えた。だん／＼人家が殖えるに從つて此婦人も亦數を增し、或る場處には十四五人も列を作つて、一齊に衣を搗つてゐた。

「あの靄の中に見えてゐる高い建物は何ですか。」と余は心を躍らせて聞いた。恰も蜃氣樓を見るやうな古びた丹碧の高樓が靄の中から現はれ始めたのである。

「あの二つ見える、高い方が大同門、低い方が錬光亭です。昔小西行長が明の將李如松と和を講じたのがあの錬光亭であつたといふやうな傳説もあります。」と言つて支局長はいつもの微笑を洩した。

右岸の人家はだん／＼殖えて行く許りか、いつの間にか城壁はもう無くなつて川岸に廣い平地が帶のやうに出來、其處に澤山の貨物が山の如く積まれ、和船や韓船や支那の戎克などがもやつてゐた。

「これは日露戰爭當時でしたが、城壁を崩して岸を埋め、貨物の陸揚げに便利なやうにしたのでした。御覽なさい、此邊の建物は皆立派なものでせう。韓人で二三十萬の財産のある商賣人は澤山居ります。」と支局長は説明した。成程見ると大厦高樓が櫛比して岸を往來する人も活氣があり、碼頭等の荷物の揚卸しの掛

聲も勇ましい。今日車上から見た彼の都邑の市の事を思ひ出させて、此古都の富み榮えて居る樣が我事のやうに懷しく思はれた。

「平壌は景色のいゝ點が京都に似てゐるといふ事を聞いてゐたが、此大同江を有し商賣の盛なところを見ると寧ろ大阪といふ方が適當なやうですね。詰まり京都と大阪とを併せて而かも規模を擴大したといふやうなところですな。」と余は激賞した。

「さうです。」と支局長は贊成した。洪さんは口の端に大きな皺をよせ一冷やかな微笑を湛へてゐた、

「どこに着けます。」と興味が無ささうに默つて我等の話を聞いてゐた船頭は、突然斯う言つて聞いた。

「税關の横に。」と支局長は答へた。

「はい。よろしい。」と船頭は又勇ましく漕ぎ出した。其調子がどうしても純粹の日本人としか思へなかつた。唯日本の船頭ならば退屈の餘りに鼻唄でも謠ふであらうと思ふ所を此船頭は默つて漕いだ。

「お前は日本に居た事があるのかい。」

「はい。福岡や、廣島や、高松に居た事がありますし東京にも一月許り居りました。」

「さうだらう。話が全く日本人と同じだ。」と余は讃めて遣つた。

「若いものはすぐに覺えてしまひます。其に小さい時分から覺えたのはアクセントが正しうございます。」と洪さんは傍から口を出した。

さきに靄の中に現はれた鍊光亭はいつの間にかもう右手に聳えて、近よつて見ると遠望した時想像した程の古色は認められないにしても大同江畔に缺くことの出來ぬ趣味ある建造物として峙ち「第一江山」といふ扁額の金文字が人の目を射た。

「おや〳〵、あの古びた建物にガラス障子が嵌めてあるのは變ですね。」と余は驚いて目を瞠つた。洪さんの目も怪しく光つたが何とも言はなかつた。

「今は郵便局長の官舍になつてゐるのです。」と支局長は答へた。

「此鍊光亭がですか。」

「さうです。すぐ此鍊光亭に接して建てられたあの木造の粗末な洋館が郵便局ですからな。」と支局長は笑つた。

余は其ガラス障子をはめて白い窓掛けを掛けて此鍊光亭の中に住まつてゐる郵便局長や其家族を考へずにはゐられなかつた。彼等は嗜き好んで此處に住まつてゐるのであらうか、恐らくさういふ譯でもあるまい。軍隊が進んで或城市を占領した時に大きな公の建物は取敢へず其舍營に當てられる。察するに日清日露兩戰時の慌しい面影が、今尚ほ改變する機會を見出さずに今日に至つたものであつて、火事の立退人を收容した寺の本堂に襤褸の下つてゐるのと同格と考へれば寧ろ其處に一種の哀れを見出さねばならなかつた。唯願はくは一日も早く郵便局長をして住宅らしき住宅に住まはしめ、同時に鍊光亭をして其本來の面目を保たしめ度いものである。斯く考へつゝある耳元に、

「ガラス障子の問題でつい忘れてゐたが……」と支局長は船頭が鍊光亭の下を過ぎ去らうとした時に俄に亭下の崖の中腹に在る祠のやうなものを指して斯う言つた。「あれが大同江祠と言つてゐて、妓生を祭つた祠だといふことです。尤も同じやうな傳說が晉州にもあるとかいふことで、何方が本家だか判らない。兎に角其物語といふのは斯ういふことです。矢張り文祿の役の時行長の部將の某が其思ひものの桂月香といふ妓生と此鍊光亭に在つて江水を眺めてゐた時、妓生は此武將を殺すことが邦家の讎を報ずる一端だと覺悟し、武將の心を許した隙

を見て崖下に突落し、自分も亦身を投じて死んだ、時人が其忠節を偉んで祠として祭つた、と斯ういふのであつたね、洪さん。」

「さういふ傳說もあるが、其に似たことは文祿の役當時に澤山ある。此大同江祠といふのは何か他のものを祭つてゐたのに後人がさういふ口碑をくつつけたものだらう。」と洪さんは重きを置かぬやうな口吻であつた。余は事實と否とを問はず彼の「第一江山」の欄下に斯る物語の小祠のあることを寧ろ滿足に思つた。

大同門は錬光亭よりも一層高く峙つて雄姿を見せてゐた。其下を過ぎると右岸の人家は漸くにして其屋根の形を變へ、棟にカーブを見ることが少なくなつた。これは朝鮮町が日本町に移り變つたことを示すのであつて、此邊はもう新市街であらねばならなかつた。支局長は靄の中に遙に水を隔てた左岸を指して、

「あそこが船橋里で大島旅團が牽制運動を試むる爲め幾度も強襲を試みて死傷の多かつたところです。」と言つた。數條の楊柳が煙るが如く暮靄の中に隱見して柔かい平和な別個の天地を爲して居た。

「あの楊柳の間に幽かに見えるのが記念碑です。お見えになりますか。」と支局長は念を推した。成程さう言はれゝば記念碑らしいものが見える。一隻の韓船は今其楊柳の岸を離れて二三の人を乘せ此方に漕ぎ來りつゝある。これ亦平和村の光景である。

「あそこは渡場になつてゐるのですか。」

「さうです。」と支局長は答へた。

我等の船も、其渡場の片方の船著場となつて居る稅關官舍の横に著いた。船を捨てて江岸に立つた時、彼の韓人の船頭は、

「私は九曜館にゐるのです。電話がありますからいつでも御用の時は電話を掛けて下さい。私の名ですか岩吉といひます。」と言つた。此日本語の巧みた韓人の岩吉といふ名は彼の時々大きな聲で「はーい。」と返辭をするほか日本語を話すことが出來ぬ松屋の韓人の佐々木といふ名程をかしくは思はなかつた。

三十三

支局長とは稅關の裏で別れ洪さんと三人夕闇の中を宿の方に歸り乍ら斯んな話をした。

「今日は殆ど平壤の周圍を一周したのですな。」

「其のみではございません。舊市街の商賣の盛な町と船著場の荷の揚げ卸しを御覽になりましたから、もうこれで平壤のゼネラル、アイディアを御得になつた譯でございます。もう此上は有名な妓生學校とサンペー位を御覽になれば十分でございませう。」と洪さんは笑ひもせずに言つた。

「京城にもあつたぢやありませんか。」

「京城にもございましたけれども妓生の本場は平壤でございますから。」

「さうすると風景の點許りでなく美人といふ點から言つても京都ですね。」

「京都でございますとも、其上舊都といふ點から申しましても。」

妻は默つて二人の話を聞き乍ら跟いて來た。

洪さんは氣が著いたやうに、

「奥さん、定めてお疲れでございましたでせう。城跡だけでもなか／＼の道程でございましたから。」

「いゝえ、左程に草臥れたやうにも思ひません。今日は本當にいゝ見物を致しました。京城で金さんの奥さんにいろんなところに御案內して戴きましたけれども、今日のやうな心持のいゝ事はございませんでした。私あのお牧さんとかいふ方が忘れられませんわ。」

「全くあの女は變つてゐるね。あのはつきりした眼と白い歯とはたしかに深い印象を殘す。お

牧の茶屋は名もいゝな。」

渋さんは薄暗の中に何事をか考へ出さうとする人のやうに暫く默つてゐたが、

「內地にゐました時に、『向う横町の』『何とかいふ鞠唄をよく聞いたやうに覺えて居りますが、其中にあるのが『お牧の茶屋』ではございませんでしたか。」

妻は笑ひ乍ら、

「其はお仙の茶屋でございませう。」

「お仙の茶屋でございましたか。」と渋さんも笑つた。

「さう〳〵そんな鞠唄があるね。どうやらいふのだね。」

「『向う横町のお稲荷さんへ』といふあの唄でせう。」

「其から先は？」

「厭ですねえ。『一錢あげて、ざつと拜んでお仙の茶屋へ』でせう。」

「其から？」

「『腰を掛けたら澁茶を出して』でせう。もう私、厭、馬鹿らしい。」と妻は怒つたやうに言つた。

渋さんはなつかしさうに其を聞いてゐたが、

「少し思ひ出しました。『澁茶よこ〳〵横目に見たらば』」

其調子がをかしいのを余も妻も笑はずに耐へてゐたが、

「それからどうやらでございました。」と渋さんは眞面目だ。

「『米の團子か土の團子か』でせう。」

「そんなに切れ〴〵に言はずに言つて見たらいいだらう。」

「でも馬鹿らしいわ。」と言ひ憎さうにしながら、「『おだんご、だんご。其だんごを犬に遣らうか。猫にやらうか。たうとうとんびがさらアつてツた』でせう。」と言つて妻は薄暗の中に腰を屆めて笑つた。

「其鞠唄を聞きますと私の永く下宿して居りました芝區霞月町の裏路次を思ひ出します。」と言つて渋さんは疎に家の建つてゐる此殺風景な新開町を眺めた。

「さうですね。鉢卷をした子守子などがよくさういふ鞠唄を謠つてゐますね。」と余も夏の夕の下町の光景を思ひ浮べた。

お仙の茶屋が話題になつて三人は足の草臥を忘れて歩いてゐると、ふとした一軒のうちに澤山の朝鮮人が集まつて、一人の日本人が說教のやうなものをしてゐた。軒燈を見ると『組合教會』といふ四字がガラスの表に赤く書かれてあつた。聞くともなく聞くと斯んな言葉が耳に入る。「そこで社の前に行くと鈴が下つて居る。鈴といふと皆樣御存知でせう、馬の此處に下つてゐる……」と牧師らしい人は自分の喉のところを示した。すると座中の鮮人中に飲込めたらしく首を動かすものと更に合點の行かぬらしく牧師の顏を見詰めてゐるものとがあつた。耶蘇の說教に神社の前の鈴はをかしいと思つてよく見ると、牧師の手に持つてゐるのは尋常小學讀本といふ類のものらしく、彼は說教をしてゐるのでなくて日本語を朝鮮人に教へてゐるのであつた。余は自分が田舍の中學校にゐた頃初めて一人の亞米利加人の宣教師が英語の教師として傭はれ、「ホワット、イズ、ヂス。」と指を一本上げ、「ザット、イズ、フインガー。」と生徒に答へさせなどして、少しも日本語を知らぬ彼が苦心慘憺してコンバーセーションを生徒に教へたことを覺えてゐる。さうして僅に簡單な會話が出來始めてから級中の有志を自宅に集め新約聖書の講義を始めた。余も其一人として列席して講義を聽いてゐると、彼は其聖書の文句を一讀して、其から熱心に講義をはじめる。どんな事

を言つたか覺えて居らぬが矢張り此牧師のやうに、神社の前の鈴を馬の喉に在るものとして說明して聞かせたりしたのであらうと思ふ。さうして余等が不得要領なやうな顏をして居ると、
「アンダースタンド？」と彼は力のある聲で言つてヂッと皆の顏を見る。皆餘り判らぬのを、判らぬといふのも氣の毒な樣に思つてよい加減に首を振つて置くと、「怪しい！」といふやうな表情をしてニヤリと笑ひ、卽て眞面目な顏に戻つて大きなため息をつき、氣乘りのせぬ調子で又次の節に取り掛つた事などを思ひ出した。此牧師も少しも朝鮮語を知らぬのか、地方訛りの多い日本語で諄々として講釋してゐた。
「まあ、貴方がた。」と此時突然後ろから聲を掛けたものがあるので驚いて振り返つて見ると、其は紛ふ方なきお筆であつた。
「いつ來た。」と余は驚くより外はなかつた。
「今日著きましたの。」
「一人で？」
お筆は笑つてゐて答へなかつた。
「宿は？」
「すぐ其處の花屋です。貴方のお宿は？」
「松屋にゐる。」
「洪さんも御一緒？」
「いゝえ私は……」と最前から微笑を含んでお筆を見てゐた洪さんは首を左右に振つた。
「奥さん、平壤つて、淋しい厭な處ですわね。まあ此往來はどうでせう。まるで灰！」
「本當ねえ。けれども牡丹臺から大同江の方はそりやいゝ景色ですよ。」
「今日そこへいらしつたの。」
「えゝ。」
「お伴すればよかつたわねえ。」
突然表で斯んな話が始まつたので牧師の引つゞいた講釋を聞き乍らも朝鮮人等は時々此方を見た。
「まあ明日でも宿に來たまへ。」と余は牧師の迷惑を思うて其前を立去らうとした。
「まあ其邊まで御一緒に行くわ。」とお筆は妻の傍により添うて步いた。

三十四

其翌日の日影が傾いてから又支局長の案内の下に我等夫婦とお筆とは船橋里を見物に出掛けた。洪さんは差支があつて來なかつた。
お筆は昨夜も松屋の前迄來て、
「今晩は此處で失禮しますわ。」と言つて其儘歸り、今日も電話で船橋里見物の話をした時、
「お前の宿迄寄つて一緒に行かう。」と言つたら、
「表で待つてるわ。」と笑つて、實際支局長等と花屋の前を通り掛つた時、チャンと表に待つてゐた。
稅關横に出ると例の大同江の廣い流が眼前に現はれて船橋里の楊柳が對岸に靜まり返つてゐた。昨晩は暮色が大分迫つて來た時分であつたので、唯廣々としたなつかしい景色に眺められたが、今日は一々其邊の光景が明かに見られた。稅關長の官舍は粗末な木造の洋館であつたが一部分板をはがして修繕をして居るのが汚く見えた。其横をだら〳〵と川に降りると、其處の砂原に二三の朝鮮人がうろ〳〵してゐた。其は皆船頭らしく、支局長と談判の下に其中の一人が其處に繫いであつた一つの韓船に乘つて面白くそりくり返つてゐる其舳を砂の上に乘り上げる樣にしたので我等四人は乘り移つた。
支局長の朝鮮語は叱咤するやうな聲でよく「タンシン」といふ言葉を使ふのが耳にとまつた。其他「オプソ」とか「チョッソ」とかいふ言葉も屢々使はれた。察するところ其語數は極めて少數かと思はれたが、其で船頭には旨く意味が

通ずるらしく命令は直ちに行はれた。

船頭は日本の艪と櫂との合の子のやうなものを艫の方に雨傘を擴げて突立つた儘で巧みに操るのであつた。船頭の顔は眼の釣り上つた鼻の高い堂々たる顔で其長大な體を稍ゝ高くなつてゐる艫に突立てた處は立派であつた。殊に其頭の上の烏帽子は品位を添へた。

大同江の水は昨日も今日も變りはなく汪洋として流れてゐた。船が中流に出た頃振り返つて見ると、稅關官舍は其板を外した汚いあとはもう目に入らず、唯小さい建物として眺められ、上流に當つて例の大同門、鍊光亭の大きな屋根が群小を壓して江水の上に從えてゐた。

「どうだい、景色だらう。」と余はお筆に言つた。

「いゝ景色だわ。」とお筆は答へた。けれどもお筆の心は此好風景の爲めに動かされたやうには見えなかつた。余は心の中で矢張り深川とかいふ彼の待合の蠟燭の灯影の方が彼には意味深く映るのであらうとをかしく思つた。其に反して妻は、「本當にいゝ景色ですわね。」と同じ言葉を何度となく繰り返して心から此江山の眺めに憧れてゐるらしく、殊に上流の牡丹臺下の彼のお牧の茶屋に屢ゝ其心は通ふものゝ如く見えた。

「斯んな淋しい景色の處よりも昨日洪さんの言つたサンペーにでも案内して貰つた方がお前は面白かつたらう。」と余は笑ひ乍ら言つた。お筆は、

「全くだわ。」と言つて澄ましてゐた。

「それでは歸りに御案内せうかな。」と支局長はお筆の美しいあばずれた顔を珍らしげに見乍ら微笑して言つた。

向うから我等の乘つてゐるのと同じやうな一隻の船が、同しやうな船頭に操られ乍ら此方に來て、我等の船と摩れ違はうとした。見ると向うの船には頭を散髮にして鳥打帽を被つてゐる兩班の子弟らしいものが唯一人乘つてゐた。支局長は無造作に聲を掛けて例の如く「タンシン……」何とか言つてものを尋ねてゐるやうに見えたが、其青年は青白い美しい顔を此方に向けて二三言答へた許りで、すぐ脇を向いてしまつた。二隻の船は互に浪を切つて別れた。

「夜學校に日本語の稽古に行くんださうです。」と支局長は言つた。余は昨夜の組合教會の光景を思ひ出した。

「夜學校といふのは組合教會ですか。」

「あそこでも遣つてゐました。まだ他にも澤山あります。」と支局長は答へた。

船は漸く對岸に著いて、磧の稍ゝ江に突出して岬の如きものを爲してゐる處に例のそつくり返つてゐる長い舳を乘り上げるやうにした。

四人はいつか楊柳の下に立つた。此楊柳は對岸からも江の上下からも、いつも船橋里の目標の如く眺められたところのもので、同時に其柔かいまん丸こい木の形が常に靜かな穩かな感じを人に與へた。今親しく其木の下に立つても此心持に變るところはなかつた。

「おや。」とお筆は驚いたやうにして後ろを顧みた。見ると矢張り楊柳に似たやうな柔かい感じのする草とも木ともつかぬものの茂つた、とある籬の中から一人の男が一個の水桶のやうなものを日本風に肩に荷つて現はれたのであつた。

「びつくらしたわ。」とお筆は清涼里で春尾綠、水の柩に出逢つた時と同じやうにひしと傍に寄り添ふやうにして余の手を握つた。妻は知らないのか、知つて知らぬ風を裝うてゐるのか默つて其男の行方を見守つてゐた。男はだら／＼と磧に下りて水桶の片方づつをかへすやうにして水を抄ひ上げ、今度は重さうに其を擔ひ乍らも

との籬の中に這入つて行つた。

「日本人だらうか。」余はお筆の手を振り拂ふやうにして言つた。

「朝鮮人よ。」とお筆も素直に手を離し乍ら言つた。

「あれは此奥に在る葡萄園に灌漑するのです。もう何十日と言つて雨が無いですからな。」と支局長は先に立つて我等を案内し乍ら言つた。

彼の船中から楊柳の間に見えた記念碑は他でもよく見るやうに砲彈を垣にして「嗚呼大島旅團……」云々といふ大きな文字の彫られた石碑が大空に聳えてゐた。全體が柔かい曲線のみで出來てゐる此邊に在つて此記念碑のみは際立つて硬い感じを與へた。

「大島旅團が此處に來た時、淸兵はあの鍊光亭で盛に支那樂を奏して餘裕を示してゐたさうです。而も其が八月の十五夜で名月の夜であつたといふのだから詩的ですね。其上當時從軍した人の話によると、牡丹臺からかけて、對岸一帶には所謂旌旗堂々で、いろんな旗、指物を飜して軍容を壯にしてゐる、まるで三國志などを讀んでゐるやうな光景であつたといふ事です。」と支局長は又得意の戰爭談を始めた。

「又來たわ。」とお筆は身を避けるやうにして又桶を擔つてゐる一人の男を遣り過ごした。彼女は支局長の戰爭談には耳を傾けようともせず、いつか又夕靄の漂ひ始めた四邊の光景を氣味惡さうに眺めてゐた。

此記念碑を取圍んだ草原の後ろはすぐ葡萄園であつた。灌漑する男は他に尙ほ二三人もあつて、彼等は廣々とした其葡萄園一體に大同江の水を灌ぐのであつた。よく見ると其男は日本人もあり朝鮮人もあつた。

「園主は日本人ですか。」

「さうです。」

「此廣い園に毎晩水を遣るのは大變ですね。」

「果樹も之に困りますね。」と支局長は經驗あるらしく云つた。

「まあ、一寸來て御覽なさい。澤山生つてますわ。」と妻は嬉しさうに聲を出して呼んだ。夕影の漂うてゐる黑ずんだ曲線の中に四人が顏を寄せて見ると房々とした小粒の顆が累々として垂れ下つてゐた。

支局長は勝手に其葡萄園の中の徑を歩き廻り乍ら、

「もう降らんと困るなあ。」と其桶を擔つた一人の男に聲を掛けたりしてゐた。妻は或は孕んだ女の乳房のやうに豐かに稔つて紫がかつた色に染まつてゐるものや、或はまだ蔓より離れ出た許りの珠のやうな小さい青いものや、其々を興あり氣に眺めて支局長のあとに跟いて行つた。だん／＼と暮色の迫つて來る光景は昨日の打晴れたお牧の茶屋とは趣を異にして、暗さは其茂つた葡萄の葉陰、此灌漑する人の足許などに、恰も心ある活物であるかの如く附き纏うて、大空に漂ふ薄い影よりは遙に黑く大地の上を彷徨うてゐた。お筆は益々是等の景色に興味を感ぜぬらしく、恰も疲れ果てた人のやうに大分後ろに後れてとぼ／＼と跟いて來てゐたが、妻と余との距離の稍々離れたのを見て、俄につかつかと余に追ひ着いて耳許に口を寄せ、囁くやうに言つた。

「私、兄さんのあとを追うて來たの。」

「えゝ？」と余は驚いてお筆の顏を見、同時に妻に氣兼をして其後ろ影を見た。一尺と離れてゐないお筆の白い顏にも薄い一刷毛の闇は掛つてゐたが其目には曾て蠟燭の火影に見た怯えのある媚の色が漲つて居り、妻の後ろ影は側の活物の暗が葡萄の茂りの中に一緒に包み込まうとしてゐる如くぼんやりと黑ずんでゐた。

「いけなくつて？」とお筆は又甘えるやうに言つた。

「馬鹿な。」と余は叱るやうに言つて、「花屋に一緒にゐるのは誰だい。」と聞いて見た。

「誰もゐやしないわ。」とお筆は笑つて、「私一人？ さう初めから言つてしまふと奥さんに悪いと思つて。」

支局長と妻とが立留つて我等を待つてゐる如く見えたので二人は此以上を話さなかつた。

葡萄園を出て再び磧に立つた時はまだ暮殘つて居る薄明りが水の上だけを這うてゐた。其處らに繋いである船の中に我等を待つてゐる先の船頭も朧氣乍ら認められた。

「一つ石を投げさせて見ませうか。」と支局長は突然思ひ立つたやうに今其磧に腰を下ろしてゐる一人のチゲに例の「タンシン」といふ言葉を使つて命令した。けれどもチゲはニヤ〳〵笑ひ乍ら首を振つて承知しなかつた。よく見ると此チゲはいかにも弱々しく、手足を動かすさへ懶さうであつた。

「此奴一日か二日食はないんだな。」と支局長は笑つた。斯ういふ類の勞働者にさういふ場合のあることは余も嘗て聞いたことがあつた。支局長の想像が當つて居るかどうかは知らぬが、彼は唯長い煙管を銜へてぼんやりと水上を眺めてゐた。

「やつぱり人だつたわ。」と最前から稍々下流の水面を見詰めてゐた妻は幽かに笑ひ乍ら言つた。これは水浴をしてゐたらしい二三人の韓人が頭より肩、胸といふ風に漸々に其體を現はして磧の方に上つて來たのであつた。其が唯薄明りの水面の上に黒い人間の形をした輪郭として見えた。

船頭が舟を寄せたので四人は又乗り込んだ。透明な空に夕星の光も静まり返つてゐた。對岸の人家は黒い形が參差として、大同門、錬光亭のあたりを中心に灯火がちらついた。支局長は何事をか船頭と話した。船頭は前の如く小高い體に突立つて例の艪とも櫂ともつかぬものを操つてゐたが、其黒い影が一層丈高く見えた。

余は初めうつかりしてゐたが、中流を過ぎた頃になつて、船は稅關官舎あたりよりも大分上手に上つてゐることに氣がついた。

「もとの所には著けないんですか。」と余は怪み乍ら聞いた。

「大同門の横に著けさせませう。あの邊の夜景も一度は見て置く價値がありますから。」と支局長は萬事を飲込み顔に答へた。お筆の横顔の額から鼻に連なる美しい曲線がすぐ余の眼の前に在つた。

三十五

大同門の横手に船を著けた頃はもう水と陸との區別なく、すつかり暮れてしまつてゐた。四人は船を見棄てて朝鮮人の店と日本人の店との入り亂れてある繁華な町を通つた。

「こゝが大同門通です、洪さんのよく來るうちは此近所だと思ふが……」と支局長は獨り言のやうに言つて心當てに一二軒を聞合はせてゐたが判らぬらしかつた。京城の鐘路通で見たやうな螢籠のやうな提灯を提げた車夫がここにも見られた。

「あの提灯を一つ買ひませう。」と支局長はとある韓人店の軒先にある一個を買つて其に灯をともして先に立つた。其時向うからひよつくら來合せたのは洪さんであつた。

「御見物でございますか。」と洪さんの方から言葉を掛けた。

「此邊だらうと思つて今宵の宿を探してゐたところだ。どうだ一緒に散歩しないか。」

「今日は俄に用事が出來て今朝から奔走してゐる。松田の法律事務所にも二度行つたが松屋へは寄る間が無かつた。……」其提灯を提げて歩くのは朝鮮では下人のすることだ。此下人さへ

居れば此邊の案内は十分だらうから僕は失敬する。」と洪さんは戯談を言つて急いで別れた。

「洪の野郎、失敬なことをいふ。」と支局長は提灯を提げた儘洪さんのあとを見送つて苦笑した。さうして大同門通りと直角をしてゐる一つの賑かな町に這入つた。今洪さんの言つた下人といふ言葉が思ひ出されて其提灯を提げてゐる支局長の後ろ姿が唯をかしく眺められた。

支局長は此邊の地理は委しいらしく、忽ち小さい路次のやうな所に這入つて行つた。京城でも余は水標橋の近處の同じやうなところに案內された覺えがあるので、もう大方は推量してゐたが、今更厭だと言つて引還すわけにも行かず、唯默つて跟いて行つた。路次は突當つてもう其處が行詰りかと思ふと軒下のやうな狹い温突の間を拔けて又別の小さい路次に出た。

「何處へ行くんです。」と妻は不審の眉を寄せた。

「支局長がお筆にサンペーを見せようといふのだらう。」と余は笑ひ乍ら答へた。

「まあ。」と妻は當惑したやうに言つたけれども支局長の手前を思つてであらう、其以上を言はず、澁々あとに跟いて來た。其に反してお筆の方は先に葡萄園に在つた時とは別人かと思はれるやうに生き〳〵とした顏附をして足の運びも輕さうであつた。人いきれのした空氣と瓦斯の多い燈火の光とは彼に勇氣を吹込むのであつた。

忽ちとある路次に出ると俄に人の心をそゝるやうな夢見るやうな唄が聞え始めた。其は一人の聲でなく、女性的な柔かい合唱であつた。何處かで一度聞いたことのあるやうな唄の調子だと思つたのは彼の朝鮮料理屋で素淡等の謠つた勸酒歌の節によく似てゐるのであつた。

「あれは何ですか。」と余は聞耳を立てた。支局長は昨日牡丹臺の城址に立つて當時の戰況を語つた時と同じやうに稍〻得意氣に舌なめずりをしてから、

「客を呼ぶ唄ですな。日本で言へば牛太郎の處を、此方はサンペー自身が斯く唄を歌つて客を呼んでゐるのです。」と言つた。其聲には何處となく悲しい調子もあつて賤しい心持は微塵も起らなかつた。

近よつて見ると或家の表に床几のやうなものを置いて其處に三人の若い女が並んで腰を掛けて其唄を歌つてゐるので、三人とも一見妓生と變らぬやうな服裝をしてゐた。さうして其前を通り過ぎようとすると、忽ち明るい火影が我等の形を仰山に照し出して門內にもけば〳〵しい服裝をした一人の女が立つてゐた。

「這入つて見ませう。」と支局長は先づ門をくぐつた。妻が躊躇してゐるうちにお筆はすぐ其あとに跟いて這入つた。此場合夫婦で表に立止るといふ事は尙人目に立つので二人とも亦止むを得ず其あとに續いた。

見ると支局長は早一人の女に其提灯を持つた方の手首を摑まへられてゐた。支局長は例の如く「タンシン……何とか言つて其手を高く上げて振り拂はうとしたが女はなか〳〵離さなかつた。唯雙方の手が爭ふ度に提灯が不規則に動いて、動ともすれば火が紙を燒かうとした。其容子がをかしかつたので、門內に四五歩進んだ許りで內部の容子を恐る〳〵伺つてゐた妻も余も覺えず笑つた。

門の入口は廣くもなかつたが、內部に這入ると、三つか四つの部屋、少し許りの庭を隔てて離れ〳〵に在つて、其處に一つ宛彼の素淡の宿で見たやうな眞鍮の金具の澤山に著いてゐる簞笥が置かれ、其を背景にして燈火を負うた女が此方を見てゐる。支局長の手首を取つた女も其一つの部屋から網に掛つた兎を覗ふやうに走

り寄つて來たのであつたが、第二の女は續いて這入つたのがお筆であつたのを見て緣から腰を浮かせた儘躊躇して此方を見てゐた。

「貴方どうなすつたの。確りなさいよ。」とお筆は後ろから支局長の背中を叩き、「美しいわねえ此人。」と其女の顏を正面に見た。

「私美人でせう。」と其女は日本語を使つて戯談のやうに聲高く笑つたが、いつかお筆に氣壓されて支局長の手をゆるめてゐた。

「奧さんもつと此方へいらつしやいましな。」と其女などは眼中に無いやうに此方を振り返つたお筆の顏は勇者のやうに輝いてゐた。

「私いや。歸りませうよ。」と妻は低い聲で余を促した。余は尚暫く容子を見ようと思つて元の位置に立つた儘妻の言葉に從はなかつた。

　女はもう支局長の手を離してゐたが提灯の灯はいつの間にか消えてゐた。支局長は何とか言つて女を揶るやうな科をすると女は笑ひ乍ら自分の部屋に歸つてマッチを持つて來た。女の擦つたマッチは二度共風に吹き消された。お筆が女の手から奪ひ取るやうにして擦つた火は巧みに蠟燭に移された。蠟燭の裸火は其女の正面と支局長とお筆との横顏とを明かに照し出し、女の顏の廣い額に光澤の無い下等な白粉の塗られてゐることや、其口許の手持無沙汰に淋しく引締つてゐることや、お筆の顏の勝誇つたらしい鮮かな表情やを描き出した。

　二人連の遊蕩子らしい若い朝鮮人は我等にぶつつかりさうに歩き乍ら這入つて來た。奧の部屋にゐた二人の女は爭ふやうにして出迎へて庭に立つた儘喋り合つた。二人の朝鮮人は時々振返つてお筆を見た。お筆は其に頓著なく支局長の手から受取つた卷煙草入から自分も一本の卷煙草を取り、一本を女に取らせ、女の擦つて進めたマッチの火を靜かに其煙草に移した。

　又一人の朝鮮人は醉うてゐるらしい足取をし乍ら、不思議さうに余等夫婦を見乍ら這入つて來た。自ら卷煙草に火を移しつゝあつた女は晴れやかな顏をして此男に何とか言つた。醉漢は怒りを含んだやうな目附をして支局長とお筆とを見たが何とも言はなかつた。

「もうそろ〳〵行かう。」と余はお筆に聲を掛けた。さうして恐ろしげに余の袖を引く妻と共に先づ門を出た。

　表の床几に腰を並べてゐる女は嘲るやうに我等を目送し乍ら、其でも彼の哀調を帶びた合唱は止めなかつた。一人の手から他の手に、其手から又他の手にと渡されつゝあるものは煙の出てゐる一本のハイレートであつた。

　やがて支局長と共に後ろから我等に追ひついたお筆の顏には、「卑怯だ。」と人を嘲るやうな色が浮んでゐた。さうして例の沼のやうに靜かな大きな眼はぢつと余の顏を見据ゑた。

　其からも同じやうな路次を縫ふやうに歩いて、同じやうな合唱を聞いたり、同じやうなぞめき歩きの朝鮮人に出逢つたりしつゝ、お筆は水の中に在る魚のやうに、獨り元氣よく興に乘つてゐたが、妻は其に反して、唯疲勞を訴へるやうな顏附をしつゝ澁々ついて來た。お筆が眞先に立つてとある狹い路次に這入つた時、あとに後れてゐた支局長は、

「其處は行詰りかも知れない。」と云ひ乍ら跟いて來た。けれども其は行詰りではなかつた。其狹い路次は更に三條の狹い路次になつてゐるので、お筆と余とは溫突に袖を擦らぬやうにと用心しつゝ比較的廣い中の一つに身を窄めて這入つて行つたが、支局長と妻とは稍ゝ後れて跟いて來た。其時お筆は小さい聲で、

「兄さん、今晩遊びにいらつしやいな。」と振り返りもせずに言つた。余が默つて答へずにゐると、

「ねえ、一寸御相談があるのよ。」と重ねて言つた。
「今晩といふ譯にも行かないが……けれども全體何の相談？　此前の相談なんかも要領を得なかつたぜ。」と余は冷笑するやうに言つた。
「厭ならいゝわ。」と拗ねたやうに言つて、「考へがあるから。」
「失敬な奴が。　己を脅迫しやあがる。」と余は心の中で憤つたが、兎に角妻を後ろに控へてゐる爲めに何事も言はぬことにした。
漸く廣い路に出た時支局長は、
「奥さんもお疲れのやうですから歸りませうか。」と言つた。余は早速賛成した。四人がヨボの車に分乘する時ふと行き逢つたお筆の眼は蛾を導く火のやうに燃えてゐた。

三十六

余が花屋の門をくゞる機會に到著したのは二三日後の事であつた。妻のところには金夫人からの紹介があつたとかで、某夫人が態々訪問して來た。其間に余は一度は訪問せうと思つてゐた松田の事務所を訪うたが生憎不在であつたので、遂に其足で花屋を訪ふ事にした。
サンペー探檢後お筆からは二度電話が掛つて來た。二度共余を電話口に呼び出して、
「一寸位來て下すつてもよささうなものだわ。」と怨ずるやうに言つた。殊に一度などは、
「兄さんも隨分奥さん孝行ね。」と嘲るやうに言うた。余は斷じて行くまいとも考へたが、此儘に放擲して置くことも何となく不安心に覺えて一度は行くことに決心したのであつた。
余が女中に導かれて其室に通つた時、お筆はクス／＼と笑ひ乍ら次の室から出て來た。見ると頭は櫛巻にして白粉のあともなく、著物も寢卷らしい、絹物ではあるが古びたものを著てゐた。其姿がなまじひに艶に見えた。
「御免なさいよ、兄さん。こんな風をしてゐて。」
「どうかしたの。」
「えゝ、少し加減が惡いの。戀煩ひよ。」と一寸余の顔を偸見るやうに見て笑つた。
「大分此間うちから人を脅迫するね。僕は其程後ろめいた事もない積りだが……」と余は戯談のやうに言ひ乍ら私に今日の結果を氣遣つた。
「隨分ねえ、脅迫なんて。」とお筆は怒つたやうに言つて、「兄さんのあとを追つて來たのがそんなに脅迫なの。」
「其はお前の勝手で僕の知つたことぢやないさ。けれども今頃僕のあとを追つて來てどうするといふの？」
「どうするといふのでもないわ。」とお筆は殆ど意味を爲さぬことを言つて其目には美しい白い玉を浮べた。蠟燭の火影に人を飜弄したり、サンペーの前に意氣を示したやうな面影は無く、恰も年の行かぬ初心な小娘のやうな素振をして唯俯向いてゐた。
「判らぬぢやないか。」と余は其しら／＼しい嬌態を心で憎みつゝ竊と囁いて室内を見廻した。荒れ古びた疊の上に新らしい粗末な煙草盆の置かれたのや、床の間の行版摺の掛地に古めかしい佛の置物などが殊に不愉快に目に映つた。
お筆は默つて怨むが如き眼なざしをして一寸余の胸の邊を見て、其睫に光るものを強ひて人の目に留めようと苦心するらしかつた。余も暫く何も言はずに彼女の口を開くのを待つてゐた。
女中は茶と菓子とを運んで來た。さうして此場の容子に好奇の目を瞠つて見ぬ振をし乍らお筆の顔を偸見るやうにした。お筆は其を避けようともせず態と其女中の方を振り返つて、「水菓子のおいしいのを。」と言つた。いつもの通りの大きな眼に涙は其周圍の睫を濡して黒い瞳を

も心地よく濕してゐた。女中はしげ〳〵と其目を見て、かへす刀に余の顔をも瞥見して退却した。

余は其眼をいつもの通り美しいとは思つたが其涙に動かされうとはしなかつた。人を動かすには其涙は餘りに乏しかつた。お篁自身が愛惜する程に他人には貴いものではなかつた。

余はふと斯ういふ話を思ひ出した。一人の遊女が春雨の日の徒然に、豫て自分に思ひを運んでゐる一人の男に手紙を送つた。女は別に其男に心を許してゐるといふでもなかつたが、唯逢ふ迄は何となく樂しかつた。自分は其男が障子を開けて自分の部屋に這入つて來た時、何と言つて泣かうかと考へた。自分自身に自分を欺いて、心より其男に焦れてゐる女の心持になり終せて、忽ち其處に泣き倒れて見度いと思つた。と唯斯ういふ話であつた。心から誰を待つ事も出來ぬ遊女は、自分から自分を欺いて迄に初心な涙を流すところに果敢ない興味があるのであつた。お篁が其乏しい涙を自ら愛惜して女中に迄誇り示す心持が余には餘り明白に讀め過ぎた。

「なんて兄さんはさう邪見なんでせう。」と女は又自ら涙を呼ばうとしたが其はもう無駄であつた。

「僕は邪見なのではないよ。」と言つて余は微笑した。

「邪見だわ。人の心も知らないで。」

「お前の心はよく判つてるよ。」

「ぢやあ、何故も少し優しくはして下さらないの。」

「……」

「あとを追つて來たのが惡かつて？」

「お前は滿洲に行くんだつてね。」と余はお京に聞いたことを思ひ出した。

「そんな事誰に聞いて。」

「……」

「朝鮮ではもう誰も相手にして呉れないんですもの。」と彼は又情ありげに言つたが、其目はもう乾き切つてゐた。辨天小僧は髷を崩して裾をまくるのであるが、此はもう初心な眞似に草臥れて心の鬘を脱ぎ棄てたといふ形であつた。さうして忽ち投げ出すやうに。

「兄さんも隨分野暮ね。情人なんか出來る人ぢやないわ。」

「今になつて判つたの。お前らしくもない。」

「だつて餘りだわ。も少し何とか曲がありさうなものに。深川の時なんか、此程とは思はなかつた。」と折角水菓子を持つて來た女中に、「ビールは無くつて。」

「エビスならあります。」

「持つて來て頂戴。」

「又ビールか。」と殆ど口へ出さうとしたのを推し默つて、ボロ〳〵する菓子を舌の上に乘せて苦い奴をせうことなしにガブ〳〵と飲んだ當夜の事が思ひ出された。此女ともうい丶加減の汐合で御免を蒙り度いとつく〴〵思つた。

「まあ、さうして置いて頂戴。」

「矢張僕の跡を追つて來た事になるのかね。」

「南山樓の方は……」

「一寸兄さんに相談があるといふ事にしたの。」

余は石橋を思ひ出した。何といふ事もなく、自ら石橋になすりつけられた形になつてゐることを腹立たしく思つた。

「石橋からは僕の出發たあとにも便りはなかつたかね。」

「え丶。」

「南山樓では何と言つてる。」

「石橋さんの事だからと言つて安心してるわ。」

「其ではお前の食費のやうなものも其儘になつてゐるのだね。」

「え丶。」

「滿洲に行く費用は?」

「どうかなるわ。」と事もなげに言つて、傷のある林檎の赤い肌を疊の上迄垂らしつゝ庖丁の手を動かしてゐた。女中の持つて來たビールがコップに注がれた。

「兄さん、私のこちらに來たのが本當にお邪魔?」とお筆の眼は又多少の光を帶びて來た。

「邪魔といふでもないが、手を握つたり耳打ちをしたりすることだけ止めて貰ひ度いね。」

「だつて淋しいんだもの。」と自分で自分の身を持て餘したやうに言ふ。

「さうすると僕がいゝ慰み物になるわけだね。」

「さうでもないわ。」とお筆は打消すやうに言つた。けれども其顏は曇つてはゐなかつた。

「意氣地のない所を見込まれたといふ譯だね。」と余は又苦笑を禁じ得なかつた。

「そんなに怖がらなくつてもいゝわ。取つて食はうとも言やしまいし。」

「細君の手前もあるからな。」と余は嘆息するやうに言つた。

「奥さんの手前、へえゝ!」とお筆は呆れたやうに言つて、「まあそんなもの?」

「まあそんなものとは?」

「私判らないんですもの、奥さんといふのが。」

「厄介な女だな。」と余はつくづく、此美しい女を厭はしく思つた。「僕は奥さんのお供で朝鮮漫遊に來た譯なのだから、實はお前に構つてゐる閑なんか無いんだよ。もういゝ加減に解放して貰ひ度いな。」

「解放つて何。」

「御免を蒙り度いといふ事さ。」と余は堪えず又嘆聲を洩した。

「氣の弱い方!」とお筆は嘲り氣味に笑つて、「ぢやあ解放して上げてよ。其代り今日は飲みませうね、お別れだわ。」

余は默つて唯苦い顏をしてゐた。よい加減に話を切り上げて歸ることは容易であつたけれども、尚ほ彼女が余に對して求むるところのものが結局何であるかといふ事を一層明白に了解して置き度い樣な心持がして暫く腰を落附けてゐた。

「ビールでは駄目ね、醉へないわ。」と大分もう顏を染めてゐながらお筆は腹立たしげに言つて手を打つた。

「飲み交ぜたらよくなからうぜ。」と余は清涼里の尼寺に於ける藥酒の惡醉を思ひ出した。

「いゝわ、私の體だもの。」と彼女は醉の力を借りて再び最前の初心な心の狀態に立戻つて見ようと苦心するらしく、物に拗ねたらしい素振をして見せた。果して乏しい[illegible]の下の再び其瞳に宿るのが見えた。

「お呼びになりましたか。」と女中は顏を出した。

「御酒をね、お肴は見計らつて。」とお筆は斯く命じ乍らも其物に拗ねた悲しげな表情は[illegible]ぬやうにと力めるらしく、瞳の奥の[illegible]も何かしらと輝いてゐた。

余の心の其涙の爲めに動かぬことは[illegible]なかつた。殊に一度ザックバランの其本性を現はして置き乍ら何故又同じ事を繰り返す其[illegible]みた表情に[illegible]力[illegible]かつた。けれども其本性を[illegible]し乍らも何[illegible]る事を[illegible]り返すことによつて果て無い興味を[illegible]ばうとする此氣違ひ[illegible]みた女を多少好奇の目を以て見ぬでもなかつた。

やがて日本酒が運ばれてお筆は殆ど一人で飲んだ。古びた綢の著物を引繕ひたやうに着てゐる肩のあたりから小高くなつてゐる乳の邊にかけて暖かい大きな呼吸が見えた。

「兄さん、飲らないの?」

「飲んでゐるよ。」

「さあ注ぐわ。」と余がしぶ／＼盃をあげる迄銚子を取上げた儘ぢつと人の顔を見た。今は殊更らに装ふでもなく其長い睫も黒い瞳も暁の星のやうに心地よげに濕うてゐて、其奥には人に迫るやうな恐ろしげな光があつた。
「僕の方はいゝ加減にして置いてくれ。」と余は注がれた盃を下に置いて、頭の中に於けるビールと日本酒との戦ふやうな渦巻を自覺した。
「厭！ 私許して上げないから。」と笑つて、「これからあの何處とかへ連れてつて下さいな。牡丹臺の何とかいふお茶屋へ。あなたのあの――奥さんが……」と奥さんといふ言葉を勉めて言ひにくさうに言つてニヤ／＼笑ひ作ら、「其處の女が大變美しくつて偉いんだつて讃めてたわ。私、其奥さんの讃めてた女が見たいの。」
「あれは全く／＼えらい女らしい。美しさはお前とどちらとも言ひ兼ねるがね。」
「まあさう、どちらが美しいか比べて來ませうよ。ねえ、兄さん、連れてつて頂戴。」
「馬鹿言つてらあ。いくら平壌だつて晝日中酔つぱらつた女を連れて出掛けられるものか。其こそ奥さんの手前もあるからね。」
「さう。」とお筆は腹立たしさうに言つて、「ぢやあどうすればいゝの。」と暫く空中に物を求むるやうな眼つきをしてゐたが、火のやうに燃えてゐた其目から今迄にない心の奥底からにじみ出たかと思ふやうな不覺の雫がポロ／＼と零れて頬を傳うた。余がはつと驚いて其を見守つた前にもう夕立のあとの碧空のやうに晴れ渡つた其顔には嘗て見なれた屈託のないあばずれた色が動いてゐた。
「美しい涙だ。」と余は心のうちで思つた。何故に彼女がかゝる涙を零したかと云ふ理由を尋ねる前に、唯何となく美しい涙だと思つた。さうして先に乏しい虚飾の涙を愛惜した彼女が却て此心からの涙を自ら恥づるかの如くに拂ひ去つた事を面白く思つた。
「何を泣いたの？」と余が尚驚きの心を全く静めることが出來ずに聞いた。
「さう、泣いて？」と彼女はごまかすやうに言つて、尚ほ頬のあたりに留まつてゐる一二滴の雫の上を其となく隠すやうに手で壓へた。酒に燃えてゐる赤い頬の上にほつそりした手は白々と青みがかつて見えた。
「泣いたのではなかつたの？」と余は微笑した。
「えゝ、泣いたのではない、笑つたの。」と快活に言つて、「他に許り酌をさせて置いて、默つて見てゐるのね。人の惡い。」
お筆は余が前に置いた儘一人で酔ひつぶれつゝあつた。余は其美しい肉團を唯不思議に眺めつゝ坐つてゐた。
「もうよしたらいゝだらう。」
「厭！」と酔うた女は首を振つたが、其癖もう餘り飲むでもなく、酒のある上に注ぎ足さうとして疊を濡らしたりした。
「大分手許が怪しくなつたぜ。」と余は笑つた。
「さう。」とお筆も笑つて、更に何か言ひさうにしたが止めた。
余は彼女の余に要求する處のものが決局何物であるかを諒解せんが爲めに腰を落著けてゐたのであつた事を思ひ出した。余は斯る女の最後の要求が常に殺風景なる或一事に歸着することを熟知して居るが爲め、彼女の稍ゝ人に異つたと見える表情の上にも餘り多くの價値を置くことが出來なかつたのであつた。けれども今日の前に在る酔つぱらつた女は尚さういふ容子を鵜の毛程も出さうとはしなかつた。
金錢！ 彼女は果して其に冷淡なのであらうか。さういふ慾望は毫厘もなしに唯狂態を演じつゝあるのであらうか。其は解き難き謎として尚ほ暫く容子を見て居るより外に致し方がな

かつた。

「もう解放されてもいゝんだらうな。」と余は戯談の様に言つて歸り支度を始めた。

「解放つて何！」とお筆は力めて醉態を隱さうとするやうに胸を搔き合せるやうにして余の顏を凝視した。

「又逆戻りかな。」と余は苦々しく思つたが、強ひて相手にせず「兎に角今日はもう歸らう。」と立上つた。

「いけないわ。」とお筆は止めようとするらしく手をあげたが立上る勇氣は無かつた。

「卑怯だわ！」と縺れた舌で投げ出すやうに言つて又盃に手を掛け、もう其上は何とも言はなかつた。部屋を出る時振り返つて見ると余の方を見送らうともせずに美しい櫛卷の中に指を割込むやうにして頭の地を搔いてゐた。

三十七

表に出るとまだ熱い日が傾きそめた許りであつた。余はいつも彼女に出喰はしたあとは漸く其手許を逃れ出たのをホッと安心するやうな心持がするのであつた。京城を去つて此地に來る時も、彼等の羈絆を脱すると云ふ事が矢張り一つの希望であつたともいへるのであるが、其が、又直ちに後を追うて來られて、附き纏はれる事になつたといふのは不愉快な事だとつくづく考へられた。其に何の爲めに執念深く附き纏ふのか明白に理解されない限り愈々氣味の惡い氣がかりの事であつた。

「二三日前に船橋里へ誘つたのが惡かつた。」と後れ走せに後悔して見たりして、もう此上に成るべく近づかぬやうにしようと決心した。

松田の事務所の前に通り掛つて又聲を掛けて見たが、今度は宅にゐた。下の間には朝鮮人が二三人机を置いて鮮文の訴訟書類らしいものを驗べてゐた。上れとの事で狹い段梯子を上つて見ると其處には寢臺もあり、長椅子もあり、狹い横長い室が其等の長大な家具で大方塞げられてゐた。

「君の來てゐることは洪から聞いたから一寸訪ねなけりやならんと思つてゐたところだ。」と景氣よく向うから聲を掛けた。其辯口が少し重たさうで目が眞赤に充血して居るのは今晝寢の眞唯中を邪魔をしたのであることが判つた。

「斯んな狹いところで仕方がないが、其處に掛けてくれ給へ。」と余を長椅子に坐らせ、自分は寢臺の上に腰掛けた儘其赤い目をこすつた。嘗て松屋の二階から定めて暑いだらうと想像した事は間違つて居なかつた。窓には一面に日を受けて低い天井は頭の上を壓しつけてゐた。

三十八

宿に歸つて見ると妻はゐなかつた。女中のお花が敷居際に手を支へて、

「お歸り遊ばせ。」としとやかに辭儀をした。「奧樣は先刻のお客樣が是非とのお勸めでお客樣のお宅へ御一緒にいらつしやいました。若し御用がおありでございましたら電話をお掛け申すやうにお約束申上げて置きました。」とお花は心得顏に言つた。お筆の所で長い時間を費した余は何となく心が咎めてゐたのであるが妻が出掛けてゐたといふ事は氣安いやうな心持がした。

風呂を出て夕飯の時刻に迫つても妻は未だ歸つて來なかつた。其うち電話がかゝつて來て、

「是非夜分迄話して行けと引きとめられますの。どう致しませう。」と相談して來た。余は「ゆつくりしたらいゝだらう。」と答へて遣つた。

お花は夕飯のお給仕に來て行儀よく坐つてお酌をした。今日のお筆の事が時々思ひ出されるのを余は力めて忘れるやうにしつゝ獨り靜かに盃を取る快味を味つてゐた。其處へ、

「お客様がお見えになりました。」と、一人の女中が報じて來た。
「誰？」
「府井さんと大内さんとでございます。」
「食事中で失禮だが別の部屋へでも……」と躊躇してゐるうちにもう二人は這入つて來た。
「府井の松木さんです。」と支局長は紹介した。
「やあ、これは御食事中を失禮しました。」と赤味がかつた活動家らしい顏をした府井は迷惑さうに坐つて、
「僕は婦人を訪問しましてね、玄關に歸り掛つたところを大内君につかまつて文學者で非常な平壤贔屓の方があるから御目にかゝつたら善からうと勸められましたものだから……」とぶしつけな來訪を恥づるやうに又斯う言つた。
「府井には一つの平壤策があるのです。貴方が此間お話しになつたホテル設置論と吻合してゐるところもあつたものですから。」と支局長は新聞記者らしい口吻で附加へた。成程そんな事を一寸支局長に話したことはあるのである。
「さうでしたか。私のは纏つた意見でもなかつたのですが……」と余は少なからず恐縮した。
「其處で貴方のホテル設置論といふのは？」と府井は直ちに斬り込んで來た。
「經濟上から成立ち得るものかどうか、其點は全く不案内ですが、要するに平壤を一大公園として經營したらどうかといふのです。牡丹臺から大同江を通じ船橋里に至る景色は雄大で而も變化の妙を極め自ら大公園を爲して居る。安奉線も廣軌になり鴨綠江の架橋工事も出來、釜山から長春迄汽車が直通するやうになれば、ゆく〳〵は朝鮮は世界の大道となる、其時分に其沿線の平壤といふ所は風光明媚で日本政府も其處を世界的公園として鋭意經營して居るといふことが判つたら世界の觀光客は必ず一度は平壤に足を止めるやうになる。其處でホテル論になるのですが、ホテルも大同江の水を中心として計畫すべきは勿論の事で、先づ一番の好地位と考へるのは綾羅島ですな。あそこに大きなホテルを作つて夏はヨットを江上に浮べて自由に綾羅島の周圍も回れば船橋里、鍊光亭、大同門のあたりを上下する。冬は又結氷を利用してスケートを遣り、江上の往來には雪車を使ふですな。春、秋は勿論、夏冬共に相當の設備さへ出來れば却つて變化に富んだ面白い遊覽地となることが出來るだらうと考へるのです。汽車の停車場を江岸迄延ばせ、其停車場とホテルの間に短い連絡線を作つて旅客に少しの不便をも感ぜしめぬ許りか、長途の汽車旅行の客を忽として輕快なる船中の客と化し二三十分間にして水中の宮殿ともいふべき綾羅島のホテルに導くやうにする事は面白い事ではないでせうか。これがホテル設置を第一の急務とする私の平壤策です。」と汽車が江岸で客を吐き出してゐたり、ヨットが直ちに其客を收容して動き始めようとしてゐたり、白い石造のホテルが何間かの窓を灯し連ねてゐたりする光景を目の前に髣髴しつゝ余は話した。さうして平壤といふ土地に存在するであらう多くの事情は一切問はず、又斯く成就する迄に費すべき時間をも考へず一畫圖のやうに其光景を描き出して見る點に興味を持つた。けれども「全く文學者の空想論かも知れんです。」と實際さう考へた事を正直に附加へて余は笑つた。府井は存外眞面目に一々點頭いてゐたが、
「私も矢張り平壤公園論者であつて其點は全く貴方と一致して居るが綾羅島にホテルを作るといふ事は結構には相違ないが實行上困難なことのやうに考へるのですな。船といふやつが旅客に取つては何となく億劫に感ぜられるもので、矢張り馬車とか自動車とかで短時間に

著く事の出來る邊にホテルを造る方が、よからうかと考へるです。勿論大同江を閑却して市中に造るといふ譯ではなく大同門、錬光亭あたりと並んだ矢張りあの江岸に作るですな。ヨットを浮べスケートを奬勵する點も勿論異存はありません。」尤も其等は經費の問題ですけれども、兎も角一個のホテルを作るといふ事は左程困難の大事業とも考へないのです。尤も平壤府だけが獨り意氣込んでも駄目な事で少なくとも鐵道院あたりで其氣になつて貰はんと駄目ですからな。」と府尹は其赤顔に何等かの不滿らしい色を浮べた。

「其は無論ですとも。私は國家事業として遣るがいゝと思ふ位で一方からいへば朝鮮鐵道の一經營策ですからな。」と余も相槌を打つて存外當局者としての府尹の意見と余の空想論との距離の近いのを不思議に思つた。けれどもホテル設置の位置として綾羅島を選することは余の空想の半ば以上を破壞されるやうに思はれて不愉快であつた。これは是非共其處迄思ひ切らねば、折角の平壤ホテルとしての特色を十分に保つ事が出來ぬ、船の往來も遣りやうによれば決して乙構でなく却て其が呼物になる譯だと考へた。

其から話を外に轉じて、

「先夜はカルボーの御探檢だつたさうですな。」と府尹は快活に笑つた。

「カルボーだかサンペーだか知りませんが大内君に案内して貰つてもう大分平壤通になりました。」と斯う余も笑ひつゝ話し乍ら、ふと思ひ出した事があつた。

「此方にも妓生學校があるさうですな。」

「ありますとも。こちらのものに言はすと平壤が妓生の本場なんですからな。」

「其處で又話がもとに戻りますが、已に妓生學校なるものがある以上は妓生を今少し世界的のものに敎育して日本語は勿論の事、一二の外國語も話せるやうにし、大同江に妓生船を浮べ、舟中に絲竹管絃の樂をも奏すれば妓生踊もやるやうにさせてはどんなものですかな。それから先にヨットと言ひましたが、あれは取消して、ヴェニスのゴンドラとか秦淮の華舫とか言つたやうな工合に、此江山に調和した一個特別の船を創造するですな。之は當局者に其考へさへあれば左程むづかしい事でもあるまいと考へますが、どうですな一つ御奮發なすつては？」と余は醉に乘じて又平壤策に逆戻りをした。

府尹は又快活に笑つて、

「さあ一つ奮發しますかな。其處迄行けば萬景臺も閑却することは出來ない。ねえ君萬景臺は是非共其平壤策のうちへ計算に入れねばならぬね。」

「さうですとも、萬景臺は是非入れる必要がありますね。」と支局長は相槌を打つた。

「萬景臺といふのは？」

「こゝから三里許り川下になるのです。」

「唯例の瀬に困りますね。」と支局長は其計畫を眞面目に考へるものの如く言つた。

「瀬なんか君何でもないさ。浚渫をやればいいぢやないか。」と府尹はもう實行上の問題として考へては居らぬらしかつた。

「鎭南浦から萬景臺迄は千早位な軍艦は上るのですが、其上流になると瀬が澤山あつて干潮になると韓船の交通にも困難する位です。」と支局長は說明した。

「さうでせうね。實行となると其んな問題が幾らでも起るでせう。」と余も稍ゝ勝手が違つて調子を鈍らせた。

「綾羅島の近傍にも困難な奴がゐるね君。」

「さうです。」

「矢張り[illegible]ですか。」

「さうです。浚渫を遣る事になつてはゐますがね。なか〳〵困難らしいです。其も經費の問題でしてね。」と府尹は苦笑した。余の空想譚はだん〳〵遠くの方に消えかゝつてゐるやうな心持がした。府尹は急に話を轉じて、

「この向ひの部屋であつたと思ふ、あの沼田がゐるのは？」

「たしかさうでした。」と支局長は答へた。

「あゝさうでした。たしか沼田さんと仰しやつた、あの小柄な人でせう。」

「さうです。あの男は不思議な男で、江原道、平安道は到る處に鑛山があるといふ或人の演説を聞いてから、殆ど二年間毎日のやうに鐵槌を腰にして山中を經めぐり、岩角をコツ〳〵と遣つて歩いた男で、到頭一つの炭礦にぶつつかつたですな。」と府尹は其實際家らしい活動的な顔に會心の微笑を浮べた。

府尹の平壤公園論も、其沼田氏とやらが鐵槌を以て一々岩角を缺いて歩く程ではなくとも、矢張り足の地に著いた實際論である事は想像に難くなかつた。けれども余の頭には今話し乍ら思ひついた華舫のやうな特別の舟のことが暫く〳〵の間つき纏つて離れなかつた。其は自分乍らよい思ひつきのやうに思はれた。現實より唯一歩を先んずることを目的とする實際論から見たら斯の如きは不急の末事と考へられるであらうけれども決してさういふ譯のものとは考へなかつた。江山に精神があるといふ事をよく人はいふが其は江山と人間との間に存在するものであつて、江山にのみ存在するものではない。さういふ場合に人はよく社を作つたり鳥居を建てたり、碑を刻んだり橋を掛けたりする。其は其江山其ものと人間との間に存在する感情を具體化したものである。秦淮の華舫の如きは其が更に一歩を進めたもので、秦淮なるものの或感じが人格化されて華舫になつたのである。翠染櫻の精が遊女になつたり、柳の精がお柳に成つたりするよりは遙に進歩した且つ自然な人格化である。之を社會的にいふと、政黨とか結社とかいふやうなものに主義綱領といふやつがあつて旗幟を鮮明にし人をして據る處あらしめようとする如く華舫は亦秦淮の主義綱領である。近い處でいへば練光亭の下に在る大同江祠や牡丹臺下に於ける永明寺、浮碧樓、お牧の茶屋、船橋里に於ける楊柳の如きものも大小の差こそあれ皆人格化であり旗幟である。即ちさういふ意味に於ける一種の船を大同江に浮べるといふ事はこの江山を天下に比類少きものとして自ら矜誇するところのものを鮮明にするのである。主義綱領を提示するのである。決して不急の末事でないどころか、非常なる急務ともいへる。……

とそんな事を考へながら余は府尹と支局長との話を默つて聞いてゐた。二人の話は沼田氏が例の鐵槌と握飯とを腰にして山中をうろついた當時の逸話などであつた。

其處へ、

「お客樣がお見えになりました。」とお桂さんが知らせて來た。名刺を見ると鶴見慶之助とあつた。

「其に一人御婦人の方も御一緒でございます。」

とお桂さんは附加へた。

慶之助の連の女といへばお筆である事は考へる迄もなかつた。

「困つたなあ。」と余は心の中で叫び乍ら、「今は來客中だから明日でも來るやうに言つて吳れんか。」とお桂に向つて言つた。

「僕等こそ何も用事は無いんだから御暇にしようぢやないか。」と府尹は支局長を促してもう立ち掛けさうにした。

「そんなたいした客ではないんです。」と言つて余は打明けて話した。

「あの女は面白い女だ。」と支局長は獨言のやうに言つて「お通しになつたらいゝでせう。」

やがてお桂に導かれて來た慶之助の後には果してお筆が立つてゐた。慶之助の頭に半分顏を隱すやうにして、片方の眼に媚を含んで余の方を見た。余は先刻のやうな狂態を演ぜらる事を何よりも恐れてゐたのであつたが、さういふ模樣は見えなかつたので安心した。

「いつ來た。」と余は府尹などに紹介してから慶之助に聞いた。

「本日參りました。」

「さつき見た新聞には明日から開場のやうに書いてあつたが碌に稽古もしないで始めるのかな。」

「私は例の通り遊軍ですから。其に春尾の代りには一人新たに加入しましたから。」

「其では當分作者專門かね。」

「まあさういつたやうな譯です。」

余と慶之助とで斯んな話をして居るうちにお筆は支局長と話してゐた。

「あれから何處か御見物でしたか。」

「いゝえ。」とお筆は言葉少なに答へてつゝましやかに控へてゐた。お筆の注意は今新たにシガーをくはへて黄色い煙を棚引かせてゐる府尹の上に集まつてゐるらしかつた。

「まだ牡丹臺へも行かないですか。」

「はい、まだ。」とお筆は何處迄も口數を少くして其癖いつもの大きな眼に一杯の媚を支局長の顏に浴せ掛けてゐた。

「鶴見君は平壤は初めてかね。」

「はい、初めてです。」

「なか〳〵いゝ處だよ君、僕は一度見たきりですつかり平壤黨になつてしまつた。其に是非牡丹臺の掛茶屋に休み給へ。其處にお牧といふ素的な美人が居るから。」

「あのお牧といふ女は變つた女ですね。」と府尹も言葉を添へた。

「お筆さんが何方が美人か比べに連れてつて呉れと言つてゐるから君連れてつて遣り給へ。」と余は笑ひ乍ら言つた。府尹等も笑つてお筆の顏を見た。

「あら、隨分ね。」とお筆の眼は忽ち燃え立つた火のやうに輝き初めて少し許り燈火の前ににじり出てお花のあつけに取られてゐる膝元の銚子を取つて府尹や支局長などに酌をした。

松屋は藝者は一步も門內に入れぬことになつてゐた。客を送つて來た藝者も客がいくら這入れと言つても、「駄目よ貴方、こゝはお女將さんが喧しいんだもの。」と言つて皆門前から引返すのが常であつた。初めからお筆の容子を變に思つてゐたお花は穩かならぬ顏附をして其一擧一動に注意してゐた。

更に二人の來客があるとお臺さんは報じて來た。其は松田と澁さんとであつた。

二人が座敷に通つてから折角にじり出てゐたお筆もいつの間にか手持無沙汰にもとの座に引下つて又つゝましやかに控へてゐた。澁さんも松田も府尹とは已に知り合ひの間であつたが別に話ははずまなかつた。唯松田は時々お筆の方を不思議さうに見た。

お花は時々銚子を代へに立つたがだら〳〵とした酒に誰も餘り醉つたやうな風も見えなかつた。余も一旦醉うた酒がまた醒め掛けて私に欠びさへ催された儘に引立たなくなつた此多人數の會合を余は唯不思議に眺めてゐた。さうして、

「お筆さん、少しはしやいではどうかね。」とからかふやうに言つて見た。お筆の時々偸見るやうに眼をやる府尹の顏のあたりには例の黃色いやうな白いやうな煙が力強く棚引いてゐた。

「大變今日は眞面目でございますね」と澁さん

も僅かな皮肉な口許を動かした。けれどもお筆に冷かに笑つてゐる許りで何とも言はなかつた。
「昔新清涼里へ行つたものは、不思議に皆此処へ集まつたのでございますね。」と洪さんは又じろりとお筆や健之助の方を見た。
「まだ何といつても交通は少いな。京城で逢つたものは、大抵又此処で逢ふやうになるね。」と余は言つた。
「内地から来る人はよく其事をいふのです。兎に角一條のレールが唯一の交通路ですからね。」と府尹も横口を挿んだ。
「殊に大概な人は此松屋に来ますからね、自然此処に落合ふやうになるのです。」と支局長は言つた。
「実際平壌には旅人宿が少い。」と松田も相槌を打つた。
　そんな話がもとになつて、又府尹の口から余の平壌策が暗に諷せられた。
「まあ仮令十年も滞在して大同江が氾濫する平壌が半以上海になるといふところを見るさ。」と松田は遠望したやうに言つて笑つた。
「要するに経費の問題さ。」と府尹は調停するやうに言つた。
「併し遊山船はいゝね。其だけは早速府尹に實行を迫らうぢやないか。」と松田は又笑つた。
　けれども皆余り笑ひもしなかつた。相變らず話に油が乗らなかつた。其時お筆は突然、
「ねえ貴方がた。私其お秋さんとかの茶屋へ行つて見たいわ。連れてつて下さいな。」と誰にいふともなく、遠慮したやうに、甘えた調子で言つた。
　これが南山楼に於ける石橋剛三の一座であつたら、「行き度けりや一人で行くさ。」などと暴言は遠慮なく言つても、いつの間にかお筆を中心にして多くの渦巻きの運動、直ちに開始されるのであるが此席に於ては誰一人其言葉に答へ、るものすらなかつた。例の府尹の葉巻は薫らず其赤顔のあたりに渦巻き、洪さんは悲惨な口許を閉ぢてゐた。
　お筆の顔には今迄に見ることの出来なかつた一つの表情が現はれた。其眼には鋭い光があつて、少し青味がかつた顔には皮肉の微動が見え、其をつとめて隠さうとする口許の冷笑は恐ろしき迄に冷やかであつた。
「大内儀、此間の晩は下人の役が滞りなく務まつたかね。」と洪さんは俄に思ひ出したやうに落着いた皮肉な調子で言つた。
「失敬なことをいふ。」と支局長は慌てたやうに言つた。
　支局長は又片手にステッキを突いて片手に提灯を提げ案内者の様に先に立つた處は面白い図であつたといふ事を洪さんは詳しく説明したので府尹も松田も笑つた。
「御自分の探検の時ですね。」と府尹は腹を叩き乍ら又笑つた。
「僕が此提灯を提げてゐる手の方を握られて大に難儀をしてゐる處をお筆さんに救はれたです。」と支局長もせうことなしに笑つた。
「何んなに一人で這つていらつしやる ですもの。」と此時お筆は忽ち普通の快活な顔に戻つて、自分の右の手首を左の手で撫つて其時の様子をして見せた。其がいかにも生き写しであつたので余と支局長も堪へず笑つた。他の人々も一度に笑つた。お筆の手真似はしつこくなく、はつと目をとめた間にもう柔かく其をほどいて自分もをかしさうに笑ひこけてゐた。簡單な物眞似にこの邊の藝者などに見ることの出來ない手の冴えを見せたので、府尹も松田も心を牽かれて見た。

三十九

　其翌日は早く夕飯を濟ませて、日が西に落ち

るか落ちぬに妻と二人で大同江に舟を浮べた。

いつ來て見てもあらたに來たやうに其廣々として雄大な景色に打たれた。船頭は初め一牡丹臺から漕ぎ下つた時の日本語の巧みな例の岩吉であつたので今日は又牡丹臺に漕ぎ上らせることにした。妻は別に多く喋るでもなく唯默つて舷に肱をもたせてゐるのであつたが其が我妻乍らいかにも貴いやうに眺められて、今迄何處かを遊覽するといへば必ず他人を交へたことを後悔するやうに覺えた。

「いつ來て見てもいゝな。」

「昨日のやうに窮屈な暑くるしい思ひをするより幾ら樂ですか。」と妻は心持膝を崩して、此舟中の小天地を樂しむやうに見えた。

「己も昨日は隨分閉口した。」

「お客樣も多勢一時になると本當に困りますわね。」

「或中心があつての會合だと多勢もいゝが、何組もの客が落合つたといふやうな時は全く困るよ。」と斯んな話をし乍ら昨日午前お筆の宿に行つたことはまだ妻に打明けなかつた。

二人は又默つて水面を見た。櫓の音が耳に響いて輕い舟がすべるやうに進む。

「上潮かね。」

「さうです。」と岩吉は幾度聞いても日本人と同じ輕快な調子で答へた。

例の大同門や練光亭はいつの間にかあとになつて、玉流所も過ぎもう綾羅島が見え始めた。

余は昨日府尹に話したホテルの話を妻にした。

「どうだ二人でホテルでも始めるか。」

「いゝわねえ。」

二人は人事のやうに話し合つて笑つた。

默つて此話を聞いてゐた岩吉は、

「旦那綾羅島の地面をすつかりお買ひになつたらいゝでせう。」

「綾羅島の王もいゝな。」と余は笑つた。

いつかもう牡丹臺は目の前に聳えてゐた、浮碧樓や永明寺やお牧の茶屋も手に取るやうに見えた。

「お牧さんゐるんでせうか。」

「ゐるだらうとも。」と二人はこんな問答をした。

岩吉を待たせて置いて、二人は草の生えた、半ば崩れたやうな石段を登つて行つた。

今登りつゝある路を此前は下つたのであつたが、かゝる石段のあつたことは記憶に殘つてゐなかつた。大きな石のぞんざいに積まれたのが歳月を重ねて愈々不規則になつてゐることゝ傾斜の急なことゝが此石段の著しい特色であつた。こんな段なら此前の時にも頭にとゞまるべき筈だと思はれるのに毛程も記憶になかつた。

「こんな段があつたのかな。」

「私も覺えてゐませんわ。」

「けれども他に路は無いんだからな。」

「さうですとも、現に今通つたあの門をくゞつた事はたしかに覺えてゐるんですもの。」

併し此際斯ういふ石段を登るといふ事に格別の興味があつた。

或人を師匠に持つた弟子が其師匠を自分一人のもののやうに考へて其師匠の細部に對する愛情迄を獨占するやうな傾もよくあることである。一人の役者を贔屓にしてゐる女が其役者の舞臺に演技してゐるのを自分一人の爲めのやうに考へることは有勝の事である。其のみならず世間の多くの女は自分の亭主の肉體も精神も自分一人の爲めに存在してゐるものゝ如く考へてゐるのである。之は獨占愛である、戀である。余の牡丹臺に對する嘆美の情も稍々之に近いと言つてよい。

唯一度見た許りの牡丹臺を二度目に訪ふ今もう自分の爲めにのみ存在してゐる天地に足を踏

み入れるやうな心持であることに氣がついて余はをかしく思つた。其も余の心がらか、妻も同じやうな心持でゐるらしく得々として段を上りつゝあるやうに見えるのも亦をかしく思はれた。

　牡丹臺は又直ちにお牧の茶屋を連想せしめた。彼女の明眸皓齒が人の心を牽くとか其賊と奮闘した話が心を躍らせるとかいふ事以外に此牡丹臺を背景にしたる葭簀茶屋の女主人として特別に尊敬の念を拂ふのであつた。此心も亦余と妻との間に大いなる相違が無いやうに見えた。

　段を登り詰めると空闊な臺地に出た。これは固より覺えのある臺地であつた。浮碧樓は右手に永明寺は左手に、お牧の茶屋は其中間に在つた。

　葭簀茶屋には舊の如く赤や青の手拭が下つてゐた。縁臺が置き並べてあつた。けれども人影が見えなかつた。お牧らしい女も居ず此前見た亭主も見えなかつた。

「おやお牧さんゐないらしいわ。」と妻が失望したやうに言つた。

「誰かゐないことはないだらう。まあ浮碧樓の方に行つて見ようぢやないか。」と余は其方に歩を移した。妻もついて來た。

　大同江に船を浮べる時、いつでも其川幅の廣いのに驚かれる如く、此處から見下ろす景色の雄大さも此程であつたかと新たに嘆美さるゝのであつた。綾羅島も大きい中洲だとは思つてゐたが此程迄に大きからうとは思はなかつた。以前見た時は一面に青い麥圃と岸の楊柳とであつたが、今日見るところ〴〵に百姓家が點在してゐて楊柳は岸許りでなく其百姓家の周圍にもあつた。

「どうかお休みなすつていらつしやい。」といふ聲が後で聞えた。其はお牧さんの聲ではなく、濁つた男の聲であつた。ふり返つて見ると髯の立派な、鼻の低い、額の狹い、眼鏡を掛けた、此間は板屋の中で俯向いて仕事をしてゐたお牧の亭主であつた。彼は不器用に腰を屈めて「お休みなすつていらつしやい。」と又くり返した。

　我等夫婦が縁臺に腰かけると亭主は不器用な手つきで茶を酌んで持つて來た。

「今日はおかみさんは居ないんですか。」と聞いて見た。

「一寸今裏で薪を割つて居ります。」と亭主は答へた。

「まあ。」と妻は驚いたやうに輕く言つた。此武骨らしい亭主が薪を割らないであのお牧が割つてゐるといふ事を余も面白いと思つた。さう聞いてから氣をつけて見ると板屋の裏に當つて鉞の音が聞えた。

　亭主は猶ほ武骨らしく手をもんで、

「どうも晝間はお暑いことで……」などと挨拶をした。この前お牧の店にゐた時は、彼は唯板屋の中に坐つてゐる許りであつたのが、今日はいかにも茶店の亭主らしくつとめてゐるのもをかしく思はれた。

「君等は四年前に此處に茶店を出したといふ事であつたが其前は國に居たのですか。」

「いえ、私は……」と彼は恥しさうに頭に手を遣つて、「もう其前十年餘りも朝鮮や滿洲あたりを經めぐつて居りました。」とさう言つてから又兩手を揉んだ。

「此男も矢張り豪傑のなれの果かな。」と余は考へ乍ら、

「さうですか。其はいろ〳〵面白い話があるでせう。」

　亭主は又恥しさうに默つて頭に手を遣つたが、其が決して上面許りでなくいかにも心から恐縮してゐるらしかつた。

「滿洲では宿屋の主人などにも大分志士を以て任じてゐる人が多いといふ事を聞きましたが……」

「さういふ方もあります。」と言つて亭主は又手を揉み乍ら、「滿洲の方へもお出でになりますか。」

「行つて見度いとも思つてゐますが……」

「一度は御出でになるのも面白うございませう。」

余はふと剛三の事を思ひ出しつゝ、

「君、石橋といふ男は知りませんか。」と何氣なく聞いて見た。

「石橋剛三でございますか。」

「さうです。」

「知つて居ります。」と亭主は無造作に答へた。さうして怪しげに余の顏を見つゝ、

「貴方も御存じでいらつしやいますか。」

「よく知つて居ります。此間京城でも一緒の宿に居りました。」

「それでは……」と亭主は余の姓名を言つて、

「貴方でいらつしやいましたか。」

「さうですが、どうして君は其を。」

「石橋は昨日此處へ參りまして貴方のお話をして居りました。」

「石橋がですか。」と余は驚かざるを得なかつた。

「まだお逢ひになりませんですか。」

「逢はないどころですか、京城で別れた切りなんですが……」

「何でも少し祕密な用事があつて、今迄誰にも居所も知らさなかつたといふ事ですが、もう其方の用事が片づいたやうに話して居りました。」

「いつこちらに來たのですか。」

「まだ間もないのでございませう。一寸京城に歸つてから今度は表立つて滿洲に行くことにしたとか言つてゐました。」

「以前は殆ど失踪したやうな形でしたがね、其では矢張り滿洲に行つてゐたのですか。」

「別に詳しい話もしませんでしたが、無論さうでございませう。」と言ひつゝ亭主は土瓶に湯を注すべく立上つた。さうして、

「粗末なお菓子許りで……」と言ひながら又不器用に妻に會釋をした。妻はあつけに取られて亭主と余の顏とを見比べてゐた。錢の音は尙ほ聞えつゝあつた。

石橋剛三！　彼が今平壤に在るといふ事は流石に驚かれた。滿洲に行つたものとは略推量してゐたのであるが、其がもういつの間にか此地に現はれてゐるといふ事は意外とせなければならなかつた。彼は何の必要があつて祕密に滿洲に行つたものか、さうして今は又平氣で此邊をのさばり歩いてゐるものか、其邊の事情に暗い余には凡て不可解であつた。

「本當でせうか。」と妻は尙ほ怪しむやうに言つた。

「眞逆うそでもあるまい。」と答へ乍ら尙ほ余の頭にも三分の疑ひをとゞめてゐた。亭主は片手に蓋を明けた儘の土瓶と、片手に其蓋を持つて板屋を下りて來た。

「石橋は何處に泊つてゐますか。」と亭主の近づくのを待つて余は尋ねた。

「花屋でせう。」と亭主は我等に茶をすゝめ乍ら答へた。

「花屋？」と余は又驚かざるを得なかつた。現に昨日余は花屋に行つてお筆の狂態に惱まされたのではなかつたか。其時石橋の事を聞いたのに對してお筆は何の便りもないと迄答へたのではなかつたか。其は餘りに信用の出來ぬ言葉だと思つた。

「昨日お筆さんが來た時に何の話もなかつたんですか。をかしいのねえ。」と妻も不審の眉を寄

せた。
　鐵瓶の音はいつの間にか止んでゐた。
「いらつしやいまし。」と部屋の陰から現はれつゝ明瞭した眼つきをして我等に挨拶したのはお牧さんであつた。
　我等は一度見た許りで牡丹臺の景色の讃美者になつたといふ事を話し、
「其にねえ、お牧さんにもすつかり惚れちやつたんですよ。差支ないでせう、夫婦で惚れたんだから。」
「いやですわねえ。」と妻はたしなめるやうに言つて笑つた。
「結構ですわ。」と言つてお牧はあざやかに笑つた。
　一匹の蜻蛉は浮碧樓から出て江の空に翔んだ。浮碧樓に蜻蛉のゐた事は思ひ出さうともせずにゐたのであつたが此前見た光景を又繰り返して見ることを面白く思つた。周圍の景色も此前來た時の時刻に近づいて來て、何處となく黄昏らしい色が認められた。亭主のいつの間にか母屋に這入つて俯向いて何かをしてゐるのも嘗て見た景色であつた。
「始終住まつて居りますと、さういゝ景色とも思ひませんですが……」と言ひつゝ、お牧は後ろの高い牡丹臺の尖角を見上げた。
　我等の乘つて來た船の岸に繋がれてゐるのが小さく見下ろされた。船頭の腰をかけてゐるのも略其らしく想像された。けれどもよく見ると同じやうな船が他にも一艘あつて、同じやうに船頭は腰を掛けてゐた。最前我等の來た時は自分の船一艘ほか無かつたやうに思つたのに不思議にも同じやうな船が二艘見えるのであつた。たゞよく氣を附けて見ると一人の船頭の頭はたしかに散髪であるが他の一人の方は髷があるやうに見えた。いつの間にか別に一艘の船が來て其處に繋がれたものと見えた。
　余が妻に其事を話してゐると、お牧さんは、
「あれは九曜館の船ですわ。矢張りお客樣を乘せて來たのでございませう。」と云つた。其時石段の方に當つて二人の男女の頭が見はれ、續いて又一人の男の頭が現はれた。
「あゝ噂をしてゐたら石橋さんですよ。」とお牧は言つた。
「さうだ、石橋だ。」と余も覺えず言つた。
「其にお筆さんと……」と言ひ掛けて妻は遲れて登つて來た一人の男を不思議さうに見た。
「お前に話したことがあると思ふ、あの男が壯士俳優の鶴見慶之助だよ。」と余は妻に教へた。斯んな話をしてゐるうちに三人は此方に近づいて來た。
「まあ、兄さんに奥さんだ。」とお筆は走り寄つて來て、「貴方所をお誘ひしたのだわ。」
「まあ、さうでしたの。失禮しましたわねえ。」と妻は嬉しげに立上つて迎へた。
「やあ。」
「やあ。」と互に言葉を交しつゝ、余も立上つて闘三の方へ近づいた。「君の來てゐることを今此處で聞いた處なのだ。此地に君がゐようとは意外であつた。」
「さうだつたらう。少し都合があつて何處にも知らさなかつたものだから。」と笑つて、「今朝洪にも逢つたよ。」
「昨夜も話しに來て置き乍ら石橋君の來たことを何とも言はなかつたのはひどいね。」と余はお筆をなじつた。
「だつて兄さんのところから歸つて來て見たら石橋の兄さん來てらつしやしたんですもの。私もびつくらしたのよ。」
「一昨日此地に來たのだが一寸用事があつて他の家に一泊して、友人と一緒に一日此邊をうろつき夜になつて初めて花屋に行つたのだ。」と闘三

三も附加へて言つた。
「其で長く平壤に滯在する積りかい。」
「さう長くはゐられまい。」
「京城に歸るのかい。」
「はつきりは判らぬが、多分滿洲に行く事になるだらう。」
「さうか。」
余はお筆の上にかゝつてゐた疑團が一時に氷解したやうに思はれた。お筆の此地に來たといふ事も何も深い意味は無かつたので、矢張剛三と一緒に滿洲に行くといふに過ぎないのであつた。此時ふと氣がついて見るとお筆の右の中指にはまぶしく光つてゐるものがあつた。これは嘗て南山樓の浴場で彼女が流しに俯向けてある桶の底の上に置き忘れてゐたものに相違なかつた。此前逢つた時も昨日あつた時も確かに其は眼にとまらなかつた。剛三の來た事と其指環の指に戻つてゐる事とも略其意味がよめるやうに思はれた。お筆が余に要求する處のものを金錢かとも疑つて見た事があつたが其も當つてはゐなかつた。剛三の手には我等の想像のつかぬ方面から私に支給さるゝものがあるのであらう。
剛三を見ると一番に思ひ出すのは清涼里の事であつた。其夜の事を話し始めると、
「其事は洪にもお筆にも聞いた。全く失敬したよ。あの晩或友人の所によると一刻も緩うすることの出來ぬ事件が持上つてゐたので、すぐ其足で奔走を始めたのだ。」
「あの日に滿洲へ出發したのかい。」
「なに、滿洲に行つたのは二三日してからであつた。けれども少し祕密を要することであつたから、もう宿にも歸らず一二の友人の外には居所も明かさず到頭其儘になつてしまつたのさ。」
と剛三は言つた。
「初めは心配したけれどもお京はじめ皆存外平氣だもんだから何か理由があるのだらうと思つて僕も其儘にしてしまつたのだ。」
「南山樓では馴れてらあね。」と言つて剛三は笑つたが其に附いてお筆も笑つた。
余はそんな談話をし乍らも興味は其方に無かつた。お筆は最前から屢々其大きな眼を瞠つてお牧の方を見たがお牧は此茶屋の女主人として凡ての責任を一人に背負つてゐるやうに萬遍なく愛嬌を振り撒いてゐた。慶之助が一人ぎごちなく傍に腰掛けてゐるのを見て彼女は其方にも愛想をした。
「おかみさん、もう此處に永年いらつしやいますんですつてね。」とお筆はお牧の美しい眼と皓い齒とを見た。お筆の眼には此江山の晩景は芝居の書割程にも其注意を牽かぬらしかつた。
「さうでございますよ。足掛け四年になります。」
「でもよくね。」とお筆は憐れむやうな目つきをした。お筆に取つては其明眸皓齒を嫉ましからうが其境遇は羨ましいものでなかつた。人間の氣と夜とのあるところなれば如何なる果遂も放浪して見ようとするお筆に取つては此江山の一隅に繫がれてゐるお牧は憐れむべき女に見えたかも知れなかつた。「迚も私等には辛抱は出來ませんわ。ねえ奥さん。」と妻をも無論自分の仲間と信ずるものゝ如く話し掛けた。
「さうですともねえ。」と妻はいつも繰り返す心からの感動を表白した。さうして、「お筆さんあちらへ行つて御覧にならなくつて。」と促すやうに言つた。
「私も御一緒に參りませう。」とお牧は先に立つた。
三人の女は僅に違ふ脊丈を並べて夕闇の棚引きそめた浮碧樓の方へ歩みを運んだ。
三人の女は略釣り合つた脊丈をして浮碧樓の

外れに立つてゐるのが茶店の床几から遠望された。眞中に立つてゐるのはお牧であつて流石に主ぶつて何かと説明の任に當つてゐるらしいのがよく見えた。妻はお牧の手の向ふところ顏の向ふところに素直に振向きつゝあつたが、お筆は一人思はぬ方向を見てゐることもあつた。江山を一人で背負つてゐるお牧と氣紛れに天下を横行しようといふお筆と常に周圍の事情に支配されて行く妻との對照が影繪の如く面白く眺められた。

こちらには又天下の志士を以て任ずる剛三、革命談のうちに在りさうな茶店の亭主、放浪生活を試みつゝ意氣地のない慶之助等の對照も面白く考へられぬでもなかつた。さうして我等夫婦を除くの外は此牡丹臺といふやうな處を背景にして立つてゐるのに孰れも相應しい人々だとをかしく眺められた。

暫く默つてゐた後余は慶之助に言つた。

「君はいつ迄此方にゐるかね。」

「芳宴閣は都合によつて此處を打上げてから解散することになりさうですから、私は石橋先生に滿洲へ連れてつて戴かうかと思つてゐるのです。」

「滿洲に行つてどうする積りかい。」

「あちらの新聞通信員に知つたものも居りますし、又安東縣へ行つても奉天へ行つても私等仲間のものも居りますから。」

「矢張り放浪生活の興味といふやうなものが忘れられないのだらう。」と余は笑つた。

「えゝまあさうですね。」と慶之助も淋しく笑つた。

「其なら滿洲にでも奉天にでも行くがいゝだらう。實際さういふ生活も面白いものだらうと僕も略想像がつくよ。其代り自分の生活は悲慘だなどと泣言は言はぬ方がいゝだらう。」と余は大邱で彼の言つた言葉を思ひ出した。

「けれども其悲慘だと感じるうちに誇もあれば慰藉もあるのですからね。」

「其もさうだらう。さう悟つてゐるのなら其でいゝさ。」

其處へ三人の女は此方へ歸つて來た。妻は近づきつゝ笑ひ乍ら斯う言つた。

「今お筆さんが面白いことを仰しやつたんですよ、三人であの崖から下へ情死をしないかつて。」

其時同じく笑ひ乍ら此方を見たのは明るい透き通つたやうなお牧の眼と沼のやうな大きなお筆の眼とであつた。

四十

其から又二三日經つてからの事であつた。誰の發起といふ事もなく大同江に大きな船を浮べて酒肴をも滿載し別の小舟に妓生や樂人を載せて舟中に樂を奏し演舞をさせつゝ江を漕ぎ下つて萬景台に迄行つて見ようといふ事が咄嗟の間に成立つた。其妓生舟を浮べるといふ事は嘗て余が府尹に話した平壤策中の一部分が試に實行されるものらしく誰人の口から獻策されたものかは知らなかつたが余は特に賛成を表した。

扨其用意が大變であつた。妓生舟に關する一切の準備は洪さんに、料理は松屋に、船の事は九曜館に一任し、幹事には支局長を推す事にした。

折節松屋には客が少なかつたので、女將は快く引受け萬事行屆いて準備をして吳れるらしかつた。尤も剛三は今度は或都合の下に花屋に泊つたけれども元來が松屋黨で殊に女將とも古い馴染であつたので、

「女將さん賴むよ。」と彼の口から手輕く賴んでしまつたのであつた。

「御馳走の準備が大變だね。」と座敷に來たお桂にいふと、

「何にせよ多勢様だもんですからねえ。」とお桂は笑つた。
「何人位になるのかい。」
「旦那様も御存知ないのですか。」
「知らないよ。」
「大内さんに伺つても其度々に變るのですよ。」
「府尹も行くのかね。」
「多分いらつしやるんでせう。」
「さうすると、いろんな人が行くことになるね。お牧さんも連れてくんだと大内君が言つてゐたが……」
「お牧さんと仰しやるのはあの牡丹臺の茶店の?」
「さうさ。」
「何でも是非引張つて行くんだとか仰しやつてゐました。」
其處へお花は電報を持つて來た。見ると大邱のお久さんからで今日著くといふ簡單な意味の通知であつた。お久さんの主人が舊義州の方へ轉任になつたのでお久さんも其あとを追つて近日出發するといふ事は前以て報知があつたのである。
「丁度いゝぢやないか。其ではお久さんも明日は引張つて行くことにするさ。お桂さん又僕の方で一人殖えることになつたよ。」
「承知致しました。」とお桂さんは引下つた。
「お花さん明日一緒に行かないか。」
「有難うございます。」とお花さんは例の通り迚も駄目とあきらめたやうな返事をする。其處へ又一人の女中が知らせて來た。
「大内さんからお電話でございます。」
早速電話口へ出て見ると愈々明日の午前九時迄に例の稅關横迄行つてくれ、稅關長も同行することになつたから稅關長のうちで待つてゐてくれてもいゝ、といふやうなことを言つて、
「明日は意外の參會者が二人あることになつたです。其だけは幹事の苦心として聊か諸君を驚かすに足る積りです。」と得意らしく言つて電話を切つてしまつた。稅關長の參會なども意外の感がするのであるが其他にまだ特に意外とすべき二人の參會者といふのは誰であらうか、一寸想像がつかなかつた。

四十一

お久さんは午後の汽車で遣つて來た。妻との間には其後の起居が互に語り合はされた。叔父夫婦は相變らず壯健であるが義州のやうな寒氣の強いところへ行くのは堪へられぬことであるので妹のうちに當分同居することになつたとお久さんは話した。
「主人も一寸お目にかゝり度くもあるし、平壤へ降りようかとも申してゐましたが何分急な事であつたものですから其間が無しに參りました。」とお久さんは又挨拶した。南山樓では始終床の間に出して置いた例の壺も此方へ來てからはもう押入にしまつた儘にしてゐたので暫く忘れてゐたが、お久さんを見るとひし〳〵と思ひ出された。妻とは爭はれぬ骨肉の親しみを示し合ひつゝあつたが半分眉にかくれてゐる大きな黑子が余には矢張りいゝ心持がしなかつた。
「其つてばねえお久さん、明日大同江に舟遊びがあるのでねえ、もう貴女も一緒に行くことになつてるのよ。」
「まあさうですか。私舟遊びなんかいふもの一度もしたことがないわ。」
「御草臥の處御迷惑かとも思ひましたがね。何でも明日は大分大仕掛の遊びらしいですから……」
「いえ結構ですわ。これから義州へでも行つたらもう愈々くすぶらなけりやならぬのですもの。いゝお伴をさせて戴きますわ。」とお久さん

は心から嬉しさうに言つた。妻よりも若い筈である其顏がいかにも世路に草臥れたらしく古びて見えた。

「義州てどんな所なんです。」

「一寸いゝ處ださうですけれど、何にせよ寒さがねえ。」

「さうねえ、其では迚も叔父さんや叔母さんはねえ。」

「さうよ、妹の處に殘して置くのも私氣がかりなんだけれど、仕方がないの。」とお久さんはいかにも氣がかりらしく見えた。大邱に逗留中、腹違ひの姉妹等が皆心を一つにして叔母はもとより叔父をも可愛がつてゐるのを美しく見たことや、內地から釜山へ、釜山から大邱へと餘儀なくせられて來た彼家一家は更に又北へ北へと推し寄せらるべき運命の下に在ると思つたことやが今更のやうに思ひ出された。さうして其がもう事實となつて現はれて來てゐることを面白くも思つた。

「其でお久さん、いつ貴女出發つの？」

「明後日は是非出發たうと思つてるの。」

「明後日？　其ぢや貴女明日一日は丸つぶれになるし何處も見物する間もないぢやありませんか。」

「私何處も見物なんかしたくないわ。も一度貴女方に逢つて置き度い許りに寄つたんだもの。」

「でも其では餘り急がしいわ。」と妻は殘惜しさうに言つてゐた。

「まあ緩りなすつたらいゝでせう。」

「有難うございますが、もう其手順になつてゐますから。」

「さうですか、其だと石橋やお筆やたんかと御一緒になる譯だね。」と余は妻に向つて言つた。

「さうですわねえ。お話相手があつてようございますわねえ。」

「どんな方？」

「いづれ明日皆お逢ひだわ。其から鶴見も一緒らしいぢやありませんか。」

「さうだ。」と答へつゝ余は我等の知つたものが一時に北移して行く時の勢といふやうなものを思つた。

四十二

翌朝九時前になつて愈ゝ稅關官舍の横手に出向いて見ると、支局長は鳥打帽を被つてステッキを擡つて悠然と江の方を見渡し乍ら突立つてゐた。余等が近づいた時彼は又例の「タ、シン……チョッソ……」などいふ少數の韓語で一人の船頭と話してゐた。

「大內君、いろ／＼お世話ですね。」と後ろから聲を掛けると、

「早かつたですね。」と振向いて、「もう官舍に這入つてゐる人も大分あります。貴方がたも少しお休みになりませんか。」と先に立つて案內せうとした。

「昨日電話で一寸申上げて置きましたが妻の從妹も一人同伴しました。」と言つてお久さんを紹介し、「まだ船橋里の方も知らないですから、少し時間に餘裕があれば、一寸連れて行つて來ようかと思ひますが……」

「ようございますとも、行つていらつしやい。若し貴方がたの方が遲かつたら此方から船を船橋里の方へつけます。渡船をさういひませうか。」と言つて支局長は何とか言つて船頭に命じてくれた。我等三人は河原に下りた。

よく見ると多くの韓船の中に遊船らしく日覆を張りたる二艘の船があつた。二艘共に日本風の船で一艘の方は大きかつた。

「此方ですか。」と河原から聲を掛けると、

「さうです。」と支局長は舟の上に立つて點頭いた。

「これなら幾人でも大丈夫ですね。」と言ひ乍ら余はふと思ひ出して、「一昨日お話しの意外な人二人といふのは誰ですか。」

「其うち實物でお目に掛けます。」と支局長は得意らしく笑つた。

「旦那今日は。」と大きな船の上で頭を下げたものがあつた。見るといつもの岩吉であつた。

我等が韓船に乘り移つて四五間漕ぎ出した頃岸の方を見ると洪さんが突立つてゐた。一寸頭をさげると洪さんも會釋をした。船が進むに從つて右岸の景色がだん／＼目に入るやうになつて來るので、あれが大同門、錬光亭と一々お久さんに教へて遣つた。

「まあいゝ景色ですことねえ。平壤より大邱の方がいゝやうに聞いてゐたけれども、こんな景色は貴方大邱にはありませんわ。」

「此上に例の有名な牡丹臺があるんですがね。今日の船遊びは川下へ下るんださうだから殘念ですが、其牡丹臺へ御案內することが出來ません。」

「其處もいゝ景色なんですか。」

「其はいゝ景色なのよ。」と妻は口を出して、「其處に茶店を出してゐる日本人に、お牧さんと言ふ其はいゝ女がゐるのよ。」

「まあ斯んな邊鄙にねえ。」とお久さんに尙ほ平壤を輕蔑してゐるやうな口吻であつた。

「器量がいゝ許りぢやない、確りした人よ。」と其から暫く二人の間にお牧が話題になつてゐた。

余は其話を聞き乍ら見て居ると、二臺の車の向うより驅けて來て、岸の上に止まるのが見えた。初めの車から降り立つたのは一人の日本婦人で、あとの車から降り立つたのは朝鮮婦人であつた。もうだん／＼と距つて來たので何人であるかはつきり判らなかつた。日本婦人の方もどうも姿形がお筆とも違ふし、其らしい人を想像して見ても思ひ當るものがなかつた。

一通り船橋里を案內して再び韓船に乘つた時向う岸を見ると、岸の上には多勢の人が立つてゐるやうに見えた。けれども日人、韓人、男、女の區別もはつきりはつかぬ位であつた。

「間に合ふでせうか。」と妻は心配さうに言つた。

「若し此方が遲かつたら向うから迎へに來て遣らうといふ事であつたから大丈夫だよ。」

「其だと船から船へ乘るのですか。」

「さうさ。」

「怖いわねえ。」と當惑さうに言つた。

「早く遣れ。」と日本語で言つて見たが韓人には通じなかつた。急いで漕ぐ眞似をして見せたら直ちに領承して盛んに漕ぎ始めた。韓人車夫の無暗矢鱈に走るのが思ひ出された。

岸の上の人は暫くぞろ／＼と蠢めいてゐるらしかつたが、即て河原に下りるのが見えた。彼等は皆船に乘り込むものと見えた。あとに殘つて尙ほ岸の上に立つてゐた一人の人が兩手を擧げて、我等の船を招く形をした。其は支局長に相違なかつた。こちらも手を擧げて承知の合圖をした。

船は三人をゆさぶるやうに動かし乍ら矢よりも早く飛んで、忽ちもう中流を過ぎ向ふ岸の光景もよく見え始めた。大方皆船に乘り移つてしまつてゐたが、まだ纜は繋いであつた。大きな船の方の舳に立つて又我等を小手招ぎしたのは支局長であつた。さうして此時支局長の傍らに立上つた一人の日本婦人と一人の韓人の女とが又各々ハンケチを振り乍ら我等の方を見て笑つた。これはさつき車から下りた二人の女に相違なかつた。

「お京さんぢやありませんか。」と妻は叫ぶやうに言つた。

「成程さういへばお京らしいね。其にあの朝鮮

人の女は？」
「一寸判らないわ。何だか妓生らしいわねえ。」
「素淡だ。」と余は覺えず叫んだ。
「あゝ！　さうですわ。あの妓生ですわ」と妻も應じた。さうして我等は又更にハンケチを振り動かした。支局長の意外な二人と言つたのが卽ちこれだと余は直ちに合點した。斯くするうちにも船頭は黑い肉塊を躍らせて漕いだ。
近づいて見ると船の中にはいろ／＼の人が集まつてゐた。よくも斯んなに驅り集めたものだと思はるゝ位集まつてゐた。
「やあ。」「やあ。」と諸處から聲を掛けられた。其うち船頭は巧みに舷に舷を寄せて乘り移るやうにした。
「賑だわねえ。」と妻とお久さんとは囁き合つてゐた。お京と素淡とは二女の手を取つてくれた。
「僕等の爲めにお待たせしたのではなかつたですかしら。」と余は支局長に挨拶し乍ら座中の諸君を見渡した。府尹もゐた。剛三もゐた。あの人が稅關長だらうと思はるゝ人もゐた。淇さんもゐた。
「此方へ來たまへ。」と剛三は麾いた。府尹は余に稅關長を紹介してくれた。
「どうです。此兩人は意外ではなかつたですか。」と支局長はお京と素淡とを顧みた。
「此間も淇さんと出會つた時、京城で落合つた仲間が大概皆此方に來てゐるが、唯素淡とお京とがゐないのが淋しい樣だと話したのさ。其を大内君が傍でゐて聞いて、其ぢや其二人を呼ばうぢやないか、と提議し、直ちに可決したやうな譯さ。君にも相談せうかと思つたが、當日になつて驚かすのもいゝだらうといふので默つてゐたのだ。」と剛三は說明してくれた。
船中には尙ほ樣々の人がゐた。お牧がゐた。松田もゐた。慶之助もゐた。沼田氏もゐた。
「よくいらつしやいましたね。」と余は沼田氏の顏を見た時挨拶した。
「府尹が出掛けに寄られて、是非とお勸め下すつたので俄にお邪魔に上る事になりました。」と沼田氏は其小まめな體を二三度搖がすやうにして答へた。
「其は結構でした。お伴れの方は？」
「あの男は本日他に用事がありまして。」と斯んな話をし乍ら尙ほ座中を見渡した。色の黑い三十餘りの藝者が一人と十二三のお酌とがゐた。三味線や鼓が持込まれてゐた。お筆が見えなかつた。
「お筆さんはどうしました。」と余は支局長に聞いた。
「今電話を掛けさせに遣りました。」と大内君は言つた。
「もうお筆だけなら構はずに出してしまつたらいゝだらう。」と剛三は言つた。
「其りやいかん。今日はお筆さんが來るといふのをだしにして稅關長や沼田君を引張つて來たのだ。いつ迄も待たなくちやいかん。」と府尹は剛三を抑へるやうに言つて笑つた。
「さうですとも、お筆さんが來てくれなけりや今日の計畫はすつかり崩れてしまふです。」と支局長は心配さうに言つた。其時岸の上に現はれた一臺の車はお筆を載せてゐた。
「お筆さんだ。」といふ聲が二三ケ所に起つて、座中が色めき立つた。

四十三

車を下り立つたお筆は船の中に在るものが騷ぐ程騷ぎもせず悠々と河原に降りて容易に船に乘らうとはしなかつた。
「さあ早く／＼。貴女が來るのを皆待兼ねてゐたのだ。」と支局長は聲を掛けた。

「だつて、怖くつて乘れやしないわ。」と眉を寄せて見せた。
「さあ此手をお取りなさい。」とお牧は艫の外に手を突出した。遂に支局長と二人に手を取られたり腰を推されたりして左程にもないところを大格鬪のやうにして漸く乘つた。其顔はいかにもあどけない子供々々した風に見えた。
お筆が乘るとすぐ纜は解かれた。さつきから艫にあつて立働いてゐた人は例の岩吉の外に二人の船頭と一人韓人とも日本人とも一寸見分けのつかぬ洋服を着た男とであつた。昨夜松屋の女將にお花さんを伴れて行く事を交渉した時、女將は、
「女中だけはどうか御免遊ばして。其代り宅の料理番をお給仕旁々一人差出しますから。」と言つた。其料理番に相違ないと思はれたが、若し其なれば豫て話のあつた朝鮮人に相違なかつた。果して朝鮮人とすれば其は岩吉以上に日本語の巧みなハイカラであつた。さうして極めて謹み深くつて何事をするにも忠實で慇懃らしいのが誰の目にも認められた。其男は其邊に亂雜に取り散らされてゐた一枚の座蒲團を見出して剛三の傍にお筆の座席を作らうとした。
「私この邊がお話相手があつていゝわ。ねえ貴女がた。」と言つてお牧と妻との間に坐り乍ら座中を見渡して一禮した。其顔には初心らしい羞恥の色を見せた。
「今迄何をしてゐたのだ。」と剛三は叱るやうに言つた。
お筆は剛三の眼を怖れるやうに一寸顔を背けて、
「大變お待ちなすつて？」と妻を見た。
「いゝえ私達も今來た許りなんですよ。」と妻は正直になだめるやうに言つた。
舟は岩吉が日本風の櫓を漕いで、他の二人の船頭は竹棹で推してゐた。我等の船と一緒に運動を始めたのは妓生を載せた小さい舟で、其處には妓生が五人に樂人が五人乘つてゐた。妓生は一處にかたまつて皆不思議さうに我等の舟の方を見てゐた。特に素淡の一人交つてゐることが彼等に取つては何よりも怪しき事のやうに見えた。樂人は京城で見たのと同じく大方年をとつてゐたが、其等も皆喋りを鎭めて長い煙管を銜へてゐた。
我等の舟中では思ひ／＼に話が始まつてゐた。お京とお筆とは斯んな話をしてゐた。
「姉さん草臥れは出なくつて。昨夕あれから待つててよ。」
「さうでしたらうねえ。でもね素淡さんが淋しがつて離さなかつたんですもの。今夜は貴女の方に泊めて貰ふわ。」
「お京さんはいつ來たの？」と余は傍から聞いた。
「一昨日です。」
「本當によく來たね。其にしてもよく出られたねえ。」
「えゝ、丁度お客切れでしてね、其に素淡さんも私が行くんなら行つて見度いつて言ふんでせう。女將さんが何とか言つてゐたけれど來てしまつたわ。」
「相變らず亂暴だな。」
「だつて貴方がたが呼んだんぢやありませんか。其でも素淡さんが來て嬉しいでせう。」と素淡の手を取つて二三度動かした。素淡は笑顔を作つて見せた。
松田と沼田氏との間にも何か話が始まつてゐるし、洪さんは向うの舟の老樂人と水を隔てて話してゐた。
洪さんは樂人たちの言つたことを取りついだ。
「もうそろ／＼始めても宜しうございませうか。」

「いゝとも。」と洪さんは答へた。洪さんが又其を通譯すると同時にドーンと太鼓の音がして――其太鼓は舳の方に吊り下げてあつた。――其から長笛、伽耶琴、洞簫、鐵琴等が各々思ひ／＼の音を出して其處に諧調のある音樂が奏し始められた。我等の心も流石に浮き立つた。舟遊びだといふやうな心持が凡ての人の顏の上に現はれた。

「どうです、妓生舟もあの調子では困るですな。」と府尹は言つた。よく見ると妓生等はハイレートを吹かして器樂の節奏に就いては知らん顏をしてゐた。長鼓を打つてゐる老人がつゝましやかに口のうちで唄を歌つてゐた。器樂の音が濁り水の上を這うて人の心をそゝる許りで、目のあたりに見た舟中の光景は府尹の言つた通り殺風景なものであつた。

「もうそろ／＼と此方も始めようぢやありませんか。」と言つて支局長は酒の燗を命じた。鍋が漕ぎ出されてから朝鮮人の料理人は洋服姿の膝を立てたり折つたり頻りに鍋の方で立働き、三十餘りの色の黑い年増と鼻の低い田舎びたお酌とは其を手傳つてゐた。

「はい。」と料理番は支局長の方を向いて兩膝を突いて其上に手を載せつゝ、命令を待つやうな顏をした。支局長は重ねて酒の燗の事を命じ、御馳走をも開く事を命じた。

「かしこまりました。」と料理番は即ちに命を聞いて前よりも一層敏捷に立働いた。もういつの間にか七厘に火が起つて藥鑵の湯がたぎつてゐた。其中に樽から出された酒が徳利に移されて漬けられた。船は中流に出て下流へ／＼と漕がれた。妓生舟はより／＼に近よつたり稍々離れたりしつゝ、相變らず單調な靜かな樂を奏してゐた。

四十四

一つの藥鑵の湯では二本づつの銅徳利の燗でも忽ちに缺乏を告げて料理番は獨りで狼狽へた。色の黑い年増も鼻の低いお酌もまご／＼してゐる許りで役に立たなかつた。先つ見兼ねて立つたのがお牧で、お京もつゞいて手傳つた。重詰の御馳走は人數に比べては餘りに上品で、一重の鮓は瞬間に、府尹、松田等の前で忽ち平げられた。

「あと御婦人方の方にも廻して置かないと。」と支局長は幹事丈に氣を配つた。

「もうこれより無いのかね。」

「まだ一重はある筈です。ねえ君。」と料理番を顧みた。

「はい。」と料理番は世話しい中で尚ほ膝を折つて、「ございますか、出しませうか。」

「出してくれ。もう一本はあの邊で無くなつてしまつた。」

「はゝ、これは申譯が無かつたな。僕はまだ澤山仕入れてあるのかと思つた。」

「今から、これぢや心細いね。」

「まだ色んなものがあるさ。食ふものが無くなつたところで酒さへあればいゝだらう。」と支局長は舳に据ゑてある一斗樽を顧みた。其傍にはビールの繩掛りも林立してゐた。

「男の方はどうでもいゝけれど、婦人方にひもじい目をさせては申譯が無い。其邊の御馳走はなるべく此方に廻してくれ給へ。」と支局長は頻りに氣をもんでゐた。さういふうちにも間二三の長い手は重の中に落ちた。

「其處で、彼方の先生達にもどうかせなければなるまい。」と府尹は妓生舟の方を顧みた。小さい艀は此時我等の船を稍々離れて淋しさうに向うの方を流れ器樂の節奏もいつの間にか止んでゐた。

「さうだ。忘れてゐた。」と支局長は手を打つて、「おい君、妓生達に食はすものは別に出來て

ゐる筈だね。」
「はい。」と料理番は又謹直にかしこまつて、「出來て居ります。出しませうか。」と命を待つ。
「出して遣つてくれ。……こら其方の舟を此方に漕ぎ寄せろ。」と支局長は立上つて命令すると妓生舟は漸次此方に漕ぎ寄つて來た。
「忘れてゐたが、素淡に勸酒歌を唄つて貰ひ度いですね、洪さん一つあなたから勸めて下さらんか。」
「一人ではどうでございますか。」と言ひ乍ら洪さんは素淡に勸めた。素淡は低い聲で唄ひ乍ら余等に酌をした。
素淡の勸酒歌が終らぬうちに妓生舟は纜を摩る位に近より終りの一二節は五人の妓生も同吟した。さういふうちにも御馳走は廚から卅に運ばれ、ビールの瓶の一綴りは樂人の手に渡された。
舟は又少し纜離れたが、見ると妓生舟の中も今迄とは違つて色めき立つてゐた。妓生等が爭つて夏蜜柑を食つてゐるのが明らさまに見えた。
其うちに我等の舟の中も大分銚子の數が重なつて、府尹の力強い笑ひ聲や、[illegible]のぞんざいた言葉の外に松田や、稅關長や支局長やの聲高い話聲が混雜して聞えた。
お爭は妻とお牧の間に坐つた儘つゝましやかに控へてゐた。けれども顏はもう櫻色に染まつて眼は時々怪しき光を放つやうに見え、お花の落著いた拔かぬやうな態度とは著しい對照を爲してゐた。
「お牧さん、貴女も少し飮んだらいゝだらう。」と余は盃をさして、「今日はよく出られましたね。」と改めて挨拶をした。
「珍らしいお催しだものですから。……萬景臺といふのも名許り聞いてゐまして、まだ一度も參つた事がございませんものですから。」
「萬景臺は知らない人が多いやうですね。松田君、君は？」
「僕も初めてだ。」
「稅關長は？」
「僕はよく知つてゐます。萬景臺の一部分は稅關の所在地面になつてゐますから。」
こんな話をしてゐるうちに船はだん／＼と漕ぎ下されて鐵橋の下を過ぎた。川幅は益々廣くなつて、兩岸の堤にはところ／＼に楊柳が柔かい丸い綠をつゝねたやうに茂つてゐる許りで他に何も眼を遮るものの無い廣漠たる眺めであつた。
「いゝ景色だ。これは又他で見られぬ景色だね。」
「大陸のやうな感じだね。」など話し合つた。川水は風を受けて少し漣波を上げてゐたが潮手であるので船は早く進んだ。
「萬景臺は？」
「今は丁度潮ちきつたところでいゝ鹽梅ですが歸りが、少々難儀ですぞ。」と稅關長は言つた。
「丁度いゝだらう、上潮になつて。」と府尹は言つた。
「駄目だよ、此位の船になると此處の潮を上るには餘程潮がなくてはいかんからな。十二時過ぎなくつちや駄目かも知れん。」
「其は大變だ。」と皆が聲を揃へて言つた。
「其んな筈は無い。」と支局長は反對したが、此は本職である稅關長の言葉を打消す力は無かつた。
「仕方がない、歸れる時に歸るのさ。」といふ府尹の一言に決局皆が贊成せざるを得なかつた。
「お爭さん一つお踊りよ。」とお京は促すやうに言つた。
今迄有るか無きかの態であつた藝者と妓生と

お酒。人の眼にとまるやうになつて、三味線は袋か、縮緬の色の褪めたよれ／＼になつた大黒、小豆色の風呂敷の中から取り出された。

「いよ／＼お京さんの腕前が見出来さうでございますね。」と洪さんは悪戯な口許に微笑を湛へた。

「さうだ。其を待設けて己等は来たのだ。」と松田は乗出した。

「本当にねえ、いつからかお約束だつたのねえ。」と姐も調子を揃へた。

「まあ、大変ですわねえ……」とお筆は恥かしげにもおど／＼して見せた。大同江の賑々とした江心の船の中で彼女の踊を見ることは余に於ても楽しい待設けであつた。

三味の音がした。色の黒い藝者の膝の上には古びた三味線が載つてゐた。ポッン／＼と同じやうな音色が二三度引きつゞいてした時、お筆の顔にもお京の顔にも妓の顔にも抑へ切れぬ冷笑の影が漂うた。

「貴様、其で弾けるのか。」と府尹のかまはない一言に皆いゝ機會を得て吹き出してしまつた。

「弾けてよ貴方。」と藝者は顔を真つ赤にし乍らも其でもジャラン／＼と弾き立てた。其音は賤しく騒々しかつたが余は此女を可哀想だと思つた。

「おやあ、私唄ふわ。」と言つてお筆は其賤しい三味に合はせて賤しい唄を歌つた。

「およしなさいよ。そんな唄。」とお京は叱るやうに言つた。けれども其を弾いた藝者は「コリャコリャ。」と言つて得意気にあとの唄を待つてゐた。

お筆はお京の方を向いて藝者に見えぬやうに一寸舌を出した。其は人の心に反感を起さす處もあつたが、美しい顔の打解けた表情が寧ろ快く人々の眼に映つた。藝者の尚ほ「コリャコリャ。」と言ひ乍ら續けさまに弾き立てる音は騒々しかつた。

「斯んな三味で踊れるものか。」といふお筆の高慢くさい表情を悪むものはなかつた。お牧やお久さんの顔にも侮蔑の色が漲つてゐた。

誰も續けて唄ふものがないので藝者は、

「小松様何か踊り。」とお龍に命令した。お龍は蒼色い顔をして、

「姐さん、何にしまひよ。」と古びた舞扇を持つて其前にかしこまつた。

「可愛い児だわねえ。」とお京はさうことなしに言つた。

此お龍の踊の爲めにお筆の踊の問題は立消えになつた。さうして皆苦々しさうに酒を飲んだ。

「でも子供に似合はん程のたちはいゝやうだ。ねえお京さん。」と余は言つた。

「本当ですわ。これでよく教へたら上手になるでせう。」とお京は言つた。船板を踏む力強い小さい足音は哀れに余の耳に響いた。

「此子だらう、近頃大分から来たとかいふのは。」と府尹は支局長を顧みた。

「さうです。」と支局長は答へた。

初めから默々として酒許り飲んでゐた沼田氏は膝を抱いて熱心に其踊を見てゐた。其痩せた小ぢんまりとした體は其自身が鐵槌のやうに小堅く見えた。

酔は川風に吹き拂はれて飲む片面から醒めて行くやうな心持であつた。

「もう騒々しい三味は止さんか。」と府尹はつく／″＼飽き／＼したやうに言つて、

「お筆さん、僕は貴女の踊を見る爲めに来たのだ。是非一つ見せて下さい。三味線に困つたなあ。」と藝者を目の前に置き乍ら當惑したやうに言つた。「お牧さん、貴女弾けないか。」

「駄目ですよ貴方。」とお牧ははつきりした聲で

打消した。

「困つたなあ。」と府井は余の妻からお久さん、お京といづれもの顔をづらりと見渡して、どれにも望がないとあきらめたかの如く、絶望したやうに言つた。

「お京さん彈けよ。」と余は此前の事を知つてゐるのでお京に勸めて見た。

「厭ですよ。」とお京は余に目くばせして、其爲めに來てゐる商賣人を閑却することを尤めるやうに言つたが、お筆は其にかまはず立上つたので遂にせうことなしに三味線を膝にのせた。

渋さんや稅關長や松田は拍手をした。

お京の三味は相變らず覺束なかつたが、其でも藝者の程覺しくは聞えなかつた。處々合の手に間違つた時にはお筆は微笑したが、其でも眞面目に彈つた。船の中のものは皆鳴りをしづめて見た。岩吉も櫓の手を緩めて日蔽の柱の蔭から覗くやうにして見た。

ふと氣がついて見ると川幅は愈々廣くなつてゐた。妓生の船は我等の船を二間許り離れたところを漕いでゐたが、樂人の中にはビールのコップを持つて口をつけて此方を見てゐるものがあつた。妓生は互に凭れあつて口の中で何かを唄ひ乍ら組み合せた手を一緒に膝の上で動かせてゐた。樂人の二三人の視線が我船との連絡を保つてゐる許りで、二艘の船は全く別々の世界を載せて流れてゐるやうであつた。我船にはお京のふるへるやうな聲にお筆の力強い足拍子が交つて岩吉の櫓に置いた手は殆ど止まつてゐるやうに見えた。

お京が覺束なく彈き終つてお筆がしなやかに船板の上にお辭儀をした時には「ワーッ」と一座が賑かになつた。上部はどこ迄も未通女らしく裝つて「これ見よ」と言はぬ許りに一座を征服しようとつとめた痕跡はお筆の顏に隱すことが出來なかつた。皆の眼は彼女の上に注がれて口々に喝采の言葉が述べられ澤山の盃は一時に其前に集まつた。一方でなかつたお京の苦心は誰も察するものがないらしいのを氣の毒に思つて余はお京に盃をさした。

「大變な骨折りであつたね。」

「全く骨が折れたわ。」とお京は輕く笑つて、「お筆さん隨分惡かつたでせう。」と何處迄も媚らしい態度を失はなかつた。

殆ど存在を認められない許りか、全く侮辱の的になつたも同じな藝者は頻りに酒を飮んでゐた。

「姉さん有難う。」とお京の返した三味を受取り乍ら、

「彈惡かつたでせう。」と言つた彼女の聲は妙に乾いて上づつてゐた。

一座は沸き立つやうに賑かであつた。莊嚴な沼田氏迄が松田を相手に相好を崩して話してゐた。稅關長は舷に背を凭せて詩を微吟してゐた。此時樂聲が俄に起つたのは妓生船からで妓生は聲を揃へて歌つてゐた。

其うち又藝者がのさばり出て三味線を彈いた。默つて引込んでゐればいゝのにと思はれるのに彼女は兎角のさばり出たがつた。其實自分の藝の拙いことは承知してゐるらしいのであるが、何ぞ引込んでゐることが出來ないやうであつた。人々に嫌はれ乍らも三味でもいぢくつてゐる方が默つて引込んで手持無沙汰にしてゐるよりはまだ自分で自分を紛らすことが出來るのかも知れなかつた。

お筆は又其三味につれて下卑た唄を歌つた。松田も其に和して歌ひ、支局長も大きな聲をして歌つた。一時賑かであつた妓生舟はいつの間にか又ひつそりとなつた。

「どうも日本人と妓生とはまだ距離があるね。」

と頻に罵つた府川はなれ〳〵しくぞんざいな言葉を使つた
「さうだねえ、妓生用も前途遼遠かな。」
「ハ、ヽ、ヽ。」と二人で笑つた。
「萬景臺が見え出した。」と岩吉は相變らず櫓を漕ぎ乍ら大きな聲をした。一挺の櫓に今は他の二人の船頭も手を添へて力を合せて漕いでゐた。
「見え出した〳〵。」といふ聲が一齊に船の中に起つた。
「どれが萬景臺です。」
「あの向うに見える高い丘です。」
「あの少し川の中に突出たやうになつてゐるところですか。」
「さうです。」
余は豫期してゐた程の處とも思はれなかつた。牡丹臺の話が出るとすぐ引合ひに出る名前である爲めに矢張り雄大な景色の處であらうと思つてゐたのに、これは唯の丘に過ぎないやうに思はれた。
漸く皆空腹を訴へてゐた。我等の方は晩飯の用意にと尚ほ二三皿をしまつて置いたのであるが、妓生や樂人の食料にもう疾くに盡きてしまつたらしかつた。其で萬景臺に船を着けて後、其處の百姓家で飯だけ炊かさうといふ事に評議が一決した。妓生の舟は相變らず我等の船を離れて浮かれつゝ、時々長鼓や太鼓の思ひ出したやうに鳴らされる音が淋しく聞えた。
お竹は今は三味線を膝に載せて自分で彈いてゐた。妻もお久さんも感心して聞き乍ら時々浮かれたやうに笑つてゐた。席上を見渡して見ると素淡と洪さんとの外は皆何事も忘れて笑ひ興じてゐるやうに見えた。固より明日は遠く北の方に去るものだといふ事を考へてゐるやうな顏は一人もなかつた。慶之助も遂に詩吟を遣つた。稅關長は半ば頃から其に同吟した。余は酒を飲めば飲む程醒めて來るやうな心持がして此騷ぎ興じて居る一座を唯ぼんやりと眺めてゐた。洪さんは時々鋭い一瞥を余の方に與へつつ口許には常に微笑を湛へてゐた。
「明日は此一座もちり〴〵になるのですね。」と余は洪さんに言つた。
「さうでございます。私もことによれば明日歸らうかと思つてゐます。」
「京城へですか。」
「さうでございます。」
「もう訴訟の方はお濟みになりましたか。」
「いえ、まだ、これからですけれども、また公判迄には大分時日がありさうでございますから。」
其中岩吉は船を廻して舳を岸の方に向けた。さつき遠望されてゐた一帶の丘はもういつの間にか目の前に聳えてゐた。

四十五

見ると岸には二三本の古い楊柳があつて其楊柳の間に唯一軒の百姓家があつた。例の菌のやうな草屋根で其が後ろには丘を負ひ前には楊柳を控へてゐるのが靜まり返つた太古の趣である。船の舳が突き進んでゐる水の中には柔かい藻草が生ひ茂つてゐて、岩吉の櫓が引上げられると、他の二人の船頭は竹棹を以て鉛のやうな重たい水の中を推した。水から引拔かれた竹棹の尖には黑い雫がちぎれるやうに落ちて、如何に此水底の泥が深いかを思はしめた。
遂にすべるやうに舳は岸に着いた。岸といふよりも寧ろ泥の中に突込まれた。岸にも一體に藻に似たやうな草が生ひ茂つてゐたが此舳の突込まれたあたりは陸地の方からじめ〳〵した水が流れ込んでゐて溝ともつかず沼ともつかぬやうなものになつてゐた。さうして其中に礎石のやうなものが亂雜に置かれて自ら其處が往來のやうにもなつてゐた。

「此處から上るのかねえ。」と松田は驚いたやうに言つた。

「他に道が無いんだもの。」と府井は答へた。岩吉は舳から眞先に岸に飛下りた。黒い泥がハッと四方に飛んで岩吉の腿のあたりにもはねた。何とか岩吉は初めて朝鮮語を使つて其泥に閉口したらしい科をして見せた。さうして足は頻りに泥の上をすべり乍ら他の二人の船頭が竹棹を推すのと同時に其舳の綱を引張つて重い船を岸へ岸へと引上げた。彼の隔離に置かれた飛石の漸く泥の上に頭を出してゐるのがある邊に辛うじて船は引上げられた。

「さあお下り下さい。」と岩吉は言つた。一番に飛下りたのは稅關長で彼は馴れてゐる爲めであらう、巧みに其飛石の上を跳ねるやうに飛び乍ら上つて行つた。續いて松田、府井、鹿之助、澁さん、余といふ順序に上つて行つたが、松田も余も踏みそこなつて靴や足袋にしたゝか泥をつけた。「迚もこれは女連中はあがれまい。」と松田は言つた。振り返つて見ると關三、沼田氏も危げに飛石の上を踏みつゝあるのを女達は船の上に立つた儘情なさうに見てゐた。支局長と料理番と岩吉とは何かいろ／＼と談合をしてゐるやうであつたが、眞先に降りようと決心したらしいのはお牧で、彼女は余等よりも巧みに飛石の上に降り下駄の先も汚さずに上つて來た。之に勢を得てお京も飛び下りたが若し岩吉が泥の中に立つて彼女の手を取らなかつたら危く顚倒するところであつた。妻もお久さんも支局長、料理番、岩吉の三人係りで漸くたいした失敗無しに其あとに續いたが、お筆、素淡、藝者、お酌は取り殘されて、衆人環視の中に皆極り惡さうに突立つてゐた。お筆は岩吉が負らうと言つたのを排斥して矢張り妻やお久さんと同じやうに船からは支局長、料理番に手や帯の邊を抑へてもらひ下からは岩吉に支へて貰つて、如何にも大事件の如く取り做しつゝ漸く飛石の上に運び下ろされた。斯く人々の助力を借り乍ら尙ほ兩方の足袋を泥だらけにしてしまつて、斯る場合にも尙ほ嬌態をすることを忘れぬ彼女は强ひて顏を赤く染めて堪へられないやうな風をして見せた。拍手が松田や府井あたりから起つた。續いて素淡はキャッ／＼と笑ひ乍ら岩吉に負さつて無事に我等の傍に運ばれた。あとに殘された藝者とお酌とも同じやうにして運び上げられた。

却つて此一騷ぎに興を催して我等の一行はぞろ／＼と百姓家の横を通つて丘の上に上つて行つた。船の中に在る時は左程に思はなかつたが、焦げるやうな日中の暑さは帽子一つでは凌ぎにくい程であつた。稅關長を先にして細い道を一列に上つて行つた。

高みから見下ろすと我船は楊柳の岸に繫がれてあつた。さうして妓生船も其に並んで繫がれ、妓生達も衆人も皆船に殘つてゐた。今楊柳の下を通つて百姓家の方に赴きつゝあるのは岩吉と料理番とであつた。彼等二人は妓生等の爲めに飯を焚く事を百姓家に交涉する筈になつてゐたのであつた。

妓生等に對する一切の事は料理番と岩吉とに一任して我等の一行は木の無い丘の上を尙ほだん／＼と登つて行つた。

「暑い／＼。」と口々につぶやいた。女連は皆蝙蝠傘をさしてゐる中にお筆のは殊に美しく赤い色が打ち榮えて他の多くの蝙蝠傘は獨りお筆のを守護してゐるかの様に人々の眼には映るのであつた。

其時ふと氣が付いた様に關三は言つた。

「素淡がゐないぢやないか。」

「ホンにさうだ。どうしたか。」と皆立ちどまつた。

「濱あから少し遲れて來てゐたぞ。ねえ貴方がたとは一緒でなかつたですね。」と支局長は聞いた。
「えゝ、あの上り口であとに殘つていらつしやいましたよ。手招きしましたけれども、頭を振つて休つていらしつたから其儘にして置きました。」と今迄と景色を指點しつゝ話し合つてゐたお牧は打倒れたやうな顏をして此方を向いて答へた。
やがて一行は又進んで松林の中に這入ると、其處に濱さんはもう腰を下ろして我等を待受けてゐたが、
「水縱橫と言つたやうな趣でございませう。」といきなり彼方を指して言つた。
「君は何處から上つて來たのです。」
「この裏の方を通つて來ました。」と別に小さい路を指した。其路の下つてゐる方面にも平野が開けて一かたまりの村落が遠望されたが其よりも濱さんの教へた正面の方は我等の足下に光つてゐる大同江の本流の他に尚ほ三條四條の水が帶のやうな少しづつの平地を挾んでは光つてゐた。
「あれは別の川ですか。」
「皆大同江の支流です。此邊は殊に澤山に分流して下流では又一緒になつてゐます。詰りあの間に在る土地は皆中洲ですよ。」と稅關長は答へた。
「珍らしい景色ですね。」と余は堪えず嘆稱した。
「あの楊柳村はどうです。」と支局長は更に右手の方を指した。其處は彼の山裏の村落の方から流れて來てゐる別の流が大同江に落合つて、丁度其突角をなしてゐるところで一軒の家も無く唯數十本の楊柳が蔭の如く密生してゐた。其もこれも內地では見られぬ景色であつた。
「萬景臺の名は此眺望から起つたのですね。」と余は初めて此たゞの平凡な丘を何故牡丹臺と併稱するかを怪しんでゐた其疑の氷解するのを覺えた。際涯の無い平野の果には熟視するに從つて水の流れが殖えて來るやうな心持がした。お妻とお久さんとは我等の傍に立つて同じく此景を眺めてゐたが、お筆とお鈴との蝙蝠傘は松の間を縫うて戲れるやうに走つてゐた。色の黑い馭者は詰まらなさうな顏をして疲れたやうに松の根方に腰を下ろしてゐたが、腰の下に敷かれた手拭の端には橫文字の染め拔かれてゐる惡い藍の色が見えた。
「此邊が一體に稅關の所有地になつてゐます。」と稅關長は濱さんに教へてゐた。
「どうですお牧さん、此處にも一軒茶店を出しては。」と支局長は言つた。
「お客のある日が一年に何日位ありませう。」とお牧さんは笑つた。
「さうさ、茶店の出來るのも稅關の建物でも出來てからの事だね。」と松田も笑つた。
「此間は此處迄千甲艦が溯江して來たです。大概な商船も此處迄は上れるさうですから此處に稅關の出張所位を造る必要は遠からず起ることと考へるです。どうです、お牧さんも土地だけ買つて置いては。此邊は廉いですよ、坪が一錢位のものです。」
「驚いたものですね。此間若槻が綾羅島を買つて置けと勸めた時、綾羅島の王になるのもいゝと言つて笑つた事ですが、さうするとあの楊柳村だけの領主になつてもいゝですな。」と余は輕く言ひ乍ら「楊柳村の領主」といふ言葉のうちに物語のやうな情味を覺えるのであつた。
「今あの煙のやうな楊柳を見てゐると楊柳村の領主もいゝがあれが幽靈のやうに枯れてしまつて、大同江が鏡のやうに結氷する恐ろしい冬

が來たら其どころではあるまい。」と府井は笑つた。

「夏でも、五月雨の頃になると其邊は一面に濁水が溢れて楊柳の先が僅に水の上に出る位になつてしまふでせう。」と稅關長は自分の買つた此高地の領主顏をして其楊柳村を見下ろし乍ら言つた。

「水に漬からうが、氷が張らうが、其んな事はどうでもいゝのですよ。唯楊柳村の領主だと思つてゐれば其でいゝのだから。」と余は閉口しなかつた。

「文學者らしい事をいふな。」と府井は又笑つた。ふと余も溫突無しにあの牡丹臺の板屋に冬籠りするお牧の事を思つて其美しい顏を見た。秋の日の晴れ渡つたやうな明るい顏は今お京と何事かを話し合ひつゝ晴れやかに笑つた。其處へお酌の小松と戲れ乍ら走つて來たお雀は、恰も小松と同じ年輩位の小娘らしい色を漲らせて、其上額に流れる汗を拭ひもせず、お京の帶の處に取りすがり乍ら、

「小松さんがいけません。」と帛を裂くやうな聲をして一同を驚かせた。皆が笑ひ乍らも彼女の上に瞳を集めた時、其顏には押へ切れぬ得意の色が動いた。皆何となく小腹の立つ思ひをし乍らも倚ほ一夜の雨に咲き亂れた櫻のやうなあでやかさを彼女の上に認めぬことが出來なかつた。此時退屈さうに欠びをして帶の間から例の煙草入を取り出したのは松の根方に腰を下ろしてゐる彼の色の黑い藝者であつたが誰も其を顧るものはなかつた。

四十六

剛三は洪さん、慶之助等と共にさつきから松林の間を拔けて、丘傳ひに散步してゐたが、いつの間にか下の路に出て我等を呼び掛けた。

「僕等は此方の路から歸るよ。」

其處で取り殘された我等もそろ〳〵と動搖を始めて下り掛けた。松林を出ると又燒きつけるやうな暑さになつたが下り坂は上る時程の苦痛は感ぜずに皆談笑し乍ら降りた。見ると下の路では素澄もいつの間にか妓生等の中に交つてゐた。さうして楊柳の岸に繫がれた二艘の船が又目に入るやうになつた。樂人や妓生等は舟に殘つてゐるものもあり百姓家の前の乾臺の上に寢轉んでゐるものもあつた。はじめは白つ茶けた乾草の中に紫や赤の派手な色が見えたので妓生だらうかと注視したが顏も手も見えぬので怪しみつゝあるうちに、少しづつ動くのを見て漸く其が妓生の寢轉んでゐるものであることを確かめて一同で笑つた。

「飯を焚いて貰つて食ひふくれてゐるのだらう。」

「我等も大分空腹になつたね。」などと話し合つて降りた。ところが我等を出迎へた料理番は當惑したやうな顏をして斯う言つた。

「此百姓家では飯を焚いてくれませんでした。幾らお錢を遣ると申しましても米が無いと言つて承知して呉れませんでした。」

「其は困つたね。」と支局長も頗る當惑した。下の路から落合つた洪さんは其理由を說明するやうに斯う言つた。

「朝鮮の片田舍の百姓家では五日なり一週間なり家族の食ふだけの米を貯へて居りますので若し其うちを他に頒つと其を補給する方法が無いのでございます。其で幾ら金を遣りましても中々分けてはくれません。若し向ふが信用して米を貸してくれることになりましても返すのは矢張り米でなければ承知しません。此邊の百姓家はそんなことはあるまいと思ひましたが……。」

「金が通用しないのは驚くね。」と剛三は笑つた。太古の姿をして居る水のほとりの一軒家は

我等の田畑に執着なく唯寂然として靜まり返つてゐるのが腹立たしくも見え貴くも考へられたが、赤色の中にごよ／＼と驚きつゝある紫色や水色等の空模様に堪へないでゐることを考へると可哀想にもあり滑稽にもあつた。

けれども我等は船に歸つて後其處に一つの大きな事實を發見して其物々は逆轉した。船に歸る時は下りる時程ではなかつたが其でも相當に混雜して漸く一同を運び終り料理番も岩吉も其々配置に着いた時、

「其處に殘つてゐるやつを半分だけでも妓生舟の方に遣つて呉れ。」と支局長は料理番に命じた。料理番は早速命を領して重箱に手を掛けたが驚いたやうに斯う言つた。

「貴方がたが召し上つたのではございませんか。」

見ると料理番の手にしてゐる重は悉く空であつた。

「僕等が食ふ暇はないぢやないか。」と支局長は叱るやうに言つたが、直ぐ其意味は誰の心にも讀めた。

「お前等は何處に行つとつたのだ。」

「あの百姓家で斷られたものですから何處か他に百姓家は無からうかと思つて少し其邊を探し歩いてゐたのでした。」

「ひどい奴等だ。」と府井は妓生舟の方を見た。笑人も妓生も知らぬ風をして相變らず煙草を吹かしてゐた。

「まあ。」と女達中も呆れたやうに言つたが暫く皆あつけに取られて後遂に噴き出して笑つてしまつた。岩吉等はいつの間にかもう櫂を擱いたので我等の船と妓生の舟とは稍々距離を保つて流れはじめた。時計を出して見ると三時を過ぎてゐた。

「仕方がない、酒でも飲むさ。」と支局長は憤激するやうに言つた。

「歸りは難儀だ。」と岩吉は櫓を推し乍ら言つた。

「十二時頃迄は駄目だらう。」と稅關長も言つた。成程氣がついて見ると我々を流れる潮の流は頗る急らしく、岩吉の力瘤を入れて推す櫓も十分の働きを爲さぬやうに見えた。

「まだ引潮だね。」

「大變な勢だね。」と人々は皆船から外に首を突出して其急な流を見た。殘りの二人の船頭は岩吉に力を合はせて一挺の櫓を又三人で漕いだ。

料理番は酒を燗して出したが何も食ふものが無いので皆苦さうな顏をして飲んだ。

「おい又三味線でも彈け。」と府井は藝者に命令した。藝者は又ジャラン／＼と鳴らし始めた。お前は又船枕を背みながらして睡さうな手つきをして無言に歸つた。

稅關長は自分の運命を知り抜いてゐる人のやうに默に頭を載せて靜かに甲板の柱を見つめてゐた。けれども其他のものは岸の立木がいつ迄經つても同じやうな處に在つて船の進んだ樣子が少しも見えぬのに氣をもらし始めた。遂に船を岸近く漕ぎ寄せて三人の船頭は岸に飛び降り一本の大きな綱を肩にして引船をする事になつた。葦の生ひ茂つた中や泥のぬる／＼とすべる汀を三人はよつちら／＼と船を引いて登る光景は面白く眺められたが此鹽梅でいつ歸られる事かと思ふと情なくもなつた。

「お峰さん、又踊らないか。」と府井は所望した。

「踊るより彈くわ。」と言つて藝者から三味線を受取り、美しい聲をして歌ひ乍ら彈いた。其唄の中には、綱は上意二「紀伊の國」「わかもの」といふやうな我等の耳にも聞き馴れた物もあつた。ふり返つて見ると妓生舟も我等の船と走り連

れ一矢張り一人の船頭が綱を引いて上りつゝあつた。時々太鼓の音がして「チョッター」といふ聲も交つて聞えた。

「妓生舟！」と余は心のうちで繰り返してなつかしく思つた。此實際の妓生舟と余が空想の妓生舟との間には餘り多くの距離があつた。水と油といふ言葉があるけれ共、彼等と我等日本人との間には到底融和すべからざる或物があるやうにも見えた。妓生なるものも朝鮮見物に來たものが朝鮮料理にいや〳〵箸を著けながら見物する位が關の山かとも考へられた。今日のやうに長い時間眺めてゐると土で作つた人形程の興味も無かつた。

「此に至ると美しい妓生よりも色は黑くとも鼻は低くとも日本人の藝者やお酌の方が矢張り同じ血が流れてゐるのだ。」とさう思つて彼等妓生や藝者などを見渡した時、いづれも同じやうな淋しい顏をしてつくねんとしてゐるのを見て又をかしく思つた。

日が傾いて來るに從つてだん〳〵涼しくなり僅に薄い上著を著てゐる妓生等は寒さうに寄り合つてゐた。獨り妓生舟の空想が破れたばかりでなく今日の舟遊び其ものが余の平壤策の如何に實際に遠いものであるかといふ事を事實的に證明する爲めに催されたやうな感じがしてくすぐつたいやうな心持もした。心なしか府尹の顏には冷笑の閃きが見えるやうにも覺えた。

其時に當つて又一つの大きな事件が目前に橫はつた。其は稅關長等には豫期されてゐたことであらうけれども不案内な我等には聊か驚かれた。といふのは今迄引船をしてゐた右岸はもう引船をする足場が無くなつた爲めに川を橫ぎつて左岸の方に船を移さねばならず、さうするのには其處にある一つの急な瀨を越さねばならぬといふ事であつた。三人の船頭は綱を手ぐつて舳に投げ込み、聲を合はせて船を推したけれども船の腹がごり〳〵と石を摩るのみか、暫く間に三四間も船を推し流さうとするやうな激しい急流の爲めに殆ど進退が谷まつてしまつた。

斯うなると男連中は默つて見て居ることが出來なくなつてしまつた。一番に裾をからげて急流の中に飛込んだのは支局長で府尹も沼田氏も松田も慶之助も續いて同じやうに船から降りた。余もせうことなしに其等のあとについて尻をからげて這入つた。其不精らしいのがをかしいと言つて妻もお京も笑つた。もう斯うなると平常どころで無い、どうでもして此船をして此瀨一つを越えしめねばならぬ、其が唯一の大問題であつた。我等と船頭とは力を合せて押した。水が激して膝小僧の上に這ひ上り、時には裾をも濡らした。小男の沼田氏は下帶迄を濡らした。

「洋服のものだけは御免を蒙らうぢやありませんか。」と言つて稅關長は洪さんを顧みて落著き拂つてゐた。

だん〳〵日が傾いて來て水の上が暗くなつて來た。

「三日月樣が。」と妻が言つた。見ると透き通るやうな大空に美しい三日月がかゝつてゐた。水の流が急な爲めに船は非常な勢で動きつゝあるやうに見えるけれども、其實同じ所に止まつてゐた。

「駄目だ。」と余は手をゆるめた。

「駄目ではない、もう少しです。」と小男の沼田氏は余を激勵するやうに言つた。三人の船頭はわめくやうな聲を出して踏ん張つた。余は其等に力を得て又押した。

やつと此瀨を押し拔ける迄には三十分以上もかゝつた。いつの間にか三日月が光りを增し

て岸の立木も薄く黑ずんでゐた。瀨を越すと水は深くなつて又櫓が漕げるやうになつた。皆へと〳〵に草臥れて濡れ足の儘で船に飛び上つた。

料理番は提灯に火を入れて目蔭の周圍にぶら下げた。顧つて見ると妓生舟の方は船が小さい爲めに我等の船から綱を渡して引張るのと一人の船頭が水に這入つて押すのとで存外容易く其灘を越すことが出來た。さうして其舟にも同じやうに提灯がぶら下げられた。

寒さがひし〳〵と肌にしみて來た。我等のインバネスは皆女等が羽織つて我等は又苦い酒を飲んだ。幾ら飲んでも醉はぬ許りか深川の時も同じやうに胃は其を押し戻さうとして嘔吐し い許りであつた。どうして此寒さを凌ぎ空腹を忘れ、如何か歸り着く迄の退屈を紛らさうかが一同の問題であつた。お京と電燈局長との間には爭が始まつた。常の座蒲團をいつの間にか一つ占領して仕舞には濁声のインバネスを羽織つてゐる不精さうな藝者は又チャラ〳〵と三味線を鳴らし始めた。余は船底に寢轉んで此不思議な光景を見てゐた。

男も女も皆たゞ騷いでゐた。殆ど絶望の極、の躁狂ともいふべきやうに騷いでゐた。今日の舟遊びは誰も豫期してゐた程は面白くなかつたに違ひない。殊に歸路に著いてからの空腹、寒氣などいふ事はかへ難い苦痛であつた。けれども不思議に落合つた是等の人々の明日はもう東西に別れ去る記念の會合としては相當に振つた會合であつた。殊にむづかしい瀨を船を降りて押したのなども求めては出來ぬ記念の種であつた。……さう考へて一座の顏を見渡すと一々の顏に一種の深い印象を見出すことが出來た。つゞけて拳に負けたお筆のくやしさうな顏にも、素淡と手を取つて男舞の眞似をしてゐる隆三の顏にも提灯の赤みを帶びた光りの下に此夜でなければ見ることの出來ぬ淋しい情味を味ひ得るのであつた。

船は稅關官舍の横迄歸ることかと思つたに、平塚のとつつきの女郎屋町の裏につけた。其處は本當の船つきではなく、女郎屋の人々が水でも汲みに降りる路らしかつたが、其處に船板を渡して其から上ることになつた。

「此處から稅關横迄はさうたいした時間もかかるまいが、もう一刻でも早く船から上り度い。」と支局長は言つた。三味線も鼓も嚢の中にしまはれたが我等が其三味線をまたげたと言つて色の黑い藝者はぷり〳〵と怒つてゐた。けれども皆笑つてゐる許りで相手にしなかつた。

船に釣り下げられてゐた澤山の提灯を三人に一人宛位が手に提げて危い道を照らした。妓生舟だけは今少し上流迄漕ぎ上せるとの事で、彼等は皆一樣に聲を上げて、

「さよなら。」と言つた。我等の方も皆聲を揃へて、

「さよなら。」と言つた。岸に上つてから見下ろすと我等の船の方には唯一つ提灯が殘つてゐる許りで殆ど水上の闇の中に包まれてゐたが妓生舟の方は澤山の提灯の光りに妓生等の顏の色の白いの迄かよく見えた。

其處を上ると妓樓町になつて、娼妓とも藝者とも判らぬやうなものが、上方風の赤い提灯の連なつてゐる妓樓の二階から見下ろしてゐた。色の黑い藝者は其中の一二人と馴々しく言葉を交してこの色町の空氣の中に蘇つたかのやうに元氣であつた。

「車が生憎揃はんので困つた。」と支局長は其邊を奔走してゐたが漸く四五臺だけ見つかつたので、女連中だけを其に載せて歸すことになつた。

「私はいゝのよ。少し歩かんと何だか氣持が

悪いから。」とお筆は俥に乗ることを肯じなかつた。

「だつて貴女が帰らなけりや困るわ。」とお京は車の上から振り返つた。

「少し歩いてから、すぐ帰るから、先に行つて頂戴よ。」とお筆はすねたやうに言つた。

「さう、おやあさうしませう。」とお京は逆はずに素淡と車を並べて、妻、お久さん、お牧等のあとについて走らせた。

「お先へ。」

「御免下さい。」といふやうな声の消え去つたあとに男連中とお筆と芸者とお酌とはとぼ／＼と往来を歩いた。此芸者は岩吉と同じく九曜館の抱へだとかで、頻りに九曜館に立寄つて飯を食つて行けと勧めた。

「ねえ貴方、さうなさいよ。」と彼はなれ／＼しく剛三の傍にすり寄るやうにして言つた。

「これから飯なんか焚いてゐては大変だ。宿に帰つた方が安全だ。」と剛三は笑つた。芸者は又余の傍に寄つて来て同じやうなことを言つた。

又車が五六台見つかつたので剛三、府尹、税関長、沼田氏、松田、慶之助などは皆其々其車に乗つて帰ることになつた。

「ねえ貴方、寄つていらつしやいよ。」と芸者は又あとに残つた余に勧めるやうに言つた。余は判然した答をせずに支局長に附いて真直ぐに行くと、芸者とお酌とはとある角に立止つて又呼んだ。

「ねえ寄つていらつしやいよ。」

「失敬。」とあとを振り返つて支局長は手を挙げた。二女は其角から右に曲つて九曜館に帰るのであるらしく、暫く淋しさうに我等を見送つてゐた。

芸者等と別れてからは支局長と余とお筆とを余すのみとなつて三人は余り人家の無い新開町を星明りの下にとぼ／＼と歩いた。

又一つの車宿を見出したので支局長は我等にも乗ることを勧めた。けれどもお筆は承知しなかつた。

「兄さん、貴方もお歩きなさいよ。一人で淋しいわ。」

「其ならお前も乗らうぢやないか。」

「私いやなの。歩き度いの。」

支局長を載せた車は四五間先に突立つて暫く我等を待受けてゐたが遂に待兼ねたやうに先に駈け出してしまつた。

「到頭二人きりになつたのね。」とお筆は言つた。「明日は愈々お別れね。」

「さうだねえ。」

「私お願ひがあるの。」

「……」

「此処から花屋迄帰るのに何分かゝるでせう。」

「あの灯のともつてゐる通りに出れば直ぐだから二三十分のものだらう。」

「私ねえ、兄さん、此処から花屋の門の処に帰りつく迄貴方の奥さんの積りでゐたいの。其もねえ、私一人でさう思つてゐてもつまらないから兄さんにも其積りでゐて貰ひたいの。ねえ貴方。唯さう思つてさへ下さればいゝのよ。お互にさう思つて、本当の御夫婦の積りで帰らうぢやありませんか。」

「ハヽヽヽ、又始まつたね。」と余は笑つた。けれどもどういふわけだか此お筆の言葉は此場合人の心を支配する強い力を持つてゐて無暗に笑つてしまふことが出来なかつた。「何故そんな事がして見度いの。」

お筆は余の言葉には答へずに心ゆくやうな大きな呼吸をして、

「私貴方の奥様ねえ、嬉しいわ。たつた二三十分間の御夫婦だけれども其でも本当の御夫婦だもの。ねえ成るべくそろ／＼歩きませう

よ……」
「はゝゝゝ。」と余は堪へず泣くやうな聲をして笑つた。
「厭よそんな笑ひやうをしては。氣味が惡いわ。」
「…………」
「貴方御夫婦になるのが怖いの。卑怯な人。」と蔑むやうに言つて、「たつた二十分間、貴方は旦那様で私が女房といふやうな心持でゐるといふ事に貴方は興味は無いの。」
「さうすると、伊左衞門と夕霧とで花道を出て來るやうな心持だね。」
「さうね、其とは少し違ふわ。」
「さうだねえ、役者の方は見物人に夢を見さすのだし、お前の方は自分で夢を見ようといふのだから、同じとも言へないだらう。けれどもそんな事を考へるだけなら僕には少しも珍らしくないね。」
「さう、貴方はもう度々なすつたことがあつて？　誰と？」
「別に誰とといふ事はないけれど文學者などといふものはいつも實際にない事を頭の中で空想して見るのだよ。さうだねえ、お前のは頭で考へる計りでなく、相手を拵へて夢を實現して見ようといふのだから矢張り俳優のとも違ふかな。」
「夢よりももつと情があつて、さうして自由ではなくつて。」
「さうかねえ。ぢやあ宜しい。お前のいふ通り花屋の門迄夫婦の積りになつて見よう。けれどもさきからもう半分足らずも來たやうだから、あと十分餘りの御夫婦ね。」
「でも嬉しいわ。」
二人は默つて暫く歩いた。兎に角十分間でもこの女が自分の妻かと思ふとをかしいやうなつかしいやうな變な心持がせぬでもなかつた。深川以來持て餘してゐる不思議な女といふ事は忘れて、此奇怪な二人の假想的の關係を興味を以て考へるのであつた。
「ねえ貴方。」とお筆は呼びかけた。
「何？」と余は答へた。
「貴方浮氣をしてはいやよ。」とお筆は言つた。
「するかも知れんよ。」
「厭ですよそんな事を言つては。たとひ十分間でも妻になつてゐる私に厭な思ひをさすことは止して頂戴。浮氣はしないと言つて頂戴。」
「よろしい。ぢやあ浮氣は致しません。」
「きつとですよ。」
「よろしい。」
「其で安心したわ。貴方と私と二人切りね。」
「さうだとも。」
余は斯く答へ乍らもふと妻のことを思ひ出した。何だか斯んな事を口から出任せに言つてゐることは妻に濟まぬやうな心持がした。けれども夢だ、芝居だ、と氣がつくと眞面目にそんな事を考へるさへ愚かな事のやうにも考へられた。
「斯んな仕合せな夫婦が外にあるでせうか。」
「あるまいね。」
「久しい間の戀中でしたものね。」
「さうとも。」
「見棄てちやいやよ。」
「見棄てるものか。」
星明りに話してゐる二人は互に朧氣な姿を見る許りで彼の沼のやうな眼が今どんな光りを放ちつゝあるか其は判らなかつたが彼女の聲は一語より一語と熱を加へ來るやうに見えた。
余の足音とお筆の小刻みな足音とは人通りの少ない寂しい町に際立つて響いてゐたが、一臺の車の音と横町を通る日本流の按摩の笛との外に其を掻き亂す別の響きも無かつた。

「ねえ貴方。」とお筆は又呼び掛けた。

「……」

「愈〻明日はお別れね。」

「さうだねえ。」

「何故夫婦でゐて別れなければならないんでせう。」

「さうさなあ。」

「あの兒の事は忘れては厭ですよ。」

「え？」

「福岡の雜餉隈に里子に遣つてあるあの兒ですよ。」

余は一寸何と答ふべきかに迷うたが、相變らずいゝ加減に答へるより外致方が無かつた。

「忘れるものか。」

「嬉しいわ。」とお筆は堅く余の手を握りしめた。いつの間にかもう灯火のところ〴〵に點つてゐる新開町らしい小店の點在してゐる通りに出て、二人は花屋の門前に立つてゐるのであつた。

「もう御夫婦はおしまひね。」と余は笑つた。

「本當だわ。夢は覺めたのね。」とお筆も笑つた。

「おい、福岡の雜餉隈に遣つてある里子といふのは？」

「貴方と私との中に出來た子ぢやありませんか。」とお筆は又笑つて、「夢は覺めた筈でしたのねえ。もうそんな事聞くのもおよしなさい。……又明日逢ふわ。ぢやあ、お別れにしませう。」と彼女は輕く頭を下げた。花屋の暗い軒ラムプは淋しい影を二つに分つた。

四十七

松屋に歸つて見るとお久さんと妻とは飯の用意をして余を待兼ねてゐた。空腹を充たし乍ら余はお筆の事を二人に話した。

「まあ厭だよ。」と妻はさげすむやうに眉間に皺をよせたが、彼もお筆の事にはもう馴れてゐるので餘り氣にとめるやうにも見えなかつた。唯最後の里子の事が暫くの間話題になつた。

「其里子の事が何だか氣がかりね。」

「……」

「實際そんな里子があるのでせうか。」

「僕との間に出來た子がかい。」

「えゝ。」と妻は笑つて、「兎に角お筆さんに子供があるんでせうか。」

「それはどうとも判らぬね。」

「若しあるんなら其子が貰つて育てて見度いわ。」

「ハヽヽ、貰つたらいゝだらう。」

其翌日は草臥れ切つた體を思ふ存分朝寢をした。床の中で、

「お久さん、今日牡丹臺へいらつしやるなら御案內します。」と余は聞いて見たが、

「私もう澤山。」とお久さんは思ひもよらぬことのやうに言つたので、其儘に又二度寢をした。

今日は愈〻聞三、お筆、慶之助、お久さん等の出發を停車場に見送ることとなつた。お久さんは荷物は大方直送してあるので、身輕い體を車に託して三人で停車場に行つた時にはもう昨日同遊した人々の顏がぽつ〳〵と見えてゐた。支局長は今日は體が痛むと言つて和服の體を乙構さうにしてゐた。其處へ何處かの車が連なつて驅けつけたのは聞三、お筆、慶之助、お京、素淡、洪さん等の一行であつた。

「おやお筆さんが……」と妻は驚いたやうに言つた。見ると一見十七八の女學生かと思はるゝやうに仰山に庇の出たローマに結つて襟元に派手なリボンを結んでゐたのが此方を振り向きつゝ、ボタリと落ちた挟み上げの後れ毛を無造作に指にて掻き上げ乍ら、

「まあ、奥様、お疲れでいらつしやいませう。」

と滿身に充ち滿ちた勇氣を抑へ切れないやうに

活溌に取り倣して妻の方に近づいて來た。
「貴女は何ほお疲れでしたらう。」と妻は昨日のお筆の活躍を思ひ出しつゝ言つた。
「えゝ、隨分草臥れましてよ。でも男の方よりは元氣ですわ。石橋の兄さんなんか、今朝體がいたいつて大騒ぎなんですもの。」
「宅もさうなんですよ。」と妻は言つた。其は別に考もあつて言つたのではなかつたらうが「此宅」といふ言葉が昨夜の十分間の妻の耳には定めて際立つて響いたらうと余はお筆の顏を見た。けれども、
「おや兄さんも。」と彼女は何事をも忘れてしまつたやうな顏をして唯羅も無く笑ふのであつた。
やがて這入つて來た府川、松田、稅關長なども此お筆の變裝に誰か度膽を拔かれたやうであつたが其でも會話は自ら彼女を中心にして待合室は賑はつてゐた。余は慶之助に耳打ちをした。
「いつか君のくれた番附に女賊北海のお龍とかいふのがあつたね、今日のお筆はどうしても『女學生お筆』といふ形だね。」
慶之助も私に恐れ入つたやうな表情をして見せて贊同の意を表した。

「私も何だか一緒に行き度いわ。」とお京は染々と別れともなささうに言つた。
「ぢやあ行くさ。」と剛三は投げ出すやうに言つた。
「お筆さんは憎らしい程平氣ねえ。貴女別に悲しくはないの。」とお京はお筆をたしなめるやうに言つた。
「ちつとも。もう昨日散々別れを惜んだんだもの。」とお筆は人に悟られぬやうに余に目くばせして微笑した。
「其はまあさうねえ。」とお京は其を昨日の舟遊びの事と解釋したらしく、「私等を態々京城から呼寄せたりなんかして考へて見ると贅澤なお別れね。」
斯んな話をしてゐる所へ沼田氏とお牧とは前後して驅けつけた。お牧は昨日と同じ服裝をして稍ゝ上氣したと思はるゝ顏に汗さへ流れてゐて黃色い埃りあとの見えるのが、お筆の態とく野暮らしく厚化粧をしたのと打映えていつもの通りいゝ對照を爲してゐた。
汽車に乘込まうとする間際にお筆は斯んな事を言つた。
「兄さん、私滿洲へ行つてから小説を書いて送つてよ。いゝこと。」

其少し首をかしげて媚を作つた容子からがどうしても二十歲以下の女學生としか見えなかつた。彼女が京城以來余に對して爲したやうな遊戯？ は迚も石橋では埓が開くまいし慶之助では物足らぬかも知れぬ。小説を書いて送るといふのは必ずしも口から出任せといふわけでもなく、多少其邊の心持を余に傳へるものかとも考へられた。
其うち發車が迫つて一同は乘込んだ。ふと見ると妻は今窓越にお久さんと改めて別離を敍した序にお筆とも何かを話し合つて二人は笑つた。汽車が動き出した時お筆の大きな眼は見送りの人を一人も見落すまいとするやうに敏捷に働いて最後に余の眼と合つた時微笑を湛へてハンケチを動かした。見送りのものは其動くハンケチを見て帽を振り手を上げた。例の植民地的の粗大な汽車は大きな呼吸を吐いて北へと向つた。
余はがつかりしたやうに覺えて暫く其あとを見送つた。傍に洪さん、素淡、お京等を見ることが一層其淋しさを増した。京城に彼等を見棄てて自分等の此方に來る時には少しも感じなかつた寂寞の感が全身を襲ふのを覺えた。これは今迄如何なる場合にもお筆に對して起した覺

えのない感じであつた。

「私等も明日歸る積りです。洪さんがお歸りになるさうですから御一緒に伴れてつて戴かうと思ひます。」とお京は言つた。

「さうすると今度は愈々僕等夫婦だけが平壤に取り殘されるのだな。」と余はガランとした停車場に立どまつて訴へるやうにお京等を見た。

洪さんと素淡とは朝鮮語で親しげに何事をか話し合つてゐた。

府尹等は皆別々に歸り去つた。

余は强ひて彼等三人を自分の宿に連れて戻つた。さうして其日は染々とした話をした。其は自らお筆に就ての噂が多かつた。

翌日三人の立つのを見送る時も府尹以下の人顏が揃つた。お京も洪さんも素淡も口を揃へて今一度歸りに京城に立よれと勸めた。

我等夫婦は尙四五日平壤に逗留した。さうして牡丹臺をも又一度訪ね、府尹、松田、稅關長、支局長等とも一二度づつ往來した。其は落附いた淋しい四五日であつた。

四十八

今新義州の宿に居ります。淋しくつて寒さが强うございます。慶之助さんはお星樣の光りが違つてゐると申します。私には判りません。今夜安東縣迄行くと石橋の兄さんは申しましたけれど厭だと駄々をこねて遣りましたの。

私は手紙を書くのは面倒で厭なんですけれども、今夜は何だか淋しいから此手紙を書きます。出鱈目ですよ。

今日汽車の中で一人の人と石橋の兄さんとのお話を聞いてゐました。其中には斯んなお話がありました。

天草や島原の女が一番えらいんですつてね。豆滿江を拔手を切つて泳ぐんですつてね。そんな眞似は私には出來ないわ。何でも島原、天草、五島邊の女が第一軍で、長崎、福岡、山口、大分、愛媛、廣島あたりが第二軍ですつて。私何軍になるんでせう。

兄さんにお目にかゝつたのは全く御緣ね。

兄さんはひどい人ね。奥さんにお打明けになつてね。御夫婦の仲つてそんなもの？　汽車の出る間際になつて、雜餉隈の里子が見度いなんて、奥樣が。

雜餉隈に行つて御覽なさい。さうして何處かの子守の背に、其らしい子供が居たら知らせて下さい。

汽車の中の話をもつとしませう。

安奉線の出來る時分の事ですつて、お金は皆指輪や腕輪にして肌につけ、金目なものは風呂敷に包んで自分の背中に背負ひ、大きなものは苦力に背負はして五六人位宛が一組になつて、其安奉線のレール傳ひを北へ〳〵と步いて行くんですつて。其がをかしいのよ。皆裾をからげて赤い湯もじを出して、大きなお尻を動かし乍ら北へ〳〵と步いて行くんですつて。其が私には旨く書けないけれど、其人のお話は其は面白いのよ。目に見るやうに話すんですもの。

其が皆第一軍ですつて。豆滿江を拔手を切つて泳ぐ手合ですつて。

私何だか其女は今でもレール傳ひに北へ北へと步いて行つてゐるやうな氣持がするの。

旅順にお銀さん奉天にお島さんといふえらい女が居るんですつてね。

お京さん達はもう歸りましたか。

お牧さんによろしく。

私も滿洲の山中で茶店でも出さうかしら。

小說はきつと書いてよ。

忘れてゐました。お久樣は停車場にお迎への方が見えてゐたのですぐ馬車で舊義州の方へお出でになりました。少しもお疲れのやうに見えません。

もう厭になつたからよします。

新義州にて　筆

今夜は安東縣にゐます。

明日はもう奉天に直行するんですつて。全體何處に行くんでせう。

此處の宿屋の主人も髯の生えた人よ。お牧さんの旦那樣によく似た人。

なんてチャンコロが多いんでせう。車屋も風呂番もチャンコロよ。其筈ね。

愈〻もう外國ね。

面白いのよ。宿の主人は私を石橋の兄さんのお妾さんの積りでゐるのよ。其で私も今日は丸髷に結つて兄さんを「旦那さん旦那さん。」と呼んであげるの。慶之助さんはまあ書生さんつてところね。

宿の主人が久しぶりだから「旦那さん」と遊び度いんでせう。其で私に氣兼ねをするをかしさ。最初は是非一緒に行かうつていふの。「私いやですわ、そんなお伴は。」つていふと、「斯んな田舍の藝者も一度は見て置いてもいゝでせう。」

「お二人で行つてらつしやい。私おとなしくお留守もりをするから。」斯う言つて つんとして見せたの。實はねえ、兄さん、私三嶋さんの世話になつてゐた時も嫉妬なんてもの燒いた覺えは一度も無いのよ。どうしてでせう。情が無いのね。けれども二人を玄關迄送つて出て、板の間に手を突いて、「行つてらつしやい。」と笑ひ乍ら言つた時は我ながら情を含んでゐて上出來よ。

慶之助さんはお友達がゐる芝居とかに行つて留守。私にも行かぬかと言つたが、兄さんに思ひのたけを書いておくのだと言つて止め。

女中が來て、「本當にいやな旦那樣ですわね。」と私が素直に出して遣つたのを意氣地無しのやうにいふのよ。「お前さんはお國は何處。」と聞くと長崎との答。第二軍ね。

「どうして此處にゐるのです。」と聞くと何でも人に騙されて奉天に連れて行かれて、停車場を降りると目かくしをさゝれて車に載せられて、其邊をきり〳〵と引き廻されて、何だか判らなくなつたところをガラス屋とかに奉公さゝれたのですつて。隨分のろ間な面白い女中よ。

私昨日汽車の中で聞いたあの話が面白くつて。まだ赤い湯もじを出して大きなお尻を振つてレール傳ひを北へ〳〵と行つてゐるやうに思はれるの。もう長春ハルビンはとつくに過ぎてしまつたでせうね。

兄さんと奧樣は毎日何をしてお暮し遊ばす。多分此方へはいらつしやらず、お國へお歸りの事とお推もじ。

浮氣な旦那を出して遣つたあとに物思ひよ。『一人と契るならうすく契りて末をば遂げよ、紅葉を見よ、うすいがちるか濃いがまづちるものと知れ、さうぢやわいな。』こんなのはいや。『君と寢ようか、五千石とろか』もいや。『露は尾花と寢たといふ、尾花は露と寢ぬといふ。あれ寢たといふ寢ぬといふ。尾花が穗に出てあらはれた。』馬鹿な尾花ね。

明日は奉天に行きます。もう暫くは手紙も差上げません。御無事に。

あの雜餉隈の里子の事。

安東縣にて　筆

（明治四十四年）

柿二つ

第一回　柿二つ

一

斯うやつてゐると小さい一本の筆が重くなる。筆が重くなるといふよりも腕が重くなるのである。痩せた自分の腕が重くなるのである。さういふ時には投げるやうに疊の上に其筆を持つた右の手を落す。と同時に又草稿を持つた左の手をも蒲團の上に落す。

草稿といふのは新聞の文苑に出す俳句の投書である。少し怠つてゐると、來るに從つて投げ込んで置く一つの投書函が忽ち一杯になる。其れが一杯になると、恰も桶にたまつた一杯の水が添水を動かすやうに、此病主人を動かして其選拔に取りかゝらしめるのである。

一昨年の暮迄はまだ時々は社に出勤することも出來たし、さうでなくつても机に凭れて仕事する位の事には差支へなかつたのである。自然俳句の投書も、來るに從つて見、見るに從つて選句を原稿紙に書留めて置く位の事を其程勞苦とは思はなかつたのであるが、昨年になつてから腰部の疼痛がだん／＼激しくなつて來て、固より出勤は思ひもよらず、家に在つて仕事をするのも大方は寢床の上にあつて、まだ蒲團の上に机を置いて其れに凭れる位の事は出來ない事はないにしても、どちらかといへば仰臥してゐる事を一番樂に感ずるやうになつたのである。

「斯んなに散らかつてゐてはしやうがない」と言つて老いた母親が大きなカスティラの空箱を持出して來て、其れに俳句の投稿を纏めて入れたのは其頃からであつた。其空箱にはふぢむらと烙印がしてあつた。病主人は情ないやうな腹立たしいやうないら／＼した心持をぢつと抑へながら、初めて枕頭に置かれた其箱を空眼をつかつて見た。見渡したところ一つとして貧し氣でない什器はないのであるが、此カスティラの空箱も決して病主人の眼を樂しましめるものではなかつた。其上自分の體のだん／＼自由を缺いて來ることが事毎につけて情なかつた。俳句の投稿を散らかさない爲めに纏めて一つの箱に入れて置くといふ事には異存の唱へやうがないのであつたが、唯其れが自分の意思から出たのでなく又自分の手で爲されたのでもなく、他人の手で容易に取り運ばれていつの間にか取り澄まして枕頭に置かれてゐるといふ事がじり／＼と癇癪に障つた。彼は何も言はずに唯ぢつと其箱を見詰めてゐた。ふぢむらといふ變體假名の烙印と暫く睨めつくらをしてゐた。鉛のやうな冷たい鈍重な心持が頭を擡げて來て其いら／＼した癇癪と席を取替へる迄。

其れ以來此ふぢむら氏は長く投書函の役目を勤めて今日に來つてゐるのである。それも初めの間は少し投書がたまるとすぐ選句に取りかかるのであつたが、それがだん／＼と延び／＼になつて來て、今年の春頃からは一杯になるのを合圖にして選句に取りかゝる例になつた。

今度も蓋が持上る位滿高になつて來てゐる事がもう何日か病主人の眼をなやましたのであつた。其れを愈々決心して朱筆を取上げたのは今日の午過ぎからであつた。初めは机を蒲團の上に置かせて坐つて見たが、其れも長くは續かなかつた。横臥したり、體をねぢるやうにして上半身だけを俯向けたりして、種々の姿勢を取つて見たが矢張り仰臥が一番長く續いた。

左右の手を蒲團と疊の上に投げ出して暫く天井を眺めながら心は選句の事から外に飛んでゐた。

二

彼はふと自分の病氣が結核性脊髓炎と醫師から診斷された當時の事を思ひ出してゐたのであつた。一昨年の秋から覺え初めた腰部の疼痛を初めの間は僂麻質斯だと人にも言へば自分も亦人に話す時に略其れに極めて話してゐたのであつたが、それに拘らずどこかで、そんな容易な病氣であるものかと嘲る聲が聞えるやうにも思はれてゐたのであつた。其れで今年の春になつて初めて結核性脊髓炎といふ診斷を或大醫に下された時には、流石に驚かれ乍らも亦豫て待設けてゐた宣告を受けたやうな感じがした。と同時に又、

「愈〻自分の運命も極まつた。」と現在其曙光を認めつゝある彼の事業の前途を思つて惆悵せずにはゐられなかつたのである。

彼は其當時の心持を回想しながら、其れから半年も經つた今日の一層光明を認める彼の事業に就いて、喜悲何れともつかぬ名狀し難い感情に暫くの間支配されてゐた。

彼は無意識に、蒲團の上に草稿を棄てた左の手で枕許に在つた體温器を取上げて腋に挾んだ。

少し酒にでも醉つたかといふやうな興奮した斯ういふ狀態は此頃少しも珍らしくなかつた。さういふ場合に體温器を挾んで見ると意外にも九度以上に昇つてゐることもあるが、其れでも左程に苦痛は覺えなかつた。かと思ふと又僅かに七度臺の事もあつて、さういふ時は何故斯んなにほてつたやうに感じるのであらうかと却つて其れを不審に思ふ位であつた。

又取上げるともなく蒲團の上の草稿を取上げた。此草稿の作者は未見の人であつて、投句家として現はれてからも月日が淺いのであるが、それに拘らず餘程老成したところがあつて選抜に苦痛が少なかつた。彼はあらぬ方に走つてゐた考から覺めて再び其句稿の上に注意を拂はうとした。最前は何處やら迄見たのであつたと、丁度開いた儘になつてゐるところを初めから辿つて見て行くと、最前逢著した或一つの句に又逢著した。どういふものだか初め此句に出逢つた時彼は杭に當つた芥のやうに暫くの間其處に吸ひ寄せられて其れから先に選を進めて行くことが出來なかつたのであつた。

「さうだ。此處迄見たのだ。」彼はさう心の中で呟いて其れから先の句に進まうとしたが、不思議にも繩で縛られたやうに、忽ち又其句の上に引止められてしまつた。

「斯んな新作者が、此頃は目立つて多くなつて來たやうである。我事業の前途は多望である。が……自分の命はもう長くは續かない。もう直夕に迫つてゐる……」

又もとの考に逆戻りしてゐた、と氣がついて彼は再び句稿の上に目を据ゑた。さうして心を落着けて更に一度讀み返して見た。其句は少しも面白い句ではなかつた。何故に自分が斯んな句に吸ひ寄せられるやうに覺えたのか其理由が判らなかつた。

腋に挾んで置いた體温器を取出して見ると熱は八度三分あつた。彼は殆ど八度三分といふ數字を頭に留めただけで、毎日のやうに慣らされた熱については別段の考も起らずに、其體温器を靜かに枕頭に置いた。

句稿はまだ投書函の中に半ば以上殘つてゐた。彼はどうしても今日中に之を片附けてしまはうと忽ちいつもの獅子のやうな勇氣を振ひ起して又選句に取りかゝつた。

三

暮れやすい秋の夕日が病室の障子に庭の隅

の大きな椎の樹の影法師を落した事も、瞬く間に其影法師が西から東に推し移つた事も、ラムプの點つた事も、其等の事には全く意をとめずに病主人は唯選句にいそしんだのであつた。

晩飯が運ばれると初めて筆を置いて病人とは思はれぬ許りによく食つた。肺を患つてからはもう十年になり腰痛を覺えて横臥してからも、もう二年近くなるのであるが、其れでゐてまだ今日の健康が保てゝゐるのは全く消化器が強健で病人としては驚くべき健啖であるのに因るのである。彼は體をねぢるやうにして上半身を俯向けながら二椀餘の飯と赤い身の刺身と小芋の煮つころがしとを殘さずに食つた。暫くの間同じ姿勢を保つて時々げぶ〱とげいぶりを出しながら病床の唯一の慰樂であるところの食欲の滿足に凡ての事を忘れてうつとりとしてゐた。

やがて仰向けに靜臥して、尙時々げいぶりを出しながら彼の考は今或一人の男の上に彷徨つてゐた。その男といふのは彼の同郷の後輩で、彼よりは七歳の年下で、今年まだ二十四歳の青年であるが、此頃は其兄と共に芝の方面に下宿屋を營んでゐた。彼の俳句の門下生としては前途に屬望せらるゝ一人であるが、それが兎角彼の心に背き勝ちで、殆ど讀書もせねば文事に親しむ容子も見えず、成功の覺束ない下宿營業などに沒頭してゐることが彼の心にかゝつてゐた。其れにしみ〲忠告をする機會の無いので彼は唯やきもきと氣をもんでゐる許りであつた。最前から見て來た投書函の中にも其男の草稿は見つからなかつた。考へて見れば此二三箇月の間其男が彼の許に寄せて來た句稿は皆無であつた。其れは下宿營業に取紛れてゐるといふ許りでなく、此病主人の關係してゐる新聞と違つた他の新聞の俳句欄を其男は擔當してゐて自分の句は其方にのみ出すやうになつたのも一つの原因であつた。此春以來彼の俳句革新の事業が著しく世間の注目を牽いて、自然彼の門下生の主な一人である其男迄が有名になつて來たことは喜ばしい事には相違なかつたが、子鳥がまだ十分に發育せぬ自分の翼を賴み過ぎるやうなところがあるのを見ると彼は危つかしくて仕方がなかつた。下宿營業も心配の種ではあつたが其れは唯心配といふばかりで彼には何の責任もなかつた。が、俳句の選や俳論や其他直接彼に影響を及ぼして來るところの文學上の仕事に至つては、其男が背後に彼のあることを忘れたかのやうに、餘り無頓著に振舞ふ事を憂慮もし不愉快にも思つた。又自分の力も量らずに巢立たうとする子鳥をどうする事も出來ぬ親鳥の淋しさもあつた。

其れにつけても書生生活から俄かに下宿屋の主人となつて時には手が鳴ると自分で返辭をして客室に顏を出す事もあるといふ其男の現在の生活を考へて見ると噴き出すやうにをかしくもなつた。

「何と思つて下宿營業などを始めたものか。高等學校を退學する時もさうであつた通り、思ひ立つと前後の思慮も無く斷行するのがあの男の癖であるから、何も今更不思議とするには當らぬが、それにしても世間に仕事も多いのに下宿營業を選んだといふことは自分などの思ひもよらぬことだ。」と病主人は又一つげいぶりをして何かにつけて自分と性行を異にする其青年を考へた。「どうせ近いうちに失敗するであらう。其時にならねば忠告も耳に入るまい。まあ遣るだけ遣らすのさ。」

さう考へて彼は再び選句の事に考を戻した。仰臥したまゝ更に朱筆を取上げて句稿を閱し始めた。

四

ラムプの光は靜かに更けて行つた。時々上野

の森に反響して轟き過ぐる汽車の音があるばかりで、根岸の夜は沈んだやうに淋しかつた。

日によつて不定ではあるけれども此頃は一體に彼の熱は夜に入つて下ることが多かつた。夜半頃から再び上るのではあるが、其無熱になつた時の心持は流石にすが／＼しかつた。病主人の頭はさういふ時に一層透明になるのであつた。彼は自分を神かと疑ふばかりの明快な判斷を數限り無い句の上に下すことが出來た。句の良否は色の黒白の如く明白に、一見して立どころに判斷することが出來た。自分で自分をあやしむ位にそれが容易で且つ迅速であつた。

彼の淋しい家庭には六十を過ぎた老母と今年二十七になつてまだ嫁がない妹とがあるばかりであつた。老いたる母も婚期を失した妹も唯病主人の病を看る爲めに生きてゐた。二人は次の室の暗いランプの下で、病室の物音に耳を欹てながら、各〻默つて針を運んでゐた。

やがて妹は膝の絲屑を拂つて立上つた。其れは病主人の枕許に、盆に載せた柿を運ぶが爲めであつた。

「もうこれ切りかい。」と彼はながし目に其盆の柿を見ながら聞いた。

「一昨日あんなにお食べたからもうこれ切りよ。」と妹は答へた。盆の上には唯二つほか載つてゐなかつた。

彼は凡てのものに健啖である中に殊に菓物を好んで食うた。中にも柿は飽くことを知らなかつた。

彼は忽ち食指が動いたのだが、唯二つの柿を今食つてしまふことは心細かつた。其れは是非共今日の大事業——投書函の一掃——が完了した時の慰藉の料に取つて置かねばならなかつた。彼は心のうちで呟いた。

「選がすんでしまつたら此柿を御褒美に遣るよ。今一息だ。たゆまずに片附けてしまへ。」と。

斯くて漸く底の見えて來た句稿の選に更に一心不亂に取り掛つた。

燈火は主人の心を知るかのやうに、瞬きもせずに冴え渡つた。傍の火鉢に炭の注がれた事も、時計が十二時を打つた事も、老いたる母の寢床に這入つたことも彼は知らぬではなかつたが、其等は餘り深く其注意を牽かなかつた。妹が床に這入つたのは其れから一時間も後であつたが、其れは其物音が兄の仕事の妨げにならぬやうに、いつ臥つたとも判らぬ位ひそやかであつた。

靜かな沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の目は燈火に光り輝いて、此夜の色の中に獨り帝王のやうな威を示してゐた。

最後に手に當つた草稿を見終つて後彼は念の爲め投書函を掻き探して見たがもう其處には一枚をも留めなかつた。彼は朱筆を投げ棄てたまま兩手で頭を抱へて暫く身動きもしなかつた。

久しく心に掛つてゐた仕事を片附けてしまつた慄へるやうな滿足の情と病軀に不相應な努力のあとに來る疲勞の恐れとで、彼の心は暫く掻き亂されてゐた。が、やがて其頭を抱へてゐた手をほどいて蒲團の外に現はした彼の顏はいよいよ興奮して、蒼白い皮膚の中にも頰のあたりの赤味は色を增してゐた。

もう時計は二時を過ぎてゐたが彼は少しも眠いとは思はなかつた。ともし火を中心とした此病床六尺の天地は今は何物にも煩はされることのない、極めて自由な、希望に充ちた世界のやうに思はれた。今や彼の體溫は再び上つて其爲めにいつもの酒に醉つたやうな興奮した心持になつてゐるのであるといふ事には氣がつかうともしなかつた。

彼は樂しげに盆の上の柿を見遣つた。柿の赤い色は媚びるやうに輝いてゐた。抑へてゐた彼の食慾は猛然として擡ひ起つた。彼は穢ゑた

虎が殘忍な眼を光らせて兎を掴むやうに忽ち其柿の一つを取上げて皮をむき始めた。

五

此柿は京都伏見の桃山に庵を結んでゐる愚庵といふ禪僧から贈つて來た釣鐘といふ珍しい名の柿であつた。さういへば形がどこか釣鐘に似てゐた。此禪僧といふのは維新の戰亂に母と妹とが生死不明になつてしまつた其行方を何十年かの間探したが遂に見當らなかつた其れが動機となつて中年から天龍寺の峨山和尚の鉗鎚下に僧となつた人であつた。主人は既に數年前から交遊があつたのであるが、此禪僧も主人と同じく肺を病んでゐる上に萬葉調の歌をよくし又書に巧であつた。俳句は作らなかつたが、其等の關係から互に推重して何かにつけて贈答を怠らなかつたのであつた。今度の柿は桃山の草庵に禪師を訪ねた人が其庭前の柿を託されて遙々と携へ歸つて病床に齎したものであつた。

其れは昨日の事であつた。其人がまだ枕頭に在る間に彼はもう辛抱が出來なくなつて其柿を三つ續け樣に食つた。其人が歸つて後も夜寢る迄に十許りを平げた。今夜枕頭に運ばれたものは其殘りの唯の二つであつた。

彼は其一つを取つて其皮をむくより早く忽ち其れに武者振りついたのであつたが、もう大方食ひ盡して蔕の所に達した時に少し顔を顰めた。其れは稍澁かつたのであつた。さういへば昨日食つたのも大方は少しづつ澁かつたのであつた。けれども彼は其れに頓着せずに其蔕の際迄少しも殘さずに食つてしまつた。

其蔕の所の澁いといふ事が少なからず彼の興味を牽いた。さういふありふれた事柄を恰も天下の大事の如く考へながら彼は又次の柿をむいた。今度の柿も同じく蔕の所が少し澁かつた。

此時彼は畢竟澁い位の柿でなければ旨くないのだといふ結論に達した。此澁くない柿よりも澁い柿の方が旨いといふ結論が又彼を喜ばせた。

二つ共に食ひ盡してしまつて後彼は盆の上にむき棄ててある皮を取上げて其皮に附いてゐる肉を少しも殘さぬやうに前齒でかじり取つた。しまひには其皮をも少しばかり食つて見た。其れは餘り旨くはなかつた。

彼は暫くぼんやりとしてゐたが、どうも此儘寢る心持にはなれなかつた。枕許の硯を引寄せ卷紙を展べて次の手紙を認めた。

「拜啓。御起居如何に御座候哉。好便に任せ佳菓御惠投に預り奉萬謝候。多年の思ひ今日に果し申候。右御禮旁〻。敬白。

十月二十八日　　根岸病庵主

愚庵禪師御もと

御佛に供へあまりの柿十五

柿熟す愚庵に猿も弟子も無し

釣鐘といふ柿の名をかしく聞きて

釣鐘の蔕のところが澁かりき

出たらめ御叱正可被下候。」

此句は三句共紙に臨んで考へた句であつた。彼は其手紙を讀み返して状袋に納めて後漸く眠りに就くべく用意した。油紙に蔽はれてゐた溲瓶を取上げて小便をし再び其れに油紙をかぶせた。其れからラムプを細めて枕に顔を埋めた。

闃かな鼾が隣の室から聞えた。頭の興奮は容易に收まりさうにもなかつた。彼は強ひて眠らうとして眼をつむつたが心はまだ今日の仕事の上に彷徨つてゐた。

三千の俳句を閲し柿二つ

博文館發行の當用日記に彼は毎日の出來事を句にして十句宛書くことを日課にしてゐた。

明日になつて今日の事を認める時に忘れぬやうに此句を加へねばならぬと思つた。疲勞が一時に出て來るやうに思はれて頭がぐら／＼した。彼は初めて熱の高いことを覺えたのであつた。

病主人は其夜眠れたのか眠れなかつたのか、其咳の響は夜もすがら聞えてゐた。

第二回　K

一

翌朝彼の眼覺めたのは南の障子に一杯日の當つてゐる頃であつた。夜中は殆ど眠つたやうな心持がしなかつたのであるが、熱が曉近く減いた爲めか老母や妹の起き出た物音を聞いて後に却つて前後不覺に眠つたのであつた。

いつも眼覺めた時する頻繁な咳が聞え始めたので妹は金盥と嗽茶碗とを持つて來た。かたばかりの手水がすむと、障子が開け放されて病床の埃が掃き出されるのであつた。

障子を開け放つて日影が直に病床に落ちると敷布や枕の上にかゝつてゐる埃が目立つて汚く見えた。其れを老母や妹はいつも氣にして掃除した。濁つた小便の這入つてゐる溲瓶は油紙を蔽うた儘便所に運ばれた。

今朝は熱が低いやうに思はれたので別に體溫を計らうともしなかつた。熱が低ければ低いだけ疲勞を感ずることの強いのが常であつた。彼は力無い眼に天井を見詰めながら曉方近く迄どうしても熟睡の出來なかつた――常に半醒半睡の狀態に在つた――昨夜の懊惱を思ひ出した。

其半醒半睡の狀に在りながら絶えず考へてゐたのは彼の男の事であつた。彼の男といふのは近頃兄と共に下宿屋を營んでゐるKの事であつた。主に人から聞いた事實を想ひ出したのであつたが、いつかもう其れが夢になつてゐたのである。

馬肉屋の横町を這入ると聞いて其通り這入つて行くと果して右手に一軒の下宿屋があつた。開きにくい表の障子を開けるとすぐ其處が帳場になつてゐて、其帳場格子の中にKが俯向いて何事をかして居た。

「おい。」と彼は聲を掛けた。顔をあげて彼を見たKは驚きの目を瞠つて、

「Nさんかな。よく表に出られたな。さあお上り。」と國言葉で親しげに彼を迎へた。

其邊の光景は大方人に聞いた通りであつたが、唯書生姿のKが帳場格子の中に控へてゐて、下宿屋の主人公として少しも不調和に見えぬのが豫ての想像とは少し違つてゐた。が、其俯向いて見てゐたものが俳句の草稿であつた事は矢張り人から聞いた通りであつた。

彼は其草稿を手に取つて見た。其投句家は皆彼が昨日投書函を一掃する時に見た投句家であつて、其俳句も亦同一のものであつた。其れに更に驚くべきはKの選句が彼の選句と全く同一なる事であつた。彼は或不快の念の萌すのを抑へる事が出來なかつた。見るとKの顔にも當惑の色があつて、彼が其草稿を見る事を非常に迷惑してゐるらしい容子が見えた。

其れから先はどうであつたか十分に覺えてをらぬが、是だけの光景ははつきりと覺えてゐた。今思ふと其れは夢であつたのである。其れに今一つ明白に記憶に殘つてゐるのは臺所に働いてゐるKの新しい妻の事であつた。其れも嘗て見た事のある顔ではあつたが、其れがKの妻として丸髷姿で立働いてゐるのを見るのは此時が初めてであつた。彼は不思議な心持に鎖されて暫く其横顔に見入つたのであつた。其横顔は斯う呟いてゐた。

「Kは私の主人です。私のものです。」

其れも矢張り夢であつたのである。

二

昨夜の記憶を辿つて彼の念頭に現はれ來るところのものは其等の夢の片々のみではなかつた。或一つの考を纏めようとして疲れた頭を樣々に苦しめたこともまざ〳〵と思ひ出された。其れはもう夢ではなかつたのである。

彼の男Kが高等學校に修學してゐる頃から、自分の後繼者はKだといふ事は彼の私に心に決したことであつた。其頃の彼は肺を患つてゐるばかりで、今日の大患たる脊髓炎はまだ發してゐなかつたのであつたが、それでも彼は明かに自分の短命を豫期してゐた。結婚といふことも考へないことはなかつたが其れも十中八九は望みを絶つてゐた。彼の全精神は殆ど事業の上に繋がつてゐた。さうして短命な彼の事業を完成するには是非共後繼者を必要とした。彼は自分の親戚、友人、後輩の中を物色してKを見出したのであつた。

Kが文學上の興味にそゝられて、學校のレギュラア、ステップを踏むことを屑しとしないで中途退學を決行したことは、頗る彼を苦しませた。といふものは彼も亦大學を今一年といふところで退學したので、いはゞ先に立つて其範を示した形になつてゐるので、世人は年少のKを責めずに却つて先輩たる彼を責めようとした。其れはいゝとしたところで、心中私に自分の後繼者と目したところのKの修養の不足は彼自身の不安であつた。彼は陰になり陽になりKの行動に注意して常に之を督勵することを怠らなかつたが、Kは其好意に感ずるやうな容子は見えながらも動ともすると彼を回避しようとした。

彼はふとした機會に久しく其心中に抱いてゐた後繼者問題をKに打明けたのは一昨年の暮であつたが、Kは其れを悦ぶ容子が見えなかつた。好意は感謝するけれども、其重任は自分には果せないから辭退すると明かに斷言した。

彼の失望は一通りではなかつた。數年前から心の中で其れと極めてゐた後繼者が斯う無造作に自分に負かうとは豫期しなかつたのであつた。其夜彼は憤懣と痛恨とに殆ど眠ることが出來ない位であつたが、遂に斯う叫んだ。

「自分は自分一人を賴むのみだ。自分は命のある限り奮闘する。」と。

其れから今日迄殆ど二年經過してをる。一時は最早Kに對して何の未練をも殘すまいと決心したのであつたが、併し其れは矢張り其當座の事であつた。數箇月經過するうちに彼の耳に聞えて來るKの消息は矢張り彼を苦しめた。以前程屢〻手紙を出しはしなかつたが、其れでも時々警告を與へずには置けなかつた。其手紙の中には、

「何故に泪をこぼしたるか自らも原因は知らず、然れども涙は獨りでに瞼にあふれ來り申候。胸中には無量の感慨起り候やう覺え候。併しそれもどんな感慨やら分らず、何しろ知識のはたらきを借らずして起る位に感情的のものなることは論無之候。」といふやうな文句もあつた。又中には、

「御手紙拜見致候。さきをくゝりての御返事に失望致し候。近來は御目に掛る事も少なく、御目に掛りてもろく〳〵御話も承はらずなつかしきまゝ、或用事をも兼ねて御來駕願上候處に有之候。それをとやかく邪推せらるゝだけ餘程御心亂れ候事と奉存候。」といふやうな文句もあつた。

三

彼の體が自由にさへなるならばKを監督し鞭撻する上にも種々の便宜があるのであつたが、寢てゐて氣ばかりもんでゐる事は一層堪へ難い苦痛であつた。其れでKに、

「いろ〳〵御話も有之候。明日にても御出で

下され度候。朝の方よろしく候。」といふやうな手紙を出して、其翌朝今か〳〵と氣をいら〳〵させつゝ待兼ねてゐてもKは來ない事が多かつた。それは昨日から少し加減が惡くつて臥つてゐるといふやうな假病であることが見えすいた斷り手紙などをよこした。たまに來る時には途中で逢つたと言つて他の俳人を同道したり、さうでないと俳句會の日に來たりした。彼は兩人差向ひでしみ〴〵話し度いと思つてゐるのであるが、Kはつとめて其れを避けるのであつた。

大概な人なら愛想をつかしてしまつてもう構ひつけないのであらうけれども、彼は決してさういふ事をしなかつた。いくらKの方で冷淡にしても彼は決してKを見棄てようとはしなかつた。それが又Kには苦痛であつた。今少し自分を自由に放任して置いて貰ひたかつた。常に自分の足首に繩がついてゐるやうな氣持がして、どうかして其れを取去りたいともがいた。

最近になつてKが下宿營業に取りかゝつたといふのも、もと兄夫婦を助けるが主意であり、其上自己の文藝上の天分について自信を持つてゐるKは下宿營業といふやうな社會的に賤しい職業に携はることを却つて痛快に考へたのであるが、同時にさういふ境界は全く他と沒交渉な天地であつて、其處には全然自由な自分を見出すといふことも其決心を促す有力な動機の一つであつたのである。

彼がKの下宿營業の話を傳聞したのは大分遲れてであつた。Kは一言も彼に相談なくして決行したのであつた。其時彼はKに一本の手紙を書いて、

「ほのかに承はれば下宿御營業に相成候由、固より小生の容喙すべき限りにあらねど、杞憂に堪へず候まゝ一言申上げ候。」と書いて、

「或は貴兄自ら手を出して御世話なされ候かとも存候へども、内々は兎も角、表立つて貴兄が出られ候事は商賣の妨げかと存候。今日の處では貴兄は多少知名の士となり居られ候に付、書生などがあれはKといふ人のやつて居る下宿屋ださうだなどといふやうでは、人皆憚つて下宿する者なかるべく候。」といふやうな注意を與へて遣つた。が、其れについてKの少しも頓着しないのを見た彼は、最早其非常識な行動を唯靜かに眺めてゐる事にした。早晩必ず失敗する時の來る事を豫期しつゝ。

彼がKを唯一の後繼者とする考はもう此頃は餘程薄らいで來てゐた。其れはKの上に到底多大の望みを繋ぐことは出來ぬとあきらめたか爲めでもあつたが、同時に此頃になつて彼の周圍に集まつて來た新しい青年の中に望みを囑するに足る一二のものゝあるのも其原因であつた。が、彼の事業がだん〳〵と世間に認められて來る程、彼の健康が益々望み少なくなつて來る程、愈々後繼者問題は重大な問題として彼の頭を離れなかつた。昨夜疲れた頭を樣々に苦しめたのも矢張り此問題であつた。

四

朝飯をすませて後も彼は何ぼんやりと天井を見詰めて考へるともなく同じやうな考に耽つてゐたが、

「兄さん、繃帶をかへませう。」と言ふ妹の聲に驚かされて、いつの間にか又うと〳〵と眠つて居た事に氣がついた。

繃帶の取替は隔日の日課で、それは常に妹の手で爲されるのであつたが、彼は時々聲をあげて痛みを訴へた。硼酸水や石炭酸や脱脂綿や油紙や、背中の爛れにつける粉藥などが取り揃へられてから、先づ汚れた繃帶が取り除けられ其あとをアルコールで拭く時に一旦傷口の或部分に觸れると彼の五體は一時に震動して腦天から出るやうな聲で「アイター。」と叫ぶのであつ

た。脊髄炎の膿は口を求めて皮膚に一錢銅貨大の穴をあけ、稍離れた處を押しても膿は其口から流れ出るのであつた。其傷口を拭くのが妹の一番骨の折れる仕事であつて、其時よく兄妹の口爭ひが繰返されるのであつた。

「お前は意地惡く其處を拭くからいかん。」

「あらあんなことを！」

「お前は私が痛いと泣くやうな聲を出すのが愉快なのだらう。さうに違ひない。さうでなけれやそんなに意地惡く其處を拭く筈がない。」

「それでも此處が一番膿で汚くなつてゐるのですもの。」

「馬鹿を言へ。そんな所迄拭かなくつても其傍迄拭いときさへすればえゝぢやないか。お前は癇癪が強いから、其處を拭いて私がアイターと言はぬと氣が濟まぬのだ。アイタ〱〱。それ、言ふ口の下から遣るぢやないか。アイターアイターア、、、。」と彼は大きな聲を出して叫喚しながら涙をぽろ〱と零した。

「もうこらへて呉れ。アイター〱〱。」

「そんな事をお言てはどうすることも出來んぢやないかな。あたしどうしたらえゝのか判らん。」と妹も終に蒲團の上に額を押し當てて泣き出した。

老いたる母親は奥の火鉢にしがみつき乍ら身を震はしつゝ唯おど〱と其兄妹の泣聲を聞いてゐた。

そんな事も往々にしてあつた。

今日の繃帶替も矢張り一二度叫喚の聲が聞えて彼の頬には涙が傳はつてゐた。

それが濟むと晝飯になつた。彼は空かぬ腹にも尚晝飯を貪り食つた。

食後の倦怠を覺えつゝ彼は尚仕事に取りかかる氣になれなかつたが、其れでも朝食後の睡眠と繃帶取替とで今朝よりも頭がはつきりとしてゐた。多年の藥の爲めに此頃著しく傷んだ歯の間を用心して楊枝でせゝりながら、昨日の選句の清書に取りかゝる爲めに今日は起き上つて机に凭れようと考へつゝあつた時に一人の俳人が訪問して來た。其俳人はKが近々下宿を止めて根岸の近所に家を持つらしいといふ新消息を傳へた。

「どうして止めるのです。」と彼は豫て豫期してゐたことであり乍らも餘り其れが早いので驚き乍ら聞いた。

「さあどういふわけですか。下宿の方はもう一通り順が附いたので、兄さん夫婦に一任するのだとかいふ噂ですが。」と其俳人も唯傳聞しただけの簡單な消息ほか知らなかつた。

根岸の近くといへば自分の家の近所である。彼は自分の家の近所に引越して來るK夫婦の事を考へずにはゐられなかつた。

五

彼が、Kの、音無川を隔ててもう其處が郡部になつてゐる日暮里に引越して來た事を聞いたのは其れから間も無い事であつた。彼は今日來るか明日來るかと窃かにKの姿を待設けてゐたが更に音沙汰が無かつた。三町とは隔つてゐない近距離にゐながら一度も顔を見せないのを不平に思はぬでもなかつたが、其れも噂に聞くと、何でも三疊一間を間借りして其處に夫婦で燻つてゐるとかで、をかしみを帯びた興味を呼び起さぬでもなかつた。

彼は、使ひに行つた序に其邊の容子を見て來た老母の話を耳を欹てて聞いた。

四軒長屋の中の一軒がKの間借をしてゐる家で、其隣には清元の師匠が住んでをり、又一軒はいゝ物、細工をして終日ゴリ〱いはしてをるといふので大概其長屋の模樣も想像がついた。彼は足が不自由になる前はよく其邊を散歩したが、其長屋の事は記憶に殘つてゐなかつた。

寒いなら寒いに極つた方が彼の健康は却つて

よかつた。十一月に入つてから熱の高下も大分少なくなつた。彼は彼の關係してゐる新聞の新年附錄の用事や、彼を中心として田舍で發行してゐる俳句雜誌やの仕事に日を暮してゐた。Kの事も頭に往來しないではなかつたが、其れよりも彼は差迫つた目前の仕事の方に忙殺されてゐた。

老母が煮物に天王寺蕪の漬物を入れて、其れを携へてKの家を訪問したのは寒い雨の降つてゐる日であつた。彼は火鉢に手を翳し乍ら毛布にくるまつて机に凭れてゐた。起きてゐるのが樂ではなかつたが、仰り寢て許りゐて仕事をするのも苦しいので、此頃のやうに無熱の時間が續く時には、よく起き上つて蒲團の上に机を置かせて、腰の痛みを耐へ乍ら仕事をした。

表の戸の鈴が鳴つたのは老母が歸つたのであつた。待兼ねてゐたKの消息は次の通りであつた。

Kは俳句の選をしてゐた。三疊の窓の下に一張の机を置いて其れに凭れてゐるKの後ろに、細君はもう人の眼に立つ程の大きな腹をして大炬燵の上に赤い切れを取散らしてゐた。其家はKの借りてゐる三疊の間の外に六疊の座敷と四疊半の茶の室とがあつて、其家族の人は四疊半の方に陣取り、六疊の座敷は雙方で共通に使用することになつてゐた。

「三疊と、六疊をまあ半分借りたやうなわけになつとる、其借り賃が一圓八十錢ぢやさうな。」

とさう言つた時、老母と彼とは、何といふ事なしにをかしくなつて來て聲を合はして笑つた。其れが彼の腰の痛みに響いて、忽ちまた「アイタタタ。」と自分から驚くやうな聲を出して叫んだ。

第三回　野心

一

冷たい空氣は常に病床を包んでゐた。さういふ日が流れるやうに過ぎた。俄かに發熱四十度以上に及んだ日も無いではなかつたが、秋よりも却つて體溫のむらは少なかつた。其れにしても寒さにいぢけて蒲團にくるまつた儘、終日仕事をせぬ日も少なくはなかつた。

さういふ日も彼の眼は爛々と輝いてゐた。彼を中心にして回轉しつゝある一個の天地のあることが常に彼の意識にあつた。彼の病床を訪ねて來る人も多く、手紙で教を乞ふ人々も尠なくはなかつたが、尙其等よりも遙かに大きな天地が自分を取卷いてゐることを彼は常に考へてゐた。

「野心！」

彼は二言目には斯う言つた。名譽心と言つても濟む事を彼は特に世間で賤しみ用ふる「野心」といふ言葉を好んで使用した。

「野心の無いもの程始末にをへぬものは無い。相當にいゝ頭を持つてゐながら婦人に關係して失敗したり、少し健康が十分でないとすぐ自棄したりするのは皆野心が無いからである。見渡したところ、此人は立派な野心を持つてゐると頼母しく見える人は絕無だと言つてよい。何某の如きは先づ〳〵野心のある方ではあるけれども、あんな野心では小つぽけで仕方が無い。」と。

病床を包む冬の空氣は冷たくつても、血の少ない彼の體は寒さに慄へてゐても、彼の心の中は常に火のやうな功名心で燃え立つてゐた。彼は斯う高言してゐた。

「僕の仕事は凡て野心に根ざしてゐるのである。僕には量り知られぬ大きな野心がある。自分程の大野心を持つてゐるものは滅多にあるまいと思はれる程の大野心を持つてをる。」と。

斯くて彼は先づ俳句界に自分の新天地を開拓して其處に所謂大野心のほんの一小部分を滿足さしたのであつたが、翌年からは更に和歌の革

新を思ひ立つて、「歌よみに與ふる書」といふ歌論を新聞紙上に公にした。其れも二たび歌よみに與ふる書」三たび歌よみに與ふる書」と矢繼早に續稿を出して遂に十度に及んで、「十たび歌よみに與ふる書」といふ迄を出し、更に群り起つた歌人の辯難に答ふる爲めに、「人々に答ふ」といふ文章をも公にした。其れは上野の森が深雪で埋まつた頃から、花見客のぞめきの響きが同じ森を通して聞えて來る頃迄の仕事で、其れから後も彼の病床の仕事は寧ろ俳句よりも和歌の方に多くの時間を割くやうになつた。

花は咲いても病床を襲ふ春の寒さの強い日は矢張りあつた。さういふ日は體溫器を脇に挾んで蒲團にくるまりながら眼ばかり光らせてゐた、心は常に世上の歌よみどもと戰ひつゝ。

衰勞しきつて昏々と眠る日はあつた。腰の痛みに聲をあげて泣き叫ぶ事は毎日のやうであつた。其れでも彼はいつも、

「野心」の大旆を眞向に押立てて一日も無意味の休息をしようとはしなかつた。

二

Kが我家近く引越して來ると聞いた時も、愈々彼の近所に引越して來て土鍋生活をしてゐるといふ話を聞いた時も、彼は何かにつけてKの事に氣を採んでゐた。一二の新聞雜誌の俳句選位では夫婦の生活さへ難かしからうし、況して遠からず出產するものとすれば生活の難儀は目前に迫つてゐる筈だと、彼は生活問題にも苦い經驗を有してをる自己に照しつゝ先づ其點に同情した。が、Kは一向無頓著らしく、近所に居ながら彼の家にも滅多に來ず、來たところで他に來合せてゐる俳人等と俳句を作つた許りで其儘歸つてしまつたり、他に來會者が無いにしても、彼と俳談位を試みた儘でさつさと歸つた。彼の方から稍染々した話を持出さうとしてもKは其れを避ける風が見えた。新年には初めて夫婦連で年始に來たが、其時もこれから細君の里へカルタを取りに行くのだとか言つて、そこ／＼に去つてしまつた。

差迫つた生活問題許りでなく、そんな浮々した生活をしてゐてゆく／＼Kは何になる積りか。唯一の後繼者といふ大任を彼に背負はさうといふ考は此頃はもう無くなつてゐるのであるが其れにしても門下生の一人として彼の前途を憂慮せずには置けなかつた。彼は長大息して心の中で呟いた。

「矢張り野心が無いから駄目なのだ。」と。

其れはK許りではなかつた。此頃は彼の門下に集まつて來る青年も多いのであつたが、どれを見ても彼を滿足さすやうな大野心家は一人も居なかつた。中には前途に望みを囑すべき青年も無いではなかつたが、其等の青年も彼の方から近づかうとすると、却つて後しざりして遠方から此方を眺めてゐた。

彼は腹立たしくさう呟くのであつた。

「矢張り彼等も野心が無いのだ。」

Kは、何樣あの三疊一間では出產が出來ぬから、と言つて、彼が幾度か歌人に書を與へて歌論に熱中してゐる頃に、外神田の方に引越してしまつた。初め近所に引越して來たことに多少の興味を覺えた彼は此移轉を物足らず思つた。が、Kの方では殆ど其等の事に頓著なく、唯風の如く行動してゐるのであつた。

俳句界に在つては從來の權威者であつた宗匠連は全く無學であつた爲めに一言も彼に反抗するものは無かつたが、流石に歌壇の方では、相當に文字のあるものがあつたので、彼の歌論に對する反響が賑やかであつた。彼は一々其れについて辯難攻撃した。誰をも賴まずに唯一人でした。

俳人程多數ではなかつたが、其れでも彼の門下に走る歌人も少なくなかつた。彼は倦まずに

其等の人と議論を上下した。Kや其他の俳人も一二度其歌會に列席して三十一字を並べて見た。が、俳句と和歌と兩方出來る人は數へる程ほか無かつた。俳人は俳人、歌人は歌人と分れて、各〻其門下に屯した。

當分和歌の爲めに費す時間の方が比較的多かつたが、其れでも俳句の方にも決して努力を吝まなかつた。彼を中心にして地方で出してゐる俳句雜誌の爲めなどには徹夜して選句したり俳論を書いたりした。

寒さが退くと、熱のむらが又却つて多くなつて來た。が、彼は病苦を忘れて讀んだり書いたりした。手を蒲團の中に埋めて靜かに仰臥してゐる時には例の鋭い目のみを爛々と光らせてゐた。其れは彼を中心にして回轉しつゝある一個の天地を底まで通れと凝視してゐるのであつた。

三

彼の友人の或男が來た時、ふと話はKの事に及んだ。

「なあに、Kだつて滿更野心が無いことはないさ。どちらかといへば奴等仲間では有る方だらう。あれでなか〳〵負け嫌ひだからな。併しまだ年が若いから無理は無いよ。今頃は遊び度い一方だもの。我等だつて覺えがあるぢやないか。」と其友人は斯う無造作に言つた。

それから其友人は向島の櫻餠屋の娘の噂をした。

「あのお六ね。又此頃店に現はれてゐるよ。もういくつかねえ。お前に九つ下だつたから、二十三か。いゝ年なのだが、まだ島田なんかに結つて若やいでゐるよ。あれでも不思議なものさ。あの頃の話をすると今でも初心らしく赤くなるからなあ。」さう言つて其友人は笑つた。彼も青白い顏に愉快な影を漂はせて笑つた。

其れは彼がまだ大學の帽子を被つてゐる二十四五の時であつた。喀血して間も無い時で、向島の櫻餠屋の一間を借りて靜養旁々一夏を讀書に過ごした。其頃の彼はまだ其程衰へても居らず制服制帽に貴公子然たる風采を具へてゐた。彼は好んで寫眞を取つたので其頃の物も二三枚は篋底に殘つて居るが、僅々數年間に斯く迄に姿が變るものかと其等の寫眞を見たものは孰れも現在の彼の憔悴を傷ましく思はぬものはなかつた。

彼は其頃を思ひ出して暫く病床の自分を忘れてゐた。お六といふのは其櫻餠屋の獨り娘で、其頃まだ十五六の少女であつたが、其れが彼の友人仲間の岡燒の材料となつた。實際それが其少女の初戀といふものであつたのかも知れなかつた。彼も流石に心を動かさぬではなかつたが、それが友人間の問題になつてゐるのを知つた時、早速其處を引拂つたのであつた。其後お六の品行は修まらないで、何度か違ふ男と駈落したといふ噂を聞いた。

其頃の彼は今のKの年頃であつた。成程友人の言ふ通り、其頃の心持を思ひ出して見ると、病床に唯野心を命に生きてゐる現在とは大分相違が無いではないが、其れでも尙今日のKの行動には同情の餘地が無かつた。

友人は又言葉をついだ。

「此間も頻りにお前の事を聞いてゐたつけ。さうして、お氣の毒樣ですねえ、とか何とか言つて大いに同情してゐたつけ。はゝゝゝ。」

友人は無造作に笑ふのであつた。けれどもさういふ事を聞く彼はつらかつた。白い若々しい皮膚と量り知られぬ未來とが女の前に無上の權威であつたことを思ひ出すと、流石に其女から憐みを受ける今の自分がつらかつた。彼の生命であり誇である大野心もふと瓦礫に等しい感じがして悲しくなつた。彼は友人と顏を合はして笑ふことが出來なかつた。

けれども其れはほんの一瞬間であつた。次の瞬間にはもう勇者としての自分を見出してゐた。痩せてはゐても骨組の大きい彼の顎の强い線は其誇を見せてゐた。

七夜だと言つてKから贈つて來た赤飯が席上にあつた。Kの子供は女の子であつた。斯ういふ歌を贈つて遣つたと彼は友人に話した。

紅梅の花染產著うちきせて神田の神
の千代をこそいのれ

四

Kの子供の祝には其歌と共に老母はメリンスの切れを紙にくるんで其外神田の家に持參した。女の子はまる〳〵と太つた色の黑い子であつたが顏立はKに似てゐた。娘は未婚であるし倅は娶らぬ爲めに一人の孫をも持たぬ老母はKの子をふと孫のやうに思つた。乳を吐くと言つて年の行かぬ父母は心配してゐたが其れ位の事は左程心配するにも當らぬであらうと慰めて置いて老母は歸つた。

嘗て日暮里の三疊の侘住居が親子三人の間の話題になつたやうに、外神田の家賃二圓五十錢の三間の家も其日の熱心な話題になつた。其れは三軒長屋の端れの家で二疊の玄關と六疊の座敷と三疊の臺所との三間であつた。同じ長屋でもまだ新しいので、日暮里の家よりも見込もよかつた。隣に住まつてゐる人も淸元の師匠やくい物細工などではなく、ひつそりとして物靜かな樣が腰辨位の人のやうに思はれた。

「丁度あかさんのお臍の落ちる日であつたさうな、あの火事が。荷物はお片附けたさうぢやけれど、持出す迄ではなかつたさうぢや。若し風が變つて風下になるやうであつたら嫁さんと一緖に荷物も運ぶ積りでお里の方から車が來てゐたさうな。嫁さんがいつでもえゝやうに支度をして置かうと、赤さんの襁褓をお取り替へたら其時にお臍は落ちたのぢやさうな。」と老母はさういふ事迄をも、見聞して來たことは一つも洩らすまいとして、懇に話したのであつた。

赤飯を食ひながら、其話が又老母と彼の口から其友人に傳へられた。彼等が斯ういふ家庭的の話になるとそんな馬鹿げた一些事迄を珍らしい話題として取扱ひつゝあるのを見て、友人は、單調な彼等親子の生活に同情せずにはゐられなかつた。

其友人といふのは、記者生活から今は政治家の色彩を帶びた華やかな新生涯に入りつゝあつた。女や酒に常に其周邊に在つた。初めは彼と略似寄つた途を辿つて來たものが、今は格別に違つた方向に赴いた事が頗る彼を危懼させた。彼はKの前途を心配するのと同じやうに其友人の前途をも心配しつゝあつた。最近に長い一つの忠告の手紙を彼から受取つた友人は其事に就いても多少の辯解を試むべく今日は來たのであつた。

「心配せんでもいゝよ。馬鹿な事はしないよ。僕も二三十年のうちにはどうかなる積りでゆつくり構へてゐるのだ。お前のやうに病氣になるとあせるものだし、又寢てばかりゐると考へんでもいゝ事迄考へるものだよ。僕だつてこれで病氣になつてお前のやうに寢たつきりになつたら、あせりもしようし考へもするさ。御覽の通り不用意であつけらかんとしてゐられるところが健康體の有難いところだよ。はゝゝゝ。Kだつてさうさ。さつきも言つた通り年も若いしお前のやうに不健康といふでもないのだから、まあゆつくり遣らせて置くさ。あれで時さへ來れば相當の活動はするよ。矢張りゆく〳〵お前の有力な後繼者の一人さ。」

人間の命がいつ迄もあるもののやうにいふ友人の言葉が癪に障つた。もう二三年は愚か、時には二三箇月の命さへむづかしいもののやうに考へる自分の健康に對して其友人迄が解釋しな

いでゐることが情なかつた。一寝て許りゐると考へないでいゝ事まで考へるものだよ。」と人を病人扱ひにした挨拶が癪に障つた。

五

昨日も彼はKに次の如く書いてやつたのであつた。

「何も彼もやり度い。其癖何も出來ぬ。此間熊本のSよりの來簡に自己の碌々たるを說き、次に、蕪村以來の俳人といはるゝ貴兄と同日の談にあらず、と書いてあつたので大いに立腹たね。其返事に、僕でも尋常の健康であつて細君を携へて百圓もらつて田舍へひつこむのならいつでもやり度いのだ、と書いてやらうかと思つてゐるのだが、又おこられても困るからまだやらずにゐる。足の無い癖に口ばかり叩きやがると世人は思つてゐるだらう。ほんたらに因業なからだだ。それでごふつくばりなのだから恐れる。

何か知らんが不平だ。家では色氣話が出來んが道灌山見たやうな所で色氣話するのも面白いだらうと思ふ。どこか座敷の緣側へ車が橫附になる所はあるまいかといふのだけれど、今金の外ないといふ事だ。今金は閉口だ。少しはどこかで人間らしい快樂を得ねば文學思想だつてホカ〱浮いて出るものぢやないけれな。」

自分が病人であることは固より百も承知してゐるのである。何も態々他人から注意を受けなくつても、いやといふ程知り拔いてゐるのである。知り拔いてゐるからこそどうかして一日でも病人でない心持になりたいと思ふのである。けれども其れが出來ぬのである。櫻餅屋のお六の話などがたまに友人の口から持出されると沙漠で泉地に出逢つたやうな感じがせぬではないが、老母や妹の前では思ひ切つた話のしやうもないのである。矢張りKに書いて遣つたやうに、せめて病軀を車で運んで、あたり近所かまはぬところで思ひ切つた色氣話がして見度いのである。

さういふ病人の心持に本當に同情してくれる人は一人も無かつた。健康な人は自分で勝手に浮かれて置いて、病人が何かいふと、其れは病人のいふ事だと輕蔑したり、又少し仕事すると、病人にしてはえらいと言つて嘲弄的に讃めたりする。彼は健康なもののする事や言ふ事が一々癪に障つた。

多くの訪問者の中に此間もある一人の僧があつた。其れはまだ若い僧であつたが、文藝上の評論や、其他新聞紙上に現はれる彼の文章を通して見た彼の煩悶を氣の毒に思つて彌陀本願の信仰を吹き込まうとして來たのであつた。諄々として說くなまぬるつこい說法がひどく彼をじれさせたが、彼は遂に穩かに斯う言つた。

「あなたは御健康のやうですね。」

「はい、幸ひに病氣といふものは知りません」

彼は冷笑し乍ら其若い僧の眞面目な顏を見たが、もう何も言はなかつた。

僧は自分の著述を一冊取出して彼の前に置いた。彼は其書物を碌に見ようともせずに又笑ひ乍ら言つた。

「私には宗教心といふやうなものは探してもありません。私には唯野心がある許りです。」

若い僧は氣の毒さうな顏をして歸つたのであつた。

第四回　K（再び）

一

彼から見ると世人は皆浮々してゐた。人に生

死の大事を悟らしめようといふ坊主さへ浮々してゐた。死はもう彼に取つては問題では無くして事實なのであつた。死といふ事實が庭前の板塀の如く目前に迫つて來てゐるのであつた。其れを死を單純な問題として取扱つたり、又問題とさへもしないでゐる人は、彼から見ると皆浮々した暢氣坊であつた。

彼は死刑の宣告を受けた人が、其宣告を受けた瞬間から刑場に引かるゝ迄の若干の時間をどんな心持で過ごすであらうかと考へて見た。さうして其れは現在の彼よりも寧ろ幸福だらうと考へて見たりした。

若し彼にしたところで、こゝに醫者が來て、お前は愈々今日から數へて何日後には死ぬるのだぞよと、さう明確な死期を通告してくれたなら、それは現在の狀態よりも安靜であり得るであらう、と考へた。

「誠に死は板塀の如く目前に聳えてゐる。けれども其板塀は時には遙かに遠方に後しざりしてゐる事がある。もう死は近いと考へるすぐ其あとから、いやまだ〳〵なか〳〵死なぬ、と自分で其れを打消さうとする。自分の心が靜平であり得ないのは其爲めである。これが愈々五日後には死ぬるのだと確定したら、自分は其五日間を極めて靜かな心持で過ごすことが出來るだらうと思ふが、果してどんなものであらうか。」

彼はふと障子に當つてゐる日影を見た。其れはいかにも美しい日影であつた。其れは生れてから今日迄つひぞ出逢つた事の無い美しい日影であつた。

半分開かれた障子の向うには板塀があつた。「五日の後に來る死は其處に聳えてゐる。」と彼は思つた。黑く塗られたのが少し剝げかゝつてゐる板塀の色は氣味の惡い色であつた。が、其れに拘らず障子に當つてゐる光は恍惚とするやうな美しさであつた。

其處へ板塀の隅に在る裏戸口を開けて這入つて來たのはKであつた。彼は何夢のやうな心持で、其死の板塀の一隅から這入つて來たKを見詰めてゐた。

Kは此間から或新聞社に這入つてゐた。其新聞は一時は惡德新聞の名さへあつたのであるが、其れが此頃頻りに社會に令聞ある士を羅致して其惡名を一洗しようとしてゐた。Kは其動搖に際して或友人の紹介で社末に列したのであつた。

此社に這入る事に就いてもKはしみ〴〵彼に相談もしなかつた。目下に迫つてゐる生活の必要から入社する事に極めた。といふ事後の報告を齎したに過ぎなかつた。彼は其れを喜ばなかつた。

其れのみでなく、其社に於けるKの位置は餘り安固なものでないといふ事を他から聞いた。何んにもそんな事は知らずにゐるKの間拔面が自分の事のやうに腹立たしかつた。

が、此頃人の話に、K自身も矢張り浮かぬ顏をしてゐて、

「忙殺される、といふ言葉はあるが、悶殺されるといふ事は初めて經驗した。などと歎息してゐるといふことを彼は聞いたのであつた。

今日來たKは少し興奮してゐた。國許の長兄の許に在る老母の病氣が大分重いので妻子を連れて歸國することにしたといふ事などを話した。

二

「其れで社の方はどうおしるのぞ。」と彼はKにたづねた。

「休む積りよ。」とKは答へた。

「凡そ何日間と豫定でもして置かないと社の方では承知すまい。」

「さうぢやらうか。病人が早くよくなればえゝけれども、長びいた場合にはさら早く歸るわ

けにも行くまいと思ふのぢやが。」

「お前の新任の仕事といふのはどういふのぞな。」

「募集小説の選抜や時事の俳句評位なものぢやけれ、居なくつても差支へないのよ。募集小説の選抜も私一人ぢやない、私は寧ろ入社した爲めに其一人に加はつたといふ伴食に過ぎないのだから。」

「社長か編輯長かにお話したか。」

「いゝえ、手紙で暫く當分休むと言うて遣つて置いた。」

「それやいかんよ、そんな手抜りなことをしては。假に私が社長か編輯長であつても其れでは承知が出來んな。」

彼の顏は不機嫌になつた。Kは默つて考へてゐた。

Kは自分でも決して社で厚遇されてゐるものとは考へて居ないので、此上續いて居たいといふ念慮はさう強くなかつた。どちらかといへば新しい局面打開の途さへあれば自ら進んで退社し度いのであつた。

二人共暫く默つてゐて後彼はKに聞いた。

「時事評といふのはどんなのぞな。どんな句が出來りやな。」

「出鱈目よ。」

「一つ二つ言つて御覽。」

「伊藤侯といふ題で、化けさうな古猫の戀あはれなり。黑死病といふ題で、黑くなつて死ぬる鼠の病かな。……まあそんな程度のものよ。」と

Kはひどく恐縮してゐた。

が、不思議に彼の機嫌は治つてゐた。

「まあ其れ位に出來りやえゝさ。どうせ俗受を主とする性質のものだから文學的に價値のある句は出來るわけが無いさ。諸君は文學的俳句は上手だけれども、さういふ俗受の句になると私には及ばんやうだ。例の、君が代も二百十日は荒れにけり、の類さ。おや！ あれをお前お知りんのか。日清戰爭前に伊藤內閣の爲め續け樣に發行停止を食つて一箇月目に漸く解停された時、二百十日といふ題で古人の句などを引用した俳文を書いて、其結末に、君が代も二百十日は荒れにけり、といふ句をくつつけて置いたのさ。ところが其れが大受で、我等仲間の俳句が俗世間に認められたのは其れからだと言つてもえゝのさ。詰りお前等にはさういふ俗方面に對する手腕が缺けて居る。それは一つは政治や社會の事情に疎いのにも由るのさ。いくら文學者でも社會的に活動しようとするのには、どうしてもさういふ一面を有してゐなけれや駄目ぢや。」

彼はさういふ方面にも自信を持つてゐた。彼の野心は獨り文壇に創作や評論を提供するといふに止まらず、廣く之を社會的の一大勢力とするに在つた。彼が平民文學としての俳句に率先して價値を認めたのも一つは其普遍なる社會的勢力に在つた。同時に之を社會的勢力となす上の政治的手腕をも彼は自己に認めてゐた。

彼はこゝ迄話して來て目を庭前にやつた。黑の板塀はいつの間にか遠方に小さくなつてゐて、障子に當つてゐる日影はたゞの日影に戾つてゐた。

三

彼は嘗てKに俗受論を説いたこともあつたが、一向其れはKに通じさうにもなかつた。

「お前のやうな娑婆つ氣の無い高潔な人間も困つたものだな。」と彼は其時皮肉らしく言つて苦笑したのであつたが、今圖らずも現在Kの携はつてゐる新聞の時事評といふ實際問題にぶつつかつたので、其れについて彼は又熱心に話すのであつた。

「時事評といふやうなものは新聞の主要な仕事

では無いけれども、併し其れも遣りやうによつては有力なものになり得るのである。お前の新聞社にお這入りたことは、私は少しも相談を受けなかつたのだから、私には責任は無いのだけれど、假にも這入つた以上は新聞記者として成功する覺悟が無けれやならぬこと位は承知してゐて貰ひ度い。さつき聞いた二句位に出來りやあ、初めての技倆としてはまあいゝ方とせなけれやならんから一つその時事評を大いに勉強してやつて御覽や。社の方にしたところで何か或點に技倆を認めたら決して輕々しく首切るやうな事はすまいからして勉強して遣つて御覽。又遣る位なら大いに突込んで遣つて御覽、私の俗受論を餘り輕蔑しないで。さういふ事をいふといつもお前等は鼻であしらつて高くとまつておいでるけれど、それでは第一新聞社に這入つたといふことからして矛盾しとるぢやないか。新聞社といふものは、今度親しく這入つてお見たから判つたらうけれども、そんな高尙な所ぢやありやせん。第一讀者といふ俗人を相手の仕事ぢやもの。お前はどうやらもう少し厭氣がさしてゐる容子だが、そんな事では何を遣つたつて駄目ぢや。下宿屋も續かなかつたし――あの方はもと／＼兄さん夫婦がお遣りる筈であつたのだといふお前の辯護說もあつたけれど――今度の新聞社もすぐさうでは、之からお前を周旋する人が無くなつてしまふかも知れん。何にせよ、さうものに飽きつぽくつて根氣が無いといふのも矢張り豫〻言ふ野心が無いからのことぢや。もう私も決してお前を自分の後繼者に強ひようとは言はぬが、それにしても少し落著いて、もう少し社會的名譽心を持つて、じつくりと遣つて見てはどうかな。いつからかしみ／＼お前に話さうと思つてゐたけれど、機會が無かつたので其儘になつてゐたのだが、お前ももう書生ではないのだから――妻子を控へてゐる一家の主人だから――目前に迫つた生活問題から言つても何とかせなけれやならんぢやないかな。……」

彼は此處迄話して來て、いつもKが斯ういふ忠告を逃れよう逃れようとして容易に二人對談の機會を作らなかつたことを思ひ出してふと不覺の淚を催したのであつたが、彼は其れを腰の痛みに紛らした。

「アイタタタタアーア。」

頰を傳うて流れる彼の淚をKはぢつと見てゐるのが辛かつた。

彼の好意は今改めて言ふ迄もなくKの十分に荷つてゐるところである。が、何分彼の一分の透も無い嚴重なる批評の下に在ることが、Kに取つては苦痛であつた。其れでどうかして其羈絆を逃れようとして藻搔くのであつたが、一度其足を繫いだ例の繩はいつ見ても斷れてしまつてはゐなかつた。比較的寬く延びてゐる時もあつたが、又いつの間にか短く繫ぎとめられてゐるのであつた。

四

彼はふとKの服裝に目をとめた。妻帶した後のKの身の廻りは大分以前と違つてゐた事に今迄も氣がつかぬではなかつたが、ふと見ると今日著て居る秩父銘仙の揃の袷と袷羽織とは格別に彼の眼を牽くものであつた。彼は苦々しげに其れを見たが、冷たい一陣の風が彼とKとの間を吹き過ぎるやうな心持がした。其風の彼方には後姿のKの細君があつた。

併し彼は猛然として其等の考に打勝つた。彼は心の底から哀憐の眼を以てKを見下ろさうとした。Kが如何に彼を回避しようが、如何に其妻帶が彼とKとの間を疎々しくする傾きを持つてゐるが、其れは彼に於いて頓著すべき筈のものではないと考へた。又兎に角歸國の事を話し易く來るといふ事も、近來何事も相談

無しに決行しつゝあつたKとしては珍らしいことゝして快く受入れてやらねばならぬ事にも氣がついた。

彼は優しくKに尋ねた。

「いつお歸りりや。」

「今夜の汽車にせうと思つとるのよ。」

「それでは晩飯を食つといきや。」

「あい、有難う。けれども今日は歸らう。」

Kは自分が好きだといふ爲めに今朝細君によつて肴屋から買はれた赤貝の事が思ひ出された。其赤貝がお膳のものにされて、一本の銚子と共に晩餐の卓上に置かれてゐることを思ふと、歸り度いやうな心持もした。が、又彼の折角の勸めを無にすることもつらかつた。

「まあえゝさ。食つといきや。今日は一つ御馳走をせうわい。おい。」と彼は妹を呼んだ。

「岡野の御馳走を今日は奢らんかい。」

「……」

「金が無いのかい。」

「すぐそんな事を。」

「まあKさんがお歸省る送別會ぢやもの。たまぢやないか、奢らんかい。」

やがて岡野の會席料理の膳が晴れがましく彼の枕頭とKとの前に置かれた。彼が自ら進んで斯ういふ破格の御馳走をすることは珍らしいことであつた。彼の歌の弟子で食物通の男が此間一度橋本の料理を彼に齎したことがあつた。俳人の弟子は人數は多かつたが、さういふ方面に通な人も、又さういふことを思ひつく人も無かつた。此新しい歌の弟子の珍らしい贈り物は非常に彼を喜ばせた。其事がまだ頭に殘つてゐたので、今度は彼の乏しい財政の中で、根岸では先づ其處といふ岡野の料理をKに御馳走することを思ひ立つたのであつた。其れは又Kにも珍らしい立派な御馳走であつた。

一本の銚子も添うてゐた。其れはKの爲めに特に添へられたものであつたが、彼も盃に半杯を恐る／＼飲んだ。

此晴れがましい御馳走は凡ての問題を暫く忘れしめて、主客共に舌鼓を打つて貪り食つた。彼はいつもの通りけいゝふりを連發して心地よげに食後の楊枝を使ひつゝ陶然として醉ひ顛れようとしてゐるKの顔を流し目に見た。

五

「群書類從の豫約にお這入りたさうぢやな。」と彼は思ひ出したやうにKに言つた。

「あい、這入つた。」

「いくらやらぢやたあ豫約金は。」

「十七圓ぢやが、初めに七圓出しといて、あとは五圓宛二度に出せばえゝのよ。」

「私も這入り度いなあ。」

「お這入りや。」

「さうよ。だけれどさうはお前財政が許さんもの。」

「私も後はどうなることか判らなかつたけれど、兎に角七圓だけ新聞社の給料を受取つた日すぐ拂込んで置いたのよ。」Kはふと其新聞社に於ける自分の地位を考へずにはゐられなかつた。兎に角纏まつた二十圓といふ給料を月々受取ることは愉快なことであつた。今度歸郷して後も尚續いて其給料は受取り得られるものかどうか。Kはもう大方あきらめてゐるのではあるが流石にまだ多少の未練があつた。

「それやよく這入つときた。お前にさういふ考が出來て來たのは結構だ。もう何冊出來たぞな。」

「まだ一冊よ。」

「何ぞな其れは。」

「神祇部よ。」

「お讀みたか。」

Kは配本を受取つて鼠色のクロース表紙をいゝ色だと眺めた許りで、實は目次も碌に見ず

にまだ其儘にしてあるのであつた。

「いゝえ、まだ……」

「尤もあゝいふ書物は、さう初めから讀むといふ譯には行かぬものよ。しらべる必要のある時によく讀んで御覽や。」

彼は何年か前から言葉を盡してKに讀書を勸め學問を勸めたものであつた。其れはまだKを彼の後繼者として考へてゐた時であつた。が、Kは少しも言ふ事を聞かなかつた。其れが此頃突然經濟雜誌社で飜刻する群書類從の豫約に這入つたことは多少滑稽にも感ぜられたが、先づ讃めてやらねばならぬことだと思つた。尤も書物が手に入つたところであの讀書嫌ひのKが其れを讀むかどうかは問題であつたが、其れにしても豫約出版に加入したといふ事だけでも讃めて遣らねばならぬことだと思はれた。

「私も群書類從は欲しいと思つとつた。どうかして這入ることは出來んかしらん。」

Kは稍まぶしいやうな心持がし乍らも其程迄に羨ましがられることは流石に得意に覺えられて、酔にほてつた額を折節運ばれたランプの光に輝かせてゐた。

「おい／＼。」と彼は又妹を呼んだ。

「何ぞな。」と妹は淋しい次の間から顔を出した。

「私の懐中時計、あれはもういるまいがい。」

「兄さんさへおいりにや、私の方は別に……」

「それぢや、あれをKさんにどうかして貰はう。もしあれが七圓にならなかつたら一圓や二圓は足してもえゝから。」

其れは彼が書生時代から持古した時計であつた。けれども病床の人となつてからは最早其れにたいした必要も無かつた。彼は其れを以て群書類從に代へようといふのであつた。

第五回　共力

一

Kが郷里に歸つて後暫くしてから彼の許に來た手紙には斯ういふ意味の事が書いてあつた。

「母の病氣は變化が無い。新聞社からは豫期して居つた通り記者席削除といふ通知が來た。尤も退社を命ずといふ代りに記者席削除といふ文字の使用される事は豫期した事のうちに這入つてゐなかつた。たとひ同じ意味にしても斯ういふ豫期しない文字を受取ると一寸變な氣がする。又自分は大概な事はこちらから求め遣る方で、高等學校の退學もこちらから求めた事であつたが、今度初めて受身になつて退社命令を受けたのである。斯ういふ經驗は初めてであるが餘りいゝ心持はしない。併し此命令を受ける迄厭々ながら所謂記者席にぢつと我慢して來たところに却つて一つの強味を自覺する。」とそんな負惜みが書いてあつた。其れから又一月餘りも經つてから更に次のやうな意味の手紙が來た。

「母の病氣は先づ小康を得て居る。遠からぬうちに一先づ歸京せうかと思ふ。扨てよく考へて見ると、自分ももう暢氣なこと許りも言つてゐられない境遇である。今度の記者席削除を機會として愈々局面展開を試み度いと思ふ。其れにつけて自分に適する職業は何であらうかといろ／＼考へて見たが、下宿屋の様な勞働も駄目、新聞記者のやうな傭はれ人も駄目とすると、どうもこれといふ適當なものを見當らない。唯今迄二三の雜誌に少し許り關係してゐた經驗から、先づ遣るんなら雜誌でも遣つて見ようかと思ふ。人に傭はれるといふ事はどうも我儘な自分には適しない。小さくとも自分が主人になつて遣つて行つて見たいと思ふ。けれども豫々叱られて居る通り無學でもあり年も立たぬから果して出來るかどうか。自分でも危まぬ

事はない。唯大兄にして御共力下さるゝならば今度は必死の覺悟で遣つて見る積りである。資本は少々ながら愚兄の補助を受けることに略相談が極つて居る。とさう書いてあつた。

此手紙を受取つた時、彼は恰も集つて來て居る門下の歌人と歌を作つて居るところであつた。新聞に連載しつゝあつた歌論は二箇月許り前に一應切り上げて、昨今は專ら作る方にのみ力を注いでゐた。歌論を切り上げたといふのも最早日に立つ程の駁論も出ぬやうになつて、今の所一寸彼の矢面に立つ人の無い事を明かにしたので、彼は一先鋒を收め、專ら作る方に力を盡してゐるのであつた。

彼は或一つの歌に考へ入つた時に其處に一本の郵便が置かれた。見るともなしに見ると其れはKの字であつた。彼は其れに構はずに前の考を辿つて其歌に案じ入つた。

彼が俳句の運座の方法を其儘歌にも用ゐたのは初めの間は歌人達を異様に感ぜしめたが、今日は皆慣らされてしまつて、矢張り其れを運座と呼んでゐた。

一運座が濟んで清書にかゝる迄の時間の餘裕に彼は初めてKの手紙を開封して見た。

一見した後に彼は默つて其手紙を卷き收めて席上の人には何事も言はなかつたが、彼の心は自分で抑へ切れぬ許りに興奮してゐることを自覺した。

晩食を終つて第二回の運座に取りかゝつたが彼の考は動もするとKの手紙の方に外れようとした。

一同が散會して後彼は又Kの手紙を取出して讀んだ。其れから仰臥した儘で深い考に沈んだ。

二

彼は夜更けても尚眠らなかつた。

彼は元來人と共同して事をする場合に自ら發起するといふやうな事は決してしなかつた。彼はよく斯ういふ事を言つて居た。

「僕は自ら發起したものはない。僕自ら發起したものがあるなら其れは僕の生命と終始すべきものであるから、僕はなか〱發起などはせぬ。」

彼は嘗て或雜誌に關係したことがあつた。が、其れは二號で倒れてしまつた。又嘗て或新聞を創刊したことがあつた。其れも日清戰爭の影響で一年許りで倒れてしまつた。併し其雜誌も新聞も共に彼の發起したものではなくて、他から相談を受けて其衝に當つたものであつた。現在彼を中心として彼の故郷で出してゐるHといふ俳諧雜誌なども、其地方の俳人が遣つて見度いといふので其れなら遣つて見たまへ、と贊成した迄のものであつて、其れも彼の發起したものではなかつた。

けれども彼は決して人と共同に仕事をすることは嫌ひはしなかつた。嫌はないどころか、其れが彼の所謂野心を滿足さす上に必要なことである限り、頗る其れを待望してゐた。唯自ら其れを發起することを好まない許りであつた。

或人は彼の此態度を評して、

「S——其れは彼の俳號である。KなどがNさんと呼ぶのは彼の通稱である——はさういふ點にもずるい男である。彼が自分で發起しないで、他の發起を待つてゐるのは自ら強者の立場に立たうとするのである。他より責められること少なく他を責むるのに便宜な地位に立たうとするのである。」と言つた。

其事を傳へ聞いた時彼は斯う言つた。

「他から見れば或はさうも見えるであらう。僕は唯自分の責任を思ふのである。地方で出してゐるH雜誌ですら、初め地方の俳人が發起して自分に賴んでゐる間は少なくも氣分が樂であつたが一旦財政上の困難から其れを廢刊しよ

うと其地方の俳人が言つて來た時、自分から續けてやつて呉れと賴んだ後は今度は責任が自分に歸して、自分から手を下げて地方の俳人に賴むやうな有様ぢや。僕は其れが辛いのである。」と。

彼はKの言つて來た雜誌に就いても一番に其事を思ひ出すのであつた。其れにKはさういふ男かといふと、寧ろ彼とは反對に容易にものを思ひ立つ男である。さうして厭になつたら無造作に止める男である。彼は其れを考へると、又H雜誌と同じやうに遠からず、續けて遣る事を自分からKに賴んで責任全部を自分に背負はなければならぬ時が來る事を想はずにはゐられなかつた。其れは病床の自分に取りては餘りに重大な仕事であつた。

其れならば一も二も無く謝絶してしまへばいいのであるが、其れは又彼の容易にすることの出來ぬことであつた。

三

といふものは若し之を謝絶してしまふとしたら第一Kは何うするであらう。或は彼に關係無しに雜誌發行を斷行するかも知れぬ。或は雜誌は思ひとゞまつて嘗て下宿營業を思ひ立つたやうに、彼の想像だも及ばぬ意外の仕事に取りかゝるかも知れぬ。Kの事であるから、どんな事でも思ひ切つて遣るには相違ない。けれどもいづれにしても十分の思慮を費し成算を立てた上で遣ることではないのであるから其等は必ず失敗に極つてゐる。さういふ事を度重ねるうちに如何なる邪路に陷らぬまいものでもない。其れはKに取つて險難至極の事である。Kが彼から離れることは恰も子供が親から離れるやうに險難なことに思へる彼に在つては、どうしても此際Kを彼から突放し度くはないのである。

今迄はいくら此方でやきもきしても一向平氣で遠ざかつてゐた者が自分の都合の爲めに俄かに助力を依賴してくるといふ事も考へて見れば餘りに我儘勝手の所爲であつて、彼は何か事がある度に考へ出す、「Kはもう自分の後繼者ではない。」といふ考を此時も亦一應は考へ出して見た。――彼は其れを考へ出す度に、親が子を賴まぬと決心した時のやうな氣の張りと胸の痛さとを覺ゆるのであつた――が、すぐ其あとから、母親と妹との外は妻も子も弟も無い彼に在つてはいつしかKを弟の如く子の如く考へて來た過去の思ひ出が力強く頭を擡げて來るのであつた。

第二にはKの利害を離れて、彼自身の利害だけから考へて見てもこれを謝絶するに忍びないものがあつた。といふのは外でもない、彼は自身からものを發起しない代りに人の與へてくれた機會は容易に之を逸さうとはしなかつた。彼は自分を中心に回轉しつゝある一個の天地を大きな目を瞠いて常に睨み詰めてゐた。さうして其處に何等かの新しい出來事がある度に彼は多大の興味を以て之を注視した。殊に其れが彼の所謂野心を滿足さす爲めの好機會であつたならば彼は必ず其前髮を捕へて離さうとはしなかつた。

「中央の文壇に自分の機關雜誌の一つ位はあつてもいゝ。」

斯ういふ考は已に一再ならず彼の頭を往來した事であつた。が、彼は決して漫に其れを口外はしなかつた。果して事實に於いて其機關雜誌の必要が迫つて來てゐるならば、彼自身から其れを言ひ出さなくつても、必ず其聲は彼の周圍から起つて來べきである。彼は辛抱強くぢつと其機運の熟するのを待つてゐたのである。彼は自分の生命の短い事は十分に知つてゐた。が、其れに拘らず斯ういふ事にかけては常人以上に辛抱強かつた。併し其辛抱強さは蜘蛛

が網に居つて蟲のかゝるのを待つてゐる辛抱強さであつた。一旦其れにかゝるものがあつた以上、たとひ其れは焦螟程の小さい蟲であらうとも、彼は躍りかゝつて其れを捕へた。地方の俳人が雜誌を出し度いと言つて來た時彼は決して表面之を驚喜して迎へはしなかつたが、併し一旦しかと捉つた其機會は其後地方の俳人の方から逃れようとしても最早離さなかつた。今度のKの一件も同じ事である。彼は決して漫然と之に同じようとは思はなかつたが、其れでも此機會を取逃すことは思ひも寄らなかつた。

四

彼は大方Kの心持を想像してゐた。Kは彼に助力を乞ふと言つたところで決して彼及び彼の門下生のみの機關雜誌とする積りではなくて、Kの知つてゐる今の文壇の知名の士とも關係を結び、範圍の廣い文學雜誌にする積りに相違なかつた。其れは單純に文學雜誌發行を目的とするKに於いては有意味なことかも知れなかつたが、自己の機關雜誌を作らうとする彼に在つては全然無意味の事であつた。此點に於いては彼は其れとなくKに警告を與へて置く必要を感じた。

けれども亦其れがKの生計を支へて行く爲めには――少なくとも雜誌其自身が維持されて行く爲めには――相當に賣れなければならぬ。これは大事件である。此俗受の手腕は嘗てKに話したことのある通り、彼は多少之を有してゐるといふ自信があるが、Kには全然缺如してをることである。知名の文士を並べ立てるといふ編輯法も俗受としては一方法であるが、それは根柢から彼の贊同しかねることとして、即ち純粹なる彼の機關雜誌とした上で、世間にも相當に賣行く方法を講ぜねばならぬ。Kを鞭撻して之を遣つて行くといふ事も、今迄にない一方面の仕事を增すことで、病軀でよく之を爲し遂げ得るや否や、彼は又靜かに其點をも考慮せねばならなかつた。

根岸の六月の末は、もう蚊が多かつた。母も妹も寢靜まつた後に彼は獨り蚊帳の中に起きてゐて興奮した頭に其等の事を考へ續けてゐた。其時ふと又彼の頭に渦卷き起つたのは彼の生命のことであつた。死の問題であつた。今年は不思議に壯健で、時に驚くやうな熱の出入も無いではないが、それにしても昨年に比ぶれば餘程の相違で、腰から出る膿汁が分量を減じてゐるといふ話などを聞くと、どうやら此病氣だと、或は順當にいゝ方に向ふのではないかとさへ考へらるゝことがあつた。其爲め例の死堺は遙かに遠退いてゐて、殆ど其問題を忘れてゐる事さへ多いのであつたが、今どういふものだか其れが非常な勢ひで頭を擡げて來て、ふと戰慄するやうな恐怖がぞく／＼と彼の身體を襲うて來た。冷たい汗がだく／＼と腋から流れた。自分はもうすぐ死ぬるのではないかといふやうな心持がした。呼吸が迫つて來た。此儘呼吸がとまるのではないかと思ふとぢつとしてゐられなかつた。彼は聲を上げて妹を呼ばうかと思つたが、老いたる母を驚かすに忍びぬので口迄出た叫び聲を嚙みしめた。齒ががた／＼と慄へた。

彼は今熱が高いのであるか、其れとも熱が低過ぎて虛脫に陷りかけてゐるのであるか、何れかを思ひ惑うた。枕許を探ると體溫器が手に當つたので、彼は慄へる手で其れを腋に挾んだ。つとめて大きな呼吸をして見た。

汽車が夜陰を轟かして過ぎた。其れは夜半に稀に通る貨物列車の響であつた。死んだ夜が漸く此響で蘇生するかのやうな心持がした。彼は一層神氣を落著けようとつとめた。

體溫器を暗いラムプの火影にすかして見ると八度以上に上つてゐなかつた。熱に慣れた彼に

あつては決して高熱とは言へなかつた。さういへば心柄か呼吸も少しは樂になつたやうに思はれた。彼は漸く恐怖から蘇りつゝあつた。

五

彼が一夜の間殆ど寢ずに費した思慮はやがて長い／＼手紙となつてKの手に落ちた。開封して見ると先づ冒頭に斯うあつた。

「御手紙正に拜見致候。今日は不圖した事で少し精神を攪亂せられ居り候まゝ何事をいひ出すか分り不申候。例の病人の不平として御聽き可被下候。」

次を讀んで行くと、暫くの間は同人間の起居がいろ／＼書並べてあつた。たとへば、

「Fは根岸に引越候由。」といふやうな文句で、其等の筆には少しも精神攪亂のあとも無ければ病人の不平と認むべきものも無かつた。が、やがて、

「…(サテコレカラガハジマリ)雜誌の事は小生は以前より首を傾ける一人にて今でも首を傾け候。」とある所に到着してKは呼吸を詰めて讀んだ。

其れからは長い／＼文句であつたが、要するに彼が一夜の間考量した事が落ちなく書並べてあつて、其間には、豫て胸中に在つたKに對する不平が述べてあつたり、又、

「小生も多少の自信があるから事務的の小生は一切雜誌の編纂上の事を擔當して詩人的の貴兄等の作を整理して行くといふ姿となる。よろしい引受けて遣つて見度い。併し天は我等の成功を嫉んでゐる。何故か運命は我等をめのかたきとねらつてゐる。四隣の萬物は少し頭を出さうとする吾輩を無理やりに抑へつける。日光は嘗て我顏を照さぬ。雲は日を掩うてをる。只の一日一夜でも平和に暮らす時は無い。數日前寒暖計が九十五度に上つた。暑いのはそれ程苦しまぬ小生も餘り苦し過ぎると思うて檢温器を取ると三十八度七分あつた。三十八度七分の熱を熱と知らないで天氣の暑いのと間違へてゐる位だや。平生いかに苦に馴れてゐるかは分るであらう。」といふやうな述懷も交つてゐた。

Kは此手紙の最後の文句、

「體裁等の事は面晤の上ならでは申し難い。」迄を一讀して、自分がSに相談して遣つたといふことがどういふ事を意味してをつたかといふ事を初めて了解した。KはSの想像して居つた通り、稍廣い範圍の文學雜誌を作る積りで固よりSに重きは置くとしても、尚其他の文學者をも自分の知つて居る範圍内のものだけは網羅して見る積りであつたのであるが、此手紙を見ると其考は無言のうちに全然否定されてゐた。

「そんな積りではなかつた。」とKは氣まづく思つた。が、併し次の瞬間に、

「假にもSに相談してやつた以上、斯ういふ返事に接する事は疾に覺悟してゐなければならぬ事であつたのだ。Sがさういふ考を喜ぶ筈はなかつたのだ。」と思つた。其れのみならず、自分とSとを繫ぐ例の繩は、唯一本の手紙によつて忽ち大きな鐵鎖と變つて、今はもう引くことも斷つことも出來ぬものになつてゐることを明かにした。

「あの手紙がそんな重大な意味のものであらうとは考へなかつた。」

Kは苦しい一つの壓迫を感じた。

が、これは餘りに我儘な考だとKは思ひ直した。斯く迄にSが氣を入れてくれるといふ事はKに取つては此上無い力強いことゝせなければならなかつた。其れのみならずKには最早此方向より外に行く可き道は一寸見當らぬやうに思はれた。此際若しSに謝絶されたとしたら忽ち進む可き道に迷はねばならなかつたのだと思つた。多少雜誌の性質に意見の相違こそあれ、兎に角これによつて局面を展開し得るとい

ふ事は何よりも愉快なこととせなければならぬと思つた。Kは其性質として前途の事を餘り詳しく考へて見ようとは思はなかつた。此際兎に角Sの意見に從つて進つて見るより外に途は無いと考へた。

第六回　發途

一

Kが東京に歸つたのは八月の末であつた。

雜誌の名前をどうするかといふことも問題の一つであつたが、其れは今迄彼――S――を中心にして地方で出してゐたH雜誌の名前を其儘繼ぐことに一決した。H雜誌の發行人はいつでも廢刊することを希望してゐたのであつた。

「もつと外にいゝ名前はあるまいか。」と初めKは彼に言つた。Hといふのは彼の俳號Sを訓讀したもので、彼の名前を其儘雜誌の名前にしてゐるのであつた。此名前をKは好まなかつた。

「外にいゝ名前があるなら變へた方がいゝな。」と彼は答へた。其處でKは自分の思ひついた種々の新しい名前を並べて見たが、どれも彼はいゝ名前だと言はなかつた。さうして斯う言つた。

「どうせどれもいゝ名前でないのならば矢張り今迄に耳に慣れてゐるHにしようぢやないか。」

Kは其れを拒むことが出來なかつた。

編輯上の事は概ね彼の意見を土臺にした。唯營業に關することだけはKの考を中心にして極めた。

知人の間に雜誌發行の事を通知旁ゝ寄稿を依賴する手紙は大概彼から出された。

二人は毎日のやうに手紙を往復した。手紙で間に合はぬことは彼の病床で協議された。Kは三日にあげず御院殿の坂を下りて來た。

上野の森には野分が吹いてゐた。暑さが今日の野分で一時に退くであらうと誰もが心賴みにしてゐた。

　　野分して蟬の少なき朝かな

と彼は折節の卽景を句にした。其朝もKは來た。

「御院殿の坂の上の大きな杉が一本折れて居つた。」とKは話した。

「今朝も人が來てお廟所の近所にも大分倒れ木があると言うとつた。ひどい風であつたな。」と彼は愉快さうな晴々した顏をしてKを迎へた。

「雜誌は愈々六十四頁にして定價を十錢にすることにしたがな。」とKは報告した。

「さうかな。なるべく厚い方がよからうと思つとつたのぢやが、十錢ならえゝわい。」と彼は答へた。

FとIとによつて書かれた二枚の口繪は共に彼の氣に入らなかつた。Kも餘り好ましい繪とは思はなかつたが、雜誌の名前をHで我慢したのと同じやうな心持で、

「折角書いてくれたのぢやから我慢せうや。」と言つた。けれども彼はきかなかつた。

「こんな繪は駄目ぢやないかな。」と言つて厭な顏をして、「私から二人に書き直して貰ふやうに賴んでやらうわい。」と言つた。

Kは心の中で、

「口繪迄を一々さうやかましく言つてゐては大變だ。」と思つた。併し彼がやかましいのは口繪ばかりではなかつた。多くの人が折角寄せて來た原稿を大概沒書にした。たまに採用するものも大分手を入れた。雜誌の半分位は自分で書くつもりでせつせと書いてゐた。其中に「小園の記」と言つて自分の家の庭の事を書いたものもあつた。

小便に立つたKは緣に立つて、其「小園の記」に書かれた庭を見た。野分のあとのすが〳〵し

い色は其處にも充ち滿ちてゐた。

二

新聞に出す廣告の事も話題に上つた。今迄他の雜誌の廣告を見てばかりゐた新聞に、初めて自分の雜誌の廣告を出すといふことが、寧ろ他の事よりも多くKの心を牽くのであつた。彼も矢張り好んで其話をした。

已に廣告の圖案はFに頼んであつた。其れが恰も其處に届いて來たので二人は急いで見た。堅くるしい感じのする圖案だとKは思つたが、彼は其方は何とも言はなかつた。唯名前を書いた平假名が氣に食はぬらしかつた。

「廣告といふものは誰の目にもつくやうにするのが目的で、こんな洒落れた字を書いては第一一寸讀めんぢやないか。字だけ私が書き直さうわい。」と言つた。

「どうでもえゝやうにしておくれ。」とKは詰らなさうに言つた。今迄Kの頭に在つた廣告の感じは、別にどうといふ形が出來てゐるのではなかつたが、唯何となく素か味のある而かも瀟洒たる感じのものであつたのだが、其れがすつかり此圖案で打毀されたやうな心持がして其文字の問題など少しも氣乘りがしなかつた。

けれども凡てさういふことに就いては、いつでも唯色がある許りで形が無いのがKの常であつた。感じだけは其圖案を否定しても、それならどういふ圖案にすればいゝのかといふ具體的の話になつて來るとぼんやりとして取止めが附かなかつた。其爲めに自分でも危んで斯ういふ場合には餘り強硬な口を利くことが出來なかつた。

其れに似よつた不滿なことは少なくはなかつたけれども、其等は凡て、一自分の雜誌が出來るのだ一といふ樂みのうちに溶込んでしまつて、餘り問題にならなかつた。たとひ時々しよげることがあつても大體の氣分のはずみにはたいした影響は無かつた。

Kがそんな氣分に醉つてぼんやりしてゐる間に彼は病苦を忘れてせつせと仕事をした。疲勞の爲めに夜眠れぬことが多くつても其れを左程苦にしなかつた。其氣分のはずみはK以上であつた。唯Kは其氣分に醉つてぼんやりといい心持でゐる間に、彼は苦痛を凌いで仕事をした。

其廣告の字を自分で書きかへることも彼は少しの仔細も無くすぐ試みた。何遍といふ事なく書き替へては書き替へた。傍で見てゐるKの方が先づ草臥れてしまつた。

「もう其れでえゝぢやないかな。」と欠を噛みしめてKは言つた。

一駄目ぢや。矢張りFの字の方が字としては旨いわい。けれども廣告の字にはならんからな。」

さう言つて彼は更に勇氣を鼓して書くのであつた。

原稿も「小園の記」の外に今極つてゐるものがこれ〱だと言つて三つばかり數へ上げた。いづれも彼の頭にはもうちやんと筋道が立つてゐて、恰も其儘筆記すれば文章になるやうにKに話して聞かせた。

それに對してKは淺草寺のことを書く積りだと言つた。それはどういふことかと彼に聞かれた時にKは明確に答へることが出來なかつた。唯淺草寺は面白い所だといふ一種の感じがあるばかりで、まだこれといふ極まつた趣向は出來てゐなかつた。

「早くおしよ。原稿の締切に間に合はぬと大變ぞな。」と彼は言つた。

三

Kは外神田の家から内神田の或家に引越した。其れは雜誌を發行する爲めに便宜の家を選んだのであつた。其處の家主は或有名な寄席の

主人で、何でも一時は其處を居所にして居つたのが、此頃又寄席の方を自分でやるやうになつて貸家にしたのだとかいふ噂であつた。不思議なのは其二階で、十五疊敷の廣間があつて、其中央に、もと何かを置いたあとであらうと思はるゝやうな疊が其處だけ青く色の變らずに在るところがあるのが人目に立つた。初めは氣味の惡い妙な家だとKの家人は思つてゐたが、やがて其れは博奕を打つ爲めに設けられた場所であつたのだといふ事が判つた。寄席の主人は其方面でも有名な親分であつた。

　此不思議な家の其不思議な座敷をH雜誌の編輯所として、小さいテーブルと一脚の椅子とを置いてKは其處に陣取つた。

　或日其家の表に車がとまつたので、まだ東都の文壇に面を出さない此發行所に何人が威勢よく車を乗りつけたのかと不思議に思つてゐると、意外にも其れは根岸の庵に三年間平臥してゐる彼であつた。

　Kの家族は驚いて之を迎へた。

「二階に上れるか知らん。」とKは彼を玄關に助け上げ乍ら二階を見上げて心配さうに言つた。其時彼はもう大きな口に微笑を湛へ乍ら默つて梯子段につかまつてゐた。Kは兩手で彼の體を支へるやうにして漸く上つた。

「いろ〳〵雜誌の相談もあつたから來た。」と彼は言つた。今年になつてから稍病勢の衰へたやうな傾きがあつたので此春已に一度車に助けられて向島に行つた事があつた。其れは豫て親しみの深かつた墨堤の殘春を見に行つたのであつたが例の櫻餅屋にも寄つて見た。併し娘のお六は居なかつた。彼は其れを物足らなく思つたが、其一人の女に逢はなかつた失望よりも久濶の山川に逢つた悦びの方がどれ程大きかつたか知れなかつた。彼は其一日の淸遊に蘇つたやうな心持がして其後又もとの如く病床に横たへた體にも、今迄とは變つて、生甲斐のあるやうな希望の輝きも一時は認められたのであつたが、流石に其れから又外出するといふ機會も勇氣も無く今日に至つたのであつた。

　それが今日は、もう九月も半ばになつて秋氣が肌に快い上に稀な好天氣であるところから彼はふと春以來の外出を思ひ立つた。殊に近來は雜誌の爲めに心が引立つてゐて、見るもの聞くものが彼の興味をそゝるので、彼は急に思ひ立つてKの新居を襲うたのであつた。

　雜誌の相談もあつて來たと言つたが、其相談といふのは別にたいした事でもなかつた。其れは二人の間に嘗て一度話合つたことのある、文章の標題の活字の大きさの事であつた。其相談は一言の下に決してしまつた。

　彼の心は輕やかであつた。病人であることを殆ど忘れてしまつてゐるらしく快濶に談笑した。患部が痛みはしないだらうか、冷えはしないだらうかとKは心配して自分の寢る蒲團を持出させたが其れは却つて彼の機嫌を惡くした。彼は恰も健康な人であるかのやうに唯一枚の座蒲團を腰の處に敷いて横になり、片肱を突いた儘でKに對して話した。

四

　別にこれといふ纏つた話もなかつたけれども二人の間に話題は盡きなかつた。其れも雜誌についての話は少なくつて世間話が多かつた。此家が博奕宿であつたといふ事などが殊に彼の興味を牽いたらしかつた。

「來た時から變な家だと思つとつたが博奕宿とは氣がつかなかつた。」と言つて笑つた。

　其處へ出て來たKの細君はをかしさうに言つた。

「この家で目立つて立派なものは竈でございますよ。それは見事な竈でございますよ。」

其竈にはNの爲めに柔かい飯を焚くべく今

盛んに火が燃えつゝあつた。

其處へ近所にゐる彼の友人や門下生がKからの報知に接して二三人集つて來た。

七輪が座敷の眞中に運ばれた。すぐ表通りの今文といふ牛肉屋と家が接してゐるので、裏口から註文すると赤い肉を並べた鍋が聲に應じて來た。其れが恰も牛肉屋に上つて食ふのと同じだといふ事が何よりも彼の氣に入つた。

「今文に來たのは何年前かな。」と彼は其牛肉屋の二階に最後に來た時の事を思ひ出した。

皆の箸は鍋の中に突込まれた。他のものが少し許りの酒を飲んでゐる間に彼はもう飯を食つた。

「これは非常によく出來てゐる。」と言つて其柔かい飯の出來工合を讃めた。細君が顏を出した時にも又〻返して讃めた。

「初めて斯ういふ出來の好い飯を食ひました。うちの飯はいくら喧しく言つても駄目ですよ。どういふものでせう。」

「其れはお炊きになる御飯が少ない爲めでございませう。」

「成程さういふわけですかね。」と彼は親子三人の陰氣な淋しい自分の家庭を思つた。折節下の間には赤ん坊の泣聲が起つたかと思ふと其れはすぐ止んで今度は大人の笑ひ聲に代つた。其等の響が際立つて陽氣に聞えた。さきに細君の吹聽した見事な竈といふものが此時ふと彼の目の前に描き出された。

餘り日が傾かぬうちに歸らうと彼は言つた。皆誰も強ひてそれを止めようとはしなかつた。彼の病氣に障らぬ事のみを祈つてゐて、彼の心の底からの今日の悦びを本當に解釋するものは無かつた。三年間病床に釘附にされてゐて、たまに外出するのも半年ぶりである彼の嬉しさは彼自身より外に解するものは無かつた。彼は歸らうと言ひ乍ら容易に腰を上げなかつた。誰かから今少し居れと引留めて貰ひ度かつたのであるけれども誰も一言も其れを言はなかつた。

車はもう表に來てゐた。其れは判つてゐたのであるが彼は知らぬ風をしてゐた。

けれども彼の門下生の中の腕力のある一人が彼を負つて梯子段を降りたのは其れから間も無いことであつた。

車に乘つてからは一刻も早く自分の家に歸つて慣れた病床に横になり度いやうな心持がした。來る時には目を牽いた町屋の光景も歸りには其程でもなかつた。彼の心はいつの間にか又H雜誌の事で一杯になつてゐた。Kに言ふ可き事の尙澤山あつたのを今になつて思ひ出した。

五

「雜誌の出來は一體わるくない。只一つ殘念なのはちと誤字が多過ぎたことだ。口繪は存外淋しい。淺草寺は最も引立ちたり配合の上より極めてよし、これが一番の出來かと思ふ。

雜誌は小生にも毎號三部づゝくれ給へ。ちと贅澤だが、切りぬいて張つておくつもりだ。第一號だけ寄贈したい人々がある。後にいはう。

天氣はよくなる。雜誌は出來る。快々。」

斯ういふ手紙を持つて使ひは歸つて來た。其れは出來た雜誌を一部だけ取敢ず彼に持たせてやつた時の返書であつた。

この手紙を受取つた時のKは何事をも忘れて唯雜誌の出來た嬉しさで一杯になつてゐた。それに一手販賣を託した本屋はあとから〳〵と取りに來て、二時間と經たぬうちに一千部は忽ち品切になつてしまつた。

「再版千部は大丈夫でせう。」と車を引いて雜誌を取りに來た印半纏の小僧は心得顏に言つ

た。
　Kは下駄を突掛けて本屋に行つた。番頭は小僧程強氣ではなかつたが、
「五百部位ならいゝでせう。」と言つた。Kは早速本屋の電話を借りて活版所に五百部の再版を申込んだ。本文の紙型は取つてあるけれども表紙の石版は今壞したところだと活版所では言つた。止むを得ず今一度製版さすことにした。
　其盛況を早速手紙で彼に報告してやつた。さうしてあとの二部は再版の時に送ると言つて遣つた。
　雜誌の發送を手傳つてくれた人々と共に今文に鰻を食ひに行つた時に、ちやぶ臺の前に坐らうとすると、
「K君。」と聲をかけた人があつた。誰かと思つて見ると、其れはKが記者席削除をされた其新聞社の記者の一人で文壇に名の聞えた男であつた
「やあ暫く。」とKは直ぐに其記者席削除の事を思ひ出しながら顏を赤くして挨拶すると、
「君の雜誌を今見たよ。なか／＼よく出來てゐる。一番いゝのは口繪だ。あれは一枚其傑作だ。」と言つて景氣よく賞めた。
「何處で君は見た。」とKは餘り反響が早いので驚いて聞いた。
「友人のところで見た。」
「其れは讀者かい。」
「矢張り俳句の好きな男さ。……賣れるだらう。」
「初版千部は賣切れた。」
「初版千部は少なかつたねえ。もつと刷つてもよかつたらうに。」
　今日のKの心持は何となく夢のやうであつた。嘗て彼と話す時などは、
「一千五百は出るだらうと思ふ。」といふ事をよく口癖のやうに言つたことであつて、自分にも何か賴むところがあるやうな氣がしてゐたのであつたが、扨て其れが實現して見ると、却つて不思議なことのやうに思はれて、待設けてゐなかつた幸福の俄かに湧いて出て來たやうな心持がするのであつた。
　其夜Kは、手紙だけでは物足りなかつたので、車を飛ばして根岸へ行つた。
　彼は淋しい明るいランプを枕頭に置いて仰臥しながら一冊の書物を讀んでゐた。彼の心は雜誌に就いての浮立つた喜びからもう疾に離れて、靜かに杜詩を讀んでゐた。落著いた眼は徐ろにKを迎へた。

第七回　釣鐘

一

　彼の病床には例の愚庵からの贈物である釣鐘（柿）が今年も亦屆いてゐた。其れは京都に居る彼の門下生の一人が枝ながら携へて東上したのであつた。其門下生が愚庵を訪ねたら、これをS君に贈つてくれと言つて枝の儘鈴生の柿を折つてくれたので、其門下生はふと思ひついて伏見から自分の家に歸らずにすぐ汽車に乘つて遙々彼の病床に齎したのであつた。
　彼は此釣鐘をKにも勸め自分でも賞食しながら、H雜誌の事よりも寧ろ杜詩の事を多く話した。
　雜誌の盛況は互に祝福された。其悦びは共に隱すことが出來なかつた。けれどもKの、今更のやうに狂喜して話すのと反對に、彼は其位の事は當然であると考へてゐるかのやうな落著いた口吻であつた。
　其れがKには不思議に思はれた。
　が、事實は、Kが來る迄にどれ程熱心に彼によつてH雜誌は隅から隅迄繰返し熟讀されたか。其れはKの想像の外に在つた。其れにKの

手紙によつて千部が賣切れて五百部再版した事をも旣に承知して、H雜誌の大勢はもう彼の頭の中でちやんと明かにされてゐたので、彼は其上に無用の贅言を附加へ度くは思はなかつた。

雜誌が出來る迄の彼の心配——寧ろ恐怖——はKの考へ及ばぬ程大きなものであつたが、今夜の彼はもうすつかり落著いてゐた。

雜誌についても第二號の準備談が好んでくりかへされた。

「校正をもつとよくせんといかんな。」と彼は言つた。

「餘程氣をつけた積りであつたのだけれど。」

「校正はむづかしいものさ。今度は私も手傳はうわい。二人で遣らう。」

「それでは校正を持つて此家へ來ようかな。」とKは少し面倒さうに言つた。

「さうよ。さうして貰はにやならんかも知れんが、天氣でもよかつたら又私の方から出掛けて行かうわい。」と彼はKの機嫌に障らぬやうに言つた。

「いゝえそんなにおしいでも、それや私の方から持つて來ることにせう。唯活版所で校正を急ぐものだからな。」

「だから編輯を早くしようぢやないか。淺草寺の積もなるべく早くお書きや。私も今度は早くせうわい。」

其れから又枕許の詩集が取上げられて杜詩に就いての彼の見解が話された。其れは流石にKの興味を牽いた。斯ういふ話を聞くと自分も讀書子になり度いやうな心持がおこらぬでもなかつた。

Kは初め車を飛ばして來た時の浮き立つた心持は大分冷却されつゝ歸路に就いた。

が、本郷を通る時に雜誌屋の店頭に出てゐる自分の雜誌を見た時には又其心持がもとに戻つた。一人の書生は其れを手に取上げて、一番に口繪を見て其れから本文を標題だけ見て居たが遂に其れを買つて行つた。

Kは微笑を含んで其後ろ影を見送つた。

二

「柿さへあれば元氣はいくらでも出るさ。」と彼は笑ひ乍ら、さつきしたゝか食つてからまだ三十分も經たぬと思ふのに又一つむき始めた。三人の客は皆笑つた。

それは皆俳句の方の門下生であつて、一しきりH雜誌の評判が出た後に稗話に倦んで默つて其れ〴〵思ひ〳〵の處を見てゐたが一齊に彼の手許に目を移して笑つたのであつた。柿の長い皮は彼の手の甲を越して新聞の上を這うてゐた。身體をねぢりながら膝這ふやうにして柿と庖丁とを兩手に握つてゐる彼の顏は生氣に充ちてゐた。

「何んにせよKがもつと書かなくつちや駄目ぢやないかな。」と矢張り同郷人で、Kとも近しい間柄の一人は言つた。話は又H雜誌の事に戻つたのであつた。

「さうさ。」と彼は剝いた柿に齒を露はに當てながら簡單に同意した。

「一人であんなにお書きるのは大變ぢやないか、いくら柿があつても。」

「ふゝゝゝ。」と彼は柿を口にためながら、其れを吹き出さぬやうに用心しながら笑つた。

一座の人は皆又默つた。

柿を食つてしまつてから彼はハンケチで口の端を拭ひながら灯火を見詰めて靜かに考へてゐたが、目を再び盆の柿の上に落しつゝ言つた。

「諸君も少し奮發して何か書いて見たまへ。Kもまだ當分の間は事務の方で多忙であらうからさう責めるわけにも行くまい。それから……」と彼は昨夜考へついたことを思ひ出して三人の

顔を見渡した。

「雲についての考へ、形容でも事實の寫生でも感想でも何でもいゝのだが、十行前後の短文を書いてくれたまへな。」

「それをどうなさるのですか。」と、これは他郷人である門下生の一人は聞いた。

「其れを並べて見ようと思ふのです。」

「Hにお出しですか。」

「さうです。」

三人の座客の間にはH雑誌について何か話が出る度に、相反した二樣の感情が常に動いてゐた。一つは彼等に係り重きを置かず唯Sと二人で雑誌發行を企てたKに對する不滿――嫉妬を交へたる――と、一つは又自分等の師と仰いでゐるSの編輯下に在る雑誌に自分等の文章を載せ度いといふ希望と、其二つの相反した感じが事毎に就いて起つた。

三人は其れ／＼違つた性質を有して、又SやKに對して其れ／＼違つた立場に立つてゐたけれども、其れでも此二樣の感じは皆之を持つてゐた。唯人によつて其感情に厚薄の相違はあつた。

K自身がもつと書かなくつちや駄目だと言つた男は僅か十行許りの文章をKの雑誌に載せて貰ふ事を愉快とは思はなかつた。

「出來たら書いて見ようわい。」と言つた其顔は冴えてゐなかつた。

三

彼が初め雑誌發行の事に就いてKに送つた長い長い手紙、あの手紙の中に、

「……他の人々に多くを望むことは出來ぬ。詰り貴兄と小生と二人でやつて行かねばならぬ、若し小生病氣したら貴兄一人でやらねばならぬ、貴兄病氣したら小生一人でやらねばならぬ……」といふ事を書いた一節があつた。

雑誌の原稿をこゝに集まつてゐる三人の男に依賴するといふやうな考へは固より持たなかつた。けれども是等の人も愛すべき彼の門下生であつた。若し向うから進んで原稿を寄せてくれて、其れがいゝ原稿でありさへすれば彼は悦んで載せるのであつた。が、不幸にして今迄彼の手許に來た其等の人の原稿は大概不出來であつた。彼は大方没書にするか、然らざるも大半筆を加へたり削減したりして僅かに收錄したのであつた。雲の題に就いて十行前後の短文を多くの人から集めて見ようといふ事も一面には其等の小さい文章で其等の人と雑誌との聯絡を保つて其反感を和げ度いといふ考もあつたのであつた。

「出來たら書いて見よう。」と言つた一人の男の冴えぬ返辭は一度彼の顔を曇らしたが、彼はすぐ其男の反感は彼に在るのでなくてKに在ることを思つた。

「雲といふ字さへ這入つて居ればえゝさ。何でも書いてお見や。私も何か書いて見る積りぢや。」と彼はやさしく言つた。

嘗てKの口から斯ういふ事を聞いた事があつた。此處に來てゐる三人のうちの二人にKから原稿の催促をした時斯ういふことを二人で言合つてゐたといふ事であつた。其れはKも他から傳聞したことであつた。

「Kが手紙で原稿の催促をしたりするのは生意氣だよ。原稿が欲しいのなら自分で頼みに來て、自分で取りに來るがいゝぢやないか。」

Kは此事を彼に話した。彼は其時斯う言つた。

「それこそ生意氣だよ。そんな事をいふやうなら放つてお置き。何もこちらから希望するわけでは無い。寧ろあの男等を疎外するやうになつては氣の毒だと思つたから一應勸めて見た迄の事ぢやないか。」

全然Kの側に立つた彼の此言葉はKを滿足さ

せたが、併し彼の心の底では其等の人のKに對する反感にも滿更同情しないわけには行かなかつた。其れ以來原稿の催促などは、Kをして言はしめることはなるべく之を避けることにしたのであつた。

Kの神田の家の話が出た。

「あの家は十二圓ぢやさうな。いくら發行所でも少し贅澤すぎるよ。」と一人の男は言つた。

「あの十五疊の二階の中央に小さいテーブルと一脚の椅子とを置いてKが澄ましてゐるところは滑稽だよ。」と他の一人の男は笑つた。

彼は其等の言葉に逆はずに矢張り笑つた。其れから斯う言つた。

「博奕場であつた丈けは振つてゐるぢやないか。」

三人は默つてゐたが、不思議にも斯ういふ場合の彼の言葉には無上の權威があつて、さう言はれて見ると成程其れは面白いと三人ながら思はずにはゐられなかつた。其爲めに十二圓の家賃の家にゐる事が贅澤だといふ考までが力を失ふやうに思はれた。

四

三人が歸つた後に彼は同じく門下生の一人で、此頃血を吐いた男の事を思ひ出した。其男からは巳に俳句稿が二冊來てゐるのであつたが、彼は最近に來た方を取上げて見始めた。

新聞の投稿の選に初心者の句が多い爲めに時間が徒らにかゝつて收穫は少ないのであるが、重立つた門下生の句稿になると流石に句が振つてゐて選句に興味が多かつた。彼はいゝと思ふ句には特に短評を加へなどしつゝ見て行つた。

H雜誌第一號の原稿を終つてから彼は殆ど休息する間も無く新聞に出すべき和歌の選稿に取りかゝつたのであつたが、其れが濟むと早や目前に雜誌第二號の原稿が迫つて來てゐた。其處へ一號が發行されて而も好評であることを聞くと流石に心が躍つて直ちに第二號に取りかゝり度いのであつたが、彼は休息の意味で、豫て閑を得て熟讀し度いと思つてゐた杜詩を此際に於いて一讀して見ようと思ひ立つたのであつた。けれども門下生其他の來訪に妨げられて其れも思ふやうに運ばなかつた。三人が歸つてから彼の考は多くの門下生の上に及んだ。近頃喀血した其男の上に及んだ時、彼の心は引締つた。

自分が初めて喀血した當時の事も思ひ出された。病床の徒然に其男が待ちかねてゐるものは彼の朱の這入つた句稿であることに想ひ到ると、萬事を措いても其れに取りかゝらねばならぬと思ひ立つたのであつた。

其一冊の句稿を見終つて更に前に來た方の句稿に及ばうとしたのであつたが、もう其勇氣が無かつた。彼は纏げるやうに筆を落した。筆の穗は赤い一點を古びた疊の上に印した。

卷紙を取上げて仰臥した儘に短い手紙を書いた。

「此頃は御持病起りたりと聞く。成べく靜かに養生あるべく候。肺病は死ぬる病氣にはあらざれどもたび〳〵喀けば身體弱り可申候。此後も風など引かぬやう御心掛可然候。

別稿返璧に及び候。前に來てゐるものも御返却可申の處今夜は疲れ居候まゝ取あへず御近作の分に附點致候。併し匆卒の際必ず見誤りもあるべく候。先日の御手紙は面白く候まゝ少し省略して一Hに掲載可致候。」

彼は其手紙を書いた序に今一本の手紙を書いた。其れは喀血した男を思へば必ず聯想して思ひ出す他の一人の男に當てたのであつた。

「一日御覽下され候事と存候。今度は原

稿多くして否々のをはじめ削減せられ候。玉稿も同樣に御座候。就いては玉稿一應返上致候に付今少し順序ある方よろしかるべく紀行と議論とが隣合せになり居候も讀みにくきかと存候。
小生先づ〳〵よろし。熱の出ぬだけでも秋は結構なり。」
此男の原稿を採用しなかつた事も氣にかゝつてゐる事の一つであつたが、此手紙を書いて漸く安心した。

五

Kは引續いて十日許り來なかつた。
第二號の原稿が彼の心を苦しめてゐた。其れに就いてもKの音沙汰の無いことが氣がかりであつた。一號の再版の五百部も相當に賣れ行くといふ事は聞いたが、其一號の好況がすつかりKを安心せしめてぼんやりしてゐるのではなからうかと心配された。
其處へKはひよつこりとやつて來た。其後の況を聞き取つた後に、
「淺草寺の續きは出來たかな。」と彼は聞いた。
「いゝえまだよ。」とKは當惑したやうに答へた。
「書きはおしるのぢやらうな。あれが無いと淋しいぞな。」と彼は油をかけるやうに言つた。
「あい。乾度書く積りでをる。」とKは答へた。
其れから話はH雜誌を一手販賣する本屋の番頭の事に及んだ。Kはつく〴〵感心したやうに言つた。
「初めて商賣人に交際つて見たが、なか〳〵機敏なものぢやな。」
「はゝゝゝ。」と彼は笑つて、「それや書生つぽとは違はいた。ぼんやりしてゐると飛んだ目に逢ふぞな。」
「さうぢやろか。」とKは考へ込んだ。
「どうかした事があつたのかな。」
「いゝえ、別にどうといふ事も無いけれど、ただ餘程こちらがしつかりしてかゝらぬと險難なやうな氣がするのよ。」
「それやさうとも。契約などでも口約だけでは險難ぞな。ちやんと契約書でも取交はすやうにしないと。」
「さうぢやろか。」とKは又疊に目を落して考へ込んだ。
彼は心配さうな顏をしてKを見た。初めからKの俗的手腕を危んでゐた彼は事務上の事にもいろ〳〵注意を與へ度いと思はぬではなかつたが、もと資本はK一人の手から出たことであるし、其上萬事一人で遣る氣でゐるらしいので今迄全然容喙しなかつたのであつたが、目のあたりKの不安な顏を見ると矢張り心配であつた。其上彼自身も新聞雜誌の俗受に就いては多少の自信もあつたが、營業上の事は更に經驗が無いので具體的に注意を與へることも出來なかつた。唯商賣人といふものは利慾の前には德義も何も無いものであるといふ事だけを知つてゐて、ひたすらKに警戒を與へるのであつた。
Kは又彼の言葉を聞くと今迄安心してゐたことが、どうやら心配になつて來た。
今兩人の間に、本屋の番頭は、彼等が想像も及ばぬ程の惡賢いずるい男のやうに考へられつゝあるのであつた。
「もうこれ切りになつた。一つお食べや。」と盆の上に唯一つ殘つてゐる釣鐘の一つをKにすゝめた。
二人は柿を食ひながら暫く默つてゐた。
「私の原稿はもう半分は出來た。成るべく早く締切らうぢやないか。」
「あい。淺草寺も……今日これから行かうか……」とKは俄かに興奮して言つた。Kの淺草寺は親しく其場に行つて見聞した事をスケッチするのであつた。

偖雜誌について暫く談話を續けた後Kは其足で淺草寺へ出掛けると言つて去つた。

彼は原稿紙に向つた。盆の上に釣鐘の姿の無くなつたのが淋しかつた。

第八回　盥の鴨

一

Hの二號は千二百部刷つたのが二百部程餘つたので三號は千部刷つた。併し其れは足りなかつた。二號よりも三號の方が少し讀者が殖えたやうであつた。

兎に角一號の千五百は破格の盛況であつたので、先づ千部と腰を据ゑねばなるまじく、現在の狀態では經濟が持てぬといふのでKは友人などから贅澤だと言はれてゐた十二圓の家を引拂つて、すぐ近所の四圓五十錢の家に越した。

此頃Kの許へ俳句稿を持參して教へを乞ひに來る二人連の男があつた。二人共前期試驗だけ通つた醫學生であつたがKなどよりもいゝ身なりをしてゐた。其二人が歳暮だと言つて一匹の小鴨を持つて來た。死んだ鴨は珍らしくないと思つたので生きた鴨を持つて來たと言つた。風呂敷から首だけ出してゐた鴨が水を入れた盥の中に移されると、其れは羽搏をし乍ら水の上に浮いて不思議さうに邊りを見廻した。其れは八疊の座敷の中央であつた。

其八疊の間の外には四疊の玄關と三疊の建増らしい落込んだ一間とがある許りであつたが、其中に例のテーブルと一脚の椅子と本箱と長火鉢と簞笥とが思ひ〳〵に陣取つた上に赤ん坊が襁褓を引摺り乍ら這つてゐた。

此生きた鴨は初めの程は珍らしがられたが、間も無く其狹い座敷の中にのさばつてゐる盥が甚だ邪魔がられた。其上物に驚いて羽搏などする時は其邊一面に水が散つた。

「御覽になつた上で召上つたらいゝでせう。」と其二人の醫學生は言つたのであつたが、

「一度飼つたものを殺す氣にはなれないわ。」とKの細君は閉口しながら其盥を緣に持ち出した。

思ひ出したやうに稗がやられる許りで盥の鴨は一向に顧みられずに寒い緣の隅に一二日を過ごした。

Kは算盤を置くのに割算にはいつも困つた。其れは六以上の九々を忘れてゐるので仕方なしに其時だけ筆算にした。

今年の暮を如何にして越すかといふ事について、ひまさへあると豫算を立てて見た。どう見積つても活版所の拂ひをすますことが出來なかつた。

其豫算の中には細君の乏しい身の廻りも這入つてゐた。此頃は不景氣だといふから澤山は貸してくれまいけれども其れでもこれ位はたしかであらうと見積つたものを、どうしても總額が不足するので、更に二十圓だけ餘分に貸してくれるものとして豫算を立て直して見たりした。

赤ん坊の正月著だけは一枚拵へてやり度い、と口癖のやうに言つてゐる細君の言葉も思ひ出されたが、其れは一通豫算に入れたものを消したなりで、どうすることも出來なかつた。

新年號に當る四號から活版所を變更することにしてゐた。其れは前の活版所から斷られたのではなかつたが、印刷料の督促のしかたが氣に食はなかつた上に、新しい活版所の方がいくらか刷賃が廉い爲めであつた。其新年號の原稿を切めて半分だけでも至急送つてくれぬと困るといふ葉書が其新しい活版所から來た。

二

根岸の庵に一人の書生が風呂敷包を持つて來た。此書生は此頃Kの家に出入してH雜誌の雜務を手傳つてゐた。

「Ｋ先生のお使ひで上りました。」と言つて其書生は風呂敷包を持つた儘彼の病床の傍迄來た。

彼は寢ながら其風呂敷包を見ると小鴨の首が出てゐた。

其れにはＫの手紙が添うてゐた。

「此小鴨は人から貰ひしものに候へど宅は狹き上に赤ん坊が這ひまはり此鴨を置く場所無之候につき打捨らんと思ひ候ひしも、ふと御病床の徒然を考へ候へば或は多少の御慰みにもならんかと存じ差出し候、御俯き被成候節は御一報被下度、早速取りに上るべく候。

活版所より新年號原稿半分だけでも至急送附すべきやう申參り候。小生分も今明日うちに認め候所存に有之候。何分宜敷願上候。」

彼が其手紙を讀んでゐるうちに水を入れた盥は病床近く運ばれて鴨はもう靜かに其處に浮いてゐた。

書生は袂から紙にくるんだ稗を出して、

「これを時々やればよろしいのでございます。」

と言つてさつさと歸つて行つた。

彼は老母と妹と三人で暫く盥の中の生きものを眺めてゐた。小鴨は人に取圍まれて驚く風情もなく浮いてゐた。

老母と妹とが見飽いて去つた後も彼は尚眺めてゐた。

彼の考は小鴨を通してＫの上に及んでゐた。

Ｋの俗的手腕は初め彼の危むところであつたのであるが、近來に至つて彼の想像とは反對に、相當の手腕があるやうにも考へられるのであつた。現に彼の門下生の一人は斯ういふ事を話してゐた。其れは、

「Ｋさんは、どう致して、商賣人としても立派な商賣人です。」とさういふ事を彼のＨ雜誌の一手販賣をしてゐる本屋の番頭が言つた、といふ事であつた。

初め本屋の番頭の機敏さに呆れてゐたＫが、今度は其番頭から感服されてゐるのを彼はをかしく思つた。果してＫにそんな手腕があるのだらうか、書生時代のＫから推すと思ひも寄らぬことのやうに思へるが、又僅か二三號ではあるけれどもＨ雜誌の事務を兎も角一人で遣つて行く最近の事實から見ると或はさういふ隱れた手腕があつたのかとも思へるのであつた。

其れに今一つ、此頃彼の門下生の多くのＫに對する反感に就いて、彼は常にＫの擁護の側に立ちつゝあるのではあるが、彼としても時にはＫの言行に對して不快の感を抱く事も無いではなかつた。よく考へて見ると其れは本屋の番頭がＫを商賣人だと言つたといふ事と關聯して、此頃新たに發見したＫの性質の一面であるやうに考へられるのであつた。

彼は初めＫを詩人的の極めて世情に疎い人間とばかり考へてゐた。餘り社會的の考へが無さ過ぎるので彼はつとめて俗趣味を說き野心を鼓吹したりしてゐたのであつたが、此頃現はれ來つた性質の一面から推すと、必ずしもそんな單純な人間とも考へられぬやうであつた。

三

さういふ氣質が新しくＫの一面に現はれて來たといふ事は、彼及び彼の門下生一同の間に非常の注意を以て迎へられた。

彼の門下生の多くは決して其れを喜ばなかつた。極端に非打算的で氣持のいゝ男であつたＫが、俄かに不愉快な人間になつたやうな心持がするのであつた。自然彼の許に來てするＫの噂も不愉快なことが多かつた。

彼は門下生の多くの者程單純に其れを考へはしなかつた。第一、何よりも心配であつたＨ雜誌の事務がどうやら[illegible]れて行きさうなといふ事

は何よりも安心せねばならぬことであつた。けれども金錢上の話になると彼にすら判らぬことや、聞くのも厭なこと迄を此頃は熱心に平氣に話してゐる、其れを聞いてゐるのは餘りいゝ心持ではなかつた。

「自分で遣るとなるとどんな事でも平氣で遣つて、其事程立派な事は無いやうに考へるのがKの癖さ。さう信じて遣る時の驀進的勇氣はたいしたものだが、どうかした事で一旦其れに對する信仰がさめると、から意氣地が無くなつてしまつて、へと／＼になつてしまふのも亦極端だよ。」とは他の門下生に對してKを評する彼の言葉であつた。

「あれで若し商賣人相手の仕事なんか下らぬものだ、といふ事がわかる時が來るとすると俄かに又もとのぐらたらに戻るかも知れないよ。」

さう言つて彼は笑ひもした。是等の言葉はいつもの通りKに對する門下生等の反感を緩める力があつた。

俳句は可なり作つてはゐるやうであつたが、併しNの處の例會には滅多に遣つて來なくなつた。其上逢へば必ずH雜誌の話になるので、二人の間に俳句の議論を上下する機會などは少なかつた。この點からも他の門下生と自然趨向を異にするやうな傾きになつて來た。他の門下生は、來れば俳句の話になるので、その間には少しも世俗臭を交へた話は無かつたが、Kになると動ともすると營業談――二人の間でなければ話すことの出來ぬやうな――が多かつた。

「斯ういふ句の此のやの切れ字に就いて先日大分喧ましい議論が起つたのだが……」といふやうな事を彼が話しかけてもKは興の無い顏をしてゐた。

「あんな調子だと商賣人になつて了ふかも知れんよ。」と門下生の一人はKが歸つた後に嘲るやうに言つた。Kも亦自然其等の人の自分に對する感情を讀んで餘りいゝ心持をしては歸らなかつた。

彼は枕に頭をつけたまゝぢつとこんな事を考へ出してゐた。小鴨は靜かに盥の中に浮いてゐて、最前妹の手によつて水の上に撒かれた稗を今迄は用心して食はなかつたのが傍に人が居なくなつて大分間のあるところから――横臥して靜まりかへつてゐる彼は小鴨の目には生きた人とは映らないらしく――漸く安心して啄み始めた。小さい首を下ろしては其れを啄むのが盥の緣に半ば隱れ乍らも面白く彼の眼に映つた。

四

其夜彼は早速新年號の原稿に取りかゝつた。横臥した儘書く時には右の手の運動が十分に出來ぬので、原稿紙を持つ左の手の方を動かして其れを助けねばならなかつた。いつものやうに寢靜まつた根岸の冬の夜は淋しさの限りであつたが、此時ふと一つの物音を聞きつけた。耳を欹てて聞くと、夜になつてから緣側に出して置いた盥の鴨が、其盥の中に入れてある稗の上に上つて羽搏する音であつた。寂寞の天地に俄かに起つた物音であつたので一時は彼の心を驚がせたが、其れが羽搏の音といふ事が明白になると又彼の心はもとの靜かさに戻つて、左の手で少しづつ原稿紙を動かしながら又右の手で筆を運んだ。

暫くすると又別の物音が起つた。同じく障子の外の物音であつたが、其れはもう羽搏の音でなく、小鴨は緣側へ飛び出してコツ／＼歩いてゐるのであつた。暫くすると其れは又別の物音に變つた。其れは障子のうちの明るい燈影かなつかしいのであらう、がさ／＼と障子に搔き附からうとするのであつた。

「おい／＼。」と彼は遂に耐へ兼ねてもう眠つてゐた妹を呼んで、「明るい方に這入り度いのらしいから、矢張り晝間のやうにうちへ入れてお遣りよ。」と命じた。

やがて小鴨は盥と共に彼の寢床の傍に置かれた。鴨は小さい眼をラムプの光に光らせて靜まり返つて水の上に浮いてゐた。

夜は再びもとの森閑に戻つた。妹も再び眠りに落ちたらしかつた。彼は凡ての事を忘れて唯一心に稿をついだ。

一應筆を置いて手の疲れを休めながら見ると、小鴨は依然として丸い小さい眼をラムプに光らせながらぢつと靜かに盥の中に浮いてゐた。

彼の心は自然と今迄の文章を離れて此小鴨の上に移つて行つた。

「今頃世の中に起きてゐる者は自分と小鴨だけだ。」と思つた。淋しさと寒さとが一時に四方から襲うて來るやうな心持がした。

「三尺の盥を天地と限られて其れから外に出ることを許されぬ小鴨と、六尺の病床に釘附にされてゐる自分とは似てゐるといへばいへる。」と思つた。

「何だか自分の影法師が其處に映つてゐるやうだ。」とも思つた。

此五分心のラムプの光を慕つて最前障子に掻きついた小鴨の心も推しはかられた。

唯一の後繼者と定めてゐたKの回避、其他の門下生も彼の方から進むと向うが退き、向うの方から進むものは彼の意に滿たぬ其じれつたさが又今更のやうに思ひ出された。

一我かともし火の下に安心して浮いてゐる此小鴨こそ唯一の我が友だ。とも思つた。いつ迄もいつ迄も此小鴨から離れともないやうな心持がした。

夜更かしをするといつも聞く貨物列車の轟きが此夜も聞えた。鴨は靜まり返つて浮いてゐた。

此時彼の心の底からは、いつ迄も隱れてゐることの出來ぬ一つの力がむくと又頭をもたげて來た。いつの間にか彼の眼は光り輝いてゐた。彼は再び原稿紙を取上げて最前の稿をついだ。

夜は次第に更けて行つたが鴨は眠らずに浮いてゐた。

五

彼は晝間を主に眠つて夜書いた。盥の鴨はいつもラムプの下に在つた。新年號の原稿は三日許りで出來上つた。

其れを受取つたKは直ちに活版所に廻送した。自分の原稿はまだ出來てゐなかつたのを其れから急いで書いた。

彼は年末になると毎年のやうに多忙であつた。其れは新年の新聞の爲めにいろ／＼の原稿を準備せなければならぬのであつた。H雜誌の原稿を終ると又其方に取りかゝつた。過勞の爲めに多少の發熱があるのを構はずに書いた。

其中に來訪者も多かつた。多くは俳句や和歌の門下生であつた。

俳人の中にはKの近狀を傳へるものがあつた。其れはKの子供の爲めに見事な晴着が出來て、其れはKの細君の里方で今養はれつゝあるといふやうな事であつた。其れはどんな地合のものだか判らなかつたが、其俳人の口からはKの家には不似合なすばらしいもののやうに傳へられた。流石に彼の額にも不愉快な影が動いた。

度々立てて見たKの年末の豫算は、いくら立て直して見ても不足は矢張り不足なので仕方なしに、彼は國許の兄の許に百圓の借金を申込んでやつた。名義は雜誌擴張といふ口實をもらし

い名前であつた。其百圓の金が屆いた時に赤ん坊の春著問題も決定したのであつた。

其年の大三十日の晩には彼はがつかりして早くから眠つた。其淋しい根岸の夜に引きかへて神田の夜は賑かであつた。Kも人並に眠らなかつた。僅かに餘つた五圓の金を握つて十二時頃から家を出た。

Kは小川町や神保町あたりを彷徨いて、ぞろぞろと歩いてゐる人や灯し連ねた店やを見ながら大三十日らしい光景を眺めてゐたが、遂に一つの勸工場に這入つて、兩方の袂や懐やを膨らませて歸つて來た。其れからまだ是だけ殘つてゐるからと言つて二圓を細君に渡して何でも買つて來いと言つた。細君は又其れを持つて買物に出掛けた。

元日の朝、朝寝をしてゐたKは一人の人に起された。其れは年始客ではなくつて、Kを誘つて淺草の芝居を見に行かうといふ人であつた。其人は醫者で劇通で、今度芝居專門の雜誌を出すといふのであつた。

「其雜誌は凡て君の雜誌に習つて遣り度いと思ふのだ。いろいろ其れに就いて話も聞き度いのだが、其上今一つのお願ひは、君に常磐座の劇評を書いて貰ひ度いと思ふのだがどうだらう、兎に角これから僕と一緒に出掛けてくれないか。」と言つた。

Kは少し面食つたが、行つて見る氣になつて一緒に出掛けた。其れは新俳優一座でバサバサした面白くない芝居であつたが、中で兒島といふ女形がうまいとKは思つた。其劇通は、

「あれもものによると大變うまいが、前途有望なのはあの河合といふ方の女形だ。」と言つた。

三日の日にKは又細君を連れて同じく淺草の宮戸座を見に行つた。其れは本屋の金庫の前に坐り込んで番頭から三圓を前借して出掛けたのであつた。

元日と三日の日にKの家に年始旁々出掛けて行つた俳人は此事を聞いて皆舌打ちして歸つた。

Kが年始にも來ないのでどうしたのかと思つてゐた彼は此消息を聞いていやな顏をした。

新年號は十日に出來た。

盥の鴨は大三十日迄病床の傍に浮いてゐたが元日の朝隣の家の庭の池に放された。彼は人の背に負はれて其小鴨の池に放されるところを見に行つた。小鴨が幾度となく羽搏をして遂に石の上で安らかに眠つたのを見て彼は又負はれて病床に歸つて來た。

其れから二十日許りして其小鴨は瀬戸の中に首を突込んで死んでしまつたといふ事を其隣の家の子供から聞いた。彼は又いやな顏をした。

第九回　病氣

一

たいした變化が無く先づ小康を得てゐたNの病氣は五月に這入つてから又一大變化を起しかけた。其れは新しく肛門の近圍に腫起したものが出來て、疼痛が激しいと同時に發熱も亂調子になつて來た。殊に場處が場處だけに寢がへりにも難儀せねばならなかつた。其迄は天氣のいゝ時とか氣分の勝れた時とかは蒲團の上に起き上つて机にもたれることが出來たが、此新患部が出來てからはさういふ事は思ひも寄らなかつた。

と同時にKも亦病人になつてしまつた。此頃食ひが兎角不進であつたところへ、好物の胡瓜揉が珍らしく出來たので其れで酒を飲んだ。ところが一時間經つか經たぬうちに惡寒を催して烈しい吐瀉を始め、一夜の間に何十回といふ程吐いたり瀉したりした。友人の誰かれが駈附けて翌日山龍堂病院に入院させた時にはもうへとへとに弱つてゐた。

「一まあ虎列剌のやうなものだな。急激な大腸カタルだ。」と醫者は言つた。

それから一週間許り吐瀉が續き其擧句粘液便に血が交つたので赤痢らしい疑ひも起つて來た。兎に角衰弱が激しく心臟痲痺を起しさうなので、或一夜などは危險だといふので皆が附ききりにした。

Ｎは自分の病氣を忘れてＫの事を心配した。數年前彼が激しい喀血をして殆ど死にかゝつた時などはＫが主な介抱者の一人であつたので、其事を銘記してゐる彼は此際介抱は出來ない迄も切めて同じ病室に起臥して慰めて遣り度い位に思つたのであるが、彼の肛門の傍の腫物様のものは遂に崩壞して新しい穴になつて其處からも膿が出始めた。即ち脊髓炎の膿が從來の腰部の口だけでは排泄し切れないで別に又一つの口を作つたのであつた。迚も自分の體を動かすことは出來なかつた。

兩人が病氣になつてしまつたので困つたのはＨ雜誌であつた。Ｋは少しも營養物を攝らず赤酒や麝香などの興奮劑のみを用ゐてゐる始末なので雜誌の事を相談してやる譯にも行かず、病苦に呻吟しながらＮ一人で氣をもんでゐた。

Ｋは病氣の峠を越してもう大丈夫と極つてからも恢復は早くなかつた。併しそろ／＼と談話位が出來るやうになつてからＮの門下の主な俳人の一人はＫの病床を訪れて斯う言つた。

「雜誌は休刊することにおしるか、其れとも私等が手傳つてよければ手傳つて出すことにせうか。」と言つた。

「私は休んでもえゝと思ふのだが、Ｎさんに相談しておくれ。」とＫは答へた。Ｋには、親しい友人ではあるけれども雜誌發行以來何かにつけて自分の非難者である其男の手で雜誌を編輯さるることを内心嬉しいとは思はなかつた。二三日して又其男は來た。

「Ｎさんに話したら、休むのは雜誌に取つて不利益であるから、私に編輯して見ぬかとの話ぢやがどうしよう。私自身でも何だか遣つて見度いやうな心持もするのだが、お前に異存があれば止めよう。」と其男は率直に言つた。Ｋは此時其れを否む言葉が口から出なかつた。

雜誌が出來たのは其月の末であつた。Ｎの口授を筆記したり、自分で小説を書いたりして其男は頓著なく自分の色を出してゐた。其れに、ＳとＫと兩主幹の病氣の爲め自分が代つて編輯した、讀者も不滿足であらうが萬止むを得ぬ次第なのだ、といふやうな意味の斷り書が卷末に記してあつた。

二

Ｋは其雜誌を病床で見た。自分が手を出さなくつても出來上つたといふ事を嬉しく思つた。友人が恰も自分の事のやうにして遣つてくれた親切を感謝する念も起つた。が、どうひつくり返して見ても、これが自分の雜誌だといふ感じにはしつくりと嵌らなかつた。

それに反してＮは此雜誌を見て新しい一つの滿足を覺えた。Ｋが病氣したら自分一人で雜誌を書かねばならず、自分が病氣したらＫ一人で雜誌を書かねばならぬといふことは自分も覺悟しＫにも覺悟さして置いたことであつたが、斯う二人一緒に大患にかゝるといふやうな場合は豫想してなかつた。其れが發刊後早くも半年餘りのうちに來ようとは愈々豫期しないことであつたので、一時は頗る當惑したのであつたが、其れがＫ以外の彼の門下生によつて兎も角も大失態も無しに斯く發行されたといふ事は彼に於いて新しい一つの滿足であつた。

「こゝが一頁白くなつてゐるとは氣が附かなかつた。」と校正の際奇數の頁で終つてゐたの

に氣が附かずに一頁の餘白を作つたことを其男は悔んだ。

「そんな事は無い。餘りこせ／＼と駄目が無いやうに編輯したのより一頁の裏白位ある方がゆとりがあつていゝさ。」と彼は其編輯振の放膽的なのを讃めるやうに言つた。其れに又新聞に出した廣告も彼の氣に入つてゐた。

「あの無頓著な廣告のしやうは面白かつたよ。二十行の木版の下に十五行ほか文句が無くつて五行も白く空いてゐたところはをかしかつた。」

此話が病床のKの耳に傳はつた時Kは面白く思はなかつた。僅々六十四頁の雜誌だから一頁は愚か半頁も餘白を作らぬやうにとKが平生苦心してゐたことも、又廣告に一字でも無用の文字を使用せぬやうにと幾度も書直して字詰を苦心することも皆彼の知つてゐる所であるのに、恰も其れに當てこするやうな此批評はKに取つて決して愉快なことではなかつた。衰へた神經の興奮して來るのを抑へようとしてKは瘦せた手で頭の髮を摑んだ。

「元來自分は自分自身の雜誌を作る積りではなかつたのか……」とKはそんな事迄考へたりした。

しかし「廣い範圍の文學雜誌」といふ當初の考は今日から見ると正しく危險なことであつて、初め不本意に思つたN中心の機關雜誌といふ事がなか／＼に堅實な遣り口であつたことはKもよく了解してゐた。けれども自分の雜誌でなくつて彼等仲間の爲めに作つた雜誌であるといふ考にはまだどうしても成り切れなかつた。彼及び彼の門下生の多く等が動もするとさういふ考を持つてゐるらしく見えるにつけてKは、

「今になつてそんな考を持つやうなら何故初めから共力しなかつたのか。原稿を賴んでやつても原稿が欲しいのならK自身で取りに來るがいゝなどとさういふ冷淡なことを何故言つたのか。Nの補助を受けた以外は全く自分一人の力で創めた雜誌を今になつて門下生等の共有物視せられることは心外だ。」と心の中で强く反抗した。

其Kの尖つた神經も身體がだん／＼恢復するにつれて大分靜まつて來た。さうして殆ど死にかゝつてゐた病氣から蘇つたといふ悅びが今は强く其心を支配してゐた。

Kは退院すると直ちに伊豆の溫泉に出掛けた。

三

Kが伊豆の溫泉で病後を靜養してゐる頃には彼の病氣もいくらかいゝ方であつた。肛門の傍の穴は塞がる見込はなかつたが、其れでも濃が自由に流れ出るやうになつてから痛みも熱も薄らいで來た。迚も坐る事は出來まいと思つたが、其れでも其場合に突當つて見ると又相當の工夫が出て來て、少しの間は辛うじて坐る事が出來た。其辛うじて坐れるといふ事が嬉しいやうでもあり情ないやうでもあつた。

痛みさへ激しくなければ尻に穴の一つ殖えた事位は彼を驚かすに足りなかつた。此頃の彼は俳人と俳句を作るよりも歌人と歌を作る機會の方が多かつたが、其歌人の中に鑄物師があつた。其鑄物師の作つた鑄物を見てから彼は其方面にも新しい趣味を見出して盛んに批評を試みた。彼は病氣の事も死の事も忘れて、さういふ新しい研究に足を踏み込むところに心の顫へるやうな愉快を覺えた。其鑄物師も、仲間の鑄物師などの型にはまつた批評よりも創見のある彼の批評に耳を傾けた。

伊豆に居るKの事も氣になつた。雜誌の方は傑の門下生の一人に編輯を託して兎も角間にだけ合はしてをるから十分に靜養して歸れと言つ

て遣つた。Kはもう其手紙に惡感を持つ程僻んだ考は持つてゐなかつた。健康が恢復する程氣分は快濶になつて來た。或時は殆ど雜誌の事なんか忘れたやうに唯滑かな温泉を浴びてぼんやりと日を暮してゐた。或時は又思ひ出したやうに筆を執つて「浴泉雜記」といふ文章などを書いたりした。其文章には再生の悦びを繰返し陳べて此伊豆の温泉の出る谿をエデンの園に比したりしてゐた。

彼は、嘗て自分にも一度經驗のあつたことで、激しかつた喀血のあと須磨で病を養つてゐた當時の心持も思ひ出されつゝ、其Kの文章を讀んだのであつたが、門下の仲間には其誇張された再生の悦びや詰らぬ伊豆の谿谷をエデンに比したことなどが凡て厭味だとして排斥された。

「さうさ。」と彼も一應は其非難にも同意して、扨て、「しかしKに取つては誇張でなくつて實際なのだらう。要するに主觀的の問題だからな。」と言つた。其れで其文章の價値は極つた事になつた。其れから「浴泉雜記を讀みてKに贈る」といふ題で彼は十首許り歌を作つたりした。Kは其歌から彼の暖かい心持を十分に受取つた。

Kは又所在が無い爲めに句作をした。其れは自分が俳句の選を擔當してゐる新聞に毎日のやうに發表した。雜誌發行後さういふ機會から久しく離れてゐたのであつた。彼は又其句を讃めた。

其後雜誌は矢繼早に出た。其爲め前の號が殆ど一月程も遲刊してゐたのが其れを取りかへして定期通りに戾すことが出來た。其れは主として編輯を代理してゐる男の働きであつた。「立派な雜誌は出來ないけれども期日だけ取りかへした事を取柄として貰ひ度い。」といふ事を其男からKに言つて來た。Kはそれに對して感謝に充ちた返事を出した。けれども其雜誌を自分の手に受取つた時は矢張り自分のものといふ感じには遠かつた。表紙の色合や、インキの附き工合迄がどこかよそ／＼しいやうな心持がした。Kは部屋の柱に凭れて前の山を眺めながらぢつと考へ込んでゐた。

四

Nは嘗てKに對して斯ういふ事を言つた事があつた。

「お前は一生懸命になる時は馬鹿に一生懸命になつてどんな事でもするけれど、少し順境に向いて來ると直ぐ安心して、もうがつかりしてしまつて何をする勇氣も無くなつてしまふやうぢや。それで今度また窮して來ると再び勇氣を振ひ起して前のやうに奮闘おしる。少し順境に向いて來ると又安心してしまふ、といふやうな遣り口ぢやな。私は其れと反對ぢや。お前のやうな遣り口は迚も心配で私には出來ない。それや多少の波動は免れぬけれども、先づ不斷に注意して努力を永續さすことにして居る。自分で少し油斷しつゝあつたと氣がつくと直ぐこれではならぬと引締めてかゝる。それから少し休息しては又遣る。とまあさういふ遣り口なのだ。お前もすこしさういふ傾向にたつて見てはどうぞな お前の方が大膽なのかも知れぬが、傍で見てゐるとどうも險難でしやうがない。」

此忠告をKはいつもの通り感謝して受取つたけれども、しかも内心では、迚も自分の性質には其れは出來ないことだと諦めてゐた。

伊豆の温泉に一箇月滯在してゐる間のKは、健康恢復の喜びに漬つて、殆ど其神經は鈍り切つてしまつてゐた。友人の手によつて編輯された「自分の雜誌」を受取つた時とか、それに關する消息に接した時とかは俄かに夢がさめたやうに深い考に沈むのであつたが、其れも少し時日が經過すると、全く忘れてしまつたやうにぼんやりとして日を過ごした。

しかし、其間にもKの頭には多少具體的の善後策が纏りつゝあつた。其れは現在大阪に在つて銀行に勤めてゐる一人の俳人を抜擢して雜誌の編輯や事務を手傳はさうかといふ考へであつた。此俳人はKよりも二三歳の年長者ではあつたが、嘗てKが選句を擔當してゐた或青年雜誌の投句家であつて先づKによつて認められたといふやうな關係からKには殊に親みがあつた。其れに多少漢學の素養もあるらしく人物も立派で、其作句は嶄然として頭角を現はしてゐた。Nも亦これを認めて最近にH紙上で推稱措かなかつたことがあるのである。其上此春其男は上京して、適當な職業さへあれば東京に居住し度いといふことをKに話したのであつた。旁々其男をH雜誌の一員として抜擢することには名案のやうにKには考へられたのであつた。

其れに就いて先づ彼の意見を問うて遣つたのであつたが、彼は直ちに返事をよこした。其れはH雜誌の經費が果して之を許すや否やが心配だが、其れは自分の與り知らぬところであるから、Kに於いて其點に成算があるならば自分には異論は無い。とさういふ意味の返事であつた。

Kは早速大阪の男の內意を聞いて遣つた。返事は存外遲かつたが、其返事にはもうちやんと銀行の方を辭職したと書いてあつた。其れから尚、半月許り暇を貰ひ度い、其間に豫て志してゐた或方面の旅行を試み度いなどと言つて來た。

Kは氣になつてゐた雜誌の善後策はもうこれでちやんと出來上つたやうな心持がした。さうしてゆつたりした氣分で尚十日餘りを溫泉に漬つてゐた。

それに引替へて彼は病苦に呻吟しながら和歌の研究や鑄物の研究やを續けつゝ、其間に雜誌の原稿をも遲らさぬやうにと焦つてゐた。

五

Kが溫泉に在る間に雜誌は又一册出來た。Kの一浴泉雜記の續きも登載されてゐたが、其れに拘らずKの所謂自分の雜誌の色彩は愈々薄れて來てゐた。

併し此次の雜誌は再び自分の手に戻つて編輯されるといふ事と大阪の男が新來の勇氣を持つて十分に自分を補助してくれるといふ事が、もうKに安心を與へてゐたので、其雜誌を手にしても今度は落著き拂つてゐた。殊に今度都門を滑つたが最後、前に十倍した大活動を敢てし得るやうな自信が起つて來るので、殘り少なになつた逗留の日を出來るだけ暢氣に過ごさうとした。少なくともさういふ理由の下に無爲の日を過ごす事が愉快であつた。

大阪の男が來るといふ事は東京の重立つた俳人仲間には喜ばれなかつた。殊に今迄Kの代りに雜誌を編輯してゐた男などは意外の感に打たれた。其消息は早く彼の許に聞えた。

Nもすこし呆氣に取られた。彼の考では大阪の男を傭ふにしても、さう早急の事とは考へてゐなかつたのであるが、其男はもう已に銀行を辭職して何處かを旅行してゐるといふことだし、Kは又今迄編輯を代理してくれた男に其勞を謝し旁々其事を通知して來たといふ事なので其迅雷的なのに驚いたのであつた。又其事に對して重立つた俳人仲間の惡感があるといふことを不愉快なことに思つた。

―私には一寸相談して來たから、其時善からうとは言つて遣つたのだけれど、實はさう急なこととは思はなかつたのよ。と彼は當惑したやうに言つた。

東京に歸つた日にKは早速彼を訪ねたのであつたが、彼の口からは先づ其不平が持出された。

「お前はよく言へば決斷が早いのだらうけれど、惡く言ふと碌に考へもせずに飛出す方だから困るよ。同じ事でも斯う極めたからと報告するのと、斯うしようと思ふがどうだらう、といふ風に相談的に出るのとは幾ら先方の感じが違ふか知れない。其位の事は少しお考へや。又大阪の男にしたところで、今迄どれ程の給料を貰つてゐたのか、今後はどれ程あればいゝのか、向うも父母や妻子を控へてゐるのであらうから、其等の事もよく掛合つた上でなければいかんぢやないか。」と苦り切つて言つた。

Kも不愉快な顔をして聞いてゐた。さうして、大阪の男には内意を聞いてやつたのであつたが、もう其返事が應諾を報じて來たのだと言つた。

「それはさうとしたところで、大分皆が不平らしいからお前に注意して置くのだが、もう少し仲間に氣兼をして、なるべく皆に不平を起させぬやうにせにやいかんな。それや皆の不平にも多少の嫉妬や、嫉妬でない迄も競爭心の交つてゐる事は間違ひないが、其れにしてもそんなに嫉妬や競爭心を起させるといふ事がお前の手抜りぢやないか。其處はお前のやりやうでどうともなると思ふ。」彼は益々苦り切つて言つた。

Kも愈々不愉快な顔をして聞いてゐた。さういふ話を聞いてゐると何だか彼迄が今は他の門下生の多くと共にKの反對の側に立つてゐるやうな心持がするのであつた。二人は暫く言葉が無しに默つてゐた。

Kは又皮肉な笑顔をしながら言つた。

「あの男に何か報酬をおしたか。」

「あゝ、十分ではなかつたかも知れぬが、是々の報酬をした。」

「さうかな、其れならえゝわい。」と彼は言葉を區切つたが、「何でもKは我等が食はしてやつてゐる様なものだ、といふやうな評判が主な俳人仲間にあるさうぞな。」さう言つて彼は又皮肉に笑つた。

第十回　又柿の頃

一

彼は初め、Kが雑誌を遣るにつけて一番に心配したのは、直ぐ倦いてしまつて放り出しはしないかといふ事であつたのだが、其後の容子を見てゐると、案外に執著力があつて、何處迄も遣つて見る氣らしいので、其點は大いに安心してゐた。けれども同時に又他の俳人との間が動もすると圓滑に行かぬことを一番に憂慮してゐた。

彼は或時は他の俳人の側に立つてKを攻撃したり注意を與へたりした。或時は又Kの側に立つて他の俳人に對してKの辯護を試みた。

H雑誌が豫想外に成功したといふ事が——少なくとも外觀さう見えたことが——凡ての問題をむづかしくするのであつた。

「Kは儲けるだらう。」といふやうな疑ひが多くの人の胸に在つた。今度病氣して一箇月程も入院をし、續いて一箇月餘りも伊豆の温泉に滯在し、其擧句新たに大阪の男を招聘することに極めたといふ其等の事件が益々其疑ひを强めたのである。殊に經濟上の事は一切K一人で遣つてゐて、彼にすら少しも打明けぬといふ事がいつも其疑惑を深くした。

Kは又、千五百部に足らぬ雑誌で弟子三人が口すぎすることの出來ぬこと位は判つてゐさうなものだと思つた。現に其爲めに自分は他の雑誌や新聞に迄關係して零碎な給料を掻き集めてゐるのではないかと憤慨した。が、其れよりも一番胸に落ちぬことは、自分は何故に自分の散文を自由にすることが出來ぬかといふ事であつた。自分が借錢するなり又働いて儲けるなりして自分の好きなことをするのに何故に他に

斟酌せなければならぬかといふことであつた。動ともするとさういふ事をNやNの門下生の多くから要求されるらしい傾きのある事を頗る心外に思つてゐた。其點に於いてKは寧ろ、一人が何と言はうが構ふものか。己は己の勝手に振舞ふのみだ。」といふやうな反抗的の考へをさへ持つてゐた。

ところへ、「Kは我等が食はしてやつてゐるやうなものだ。」といふ事を主な俳人等は言つてをるといふ事をNの口から聞いた時にKは、今迄に無く憤激して言つた。

「へえ、そんな事を言つてをるのかな。其れでNさんはどう思つておいでるのぞ。」

「私は別に何とも思つてゐやしない。」と彼はKの顏を見乍ら冷やかに言つた。「さういふ批評があることをよく考へておいでんといかんぞな、といふ事を參考迄に言つたのよ。」

Kも其事に就いては其れきりで默つてしまつて、其後は互に二箇月も逢はなかつた間の出來事や病氣の事を話したりして夜を更かして歸つたのであつたが、其れ以來Kの頭に此不愉快な一句はこびりついて離れなかつた。

上京して來た大阪の男は暫くの間Kの家に同居してゐたが、扨てどういふ風にしてKの手助けをするかといふ事が一寸見當がつかなかつた。兎に角今迄銀行に居つた關係から會計其他の事務を擔當することにした。

Kは溫泉に在つた時豫想してゐた十分の一の活動も出來なかつた。其れはK許りでなく大阪の男も大阪で豫想してゐたよりも遙かに興味の薄い仕事であるのに失望したやうにも見えた。

が何んにしても今迄よりは一人を增したので雜誌の事務は澁滯することが少なくなつた。

こんな狀態でH雜誌は一年を經過して、いつの間にか又柿の頃が來てゐた。

二

「隨問隨答」といふのは、俳句に關して種々の疑問を讀者から尋ねて來るのを、彼は其れに解答を與へて遣る其文章の事であつたが、いつも其面白くない仕事を彼は辛抱して書いてゐた。尤も面白くないと言つたところで、斯ういふ學者的の仕事をするものは彼の門下生中には一人も無くつて、それは是非彼自身を勞せねばならぬといふ事が、一方からいふと門下生の知識の貧弱が情なかつたが、一方からいふと又自分を賴むやうな聊かの滿足もあつた。彼の好物は柿ばかりでなく大概な果物は人並外れて嗜むのであつたが、其好物の果物などを食つて、其れに勢ひを得てさういふ厭な仕事に從事するのであつた。

其れが今年の果物の中でも一番の好物である柿の頃が來ても生憎胃腸を痛めて其柿を食ふことが出來なかつた。醫者は昔しか結核性の疾患が消化器の方にも及んだのであるまいかと心配したが、幸ひに其れは長くは續かなかつた。其れでも醫者は當分の間は柿などを食ふことを嚴禁した。

柿も食はで隨問隨答を草しける

斯ういふ句を作つて彼は自ら慰めてゐた。勤勞の擧句に其御褒美として口腹の慾を充たすことの出來ない事が彼には一番つらかつた。百圓の原稿料よりも一顆の柿の方が彼の仕事によりも多くの勇氣を附けるのであつたが、其柿の食へぬことが何よりも情なかつた。「隨問隨答」を終ると漸く一枚鹽煎餅を貰つて、其れで滿足せなければならなかつた。

けれども其れも長い間ではなかつた。

彼は或日、碧梧の門下生の一人が土產として持つて來てくれた柿を、其男が歸つてあとで遂に我慢し切れなくつて食つた。喜びの餘りに直ぐ手紙を書いて其男に出した。

只今は失敬致候。御歸り後御覧たまものを運び來り見せ候處最早がまんの緒がきれたらとう一つねだり取り申候。これは當地にて蜂屋と申候やらん、我郷里にては祇園坊と申候。凡そ天下に柿多しといへども此柿にますは無之候處、根岸に無之ため終に口に入らず、郷を出でて二十年はじめて風味に接し申候。定めて御持參困難なりし事と存候。右御禮迄、匆々不悉。

鄙にては祇園ぼといふ都にて
はち屋ともいふ柿の王はこれ
味はひを何にたとへん形さへ
濃きくれなゐの玉のごとき柿 一

今年はもう愚庵から釣鐘は來なかつたが、彼は此日から毎日のやうに柿を食つた。柿の爲めに彼の元氣は增すやうに見えた。或日の秋日和に彼の心はふと動いてKの家を訪ふことにした。腰に一箇所の痛み場所が殖えたに拘らず、雨手で突張るやうに工夫をすれば車に乘れぬこともなかつた。丁度彼の所に來て居つた一俳人を先づKの處へ遣つて其事を知らせて置いて、彼はあとから車に乘つて表に出た。其れは丁度一年ぶりであつた。一時はもう床の上に坐る事も出來まいと諦めてゐたが、兎も角も表に出られた事は喩へやうがなく嬉しかつた。

Kのうちに來て見るともう五六人の俳人は集つて彼を待設けてゐた。何んと言つてもKの家は其等の人の自然集り場所になつてゐた。待設けぬ門下生等の落合つた事が益々彼を悦ばせた。彼が興に乘れば乘る程門下生等も興に乘つた。

美しい柿が盆の上に盛られたが其柿の山は忽ちのうちに崩された。其中でも彼の前に一番柿の皮が多かつた。

三

柿を食つて柿十句を作り乍ら夕食には闇汁會を催さうといふ議が持上つた。横になつてゐる彼一人をのこして置いて他のものは皆表に買物に出掛けた。

めい〳〵の心は譯もなく悦びに充ちてゐた。店頭に立つて漸く思ふものが見當つて其れを買ひ得た時にニタ〳〵一人笑ひをするものもあつた。

Kの細君は子供を背負つて松茸飯を焚いた。闇汁の鍋の中にはさま〴〵なものが思ひ〳〵の形をして煮えつゝあつた。

Kも嬉しさうな顔をして細君と共に臺所で働いてゐた。他のものが柿十句を作る間も彼は細君の手傳ひの方に忙がしかつた。Kの細君は時々こちらへ兼ねてクス〳〵笑つた。

他の俳人の多くも代り合つて臺所に顔を出しては笑つた。

いよ〳〵鍋が席の中央に持出されてから皆の顔は一層輝いた。鍋の中から南瓜が出て來たり大福餅が出て來たりするとドッと笑つた。

闇汁といふ事が皆に珍らしかつた譯でもなかつた。此日は誰の心にも何んの陰も無かつた。唯譯もなく樂しいのであつた。

其れから三四日經つて、同じやうな人數が又道灌山に集つた。其れは其中の一人が醫者になつて國に歸るので其れを送別の爲めの集會であつた。彼は又車に乘せられて其席に列した。

山茶花の大きな木の下に彼の乘つて來た車は置かれて彼の歸りを待つてゐた。其木には花が一杯に附いてゐた。

此日の御馳走はめい〳〵の持寄であつた。中にもKの持つて來た柚味噌が一番興を牽いて、其れが火鉢の火の上に置かれてブツ〳〵煮えるのを皆面白がつた。

何も彼も面白かつた。詰らぬ事迄が面白かつた。

其前の日の會合を闇汁會と名附け、後の日の會合を柚味噌會と名附けて彼は其記事を書いた。闇汁會には彼の趣向になる挿畫があり、柚味噌會には俳人で畫家であるところの當日の會合者の一人Ｉの寫生畫があつた。

此二篇の文章の出た雜誌は殊に興味の多い號だとして一般に持て囃された。仲間中では自分等の機關雜誌の振つた事は卽ち自分等の振つたこととして各ゝ興奮してゐた。此勢ひで行けば文壇に恐るべきものはないやうな自信がめいめいの頭に湧いて來てゐた。又新聞紙上などでは、世間を餘所にして悠遊してゐる此仲間を羨ましい仲間だと言つたりした。

彼の病床で月に一回位宛文章會が開けるやうになつたのも此頃からであつた。

皆が文章を作つて彼の病床で朗讀すると彼は一々それを批評した。彼以外の者もめいめい意見を陳べたが彼が何か言ふと自然其言ふ事が尤もに聞えて誰も其れを疑ふ氣になれなかつた。多少疑ひを抱いてゐる者も强ひて爭ふ勇氣がなかつた。

此文章會が成立つてから、自然其席上で好評であつた文章でないとＨ雜誌には載らぬやうになつた。

四

正しく文章會は其頃の興味の中心であつた。俳人の側からも歌人の側からも出て來て、彼の批評を熱心に待設けつゝ、めい〳〵自分の作を朗讀した。

初めＨ雜誌を出した頃は、Ｋは自分勝手に淺草寺に出掛けて、其寫生をしたものを彼にも相談無しに自分で雜誌に收錄すると、彼は却つて其文章が一番振つてゐたなどと讚めたりした。又自分が溫泉場に居つて編輯に與らなかつた時でも、浴泉雜記を送ると、其れは餘りいゝ出來でなかつたにしても、兎に角雜誌發行人としてのＫの文章であるといふ理由の下に採錄されたといふやうな事もあつた。其れが此文章會が出來てから、縱ひＫの文章であつても、其席上で評判の好くないものであつたら、自然雜誌には採錄されぬ傾向になつて來た。其れは誰が發議してさうしたといふ譯ではなかつたが、自然の傾向がさうなつて來たのであつた。

文章會の出來たといふ事は雜誌を編輯する上に便宜なことも多かつた。殊に其席上の輿論を容易に支配し得るＮに在つては、自分一人で取捨するといふよりも、席上の輿論を尊重することに非常な便宜があつた。彼程ではないにしてもＫにも矢張り便宜があつた。「文章會の席上で評判が惡かつたから。」といへば何人の寄稿でも之を謝絕するのにむつかしくなかつた。Ｋは其れを便宜として、よく其れを辭柄に他の寄稿を謝絕した。

かゝる便宜のみならず、假にもこゝに一つさういふ諮問機關のやうなものが出來て、其處で議を盡して採否を決するといふ事は進步した方法であつて、雜誌の爲めにも祝賀すべきことであるといふ事は考へないではなかつた。

「文章會が出來たので自然いゝ文章を選擇するやうになつて來たな。」と現にＫは彼に話したことがあつた。

「さうさ、其れに第一樂になつたさ。一々賴んで廻つたり斷つて遣つたりする面倒が無くなつたのだから。」と彼も答へた。

其れはたしかにさうであつた。雜誌發行當時は一つの文章を他に賴むにも相當の手數がかゝつた。其れも其出來榮がいゝ場合はまだ樂であつたが、不出來で雜誌に載せ兼ねるといふやうな場合は、彼は一々其れに就いて自分の意見を添へたり、言譯をしたりして二重の手數を取ら

ねばならなかつた。さういふ面倒はたしかに此文章會の爲めに無くなつたのであつた。

「其れといふのも矢張り雜誌に權威が出來たのだ。」

Kはさう考へて嬉しくも思つた。文章會を通過するといふ事の喜びには雜誌に採錄されるといふ喜びが添うてゐる事は勿論で、其れは矢張り雜誌の權威と考へねばならなかつた。

が、其等の滿足に拘らず、一方には其文章會がある爲めに、K自身の文章をも矢張り自分の考だけで雜誌に載せるといふ事は不穩當なやうに考へられて來た事がKを苦しめた。

初めの間は其處に氣が附かずに文章會に出さない文章でも自分のものだけは構はぬやうな積りで雜誌に載せたのであつたが、次の文章會席上で盛んに其非難が出て、Kをして困惑せしめたことが一再ならずあつたので、其れ以來Kは皆の意を斟酌して其自己の特權と認め來つたところのものを放棄せねばならぬ事を知つた。其點が文章會に對するKの不滿な點であつた。

Nは其Kの不滿をよく察してゐた。が、雜誌本位から行けば矢張り文章會に其位の權威を持たすことは必要なことであつた。彼はKに對しては態と其不滿を察せぬやうな風をしてゐた。

五

何も故意にKの文章のみを貶す心は無かつたのだけれども、急に文章に油に乘つて來た他の人々のに比べて見るとKの近來の文章は何處となく生氣が無かつた。彼は其れを慊らなく思つた。

「もう少し寫生に骨を折つて御覽や。」とKが朗讀した文章の詰らなかつたのに失望した彼は言つた。席上の他の人々はKを憐むやうに默つてゐた。

寫生といふ事は彼に注意さるゝ迄もなく既にKは心得てゐる積りであつた。現に手帳と鉛筆とを持つて淺草寺へ寫生に出掛けたのが「淺草寺のくさぐさ」であつた。畫家の寫生手段を文章に應用したのは自分が先驅であつたのだとKは信じてゐた。其れが今になつてNから寫生を説かれたり、人々から憐みの眼を以て見られたりすることが心外であつた。

「所謂寫生なるものの見解が自分と他の人々とは違つてゐるのだ。」

Kはそんな事を考へて見た。現に彼の口から屢々唱へられて他の人々によつて和せられつゝあつた山なるものがKには十分に合點がいかなかつた。其れは文章には山が無くちやいかんといふ事であつた。實際見聞した事が山が無い場合は、自分の頭で製造してでも文章には山が無けれやいかんといふ事が彼の主張であつた。

「山會に行かう。」などといふ事を皆がよく言つた。其れは文章會の事であつた。其程に山論は其文章會で重きを爲してゐた。

「何故山が無けれやいかないのであらう。」とKは不平であつた。Kは自分の文章に山の無いことを意識してゐた。

Kは自分ながら文章に氣乘のしなくなつて來たことを情なく思つた。

他の人々は今一つの原因でKに對して輕蔑の念を抱いてゐた。其れはKが雜誌維持の爲めといふ理由の下に出版を始めたことであつた。其出版も彼の過去の俳論を輯めたり、彼の序文を載せて古俳書を飜刻したりすることであつた。彼は其れを快諾したのであつたが、他の人々は係りいゝ氣持では迎へなかつた。

「雜誌の維持といふ事はKの生計の補助といふ事ぢやないか。」といふやうな疑惑が人々の胸に在つた。

「愈々Kは商賣人になつた。」といふ冷評も聞

えた。其れは雜誌發行が書籍出版と移り行いた事を苦々しく思つた人の言葉であつた。

文章會は引續いて彼の枕頭で開かれた。Kは大概缺席はしなかつたが、いつも人後に落ちるやうな不愉快な心持で、他の人の作物の朗讀を聞いてゐた。文章に氣乘のしてゐる男の朗讀は、朗讀其ものにも精彩があつた。一人の男などは、席上で喝采を博することに略見當の附いてゐる處へ來ると、少し調子を緩めて、間を置いて、喝采の意味を籠めた笑聲の起るのを待設けたりした。そんな心のゆとりは勿論Kには無かつた。

彼は其後も一度車に乘つて和歌の門下生の家へ行つた。其れが丁度酉の市の日であつたので、車上から見た光景を「熊手と提灯」といふ題で文章にした。又其頃「根岸庵記事」といふ題で、彼を初め二三人が彼の家の寫生を試みたものを並べたりした。Kの文章も其中に加はつてゐた。其等のものの出た雜誌も賑かな號の一つであつた。

第十一回　ガラス障子

一

冬が來る度に、今年の寒さをどうして凌がうかといふ事が彼の大問題であつた。此前の冬にはKが石油ストーヴを屆けたので、夜晝其れに點火して漸く暖を取つたのであつた。今年も早くから其れに點火して、他の人が病室に這入ると忽ち瓦斯中毒を起しさうな氣持のする中に彼は平氣で寢て居た。

今年の冬の寒さが新たに問題になつた時、Kは、庭に面した南の障子をガラス障子に替へたら暖かだらうと言つた。天氣さへよければ一日日が當つてをるのであるから成程ガラス障子にしたら暖かだらうと彼も考へた。

此病室の凡ての物に不似合な手荒な物音をさせて居た建具屋が四枚の新しいガラス障子を嵌めて歸つて行つたのは十二月の初めであつた。

今迄障子を開ければ見えなかつた上野の山の枯木立も、草花の枯れて突立つてゐる冬枯の小庭も手に取るやうに見えた。暖かい日光は豫想以上に深く射し込んで來て、病床に横たはつた儘で日光浴が出來た。

彼は蒲團をガラス障子の近處迄引張らせて、其蒲團の上に起上つて、ガラスの汚れたのを拭き始めた。

「そんな事をおして又熱でも出ると大變ぞな。」と老いたる母親は心配した。

彼はかまはずにガラスを拭いた。餘り日がよく當るので彼は少し上氣せて來た。壯健な時の樂しかつた旅行の記念に何年か病室の柱に吊して置いた菅笠を思ひ出して、彼は其菅笠を取らせて被つた。

此珍らしい機嫌はいつも曇つてゐる此一家内の空氣を晴々とした。親子三人揃つた笑聲が暫くの間聞えた。

彼は遂に菅笠を被つた儘机に凭れて原稿を書き始めた。

彼は愉快な事があると直ぐ仕事の事を思つた。御馳走を食べても之は仕事をする爲めの御馳走だと思ふといふ心持であつた。もし仕事も何もせずに唯御馳走だけ食べるものとすると彼は自分に對して申譯が無かつた。今ガラス障子が病室に出來て、今迄に覺えない暖かさを覺えるにつけて、彼は唯此愉快を快喫して居るに忍びなかつた。彼は遂に菅笠を被つた儘で机に凭れたのであつた。

其れにつけても近來彼が世間に有名になりH雜誌が相當に賣れ行くやうになるにつけて、K初め彼等仲間のもの一同が同じやうに有名になり、地方などを旅行しても到る處で俳人等に

歡迎されることを苦々しく思つて居た。有名になることや歡迎されることは結構なことであるが、唯彼等がさういふ事に有頂天になつて、少しも自ら省みず、餘り悠長に暢氣に日を暮してゐるのを見ると癪に障つてたまらないのであつた。

彼は其事に就いて屢〻K初め一同に訓戒を加へた。皆其當座は興奮したやうな顏をして、勉強する氣にもなつてゐるやうであつたが、暫くすると忘れたやうな顏をして酒を飲んだりしてゐた。殊にKは一向に勉強する容子は無く雜誌は動ともすると遲刊した。いろ〳〵逢つて話し度いと思ふことがあつても此頃滅多に遣つて來ることも無かつた。偶に來ても彼の口から少し苦い言葉が出始めると、何か用事にかこつけて直ぐ歸つて行つた。

二

後繼者問題はもう殆ど彼の頭を去つてしまつてゐた。彼の事業は和歌、俳句、寫生文といふ風に段々と手を擴げて來て迚も其れを一人の後繼者によつて繼承せしめるといふ事は容易なことでないことが明かになつて來た。

のみならず新聞雜誌の力は、彼が豫想して居たよりも急速に彼の事業を成功せしめた――少なくともせしめつゝある――といふ事が彼に一つの安心を與へ始めた。彼は斯く迄迅速に彼の俳句の事業が社會的の勢力にならうとは全く豫想しなかつた事であつた。芭蕉が羸弱な體であつたとは言ひ乍らも別に病人といふではなく、殆ど日本國中を行脚して廻つて數十年の歲月を閲してやつたことを、彼は根岸の一蝸牛廬に横臥した儘で近々數年間に成就しようとは一寸自分乍ら想像のつかなかつた事であつた。H雜誌發行後僅々一年餘りであるに拘らず募集句に投稿する人の激增、地方俳句界に投稿する俳句會の激增、我ながら驚く許りであつた。彼は自分の歿後、所謂後繼者の手によつて漸く收め得らるゝものと考へて居たものが、自分の生前に已に其形を現はして來たといふものは、主として其れは活字の功に歸せねばならぬと思つた。

其上又、K初め主な彼の門下生の誰一人を捕へても彼の後繼者としては餘りに不眞面目であつたり餘りに無氣力であつたりした。彼は現前してゐる其等の人々よりも、今は彼と何等の交渉も無く竹馬に乘つたり木登りをしたりして嬉遊してゐる一時代飛んで先の後繼者に考へ及ぼして見た。其れは家を興した老主人が自分の息子を賴むに足らぬと諦めて孫に望みを屬すると同じやうな考であつた。

ガラス障子が嵌つてから二三日目の事であつた。今日は朝からの曇り日和で、ガラスを通して射込んで來る日光も無ければ、ガラス越に見る上野の森の色も小庭の色も灰色の冷たい一色であつた。彼は見るともなく庭の面を見てゐると、いつの間にか一匹の野良猫が長い尾を垂らした儘で隣の庭から垣根を潛つて此方へ遣つて來た。さうして茨や鷄頭の枯れ〳〵に突立つてゐる花壇の間に立つて邊を見廻してゐたが、軈て其處に糞をしはじめた。

野良猫の糞してゐるや冬の庭

といふ句が別に考へるでもなしに出來た。糞をしてしまつた猫は又長い尾を垂らした儘悠々と彼方へ去つてしまつた。

彼は又いつの間にかKがH雜誌によつて衣食するといふ事の意味を考へてゐた。此間も嘗て向島のお六の事を話したあの友人が來て斯んな事を言つた。

――Kは近頃大分贅澤をしてゐるやうな評判だが、H雜誌にそんなに利益があるのかな。あの雜誌はもとどういふ組織で出來てゐるのか知らぬが、仲間の機關雜誌として發行してゐるもの

なら、利益の分配でもすることにした方が穩當ぢやないのか。君から言ひにくけれや僕からKに話さうか。」

　これも彼が唯一の防寒具である石油ストーヴの石油の費用の嵩まるのに困却してゐるといふやうなことが話題に上つた時の事であつた。其時彼は冷やかに答へた。

「H雜誌から金錢を貰はうといふやうなことは僕は初めから考へてゐやしない。」

其時此話はこれ切りで終つてしまつた。

三

　H雜誌が二千部近く出るやうになつたといふ事はK自身から聞いたことであつたが、其れでどれ程の利益があるかといふ事は彼自身では見當が附かなかつた。けれどもさういふ方面に多少知識のある俳人等が來ると、凡そどれ程の利益はある筈だなどと、彼が聞きもせぬのに話したりした。彼はさういふ金錢上の問題になると、他人の事でも聞くのを不愉快に思つた。況して自分を其渦中に置くことは考へるのも厭なことであつた。Kが自分の勝手で雜誌を出して——雜誌發行を營業として——相當の利益を收めて、其れで衣食して行くといふ事には何等の干渉をも試み度くなかつた。自分は寧ろ其等金錢上の問題には超然として、唯雜誌の編輯上の實權さへ握つてをれば其れでいゝのであつた。

　けれども元來社會的の人間としては無能力者に近いと迄考へてゐたKが、案外にもさうでなくつて、本屋の番頭が言つたとかいふやうに、商賣人としても相當に遣つて行けさうだといふ事が、嘗て俗受を数へ、野心を説いて聞かした彼としては裏切られたやうな心持がして、幾らかをかし味も伴ふけれども、多少小癪に障るところもあつた。殊に又彼が石油ストーヴの石油代にすら困却しつゝある生活狀態に在るに拘らず、Kは彼の友人の話すところによると、細君に一枚の晴着を作つて遣つたとか、汽車には好んで二等に乘るらしいとか、其れに似寄つた話を聞くと、流石に愉快に感ずることは出來なかつた。

　彼は今野良猫の糞をして去つた寒い冬枯の小庭をガラス障子越にぢつと見詰めながら、ふとさういふ事を考へてゐる自分を振返つて見た。

「Kが多くの人間のやうに小さい感情や小さい欲望に支配せられて動いてゐるといふのも畢竟大いなる野心が無いからの事だ。寧ろ罪が無いといへば言へるのである。自分のやうに痩我慢を張つて金錢に遠ざかつてゐるといふのもKよりは大きい野心を持つてゐるからの事だ。縱ひ不正不義を働くといふ譯でなくつても、金錢に携はる職業を選んだ以上、其人の清名は得て期し難いものである。雜誌を發行するにしても自分自身で其衝に當る事はさういふ意味に於いても好まぬところであつたのだが、Kは好んで其厭な事を自ら遣ることになつたのである。Kが金錢上の事を一人で勝手に遣つてゐるといふ非難が一般に聞えるが、實はKをして一人で其衝に當らしめて置いて、自分は高い處に立つて知らぬ風をしてをる。とも言へるのである。」

　彼は其處迄考へて來て、其Kが支配されつゝあるやうな小さい感情や小さい欲望に打勝つことは彼に於いては病苦に打勝つよりも遙かに容易であることを思うて微笑した。

　其處へ臺所へ何物かを運んで來たやうな物音がするのを怪しみ聞いてゐると、其れには一封の手紙が添うてゐたと言うて妹が持つて來た。開封して見ると、其れは畫家Fからの手紙で、失禮ではあるが石油一罐を屆ける、それを石油ストーヴの燃料にしてくれゝば幸ひである、何卒許諾を得れば今後石燃料だけは自分が差出し度

いと思ふ、といふやうな事が書いてあつた。

四

Fは此頃住宅と共に畫室を新築した。筆先きで其れだけの金を造つたといふ事が仲間の者を驚かした。けれども非常な貧生であつた彼が、今日畫室を新築する迄になつた其勤儉力行は及び難いものとして嫉妬交りの惡口などは誰も言はなかつた。

其Fから石油を彼に贈つたといふ事も一般に好感を以て迎へられた。が、其れにつけても、

「其れは寧ろKの爲すべき所ではなかつたのか。」といふやうな考が誰の頭にも起つた。

「ガラス障子が嵌りましたね。」と二三人の俳人が來た時障子に目を留めて先づ一人は言つた。

「Kが拵へてくれたのです。」と彼は答へた。

「明るくなつたが、馬鹿に明る過ぎて寒いやうな心持がする。」と他の一人は獨言のやうに言つた。

「そんな事はない。餘程暖かになつた。」と彼は其れに答へた。

「併し暖かいのは紙障子の方が暖かいといふではありませんか。日の當つてゐる時はガラスの方がいゝけれど、曇つてゐる日は却つて室内の熱を放散し易くつて寒いといふことですよ。カーテンをお拵へになつてお引きになつて置いたらいゝでせう。」と又他の一人は此企ての失敗をカーテンで償ふといふやうな口吻で言つた。

「そんな事はないでせう。」と彼は承知しなかつたが、實際此間のやうに曇つてゐた日は障子よりも寒いやうな心持がせぬではなかつた。

やがてH雜誌の遲刊の事が話題になつた。

「遲刊し通しでも困つたものだな。」

「張合が無くなつてしまふよ。」

遲刊の責任は彼にも在つた。けれども病苦に惱まされ通しでゐる彼を責める考は誰にもなかつた。

「何よりもKが晩酌をよさなけれやいかんさ。」

其晩酌論には直ちに彼も贊同した。

「さうさ。朝湯と晩酌はいかんよ。」

皆笑つた。今の晩酌論を遣つた男はよく朝湯に這入つた。もう何年か湯に這入つた事の無い彼は殊に朝湯には同情が無かつた。

「そんな事はない。朝湯に這入ると氣持がよくつて仕事が善く出來るやうに私は思ふ。」

「そんな馬鹿な事があるものか。朝湯に這入るのはあれは敗北者の江戸つ兒のすることだ。」

さう言つて彼はハンケチ――彼は食後楊枝で齒をせゝる時、其楊枝に附いた汚物をいつもハンケチにこすりつけた――を取上げて鼻の穴に突込んだ。

其男は尙暫く反抗してゐたが、朝湯に這入る者はいかにも柔弱な人間であるやうな感じが一座の人の頭を支配し始めて、其反抗は結局笑聲に葬られてしまつた。

其年の蕪村忌には五十人近くの人が集つて、Nの草庵空前の盛會であつた。其中には一人の支那人が美しい絹の支那服を著て交つてゐた。母が日本人であるといふ事であつたが、父は公使館の一等書記官に相當する人だとかで、品格のいゝ美少年であつた。其れに俳句も上手であつた。

其支那人の交つてゐるといふ事が俳句の隆盛を思はしめた。

何しろ狹い家に五十人近くの人が集つたので大變な騷ぎであつた。病室も座敷もなしに襖も障子も取り外して坐つたのであつたが、しまひには坐る處が無くなつてしまつて、止むを得ず床の間に坐つた人が二三人も出來た。

五

Kの頭は此頃動ともすると思はぬ方へ外れようとしてゐた。それは出來る事ならば彼等同人

の間から遁れ去り度いといふやうな考であつた。

けれども其考も忽ち現はれ忽ち消ゆると言つたやうな有様で、一定の長い時間頭を支配してゐるといふやうな事はなかつた。唯其日々々の事に追はれてゐた。凡て周圍に起つて來る事に餘儀なくせらるゝやうな心持であつた。

Ｈ雜誌發行所から毎月一定の額を極めて彼に送金するといふ事にしたのも同じやうな心持であつた。さういふ事にする方が善いとか惡いとかいふ、さういふはつきりした考によつて決したのではなかつた。

「さういふ事にしてはどうかと思ふのだが…」

Ｋは浮かぬ顏をして言つた。

「出來るか出來ぬか、まあ遣つて御覽や。」

彼も不愉快さうな顏をして言つた。

それでも愈〻さう極まつてからＫの頭は幾らか輕くなつたやうに覺えた。

又正月が來た。Ｋは袴を穿いて何處かへ出掛けようとしてゐるところへ俳人が來た。二人で酒を飮んでゐるところへ又別の俳人が來た。そんな事をして日を暮らした。

「Ｋは袴を著けて客を待受けて居た。」

其俳人の一人はＮの家へ行つて斯う言つた。

Ｎは厭な顏をした。

俳人や俳句會許りがだん〲殖えて來る許りでなく、地方から出る俳句雜誌が又非常な勢ひで殖えて來た。其れは皆Ｎに命名や題句を頼んで來た。Ｎは一々其請ひに應じてやつた。

其等の雜誌は又Ｋにも選句などを頼んで來たが、Ｋは大方怠り勝であつた。

Ｈ雜誌は更に遲刊を重ねた。Ｎは雜誌の「消息欄」に次のやうな事を書いた。

「Ｋ君は最早病氣の名殘も留めず元氣恢復せられ候へども兎角持前の不精は離れず候。Ｋ君の不精と小生の發熱と相助けてＨ雜誌の遲刊を來し候は申譯無之候。」

彼は此頃からよく此消息欄に筆を執つた。今迄はＫが、Ｎ及び同人間の消息を傳へるのが主であつたのだが、此頃からＮ自身で自分の消息や門下生等の消息を書いた。其れは時には六號活字で菊判の三四頁にも渉つた。

雜誌の讀者は何よりも其れを好んで讀んだ。

大阪の男も矢張りＮの眼にはＫと同じやうに不精に映つた。けれども大阪の男自身は頭にＮやＫを頂いて居つて自分一人の力ではどうすることも出來ぬと諦めてゐた。

Ｋ自身にも其れに倚寄つた考があつた。

「若し自分一人で勝手にやつていゝのなら幾らでも遣りやうがあるのだけれども、自分で遣らうと思ふ事はＮの意に滿たぬのだから困つてしまふ。」

遲刊の結果二月號は休刊して三月號を期日通りに出すことにした。一月拔いた爲めに漸く期日に復したのであつた。

「今後遲刊すれや同じことだ。」と言つて笑つた人もあつた。けれどもＮでもＫでも編輯に携はつてゐるものからいふと、せめてさうでもして一應期日に戻し度く思つたのであつた。

さういふ不始末に拘らず雜誌の賣行は惡い方ではなかつた。

第十二回　衰弱

一

春になると又熱の出入が多かつた。彼は大阪の或若い俳人に手紙を書いた。

「小生格別變動も無之候へども昨今はとかく苦しみ申候。蕪村忌前夜拙宅に御一泊の貴兄等と共に徹夜談笑致したるは小生若返りし心持にて近來の快事なりしが、最早再びかゝる事はあるまじく候。此頃ははかなき考のみ相起り時として

はハンケチを濡らし申候。貴兄家業熱心に御勉强の由奉賀候。御地の人皆少年と聞く。皆々俳句上達はいちじるしきことなれども萬一身を持ちくづすやうなことありてはよろしからず候。遊びたき時遊ぶは惡きにあらねどきまる時にきまらねば一生不幸に陷り可申候。小生身體衰ふるにつれ恰も老人同樣に愚癡に相成、一寸した事まで心にかゝり頭を惱ましむるやうになり申候。諸君にして文學者になるゝならば其積りにて勉强あるべく、若し又文學專門にあらずば自分の本業を何處までもつとめて其傍らに俳句を作るやうになされ度候。諸君に御面會の節愚意御つたへ被下べく候。不悉。」

彼はこゝ迄書いて來て淚が頰を流るゝのを覺えた。これが三十四歳の自分の口から出る言葉かと思ふと、鏡に對して病みほうけた顏を見る時のやうな果敢なさをも感ずるのであつた。彼は更に次のやうな狂態の句を書き添へた。

「若き時は酒ものみしが春の宵
　ほれられて通ひし春の夜も昔
老境可憐ハ、、、、。」

彼は其手紙を封筒に入れ上書をし乍らふと或一人の女の事を考へてゐた。其女といふのは例の櫻餅屋の娘ではなかつた。色の白い脊の高い頭を束髮に結つてゐる二十四五の女であつた。其女は今は或商賣人の妻になつてゐる筈であつた。

大本營が廣島に在つた頃、筆を投じて戎軒を事とすといつたやうな多くの新聞記者に交つて、脂粉の女に取卷かれて騷々しき夜を明し勝であつたのも、考へて見れば丁度今頃の時候であつた。が、今日になつて見ると其等は全く他人の事のやうによそ〳〵しく考へられるのであつたが、唯一人の女――其色の白い脊の高い女――だけは、今でも其れを思ひ出す度に、冬枯の彼の病床に一脈の春を持來たすやうな心持がした。

何處かに樂器の音が幽かに聞えた。何んの音ともはつきり分らなかつたが、彼の心は其音の中に溶け込んで行くやうに覺えた。

そんな心持も永く續くことは出來なかつた。何んといふ事もない不安の念が俄かに頭を擡げて來た。淚は再び頰を傳うた。

彼は聲を放つて何人かを呼び度いと思つたが、ぢつと其れを制した。さうして强ひて自分を抑へようと試みてゐる中にふと白い土でこねた一つの像を目の前に描き出した。其れは他人の像ではなかつた。其一人の女の像でもなかつた。其れは彼自身の像であつた。

彼の歌の弟子の鑄物師から土を貰つて、病床の徒然に樣々のものをこねて見たいといふ考は此頃から萠してゐた。が、扨て何ものを捏ねようかとなると、更に其方の知識の無い彼には見當が附かなかつた。其れが今何うといふわけともなく自分の像を目の前へ描き出したのであつた。

其像はまだ若々しかつた。さうして西洋の文學者などの像によく見るやうな美しさと氣高さがあつた。

二

彼は柄のある鏡を持つて自分の顏を見ては又其れを下に置いて粘土を捏ねた。其れはなかなかの勞作であつた。草臥れると休んで又取りかかつた。

其出來上つたものは、西洋の文學者のやうなものではなくつて、どこかに落ちてゐる地藏の首のやうなものであつた。

翌日になると其首が少し曲つた。此儘放つて置く〳〵と又どんな風に曲るかも知れぬと思つたの

で、彼はふと之を燒くことに思ひ到つた。例の鑄物師の家へ持たせてやつて之を燒いて貰はうと思うた。妹に其れを持つて行くことを命じた。

「まあお氣の毒な。そんなものを持つて行つてお手數を供へるのは。」と老母や妹は其いびつになつた塊を氣味惡さうに見ながら反對した。

彼の機嫌は忽ち惡くなつた。どうしても之を持つて行つて燒いて貰つて來いと言つた。又若し途中で壞しでもしたら大事件だから何んとか工夫をして壞さぬやうに持つて行けと命じた。

妹が其支度をしてゐる間に、彼はやきもきと氣を揉みながら其れは空罐に入れて行くのが一番安全だらうと思ひついた。

老母が戸棚の中でゴト／＼と空罐を探してゐるのが彼にはまだるつこかつた。結局其首の這入る程の適當のが見附からなかつたので、老母は隣家に走つて行つて稍大きいのを借りて來た。

其罐の中に首を入れることも彼は自分でした。妹は其罐を紐でからげて其れを携へて行つた。

其れには一封の彼の手紙が添うてゐた。

鑄物師は其紐でからげた罐を何物とも判じかねつゝ其手紙を讀んで見た。

「顏かたげの御像御目にかけ申候。御序に御燒き被下度候。急ぎ不申候。若し燒かずともかたまるものならば燒かずとも善く候。

土がたにうつしかたどる我顏の
少しゆがみて猶面白し
常臥の病のひまのつれ／＼に
土をつぐねて人をつくりぬ
此次に何をこねんか驚く莫れ
大慈大悲の觀世音菩薩
觀音を寫生なさんと思へども
觀音あらず似たる女もが
方丈の室にこもりて捏ねんと思ふ
二丈五尺の土の盧舍那佛」

鑄物師は罐を開けて見て、

「これは小さい割合に重いですな。」と言つて笑つた。妹も笑つた。

「これは頭の中を空洞にしなければ上が重いから曲るのですよ。又此儘燒くに燒けぬこともないですが、石膏に取つた方がよくはないですか。」と言つた。

妹は其旨を書いた鑄物師の手紙を携へて、兎も角首は鑄物師のもとへ置いて歸つて來た。

彼は又鑄物師に次の歌を書いて送つた。

「ほら／＼にほらに迴りてほら頭の
うつろ頭となすべきものを
みち足れるおもたき頭穴をなみ
燒くとも燒けじか燒かずともよし
いかにして石膏に取るか殊の外の
手數かゝらば取らずともよし」

三

彼は此頃文章もあまり作らなかつた。彼の枕頭で開かれる文章會も暫く途絶えてゐた。俳句も思ふ通りに出來なかつた。自分で何故とも判らなかつたがふと氣がついて見ると、其れは全く衰弱の爲めであつた。病苦は前と少しも變らず寧ろ病苦に慣れたが爲めに、いくらか以前よりは樂になつたやうな心持さへするのであつたが、よく考へて見ると衰弱は疑ふことが出來なかつた。

「斯んな風にして人間はだん／＼衰へて行つていつの間にか死ぬるのだ。」

彼は其病苦に慣れて却つて苦痛を感じないかとも思ふやうになつた自分を不思議さうに眺めた。今日彼の心を慰むに足るものは文章でもなく俳句でもなく、彼が其革新を思ひ立つてか

らまだ日の淺い和歌であつた。さうして和歌よりも寧ろ、最近氣紛れに始めた土細工であつた。

彼は好んで門下の歌人の許に手紙を出した。歌人等も亦歌を送つたり訪問したり、又地方から珍らしい食物などを送つた。其食物といふのもたとへば滅多に人の食はぬ楤芽のやうなものがあつた。

「年の夜の鰯のかしらさすといふ
　たらの木の芽をゆでてくひけり
竹むらに隱れて生ふる山椒の芽の
　からくも君にこひわたるかも」

彼は斯んな歌を作つて其楤の芽を贈つてくれた男に返した。

中には又寒い國からは猪の皮などを贈つて來た。

「青疊青色あせし我庵に
　君がめぐみのくらしゝの皮
くらしゝの革の皮をわが敷きて
　鄰の櫻見れば樂しも」

彼は又斯ういふ歌を作つて其猪の皮をくれた人にかへした。

彼は又去年の冬から全く蟄居してゐたのが、ふと思ひ立つて本所に住まつてゐる歌の門下生を訪問した。其序に龜戶天神迄車を驅つて藤を見た。途中から發熱を覺えて苦しかつたが、其門下生の家で、歌論を闘はしてゐるうちに熱が覺めた。

彼は家に歸つてから其疲勞の烈しいのに驚いた。一年の間にそんなに違ふものかと呆れた。

H雜誌は大阪の男が父母の孝養を理由として國に歸るやうになつてから、曩にKの病中編輯を代理した男の一人が社員として入社し專ら編輯を助けることになつた。

彼は其男とKとの間が果して圓滿に行くかどうかを危んだ。けれどもKとしては大阪の男が歸るやうになつた以上、其男の入社するといふ事が最善の方法だと考へた。其癖其男のする事は何んともないこと迄がKの神經を慄はした。

彼は其H雜誌の事が常に癇癪の種になるのであつたが、それを我慢しては歌を作つた。歌讀みとの交遊は矢張り唯一の慰藉であつた。けれども其歌讀みの一人である彼の鑄物師のことが亦漸くにして彼の心を苦しめはじめた。

「なりはひも大事なりけりつきあひも
　大事なりけり名をあぐるにしかず」

之は其鑄物師に送る歌の一首であつた。

其ひまに彼は土を捏ねてゐた。

四

彼は元來人間よりも草花や小鳥が好きであつた。其れは子供の時分から已にさういふ傾向があつた。俗世間に對する彼の欲望も大きく、人間に對する彼の欲望も大きかつたので、其世間も人間もなか〳〵彼の註文通りにはなつてくれなかつた。其れが年を取るに從つて愈々烈しくなつて來た。例へば俳人の弟子の如きも初め彼とまだ距離のある間は其程にも感じなかつたが、だん〳〵親しみが增して世間的の交渉が殖えて來ると彼の心に慊らない事許り多くなつて來て、其れを冷やかに棄てて置く事の出來ぬ彼は常に其爲めに苦悶した。俳人の中でもKの如きは終始彼の念頭を離れずに其言行が悉く氣になつた。歌人の弟子の方でも漸く月日が重なるに連れて、彼の鑄物師のやうに其生活の狀態が知れて來ると矢張り彼の心を苦しめた。其等有情の人間よりも、土を捏ねて拵へた無生の首の方が彼の前には平和であつた。草花を見て、其れを繪の具で紙の上に寫生する事も亦此頃彼の心を慰める一つの方法であつた。其れに今一つ、或人の周旋で高さ一間位の鐵網の大鳥籠が彼の庭に置かれた。其中に彼は一本の李の木を植ゑて、ヒハ二羽、キンバラ二羽、キンクヮ

鳥二羽、チャガタラ雀一羽を飼つた。其等の小鳥が又朝暮彼の心を慰める無二の伴侶となつた。彼が嘗て書いた文章の一節に斯ういふことがあつた。

「余は俗世間に向つて求めたところが己の情慾を滿たす事が出來ないから矢張り天然界に向つて求めようとする。こちらから情を以て向ふと今迄は無心のやうであつた天然界が俄かに活動しはじめて、總ての物が情を以て周圍から余に話しかける。卽ち總てのものに靈があつて、それが皆自分一人に向つて來る。卽ち余が中心に立つて居て周圍を支配してゐるやうに思ふ。」

彼は自分が中心に立つ事でなければ何事に對しても興味を見出すことが出來なかつた。彼はナポレオンでも豐太閤でも耶蘇でも日蓮でも皆彼のやうな人間であつたらうと考へたことがあつた。周圍を支配するといふ事の爲めには如何なる苦痛でも其れを耐へ忍ぶだけの力を持つてゐた。が、彼の身心が疲勞して來るに從つて流石に人間を小煩いと感ずることが多くなつて來た。彼は動ともすると、極めて柔順で少しも彼の意に逆はぬ天然界の王者となることを喜んだ。

「小鳥籠に飼ひ居り候カナリヤが子を産み候につき近日これも大鳥籠の中に入れ可申、賑かに相成可申候。」

これは或人に送つた手紙の一節であつた。けれども彼は又土を捏ねたり、草花を寫生したり、小鳥を飼つたりすることだけの境界に身を退いて、今後世の中の事は一切知らぬといふ風に取りすます事は素より思ひも寄らなかつた。彼はぢつと土を捏ねてゐる時にもK其他に對する癇癪がじり／＼と腹の底で煮えくりかへつてゐた。大鳥籠の金華鳥の美しさに目を放つてゐる時も、彼を中心に回轉しつゝある彼の世界の出來事が一々手に取るやうに見えた。

五

彼に其大鳥籠を周旋した人はF等よりは先輩の畫家であつた。其畫家は間もなく巴里に遊學したのであつたが、著早々ノールウェーの敷物模樣を應用したH雜誌の表紙圖案を彼の許に送つて來た。其れには長い手紙が添うてゐて、折節巴里で開かれた博覽會の美術館の模樣が報告され、極力日本の博覽會屋――お太鼓事務官――の不見識、日本出品の下劣を極めたことなどが攻擊されてゐた。これは病床の彼に少なからざる慰藉を與へた。彼は其手紙を見た後直ちに筆を執つて長い返事を書いた。こんなに長い手紙を書いた事は近頃珍らしいことであつた。其中に次のやうな一節があつた。

「御出立前御周旋に預かりし鐵網籠は其後F子の周旋により先方より借り來り庭前に据付申候。籠の中に李の生木一本を植ゑ小鳥類を入置候。追々殖え可申候。生木を植ゑ候は來春花咲かばその望みに候へ共鳥は今の處盡く葉を食ひ切り候を見るに迚も蕾が花になる迄無事にはそだち申すまじく候。……

……それ等より考へ候に小生なども一篇の文章を書いて何圓取れたとか俳句を拔いて何圓貰うたとかいふ事他人より見れば高過ぎるやうに思ふべく、若し他人に謗られぬやうにするにはどこ迄も淸貧的にやらざるべからざる事と存候。未來は知らず今日にては文士は貧乏ならざるべからず」と神樣の掟に定めある事と被信候。「必要費だけなくては」とは一般の口癖にいふ所ながら必要費と贅澤費との區別は到底難出來候故、小生はそんな曖昧な事を言はず、必要費でも何んでも成べく少なくして暮らすが文士の職

分と此頃初めて思ひ知り候。病氣の上よりは成べく贅澤を欲する小生が此衝突したる意見を抱きてさへいづれの意見が勝を制するかと申候に、今日まで出來る範圍内に於いて爲しつゝある贅澤を減少する譯には參らず、さりとて此上贅澤する程の金は出來申すまじく、それこれする内に此世も終るべく、ツマリ此等の消極的氣焔も死にがけの駄賃と御笑ひ可被下候。

小生元來金を欲しとは存ぜず候へども友達が百圓取つてゐるに自分は五十圓しか取らぬアイツが五十圓貰ふに自分は二十五圓しか貰はぬといふやうな事に心を惱まし居候處、文士の職分を心得て後全く其煩悶なくなり申候。寧ろ人が多く取つて居るだけ自分が少なく取つてゐるだけ自分が偉いやうに存候。何故と申せば『文士は貧乏なれ』といふ神樣の掟に自分が叶ひ居候故に御座候。……

……小生元來旅行好きにて何といふ目的はなけれど是非世界一周致したしと存候ひしに日本の十分の一も踏むか踏まぬに腰拔に相成殘念に存候。併し熟〻思へば若し巴里の繁華贅澤などを見て歸り候はゞ到底『文子は貧乏なれ』の掟を守り難かるべく、それを思うて神樣は小生の腰を拔き是非とも貧乏ならしむるやう強制致され候事と存候。有難迷惑の事に存候。ハ、、、、、……

……巴里のガス燈の下にて根岸の五分心のランプの陰にて聞くやうなよまひ言を御聞きなさるゝも却つて御一興なるべくわざとよまひ言如斯候。

　くれ竹の根岸の豚はうまからず
　　ばりす思へば涎し流る

小生近來は何も書かず食うてばかり居候。」

第十三回　癇癪

一

土を捏ねることも、草花を寫生することも、歌を作ることも亦彼の心を慰めることの出來ない場合が多くなつて來た。其等の事で紛らさうとしてゐた癇癪が、もう其等の事では紛らされなくなつて來た。

　Kが或時彼を訪問すると、彼は蒲團の外に足を出して其れを妹に洗はせてゐた。金盥の湯からは湯氣が上つてゐた。

　Kがいつもの通りつかつかと病床近く迄這入つて來て、無事な顏をして其脚湯を眺めてゐることがもうじりじりと彼の癇癪に障つてゐた。

　Kは、其垢によごれた足が手拭でこすられる度に白くなつて行くのを見乍ら斯う言つた。

「脚湯はいゝ心持ぢやあろな。」

「え？」と彼の眉間には忽ち皺がよつた。「お前は私が心持がえゝ爲めに脚湯をしてゐるのだと思つといでるのか。これはな、暑い時分なんかは足を蒲團の外に出すことがあるから、さういふ時には他人に氣の毒だと思つて、時々斯んな風に洗はすのよ。氣持がえゝどころか何んとも言へぬ苦しさでな。妹の手が皮膚の上に障る度に頭のテッペン迄チーンと響くのぢやものお前。惡い心持でどうもたまらんがな。」

　彼は其處迄話して來て、泣き度いやうな顏をして、ぢつと額越にKの顏を見詰めた。其れはKが彼の此言葉でどれ程感動してゐるかを見ようとしたのであつたが、彼の癇癪に或點迄反感を持つてゐたKは態と何んの感じも無いやうな鈍い顏をしてゐた。

「幾ら言つても斯ういふ事はお前には判るまい

な。」と彼は益々泣き度いやうな顔をし乍ら極めて冷やかな調子で言つた。何とか一言でいゝから鋭い文句を使つてKを怒らして遣り度いと思つたが其言葉が見附からなかつた。いつ迄もKの鈍い顔をしてゐることが愈々彼を苛々させた。

妹が漸く脚湯を終つてタオルで足を拭く時に彼は忽ち泣き叫んだ。

「タイター……。アイタア〱〱……」

彼はさう言ひ乍らもKの顔を見た、今度は少しは其鈍い神經にも障つたらうと思ひ乍ら。けれどもKは相變らず何んの感じも無いやうな顔をして押し默つてゐた。

彼の頬にはいつもの通り涙が流れてゐた。

妹が次の間に退いてから、鬱結したやうな病室の空氣の中に二人は暫くの間默りこくつてゐた。

漸く彼の方から口を切つた。

「一つ文章を筆記して貰はうか。」

「あい。筆記しよう。」

Kは筆や原稿紙を用意して枕頭に坐つた。

彼は此頃さういふ風に口授をしてK等に筆記せしめることの方が、自分で筆を執るよりも多くなつてゐた。筆記したものが一字も改作することなしに其儘文章になつてゐた。

其筆記が出來上つて後に、彼はいつもの通り其れに目を通した。

「お前は『障』といふ字をお知りんのぢやな。これは『觸』といふ字が書いてある。それでお前は人に何んと言はれても腹が立たんのぢやな、癪に障るのでなくつて癪に觸れるのだから。」

其れは障といふ字を書くべきところへKは誤つて觸と書いて居つたのであつた。

遉のKも彼の此言葉を聞いた時は餘りの皮肉に腹が立つたが、同時にをかしくなつて來て、噴き出して笑つた。彼は相變らず泣きさうな顔をして笑はなかつた。

二

此頃Kは何かにつけて隔意なくNに話すことも、又隔意なくNから聞くことも出來ぬやうな心持になつてゐた。以前は隨分Nの口から面と向つて激しい攻撃を受けたこともあるし又手紙で手厳しく難詰されたこともあつたのであるが、Kはうるさいと思ふと其れを回避する許りで、別に其心に僻みは無かつた。其れが此頃になると、Nの言葉が一々Kには二重の意味で響いて、表面だけの意味を素直に受取ることは出來なくなつた。

其れに反してK以外の多くの俳人が彼と話してをるところを聞くと、其間には何んの蟠りも無いやうにKには聞えた。自分一人さういふ苦しい立場に立つてゐるといふ事がKには情なかつた。

「あゝあ。雜誌なんか止めてしまひ度い。殊に俳書出版なんか思ひ立たねばよかつた。」

Kはそんな風に歎息して、どうかして今の苦しい位置を逃れ度いとも思つたが、又一方にはKの細君はもう遠からず二番目の子を産むことになつてゐた。Kは默つて考へることが出來ずに立上つてうろ〱と歩いた。

Kの友人は此頃になつて家を持つものが多かつた。其等の新家庭に比べて見るとKの生活は何かにつけて贅澤だと人の目に映じた。女の子に赤い着物を著せて手土産を持つてNの見舞に來る細君の服裝なども動ともすると問題になつた。

其年の夏期休暇に或學校の教室で俳句の講習會が開かれた。其講師としてはK以外の二人の俳人が選定された事をK等は非常に羨ましがつてゐるといふやうな風に彼の病床には傳へられた。

それはKの所へ、矢張り講師に選定されなか

つた一人の俳人が來て、
「一つ傍聽に行つて見ようぢやないか。」と言つたのでKも贊同した。其事をKは其講師になつた俳人に話すと、其俳人は校主に相談して、何日の何時から來いとKの所へ通知して來た。其時間が切迫してゐたのでKは其傍聽を誘つた男の所へ電報を打つた。其處で二人で傍聽に出掛けたといふ事が、種々の意味に解釋せられていろいろに彼の許へ傳はつたのであつた。
「K君等も最終の數時間は聽講兼監督といふやうなる役目にて參會……」と其講師の一人であつて、かの最近H雜誌の編輯を補けることになつた男は、雜誌の消息欄に書いた。其監督といふ言葉が皮肉に響いた。
「何んにせよKから電報が來たものだから、電報に對してもこれや大急ぎで出掛けにやならんと思つて……」とKと共に傍聽に出掛けた男は、彼の枕頭で當日の事を話して輕快に笑つた。
彼は遂にH雜誌の次の號の消息欄に、自ら筆を執つて長い文章を書いた。
「……此頃自分ども病人の耳朶に達する諸報の中にて天津聯合軍の消息につぎて騷がしきは俳句講習の噂に候。某所夏期講習に俳句の一課を加へたりとてそれが何とした
と申すにや……」
彼は六號活字で菊判四頁にわたる長い文章を書いたのであつたが、其れは途中で血咳が出た爲めに數日休んでは又筆を執つたり、後には口述して他人に筆記させたりして何日にも渉つて出來上つた文章であつた。

三

彼の名聲は日に月に盛んになつて來て、彼の病床に爭つて地方の名物を贈つて來るやうな人がだん〲と殖えて來た。彼は其れに一種の安心を得乍らも、そんな事に小さい安心を得ることを何より恥辱と心得てゐた。彼はよくKに斯ういふ事を言つた。
「お前は未來の幸福よりも現在の幸福の方に牽きつけられる方ぢやが私は反對ぢや。私は現在の幸福よりも未來の幸福の方を望むな。」
其處でKは言つた。
「死ぬる時迄さうだとすると、詰り死後の幸福を望むといふ事になるのぢやな。」
「さうさ。死後の幸福といふと宗教家らしい口吻になるが、あの世とか何とかいふ意味ではなく、此世に於ける死後の名譽さ。武士の身後の名を惜むといふのと同じ意味さ。」
「私はさういふ考は少ないな。寧ろ生前一杯の酒に若かずの方ぢやな。」
「だから私とは何かにつけて意見が違ふのぢや。若しこゝに今の私の病苦を治す一つの名藥があるとしても、其れを得る爲めに少しでも死後の名を瀆すやうなら私は寧ろ今の病苦に甘んずるな。」
彼はさういふ口の下から家人を叱りつけたり、K等にも頻りに病苦を訴へるのであつた。
Kは思つた。假りにさういふ名藥があるとしたら、たとひ死後の名を瀆さうとも自分であつたら即刻其れを用ゐて、こんなに家人を叱りつけたりはしないと。さうして自分の死後の名の爲めに家人を苦しめて平氣でゐるといふことは一つの罪惡ではないかと迄考へた。
「死後の名譽なんて馬鹿なことだ。」
Kはさう心の中で呟いたが口へは出さなかつた。
彼はKがさういふ考に住してゐることをよく知つてゐた。K許りでなく彼の門下生の多くは大概似たり寄つたりの考を持つてゐる事もよく知つてゐた。彼はさういふ門下生等の言動を見聞するにつけて益々反動的に現在の快樂から遠ざからうとした。

「土を捏ねたり草花を寫生したり、地方から贈つて來た名物を食つたりしてゐる時よりも、これでもかこれでもかと責めて來る病苦に耐へ忍んでウン／＼呻吟してゐる時の方が、自分の生活として有意味だ。」

彼は時々そんな事迄を考へた。

さういふ眼から見ると、學校の講習會に俳句の加はつたことを何か俳句界の一大事の如く騒いでゐるなどは、腹が立つ所を通り越して寧ろ情なかつた。

彼はもう我慢がし切れなくなつた。今迄はK等の爲めから言つても、亦彼自身の爲めから言つても、力めてK等に社會的の地位を作らす必要があつたので、面と向つたり手紙などでは手嚴しく叱つて置き乍らも世間に對しては之を持上ぐることを怠らなかつたのであつたが、もうそんな手緩つこいことは彼の病氣が許さぬやうになつた。其上彼の病氣が自然に或特權を彼に與へつゝあることを彼は十分に意識してゐた。彼は今度H雜誌の消息欄に書いた文章で、公々然とK等の不心得を叱責したのであつた。

其公開狀はH雜誌の讀者を驚かした。今迄は彼とK等との間に其程の距離があらうとは思つてゐなかつた讀者は、其れによつて初めて自分等もK等も同じく偉大なる彼の下に在る同じやうな門下生であることに氣がついた。

四

彼は其文章を公にして、今迄たまりにたまつて來てゐた溜飮が一時に下つたやうなすがすがしい心持になつた。其消息の終りには斯う書いてあつた。

「萬事抛擲のうちにも唯この消息だけは不平と必要に迫られて書き始め候へ共、きのふ一枚けふ一枚といふ次第にて一向捗取不申、果は人の力を借りて漸く書き了へ申候。」

一時H雜誌の編輯を助けてゐた、かの大阪の男は其消息を讀んだ日直ちに博文館出版の俳諧文庫全部を買ひ整へたといふやうな話も東京に傳はつて來た。講習會の講師になつた男も、實際自分が講師になつて見て學問の不足を痛切に感じてゐた矢先であつたので、取敢ず書架の俳書を取出して讀んだりした。其中に獨りKは、

「何故にNは其れを特に公開狀にしたのか。」といふ點に不快の感じを持つてゐた。殊に其攻撃の要點は此頃K等が學問もせずに學者的野心を持つてゐることは片腹痛いことである、といふにあつたので、其點は特に承服することが出來なかつた。

「自分は少しも學者振らうとしてはゐやしない。自分に讀書慾の無いことはあれ程Nに白狀して置いた事ではないか。今度夏期講習會の講師に自分のならなかつたといふ事についても自分は何んとも思つてゐやしないのである。其れを何か羨ましがつてゐるやうな風に解釋して其等の點から自分を責めようとするのは間違つた話である。他の諸君はどうか知らぬが、自分に於いては承服することは出來ない。」

Kは「自分の雜誌」に出てゐる其不愉快な文字を繰返して讀む氣にもなれなかつた。其後彼と出逢つても其事については一言も言はなかつた。Nも不愉快さうな顏をして默つてゐた。

Kの頭は反動的にあらぬ方へ／＼と動いてゐた。

「何かもつと飛び離れた商賣でも遣つて見ようかな。」

さう考へることは誠に自由で愉快であつた。が、其れかと言つて今の境界から、全然脫離することは思ひもよらぬ事のやうにも考へられた。

Kは鎖で引摺られ乍ら歩いてゐる犬のやうな

心持で次の雜誌の編輯に取りかゝつた。其れから今度の消息欄に次のやうな意味の事を書いた。

「自分に學者的野心があるやうに記載せられたことは意外である。自分には學者的野心といふやうなものは毛頭もない。白狀すれば雜誌に携はつて以來、寧ろ俗境に立つて商賣人になつたといふ方が適當な位のものである。是日下の止むを得ざる境遇であつて、其境遇の制する儘に任して置くより致方がない。」

Kは又、自分がさういふ立場になつてをればこそ雜誌も遣つて行けてゐるのではないか、其れを彼初め多くの人が兎角口喧しくいふ事は受取れぬ、とも思つた。

Nの枕頭に集つてゐる多くの俳人はかの消息が出て後も快濶に話し合つてゐるやうにKには思へた。さうしてK一人はどうしても其等の仲間に這入つて同じやうに快濶に口が利けぬやうな心持がした。

「あの消息も畢竟自分一人の爲めに書かれたものではなかつたのか。」といふやうな考へさへ起つた。

N及び彼の門下生は皆一團となつてK一人を疎外してゐるやうな心持さへした。

五

今年も亦野分の吹く頃になつて上野の山の彼岸は少なくなかつたとかいふ事であつたが、彼の庭の鷄頭にはたいした傷みもなかつた。Nはガラス障子越に其鷄頭を見乍ら、高等學校時代からの彼の親友であつたSが二年間英國留學を命ぜられて此間自分を訪問してくれたことなどを思ひ出してゐた。

彼の友人で此頃洋行するものがだん／＼殖えて來た。彼は其等の人を送る度にいつももう今度は逢へまいと思つて別離を敍するのであるが、中には留學期間が短くして、意外にも又逢へるのがあつた。けれども今度のSにはもう迚も逢ふ事が出來さうには思へなかつた。

Aの事も考へに上つた。Aは今海軍の中佐であつた。同鄕の友人で、天下の豪傑は使君と我のみと言つたやうに互に許し合つてゐた間柄であつたが其氣を負つてゐた壯健な時代の事がまざ／＼と思ひ出された。其Aは此間歸朝して不思議に再び逢ふことの出來た一人であつた。

其處へ額を出したのは一人の俳人であつて、續いて又Kも遣つて來た。

其俳人は例の消息欄の彼の文章に就いて話してゐたが、Kが來て詰らなさうな顏をしてゐたので其れは止めてしまつた。それからこんな事を話した。

「僕がK君に出逢つたのはもう何年前になるかねえ。何んでも其頃此方の俳句會に來て見ると、いつも齒の間に石の挾まつた下駄が玄關に轉がつてゐたものだ。來る度にいつもさうであつたので、隨分暢氣な奴もあるものだと思つて、或時歸りに誰の下駄だらうと氣を附けて見て居ると其れを穿いたのがK君であつた。歸りにも其石の挾まつた奴を平氣で穿いて行つたつけ。はゝゝゝ。」

Kは負けてゐなかつた。

「馬鹿をいふ。そんなに始終石の挾まつてゐる下駄を穿いてゐる奴があるものか。其れよりもあの頃の君は隨分汚なかつた。いつも會に來る度に雲脂だらけの髮を延ばしてゐる妙な男が居るなと思つたものだ。」

此話を聞いてゐた彼は珍らしく晴々と笑つた。

「はゝゝゝゝゝ。」

其一人の俳人が歸つたあとで彼はKに言つた。

「お前は禪坊主の問答といふものを知つといでるか。」
「いゝえ。」
「まあ手近い話がさつきの問答のやうなものさ。あゝいふ風の應對は側で聞いてゐても氣持がよい。今日のは上出來であつたが、一體お前にはさういふ風の禪味が缺けてをる。其れがお前の缺點の一つだ。眞面目過ぎるといふのか、物に拘泥し過ぎるといふのか、何だかじめ〳〵と陰氣でいかんな。少し禪坊主の問答でも讀んで御覧や。」
彼は斯う話してゐるうちにも癇癪が起つて來たらしく不愉快さうな顏をして言葉を切つた。
「あい。」と言つてＫも不愉快さうな顏をした。
其れから話は用談に移つた。
彼は突然家を擧げて興津に移轉せうといふ事を思ひ立つたのでそれは此頃主な門下生や親戚の間の大問題になつてゐたのであつた。其事に就いてＫは今日も亦彼に呼ばれて來たのであつた。

第十四回　興津問題

一

或日一人の俳人が話しに來て、ふと興津の事を話した時、彼の心はどうしたものか忽ち其興津といふ名に牽かれてしまつたのであつた。
「さうだ。何物をか自分は求めつゝあつたのだ。其れはどういふものだか今迄判らなかつたが、其れが今になつて初めて判つた。興津へ移轉せう。其處を自分の死場所にせう。」
彼の心は飛立つやうに覺えた。其夜は眠れなかつた。翌朝早速使ひを出したのはＫの所であつた。而も車をもつて迎へにやつた。Ｋは驚いて其車に乘つて來た。
「どうしたのぞな。」とＫは彼の容體に急變でもあつたのかと驚いて來たのであつたが、そんな容子も見えないので、不審さうな顏をして枕頭に坐つた。
Ｋの此容子を見た彼は涙ぐみながら笑つた。
「びつくりおしちやいかんぞな。實は諸君に不贊成さへ無けれや興津に移轉せうかと思ふのぢやがな。」
「えゝ、移轉な。」
「さうさ。迚も此體で又戻つて來るといふやうな事は思ひもよらんから、今度行つたらもう行きつきりさ。」
Ｋは何んと答へていゝか判らなかつた。
「誰かにもう其事をお話したか。」
「いゝえ。今お前に話すのが初めてよ。」
「それで小母さん達の御意見はな。」
「母や妹は不贊成らしい事を言つてをるけれど、それやどうでもえゝのさ。」
「それでも小母さん達に御異存があつては…」
彼は其Ｋの言葉におつかぶせるやうに言つた。
「其れで早速お前に頼み度いのは新聞社の方や醫者の方に掛合つて見て貰ひ度いのぢやが、其れから今晩叔父にも逢つて話して貰ひ度いと思ふのぢやが。」
「あい。其れを話すことは易いことぢやが、お前のその興津移轉をお思ひ立ちになつた主な理由はどういふのぞな。其れを皆から聞かれるだらうと思ふのぢやが。」
「其理由はいろ〳〵あるけれども…」と言ひながら彼は考へてゐた。「まあ主な理由は氣候とか空氣とかいふ事だな。東京とは餘程違ふといふ事だから、それに今一つは此頃のやうに來客が多いと、其應接だけでも非常に疲勞するけれな、興津へ行けば其れは自然少なくなるに極つてゐるから…」
彼は其れ以上の理由を言はなかつた。
Ｋの心は漸く落著いて來てゐた。さうして

彼が主な理由とすることの理由としては薄弱なことに氣がつきながら、何んとなく其興津移轉に同情を呼ぶのであつた。

何事にも一々嚴密なる理由がくつつくのが此頃の彼の状態であつた。其餘り堅くるし過ぎて少しもゆとりの無い事がKにはいつも慊らなかつた。彼がまだ壯健であつた頃は決してこんなではなかつた。寧ろ反對であつたと考へ乍ら、而も其いふ事に一々駄目がつんでゐるのだから反抗する事も出來ずにKは唯默つて其れを聞いてゐたのであつた。そんな間に在つて突然此興津移轉の話を聞くことは、何だか昔の彼が蘇つて來たやうな心持がして、Kには愉快であつた。殊に「唯興津へ移轉し度い。」といふだけで、十二分の理由があるやうにKには考へられた。K自身は其れ以上の理由を聞き度いとも思はなかつたけれども新聞社の社長や、醫者や、外交官である彼の叔父などには其れだけの理由では通用しないことを知つてゐた。今彼の口から話された二つの理由も恐らく通用しないであらうと危み乍らKは聞いてゐた。

二

Kは早速彼の依頼通りに社長、醫者、叔父に當る人に其れ〲話したが、皆其思ひもよらぬことに唯驚いてゐた。社長は、

「社の方はちつともかまはんが、あの身體では第一道中にも困るし、向うで病氣の惡くなつた時分に君等が出掛けると言つたところでさう自由は利かないし、そいつは考へものだね。」と言つた。醫者は、

「無理に行くなれば汽車の中に其れなりの設備をしてなるべく動搖を感ぜないやうにするのですね。何んにせよ今のあの身體を動かすといふのは亂暴ですね。」と厭な顏をした。絶對的に不贊成を唱へたのは叔父であつた。

「そんな馬鹿なことが出來るものか、何で又興津といふやうな所を思ひついたものだらう。今根岸に居るのさへ私等には不便で、一寸何處かへ行つた序に寄つてやらうと思つてもさうはいかぬものな。其れにお前興津なんかへ行つて御覽、見舞に行つてくれる人なんかあるものか。何んな？　澤山訪問者があるのが蒼蠅いな？　其れなら面會謝絶にすれやえゝぢやないか。何も興津迄行つて客を避けるにも及ばない話ぢや。二三日うち私が行つてよく話してやるが併しお前等からも止めておくれ。」

Kは其等の人の意見々あらまし彼に話した。

「兎に角一番不贊成らしいのは叔父さんだが、其れも二三日うち來て親しく話すといふ事であるから、直に意見を聞いて見ておくれ。」

Kは彼の移轉を思ひ立つた心持に或了解を持ち乍らも母堂初め親戚の人々の反對にも反抗しかねた。

親しく彼の病床に來た叔父はKに話した程強硬に反對はしなかつた。

「まあもう少しよく考へて御覽。急ぐことでもないぢやないか。」などと言つて歸つた。

其れで此問題は月を越しても容易に決定しなかつた。叔父許りでなく内心反對意見を持つてゐても彼の前で明白に其れを表しかねる人が多かつた。

Kは其事について度々彼に呼ばれた。愈々行くと假定して汽車はどういふ風にしたらいゝかといふ事の取調なども命ぜられた。

其間にKはよく又彼に叱られた。或時も手紙が來たので、又興津問題だらうと開けて見ると、

「今日も九度以上の熱あり、何も出來ず、仕方なさに寢ながら斯んなものを認め候。」とあつて、近來稍驕慢心の見ゆる事は頗る苦々しい事であるから注意しなければいかぬ、などといふ事が書いてあつた。殊に每月蕪村句集の輪講を彼の枕頭でする時に、Kが一番よく遲刻することな

どが例に擧げて義務の念の薄弱なことも叱つてあつた。

「我々の交際に權利義務などと下らぬ事いひ度きにあらず、然れども貴兄はH雜誌の關係者として最も俗の方面に關係せざるべからざる身分なれば此一方よりもそれ相應の義務を盡すの念慮なかるべからずと存候。」といふやうな事も書いてあつた。

Kは自分に斯ういふ面倒な忠告をしてくれる彼よりも興津移轉を思ひ立つた彼の方に同情が多かつた。さうして愈〻移轉と極まれば費用萬端は自分で負擔する積りでゐた。其事を知つた彼は其れを感謝する手紙をよこした。

「移轉費は(敷金を除き)五十圓と見積り居候。百圓もかゝるやうにては止めねばならずと存候。これは貴兄へ對する配慮の爲めにあらず、身分の點より割出し、さうでなければ自ら安んじ不申候。

鷄頭の花に涙を濺ぎけり」

其れは九月の半ばの事であつた。

三

其問題は十月に入つてもまだ決しなかつた。彼も初めから、たとひ移轉をするにしても秋に這入らねば駄目だらうと考へてゐたのでさう決定を急いで居つた譯ではなかつたが、斯く遷延して決しないことは幾らか苛々させた。

九月の末に一人の俳人は大阪に行く序に興津に立寄つて、略心當りの家を探して見た。さうして或醫者の家の病室が一番適當だらうといふ事に見當を附けて歸つて來た。其れに愈〻彼が移轉する事に極まれば肺病初期の一人の門下生が同行しようといふ事になつて、六疊と四疊半との病室が三つ並んである其一つを其男が借りて、殘りの二つを彼が占領することにしようといふ事迄略相談が極まつた。其れに拘らず肝腎の移轉問題は煮切らなかつた。

或日彼は一人ぼんやりと此問題を考へてゐるうちに頻りに野菊の事が考へられた。どういふものだか興津には野菊が澤山咲いてゐさうな心持がしたのであつた。彼が愈〻移轉と極まれば借りることになつてゐる其醫者の家の庭にも矢張り野菊が澤山に在るやうな心持がした。若し其時人があつて興津移轉の理由を聞いたら、彼は直ちに、

「野菊。」と答へたかも知れなかつた。

此頃興津を考へることは絶望の彼の前途に不思議な光明の世界を描き出すのであつた。草花を寫生したり土を捏ねたりすることにも興味を失つて、唯うん〳〵と病苦にうめく事が一番意味あることのやうにすら考へる此頃に在つても、一度興津問題に觸れると、彼の心は夢のやうに樂しかつた。

扨て興津に行つてどうするのかといふ實際問題に考へ到ることを彼は身顫ひする樣に恐れてゐた。其興津の醫者の家の病室に横たはつてゐても今此根岸の病室に横たはつてゐるのと少しも變らずに矢張り苦痛を堪へるのかと思ふと、其樂しい夢は一時に覺めようとした。けれども其れに拘らず彼の心は其問題に觸れる度に、強ひて其れを實際問題としないで絶望の前途に唯一の希望を繫がうとするのであつた。其希望は何んであるか。さう嚴密に尋ねられると彼自身にも答は出來なかつた。唯、現在のやうに野菊の事を考へてゐる時に人が聞いたら、直ちに、

「野菊。」と答へ度いやうな心持がするのみであつた。

彼は何かにつけてKを叱つた。其れは一つは此頃の自分の癇癪の遣り場を一番にKに見出すのであつた。其れが又一番Kに親しみがあるのだとも思つた。さうして一旦興津問題のやうな問題が起る時に取敢ず其れを話して見度く思ふ

のは矢張りKであつた。果してKは凡ての門下生を通じて一番其事に同情を表してゐるやうに見えた。併し八月が九月になり、九月が十月になつてから彼自身の心が落着いてくればくる程、其Kの同情が却つて彼にはあぶなつかしくも見えて來た。彼はKに次のやうなことを書いてやつた。

「小生今夜發熱中段々ぢへ申候。興津行いやにも成申候。
原因は金也。
再び不安の情態に戻る。」

其れから又、靜岡に居つて今度の問題につきいろ／＼周旋してくれた一俳人に斯んな事を言つて遣つた。

「興津には野宿乏しく候哉。」

四

歌人の中にも文章會に出席する一人の年とつた男は彼の興津問題に同情を持つた一人であつて叔父を訪問して其意見を陳べたりした。興津に家を見に行つた俳人も外務省の應接室で叔父に會つたりした。

叔父の意見は飽迄も反對であつたけれども、若し彼が何處迄も頑張ればそれを伺歴へ附けてしまはうといふ程でもないらしかつた。

或日彼の枕頭に二三の人が集つた中に六十近い一人の老俳人が交つてゐた。此人は俳句は彼に學んだけれど、もと／＼同郷の先輩で、彼は却つて其人を先生と敬稱してゐた。移轉問題に反對の人は此先輩の口から强硬に反對して貰ふことを庶幾してゐた。

果して此先輩は何んの粉飾もなく强硬に反對した。訪問者を避ける爲めに興津へ行くのは無意味だ、其れだけの理由ならば何も移住迄するには及ばない、此家に在つて來客を謝絶すれば其れでいゝ、と斯う云つた。此頃の彼はもう思ひ立つた當時程の熱心もないらしく、贊否兩者の意見を唯冷やかに聽取る位の態度でゐたのであつたが、此先輩の反對が餘り手嚴しかつたので、忽ち反抗した。

來客を謝絶するといふ事は不愉快な事である。さういふ事は最後の呼吸の引取る迄自分はせうとは思はない。併し興津へ行つて其爲め客が來なくなるといふ事は來客謝絶といふ事とは意味は違ふ。と斯う彼は言つた。

「そんな馬鹿な事はない。其れは同じ事ぢや。」と先輩は言つた。

「決して同じ事ではない。非常に相違があります。」と彼は言つた。

「其れは貴方にも似合はん感情一遍の議論で、全く理窟に合はん話ぢや。」と先輩は憤慨した。

「其區別が先生には判らんのかや。」と彼も憤慨した。

「それや同じ事よ。」

「いゝえ、非常に違ふ。」

二人は益々激して來て、しまひには同じ事を繰返して聲高に罵り合つた。

彼は青い色をして聲を嗄らしてゐた。

Kは詰らなさうな顏をして唯傍らで聞いてゐた。

其夜は其二人の議論だけで夜が更けて了つた。翌朝になつて先輩から手紙が來て、病中をも量らず議論をして申譯が無かつた、格別障りはしなかつたらうかと心配してをる、併し興津移轉の儀は貴方の機嫌を損ずるとも是非止め度いと思ふ、といふ意味の事を言つて來た。其れに對して彼も手紙を書いた。

「拜啓、昨夜は又例の暴言を發し後悔一方ならず、今朝御詫狀差上可申と存候處に却つて御手紙に接し恐縮の至りに候。來客謝絶の件は私の心持丁度曾子易簀と同じやうに存候。曾子は簀に對して心を安んぜず私は客に對して

心を安んぜずと申事に候。

私は轉居の方に定めて、此上は叔父の認可不認可によつて決定可仕候。若し興津へ參り候はゞ御高話を聽くことも難出來、其代り例の暴言を吐いて御詫狀を出すやうの事もなかるべく候。

わざと簡單に御返事旁ゝ御わび迄一書差上候。御厚意の程は十分銘肝罷在候。

謹言。」

五

「拜啓、明十六日午後四時頃より興津一件につき御相談致度御閑ならば御枉駕奉願候。」

斯ういふ手紙を彼は五六本認めた。興津問題につき何かと心配してくれた主な人々を集めて愈ゝ最後の決定をせうとするのであつた。唯其中に彼の來客謝絶に就いて激論した先輩は加はつてゐなかつた。叔父も加はつてゐなかつた。

枕頭に集つた人は皆氣抜のしたやうな顏をしてゐた。此會合はほんの結末をつけるだけの表向きの會合であつて、めい／＼が改めて贊否をいふ前にもう大勢は極まつてゐることを誰も知つてゐたのであつた。

老母や妹はお國振の鮨をつけて皆をもてなした。二女の顏には此難問題が漸く收まりかゝつて來たことを安心する色が見えてゐた。

Kは其二女の心情にも同情せずにはゐられなかつた。此垂死の大病人を抱へて殆ど知人の無い興津くんだり迄行くことは二女に取つてどんなに心細いことに考へられたらう。其れを思ふとKも、叔父初め主として親戚側の人の反對論に强ひて楯つく勇氣は無かつたのであつた。

けれども此日Kに取つて其れ以上の苦痛と感ぜられたことは、此日の枕頭の會合が、皆秋の夕日の莚に坐つた人のやうな、勢ひの無い淋しい會合であつたことであつた。皆格別改めて贊否をいふでもなく、其お國振の鮨を食ひながら世間話をしてゐた。

「兎に角今日の問題に取りかゝらうや。」と一人は言つた。

「其れで貴方の御意見はどちらに御極めになつたのです。其れが何よりも根本問題ですから。」と他の一人は言つた。

「僕は轉居の方に極めてゐるのです。」と彼は苦しさうに言つた。

皆又暫く默つてゐた。

「叔父さん初め親戚の方々が皆非常に心配されてゐる容子であるから、兎に角當分延期とでもいふ事にして置いてはどうだらう。」と一人は言つた。

又暫く沈默が續いた。

そんな煮切らない話を繰返してゐるうちに、此日の最後の會合が、遂に興津問題を否決したといふだけの色――薄い色ではあつたが――を白紙の上になすりつけるだけの事は出來た。

其れから又雜談に移つた。

入日が天地を染めた茜の色は消えてしまつた。彼が絶望の生涯に最後の樂しい空想界を描き出して見ようとしたことも却つて彼に絶望を重ねさすことに終つてしまつた。

「若し實際興津に移轉と極つてゐたら今頃どうだらう。大騷ぎだよ。」と其後Kの家へ遊びに來た一人の俳人は言つた。

「さうさ。初め一月許りは多少珍らしい爲めに病苦が慰むかも知れぬが、あとは同じ事だらう。矢張り行かなかつた方がよかつたよ。」と其時矢張りKの家に來て居つた、移轉に贊成であつた一人も安心したやうに言つた。

Kは默つて其等の話を聞いてゐた。さうして其等の人のいふ所を其通りだと思つた。あの

むづかしい身體をどうして汽車に載せるか、考へて見れば其れだけでも大問題であつたのである。兎に角此事に今迄の家に落着いたといふ事は當人に取つても周圍のものに取つても幸福なことであつたに相違なかつた。が、其れに拘らず彼が其れを斷念してしまつたことを考へると自分の事のやうに淋しかつた。茜の色は彼のみに消えたのでなく、Kにも亦消えたやうな心持がした。

「興津に野分は少なく候。」といふ返事が遅れて隣國の男から彼の許に來た。

第十五回　命

一

　十月の二十八日は彼の誕生日であつた。興津行の事が頭からなくなつて後の彼は此誕生日の事許り考へてゐた。彼はKに斯んな手紙を書いてやつた。

「……小生誕辰に御馳走の件今より頭をなやまし候。小生今後の浮沈盛衰は總て此一會の結果に在るやう存じ落著不申候。」

其日は四人の俳人が彼の枕頭に集つた。めいめい食物か玩具の土産を持つて來ることが其日の趣向であつた。殊に其れには彼の出題にかかる色に因んだものであらねばならなかつた。其色に赤黄青茶といふやうなものであつたがKには赤が當つてゐた。

　御馳走が大問題であると聞くと、其土産の趣向もかりそめには出來ぬやうに考へられた。

　Kはいろ／＼考へたがいゝ思ひつきもなかつた。ニコライの女學校にゐた細君が、露西亞の復活祭に鶏卵を赤く染める事を知つてゐて其れを献策したので其れに極めた。細君は早速方式に從つて鶏卵を染め其れを籠に盛つた。

　赤い鶏卵が籠に盛上つてゐるだけでは何だかまだ物足りなかつた。Kは赤い風船玉を三つ許り買つて來て其籠の柄にくゝりつけた。彼の枕頭で風呂敷を開く時に其風船玉が其風呂敷の中から高く上るところを趣向にせうと思つたのであつた。

　けれども其れから一時間餘りも經つた爲めであつたか、風呂敷に縛られて居つたが爲めであつたか、風船玉は思つた程高く上らなかつた。

「これはいけなかつた。」とKは申譯無いやうな顔をして彼を見た。上に揚るべき風船玉の揚らぬといふ事が、此目出度い日の爲めに頗る不詳な事であつたと考へたのであつた。

「いけない事はない、面白いぢやないか。」どれ程の高さに上るものが其風呂敷の中から出るかといふ事を豫期してゐなかつた彼は、風船玉が籠の柄のところをふは／＼と彷徨いてゐるだけでも氣に入つたらしかつた。

　他の三人の俳人も色に因んだ其れ／＼の思ひつきを見せた。

　庭を見ると一つの松から他の一つの松に白木綿が幕のやうに引張つてあつた。それが何んの爲めかといふ事は主人以外には判らなかつたが、それでも如何に彼が興奮してゐるかは何人にも想像された。

　主客五人で其日は珍らしく談笑した。彼の機嫌は非常によかつた。

　彼は其日の事を或文章に斯う書いた。

「誕生日には御馳走の食ひをさめをやる積りでK等四人を招いた。此時余はいふにいはれぬ感慨に打たれて胸の中は實にやすまる事がなかつた。余は此日を非常に自分に取つて大切な日と思つたので、先づ庭の松の木から松の木へ白木綿を張りなどした。これは前の小集の色をうしろ側の鶏頭の色が壓するから此白幕で鶏頭を隠したのである。ところが暫くすると曇りが少し取れて日が赫とさしたので右の白幕へ五六本の

鷄頭の影が高低に映つたのは實に妙であつた。」

彼が今後一年間の命を卜した誕生日は無事に終つた。

二

彼の誕生日が過ぎて、其誕生日に白木綿の幕を張つて其色を憐んだ小菊の黃色が赤味を帶びる頃が來た。——彼の庭には其小菊の外に菊は無かつた。多くの家の物々しい庭には菊花壇が作られて、大輪の菊は絲のやうな花瓣を狂はせる頃であつた。——彼が興津行を思ひ立つたのは其れも一つの原因であつた東京の寒さがそろそろと病床を襲うて來た。天氣のいゝ日はガラス障子が思ふ存分日光を運び入れて吳れるにしても、其れももう一年間慣らされて見ると當り前になつてしまつてゐた。燈爐——彼は石油ストーヴをさう呼ぶ事にしてゐた——はもう一月も前から持出されてゐたが、だん／＼衰弱して來た彼の身體は其位の溫度では持耐へられなくなつて來てゐた。興津問題に就いてはKよりも寧ろ思ひ切つた積極的の贊成者であつた——叔父を訪問して自分の意見を陳べたりした——歌人は、其興津行の止まつた事を其後も倘殘念がつてゐた。さうして切めて其寒さを凌ぐ事だけでも他の方法を以て補ひ度いといふので、彼の病室に石炭を焚くストーヴを据附ける事を主張した。さうして其ストーヴは自分で寄附すると言つた。

彼は其好意を感謝したけれども、石炭代其他に就いて心配した。其處で歌人は自分と書家のFとKとで其れを分擔することにしてはどうであらうと言つた。

「まあ兎も角もKに相談してくれたまへ。」と彼は心苦しさうに言つた。

其話は半日で纏つた。

小さいストーヴであつたけれどもチヤンと煙突の附いてゐるものが出來てガラ／＼と石炭を投げ込んで置くと、春が蘇つて來たやうに六疊の部屋は暖かになつた。屋根の上に餘り高く突出てゐない煙突からは黑い煙が湧き立つやうに出た。

「風があの煙をお隣へ吹きつけるやうな事はあるまいか。」と母と妹は心配した。

ガラス障子の外には容赦もなく冬が押し寄せて來た。ストーヴは朝晩絶え間なしに焚かれた。

「此ストーヴさへあれば此冬の寒さは大丈夫だ。」と考へたのも初めの間だけのことであつた。部屋の溫度は六十度位に上つてゐても、矢張り寒さは病骨に響いた。痛みの强い日や熱の高い日が多かつた。

望みの絶え果てたやうな淋しい日をぼんやりと暮らすことは迚も出來ない事であつた。彼は其中でH雜誌の爲めに力めて筆を執つて、俳句や和歌をも力めて作つた。もう土は捏ねなかつたが畫の具は時々いぢつた。

それから誕生日には主な俳人と會食したので、今度は歌人と會食することを思ひ立つた。彼は次のやうな規約を設けて回章を廻した。

一草廬飮食會會規

一草廬に於いて飮食會を催さんとする者は來客謝絶の限りに非ず

一來會者は手土産を要せず

一若し飮食會の興を助くるために食料品を携帶する者は左の條項中少なくも二項に該當するを要す

一安價なる事

一ウマキ事

一珍らしき事

一趣向ある事

一來ねば來ず來れば來て食ふ素話に食はずに歸る客はいや／＼」

彼は腰や横腹の痛みに呻きながら、せめて此會合を樂みにしてゐた。

三

H雜誌の事も氣になるのであつたが自分で筆を執つて闇汁會や柚味噌會の記事を書いた時分の勇氣はもう無かつた。歌人を會しての御馳走會も其一年前を思ひ出させる闇汁はあつたが、彼は唯皆と一緒に食つてさうして談笑することを樂みにするより外に何物をも收穫することが出來ないのを自分で物足らず思つた。

けれども彼は盛んに食つた。彼は其處に運ばれて來る御馳走に一々饑ゑた鷹のやうな目を放つた。彼の痛み場所は此頃又一つ殖えた。其れは脊髓炎には關係の無いものであらうと思はれたが――大方床擦であらうと想像されたが――其れでも痛い事は矢張り從來の患部と同じやうに痛かつた。一寸體を動かす時にでも何時か一箇所の痛み場所には必ず障つた。彼は相變らず上半身だけをねぢるやうにして片肱を突き箸を取るのであつたが、其姿勢を取る迄にも度々痛さを凌がねばならず、一度其姿勢を取つて後もどうかした機で忽ち患部に響いた。

「アイタヽヽヽヽアーアー。」

席上の人は皆驚いて彼を見るのであつた。彼の目からはいつもの通り涙が出て頬を傳うてゐた。が彼は其間も箸を取つて食ふ事は止めなかつた。

「又兄さんは食べ過ぎてあとで難儀をおしるのだ。」と妹は臺所で心配しながら闇汁の椀を盛りかへた。

「相變らずよく召上りますねえ。」と彼の鑄物師は盃を手に取り乍ら驚いたやうに言つた。鑄物師の膳には少し許り箸をつけた御馳走が大方もとの儘に並んでゐた。彼は酒飲みの酒許りを飲んで御馳走を食はぬことがいつも氣に食はなかつた。氣に食はぬといふよりも危つかしかつた。彼は自分の命は御馳走の爲めに持つてゐることをよく知つてゐた。これだけの業病でゐて、割合に衰弱の急速に來ないのは全く強い胃を持つてゐる爲めだと自分でも其點だけは頼母しく思つてゐた。彼は刺身でも白い刺身よりは赤い刺身を食はねばいかぬと主張した。總じて淡泊なものよりも濃厚なものを食はねばいかぬといふのが彼の口癖であつた。鑄物師のやうに酒許り飲んでゐて淡泊なものを少し許り舌に載せてゐるのなどは側目に見てゐても不安心で仕樣がなかつた。

其れからいつもの通りの御馳走論をしながら彼は容易に箸を捨てなかつた。箸から離れることは其日の快樂から離れるやうな心持がするのであつた。

果して妹の心配した通り、あとになると食ひ過ぎたと言つて苦んだ。けれども自分で苦みながらも、矢張り鑄物師初め酒飲みの小食の事が氣になつた。此鑄物師でもKでも兎角物に根氣の無いのは一に此濃厚な御馳走を食はないのに原因するものとしてゲープ〳〵言ひながら盛んに鑄物師を攻撃した。

「けれども此頃の僕のやうに御馳走を食つても何も仕事をしないのは申譯のない次第だけれども仕方がない。」と彼は歎息した。

其處に運ばれた柿に一番に手を出したのも彼であつた。胃が膨滿し過ぎた苦しみは尙全く去らぬのであつたが、其れに拘らず柿は一つや二つでは足りなかつた。

四

飮食會を終つてから彼は二三日物淋しい日を過ごした。ふと又思ひついて、それから一週間目にストーヴ据附祝といふ名義で、其ストーヴの寄附者である歌人や其他二三人を招いて又小會食を催した。

其晩の御馳走は主として手料理であつたが、

鹽が辛かつた。其れに拘らず彼は盛んに食つたので、其夜は滿腹の苦痛の上に、喉が渇いてたまらず蜜柑が食ひ度いと思ひついた。喉の渇く事は、苦痛であつたけれども其爲めに蜜柑を食ふといふ事は、其苦痛の中に僅かに探り當てた快樂の一つであつたのであるが、老母は斯う言つた。

「蜜柑は今無いで柿ではいかんかな。」

其れは普通の言葉であつたけれども彼にはいかにも冷やかな言葉のやうに聞えた。

「喉の渇く時に柿でなほると思つといでるのかや。蜜柑が無けれや買つておいでなさいや。」

彼はもう苛々して來て涙は瞼を溢れようとしてゐた。

「もう斯んなに遲いのに……」と老母は當惑した。時計はもう十一時を過ぎてゐた。根岸の夜は更け易くつて、もう戸を閉けてゐる家は一軒もあらうとは思へなかつた。更けた戸を叩いて僅か許りの買物をするといふ事は、つゝましやかな田舍氣質の老母には、さういふ時に、寢ぼけ聲を出して不精不精に品物を渡してくれる店の者の氣の毒さを思ふと、此夜もこれから買物に出掛ける勇氣はもうなかつた。「其れもお藥か何かなら仕方がないけれど、蜜柑位のものをこんなに遲く買ひに行くのもをかしい。」

「何故蜜柑を買ひに行くのがをかしいのぞや。藥屋に藥を買ひに行くのと水菓子屋へ蜜柑を買ひに行くのとどれ程違ふのぞや。」さう言ひ乍ら彼の涙はもう頰を傳うて流れてゐた。殊に蜜柑位と言つた老母の言葉が彼の心を搔亂つた。何で蜜柑位なものか。蜜柑がなけれや此渇きが止らぬのぢやないか。今の自分の爲めには百の藥よりも一つの蜜柑の方が大切ではないのか。……さう思つて來ると矢も楯も耐らなくなつて來た。腰の痛み迄が耐へられないやうに激しくなつて來た。聲を出して叫び度いやうな心持がして來た。

獨りで焦れて後に斯う言つた。

「其れでは鹽湯を拵へておくれなさい。」

「えゝ鹽湯をお飲みるのか。」と老母は狼狽し乍ら鹽湯を拵へた。

鹽湯は唯辛い許りであつた。少しも其れで喉の渇きが止まりさうにもなかつた。

「紅茶を持つておいでなさい。」

紅茶は先刻來客の時に入れた出がらしがあつた。其出がらしに砂糖を入れずに飲んだ。其れも唯澁い許りであつた。

「水を持つておいでなさい。」

「えゝ、水てて生水かな。」

「さうよ。水といや生水に極つとるぢやありませんか。」

老母が愈々狼狽し乍ら持つて來た水を彼はがぶがぶと飲んだ。

五

煙突は毎日のやうに煙を吐いた。彼は病室に縮かまつて目許り光らせてゐる日も多かつた。

いろ／＼の事が氣になつた。枕許に置いてある火鉢がどうしても心配でならなかつた。座敷を通る人と其火鉢とは大分距離があるのだけれども、其れでも其人が其火鉢に躓きさうに思はれて仕方がなかつた。時としては其火鉢が机の下に置いてあることがあつた。其時其火鉢に火の無いことは承知してゐながらも、萬一其れに炭火が殘つてゐて其爲めに机の下側が焦げはしないだらうかと其れが心配で仕方がなかつた。

ラムプの影が天井に映つてゐる、其れが又あぶなつかしくて仕方がなかつた。其ホヤの形なりに丸く大きく天井に映つてゐる火影の中から赤い焔がちら／＼と舌を出しはしないだらうかと思ひ出すと遣瀨もなく恐ろしかつた。

彼は或時Kに斯んな事を言つた。
「今、西亞が大擧して日本に押し寄せて來るといふ事を考へて見ると其れは恐ろしいには相違ないが、併し人が其處の敷居に躓いて自分の上に倒れかゝつて來るといふ事を考へると、それは其露西亞の使人よりも數層倍恐ろしいな。さういふ事を考へ出すと此處にぢつとしてかうして居ることが出來ないやうな心持がする。それを妹や母は平氣で其邊を歩くのだものな。危つかしくて／＼此方は冷や／＼してゐるのだけれども一向其邊にお氣が附かれんのよ。」
Kは何んと答へていゝか判らなかつた。唯其時のおど／＼してゐる彼の目を心配さうに凝視するより外はなかつた。
彼の氣にかゝるのはさういふ事許りではなかつた。Kだとか鑄物師だとかいふやうな感情的な、意思の薄弱な人間のすることが一々危つかしくて仕方がなかつた。Kの方は意外に世間的なところがあつて、此頃は反感を起す事すら少なくないのであつたが、其れに拘らず矢張り氣になる許りであつた。殊に鑄物師の近狀は聞けば聞く程心配でたまらなかつた。彼は續けさまに二三本の手紙を書いて鑄物師の許に送つた。
彼は嘗て祇園坊を哭れた事のある歌人の事も氣になつた。其れは主として健康の事であつた。其歌人もストーヴの石炭の奉加帳に加はつた一人であつたので、据附祝の時に來たのであつたが、其時已に不健康の模樣は十分に見えてゐた。彼は次のやうな手紙を書いて送つた。
……今後寒中は夜氣に當らぬやう御用心可被成候。且つ又氣分を落著けて言語擧動とも可成靜かに被成候はねばやりそこなひなしと申されず候。
熱あれば寢るべし
息迫る時は靜まるべし
寒ければ火を焚くべし
精神活潑なるべし
但し煩悶すべからず
道樂は適宜なるべし
但し分別を失ふべからず」
彼はそんな風に周圍のあらゆる事が氣になりながら、消え殘つた火種のやうな淋しい自分の命をもてあつかつてゐた。

第十六回　命（續）

一

「どうして今日を暮らさうか。」
斯ういふ問題は每日のやうに起つた。
彼は此頃一日も缺かさずに新聞に原稿を送つてゐた。其れは一月の末からであつた。年はいつの間にか改まつてゐたのであつた。今はこれが彼の每日の唯一の慰藉でもあり生命でもあつた。其れは「墨汁一滴」といふ名前であつた。
所が或日其原稿がどういふものか新聞に載つてゐなかつた。彼は自分の神經が俄かに狂ひ出しさうになつて來た事を意識した。
「さあ大變だ。」と思つた。
「どうしよう。」と覺えず獨言を言つた。
「どうおしたのぞ。」と妹は心配さうに彼の顏を見た。
「大變だ。」と彼は益々自分の神經の變になつて來るのを不安に思つた。「墨汁一滴が出てゐない。」
「何か新聞社の都合があつたのであろ。」と妹はせん方無さうに言つた。
「えゝ都合があつた？　新聞社に都合があつた？」と彼は聲を震はし乍ら言つた。「そんな事を言つてくれるな、そんな冷淡な事を。さういふ事を言つてくれると益々大變になつて來る。」と彼は目の色を變へて妹を見た。

ふと氣が附いて見ると世の中の物音が絶えてしまつたやうにひつそりとしてゐた。妹も默り彼も默つてゐたのであつた。

其物靜かさが又彼に不安を與へた。彼は救ひを求めるやうな眼をして妹を見たが、妹は眼を膝の上に落した儘でゐた。

「さあどうしよう。」と彼は自問した。

卷紙を取上げた。筆を取上げた。仰臥しながら一本の手紙を書いた。それは其新聞の社員である彼の門下生に宛てたものであつた。其れには次のやうな意味の事を書いた。

一今日の新聞に黒汁一滴の出てゐないといふ事は僕に取つて大事件だ。斯う言つた許りでは君等には判らないかも知らぬが、あれの出てゐない日は僕の生命の無い日のやうな心持がする。君等が見たら誠につまらぬ短文字に過ぎないだらうから、紙面の都合で一日や二日載せぬ位の事は何でもなからうが、どうして〳〵僕に取つては新聞の發行停止よりも大事件だ。今僕は其爲めに少し氣が變になつてゐる。不安の空氣が世界に充滿してゐる。其處で僕は今斯ういふ事を考へてゐる。僕の文章を出す紙面が無かつたら欄外でもいゝ。が一層廣告欄でもいゝと思ふ。尤も廣告欄となると一行幾らの規定通りの廣告料を拂はねばならぬのはいふ迄もないことで、其金が僕にあるか無いかも考へなければならぬが、實は今は其れ處ではないのである。さういふ事は他日の問題として、兎も角一日も缺かさずに出す爲めに、紙面の都合の附かぬ時は廣告欄に出して貰はうかと思ひついたのである。何廣告料を廉くでもしてくれるといふ事なら毎日廣告欄に出してもいゝ。今さういふ事を思ひついたから兎に角君に迄言つて遣る。これだけ手紙を書いたので少しは神經がをさまりかゝつて來さうだ。」

老母は早速其手紙を持つて車屋迄行つた。今日の新聞を編輯した年の若い男は其手紙の話を聞いて苦笑してゐた。早口で甲高な調子の聲を出す編輯長は斯う言つた。

「可哀さうに、毎日出すことにして遣れ。」

二

「墨汁一滴」にはさま〴〵の記事があつた。自分の日常の事を記したり、社會上文學上に就いての意見を陳べたり、其日々〳〵の氣分の赴く處に任じて筆を執るのであつた。が、時として興に乘ると或一つの題目に就いて連日筆を執ることもあつた。萬葉の研究者であり萬葉調の歌人である備前の人平賀元義に就いての研究などは十日以上に渉つた。

時としては一日の分量が相當に多いことがあつた。新聞として他に重要な記事のある場合にも休載せぬ事に極めた此原稿を載せる爲めに其重要な記事も短くつゞめねばならぬといふやうな場合もあつた。彼の病氣や其他に就いて親しみのない、此頃這入つた社員などは、此原稿を厄介物にした。

一今日は短くつて助かつた。などと言つた。

彼は少しでも長い方が、翌日其文章の出てゐる新聞を取上げた時に力強い自分を見出したやうな心持がするのであつたが、紙面の都合を慮かつて短くつて濟ます日の方が多かつた。又病苦のはげしい日などは止むを得ず二三行で濟ますこともあつた。

其止むを得ず二三行で濟ました日の新聞は手に取るのが悲しかつた。

其文章に就いて手紙をくれる人もあつた。殊に彼の病苦の一端を洩らした記事などに就いては、彼を慰藉すると同時に宗教を信じろなどと

言つて來るものもあつた。其等が時とすると彼の癇癪に障つて、彼は直ちに翌日の紙面で、其宗教家に當てこすつた。

彼は此頃だん〳〵と自分の情を矯めることの出來なくなつて來た事を知つてゐた。ふと氣がついて見ると、其れは餘程極端に迄行つてゐるやうに思つた。さう氣が附くと此「墨汁一滴」のやうな新聞紙上に公にする文章には其れを控へねばならぬと思つた。我慢しかねて當てこすつた文章などは翌日其れを見る時にいゝ心持はしなかつた。

が、しかし其我慢のし切れない場合がだんだんと多くなつて來た。翌日其新聞を見た時に厭な心持のする事は十分承知しながらも我慢がし切れないのであつた。

「墨汁一滴」は其年の七月迄續いた。其夏の暑さは遂に彼に筆を投ぜしめた。彼は毎日詰らぬ顏をして新聞を見た。自分の影の映らぬ鏡を取上げたやうな心持であつた。

病苦は日を追うて激しくなつて來る許りであつた。どうして此夏を過ごしたものかと考へると、今日生きてゐるといふ事が恐ろしかつた。が、死ぬるといふ事は尚恐ろしかつた。どうしたらいゝのか判らなかつた。矢張り苦痛の中に何事をかをせねば其日が過ごせないのであつた。

彼は美濃版の半紙を綴ぢたものを座右に置いた。今度は「墨汁一滴」のやうな公開的なものでなくて、誰に見せるといふでもなく唯漫然と筆を執ることにせうと思ひ立つた。

漸く其れに筆を執り始めたのは九月に入つてからであつた。彼は其れに「仰臥漫録」と題した。

三

彼は此頃は毎日載せる新聞の俳句の選をする事は止めてゐた。——其れは門下生の一人に任してゐた——其代り一週間に一度週報といふ名で出る附錄の上には必ず缺かさずに自分の選句を載せることにしてゐた。此頃は其俳句を見ることが餘程の大事業であつた。其れも期日が迫つて來て一息に見る時などは目が痛くなつて、其あとでは目をあけてものを見ることが出來ず、新聞などは妹に讀ませたりした。

「そんなに御難儀でしたら、其週報の選句も他人にお任せになつてはいかゞです。」と一人の男は言つた。

彼は其言葉を聞いた時に泣きさうな顏をして何んとも言はなかつた。其週報の投句は其程澤山といふでもなく、彼が毎日のやうに新聞に出す爲めに選んでゐた以前の句數に比べると非常な少數であつたのであるが、其れでも其れを選んで居るといふ處に僅かに自分の俳句の生命を繋いでゐるものとして彼は苦痛を忍んで遣り來つたのであるが、其れも止めてはどうかと言はれたことは、お前の俳句の生命を斷つてはどうかと言はれたやうに彼には解釋されたのであつた。

餘所目には彼はつとめて仕事をしてつとめて苦んでゐるやうに見えた。それだけの事をしなければ生甲斐がないやうに思ふ彼の心持に同情するものは澤山無かつた。

Kは去年の暮に二番目の子が出來て愈〻家庭の方に心を牽かれつゝあつた。凡ての計畫が、皆家庭本位から來てゐるやうに多くの人の目には映つた。例へば雜誌の經營にしたところが俳句の爲めにやるとか、團體の爲めにやるとかいふ傾向はだん〳〵少なくなつて來て、衣食の爲めに營利的にやるといふやうな傾向の見えて來る事が著しくなつて來た。其れに近來は雜誌よりも出版事業の方がより多くKの心を牽きつゝあるやうに他人には推量された。其等は凡て彼に取つて愉快なことではなかつた。

其れが最近に於いて十六圓の家賃の家に引越したといふ事が殊に彼の惡感をそゝつた。彼は九月十八日の漫錄中に次の如く書いた。

「午後K來る。晩餐を食うて歸る。Kは九段坂上に轉居せり。家新らし。家賃十六圓なりと。」

其れから其翌日の十九日の記事中に左の一項があつた。

「家賃くらべ

K(九段上)十六圓　何某(番町)九圓　何某(猿樂町)七圓五十錢　何某(淺草町)五圓十五錢　何某何某同居(上野涼泉院)二圓五十錢　吾廬(上根岸)六圓五十錢」

倘其他二三人の知人の名も列してあつた。其れから又續いて斯ういふ記事があつた。

「自分は一つの梅干を二度にも三度にも食ふ。其れでもまだ捨てるのが惜しい。梅干の核は幾度迄はぶつても何ほ酸味を帶びて居る。それをはきだめに捨ててしまふといふのが如何にも惜しくてたまらぬ。」

「仰臥漫錄」は始終彼の枕頭に在つたので來訪者はよく手に取つて見た。此家賃くらべは殊に人の眼を牽いた。

「これは面白い。」と言つて皆痛快さうに笑つた。Kは獨り笑はなかつた。

四

Kは家族の增して來る上に出版の事業も擴大されるに就いて十六圓位の家賃の家に住居することを何んでもないことのやうに考へてゐた。其爲めに此「仰臥漫錄」を見た時は唯厭な心持がした。斯ういふ事を問題にする彼を憎むやうな考さへ起つた。

「何故に、KはKなりに發達せしめよう、といふさういふ自由なのんびりした考を彼は持たないのであらう。」と思つた。

それ以來門下生の多くはKを殷鑑にして成るべく目立たしい生活などはせぬやうにと心掛けるらしかつた。それがKには反感を起させた。

「自分は自分の道を拓かう。其他に道は無い。」

Kは獨り心の中で呟いた。

けれどもKの弱い心はすぐ彼から背き去る程の勇氣も無かつた。のみならず親しく彼の枕頭に坐して見ると恰も子が親から離れることの出來ぬやうな、少なくとも弟が兄から離れる事の出來ぬやうな或物があることを意識せずにはゐられなかつた。

「仰臥漫錄」には其れから十日許り經つて又斯んな記事があつた。

「母廣德寺前にて野菜石竹等の種五六袋買うて歸らる。(野菜は余の所望なり)おみやげ燒栗一袋(十個入二錢)は上野廣小路六阿彌陀へ參られし歸り門前の茶店にて求められたりと。余、何故に、もすこし多く買はざるかと問へば、餘り高き故なりと。

東京の婦女子時に神社佛閣參りなどと稱へて出歩行くは多く料理屋にて飯くふか、少なくも蕎麥屋汁粉屋位のおごりはするなり。手土産を持ち歸るはいふ迄もなし。田舍者はさる贅澤を知らず、內の者などたまたま出歩行くも淺草ならば仲店を見物して一錢か二錢の花簪一二本買ふ位に過ぎず、其簪何にすると問へば隣の誰それに送るなりと。そんな簪わざわざ三百里の道を送らずとも國にもいくらもあるべしといへば、さにあらず、江戶土產といへば善惡に拘らずうれしきこと子供の時覺えありとやさしき心がけ、生活の程度はまだこんなものなり。」

Kは此記事も讀んだ。斯る生活に對する尊敬の念は起らぬではなかつた。が、凡ての人が斯ういふ生活をしなければならぬ、といふ考は

どうしても起らなかつた。
　K自身に關する記事は大概Kには面白くなかつた。「仰臥漫錄」は殆どKに對する彼の不平を洩らす爲めの記錄ではないかと思ふやうな心持さへした。けれどもそんな心持をして「仰臥漫錄」に對するものはK許りではなかつた。多くの門下生は皆氣味惡がりながら其れに對したのであつた。さうして自分の事を言はれたのでなくつても、さういふ解釋の出來る事に遭遇すると厭な顏をした。

五

「そんなにおしると皺がよつて工合が惡い。」と妹は言つた。
「一寸お待ち。」
　Kはさう言つて强ひて妹の手を止めさせて、自分の横腹を見た。妹は彼が其處を見る事を嫌つたのであつた。其處は眞黑になつてゐて遠からず又口を開くことは疑ふことが出來なかつた。
「こんなに黑くなつてゐるのかい。」と彼は憮然として言つた。「もう腐つてしまつてゐるのだね。」
　妹は默つてゐた。
　彼は「仰臥漫錄」に次の如く書いた。
「一兩日來腸骨のところいつもより痛み强くなりし故、繃帶取替の時一寸見るに眞黑になりて腐り居るなり。定めて又穴のあくことならんと思はる。捨て果てた體どうならうとも構はぬことなれども又穴があくかと思へば餘りいゝ心持はせず。この事氣にかゝりながら午飯を食ひしに飯もいつもの如くうまからず、食ひながら時々涙ぐむ。」
　腐敗した部分の皮がガーゼに附著して取れたのは其れから二三日しての事であつた。彼は暫くの間聲を放つて泣いた。涙はとめどもなく流れた。
　此頃は逆上が激しくつて新聞を見ることが出來なかつた。新聞も見ずにぢつと考へてゐると愈〻死の迫つて來てゐることが意識された。「切めて御馳走でも食ひ度い。」と思つた。いくら考へても其外に希望はなかつた。
「御馳走を食ふだけの金が欲しい。」と思つた。其等に關聯して頭に上つて來るものは例によつてKの事であつた。H雜誌の事であつた。
　或日の事であつた。世間はひつそりとして臺所に時々幽かな物音が聞えるばかりの時であつた。彼はふと自分の精神の止めどもなく激昂して來るのを覺えた。遂にこらへ切れなくなつて聲を放つて叫びはじめた。
「アヽ、たまらん〳〵、これやたまらん。馬鹿野郎。畜生。アンポン丹。アヽ、……」
　彼はさう叫び乍ら手を顏の前に翳し其れを痙攣的に震はした。
　母や妹は驚いて其れを慰めようとしたけれども何か言へばいふ程益〻激昂せしめるので仕方なしに唯眺めてゐた。
　同じやうな狀態は翌日も續いた。
　其日はH雜誌についての茶話會を開くといふ通知が二三日前から來てゐたので、K初め主な關係者の二三人が來た。Kは神田の風月堂の西洋菓子を持つて來た。其他の人々も其れ其れ食物の土産を持つて來た。
　そんな事の爲めに彼の激昂も稍沈まつたが皆彼の不穩の狀態に氣兼して茶話會の方の事はたいした話も無かつた。
　H雜誌について主として經濟上の問題について――此頃彼初め同人の多くから益〻惡感を買ひつゝある事をKは知つてゐた。若しさういふ問題が具體的に起つて來たらKはH雜誌から身を退くより外に方法はないと思つてゐた。
　此日茶話會といふ名義で招集されたところのも

のが其邊の問題に觸れるのであつたら、Kは其決心を話す積りで居たのであつたが、少しもさういふ問題には立入らなかつた。

第十七回　小葛藤

一

彼の逆上は其後も時々發作的に起つた。さういふ時はいつも聲を放つて號泣した。

Kは凡そ一月の間に二度の不幸に出逢つた。彼の下宿屋を營んでゐた兄はチブスのあとが腹膜炎になつて八月の末に赤十字病院で死んだ。又十月の初めには細君の母が胃病の爲め大學病院で死んだ。其等の爲め彼を訪ねることも少なく、且つ雜誌や出版の仕事に追はれて多忙な日を過ごしてゐた。

自分の家許りでなく親戚の生活上の問題に迄頭をなやまさねばならなくなつて來たといふ事がKには重荷であつた。其れよりも雜誌の經濟上の事が彼や彼の門下生の仲間で兎角問題になつてゐることが、より多くKを苦しめた。

けれども又斯ういふ事をKは他の俳人の一人から聞いた。

或時二三の俳人はNの許に集つて雜誌の噂をした。其節一人は斯う言つた。

「Kは雜誌をやることに多少いや氣がさしてゐるらしい。Kはあれで自分の生活費を得ようとしてゐる爲めに苦しい立場に立たなければならぬのだから、寧そあれを團體のものにしてしまつたらどうであらう。さうして編輯はめいめいで代つてしたらどうであらう。」

他の俳人は皆之に贊成したがNは獨り贊成しなかつた。Nは其時斯う言つた。

「Kにはいろ〳〵缺點もあるけれど、併し矢張りKでなけれや雜誌は遣つて行けないよ。」

其一言で他の俳人達は皆默つてしまつた。……

と斯ういふ事を聞いた時Kは又深い考に沈んだ。

彼の病床には天井から紐がぶら下つてゐた。それは其紐に手を掛けて寢がへりなどをするので力綱と呼んでゐたが、此頃其紐に一つの財布がくゝりつけてあつた。其中には二圓の金が這入つてゐた。

其金は御馳走を食ふ爲めの金であつた。

「切めて御馳走でも食ひ度い。」といふ考は絶えず起つてゐたのであつたが其御馳走代がなかつた。

「書物でも賣らうかと思つとる。」といふやうなことを彼はKや其他のものにも話した。

「そんなにおしいでも少々位の金ならどうかしようわい。」とKは言つた。

其時彼は不愉快さうな顏をして默つてゐた。けれども其後兎も角二十圓だけの金をKは御馳走代として彼に提供することを申し出た。

「其れでは其れだけ借りることにしようか。借りると言つたところで返す當もないけれども……」

其處で十圓餘りの金は一月許りのうちに御馳走代に代へられた。

其話を聞いて彼の祇園坊をくれた歌人は新しい更紗の財布の中に二圓の金を入れて彼の許に持つて來た。

「失禮ですけれども御馳走代として持つてまゐりましたから……」

彼は其好意を感謝をし乍ら其れを受取つたけれども餘り愉快さうな顏はしなかつた。Kから二十圓の金を借りた時と同じやうに。

彼は「仰臥漫錄」に斯ういふ意味の事を書いた。

「此頃中江兆民は一年有半といふ書物を著して四版五版を重ねて居る。其れは醫師から今後の命が一年半しかないといふことを言はれたといふ事を發表して世間の同情を

贏ち得たのである。余は此頃病苦を訴へてK等から御馳走代をせしめつゝある。いづれも病氣を賣物にする點は同じことで卑しむべきである。」

二

其年の暮にKは愈〻出版事業の方に一歩を進めてK堂といふ堂名まで附け其事業は全くH雜誌と分離し、H雜誌の編輯の方は、嘗てからKを補けて編輯に携はつて來た俳人に一任することにした。其上三四人の主な俳人を社員にして、其等の人々に若干の給料を支出することにした。經濟上の事は矢張りKが處理してゐたけれども其れでも利益の多くは其等の人の給料とするやうにした。さうしてK自身の生活費は主として出版事業の方で得るやうに努力した。

それで人々の非難は免れ得ることと思つてゐたところ、又別の非難が起つて來た。其れは、

「Kは商賣に身が入り過ぎて俳句が下手になつた。」といふことであつた。

「其れは仕方がない。」とKは思つた。が、何故に人々は自分の事業を成功させようとしないで、動ともすると氣勢をくじかすやうなことばかり言ふのであらうと不平であつた。

「自分の注意も努力も主として出版事業の方に向いてゐるのだもの、それだけ俳句なり文章なりの方に疎くなるのは當然の事である。が、俳句が下手になつたと、態〻言ひふらされることは苦痛である。」

Kは不愉快な顏をして其等の人と出逢つてゐた。

或日Kの友人の許で支那の重慶に駐在してゐる一人の武官に出逢つた。其友人も參謀本部にゐる軍人でさうして俳句を作る男であつた。其友人と久しぶりで歸朝した武官との間には頻りに支那問題が論ぜられてゐた。Kも牛肉をつついたり盃を銜んだりしながら默つて其話を聞いてゐた。

其武官は斯う言つた。

「誰か雜貨を持つて重慶に遣つて來る男はあるまいか。まだ重慶に這入つてゐる日本の雜貨といふものは極めて稀なのだからマッチ一箱でも大變な値段なのだ。さう澤山の資本は入らない。勇氣さへあれば出來る仕事だから書生上りの奴に遣る奴があつたら勸めて見度いと思つとる。誰かあるまいか。」

友人は顋を撫でながら默つてゐたが、それは頗るKの心を動かして、

「重慶に行くのは何日位かゝるのです。」などといふ質問を發したりした。

武官は、重慶はもと蜀の成都だから交通は便利とは言へない、日本の雜貨の容易に這入らないといふのも其爲めであるが不便だと言つたところで何處々々迄は揚子江を溯ることが出來るし、其あとは斯うすればいゝ、別にさう恐れる程の行路でもない……といふやうな事を勢ひのいゝ言葉で說明した末斯う言つた。

「君どうです遣つて見ませんか。僕が出來るだけの便宜は與へます。內地でぐづ〱した仕事をしてゐるよりは面白いですよ」

Kは無造作に答へた。

「ことによれば遣つて見てもようございますね。どういふ雜貨が向うで受けるといふやうなことは判つてゐるでせうね。」

「其れはちやんと取調べてあります。」

其れから蜀の棧道の話などが出た。

Kの頭には其時から支那といふ二字が離れなくなつた。

「斯んな窮屈な小天地で氣煩ばかりしてゐるよりも一つ支那にでも出掛けて見ようか。」

何んだか體の中に潛んでゐた冒險好きの祖先の血液が急に目覺めて來たやうな心持がした。

「さういふ便宜がある以上取敢ず重慶を選んでもいゝ。」

Kは二三の俳人に其事を話した。其等の俳人は何んとも言はずに唯其顔を見詰めてゐた。

三

殆ど其れと同時であつた、H雑誌の上に「俳諧評判記」といふものが公にされた。其れはKは少しも知らなかつた事で、唯雑誌が出來て後初めて讀んだのであつた。其れは彼の枕頭で三四の俳人の間に評判された事を筆記するといふ前置で、其筆記者の名前は「同人數名」としてあつた。さうして一番に斯うあつた。

〇Kは近頃妙なわからない句を取るが、其れもよいとした所で、商賣に身が入つて、句作の方は大方お留守だ。其句を見給へ、句作が下手になつたと言はれても致方がない。

これは豫ゝ評判されてゐることで、初耳といふ譯ではなかつたけれども、所謂自分の雑誌――其編輯は他の俳人によつてなされつゝある現在に在つてすらも――と思つてゐるものに自分の惡口の載つてゐることを不滿足に思つた。其れに此一項許りでなく、其他にも斯ういふ記事があつた。

〇Kの或雑誌に出てゐる句評といふものは筆者の惡いせゐかも知らぬが其口調がいかにも宗匠地味とる。それではいきませんねえと來るからなあ。

又最後に繰返して斯ういふ事が言つてあつた。

〇某は醫者四分俳諧六分。某は法學生三分五厘俳諧師三分五厘歌よみ三分。Kは俳諧師四分七厘商賣人五分三厘。

地方雑誌の記者が上京の序によい加減に筆記したものを捉まへて問題にしたり、俳諧師四分七厘商賣人五分三厘と言つたりする事も決して筆記者の態度を眞面目と解釋する事は出來なかつた。

Kが此「俳諧評判記」を讀んで大分不平を抱いてゐるといふ事が早くも彼の耳に傳はつた。それと前後しての例の重慶問題も亦病床に聞えた。

「俳諧評判記」を讀んで大方の人は笑つたが、矢張りK同樣に非難――寧ろ嘲笑――の材料になつてゐる一人の俳人は非常に憤慨して長い手紙をKのところによこした。それは主として其筆記者である――現在雑誌を編輯しつゝある――俳人に對する惡感で、自分は今後斷然其男を敵として立たうと思ふ、今まで其男の言行が癪に障つたことも一再ではなかつたが、其れはこらへにこらへて來た、今度の評判記だけは我慢が出來ぬ……とさういふ意味のことを書いて來た。

Kは自分の不平も不平であつたが、病の重い彼を前に置いて、門下生の間に爭ひの生ずることは好ましいこととも考へられなかつたので、どうしても自分の立場として其俳人を慰撫せなければならぬやうに思つた。

Kが親しく其俳人に逢つたことによつて其俳人の感情は大分和らげられたやうであつた。

「君に心配をかけてはすまないから僕ももう一度我慢することにせう。心配しないでくれたまへ。」

其俳人を慰撫し得たといふ事がK自身には愉快なことに思はれて、其爲めに自分の不平は却つて薄らぐやうな心持がした。

ところが其翌朝であつた。Kは彼から一封の手紙を受取つた。此頃は打絶えて受取つたことのない彼の手紙をKは珍らしさうに眺め乍ら開封した。

四

開封して見ると一々色の變つた四五枚の詩箋に字劃の正しい文字で――彼は此頃になつて殊

に文字の劃を正しく書いた——書信文が認めてあつた。其れは斯ういふ意味の事であつた。

「此頃傳聞するところによると俳諧評判記がお氣に障つた由、あれは執筆者の罪も幾らか無いではないが併し其責任は自分が背負ふ。此頃自分は俳句界の事情に疎いけれども、其れでも枕頭でいろんな噂を聞くと其れが氣になる。纏つた意見を發表する勇氣は固より無いから、其枕頭での噂を筆記させて雜誌の埋草にし幾らか警策ともし度いと思つたのであつた。其れが貴兄等の怒りを買つたことは甚だ不本意である。が全く自分の不德として慚愧に堪へない次第である。こゝに謝罪の意味で此手紙を認める。もう自分の命も旦夕を計られないのであるが、其れでゐて、此頃は萬事皆非なりといふやうな感じがして頗る不愉快である。」

Kは其れを讀み乍ら今迄に覺えない不思議な心持に鎖された。堪へることの出來ない不快が胸許からこみ上げて來た。

「俳諧評判記に對する不平は親に對する不平、兄弟に對する不平のやうなものである。親なり兄なりの言としては餘りに輕薄で不親切であるといふのが自分許りでなく一般の不平を買つた理由ではあるまいか。其點の責任は主として筆記者の筆の上すべりのして轉はずみである點に在る事はいふ迄もない。現に一人の俳人の如きもNを怨む容子は少しも無く、唯其筆記者たる俳人のみを怒つてゐるのである。自分にしたところで同じことである。」

Kは自分の「俳諧評判記」に對する不平を自分で斯う解釋した。さうして其れに對してNから謝罪手紙のやうなものを受取つたことは意外なことであつて、何んだか多少當てこすられたやうな心持もした。が、一番厭に思つたことは、子が親から——若くは弟が兄から——謝罪文を受取つた時には斯んな感じもするであらうといふやうな心持のしたことであつた。子供らしく弟らしく駄々をこねてゐる時に、惡かつたからこらへてくれと親なり兄なりから改まつて謝罪されるといふ事が、其れが勝利といふものであらうか。親や兄に謝罪したといふ事は何んの誇にもならぬばかりか、唯不愉快な固りが腹の底からこみあげて來る許りであつた。

「厭だ〳〵。馬鹿々々しい。」

Kは其手紙を二つに破つた。まだ手紙らしい形の殘つてゐるのが目障りなので、更に其れを十にも二十にも破り棄てて、唯赤や青や黃色の埃にしてしまつた。

Kは十八の年に初めて彼から受取つた以來今日迄の彼の手紙を悉く筐底に保存してゐた。葉書一枚も反古にはしなかつた。彼の手紙を破り棄てたのは此時が初めてで又終りであつた。

「俳諧評判記」は每號連載する計畫であつたけれども此ごた〳〵の爲め一號切りで中止することになつた。Nの枕頭でもKの家でも其後其れを話題にする者はあまり無かつた。其後其れが彼に逢つた時も其事に就いては多言しなかつた。唯斯んな會話を交換した許りであつた。

「此間は……あんな手紙を貰つて恐縮した。」

「……」

「近頃はどんな鹽梅ぞな。」

「近頃は何も彼も不愉快でな。」

「……」

五

何んとなく打解けられないやうな不愉快な心持がNとKとの間にあつた。「俳諧評判記」の問題にはそうつとして障らずに置かうとするやうな努力が雙方に在つた。けれども、

「情をためる事が出來なくなつた。」と彼自身で言明するやうに、彼は其內心の不平を默つてぢ

つと抑へ附けてゐることは出來なかつた。彼はよくKの前で聲を放つて叫んだ。

「だめだ〳〵。愈〻駄目だ。あゝ苦しい。たまらない。」

さういふ時には涙がいつも流れた。

「藥を持つておいで。」

しまひにはさう言つた。其れは鎭痛劑としてモヒを用ゐるのであつたが、其結果は酒に醉つたやうに多少の愉快を覺えた。

「此藥もな、なるべく飲むまいとして我慢してゐるのだけれど、だん〳〵とこれが戀しくなつて來てな。」

老母の持つて來た藥を目の前に置いた儘彼はなか〳〵其れを手に取らぬ事もあつた。

「目の前に在るとまあ安心だ。一分間でも我慢しよう。」

藥を飲んだあとでは面白さうに話をすることもあつた。が、それは俳句の話でも雜誌の話でも出版の話でもなかつた。大方世間話であつた。さういふ話題をつとめて選ぶところに多少の苦痛が伴つた。

が、面白さうに世間話をする時は實際Nも愉快さうであつた。Kも苦痛の叫びを聞かずに、縱ひ短時間でも靜平で居る彼を見る事を祝福せずにはゐられなかつた。或時話題に困つた時に、Kは例の重慶談を持出した。自分が行くとか行かぬとかいふ事に就いては何も言はなかつたが彼の武官から聞いた話は大方話した。

彼は默つて聞いてゐた。他の話よりも其事に就いては格別に熱を持つて話してゐるKの顏を時々注視しながら。

其れから二三日して彼の「俳諧評判記」を執筆した俳人が來て斯んな事を話した。

「Nさんが大分心配しといでるぞな。……の重慶談は前にも人を通して聞いた事はあつた。餘り氣にも留めてゐなかつたが、今度初めて、K自身から聞いて驚いた。あれは本氣かも知れない。思ひ立つと何んな事でも遣り兼ねない人間だから困つたものだ。重慶行もいゝかも知らんが、實は今Kに重慶にでも行かれると困るのは私だからな。もう長くはないのだから行くにしても私が死んで後にしてもらひ度いものだ。……そんな事を言つておいでたぞな。非常に心細さうであつた。眞逆行きもすまい、と私は笑つて置いたけれど、お前も行つて何んとか言つときよ。」

Kは此話を聞いた時、此頃何かにつけて自分に對し不快の感を持つてゐる如く考へられつゝあつたNが、其程迄に自分を賴りにしてゐるのかと思ふと、稍意外の感に打たれざるを得なかつた。此上更に不愉快な問題にぶつつかつたらさつさと足を洗つて違つた方面に新しい世の中を見出さうと思うてゐた考も鈍らざるを得なかつた。

重慶談も其後はそうつとして觸れないやうにして置く問題の一つであつた。

第十八回　介抱

一

Kと雜誌を編輯してゐる俳人とストーヴを寄附した歌人との三人は此頃一日代りにNを訪ふ事になつた。其れは彼の病苦がだん〳〵激しくなつて來て老母や妹許りの介抱では其日が過ごせぬので、此三人が代り番こに看病に來る事になつたのであつた。

彼は小さいボールの空箱の中から綿を取出してそれを口中に入れ、暫くの間齦を抑へては其れを小さい壺の中に投け込みつゝあつた。それは此頃齦が腫れてところ〳〵から膿が出るのを綿で拭き取るのであつた。

「齦までが腐るのだからな。」と彼はKを顧みて泣きさうな顏をした。Kは其れに答へる言葉を

見出さなかつた。
「おい。」と彼は妹を呼んだ。「あのカナリヤを何處か外へ遣つておくれ。どうも此間からあの鳴聲が耳について仕方がない。」
「え、あのカナリヤの鳴聲がな？」とKは訝しさうに言つた。それは別に騷々しい聲とも覺えなかつたが、――殊に今迄は其鳴聲が病床の慰めの一つであつたのだが――其れさへ蒼蠅く感ずるやうになつたのかと思ふと、氣の毒といふよりも、寧ろ或恐怖に近いやうな不安な感じをKは起した。
「此間も母に言つたことだがな……」と彼は暫くしてから父Kに話しかけた。
「斯うやつて臥つてゐると、其處に坐つてゐる人が大きい人だとなんだか上から壓迫されるやうな心持がして苦しくつて仕方がないが、お前みたやうな身體の小さい人はさういふ感じが無くつていゝよ。」
ストーヴの歌人は體格の大きい男であつた。
彼は主として其れと比較して話すやうであつた。Kは自分の小さい體格がそんな點に取柄がある事ををかしく思つて唯聞いてゐた。
後に其話を聞いて雜誌を編輯してゐる俳人は笑ひ乍ら言つた。
「其れはNさんがKが好きなんだよ。身體が大きいとか小さいとかいふのは口實に過ぎないのだ。」
果してさうだらうかとKは考へ込んだ。
此三人のほかに病床に見舞に來る人も少なくはなかつた。が其等の人が來たところで矢張り其日の當番である介抱役の一人が來ないと彼は物足りなかつた。殊に動ともすると遲刻勝であるKは彼を焦らさせた。
「Kさんが遲いこと。」と老母や妹も口には出さないが心の裡で呟いて彼の機嫌を心配した。
別に時間を極めて置くわけではないけれども、其れでも凡そ極つた時間に他の二人は來るのであつたがK許りは兎角遲れ勝ちであつた。其れに拘らず、今日がKの當番の日だと思ふと、一層其れを待兼ねるやうな心持が彼に在つた。
或日彼はふと横腹の穴を見た。大方其位の穴であらうと想像してゐたのよりも遙かに大きい穴であつた。穴といふよりも伽藍堂であつた。
彼は暫くの間獨りで泣いてゐた。
其日もKの來ることが遲かつた。彼の涙は止まらなかつた。

二

時によるとKの家主のうちの電話が慌しく鳴つて其れがKへの用事であることもあつた。さうして其用事といふのは大概彼の家からであつた。
「お電話ですよ。」と家主の女中は裏口から大きな聲をした。
Kが電話口に出ると、彼の介抱に來てゐる俳人などの聲で、少し容體が惡いやうだから至急來てくれといふ狼狽へた聲が聞えるのであつた。
或日又さういふ電話がかゝつたので、細君はKの出先を尋ね廻つて其事を報知した。Kが根岸へ駈けつけたのは電話がかゝつてから二三時間も經つてであつた。
Kはさういふ時いつも恐る〳〵表の戸を開けた。其戸を開ける音が病床の彼には大問題になつてゐるのであつた。少し荒々しい開けやうでもすると其れだけで彼の癇癪は破裂した。
其れのみでなく、其戸を開けた時一番にKの耳に響いて來る物音がKの心を騷がした。其れが普通に聞ゆる彼の咳などである場合は其程でもなかつたが「アーアーアー。」といふやうな泣聲ともつかず、うめき聲ともつかぬやうな氣味の惡い聲であつた時はKの全身は引締るのであつた。此日も其聲を待設けつゝ一歩を門内に踏

み入れたのであつたが、意外にもひつそりとして何んの物音もしなかつた。殆ど死の境界であるやうな寂寞がKを襲うた。Kは總毛立つて立竦んだ。

恐る〳〵玄關の障子を開けて座敷に這入ると、其處には其日當直の俳人と老母と妹とが彼の病床近く坐つてゐたが皆無言の儘Kを迎へた。三人の眼が言合はしたやうに、「何故遲かつたのか。」とKを詰るやうに見えた。彼は少し口を開けて何かを言ひつゝあるやうであつたが聲は少しも出なかつた。眼からは涙が流れてゐた。

「どんなのかな。」とKは俳人に聞いた。其れは餘程注意して發した言葉ではあつたけれども、矢張り緊縮し切つた靜寂を極めた此場合には不適當な言葉のやうに響いた。

其れは今朝から未曾有の大苦痛を現じて、初めの間は「其れでな〳〵……」とか「あゝ苦しい。」とか言ふ言葉だけが出てゐたが、それも中途からは聲が嗄れて出なくなり、現在のやうに苦しんでゐるのであつて、どうにも手のつけやうが無い、といふ意味の事を俳人は話した。

「醫者は？」とKは聞いた。

「其れももう來さうなものだと待兼ねてゐるのよ。」と俳人は答へた。

「Nさん、苦しいかな。」とKは少し身を前に出して聞いた。

彼は答へなかつた。唯涙が瀧のやうに流れた。

今迄三人はあるにもあられぬ思ひをしながら唯ぼんやりと坐つてゐる許りであつたのであるが、Kも同じやうな思ひをしながら同じやうに手を束ねて坐つてゐるより外に仕方が無かつた。

醫師が來て苦痛おさへの投藥をしたのは其れから間も無いことであつた。が、心臟の鼓動と呼吸の切迫は容易に收まらなかつた。二度與へた藥がきいて漸くうと〳〵と眠りかけたのは夜の一時頃であつた。

三

さういふ極端な興奮のあとには又極端な疲勞が來て、其翌日は覺めてゐるのか眠つてゐるのか判らぬやうな狀態であつた。其れでも昨日は何も食はなかつた腹に今日は僅か許り牛乳を飲用することが出來た。

其大苦悶の日から代り合つて介抱に來る許りでなく又代り合つて宿直もすることにした。

二三日後のことであつた、少し氣分がよいといふのでそろ〳〵談話などもした。

「もう斯うなつてしまつては野心も色氣も何もあつたものではないな。」と言つて彼は笑つた。以前Kに盛んに野心を說いた時分の事が思ひ出されたのであつた。

「もう何をしようとか、どういふ風に氣取らうとかいふ考は殆ど無くなつてしまつた。唯どうして現在を過ごさうかといふ問題ばかりだ。」

暫く默つてゐた後彼は又言つた。

「これでもな昔は相當に色氣も野心もあつたものだ。さうさお前にも盛んに野心を說いたものであつたな。自分程の大野心を持つてゐるものは無いとさへ考へてゐた。併し其れはだん〳〵と無くなつて來た。もう昨今では皆無になつてしまつた。野心、氣取り、虛飾、空威張り、色氣、其等のものは地を拂つてしまつた。以前は幾ら痛くつても悲しくつても少しは人前を考へたものだが、もう誰の前でも痛い時は泣く、喚く、怒る、譫言をいふ、人を叱りつける、大聲あげてあん〳〵泣く、我ながら呆れたものだ。醜態を極めたものだ。昔は……惚氣をいふ程の色話は考へて見てもないが、これでも紅燈綠酒のうちに天下一の色男になつたやうな心持のこともあつたし一寸すれ違つた女に顏を見られて上

氣したといふやうなあどけない色氣もあつたものだが、其れも一年々々と薄らいでもう消え去つてしまつた。假に絶世の美人が今枕頭に坐つて飯の給仕をしようと言つたところで『馬鹿野郎。』といふ痛罵の一言で追ひ拂ふばかりだ。兎に角餘りの苦しさに天地も忘れ人間も忘れ野心も色氣も忘れてしまうて、もとの生れた儘の裸體にかへりかけてゐるのだな。」

Kは時に簡單な返辭をしながら尊い心持で其話を聞いてゐた。以前口癖のやうに說法された野心論などよりも今日の話の方が遙かに身にしみた。

彼は「病床苦語」といふ標題で同じやうな事をKや其他の者に口授して筆記させた。其れはH雜誌に二號續いて出た。其結末には「俳諧評判記」に對する辯解のやうなものもあつた。評判記問題がそんなに迄彼の心を惱ましたかと、Kは其れを筆記しながら濟まぬやうな心持もした。

雜誌を出し始めた當時、彼の門下生——Kの友人——の多くの不平は大概彼の一言で打消されつゝあつた事をKはよく知つてゐたが、其れがだん／＼とKに對する彼の同情が薄らいで？來るに從つて、寧ろ門下生の不平其ものが彼自身の不平であるやうにKには感ぜられたものであつた。殊に最近に至つては其は絶頂に達したやうに感じてゐた。が、今親しく彼の口から以上のやうな話を聞いて見ると、其等は皆Kの疑心暗鬼で、彼は全く私心を去つた——垢穢を燒き盡した——心を以て高い處から自分等を見下ろしたものかとも考へられた。Kは枕頭に坐つて机に凭れながら筆を操つた手を止めて憔悴した彼の顏に見入つた。

四

後繼者問題なんかはもう此頃口の端に上らうともしなかつた。恐らく藁火が消えて灰になつて、其灰も冷たくなつて、風に吹き飛ばされてしまつたやうなものであらうとKは思つた。

「實際Nの後繼者は今や天下に充滿してゐる。Nはもう其點に於いて何も心を勞する必要は無い。」

Kは其憔悴した彼の顏を見下ろしながらも其點に於いては心から彼を祝福した。

彼の目は今も何彼を中心にして回轉してゐる天地をぢつと凝視してゐることがあつた。「天地も忘れ人間も忘れ‥‥」と言つた彼の言葉は虛僞とも思へなかつたが、又凡てを言ひ盡した言葉ともKには思へなかつた。最後の呼吸を引き取るまで娑婆つ氣の拔けない野心の固りのやうな人であるとしたところで、少しもNの價値を損じない。N自身に在つては、今はもう野心のやの字も無いもののやうに思つてゐるであらうけれど、どうして／＼餘所目に見れば矢張りもとの如き大野心家である。これは自分の考が間違つてゐるとは思へない。

Kは彼の話を聞いてゐるうちには一度は垢穢を燒き盡した人の如く彼を眺めたのであつたが、今は又全く別の心を以て彼を眺めた。

其處へ來たのは醫師であつた。

醫師は病氣については餘り言はなかつた。彼が二三日前の大苦惱も畢竟は心氣の亢進に過ぎなかつたので、差迫つた危險の狀態に在るものとは思へなかつたのである。醫師はKをつかまへて世間話などをした。

「昨日も話したことですが、其れはN君には似てゐない、といふのは眼がいけないのですね。」と其醫師は床の間に置いてある石膏細工を指した。其れは彼の鑄物師が作つた彼の塑像であつた。

醫師は昨日も彼の枕頭で他の介抱人を捕へて其話をしたのであつたが、折節Kが居なか

つたので今日又其れをKの前で繰返すのであつた。其話は彼を喜ばすやうに見えた。

要するに其話は斯ういふのであつた。

此塑像が彼に似てゐないのは主として眼が似てゐないのである。彼の眼は眼裂が廣く長くて、其端が顳顬骨の上迄來てをる。其れから眼瞼の張りかたが特別で、骨相學などでいふ鳳眼といふ眼である。先づ鼻柱に近い方からいふと、かう大きく彎曲をして、其れから眼の中央へ來ると水平になつて、端の所で再度彎曲して其れで眼尻になつてゐる。S君の眼に在つては特に右眼の方に其形が著しい。書家が孔子様を描いてもお釋迦様を描いても皆此鳳眼に書く。S君の像を作るんなら其處に一番に意を留めねばならぬのであるが、此尊像には其肝腎な眼が全く違つてをる。これでは凡眼である。此眼を改めたら屹度よく似るやうになるであらう。

醫師はこれだけの話をして歸つた。

「私の眼は何んだか妙な眼だと思つてはゐたが……」と彼に其處迄言ひかけて其以上は言はなかつた。自分の眼が孔子や釋迦の眼と同じやうな骨相學上で第一位に居る鳳眼であるといふ事は眞逆其醫師の出鱈目の言葉とも思へなかつたのであつた。

五

天井から下つてゐる力綱にくゝりつけてあつた彼の更紗の財布も此頃は殆ど彼の眼に入らなかつた。依然としてぶら下つてゐるのではあるが彼は其れに何んの興味をも持たなかつた。唯一の慰藉であつた御馳走も此頃は食うて見る氣が起らなかつた。

今年の暑さが又思ひやられた。枕頭に坐つて介抱するK等は話題に窮する時は其暑さを防ぐ方法などを話題にした。氷柱とか旋風器とかいふものは唯話に聞いてゐる許りであつた。電燈も瓦斯も水道も何一つ來てゐない上野の山の北には暑さを避けるにも氣の利いた方法は見つからなかつた。坂下に近いところに美術床屋と呼んでゐる床屋があつて其床屋の天井に長方形の白布の板のやうなものが下つてゐて、其れを前後に動かして風を起し、其れで理髪をしてゐる客に涼を送るといふ事をしてをる、其れを見て來た門下生の一人は彼の病床の天井にも之を備へつけて見ようでないかと發議して其れを實行したのは昨年の事であつたが、其れも初めの間こそ多少涼しさを覺えたれ、慣れて來るに從つて、却つて大きなものが天井に動いてゐるのが目障りで中途で其れを取り除けさせてしまつた。

嘗て試みた其一つの方法も失敗であつたので、種々の方法が提議されても彼は餘り乘氣にもなれなかつた。唯そんな事を話題にして多少の慰藉とする許りであつた。

彼の介抱にはK許りでなく誰も皆草臥れた。中にも餘り壯健な身體でないKは殊に草臥れた。彼はよく斯んな事を言つて人に不平を漏らしたことがあつた。

「Kは僕が病氣をすると自分も病人になる程同情に富んでゐるのだから困るよ。僕が病氣の爲め原稿が出來ないなら一人で遣つてしまふといふ勇氣が無いのだからな。」

其れを聞いた人は皆笑つた。Kも其れを聞いた時は苦笑した。けれどよく考へて見ると矢張りさういふところが無いとも言へなかつた。彼の介抱を厭がるといふではなかつたが、彼の呻き聲を聞く時などは自分自身痛苦に責められるやうな心持がした。誰も其れを聞いていゝ顔をするものはなかつたが、其れでも體格の殊に立派な彼のストーヴの歌人などは其程には感じないやうに見えた。が、其れが又動ともすると彼をして身體が小さいといふ口實の下にKを愛好せしめた所以ともなつた。苦痛の上に癇癪を

も交へてうん／＼唸つてゐる時に、餘り感じないやうな顏をしてゐる默人などを見るよりも、あるにもあられぬやうな顏をしてゐるKを見る方が遙かに彼を慰めた。

「Kのやうな感情的の男は唯枕頭に坐つて哭れてゐるだけで非常に慰藉になることがある。」

そんな事を言うたこともあつた。

彼は自ら病氣に愛想をつかした如く介抱人も長い間の介抱に大分根氣が盡きたやうであつた。

「以前少し惡い時には自分は其程に思はないのに周圍の人が頻りに騷いだものだが、此頃は自分では餘程惡いと思つてゐるのに却つて周圍の人は平氣でゐる。」

彼はそんな不平も言つた。

第十九回　百花繪卷物

一

「どうして今日を過ごさうか。」

依然として其れが其日々々の大問題であつた。彼は此頃又以前の「墨汁一滴」と同じやうなものを日課にして新聞に送つてゐた。其れは「病牀六尺」といふ標題であつた。

其れには何といふ極つたこともなく其日々々の思ひつきで見聞した事や感想やを敍するものであつた。「墨汁一滴」の時の例もあるので、其れは紙面の都合の如何に拘らず必ず毎日の紙上に載つた。彼は朝起きて其れを見ることによつて今日の命を認めた。

彼は其「病牀六尺」の中にも好んで畫の事をよく書いた。彼は三四年前から試みつゝあつた草花などの寫生は此頃もまだ廢めなかつた。全く自由の取れぬ身體を無理をして畫筆を執ることは苦痛が多かつたけれども、其れでも「どうして今日を過ごさうか。」といふ問題に答へるには之が目下の處最良の方法であつた。最良といふよりも唯一の方法であつた。彼は少し精神の靜まつた時があれば畫筆を握つた。精神の興奮した時も強ひて畫筆を握つて其れを靜めようと試みた。

手頃の板に畫紙を張りつけて、其四隅をピンでとめたものが常に枕頭に置いてあつた。それの染まらぬ間の長い程彼の機嫌は惡かつた。種々の草花を寫生したものが何枚も重ねてあつた。介抱に來る者などの其れを一枚々々見て行くことが又彼を樂しましめた。

去年の秋であつたか、彼は柿の皮のむきかけてある所を寫生した。Kが其れを見た時に變な顏をしてゐたので彼は聞いて見た。

「其畫はどうぞな。」

「さうよ、何んだか變な畫だと思つて見てゐるのよ。」

「其れは私の少し得意な畫ぢやが……何んの畫とお見たら？」

「馬の肛門みたやうだと思つて見てゐるのよ。」

「はゝゝゝ。其れはひどい。はゝゝゝ。」

そんな事が却つて彼を樂しましめた。馬の肛門は暫くの間好話題になつた。

彼は近來になつて好んで古人の畫譜なども見た。さうして其品隲を試むることをも一つの慰藉とした。

遠方から畫譜を贈つてくれるものもあつた。其れは「病牀六尺」に出てゐる彼の畫に就いての記事を見てゞあつた。

一　一草　北野十種の一　一折
一　文鳳畫譜　一册
一　貝合　一册
一　盃合　一册

右御惠贈被下難有奉存候。
小生此頃は頭工合惡き事一方ならず現に今朝も閉口致候。只麻痺劑を用ゐてやう／＼ごまかし居候。…

此際唯一の救助法は、畫本を見ることに候。これも彩色本殊に宜しく候。……只藏書少なくして困り申候。只今所持のものにて最も出來よきは
　月樵の不形畫藪
　南岳文鳳の手競畫譜
　光琳畫式
　鶯邨畫譜
　景文花鳥畫譜後篇　前篇持たず
　公長略畫二册
　其外廣重の草筆畫譜（八本）蕙齋略畫式
抔に有之候。……
小生時に筆をとりて極めて拙き畫をつくり獨り自ら樂み居候。然し他人は珍重いたしくれず大不平に候。呵々。」

これは大阪の或俳人に送つた手紙であつた。畫に關したことであるからこそ斯らいふ手紙を書く勇氣も出た。

二

さらいふ事を聞き傳へて此頃彼の許に來る或二人連の俳人は、同じく俳人である或寺の住職が南岳の百花繪卷物を愛藏してゐるのを借り受けて彼に見せに來た。

彼は大阪の俳人に自分所持の畫本の名前を列擧してやつた。其後も一册でも氣に入つた畫本の手に入ることを何よりも樂しみにしてゐた。此南岳の百花繪卷物を初めて手にした時、彼は今迄見た畫本のうちで最も氣に入つたものだと思つた。

　二三日借用することにして朝暮其れを眺めてゐるうちに彼は此繪卷物が自分の所有でなくてやがて返却せねばならぬものであるといふ事を考へると悲しくなつた。

　其住職も此繪卷物を持つて來てくれた他の二俳人と共に彼の許に來たことが兩三度あつた。彼の新聞に俳句を投書して來る事は大分前からであつた。K等が其寺を借りて俳句會を催したことも聞いてゐた。

「和尚に話して之を讓つてもらひ度い。」

　彼はさう思ひ立つと矢も楯もたまらなくなつて來た。

　二人の俳人が其繪卷物を取り旁々來た時に彼は其意味の事を話した。

「何か僕の持つてゐるもので其れと交易してもらふことが出來るなら最も妙だが……」

　二人の俳人は和尚の心を量り兼ねて卽答はしなかつたが、併し心の中で、若し彼の書いた短册とか畫とかいふものを代りに遣つたならば和尚は必ず喜んで其求めに應ずるであらうと考へた。

「兎も角其れでは繪卷物は置いて參りませう。早速和尚に聞いて見て又明日上りますから。」と言つて二俳人は歸つた。

　彼は其返事を待兼ねてゐた。いつもの苦痛を忘れる迄に唯一途に其二俳人の來るのを待設けてゐた。ところが其日二俳人は來ないで手紙が來た。其返事は案外であつた。大意は、和尚に話して見たところが和尚は他のものならば兎も角、あの百花繪卷物は特別の關係があつて先住から讓り受けたものであるから、まことにお氣の毒だけれども其事だけは御免を蒙り度い、といつた、甚だ賴まれ甲斐の無いことで不本意千萬だけれども致し方が無い、惡からず思つてもらひ度い、別封百人豪は此間お話した書物である、和尚も此方ならば差上げてもよいと言つて居る、いづれ近日參上の上委細申陳べる積りであるが、取敢ず右申上げて置く。と斯ういふのであつた。

　彼は喩へやうの無い失望を感じつゝ、其百人豪を手に取上げて見た。これも兼て見たいと思つてゐた畫本の一つであつたのであるが、少しもなつかしみを見出さなかつた。

彼は和尚が自分の俳句の弟子であるといふ事の爲めに自分の欲望を和尚に強ひようといふ考は少しも無かつた。唯死に瀕してゐる自分の要求は大方和尚が容れてくれるもののやうにぼんやりと考へてゐたのであつた。彼は百人豪を打棄つて又百花絹卷物を取上げた。彼はどうしても之に別れるに忍びぬやうな心持がした。

三

「拝啓昨日は御光來被下奉多謝候。今朝は百人公早速御送り被下難有候。暫時拝借致置候。又草花卷の事委細承知致候。御手数奉謝候。且又和尚に對し失禮なる事申上候段貴兄より宜敷御詫いたし置可被下候。右御禮まで、匆々。」

彼は此手紙を書いて封筒にも入れず暫く考へてゐた。その末又筆を取りあげて更に次のやうな手紙を書いた。

「和尚に對し突然此草花卷讀り下されと申したところで和尚の承諾無きは固より明かな事に候。そを特別なる貴兄の手腕にて若しうまく行く事もやと心だのみに致居候處、今朝御手紙を拝見、今更のやうに煩悶致候。併し貴兄を恨むわけには無之、くり言御許可被下候。

断腸花つれなき文の返事かな」

彼は此両方を併せて一つの封筒に入れて二俳人に返した。此頃になつては如何なる些事に對しても周密なる注意を拂はねば安心することの出來ぬ彼が、此百花絹卷物に對しては頗る不用意であつたことを自分でも不思議なやうに思つた。年の行かぬ二俳人が恰も彼が思つてゐるだけの事を十分に和尚に傳へ得るもののやうに考へたことが第一の失策であると思つた。又若し先方がすげなくこちらの要求を排斥するといふやうな場合があつた時は――事實が正しくさうであつたのであるが――どうしようかといふやうなことも考へて見ようとはしなかつた。若し少しでもさういふ疑ひが起つたならば斯く輕率に其れを切り出しはしないのであつた。さういふ事を考へると絹卷物に離れともないといふ事の上に、もう一旦切り出した上はどうでもして此意地を通さねばならぬといふやうないらした心持があつた。

彼は前の手紙を投函させてから間も無く又次の手紙を認めた。

「前便さし上候後猶やるせなくいろ〳〵に考へ申候。小生はじめて是程の思ひに焦れ候。若し和尚のお寺に何か要求せらるゝものあらば其物にても購求致し交換相願候事にても參らば極めて妙と存候。固より貧乏者にて意に任せず候へども只今手もとに少々の遊金有之候故かく申上候次第にて、若し二三十圓位にて間にあひ候はゞいつにても差上可申候。斯く申候へどもどうでもかうでも此卷物を横取せんと申すにては無之、斯樣な事を申していよ〳〵和尚の御きげんを損じ候やうにてはよろしからず、その處は貴兄がたの御考にて内々御あたり被下度候。かやうなことは申さぬがよろしとの御考ならば和尚へは一切祕密になし置可被下候。此外に何か好手段あらば小生身にかなふほどの事何にても可致心中御憫察可被下候。併し乍ら到底出來ぬものならば致方も無之あきらめ可申、御配慮煩はし候段御宥恕被下度候。

草の花つれなきものに思ひけり」

彼は其筆の序に或俳人にも次の手紙を認めた。

一茄子難有候。今日は思はぬ戀の失望に朝來煩悶致居候。

　病む人が老いての戀や秋茄子」

彼は筆を握つた儘今日は何本でも手紙を書き度いやうな心持がした。さうして其れには悉く戀の煩悶が書き度かつた。憔悴した顏にも今日は少し赤味を帶びてゐた。

四

　若い二俳人は困つた顏をして相談した。兎も角も今一度和尙を說いて見る事にして寺に出掛けた。

「S先生が其程迄に御懇望なのだから、どうかならんものでせうか。」と二人は和尙の顏を見詰めた。

「何んにせよ先住の特に愛藏してゐた物を、私の手から他に渡すといふ事は出來ない事ですから。」と和尙の顏の筋肉は動かなかつた。若し其れが自分達の物であつたなら、どんな事情があらうとも快く先生に差出すものを、と窮地に立つた二俳人は、和尙の木像のやうな顏が腹立たしかつた。

　寺から歸つた二人は又額を鳩めて相談した。その結果此頃根岸に移り住んだ、彼のH雜誌の編輯をしてゐる俳人を尋ねて相談した。高弟の一人である此俳人の力を借ることによつて、此難關を切り拔け度いと考へたのであつた。

　此二三日彼を訪問しなかつた其俳人は、初めて二俳人から事情を聞いた。

「そいつは一寸困つた事が持上つたものですねえ。讓ることが出來ないといふものを無理に強奪するわけには勿論行かないし、其れかと言つてあの病人に失望さすのもいけないし。」と矢張り二俳人と同じやうな顏をして困つた。

「貴方から今一應和尙に話して見て戴きませうか。」

「Sの方の容子をも見た上で、どうしても欲しいといふ模樣なら僕から更に交涉して見ることにしませう。其結果によつて又君等と相談しなければならぬでせう。」

　二俳人は何分宜しく賴むと言つて歸つた。

　彼は其日百花繪卷の事を考へてゐた。二人の若い俳人が中に立つて困つてゐることも略想像してゐた。けれども今迄自分の信じてゐた瀕死の病人の特權ともいふべきものが、無造作に一和尙の足下に踏みにじられてしまつたといふ事はどうしても我慢の出來ないことであつた。百花繪卷物に離れともない心に變りはなかつたが、今は其愛慕の情よりも更に强大な戀の意地にも似た其力が日増に强くなつて來た。

「私が一つ和尙に逢つて見ようか。」

　彼の容子を見た俳人は、彼の熱烈な戀？をどうする事も出來ぬ事を知つて、遂に斯う言つた。

「さうして貰はうか。」と彼は淚ぐみながら答へた。

　和尙は若い二俳人に答へたのと同じ調子で此俳人にも答へた。

　使者は其役目を果すことが出來ずに空しく戾つて來たが、其儘に彼に復命する勇氣は無かつた。其處で更に二俳人と協議した上で三人で又寺へ出掛けた。

　和尙を取り圍んだ協議の結果は斯うなつた。表面は和尙から快く彼に讓る事、其實は借用する事、彼の百歲の後は相違無く返却する事、それは此處に列座した三人が保證する、とさういふ事に漸くの事で評議が決した。尙念の爲めといふので三人連名の一札を差入れた。若い二俳人はほつと息をついた。

五

　尙斯ういふ事も別に和尙と三俳人との間に口約された。其れは百花繪卷物を彼の生存中彼に讓り渡して置くといふ事の報酬として十枚宛

り彼の短册を送るといふ事であつた。

其等一切の報告を受けた時、彼は衰へた顔に笑を湛へて喜んだ。死ぬる前に飛んだ事を切り出してあとにも引かれぬ羽目に陷つてゐたのが、之によつて解決した事を何よりも嬉しく思つた。張詰めてゐた戀？の勇氣が、其滿足によつて却つて俄かにくじけたやうな心持がした。

其れでも我物と極つた――殊に大分曲折を經て極つた――百花繪卷物を取上げて今更のやうに眺めた。已に何度も繰返して見た畫に新しい趣味の湧き出て來るのを覺えた。彼は早速筆を執つて次の手紙を認めた。

「……南岳の百花繪卷物御祕藏の處此度愚生の懇望により御割愛被下何んとも御禮の申上樣もなき次第、狂喜雀躍朝夕枕邊に置きて、あけては見あけては見、ひとりながめては樂み申居候。この事につきては甚だ失禮なる事のみ申上候段、幾重にも御わび申上候。先は右御わび迄如斯に御座候。

別に御禮がへしのいたしやうも無御座困り居り候處、いろ／＼御申聞けの次第も有之候に付、拙書短册など何か心よき時に出來候はゞ御笑覽に供へ可申候。」

其れから又「病牀六尺」には近頃珍らしい長い文章を書いた。其れは新しく家に來たお嬢さんに對する戀物語で、色々煩悶した末其お嬢さんは遂に自分のものになつた、其お嬢さんの名は百花繪卷物といふのだ、などと書いた。

其れから又毎日和尙に送る短册を氣にしてゐたが、四五日目に赤や青の美しい短册十枚に佛に關した句などを認めて送つた。其時の手紙は簡單な文句であつた。

「拜啓、別封小包にて短册十枚差上候。御一笑可被下候。」

此一條をKは遲れて詳しく聞いた。「病牀六尺」を讀んでゐたけれども、其程曲折があつたものとは想像してゐなかつた。又介抱の當番で來た時にも彼は其事に就いて餘りには話さなかつた。唯枕頭に置いてある繪卷物を手に取上げて見た時、

「旨い畫ぢやあろがな。」

「さうよ、面白い畫ぢやな。」

そんな簡單な談話を交換した許りであつた。

其詳しい話を聞いて後Kは彼の枕頭に置かれた百花繪卷物を見るに忍びぬやうな心持がした。殊に近來になつて著しく憔悴の度を增した彼の顔と其繪卷物を繰返し見て居る瘦せた長い指とを見くらべて、此強情我慢な大野心家が、其果敢なき戀？に滿足してゐる哀れな姿を氣の毒に思つた。

Kは此頃餘り彼に叱られぬやうになつた。彼の逆上は却つて靜まつてゐるやうであつたが、その衰弱は何人の眼にも著しく映つた。

第二十回　死

一

堪へ難いと思はれた今年の暑さも或朝の風にいつしか秋の來た事の頷かれる頃であつた、彼の足の甲に少し水氣が見えた。妹は之を母に囁いたけれども彼には知らさなかつた。

妹が氣附いてから三四日目であつた、彼はどこやら足の感覺が鈍いと思つて妹に聞いた。

「水でも來たのではないかい。」

彼は眞逆さうでもあるまいが……といふ位の輕い心持で聞いたのであつたが妹の答は案外であつた。

「えゝ少し許り。」

不意の兄の質問に對して僞つて答へる事の出來なかつた妹は狼狽へてゐた。

「さうであらうと思つた。」

彼は投げ出すやうに言つたが、彼の心も狼狽へてゐた。兄妹が違つた心持で豫て豫期してゐた事が、いつの間にか目の前に迫つて來てゐたのであつた。

二人は暫くの間默つてゐた。

彼は自分の死を板塀に譬へて考へた事があつた。已に其頃其板塀は目前に迫つて來てゐるやうに人に話した事などもあつた。併し其頃はまだ何んと言つてもゆとりがあつた。死を板塀に譬へて考へて見るだけのゆとりがあつた。今重病人の最後に必ず來る足の甲の水が來たといふ事は息の詰るやうな恐ろしい事實であつた。

彼はぢつと天井の一角を見詰めた。

Kが訪問したのは丁度彼の晝飯を食つてゐる頃であつた。

「足へ水が來てな。」と彼は枕頭に坐つたKの顏を凝視し乍ら言つた。さうして生鷄卵を粥にかけて不味さうに食べてゐた。顏を横向けた儘で茶碗を口の所へ持つて行き匙で送り込むやうにして食べてゐた。

「心臟が惡いのであろか。」とKは顏を曇らせた。其水氣を單に心臟の故障などから來た一時の現象のやうに考へてゐるらしく取りつくろつた。それは愚かな胡麻化しであるとは思つたが一寸其れ以外に言葉が出なかつた。

彼は暫くの間默つて匙を口へ運んでゐたが、もの憂さうに其手を止めてはKに話した。其れは唯の浮世話であつた。

Kは彼の言葉に何處か不明瞭な響きの交つてゐることに氣がついた。これも死に近づいた人に必ず見るところのものであつた。

彼は又思ひ出したやうに匙を取上げた。さうして冷たくなつた粥――生鷄卵をかけた――を再び口へ運んだ。

「茶漬を食べ度いのだけれど、茶漬を食べると益〻水が増さうかと思つてな……」

「……」

「香物で茶漬を食べたらどんなに旨からうかと思ふ。妹や母が茶漬を掻き込んでる音が羨ましいてて。」

「鷄卵をかけた粥は味があるかな。」

「いゝえ、ちつとも、味は無いのよ。けれども何處やら茶漬に似て居ろがな。茶漬の積りで食べてをるのよ。」

二

彼は「病牀六尺」に次の如く書いた。

「一日のうちに我が瘦足の先俄かに腫上りてブル〳〵とふくらみたる其さま火箸のさきに德利をつけたるが如し。醫者に問へば病人には有勝の現象にて血の通ひの惡きなりといふ。兎に角に心持よきものに非ず。」

醫者はKよりもまだ見えすいた氣休めを言つて彼を欺かうとしたのであつた。人の死ぬる前には大概皆同じやうな事を言ふものに極まつてゐる。其事に彼は氣がついてゐた。其れに拘らず彼が想像してゐたやうに、之が死の前兆であると言はれるよりも、さういふ氣休めを言はれる方が矢張り苦痛が少なかつた。醫者のいふ事は氣休めに過ぎぬと思ひ乍ら、もしかさうかも知れぬといふやうな果敢ない望みを繋いだ。

周圍のものが寄つてたかつて自分を欺いてゐるのだといふ考は實際彼には起つてゐなかつた。現に足の甲に水の來たのは數日前からであつたのであるが、彼は妹の言葉で初めて其れを知つた日に一時に腫上つたもののやうに考へた。

其れは一日々々と日を重ぬるに從つて怖るべき足となつて來た。今は甲許りでなく脚部全體が氣味惡く腫上つた。

其上少しでも脚を動かすと五體を震動するや

うな痛みを感じた。彼は「病牀六尺」に二日續いて次の如く書いた。

「支那や朝鮮では今でも拷問をするさうだが自分はきのふ以來晝夜の別なく、五體すきなしといふ拷問を受けた。誠に話にならぬ苦しさである。」

「人間の苦痛は餘程極度へまで想像せられるがしかしそんなに極度に迄想像したやうな苦痛が自分の此身の上に來るとは一寸想像せられぬ事である。」

毎日代り合つて介抱に來ることは其後も變らなかつたが、其上一日代りに宿直することは暫く止んでゐた。其れが又最近に復活された。

Kが宿直した夜は殘暑の激しい寢苦しい晩であつた。其れに拘らず彼は珍らしく熟睡したやうであつた。夜中に咳が聞える度に思はず耳を欹てたが、併し彼が眼覺める容子が無かつた。

いつの間にかKも熟睡したと思ふと、ふと或物音が耳に入つた。其れは彼の病床に當つて聞えたのであつた。

「おい〳〵。」と妹を起す彼の聲が聞えた。其聲は極めて不判明な濁つた聲であつた。

「大便を掃除しておくれ。」

其聲も漸くKに聞き取れた。彼は此頃大小便とも自分で知らぬ間に出るので、襁褓のやうなものを澤山當てて置いて其れを妹が掃除をするのであつた。Kの耳にとまつたのは其襁褓の上に不淨を取落した時の音であつたのだ。

臭氣がKの寢てゐる座敷をも襲うた。Kは其れを厭ふよりも、其淺ましい狀態に暗涙を催した。

夜はほの〴〵と白んで來た。

不淨の掃除が出來てからKは彼の病室に這入つて行つた。

「ゆうべはよくお眠みたやうだな。」

「ゆうべは熟睡した。」

彼の舌は餘程不自由らしく見えた。其れにも拘らず彼の容體は珍らしく平穩であつた。

三

妹は雨戸をもガラス障子をも開け放した。涼しい朝風が流れ込んで、不淨の臭氣は何處かへ逃げてしまつた。

彼は此頃に覺えない安靜を覺えて、殆ど五體のどの部分にも何んの痛みをも感じなかつた。こんな事は死に至る迄かりそめにも有る事を豫期しなかつた事であつた。まだ夢の中に在るのではないかといふやうな心持もした。

實際まだ覺め切つてはゐなかつたのであつた。此時初めて渇きを覺えたので枕頭に置いてあつた盆の葡萄を二つ三つ續け樣に口に入れた。

「これは旨い、Kさんもお食べや。」と彼はKにも其葡萄を食ふことを勸めた。「金莖一杯露といふ語があるがそんな心持がする。食べて御覽、非常に旨い。」

Kは辛うじて其等の言葉を聞き取つた。彼は愉快さうに話してゐるのであつたが、其不判明な言葉は聞いてゐる方には苦し氣に響いた。

其處へ納豆々々といふ賣聲が聞えた。其れは今迄に一度も聞えた事のない裏門に當つてであつた。

「裏門の方へ納豆賣が來たよ。これは珍らしい。」と彼は嬉しさうに言つた。「買つてお遣りなさい。」

母親が其れを買ひに出るのを待兼ねるやうにして又言つた。

「早くお呼びなさい。さうせんと行つてしまふ。」

漸く母の聲で呼びとめて其れを買つてゐる容子なので彼は安心したらしく默つた。

「一納豆をお食べるのか。」とKは怪しんで聞い

た。

「いゝえ、私は食ひはせんけれど此裏門の方には滅多に物賣が來んけれな、たまに來た時は奬勵の爲めに買つて遣るのよ。折角此處迄來て誰も買ふものがなかつたら一度で懲りてしまふからな。」

其朝の安靜は倚ほ暫く續いた。彼は一つ筆記して貰はうか、と言つてKに文章を筆記させた。其れは不淨の掃除から納豆を買はせる迄の其朝の記事であつた。

「題は何とせうかな。」と筆記を終へてからKは聞いた。

「九月十四日の朝、とでもしておくれ。」

母や妹も今朝の珍らしい平穩な容體に安心して茶の間で落著いた朝飯を取つた。

けれどもそれも午後迄は續かなかつた。脚部の水氣は一日々々增して、仰臥した儘の姿勢を少しでも動かさうとしたら忽ち痛みを覺えて大叫喚を始めるのであつた。殊に脚は曲つて立てた儘になつてゐて、其れを延ばすことも橫に寢かすことも出來なかつた。初めは蒲團を枕にしてゐたが今は其れでも十分の支へものとはならなかつた。其處で大方は妹が手を其膝の處に添へてぢつと其れを支へてゐた。其れは見てゐても苦しさうな姿勢であつた。

「少し代りませう。」と彼は妹に言つた。

「其れはなか／＼むづかしいぞな、一寸でも動いたら大變なのだからな。」と彼は言つた。

「大概出來ないことはあるまい。まあ遣つて見よう。」

Kは今迄妹の坐つてゐた處に坐つて其脚に手を添へた。

「臭いぞな。」と彼は又注意するやうに言つた。枕頭に坐つてゐる時と違つて不淨の臭氣が鼻を打つた。

四

彼はぢつと彼の膝を手で支へてゐるKを見て言つた。

「とんだところで脇の修行が出來るな。はゝは。」と。これはKが最近に能の脇の型を習つてゐるといふ事を彼は知つてゐたからであつた。殆ど不動の姿勢でぢつと膝を支へてゐることはどこか脇の修行に似たところがあつた。

彼は僅かに笑つたに相違なかつた。併し其れは不明瞭な笑ひ聲許りであつて、彼の顏の筋肉は少しも動かなかつた。枕頭に坐つてゐる時はKは唯彼の頭許りを見てゐたのであつたが、斯く足部の方から顏を見ると彼の顏はもう全く生きた色は無かつた。笑つても顏の筋肉は動かぬ迄に死相を現じてゐた。

Kは悚然として其物凄い顏から眼を外らしたが、彼はぢつとKを凝視してゐるやうであつた。

其日はKは夜になつて歸つた。宿直は他の俳人がした。

翌日もKは見舞つたが、宿直は他の者がした。

醫者は每日のやうに警戒を與へて去つたが、たいした異變も無かつた。

「病牀六尺」は依然として新聞紙上に掲載されてゐた。たとひ病苦の激しいことが書き並べてあつても、讀者は斯く許り彼の病勢が重つてゐるものとは想像しなかつた。兎に角文章が書ける位の元氣はまだあるものと考へたからであつた。

其れは其れに相違なかつた。たとひ口授であつたにしろ兎に角他人の文章では無く彼の文章に相違なかつた。けれども其れは彼の銳い精神の一部がまだ活動を止めない許りの事であつた。彼の肉體はもう殆ど死んでゐたのであつた。死んだ肉體の中に火のやうな彼の精神はまだ生きよう／＼と藻搔いてゐた。九月十五日の

「病牀六尺」には斯んな記事があつた。
「芭蕉が奥羽行脚の時に、尾花澤といふ出羽の山奥に宿を乞うて馬小屋の隣にやう〳〵一夜の夢を結んだ事があるさうだ。ころしも夏であつたので、

　蚤虱馬のしとする枕許

といふ一句を得て形見とした。しかし芭蕉はそれ程臭氣に辟易はしなかつたらうと覺える。」
「上野の動物園に行つて見ると、今は知らぬが前には虎の檻の前などに來ると、もの珍らし氣に江戸つ兒のちやき〳〵などが立留つて見て鼻をつまみながら、くせえ〳〵などと惡口を言つてゐる。其後へ來た青毛布のぢいさんなどは一向匂ひなにかには平氣な容子で唯虎のでけえのに驚いてゐる。」
此記事は病牀の臭氣に反抗した記事であつた。K等には「臭いぞな。」とNから注意を與へる位であつたが、其れでも、其臭氣は自分の病牀から發する臭氣であるとすると、其れを嫌惡する人間は彼には馬鹿に見えた。馬の小便に辟易しなかつた芭蕉や、匂ひなんかには平氣で唯虎のでけえのに驚いてゐる青毛布などが此時彼に取つては話すに足る人間であつた。

けれども其「病牀六尺」も遂に出なくなる時が來た。二日休んで又一日出たと思ふと又出なくなつた。

五

其夜もKの宿直の番であつた。十二時近くなつてから其迄起きてゐたKは老母等と代つて眠る番になつた。けれども眠くもなかつたので庭に降りて大空を仰いだ。月は清光を放つて眞丸く中空に懸つてゐた。座敷の障子に當つてゐる明るい火影も其月の清光の下には力の無い唯の黄色い色に見えた。Kは疲勞した手足を押し延ばすやうにして月を仰ぎながら大きな呼吸を五六度した。其れから其障子を開けて、其力ない黄色い灯火の中に戻つた。
彼は日暮前には一時苦痛を訴へたが醫者が來て投藥して後には極めて安靜に眠り續けた。今も猶其安眠が續いてゐるらしいのでKも横になつた。
眠つたと思ふ間も無く老母の狼狽へた聲に呼び起されてKは撥ね起きた。此時彼の呼吸は已に無かつたのであつた。
Kはものにはじかれたやうに下駄を突かけて表に出た。
十七夜の月は最前よりも一層冴え渡つてゐた。Kは其時大空を仰いで何物かが其處に動いてゐるやうな心持がした。今迄人間として形容の出來ない迄苦痛を嘗めてゐた彼がもう神か佛とか名の附くものになつて風の如く輕く自在に今大空に騰りつゝあるのではないかといふやうな心持がした。恐ろしいやうな尊いやうな心持がしてぢつと其もの動くあたりを凝視した。
そんな心持で、明る過ぎる許りに明るい道を歩いてゐると、自分の足迄が雲でも踏んでゐるやうにふは〳〵と取りとめのないやうな心持がした。
彼の主な門下生の一人として、何かにつけてKの競爭者として立つ――今H雜誌の編輯に携はりつゝある――一俳人の家の表に立つた。寢靜まつた門も明るい月の下に在つた。Kは今夜起つた重大事を分け擔ふ主な一人として頼母し氣な心持がしつゝ其戸を叩いた。
眠りの覺めた主人に急を告げて又他の一俳人の家に向つた。
其俳人の家も明るい月の下に在つた。同じやうに叩き起して彼の家に取つて返した。
嘗て其戸に手をかけて一番に耳に傳はつて來る叫喚の聲を聞くことが身を切られるやうに辛

かつた、其戸も今は何んの弾力も持たないもののやうに開いた。

ラムプの光は宵の口と同じやうに彼――彼の屍――と老母と妹と今一人夜伽に來てゐた親戚の老婦人を照らし出してゐた。

表から歸つたKを見ると、其迄默つて枕許に坐つてゐる老母は其一人の老婦人に斯う言つた。

「NはKさんが一番好きであつた。Kさんには一番お世話になつた。」

さう言つて老母は泣き伏した。

次の間からは妹の泣聲が聞えた。

Kは默つて其處に坐つた。

二俳人も來た。其他一二の人も來た。皆の心が相倚つて彼を追懷しつゝ曉を待つ心持はしめやかであつた。

百花繪卷物の話も出た。其れは翌朝早速使ひを以て和尚の許へ返すことにした。

興津行の話も出た。

「これが興津であつては大變であつた。」と一人が言つた。皆其れに頷いた。皆の頭には種々の感懷があつた。けれども曉が近づくに從つて葬儀の事や墓所の事が主として話題になつた。

虛桐庵記

昔芭蕉の幻住庵は、麗しき筆の記に殘りて、今も翠微にのぼる三曲二百歩、石山の奥に其跡を訪ふもの多し。三年の昔、碧梧桐と共に爐を擁して、豆の如き燈を守りし、京都吉田の庵は、當時假りに虛桐庵と名づけつ。我等去りてのち、鼠骨長く扉を守りしが、この秋事ありて暫くこの地に止る時、新たに大學の敷地に選まれて、今は空しき礎を止めたりと聞く怨み。ある夕暮獨り杖を曳いて其後を弔ふ。庵は神樂岡の麓、吉田神社を去ること西に三百歩、道より左にして、夕月雙松の影を落す所に在りき。柱曲りたれども風に堪ふる壁あり、軒破れたれども雨を凌ぐ繰戸あり。春は霞近く圓山に流れて、黒谷の夕鐘に雲雀麥圃に眼下に落ち、夏は袋の螢を放つ青薄の露に纏ふ蚊遣りの夜更けて、水鷄裏戸を叩くこと急なり。秋は日晴るゝとき、庭の野菊に小狐の隱れ顔なる、雨降るとき、新酒温めて肌寒の衣重ぬる、いづれか詩魂動かざるなし。冬は時雨の戸、木枯の窓堅くしめて、難解の書に痛き頭を擁きたる。更に雪の日こそ面白けれ。一帶の平原南に伏見の澤田に開けて、蒼き並ぶ甍は本願寺東寺の堂塔伽藍に極るところ、洛陽の霽景眸裡に輻まりて、悉く銀をのべたる如し。されば此地を過るもの、東都の鳴雪、瓢亭、非風、古白、難波の露石等悉く來り訪ひ、同窓の友四方太、繞石、鼠骨、修竹、自適、累々、草美幹、醒櫻、木圃、岐山、京男、臥松等常に集ひ遊びしところ。

木枯の夕暮近し東山　鳴雪

我宿は徒然草のしぐれかな　瓢亭

東山も北山も雪のあしたかな　碧梧桐

古庭に大文字山の落葉かな　虛子

等古き句も思ひいでられつゝ、今は淋しく殘る井戸の端に、末枯れし南瓜畑の踏み荒されたるを見るのみ。この情坐ろに堪ず可からず。乃去りて聖護院の片ほとりに、假りの庵結ぶ鼠骨訪れんと、田圃よぎりて俗に化物屋敷といふをすぐ。これむかし虛桐庵を結ぶより前我獨り冬籠の膝を抱きしところ、土壁崩れて、今は人の住むべうも見えず。

肌寒の我いまだ生きてこゝにあり

（明治二十九年秋）

俳句

春の部

早春の鎌倉山の椿かな
早春の庭をめぐりて門を出でず
春寒き火鉢によるや歌語り
春寒や砂より出でし松の幹
けふ覺ゆ春の寒さや光悦寺
春めける山河消え去る夕かげり
春の夜や机の上の肱枕
春の夜を更かし歸りてさす戸かな

藤田邸にて(一句)

春の夜のいちご日出度し牛乳かけん
怒濤岩を嚙む我を神かと朧の夜
藍流しく村の日永かな
鷄の築地を崩す日永かな

龍安寺(一句)

この庭の遲日の石のいつまでも
山寺に線香もゆる日永かな
叡山を下りて母訪ふ暮の春
春惜しむ趣向に集ふ草の宿

此春は徂くにつけても風雨かな
春惜しむ人白面の書生かな
行く春や到るところに遲櫻
浪間より人買船や春惜しむ
行く春や西山の邊の丹波路
亡國の狹斜美し春惜しむ
賃仕事ためて遊ぶや針供養
裏打の反古悲しや涅槃像
しろくと釋迦の顏の胡粉かな
牡丹餅に夕飯遲き彼岸かな
手に持ちて線香賣りぬ彼岸道
谷合に鉦が鳴るなり彼岸寺
舞臺暫し空しくありぬ壬生念佛
西山に所々の花見ゆ壬生念佛
ひれ伏して拜む女や花供養
寒食や竈の中の薪二本
寒食や壺の底なるしゝびしほ
足あげて日もすがらあり麥を踏む
難波女や軍になれて畑打つ
たゞ一人山に向ひて畑打つ

野を焼いて歸れば燈下母やさし
此村を出でばやと思ふ畦を焼く
雲靜かに影落し過ぎし接木かな
木深くも接木してゐる主かな
富士淺間二日灸の煙かな
背中より靑き煙や二日灸
白桃にかくれまします古雛
もたれあひて倒れずにある雛かな
雛の灯のほかともりて暮遲し
葛城の神省みはせ青き踏む
踏青や川を隔てて相笑める
踏青や古き石階あるばかり
鞦韆に抱きのせて沓に接吻す
ちよろくと滿ち來る汐や足の甲
汐干舟浮み上りて歸るなり
摘草に裏戸を出でて連れ立ちぬ
草摘みし今日の野いたみ夜雨來る
草摘に出し萬葉の男かな
髮結はゞ早見たといふ二の替
競べ馬一騎遊びてはじまらず
夕日影競漕赤の勝とかや
三つ食へば葉三片や櫻餅
灯火の下に土産や櫻餅
春風や草廣うして假の堂

春風や闘志いだきて丘に立つ
春月や南へ下りに東山
海荒れて渡れぬ佐渡の霞かな
春雨の衣桁に重し戀衣
山寺に傘もたせやる春の雨
春雨や少し燃えたる手提灯
静さや花なき庭の春の雨
さしくれし春雨傘を受取りし

金子せん女邸にて（一句）

鉢伏に雲のかゝれば春の雨

光悦寺にて（九句）

竹林に降る春雨や光悦寺
春雨や忽ちくもる鷹が峰
もたし置く春雨傘や茶室の戸
斯くかざす春雨傘か昔し人
春雨の傘傾けて窓を訪ふ
宿直して曉寒し春の雪
春雪のちらつきそめし芝居前
袖に來て遊び消ゆるや春の雪
春雷やひゞの入りたる床の壺

嵐山（三句）

雪解けて奥の餅屋の煙かな
雪解の谷の坊よりのぼせもの
僧は里に男は納屋に雪解かな

高商卒業生を送る（一句）

これよりは戀や事業や水温む
一つ根に離れ浮く葉や春の水
春水や滔々として菖蒲の芽

華田邸にて（一句）

石橋に佇ってすりや春の水
春潮や巖の上の家二軒

下の關（一句）

春の潮先帝祭も近づきぬ
老猫の戀のまどゐに居りにけり
戀猫をにくむ心もなかりけり
我を見てやがて啼きけり春の猫
白々と松の木の間の春の猫
雉子をうつ裏山近し百姓家
灯ともしに來る湯女嬉し雉子の聲
雉子提げし人やりすごす山路かな
鶯や文字も知らずに歌心
城山の鶯來鳴く士族町
鶯や卒然として霞める日
鶯や洞然として晝霞

大原三千院にて（一句）

鶯の聲の大きく静かさよ
囀りの大樹の下の茶店かな
囀りの高まり終り静まりぬ

雨戸閉てて遠くなりたる蛙かな
漕ぎいでて蛙聞えずなりにけり
草に置いて提灯ともす蛙かな
山下りて人なつかしや夕蛙
蝌蚪の水動きしづまる時もなし
蝌蚪の水漸く淺く芹の花
雨の掌にすくひこぼす蝌蚪の水
蛇穴を出て見れば周の天下なり
穴を出る蛇を見て居る鴉かな
龜鳴くや皆愚なる村のもの
舟棹に散りて影なし柳鮠
水底の一枚石や柳鮠
彼踏んで覗けば淺き諸子魚かな
人影の立ち塞がりし蠶室の灯
逡巡として繭ごもらざる蠶かな
宿かさぬ蠶の村や行き過ぎし
蝶々の草にかくるゝ夕日かな
蝶々のとまりてしなふ草や何
莚打てば蝶々飛ぶや五六匹
花筵たゝめば高く蝶々かな
日輪を飛び隱したる蝶々かな
巣の中に蜂のかぶとの動き見ゆ
うなり落つ蜂や大地を怒り這ふ
虻落ちてもがけば丁字香るなり

冴えかへり又居ずなりぬ春の蝿
梅白し萬草の徒と句三昧
年々に見古す家や梅の道
小僧皆主の子や梅の寺
燻りて白梅咲きし軒端かな
黄昏の月何處にか梅の影
梅を採りて病める老尼に二三言
落ちて皆轉る花や椿坂
此の後の古墳の月日椿かな
腐れ水椿落つれば窪むかな
京女花に狂はぬ罪深し
山門も伽藍も花の雲の上
金屏におしつけて生けし櫻かな
山寺の寶物見るや花の雨
花衣脱ぎもかへずに芝居かな
太秦で提灯買ふや櫻狩
山人の垣根づたひや櫻狩
提灯に落花の風の見ゆるかな

貴船奥の宮（一句）

おもひ川渡ればまたも花の雨
一片の落花見送る靜かな
葉がくれになほ散る花のありにけり
ぬれ縁にいづくともなき落花かな
竹藪をはづれて花の嵐山

仁和寺（三句）

花の茶屋過ぎて御堂に憩はゞや
右つゝじ左櫻の御室茶屋
花茶屋に隣りて假の交番所
咲き滿ちてこぼるゝ花もなかりけり
連翹や馬が食み押す秣桶
肩脱いで髪すく庭や木瓜の花
沈丁花春の月夜となりにけり
いたゞきを蜘がいためぬ沈丁花
前山の藤の紫現はれぬ
鐵漿つけし藤の茶店の娘かな
間道の藤多き邊へ出でたりし
藤の花人の守らぬ砦かな
藤の根に猫蛇相搏つ妖々と
裏山に藤波かゝるお寺かな
柳の根に括りつけたる祠かな
舟岸につけば柳に星一つ
芽ぐみたる前山いつか青かつし
どうだんのかり込んである木の芽かな
山吹の雨や雙親堂にあり
山吹に流れよりたる雛かな
叡山を下るや花菜見えそむる
菜の花や村より村へものもらひ
道中は明日の廓や花大根
大根の花紫野大徳寺
摘んでゐるげんげや村の馬鹿が來る
ものの芽のあらはれ出でし大事かな
さゞなみの其處より起る菖蒲の芽
草萠や人の住まざる門の内
垣間見る好色者に草芳しき
芳草や黑き烏も濃紫
草の戸に蕨もえけり二三本
早蕨を誰がもたらせし厨かな
青麥に走穂一つ見ゆるかな
尻くくれし志やな蕗の薹
湖の此岸淺し蘆の角
蘆の芽の水にいづくの火影かな
浮草のそゞろに生ふる古江かな
加茂祭餘所に見て摘む根芹かな
よそほひて來る村嬢や芹の水
浪がしら刈りし若布の漂へり
老の手のほとびて白し海苔の桶
てのひらの上そよ〳〵と流れ海苔
岩の上に傾き置きぬ海苔の桶

夏の部

二階人暑さにまけて病めりけり

雨漏りに騷げる僧や雷涼し
橋涼し更に數歩を移すなる
涼しさや走馬燈に月がさす
山の上の涼しき神や夕詣り
宗鑑の墓に花無き涼しさよ
涼風の暫くしては又來る
晩涼の池の萍皆動く
鎌倉の晩涼にある我等かな
明易く尚積荷する兵庫かな
短夜やほそ〳〵として峰の道
明易き第一峰のお寺かな
大海のうしほはあれど旱かな

偕樂園にて（十句）

太き道一筋夏の園にあり
うちたてて見えぬ幟の破れかな
雨に濡れ日に乾きたる幟かな
藥玉に人うち映えてゆききかな
手拭の藍に菖蒲の綠かな
我入れば暫し菖蒲湯あふれやまず
草市ややがて行くべき道の露
六十になりて母無き燈籠かな
燈籠に入るゝ灯を手渡しぬ
灯心落ちて油はねたる燈籠かな
ある寺を燈籠明りに訪ねけり

寺にある人たづねけり盆燈籠
獨り淋し廻り燈籠に這入るべく

元君の病を訪ふ（一句）

提げて行く廻り燈籠を見舞かな
送り火や母が心に幾佛
墓拜む人のうしろを通りけり
都なる先祖の墓に參りけり
踊うた我世の事ぞうたはるゝ
年々に月かゝる松や踊りけり
はじまらん踊の庭の人ゆきき
七夕や古りし机に瓜二つ
手をとつて書かする梶の廣葉かな
七夕の歌書く人により添ひぬ
吹き亂す七夕竹の嵐かな
漸くに夕影こゆし星祭り
茣蓙取れば蒔き祭の疊かな
お旅所に太鼓打出す祭かな
藪の道人の出て來る祭かな
老禰宜の太鼓打ち居る祭かな
裏町は祭提灯ばかりなり
人垣のどよみ揉むや荒神輿
谷川を渡らじと誓ふ一夏かな
深藪に人現はるゝ登山かな
ものなくて輕き袂や更衣

老夫婦衣更へたる靜かかな
百官の衣更へにし奈良の朝
紅袍の下に袷の古びかな
袷著ていつもなる上つぱり
いと輕く洗ひ晒しの古浴衣
お小姓にほれたはれたや白重
白扇や漆の如き夏羽織
帷子や見にくからざる老夫婦
帷子ややせほそりつゝ著たりけり
戀はものゝ男甚平女紺しぼり
どかと解く夏帶に句を書けとこそ
夏帶にはさみ沒せし扇子かな
二階より舟に投げやる團扇かな
美人繪の團扇持ちたる老師かな
くづをれて團扇使ひの老尼かな
蚊帳吊りて皆人借れり濱別墅

父君を失へる青峰、的浦兄弟へ（一句）

兄弟の喪に籠り寐る蚊帳一つ
病やゝよき病人や蚊帳の中
古蚊帳の月おもしろく寐まりけり
危座兀座賓主いづれや簟
今日の日も衰へ、あふつ日除かな
淸瀧の橋の上まで日蔽かな
籠枕庄屋になりし一夢かな

川狩や鯰を添へて網かへす
一つづつ太き夜振の獲物かな
鵜の川に翌朝かゝる荷船かな
鵜つかひの宿や大きな唐辛子
庭を背に籐椅子にある女かな
海風に吹きゐざりたる籐椅子かな
籐椅子の人に遊船かくれけり
葭戸はめぬ絶えずこぼれ居る水の音
水に浮く蛙のむくろや早苗取
早苗籠負うて走りぬ雨の中
早苗籠負うて歩きぬ僧のあと
早苗籠草を握つて負ひ立ちぬ
忽ちに一枚の田を植ゑにけり
降りかくす森見に立ちし田植かな
うち立てば利根の風あり田草取
編みくるゝ麥藁籠や夕明り
麥笛や四十の戀の合圖吹く
飯喰に下りし曝書の主かな
水打つて白雲起る芭蕉かな
打水や蜘の振舞の慌てそう
暑に堪へて雙親あるや水を打つ
炎帝の威の衰へに水を打つ
水打つて風鈴いまだ鳴らぬなり
月いでて屯にもならぬ蚊遣かな

隣なる蚊遣も同じ枇杷の樹に
毎日の蚊やり火をなどもたらさぬ
すたれたるもの興させよ草合
岸に釣る人の欠びや舟遊び
橋脚に張りし規則や床涼み
橋裏を皆打仰ぐ涼み舟
行水の女に惚れる鳥かな
晝寐さめて其儘雲を見居るなり
手枕の間無く覺めよと晝寐かな
晝寐さめにきと童子が案内かな
漁師等に焦げ交りたる裸かな
熔岩の上をはだしの島男
俗めきて風鈴鳴るや僧の居間
汗ばまずからりと在す老師かな
汗をたゝむ額の皺の深きかな
なく聲の大いなるかな汗疹の兒
日焼せし旅の戻りの京の宿
紅さして寐冷の顔をつくろひぬ
コレラ怖ぢて綺麗に住める女かな
紫陽花にはやるともなきコレラかな
コレラの家を出し人こちに來りけり
葛水に波なく庵に響なし
葛水にかきもち添へて出されけり
ちゝと鳴く蟬草にある夕立かな

枯松を降りかくしたる夕立かな
夕立の池に足洗ふ男かな
五月雨に郵便遅し山の宿
五月雨や魚とる人の流るべう
蘭の花の上漕ぐ舟や五月雨
沼に出れば魚とり居る夏野かな
清水茶屋心太ある許りかな
底の石ほと動き湧く清水かな
駒の鼻ふくれて動く泉かな
今一つ奥なる瀧に九十九折
彼方にも人現はれぬ瀧の下
門の子を母が呼ぶなる蚊喰鳥
御車に牛かくる空や時鳥
川船のギイと曲るやよし雀
墓出でて主も縁に立出でぬ
老僧の蛇を叱りて追ひにけり
手に置けば空蟬風にとびにけり
灯取蟲燭を離れて主客あり
灯ともせば早そことべり灯取蟲
金龜子擲つ闇の深さかな

高野山（一句）

此方へと法の御山のみちをしへ
蜘掃けば太鼓落して悲しけれ
舟べりにとまりてうすき螢かな

雨にうたれ落つる火もある螢かな
螢火の傷つき落つる水の上
老僧の骨刺しに來る藪蚊かな
主客閑話でゝむし竹を上るなり
蚰蜒を打てば層々になりにけり
わだつみに物の命のくらげかな
松風に皆騒ぎ飛ぶ水馬
日高きに宿もとめ得つ栗の花
雨だれにうたれてかたし柿の花
軒下の破れ樋に散る柘榴かな
白き雲鼠にかはる百日紅
棕梠の花の句作につけて見る日かな
棕梠の花こぼれて掃くも五六日
卯の花や佛も願はず隠れ住む
葉がくれにありと思ほゆ實梅かな
枇杷食ひに來て歸り去る從弟かな
箏の前に人ゐずなんぬ若楓
門ありて唯夏木立ありにけり
兩岸の若葉せまりて舟早し
掃いてゐる新樹の下の地面かな
今敷きし船の毛布や松落葉
日蔭に松の落葉の生れけり
病葉や大地に何の病ある
徐ろに歩を移し剪るさうびかな

寂として殘る土階や花茨
鄕香をなつかしみ行く花茨
花茨かぶさりかゝる野水かな
船にのせて湖をわたしたる牡丹かな
雨風に任せて悼む牡丹かな
白牡丹いづくの紅のうつりたる
白牡丹といふといへども紅ほのか
小さき蚤足を食ひ居り花葵
紫陽花の花に日を經る湯治かな
紫陽花につき出したる日蔭かな
撫子やむぐらの土の動きやむ
百合折りて捨つれば草に浮みけり
唯一人船繫ぐ人や月見草
開くとき蕊の淋しき月見草
晝顔のしぼみかくるゝ夕野原
山路に石段ありて葛の花
よりそひて靜かなるかなかきつばた
山の湯の流れに咲けるあやめかな
はなびらの垂れて靜かや花菖蒲
河骨の花に神鳴る野道かな
草刈つて青鬼灯のなかりけり
年々や三本つくる帚草
帚木に雀を逃げて蝶白し
夏草を踏み行けば雨意人にあり

夏草に下りて蛙うつ鳥二羽
輕々と浮き垂りぬ麥埃
茄子汁主人好めばけふも〳〵
蓴採る舟やらん人ありやなし
うき草の葉の長さや山の池
厚板の錦のかびや爪はじき

秋の部

草の戸の殘暑といふもきのふけふ
新涼の驚き貌に來りけり
新涼の屋をゆるがして來りけり
新涼や佛にともし奉る
朝寒の老を追ひぬく朝な〳〵
淋しさにかるたとるなり秋の暮
芝居見て戻る草廬や秋の暮
俗の人俳の留守居や秋の暮
父母の夜長くおはし給ふらん
長き夜の中に我在る思ひかな
仲秋や任に赴く安藝守
仲秋や峰の寺より歌だより
仲秋や院宣をまつ湖のほとり
仲秋や月明かに人老いし
船に乘れば陸情あり暮の秋

能すみし面の裏へ暮の秋
門前の借家久しや老の秋
船大工備ひ入れたり庭の秋

夜觀世音寺に詣づ(二句)

秋の灯に照らし出す佛皆觀世音
掃除待や暫く憩ふ老一人
門葉の亂れもすこし獺祭忌
門前に知る人もある十夜かな
說法の日毎の場や捨扇
襟にさいて忘れ扇や秋の風
落し水かぼそくなりていつまでも
毛見の日とおしろいぬりし娘かな

薩摩の國に入る(一句)

山田守る案山子も兵兒の伴人かな
御室田に法師姿のかゝしかな
仰向けに倒れし顏の案山子かな
盜んだる案山子の笠に雨急なり
案山子さへ都近くの姿かな
古繪馬に竹結ひつけし鳴子かな
掛稻の下に水づきし徑かな
星墮つる籬の中や砧打つ
廊下行く手燭に風や砧聞く
礎に砧のつちのせてあり
避暑人のへりたる濱の花火かな

木賊刈る水に石あり憩ひけり
日外の石のしるしや木賊刈
二三子の携へ來る新酒かな
老の頰に紅潮すや濁り酒
政を聞いて夜食す柚味噌かな

鎌倉(一句)

秋天の下に浪あり墳墓あり
秋の日のすべり消えたる谷の坊
秋日和子規の母君來ましけり
空むいて繪馬見る人や秋日和
秋晴に足の赴くところかな
秋晴や起き直りたる箒草
三日月の忽ち見えぬ雲かな
月のみにかゝる雲あり暫し程
子規逝くや十七日の月明に
淸淨な月を見にけり峰の寺
月の坂高野の僧に逢ふばかり

退官せし某氏に(一句)

淸閑にあれば月出づおのづから
月遲く出である山のたゝずまひ
子を負うて妻とかへるや月の道
故鄕の月の港を過ぐるのみ
遲月の山を出でたる暗さかな
月の友三人を追ふ一人かな
三人は淋し過ぎたり後の月

夜都府樓趾に佇む。懷古(一句)

天の川の下に天智天皇と臣虛子と
秋風に又來りけり法隆寺
一人の强者唯出よ秋の風
秋風に草の一葉のうちふるふ
鷄の空時つくる野分かな
地をすつて萩たのみなき野分かな
家主の棄くれたる野分かな
又一人渡りし橋の野分かな
吹き撓む柿の接穗の野分かな
女出て野分の門をとざしけり
稻妻や半ば刈りたる草の原
秋雨の雪に間近き山家かな
秋雨や川の眞中の杭の波
芋の葉や泥いさゝかの露の玉
露深しと皆云ひ合ひぬ途の中
すぐさめし朝の茜や露葎
露の戸をよろぼひ入りて締めにけり

風早西の下は余が一歲より八歲迄鄕居せし地なり。家空しく大川の堤の大師堂のみ存す　其堂の傍に老松あり

此松の下に佇めば露の我
露の幹靜かに蟬の歩き居り
妹が戸に流るゝ露やしまりたる

秋の山阿彌陀堂まで送らるゝ
東に日の沈み居る花野かな
見えてゐて釣れぬ小魚や秋の水
鹿を聞く三千院の後架かな
大空にまたわき出でし小鳥かな
木曾川の今こそ光れ渡り鳥
山雀に小さき鐘のかゝりけり
ひら〳〵と釣られて淋し今年鯊
相慕ふ村の灯二つ蟲の聲
蟲聞きに塔をめぐれる法師かな

假樂園(一句)

又こゝに蟲聞く床几置かれたり
掌に頤埋めて蟲を聴く
其中に金鈴をふる蟲一つ
松蟲に戀しき人の書齋かな
蜻蛉は亡くなり終んぬ鶏頭花
蜻蛉のさら〳〵流れ止まらず
叢や蟷螂蝶を捕へたり
秋風に殖えては減るや法師蟬
秋の螢灯に流れ來てあはれなり
風吹くや松に吹きつけ花芙蓉
したゝかに柿を喰ひたる祭かな
何の木のもとともあらず栗拾ふ
嵐のあと栗の大きくなること〳〵

栗の毬ふみしだきあるところかな
辨當に拾ひためたる木の實かな
石段にとゞまりもする木の實かな
膝ついて椎の實拾ふ子守かな
われが來し南の國のザボンかな
湖の見えずなりたる通草かな
ぬり盆に茶屋の女房の郁子をのせ
葡萄の種吐き出して事を決しけり
桐一葉日當りながら落ちにけり
僧遠く一葉しにけり梵
いちじくのまことしやかに二葉三葉
崖下や打重りて紅葉茶屋
うす紅葉せる木の下の床几かな
曉の紺朝顔や星一つ

母君に送る手紙のはしに(一句)

朝顔の花咲かぬ間に起きもする
土近く朝顔咲くや今朝の秋
銀瓶に朝顔しぼみたるゝかな
順々に風吹きあふつ崖の萩
雨風や最も萩をいたましむ
彼の堂に齋せむとして萩の道
茶をよぶに眞萩の叢の上よりす

みさ子忌日(一句)

二つ三つ萩咲きそめし忌日かな

やう〳〵に殘る暑さも萩の露
萩の風ほつ〳〵と花咲きそめし
朝の蚊のほのかに立ちぬ露の萩
もてなしの女あるじや萩の花
白粉の花のすがれや窓の下
コスモスのよく動きゐる花の數
秋天の下に野菊の花瓣缺く
鹽焚の壺中に減るや自ら
鹽たれて焚の穗さや箸の先
病よし菊の畑の荒を見る
老懶や杖もやらざる菊の花
地に這ひし菊起しはく箒かな
祇王寺の道や鶏頭の雨三家
鶏頭に妻は水汲むはだしかな
島見えずなりて鶏頭に降り出せし
柿賣りしあと鶏頭の小家かな
葉鶏頭の葉垂れ〳〵し影堀に
破蓮の莖動き止む時もなし
蚊柱もたゝずなりたる芭蕉かな
芭蕉葉や團扇の塵をはたくべく
講堂の雨垂れ落つる芭蕉かな
故人すみて煙草かけたる小家かな
末枯の草や必ず墓のあり
末枯や蝶追ひよべる鶏一羽

稲塚にしばしもたれて旅悲し
田舎馬車ねぎりてのるや稲の花
たゞ一人いつまで稲を刈る人ぞ
稲掛けて後定まらぬ天気かな
蛼多き山田の稲や刈らである
枝豆を食へば雨月の情あり
鬼灯はまことしやかに赤らみぬ
誰彼にくれる印や生り瓢
両側に栗の穂たるゝ野道かな
友は大官芋掘つてこれをもてなしぬ
初茸を山浅く狩りて戻りけり
茸狩や雨のあしたの日曜日
秋蝶の人なつかしや菌山
洛中の昼の汽笛や菌山
菌山のむしろの客となりにけり

冬の部

ハルビンにて(一句)
短日や馬車を驅りたる小買物
足早き提灯を追ふ寒さかな
寒燈に柱も細る思ひかな
三世の佛皆座にあれば寒からず
喝食の面打ち終へし冬至かな

冬ざれの石に少し降りて止みにけり
能を見て故人に逢ひし師走かな
行く年の松杉高し相国寺
年を以て巨人としたり歩み去る
古味噌の壺に行年のありやなし
行年やかたみに留守の妻と我
大いなる春を待つなる貧士かな
一筋に神をたのみて送りけり
蘆の葉も笛仕る神の旅
何やらがもげて悲しき熊手かな
百年の煤も掃かずに囲爐裏かな
あぢきなき炬燵の夢や占問はん
吾妹子と古りにけるかも桐火桶
病める子の足のせ眠る湯婆かな
明けくれの身をいたはれる懐爐かな
ストーブに遂に投ぜし手紙かな
ストーブを離れて一人窓に倚る
今朝もまた焚火に耶蘇の話かな
夕靄の早かゝりたる焚火かな
いつまでも炭ひいてゐる音すなり
柴漬にみるもかなしき小魚かな
村の名も法隆寺なり麦を蒔く
蘆刈の向ふの岸に渉る
蒲團かつぐ人も乗せたり渡し舟

死神を蹴る力無き蒲團かな
叡山横川中室宿泊(一句)
蒲團かついで杉の中來る男かな
古布子ねまきになりて久しけれ
古布子上にまとひし法衣かな
古頭巾師走の市をうろ／＼と
風邪引の著ぶくれてゐる水仕かな
平常著のまゝに寝ねけり風邪の妻
胼の頬を相寄せたりし母子かな
耳とほき浮世の事や冬籠
足低き机によるや冬籠
朝からの書斎の友や冬籠
戸を出づれば芝居見にゆく冬籠
すみ／＼の掃除届きて冬籠
藪の戸のよき飼犬や探梅行
年忘柱にもたれ話しけり
包つぼを著て寒紅をつけにけり
餅搗くや草の庵の這入口
牡蠣船の薄暗くなり船過ぐる
柊をさす母によりそひにけり
干からびてちぎれなくなる干菜かな
灯のともる干菜の窓やつむぐらん
茎の水明日はこぼれんけしきかな
手にとればほのとぬくしや寒玉子

かりに著る女の羽織玉子酒
煮凍に乏しき酒をあたゝめぬ
爐にかけて冷えてゐるなり蕪汁
煮ゆる時蕪汁とぞ匂ひける
湊かむや時雨日和をめでながら
軒借るや又時雨來と言ひながら
京寒く菊に先立つ時雨かな
二三子や時雨るゝ心親しめり
窓の灯に慕ひよりつ拂ふ下駄の雪
石段の深雪見上げて拜みけり
我を迎ふ舊山河雪を裝へり
枯木立匆忙として雪の來し
霜降れば霜を楯とす法の城
庫裡を出て納屋の後ろの冬の山
冬の山低きところや法隆寺
眠る山に歸る雲あり南禪寺
山眠る中に貴船の鳥居かな
遠山に日の當りたる枯野かな
都會の灯見ゆる宵ある枯野かな
ところ〴〵冬田の徑の缺けて無し
冬川に道のついたる鳥居かな
泉水は氷りて開けぬ雨戸かな
狐火の出てゐる宿の女かな
山の宿梟啼いて飯遲し

庭にこぼす十能の火や鷦鷯
水鳥の立ちて羽ばたく一羽かな
水鳥に菜屑捨てたり岸の家
水鳥や氷の上につぶらなる
藪の池寒鯉釣りのはやあらず
牡蠣をむぐ火に鴨川の嵐かな
凍蝶の落ちくだけけり石の上
日に消えて又現はれぬ歸り花
山茶花の掃き集めあるは夥し
霜を掃き山茶花を掃く許りかな
花活の茶の花落つる夜の音
茶の花に暖き日のしまひかな
茶の花の眞白にあらぬもの淋し
茶の花や黄檗の僧今は誰
茶の花に日當れば虻の動きをり
大空に延び傾ける冬木かな
野々宮のほとりの冬木何々ぞ
忘れもの何ありし茶屋や枯柳
空林やなほ落葉する日もすがら

吉田虚桐庵（一句）

我庵は大文字山の落葉かな
かさ〳〵と落葉の上の小鳥かな
ひら〳〵と深きが上の落葉かな
たまるに任せ落つるに任す屋根落葉

徐々と掃く落葉箒に從へる
庭隅に枯れてなくなる落葉かな
休みには落葉掃くなり寺男
佇めば落葉さゝやく日南かな

瓜下亭（一句）

柚子一つそなへて寒し像の前
御佛に水仙の花一つづつ
水仙や日は中空にかゝりたる
冬枯の道一筋に別れけり
草枯れて夕日にさはるものもなし
底にある青草ゆゝし枯葎
枯萩のいつまで刈らであることか
枯萩の庵ともいはゞいひつべし
枯萩を刈りたる日よりしぐれけり
枯れ〳〵て額ともわかずなりにけり
破壺をうちすててあり枯すゝき
枯芒ほつ〳〵出でぬ雪の原
流れ行く大根の葉の早さかな

新年の部

酒もすき餅もすきなり今朝の春
元朝の氷すてたり手水鉢
ふだん著に日向ぼこりや宿の春

一年の又はじまりし何や彼や
琴棋書畫松の內なる遊びかな
松の內鼓の音のありどころ
人住みて門松立てぬ城の門
門飾吹きゆがめたる富士颪
輪飾のすこしゆがみて目出度けれ
初暦賴みもかけず掛けにけり
蓬萊に徐福と申す鼠かな
三條の橋を背中に傀儡師
人形まだ生きて動かず傀儡師
猿廻し通るが見ゆる籬の上
親猿の赤い頭巾や叱られし
年禮の城をめぐりて暮れにけり
年禮やいたく老いぬる人の妻
禮者西門を入る主人東籬に在り
年玉の十にあまりし手毬かな
年玉の水引うつる板間かな
掃きぞめの箒や土になれ始む
掃きぞめの箒にくせもなかりけり
縫ぞめや堺のはさみ京の針
亂れ始む人誰々ぞ弓始め
彈始めの姉のかげなる妹かな
こゝに又出初くづれのゐたりけり
病人のある氣がかりや初芝居

座をあげて戀ほのめくや歌がるた
子等がとる加留多の宿に戻りけり
やり羽子や油のやうな京言葉
東山靜かに羽子の舞ひ落ちぬ
鎌倉は和田一門の雜煮かな
一學系を率ゐて喰ふ雜煮かな
此家の衰へながら雜煮かな
ゆるぎなき柱のもとの雜煮かな
初富士や草庵を出て十歩なる
初富士や雙親草の庵にあり
何もなき床に置きけり福壽草

修竹林

把栗と兩人で嵯峨の天龍寺の横を散歩する。秋日和で好い氣持だ。大きな寺に添うて歩く。一抱へもありさうな竹が程よく間隔を取つて叢生して居る。奥が判らぬ程深い。是が名に負ふ修竹林だ。

僕の家（廢寺）には大きな佛壇がある。其處に小さい阿彌陀を一つ祭つて居る。面白いだらうと把栗が言ふ。面白いと答へる。密生した竹の葉を漏る日がちら〳〵と竹の幹にあたる。其日影は極めて鮮明だ。

僕の家に古びては居るが大きな風呂がある。其を沸した時は近所の者が這入りに來る。一人が必ず一握りづつ藁を持つて來る。其をぽつと燃して暖まつて歸るのだ。面白いぢやないかと把栗が言ふ。面白いと答へる。藪の中には偶〻一本の折竹がある。他の悉く垂直の中に、其折竹の一本斜なのが極めて鮮明だ。

家の近傍に毎月一度米一升宛貰ひに來る尼がある。默つて來るから默つて渡すと持つて歸る。決して一度より來ない。面白いぢやないかと把栗が言ふ。面白いと答へる。藪の中の一本の大竹に小さい蔦が絡まつてする〳〵と攀つて居る。其の眞赤に紅葉したのが眞青な竹に反映して極めて鮮明だ。

藪の中鵙啼去つて磬遠し

年譜

明治七年（一歳）
二月二十二日生る。父は伊豫松山藩士池内庄四郎信夫、母は山川氏。

明治八年（二歳）
舊藩時代に於て父は劍客にして而も祐筆を勤めをりしが、廢藩後劍と筆とを棄て農に歸せんと志し、風早郡柳原村西の下に郷居す。此の西の下の風光は幼時の頭に印象すること深く、他日文學に志す素地を作りたるが如し。

明治十四年（八歳）
三人の兄は農となるを好まず、其々職を求めて松山に出で、父も一家を擧げて亦松山に歸る。松山智環學校に入學し、轉じて松山高等小學校に學ぶ。祖母の家高濱の姓を冒す。

明治二十一年（十五歳）
伊豫尋常中學校に入學す。

明治二十四年（十八歳）
父歿す。
正岡子規と文通す。

明治二十五年（十九歳）
京都第三高等中學校に入學。

明治二十六年（二十歳）
子規、飄亭、鳴雪等と京都の寓居を訪ふ。

明治二十七年（二十一歳）
春休みに上京、子規庵を訪ひ、木曾路を經て京都に歸る。「木曾路の記」あり。

明治二十八年（二十二歳）
夏、仙臺第二高等學校に轉じ、退學。上京。雜誌「日本人」に俳話を連載す。後年『俳句入門』として出版せしもの主として此の俳話を集めたり。

明治二十九年（二十三歳）
「國民新聞」俳句の選を擔當す。

明治三十年（二十四歳）
柳原極堂松山にて「ホトトギス」を發刊す。
大畠いとと婚す。

明治三十一年（二十五歳）
『俳句入門』を内外出版協會より出版。
長女眞砂子生る。
母歿す。
「ホトトギス」を東京に移し、主幹す。
「ホトトギス」に「淺草寺のくさぐさ」を載す。
是寫生文と稱するものの濫觴なり。

明治三十三年（二十七歳）
『寒玉集』「寸紅集」をホトトギス發行所より出版。
長男年尾生る。

明治三十四年（二十八歳）
『寒玉集』第二編を出版。
三兄池内政夫病歿。

明治三十五年（二十九歳）
正岡子規病歿。

明治三十六年（三十歳）
『寫生文集』をホトトギス發行所より出版。
二女立子生る。

明治三十九年（三十三歳）
次男友次郎生る。生れたる時池内家の後繼者たるべき約あり。

明治四十年（三十四歳）
『帆立貝』『俳諧馬の糞』を俳書堂より出版。
『風流懺法』『斑鳩物語』『大内旅宿』等を「ホトトギス」に載す。
『俳諧一口噺』を金尾文淵堂より出版。

明治四十一年（三十五歳）
「俳諧師」を「國民新聞」に載す。
「鶏頭」を春陽堂より出版す。
「ホトトギス」に雜詠の選を始む。
國民新聞社に入社、文藝部を創設す。

明治四十二年（三十六歳）
「續俳諧師」を「國民新聞」に載す。
「凡人」を春陽堂より出版。
三女宵子生る。

明治四十三年（三十七歳）
國民新聞社を退き、鎌倉に移住。
百穂と秋田に遊び、露月を女米木に訪ふ。

明治四十四年（三十八歳）
朝鮮に遊ぶ。
「朝鮮」を「大阪毎日新聞」「東京日々新聞」に載す。

大正元年（三十九歳）
「お丁と」を「國民新聞」に載す。
「ホトトギス」に雜詠欄を復活す。
四女六子生る。

大正二年（四十歳）
此頃より健康を損じ、能樂に遊ぶ。
「ホトトギス」二百號を記念する爲め能樂を催し廣く文藝家を招待す。
「杏の落ちる音」を「ホトトギス」に發表。
「所謂新傾向句雜感」「一葉舟主人の俳句の草稿を見る」を「ホトトギス」に發表。
信州より越後に遊び、轉じて金澤に至る。

大正三年（四十一歳）
松山に歸省。京阪地方に遊ぶ。
「道」を「ホトトギス」に發表。
「俳句とはどんなものか」「俳句の作りやう」を實業之日本社より出版。
鎌倉能樂堂を同志十人と共に建設。爾來每月數回囃子會、年二三回演能。大正十二年大震災の時に渉る。
四女六子歿す。

大正四年（四十二歳）
「落葉降る下にて」を「中央公論」に發表。
「東京朝日新聞」に「柿二つ」を連載す。
數人と丹波竹田、叡山等に遊び、又長女眞砂子を伴ひ京都、奈良に遊びたる紀行「十九日間」を「ホトトギス」に載す。
「お丁と」を「女七人に男一人」と改め、四方堂より出版。
「子規居士と余」を實業之日本社より出版。
「ホトトギス雜詠集」を出版。
五女晴子生る。

大正五年（四十三歳）
「十五代將軍」「螢」「カナリヤ」「老い朽ち行く感」等を「ホトトギス」紙上に發表。
新作能「鐵門」を「机上觀能」と題し「ホトトギス」に發表。
長兄、即ち次男女次郎の養父たる池内政忠病歿。
夏目漱石病歿。

大正六年（四十四歳）
國民新聞社の依囑を受けて河口湖、増富、須賀を歴訪し、其紀行文を「國民新聞」に載す。
松山、福岡、熊本に遊ぶ。
「道」を新潮社より出版。
『十五代將軍』を阿蘭陀書房より出版。
長女眞砂子、眞下喜太郎に嫁す。
「眞砂子に贐の言葉」を「ホトトギス」に發表。
「兄」を「ホトトギス」に載す。
鳴雪翁古稀祝賀演能に碧梧桐のツキにて自然居士を舞ふ。
阪本四方太病歿。

大正七年（四十五歳）
「漱石氏と私」をアルスより、「進むべき俳句の道」を實業之日本社より、「俳句は斯く解し斯く味ふ」を新潮社より出版。

大正八年（四十六歳）

新作能「實朝」を『中央公論』に發表。

「どんな俳句を作つたらいゝか」「俳句の作りやう」を實業之日本社より出版。

『俳諧のゆ』を刊行。

六女章子生る。

山陰道を遊歴。

大正九年（四十七歳）

友次郎の養母たる長嫂病歿。立子、友次郎と共に其骨を携へて松山に歸省。

「嫂」を『ホトトギス』に連載。

別府温泉より招かれ別府温泉、耶馬溪に遊ぶ。

輕微なる腦溢血にかゝる。之より酒を斷つ。

大正十一年（四十九歳）

『ホトトギス雜詠選集』を實業之日本社より。

三河、名古屋、大阪、京都に遊ぶ。

大正十二年（五十歳）

初めて俳句講演會を催し「芭蕉の境涯と我等の境涯」等を講ず。

『凡兆小論』『新は深なり』を『ホトトギス』に。

暫く家族を京都に移し、芝二本榎に假寓す。

丹波、京都、大阪、高松、名古屋等に遊歴す。

大正十三年（五十一歳）

北陸に遊ぶ。

滿鮮に遊ぶ。

二女立子星野吉人に嫁す。

大正十四年（五十二歳）

寫生論を『ホトトギス』に連載す。

大阪、高松、觀音寺、松山、五條、京都に遊ぶ。

昭和元年（五十三歳）

「雜詠句評會」と題して、俳句の新作を評論するものを『ホトトギス』に連載す。

『俳句小論』を『ホトトギス』に載す。

内藤鳴雪逝く。

昭和二年（五十四歳）

『時雨をたづねて』を『改造』に載す。

松山の第一回關西俳句大會に列席す。

青根温泉に浴し、高田松原に遊ぶ。

長良川の鵜飼を見る。

高野山に於ける改造社講演會に出席。和歌山蒲郡等の俳句會に列席。京都に大文字の火を見る。

次男友次郎佛蘭西に遊學す。

長男年尾上田きみ子と結婚す。

三女宵子新田義美に嫁す。

俳句講演會を復興す。

『ホトトギス雜詠集』と『ホトトギス雜詠選集』とを併せて『虚子選雜詠選集第一卷』となし、實業之日本社より再刊。

昭和三年（五十五歳）

『虚子句集』『現代俳句評釋』を春秋社より、『虚子選雜詠選集第二卷』を實業之日本社より刊行。

「芭蕉の句を三種類に分けて」「寫生の話」「秋櫻子と素十」を『ホトトギス』に發表。

「京都の春秋の三日」「後の祇園會と天神祭」を『ホトトギス』に發表。

昭和四年（五十六歳）

福岡の第二回關西俳句大會に列席す。

「花鳥諷詠」「寫生といふこと」「俳諧趣味」「寫生主義」「街頭に出て法を説く」「一節に空白を存する敍法」を『ホトトギス』に。

滿洲に遊ぶ。

『ホトトギス』四百號記念會を催す。

「ハルビンなど」を『ホトトギス』に連載す。

大阪の第三回關西俳句大會に列席す。

昭和五年（五十七歳）

『二三片』をホトトギス發行所より出版す。

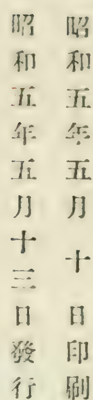
佛國國立音樂學校に學べる友次郎休暇を得て歸省。

立子をして女流俳句雜誌『玉藻』を發刊せしむ。

昭和五年五月十日印刷
昭和五年五月十三日發行

現代日本文學全集 第四十篇

伊藤左千夫
長塚節
高濱虛子



著作者 伊藤左千夫 長塚節 高濱虛子

發行者 東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地 山本美

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 杉山愛二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二一番
電話芝(43) 一一一一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番





改造社